地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター年報

令 和 ５ 年 度

地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター
Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology

緒　　言

東京都健康長寿医療センターは平成21年４月より地方独立行政法人として運営を始め、令和５年度は中期計画の第四期目初年度にあたり、システム構築と経営を含めた基盤の構築強化を生かし、臨床と研究の新規の成果の進捗を図る新たなステージに入っています。

新型コロナウイルス感染症には、周期的に影響を受け、認知症を含む都内広域の超高齢者のコロナ感染症患者を積極的に受け入れ、退院支援にも力を注ぎました。家族の必要不可欠な面会は、PCRや抗原検査の活用で、毎週100人程度をパンデミック時もずっと継続してきました。この間院内感染を乗り越え、職員の1/3以上が感染致しましたが、元気に復帰して職務に励みました。東京都から表彰されたこれらの奮闘は、年度末にコロナ感染の記録としてセンター長のリーダーシップで、後世に役立つよう冊子にまとめました。

ポストコロナの医師働き方改革に向け一層の医師確保に力を入れ、多くの診療科で体制強化が実現しましたが、まだ不十分な診療科も多く、一層体制強化に努めたいと思います。令和５年12月には、世界初の認知症疾患修飾薬（レカネマブ）をいち早く開始した医療機関として報道されました。投与に先立つこと３ヶ月前から、専門外来、外来検査体制、説明手順などを整備し、幸いなことにトラブルなく順調に受け入れが進んでいます。

令和５年度は、経営面ではこれまでの業務形態見直しを継続し、救急の充実、画像加算の継続、手術増加など、運営交付金の適切効率的な運用を図るとともに、事務方と医師の努力により医療機器など経費の削減を継続しました。東京都からの委託を受けた研究医療とテクノロジーの融合に向け、「認知症未来社会創造センター」、「フレイル予防センター」での、研究とケアのプロジェクトが進展してきました。認知症では、AIを用いた情緒支援チャットボット臨床研究が始まり、統合コホートでは認知症リスクの新たな論文成果が、バイオマーカーでは微量測定の新技術開発に成功し、基礎研究では、新たな創薬の芽生えにつながるミトコンドリア超複合体の発見と機能解析の研究が世界的に評価され、共生では、「当事者のみ」の集まりを支援する試みが始まりました。フレイルでは、院内のフレイル電子情報を統合したEFRAILが６ヶ月で1000例以上のデータ集積の実績を上げ、本邦初の「フレイルサポ ート医」「フレイルサポート看護師」「フレイルサポート栄養士」を国、東京都、板橋区医師会と協力して継続して広がりを図って居ます。

フレイルの研究面では、絵本読み聞かせは都内の全域に展開が広がり、寺院や農園の活用により活力と結びつく成果を継続しています。また、「一人暮らしでも、交流があれば虚弱にならない」という希望のメッセージを論文化しました。センターのアクティビティーは第12回アジアオセアニア老年学会（横浜）を主催し、120を超える英文演題を発表、多数の原著論文を公表しました。競争的資金の獲得では10億円を超え、文部科学省研究費の新規採択率は全国３位という輝かしい結果を得ました。

ここに、東京都健康長寿医療センターの令和５年度の事業・活動内容をまとめた「地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター年報」が完成しましたのでお届けいたします。

引き続き、皆様のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター

理事長　鳥羽　研二

目　　次

緒言

第一部　概要 …… 1
1　概要 …… 2
2　沿革 …… 4
3　基本理念及び運営方針 …… 7
(1) 基本理念 …… 7
(2) 運営方針 …… 7
(3) 患者権利章典 …… 7
4　組織 …… 8
(1) 組織図 …… 8
(2) 職員構成 …… 10
(3) 看護部配置状況 …… 10
(4) 非常勤職員配置状況 …… 11
5　予算 …… 12
6　センターにおける会議 …… 13
(1) 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター運営協議会 …… 13
(2) 会議 …… 13
7　指定・許可・学会認定 …… 15
(1) 指定・許可状況 …… 15
(2) 各種学会認定状況 …… 16
(3) 各種学会施設認定に伴う指導医等一覧 … 16
8　事務局 …… 18
9　令和５年度業務実績の全体的な概要 … 20
(1) 総括と課題 …… 20
(2) 事業の進捗状況及び特記事項 …… 21

第二部　病院部門 …… 25
Ⅰ　令和５年度運営報告 …… 25
内科総括 …… 26
総合内科・高齢診療科 …… 30
膠原病・リウマチ科 …… 31
腎臓内科・透析科 …… 32
糖尿病・代謝・内分泌内科 …… 33
循環器内科 …… 35
呼吸器内科 …… 36
消化器・内視鏡内科 …… 37
脳神経内科 …… 38
血液内科 …… 40
輸血・細胞療法科 …… 42
感染症内科 …… 44
精神科 …… 45
もの忘れ外来 …… 46
緩和ケア内科 …… 47
外科総括 …… 48
外科 …… 49
血管外科 …… 50
心臓血管外科 …… 51
脳神経外科 …… 53
呼吸器外科 …… 54
整形外科・脊椎外科 …… 55
皮膚科 …… 56
泌尿器科 …… 57
眼科 …… 58
耳鼻咽喉科 …… 59
歯科口腔外科 …… 60
救急診療部 …… 62
麻酔科 …… 64
中央手術室 …… 66
特定集中治療室 …… 68
リハビリテーション科 …… 70
放射線診断科 …… 73
放射線治療科 …… 75
臨床検査科 …… 77
病理診断科 …… 78
薬剤科 …… 79

栄養科 …… 81
臨床工学科 …… 83
高齢者バイオリソースセンター…… 85
認知症支援推進センター…… 86
認知症疾患医療センター…… 96
高齢者健康増進センター…… 100
がん相談支援センター …… 101
看護部 …… 102
医療連携係 …… 111
在宅医療・福祉相談係 …… 112
老年学情報センター…… 113
養育院・渋沢記念コーナー…… 115

Ⅱ　令和５年度研究活動報告…… 116
名誉理事長　井藤英喜 …… 117
理事長　鳥羽研二 …… 118
センター長　許俊鋭…… 119
副院長　原田和昌 …… 122
副院長　荒木厚…… 125
副院長　岩田淳…… 132
総合内科・高齢診療科 …… 139
膠原病・リウマチ科…… 141
腎臓内科・透析科 …… 143
糖尿病・代謝・内分泌内科…… 145
循環器内科 …… 154
呼吸器内科 …… 160
消化器・内視鏡内科…… 163
脳神経内科 …… 164
血液内科…… 176
輸血・細胞療法科 …… 177
感染症内科 …… 178
精神科・もの忘れ外来 …… 179
緩和ケア内科…… 183
外科…… 184
血管外科…… 185
心臓血管外科 …… 186
脳神経外科 …… 190
呼吸器外科 …… 192
整形・脊椎外科 …… 193
皮膚科 …… 195
眼科…… 196
耳鼻咽喉科 …… 198
歯科口腔外科…… 199
麻酔科…… 204
特定集中治療室 …… 205
リハビリテーション科 …… 206
放射線診断科…… 208
放射線治療科…… 210
臨床検査科 …… 211
病理診断科 …… 212
薬剤科…… 215
栄養科…… 216
高齢者バイオリソースセンター …… 217
病院部門課題研究費で行われた研究‥ 219

Ⅲ　統計…… 221
外来診療の状況
１．診療科別外来患者数…… 222
２．診療科・初診・再診別外来患者数‥ 222
３．外来初診予約時の状況…… 223
４．救急患者取扱状況…… 225

入院退院の状況
５．病床利用状況…… 226
６．病床稼動率…… 226
７．月別入退院状況…… 227
８．平均在院日数…… 227
９．入院患者の年齢別内訳…… 228
10．入院患者平均年齢（入院時）…… 228
11．地域別入院患者数…… 229
12．退院者の在院期間…… 230

入院患者の死亡状況
13．死亡者内訳及び剖検数…… 231
14．年齢別死亡者数…… 232
15．死亡原因別死亡者数…… 233
16．死亡者の入院期間…… 233

部署別業務状況
17．手術件数…… 234
18．疾病別手術件数…… 236
19．リハビリテーション取扱実績…… 238
20．理学療法実施状況…… 239
21．作業療法実施状況…… 239

22. 言語療法実施状況…… 239
23. 心理検査等取扱件数…… 239
24. 調剤実施状況…… 240
25. 製剤実施状況…… 240
26. 院外処方箋発行率…… 240
27. 薬品管理状況…… 241
28. 薬効別薬品使用比率（薬価）…… 241
29. 麻薬取扱状況…… 242
30. 向精神薬・覚醒剤原料取扱業務… 243
31. 外来服薬指導実施状況…… 243
32. 外来がん患者指導業務…… 243
33. 病棟業務実施状況…… 244
34. 無菌製剤（抗がん剤・TPN・末梢点滴混注）処方箋取扱数…… 244
35. 医薬品情報業務…… 244
36. 輸血用血液およびアルブミン製剤取扱状況… 245
37. 病理学的業務実施状況…… 246
38. 臨床検査実施状況…… 247
39. 放射線部門取扱数…… 248
40. 給食実施状況…… 250
41. 再加工及び禁止・個人対応食の状況250
42. 個人栄養食事指導実施状況…… 251
43. 集団栄養食事指導実施状況…… 251
44. 在宅看護相談室の看護実施状況… 252
45. 在宅酸素療法実績…… 253
46. 在宅人工呼吸療法実績…… 253
47. 病歴取扱状況…… 254
48. 在宅医療・福祉相談係相談件数… 255

診療費の収入状況

49. 診療実績…… 256
50. 診療実績：前年度比較…… 257
51. 診療実績（入院）…… 258
52. 診療実績（外来）…… 259
53. 入院患者（入院時）保険種別内訳… 260
54. 外来患者（新患）保険種別内訳… 261

疾病統計

55. 退院患者の疾患内訳
（ICD10コードによる大分類）…… 262
56. 退院患者の悪性新生物患者数内訳
（ICD10コードによる中分類）…… 263

第三部　研究部門 …… 273
Ⅰ　チーム研究等（令和５年度活動報告）273
チーム研究…… 274
老化機構研究チーム…… 275
老化制御研究チーム…… 294
老化脳神経科学研究チーム …… 313
加齢変容研究チーム…… 329
老年病理学研究チーム …… 338
神経画像研究チーム…… 352
社会参加とヘルシーエイジングチーム368
自立促進と精神保健研究チーム …… 403
福祉と生活ケア研究チーム …… 442
研究支援施設等…… 472
アイソトープ施設…… 472
実験動物施設…… 473
研究情報管理室 …… 475
高齢者健康増進事業支援室 …… 476
東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター…… 478

Ⅱ　普及活動等…… 488
１　新聞・雑誌・テレビ等…… 489
２　プレス発表…… 490
３　老年学・老年医学公開講座等 …… 492
４　友 の 会…… 493

第四部　病院・研究所連携部門…… 494
フレイル予防センター…… 495
認知症未来社会創造センター…… 506
健康長寿イノベーションセンター…… 508

第五部　補助金等 …… 511
研究補助金・助成金等受入状況…… 512
１　受託研究…… 512
２　共同研究…… 512
３　奨学寄附…… 515
４　国庫補助…… 516
５　民間助成金…… 517
６　受託事業…… 519
７　学術指導…… 520
８　科学研究費…… 522
９　日本医療研究開発機構委託研究開発【研

究代表者・研究分担者】……530
10　研究委託費……533

第一部　概　　要

１　概　　要

■名称　　地方独立行政法人　東京都健康長寿医療センター
■所在地　　東京都板橋区栄町35番２号
■電話　　03－3964－1141（病院部門代表）　03－3964－3241（研究部門代表）
■設立団体　　東京都
■開設年月日　　平成21年４月１日
■役員　　理事長　鳥羽　研二
理　事　許　　俊鋭　中川原　米俊
監　事　鵜川　正樹　溝口　敬人
■建物　　構造－鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造）
規模－地下２階、地上12階、塔屋１階
面積－延61,628.28㎡

〈病院部門〉

■診療規模　　医療法定床　550床（一般520床、精神30床）
外来　平均 678.7人／日（令和５年度実績）
■診療科目　　［内科系］総合内科・高齢診療科、膠原病・リウマチ科、腎臓内科・透析科、糖尿病・代謝・内分泌内科、循環器内科、呼吸器内科、消化器・内視鏡内科、脳神経内科、血液内科、 感染症内科、 緩和ケア内科、精神科
［外科系］外科、血管外科、 心臓血管外科、脳神経外科、呼吸器外科、整形・脊椎外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科
【その他部門】リハビリテーション科、放射線診断科、放射線治療科、麻酔科、救急診療部
※臨床研修指定病院（医師法、歯科医師法）
※診療科以外にも、臨床検査科、病理診断科を設置
（令和６年３月31日現在）

■施設基準等の届出関係（令和６年３月１日現在）

- □ 地域歯科診療支援病院歯科初診料
- □ 歯科外来診療環境体制加算２
- □ 一般病棟入院基本料
- □ 精神病棟入院基本料
- □ 救急医療管理加算
- □ 超急性期脳卒中加算
- □ 診療録管理体制加算１
- □ 医師事務作業補助体制加算１
- □ 急性期看護補助体制加算
- □ 看護職員夜間配置加算
- □ 療養環境加算
- □ 重症者等療養環境特別加算
- □ 無菌治療室管理加算１
- □ 無菌治療室管理加算２
- □ 緩和ケア診療加算
- □ 精神科身体合併症管理加算
- □ 精神科リエゾンチーム加算
- □ 栄養サポートチーム加算
- □ 医療安全対策加算１
- □ 感染対策向上加算１
- □ 褥瘡ハイリスク患者ケア加算
- □ 後発医薬品使用体制加算２
- □ 病棟薬剤業務実施加算１
- □ データ提出加算
- □ 入退院支援加算
- □ 認知症ケア加算
- □ せん妄ハイリスク患者ケア加算
- □ 精神科急性期医師配置加算
- □ 地域医療体制確保加算
- □ 特定集中治療室管理料３
- □ 脳卒中ケアユニット入院医療管理料
- □ 地域包括ケア病棟入院料２
- □ 緩和ケア病棟入院料１
- □ 看護職員処遇改善評価料（55）
- □ 入院時食事療養（Ⅰ）・入院時生活療養（Ⅰ）
- □ 外来栄養食事指導料の注２に規定する基準
- □ 外来栄養食事指導料の注３に規定する基準
- □ 心臓ペースメーカー指導管理料の注５に規定する遠隔モニタリング加算
- □ 糖尿病合併症管理料
- □ がん性疼痛緩和指導管理料
- □ がん患者指導管理料イ
- □ がん患者指導管理料ロ
- □ がん患者指導管理料ハ
- □ がん患者指導管理料ニ
- □ 移植後患者指導管理料（造血幹細胞移植後）
- □ 腎代替療法指導管理料
- □ 二次性骨折予防継続管理料１
- □ 二次性骨折予防継続管理料３
- □ 下肢創傷処置管理料
- □ 夜間休日救急搬送医学管理料の注３に規定する救急搬送看護体制加算
- □ 外来放射線照射診療料
- □ 外来腫瘍化学療法診療料１
- □ 連携充実加算
- □ がん治療連携計画策定料
- □ 薬剤管理指導料
- □ 医療機器安全管理料１
- □ 医療機器安全管理料２
- □ 医療機器安全管理料（歯科）
- □ 精神科退院時共同指導料２
- □ 歯科治療時医療管理料

- □ 在宅療養後方支援病院
- □ 在宅患者訪問看護・指導料及び同一建物居住者訪問看護・指導料の注２
- □ 在宅持続陽圧呼吸療法指導管理料の注２に規定する遠隔モニタリング加算
- □ 在宅植込型補助人工心臓(非拍動流型)指導管理料
- □ 持続血糖測定器加算（間歇注入シリンジポンプと連動する持続血糖測定器を用いる場合）及び皮下連続式グルコース測定
- □ 持続血糖測定器加算（間歇注入シリンジポンプと連動しない持続血糖測定器を用いる場合）
- □ 遺伝学的検査
- □ ＢＲＣＡ１／２遺伝子検査
- □ ウイルス・細菌核酸多項目同時検出
- □ 検体検査管理加算(Ⅰ)
- □ 検体検査管理加算(Ⅳ)
- □ 時間内歩行試験及びシャトルウォーキングテスト
- □ ヘッドアップティルト試験
- □ 単線維筋電図
- □ 脳波検査判断料１
- □ 神経学的検査
- □ 補聴器適合検査
- □ 内服・点滴誘発試験
- □ 前立腺針生検法（ＭＲＩ撮影及び超音波検査融合画像によるもの）
- □ 有床義歯咀嚼機能検査１のロ及び咀嚼能力検査
- □ 有床義歯咀嚼機能検査２のロ及び咬合圧検査
- □ 精密触覚機能検査
- □ 画像診断管理加算１
- □ 画像診断管理加算２
- □ ポジトロン断層撮影
- □ ポジトロン断層・コンピューター断層複合撮影
- □ ＣＴ撮影及びＭＲＩ撮影
- □ 冠動脈ＣＴ撮影加算
- □ 心臓ＭＲＩ撮影加算
- □ 抗悪性腫瘍剤処方管理加算
- □ 外来化学療法加算１
- □ 無菌製剤処理料
- □ 心大血管疾患リハビリテーション料(Ⅰ)
- □ 脳血管疾患等リハビリテーション料(Ⅰ)
- □ 運動器リハビリテーション料(Ⅰ)
- □ 呼吸器リハビリテーション料(Ⅰ)
- □ がん患者リハビリテーション料
- □ 歯科口腔リハビリテーション料２
- □ 療養生活継続支援加算
- □ 医療保護入院等診療料
- □ 静脈圧迫処置（慢性静脈不全に対するもの）
- □ 人工腎臓
- □ 導入期加算２
- □ 透析液水質確保加算及び慢性維持透析濾過加算
- □ 下肢末梢動脈疾患指導管理加算
- □ 磁気による膀胱等刺激法
- □ 手術用顕微鏡加算
- □ ＣＡＤ／ＣＡＭ冠及びＣＡＤ／ＣＡＭインレー
- □ 椎間板内酵素注入療法
- □ 脊髄刺激装置植込術、脊髄刺激装置交換術
- □ 仙骨神経刺激装置植込術及び仙骨神経刺激装置交換術（過活動膀胱）
- □ 緑内障手術（緑内障手術（流出路再建術（眼内法）及び水晶体再建術併用眼内ドレーン挿入術）
- □ 緑内障手術（濾過胞再建術（needle法））
- □ 人工内耳植込術
- □ 乳がんセンチネルリンパ節加算２及びセンチネルリンパ節生検（単独）
- □ 食道縫合術（穿孔、損傷）(内視鏡によるもの)、
- □ 内視鏡下胃、十二指腸穿孔瘻孔閉鎖術、
- □ 胃瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 小腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 結腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 腎（腎盂）腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 尿管腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 膀胱腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの)、
- □ 腟腸瘻閉鎖術（内視鏡によるもの）
- □ 経皮的冠動脈形成術（特殊カテーテルによるもの）
- □ 経カテーテル弁置換術（経心尖大動脈弁置換術及び経皮的大動脈弁置換術）
- □ 不整脈手術 左心耳閉鎖術（胸腔鏡下によるもの）
- □ 経皮的中隔心筋焼灼術
- □ ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術
- □ ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術（リードレスペースメーカー）
- □ 両心室ペースメーカー移植術（経静脈電極の場合）及び両心室ペースメーカー交換術（経静脈電極の場合）
- □ 植込型除細動器移植術（経静脈リードを用いるもの又は皮下植込型リードを用いるもの)、植込型除細動器交換術（その他のもの）及び経静脈電極抜去術
- □ 両室ペーシング機能付き植込型除細動器移植術（経静脈電極の場合）及び両室ペーシング機能付き植込型除細動器交換術（経静脈電極の場合）
- □ 大動脈バルーンパンピング法（ＩＡＢＰ法）
- □ 経皮的循環補助法（ポンプカテーテルを用いたもの）
- □ 経皮的下肢動脈形成術
- □ 腹腔鏡下リンパ節群郭清術（側方）
- □ 腹腔鏡下小切開尿管腫瘍摘出術、
- □ 腹腔鏡下小切開腎(尿管)悪性腫瘍手術、
- □ 腹腔鏡下小切開前立腺悪性腫瘍手術
- □ 腹腔鏡下胆嚢悪性腫瘍手術(胆嚢床切除を伴うもの)
- □ 腹腔鏡下肝切除術
- □ 腹腔鏡下膵腫瘍摘出術
- □ 腹腔鏡下膵体尾部腫瘍切除術
- □ 早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術
- □ 膀胱水圧拡張術及びハンナ型間質性膀胱炎手術（経尿道）
- □ 人工尿道括約筋植込・置換術
- □ 体外式膜型人工肺管理料
- □ 医科点数表第２章第10部手術の通則の16に掲げる手術
- □ 輸血管理料Ⅰ
- □ 輸血適正使用加算
- □ コーディネート体制充実加算
- □ 人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算
- □ 胃瘻造設時嚥下機能評価加算
- □ 歯根端切除手術の注３
- □ 麻酔管理料（Ⅰ）
- □ 麻酔管理料（Ⅱ）
- □ 放射線治療専任加算
- □ 外来放射線治療加算
- □ 高エネルギー放射線治療
- □ 一回線量増加加算
- □ 強度変調放射線治療（ＩＭＲＴ）
- □ 画像誘導放射線治療（ＩＧＲＴ）
- □ 体外照射呼吸性移動対策加算
- □ 定位放射線治療
- □ 定位放射線治療呼吸性移動対策加算
- □ 保険医療機関間の連携による病理診断
- □ 病理診断管理加算２
- □ 悪性腫瘍病理組織標本加算
- □ クラウン・ブリッジ維持管理料

■救急告示　　昭和40年３月18日（更新　令和２年１月31日）

〈研究部門〉

■研究体制　［自然科学系研究］老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老化脳神経科学研究チーム、加齢変容研究チーム、老年病理学研究チーム、神経画像研究チーム
［社会科学系研究］社会参加とヘルシーエイジング研究チーム、自立促進と精神保健研究チーム、福祉と生活ケア研究チーム

２　沿革

明治５．10．15　養育院創立
５．12．１　病室建築に着手
６．２．３　病室を建築し、嘱託医師入所者の医療業務を開始
８．４．８　東京府下生活困窮者の伝染病治療をはじめる
10．６．７　東京府下生活困窮者の無料診療、施薬開始
22．11．26　出獄罹病者診療のための収容開始
37．10．７　ハンセン氏病患者収容室、結核患者病室設置
大正３．10．24　肺結核・癩疾患者の隔離治療のため板橋分院を開始
４．12．27　板橋分院に一病棟増設、定員33名
昭和５．10．１　本院医療施設、病院として開設許可
８．２．９　本院作業室の一部を改造、高齢患者の病後静養室開設
11．４．10　外来診療所を開所、救護法による患者診療の実施
11．５．２　本院医療施設、定員731名で認可
16．10．１　医療保護法による医療保護施設として府知事より認可
17．３．18　医療保護施設として定員763名
20．４．13　米空軍Ｂ29による大空襲により、病院焼失
20．９．25　板橋の元陸軍造兵廠工員宿舎を借り、病院として再発足
22．７．24　医務課を廃止、付属病院開設
33．３．31　附属病院建設工事竣工（470床）
44．１．　美濃部都知事、１,000床の老人専門病院建設の意向表明
44．３．１　老人病院建設準備室設置
45．７．　老人病院建設工事着工
45．10．　老人病院開設準備委員会設置
47．４．　東京都老人総合研究所開所（研究部門）
47．４．１　村上元孝病院長就任
47．４．　新附属病院及び「老人総合研究所」開設
47．６．１　外来診療開始
47．６．７　旧病院より新病院へ入院患者を移送
47．８．31　第１回養育院附属病院運営協議会開催
（現在の病院は、昭和47年に竣工したものであり、この時より一般都民も利用できる高齢者医療の専門病院という形で運営されている。）
53．６．１　病院防災工事開始
53．８．20　第11回国際老年学会の事務局となる
54．５．11　精神科病棟開設
56．10．　財団法人東京都老人総合研究所に改組（研究部門）
59．１．４　「老年学情報センター」開設
59．４．１　村上元孝病院長は名誉院長となる
59．４．２　豊倉康夫病院長就任
59．９．　米国国立老化研究所（NIA）との間で研究協力に関する協定の締結（研究部門）
59．12．１　事務室医事課における医事事務の電算化を実施
60．12．３　血液科病棟においてクリーンルーム（２床）を開設
61．４．１　「老人医療センター」と名称を変更
62．４．１　臨床研修病院の指定を受ける
63．３．25　MR棟竣工
63．３．　中華人民共和国北京老年病医療研究中心との研究交流事業に関する協定に調印（研究部門）
63．９．　ソビエト連邦医学アカデミー老年学研究所との間で研究協力覚書の交換（研究部門）（現ウクライナ医学アカデミー老年学研究所）
63．10．５　結核病棟を廃止、普通病棟とする
平成２．４．１　豊倉康夫院長は名誉院長となる
２．４．１　藏本築院長就任
２．７．１　精神科病棟内に痴呆病床10床開床
２．７．２　外来処方・予約コンピュータ導入
２．８．６　研究系１研究施設に組織改正（研究部門）
２．９．　ポジトロン医学研究施設開設（研究部門）
３．２．15　病棟改修のため４病棟閉鎖
３．４．１　病棟改修工事着工
４．７．４　20周年記念講演会都民ホールで開催
５．４．２　小澤利男院長就任
６．５．31　全病棟改修工事竣工

６．６．11　第１回養育院老年学会開催
６．７．１　総合診療病棟開設
７．３．30　養育院老人医療センター運営基本方針策定
７．６．10　第２回養育院老年学会開催
８．３．15　老人医療センター改修工事竣工
８．４．10　ICU・CCU開設
８．９．28　第３回養育院老年学会開催
９．４．１　藏本院長は名誉院長となる
９．４．２　折茂肇院長就任
９．７．16　高齢者施策推進室の発足
９．９．１　脳卒中診療のユニットの開設
９．10．８　第４回東京都老年学会開催
９．12．１　エイズ診療拠点病院の指定を受ける
９．12．10　板橋区、板橋区医師会との地域連携３事業開始
10．10．８　研究系１研究施設に組織改正（研究部門）
10．10．８　第５回東京都老年学会開催
11．１．11　もの忘れ外来開設
11．４．１　小澤病院長は名誉院長となる
11．５．　「中期経営計画」策定（研究部門）
11．７．26　区西北部医師会、歯科医師会、薬剤師会と医療連携に関する協定締結を開始（11．12．13　協定締結終了）
11．９．30　デイホスピタル終了
11．10．４　ペインクリニック外来の開設
11．10．18　国際高齢者年記念講演会開催
11．10．29　第６回東京都老年学会開催
12．１．　区西北部二次保健医療圏等医療連携協議会の開催
12．４．１　老人医療センターホームページを開設
12．10．　地域連携室の開設
12．10．13　第７回東京都老年学会開催
13．１．　高血圧外来、不整脈外来、めまい外来の開設
13．２．　東洋医学外来の開設
13．４．１　高齢者施策推進室は福祉局に統合となる
13．12．　老人医療センター院内LAN稼働
13．12．18　第８回東京都老年学会開催
14．４．　地域福祉財団と統合し、新たに財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団　東京都老人総合研究所として発足　グループ研究制に組織改正（研究部門）
14．９．21　老人医療センター30周年記念式典開催
14．10．１　林泰史院長就任
14．11．29　第９回東京都老年学会開催
15．７．16　オーダーメード医療実現化プロジェクト参画
15．10．15　第10回東京都老年学会開催
15．12．８　高齢者いきいき外来の開設
16．８．１　「福祉局」と「健康局」が統合され「福祉保健局」となる
16．８．23　病院機能評価認定
16．11．５　第11回東京都老年学会開催
18．１．12　東京都老年学会と東京都保健医療学会が統合され東京都福祉保健医療学会として開設
17．４．　コア研究体制に組織改正（研究部門）
18．４．１　井藤英喜院長就任
18．７．13　東京都が発表した「行財政改革実行プログラム」の中で、老人医療センターと老人総合研究所は、地方独立行政法人への移行を目指すことに決定。
18．11．２　平成18年度東京都福祉保健医療学会開催
19．５．31　福祉保健局が「板橋キャンパス再編整備基本構想」を公表。
21．４．１　東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所が統合し、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターとして新たに出発。
松下正明理事長、井藤英喜センター長、中村彰吾経営企画局長就任
外来化学療法室の開設
新施設開設建設室の設置
23．１．　新施設建設着工
23．９．　緩和ケア内科の開設
24．１．　救急診療部の開設
24．２．　東京都認知症疾患医療センターの指定を受ける
24．３．　東京都大腸がん診療連携協力病院の指定を受ける
25．３．　在宅医療連携病床の新設
25．４．１　呼吸器外科の開設
25．６．　新施設開設
旧病院より新病院へ入院患者を移送
電子カルテシステムの導入
25．６．30　新施設開設建設室の廃止

25. 12. 東京都災害拠点病院指定
26. 4. 1 婦人科の廃止
27. 4. 1 井藤英喜理事長、許俊鋭センター長就任
事務部門の組織改正（事務部長の設置、４課から３課体制に改編）
認知症支援推進センターの設置
27. 7. 1 臨床試験管理センターの設置、治験管理センター（治験事務局）の廃止
28. 1. 1 がん相談支援センターの設置
28. 4. 1 医療戦略室の設置
29. 1. 4 病院機能評価認定
29. 6. 12 第10,000例目の病理解剖を実施
29. 10. ICU・CCUの再編・SCUの開設
30. 8. 1 健康長寿イノベーションセンターの設置
31. 1. 1 電子カルテシステムの更新
令和元. 6. 1 鳥羽研二理事長就任
元. 6. 1 井藤英喜名誉理事長就任
２. 4. 1 認知症未来社会創造センターの設置
２. 4. 1 フレイル予防センターの設置
４. 7. 1 中川原米俊経営企画局長就任
４. 9. 1 研修センターの設置
５. ２. ９ 病院、研究所開設50年・養育院創立150年記念行事開催
５.１２. 1 ICU・CCU・SCUの再編
６. ３. 29 地域医療支援病院の承認
６. ３. 31 許俊鋭センター長退任

3　基本理念及び運営方針

（1）基本理念

センターは、高齢者の心身の特性に応じた適切な医療の提供、臨床と研究の連携、高齢者のQOLを維持・向上させるための研究を通じて、高齢者の健康増進、健康長寿の実現を目指し、大都市東京における超高齢社会の都市モデルの創造の一翼を担う。

（2）運営方針

ア　病院運営方針

・患者さま本位の質の高い医療サービスを提供します。
・高齢者に対する専門的医療と生活の質（QOL）を重視した全人的包括的医療を提供します。
・地域の医療機関や福祉施設との連携による継続性のある一貫した医療を提供します。
・診療科や部門・職種の枠にとらわれないチーム医療を実践します。
・高齢者医療・フレイル予防を担う人材の育成及び研究所との連携による研究を推進します。

イ　研究所運営方針

・東京都の高齢者医療・保健・福祉行政を研究分野で支えます。
・地域の自治体や高齢者福祉施設と連携して研究を進めます。
・国や地方公共団体、民間企業等と活発に共同研究を行います。
・諸外国の代表的な老化研究機関と積極的に研究交流を行います。
・最先端技術を用いて老年病・認知症などの研究を行います。
・研究成果を公開講座や出版によりみなさまに還元します。

（3）患者権利章典

患者さまは、人間として尊厳を有しながら医療を受ける権利を持っています。また、医療は、患者さまと医療提供者とが、信頼関係に基づいてともにつくり上げていくものです。

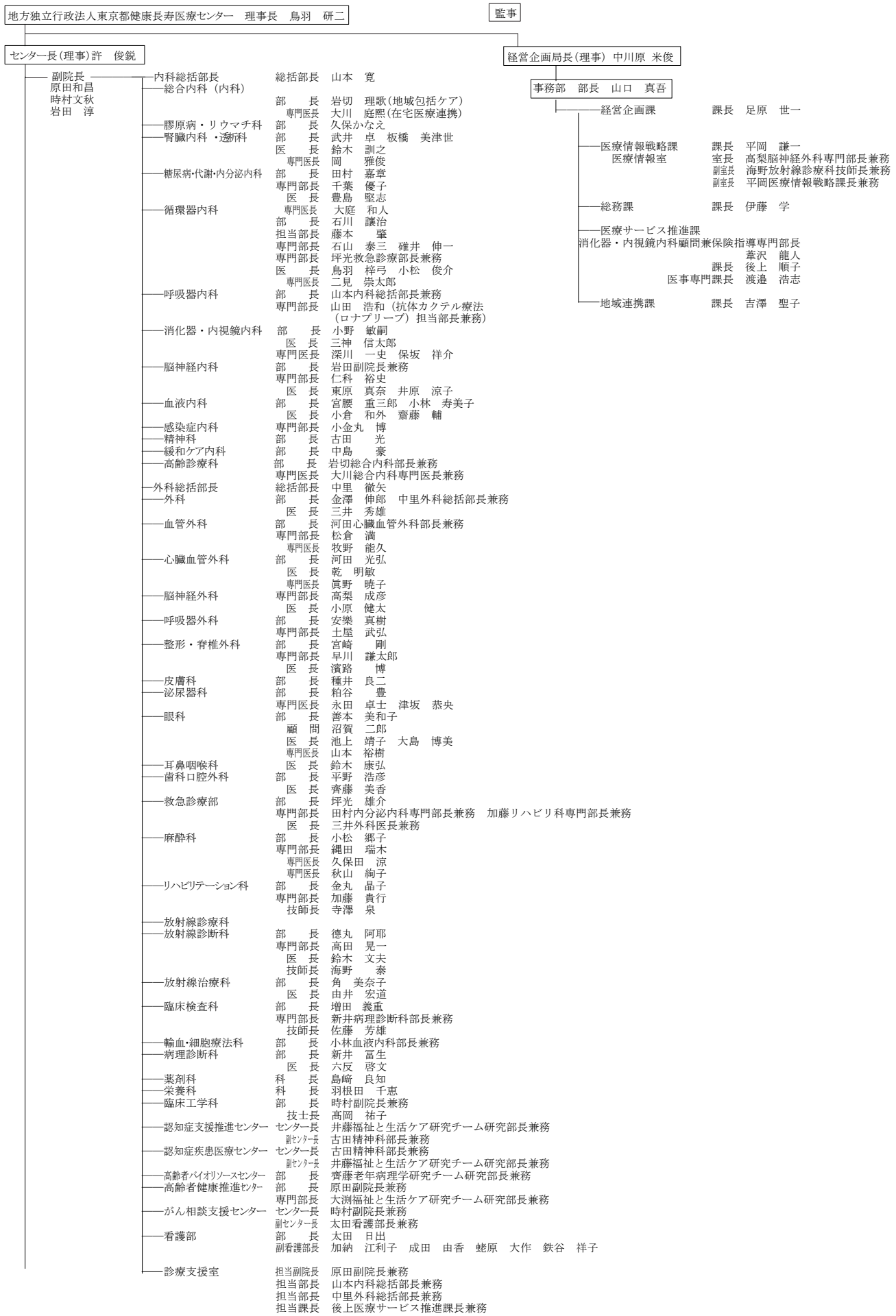
当センターは、このような考え方に基づき「患者権利章典」を制定し、これを守り、患者さま中心の医療を実践していきます。

患者さまもこの趣旨をご理解いただき、自らの意思と責任で医療に参加してくださるようお願いいたします。

1　だれでも、どのような病気にかかった場合でも、良質な医療を公平に受ける権利があります。
2　だれもが、一人の人間として尊重され、医師や看護師など医療提供者との相互協力のもとで医療を受ける権利があります。
3　病気や検査、治療について、わかりやすい言葉や方法で、納得できるまで十分な説明を受ける権利があります。
4　治療方法などを自分の意思で選択する権利があります。
5　自分の診療記録の開示を求める権利があります。
6　診療の過程で得られた患者さまの個人情報や療養中のプライバシーが守られる権利があります。
7　研究途上にある医療に関し、目的や危険性などについて十分な情報提供を受けたうえで、その医療を受けるかどうか決める権利と、何らの不利益を受けることなくいつでもその医療を拒否する権利があります。
8　良質な医療を実現するためには、医師をはじめとする医療提供者に対し、患者さま自身の健康に関する情報をできるだけ正確に提供する責任と義務があります。
9　納得できる医療を受けるために、医療に関する説明を受けてもよく理解できなかったことについて、十分理解できるまで質問する責任と義務があります。
10　すべての患者さまが適切な医療を受けられるようにするため、患者さまには、他の患者さまの治療や病院職員による医療提供に支障を与えないよう配慮する責任と義務があります。

4　組織

(1)　組織図　（令和６年３月31日現在）



健康長寿医療
研修センター
センター長　荒木　厚
副センター長　金澤外科部長兼務
担当部長　仁科脳神経内科専門部長兼務
担当部長　古田精神科部長兼務
担当部長　加藤リハビリテーション科専門部長兼務
担当部長　藤原副所長兼務
担当部長　大渕研究部長兼務
担当部長　井藤研究部長兼務
担当課長　成田副看護部長兼務
副所長
（自然科学系）
石神　昭人
老化機構研究チーム
研究部長　井上　聡
研究部長　萬谷　博　三浦　ゆり
専門副部長　高山　賢一
老化制御研究チーム
研究部長　石神副所長兼務
研究副部長　近藤　嘉高　大澤　郁朗　杉本　昌隆
老化脳神経科学研究チーム
研究部長　遠藤　昌吾　堀田　晴美　西宗　裕史
専門副部長　内田　さえ
加齢変容研究チーム
研究部長　石神副所長兼務　小野　悠介
研究副部長　豊田　雅士
老年病理学研究チーム
研究部長　石渡　俊行　齊藤　祐子　村山　繁雄（特任研究員）
神経画像研究チーム
研究部長　豊原　潤
専門部長　石井認知症未来社会創造センター副センター長兼務　亀山　征史
研究副部長　石橋　賢士
副所長
（社会科学系）
藤原　佳典
社会参加とヘルシーエイジング研究チーム
研究部長　小林　江里香
研究副部長　鈴木　宏幸　村山　洋史
自立促進と精神保健研究チーム
研究部長　平野歯科口腔外科部長兼務
研究副部長　笹井　浩行　岡村　毅
福祉と生活ケア研究チーム
研究部長　石崎　達郎　大渕　修一　井藤　佳恵
研究副部長　河合　恒
研究支援施設等
アイソトープ施設
研究副部長　三浦老化機構研究チーム研究部長兼務
実験動物施設
研究部長　石神副所長兼務
高齢者健康増進事業支援室
研究部長　大渕福祉と生活ケア研究チーム研究部長兼務
研究副部長　河合福祉と生活ケア研究チーム専門副部長兼務
研究情報管理室
研究部長　石神副所長兼務
新型コロナウイルス等遺伝子解析研究室
研究副部長　豊田加齢変容研究チーム研究副部長兼務
介護予防・フレイル予防推進支援センター
研究部長　藤原副所長兼務
健康長寿医療イノベーションセンター
センター長　原田副院長兼務
副センター長　藤原副所長兼務
研究開発ユニット　ユニット長　金井　信雄
専門副部長　吉岡薬剤科副科長兼務
事務ユニット　ユニット長　足原経営企画課長兼務
認知症未来社会創造センター
センター長　栗田主一
健康長寿データベース/バイオバンクチーム
副センター長　金井健康長寿イノベーションセンター研究開発ユニット長兼務
メディカルオミックス/バイオマーカチーム
副センター長　岩田副院長兼務
コホート研究データ統合活用チーム
副センター長　鈴木社会参加とヘルシーエイジング研究チーム研究副部長兼務
神経画像/AI診断システムチーム
副センター長　石井　賢二
認知症共生社会チーム
副センター長　岡村自立促進と精神保健研究チーム研究副部長兼務
フレイル予防センター　センター長　荒木健康長寿医療研修センター長兼務
医療安全対策室
感染対策室

（２）職員構成（職種と定数）

（令和６年３月31日現在）

職種		計画数
事務系	一般事務	86
	計	86
福祉	福祉(MSW)	11
	心理	8
	福祉技術(ST)	4
	計	23
医師	医師	121
	歯科医師	3
	計	124
研究員	研究員	88
	計	88

※ 役員は含んでいない。

職種			計画数
医療技術	薬剤師		36
	診療放射線技師		30
	歯科衛生士		1
	歯科技工士		1
	理学療法士		17
	作業療法士		8
	臨床検査技師		44
	栄養士		7
	医療技術(臨床工学技士)		15
	視能訓練士		2
	技能		1
	計		162
看護	看護師		481
	計		481
計			964

（３）看護部配置状況

（令和６年３月31日現在）

病棟・診療科		定床数	現員				夜勤体制(準－深)
			管理職	看護師長(次)	看護師	計	
５東 循環器内科、心臓血管外科、呼吸器外科 血管外科、呼吸器内科		36		1	22	23	3-3
５西 循環器内科		36		1	21	22	3-3
６東 整形・脊椎外科		36		1	22	23	3-3
６西 総合内科・高齢診療科（在宅医療連携病床）、整形・脊椎外科、リハビリテーション科		26		1	15	16	2-2
７東 外科、眼科		36		1	23	24	3-3
７西 外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、皮膚科 呼吸器内科、眼科		36		1	21	22	3-3
８東 腎臓内科、脳神経内科・脳卒中科脳神経外科		36		2	22	24	3-3
８西 消化器・内視鏡内科		36		2	23	25	3-3
９東 コロナ対応病床		15		1	21	22	3-3
９西 糖尿病・代謝・内分泌内科、総合内科・高齢診療科、歯科口腔外科		36		1	20	21	3-3
10東 SCU		9		2	18	20	3-3
10西 脳神経内科・脳卒中科、脳神経外科		36		1	29	30	3-3
11東 精神科		30		1	18	19	2-2
11西 血液内科、膠原病・リウマチ科 糖尿病・代謝・内分泌内科		36		1	22	23	3-3
12階 緩和ケア内科		14		1	14	15	2-2
特定集中治療室（ICU／CCU）		8		2	24	26	4-4
手術室				1	25	26	
外来				2	21	23	
救急外来				1	21	22	
在宅看護				1	3	4	
看護部			5	2	9	16	
看護部内訳	研修教育担当			1		1	
	セーフティーマネジャー			1		1	
	感染管理認定看護師			1		1	
	病床管理担当			1		1	
	認知症看護認定看護師			1		1	
	皮膚・排泄ケア認定看護師			1		1	
	がん性疼痛看護認定看護師			1		1	
	糖尿病看護認定看護師				1	1	
合計		462	5	34	415	454	

※育休、休職の職員は含んでいない。
※定床数は、コロナ対応に伴う病棟制限等を踏まえた稼働病棟を記載している。

（４）非常勤職員配置状況

（令和６年３月31日現在）

科目／種別	総合内科	膠原病・リウマチ科	腎臓内科・透析科	糖尿病・代謝・内分泌内科	循環器内科	呼吸器内科	消化器・内視鏡内科	脳神経内科	血液内科	感染症内科	精神科	緩和ケア内科	高齢診療科	外科	血管外科	心臓血管外科	脳神経外科	呼吸器外科	整形・脊椎外科	泌尿器科	眼科	耳鼻咽喉科	歯科口腔外科	救急診療部	麻酔科	リハビリテーション科	放射線診療科	放射線診断科	臨床検査科	病理診断科	薬剤科	栄養科	臨床工学科	認知症支援推進センター	認知症疾患医療センター	高齢者バイオリソースセンター	看護部	診療支援室	総務課	医療サービス推進課	地域連携課	建康長寿イノベーションセンター	認知症未来社会創造センター	研究部門	総計
専門医		4	3	1	9	1	1	10		2	2			11	8	6	3	1	4	1	7	2	2	5	9			14	1	4						3									114
研修医		1	6	5	1	1	5	7	2		2		1	4					1		4		2			1		2	1	2														48
研究員																																1									2	9	109	121
医療技術	1			3	1			1			4	2									6		1			1	3		6		6	5	2		2		39				1	3			87
看護師																												4							27					3			34
事務					1																					1	1		2	5			3	1		2	13	16	18	3	11	32	100	209
総計	1	5	9	9	12	2	6	18	2	2	8	2	1	15	8	6	3	1	5	1	17	2	5	5	9	2	4	17	12	8	11	5	2	4	3	3	68	13	16	18	4	19	41	209	613

５　予算（令和５年度）

（単位：百万円）

区　　分	金　　額
収入	
営業収益	20,359
医業収益	14,464
研究事業収益	40
運営費負担金	2,941
運営費交付金	2,693
補助金	51
寄附金	－
雑益	171
営業外収益	127
寄附金	0
雑収益	126
資本収入	－
運営費交付金	－
長期借入金	－
その他の資本収入	－
受託研究等外部資金収入	721
計	21,208
支出	
営業費用	20,092
医業費用	16,606
給与費	8,264
材料費	4,537
委託費	1,326
設備関係費	1,300
研究研修費	71
経費	1,110
研究事業費用	2,765
給与費	1,094
研究材料費	41
委託費	167
設備関係費	171
研究研修費	1,095
経費	196
一般管理費	721
営業外費用	－
資本支出	1,268
建設改良費	509
長期借入金償還金	758
その他の支出	－
受託研究等外部資金支出	631
計	21,991

６　センターにおける会議

（令和６年３月31日現在）

（１）地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター運営協議会

○目　　的：外部有識者による意見や助言を受け、都民ニーズに応えた業務運営を実施するため
○審議事項：センターの事業内容及び運営方針、その他運営上必要な事項に関すること
○構成委員：以下のとおり

（敬称略）

氏名	所属
井　藤　英　喜	長寿科学振興財団理事・東京都福祉保健財団理事
鈴　木　隆　雄	桜美林大学老年学総合研究所・同大学院教授（老年学）
新　田　國　夫	一般社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会　会長
秋　山　正　子	株式会社ケアーズ　代表取締役 白十字訪問看護ステーション 統括所長 マギーズ東京　共同代表理事
坂　本　　健	板橋区長
平　川　博　之	公益社団法人東京都医師会　副会長
土　屋　淳　郎	公益社団法人豊島区医師会　会長
増　田　幹　生	一般社団法人東京都北区医師会　会長
齋　藤　英　治	公益社団法人板橋区医師会　会長
小　林　　顕	公益社団法人東京都板橋区歯科医師会　会長
内　田　　寛	一般社団法人練馬区医師会　会長
植　木　　浩	患者代表
梶　野　京　子	東京都福祉局　高齢者施策推進担当部長
鳥　羽　研　二	東京都健康長寿医療センター　理事長
許　　俊　鋭	東京都健康長寿医療センター　センター長
中川原　米俊	東京都健康長寿医療センター 経営企画局　理事
原　田　和　昌	東京都健康長寿医療センター 副院長
岩　田　　淳	東京都健康長寿医療センター 副院長
時　村　文　秋	東京都健康長寿医療センター 副院長
太　田　日　出	東京都健康長寿医療センター 副院長兼看護部長
石　神　昭　人	東京都健康長寿医療センター 研究所副所長
藤　原　佳　典	東京都健康長寿医療センター 研究所副所長

（２）会議

ア　理事会

○メンバー：理事長、センター長、経営企画局長、監事、副院長、副所長、看護部長、事務部長、経営企画課長、医療情報戦略課長、総務課長、医療サービス推進課長、医事専門課長、地域連携課長
○毎月第３木曜日開催

イ　経営戦略会議

○メンバー：理事長、センター長、経営企画局長、監事、副院長、副所長、看護部長、事務部長、

経営企画課長、医療情報戦略課長、総務課長、医療サービス推進課長、医事専門課長、地域連携課長

○毎月第３木曜日開催

ウ　病院運営会議

○メンバー：理事長（オブザーバー）、センター長、経営企画局長、副院長、内科総括部長、外科総括部長、看護部長、事務部長、リハビリテーション科技師長、放射線診療科技師長、臨床検査科技師長、臨床工学科技士長、薬剤科長、栄養科長、保険指導専門部長（オブザーバー）、経営企画課長、医療情報戦略課長、総務課長、医療サービス推進課長、医事専門課長、地域連携課長

○毎月第４月曜日開催

エ　病院幹部会

○メンバー：理事長（オブザーバー）、センター長、副院長、各診療部門長・技師長、各診療部門専門部長、各臨床研究部門長、看護部長、副看護部長、事務部長、経営企画課長、総務課長、医療情報戦略課長、医療サービス推進課長、医事専門課長、地域連携課長

○毎月第４火曜日開催

オ　認知症未来社会創造センター運営会議

○メンバー：理事長（オブザーバー）、センター長（オブザーバー）、副所長、健康長寿イノベーションセンター研究開発ユニット長、副院長（脳神経内科部長）、神経画像研究チームＰＥＴ画像診断専門部長、老年病理学研究チーム神経病理学研究部長、社会参加とヘルシーエイジング研究チーム社会参加・社会貢献研究副部長、自立促進と精神保健研究チーム認知症・精神保健研究副部長、認知症疾患医療センター長、認知症支援推進センター長、自然科学系シニアフェロー、健康長寿イノベーションセンター健康データ科学研究室長、事務部長、健康長寿イノベーションセンター事務ユニット長、総務課長

○毎月最終水曜日

カ　研究推進会議

○メンバー：理事長（オブザーバー）、センター長、経営企画局長（オブザーバー）、副所長、研究部長、事務部長（オブザーバー）、健康長寿イノベーションセンター研究開発ユニット長、健康長寿イノベーションセンター事務ユニット長

○毎月第１、第３木曜日開催

キ　研究所幹部会議

○メンバー：センター長、理事長（オブザーバー）、副所長、研究部長、研究専門部長、研究副部長、研究専門副部長、特任研究員、健康長寿イノベーションセンター研究開発ユニット長、健康長寿イノベーションセンター健康データ科学研究室長、健康長寿イノベーションセンター事務ユニット長

○毎月第３木曜日開催

ク　トランスレーショナルリサーチ推進会議

○メンバー：理事長（オブザーバー）、センター長、副院長、副所長、健康長寿イノベーションセンター研究開発ユニット長（オブザーバー）

○原則年１回

7　指定・許可・学会認定

（1）指定・許可状況

指定・許可年月日	事　項	根拠法令等
昭和５．10．１	開設許可	医療法第７条
25．５．４	生活保護法指定医療機関	生活保護法第49条
37．４．16	結核予防法指定医療機関（医療機関指定書第4251号）	結核予防法第36条第１項
40．３．18	救急病院告示医療機関	厚生省「救急病院等を定める省令」
45．６．１	保険医療機関指定	保険医療機関及び保険薬局並びに保険医及び保険薬剤師の登録に関する省令
45．６．１	国民健康保険法療養取扱機関	国民健康保険法第37条第３項
46．４．10	東京都以外の区域の保険者に係る療養の給付を担当する旨の申し出について（46養病医第556号）	国民健康保険法第37条第５項
48．12．１	地公災東京都支部協定医療機関	地方公務員災害補償法第26条(都立病院との協定に準ずる)
52．１．１	被爆者一般疾病医療機関（指定番号　原病176） 東京都職員共済組合契約医療機関 心身障害者(児)医療費助成制度にもとづく同意医療機関 特殊疾病対策医療費助成制度にもとづく契約医療機関公害医療機関	原子爆弾被爆者の医療等に関する法律 共済組合との契約による心身障害者の医療費の助成に関する条例 東京都医療費助成実施要綱及び厚生事務次官通知 公害健康被害補償法第20条（全健保適用医療機関）
54．10．７	心臓循環器（CCU）救急医療事業協力医療施設	都　心臓循環器（CCU）救急医療実施要綱（衛生局）
61．６．１	紹介型病院の承認	厚生省告示第177号
62．３．16	病院群による臨床研修を行う病院	医師法第16条の２第１項
平成９．12．１	エイズ診療拠点病院	都　エイズ診療協力病院運営要綱（衛生局）
15．11．１	救急救命士再教育（病院実習）実施医療機関	救急救命士の再教育（病院実習）に関する協定書
15．11．19	臨床研修病院	医師法第16条の２第１項
19．１．31	指定自立支援医療機関（精神通院医療）	障害者自立支援法第59条第１項
19．４．１	指定自立支援医療機関（免疫）	障害者自立支援法第59条第１項
19．７．10	東京都肝臓専門医医療機関	東京都難病患者等に係る医療費等の助成に関する規則
21．１．30	東京都脳卒中急性期医療機関	東京都脳卒中急性期医療機関設置要綱第３の３
21．４．１	開設許可（東京都健康長寿医療センター）	医療法第７条
24．２．９	東京都認知症疾患医療センター	東京都認知症疾患医療センター運営事業実施要綱(福祉保健局)
24．３．22	東京都大腸がん診療連携協力病院	東京都大腸がん診療連携協力病院設置要綱(福祉保健局)
25．12．19	東京都災害拠点病院	東京都災害拠点病院設置運営要綱（福祉保健局）
26．４．23	臨床修練指定病院	外国医師等が行う臨床修練に係る医師法第17条等の特例等に関する法律第２条第４号
27．１．１	難病医療費助成指定医療機関	難病の患者に対する医療等に関する法律第14条第１項
令和６．３．29	地域医療支援病院	医療法第４条第１項

（２）各種学会認定状況

日本内科学会認定教育施設（教育病院） 日本老年医学会認定施設 日本消化器病学会認定医制度認定施設 日本消化器内視鏡学会認定専門医制度指導施設 日本神経学会認定教育施設 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本呼吸器学会認定医制度認定施設 日本血液学会認定血液研修施設 日本糖尿病学会認定教育施設 日本超音波医学会認定超音波専門医研修施設 日本外科学会外科専門医制度修練施設 日本整形外科学会専門医研修施設 日本眼科学会専門医制度研修施設 日本泌尿器科学会専門医教育施設 日本皮膚科学会認定専門医研修施設 日本麻酔科学会認定研修施設 日本リウマチ学会教育施設 日本医学放射線学会放射線科専門医修練機関 日本リハビリテーション医学会研修施設 日本病理学会研修認定施設 日本臨床細胞学会教育研修施設 日本高血圧学会専門医認定研修施設 日本認知症学会専門医教育施設 日本心血管インターベンション治療学会研修施設 日本消化器外科学会専門医修練施設 日本がん治療認定医機構認定研修施設 日本栄養療法推進協議会NST稼働施設認定 日本内分泌学会内分泌代謝科認定教育施設 日本老年精神医学会専門医制度認定施設 日本老年歯科医学会認定研修歯科診療施設 日本感染症学会認定研修施設	日本透析医学会専門医制度教育関連施設 日本腎臓学会専門医制度研修施設 日本手外科学会研修施設 日本脳卒中学会専門医制度研修教育病院 三学会構成心臓血管外科専門医認定機構基幹施設 腹部ステントグラフト実施施設 日本精神神経学会精神科専門医研修施設 日本脳神経外科学会専門医研修プログラム研修施設 日本脳神経外科学会専門医研修プログラム関連施設 胸部ステンドグラフト実施施設 日本核医学会専門医教育病院 日本脈管学会認定研修指定施設 日本眼科学会専門医制度眼科研修プログラム施行施設 日本緩和医療学会認定研修施設 日本アレルギー学会アレルギー専門医教育研修施設 日本臨床細胞学会施設 呼吸器外科専門医関連施設 日本病態栄養学会認定病態栄養専門医研修認定施設 日本内科学会認定医教育病院 経カテーテル的大動脈弁置換術実施施設（TAVI） 日本核医学会　PET撮像施設 日本呼吸器内視鏡学会認定施設 非血縁者間骨髄採取認定施設 非血縁者間末梢幹細胞採取認定施設 補助人工心臓治療関連学会協議会IMPELLA実施施設 NCD参加施設 日本動脈硬化学会専門医制度教育病院 日本肝臓学会関連施設 日本脳卒中学会一時脳卒中センター 認定臨床実習指導施設 日本胆道学会認定指導医制度指導施設 日本臨床生理学会認定施設 日本集中治療医学会専門医研修施設

（３）各種学会施設認定に伴う指導医等一覧

（令和６年３月31日現在）

学会名	指導医等名（卒業年次）					
日本内科学会	鳥羽　研二	（S53）	村山　繁雄	（S54）	荒木　　厚	（S58）
	宮腰重三郎	（S59）	原田　和昌	（S60）	小林寿美子	（S61）
	岩切　理歌	（H１）	加藤　貴行	（H２）	仁科　裕史	（H３）
	山田　浩和	（H４）	坪光　雄介	（H５）	岩田　　淳	（H５）
	石川　譲治	（H６）	武井　　卓	（H７）	千葉　優子	（H７）
	久保かなえ	（H７）	碓井　伸一	（H７）	板橋美津世	（H８）
	田村　嘉章	（H８）	藤本　　肇	（H８）	石山　泰三	（H８）
	眞野　暁子	（H８）	山本　　寛	（H９）	小倉　和外	（H10）
	東原　真奈	（H13）	小金丸　博	（H13）	井原　涼子	（H14）
	村野　陽子	（H14）	齋藤　　輔	（H15）	小野　敏嗣	（H15）
	鈴木　訓之	（H15）	豊島　堅志	（H16）	三神信太郎	（H17）
	大庭　和人	（H18）	鳥羽　梓弓	（H18）	波多野敬子	（H19）
	片岡　　愛	（H20）	小松　俊介	（H20）	保坂　祥介	（H20）
	岡　　雅俊	（H20）	大川　庭熙	（H21）	小寺　玲美	（H22）
	十菱　千尋	（H22）	深川　一史	（H22）	濵谷　広頌	（H22）
	平　賢一郎	（H22）	佐塚まなみ	（H23）	野木森智江美	（H23）
	小林　聖未	（H23）	齋藤　義弘	（H23）	齊藤　陽子	（H24）
	栗原　正典	（H24）	二見崇太郎	（H24）	中山　智博	（H25）
	山中　法子	（H27）	羽鳥　清華	（H27）	舘鼻　　彩	（H27）
	大隅　　瞬	（H27）	清水　瑠理	（H27）	籠尾南海夫	（H28）
日本老年医学会	鳥羽　研二	（S53）	荒木　　厚	（S58）	宮腰重三郎	（S59）
	原田　和昌	（S60）	岩切　理歌	（H１）	石川　譲治	（H６）
	千葉　優子	（H７）	田村　嘉章	（H８）	藤本　　肇	（H８）
	山本　　寛	（H９）	村野　陽子	（H14）	鈴木　訓之	（H15）
	豊島　堅志	（H16）	大庭　和人	（H18）	鳥羽　梓弓	（H18）

学会名	指導医等名（卒業年次）					
	片岡　愛	(H20)	小寺　玲美	(H22)	濵谷　広頌	(H22)
	佐塚まなみ	(H23)	野木森智江美	(H23)	齊藤　陽子	(H24)
	二見崇太郎	(H24)				
日本消化器病学会	金澤　伸郎	(H１)	小野　敏嗣	(H15)	三神信太郎	(H17)
	保坂　祥介	(H20)	深川　一史	(H22)	羽鳥　清華	(H27)
日本消化器内視鏡学会	金澤　伸郎	(H１)	三井　秀雄	(H８)	中里　徹矢	(H13)
	小野　敏嗣	(H15)	保坂　祥介	(H20)	深川　一史	(H22)
	羽鳥　清華	(H27)				
日本神経学会	村山　繁雄	(S54)	加藤　貴行	(H２)	仁科　裕史	(H３)
	岩田　淳	(H５)	東原　真奈	(H13)	井原　涼子	(H14)
	波多野敬子	(H19)	平　賢一郎	(H22)	栗原　正典	(H24)
日本循環器学会	許　俊鋭	(S49)	原田　和昌	(S60)	坪光　雄介	(H５)
	石川　譲治	(H６)	碓井　伸一	(H７)	石山　泰三	(H８)
	藤本　肇	(H８)	眞野　暁子	(H８)	河田　光弘	(H９)
	鳥羽　梓弓	(H18)	小松　俊介	(H20)	十菱　千尋	(H22)
	齋藤　義弘	(H23)	二見崇太郎	(H24)		
日本呼吸器学会	山田　浩和	(H４)	山本　寛	(H９)	片岡　愛	(H20)
	濵谷　広頌	(H22)	佐塚まなみ	(H23)	野木森智江美	(H23)
	籠尾南海夫	(H28)				
日本血液学会	宮腰重三郎	(S59)	小林寿美子	(S61)	岩切　理歌	(H１)
	小倉　和外	(H10)	齋藤　輔	(H10)	橘　盛昭	(H24)
日本糖尿病学会	荒木　厚	(S58)	千葉　優子	(H７)	田村　嘉章	(H８)
	豊島　堅志	(H16)	大庭　和人	(H18)	小寺　玲美	(H22)
日本超音波医学会	許　俊鋭	(S49)	石川　譲治	(H６)	二見崇太郎	(H24)
日本外科学会	許　俊鋭	(S49)	葦沢　龍人	(S54)	金澤　伸郎	(H１)
	三井　秀雄	(H８)	河田　光弘	(H９)	中里　徹矢	(H13)
	松倉　満	(H17)	土屋　武弘	(H18)	乾　明敏	(H19)
	牧野　能久	(H19)	村田　知洋	(H22)	新井　孝明	(H24)
	登　祐哉	(H25)				
日本整形外科学会	時村　文秋	(S61)	宮崎　剛	(H５)	濱路　博	(H７)
	早川謙太郎	(H14)	正田奈緒子	(H15)	金子　雅子	(H16)
	金子　泰三	(H20)	河田　学	(H21)		
日本眼科学会	沼賀　二郎	(S59)	池上　靖子	(S61)	善本三和子	(H１)
	山本　裕樹	(H19)	大島　博美	(H16)	高尾　博子	(H21)
日本耳鼻咽喉科学会	鈴木　康弘	(H10)	渡邊　浩基	(H24)	家坂　辰弥	(H28)
日本泌尿器科学会	粕谷　豊	(H２)	永田　卓士	(H15)	津坂　恭央	(H18)
日本皮膚科学会	種井　良二	(S62)	宮澤理恵子	(H21)		
日本麻酔科学会	小松　郷子	(S60)	縄田　瑞木	(H11)	久保田　涼	(H12)
	秋山　絢子	(H18)	清水　啓介	(H27)	兒玉　瑞穂	(H29)
日本リウマチ学会	山田　浩和	(H４)	宮崎　剛	(H５)	久保かなえ	(H７)
	小林　聖未	(H23)				
日本医学放射線学会	徳丸　阿耶	(S60)	角　美奈子	(S61)	高田　晃一	(H10)
	鈴木　文夫	(H22)	佐々木　舞	(H26)	張　申逸	(H29)
日本リハビリテーション医学会	村山　繁雄	(S54)	金丸　晶子	(S61)	加藤　貴行	(H２)
	正田奈緒子	(H15)	齊藤　陽子	(H24)		
日本病理学会	新井　冨生	(S59)	六反　啓文	(H19)		
日本臨床細胞学会	新井　冨生	(S59)				
日本高血圧学会	原田　和昌	(S60)	石川　譲治	(H６)	鳥羽　梓弓	(H18)
日本認知症学会	鳥羽　研二	(S53)	村山　繁雄	(S54)	金丸　晶子	(S61)
	加藤　貴行	(H２)	仁科　裕史	(H３)	岩田　淳	(H５)
	古田　光	(H８)	井原　涼子	(H14)	大森　佑貴	(H22)
	栗原　正典	(H24)				
日本心血管インターベンション学会	坪光　雄介	(H５)	碓井　伸一	(H７)	藤本　肇	(H８)
日本消化器外科学会	葦沢　龍人	(S54)	金澤　伸郎	(H１)	中里　徹矢	(H13)
	新井　孝明	(H24)				
日本臨床検査医学会	新井　冨生	(S59)				
日本内分泌学会	千葉　優子	(H７)	田村　嘉章	(H８)	大庭　和人	(H18)
日本老年精神医学会	古田　光	(H８)	栗田　主一	(S59)	藤原　佳典	(H５)
	大森　佑貴	(H22)				
日本老年歯科医学会	平野　浩彦	(H２)	齊藤　美香	(H７)	森　美由紀	(H18)
日本透析医学会	武井　卓	(H７)	板橋美津世	(H８)	鈴木　訓之	(H15)
	津坂　恭央	(H18)	岡　雅俊	(H20)		
日本腎臓学会	武井　卓	(H７)	久保かなえ	(H７)	板橋美津世	(H８)

学会名	指導医等名（卒業年次）					
	鈴木　訓之	(H15)	山中　法子	(H27)		
日本手外科学会	時村　文秋	(S61)				
日本脳卒中学会	村山　繁雄	(S54)	岩田　　淳	(H５)		
日本心臓血管外科学会	許　　俊鋭	(S49)	河田　光弘	(H９)	松倉　　満	(H17)
	乾　　明敏	(H19)	村田　知洋	(H22)		
日本精神神経学会	古田　　光	(H８)	井藤　佳恵	(H14)	片岡　宗子	(H19)
	松井　仁美	(H21)	大森　佑貴	(H22)	清水　真央	(H28)
日本脳神経外科学会	高梨　成彦	(H14)	小原　健太	(H23)	横井　利光	(H29)
日本脈管学会	松倉　　満	(H17)	牧野　能久	(H19)		
日本アレルギー学会	山田　浩和	(H４)	鈴木　康弘	(H10)		
日本口腔外科学会	森　美由紀	(H18)				
日本大腸肛門病学会	金澤　伸郎	(H１)				
日本肝臓学会	葦沢　龍人	(S54)	小野　敏嗣	(H15)	三神信太郎	(H17)
	深川　一史	(H22)				
日本医師会産業医	増田　義重	(S58)	宮腰重三郎	(S59)	山田　浩和	(H４)
	田村　嘉章	(H８)	小金丸　博	(H13)	村野　陽子	(H14)
	金子　雅子	(H16)	片岡　宗子	(H19)	片岡　　愛	(H20)
	小松　俊介	(H20)	金子　泰三	(H20)	大森　佑貴	(H22)
	野木森智江美	(H23)	羽鳥　清華	(H27)		
日本病態栄養学会	荒木　　厚	(S58)				
日本胸部外科学会	許　　俊鋭	(S49)				
日本呼吸器内視鏡学会	山本　　寛	(H９)	佐塚まなみ	(H23)		
日本顎咬合学会	齊藤　美香	(H７)				

８　事務局

経営企画局事務部

（ア）経営企画課

経営企画課は、理事長のトップマネジメントを補佐する役割を担い、課内はもとより総務課、医療サービス推進課、医療情報戦略課及び地域連携課と情報を共有し綿密に意思疎通を図りながら、センター第四期中期計画及び年度計画の達成に向け、病院及び研究所の円滑な業務運営をサポートするとともに、センターが抱える諸課題の解決に向けて果敢に取り組んだ。

①　経営改善に向けた取組

センター経営の改善・効率化を図るため、経営戦略会議及び病院運営会議等の各種会議において、センターの収支、実績等の報告及び分析を行い、課題点と改善策の検討を行った。検討にあたり、より実効性ある経営改善につなげるため、各診療科の診療実績の検証や課題の把握、改善に向け、各診療部門からのヒアリングなどを実施した。さらに、令和６年度予算の策定にあたっては、予算要求部署へのヒアリングを行い、既存業務の見直しを図るなど、一層の経費の削減に努めた。

②　経営状況の把握と効率的な会計処理方法の検討

適時の経営判断に資するため、長期的な資金計画の策定や更新、月次決算などの充実を図り、財務内容の分析をきめ細かく行った。また、法人が抱えるリスクを洗い出し、適法性、合理性及び効率性の観点から適切な内部監査を実施したほか、会計監査人及び監事監査の指摘や意見について適切に対応した。

（イ）医療情報戦略課

医療情報システム等に蓄積されている情報やDPCデータを用い、経営指標数値の抽出及び傾向分析を行った。

診療科別の原価計算を実施し、科別の費用配分により収支状況を可視化した。

医療情報システムを始めとするシステムの安定稼働のサポートやコロナ禍におけるシステムの活用を拡充した。

① 原価計算による収支分析

診療科別の原価計算を実施するとともに、各科の収支課題の可視化を図った。

② 医療の質評価とDPCデータの公表

今年度も全国自治体病院協議会による「医療の質の評価・公表等推進事業」に引き続き参加し、データ提供を行った。また、DPCデータを使用した「病院情報の公表」や、医療実績のホームページ掲載を継続し、センターにおける診療実績の発信に努めた。

③ 医療情報システムの安定稼働

医療情報システムの課題に対し、システムベンダや各部署の職員と連携を取りながら迅速に改善し、より効率的な診療業務ができるよう推進した。また、財務会計システム及び人事給与システムが安定的に稼働するようサポートをした。

④ 入退院サポートセンター本稼働

入院が予定されている患者が、入院生活をスムーズに送り、より早い時期により良い状態で退院できるよう入院前からの支援を行う取り組みを多職種（看護、薬剤、栄養、MSW）介入することにより入院治療が始まる前に患者状態を把握する事ができる運用を開始した。

⑤ 脳卒中ケアユニット病棟拡大

稼働実績や地域の医療ニーズ等を踏まえ、病床数拡大しつつ段階的な増床を図った。

（ウ）総務課

① 人材確保及び人材養成

高齢者医療を安定的・継続的に提供するため必要な法人の人材として、令和５年度は医師23名、研究員17名、看護師61名、医療技術員27名、事務22名を採用した。看護師採用については７対１看護導入を受け積極的に行い、保育料の助成制度等の看護師確保対策・離職防止対策を実施した。

医療従事者及び研究者の育成については、医科・歯科研修医54名、都立看護学校を始め計30施設から726名の実習生及び研修生を受け入れたほか、連携大学院や大学・研究機関から学生や研究者を受け入れた。

② 契約状況

令和５年度の契約状況は、物品の買い入れ328件、修理・修繕84件、印刷製本8件、委託389件、物品借り入れ68件、工事3件、人材派遣34件で、合計914件であった。

③ 施設・設備の維持・管理と環境整備

環境整備においては、10階東病棟を脳卒中ケアユニットに再編するため扉改善工事を実施し、救急外来においては感染対策のため補助金を利用し陰圧換気設備工事を行った。その他、施設・設備に不具合が生じた際には、必要性・緊急性・費用対効果なども考慮しながら順次改善を図っている。新施設稼働から11年経過したこともあり、経年劣化への対応や消耗部品の交換など、計画的に修理・補修を行い、施設を最善の状況に保つよう留意している。さらに、光熱水費等についても、使用量の管理等により、省エネルギーの実現と経費節減に向けた対策を実施している。

④ 災害・危機管理対策の実施

コロナ禍前に例年行ってきた大規模災害訓練については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から実施を見送ったが、令和５年１１月に板橋区との合同防災訓練として板橋区・東京都保健所・板橋看護学校・医師会等が参加しトリアージ訓練・医療救護所設置訓練・医療救護活動訓練等を実施した。また、令和５年１２月に安否確認システムを導入し、令和６年３月に一斉送信訓練を実施した。その他部分訓練として、令和６年３月に栄養科実働訓練を実施した。

⑤　診療内容及び研究成果の広報普及

ホームページ、広報誌、YouTube用動画、Twitter等により積極的にセンター事業についての情報を発信している。公開講座は対面開催2回、YouTube開催2回を実施し、並行してセンター公式YouTubeチャンネルを充実させている。また、新型コロナウイルス感染症に対する取り組みをまとめた「新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020年～2023年）」を発行した。

・病院広報誌「糸でんわ」　　年間６回発行
・研究所広報誌「研究所NEWS」　　年間４回発行

（エ）医療サービス推進課

高齢者の急性期病院として、医療資源の有効活用と健全な病院経営を目指し、在院日数の短縮と病床稼働率の確保を組織的な目標として揚げている。在院日数の短縮について、入退院支援チームの活動や各病棟別の在院患者一覧表による管理を実施することにより、令和５年度平均在院日数は12.5日、病床稼働率は71.7%であった（対稼働病床84.5%）。診療録の開示については233件、セカンドオピニオン利用患者数は31名であった。

院内の医療安全管理対策については、医療安全管理委員会等の事務局として、院内各診療科・各部門との協力体制により年度活動計画を策定し、医療安全管理講習会の開催、各種研修会・勉強会及び医療安全推進週間を設定し、安全管理体制の徹底と職員の医療安全に対する意識の向上に取り組んでいる。令和５年度は、医療安全管理講演会を２回開催し、延出席数は2,815名であった。

患者様の声（ご意見箱への投書）は「意見・要望」81件、「感謝」24件であった。また、入院患者満足度調査を適宜実施し、毎月の集計結果を職員向けに公開している。

※令和５年度入院患者満足度　89.0%　（令和４年度　88.5%）

９　令和５年度業務実績の全体的な概要

（１）総括と課題

第四期中期目標期間の初年度となる令和５年度は、新たに高齢者糖尿病医療を加えた四大重点医療を中心に医療の提供を進めた。

また、積極的な救急患者の受入れ、地域医療機関との連携強化を推進するなど、急性期病院としての役割を果たし、地域医療の体制確保に貢献した。

さらに、東京都における公的研究機関として、高齢者の健康増進や自立した生活の継続に向けた研究を推進し、成果の普及・還元に努めた。

加えて、新型コロナ対応においては、国や都と連携しながら、新型コロナの５類移行後もコロナ専用病棟を確保し、陽性患者を積極的に受け入れた。

ア　組織運営

理事会や経営戦略会議を定期的及び随時開催し、法人運営の重要事項を審議・決定するとともに、病院部門、研究部門の幹部職員で構成する会議等を通じて、事業運営の検討や情報の共有を図った。

また、外部有識者で構成する運営協議会を開催し、法人運営に関する意見や助言を受けるとともに、研究活動の妥当性について、外部評価委員会から評価を受けるなど、透明性を確保しつつ都民ニーズに的確に対応した法人運営を行った。

イ　病院運営

病院幹部職員で構成する病院運営会議においては、病院運営について迅速かつ十分な議論や審議を随時行い、コロナ禍での病棟運用をはじめ、平均在院日数の適正化や病床利用率の向上等の様々な検討や取組を行った。

また、入退院サポートセンターを設置し、予約入院患者が入院生活をスムーズに送り、より早い時期により良い状態で退院できるよう、入院前、入院中、退院後の生活までを見据えた説明を行うよう努めた。

令和６年３月には、紹介患者に対する医療提供、救急医療等によりかかりつけ医を支援し、地域医療の確保を図る病院として「地域医療支援病院」に承認された。

ウ　研究所運営

研究所幹部職員で構成する研究推進会議において、定期的に研究所運営や研究支援に関する検討を行うとともに、外部評価委員会、内部評価委員会等により、各研究の進行管理と評価を実施した。

また、臨床研究法や各種倫理指針に基づく厳正な倫理審査など、研究者や臨床医師が行う研究を包括的に支援する組織「健康長寿イノベーションセンター（HAIC)」において、認定臨床研究審査委員会の運営や、知的財産活動の普及・促進のための体制整備など、研究推進のための基盤強化に取り組んだ。

さらに、病院と研究所が一体となり、引き続き「認知症未来社会創造センター（IRIDE)」や「フレイル予防センター」を運営するとともに、「スマートウォッチ等のデジタル機器を用いた健康づくりに関する研究プロジェクト」ではウエアラブルデバイスを用いて地域在住高齢者（板橋区・千代田区）及び当センターフレイル外来通院患者等から収集したライフログ情報（歩行、活動量、睡眠状態、脈拍、会話時間等）の検証を行った。

エ　経営改善

引き続き厳しい経営状況にある中、急性大動脈スーパーネットワーク、東京都CCUネットワークを始めとした救急患者の積極的な受入れなどにより収益を確保するとともに、材料費、医療機器の保守費用をはじめ、各診療科収益の経年比較など一層のコスト削減策の検討・実施を行うなど、経営改善に向けた取組を推進した。

（２）事業の進捗状況及び特記事項

以下、中期計画及び年度計画に記された主要な事項に沿って、令和５年度の事業進捗状況を記す。

１）高齢者の健康長寿を支える医療の提供・普及

（ア）健康長寿を阻害する疾患等に対する高齢者医療の提供

センターが重点医療として掲げる血管病・高齢者がん・認知症・高齢者糖尿病について、研究所と連携しながら、高齢者の特性に配慮した低侵襲な医療の提供及び患者が安心できる医療体制を推進する。

また、包括的な医療を提供するため、多職種の連携による生活機能の維持・向上を目指した支援を行うとともに、医療安全管理体制の強化を図る。

①　血管病医療への取組

SCU（脳卒中ケアユニット）病床を増床（６床→９床）し、より多くの脳卒中患者を積極的に受け入れた。引き続き、SCU稼働率90％を維持した。

また、急性大動脈スーパーネットワーク及び東京都CCUネットワークからの依頼は、原則として断ることなく受け入れた。

そのほか、当センター医師が監修を行った『心不全管理手帳』を活用し、運動介入や栄養介入をはじめ、疾患との向き合い方やアドバンス・ケア・プランニングについて、患者及び家族との対話に努めた。

②　高齢者がん医療への取組

昨年度に引き続き、肝胆膵領域における高難度手術を積極的に行うなど、高度ながん治療を提供した。さらに、今年度からは、腹腔鏡下肝切除術及び腹腔鏡下鼠経ヘルニア手術を開始した。

NBI内視鏡を用いた検査によるがんの早期発見・早期治療のモダリティが増えたことにより、内視鏡下粘膜下層剥離術（ESD）や内視鏡的粘膜切除術（EMR）等の低侵襲な治療を例年より多く実施することができた。

また、放射線治療においては、呼吸監視装置による呼吸同期照射を開始し、より正確な治療を提供した。

③　認知症医療への取組

今年度よりアルツハイマー型認知症にレカネマブが適応となり、全国に先駆けて投与を開始

した。それに伴い、レカネマブ投与のために必要なアミロイドPETの立ち上げやMRIの検査体制整備を図った。

また、もの忘れ外来ではレカネマブの相談外来としての機能を果たした。患者・家族に対して効果、副作用について丁寧な説明を行い、意思決定やフォローアップ相談体制を整備した。

④　高齢者糖尿病医療への取組

インスリンポンプの新しいモードを導入し、血糖コントロール改善、較正の回数軽減に役立ち、患者のQOL向上に大きく役立った。

さらに、インスリンペン自体に注射時刻が記録されるインスリンスマートペンの導入を行い、インスリン注射のアドヒアランス向上に繋がっている。

また、糖尿病患者会の主催で、通いの場を利用した自主運営による運動教室を開始した。要介護認定のない患者への運動・社会参加を推進するため、患者会、区担当者、通いの場提供事業者と連携を図り、通いの場を立ち上げ、利用を推奨している。

⑤　高齢者の特性に配慮した医療

高齢者に多い疾患に対応するため、白内障手術、加齢黄斑変性等に対する抗VEGF薬硝子体内注射などの治療を積極的に行った。また、局所麻酔下手術が不可能な認知症患者に対しては、全身麻酔下で手術を行うなどの対応をした。

また、高齢者の加齢に伴う関節疾患・脊椎疾患に対応するため、従来の人工関節外来、脊椎外科外来に加え、股関節外来、膝関節外来などを設置し、診断・治療を実施した。

（イ）地域における公的医療機関としての取組

①　救急医療

24時間365日のオンコール体制を維持し、夜間も含めた緊急手術体制を維持した。

また、自院救急車の運用を開始し、脳卒中の患者を中心に近隣医療機関から当センターへの緊急搬送を担った。

そのほか、心臓カテーテル検査及びIVRに対応できる看護師の育成や、救急救命士の新規採用など、救急医療の体制確保に注力した。

②　地域連携の推進

引き続き、地域医療連携システム（C@RNA）を活用して、連携医療機関に対し、オンライン検査・初診予約の利用促進に向けた訪問活動を積極的に行った。さらに、今年度から上部内視鏡検査予約の運用を開始した。

また、板橋区医師会連携会議、板橋区医師会・豊島病院三者合同懇親会を４年ぶりに開催し、さらなる地域連携の強化を図った。

③　災害・感染症等の緊急事態への対応

令和６年１月に発生した能登半島地震に際し、自治体病院協議会を通じて、看護師延べ11名を被災した医療機関に迅速に派遣した。

新型コロナウイルス５類移行後もコロナ専用病棟を１病棟確保し、認知症合併例など高齢者の複雑例を多数受け入れた。

災害拠点病院として、板橋区、板橋区医師会、板橋区薬剤師会協力のもと合同大規模災害訓練を実施した。

（ウ）安心かつ信頼できる質の高い医療提供体制の確保

①　安全で質の高い医療の提供

インシデント・アクシデントレポートを活用するとともに、医療安全対策室の積極的な取組により、引き続き医療安全管理を推進した。

また、今年度から、臨床工学技士が内視鏡業務に関与する機会を増やし、内視鏡下粘膜下層剥離術（ESD）や内視鏡的逆行性胆管膵管造影（ERCP）に対応可能となった。そのほか、血液浄化業務におけるエコーガイド穿刺や、シャント管理業務についても対応している。

② 患者中心の医療の実践・患者サービスの向上

ご意見箱に寄せられた要望・苦情や患者満足度調査の結果については、速やかに対策を検討し、病院幹部会にて報告を行うとともに、改善状況のモニタリングについても会議体で報告した。

また、離床センサー類を効果的に使用するために、定期点検及び管理を強化し、入院患者の面会や行動制限が緩和される中、転倒・転落発生率を前年と同様の水準を維持した。また、それに起因する骨折の発生も前年度を下回った。これらは、入院時の転倒・転落リスクの評価、患者の状態に適した防止策が効果を発揮したと考えられる。

２）高齢者の健康長寿と生活の質の向上を目指す研究

（ア）高齢者に特有な疾患と老年症候群を克服するための研究

前立腺がん、乳がんや卵巣がんにおける治療抵抗性ならびに治療不応性に関わる新しい転写制御および RNA 制御メカニズムを見出し、その診断・治療標的への応用を患者由来がんモデルや臨床検体等を用いて検討した。

また、加齢に伴う心臓組織内毛細血管構造の変化の追跡に加え、新たに透過機能を検出・評価法を確立した。

さらに、血管内皮型 APP は糖鎖修飾および代謝機構が神経細胞型 APP とは異なり、一度細胞表面に輸送されたのちに再度細胞内に取り込まれた APP が 0 型糖鎖修飾をうけることでアミロイドβに切断されることを明らかにした

（イ）高齢者の地域での生活を支える研究

東京都北区の12圏域において、地域包括支援センターによるPDCAサイクルに沿った通いの場づくりの伴走支援を行い、団地在住男性の孤立解消を目的としたプロジェクトや移動型スーパーを活用した居場所づくりなどの取り組みを進めた。

また、認知症とともに生きる高齢者が希望と尊厳をもって暮らせる認知症フレンドリー社会のモデル構築に向けた研究を実施した。

さらに、IOTデバイスによる認知的フレイルの検知を行い、感度が90％以上で、認知機能低下を検出する人工知能モデルを作成した。運動習慣がフレイル状態となっても精神的健康を保つことを明らかにした。

（ウ）老年学研究におけるリーダーシップの発揮

第12回アジア/オセアニア国際老年学会議（IAGG-AOR2023）や第11回TOBIRA研究交流フォーラムにおいて、IRIDE事業等の研究成果を広く発信した。

また、TOBIRAでは「認知症の未来社会～バイオマーカーを用いた新たな認知症医療の社会実装～」と題し、IRIDEを中心に、血液等を用いた低侵襲のバイオマーカー検査、AI を活用した神経画像検査支援システム、AI チャットボット（自動会話プログラム）等、多数研究成果に加え、23件のポスター発表により活発なディスカッションが行われた。

（エ）研究成果の社会への還元

治験審査委員会（IRB）、認定臨床研究審査委員会（CRB）などの委員会を適切に運営することにより、当センターで実施している研究の質や安全性を確保するとともに、臨床研究法の CRB では都立病院の臨床研究の審査・管理を実施し、再生医療安全確保法の CRB でも新規に 1 件審査・管理を開始した。

また、科学研究費等へ積極的に応募することにより、科研費新規採択率が全国３位となった。

３）法人の資源を活用した政策課題への対応

（ア）介護予防・フレイル予防の取組

区市町村・地域包括支援センター職員に対する研修として、「総論編」１回＋オンデマンド、実践編I：地域づくりによる介護予防研修４回、実践編II：多様性・機能強化研修６回、介護予防・フレイル予防推進員研修４回に加え、自治体の進捗報告の場として実践報告会を２回実施し、計1,190名が受講した。

また、通いの場への予防プログラム「ちょい足しプログラム」のモデル事業を荒川区・豊島

区で実施し、都内11自治体に展開した。

（イ）認知症との共生・予防の取組

認知症高齢者を地域で支える医療従事者等の認知症対応力向上に向けた支援として、認知症サポート医フォローアップ研修４回、認知症疾患医療センター職員研修２回、看護師認知症対応力向上研修Ⅱ４回、研修内容を検討する検討会５回を実施した。

また、区市町村の認知症対応力向上に向けた支援として、認知症地域対応力向上研修３回、島しょ地域等（島しょ地域各町村及び檜原村）認知症サポート事業（大島町外６町村への医療相談、初期集中支援チームの活動支援等）、島しょ地域の認知症対応力向上研修３回（利島村、御蔵島村、青ヶ島村）を実施した。

４）高齢者の医療と介護を支える専門人材の育成

東京都全域を対象地域として、認知症高齢者を地域で支える医療従者者等に対し、認知症対応力向上を目的とした研修会の企画運営を実施した。

また、大学病院や地域機関病院、特別連携施設と連携しながら専攻医を受け入れ、高齢者医療や老年医学等の研修を行い、今後の高齢者医療・研究を担う人材の確保・育成に努めた。

５）業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためとるべき措置

業務の改善や効率化のために新たに勤怠管理システムを導入することにより、職員の勤務状況を可視化、紙媒体での管理からペーパーレス化した。

また、新たに医師も含めた全職員を対象とした悉皆研修の１つとしてコンプライアンス研修を開催し、医療及び研究に携わる者の行動規範と倫理について周知した。

６）財務内容の改善に関する事項

収入面においては、「画像診断管理加算２」や「看護職員夜間１２対１配置加算」などの新たな施設基準を取得し、収益確保に向けた取組を実施した。

また、公的研究費（科研費等）への応募や産学公連携活動（共同研究・受託研究・受託事業等）を推進し、昨年度を上回る外部資金を獲得した。

費用面においては、各診療科別に収支増減、収益力を分析・報告するほか、入外収益の経年推移や原価計算結果に基づいたヒアリングを実施し、センター内での課題共有と改善によるコスト削減を実施した。

７）その他業務運営に関する重要事項（センター運営におけるリスク管理）

新型コロナに対し、都や地域と連携し、陽性患者の受入れや宿泊療養施設への看護師派遣などを積極的に実施したほか、都が運営する臨時医療施設と連携した転送搬送体制の構築等を実施した。

また、サイバー攻撃による被害防止に備え、情報システムに係る特定のシステムベンダーに対してセキュリティ監査を行い、不適事項の改善を指示した。

さらに、外部の弁護士が相談を受け付けるハラスメント相談窓口を設置するとともに、ハラスメント防止にかかる普及啓発のメールを送信するなど、職員が働きやすい職場環境を構築した。

第二部　病 院 部 門

Ⅰ　令和５年度運営報告

内科総括

副院長　岩田　淳、内科総括部長　山本　寛

1　人員体制（敬称略）

〈部長〉

荒木厚（副院長（～10月）、健康長寿医療研修センター長）、岩田淳（副院長（10月～）、脳神経内科部長）、増田義重（臨床検査科部長）、宮腰重三郎（血液内科部長）、小林寿美子（輸血・細胞療法科部長）、岩切理歌（高齢診療科・総合内科部長）、仁科裕史（脳神経内科専門部長）、石川譲治（循環器内科部長）、坪光雄介（循環器内科専門部長、救急診療部部長）、碓井伸一（循環器内科専門部長（7月～））、石山泰三（循環器内科専門部長）、藤本肇（循環器内科担当部長）、武井卓（腎臓内科・透析科部長）、板橋美津世（腎臓内科・透析科部長）、田村嘉章（糖尿病・代謝・内分泌内科部長）、千葉優子（糖尿病・代謝・内分泌内科専門部長）、久保かなえ（膠原病・リウマチ科部長）、山本寛（内科総括部長（10月～）、呼吸器内科部長）、山田浩和（呼吸器内科専門部長）、小金丸博（感染症内科専門部長）、小野敏嗣（消化器・内視鏡内科部長）、齊藤英一（緩和ケア内科部長（～12月））、中島豪（緩和ケア内科部長（11月～））、古田光（精神科部長）

〈医長〉

東原真奈（脳神経内科医長）、井原涼子（脳神経内科医長）、三神信太郎（消化器・内視鏡科医長）、保坂祥介（消化器・内視鏡科専門医長）、深川一史（消化器・内視鏡科専門医長）、豊島堅志（糖尿病･代謝・内分泌内科医長）、大庭和人（糖尿病・代謝・内分泌内科専門医長）、大川庭熙（総合内科医長）、小倉和外（血液内科医長）、齋藤輔（血液内科医長）、鳥羽梓弓（循環器内科医長）、小松俊介（循環器内科医長）、二見崇太郎（循環器内科専門医長）、鈴木訓之（腎臓内科・透析科医長）、岡雅俊（腎臓内科・透析科専門医長）

〈常勤〉

（高齢診療科・総合内科）村野陽子、片岡愛、濵谷広頌、中山智博、（循環器内科）十菱千尋、清水瑠理、齋藤義弘、両角愛、吉村沙織、（消化器・内視鏡内科）羽鳥清華、大隅瞬、（脳神経内科）波多野敬子、栗原正典、平賢一郎、（糖尿病・代謝・内分泌内科）小寺玲美、舘鼻彩、（腎臓内科・透析科）山中法子、（呼吸器内科）石橋昌幸、佐塚まなみ、籠尾南海夫、（膠原病・リウマチ科）小林聖未、（精神科）松井仁美、大森佑貴、清水真央、片岡宗子、（緩和ケア内科（呼吸器内科兼務））野木森智江美

〈人事異動〉

令和5年度は、4月1日より田村嘉章が糖尿病・代謝・内分泌内科部長に、小金丸博が感染症内科専門部長に、大川庭熙が総合内科医長に、鳥羽梓弓、小松俊介が循環器内科医長に、岡雅俊が腎臓内科・透析科専門医長に、大庭和人が糖尿病・代謝・内分泌内科専門医長にそれぞれ昇任した。また、10月1日より山本寛が内科総括部長に昇任した。

4月1日に循環器内科専門医長として二見崇太郎、腎臓内科・透析科医長として鈴木訓之、7月1日に循環器内科専門部長として碓井伸一、11月1日に緩和ケア内科部長として中島豪を、それぞれ迎えた。4月1日に循環器内科に齋藤義弘、両角愛、吉村沙織、脳神経内科に平賢一郎がそれぞれ入職した。

令和5年6月30日付けで呼吸器内科の石橋昌幸、12月31日付けで緩和ケア内科部長の齊藤英一、令和6年3月31日付けで臨床検査科部長の増田義重が定年退職、消化器・内視鏡科医長の三神信太郎、精神科の片岡宗子がそれぞれ退職した。これまでセンターの診療の発展に貢献されたことに感謝の意を表したい。

〈シニアレジデント〉

白倉英知（膠原病・リウマチ科／血液内科／腎臓内科・透析科／脳神経内科／糖尿病・代謝・内分泌内科）、松野志歩（腎臓内科・透析科）、近藤壮一郎（脳神経内科）、谷藤秀一（脳神経内科）、小谷理紗（脳神経内科）、久能美香（血液内科）、土屋毅亮（腎臓内科・透析科）、太田由衣（腎臓内科・透析科）、正谷一石（消化器・内視鏡内科）、内田奈緒子（高齢診療科・総合内科／脳神経内科）、長嶋勇希（糖尿病・代謝・内分泌内科）、帯刀健太（腎臓内科・透析科）、佐藤優樹（消化器・内視鏡内科）、髙橋健祐（脳神経内科）、嶋﨑亮介（脳神経内科）、井原建人（糖尿病・代謝・内分泌内科／呼吸器内科）、麓隆太郎（糖尿病・代謝・内分泌内科）、堀越裕介（消化器・内視鏡内科）、小森雄太（脳神経内科）、山川尚子（脳神経内科／糖尿病・代謝・内分泌内科）、土屋大樹（精神科）、村松恭祐（脳神経内科）

10月15日、シニアレジデントの白倉英知先生が逝去された。長年センターの診療に多大な貢献をされた先生である。この場を借りて心よりご冥福をお祈りする。

〈ジュニアレジデント〉

1年目は岡田璃瀬、中山英雅、吉井元、鈴木淳史、林利樹、和田都花、宮内祐弥、孫田皓康、東京大学からのたすき掛けで宮本一慶が、2年目は今村洋介、小林茉愛、舟川開、福島薫子、西頭麻希、秋冨友佑、佐藤宏樹、林拓海が、それぞれ研修した。2年生の8人が初期研修を修了した。

2　診療活動・実績

（1）外来部門

	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度	対前年度比
延外来患者数	101,694	106,777	102,329	96,397	94.2%
初診算定外来者数	4,566	4,957	4,866	4,867	100.0%
１日平均外来患者数	418.5	441.2	421.1	396.7	94.2%

（2）救急部門

	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度	対前年度比
救急外来受診数	5,573	6,819	7,115	5,353	75.2%

内科系の外来患者数は延外来患者数、1日の平均外来患者数はわずかに減少したが、初診算定外来者数は前年度と同等であった。一方、救急外来受診数の減少が目立った。救急外来は二次救急として24時間体制で行い、日勤帯は常勤医が指導医として3～4週に1回担当し、初期研修医1年目と2～4年目の医師と合わせて3人体制で救急外来を担当した。

内科外来では、総合内科・高齢診療科の医師が指導医となって初期研修医の外来研修をサポートした。高齢診療科外来は月～金曜日の午後、老年症候群の鑑別、高齢者総合機能評価を行い、総合内科と合わせて3,114人という多くの患者を受け入れた。フレイル外来では767人の受診があり、昨年度と比べて7.9%増加した。

新規患者の獲得、逆紹介の促進が必要不可欠である。医療連携係とともに地域医療機関への個別訪問を行い、各紹介元医療機関からの紹介患者数や個別の経過についてのご報告、各診療科のセールスポイントの紹介、紹介元医療機関のご要望の確認、24時間オンライン予約システム（C@RNAシステム）の宣伝等を行った。

（3）入院

	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度	対前年度比
内科延入院患者数	88,625	89,185	91,080	89,952	98.8%
内科新規入院患者数	4,116	4,076	3,786	3,436	90.8%
内科転入院患者数	1,874	2,403	2,469	2,571	104.1%
内科退院患者数	5,673	6,160	5,897	5,645	95.7%
病床利用率(%)	80.8	80.8	－	－	－
内科在院日数	16.9	16.2	17.6	18.6	105.7%
転入出込在院日数	13.8	12.8	13.8	14.0	101.4%

内科系の新規入院患者数、退院患者数はいずれも減少したが、在院日数が増加したことにより、延入院患者数は昨年度同様となった。センターの運営改善にはコロナ禍で閉鎖してきた病棟・病床を可能な限り速やかにオープンすることが必要であり、COVID-19対応病床としていた10階東病棟について、10月からこれを閉鎖しSCU化に向けた工事を開始、12月からはICUの8床を6床に減床し、SCUを6床から8床に増床した。これにより、ICU・SCUの効率的な運用が図られ、大きな収益につながった。そして、令和6年2月28日からは10階東病棟9床のSCUとしての運用を開始した。以降もSCUはフル稼働が続いており、6月には12床まで増床する方針になっている。一方、COVID-19対応病床については、9階東（15床）と10階東（疑似症用；10床）をこれにあて運用したが、10月からは9階東のみ20床での運用となった。内科系・外科系各科が輪番で診療する体制で運営していたが、新型コロナウイルス感染症にかかる診療報酬上の特例措置が令和6年3月末で廃止となることを受けて、4月以降はCOVID-19対応病床を廃止し、あらゆる病棟でCOVID-19の患者を受け入れることになった。10階東病棟のSCU運用に伴って、COVID-19対応病床を9階東病棟の20床のみとし、その9階東についても、4月からは一般病棟として稼働させることになった。これによって、稼働病床数が令和6年4月あたまの時点で467床から483床まで増床となる。また、コロナ禍で分散していた各診療科の病棟を、可能な限り同一フロアへ集約させ、一方で、病棟間の繁閑差や稼働率の平準化を図ることを目的として、4月あたまに大規模な病棟再編を行うことになり、その準備を進めた。

地域包括ケア病棟は岩切部長を中心に、内科病棟から在宅復帰のための患者を受け入れ、在院日数短縮、患者・家族の負担軽減に引き続き貢献した。在宅医療連携病床は大川医長が担当した。

３　感染対策

4月から、PCR偽陽性が疑われる例、アフターコロナか新規感染か判断に迷う例、なかなかPCRが陰性化せず感染対応を解除できない例などに対して、SARS-CoV-2抗原定量検査の運用が正式に開始された。5月8日からは新型コロナウイルス感染症が感染症法上の第2類から第5類に変更となり、研究所の協力のもと行ってきた予定入院前PCR(前日連携検査外来で実施)は平日のみ行う運用に変更したが、予定入院当日の抗原検査は引き続き運用された。緊急入院症例に対しては、引き続き呼吸器PCR（FilmArray®呼吸器パネル2.1）で入院時の感染確認を行った上で一旦は個室隔離対応としたが、陰性例については、翌日の研究所PCRで陰性を確認した上で隔離解除可とした。10月1日からの緊急入院症例について、入院当日の呼吸器PCRが陰性であれば、一部条件付きで大部屋への入院を可能とし、10月2日からは、2泊以上の入院症例に限り直近の平日にPCRを行って陰性を確認すれば、当日の抗原検査は不要とした。11月1日からは、1泊2日予定入院に関して、事前に抗原検査キットを渡し、当日自宅で陰性確認をして頂くことになり、事前のPCR検査は不要とした。さらに緊急入院に関しては、有症状例に対しては従来どおり呼吸器PCRを行うが、症状がない場合には抗原検査陰性を確認できれば大部屋への入院を可能とした。また、職員の感染防護具の着用についても、基準を一部緩和した。呼吸器PCRパネルの導入によって、これまで感染対策が整備されていなかった呼吸器感染症が検出可能となったが、RSウイルス、およびヒトメタニューモウイルスのPCR陽性の患者については、CDCガイドラインに基づき原則個室対応とするよう改めた。

職員の新型コロナウイルスワクチンの接種については、6回目（5月29日～6月15日）、7回目（XBB株対応；9月20日～11月1日）が行われ、内科系医師、外科系医師が当番制で問診を行い、ER担当は循環器内科が担当した。

４　研修・教育活動

研修医は新たに初期研修医9名が4月より研修を開始し、2年目と合わせて計17名が研修を行った。研修医は、所属の科のカンファともに、モーニングカンファ、昼のクルズス、病院CC、病院CPC、研修医CPC、高齢診療科・総合内科の外来研修などに参加し、幅広い研修が行われた。初期研修医2年目は8名全員が初期研修プログラムを修了した。金澤先生を中心に各科の医師が協力し、6月24日にプラネックス研修が行われた。病院CCは研修医教育のために毎週木曜日に行われ、初期研修医が発表し、専攻医または若手医師がコメンテーター、指導医が指導する3人体制で行なわれた。モーニングカンファはレジデントが夜間の一般内科救急患者の症例の検討を救急診療部の坪光先生、田村先生、加藤先生などの指導のもとに行った。昼のクルズスは板橋先生、千葉先生を中心に管理し、毎週1回、内科のみならず、全科の先生が講義を行った。研修医のリクルート活動として、レジナビはオンラインとなり、6月15日に病院の紹介動画と初期研修医、専攻医、指導医が集まって、学生の質問に答えるような形式として開催された。7月29日午後にハイブリッド形式で高齢医学セミナーを行った。初期研修医の定員は8名だが、第一希望者は28名で3.50倍と高倍率を維持している。

当センターの内科専攻医基幹プログラム研修を正谷一石先生が継続し、堀越裕介先生、小森雄太先生、麓隆太郎先生の3名が新たに基幹プログラム研修を開始した。連携施設プログラムに所属した先生を含め、内科系全体で11名が当センターでの研修を行った。

５　学会発表・論文発表

今年度の内科系学会の全発表数は181（昨年度129)、研修医・専攻医の学会発表数は53（昨年度26)、内科地方会または内科学会総会への発表は15題（昨年度12）となりいずれも大幅に増加し、過去7年で最多となった。内科全体の論文発表数は143（昨年度159）と減少したが、研修医、専攻医の論文発表数は11（昨年度9）と増加した。

６　今後の課題

ポストコロナに向けた入院患者の確保、教育・研修体制の強化、臨床研究の推進、働き方改革が今後の課題である。新型コロナウイルス感染症の収束が、救急外来受診数の減少という形で大きな影を落としたが、救急応需率を低下させる要因の検証とそれに対する対策の実行が喫緊の課題である。救急応需率の改善、顔の見える連携を通した新規外来患者の獲得と特色のある短期予定入院の確保、長期入院患者の退院促進等によって、病床の回転を速くし、DPCⅡ超率の低下をめざすこと、極力外来で検査を行って出来高対比を改善させることも、病院経営上不可欠なアプローチになるだろう。学会発表・論文発表に関しては、過去最高の実績となったが、J-OSLERへの症例登録と研修の評価、および救急研修に関しては課題を抱えている。医療安全の観点から、当院退職後の電子カルテの閲覧が難しくなったため、経験を得たタイミングで迅速な症例登録を行うことが求められている。プラネックス研修やJ-MECC研修も持続可能な指導体制をいかに構築していくかが課題である。学会発表・論文発表も含め、特定の指導医の業務負担が増えている一方で、それを正当に評価する方法がないことも、大きな問題である。より多くの指導医で分担するようにしていくことに加えて、教育への貢献を適正に評価し、それを個人や診療科の評価に反映して指導医それぞれの自己効力感を高めていくことが望まれる。臨床研究の推進のためには病院の臨床データのデータベースを作成し、共有することが必要である。入退院サポートセンターが2階26ブロックに設置され、そこで看護師などが行った認知機能、ADL、栄養、薬剤、社会的問題といった点に関する高齢者総

合機能評価の結果を、共通のフォーマットに入力し、入院後には医師の評価もここに加え、収集された情報を各職種の担当者間で共有して、退院支援に活かしていこう、という取り組みが始まった。ここで入力されたデータが将来の臨床研究に活用されていくことが期待される。

令和6年4月から、働き方改革の波がいよいよ医療現場にも打ち寄せてくる。この時間外労働、休日労働の上限規制は医療従事者の健康を守り、診療の質の向上や人材の確保にもつながると考えられている。すでに年次有給休暇の最低5日以上の取得義務化や勤怠管理システムの導入がなされているが、慢性的な人材不足に悩む診療科・部署があり、人材の獲得・投入が急がれる。また、勤務時間のインターバル制限にも対応するためには、チーム制の導入が有効と考えられるが、その実現にはさらに多くの人材を必要とする。すでに一部の診療科ではチーム制が導入されているが、これを多くの診療科に広げていくためにより多くの医師の採用を進める必要がある。また、これが困難な診療科も含め、内科全体で医師というリソースを均等に共有するシステムづくりが必要になってくるかもしれない。

総合内科・高齢診療科

部長 岩切 理歌

1　人員体制

〈部長〉 岩切理歌
〈医長〉 大川庭熙
〈医員〉 村野陽子 片岡愛 濱谷広頌 中山智博
〈専攻医〉内田奈緒子

2　診療活動・実績

■外来診療の実績

（1）総合内科・高齢診療科外来：年間初診料算定患者数：489 人（前年度 544 人）
1 日平均初診料算定外来患者数：2.0 人（前年度 2.2 人）浮腫、食欲不振・体重減少、めまい精査などフレイル予防対策、ポリファーマシー対策、在宅支援にも力を入れている。
初期研修医の外来研修の場としての指導も兼ねている。

（2）ポリファーマシー外来
2018 年 10 月、火木の午後に開設した。薬のことで問題を抱えている患者を対象とし、内服状況や副作用の有無について確認し、必要に応じて内服回数や内服数の軽減を提案することを目的としている。

■入院診療の実績

（1）総合内科・高齢診療科 9 西病棟 6 西病棟
新入院患者数 170 人、転入患者数は 343 人（前年度はそれぞれ 167 人、379 人）。他院からの転院患者、救外からの緊急入院患者、内科外来、高齢診療科外来からの精査目的の患者の診察を行った。

■診療内容

・感染症や脱水症などの治療、食欲不振・体重減少などの精査、在宅療養環境の調整など。
・COVID-19 感染患者の治療、在宅療養患者のレスパイト入院。

■地域包括ケア病棟

病状が安定した後、数日から約 3 週間、自宅退院に向けて生活機能向上を目的とした調整を行っている。年間入棟患者数は 531 人（前年度 658 人）。在宅復帰率（施設基準≧72.5%）の平均は 83.7%（前年度 82.9%）、直入率(施設基準≧40%)は 54.9%（前年度 53.7%）であった。

■初期研修医の外来研修

1 年目の初期研修医の外来研修は、各自 40 単位（半日が 1 単位）履修する必要がある。総合内科、高齢診療科外来にて、毎回 1～2 人の初診患者に対し、問診、診察、検査計画、結果説明、考察を行い、すべて当科スタッフが指導医として毎回 1 対 1 で指導を行っている。

3 研修・研究活動

（1）入院患者についての症例検討会：毎週月曜日に施行。
（2）抄読会・勉強会：月１～２回、毎回担当者が自分でテーマを決めて発表している。
（3）ポリファーマシーカンファレンス：高齢診療科、循環器内科医師、薬剤師を中心に、週一回、６階地域包括ケア病棟、整形・脊椎外科病棟に入院中の内服数が多い患者を中心に、通常は８剤以上内服している患者に対し見直しを行い、薬の調整を呼び掛けている。
（4）お昼のクルズス　　2023 年 6 月、高齢者の多剤併用について

岩切理歌

膠原病・リウマチ科

部長　久保　かなえ

1　人員体制

〈部長〉久保かなえ　〈医員〉小林聖未

〈非常勤医員〉杉原毅彦、瀬理祐、坂内穎、青崎真太郎

2　診療活動・実績

■外来診療の実績

専門外来　久保；月曜/水曜午前午後、
小林；金曜午前午後
杉原；火曜午前
坂内；火曜午前
青崎；水曜午前
瀬理；木曜午前

外来担当医数が減少したが、病診連携や逆紹介を促進して新規症例の受け入れを継続し、外来収入額は増加傾向にある。リウマチ性疾患として高齢発症関節リウマチ、リウマチ性多発筋痛症、脊椎関節炎などの関節炎疾患とともに、リウマトイド血管炎や ANCA 関連血管炎、巨細胞性動脈炎などの血管炎症候群や全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、皮膚筋炎／多発性筋炎などの膠原病および成人スティル病、サルコイドーシス、ベーチェット病を含む多くの類縁疾患に対し診断と治療を遂行した。高齢層だけでなく、若年層の新規症例も増え、高齢者に対する老年症候群の対応のみならず、妊娠や就労などのライフステージを考慮した診療の機会が増加した。

■入院診療の実績

8 東病棟から 11 西病棟に移動し 93%と良好な稼働率を維持した。当科外来症例に合併した一般内科疾患は他病棟で加療していただくこともあったが、濃密に専門的精査加療を要する症例の診療を行い、入院収入額の増加につなげた。他科と連携することで、間質性肺疾患や腎疾患、神経疾患、皮膚疾患など、膠原病関連疾患を背景とした多彩な臓器病変の診療を行った。同一疾患でも高齢者特有の臨床的特徴や老年症候群を考慮した診療を心掛けて研究や教育につなげている。日々医員、研修医と病棟カンファレンスとラウンドを行い、最新の文献を確認しながら診療を行うことを心掛けた。

3　研修・教育活動

当院は日本リウマチ学会の教育指定病院である。久保医師は日本リウマチ学会認定専門医、指導医、評議員として学会関連の仕事、教育目的の総説の作成、臨床研究業務に従事し、研修医の専門診療教育と臨床研究および学会発表の指導を行った。小林医師は日本リウマチ学会認定専門医、指導医として、ともに研修医の教育に携わった。新たな臨床研究を立ち上げるとともに複数の臨床研究を継続し、その成果は日本リウマチ学会を含む主要学会での発表、論文の発表につなげた。

初期研修医は内科学会関東地方会で奨励賞を、久保医師は指導医賞を授賞した。小林医師、久保医師共著の論文は院内の村上賞を授賞した

腎臓内科・透析科

部長　武井　卓・板橋　美津世

１　人員体制

〈腎臓内科・透析科部長〉武井卓、板橋美津世
〈医長〉 鈴木訓之、岡　雅俊
〈常勤医〉山中法子
〈後期研修医〉 松野志歩、土屋毅亮、太田由衣、帯刀健太
〈初期研修医〉 10名（１−２ヶ月ローテーション）
〈非常勤医〉齋藤誉子、鶴田悠木、橋本征治

２　診療活動・実績

（１）外来

外来は腎臓内科一般、特に高齢者の腎障害を中心に診療を行っている。腎炎・血管炎にも力を入れ、紹介を頂いている。令和5年度延べ外来患者数8,268名（前年度+136名)、初診患者数は184名(前年度+18名)であった。

透析センター(17床）は、月水金および火木土の午前・午後の４クールで運営している。治療法はHD、ECUM、OHDF、オフラインHDFであった。また腹膜透析導入をすすめ腹膜透析外来にて診療にあたった。外来血液維持透析患者の質的向上を目指しフットケア、フレイル・栄養評価、シャント血流エコーを行った。

（２）病棟

病棟診療においては、腎不全保存期教育入院、透析導入入院、維持透析合併症治療入院などを行った。またクリニカルパスを利用したネフローゼ症候群やANCA関連血管炎に対するリツキシマブ治療および腎生検入院を積極的に行った。腎生検は他科依頼の症例に対しても施行し、検体採取のみにとどまらず、当院病理診断科と組織診断まで首尾一貫して行っている。透析導入に関しては腹膜透析導入も令和元年より可能とし、腎代替療法選択が可能となった。令和5年度は病床数17床で運営し、延べ入院患者数8,653名と前年度に比べ+3,229名と大幅に上回った。平均在院日数は19.2日と前年に比して+1.6日であった。

（３）透析センター

透析センターでの治療法はHD、ECUM、OHDF、オフラインHDF、CHDF、血漿交換、吸着療法及び関連診療として血管再生・末梢血幹細胞移植のためのリンパ球分離である。血液透析新規導入は75名（+6名)、腹膜透析患者は２名追加となった。

３　研修・教育活動

日本腎臓学会認定教育施設、日本透析医学会認定施設、老年病専門医認定施設である。

専門医取得のための症例登録、サマリーチェックなどサポートを行っている。令和5年度は1名腎臓専門医、1名老年病専門医を取得した。

また、研修医に学会報告・論文報告を推進している。

令和5年内科学会関東地方会に初期研修医が2名発表、腎臓学会東部学術大会に初期研修医2名、後期研修医１名、日本透析医学会に後期研修医3名、日本腎臓学会総会に後期研修医1名、IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023に後期研修医1名が発表した。

院内では病棟カンファレンスを週１回、透析カンファレンスを週１回、腎病理カンファレンスを月１回、CPCカンファレンスを1回/年。また実習生・見学生の受け入れを随時行った。

板橋区・練馬区・豊島区・北区合同 糖尿病予防デーで講演し啓蒙活動を行った。また医療の価値評価を目指すセミナー「医療価値評価の胎動プログラム：医療技術：分子標的薬」の講義を行った（武井)。

城北腎性貧血治療WEBセミナー、Nephrologist meetingでCKDの最新の話題を提供した（板橋)。

糖尿病・代謝・内分泌内科

部長　田村　嘉章

１　人員体制

糖尿病・代謝・内分泌内科は、常勤７名とシニアレジデント５名で運営した。

〈副院長、健康長寿医療研修センター長〉荒木 厚、〈部長〉田村嘉章〈専門部長〉千葉優子、
〈医長〉豊島堅志、〈専門医長〉大庭和人、〈医員〉小寺玲美、舘鼻彩
〈シニアレジデント〉麓隆太郎、白倉英知、長嶋勇希、井原健人、山川尚子
〈非常勤医〉森聖二郎（研究所医師)、飯塚あい

２　診療活動・実績

■外来診療の実績

外来患者数は１日 64.1 人（昨年度 68.1 人)、延外来患者数は 15,588 人（昨年度 16,540 人）であった。糖尿病専門医の連携医への訪問を 4 件行い、紹介、逆紹介を推進した。初診患者は 254 人（昨年度 253 人）と同等であったが、逆紹介患者は 301 件(昨年 212 件)大幅増となった。

昨年度から週 5 日の糖尿病看護外来の運用を継続しており、フットケア、療養相談(特に退院後患者)のほか、持続血糖モニター（CGM)、インスリンポンプ療法（SAP、HCL）など先進機器の導入がスムーズに行われている。糖尿病看護外来での延べ受診数は 1197 人(昨年度 1051 人)、フットケア数は 576 件(540 件)と昨年よりさらに増加した。今年度は特にリアルタイム CGM(rtCGM)の症例が 11 例と大幅に増えた。また、SAP に関しては、血糖高値の際にさらに補正ボーラスインスリンが投与される Advanced HCL（ACHL)が導入され、看護師を中心に機器のアップデートを安全に行った。

■入院診療の実績

令和５年度も糖尿病、脂質異常症、骨粗鬆症、内分泌疾患、低血糖などの患者の他、多くの内科救急患者を担当した。指導医、専攻医、初期研修医の担当医２～３人による診療体制により、多くの患者を受け入れることができた。多くの医師が救急外来、当直も担当し、病院の救急患者増にも大きく貢献している。

病床は 9 西病棟＋6 西病棟から 9 西病棟＋11 西病棟となった。新入院患者 186 人と転入（救急）患者 337 人を合わせた 523 人を受け入れ、昨年度より 9%減少した。これは外来での管理が良好であったことのほか、専攻医の人員に欠員が出たことが原因と考えられる。週２回の多職種による退院支援カンファレンスを行い、転入込みの在院日数は 13.5 日と昨年度より 1 日短縮した。

当科はまた医師、看護師、栄養士、薬剤師などのチーム医療による糖尿病教育と治療を行っている。入院患者の医師による糖尿病教室は毎週水曜日に、看護師、栄養士、薬剤師による教室はそれぞれ火・金曜日(隔週)、月曜日、木曜日(隔週)のいずれも午後に行われている。他科コンサルト件数も非常に多く(408 件/年)、周術期、ステロイド治療時などのインスリン管理に貢献している。また他科における退院前療養指導に認定看護師が大いにに役立っている。5 年度からは 2 名の看護師が特定行為(血糖コントロールに係る薬剤投与の補助)も行っている。

さらに、入院および外来患者に対して、フレイル外来を利用して高齢者総合機能評価（CGA）を行い、その情報に基づいて退院後の生活を考慮したインスリン治療の単純化などを行っている。

３　研修・教育活動

前年度に引き続き毎週月曜日の午後５時 30 分より臨床カンファレンスを行い、患者の治療方針の詳細な検討とレジデント教育を行った。また毎週水曜日の午前８時 30 分より最新の英語論文または内分泌学の英語教科書を読むジャーナルクラブを実施した。

J-CDE の数は看護師５名、栄養科７名（常勤５名、非常勤２名)、薬剤部３名、リハビリ１名の合計 16 名となり、院内の糖尿病の教育体制の充実を図っている。毎月医療チームで連絡会を行い、新しい機器に関する知識の共有や、勉強会の開催の企画を行っている。院内では糖尿病ケアチーム勉強会(メディカルスタッフ向けの勉強会)を 2 回開催し、好評であった。また、地域の多職種の会「いたばし糖尿病多職種ネットワークの会」では、8 月に当番幹事としてワークショップを開催し、2 月には医師の講演をおこなった。

さらに、高血糖緊急症に対するマニュアルがなかったことから、5 月に「高浸透圧高血糖症候群、ケトアシドーシスの初期対応マニュアル」を作成し、ガルーンおよび救急外来に掲示した。また、前回のインスリンマニュアル作成から 8 年が経過したため、内容の見直しをおこない、3 月に改訂版を作成した(4 月に電子カルテ掲載)。

４　患者教育、患者会活動

COVID-19 感染症のために中止していた外来患者向けの糖尿病教室を、コロナ前と同じ年 3 回開催した。体操教室も中止されていたが、患者さんが独自に運営する「通いの場」の立ち上げに協力し、8 月から自主運営の体操教室を開始することに成功した。特に身体、社会的フレイルの患者さんに参加を促すことによって、37 名に減少していた会員数を 63 名に増やすことができた。11 月には 4 年ぶりにノルディックウォークの会を開催した。

循環器内科

部長　石川　譲治

１．人員体制

〈副院長〉原田和昌
〈部長〉石川譲治
〈専門部長〉坪光雄介、碓井伸一、石山泰三
〈担当部長〉藤本肇
〈医長〉鳥羽梓弓、小松俊介
〈専門医長〉二見崇太郎
〈常勤医員〉十菱千尋、清水瑠璃、斎藤義弘、両角愛、吉村沙織
〈非常勤医師〉山本文、鈴木歩
〈専攻医〉なし

病棟は、循環器内科で５階西病棟、心臓外科・血管外科・呼吸器外科との共同で５階東病棟を運営している。従前より日本循環器学会教育施設・日本心血管インターベンション学会研修施設、日本超音波医学会研修施設という教育施設認定を受け、診療面では東京都CCUネットワーク/大動脈スーパーネットワーク支援施設に加盟している。

２.診療活動・実績

	令和4年度	令和5年度	対前年度	対前年度比
延入院患者数	16,319	15,768	-551	-3.3%
新入院患者数	909	854	-55	-6.1%
平均在院日数	15.1	15.3	0.2	1.3%
延初診外来患者数	898	884	-14	-1.6%
延外来患者数	25,331	23,299	-2032	-8.0

入院患者の年齢構成は、65 歳以上の高齢者が 86.6%と大多数を占め、75 歳以上の後期高齢者が　70.2%であった。当院は東京都　CCU ネットワーク、大動脈スーパーネットワークの支援病院として東京都の循環器救急医療の一躍を担っているが、令和 5 年度の急性大動脈スーパーネットワーク受け入れは　23 件、CCU ネットワークの受け入れは　105 件であった。疾患別では、近隣の救急病院の循環器科では虚血性心疾患・不整脈疾患が多数を占めるのに対し、当院では心不全症例を積極的に受け入れているのが特徴的である。DPC　データに基づく血管病による主な検査・治療件数は、心臓カテーテル検査 339 件で、PCI 件数 196 件（緊急 63 件)、循環補助用心内留置型ポンプカテーテル 3 件、経カテーテル的大動脈弁置換術は 23 件であった。不整脈ならびに心室再同期療法については、ペースメーカー（新規植込み 61 例、交換 26 例）植え込み型除細動器（新規 0 件、交換 2 件)、両心室ペーシング（新規 4 件、交換 0 件)、アブレーション（心房細動 29 件、その他 7 件）であった。生理機能検査では、心エコー図検査 6921 件、経食道心エコー図検査 222 件、運動負荷心エコー検査 29 件であった。24 時間自由行動下血圧モニタリング 178 件、ホルター心電図 695 件であった。核医学検査では、心臓 SPECT 306 件、心臓PET 8 件であった。心臓 CT 341 件、心臓 MRI 16 件であった。

３．研修・教育活動

毎朝８時 15 分より CCU　で症例検討カンファを行い、月曜夕方にクリニカル・カンファ、論文抄読会、水曜午前に副院長回診、夕方に心臓外科との合同カンファ、カテーテル症例カンファ、木曜午後に心エコー図カンファを開いている。また別紙のとおり学会・研究会での発表を行った。

（文責：部長　石川譲治）

呼吸器内科

部長　山本　寛

1　人員体制

〈部長〉山本寛　　〈専門部長〉山田浩和
〈医員〉石橋昌幸（令和5年6月30日付け退職)、佐塚まなみ、籠尾南海夫
〈医員〉【緩和ケア内科兼務】〉野木森智江美
〈非常勤〉齋藤朗

2　診療活動・実績

■入院診療の実績（転科を含む）

病床数19床。退院症例は計417例（△13例）で、男性251例、女性166例。入院患者の年齢中央値は81歳（28-98歳)、緊急入院が66.9%(△5.5%)。死亡退院は34例(△4例;うち剖検 4)。入院日数の中央値は16日(1-139日)、平均在院日数は20.5日（△2.8日）であった。入院患者の疾患内訳（のべ）は下記の通り（主なもののみ示す)。

原発性肺癌	144	膿胸、肺膿瘍	16
原発性肺癌の疑い	19	非結核性抗酸菌症	16
COPD	145	肺アスペルギルス症	22
間質性肺疾患	122	気管支拡張症	24
気管支喘息	64	気胸、縦隔気腫	24
肺炎・気管支肺炎・気管支炎	210	胸水貯留	53
COVID-19	54	睡眠時無呼吸症候群	10

■外来診療の実績

令和5年度の初診料算定外来患者数は228人（△18人)、延外来患者数は9376人（▼383人）であった。重症喘息に対する生物学的製剤の投与症例も徐々に増加している。外来腫瘍化学療法診療料の算定は、抗悪性腫瘍剤投与が261件(△2件)，必要な治療管理が107件（▼39件）であった。

■手術・検査実績

令和5年度の呼吸器内視鏡検査施行症例数

呼吸器内視鏡検査施行症例数		53
（内訳）	TBLB/TBB	12
	EBUS-GS	11
	EBUS-TBNA	13
	気管支ナビゲーション	10
	BAL	0
	局所麻酔下胸腔鏡	2

常時、最新の気管支ファイバーを取り揃え、検査を行っている。Synapse Vincentによる仮想気管支鏡画像を用いた気管支ナビゲーション、(極) 細径気管支鏡を用いて正確に関与気管支を同定し、EBUS-GSでwith-inを確認して生検、さらに、病理診断科と共同で開発した迅速染色法(改変Ultrafast Papanicolaou染色)を用いてROSE（rapid on-site evaluation）を行うことで、診断精度が高まり、当センターの志向する、高齢者にもやさしい質の高い検査が可能になった。局所麻酔下胸腔鏡検査を、呼吸器外科と合同で2例の膿胸症例に行った。

3　研修・教育活動

呼吸器内科カンファ：毎週火曜日17:30-
呼吸器内科・呼吸器外科・病理診断科・放射線治療科合同カンファ、抄読会：毎週金曜日16:30-
呼吸器キャンサーボード：毎月第2金曜日16:30-

●病棟勉強会、院内研修会
山本寛、佐塚まなみ、野木森智江美：[ファシリテーター]第7回緩和ケア研修会. 令和5年11月12日
●お昼のクルズス
山本寛：胸部単純X線写真の読み方. お昼のクルズス.令和5年11月1日.
●専門医・指導医取得
佐塚まなみ：日本呼吸器学会呼吸器指導医

（文責：山本寛）

消化器・内視鏡内科

部長　小野　敏嗣

1　人員体制

〈部長〉小野敏嗣
〈医長〉三神信太郎
〈専門医長〉保坂祥介
〈専門医長〉深川一史
〈常勤医〉羽鳥清香
〈常勤医〉大隅瞬
〈非常勤医〉正谷一石
〈非常勤医〉白倉英知
〈非常勤医〉佐藤優樹
〈非常勤医〉堀越裕介
〈顧問医〉葦沢龍人

令和５年度４月から新たな専門研修医・他院に出向していた専門研修医の加入があり、常勤６名、顧問医１名、専門研修医４名の体制となった。消化管・胆膵・肝臓の消化器における３分野をバランスよく担当する体制がとれるようになっていたが、１０月に専門研修医白倉医師の急逝があり、加えて大学院進学を希望した三神医長が令和６年度から離脱することとなり後半に関しては肝臓疾患の診療体制は縮小とせざるを得なくなった。

2　診療活動・実績

■外来診療の実績

延外来患者数　11,516人（前年比-27人）

前年度と同様に、外来に関しては積極的に新規患者紹介を受け入れると共に、病状の安定した方の近隣医への逆紹介を推し進めた。結果として、延べ外来患者数にほぼ横ばいではあるが、初診料算定患者数(1,127人　前年比+65人)は増加となった。

■入院診療の実績

延入院患者数 11,257人（前年比+115人）

前年度と同様に、消化管内視鏡検査など外来でも施行可能な検査は外来で行うようパス入院の件数を削減しつつも、処置入院や緊急入院などの治療入院件数を増やし、総計として昨年度の延入院人数を上回ることができた。

■手術・検査実績

内視鏡的粘膜下層剥離術	135件(前年比+19件)
内視鏡的逆行性膵胆管造影検査	241件(前年比-31件)
超音波内視鏡下穿刺吸引法	27件(前年比-5件)

内視鏡的粘膜下層剥離術は前年度を上回る件数となり、内視鏡的逆行性膵胆管造影検査は過去１０年で最高件数となった前年度より減少となったとはいえ依然として高い水準を維持している。超音波内視鏡下穿刺吸引法については前年度を下回っているが、造影剤を用いた造影超音波内視鏡検査の導入により不必要な穿刺吸引法は削減できており、一方で超音波内視鏡検査の件数(145件　前年比+6件)そのものは増加している。

3　研修・教育活動

前年度同様に、週一回の症例カンファレンスおよび化学療法症例の検討を行った。また、月１回の消化器キャンサーボードは外科と病理診断科と合同で行った。加えて、週一回の内視鏡カンファランス、月一回の胆膵症例カンファランスを継続した。また、常勤医・非常勤医とも積極的に論文発表や学会発表を行うよう努め、他施設との共同研究も積極的に受け入れるようにした。

脳神経内科

部長　岩田　淳

１　人員体制

〈部長〉岩田　淳
〈専門部長〉仁科裕史
〈医長〉東原真奈、井原涼子
〈医員〉波多野敬子、平　賢一、栗原正典
〈兼任〉齋藤祐子、村山繁雄（ブレインバンク）、石井賢二、石橋賢士（神経画像研究チーム）
〈外来非常勤〉江口桂、森本悟、辰口（広吉）祐子、吉野正俊、仙石錬平、金丸和冨
神経心理：武田克彦、てんかん：脳波：大南伸也
その他後期研修医３名、初期研修医 1-2 名の体制で、常勤の日本神経学会専門医は７人体制である。神経変性疾患から脳梗塞まで、幅広い専門的な対応が可能となっている。

２　診療活動・実績

病棟：10 階西病棟 36 床　8 東病棟 4 床　脳梗塞超急性期の tPA 治療等は脳卒中ケアユニット（SCU6 床 12 月から 8 床、R6 年 2 月 28 日より 9 床で診療している。脳卒中ユニット SCU は脳神経外科とともに運営し、24 時間対応で急性期脳卒中診療を行うとともに、リハビリ科との協力により急性期リハビリにも取り組み、最初から医療ソーシャルワーカーも SCU カンファランスに参加し早期の適切な退院支援を行っている。令和５年度の新入院転入患者数は 915 人。初診外来患者数は 1149 人である。神経・筋疾患については、電気生理学的検査・カンファランスで適応を検討の上生検も行っている。肺炎・尿路感染症・脱水症などの内科疾患にも対応。病棟では、毎朝のカンファ、火曜日、金曜日に新患回診を行い、研修医には週に一度個別指導の Bed side teaching を行い、問題症例は月１回の症例カンファで討論している（岩田）。**外来**：神経内科外来は予約制であり、月曜日から金曜日まで常勤スタッフおよび非常勤スタッフ、研究所所属医師が、初診・再来患者診療を行った。救急対応は、救急外来、また、毎日設けている神経内科外来予約外診療（予約新患にも対応）にて行っている。毎週月(井原)、水曜日午後(交代制 仁科・波多野)には“もの忘れ外来”も担当。神経心理外来(武田)も継続し専門性の高い治療にも対応した。その他、眼瞼痙攣を対象にボツリヌス治療を行っている（金丸)。神経心理検査は常勤（小幡)・非常勤心理士が対応している。
レカネマブ投与：アルツハイマー型認知症の疾患修飾治療（DMT）として初の薬剤であるレカネマブを承認直後の R5 年 12 月中にいち早く導入し、R6 年１月以後 DMT 外来を創設した。週に 6 枠 DMT 外来として適応希望者の診察し適応となる症例を選別している。脳へのアミロイド沈着を判定する目的でアミロイド PET（外来)、または髄液検査（短期パス入院）を施行し、レカネマブの適応については慎重にカンファランスにて検討している。毎週 DMT 初診 12 枠、再診実際の投与可能な 40 枠を確保した。R6 年 3 月末の時点で 17 人のレカネマブ投与を行っている。**検査**：針筋電図、神経伝導検査、誘発電位など電気生理学的検査（東原)、神経・筋、皮膚生検（仁科)、頸動脈エコー（全常勤医師)、脳脊髄液バイオマーカー検査（t-tau、Aβ42）（外注に移行）を行っている。神経・筋はバイオリソースセンター組織リソース、脳脊髄液に加えて血液もバイオマーカーリソースとして蓄積を継続している。令和５年度、脳脊髄液検体数 バイオバンク同意あり CSF　146 例（血清・血漿あり，共同研究可)あり。病理診断は神経病理専門医（斉藤、村山）が行っている。放射線検査として、CT および MRI が 24 時間対応可能で、神経放射線専門医が対応している。問題症例は、研究所に依頼し PET 検査を積極的に行っている（石井・石橋)。死亡患者の剖検許可をご遺族より得て高齢者ブレインバンクに登録することに加え、生前同意を得る努力も行っており、臨床・画像・病理連関に基づき、診療に生かす努力を高齢者ブレインバン

ク・バイオバンクプロジェクトとして行っている（村山）。在宅診療：板橋区医師会神経難病の在宅往診診療を行っている（金丸）。

３　研修・教育・研究活動

検討会：毎朝、新規入院症例の検討を行っている。研修医が症例提示は担当し、プレゼンテーションと適切な表現のトレーニングの場ともなっている。脳神経内科入院中の問題症例については、毎週火曜日に症例検討会を行い診断および治療方針の検討を行っている。死亡例については、高齢者ブレインバンクと共同でブレインカッティングおよび臨床病理検討会（CPC）を行い診療レベルの向上に努めている。また、月１回、精神科・放射線科・リハビリテーション科と合同で物忘れカンファを行っている。

血液内科

部長　宮腰　重三郎

1　人員体制

〈血液内科部長〉宮腰重三郎
〈血液内科医長〉小倉和外　斉藤輔
〈血液内科　移植コーディネーター〉赤川順子
〈輸血細胞療法科部長　血液内科専門部長〉小林寿美子

2020年度より後期レジデントとして久能(原田)美香医師が着任したが、2024年3月をもって退職。血液内科は主に血液造血組織に関する疾患を扱っている。病床数は完全無菌室36床、例年通り入院患者の90%以上が血液疾患症例であり、このうち約半数が急性骨髄性白血病を中心とした急性白血病と骨髄異形成症候群であった。今年度も入院患者の80%以上が移植関連の症例が占めていた。昨年度は新型コロナウイルス禍にて他病院への訪問回診等が施行できず、入院症例の増加は認められなかったが、2023年度は若干増加している。

2　診療活動・実績

〈外来〉延べ外来患者数と新患は、コロナ禍の影響から脱却し増加した。造血幹細胞移植目的での紹介が多く、セカンドオピニオン外来は、当院全セカンドオピニオン36件中25件を血液内科が占めた。福井県、山形県、宮城県よりの遠方からのセカンドオピニオンもあった。紹介患者の大部分は区西北部医療圏の地域連携での患者である。大学病院など公的病院、一般病院での高齢者血液悪性疾患患者の受け入れは十分といえず、当科が受け皿となっている現状は例年と変わりはなかった。
〈入院〉前年度に比較し、延べ入院患者数、病床利用率は増加傾向を示した。2023度は造血幹細胞移植症例23例であった。平均在院日数は27日(昨年度26.8日)と若干延長した。65歳以上の移植件数は17例で70歳以上は9例であった。臍帯血移植は19例で、当科の特徴を示していた。以前より注力している、多剤耐性菌のブレークスルーは認められなかった。施設は11階西病棟に36床の無菌病室（管理加算－1：3000点/日対応　14個室、管理加算－2：2000点/日　対応の多床室22ベッド)。血液内科病棟は陰圧室2床を有効利用し、コロナ禍前より耐性菌ブレークスルーを起こさないように、培養結果を確認されるまで、陰圧室にて管理、その後他床室へと移動をするシステムを継続中である。
また、2017年1月に骨髄バンク認定採取病院になり、さらに2017年4月日本造血・免疫細胞移植学会認定の移植認定病院となった。このことにより非血縁者間臍帯血移植以外にも骨髄バンクからの骨髄移植や末梢血幹細胞移植が可能となった。バンクドナーからの造血幹細胞採取は骨髄採取7例、末梢血幹細胞採取8例　計15例で、例年同様であった。

3　研修・教育活動

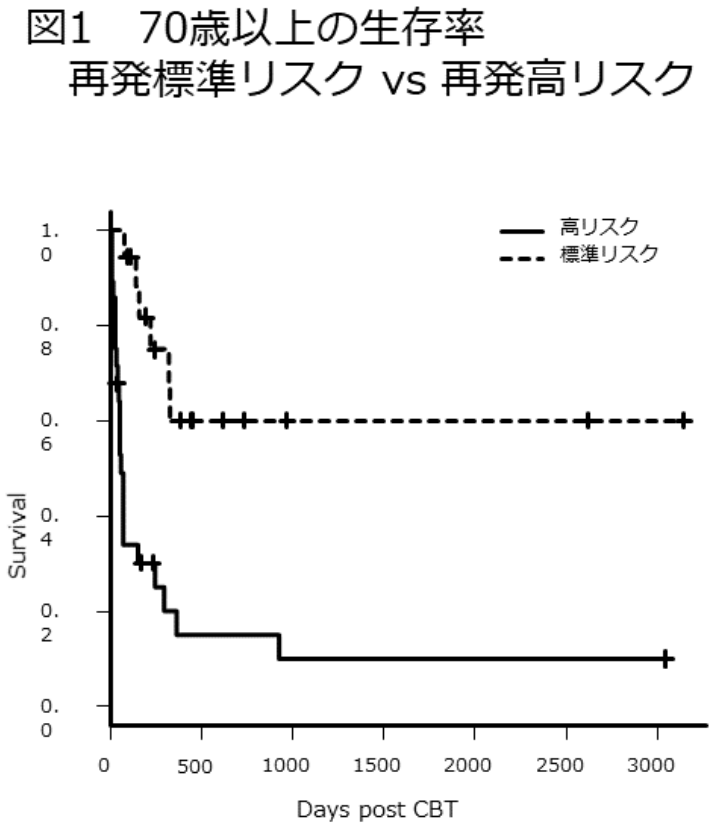
例年と同様に新臨床研修制度を充実させるため、骨髄標本読み会を通して、血液疾患に対する理解を深めている。特に骨髄標本読み会においては、大型モニターを利用し、同時に多くの先生とディスカッションできるように工夫をしている。血液悪性疾患の治療にはコメディカルの協力が不可欠である。このため血液疾患の特性、治療上の留意点など、さらに理解を深めてもらうため定期的に病棟カンファランスを開催している。病棟薬剤師、栄養士の方々も参加してもらった。血液悪性疾患についてのカンファランスを行った。
回診も強化し、週3回の回診と毎日朝の移植症例回診を充実させた。学会活動も積極的に行った。

研究面では、高齢者血液悪性疾患に対する造血幹細胞移植の安全性確立に関して、継続して移植後合併症をいかに減少させるかに注力し、その成果を学会で発表した。新たに再発予防を目標とした研究をはじける予定である。

図 1　70 歳以上の急性骨髄性白血病・骨髄異形成症候群　再発標準リスクと再発高リスクの生存率の比較

解説

若年層で行われている確立した骨髄破壊的移植において、再発標準リスクと高リスクの生存率の比較では、一般的に標準リスクが 60～70%、高リスクでは 30～35%と言われている。70 歳以上の当科での比較でも同様な結果が得られている。このことは当科で行っている移植前処置において、移植関連死亡と再発死亡が確立している若年層での骨髄破壊的移植と同様な結果を示し、当科の移植前処置が適切であることを示している。



輸血・細胞療法科

部長　小林　寿美子

１　人員体制

〈医師〉小林寿美子（部長)、小倉和外　齋藤　輔
〈常勤〉谷田部元野、小菅隆雄、土田紗貴
当科のスタッフは、医師３名（２名輸血認定医)、常勤臨床検査技師3名の計6名体制である。

２　診療活動・実績

主な業務内容は、１）輸血関連検査（血液型検査・不規則抗体検査・交差適合試験)、２）輸血用血液製剤の管理、３）移植細胞の管理、４）自己血貯血と管理である。令和5年度（令和5年４月～令和6年３月）の輸血実績は、赤血球製剤（自己血除く）3,243件（6,446単位)、濃厚血小板1,091件（11,535単位)、新鮮凍結血漿709件（1,516単位）でRBCとPCは前年度の４％、FFPは各々前年度の17％増加、PCは６％の減少であった。令和5年度の自己血輸血の実績は、72例（210単位）で対前年度33%減少であった。自己血貯血の実施は週４回で年齢の上限を設けずに高齢者対応を行っている。当科の最大の目標である安全な輸血療法の実施に向けて、１）適応に合致する輸血療法の実施、２）人為的ミスの排除、３）輸血療法による副反応への対策を柱として、現状の把握と改善策の具体化を常に心がけている。１）については輸血療法の適応について担当医との協議を行い、また当院での適正な輸血療法の指針を具体的に提案し、輸血・細胞療法委員会で審議の上、院内に周知している。安全な輸血医療の実践のための輸血・細胞療法委員会は、年６回実施している。２）については輸血用血液およびアルブミン製剤を輸血・細胞療法科が一元的管理を行い、製剤の品質管理を徹底している。ABO不適合の移植患者では、移植後使用する血液製剤が製剤種毎に血液型が異なるため、システム化し製剤毎の血液型不適合輸血を防止に努めている。また輸血委員会が中心となり令和5度も廃棄率の徹底が維持されている。３）については輸血副反応の情報収集につとめ、事後処理が適切に行えるよう必要な情報を担当医に速やかに提供する体制を整えている。このような業務管理により、血液製剤の使用および管理の適正性が評価され、診療報酬の輸血管理料Ⅰ及び輸血適正使用加算を継続中である。平成30年３月末には日本骨髄バンク認定採取施設（末梢血幹細胞採取、DLI採取、骨髄採取）を取得し以降、骨髄バンクカテゴリIを維持し、１年間で17件の採取を行い、コロナの影響を受けつつも前年度の14件からさらに増加で骨髄バンク活動に貢献中である。本年度より新たな細胞療法として間葉系幹細胞による治療を開始した。

３　細胞採取プロセッショング

さらに細胞プロセッシング業務として、造血幹細胞移植での細胞採取に参画し細胞処理業務を行った。血液内科との連携のもと、末梢血幹細胞移植4例（自家移植1例)、骨髄バンクドナー17症例（骨髄採取9例，末梢血幹細胞採取7例，ドナーリンパ球採取1例）を継続受け入れしており、細胞採取ならびに処理を実施しバンク関連業務の拡大に寄与している。また臍帯血移植保存管理は17例で対前年と同等であった。

４　研修・研究・教育活動

１）研修医の研修では当直時間帯における血液型検査、血液製剤の適正使用について教育を実施。年度初めには全員への啓蒙を実施した。
２）令和5年度に採用された臨床検査科職員を中心に輸血関連検査等の研修を実施し、当直時にも対応できる体制を整え新システムのコンピュータに対応可能な教育を随時行っている。
３）内部精度管理として当直者を対象に血液型、間接抗グロブリン試験の実技と手技の確認と凝集判定の目合わせを行い、併せて安全性を考慮して日当直時間帯も全自動輸血検査装置の使用を開始した。
４）臨技臨床検査精度管理調査および日本輸血・細胞治療学会精度管理調査に参加した。
５）都内医療大学より実習生を3名受け入れ研修教育活動を実施した。
６）全看護師と研修医を対象に【輸血療法】についてe-ラーニングを行い部署毎の評価を行った。

５　発表・論文

1)小林茉愛,小林寿美子,李　惠,林　拓海,橘　盛昭,　齋藤　輔,小倉和外,宮腰重三郎.新型コロナウイルスワクチン4回接種後に脳出血を伴うITPを発症しTPO製剤が著効した高齢者の1例.第686回日本内科学会関東地方会（東京）2023.5.20

2)小菅隆雄、阿部真愛、谷田部元野、土田紗貴、斎藤　輔、小倉和外、小林寿美子.　当センターで経験した抗JMH

保有患者への輸血を行なった 1 症例. 第 71 回日本輸血細胞治療学会総会　ポスター発表 2023.5.11(千葉幕張)

３）Mai Kobayashi, Sumiko Kobayashi, Takumi Hayashi, Moriaki Tachibana, Tasuku Saito, Kazuto Ogura, Shigesaburo Miyakoshi.　Immune thrombocytopenic purpura in an elderly patient with cerebral hemorrhage after the fourth mRNA-1273 COVID 19 vaccination. Geriatrics & Gerontology International. 969-970: 23(12). 2023. httpw://doi.org.1111/ggi.14737

4）小林寿美子.　高齢者骨髄系腫瘍に対する同種移植.　血液内科 vol87(3). 322-328. 2023

感染症内科

専門部長　小金丸　博

1　人員体制

〈専門部長〉小金丸博
〈非常勤医〉吉田敦　稲松孝思

2　診療活動・実績

■外来診療の実績

外来業務として、感染症内科外来4単位を担当した。感染症内科外来では、肺炎、結核などの呼吸器疾患（接触者検診でIGRA陽性となった患者を含む）、梅毒などの性行為感染症、発熱疾患などの診療を行った。

ワクチン外来では、肺炎球菌ワクチン（ニューモバックス）、インフルエンザワクチン（高齢者の定期接種）、少数ではあるがB型肝炎ワクチンの接種を行った。また、R5年度は不活化帯状疱疹ワクチン（シングリックス）の一部公費助成が始まった影響で接種希望者が増加し、51名（前年度は6名）に対してワクチン接種を行った。

■入院診療の実績

R5年度は入院患者を主治医として直接担当する業務は原則行わず、コンサルテーションを主体としたサポートを行った。COVID-19の流行により、担当患者のほとんどをCOVID-19が占めた。軽症～重症まで、すべてのCOVID-19入院患者の診療を他科医師とともにおこなった。１年間で入院したCOVID-19患者は530名（院内クラスター例を含む）であった。COVID-19死亡例は18例（うち剖検2例）だった。COVID-19は令和5年5月8日に5類感染症へ移行したが、当センターでは厳格な感染対策を継続し、多くの入院患者に対応した。

■院内感染対策の取り組み

病院全体の院内感染対策を中心的立場で取り組み、特定感染症予防対策委員会の運営を担った。血液培養陽性例に対しては全例診療録に所見を記載し、担当医の診療の一助となるように努めた。また、院内感染対策チーム、抗菌薬適正使用支援チームの一員として、血液培養陽性例、広域抗菌薬の長期投与例、コンサルト例に対して回診を行った。

COVID-19の診断、治療、院内感染対策に関して、中心的な立場で取り組んだ。新型コロナウイルスの流行状況に応じて対策会議を2～3週に1回の頻度で開催し、院内での新型コロナウイルス感染症の対策を決定し、職員への周知を行った。

R5年度は複数の新型コロナウイルス感染症の院内感染事例が発生し、院内感染対策チームの一員として対応した。

3　研修・教育活動

（１）　第1回院内感染対策講演会　2023/7/3～8/4
（２）　第2回院内感染対策講演会　2023/11/22
（３）　初期研修医対象勉強会　抗菌薬の使い方（基礎知識編）　2023/6/7
（４）　初期研修医対象勉強会　抗菌薬の使い方（実践編）　2023/6/21

精神科

部長　古田　光

１　人員体制

医師：〈部長〉古田光
〈常勤医員〉松井仁美、大森佑貴、片岡宗子、清水真央　〈シニアレジデント〉土屋大樹
〈非常勤医員〉四手井友紀
臨床心理士：
〈常勤〉扇澤史子、岡本一枝、今村陽子、髙岡陽子、青島希　＜非常勤＞植田那月、加藤真衣

2023年度は常勤医は前年度の体制を維持し、古田光、松井仁美、大森佑貴、片岡宗子、清水真央の常勤医5名体制を継続した。2024年3月片岡医師が退職した。シニアレジデントとして2023年年4月～2024年4月土屋大樹が研修を行った。非常勤医師として2024年3月末まで四手井友紀が外来診療を継続した。当センタージュニアレジデント計8名（今村洋介、小林茉愛、舟川開、福島薫子、西頭麻希、秋富友佑、佐藤宏樹、林拓海）が、豊島病院神経科の協力を得て精神科で研修を行った。またみさと健和病院の初期研修プログラムジュニアレジデント多々良祥敏が2023年12月当院精神科で研修を行った。心理士の人員に変更はなかったが、臨床心理科の設立にむけ検討が行われた。

２　診療活動・実績

［１］外来

2023年度の総初診患者数は再初診も含め当科台帳上計458名（男性163名、女性295名）、平均年齢78.6±12.0歳（27-99歳）、初診時主診断はICD-10分類F0（認知症・せん妄を含む器質性精神疾患）63.3%、F1（アルコール依存等精神作用物質による障害）2.2%、F2（妄想性障害を中心とする統合失調症圏）3.9%、F3（うつ病など気分障害）11.6%、F4（不安障害、適応障害などの神経症圏）10.5%、F5（不眠症や摂食障害等）2.6%、F6・F7・F8・F9（パーソナリティー障害や精神遅滞、発達障害）1.7%であった。他病院からの紹介患者64.2%、院内紹介が21.2%であった。初診患者の居住地は板橋区52.0%、区西北部二次医療圏の患者で83.4%を占めた。

［２］入院

定数30床（うち有料個室1床）＋定数外保護室2床の閉鎖病棟で、看護基準10：１の体制を継続した。精神科急性期医師配置加算の算定を継続した。2023年度の精神保健法上の入院患者数はのべ計244名（男性89名、女性155名）、平均年齢81.4±8.2歳（51-96歳）、退院時主診断のICD-10分類、F0：73.4%、F1：0.4%、F2：8.7%、F3：15.6%、F4：1.6%であった。ECTの施行件数は計256件であった。2022年度より入院患者は増加したが、病床稼働率は73.9%であった。

［３］コンサルテーションリエゾン

■入院中他科コンサルテーションリエゾン

2022年度精神科に診察依頼のあった他病棟入院中患者は計301名（男性150名、女性151名）、平均年齢は80.1±21.2歳（24-98歳）であった。64歳以下の非高齢者の割合は10.6%であった。精神科主診断内訳F0の患者は66.4%であった。

■精神科リエゾンチーム

木村陽子認知症看護認定看護師、大森医師、臨床心理士、精神保健福祉士、薬剤師で構成する精神科リエゾンチームが週１回全病棟の回診と都度の臨時対応を継続した。2023年度ののべ介入患者は241名であった。

［４］緩和ケアチーム

松井医師が担当した。

３　研修・教育活動

各種学会で医師、コメディカルらが発表を行うとともに、各種講師をつとめた。東京都立板橋看護専門学校の精神看護学講義を引き続き担当した。認知症支援推進センターの島しょ地域の認知症対応力向上に向けた支援事業に医師、臨床心理士が参加した。行動制限最小化委員会の勉強会を3回開催した。詳細は認知症疾患医療センターの報告書を参照のこと。

もの忘れ外来

精神科部長　古田　光

１　人員体制

もの忘れ外来では引き続き精神科・脳神経内科・研究所の協力態勢で診療を行った。精神科・脳神経内科の常勤・非常勤医師のほか、鳥羽理事長、研究所粟田主一医師、藤原佳典医師、井藤佳恵医師、岡村毅医師がもの忘れ外来で診療を継続した。また、2023年12月アミロイドβ抗体治療薬レカネマブの投与開始とあわせ、抗体治療薬投与のための専門外来としてDMT外来を物忘れ外来内に開設し、脳神経内科井原医師、栗原医師を中心にレカネマブ適応判定および投与を開始した。

２　診療活動・実績

もの忘れ外来では区西北部二次保健医療圏患者の優先診療を継続した。初診患者（再初診含む）は1009名、平均年齢81.1±7.8歳（44-102歳）であった。(男性323名,平均年齢79.9±7.7歳：女性686名,平均年齢81.6±7.7歳)。患者居住地域は板橋区59.5%、豊島区9.9%、北区10.5%、練馬区9.1%と区西北部4区在住の患者で89.0%を占めた。他医療機関からの紹介患者は86.6%、院内他科からの依頼は2.3%であった。初診時診断は、正常または健常4.6%、軽度認知障害（MCI）29.0%、アルツハイマー型認知症37.7%、血管性認知症4.3%、レビー小体型認知症6.3%、前頭側頭型認知症1.1%、その他の認知症14.2%、認知症以外の精神疾患1.7%、認知症以外の神経疾患0.5%であった。

引き続き認知症専門相談室でトリアージを行い、緊急性の高い患者は個別での対応を行った。コロナ禍の中でも引き続き、認知症初期集中支援チーム、認知症疾患医療センターアウトリーチ事業、板橋区おとしより専門相談事業と連携した受診調整を行った。東京都公安委員会からの依頼による臨時適正検査を継続した。

３　その他

2023年度も引き続き東京都認知症疾患医療センター運営事業の委託を受け活動した。コロナ禍が収束に向かう中、研修、患者・家族サポートプログラムの一部をオンラインから実地開催に移行を開始した。詳細は認知症疾患医療センターの項を参照のこと。

緩和ケア内科

部長　齊藤 英一 / 中島　豪

1　人員体制

〈部長〉齊藤 英一 / 中島 豪

〈常勤医師〉野木森 智江美（呼吸器内科兼任）

〈非常勤医師〉久保 美樹

〈心理士〉小野 恵里香、大野 麻美

〈音楽療法士〉神藤 雅子、渡邊 えりか

年度途中で部長が交代となった。非常勤医師、心理士に退職者があった。

2　診療活動・実績

■緩和ケア病棟運営状況

	令和5年度	令和4年度
新入院患者数（人）	94	149
転入患者数（人）	67	61
退院患者数（人）	177	219
転出患者数（人）	7	4
延入院患者数（人）	4478	5481
平均在院日数（日）	31.7	28.6
平均在院日数（日）※転入出込	24.9	24.3

人員不足から、緩和ケア病棟全病床数20のうち14での運用となっていたこともあり、前年度と比較し入院患者数、延入院患者数とも減少となった。

3　研修・教育活動

（1）がん診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会　令和5年11月12日　於 東京都健康長寿医療センター3回第3会議室A・B

外科総括

外科総括部長　中里　徹矢

１　人員体制

令和５年度の外科系診療体制は、外科、血管外科、心臓血管外科、脳神経外科、呼吸器外科、整形・脊椎外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、麻酔科、リハビリテーション科の 13 科と中央手術室であり、各科・部門が密接に連携し診療にあたっている。

人事異動

新たに赴任した外科系常勤医師は（以下敬称略）、令和５年４月に 土屋武弘（呼吸器外科専門部長）、善本三和子（眼科医長）、牧野能久（血管外科専門医長）、田口備教（脳神経外科医員）、河田　学（整形・脊椎外科医員）、村田弘明（泌尿器科医員）、兒玉瑞穂（麻酔科医員）、令和５年５月に安樂真樹（呼吸器外科部長）、令和６年２月に横井利光（脳神経外科医員）の各医師である。

退職された外科系常勤医師は令和６年３月末に許　俊鋭（センター長、心臓血管外科）、時村文秋（副院長、整形・脊椎外科）、金丸晶子（リハビリテーション科）、永田卓士（泌尿器科）、松平恭子（整形・脊椎外科）、富田大信（麻酔科）、齊藤陽子（リハビリテーション科）であった。

また、令和５年４月に高梨成彦（脳神経外科専門部長）、眞野暁子（心臓血管外科医長）、令和５年６月に善本三和子（眼科部長）が各々昇任した。

２　診療活動・実績

令和５年度の中央手術室利用総数は 4777 件と昨年度（4448 件）より 329 件増加した。

外科系診療科手術室利用件数の内訳は、眼科（2181 件）、外科（531 件）、整形外科（355 件）、泌尿器科（349 件）、脳神経外科（251 件）、血管外科（208 件）、脊椎外科（164 件）、呼吸器外科（104 件）、心臓血管外科（92 件）、耳鼻咽喉科（64 件）、皮膚科（19 件）、歯科口腔外科（7 件）の順であった。

前年度との比較では呼吸器外科が 66 件（273%）、脳神経外科が 63 件（133%）、整形外科が 81 件（130%）、心臓血管外科が 21 件（130%）と手術件数の増加が顕著であった。

３　医学教育・広報活動

令和５年度は、新たに９名の初期研修医を受け入れた。当センターの初期研修プログラムでは内科研修が主体であるが、必修の外科、麻酔科に加えて希望する各外科系診療科での研修も行った。特に初期研修２年目の医師は外科、麻酔科、眼科、皮膚科、３次救急（帝京）、産婦人科（帝京、大塚）での研修を行った。また、後期臨床研修医は合計 11 名（眼科５名、外科３名、リハビリテーション科１名、整形・脊椎外科２名）が在籍し、それぞれの診療科で専門研修を行った。

初期研修医に対する教育活動の一環として、コロナ禍で２年間開催が中止されていた出張シミュレーショントレーニングが令和５年６月 24 日に神奈川県のテルモメディカルプラネックスにおいて実施され、CV カテーテル挿入や皮膚縫合、気管内挿管などのトレーニングがおこなわれた。

広報活動として、病院発行の広報誌「糸でんわ」に池上靖子　眼科医長が「当センターでの白内障の手術について」、土屋武弘　呼吸器外科専門部長、安樂真樹　呼吸器外科部長が「呼吸器外科のご紹介」、を掲載した。

高齢者医療を中心とした地域医療を担う病院として、幅広い年齢層の患者様に対するために各職員が日々努力している。外科系各診療科では安全確実で適切な手術を中心とした診療を行うことにより、患者様へ満足できるサービスを提供することを目標としている。その為にも新たな人材の育成や新規術式、ロボット支援手術の導入などを推進し、新しい技術の習得・研鑽に努めていく。

外科

部長　金澤　伸郎

1　人員体制

〈外科総括部長〉中里徹矢
〈部長〉金澤伸郎
〈医長〉三井秀雄（救急診療部兼務）
〈医員〉新井孝明
〈外科専攻医〉田中佑治、荒井奈緒子、江本雛子

人員体制としては、前年度末に杏林大学から派遣されていた大森医師が退職された。
杏林大学からは､外科専攻医として荒井医師が着任された。
また、東京大学より、10月から外科専攻医として江本医師が着任された。

2　診療活動・実績

外科外来は、月曜から金曜まで消化器外科を中心に一般外科、乳腺外科など幅広く診療に当たっている。専門外来は金曜に肝胆膵外科専門外来、木曜に内視鏡下胃瘻造設に対応するためPEG専門外来を行っている。ストマケア・スキンケア外来は主に木曜だが、他の曜日についても、患者外来の予定に合わせて可能な限り対応している。同外来では、皮膚・排泄ケア認定看護師とともに人工肛門管理に加え、褥瘡の処置・指導を行っている。また、がん検診からの受け皿として便潜血外来を、腹腔鏡手術の増加に伴い腹腔鏡外科外来を週4日間開設している。術前検査センターも活用し、術前検査を外来で施行する頻度が高まり入院期間が短縮されている。DPCが導入されたこともあり、外来での検査が増加傾向にある。

外科単科で当直も含め、24時間、365日、2名でのon call 体制を取っており、緊急手術も含めた救急医療に対応している。７名での体制維持は中々難しく、当直は週2.5回、といった変則な形で行っているが、全員の努力の甲斐もあり、手術件数は、緊急症例も含め微増している。

本年度は上部消化管領域、肝胆膵領域の症例数が増えており、紹介症例の増加は、地道な地域医療機関への報告の徹底などによるものと考える。

また、消化器内科・内視鏡科も人員的に安定したことも有り、両科間の垣根をなくし、緊密な協力関係を維持していく事が、新規患者の獲得にもつながると考える。一方、多くの内視鏡検査が外来にて施行可能となったことから、検査入院患者数が減少しており、新規患者の獲得が喫緊の課題となっている。

他科の外来・入院患者への検査、治療にも積極的に対応しており、依頼があれば、リンパ節生検やCV（ポートも含めた）挿入術などは、曜日にかかわらず迅速に対応している。毎週に行われる褥瘡回診、栄養療法のためのNST回診にも積極的に参加している。東京都がん診療連携協力病院としての対象となっている大腸がん、胃がんに関しては、東京都医療連携手帳の活用も行っている。

他科との連携も密に取っており、消化器内科・内視鏡科・病理診断科とのキャンサーボード（消化器CPC)、消化器内科と合同の肝胆膵カンファランス、緩和ケア認定看護師・がん化学療法看護認定看護師と共同で、がん患者に対するカウンセリングを行っている。

対外的には消化器癌に関するセカンドオピニオンを担当しており、がん相談支援センターの活動にも積極的に参加している。

3　研修・研究活動

外科カンファランスは毎週火曜、木曜に行い、画像診断技術の向上に努めるとともに、カンファランスにより治療方針の決定を行っている。又、術中、術後写真も用いた術後症例検討会も同時に行っている。キャンサーボード（消化器CPC）も病理診断科、消化器内科、内視鏡科と共同で定期的に開催している。

院外研修は特に若手医師に学会発表を奨励し、日本外科学会による外科専門医修得や論文作成などにも力を入れている。また、腹腔鏡下手術の技術獲得を目的として、腹腔鏡手術手技研修会などへの参加を促し、手技向上を図っている。

院内活動では、病院研修の一環として、初期研修医に対する様々なシミュレーション研修（プラネックス）に積極的に参加しており、初期研修医の指導行った。(2023年6月24日　土曜)

２月には、消化器フォーラム2024を開催できた。(2024年2月20日　火曜)

血管外科

専門部長　松倉　満

1　人員体制

〈血管外科部長兼任・心臓血管外科部長〉河田光弘(2021/4/1～)
〈血管外科専門部長〉松倉　満(2021/10/1～)
〈血管外科専門医長〉　牧野能久(2023/4/1～)
〈血管外科非常勤医員〉高山利夫、渡部晃士、戸谷直樹、名木田明幸、田所　優、松原和英

前年度に引き続き、松倉が診療責任者として業務を統括している。牧野能久医師が専門医長として着任した。

2　診療活動・実績

今年度も2名体制であり、前年度同様に心臓血管外科スタッフと共同で診療に従事した。
手術数は前年度より減少したが、新規紹介患者は月20名程度と堅調に推移していた。
・新入院患者数　176人（令和4年度　186人）延入院患者数 2566人（令和4年度　2102人）
・初診患者数　　248人（令和4年度　217人）

総手術実績　195 例　（令和4年度 255例）
・胸部大動脈瘤 1例　　（TEVAR 1例）
・腹部大動脈瘤 18例　　（EVAR 13例、開腹人工血管置換術　5例）
・腸骨動脈瘤　 3例　　（EVAR 2例 瘤切除 1例）
・閉塞性動脈硬化症 100例
　（EVT 45例、TEA 3例、Ax-BiF bypass 2例、F-F bypass 4例、F-P bypass 6例、Distal bypass 8例、コラテジェン投与 2例、大切断 17例、足趾切断・デブリドメント 13例）
・急性動脈閉塞 5例　（上肢 1例 下肢 4例）
・下肢静脈瘤 38例　（ベナシール 3例、ラジオ波血管内焼灼術 35例）
・透析用ブラッドアクセス 16例（内シャント造設 7例、シャントPTA 9例）
・その他 2例　　（EVAR術後追加処置 2例）
・非血管外科手術 9例　（脊髄刺激療法関連 7例、後頚部アテローム摘出 2例）

3　研修・教育活動

第51回日本血管外科学会総会、第64回日本脈管学会総会など　各研究会で発表した。
依頼原稿の執筆(松倉　満　雑誌手術　金原出版株式会社. 2023年13巻1885-1891頁)を行った。
また院内研究として”高齢者でも安全に行える歩行機能評価方法の開発”に取り組んだ。

（文責：血管外科　専門部長　松倉　満）

心臓血管外科

部長　河田　光弘

1　人員体制

〈センター長〉許 俊鋭
〈部長〉河田光弘
〈医長〉乾　明敏
〈専門医長〉眞野暁子
〈医員〉村田知洋
〈顧問〉小野稔（東京大学心臓外科・教授）
〈非常勤〉竹谷剛（三井記念病院心臓血管外科・科長）木下修（埼玉医科大学国際医療センター心臓血管外科・准教授）山本真由（帝京大学放射線科・講師）近藤浩史（帝京大学放射線科・教授）
吉鷹秀範（心臓病センター榊原病院　心臓血管外科　名誉副院長）
林田健太郎（慶応義塾大学　循環器内科　循環器内科准教授　心臓カテーテル室主任）

令和5年度は常勤スタッフに異動は無く、現スタッフで運営した。
TAVI診療においては林田健太郎先生、吉鷹秀範先生には心臓血管外科の非常勤医としてご指導して頂いた。
2011年～副院長として4年、2015年～センター長として9年の計13年間、東京都健康長寿医療センターを牽引して来られた許 俊鋭先生が2024年3月31日をもって退官された。心臓血管外科の立ち上げ、外科診療の活性化、コロナ禍での積極的コロナ患者受け入れ、迅速で柔軟な対策などに対して感謝の念に堪えません。
今後は、名誉センター長に就任する予定である。今後、心臓血管外科は、現役メンバーでより発展させる事が出来る様に精進してゆく所存である。
5階東病棟を一般床として、術前管理、術後から退院までの診療を行い、特定集中治療室(CCU・ICU)にて周術期の集中治療を行ってきた。ハートチームとして循環器内科、血管外科、麻酔科、リハビリ科、ME、看護部、栄養科と協力して診療を行って来た。

2　診療活動・実績

■外来診療の実績・・・1日平均外来患者数 10.8人/日(令和4年 11.0人/日)、初診患者数 56人（令和4年 55人)、延外来患者数 2122人（令和4年 1988人)
■入院診療の実績・・・新入院患者数 59人(令和4年 46人)、転入患者数 23人(令和4年 37人)、
退院患者数 86人(令和4年 79人)、転出患者数 3人(令和4年 4人)、
延入院患者数 2890人(令和4年 2808人)、平均在院日数 32.8日(令和4年 32.9日)
■急性大動脈スーパーネットワーク受け入れ実績
23件（令和4年 22件)
■手術・検査実績・・・心臓血管外科手術総数　93件　(人工心肺・オフポンプCABG　45件)
内訳　緊急手術　31件　(緊急開心・胸部大動脈手術 22件)
TAVI 24件
TEVAR 10件

令和5年度は、5月8日～新型コロナ感染症がこれまでの「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる２類相当)」から「５類感染症」に移行した。そのためいろいろな規制が緩和され通常診療もコロナ禍以前に回復する事が求められた。
ハートチームとして経カテーテル的大動脈弁植込み術（TAVI）は、令和5年9月に村田知洋がTAVI(TAVR)実施医認定(SAPIENシリーズ)を取得し、続いて8月～11月循環器内科藤本肇担当部長がTAVI(TAVR)実施医認定(SAPIENシリーズ)取得を目指して術者を8例経験し実施医申請中である。12月～令和6年2月心臓血管外科乾明敏医長がTAVI(TAVR)実施医認定(SAPIENシリーズ)取得を目指して術者を8例経験し実施医申請中である。
施設認定更新も無事合格する事が出来て今後もますますTAVI治療を発展させてゆく予定である。
大血管治療の低侵襲治療として実施している胸部ステントグラフトVALIANT Captivia/Navionの指導医を河田が令和5年6月に取得した。令和6年1月から胸部ステントグラフト実施施設の更新も合格する事が出来ている。
急性大動脈スーパーネットワーク緊急大動脈支援病院として24時間体制で緊急手術も積極的に受け入れ続け、実績としても症例数を増やしている。
MICS(低侵襲開心術)について人工心肺が不要である術式で、不整脈手術左心耳閉鎖術(胸腔鏡下によるもの)を

令和4年7月に関東信越厚生局に届出を行い、受理されたため、院内で準備を進めているがまだ開始できていなかった。令和6年度には実施したいと考えている。

外来診療は、地域のクリニックからの紹介患者さん以外に、ホームページを見て当院を受診希望された患者さん、ご家族が増えて来ており、ホームページのup dateを随時していく。

3　研修・教育活動

術前カンファレンスはこれまで同様に心臓血管外科、麻酔科、臨床工学士（ME)、手術室、集中治療室、病棟看護師と共に水曜日午後(15:00～)に実施している。

症例検討については、ハートチーム（心臓血管外科・循環器内科・麻酔科・リハビリテーション科・手術室・集中治療室・病棟看護師・エコー技師・臨床工学士（ME)・放射線技師・輸血科）として水曜日午後(16:00～)に実施している。また、病棟カンファランスは金曜日に、それぞれ多職種で行い情報共有を行っている。

病棟勉強会は、乾、村田が講師として行い、ICU/CCU勉強会は眞野が講師として行っている。

全症例をNational Clinical Database（NCD）へ登録している。NCDから算出されるJapan Scoreを用いて患者さん・ご家族への手術説明の際の危険度を具体的に提示する事で手術に対する理解を深めていただいている。

4　その他

当院での心臓大血管手術の現状、成績、問題点を定期的にまとめて学会発表・論文発表を行っている。
国際学会はASCVTS2023(31st Annual Meeting of the Asian Society for Cardiovascular and Thoracic Surgery, Busan, Korea) 2023/5/31-6/3で演題が採択され、現地で発表してきた。

2021年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）に『急性大動脈解離での肺酸素化障害抑制に向けた水素ガス吸入療法の検討』で2021/4/1時点で採択され、院内の認定臨床研究審査委員会で承認を得た(整理番号H20-03) 『急性大動脈解離Stanford B型患者に起こる肺酸素化障害に対する水素ガス吸入の安全性試験』を2023/3/31で終了し、結果をまとめて、第77回日本胸部外科学会定期学術集会に演題投稿中である。

2024年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）に『急性大動脈解離でのサイトカインストームに対する水素ガス吸入療法の確立』で2024/4/1時点で採択された。特定臨床研究として前回の安全性試験から、水素ガス吸入の効果を検証するプロトコールを推敲中である。

また10施設での治験『冠動脈バイパス手術（CABG）を施行する虚血性心疾患に伴う重症心不全患者に対するヒト（同種）iPS 細胞由来心筋球（HS-001）の第Ⅰ/Ⅱ相試験』を治験審査委員会で承認を得て(整理番号T20-08)、現在も適応患者さんを募集している。

また、研究所老年病態・心血管老化再生医学　研究副部長　豊田雅士先生が責任者の『組織機能の維持・低下における細胞機能の解析及びin vitro老化モデルの構築』(整理番号H20-23　院内　研究審査委員会)にも実施担当者として心臓血管外科が継続して参加している。

脳神経外科

医長・診療科長　小原　健太

１　人員体制

令和5年度の脳神経外科は、小原健太医長・診療科長 （日本脳神経外科学会専門医、日本脳神経血管内治療専門医、日本脳卒中の外科学会技術認定医、日本神経内視鏡学会技術認定医)、高梨成彦専門部長 （日本脳神経外科学会専門医、脳血管内治療専門医)、東京大学脳神経外科医局から赴任した横井利光医員の常勤医師３名で診療にあたった。

非常勤医として、西山恭平が毎週半日勤務３～４回と当直業務を担当しているほか、幸田俊一郎が正常圧水頭症外来（毎週火曜日、水曜日、木曜日）を担当しており、加えて脳卒中データベース管理や手術支援を担当している。

脳神経外科外来は、週日の一般外来において脳血管障害・脳腫瘍・頭部外傷・頭痛・水頭症・めまい等の診療を行っている。さらに、専門外来として正常圧水頭症外来を開設しており、令和5年度の症例数増加を鑑みて、従来の週１回から週3回に外来枠を増設した。他院からの紹介患者も積極的に受けいれ、手術数の増加につながっている。入院業務は、10階西病棟、８階東病棟（病棟再編後は9階西病棟）の主に２病棟に加えて、SCU病床で運用している。

毎週月、水、金曜日朝、勤務医師全員による回診と連日の症例検討、金曜日午後３時からの脳卒中カンファランス（神経内科、リハビリテーション科合同）に参加した。全身麻酔の手術前後と重要症例については、随時検討会を行った。定時の手術日は毎週火曜（開頭術・水頭症)、木曜午後（血管内治療・水頭症）の２日で、必要時に応じてその他の週日に定時手術を追加し、随時の緊急手術を行った。脳卒中の救急入院はSCUで診療し、大手術後の患者は原則として特定集中治療室で術後管理を行った。

２　診療活動・実績

脳神経外科の外来診療は、外来延べ患者数は昨年度と同様の3157人 （１日13.0人)であり、初診料算定患者数は350人(１日1.4人)と前年度を上回っており、経時的な患者数の増加、特に紹介患者数の増加につながっている。

脳神経外科の新入院患者数は290人と昨年比29%の増加でポストコロナ時代の対応として順調に患者数の増加につながっている。入院患者の増加に伴い、当科入院病床数は20床まで増加。また、SCU病床数も12床まで増加の対応となった。

令和5年1月に診療科長として小原が赴任後は、開頭術、脳血管術、水頭症手術を含めて積極的に手術を行う体制に移行している。中央手術室における手術件数は総数210件で、昨年度より年間62件(42%)増加と大きく向上した。従来低侵襲治療として提供していた血管内手術に加えて、より積極的に脳血管外科手術、開頭術を行う方針としており、手術の内訳は大きく変化した。開頭手術や脳血管外科手術は従来ほぼ行えていなかった状況であったが、47件まで増加した。内訳は脳腫瘍11件、脳動脈瘤7件、脳動静脈奇形1件、頚動脈内膜剥離術11件、バイパス術5件、脳出血などその他12件であった。正常圧水頭症に対するシャント術も55件と大きく増加した。その中で、ハイブリッド室にて実施する低侵襲の血管内手術が45件（脳動脈瘤等のコイル塞栓術10件、頸動脈ステント留置術13件、経皮的脳血栓回収術12件、その他10件）と例年と同水準を維持した。今後は、開頭術・脳血管外科手術の件数や水頭症治療の手術件数をさらに増加させるべく体制を拡充する。また高齢化医療における低侵襲治療として脳血管内治療に加えて、神経内視鏡手術、小開頭手術を導入することを目標とする。

脳卒中ホットラインを運用して、24時間の脳卒中救急患者受入れ態勢を強化した。東京都脳卒中救急搬送体制によるtPA患者の受入れに協力し、必要に応じて急性期再開通療法を行った。

３　研修・教育活動

脳神経外科関連学会への演題発表は5演題であり、小原が筆頭著者として論文を1編発表した。
教育活動として高梨成彦が板橋看護学校の脳神経外科の講義を担当した。金曜日午後に抄読会を開催した。

日本脳神経外科学会により2015年開始されたJNR(Japan Neurosurgery Registry. National Clinical Database を利用した手術症例の登録事業)から2018年１月に発展的に移行した、施設ごとの脳神経外科全入院症例登録:JND(Japan Neurosurgical Database）に、症例登録を行った。2019年1月から参画している日本脳卒中データバンク事業（施設ごとの脳卒中入院全症例登録）に、症例登録を行った。

東京大学脳神経外科の専門研修プログラムに研修施設として参加した。帝京大学脳神経外科の専門研修プログラムに連携施設として参加した。

（文責：医長　小原 健太）

呼吸器外科

診療科長　土屋　武弘

1　人員体制

〈副院長　部長兼務〉安樂真樹（R5.4～）
〈専門部長〉　　土屋武弘（R5.4～）
〈医員〉　　登　祐哉（R3.10～）

2　診療活動・実績

安樂真樹部長、土屋武弘専門部長、登祐哉医員の常勤医3名体制で診療を行っている。

主な対象疾患は、胸部悪性腫瘍（原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、胸壁腫瘍など)、自然気胸、続発性気胸、膿胸、感染性肺疾患等である。2020年4月より新型コロナ肺炎患者の受け入れをECMOチームとして行っており、計21例のECMO症例を含む重症例の治療に携わってきた。

（1）外来・入院

毎週月曜の午前と午後、水曜の午後、木曜の午前に外来日を設定し，地域の診療所やクリニックからの初診患者の受け入れを行っている。特に板橋区医師会の肺がん検診で胸部異常陰影を指摘された症例の受け入れを積極的に行って地域の肺がん診療に携わっている。初診患者数は昨年度より31人増加した。

入院患者は主に肺癌をはじめとした胸部悪性腫瘍症例の手術症例である。昨年度と比較して新規の入院患者数は101人に増加した。手術件数は増加したが、低侵襲手術や術後回復プログラムの充実により平均在院日数は前年度同様であった。

外来患者数

	R5	R4	対前年	対前年比
1日平均外来患者数	10.7	6.9	+3.8	155%
初診患者数	85	54	+31	157%

入院患者数

	R5	R4	対前年	対前年比
新規入院患者数	101	50	+51	202%
平均在院日数	11.2	11.0	+0.2	101.8%

（2）手術

毎週火曜日と金曜日が手術日である。

令和5年度の手術総数は 110(前年度44)件で、対前年度で66件増加（250.0%）であった。疾患内訳（下記）では肺癌が最も多く、全体の6割近くを占めていた。低侵襲手術である内視鏡下手術は全症例の88.2%で行われた。

術後診断	R5	R4	疾患割合(%)
肺癌	64	27	58.2%
転移性肺腫瘍	1	4	0.1%
胸腺腫瘍	7	1	6.5%
気胸	6	0	5.6%
膿胸	8	0	7.7%
その他	24	12	21.9%
計	110	44	

3　研修・教育活動

呼吸器内科、放射線治療科、病理部との合同カンファレンスを毎週金曜日に行い、手術・化学療法・放射線治療、緩和医療などの適応・方針について多角的な検討を行っている。当科ローテートを希望する研修医には手術、論文等の指導を行っている。

4　その他

・National Clinical Database (NCD)登録
・呼吸器外科専門研修連携施設登録（日本呼吸器外科学会）

整形外科・脊椎外科

部長　宮崎　剛・早川　謙太郎

１　人員体制

令和５年度の整形・脊椎外科は、時村文秋（副院長）、宮崎剛、濱路博、早川謙太郎、金子雅子、金子泰三、松平恭子の7名と、4月1日より河田学、竹山哲史を迎え、合計9名でのスタートとなった。10月1日より、竹山の後任として斉藤有輝が赴任した。9名は、外来・病棟・手術・勉強会などすべて協力して活動した。非常勤医としては例年通り、石橋英明（ロコモ外来含む）・穴水依人が外来および手術指導を担当した。

２　診療活動・実績

新病院移転後11年目となり、新任医師の赴任に際しても大きな混乱はなかった。新型コロナウイルス感染症の５類感染症移行に伴い、予定入院、医療連携経由の手術目的の転院、緊急入院もスムーズとなった。

整形・脊椎外科外来は処置室以外に4ブースの割り当てがあり、合計5部屋で診療を行った。外来は月曜から金曜日まで水曜日を除き、再診2列、初診1列、処置1列の計4ブースないし5ブースで診察を行った。ブロック等の処置患者で混雑し、ブースが不足した際は処置室をさらにカーテンで区切って使用した。内科のブースを使用させていただくこともあった。処置内容は例年通り、関節内注射・仙骨硬膜外ブロックが主で、ギプス巻きも時に行った。専門外来としては脊椎外来（早川、松平）、人工関節外来（宮崎、濱路、金子（泰）、河田）、股関節外来（濱路、金子（泰））、ロコモ外来（石橋）、骨粗鬆症外来（時村、金子（雅）、河田）を行った。

令和５年度延外来患者数は12,397名（前年13,055名）、初診外来患者数は963名（前年989名）、１日平均外来患者数は51.0名（前年53.7名）であった。

病棟は、病棟再編が重なり、6東病棟30～36床と6西病棟8～10床と変動した。

入院患者は例年通り、変形性膝関節症、変形性股関節症、腰部脊柱管狭窄症、頚椎症性脊髄症、大腿骨頚部骨折、腰椎圧迫骨折、手根管症候群などが主体であった。延入院患者数は13,255名（前年12,199名）、新規入院患者数は529名（前年451名）。平均在院日数は、24.0日（前年24.9日）であった。

手術は合計528件（前年456件）。内訳は大腿骨頚部骨折関連87件（人工骨頭置換術40件、観血的整復内固定術47件）、人工膝関節置換術85件、人工股関節置換術60件、脊椎関連手術144件（頚椎手術26件、胸椎手術6件、腰椎手術71件、椎体形成術22件など）、手外科関連手術95件（手根管開放術39件）等であった。

３　研修・教育活動

例年通り、月曜夕方の術前カンファレンス、病棟回診、水曜朝および夕方のレントゲンカンファレンス、病棟カンファレンス、外来カンファレンスを行った。

研究に関しては、当院単独での臨床研究：1）日本人患者におけるTaper-wedged stemのstem-bone contact patternと臨床成績の検討. 2）日本人高齢患者における手術加療を受けた大腿骨転子部骨折の1年死亡率と危険因子の検討. を金子（泰）が行った。学会発表は、早川、金子（泰）、河田が行った。論文は、宮崎、早川、金子(泰)、河田が作成した。臨床研究、論文作成、学会発表は次年度も積極的に行う予定である。

４　その他

河田学：The Emerging Investigator Excellence Award, ACR Convergence 2023 獲得

河田学：日本学術振興会科学研究費　2023-2024年度　研究活度スタート支援　転写因子KLF4に依拠した、変形性関節症の新規治療候補薬剤の網羅的探索および機能解析（河田学[研究代表者]）

皮膚科

部長　種井　良二

1　人員体制

〈部長〉種井良二
〈医員〉宮澤理恵子

以上2名で当センターの皮膚科外来受診患者や入院患者の診療、他科入院患者の診察・往診、研修医の指導などの業務に従事した。

2　診療活動・実績

当院の皮膚科受診患者は湿疹や皮膚掻痒症、蕁麻疹や痒疹、皮膚真菌症、帯状疱疹や単純性疱疹、丹毒・蜂巣炎、薬疹・中毒疹、皮膚壊疽・血行障害・褥瘡、熱傷、皮膚良性・悪性腫瘍、疥癬、膠原病・血管炎、角化異常症、爪の疾患、皮膚の加齢徴候、アレルギー性皮膚炎が主な対象疾患である。令和5年度の皮膚科外来延患者数は7,396人で、新規入院患者数は75人、平均在院日数18.4日であった。例年通り連携病院、高齢者保健施設、他科入院中の患者の診療や生検依頼が非常に多く、専門医による視診やダーモスコピーあるいは皮膚生検により、診断を確定（種井は皮膚病理報告書を病理専門医と共同作成）し、内服・外用・光線療法や手術あるいはバイオ製剤の注射による治療でこれに対応した。

主な入院対象疾患は帯状疱疹や丹毒・蜂巣炎の点滴治療、皮膚癌・癌前駆症や皮膚良性腫瘍の手術、類天疱瘡のステロイド全身投与治療、熱傷・褥瘡の治療、皮膚壊疽・血行障害の精査と治療、薬疹・中毒疹や重症湿疹・痒疹などの原因検索や治療であった。また、毎週水曜日に執り行なわれている褥瘡ラウンドでは宮澤医師が中心メンバーとして参加して、各科入院中患者の褥瘡の評価・治療に尽力した。令和5年度より皮膚科専攻医は不在となっている。

3　研修・教育活動

皮膚科の短期研修を希望する初期研修医(佐藤宏樹先生、西頭麻希先生、林　拓海先生、福島薫子先生、今村洋介先生)に皮膚科診療の基本的な取り組みかた（発疹の診方、各種検査や治療の方法)・手技（皮膚生検や皮膚外科）などについて宮澤・種井が指導医となり研修指導を実施した。

院内・院外の研修・教育活動として種井がお昼のクルズスで「知っておきたい高齢者の皮膚疾患」の講義を行った。

泌尿器科

部長　粕谷　豊

１　人員体制

〈部長〉粕谷豊

〈専門医長〉永田卓士、津坂恭央、村田弘明

泌尿器科は粕谷部長および永田専門医長、津坂専門医長、村田弘明医員の4名で腎臓癌、尿路上皮癌、前立腺癌、前立腺肥大症、尿路結石、排尿障害の診療にあった。

令和4年度の人事面では、上野医師が東京医大学泌尿器科に転出し、代わって三井記念病院から村田医師が着任し4人体制で泌尿器科疾患の診断・治療を行った。

２　診療活動・実績

（１）外来

現在、外来を2列で診療に当たっているが、外来延べ患者数13496名で、329名減少、新規患者数は337名で25名の減少で紹介患者数は485名で19名減少した。

（２）入院

手術件数は349件で前年度より5.8%ほど増加した、腎・腎尿管悪性腫瘍手術を小切開手術から腹腔鏡下手術に変更後3症例、前立腺癌の腹腔鏡下小切開根治的前立腺拡大全摘術が8症例であった。膀胱癌は89症例で可能な限りPDDを使用したTUR-Bｔを行った。経尿道的手術（TUR-P、蒸散術、結石砕石術）119例であった、今年度は前立腺生検でバイオジェット導入できたので先進医療として89症例が適応となった、また病床稼働率は96.2%と3.5改善し単価も70.127から73.971増加し、収入額は昨年に比し1670.9万増加した

３　研修・教育活動

（１）　臨床手技の完全解説2023～24年度版　粕谷豊

眼科

部長　善本　三和子

1　人員体制

医師

〈部長〉沼賀二郎（～2023.5.31)、善本　三和子（2023.6.1～）
〈常勤顧問〉沼賀二郎（2023.6.1～）
〈医長〉池上靖子、大島博美
〈専門医長〉山本裕樹
〈常勤〉髙尾博子
〈非常勤医師〉新家眞、太田良枝、本庄恵、青木彩、坂田礼、外山琢、小関信之
〈専攻医〉岡野夏海、中川美和子（～2023.9退職)、一迫星来、竹中美帆、福尾美和子（2023.10～産育休)

視能訓練士（ORT)

〈常勤〉植沙織（2023年度中　育児休業)、佐野友弘
〈非常勤〉宮田綾乃、吉田利佳、八鍬集、加藤一樹

2022年度から2023年度にかけて、長く勤務した常勤医師や専攻医の退職が続き、診療体制が変わり、かつ、2023年度は、常勤の視能訓練士の産休および育児休業、また専攻医の1名の退職、1名の産休があった。

2　診療活動・実績

［1］外来

	R5	R4	対前年	対前年比
延外来患者数	14990	17679	-2689	84.8%
初診外来者数	1072	1165	-93	92.0%
1日平均外来患者数	61.7	72.8	-11.1	84.8%

［2］外来手術件数（レーザー治療）

	R5	R4	対前年	対前比
マルチカラー	200	105	+35	190.4%
YAG/SLT	118	86	+32	137.2%

外来診療は、午前午後ともに2-4列の診療を行った。上記のスタッフの変動もあり、延外来患者数は減少したが、初診外来患者数はほぼ維持することができた。また外来のレーザー治療の件数は、網膜光凝固などに用いるマルチカラーレーザーは昨年に比してほぼ2倍の治療件数、後発白内障や緑内障に用いるYAG/SLTレーザーも実施件数が増加し、網膜疾患から、水晶体関連、および緑内障など幅広い分野での外来治療の内容が充実する結果であった。

［3］入院

	R5	R4	対前年	対前年比
延入院患者数	4191	4301	117	97.4%
新規入院患者数	2174	2187	106	99.4%

［4］手術件数（中央手術室）

	R5	R4	対前年	対前年比
白内障関連	1584	1563	+19	101.3%
硝子体関連	63	74	-11	85.1%
緑内障関連	46	57	-11	80.7%
外眼部関連	32	62	-30	51.6%
硝子体注射	457	465	-8	98.2%

手術は、月・水・金は午前/午後で2列、火・木は午後1列で行った。日帰り手術もすべて日帰り入院として行い、新規入院患者数は2174名、延入院患者数は4191名であった。手術件数は、主となる白内障が1584件と昨年に比してやや増加、その他には硝子体手術、緑内障手術、硝子体注射はやや減少した。

3　研修・教育活動

当院は眼科専門研修基幹施設として、東京大学眼科の1年目、2年目の医師が専攻医として専門研修を行っている。外来診療から始まり、白内障手術を術者として完投できるまで、スタッフ全員で熱心に指導をおこない、また臨床研究に関しては、東大眼科のクリニカルカンファランスから、眼科学会発表、論文作成に至るまで指導を行った。毎週月曜夕方には勉強会と医局会、金曜夕方には手術前カンファランスを行った。板橋看護学校の講義は、善本（部長）が担当し、院内の研修医に対するクルズスは、大島（医長）が担当した。

【院内活動（講演)】

1)「高齢者のめやに」　善本　三和子
健康長寿医療センター　カスタマーサービス向上委員会　2023.5.12

2)「糖尿病による目の病気」　善本　三和子
東京都健康長寿医療センター　令和5年度糖尿病教室　2024.2.21

耳鼻咽喉科

医長　鈴木　康弘

1　人員体制

〈医長〉鈴木康弘
〈医員〉渡邊浩基、家坂辰弥
〈非常勤医師〉川島慶之、木村百合香

耳鼻咽喉科の診療体制は、常勤医師3名で診療にあたった。その他、外来担当非常勤医1名、手術指導担当非常勤医1名で構成された。病棟は7階西病棟の2床を運用した。主に中耳炎・副鼻腔炎の手術パス入院症例と顔面神経麻痺・突発性難聴パス入院症例が多かった。また、低侵襲手術の導入により入院日数の大幅な削減を継続しており、今後も手術症例の増加に努める予定である。

2　診療活動・実績

（1）外来

外来診療実績は、昨年度に比べ、延べ外来患者数はやや減少し、初診外来患者数も減少した。担当医異動による患者数減少は少なかったものの、紹介患者数の減少が影響したものと考えている。近隣の診療所やクリニックとのさらなる連携強化が必要と考えている。

（2）入院

入院患者数は、外来紹介患者数の減少に伴い、昨年度に比べてやや減少した。手術症例における短期入院の導入により、平均在院日数の短縮は昨年度と同様に行ってきた。

3　研修・教育活動

定期的に紹介患者の症例検討会を行い、臨床技術の向上に加え、個々の症例に最善の治療を提供できる環境を整えている。また予定手術症例のカンファレンスも行い、治療に関する議論を行っている。引き続き、鼻手術外来、耳手術外来、嚥下外来、補聴器外来を設置し、より専門的な治療を提供していることを内外に示している。

4　その他

超高齢化社会の到来により、今後も加齢性難聴、高齢者平衡機能障害、嚥下機能障害等の疾患は増加傾向がしばらく続くものと考えられる。当院の特性として、補聴器外来や嚥下外来等の専門外来を引き続き充実させていくとともに、難聴・平衡障害の他覚的精密検査を必要な症例には積極的に行っていく必要があると考えている。来年度は、大学との共同研究にも参画する予定となっている。また人工内耳手術の施設認定を受け、今後当院でも人工内耳手術を行える体制が整った。
今後も質の高い、専門的な診療を行い、高齢者のQOLを向上させるための診療を行っていきたい。

歯科口腔外科

部長　平野　浩彦

1　人員体制

〈歯科口腔外科部長〉平野浩彦　（研究所研究部長兼務）
〈歯科口腔外科医長〉斉藤美香
〈常勤〉森美由紀
〈非常勤〉大鶴洋、高野智史
〈初期研修医〉大沢　啓、佐藤はるか
〈歯科衛生士〉常　勤：五十嵐麻奈三、宮本敦子、市川果歩
　　非常勤：森　彩乃

2　診療活動・実績

（1）運営方針以下を目標とした。

①　医療連携を強化する

地域歯科医師会の口腔保健センターなどを通じ、施設入所患者、在宅療養患者などの要介護高齢者の歯科治療の受け入れを実施した。特に認知症患者の受け入れを積極的に行った。

骨吸収抑制薬（BPまたはデノスマブ）関連顎骨壊死患者および骨吸収抑制薬服用患者の紹介が増加した。

抗血栓療法実施患者の抜歯など観血的処置も積極的に実施した。

また、地域歯科医院への逆紹介も積極的に実施し円滑な初診患者受け入れの体制を整備した。

②　口腔衛生・機能管理支援の充実

手術（がん、心臓血管、人工股関節置換など）、化学療法対象患者への対応を各該当科と連携しきめ細かく行い、周術期口腔管理を実施した。また病棟への歯科衛生士派遣を積極的に行い、患者負担の軽減を図った。これまでの周術期口腔管理に実施状況データをまとめ課題の抽出を行い対応の検討を適宜行った。

入院療養に際して生じる口腔衛生・機能低下への対応を、他科と連携し積極的に実施した。

③　保険外診療の導入

患者ニーズの多様化に対応するため、歯科補綴治療（義歯、歯冠補綴など）を中心に保険外診療を令和3年に導入し運用した。

（2）患者数：令和4年度・令和5年度の各患者数を表に示す。

	外来患者数		前年度比
	令和4年度	令和5年度	
初診	2,347	2,319	(1.2%減)
再診	9,107	8,233	(9.6%増)

	周術期管理患者数		前年度比
	令和4年度	令和5年度	
初診	609	706	(16.4%増)

3　研修・教育活動

（1）臨床研修

ア　大沢　啓、佐藤はるかが臨床研修を行った。

イ　臨床研修歯科医第26期生として6名の応募があり、武山桂己桂己が選考された。

（2）院内研修

・もの忘れ外来家族交流会、オレンジの会などに講師を派遣し、患者および家族への口腔衛生の具体的な手法、摂食嚥下機能低下への対応法などの啓発を実施している。
・高齢者看護エキスパート研修会、栄養士研修会など院内各職域研修へ講師を派遣し、口腔衛生および機能管理の視点および手法についての実習なども含めた研修を行っている。

４　その他

今後の課題と展望

ア　自己収支比率の改善を図る。

イ　周術期口腔管理を充実する。

ウ　臨床研修を充実する。

エ　歯科衛生士の育成を図る。

救急診療部

部長　坪光　雄介

1　人員体制

坪光雄介（循環器内科専門部長）
加藤貴行（リハビリテーション科専門部長，救急診療部専門部長）
田村嘉章（糖尿病・代謝・内分泌内科先生専門部長，救急診療部専門部長）
仁科裕史（神経内科専門部長，脳卒中Ａ担当部長）
三井秀雄（外科医長）

「断らない救急医療」の徹底を重要課題とし、救急診療部を 2012 年１月に新設、救急診療部の核となる医師（各科の主力メンバー）を配置している。日中の救急外来診療には、当番医（指導医１名、初期・後期研修医２～３名）に加えて、帝京大学医学部附属病院救命救急センターより非常勤医師を派遣して頂いている。初期研修医 1 年目を初期研修医 2 年目が指導，初期研修医 2 年目を後期研修医 3 年目が指導、後期研修医を指導医が指導するいわゆる「屋根瓦方式」にて研修・実践をしている。

2　診療活動・実績

当センターは救急告示医療機関であり、東京都の二次救急医療機関に指定されている。休日・全夜間問わず積極的な救急の受け入れを行っている。加えて区西北部保険医療圏内における東京ルール事案（受入困難症例）の受け入れ、または受け入れ調整を行う「地域救急医療センター」としての役割も担っている。

新型コロナウイルス感染拡大（2020 年１月）に伴い、救急隊からの依頼件数が約 1.9 倍（コロナ前：450-460/月→コロナ以降：800-900/月）に増加した。救急隊からの依頼件数が約 2 倍に増加してことで，お断り率 2.1 倍（コロナ前 2019 年度：15.0%→2023 年度 31.9%）となった。
前年度に比べて，救急患者受入数は 8,619 人（前年比-1,057 人），救急車受入台数は 4,431 台（前年比+214 台），救急車以外の wall-in，軽症患者が減った要因は前年度に比べて，コロナ疑い，発熱患者の受診が減ったことが原因と考える。依然として高いお断り率ではあるが，コロナの影響が完全に収束してくれば，通常の医療体制に復帰すると考える。

3　研修・教育活動

「朝カンファランス」　毎朝 8 時 15 分から，8 時 30 分頃まで

初期研修医が当直して診療に携わった症例（2 症例）について、主訴、バイタルサイン、血液検査、画像所見などをもとに何を鑑別診断として挙げ、暫定診断に至った経緯をプレゼンテーションしている。指導医は指導・教育を行っている。また、当直研修医が直接に診察していない専門当直の診察した科（循環器内科・脳神経内科・外科症例）においても、指導医を通して症例の解説を加えている。

「テルモメディカルプラネックス研修」

今年度は 6 月 24 日（土）に開催（研修が始まって今回で 12 回目）することができた。
内容：
① 縫合（手洗い・ガウンテクニック・豚皮を用いた縫合術：消毒、局麻、縫合、結節縫合、埋没縫合）

② 簡易気管切開（豚気管を用いたミニトラック：トラヘルパー挿入術の実践、および気管切開）

③ 気管内挿管（模擬人形）麻酔科医指導：喉頭鏡，マックグラス（ビデオ喉頭鏡）を用いての指導

④ シュミレーター(模擬人形)を用いた急変時対応

（3 パターン：症候性てんかん，アナフィラキシーショック，急性冠症候群）

⑤ シュミレーター(模擬人形)を用いた超音波ガイド下の内頸静脈より中心静脈カテーテル挿入

＊年度別，救急患者受入総数，救急車受入総数，お断り率（端末 off 除外）

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
救急患者受入総（名）	8,911	8,792	7,948	9,591	9,676	8,619
救急車受入台総（台）	4,257	4,138	3,544	4,330	4,217	4,431
救急患者お断り率（%）	13.1	15.0	31.9	29.9	31.0	31.9

麻酔科

部長　小松　郷子

1　人員体制

【常勤】

〈部長〉小松郷子

〈専門部長〉縄田瑞木

〈専門医長〉久保田涼、秋山絢子

〈医員〉清水啓介、富田大信、兒玉瑞穂

【非常勤】内田博(週4日)、脊山雅子(週3日)、相川和之、露嵜仁志、芳野泰史、永谷雅子
木村香生里（4～9月)、榎田隆志（10～3月）

令和5年度は東京大学麻酔科から廣瀬佳代医師に代わり兒玉瑞穂医師が常勤医として採用された。専門部長の内田博医師は週4日の勤務体制で非常勤医として継続となった。

非常勤には、外来診察と説明同意取得を毎週火曜日に相川和之医師に、一般手術麻酔を内田博医師(週4日)、脊山雅子医師（週3日）に担当いただいた。東京大学麻酔科から心臓麻酔指導を露嵜仁志医師（毎月曜)、芳野泰史医師（毎水曜)、永谷雅子医師（毎木曜）にお願いし、木村香生里医師（4～9月)、榎田隆志医師（10～3月）には毎週火曜日に一般手術麻酔をお願いした。

2　診療活動・実績

（1） 麻酔科管理症例数

令和5年度麻酔科管理症例数は1,835件で、267件の増加となった【表1】。(JSA PIMSからのデータを表示)

表1. 麻酔科管理症例数

R1	R2	R3	R4	**R5**	対前年
1,662	1,515	1,580	1,568	**1,835**	+267

（2）術前評価および麻酔科診察/IC

術前検査センター経由のカルテによる術前診察件数は1,654件であった。2階23番の第5ブースでの麻酔科診察/説明同意取得(麻酔科IC)は1,125件と年々増加し続けている【表2】。

表2. 麻酔科診察/説明同意取得

R1	R2	R3	R4	**R5**	対前年
434	602	770	1,030	**1,125**	+95

（3）他科からの麻酔科コンサルト依頼

パスのない疾患や内科系入院患者の手術、準緊急手術患者は高リスクの頻度も高い。より安全な周術期管理のために麻酔科術前耐術能評価コンサルトを令和2年度より本格的に始めたが、次第に各科に浸透し件数は694件と年々増加し続けている【表3】。

表3. 他科からの麻酔科コンサルト依頼

R1	R2	R3	R4	**R5**	対前年
129	250	437	499	**694**	+195

（4）緩和医療に関するコンサルトは随時対応している。手術室内でのカテーテル挿入は2件であった。

3　研修・教育活動

（1） 本年度麻酔科を回った初期研修医は、林拓海、西頭麻希、宮内佑弥、小林茉愛、和田都花、今村洋介、

宮本一慶、吉田元、鈴木淳史の各医師である。

（２） 東京大学医学部6年生（一部5年生）1-2名に対して、数か月間毎週木曜日に当センター手術室にて臨床実習を実施した。

（３） 院内研修として当センター看護師対象に静脈注射講習を行った。

（４） 院外では板橋看護専門学校看護学生1年生に対し手術麻酔に関する講義を6回にわたって行った。

（５） 看護師特定行為研修外部評価者として2021年度より東大病院総合研修センターに協力している。

（６） 職員を対象とした「第2回健康長寿ICLSコース」を開催した。今後も継続予定である。

４　その他

（１）基幹施設としての東京都健康長寿医療センター麻酔科専門研修プログラムは、2023 年開始のプログラムを策定し認可された。また東京大学医学部附属病院麻酔科専門研修プログラムのＡ連携施設として前年同様に専門研修医を 2 名受け入れた。

中央手術室

外科総括部長　中里　徹矢

1　人員体制

令和 5 年度の中央手術室の運営は小松郷子　麻酔科部長、平野　哲　手術室看護師長を中心とする麻酔科と手術室看護師により行われていた。手術は一般手術室 9 室＋ハイブリッド手術室の全 10 室が稼働している。電子カルテシステム、手術室管理システム、映像管理システムなどのシステムが導入されているが、日常の手術室管理においては、手術室看護師が非常に大きな役割を担っている。看護師は平野看護師長を中心に日々の業務を担当した。また、手術材料については SPD がその大半を管理し、手術用物品の効率的運用と看護師の管理業務の負担軽減が計られている。また手術用医療機器の維持管理に関しては、臨床工学士が担当している。

2　診療活動・実績

令和 5 年度の中央手術室の利用件数は 4777 件と令和 4 年度から 329 件増加した（表)。整形外科（81 件)、精神科（70 件)、呼吸器外科（66 件)、脳神経外科（63 件)、脊椎外科（34 件)、腎臓内科（31 件)、心臓血管外科（21 件)、外科（19 件)、泌尿器科（19 件)、神経内科（9 件)、麻酔科（5 件)、血液内科（3 件)、消化器内科（3 件)、耳鼻咽喉科（2 件)、循環器内科（2 件)、皮膚科（2 件）の順に手術室利用件数が増加した。特に呼吸器外科は土屋武弘専門部長、安樂真樹部長が赴任されてから増加傾向が顕著であった。

令和 5 年度の緊急手術件数は 290 件と昨年（211 件）に比べ 79 件増加した。

手術室運営部会は年 2 回の定例開催及び審議する議題が発生した時に随時開催されている。令和 5 年度の手術室運営部会は 2 回開催され、手術室利用件数や新規納入医療機器等について報告があった。また、ハイブリット室の運営や骨髄移植ドナー髄液採取の手術枠について検討された。

手術室の円滑な運用開始のため、麻酔科及び各診療科、手術室看護師、コメディカル、事務方等多くの部門に協力をいただいている。今後さらに各科、各部門の協力を得て、手術室の安全と効率的運用を目指していく予定である。

3　新規導入・更新器機

令和 5 年度に中央手術室に新規導入・更新された機器は以下である。

脳神経外科手術用ドリル（脳神経外科）
手術用ドリル（脳神経外科/整形外科）
軟性膀胱鏡（泌尿器科）
スターナムソー（心臓血管外科）
手術用内視鏡（脳神経外科）
手術用内視鏡ビデオシステム（泌尿器科）
絶縁破壊テスター（手術室）
バイポーラ凝固切開装置（整形脊椎外科）

また、令和 6 年 3 月に内視鏡手術支援ロボット（da Vinci）の導入が承認され、令和 6 年度内の導入が決定した。

表．科別手術室利用件数

（単位：件）

区　　分	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
外科	437	520	512	531
心臓外科	106	146	71	92
血管外科	351	98	243	208
呼吸器外科	70	53	38	104
脳神経外科	135	162	188	251
整形外科	300	312	274	355
脊椎外科	133	134	168	164
泌尿器科	292	314	330	349
眼科	1894	2086	2188	2181
耳鼻咽喉科	36	32	62	64
皮膚科	32	32	17	19
歯科口腔外科	10	8	7	7
リハビリ	0	0	1	0
麻酔科	6	0	5	2
精神科	281	275	186	256
循環器内科	94	113	115	109
消化器内科	1	0	5	8
呼吸器内科	3	6	6	2
神経内科	13	11	5	14
血液内科	5	5	5	8
腎臓内科	0	8	22	53
合計	4,199	4,315	4448	4777

特定集中治療室

特定集中治療室 室長 眞野 暁子

特定集中治療室（特治、Intensive Care Unit: ICU)は、内科重症患者を受け入れる Medical ICU、術後重症患者を受け入れる Surgical ICU、冠動脈疾患を中心とした循環器重症患者を受け入れる Coronary Care Unit (CCU)が共有で重症患者の管理・治療を行っている。

令和 5 年 5 月より、手術後予定入室の多い火曜日および木曜日は 8 床で、それ以外の曜日は 6 床で運用している。また陰圧個室を計 3 室有しており、重症 COVID-19 患者等を可能な限り受け入れられるよう、病床管理を行っている。さらに、一般病棟や脳卒中ケアユニット (SCU)と連携しながら、比較的状態が安定している術直後患者さんや人工呼吸管理中の患者さんを夜間の緊急移動も含めて受け入れていただき、なるべく多くの重症患者さんを収容できるよう、努めている。

1. 人員・管理体制

ICU の運営は、藤本循環器内科担当部長が室長を務め、小原脳神経外科医長、眞野心臓外科医長が副室長として、お互いに協力し合って行っている。

当院 ICU は Open ICU である。入室患者は担当科の主治医が受け持ち医となり、管理・治療にあたるが、集中治療専門医である眞野副室長が平日日中は ICU フロアに専任し、各受け持ち医と密に情報交換を行いながら管理・治療のサポートを行っている。看護体制は 2:1 看護である。片岡師長、集中治療認証看護師である石川主任が中心となり、定期的に勉強会等を行い、業務に関する専門的技術や知識の習得に努めている。令和 3 年度からは、ICU 担当の管理栄養士が 1 名配属されており、毎朝、担当管理栄養士、ICU 専任医師、ICU 師長で回診を行い、栄養状態・栄養投与方法に関するアセスメントを行っている。

入室が 1 週間を超える患者については、主治医、看護師、ICU 専任医師、薬剤師、栄養士、リハビリ担当者、臨床工学士を含めた多職種で週 1 回、定期的にカンファレンスを行い、情報共有および治療方針の検討を行っている。さらに患者の病状等に変化があった場合などにはその都度、適宜カンファレンスを追加している。また、残念ながら入室患者がお亡くなりになられた場合は、原則 1 か月以内に上記多職種で死亡カンファレンスも行っている。

2. 診療活動・実績

令和 5 年度の入室患者数は、729 人と昨年度 (711 人)に比し、18 人増加した。そのうち、213 人 (29%)が緊急入室、516 人 (71%)が予定入室であった。予定入室はほぼ術後患者であった。担当科は多い順に、外科 181 人、循環器内科 163 人、呼吸器外科 90 人、血管外科 69 人、心臓血管外科 67 人、脳神経外科 54 人、脳神経内科 24 人、泌尿器科 21 人、腎臓内科・透析科 17 人、整形・脊椎外科 17 人、その他内科 26 人と、例年同様、外科系の術後管理および急性冠症候群を中心とした循環器疾患の管理が大半を占めた。入室患者の平均年齢は 76.4 歳、平均在室日数は 3.1 日、生存退室が 703 人 (96%)、死亡退室が 26 人 (4%)であった。年間平均病床利用率は 66.5%と、6 床運用が main であることを反映し、昨年 (53.5%)より増加した。

前年度同様、東京都 CCU ネットワーク、大動脈スーパーネットワークに参画し、夜間休日を含め、積極的な患者受け入れに努めた。

これまで心臓カテーテル室業務は ICU 看護師が行ってきたが、常時安全確実な 2:1 看護を遂行するため、その業務を手術室看護師に移行することとなり、スムーズな業務引き継ぎのための教育・研修を行った。

3. 研修・教育活動

高度な専門的知識・技術に基づいて安全な患者管理ができるよう、業務の見直しを行いながらその効率化を目指し、適宜勉強会やマニュアルの改訂を行った。また、専門的医療の充実、技術の習得を目指し、計画的に各種学会会・研修会への参加を推進した。引き続き、ICU の患者管理・治療体制の充実、向上を目指す方針である。

リハビリテーション科

部長　金丸　晶子

1　人員体制

〈部長〉金丸晶子　　〈専門部長〉加藤貴行　　〈医員〉正田奈緒子, 齊藤陽子
〈後期研修医〉全秀剛
〈理学療法士〉寺澤泉, 榎本洋司, 髙山祐子, 江渕貴裕, 熊木陽平, 池田光範, 山口真依, 朴文華, 真藤嗣正, 樋口和奏, 鈴木圭, 木村和哉, 小谷優太, 根本麻鈴, 篠山絵里奈(4月育休明け), 西山大輝(3月入職), 田嶋真由美(3月退職), 藤本静香(8月退職)
〈作業療法士〉本田拓也, 清水彩, 山田大翔, 村上康(4月入職), 奥野由佳(12月退職), 澁野由希奈(3月退職), 榎戸理沙(3月退職)
〈言語聴覚士〉田中春奈, 江渡友香, 関泰子(1月入職),大村有希(3月退職)
〈臨床心理士〉夘埜静奈,牧田彩加, 河地由恵(4月育休明け)
〈非常勤職員〉藤田博暁(理学療法士)　産休･育休･病欠など:PTが1名, OTが0名, STが1名,CPが2名
退職:PT2名,OT3名,ST1名

2　診療活動・実績

■診療の実績（医師）

リハビリテーション科医師の主たる業務は、患者のリハビリテーション実施について他科医師からコンサルテーションを受けて、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士等に対し、リハビリテーション処方をおこなうことである。患者を診察しリハビリテーションの適応を判断して、必要なリハビリテーション内容を処方する。またリハビリテーションの方法や方針については、主治医の指示の下で、療法士とリハビリテーション科医師が相談しながら決定している。外来リハビリテーションについては、介護認定を受けた患者が医療保険で外来通院リハビリテーションを受けられなくなったことと、病院と診療所の機能分担の観点から、当院では外来通院リハビリテーションを基本的に実施していない。例外としては、ボツリヌス外来時に単回のリハビリテーション介入を実施する場合や、変性疾患による進行性失語症に対する言語機能評価目的で外来リハビリテーションを実施する場合、等がある。

（1）リハビリテーション処方業務

院内他科からのコンサルテーション依頼による診察件数は2,316件であった（1日平均コンサルテーション診察患者数は9.5人／日）。このコンサルテーション依頼に対して2,043件のリハビリテーション処方をおこなった。

表１　疾患別リハビリテーションの処方件数

脳血管疾患等	廃用症候群	運動器	心大血管疾患	呼吸器	その他
736	561	117	365	215	49

（2）外来患者診療

延外来患者数は令和4年度1,976人から令和5年度1,929人と若干減少したが、これは病診連携で地域医療機関へ患者を紹介したことによる。初診料算定患者数は令和4年度57人から令和5年度54人と微減しており、今後リハビリテーション科専門外来（ボツリヌス外来・高齢者いきいき外来）において新患獲得を進めていく必要がある。

表２　リハビリテーション科専門外来

ボツリヌス外来	初診 13人、ボトックス®投与件数 38件
装具外来	51人　（内、採型・作成が16件）

高齢者いきいき外来（軽度認知障害専門外来）*1	初診 26人、再初診 41人

*1　全例初診時にリバーミード行動記憶検査、MMSE、MOCA、WAIS-Ⅲ数唱、GDSを施行した

（3）入院患者診療

リハビリテーション科として入院した患者数は、令和4年度29人、令和5年度23人と減少した。入院目的は短期入院リハビリテーション目的が15人で、その他は、ボツリヌス初回施注時のリハビリテーションを兼ねた入院や、蜂窩織炎のデブリードマン等の治療目的、院内当番制のCovid-19入院、胃瘻チューブ交換等のケースであった。他科からリハビリテーション目的で依頼された転科入院や、地域医療機関から紹介の短期リハビリテーション目的での入院については、今後も積極的に対応していく方針である。尚、病棟は目的に応じて、地域包括ケア病棟（6階西）と一般病床を利用した。

■診療の実績（リハビリテーション療法士）

リハビリテーションは20分間を1単位として算定する。本項では臨床心理も便宜的に20分間の介入を1単位と換算して掲載した。

表３　リハビリテーション処方件数

	理学療法	作業療法	言語聴覚療法	臨床心理
脳血管疾患等	706	614	351	211
廃用症候群	551	205	91	36
運動器	896	135	0	41
心大血管疾患	361	22	0	47
呼吸器	209	37	58	18
その他	22	2	4	35
合計	2745	1015	504	388

表４　リハビリテーション実施単位数

	理学療法	作業療法	言語聴覚療法	臨床心理
脳血管疾患等	12419	10978	5742	3567
廃用症候群	9066	3672	1028	631
運動器	18515	2239	0	1359
心大血管疾患	5263	201	0	774
呼吸器	3780	661	587	186
その他	162	33	110	351
合計	49205	17784	7467	6868

疾患別リハビリテーション料については、下記の2種類の加算がある。

①発症、手術又は急性増悪から30日を限度として、早期リハビリテーション加算として、1単位につき30点を所定点数に加算する。

②発症、手術又は急性増悪から14日を限度として、初期加算として、1単位につき45点を更に所定点数に加算する。

表５　早期リハビリテーション加算及び初期加算の単位数

	理学療法		作業療法		言語聴覚療法	
	早期加算	初期加算	早期加算	初期加算	早期加算	初期加算
脳血管疾患等	9209	5125	8211	4403	4230	2473

廃用症候群	5999	2532	2497	948	673	290
運動器	14451	8087	1525	744	0	0
心大血管疾患	4347	3002	131	79	0	0
呼吸器	2835	1637	497	291	448	271
合計	36841	20383	12861	6465	5351	3034

表６　リハビリテーション科臨床心理実施検査数（合計1141件）

発達及び知能検査（容易・80点）	179	その他の心理検査（極めて複雑・450点）	7
人格検査（容易・80点）	3	その他の心理検査（複雑・280点）	293
		その他の心理検査（容易・80点）	659

現在リハビリテーション科では退職による欠員と、産休・育休等による人手不足が常態化しているが、毎週土曜日はリハビリテーション療法士が2名ずつ勤務している。また土曜日を除いて休日が3連休以上となる場合には、連休中の1日ないし2日間、リハビリテーション療法士が3～5名出勤し、リハビリテーションが必要な入院患者を対象として、主に病棟のベッドサイドでのリハビリテーションを実施している。

３　研修・教育活動

（１）SCU入院症例カンファレンス（平日毎朝9:15～9:30）：リハビリテーション科医師、神経内科医師、脳外科医師、病棟看護師、理学療法士、MSW、管理栄養士が参加して、SCU入院全症例について治療方針、退院先の検討を行っている。

（２）脳卒中カンファランス（毎週金曜日15:00～15:45）：リハビリテーション科医師、神経内科医師、脳外科医師、病棟看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、MSW、管理栄養士が参加。リハビリテーションが開始された脳卒中症例について、リハビリテーションの方針、回復期リハビリテーション病棟への転院の必要性、等について検討している。

（３）リハビリテーション病棟カンファランス（毎週金曜日14:30～15:00）：リハビリテーション科医師、病棟看護師、リハビリテーション療法士スタッフが参加し、リハビリテーション科入院患者の症例検討会を実施している。

（４）心臓外科カンファランス（毎週金曜日）：心臓外科医・看護師（病棟やICU）・臨床工学士等による症例検討会に、リハビリテーション科からは理学療法士が出席している。

（５）NST回診・カンファランス（毎週水曜日）：医師、歯科医師、栄養士、看護師、薬剤師、臨床検査技師、言語聴覚士による回診・カンファレンスを実施している。医師のメンバーとしてリハビリテーション科からは金丸、加藤、齊藤が参加した。

（６）救急外来カンファレンス（平日毎朝8:15～8:30）：当直医を含む初期研修医、指導医による救急外来から入院した症例についてのカンファレンス。指導医の1人として加藤が出席している。

（７）リハビリテーション療法士養成校から複数の実習生を受け入れた（理学療法・作業療法）。

（文責　加藤貴行）

放射線診断科

部長　徳丸　阿耶

1　人員体制

〈部長〉徳丸阿耶
〈専門部長〉高田晃一
〈医長〉鈴木文夫
〈常勤医〉 張申逸
〈非常勤医〉11 名

2　診療活動・実績

（1）検査件数

・RI 総検査数：1,910 件

① 脳血流 SPECT：836 件　②DaT スキャン：437 件　③MIBG 心筋シンチ：270 件　④骨シンチ；88 件

①～③は、アルツハイマー病、レビー小体病、パーキンソン病診断に有用で、国際診断基準にも採用されている。

・保険収載 PET 件数 384 件

① FDG 腫瘍：307 件　②脳アミロイド PET：15 件　その他：62 件

①は、早期の悪性腫瘍評価、転移評価に有用である。

②の脳アミロイドが保険収載され、2024 年 1 月から保険での撮影が開始された。

・研究用 PET：838 件

（2）放射線診断

・CT 検査総数：20,366 件

・MRI 検査総数：7,302 件

・認知症関連 MRI は 1,437 例。保険収載範囲で、認知症の背景を推定する技術開発が進み、その診断技術は国内外をリードする。

（3）地域連携

・MRI 検査数は 297 件、CT 検査数は 448 件、核医学検査数は 20 件、骨塩定量は 254 件

・オンライン予約：オンライン予約は 89.7%と昨年度よりもさらにオンライン予約が増加している。オンライ予約システム稼働から 7 年を経て、かかりつけ医（地域の主治医）の先生方に各種画像診断をインターネットで 24 時間いつでも予約できるシステム（地域医療連携システム）の利便性がさらに浸透していると思われる。電話でお待たせすることなく、土日・祝日を含む時間外にも検査内容の選択、患者情報などの入力だけで予約が可能なオンライン連携システムを無料で地域の医療機関に提供させていただいており、今後の活用幅の広がりが一層期待される。

（4）画像診断報告書

・放射線診断専門医による画像診断報告書の重要性は日々高まっている。

・CT 報告書作成率：97.3%、MRI 報告書作成率は 97.0%（報告書作成中を含めるとほぼ 100%）である。

3　研究教育活動

徳丸は、東邦大学佐倉医療センター放射線科客員教授、帝京大学医学部非常勤講師として大学院、および医学部生に対し神経放射線診断の基礎及び応用の講義を行い、また多施設共同研究において、認知症、進行性核

上性麻痺、皮質基底核変性症など早期診断研究に供される MR 画像の中央診断に関与している。神経病理学会関東地方会神経画像コンサルタント、日本神経放射線学会評議員、NR 懇話会世話人、日本神経放射線学会倫理委員会委員長、日本神経放射線学会特任理事等。

高田は、帝京大学での臨床研修医への臨床画像の丁寧な教育など臨床教育、帝京大学との共同研究に力を発揮している。

鈴木は global neuro CPC での画像のプレゼンを行い、病理スライドカンファレンスや消化器キャンサーボード、呼吸器キャンサーボードなどへの出席している。

4　その他

放射線診断科は、病院のスタンダードを守る砦であり、一同そのスタンダードレベルを上げることに腐心してきた。重点医療のがん診断における画像診断の意義は大きく、できるだけ遅滞なく検査を施行し、また翌診療日までに診断レポートを提出することに努めている。さらに、最新検査機器を育て、十全に機能させることにまい進したい。

画像検査の重要性が増すとともに検査依頼件数の増加は著しい一方、対応する機械・人員には限界があり、予約待ちの増加が課題となっており、常勤技師、放射線科専門看護師、常勤医師の増員が課題となる。令和 5 年度からは東京大学医学部放射線科より新たな診療科長と常勤医師を迎えた。また子育て中の女性医師が在宅勤務できる環境を整備した。その結果、読影に必要な人材がある程度確保され、画像診断管理加算 2 を 2023 年 10 月から取得することができるようになった。画像診断管理加算 2 は病院にとって重要な収入源でもあり、今後も維持できるように今後も常勤医、非常勤医を確保したい。

認知症の診断において CT や MRI による脳形態画像や核医学検査による脳機能画像は欠かせないものとなっている。認知症を早期に正確に診断することは、適切な治療や介護、看護などの介入につながり、患者の予後や QOL を高める上できわめて重要である。日々進歩を続ける画像診断の最新の知見を学び、各診療科に適切な診断技術を提供することが、本院放射線診断科の役割である。

放射線治療科

部長　角　美奈子

１　人員体制

〈部長〉　角　美奈子

２　診療活動・実績

■診療実績　（　）内の数字は前年実績

令和５年も施設基準が満たされ放射線治療料の 10 割保険請求を維持できる。放射線治療専任加算（330 点）、外来放射線治療加算（100 点/日）も維持できている。

年間のべ治療患者数は、高エネルギーＸ線：1,414 人（1,641 人）、5,487 件（6,939 件）、高エネルギー電子線：0 人（73 人）、0 件（73 件）、放射線治療管理料：115 例（125 例）であった。

令和５年の放射線治療症例数は 115 例（129 例）と、感染症の影響を受け減少した。新装置への更新により可能となった画像誘導放射線治療を、X 線治療症例の全例で実施している。

患者の年齢は、80～89 歳は 38 例（45 例）、90 歳以上は 6 例（13 例）であった。

高精度放射線治療は、定位放射線治療２例（脳１・肺１）、強度変調放射線治療９例（前立腺６・脳３）で応用した。

緩和的放射線治療においては骨転移に対し８Gy/１回照射を 20 件（20 件）で実施した。

高精度放射線治療は、定位放射線治療及び強度変調放射線治療ともに、精度管理技術が向上し、治療計画より治療開始までの期間が短縮している。

３　研修・教育活動

松井技師は放射線治療専門放射線技師及び放射線治療品質管理士に認定されている。角医師は日本放射線腫瘍学会・日本医学放射線学会の放射線治療専門医及び日本医学放射線学会研修指導者として認定されている。

城西放射線技術専門学校、東京電子専門　学校・診療放射線学科、日本医療科学大学・診療放射線学科の学生に、放射線治療に関し教育実習を行っている。

４　その他

東京都がん診療連携協力病院に認定されており（平成 28 年４月１日～）、放射線治療を提供している。

隣接する豊島病院と連携し放射線治療装置の精度管理について、情報交換を行った。

表　放射線治療症例数

	2021	2022	2023
治療患者数	72 例	129 例	115 例
治療件数	83 件	144 件	129 件
年齢			
80～89 歳	27 例	45 例	38 例
90 歳以上	5 例	13 例	6 例
緩和的放射線 治療例数と件数	46 例 57 件	97 例 112 件	88 例 99 件
高精度放射線治療			

定位照射	1	5	2
IMRT	3	15	9
症例の原発部位			
肺	24	46	27
乳腺	7	7	9
血液	10	7	15
消化管/器	11	21	35
頭頸部	6	9	4
泌尿器	8	27	15
皮膚	2	6	1
その他	4	6	9

臨床検査科

部長　増田　義重

1　人員体制

〈部長〉増田義重
〈専門部長〉新井冨生（病理診断科部長兼務）
〈技師長〉佐藤芳雄
〈副技師長〉太田和志
〈生理機能部門〉清水優、高梨大輔、夏目采、河野ますよ、前田哲平、釜井愛、猪股香奈恵、大川久枝、奥野恵子、小野秀子、小林敬翔、井上美香、倉部美奈、長谷川侑、塚越茉咲、門屋雅大
非常勤：吉村由香子
〈検体検査部門〉岩澤大地、猪股聡史、高山紗桜理、今井伶佳、加藤彩奈、山岸夕夏、白戸琳
非常勤：菅原由美、川原雄太
〈細菌検査部門〉浅見諒子、野口穣、古川友子、東條未希、脇谷美弥子
〈採血室〉矢作和規、小林夕季
非常勤：藤宮真奈美、倉持恵美子、田中真理子、森田千絵
看護師：高橋晴美、櫻井英利子、野本宏美、今綾子
令和5年度は非常勤１名採用、短縮勤務3名
当直に関しては、輸血・細胞療法科所属の臨床検査技師2名と協力して行っている。

2　診療活動・実績

技師長・係長・主任を中心に生理機能部門・検体検査部門・細菌検査部門で相互に協力して、日常業務を行った。
検体検査部門は診療支援部門として、365日24時間体制の緊急検査の報告時間短縮、安全対策、検査精度の向上など業務改善を実施している。検体受付から報告までの工程管理を強化し、TATの短縮に貢献できるようにした。検査総件数は520，774件であり、外来の採血業務が59，641件と１割程度を占めていた。
肝線維化のマーカーとしてFIB-4 Indexの項目を追加し、自動計算で電子カルテの結果に併記した。
生理機能部門においても定期的な内部勉強会を実施し、検査技術と知識的部分の向上を図っている。
細菌検査部門では、新型コロナウイルス感染症の検査として、Filmarray Torchシステムおよび TRC装置・GENE CUBE装置でPCRはすべて検査室内で実施し迅速な結果報告を行った。令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症になったこともあり10月より入院前PCR検査がなくなり、また入院時の呼吸器PCRの検査も全件ではなく有症状時になり検査数は減少している。令和5年度に院内で実施したPCR＋抗原検査件数は12,592件であった。

患者サービス向上では、患者に不愉快な思いをさせない接遇を心がけている。生理検査部門と外来採血室においては待ち時間短縮と患者間違い防止に注力し、各職員の技術向上に努めている。また、混雑時の応援体制の強化と非常勤職員を採用し、待ち時間に対する患者クレームに対応した。

生理検査として脳神経内科医による神経筋超音波検査の予約枠を木曜日午後に設定した。

チーム医療として、生理検査部門はハートチームの一員としてカンファランスに参加し、TAVI術中エコーへの参画、臨床側と積極的に連携して検査を行っている。脊椎手術の術中神経モニタリングを行った。
細菌検査部門ではFilmarray Torchシステム活用して検査を迅速化しICT/ASTに積極的に参画している。
薬剤科、栄養科とともにNSTにも参画している。
若手の女性の多い職場であり、産休/育休/短縮勤務による人員の減少への対策を考慮していく必要がある。

3　研修・教育活動

ベテラン職員による若手技師への技術指導と知識の向上など人材育成にも力を注ぎ、各職員が認定資格取得を目指して研鑽している。部門内でも勉強会/Web講習会に積極的に参加している。また、各学会や研修会に参加できるよう勤務調整を行っている。
3校より4名の実習生を受け入れ、研修指導も行った。初期研修医の超音波研修も3名受け入れている。
技師1名が認定臨床微生物検査技師及び感染制御認定臨床微生物検査技師（ICMT）の資格を取得した。

病理診断科

部長　新井　冨生

1　人員体制

〈部長〉新井冨生〈医長〉六反啓文〈医員〉小松明子〈後期研修医〉永坂拓也、神野聖也〈非常勤医師〉熊坂利夫、坂本 啓、倉田盛人、市川一仁〈技師等〉鈴木明美、白幡浩人、江坂四季音、中島裕理、永田絵美、仁科春香、長谷川菜月、満木 亮、緑川広紀〈非常勤技師〉長谷川康子〈非常勤事務〉岸 律子、山口あいり

2　診療活動・実績

■生検・手術、細胞診、術中迅速検体、免疫染色、電子顕微鏡検査

検査種類	令和４年度	令和５年度	対前年度	対前年度比
生検・手術検体	2,641	3,007	+366	113.9%
細胞診	1,596	1,549	−47	97.1%
術中迅速	79	134	+55	169.6%
免疫染色	832	873	+41	104.9%
電子顕微鏡	18	26	+8	144.4%
検査中迅速（細胞診）	9	12	+3	133.3%
術中迅速（細胞診）	43	94	+51	218.6%

■病理解剖の実績

	令和４年度	令和５年度	対前年度	対前年度比
解剖数	56	48	−8	85.7%
院内剖検率	9.8%	9.0%	−0.8%	91.8%

■慰霊祭

令和4年度病理解剖例を慰霊する目的で、センター3階第3会議室で令和5年10月3日に慰霊祭が執り行われた。

3　研修・教育活動

（１）研修医・細胞検査士の教育体制

当センター病理診断科は日本専門医機構から基幹病院として承認されている。「東京都健康長寿医療センター病理研修プログラム」に専攻医１名を受け入れ、研修を開始した。現在2年目の専攻医1名と合計2名が研修中である。また、細胞検査士の資格を習得すべく、検査技師1名が研修中である。

（２）剖検のカンファレンス

オルガンコントロールを28回（第1595～1622回)、スライドカンファレンスを31回（第1821～1851回）実施した。

（３）臨床病理検討会（CPC)

CPCを10回（第866～875回）開催した。10回のCPCには、RCPC（reversed CPC)１回が含まれる。

（４）キャンサーボード

胃癌・大腸癌(12回)、肺癌(12回)、前立腺癌(12回)に対するキャンサーボードを関係する部署と開催した。

薬剤科

科長　島﨑　良知

1　人員体制

常勤薬剤師31名※、非常勤薬剤師7名（5.14名）、非常勤事務員5名（3.6名）により運営した。
※産休育休3名、時短勤務1名含む

2　診療活動・実績

（1）調剤

外来院内処方箋取扱枚数は3,954枚（前年度比14.5%減）、院外処方箋発行率は96.3%（0.3%減）、入院処方箋は89,501枚（同1.7%増）であった。看護業務の負担軽減を目的とした内服定期処方配薬セットは継続して行っている。注射調剤（個人セット）は89,501枚（同0.9%減）であった。

（2）薬剤管理指導・病棟薬剤業務

薬剤管理指導料算定件数は、特に安全管理が必要な医薬品（ハイリスク薬）が使用されている患者（380点）が6,112件、それ以外の患者（325点）が6,613件の合計12,725件（前年度比9.9%増）であった。コロナ禍に係る病床稼働率の低下、退職や産休育休などの職員数減少、個別指導対策における過度な算定件数の見直しなどで件数の減少を予想していたが、先を見据えた業務の見直しやフレキシブルなシフト変更などで増加に転じており、中央部門・病棟部門などがうまく連携できた結果といえる。また、年度末は退職者の有休休暇取得などによる人員減少が著しかったが、中途入職者や周囲のサポートから労働衛生を確保しながらの業務維持を行うことができた。一方で、今後職員の産育休などが増加することが予想され、予断を許さない状況は続くため、それらを見据えた対策を今後も継続していきたい。高齢診療科と協働したポリファーマシー活動については地域包括ケア病棟を中心に継続して取り組んでおり、薬剤総合評価調整加算の算定も徐々に増加傾向にある。

（3）医薬品安全管理

医薬品の安全管理対策として、令和5年度疑義照会件数は761件で僅かな減少となったが、重要な事例については、日本病院薬剤師会へプレアボイドとしてほぼ例年通りの268件を報告した。薬剤科の疑義照会については日々業務の中で見えにくい部分であるが、重要なミスを未然に防ぐ努力を積極的に行っていることは評価できる。安全対策の取り組みとしてガイドライン変更になった血管外漏出時の対処方法、アレルギー薬剤の見落としなどについて医療安全と協働し周知を図るとともに、造影剤投与マニュアルの作成に関与した。

ハイリスク薬及び規制医薬品適正使用の推進及び適正な在庫管理を目的とした医薬品安全管理点検業務を毎月１回実施した。加えて、薬剤師がICU及び手術室、救急外来、透析室、検査科、内視鏡科へ出向き、麻薬、毒薬及び向精神薬などの重点規制医薬品の補充及び使用実績の確認業務を行い、適正使用はもとより盗難・紛失など病院運営に影響を及ぼすような事例防止に取り組んだ。

（4）医薬品管理

令和5年度末の採用医薬品数は1,717品目であり、前年度より39品目増加した。年間出庫金額は薬価ベースで17億1,850万円、前年度比5.0%の減少であった。今年度の品目数増加については、近年、新作用機序薬剤の上市が相次いでいることや、それに替わる薬剤の削除が事実上困難であることが要因と考えられる。一方、出庫金額の減少については、後発医薬品への継続的な切り替えが一定の効果を上げたともいえるが、全体的な患者数の減少が主な要因と考えられる。

（5）医薬品情報（DI）

医薬品情報の提供は、毎月の薬事委員会結果報告、院内副作用情報、隔月発行の薬局ジャーナルなどを通じて各部署へ行っている。近年、継続する医薬品供給調整問題への対応に追われているが、急性期病院で治療が困難になる事態を回避するべく、取り組んでいる。

（6）無菌製剤（抗がん剤混合調製、TPN及び末梢点滴の混合調製）

抗がん剤の混合調製は、外来及び全病棟の全患者に休祭日を含めた全日を対象に行っている。全病棟を対象にしたTPN混合調製業務及び11階西病棟の末梢点滴の混合調整は平日を対象に行っている。

（７）外来がん患者指導業務

がんに係る認定薬剤師の養成を目標に資格支援などを充実させてきた結果、年度末に4名が合格した。令和5年度も薬剤師による外来腫瘍化学療法診療料1に係る連携充実加算などの算定を目指し、効率的に運用できるよう日々工夫している。化学療法における患者サービス向上の取り組み（今年度は消化器内科と協働）を開始した。医師、薬剤師、栄養士などの「ケモカンファ」で抗がん剤レジメンを決定した後、次の外来で医師の説明が行われ投与が決まれば、直ちに薬剤師がレジメンの説明や総合機能評価を実施し、入院に備えることとした。このような薬剤師の主体的な取り組みは、患者サービスの向上のみならず、医師の業務軽減にも寄与していると考えられる。

（８）個別指導・適時調査への対応

過去に個別指導を受けた経験を踏まえ、薬剤科では薬剤管理指導料や退院時薬剤情報管理指導料の記録を定期的に見直し、注意喚起してきた。また、必要な記載事項はテンプレート化されており、未記載の防止に努めた。さらに、個別指導ワーキンググループなどから得た病院からのアドバイスや注意事項を科内で共有してきた結果、今回の薬剤科の服薬指導記録記載には不適切な点が少なく、診療報酬の返戻リスクは低いと考えられる。これは科内職員の努力の成果である。

３　研修・教育活動

（１）長期実務実習受け入れ

令和４年度は職員数の大幅な減少により学生の受け入れを停止していたが､今年度は受け入れを再開している。人員が不足する中で対応に苦慮することもあるが、薬剤師の育成や病院収入への貢献が必要である。

（２）各種認定取得について

令和5年度末現在の主な認定取得状況は、

NST専門療法士4名、日本糖尿病療養指導士3名、老年薬学会評議員1名、老年薬学指導薬剤師1名、老年薬学認定薬剤師3名、認定実務実習指導薬剤師6名、日本病院薬剤師会認定指導薬剤師2名、日病薬病院薬学認定薬剤師17名、日本臨床薬理学会認定CRC1名、がん薬物療法認定薬剤師2名、外来がん治療専門薬剤師1名、外来がん治療認定薬剤師5名、感染制御認定薬剤師3名、抗菌化学療法認定薬剤師3名、精神科薬物療法認定薬剤師2名、骨粗鬆症マネージャー4名、心不全療養指導士2名、腎臓病薬物療法認定薬剤師2名、管理栄養士1名

となっている。

４　その他

チーム医療への参画

栄養サポートチーム（NST)、感染制御チーム（ICT)、抗菌薬適正使用支援チーム（AST)、緩和ケアチーム（PCT)
精神科リエゾンチーム（PLT)

（文責：科長　島﨑　良知）

栄養科

科長　羽根田　千恵

１　人員体制

〈科長〉羽根田千恵

令和５年度は、常勤８名、非常勤５名で運営した。

２　活動内容・実績

臨床栄養管理推進と患者サービスの向上を図ることを目的に、治療食の調整等食事療養業務、入院時の臨床栄養管理及び栄養食事指導に努めた。

（１）栄養食事指導

個別指導は、入院及び外来患者とその家族を対象に実施し、入院747件、外来2790件の計3537件で前年度に比較して324件減少した。対象疾患は、糖尿病が1723件49%と最も多く、心臓・高血圧症、腎臓病の順であった。令和2年度より開始した化学療法室にて化学療法中に行う指導も含めてがん疾患に関する栄養指導が件数を伸ばしている。集団指導は、衛生環境に配慮しながら、糖尿病の教育入院を継続し、176名が受講した。令和５年度からは外来患者を対象とした糖尿病教室も年３回の開催となった。

（２）治療食の調整等入院時食事療養業務

１日当たり給食数は938食であり、内訳は、一般治療食415食（44%）、特別治療食522食（56%）であり、前年度と同様、特別食の割合が高かった。特別治療食の内訳では、食塩エネルギー調整食が21.8%と最も多く、２番目が嚥下調整食15.2%だった。当センターでは、誤嚥の心配な患者割合が多く、嚥下調整食の必要性がある患者が増加している結果であろう。きざみやブレンダーなどの再加工食は、総食数の29.4%を占め、患者の病状や嗜好等に配慮した禁止・個別対応食は、37.8%となった。低栄養患者への早期介入を行い、個別の患者対応を行うことが必要エネルギー量・たんぱく質量を充足することに繋がると考え、取り組みを行った結果と考える。

また、調理業務受託会社の契約は今年度が最終年度となり、来年度の受託業者を複数業者によるプロポーザルにて選定し、契約内容の見直しも併せて行った。

（３）臨床栄養管理について

入院患者へ、医師、看護師と共に栄養状態等の評価を行い、必要栄養量・食形態を個別に考慮した「栄養管理計画書」を作成し、栄養改善が必要な患者には、病棟担当の管理栄養士が医師や看護師と連携して栄養管理の提案を行った。また、禁食中の患者に対して摂食嚥下機能に即した経口摂取開始のためのフローチャートを作成し、啓蒙活動を前年度に引き続き行った。この結果、禁食率は15.1%と低割合を維持することができた。

チーム医療の取り組みとして、ＮＳＴ回診総件数は297件であった。嚥下評価、必要栄養量の評価、食事の内容や形態、経管栄養剤の調整がＮＳＴの主な提案内容であり、エネルギー及びたんぱく質の充足率をアップさせ、治療に貢献できるように取り組みを行った。

ＩＣＵと取り組みを行っている早期栄養介入加算は算定対象者が拡大となり算定件数は1057件となり、新たに544人の介入を行った。

３　研修・教育活動

（１）研修

高齢患者を中心とした臨床栄養管理が実践できることを目標に局研修・各種学会研修などに参加した。

（２）各種認定取得

令和５年度末の主な認定取得状況は、日本糖尿病学会認定糖尿病療養指導士７人、日本臨床栄養代謝学会栄養サポートチーム専門療法士５人、日本病態栄養学会認定管理栄養士５人、日本病態栄養学会認定がん病態栄養専門管理栄養士５人、災害支援チーム（JDA-DAT）１人となっており、今後も、専門・高度化する臨床栄養に対応する人材を養成し、治療に貢献していく。

（３）実習生の受け入れ

大学院生（臨床研究）１大学２グループの受け入れ、臨地実習訓練生２大学２グループの研修を行った。

４　その他

当センターの患者は、平均年齢が78歳の急性期高齢者であり、原疾患による栄養調整はもとより、合併症や加齢による摂食嚥下問題を有する患者も多い。病棟担当管理栄養士が、カンファレンスの参加やラウンドを行うことにより患者の病態把握に努め、適切な時期に食事内容や形態の提案を行えるよう体制を強化し、継続している。

さらに元年度からは、患者や家族及び退院後の行先に入院中の食事内容の説明を文書化した食事情報提供書を作成し、退院後の栄養管理に繋がるよう取り組みを開始した。

緩和ケアチーム、ＩＣＵとの早期栄養介入加算などの新たなチーム医療の取り組みも継続して行っている。今年度は、ＳＣＵ病棟への早期栄養介入を移転後の増床に合わせて試行を開始し、令和６年度４月より算定開始予定で準備を進めている。

また、今年度は麻酔科と協力し、術前の患者に対しERAS®効果の期待がある食品飲料を提供する取り組みを10月から開始した。患者の禁食期間を減らし、患者からの好評も得ている。

今後とも、多職種と連携し、管理栄養士が中核となって患者の栄養管理に取り組み、発展させていきたい。

臨床工学科

部長　時村　文秋

１　人員体制

〈部長〉副院長　時村文秋〈技士長〉高岡祐子〈主任技術員〉本田博一・小澤直人
〈主任〉新谷剛・和田智至・村野井一樹・柴村真希・金澤佑樹
〈主事〉若杉卓矢・梶真悠子・玉田史織・鉄春香・石田みのり・山中健司・山内楓・廣瀬郁弥・郡司益徳
４月に廣瀬郁弥、郡司益徳が入職、１月に休職していた石井正晃が退職、３月末の時点で、常勤１７名。
（内障害者枠技士２名）

２　診療活動・実績

１）新規業務　内視鏡管理

内視鏡医師より業務補助依頼があり、タスクシフトの一環として内視鏡業務治療に対して診療補助業務開始、８月からは当直者可能者へのトレーニングを行い、夜間緊急内視鏡時の業務補助を行えるようにローテーションを実施。3月から当直者が夜間内視鏡業務に関与開始した。

２）当直体制

髙岡を含む１０名で１直２勤務体制当直を実施。夜間帯は特定集中治療室（ICU）での血液浄化・補助循環管理、病棟での機器トラブル対応、緊急心臓カテーテル業務、内視鏡関連業務、EMコール対応を行っている。オンコール者を毎日１名配置し、緊急手術や特殊治療対応などの複数名必要とする業務も安全に務められるように配慮している。

３）透析センター

現在１７床（内１床は陰圧室)、月～土曜日の午前・午後２クール制。腹膜透析の患者も受け入れしている。ICUでの血液透析治療をはじめとした血液浄化業務や病棟依頼の腹水濾過濃縮業務なども透析センタースタッフが実施し、透析患者入れ替え時間には他部署スタッフが応援することで、最小限の人員配置で治療サポートをおこなっている。土曜日についても4～5名体制で出勤し、安全な透析治療提供をおこなっている。

４）末梢血幹細胞業務

血液内科依頼の骨髄バンクドナーを含む末梢血幹細胞採取業務を血液内科病棟で実施している。２名が病棟へ出張し、医師の指示のもと採取業務に従事している。

５）手術室・ICU補助循環業務

手術室では人工心肺業務時は３名体制とし、手術室内の機器トラブル対応可能者を１～２名で従事させている。玉田が体外循環認定士を取得したことで人工心肺操作可能者が5人となり、夜間緊急対応へ充実が図れた。

TAVIについてはハートチームの一員として、臨床工学技士３名が関与し、医師補助業務を実施。

ICUでのIABP、IMPELLA、ECMOなどの補助循環業務時において、準備から維持管理まで医師・看護師と連携対応および、スタッフ教育を実施することで緊急治療時に迅速対応できるように努めた。

６）血管造影室業務

心臓カテーテル業務には１名でポリグラフの操作、血管内超音波IVUS、光干渉断層法OFDI、心臓カテーテル治療デバイスはエキシマレーザー治療やダイヤモンドバックなど様々な治療機器の操作補助を担っている。
今年度はカテーテル治療のためのトレーニング者が続いたため、2名体制で関与している。

７）不整脈治療

不整脈治療ではアブレーション治療装置の操作、恒久的ペースメーカ植込み、手術患者の植込みペースメーカモード変更対応、院内・外来患者データーcheck、MRI撮像時の立会など幅広い業務対応を行っている。また遠隔モニタリング管理も、現在5機種に対応し、遠隔データーの定期的な監視による医師業務負担軽減やメーカー立合い件数を減らせるよう努めている。

８）血管外科業務

IVUS操作や、炭酸ガス造影、EVT治療、下肢バイパス術などについては予定外業務依頼が多く、技士1名が業務対応できるような勤務体制を整えている。

９）MEセンター業務

中央管理機器の貸出・返却・保守・点検、院内すべての修理の一元管理している。在宅持ち込み患者機器についても毎日１日１回のラウンドし、転院サポートで搬送同行を行っている。特に、点検・修理業務については適正修理となるように実施および監視することで、事務部の業務負担軽減を担っている。移設後10年が過ぎ、院内における医療機器更新計画について適正な機器運用となるようサポートをおこなっている。

３　次年度にむけた体制

内視鏡業務については日勤帯の検査室業務への人員配置および、引き続き夜間緊急対応への当直者介助業務教育を実施。

技士のライフワークバランスに合わせた業務体制の検討が必要となっており、各部署の業務の見直しおよび複数部署の兼務体制が行えるように指導していく。

医師からの業務依頼が増えている。優先順位を検討しながら拡大できるようにすすめていく。

高齢者バイオリソースセンター

部長　齊藤　祐子

1　人員体制

〈部長〉齊藤祐子（本務　研究所神経病理学研究部長）
（医師）村山繁雄（同上　常勤特任研究員、クロスアポイント：大阪大学大学院連合小児発達学研究科ブレインバンク・バイオリソース部門）
〈臨床心理士〉小幡真希
〈臨床検査技師〉古賀裕
　この他、非常勤研究員または兼務として約10名が活動している。バイオリソースセンターは、脳神経内科、放射線科、研究所テーマ神経病理学、臨床画像と密接に連携している。

2　診療活動・実績

　当センターにおける開頭剖検に加わり、研究所神経病理部門と協力し、半脳・脊髄・末梢神経・筋の凍結を原則として死後脳・脊髄・末梢組織リソースの蓄積と、生前臨床情報、PETを含む画像、体液バイオマーカーとの紐付けを継続した。当施設神経病理診断は、国内外で一流の評価を得ている。蓄積したバイオリソースは、高齢者ブレインバンクを通じて医学研究のために役立てられた。高齢者ブレインバンクでは、学術変革領域研究コホート・生体試料支援プラットフォーム（http://cohort.umin.jp/）のホームページより、リソースを希望する研究者からの申請計画を常時受け付けている。申請計画は、各施設における倫理審査承認を前提とし、守秘義務下の学術審査として、日本神経科学ブレインバンクネットワーク構成施設責任者の一次審査、外部学術委員による二次審査承認後、健康長寿倫理委員会迅速審査承認を経るプロセスを踏む。利用希望者の要望に最適なリソース提供を目的に、インターネットカンファレンスを行う。令和5年度のバイオリソース共同研究数（高齢者ブレインバンクを含む）は54件と増加した。原著英文論文は合計19件であったが、今年度は、我々が主導して執筆した論文が５本と多かった。
　欧米のブレインバンクは脳だけの蓄積であるのに対し、本邦では全身剖検を前提とするため、脊髄、末梢臓器の部分凍結も貴重な試料となる。髄液、血清についても蓄積を継続し、認知症に関連するサロゲートバイオマーカー検査結果と紐付けしてデータベース化することで、バイオバンク構築を継続した。
　高齢者ブレインバンク生前献脳事前登録のため、治験と同様責任者が説明を行い、常勤臨床心理士がコーディネーターとして同意取得を行った。高齢者ブレインバンク生前同意事前登録者は2023年度までに累積274名（年間平均20例）と、年間29名の増加となり、依頼元病院や医師の幅も広がっており、アウトリーチ活動の成果である。死亡後剖検し、高齢者ブレインバンクに本登録した数の累計は10名増加し、114名となった（2016年度以降年間10例を超える年度が増えている）。
　ブレインバンク事業を全国規模に拡大するため、高齢者ブレインバンクを中核とする日本ブレインバンクネットワークの構築を進めており、東京大学、大阪大学をはじめとする国立大学、ナショナルセンター、国立病院機構の協力を得ている。生前献脳同意登録者の死亡時、ブレインバンク本登録支援に、日本の各地に拠点を形成するために出張支援を行うことで、オールジャパン体制の確立に貢献できた。

3　研修・教育活動

　病院脳神経内科、研究所神経病理部門と共同で、毎週剖検例についてブレインカッティング、および臨床病理検討会（CPC）を行っている。双方とも、大阪拠点と相互配信を行い、ディスカッションを通して、若手医師の診療レベルの向上と、神経病理学的診断のトレーニング、診断精度管理を行っている。
　また東京大学をはじめ、全国の連携大学院生および研究生を多数受け入れ、教育的指導を行っている。
　2020年度から、症例のディスカッションを対面で行う機会が皆無となったことを受け、2022年度から、若手脳神経内科、精神科、リハ科、放射線科の教育を目的として、高齢者ブレインバンクリソース構築支援・運用・研究支援者を対象とし、”Global Neuro CPC”を月一回開催し、個人情報保護を徹底しつつ全国にWeb配信し、11回実施した。累計33回行い、参加数も全国レベルであり、増加している。
　国内学会として、日本神経学会総会、日本神経病理学会総会、日本認知症学会、TOBIRA等において広報活動を行い、リソースを用いた研究発表を支援した。国際学会としては、国際アルツハイマー会議、米国神経病理学会に高齢者ブレインバンク年次活動報告を行った。

4　その他

　本邦唯一のブレインバンクとして、国際的知名度を高める努力に加え、今後さらに精進していく予定である。

認知症支援推進センター

センター長　井藤　佳恵

1　設置目的

認知症支援推進センター事業は、東京都から委託を受け、以下の事業を実施するために設置された組織である。（平成27年4月1日設置、8年度目）

Ⅰ 医療従事者等の認知症対応力向上

1）認知症疾患医療センターの円滑な活動支援
- 認知症疾患医療センター職員対象の研修の企画運営
- 地域拠点型認知症疾患医療センターが実施する研修の教材の作成

2） 認知症サポート医等を対象の研修の企画運営

3） 医療従事者を対象の研修の検討会の主催

Ⅱ 区市町村の認知症対応力向上支援

1）区市町村における認知症支援の指導者養成
自治体職員、地域包括支援センター職員等を対象とした研修の企画運営

2）島しょ地域等の認知症支援体制の構築支援
- 島しょ地域の認知症対応力向上研修
- 認知症医療サポート事業

専門職対象からの認知症の医療・介護・福祉に関する相談応需
認知症初期集中支援チームの活動支援

2　人員体制

センター長：井藤佳恵（医師研究員）
研究所福祉と生活ケア研究チーム研究部長（本務）、認知症疾患医療センター副センター長兼務
副センター長：古田光（医師）
精神科部長（本務）、認知症疾患医療センター長兼務
事務員：常勤２人（総務課からの出向）、非常勤４人（月 5～20 日勤務）
専門職：常勤２名
精神保健福祉士（認知症疾患医療センター、精神科兼務）畠山啓
臨床心理士（本務は精神科心理士）高岡陽子
非常勤１名
看護師（研究所協力研究員兼務）小野真由子

※島しょ地域等認知症医療サポート事業及び島しょ地域の認知症対応力向上研修の実施については認知症疾患医療センターの職員等と連携して実施した。

3　活動内容・実績

①研修

1） 東京都認知症サポート医等フォローアップ研修（全 4 回、受講者数のべ 726 人）
対象：都内で活動する認知症サポート医、受講希望があったかかりつけ医

東京都認知症サポート医等フォローアップ研修					
回数	開催日時 配信時間	開催形式	研修タイトル 講師	受講者数（人）	役割
第1回	6.10（土） 15:00～16:35	オンライン	①認知症サポート医に期待される役割 東京都健康長寿医療センター　井藤　佳恵 ②板橋区における認知症対策：とくに初期集中チームの活動について- 吉野内科クリニック 院長　吉野　正俊 ③臨床お役立ちコンテンツ～社会資源の知識を整理しよう～ 経済支援（福祉事務所と生活保護制度を中心に） あべクリニック　近藤康寛	247	企画（井藤佳恵） 運営事務局
第2回	8.5（土） 15:00～16:35		①認知症初期の人と家族を地域で支援する診療所：本人のwell-beingを支える共生の視点から 東京都健康長寿医療センター研究所　津田　修治 ②臨床お役立ちコンテンツ～社会資源の知識を整理しよう～ 認知症者の生活支援　介護保険サービス編 居宅介護支援事業所ハピネスケア大山 下谷内　ふじ子	221	企画（井藤佳恵） 運営事務局
第3回	10.14（土） 15:00～16:35		①成年後見制度は高齢者の人権を守るか？ 東京都立松沢病院　齋藤　正彦 ②「共生社会の実現を推進するための認知症基本方」の成立を受けて 東京都健康長寿医療センター研究所　粟田　主一	221	企画（井藤佳恵） 運営事務局
第4回	2.17（土） 15:00～ 17:10	会場 （ベルサール新宿グランド）	①いわゆる高齢者困難事例について多角的な視点で考える （グループワーク研修） 東京都健康長寿医療センター 井藤　佳恵	39	企画（井藤佳恵） 運営事務局
				728	

2） 認知症地域対応力向上研修（全 3 回、受講者数のべ 489 人）
対象：都内で認知症の保健・医療に携わる専門職および自治体職員

認知症地域対応力向上研修					
第1回	5.31（水）－6.11（日） 配信	オンライン	①DASC研修 東京都健康長寿医療センター　井藤　佳恵	395	企画（畠山啓）、運営
第2回	7.14(金) 14:35 ～16:35	オンライン	①「8050問題！～事例を元に考える～」 グループワーク研修 医療法人社団心清会・心翠会　作間　聡	47	企画（畠山啓）、運営
第3回	9.8(金) 14:35 ～16:35	会場 （ベルサール新宿グランド）	①「8050問題！～事例を元に考える～」 グループワーク研修 医療法人社団心清会・心翠会　作間　聡	47	企画（畠山啓）、運営
				489	

3） 東京都認知症疾患医療センター職員研修（全 2 回、受講者数のべ 73 人）
対象：都内の認知症疾患医療センター（52 か所）の職員

東京都認知症疾患医療センター職員研修					
基礎編	5.26(金) 15:00～ 16:40	オンライン	①医療者のための認知症はじめて講座【病気とくすり編】 東京都健康長寿医療センター古田 光 ②医療者のための認知症はじめて講座【ケアとサポート編】 東京都健康長寿医療センター髙岡 陽子、福田 美都子 ③東京都の認知症施策と認知症疾患医療センターの役割等について 東京都福祉保健局高齢社会対策部在宅支援課 中島有望 ④グループワーク 認知症疾患医療センター職員研修内容検討会委員	35	企画(畠山啓) 運営事務局
応用編	10.27(金) 13:25～ 17:00	会場 (ベルサール新宿グランド)	①講義:認知症基本法と東京都認知症疾患医療センターの10年と未来へのメッセージ 東京都健康長寿医療センター研究所 栗田 主一 ②シンポジウム:私たちの10年、これからの10年:認知症疾患医療センター職員として取り組んだ10年を振り返る シンポジスト 東京江東高齢者医療センター 矢村 圭介 平川病院 椎名 貴恵 桜ヶ丘記念病院 山田 悠佳 あべクリニック 近藤 康寛 ③困難事例の支援策を本気で検討する 東京都済生会中央病院 川端 奈緒 浴風会病院 髙橋 三紀子 ④グループワーク 多摩平の森の病院 林 直哉 豊島長崎クリニック 木明 大樹 東京都健康長寿医療センター 齋藤 久美子	38	企画(畠山啓) 運営事務局
				73	

4） 東京都島しょ地域等認知症対応力向上研修（４島１町３村）
対象：島しょ二次保健医療圏の専門職。島しょ二次保健医療圏を構成する 9 町村を、 各年度３町村を訪問する。訪問しない年は希望に応じてオンライン研修を行う。

東京都島しょ地域等認知症対応力向上研修					
青ヶ島村	12.21～12.22	会場 (青ヶ島村役場)	・関係者ミーティング ・研修 ・高齢者の精神疾患について 東京都健康長寿医療センター 古田光	7	企画運営
御蔵島村	11.9～11.10	会場 (御蔵島村役場)	・関係者ミーティング ・研修 ・認知症予防と備え ・集団療法のススメ方 東京都健康長寿医療センター 高岡陽子	5	企画運営
利島村	9.30～10.1	会場 (利島村地域交流会館)	・関係者ミーティング ・事例検討会 ・研修 ・認知症初期集中支援チーム員研修 ・認知症基礎講座 東京都健康長寿医療センター 古田光 ・認知症とともに生きるために 東京都健康長寿医療センター 畠山啓 ・住民向け相談会(認知症よろず相談会)	18	企画運営
大島町	3.25	オンライン	・研修 ・高齢者の精神疾患について	14	企画運営

5） 東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅱ（全４回、受講者実数 433 人）
対象：都内の病院等に勤務する看護師で、東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰを修了した者

東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅱ					
第1回	【講義】 8.7(月)～8.17(木) 【演習】 8.20(日) ・9:30～12:40 ・14:00～17:10	オンライン	・第1～4回共通プログラム(東京都看護協会作成) 講義 ・認知症のチームケアと情報共有 ・認知症ケアに関する知識 ・認知症の退院調整と地域連携 演習 ・演習A　せん妄に関するアセスメントとケア ・演習B　退院支援計画 ・形式:オンデマンド配信による講義の受講後に、ライブ配信/会場研修にて演習を実施 講師 順天堂大学医学部附属江東高齢者医療センター 浅野　久美子 順天堂大学医学部附属江東高齢者医療センター 佐藤　典子 山田病院　田村　智美 青梅成木台病院　鈴木　俊也 都立荏原病院　平井　薫 都立松沢病院　堀口　法子 東京都健康長寿医療センター　木村　陽子 立川病院　神山　和子 浴風会病院　白川　真千	104	運営事務局
第2回	【講義】 8.21(月)～8.31(木) 【演習】 9.3(日) ・9:30～12:40 ・14:00～17:10	オンライン		105	運営事務局
第3回	【講義】 10.30(月)～11.9(木) 【演習】 11.12(日) ・9:30～12:40 ・14:00～17:10	オンライン		124	運営事務局
第4回	【講義】 11.13(月)～11.23(木) 【演習】 11.26(日) ・9:30～12:40 ・14:00～17:10	会場 (ベルサール新宿グランド)		100	運営事務局
				433	

6） 第 11 回認知症疾患医療センター全国研修会東京大会（全１回、参加者数 707 人）
対象：全国の認知症疾患医療センターに勤務する職員等

第11回認知症疾患医療センター全国研修会東京大会					
(東京都委託業務外)	1.27(土) 10:00～16:10 アーカイブ配信 1.30(火)-2.29(木)	ライブ配信		707	運営事務局

7） その他運営事務局業務（3 種 7 回の研修、受講者数のべ 396 人）
拠点型認知症疾患医療センターにおいて実施が義務付けられている下記研修の運営事務局は認知症支援推進センターで担っている

研修名	回数	開催形式		受講者数合計	役割
東京都かかりつけ医等認知症対応力向上研修	2	第1回 オンライン 第2回 会場			運営事務局
認知症初期集中支援チーム員研修	1	会場			運営事務局
東京都看護師研修Ⅰ		講義 オンライン（配信） 演習 会場			運営事務局
				0	

②島しょ地域認知症サポート事業

島しょ二次保健医療圏の認知症医療サポート事業として、専門職対象からの認知症の医療・介護・福祉に関する相談応需および認知症初期集中支援チームの活動支援を行った。
対象：訪問した３島以外の島の６町村、および中山間地域である桧原村

対象	実施日時	実施形式	実施内容	対応者
大島町	1.24（水） 11:00～12:00	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	認知症支援推進センター 井藤　佳恵、古田　光 脳神経内科 仁科　裕史
新島村	未	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	
八丈町	12.5（火） 11:00～12:00	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	
小笠原村	3.4（月）	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	
神津島村	2.26（月） 10:00～11:00	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	
三宅村	未	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	
檜原村	2.19（月） 11:00～12:00	オンライン	・認知症の診断及び治療等に係る相談 ・初期集中支援チームの活動支援	

③連携協議会、検討会等

研修カリキュラムの検討を目的とした検討会のほか、認知症支援推進センターとして東京都、板橋区の連携協議会に参加した

	会議名	役割	回数/年
1	認知症医療従事者向け支援検討会	主催	1回
2	看護師研修検討会	主催	1回
3	看護師研修カリキュラム検討委員会	主催	3回
4	認知症疾患医療センター職員研修内容検討会	主催	1回
5	地域拠点型認知症疾患医療センター情報交換会（東京都）	オブザーバー（認知症支援推進センター長）	1回
6	認知症サポート医連絡協議会（東京都）	委員（認知症支援推進センター長）	6回
7	認知症支援連絡会（板橋区）	委員（認知症支援推進センター長）	2回
8	認知症初期集中支援チーム検討委員会（分科会、板橋区）	委員（認知症支援推進センター長）	1回

④講演・研修業績　（2023 年 1 月-2023 年 12 月、全 46 回）

認知症疾患医療センターを構成する人員の個人業績を示す（常勤職員は二重線、非常勤職員は一重線を付した）。

【専門職対象】

1. 井藤佳恵. 認知症の基礎知識. 第 2 回歯科医師認知症対応力向上研修; Online: 東京都歯科医師会. 2023.12.11
2. 井藤佳恵. 認知症の基礎知識. 令和 5 年度「成年後見人経験者用セミナー」; AP 市ヶ谷: 公益社団法人後見センター・リーガルサポート東京支部. 2023.12.10
3. 井藤佳恵. 認知症がある人の意思決定への関わり. 令和 5 年度第 2 回かかりつけ医認知症対応力向上研修; ベルサール新宿: 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター. 2023.11.11
4. 井藤佳恵. 高齢者困難事例への対応と地域の課題. 令和 5 年度奥会津医療介護連携セミナー; 福島県会津市三島町町民センター: 福島県立医科大学会津医療センター　奥会津在宅医療・介護連携支援センター. 2023.9.29
5. 井藤佳恵. 認知症等高齢者困難事例について考える –いわゆる”ごみ屋敷”を通してー. 多摩平の森の病院地域連携型認知症疾患医療センター 主催勉強会; 多摩平の森の病院（日野市）: 地域連携型認知症疾患医療センター　多摩平の森の病院. 2023.9.13
6. 井藤佳恵. 高齢期のいわゆる「ごみ屋敷」について～高齢者福祉の視点で考えてみよう. 令和 5 年度第 1 回西多摩地区認知症疾患医療・介護連携協議会; 青梅市ネッツたまぐーセンター（青梅市）: 地域拠点型認知症疾患医療センター　青梅成木台病院. 2023.8.1
7. 井藤佳恵. 認知症高齢者の個別支援：介入困難な家族への対応. 令和 5 年度板橋区認知症初期集中支援チーム員研修; グリーンホール（板橋区）: 板橋区おとしより保健福祉センター. 2023.7.13
8. 井藤佳恵. DASC 研修. 令和 5 年度第 1 回認知症地域対応力向上研修　Online: 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター. 2023.5.31-6.11
9. 井藤佳恵. 認知症高齢者の医療上の意思決定への関わり. 認知症初期集中支援研修会; 豊島区医師会; 豊島区医師会. 2023.3.27
10. 井藤佳恵. 「看取り」へのそれぞれの思い～対話型デスエデュケーション・プログラム～. 社会福祉法人育秀会　3 施設合同研修会; 社会福祉法人育集会; 育秀苑（練馬区）. 2023.3.17
11. 井藤佳恵. 精神疾患が背景にある認知症高齢者の対応と支援. 令和 4 年度板橋区認知症初期集中支援チーム員研修; 板橋区おとしより保健福祉センター認知症施策推進係; グリーンホール（板橋区）. 2023.2.2
12. 古田光. 高齢者の精神疾患について.　令和５年度島しょ地域等認知症対応力向上研修; 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター; 青ヶ島村役場（青ヶ島村）. 2023.12.21
13. 古田光. 認知症に関する知識.　東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ; Online:認知疾患医療センター. 2023.12.15
14. 古田光. かかりつけ医認知症対応力向上研修. 令和5年度第1回かかりつけ医認知症対応力向上研修; 東京都健康長寿医療センター. 認知症疾患医療センター. 2023.11.11
15. 古田光. 認知症に関する知識.　東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ; Online:認知疾患医療センター. 2023.9.15
16. 古田光. 認知症の基礎知識. 令和5年度第1回東京都歯科医師認知症対応力向上研修: Online:東京都歯科医師

会. 2023.8.30
17. 古田光. 認知症に関する知識. 東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ；Online:認知疾患医療センター.2023.8.3
18. 古田光. 認知症に関する知識. 東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ；Online:認知疾患医療センター.2023.6.30
19. 古田光. 認知症の治療について. 豊島区薬剤師学術講演会；Online:豊島区薬剤師会. 2023.6.22
20. 古田光. 地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート（DASC-21).板橋区DASC研修;板橋グリーンホール:板橋区.2023.6.19
21. 古田光. 当院におけるリエゾンチーム活動. 城北リエゾン&スリープセミナー；Online:ＭＳＤ. 2023.5.18
22. 古田光. BPSDの評価と対応. 高齢者実地医家診療Webセミナー；Online :エーザイ. 2023.3.2
23. 古田光. 地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート（DASC-21).板橋区DASC研修;板橋グリーンホール:板橋区.2023.1.27
24. 古田光. 認知症の人の理解と対応. 2023年度東京都認知症介護実践者研修;Online：東京都. 2023.3.7-12.31配信
25. 畠山啓.認知症の方へのソーシャルワーク支援.2023 年度ソーシャルワークスキルアップ研修;Online:日本医療ソーシャルワーカー協会.2023.10.23
26. 畠山啓.DASC について. DASC 研修.すみだリバーサイドホールイベントホール（墨田区）;墨田区福祉保健部高齢者福祉課地域支援係.2023.10.6
27. 畠山啓. 認知症とともに生きるために. 令和５年度島しょ地域等認知症対応力向上研修; 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター; 利島村地域交流会館（利島村）. 2023.9.30
28. 畠山啓.DASC について. DASC 研修.すみだリバーサイドホールイベントホール（墨田区）;墨田区福祉保健部高齢者福祉課地域支援係.2023.1.23
29. 高岡陽子.認知症の予防と備え. 令和５年度島しょ地域等認知症対応力向上研修; 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター; 御蔵島村役場（御蔵島村）. 2023.11.9
30. 高岡陽子.集団療法のススメ方. 令和５年度島しょ地域等認知症対応力向上研修; 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター; 御蔵島村役場（御蔵島村）. 2023.11.9

【大学における講義等】
31. 井藤佳恵. エンドオブライフケアにおける意思決定への関わり②. 佐久大学人間福祉学部「ターミナルケア」; 佐久大学; 佐久大学. 2023.11.29
32. 井藤佳恵. エンドオブライフケアにおける意思決定への関わり①. 佐久大学人間福祉学部「ターミナルケア」; 佐久大学; 佐久大学. 2023.11.22
33. 井藤佳恵. 重い精神疾患をもつ人の医療上の意思決定への関わり. 東京大学「臨床死生学・倫理学研究会」; Online: 東京大学大学院人文社会系研究科　死生学・応用倫理センター　上廣講座. 2023.10.11
34. 古田光. 認知症（BPSD）.東京医科歯科大学神経科学・臨床（ブロック型）；東京医科歯科大学：2023.9.12
35. 古田光. 東京都健康長寿医療センターと認知症疾患医療センターにおける高齢者の精神疾患、および認知症の診断と治療について. 東京都立大実習講義.22.5.9

【一般市民、市民リーダー対象】
36. 井藤佳恵. 認知症はじめて講座. みんなが安心声かけ訓練 IN 徳丸ふれあい館; 徳丸ふれあい館: 板橋区徳丸おとしより相談センター（地域包括支援センター）.2023.9.26
37. 井藤佳恵. 共生社会について考えよう. 令和 5 年介護予防主任運動指導員フォローアップ研修; Online: 東京都健康長寿医療センター. 2023.9.11
38. 井藤佳恵. 認知症支援推進センターの活動について. TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム; ソラシティカンファレンスセンター（千代田区）: 東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合. 2023.7.28
39. 井藤佳恵. 認知症サポート医に期待される役割. 令和 5 年度第 1 回東京都認知症サポート医等フォローアップ研修; Online: 東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター. 2023.6.10
40. 井藤佳恵. 共生社会について考えよう. 令和 5 年介護予防主任運動指導員フォローアップ研修; Online: 東京都健康長寿医療センター. 2023.5.22
41. 井藤佳恵. アドバンス・ケア・プランニング-人生の最終段階を支えるために-. 市民後見人養成講習; 中野区社会福祉区協議会; 中野区産業振興センター（中野区）. 2023.2.17
42. 井藤佳恵. 高齢者の住環境と福祉-高齢期になって現れるいわゆる”ごみ屋敷”について考える-. マンション未来価値研究所セミナー「超高齢社会における共生」; 大和ライフネクスト(株); 大和ライフネクスト(株)本社赤坂プラスラスタジオ（港区）. 2023.2.8
43. 古田光.認知症基礎講座.東京都島しょ部認知症対応力向上にむけた支援事業；利島村：2023.09.30

44. 古田光. 認知症と人生会議. 中野区 ACP 講演会；中野区役所：中野区.2023.6.16
45. 古田光. 認知症と診断されたら知っておきたい医療と治療の話.板橋区認知症の方を介護する家族のための講座：グリーンホール：板橋区. 2023.05.24
46. 畠山啓. 認知症と共に生きる 認知症の経過 見取りまで見据えて. 令和５年度島しょ地域等認知症対応力向上研修.利島村地域交流館（利島村）.東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター. 2023.9.30

⑤学術業績（2023 年 1 月-2023 年 12 月）

種別	総数
原書論文（英文）	4 本
原著論文（和文）	4 本
総説	11 本
論文総数	18 本
学会発表（国際）	8 演題
学会発表（国内）	21 演題
学会発表演題総数	29 演題

論文（誌上発表）：原著（英文４本、和文4本）

1. Ito K: Older people living in the community with delusion, Geriatr Gerontol Int 2023(査読あり) (IF 3.387, 2021)
2. Ito K, Tsuda S, Hagiwara M, Okamura T: Encouraging death communication in a death-avoidant society: analysis of interviews with death cafe organizers, BMC Health Serv Res;23(1):944 2023(査読あり) (IF: 2.908, 2023)
3. Hori N, Ishizaki T, Masui Y, Yoshida Y, Inagaki H, Ito K, Ishioka Y, Nakagawa T, Ogawa M, Kabayama M, Kamide K, Ikebe K, Arai Y, Gondo Y: Criterion validity of the health assessment questionnaire for the national screening program for older adults in Japan: The SONIC study, Geriatr Gerontol Int;23(6):437-43 2023(査読あり)(IF:3.387, 2021)
4. Yamashita M, Kato M, Kawanishi T, Uehara Y, Kubota Y, Ogisawa F, Kawakubo K, Taga T, Okamura T, Ito K, Kitamura S, Yamazaki A: Characteristics of people seeking consultation after progressing to severe dementia: A mixed-method analysis, Int J Geriatr Psychiatry;38(3):e5902 2023(査読あり)((IF 3.85, 2023)
5. 井藤佳恵, 津田修治, 山下真理, 菊地和則, 畠山啓, 扇澤史子, 古田光, 栗田主一: 認知症サポート医が困難事例対応において期待される役割, 日本老年医学雑誌;60(3):251-60 2023(査読あり)(IF: NA)
6. 小野真由子, 井藤佳恵, 池内朋子, 藤野秀美, 長田久雄: 高齢者における「感謝」の構成要素, ヒューマン・ケア研究 23:31-42 2023(査読あり)(IF NA)
7. 小野真由子, 井藤佳恵, 池内朋子, 藤野秀美, 長田久雄: 高齢者における感謝の対象 : 対人関係の中あるいはそれ以外で生起する感謝の検討, 応用老年学;1:51-61 2023(査読あり) (IF:NA)
8. 畠山啓, 枝広あや子, 椎名貴恵, 近藤康寛, 山田悠佳, 新田怜小, 佐古真紀, 柏木一惠, 岡村毅, 井藤佳恵, 栗田主一: 認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援, 老年精神医学雑誌;34(5):477－86 2023(査読あり)(IF NA)

２ 論文（誌上発表）：総説（全11本）

1. 井藤佳恵: 特集【精神科臨床で知っておきたい法制度、社会資源、連携機関】成人の虐待を把握したときの対応, 精神科治療学;37(12):1363-70 2023
2. 井藤佳恵: 【特集 精神医学における臨床研究のすすめ】後方視的観察研究のポイント：連続例研究, 精神医学;65(1):47-54 2023
3. 井藤佳恵: 特集【高齢者の社会的孤立・孤独とメンタルヘルス】高齢者の社会的孤立と地域精神保健の課題, 老年精神医学雑誌;34(4):154-60 2023
4. 井藤佳恵: 特集【高齢者の精神疾患と社会的問題】高齢者の精神疾患といわゆる「ごみ屋敷」, 日本老年医学雑誌;60(3)232-236 2023
5. 井藤佳恵: 認知症保健・医療・介護連携体制のなかの多職種協働, 東京内科医会会誌;39(2):97-101 2023
6. 井藤佳恵: 認知症サポート医の役割と活動, ドクターサロン;67:18-21 2023
7. 井藤佳恵: 高齢者の住環境と福祉－高齢期になって現れるいわゆる“ごみ屋敷”について考えるー, 環境福祉学会誌;8(1):65-72 2023

8. 井藤佳恵. 高齢期のいわゆる「ごみ屋敷」-支援の目的は片づけること、でいいの？. 第 165 回老年学・老年医学公開講座「老いを目指し老いを見据える」. 東京: 東京都健康長寿医療センター; 2023.
9. 井藤佳恵: 認知機能が低下した人の医療ケアにおける意思決定, 長寿科学振興財団 WEB 版機関紙「Aging and Health」;107 号・秋 2023
10. 井藤佳恵: 特集【老年期の精神医療と死生学】統合失調症患者のエンドオブライフの意思決定, 老年精神医学雑誌;34(9):881-8 2023
11. 井藤佳恵: 特集【認知機能が低下しても個人を尊重した普段の生活におけるさまざまな意思決定支援】認知機能が低下した人の医療ケアにおける意思決定, Aging and Health;32(3):11-5 2023

３ 学会発表（国際、全８演題）

1. Ito K, Hagiwara M, Okamura T. Can Death Cafés contribute to the creation of a ″death-inclusive society″ that will be the ground for the Advance care planning? 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2 2023.6.29
2. Ito K. Older people with delusional disorder. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023) Symposium Dementia 10 “Community-based participatory research in Tokyo: Toward dementia-friendly community”; パシフィコ横浜. 2023.6.12-15 2023.6.12
3. Tsuda S, Ito K. Scope of post-diagnostic dementia care by Japanese primary care clinics using team-based care models. 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2
4. Ono M, Ito K, Ikeuchi T, Fujino H, Osad H. Viewing Family Support from the Perspective of Gratitude in Older Adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 Symposium Long Term Care 2 ”Practical research on family care research to beyond: Up-and-Coming perspectives of junior researcher” Yokohama. 2023.6.14
5. Yoshida Y, Ishizaki T, Masui Y, Hori N, Inagaki H, Ito K, Ogawa M, Yasumoto S, Arai Y, Kamide K, Ikebe K, Gondo Y. The effect of the number of medications on the incidence of falls among community-dwelling older adults: Three-year longitudinal analysis of the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023); パシフィコ横浜. 2023.6.12-15
6. Sugiyama M, Inagaki H, Ito K, Okamura T. Are the older community-residents who did not respond to the administrative survey high risk group? Early detection and continuous support by the visiting nurse 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2
7. Mitsutake S, Ishizaki T, Yano S, Ito K, Furuta K, Hatakeyama A, Shimazaki Y, Awata S, Toba K, Ito H. Association of the Diagnosis Procedure Combination Data Version of Hospital-Associated Complications of Older People with hospital length of stay and discharge to a facility or hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023); パシフィコ横浜. 2023.6.12-15
8. Matsui Y, Nakagawa T, Gondo Y, Ogawa M, Kasuga A, Yasumoto S, Hori N, Yoshida Y, Inagaki H, Ishioka Y, Takayama M, Ito K, Ikebe K, Kamide K, Arai Y, Ishizaki T. A longitudinal study of the reciprocal effects of gerotranscendence and
mental health in old age: Using data from the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress , 2023 (IAGG2023) パシフィコ横浜. 2023.6.12-15

４ 学会発表（国内、全21演題）

1. 井藤佳恵. 精神医療と臨床倫理ー身体合併症医療の意思決定を中心に. 第 36 回日本総合病院精神医学会総会 教育講演; 仙台. 2023.11.17
2. 井藤佳恵. 認知症医療・ケアの臨床倫理. 2023 年度認知症ケア学会関東ブロック大会 教育講演; 幕張メッセ国際会議場. 2023.11.12
3. 井藤佳恵. 福祉ネットワークからこぼれる人の支援ー高齢者の幻覚妄想状態と社会的孤立. 第 38 回日本老年精神医学会【秋季大会】教育講演; 日本教育会館（千代田区）. 2023.10.14
4. 井藤佳恵. 精神医療と臨床倫理・エンドオブライフケア. 日本エンドオブライフケア学会第 6 回学術集会指定講演; 前橋市民文化会館. 2023.9.17
5. 井藤佳恵. 認知症の人と成年後見制度. 第 119 回 日本精神神経学会 委員会シンポジウム「認知症の人の経済的支援」; パシフィコ横浜. 2023.6.22-25 2023.6.23
6. 井藤佳恵. 共生の課題ー理解と包摂から取り残されたものーいわゆるごみ屋敷症候群―. 第 65 回日本老年医学会学術集会 シンポジウム 6 (認知症対策小委員会)「認知症施策推進大綱の中間評価を踏まえて老年医学会はいかに関与すべきか」; パシフィコ横浜. 2023.6.16-18 2023.6.18
7. 井藤佳恵. 認知症とともに独りで暮らす高齢者のエンドオブライフの意思決定への関わり. 第 33 回日本老年医学会総会 合同シンポジウム 10「エンドオブライフの医療とケア」; パシフィコ横浜. 2023.6.16-18 2023.6.17

8. 井藤佳恵，宮前史子，小野真由子．看取りに関わる施設職員を対象とした対話型デスエデュケーション・プログラムの試み．日本認知症ケア学会第 24 回大会；国立京都国際会館．2023.6.3-4 2023.6.3
9. 井藤佳恵．認知症の保健・医療・介護連携体制のなかの多職種協働．東京内科医会第 36 回医学会　教育講演；お茶の水トライエッジカンファレンス．2023.3.18
10. 池内朋子，菊地和則，谷口優，井藤佳恵．人や支援につながりにくい高齢者の特徴：全国自治体・社会福祉協議会調査結果．第 65 回日本老年社会科学会；横浜市．2023.6.18.
11. 肥田あゆみ，大橋琢也，井藤佳恵．終末期における胃ろう造設をめぐる自己決定権についての検討．日本医事法学会第 53 回研究大会；東京都立大学南大沢キャンパス．2023.11.18-19
12. 萩原眞由美，井藤佳恵，新開省二．デスカフェがもたらす死生観の変化と ACP の準備性．日本エンドオブライフケア学会第 6 回学術集会；前橋市民文化会館．2023.9.16
13. 扇澤史子，岡本一枝，井藤佳恵，今村陽子，高岡陽子，青島希，植田那月，大森佑貴，松井仁美，畠山啓，齋藤久美子，古田光，粟田主一．認知症高齢者の希死念慮の特徴と背景-精神科入院中の診療録の希死念慮に関連する記述の質的分析．第 38 回日本老年精神医学会【秋季大会】；日本教育会館（千代田区）．2023.10.14
14. 増井幸恵，中川威，権藤恭之，安元佐織，小川まどか，松本清明，石岡良子，春日彩花，堀紀子，稲垣宏樹，吉田祐子，井藤佳恵，髙山緑，新井康通，池邉一典，神出計，石崎達郎．老年的超越の縦断変化パターンの分類と関連要因の検討：SONIC 70 歳群データを用いて．第 18 回応用老年学会大会；大阪大学会館．2023.10.28-29
15. 増井幸恵，権藤恭之，中川威，小川まどか，堀紀子，吉田祐子，井藤佳恵，池邉一典，神出計，石崎達郎．地域在住高齢者における老年的超越の関連要因の検討　SONIC 研究データを用いて．日本老年社会科学会第 65 回大会．2023.6.17-18
16. 杉山美香、稲垣宏樹、井藤佳恵、粟田主一．郵送調査未返送者で介護保険サービス未利用の要介護認定者への訪問調査と多職種協働～認知症等高齢者の困難事例化予防にむけて．第 12 回認知症予防学会各術集会；新潟．2023.9.15-17
17. 杉山美香，稲垣宏樹，井藤佳恵，岡村毅，粟田主一．DFCs にむけたコミュニティ参加型研究の実践～東京都千代田区での取り組み報告～．日本認知症ケア学会第 24 回大会；国立京都国際会館．2023.6.3-4
18. 畠山啓．認知症ケアチーム活動の役割と課題 精神保健福祉士の立場から 第 42 回日本認知症学会学術集会シンポジウム 26「多職種からなる認知症ケアチームの活動の成果」;奈良県コンベンションセンター（奈良市）.2023.10.24-26 2023.10.25
19. 畠山啓，枝広あや子，椎名貴恵，近藤康寛，山田悠佳，新田怜小，岡村毅，井藤佳恵，粟田主一．認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援．認知症ケア学会第 24 回大会；国立京都国際会館．2023.6.3-4 2023.6.4
20. 扇澤史子，岡本 一枝，今村 陽子，高岡 陽子，青島 希，植田 那月，佐藤 妙子，畠山 啓，大森 佑貴，古田 光　急性期病院での認知症ケアを次の生活拠点につなぐための取り組み　「ケアの提案書」の意義と課題 日本認知症ケア学会第 24 回大会；国立京都国際会館．2023.6.3-4 2023.6.3
21. 小野真由子，井藤佳恵，長田久雄．高齢者用感謝尺度の開発．日本エンドオブライフケア学会第 6 回学術大会；群馬県．2023.9.18

認知症疾患医療センター

センター長　古田　光

1　設置目的

認知症疾患医療センターは、東京都から平成24年2月9日付で指定を受け、二次医療圏毎に1ヶ所設置される地域拠点型認知症疾患医療センターであり、区西北部（豊島区・北区・板橋区・練馬区）を主な活動圏域としている。令和3年4月1日付で指定の更新（3ヵ年）を行い、12年目を迎えたところである。

本事業は、保健医療・介護機関等と連携を図りながら、認知症疾患に関する鑑別診断とその初期対応、身体合併症と行動・心理症状への対応、専門医療相談等を実施するとともに、地域の保健医療・介護関係者への研修等を行うことにより、地域において認知症について進行予防から地域生活の維持などに必要となる医療を提供できる機能体制の構築を図ることを目的としている。

2　人員体制

〈医師〉古田光（センター長、精神科部長）
　　井藤佳恵（副センター長、研究所研究部長）
〈常勤〉畠山啓（認知症支援推進センター課長代理兼務/精神保健福祉士・社会福祉士）
　　齋藤久美子（認知症疾患医療センター主任専従/精神保健福祉士・社会福祉士）
　　木村陽子（看護部師長/認知症看護認定看護師）
　　扇澤史子（精神科主任技術員/公認心理師）
　　岡本一枝（精神科主任/公認心理師）
　　今村陽子（精神科主任/公認心理師）
〈非常勤〉福田美都子（精神保健福祉士）
　　小林優子（精神保健福祉士・社会福祉士）
　　佐々木優子（事務）

認知症疾患医療センターに設置される認知症専門相談室では、精神保健福祉士（以下「PSW」）専従1名の他、PSW3名、認知症看護認定看護師1名、専任を含む公認心理師（以下「CPP」）3名、事務職1名で相談及び研修業務を行い、関係機関との連携や、連携協議会の運営等については、認知症支援推進センターの事務局と連携し対応している。もの忘れ外来の受診前相談とインテーク、近隣医療機関からの受診・入院相談も積極的に対応した。また、全入院患者に対し地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート（DASC）を実施した。

3　活動内容・実績

（1）専門外来

もの忘れ外来のページを参照のこと。

（2）専門医療相談

もの忘れ外来受診を希望する患者家族や未受診・他医療機関に通院する患者家族に対し、相談内容に応じて介護相談や心理相談、社会資源の情報提供等を行った。実績（いずれも件数・人数は述べ）については下記のとおりである。

相談総件数は、16,254件であった。そのうち、PSWが受けた相談件数は、14,335件、その他の構成員（CPP等）が受けた相談件数は、1,691件、認知症ケア加算Ⅰに関連してチームが相談対応した件数は、228件であった。相談内容の内訳は、受診・受療に関わる援助が4,327件と最も多く、続いて転院・入所に関わる援助が4,177件、入院に関わる援助が1,774件と続いている。また、区高齢者主管課や地域包括支援センター等の地域の医療機関から緊急性が高いと判断された相談についても、救急当番医と連携し、適切な対応を行った。本人・家族・院内職員を除く関係機関別の連携内訳は、医療機関（1,842件）、地域包括支援センター（444件）、ケアマネジャー（397件）の順になっている。

また、12月20日にアルツハイマー病の抗体医薬レカネマブ（レケンビ®）の発売に伴い、脳神経内科、精神科、地域連携課医療連携係、医療サービス推進課医事管理係、総務課総務係広報担当と連携し、予約方法や問い合わせ対応のフローを作成した。認知症疾患医療センターで12月から3月までに受けた相談は、297件であった。医師が作成したマニュアルによる統一した対応を行い、第一スクーリング外来（もの忘れ外来・脳神経内科外来）の予約に至った件数は、180件（61%）であった。患者年齢別にみると、70代が最も多く122件、次いで80代が90件であった。相談者地域別にみると、区西北部が80件と最も多く、次いでその他の区部67件、埼玉

県が47件と続いた。

（3）認知症疾患医療・介護連携協議会の開催

地域の認知症疾患に関する医療及び介護の連携体制強化のために認知症疾患医療・介護連携協議会を組織し開催した。主に認知症疾患医療センターの実績報告、アウトリーチ事業及び各研修の説明と報告、国と都の動向の情報提供、各区医師会及び行政機関からの認知症対策の取り組みの報告など情報交換及びかかりつけ医認知症研修の内容検討など2 回開催した。各回オンライン開催（ZOOM）とした。

開催日	会議名	主な参加者
5月31日	第1回区西北部認知症疾患医療・介護連携協議会(医療部会)	区医師会代表者及び 認知症疾患医療センター代表者等
2月7日	第2回区西北部認知症疾患医療・介護連携協議会	区医師会代表者 区高齢者主管課代表職員及び認知症疾患医療センター代表者等

（4）普及啓発

認知症疾患医療センターの周知活動や認知症に関する普及啓発を行った。関係機関及び地域住民に対して、事業の周知を目的に作成したリーフレットや都や近隣区が作成したパンフレット等を配布した。また、家族介護者（ケアラー）支援として、家族教室（心理教育）、家族会（相互交流、ピアカウンセリング）の提供を行った。

○認知症はじめて講座の開催

もの忘れ外来や精神科等を受診し、認知症と診断された患者・患者家族を対象に、認知症はじめて講座として「病気の知識と治療編」と「ケア・サポート編」の2つの講座を開催した。前者は精神科医師による講義、後者はコメディカルスタッフが、認知症に対するケアと利用できるサービスについて講義を行った。開催方法は、4月～6月がオンライン（ZOOM）開催、7月～9月が、会場とオンラインのハイブリット開催、10月～3月が会場開催とした。参加者総数は、164名であった。

○家族交流会の開催

もの忘れ外来・精神科・神経内科等を受診している患者家族を対象に、医師等の講義と交流会を開催した。方法と回数は、会場開催にて12回行った。参加者総数は、102名であった。また、若年性認知症の家族を対象とした会を計画したが、参加希望者がいなかったため開催に至らなかった。

○院内勉強会の開催

専門的な知識・経験を有する医師・看護師等の育成を目指し、院内の研修会を開催した。参加総数は、228名であった。7月～9月の期間は、YouTube夏季集中講義として、週1回の動画配信を行った。

開催日	演題	講師
4月10日	認知症はじめて講座～医学的知識編～	古田医師
5月8日	認知症はじめて講座～ケア・サポート編～	髙岡CP　福田PSW
6月26日	基礎から学びDASC-21	古田医師
10月16日	不穏と不眠について再考するー見立てから対応までー	大森医師
11月13日	見立てから選ぶ　不穏時・不眠時の薬～使用から評価まで～	谷古宇薬剤師
12月11日	リエゾンチームが推進する認知症ケア	木村看護師
3月11日	事例検討～食べられなくなったとき多職種チームで考える認知症ケア	木村看護師

YouTube夏季集中講義

配信日	タイトル
7月10日	古田精神科部長が語る認知症ケアに思うこと
7月18日	谷口薬剤師が語るお薬のミニ知識
7月24日	粟田認知症未来社会創造センター長が語る認知症基本法のポイント
7月31日	精神科大森先生が語る精神科リエゾンチーム通信について
8月7日	認定看護師の野島さん木村さんが語る最近思うこと
8月14日	潜入レポ！東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ
8月21日	公認心理師岡本さんが語るストレスケアについて
8月28日	ソーシャルワーカー齋藤さんが語る入院費用について
9月4日	精神科清水先生が語る認知症医療を経験して学んだこと
9月11日	宮前研究員が語るココからステーションについて
9月19日	潜入レポ！東京都認知症地域対応力向上研修

配信日	タイトル
9月25日	精神科大森先生が語る脳の機能の覚え方について

○かかりつけ医認知症研修の開催

高齢者が日頃より受診する診療所等の主治医（かかりつけ医）に対し、適切な認知症診療の知識・技術や患者とその家族を支える知識と方法の習得と支援体制の構築を図るための研修会を、圏域4区医師会、地域連携型認知症疾患医療センター協力の元に開催した。

開催日	開催方法	内容他	修了者数
10月1日～ 10月15日	配信	かかりつけ医の役割 基本知識、診療における実 践 地域・生活における実践	113名
11月11日	講義 グループワーク	《講義》 認知症を抱える人の意思決定への関わり 講師：認知症支援推進センター 井藤佳恵センター長 《グループワーク》 意思決定支援に関わるグループディスカッション 講師：認知症疾患医療センター 古田光センター長	20名

○看護師認知症対応力向上研修Ⅰの開催

急性期医療に関わる一般病院の看護師等が、入院から退院後の在宅生活まで視野に入れた認知症ケアについての知識を学ぶことで、認知症の人が病院で治療を受けること、退院後にもとの生活に戻ることができることを促進するために研修会を開催した。講師は、内容によって各職種が担当し、グループワークでは、認知症専門相談室のスタッフがファシリテーターとして参加した。

開催日 （）内は事前配信期間	内容他	修了者数
6月30日 （6月19日～6月29日）	《事前配信》190分 ・認知症の知識、 ・認知症ケアに関する知識 ・認知症の人を支える連携等について 《演習》150分 ・認知症、認知症看護に関する演習 ・チームケア	55名
8月3日 （7月23日～8月2日）		49名
9月15日 （9月4日～9月14日）		45名
12月15日 （12月4日～12月14日）		67名

○認知症初期集中支援チーム支援研修の企画

複数の専門職が家族の訴え等により認知症が疑われる人や認知症の人及びその家族を訪問し、アセスメント、家族支援などの初期の支援を包括的に行い、自立生活のサポートを行うために各区が設置している認知症初期集中支援チームの技術支援等の向上を目的に研修を企画した。開催方法は、会場開催とした。

開催日	演題・講師他	修了者数
10月11日	《講義》 認知症施策の現状と今後～最近のトピックを踏まえて～ 講師：認知症未来社会創造センター 栗田主一センター長 《グループワーク》 初期集中支援チーム介入のゴールラインについて悩むとき 講師：豊島長崎クリニック　木明大樹氏　佐藤雅子氏	47名

○認知症地域カンファランスの開催

平成24年度より、実際に今困っている事例を挙げて多職種で意見交換を行う認知症地域カンファランスを開催している。参加者は、アウトリーチ事業を運営する板橋区・豊島区の行政関係職員、地域包括支援センター職員、周辺の精神科病床を有する医療機関PSW等が中心であった。

開催日	内容他	参加者数
7月21日	支援のはじまりにどのように向き合うか～出会いの関わりの大切さを考える	27名
11月10日	8050問題などの複合的な課題を抱える認知症の人が暮らす世帯への支援方法	26名
2月13日	受け入れられやすい支援のあり方を考える～援助希求が得意ではないケースへの支援方法～	18名

○行動制限最小化委員会勉強会の開催

平成16年の診療報酬の改定で「医療保護入院等診療料」が新設され、精神科を標榜する病院で「医療保護入院等診療料」を算定する場合には、必ず「行動制限最小化委員会」を設置することになっており、事務局を認知症疾患医療センターに位置付けている。行動制限最小化委員会で行うべき活動内容に、精神科診療に携わる職員全てを対象とした、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律、隔離拘束の早期解除及び危機予防のための介入技術等に関する研修会の年2回程度の実施が義務付けられており、下記のとおり開催した。

開催日	演題・講師他	参加者数
7月3日	精神保健福祉法について 講師：精神科 古田光部長	25名
10月30日	なぜ精神科病院での虐待事件は繰り返されるのか 講師：代々木病院精神神経科科長 竹内真弓氏	40名
2月19日	行動制限最小化のためにできることをみんなで考える 進行：11東病棟 金田千恵子看護師長	26名

○講師等派遣

板橋区や東京都福祉保健財団、各区医師会等からの依頼により、研修会等へ講師派遣を行った。区西北部医療圏内の会議・研修会等への参加件数は、17件であった。

（5）認知症アウトリーチチーム事業

平成25年度よりモデル事業として開始し、平成27年度より認知症疾患医療センター事業に移行された。区市町村が配置する認知症支援コーディネーターと、認知症疾患医療センター等の医療機関に配置する認知症アウトリーチチームが協働して、認知症の疑いのある人を把握・訪問し、状態に応じて適切な医療・介護サービスに結びつける等の取り組みを行った。区西北部医療圏域内の認知症支援コーディネーターを配置する板橋区と豊島区が対象となっている。対象者3名、訪問等回数3回であった。職種別にみると医師3回、PSW3回、CPP3回であった。

（6）精神科リエゾンチームの一員として

カンファレンスに参加し、各病棟をラウンドして病棟における認知症ケアの実施状況を把握するとともに患者家族及び病棟職員に対し助言等を行った。詳細は、精神科のページを参照のこと。

（7）入院患者の認知症日常生活自立度の把握

65歳以上の入院患者に対し問診票（DASC）を配布・回収を行った。10,668枚配布し、回収率42%（4,517枚回収）であった。提出された日にカルテ入力とスキャンを行い、病棟スタッフや精神科リエゾンチーム等と情報共有を図った。

（8）精神保健福祉士の実習指導

精神保健福祉士カリキュラムの医療機関実習として、日本福祉教育専門学校、高崎医療福祉カレッジ、聖徳大学より9名の実習生を受け入れた。

（9）その他

島しょ地域等認知症サポート事業及び島しょ地域の認知症対応力向上研修などの支援を認知症支援推進センターと連携して実施した。詳細は、認知症支援推進センターを参照のこと。

（認知症疾患医療センター課長代理　畠山啓）

高齢者健康増進センター

部長　原田　和昌

1　人員体制

〈部長〉原田和昌副院長
〈専門部長〉大渕修一（研究所）

2　診療活動・実績

新型コロナ感染症（Covid-19）のパンデミックに伴い、高齢者健康増進センターをPCR検査会場として貸し出していたため、令和５年度は高齢者健康増進センターを閉鎖していた。

がん相談支援センター

センター長　時村　文秋

１　人員体制

東京都がん診療連携協力病院として平成28年度４月１日よりがん相談支援センターを開設。

令和５年度は副院長 時村(がん相談支援センター長)、看護部長 太田(同副センター長)、MSW 西山（専従相談員)、MSW 津川（専任相談員）を配置。またサポーターとして、がん性疼痛看護認定看護師、がん化学療法看護認定看護師、薬剤師、臨床心理士、歯科衛生士、管理栄養士に運営協力を仰ぎ、連携して相談支援の充実を図った。

２　診療活動・実績

がん相談支援センターは、患者・家族のほか地域住民を対象に、がんの治療を受ける上での不安や悩みや、療養生活、治療と仕事の両立などについて、相談支援、がんに関する情報提供を行うことを目的としている。

令和５年度の相談件数は９４０件。相談内容は、療養上の相談、緩和ケア相談、転院相談、不安・精神的苦痛、治療の相談に関する相談が上位を占めた。

広報活動として院内の外来エリアや病棟にポスターを掲示し、がん相談支援センターを周知。また、がん診療に携わる診療科の外来エリア（呼吸器内科、消化器・内視鏡内科、外科、泌尿器科、血液内科）と、化学療法室に『がん相談支援センターのご案内』･『疾患別冊子』(国立がん研究センター/がん情報サービス発行）を配置し、閲覧環境を整えた。地域住民に向けては、ホームページの掲載や、院内の渋沢サロンにがん情報コーナーを設けるなど情報提供を行っている。

患者会〈おれんじの会〉は、新型コロナウイルス感染の影響で令和4年度は年２回の開催だったが、令和5年度は感染状況をみながら３回開催した。第１回は池田理学療法士より「座ったままできるリハビリあれこれ」、第２回は荒牧管理栄養士･西岡薬剤師より「抗がん剤治療による副作用はなぜ起きる？起きた時はどうしたらいい？」、第３回は髙橋がん化学療法認定看護師より「爪のケア・保湿について」のテーマで講演会・茶話会を実施した。

また昨年度に引き続き広報誌『糸でんわ』に「がん相談支援センターだより」を掲載。がん患者にとって必要な情報を専門分野別に投稿し、年度内は、MSW編・緩和ケア看護認定看護師編・薬剤師編に分け計３回の記事掲載を行った。

３　研修・教育活動

専従・専任相談員、サポーターの認定看護師等とともに定期的にミーティング（毎月第３水曜日）を実施し、がん相談支援センターの運営について協議、各種ケースの相談や検証を行っている。

がん相談支援センター相談員研修（国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター主催）は、今年度、基礎研修(３)をMSW２名が申し込みMSW津川は受講終了となった。もう１名は希望者多数にて抽選外となり受講の機会を得られなかった。また基礎研修(１)(２)は在籍する11名のMSWは受講終了している。また、東京都がん診療連携協議会相談・情報部会主催「QAを学ぶ一相談対応の質保証―」研修会にMSW津川１名参加。東京都委託事業がん研究会有明病院主催「東京都緩和ケア研修会（多職種）職種別編：MSW・心理職web」にMSW賀来が参加した。

４　課題

令和５年度も例年に引き続き〈院内外来診療との連携〉を重視した。しかし、がん相談支援センターの役割、機能については、さらなる周知が必要である。医師・外来看護師との連携、がん相談支援センタースタッフ間で密な情報共有が行える体制の構築が課題である。診断時から継続した相談支援が行える体制を目指す。

患者会〈おれんじの会〉に関しては年４回の実施を予定。患者家族が活発に情報交換、悩みを共有できる場を提供する。

今後も院内、院外問わず適切な相談支援を提供し、患者・家族に寄り添ったがん相談支援センターの運営を継続する。

（文責：MSW 西山亜矢子・MSW 津川晴奈）

看護部

部長　加納　江利子

１　人員体制

〈部長〉太田日出
〈副看護部長〉加納江利子、成田由香、蛯原大作、鉄谷祥子
　令和4年度は、看護師定数473名、採用者数は、新人看護師41名、経験者看護師14名であった。

２　診療活動・実績

（１）看護部の目標への取り組み
　看護部では、「高齢者の尊厳を再考し、尊厳を守る」スローガンのもと①医療安全・感染予防策の実践への患者参加を促す②患者･家族の思いに耳を傾け、抱える問題解決を支援する③職員個々の目標達成を、相互に支援する④職員の心理的安全性が保障される組織をつくる⑤病院経営に参画する、の５つの目標を掲げ、委員会、次席・主任研修等で取り組んだ。

３　研修・教育活動

（１）実習の受け入れ
　基礎教育では、都立看護専門学校１校、看護大学４校の臨地実習を受け入れた。認定看護師教育課程では「慢性心不全看護」、特定行為研修を含む「皮膚排泄ケア」、特定行為研修として「緩和ケア」「皮膚排泄ケア」の臨地実習を受け入れた。
（２） 各種認定の取得
　皮膚排泄ケアおよび緩和ケアの認定看護師教育課程にそれぞれ1名派遣し修了した。また、慢性心不全看護認定看護師1名が合格した。その他、心不全療養指導士に5名合格した。
（３）研究・学会関連
　8部署が院内看護研究発表会で発表した。日本老年看護学会、日本エンドオブライフケア学会、日本手術看護学会、全国自治体病院学会、東京都福祉保健医療学会、板橋区医師会医学会等で計15題の演題発表をした。
（４）その他、長庚（ﾁｮｳｺｳ）科技大学看護学部の学生6名の実習受け入れ、JICAモンゴル国看護師の卒後研修強化プロジェクトの研修生8名の施設見学の受け入れをおこなった。

●委員会活動

１　キャリアサポート委員会

活動内容
（１）新人看護職員臨床研修
　集合研修と病棟体験研修・OJTにより、基本的な知識・技術・態度の段階的な習得に向けて支援した。また、集合研修でサポートカンファレンスを行い新人看護師が円滑に職場に適応できるようにサポートした。
（２） 委員会活動の効率化等
　研修案など議題を検討する際の書類のペーパーレス化、研修アンケートのデータ入力化をおこなった。
成果：キャリアラダーレベルⅠ38名、レベルⅡ30名、レベルⅢ24名が修了した。また、第2回の院内認定フレイルサポートナース育成研修（基礎編）に院内5名、院外4名参加、アドバンス編も開催し16名が受講した。

２　看護記録委員会

活動内容：看護記録の質向上に向けて以下に取り組んだ。
（１）NANDA-I看護診断2021-2023への移行
（２）看護記録記載基準の改訂と看護記録監査の実施
　入退院サポートセンターの始動とともにヒアリング内容の見直しと聴取項目の追加、急変対応時記録を含めて改訂をおこなった。また、全看護師に看護記録の形式監査、質監査は各部署2名が実施した。
（３）重症度、医療･看護必要度の理解度確認テストを年2回実施し評価精度の向上を目指した。

３　クリニカルパス委員会

活動内容：クリニカルパスの新規作成や見直し及びバリアンス分析に取り組んだ。クリニカルパス適応率は42.6%、有効率は72.1%であった。バリアンス要因は上位から患者要因（身体状況・本疾患）が41%、医療者要因（意図的なパス変更）が16%、社会要因（受け入れ病院等）が14%であった。

４　実習指導者委員会

活動内容：感染対策を徹底しながら臨地実習を受け入れた。実習後アンケートでは、実習環境に関する肯定割合が78.8%であった。

５　ＣＳ向上委員会

活動内容：　看護サービス向上を目的に取り組んだ。

（１）環境調整：療養環境を整える意識についてアンケートを実施した。環境整備が適切に実施されていないと思う職員が９割以上であることがわかった。実際に実施できるようにポスターを作成し、活用していくようにした。

（２）整容について：眼脂ケアについて、アンケートを実施し、ケアの現状とできていない理由について調査を実施した。その結果、医師より勉強会を実施し、各部署へ OJT を実施し、ケアの推進を図った。

（３）挨拶・接遇：エレベーター昇降時に患者への声かけができていない現状があり、ポスターを作成し周知した。

６　看護システム委員会　活動内容：電子カルテシステムに関する改善要望の検討とシステム停止に関する整備を行った。

（１）病棟業務の効率化を目的に経過表のセット展開の追加を実施した。また、感染管理のSSIテンプレートの運用修正、安全管理では緊急採血ラベルの表示変更を実施した。要望件数19件のうち改善済14件、対応不可5件であった。

（２）システムダウン時の伝票にインスリンのボトル混注時の運用の用紙を追加した。

７　看護部感染対策委員会

活動内容：知識・実践力を身に着け、医療関連感染を予防することを目標に取り組みを行った。

（１）患者・家族への感染対策指導状況を調査し、入院時の感染対策説明用紙・掲示ポスターを刷新することで手指衛生遵守率を患者は65％から75％、家族は78％から83%まで上昇できた。

（２）「環境整備における視点の統一」をテーマに委員会内で勉強会を実施後、各部署で課題と目標を設定して環境整備について取り組みを実施し、部署の環境整備向上を図った。

８　リスクマネジメント看護分科会

活動内容：安全な看護の提供を目指し、下記の取り組みを行った。

（１）患者誤認ゼロ：各部署で照合確認ロールプレイングと抜き打ちチェックを実施しフィードバックを行った。

（２）転倒転落防止：転倒に関するKYTを実施した。転倒防止に関わるセンサー類の総点検をMEと実施した。

（３）急変時対応能力の向上：シナリオベースの技術チェックリストを使用した急変時対応訓練を実施した。

（４）EMコールに対する意識向上：EMコール報告書を分析した。呼吸回数のワンデイ調査を2回/年実施した。

９　褥瘡・栄養サポート委員会

活動内容：　褥瘡対策および栄養サポート、排泄ケアに関する知識・技術の向上、褥瘡・スキン-テアの発生予防、栄養・排泄状態の維持改善を目標に取り組んだ。

（１）褥瘡発生防止対策としてケア実践の他、褥瘡に関するデータ集計・分析、褥瘡対策でのチームカンファレンスを毎週実施し、院内褥瘡発生率は2.0％、医療機器関連圧迫創傷は、0.6％という結果であった。

（２）患者を大事に、大切にケアを行うこと、患者の声を聴くことを目標に取り組んだ。具体的には①保湿ケア②患者の声(S情報)の記載状況③退院時聞き取り調査（「大切にされたと感じた」「自分らしく入院生活を送れた」）では看護ケアに対して良い評価が得られた。

１０　退院支援チーム

活動内容：以下の取り組みを行い、リンクナースへの教育、退院支援内容の強化を図った。

（１）診療報酬、介護保険、療養施設に関する勉強会、訪問看護ステーション管理者による講演会開催。

（２）退院支援記録の記載内容調査、課題の共有、周知

（３）リンクナースの訪問看護ステーション研修

（４）退院支援マニュアルの更新

１１　認定看護師・専門看護師連絡会

活動内容：　例年行っている看護を語る会やたんぽぽ会のほかに、新たに地域との連携を強化する取組を行った。

（１）東京都看護協会立城北看護ステーションとの相互研修で退院後訪問を行い、指導の在り方や看護への活かし方について、専門・認定看護師の視点で学びを得た。

（２）地域の介護職者を対象に、看護ケアワークショップを開催した(参加者19名)。

（３）板橋区民祭りで、フレイルチェックや認知機能に関する相談、BLS体験のブースを開設した。

１２　認知症ケア委員会

活動内容：認知機能障害のある患者への尊厳に配慮したケアの実践を目指し、以下の活動や勉強会を行った。

（１）認知機能障害のある患者に対する適切な対応と記録が行っていけるために病棟でアンケートを実施した。記録記載時の考え方としてリンクナースから病棟へ周知した。

（２）生活障害に関するアセスメント能力の向上をめざし、認知症患者の食事を包括的にアセスメントできるＫＴバランスチャートを活用した事例検討、認知症マフの使用、マッサージについて勉強会を実施した。

（３）せん妄アセスメントシート・身体拘束に関する確認シートの集計と評価を行った。

1　令和5年度　東京都健康長寿医療センター 看護部院内研修年間実績報告

コース名		対象者		研修名	研修時間	講師	会議室	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ベーシックコース	レベルⅠ	令和5年4月採用者	新人看護職員臨床研修	看護部概要Ⅰ・Ⅱ	1.5時間	看護部	3階AB	3(月)4(火)											
				看護倫理Ⅰ	1時間	看護部	3階AB	4(火)											
				高齢者看護総論	1.75時間	院内講師	3階AB	4(火)											
				高齢者看護Ⅰ（高齢者のスキンケア）	1.5時間	院内講師	3階AB	4(火)											
				院内見学	1.5時間	院内講師	各部署3階AB	4(火)											
				安全管理Ⅰ－①	3時間	院内講師	3階AB	5(水)											
				感染管理Ⅰ	4時間	外部講師	3階AB	5(水)											
				高齢者看護Ⅰ（摂食・嚥下）	1.75時間	院内講師	3階AB	6(木)											
				トランスファー	1.75時間	院内講師	3階AB	6(木)											
				電子カルテ操作研修	3.5時間	院内講師	3階カンファレンス	6(木)7(金)											
				看護記録Ⅰ－①	3.5時間	院内講師	3階AB	6(木)7(金)											
				接遇・マナー研修	3.5時間	院内講師	3階AB	7(金)											
				配属前部署研修	計27時間	院内講師	各部署	10(月)11(火)12(水)13(木)											
				キャリア開発Ⅰ－①	1時間	院内講師	3階AB	14(金)											
				重症度、医療・看護必要度	1時間	院内講師	3階AB	14(金)											
				災害拠点病院の役割	1.5時間	院内講師	3階AB	14(金)											
				薬剤の基礎	1.5時間	院内講師	3階AB	14(金)											
				看護助手との協働推進研修	2時間	院内講師	3階AB	14(金)											
				ME機器の取り扱い	3.5時間	院内講師	3階AB トレーニングルーム	17(月)											
				夜勤導入前オリエンテーション研修	1時間	院内講師	3階AB		12(金)										
				急変時対応	2.5時間	院内講師	3階AB		12(金)										
				採血	3.5時間	外部講師	3階AB		12(金)										
				サポートカンファレンス	4.5時間	院内講師	3階AB	4(火)13(木)	12(金)		6(木)10(月)【二部制】			10(火)		18(月)			
				高齢者看護Ⅰ（フィジカルアセスメント）	6.75時間	外部講師	3階AB				6(木)10(月)【二部制】					18(月)			
				看護記録Ⅰ－②	7時間	外部講師	3階AB				28(金)多目的室								
				事例検討Ⅰ（オリエンテーション、発表会）	4.5時間	院内講師	3階AB						4(月)				17(水)発表		
				安全管理Ⅰ－②	3.5時間	院内講師	3階AB						4(月)						
				キャリア開発Ⅰ－②	計14時間	院内講師	各部署											→	→
				高齢者看護Ⅰ（認知機能障害）	3.5時間	院内講師	3階AB							10(火)					
				静脈注射	4時間	院内講師	3階AB								17(金)				
				事例検討Ⅰに係る付与時間	4時間									→	→	→	→		
				レベルⅠ合計時間数　（レベルⅠ修了認定者：38名）	124.5時間														
	レベルⅡ	レベルⅠ修了者		看護倫理Ⅱ	3時間	院内講師	3階AB		29(月)【二部制】										
				事例検討Ⅱ（オリエンテーション、発表）	5時間	院内講師	3階AB		29(月)【二部制】							22(金)発表			
				安全管理Ⅱ	2時間	院内講師	3階AB			16(金)【二部制】									
				感染管理Ⅱ	2時間	院内講師	3階AB			16(金)【二部制】									
				高齢者看護　Ⅱ（認知機能障害）	4時間	院内講師	3階AB				4(火)								
				看護記録　Ⅱ	7時間	外部講師	3階AB						5(火)						
				リーダーシップⅡ	3時間	院内講師	3階AB										30(火)		
				事例検討Ⅱに係る付与時間	7時間					→	→	→	→	→	→	→			
				レベルⅡ合計時間数　（レベルⅡ修了認定者：30名）	33時間														
	レベルⅢ	レベルⅡ修了者		キャリア開発	2時間	院内講師	3階AB		19(金)										
				事例研究	8時間	院内講師	3階AB		19(金)									19(月)	
				事例研究相談　選択研修	－	院内講師	3階AB												
				看護倫理Ⅲ(エンド・オブ・ライフケア)	3時間	院内講師	3階AB			12(月)									
				安全管理Ⅲ	4時間	院内講師	3階AB				12(水)								
				看護記録Ⅲ	7時間	外部講師	3階AB							5(木)					
				高齢者看護Ⅲ　統合演習	4時間	院内講師	3階AB								6(月)				
				事例研究に係る付与時間	12時間				→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
				レベルⅢ合計時間数（レベルⅠ修了認定者：24名）	38時間														
ジェネラルコース	レベルⅣ	レベルⅢ修了者		看護倫理Ⅳ（事例検討）	4時間	院内講師	3階AB		30(火)										
				リーダーシップⅣ	11時間	外部講師	3階AB			第1回20(火)	第2回18(火)				第3回8(水)				
				指導者	8時間	外部講師	3階AB			第2回23(金)									第1回6(火)
				看護記録Ⅳ（看護記録指導者）	12時間	外部講師	3階AB								第1回30(木)		第2回28(金)		
				教育担当者	3時間	院内講師	3階AB												8(金)
				看護研究導入研修	3時間	外部講師	3階AB		28(金)										
				看護研究面接・発表	時間	外部講師	3階AB		28(金)		12(水)		1(金)26(火)	25(水)	29(水)	28(火)	11(木)	2(金)発表	
				高齢者看護エキスパートコース	時間	外部講師 院内講師	3階A等												
全レベル対象				メンタルヘルスケア	1時間	院内講師	3階AB				11(火)					18(月)			
				災害看護　基礎編	2時間	院内講師	3階AB			8(木)									
				災害看護　応用編	2時間	院外講師	3階AB											28日(月)	
				糖尿病看護	2時間	院内講師	3階AB									7(木)			
				看護助手との協働推進	2時間	院内講師	3階AB		22(月)	26(月)	21(金)			27(金)				20(火)	
				フィジカルアセスメント　～呼吸～	2時間	院内講師	3階AB								7(火)				
				多職種連携	2時間	院内講師	3階AB										29(月)		
				パワーアップ研修・より良い高齢者看護の実践	2時間	外部講師	3階AB								2(木)				
マスターコース		マネジメントコース		看護マネジメント研修		看護部	3階AB	28(金)	25(木)	22(木)	27(木)		28(木)	26(木)	24(金)	22(木)	22(月)	22(木)	28(木)
				係長昇任前研修		看護部	トレーニングルーム												7(木)
				主任昇任前研修		看護部	トレーニングルーム												7(木)
				昇任主任研修		看護部	トレーニングルーム												14(木)
				主任課題研修		看護部	3階AB等			29(木)	28(金)		29(金)	30(月)	21(火)	19(火)	23(火)	29(木)	25(月)
				次席課題研修		看護部	トレーニングルーム			26(月)	31(月)		25(月)	31(火)	27(月)	25(月)	29(月)	26(月)	
経験者採用				経験者採用職員研修	8時間	院内講師	トレーニングルーム等		1(月)	1(木)	3(月)	1(火)	1(金)	2(月)	1(水)	1(金)	4(木)	1(木)	1(金)
				フォローアップ研修（1ヶ月・3カ月・6ヶ月）	2時間	院内講師	トレーニングルーム等		11(木)		26(水)			23(月)					
看護補助者（看護助手）				看護助手の役割	2時間	看護部	3階AB			6(火)									
				医療安全（安全管理、感染管理）	3時間	院内講師	3階AB						13(水)19(火)						
				日常生活援助	2時間	院内講師	3階AB										19(金)		
専門・認定看護師連絡会　合同研修				フレイルサポートナース育成研修	8時間	院内講師	3階AB									14（木）		17(土)	

2　令和5年度　看護部院外研修派遣実績

研修内容	対象者数(人)	研修日数（日）	延べ人数（人）
東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ 6/30、8/3、9/15、12/15	22	1	22
東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅱ 8/20、11/12	2	1	2
東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅲ 2/23	1	1	1
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：臨地実習指導者研修 4/20，21，6/7	2	3	6
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：看護記録リーダー 6/1、2、30、7/11、12	2	5	10
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：リスクマネジメント（基礎） 7/12、9/22	1	2	2
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：看護倫理（Aクラス・Bクラス） 5/24、31、9/19，26	4	2	8
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：ファシリテーション 10/4、13、17	2	3	6
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：院内教育担当者研修（Aクラス・Bクラス） 5/30、6/28、7/13、19、25、26、28、31	2	5	10
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：人材育成スキルアップ研修 10/19、20、31、11/10	2	4	8
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：看護記録リーダー 6/1、4、18、7/2、16	2	5	10
東京都福祉保健財団・病院経営本部研修：リスクマネジメント（専従・専任リスクマネージャー） 1/26	1	1	1
東京都看護協会：実習指導者研修 11/22～12/6	1	33	33
東京都看護協会：医療安全管理者研修 2/7～24	1	7	7
東京都看護協会：東京都新人看護職員　研修責任者研修 11/21	2	1	2
東京都看護協会：東京都入退院時連携強化研修 10/31、11/2、11/10	1	3	3
東京都看護協会：東京都入退院時連携強化フォローアップ研修 12月～1月	1	6	6
東京都看護協会、全日本病院協会、全国自治体病院協議会：看護補助者活用促進のための看護管理者研修 各5～7月	7	1	7
国立長寿医療研究センター：高齢者医療・在宅医療総合看護研修 各8～11月	3	2	6
東京都リハビリテーション病院：リハビリテーション看護エキスパート研修 各5月～2月	3	8	24
救急車同乗研修（板橋消防署） 12月	1	1	1
日本看護協会：災害支援ナース養成研修 10/28、11/5	1	2	2
合計	64	97	177

認定看護管理者教育課程「ファーストレベル」 東京都看護協会、東京都福祉保健財団、国際医療福祉大学生涯学習センター	6	105時間	
認定看護管理者教育課程「セカンドレベル」 東京都看護協会、国際医療福祉大学	2	180時間	
認定看護管理者教育課程「サードレベル」 国際医療福祉大学	1	180時間	

特定行為看護師養成分野 国際医療福祉大学大学院　4月～	1		
認定看護師教育課程　B課程【皮膚・排泄ケア分野】 京都橘大学看護教育研修センター　4月～3月	1		
認定看護師教育課程　B課程【緩和ケア分野】 静岡県立静岡がんセンター　4月～3月	1		

3　令和5年度　学会派遣実績

NO	学会名称	開催日	会場（開催地）	対象者数（人）	研修日数（日）	延べ人数（人）
1	日本認知症ケア学会	6/3.4	国立京都国際会館	1	2	2
2	日本老年看護学会第28回学術集会	6/16～18	パシフィコ横浜およびWEB開催	4	3	12
3	第34回日本手術看護学会関東甲信越地区	6/24	パシフィコ横浜	1	1	1
4	第28回日本緩和医療学会学術大会	6/30.7/1	神戸国際展示場・神戸国際会議場等	4	2	8
5	第19回 一般社団法人 日本クリティカルケア看護学会	7/1.2	タワーホール船堀	1	2	2
6	第29回日本看護診断学会学術大会	7/1.2	アクロス福岡	1	1	1
7	第32回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会	7/8.9	仙台国際センター	3	2	6
8	第38回日本環境感染学会総会・学術集会	7/20～22	パシフィコ横浜	5	1	5
9	第27回日本看護管理学会学術集会	8/25.26	東京国際フォーラム	3	2	6
10	第23回日本感染看護学会学術集会	8/26.27	WEB開催	2	2	4
11	日本看護学教育学会第33回学術集会	8/26.27	福岡コンベンションセンター	1	1	1
12	第61回全国自治体病院学会	8/31.9/1	札幌コンベンションセンター	1	2	2
13	第25回日本褥瘡学会学術集会	9/1.2	神戸コンベンションセンター	3	2	6
14	第17回日本慢性看護学会学術集会	9/2.3	ステーションコンファレンス川崎、WEB	2	2	4
15	日本地域看護学会第26回学術集会	9/2.3	川崎市立看護大学、WEB開催	1	2	2
16	第29回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術	9/2.3	パシフィコ横浜	2	2	4
17	第20回日本循環器看護学会学術集会	9/16.17	オンライン開催	2	2	4
18	日本エンドオブライフケア学会第6回学術集会	9/16.17	昌賢学園まえばしホール+WEB開催	9	2	18
19	第28回日本糖尿病教育・看護学会学術集会	9/23.24	岡山コンベンションセンター	3	2	6
20	第54回日本看護学会（大阪府立国際会議場）	9/29.30	大阪	2	2	4
21	第25回日本骨粗鬆症学会	9/29.30.10/1	名古屋国際会議場	1	3	3
22	第27回日本心不全学会学術大会	10/6～8	パシフィコ横浜	6	3	18
23	第37回日本手術看護学会年次大会	10/27.28	福岡国際会議場	1	2	2
24	第26回日本腎不全看護学会学術集会・総会	11/18.19	仙台市中小企業活性化センター等	2	2	4
25	日本在宅看護学会学術集会　第13回	11/18.19	船橋市	1	2	2
26	第25回日本救急看護学会学術集会	11/24.25	長崎市	2	2	4
27	第18回医療の質・安全学会学術集会	11/25.26	神戸国際展示場	3	2	6
28	第44回日本死の臨床研究会年次大会	11/25.26	愛媛県県民文化会館	2	2	4
29	第33回日本呼吸ケアリハビリテーション学会・学術集会	12/1.2	仙台国際センター	1	2	2
30	第27回板橋区医師会医学会	12/2	板橋区文化会館	4	1	4
31	第19回東京都福祉保健医療学会	12/2	東京都社会福祉保健医療研修センター	2	1	2
32	第38回日本がん看護学会学術集会	2024.2/24.25	神戸国際展示場等	3	2	6
33	第49回日本脳卒中学会学術大会	2024.3/7～9	パシフィコ横浜	1	2	2
34	第51回日本集中治療医学会学術集会	2024.3/14～16	ロイトン札幌他	1	3	3
35	第46回日本造血細胞移植学会総会	2024.3/21～23	東京国際フォーラム	1	3	3
36	第11回PNS研究会	2024.3/2.3	福井県民ホール	1	2	2
	合計			83	71	165

4　令和5年度　研修生受け入れ実績

	研修内容	受入数	実習日数	延人数	主催施設
認定看護師教育課程「慢性心不全看護」 11月20日～12月21日	臨地実習	2	23	46	北里大学看護キャリア開発・ 研究センター
認定看護師教育課程「皮膚・排泄ケア学科」 （特定行為実習含む） 10月17日～12月5日	臨地実習	2	30	60	日本看護協会看護研修学校
認定看護師教育課程「皮膚・排泄ケア学科」 特定行為実習 12月11日～1月31日	臨地実習	1	15	15	京都橘大学看護教育研修センター
認定看護師教育課程「緩和ケア学科」 特定行為実習 12月4日～1月26日	臨地実習	1	15	15	静岡がんセンター
合計		6	83	136	

5　令和5年度　看護実習生受け入れ実績

学 校 名	学生数	実習日数	延人数	実習科目
都立板橋看護専門学校	30	3	0	基礎実習Ⅰ
	30	9	270	基礎実習Ⅱ
	18	9	162	その人らしさを考える
	6	9	54	その人らしさを支えるⅠ
	6	9	54	その人らしさを支えるⅡ
	11	9	99	その人らしさを支えるⅢ
	15	9	135	老年看護Ⅱ
	30	9	270	成人看護学Ⅰ
	12	9	108	成人看護学Ⅱ
	24	9	216	成人看護学Ⅲ
	40	9	360	統合
東京都立大学	3	8	24	総合臨地看護学実習 （高齢者）
文京学院大学	33	7	231	老年看護学実習
	8	8	64	統合実習
帝京平成大学	54	3	162	基礎看護学Ⅰ
	45	7	315	基礎看護学Ⅱ
	18	5	90	高齢者看護学Ⅰ
日本医療科学大学　保健医療学部看護学科	30	3	90	基礎看護学Ⅰ－②
	30	7	210	基礎看護学Ⅱ
	24	7	168	統合実習
	33	10	330	高齢者看護学Ⅱ
合計	500	158	3,412	

6　東京都ナースプラザ 看護体験受け入れ実績

6名

7　東京都ナースプラザ 新人看護職員7日間研修（病院実習3日間）受け入れ実績

4名

8　その他　病院実習受け入れ実績

台湾　長庚（ﾁｮｳｺｳ）科技大学看護学部　看護学生6名　1日間

JICAモンゴル国看護師の卒後研修強化プロジェクト病院実習　研修生8名　1日間

9　令和5年度　講師派遣実績

	講　師　名	科目（講義内容）	時間数	回数	施設名
1	加 納　江 利 子	看護管理	3時間	3回	東京都立板橋看護専門学校
2	加 納　江 利 子	ファーストレベル　組織管理論Ⅰ	3時間	2回	東京都看護協会
3	蛯　原　大　作	災害危機管理Ⅰ　組織マネジメント論	1時間半	1回	国際医療福祉大学大学院
4	蛯　原　大　作	災害看護	1時間半	2回	東京都立板橋看護専門学校
5	蛯　原　大　作	アメリカ心臓協会　JSISH-ITC BLSプロバイダーコース　インストラクター	4時間	2回	日本医療教授システム学会 東京都健康長寿医療センター
6	蛯　原　大　作	アメリカ心臓協会　JSISH-ITC ACLSプロバイダーコース　インストラクター	12時間	5回	日本医療教授システム学会 東京都健康長寿医療センター
7	鉄　谷　祥　子	認定看護師教育課程「慢性心不全」 心不全患者の療養支援、慢性心不全患者の意思決定と 在宅療養支援・急性増悪時のケア	1時間	4回	北里大学看護キャリア開発・研究センター
8	綾 村　可 歩 理	効果的な実習指導	6時間	1回	東京都ナースプラザ
9	原　口　政　敏	令和5年度福祉保健局・東京都病院機構 専門研修　職種職務専門研修「リスクマネジメント（基礎）」	6時間	1回	公益社団法人東京都福祉保健財団 東京都社会福祉医療研修センター
10	野　島　陽　子	高齢者のスキンケアと創傷ケア	3時間	2回	東京都ナースプラザ
11	野　島　陽　子	排泄障害の管理 ６．排泄ケアの実際	7時間	1回	日本看護研修学校　認定看護師教育課程
12	野　島　陽　子	介護予防ケアマネジメント ～排泄障がいにおけるケア～	2時間	1回	板橋区おとしより保健福祉センター
13	野　島　陽　子	高齢者のストーマケアセミナー	4時間	1回	(株)ホリスター
14	野　島　陽　子	「高齢者看護」レベルⅡ	1時間	1回	かわぐち心臓呼吸器病院看護部
15	髙　木　美　那	高齢者のスキンケアと褥瘡ケア-介護施設・療養の場で-	3時間	1回	東京都ナースプラザ
16	木　村　陽　子	東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ	4時間	4回	認知症疾患医療センター（当院）
17	木　村　陽　子	東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅱ	4時間	4回	認知症疾患医療センター（当院）
18	木　村　陽　子	東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅲ	1日	1回	東京都福祉局高齢者施策推進部
19	木　村　陽　子	第11回認知症疾患医療センター全国研修会東京大会：「認知症ケアと人材育成」	1日	1回	認知症疾患医療センター （当院）
20	木　村　陽　子	認知症ケア：「笑顔を引き出す認知症ケア」	1時間	1回	竹川病院
21	木　村　陽　子	認知症ケア：ユマニチュード等	2時間	1回	佐久大学
22	木　村　陽　子	認知症看護認定看護師へのインタビュー講義	1.5時間	1回	帝京平成大学
23	佐 々 木 知 輝	「認知機能が低下した高齢者の暮らしを支える看護　認知機能が低下した高齢者の理解」	寺間□2クラス	2回	都立板橋看護専門学校
24	佐 々 木 知 輝	人生100年時代を生き抜くためにいまからできること	6時間	1回	東京都看護協会
25	佐 々 木 知 輝	認知症高齢者の意思決定支援	1時間	1回	JR東京総合病院
26	佐 々 木 知 輝	こころとからだのゼミナール	2時間	1回	高島平ココからステーション
27	髙　橋　裕　季	抗がん薬曝露対策セミナー　～見直そう！私とあなたの化学療法・安全対策～	1時間	1回	（株）日本ベクトン・ディッキンソン
28	新 名　由 利 子	摂食嚥下障害の看護	3時間	3回	東京都ナースプラザ
29	新 名　由 利 子	訪問看護師向け摂食嚥下障害の看護	3時間	1回	東京都ナースプラザ
30	金　谷　育　子	画像検査技術学実習Ⅱ（臨床実習）：放射線科業務における感染対策について	3時間	1回	日本医療科学大学
31	堀 川 由 加 里	慢性心不全患者の意思決定支援	90分/回	1回	北里大学看護キャリア開発研究センター　慢性心不全看護認定看護師教育課程
32	堀 川 由 加 里	慢性心不全患者の療養生活支援演習	6時間	2回	北里大学看護キャリア開発研究センター　慢性心不全看護認定看護師教育課程
33	堀 川 由 加 里	病院と在宅の連携方法～心不全ケアを通じて考える～	2時間	1回	東京都看護協会 令和5年度東京都訪問看護教育ステーション事業
34	仲　程　知　恵	「糖尿病治療の基本」	3時間	2回	東京都ナースプラザ
35	野　溝　直	実習指者研修　実習指導案（演習）	3時間	4回	東京都ナースプラザ

10　令和5年度　著書（執筆）実績

	著者名	論文名	書名	出版社
1	蛯　原　　大　作	職務満足度調査のポジティブ活用法	看護展望2024年3月号	（株） メヂカルフレンド社
2	佐　々　木　知　輝	「フレイル予防」　「コミュニケーション」	高齢者ケアアドバンス	インターメディカ社
3	佐　々　木　知　輝	Using the Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON) for early detection of frailty	Geriatrics & Gerontolgy International	日本老年医学会
4	野　島　陽　子	スキン-テア、褥瘡ケア、排泄ケア等	高齢者の看護	インターメディカ
5	野　島　陽　子	ご遺体のストーマ管理・ストーマケア	ストーマケアベストプラクティス	照林社

11　令和5年度　学会発表実績

NO	研究者名	演　題　名	学会名称	年月日	発表形式
1	佐々木知輝	Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON)	IAGG　Asia/Oceania Regional Congress 2023	令和5年6月	ポスター
2	治久丸尚美・梅田真由美・都築紀子・佐藤妙子	Disturbed sleep-wake rhythm and cognitive dysfunction among inpatients in a geriatric hospital	IAGG　Asia/Oceania Regional Congress 2023	令和5年6月	ポスター
3	飯野君江	終末期患者の家族への援助～家族エンパワメント理論を用いて振り返る～	第38回日本がん看護学会学術集会	令和6年2月	ポスター
4	木村陽子	超高齢腎不全患者のエンドオブライフケア ～急性期から在宅療養、看取りまで～	日本エンドオブライフケア学会	令和5年9月	ポスター
5	野島　陽子 髙木　美那	ストーマ周囲に生じた壊疽性膿皮症による 難治性潰瘍が治癒に至るまでの経過報告	第32回日本創傷・オストミー・失禁管理学会	令和5年7月	口演 一般演題
6	成田　由香　佐々木知輝 亀井めぐみ　今井典子 田子真理絵　綾村可歩理	院内認定「フレイルサポートナース」育成研修の評価と今後の課題	第61回全国自治体病院学会in北海道	令和5年9月	ポスター
7	野島　陽子	認知症をもつストーマ保有者と 家族に寄り添い続ける ストーマ外来で在るために	第44回 神奈川ストーマリハビリテーション研究会	令和5年9月	シンポジスト
8	堀川　由加里	日本循環器看護学会・エンドオブライフケア学会合同シンポジウム 心不全の治療のプロセスとエンドオブライフケア	第20回循環器看護学会、第6回日本エンドオブライフケア学会	令和5年9月	口演
9	渡部　眸美	「認知症高齢者への周術期看護において新卒手術室看護師が捉える倫理的問題とその対応」～1事例の検討を通して～	第37回日本手術看護学会年次大会	令和5年10月	ポスター
10	金谷　育子	ナッジを用いた手指衛生遵守率向上の取り組み	第19回東京都福祉保健医療学会	令和5年12月	ポスター
11	上村大輔　髙木美那 川崎愛莉 小國拳斗　和田彩	泌尿器科患者における 術後のテネスムス症状出現に影響する要因について	第19回東京都福祉保健医療学会	令和5年12月	ポスター
12	渡邊　千里	慢性腎臓病患者へのACPアプローチによる看護支援	第27回　板橋区医師会医学会	令和5年12月	口演
13	山本　紗菜	脳卒中ケアユニットでのオンライン面会を実施して	第27回　板橋区医師会医学会	令和5年12月	口演
14	山崎　彩乃	2型糖尿病患者に対するACP支援 ～ACPが血糖コントロールに及ぼす効果について～	第27回　板橋区医師会医学会	令和5年12月	口演
15	宮澤　美穂	患者への意思決定支援の振り返り	第27回　板橋区医師会医学会	令和5年12月	口演

医療連携係

係長　中馬　かつら

1　人員体制

常勤職員　中馬　かつら、安藤　玲奈（～7 月 31 日）、齊藤　恵、前田　悠希、中村　圭一、池野谷　美奈（8 月 1 日～）

2　活動実績

【紹介率/逆紹介率】

紹介率：78.1%（令和 4 年度：72.0%）

逆紹介率：107.9%（令和 4 年度：88.9%）

初診料算定患者数：15,297 人（令和 4 年度 18,387 人）

【集患に向けた取り組み】

診療科医師による積極的な医療機関訪問を促進するとともに医師訪問の同行、連携係員単独での訪問も実施した。

地域連携ニュースの発行：4 回

公開 CPC：2 回（令和 5 年 7 月 27 日、11 月 16 日）

各種セミナー（製薬会社と共催）の実施：6 回（令和 5 年 6 月 12 日、8 月 4 日、8 月 25 日、令和 6 年 2 月 20 日、3 月 7 日）

【かかりつけ医紹介窓口】

逆紹介推進のため、センターにおける急性期治療が終了し、かかりつけ医をお持ちでない患者さんへかかりつけ医紹介窓口にて医療機関の紹介を行った。

窓口対応件数：703 件（令和 4 年度 433 件）・　連携医療機関数：874 件（令和 4 年度 846 件）

【医療機関オンライン予約システム（C@RNAconnect）の推奨】

連携医向け広報誌への掲載や医療機関を訪問しタブレット端末で操作説明を行うなど、スムーズな予約取得のご案内に努めた。

・登録医療機関数：130 件（令和 4 年度 110 件）

・オンラインによる高額機器共同利用件数：1,057 件（令和 4 年度 1,064 件）

【救急外来増患に向けた取り組み】

救急外来患者増加を目指し、救急部会事務局として活動。

救急救命士 2 名体制による自院救急車の運用を開始。転院搬送のほかに、近隣医療機関から当センターへの脳卒中患者の搬送を担う等救急医療の充実を図った。

救急患者受入総数：8,612 人（令和 4 年度 10,336 人）

救急車受入件数：4,431 台（令和 4 年度 4,246 台）

自院救急車稼働件数：268 件

【東京都在宅難病患者一時入院事業実績】

受入件数：34 件（令和 4 年度 29 件）

【レカネマブ実施協力】

各科との協力のもとレカネマブ予約開始、実施準備を行った。

在宅医療・福祉相談係

係長　奥村　真木

1　人員体制

【係長】奥村真木【次席】川口東子【主任】清水義尉、津川晴奈、瀬川寿行、西山亜矢子【主事】竹原史穂、品川香菜子（産休・育休中）、賀来尚人、杉山由実子、岩崎藍子

【非常勤】小澤利香　嶋田尚子

2　活動内容・実績

【相談件数・内容】

相談業務総件数は88,691件。相談内容の内訳は、退院に伴う相談が最も多く83.1%（内、転院・施設入所の相談79.1%、自宅退院に向けての相談が7.9%）。次いで療養上の相談3.5%、経済相談2.8%、福祉制度の相談1.6%となっている。

転院相談では、長期療養可能な療養型病院をはじめ、治療継続可能な一般病院、回復期リハビリテーション病院、地域包括ケア病院への転院調整。また、昨今増加傾向にある癌末期及び難病患者を専門に受入れる有料老人ホームへの退院調整も大幅に増えた。自宅への退院調整には、ケース内容（点滴・酸素・吸引など医療行為がある患者で手技指導が必要な場合）により同室の在宅看護相談室と協力しながら進めている。

【退院支援】

在宅医療・福祉相談係は、積極的な早期介入・早期退院、在院日数の短縮とベッド稼働率とのバランスに努めている。具体的には、日々病棟カンファレンスへの参加、病棟ラウンドを実施。チーム医療を意識し医師・看護師・コメディカル・事務員等スタッフとの情報共有、方針協議を日々積極的に行っている。とりわけ、入院前からの早期介入を心掛け各種支援を行った。

板橋区における「新型コロナウィルス対策に係る病院間連携体制整備事業」〈板橋区医師会　療養相談室〉を活用し、新型コロナウィルス感染患者の円滑な退院支援にも注力した。この事業は、2021（令和3）年1月8日～2023（令和5）年5月8日迄運営され、この事業を通じて計150人の退院調整を行った。

また、退院支援をより効率的に行うため『脳卒中リハビリほっとライン』の発足準備を開始。近隣病院10医療機関と連携を組み、来年度運用実施に向けて協議を重ねた。これは、脳卒中回復期の患者が早期に連携病院へ転院し、速やかにリハビリへ移行出来るよう効率的に調整を進めることが目的である。

また、専従MSWによるセンター全体の長期入院患者管理を開始して8年目を迎えた。これは、入院が長期化している理由を解明し、今後の方向性を各診療科部長及び主治医等に確認し速やかな退院支援を推し進めるため入院期間18日以上を対象に実施している。今後も、専任MSW及び医師・看護師等多職種で協働しながら長期入院患者数の削減を促進する。

【退院支援加算Ⅰ】

今年度も引き続き「入退院支援加算Ⅰ」（700点/件）の算定に尽力した。コスト算定の為、日頃から病棟や在宅看護師と積極的に連携を図っている。また、入退院サポートセンター発足により令和5年5月より「入院時支援加算1」のコスト算定に着手。確実なコスト算定を目指し医師を始め、外来看護師、薬剤科、栄養科など多職種との協働に努めた。令和5年度の入退院支援加算1のコスト算定件数は5,004件で、前年度より364件増加。入院時支援加算1のコスト算定件数は681件である。

【その他の業務】

医療・福祉情報紙『ごぞんじですか？』随時更新・配布/看護部院内研修講師（随時）/退院支援チーム参加（12回/年）/慈誠会SW部会参加（3回/年）/板橋区在宅療養ネットワーク懇話会参加（2回/年）/豊島区訪問看護ステーション意見交換会参加（1回/年）/板橋区医療介護連携を考える会（1回/年）/練馬区多職種連携会議参加（1回/年）

老年学情報センター

宮本　孝一

老年学情報センターは、健康長寿医療センター職員用図書館として、臨床・教育・調査・研究を、資料の収集・提供及び学会発表の補助で支援している。

看護部の院内研修では、文献検索・文献入手、老年学情報センターの利用案内、スライド作成について講義を行った。

また、4 月には初期研修医向けに老年学情報センターに関するガイダンスを行っている。

5 月より宮本は常勤勤務となり、センターの広報活動にも加わることとなった。

(1) 購読雑誌の選定

洋雑誌は購読中止は行わなかった。和雑誌は購読中止 4 誌。

2024 年購読誌の選定では、円安の進行により洋雑誌の価格が総額で 20%近い上昇となり、過去最大の値上がり率となった。購読中止はせず、既存雑誌を全点継続とした。和雑誌は円安による値上がりは見られなかったが、利用状況による購読中止 4 誌、休刊 2 誌となった。円安の状況から和洋雑誌とも新規購読は行わなかった。

雑誌の購読点数は年々減少が続いている。洋雑誌は利用状況（オンラインジャーナル 1 アクセス当たりの費用）での購読中止、和雑誌は利用状況（閲覧・貸出・複写の 1 回当たり費用）での購読中止と雑誌休刊による。

(2) 図書の購入

職員用図書、患者用図書とも例年並みの予算で図書を購入。

(3) IAGG アジア/オセアニア国際老年学会議関連

・センター新パンフレット　日本語版・英語版の制作

デザイン・レイアウト作業を行い、印刷用の PDF ファイルを作成した。

・会場に展示するパネル 22 枚（84 ㎝×120 ㎝）のデザイン・レイアウトを行った。

・パネルを展示するブースの配置や展示のプランを作成し、イベント業者との打ち合わせを進めた。

・会場設営・撤去作業の指示を行った。

(4) 新たな取り組み

【教育】

○職員向け動画教材の公開　職員対象の動画教材を作成し、ガルーンで公開した。

・テーマ　「渋沢栄一と東京都健康長寿医療センター」　全 12 話

・テーマ　「医中誌 WEB　文献検索　文献入手」　全 7 話

・テーマ　「ワード・パワポでデザイン　刺さる表現をデザインの基礎から考えてみよう」　全 12 話

【広報】

①センター広報の方針とスケジュールについて提案を行った。

②センターホームページの閲覧状況についてのサイト分析を行い、レポートにまとめた。

③病院広報について、紹介患者増に向けて、二次医療圏内の急性期病院の実績比較、重点診療科案、数値目標案、今後の取り組み案をまとめて、レポートを提出した。

④公立図書館での展示

板橋区立図書館から、渋沢栄一に関する展示の依頼があり、図書館を会場にした 1 か月間の展示を 3 回行った。

・令和 5 年 8 月　区立高島平図書館　テーマ「子どもたちの近代」　・・・養育院創設から渋沢栄一逝

去までの、院の児童保護・自立教育の事業、および、渋沢栄一没後から東京都健康長寿医療センターに至る養育院史と、現在の東京都健康長寿医療センターの事業を紹介。

・令和 5 年 11 月　区立高島平図書　テーマ「多病息災 渋沢栄一　寿命の人間学（ジェロントロジー)」　・・・渋沢栄一の寿命観と、現代の老年学を紹介。

・令和 6 年 1 月　区立赤塚図書館　テーマ「多病息災 渋沢栄一　寿命の人間学（ジェロントロジー)」

●運営報告

① 資料の収集・整理　令和 5 年度

雑誌	外国雑誌	39	冊子 3	オンライン 36	+シュプリンガー・メドライン・コレクション約 470 誌パッケージ
	国内雑誌	38	冊子のみ		
図書	職員用図書	91	購入 58	寄贈 33	※厚生統計協会刊行の統計類除く
	一般向け図書	61	購入 58	寄贈 3	

②蔵書数　令和 6 年 3 月 31 日現在

雑誌（和・洋）	198	タイトル数　オンラインジャーナル単独誌契約含む　シュプリンガー・メドライン・コレクションは含まない
図書	1,380	老人総合研究所・老人医療センター・健康長寿医療センター刊行物や厚生統計類除く
一般向け図書	1,579	冊数

② 貸出　令和 5 年度

職員用図書	雑誌	一般向け図書
63	132	95

④文献取り寄せへの対応　令和 5 年度

	都医学研	都立（公社等）病院	大学図書館	病院図書室	当室所蔵	WEB フリー公開	入手不能
入手	0	0	1,552	219	97	391	174
送付	0	14	0	2	－	－	－

養育院・渋沢記念コーナー

顧問医　稲松孝思　老年学情報センター　宮本孝一

2013年に現在の施設開設に際し、玄関の円筒棟の2階に『養育院・渋沢記念コーナー』が設置された。

このコーナーでは、明治5年の養育院開設から現在の東京都健康長寿医療センターに至る歴史を紹介している。また、センター各部門の催しの広報、患者・家族のための医療・健康情報を提供している。

1)「養育院・渋沢記念コーナー」の利用状況

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため飲食は禁止とし、ボランティア活動も2023年11月まで休止した。

2) 歴史展示・櫻園通信

・当院の歴史資料とパネル、渋沢の墨跡、各種写真を展示、歴史ビデオ、講演スライドを供覧。
・展示物を解説した冊子「ようこそ養育院・渋沢記念コーナーへ」を配布している。
・歴史案内「櫻園通信」の作成、配布は継続し、病院ホームページでpdfファイルを公開している。

3) なるほど！からだラウンジと養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

・患者図書室サービス：疾患や治療法の理解、介護生活、健康増進に役立つ図書及び渋沢栄一・養育院関連図書の収集。新型コロナウィルス感染症流行で11月まで貸出は休止。11月20日貸出サービス再開。

4) 養育院史などに関する著作,講演,出張展示

・稲松孝思：渋沢栄一の社会事業について.第124回医史学会シンポジウム医療と文化.2023年6月3日（東京・二松学舎）
・宮本孝一：展示「子どもたちの近代　渋沢栄一院長の養育院」.板橋区立高島平図書館.2023年8月2日-30日
・宮本孝一：多病息災”渋沢栄一　寿命の人間学（ジェロントロジー）.板橋区渋沢栄一公開講座　2023年11月24日
・宮本孝一：展示「多病息災 渋沢栄一 寿命の人間学（ジェロントロジー)」.板橋区立高島平図書館.2023年11月2日-29日
・稲松孝思：TVドラマの歴史的事実について“青天を衝け”“らんまん”を観て. 橋区渋沢栄一公開講座 2023年11月24日
・宮本孝一：展示「多病息災 渋沢栄一 寿命の人間学（ジェロントロジー)」.板橋区立赤塚図書館.2024年1月5日-30日
・稲松孝思：渋沢栄一の社会事業について. 練馬区地域公開講座「生涯養育院長さんとして　渋沢栄一」.2024年2月6日　大泉学園　夢リアホール

Ⅱ　令和５年度研究活動報告

名誉理事長　井藤英喜

●雑誌論文

1. Seigo Mitsutake,Tatsuro Ishizaki,Shohei Yano,Rumiko Tsuchiya-Ito,Kazuaki Uda,Kenji Toba,Hideki Ito：All-cause readmission or potentially avoidable readmission:Which is more predictable using frailty,comorbidities,and ADL?.Innovation in Aging 7(5):1-8,2023.igrad043,https://doi.org/10.1093/geroni/igrad043,advance access publication: 15 May 2023
2. Mitsutake,S.,Yano,S.,Ishizaki,T.,Furuta,K.,Hatakeyama,A.,Sugiyama,M.,Awata,S.,Ito,H.,Toba,K.:Association of functional and cognitive impairment severity with discharge to long-term care facilities in older patients admitted to a general acute care hospital from home. Archives of Gerontology and Geriatrics 115:105111,2023. https://doi.org/10.1016/j.archger.2023.105111

●総説

1. 井藤英喜：高齢社会において感じること.Geriatric Medicine 61(4):351-352,2023
2. 井藤英喜：書評 高齢者糖尿病の診療・研究に関わる全職種の座右の書、日本老年医学会・日本糖尿病学会編・著「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023」.内科 132(5):973,2023.
3. 井藤英喜：書評 自律神経系研究の発展の歴史がよくわかる、自律神経系研究の面白さがわかる本、佐藤郁子著「生理学をめぐる旅-研究を紡いだ若者たち-」.中外医学社ホームページ,2023 年 10 月.http://www.chugaiigaku.jp/item/detail.php?id=4347

●単行書・報告書

1. 井藤英喜(監修)：介護をする家族のため介護と保健ガイドブック(2023 年度版),一般社団法人日本保健情報コンソシウム,東京,2023.
2. 井藤英喜（監修）：輝くシニアのための糖質&カロリーコントロール-適正な栄養摂取-,日本保健情報コンソシウム,東京,2023.
3. 井藤英喜（監修）：ニオイ対策 BOOK-介護の悩みを解決し、QOL を向上,一般社団法人日本保健情報コンソシウム,東京,2023.
4. 井藤英喜（医学監修）：新訂第 2 版　写真でわかる高齢者ケアアドバンス-高齢者の心と体を理解し、フレイルを予防し生活の営みを支える,監修：古田愛子,医学監修：井藤英喜,インターメディカ,東京,2024.

理事長　鳥羽研二

●雑誌論文

1. Uchida K, Sugimoto T, Murotani K, Tsujimoto M, Kishino Y, Kuroda Y, Matsumoto N, Fujita K, Suzuki K, Ono R, Akisue T, Arai H, Toba K, Sakurai T : A Combined Index Using the Mini-Mental State Examination and Lawton Index to Discriminate Between Clinical Dementia Rating Scores of 0.5 and 1:A Development and Validation Study. Clin Psychiatry 20;85(2):23, 2023.
2. Kikuchi M, Miyashita A, Hara N, Kasuga K, Saito Y, Murayama S, Kakita A, Akatsu H, Ozaki K, Niida S, Kuwano R, Iwatsubo T, Nakaya A, Ikeuchi T, Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative ; Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative : Polygenic effects on the risk of Alzheimer's disease in the Japanese population. Alzheimers Res Ther 16(1):45, 2024.
3. Sasaki T, Ueda T, Negishi Y, oyoshima K, Yoshioka M, Ohta H, Araki A, Toba K : Using the prefrailty scale for appearance observation by nurses (PAON) for early detection of frailty. Geriatr Gerontol Int 24 Suppl1:396-397, 2024.
4. Bae S, Shimada H, Lee S, Makino K, Chiba I, Katayama O, Harada K, Park H, Toba K : Subjective Cognitive Decline and Frailty Trajectories and Influencing Factors in Japanese Community-Dwelling Older Adults:A Longitudinal Study. J Clin Med 12(18):5803, 2023.
5. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Suzuki H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K:RIDE Cohort Study investigators : Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers:The IRIDE cohort study. Geriatr Gerontol Int 23(11):887-888, 2023.
6. Abe T, Yamashita M, Fujiwara Y, Sasai H, Obuchi SP, Ishizaki T, Awata S, Toba K:IRIDE Cohort Study investigators : Fluctuations in Cognitive Test Scores and Loss to Follow-Up in Community-Dwelling Older Adults:The IRIDE Cohort Study. Dement Geriatr Cogn Disord 52(5-6):296-303, 2023.
7. Mitsutake S, Yano S, Ishizaki T, Furuta K, Hatakeyama A, Sugiyama M, Awata S, Ito H, Toba K:Association of functional and cognitive impairment severity with discharge to long-term care facilities in older patients admitted to a general acute care hospital from home. Arch Gerontol Geriatr. 115:105111, 2023.
8. Mitsutake S, Ishizaki T, Yano S, Tsuchiya-Ito R, Uda K, Toba K, Ito H:All-Cause Readmission or Potentially Avoidable Readmission:Which Is More Predictable Using Frailty, Comorbidities, and ADL?. Innov Aging 7(5):igad043, 2023.
9. Ohta T, Sasai H, Osuka Y, Kojima N, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K:IRIDE Cohort Study Investigators:Age- and sex-specific associations between sarcopenia severity and poor cognitive function among community-dwelling older adults in Japan:The IRIDE Cohort Study. Front Public Health 11:1148404, 2023.
10. Winston CN, Langford O, Levin N, Raman R, Yarasheski K, West T, Abdel-Latif S, Donohue M, Nakamura A, Toba K, Masters CL, Doecke J, Sperling RA, Aisen PS, Rissman RA : Evaluation of Blood-Based Plasma Biomarkers as Potential Markers of Amyloid Burden in Preclinical Alzheimer's Disease. J Alzheimers Dis 92(1):95-107, 2023.

センター長　許 俊鋭

●雑誌論文

1. 許　俊鋭,河田光弘,五條理志：「リフレーミング」心臓外科医からの期待:心臓移植,心臓再生医療.医工学治療 35(3):165-169,2023.
2. 河田光弘,村田知洋,眞野暁子,乾　明敏,許　俊鋭：陳旧性脳梗塞で右片麻痺のあるA型急性大動脈解離,severe ARに対して新型コロナ禍の救急対応を行い救命できた1例.ICUとCCU 47:S57-61,2023
3. Mano A,Murata T,Inui A,Kawata M,Kyo S：“Acute myocardial infarction due to left main trunk ostial stenosis occurring in the acute phase after aortic valve replacement”.Cureus 22 15(10):2023.
4. Mano A,Murata T,Inui A,Kawata M,Kyo S：“Severe left ventricular failure unmanageable by Impella 5.0”.Cureus 28 15(10):2023.
5. 村田知洋,乾 明敏,眞野暁子,河田光弘,許 俊鋭：COVID-19関連肺炎を罹患した上肢急性動脈閉塞症の1例.日本血管外科学会雑誌 32(4):301-305,2023.
6. Mano A,Murata T,Date K,Kawata M,Sato M,Yamashita N,Iino K,Kyo S,Saito E：Dexmedetomidine for dyspnoea. BMJ Support Palliat Care 13(e1):e84-e85,2023.

●総説

1. 許　俊鋭：HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入（1）「体外式 VAD 開発～製造販売承認～心臓移植ブリッジ使用の軌跡」.BIO Clinica 39(2):126-131,2024.
2. 許　俊鋭：HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入（2）「第一世代拍動流植込型 LVAD 臨床導入から補助人工心臓治療関連学会協議会（VAD 協議会）設立の軌跡」.BIO Clinica 39(4):33-38,2024.
3. 許　俊鋭:HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入（1）「VAD 協議会設立後の活動:連続流植込型LVAD 承認・保険償還の経緯」.BIO Clinica 39(4):478-483,2024.
4. 許　俊鋭:HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入（1）「DT（Destination Therapy）,小児用 VAD（EXCOR）,カテーテル VAD（Impella）の臨床導入の経緯」.BIO Clinica 39(9):751-756,2024.
5. 許　俊鋭：「CE 図鑑」臨床工学技士のココがすごい！.Clinical Engineering 35(1):4,2023.
6. 許　俊鋭：心臓死ドナー心を用いた心臓移植成績（解説：許 俊鋭氏）－1689（carenet.com）<https ://www.carenet.com/news/clear/journal/56708>
7. 許　俊鋭：VAHEART 臨床治験「EVAHEART 装着下にご結婚された小暮直樹さんの思い出」.大阪大学移植医療部20 周年記念誌：22-23,2024.
8. 許　俊鋭：私の海外留学見聞録「マサチューセッツ総合病院(MGH)留学と築いた人脈」.集中/MediCon 2023 Oct.:26-27,2023.
9. 許　俊鋭：リレーエッセイ第12回：本邦への植込型LVAD臨床導入とそのエピソード.日本人工臓器学会HP(2023.10.19)<https://www.jsao.org/essay/essay015/>
10. 許　俊鋭:第60回日本人工臓器学会特別講演「本邦における Destination Therapy 導入までの歩み」.人工臓器 52(1):12-13,2023.
11. 許　俊鋭,小金丸博,増田義重,出崎奈美,金谷育子,島崎良知,太田日出,佐藤芳雄,豊田雅士,鳥羽研二：新型コロナウイルス感染症へのセンターの取り組み.東京都健康長寿医療センター病院,研究所開設 50 年・養育院創立150年記念誌：50-52,2023.
12. 許　俊鋭：東京都健康長寿医療センターにおける新型コロナウイルス感染(コロナ)パンデミックに対する取り組み.新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020年～2023年）.東京都健康長寿医療センターHP https://www.tmghig.jp/cms_upload/dfafa334857a73aa1ebf3c2cd4e8cb32_1.pdf

●学会・研究会発表

1. 許　俊鋭:より良い在宅治療を考える:人工心臓.日本医工学治療学会第39回学術大会.川越プリンスホテル,5月13日,2023.
2. 許　俊鋭：人工心臓と私～在宅治療に向けた人工心臓の歴史を振り返る～.日本医工学治療学会第39回学術大会.川越プリンスホテル,5月13日,2023.
3. 許　俊鋭,河田光弘,五條理志：特別企画　「リフレーミング」 心臓医からの期待.日本医工学治療学会第39回学術大会.川越プリンスホテル,5月13日,2023.
4. KYO S,TOBA K：Introduction of TMIG. Brief history from “Yoikuin” to the “TMIG”.7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium.TMIG,Oct 16-18th,2023.
5. Ishikawa J,Araki A,Harada K,Kyo S:Wearable watch device use to detect Atrial fibrillation and He

art failure for prevention of frailty. Symposium 14 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023
6. 許　俊鋭:健康な心臓を保つために日常生活で注意すること.未病息災カンファレンス.九段会館,3 月 11 日,2023.
7. 許　俊鋭：本邦における植込型 LVAD Destination Therapy 導入までの歩み.医療価値評価の胎動プログラム 2022.東大,3 月 1 日,2024.
8. Mitsuhiro Kawata,Tomohiro Murata,Akiko Mano,Akitoshi Inui,Shunei Kyo：Successful ascending aorta replacement using intermittent pressure-augmented retrograde cerebral perfusion (IPA-RCP) for acute aortic dissection type A in nonagenarian patients in the COVID-19 era.The 31st Annual meeting of the Asian society for cardiovascular and thoracic surgery,BEXCO.Busan,Korea,5 月 31 日-6 月 3 日,2023.
9. Mitsuhiro Kawata,Tomohiro Murata,Akiko Mano,Akitoshi Inui,Shunei Kyo：Efficacy of intermittent pressure-augmented retrograde cerebral perfusion (IPA-RCP) for acute aortic dissection type A in a nonagenarian.The 12th International Association of Gerontology and Geriatric(IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023,PACIFICO Yokohama NORTH,Yokohama,JAPAN,6.12-15,2023.
10. Ishikawa J,Araki A,Harada K,Kyo S:Wearable watch device use to detect Atrial fibrillation and Heart failure for prevention of frailty. Symposium 14. The 12th International Association of Gerontology and Geriatric(IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023,PACIFICO Yokohama NORTH,Yokohama,JAPAN,6.12-15,2023.
11. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例.東京胸部外科懇話会　2023 年度.東京,7 月 17 日,2023.
12. Kyo S,Toba K：Introduction of TMIG.Brief history from“Yoikuin”to the“TMIG”.7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium. 東京都健康長寿医療センター,10 月 16 日-18 日,2023.
13. 河田光弘,村田知洋,眞野暁子,乾　明敏,許　俊鋭：Malperfusion を伴う急性 B 型大動脈解離に対して緊急 TEVAR＋末梢血行再建にて救命,救肢できた 1 例.第 26 回大動脈ステントグラフト研究会.奈良,2023.11.3
14. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例.第 193 回日本胸部外科学会関東甲信越地方会.東京,2023.11.11
15. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：脳梗塞を契機に発見された急性 A 型大動脈解離.第 27 回板橋区医師会医学会. 板橋区立文化会館 東京,12 月 2 日,2023.
16. 河田光弘,村田知洋,眞野暁子,乾　明敏,許　俊鋭：下半身灌流障害を伴う B 型急性大動脈解離に対して緊急 TEVAR+末梢血行再建にて救命,救肢出来た 1 例.第 43 回東京 CCU 研究会.日本橋ラーニングセンター,12 月 23 日,2023.
17. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例.東京胸部外科懇話会　2023 年度.東京,7 月 17 日,2023.
18. Kyo S,Toba K：Introduction of TMIG. Brief history from“Yoikuin”to the“TMIG”.7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium.東京都健康長寿医療センター,10 月 16 日-18 日,2023.
19. 河田光弘,村田知洋,眞野暁子,乾　明敏,許　俊鋭：Malperfusion を伴う急性 B 型大動脈解離に対して緊急 TEVAR＋末梢血行再建にて救命,救肢できた 1 例.第 26 回大動脈ステントグラフト研究会.奈良,11 月 3 日,2023.
20. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例.第 193 回日本胸部外科学会関東甲信越地方会.東京,11 月 11 日,2023.
21. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：脳梗塞を契機に発見された急性 A 型大動脈解離.第 27 回板橋区医師会医学会.板橋区立文化会館　東京,12 月 2 日,2023.
22. 河田光弘,村田知洋,眞野暁子,乾明敏,許　俊鋭：下半身灌流障害を伴う B 型急性大動脈解離に対して緊急 TEVAR+末梢血行再建にて救命,救肢出来た 1 例.第 43 回東京 CCU 研究会.日本橋ラーニングセンター,12 月 23 日,2023.
23. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭:2023 年度報告.東京胸部外科懇話会 2023 年度冬 報告会.東京大学医学部附属病院 臨床研究棟Ａ 1 階会議室,12 月 17 日,2023.
24. 乾　明敏,村田知洋,眞野暁子,河田光弘,許　俊鋭：術後 5 年半で人工弁機能不全をきたした 1 例.第 194 回日本胸部外科学会関東甲信越地方会.宇都宮,3 月 16 日,2024.

●講師等院外活動（講演・放送等）
1. 許　俊鋭:本邦における補助人工心臓治療-特に植込型 LVAD の実施施設・実施医基準について-第 30 回東大・東京女子医大 VAD 研修コース.東大+Web,5 月 28 日,2023.
2. 許　俊鋭:本邦における補助人工心臓治療-特に植込型 LVAD の実施施設・実施医基準について-第 31 回東大・東京女子医大 VAD 研修コース.女子医大+Web,11 月 14 日,2023.

3. 許　俊鋭：重症心不全の外科治療 特に補助人工心臓と心臓移植. 第 47 回東京電機大学 E 講座. WEB 配信,11 月 14 日,2023.
4. 許　俊鋭：補助人工心臓治療とエンド・オブ・ライフケア.第 7 回エンド・オブ・ライフケア研修会.TMGH,1 月 27 日,2023.

副院長　原田和昌

●雑誌論文

1. Aoyama R,Takeda K,Ishikawa J,Harada K：Short-term effects of transcatheter aortic valve replacement on blood pressure and cardiac function in elderly patients with severe aortic stenosis.Blood Press Monit 28(2):103-108,2023.
2. Murao Y,Ishikawa J,Tamura Y,Kobayashi F,Iizuka A,Toba A,Harada K,Araki A：Association between physical performance during sit-to -stand motion and frailty in older adults with cardiometabolic diseases:a cross-sectional,longitudinal study.BMC Geriatr 23 (1):337,2023.
3. Ishikawa J,Toba A,Tamura Y,Araki A,Harada K：Changes in blood pressure associated with frailty and sarcopenia in elderly outpatients with cardiometabolic diseases.Geriatr Gerontol Int 23(7):506-516,2023.
4. Yamamoto T,Harada K,Yoshino H,Nakamura M,Kobayashi Y,Yoshikawa T,Maejima Y,Otsuka T,Nagao K,Takayama M：Impact of the COVID-19 pandemic on incidence and mortality of emergency cardiovascular diseases in Tokyo,J Cardiol 82(2):134-139,2023.
5. Ishikawa J,Toba A,Tamura Y,Araki A,Harada K：Relationship between blood pressure and cognitive impairment in elderly outpatients with cardiometabolic diseases,Geriatr Gerontol Int Nov 7,2023.
6. Toba A,Ishikawa J,Harada K：Automated office blood pressure measurement with the assistance of an instructional video in patients with hypertension.Blood Press Monit 2023 Nov 15.
7. Matsushita K,Harada K,Kohno T,Nakano H,Kitano D,Matsuda J,Takei M,Yoshino H,Yamamoto T,Nagao K,Takayama M：Prevalence and clinical characteristics of diabetic cardiomyopathy in patients with acute heart failure.Nutr Metab Cardiovasc Dis 2023 Dec 19:S0939-4753(23)00507-0.
8. Jimba T,Kodera S,Kohsaka S,Otsuka T,Harada K,hindo A,Shiraishi Y,Kohno T,akei M,Nakano H,Matsuda J,amamoto T,Nagao K,Takayama M：Forecasting the Acute Heart Failure Admissions: Development of Deep Learning Prediction Model Incorporating the Climate Information.J Card Fail 30(2):404-409,2024.
9. Yorikawa F,Ishikawa J,Tamura Y,Murao Y,Toba A,Harada K,Araki A：Determinants of depressive symptoms in older outpatients with cardiometabolic diseases in a Japanese frailty clinic: importance of bidirectional association between depression and frailty,PLoS One,2023;18:e0281465.
10. Ishikawa J,Harada K：Heart and Brain Failure,The Vicious Cycle of the Heart-Brain Interaction,JACC: Asia 3:120-121,2023. Editorial comment.
11. 小川雅史,村田哲平,石川譲治,原田和昌：カテーテル的血栓溶解療法施行後に血栓が改善された後期高齢者の深部静脈血栓症の１例.日本老年医学会雑誌 60(3):275-282,2023.

●総説

1. 原田和昌：減塩１グラムで血圧１低下.日刊スポーツ 2023.12.24:p13.
2. 原田和昌：血圧は「高め」でもダメ.日刊スポーツ 2023.12.25:p21.
3. 原田和昌：食物繊維を意識する.日刊スポーツ 2023.12.26:p23.
4. 原田和昌：減塩で認知症予防も.日刊スポーツ 2023.12.27:p23.
5. 原田和昌：減塩作戦に乗ってみる.日刊スポーツ 2023.12.29:p25.
6. 原田和昌：動脈硬化が治る？.日刊スポーツ 2023.12.30:p23.
7. 原田和昌：隠れ心不全に注意.日刊スポーツ 2023.12.31:p25.
8. 原田和昌：血圧測定の習慣化を.日刊スポーツ 2024.1.6:p23.
9. 原田和昌：sotatercept は新しい作用機序の肺動脈性肺高血圧症の新薬である.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1659,2023.4.12 公開
10. 原田和昌:遠隔血行動態モニタリングシステムは心不全患者 EF に関係なく入院を減少させ、QOL を改善する.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1699,2023.7.25 公開
11. 原田和昌：拡張型心筋症の遺伝子構造はアフリカ系と欧州系患者とで異なっている.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1719,2023.9.11 公開
12. 原田和昌：カテーテルアブレーションは心房細動を伴う末期心不全の予後を改善する.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1729,2023/10/05 公開
13. 原田和昌：アントラサイクリン系薬剤による心機能障害をアトルバスタチンは抑制したがプラセボとの差はわずかであった.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1730,2023.10.6 公開
14. 原田和昌：RNA 干渉治療薬パチシランはトランスサイレチン型心アミロイドーシス患者の 12 か月時の機能的

能力を維持したが全死因死亡や心血管イベントは低下しなかった.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1764,2023.12.20 公開
15. 原田和昌：症候性の重症大動脈弁狭窄症に対する新しい非侵襲的超音波治療(NIUT)の可能性.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1778,2024.1.24 公開
16. 原田和昌：高親和性 TTR 安定化薬 acoramidis は ATTR 心アミロイドーシスの予後を改善する.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1785,2024.2.27 公開
17. 原田和昌：CRT-D は NYHA 分類Ⅱ/Ⅲ心不全の全死亡を 14 年後まで減少させる.Carenet.com clear ジャーナル四天王 1787,2024.2.29 公開

●単行書・報告書
1. 原田和昌（監修）：エキスパートが語る高齢者循環器診療のすべて ガイドライン通りにできない場合には?,日本医事新報社,東京,2024.
2 原田和昌：第 2 章老年病特論 2.3 心不全. 介護予防主任運動指導員・介護予防運動指導員 養成講座テキスト 大渕修一編,社会保険出版社,東京,2023.
3. 原田和昌：【変わりゆく高齢者の循環器診療】高齢者の心不全診療の特徴. 心臓 55 巻 1 号,pp8-14,2023

●学会・研究会発表
1. Harada K：Anticoagulant Therapy in the Elderly AF Patients:With Consideration of CKD,Adherence, and Frailty.IAGG-AOR イブニングセミナー.Yokohama,Japan,2023.6.22
2. Ishikawa J,Harada K,Kyo S：Recent advance in wearable watch devices to evaluate atrial fibrillation and heart failure for prevention of Frailty.IAGG-AOR 2023.Yokohama,Japan,Jun 12,2023.
3. Ishikawa J,Toba A,Tamura Y,Araki A,and Harada K：Reduced activity of daily living by cognitive dysfunction was associated with lower BP in elderly outpatients with cardiometabolic diseases.IAGG-AOR 2023.Yokohama Japan,Jun 14,2023.
4. Ruri Shimizu,Joji Ishikawa,Ai Morozumi,Shutaro Futami,Yoshihiro Saito,Chihiro Jubishi,Shunsuke Komatsu,Ayumi Toba,Hajime Fujimoto,Taizo Ishiyama,Yusuke Tsuboko,Kazumasa Harada：DASC-21 score was predictive of in-hospital death and prolong hospital stay in elderly patients hospitalized for heart failure.IAGG-AOR 2023.Yokohama Japan,Jun 14,2023.
5. Toba A,Ishikawa J,Harada K：Left atrial function assessed by strain imaging is associated with skeletal muscle mass in older outpatients with cardiometabolic disease,IAGG-AOR 2023.Yokohama Japan,Jun 14,2023.
6. 李　惠,原田和昌,石川譲治,坪光雄介,藤本　肇,石山泰三,村田哲平,鳥羽梓弓,小松俊介,十菱千尋,清水瑠璃,橘　昌利,河田光弘,眞野暁子,村田知洋：亜急性期心筋梗塞で発見された椎体破壊を伴う梅毒性胸部大動脈瘤の一例.第 267 回日本循環器学会関東甲信越地方会.ステーションコンファレンス東京,2 月 25 日,2023.
7. 清水瑠璃,田中　文,村田哲平,石川譲治,原田和昌：感染性脳動脈瘤破裂をきたした重症僧帽弁狭窄症に伴う感染性心内膜炎の一例　感染性心内膜炎 1.第 96 回日本超音波医学会学術集会.大宮,5 月 27 日,2023.
8. 石川譲治,田村嘉章,鳥羽梓弓,十菱千尋,藤本　肇,荒木　厚,原田和昌：心血管代謝疾患を有する外来通院患者における 3 年間の外来血圧の変化と認知機能変化の関連（優秀演題賞）.第 65 回日本老年医学会学術集.横浜,6 月 17 日,2023.
9. 鳥羽梓弓,石川譲治,二見崇太郎,清水瑠璃,十菱千尋,両角　愛,斎藤義弘,小松俊介,石山泰三,藤本　肇,坪公雄介,田村嘉章,荒木　厚,原田和昌：高齢高血圧患者における左房機能低下はサルコペニアと関連している.第 45 回日本高血圧学会総会.大阪,9 月 16 日,2023.
10. 石川譲治,鳥羽梓弓,二見崇太郎,田村嘉章,荒木　厚,原田和昌：高齢高血圧患者における脈圧および平均血圧とフレイルおよび認知機能との関連.第 45 回日本高血圧学会総会.大阪,9 月 17 日,2023.
11. 村尾雄治,石川譲治,田村嘉章,飯塚あい,鳥羽梓弓,原田和昌,荒木　厚：心血管代謝疾患を有する高齢者における位相角とフレイルの関連－縦断調査による検討－日本サルコペニア・フレイル学会.御茶ノ水,11 月 3 日～4 日,2023.
12. 清水瑠璃,石川譲治,二見崇太郎,十菱千尋,鳥羽梓弓,小松俊介,石山泰三,両角　愛,斎藤義弘,藤本　肇,坪公雄介,原田和昌：高齢心不全入院患者における認知機能障害に伴う生活機能低下が退院後の死亡および心不全再入院に与える影響について.日本心不全学会年次学術集会.横浜,10 月 7 日,2023.
13. 宮本一慶,清水瑠理,二見崇太郎,石川譲治,原田和昌：難治性心不全に伴う蛋白漏出性胃腸症を診断治療した症例.第 690 回日本内科学会関東地方会.東京,10 月 14 日,2023.

●講師等院外活動（講演・放送等）

1. 原田和昌：成人の２人に１人が抱える「高血圧」，治療を受けながらの高血圧との正しい付き合い方とは?（前編）．草野仁の名医が寄りそうからだ若返り TV．BS 朝日，4 月 23 日，2023．
2. 原田和昌：高齢者心不全の併存症としての貧血治療．相模原 cardiovascular Web セミナー（WEB 開催），4 月 25 日，2023．
3. 原田和昌：成人の２人に１人が抱える「高血圧」，治療を受けながらの高血圧との正しい付き合い方とは?（後編）．草野仁の名医が寄りそうからだ若返り TV．BS 朝日，4 月 29 日，2023．
4. 原田和昌：症状が悪化すると命の危険に直結する「心臓の衰え」，ある栄養素が鍵を握っていた！改善食事プランとは?．草野仁の名医が寄りそうからだ若返り TV．BS 朝日，5 月 20 日，2023．
5. 原田和昌：心不全．メトロポリタン循環器内科研修連絡会 WEB2023（第２回）（WEB 開催）．5 月 23 日，2023．
6. 原田和昌：心血管イベントと心不全を考慮した糖尿病治療．Miyazaki Network Conference（WEB 開催）．5 月 25 日，2023．
7. 原田和昌：高齢者心房細動患者の抗血栓治療におけるフレイルの意義．AF 患者さんの Lifelong Support（WEB 開催）．6 月 1 日，2023．
8. 原田和昌：高齢者と亜鉛．高齢者と亜鉛 WEB セミナー（WEB 開催）．6 月 19 日，2023．
9. 原田和昌：高齢者高血圧における夜間高血圧における神経体液性因子～エンレストへの期待～．高齢者高血圧を考える会（WEB 開催）．6 月 27 日，2023．
10. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方の役割と可能性．河北郡市医師会学術講演会（WEB 開催）．7 月 12 日，2023．
11. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2 阻害薬の意義～．Heart Failure Webinar in 大牟田（WEB 開催）．8 月 24 日，2023．
12. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2 阻害薬の意義～．心不全治療を考える会（WEB 開催）．8 月 25 日，2023．
13. 原田和昌：腎性貧血治療のパラダイムシフト（Opening）．城北腎性貧血治療 WEB セミナー（WEB 開催）．8 月 31 日，2023．
14. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2 阻害薬の意義～．Online Heart Failure Conference（WEB 開催）．9 月 1 日，2023．
15. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方薬の役割と可能性．循環器漢方医学講演会 2023（WEB 開催）．9 月 21 日，2023．
16. 原田和昌：心不全とフレイル～予防と治療のために必要なこと～．三原市医師会学術講演会「高齢者疾患の栄養・運動・薬物療法」（WEB 開催）．9 月 26 日，2023．
17. 原田和昌：心血管イベントと心不全を考慮した糖尿病治療．宮崎市郡内科医会学術講演会（WEB 開催）．10 月 20 日，2023．
18. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方薬の役割と可能性．心不全の栄養管理について漢方薬で考える会（WEB 開催）．11 月 26 日，2023．
19. 原田和昌：高尿酸血症は心不全患者の予後を規定する～病型分類と薬物治療選択の実際～．高尿酸血症治療セミナー（WEB 開催）．12 月 7 日，2023．
20. 原田和昌：高齢者心不全の特性に基づいた薬物治療～早期治療の重要性．循環器 WEB セミナー（WEB 開催）．12 月 21 日，2023．
21. 原田和昌：高寒い冬こそ注意したい「高血圧」．冬にぴったりの「お風呂で血圧改善法」．草野仁の名医が寄りそうからだ若返り TV．BS 朝日，1 月 6 日，2024．
22. 原田和昌：高齢者高血圧における夜間高血圧と神経体液性因子～エンレストへの期待～．令和 5 年度第１回青森県臨床内科医会学術講演会～健康寿命延伸に向けた血圧管理を目指して～（WEB 開催）．1 月 15 日，2024．
23. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢ーSGLT2 阻害薬の意義ー．心不全治療を考える会～超高齢社会における SGLT2 阻害薬の役割～（WEB 開催）．3 月 28 日，2024．

副院長　荒木　厚

●雑誌論文(原著論文、英文誌、学会誌)

1. Shimazaki T, Kishimoto K, Ishikawa J, Iwakiri R, Araki A, Imai S : Association between cognitive impairment severity and polypharmacy in older patients with atrial fibrillation: a retrospective study using inpatient data from a specialised geriatric hospital. Geriatrics 9(1):15, 2024.
2. Katsumata Y, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Iizuka A, Tachibana A, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Ishikawa J, Araki A : Changes in physical activity before, during, and after the state of emergency due to COVID-19 pandemic and its association with incidence of frailty in older outpatients with cardiometabolic disease. Aging Medicine and Healthcare (in press) , 2024.
3. Oba K, Ishikawa J, Tamura Y, Fujita Y, Ito M, Iizuka A, Fujiwara Y, Kodera R, Toyoshima K, Chiba Y, Tanaka M, Araki A : Serum Growth Differentiation Factor 15 Levels Predict the Incidence of Frailty Among Patients with Cardiometabolic Diseases. Gerontology Online ahead of print, 2024
4. Kodera R, Fujihara K, Koyama T, Shiozaki H, Mutsuma Y, Yagyuda N, Hatta M, Tsuruoka K, Takeda Y, Araki A, Sone H : Impact of a history of cardiovascular disease and physical activity habits on the incidence of functional disability. Scientific reports 13(1):20793, 2023.
5. Iwakiri R, Hamaya H, Nakayama T, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Araki A : Multimorbidity, consisting of a combination of chronic diseases and geriatric syndromes, predicts the risk of difficulty in discharge home in older patients admitted to acute care hospital. Geriatrics & gerontology international:Online ahead of print, 2023.
6. Sasaki T, Ueda T, Negishi Y, Toyoshima K, Yoshioka M, Ohta H, Araki A, Toba K : Using the Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON) for early detection of frailty. Geriatrics & gerontology international Online ahead of print, 2023.
7. Katsumata Y, Toyoshima K, Tamura Y, Murao Y, Sato M, Watanabe S, Kodera R, Oba K, Ishikawa J, Chiba Y, Awata S, Araki A : Categorization using the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) based on cognitive function and activities of daily living predicts frailty, disability, and mortality in older adults. Geriatrics & gerontology international:Epub ahead of print, 2023.
8. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K : Relationship between blood pressure and cognitive impairment in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. Geriatrics & gerontology international:Epub ahead of print, 2023.
9. Sato M, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Katsumata Y, Watanabe S, Zen S, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Araki A : The cross-sectional area of erector spinae muscle and the liver-to-spleen ratio are associated with frailty in older patients with diabetes:A cross-sectional study. BMC geriatrics 23(1):765, 2023.
10. Sato M, Toyoshima K, Tamura Y, Chiba Y, Araki A : Spontaneous pneumoperitoneum and diabetic ketoacidosis in fulminant type 1 diabetes: a case report. Oxford medical case reports 2023(8):omad079, 2023.
11. Murao Y, Ishikawa J, Tamura Y, Kobayashi F, Iizuka A, Toba A, Harada K, Araki A : Association between physical performance during sit-to-stand motion and frailty in older adults with cardiometabolic diseases: a cross-sectional, longitudinal study. BMC geriatrics 23(1):337, 2023.
12. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K : Changes in blood pressure associated with frailty and sarcopenia in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. Geriatrics & gerontology international 23(7):506-516, 2023.
13. Moyama S, Yamada Y, Makabe N, Fujita H, Araki A, Suzuki A, Seino Y, Shide K, Kimura K, Murotani K, Honda H, Kobayashi M, Fujita S, Yasuda K, Kuroe A, Tsukiyama K, Seino Y, Yabe D : Efficacy and Safety of 6-Month High Dietary Protein Intake in Hospitalized Adults Aged 75 or Older at Nutritional Risk: An Exploratory, Randomized, Controlled Study. Nutrients 15(9):2024, 2023.
14. Tamura Y, Sato M, Araki A : Case of an 89-year-old patient with Type 1 diabetes whose indices of continuous glucose monitoring were significantly improved using an insulin pump with hybrid closed-loop mode. Geriatrics & gerontology international 23(4):313-314, 2023.
15. Yorikawa F, Ishikawa J, Tamura Y, Murao Y, Toba A, Harada K, Araki A : Determinants of depressive symptoms in older outpatients with cardiometabolic diseases in a Japanese frailty clinic: importance of bidirectional association between depression and frailty. PloS one 18(2):e0281465, 2023.

16. 荒木　厚：高齢者の common disease―糖尿病. 日本医師会雑誌 152:1280-1281, 2024.
17. 荒木　厚：夜間頻尿. 日本医師会雑誌 152(9):990, 2023.
18. 瀧川美和, 岩切理歌, 片原憂斗, 小原朋也, 島﨑良知, 瀧川正紀, 片岡 愛, 大川庭熙, 石川譲治, 荒木　厚：高齢者急性期病院におけるポリファーマシーカンファレンスに基づいた薬剤師による減薬提案の実態および効果に関する調査. 日本老年薬学会誌 7(1):1-7, 2024.
19. 荒木　厚：高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 が目指すもの. 日本内科学会雑誌 112(9):1600-1606, 2023.
20. 荒木　厚：糖尿病と認知機能障害, 認知症. 糖尿病 66(6):472-475, 2023.
21. 荒木　厚, 田村嘉章, 豊島堅志, 千葉優子, 野村和至：チーム医療と多職種連携. 糖尿病合併症 37(2):194-198, 2023.

●総説

1. 荒木　厚：高齢者糖尿病における GLP-1 受容体作動薬の使用の意義と注意点. 医学のあゆみ 288(12):981-984, 2024.
2. 長嶋勇希, 小寺玲美, 荒木　厚：高齢糖尿病患者の治療と認知症管理. 糖尿病ケア＋ 21(3):2-9, 2014.
3. 荒木　厚：「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023」を踏まえた高齢者糖尿病の個別化医療. Diabetes Journal 51(1):22-26, 2024.
4. 荒木　厚：高齢者のサルコペニア肥満. アニムス 117:35-41, 2024.
5. 荒木　厚：特集 糖尿病と認知症 序文. Progress in Medicine 43(12):1083, 2023.
6. 豊島堅志, 荒木　厚：SGLT2 阻害薬, GLP-1 受容体作動薬と認知症. Progress in Medicine 43(12):1121-1124, 2023.
7. 荒木　厚：Q&A 糖尿病による末梢神経障害に悩まされています. きょうの健康　12 月号, 106, 2023.
8. 荒木　厚, 田村嘉章, 鳥羽研二：糖尿病とフレイル・サルコペニア. DIABETES JOURNAL 50(3):101-108, 2023.
9. 荒木　厚：高齢者糖尿病の特徴と個別化治療. 日本臨床 81:466-472, 2023.
10. 府川則子, 荒木　厚：食事療法と糖尿病. 月刊糖尿病 15:47-55, 2023.
11. 勝俣 悠, 千葉優子, 池上靖子, 荒木　厚：糖尿病網膜症と認知機能障害, 認知症. 月刊糖尿病 15:29-38, 2023.
12. 荒木　厚：特集にあたって：認知症予防を考慮した高齢者糖尿病の治療. 月刊糖尿病 15: 5, 2023.
13. 荒木　厚：フレイル対策におけるプロフェッショナル育成. Progress in Medicine 43(7):615-619, 2023.
14. 荒木　厚：老年医学随想:Geriatric Medicine goes on. Geriatric Medicine 61(5):447-448, 2023.
15. 豊島堅志, 荒木　厚：肥満治療は認知症予防に役立ちますか? Geriatric Medicine 61(5):433-436, 2023.
16. 片岡 愛, 岩切理歌, 荒木　厚：おなかによい生活習慣とは? 患者さんにどう伝える? 薬局 74:1135-1138, 2023.

●書籍, 単行書

1. 荒木　厚：生活習慣病と認知症予防の深い関係を知ろう. 健達ネットで 1 億回読まれている認知症が分かるコラム, メディカル・ケア・サービス株式会社, 東京, pp29-35, 2024.
2. 荒木　厚：高齢者糖尿病. 日常診療に活かす診療ガイドライン UP-TO-DATE 2024-2025, 門脇 孝, 小室一成, 宮地良樹(監修). メディカルビュー社, 大阪, pp1049-1055, 2024.
3. 荒木　厚：第 14 章 高齢者糖尿病. 糖尿病専門医研修ガイドブック改訂第 9 版-日本糖尿病学会専門医取得のための研修必携ガイド, 日本糖尿病学会（編）, 診断と治療社, 東京, pp426-434, 2023.
4. 荒木　厚：第 15 章 特殊な病態における糖尿病治療 14 認知機能障害, 精神疾患における血糖コントロール. 糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂第 9 版-日本糖尿病学会専門医取得のための研修必携ガイド, 日本糖尿病学会（編）, 診断と治療社, 東京, pp467-469, 2023.
5. 荒木　厚：高齢者糖尿病. 内分泌代謝・糖尿病　内科領域専門医研修ハンドブック, 日本内分泌学会・日本糖尿病学会（編集）, 診断と治療社, 東京, pp401-403, 2023.
6. 荒木　厚：高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023, 日本老年医学会・日本糖尿病学会（編・著）, 南江堂, 東京, pp1-235, 2023.
7. 荒木　厚：認知機能障害、精神疾患における血糖管理. 内分泌代謝・糖尿病　内科領域専門医研修ハンドブック, 日本内分泌学会・日本糖尿病学会（編集）, 診断と治療社, 東京, pp431-432, 2023.
8. 荒木　厚：第６章　内科疾患. 公認心理師カリキュラム準拠 人体の構造と機能及び疾病第 2 版, 武田克彦(編集), 岩田　淳(編集), 小林 靖(編集), 医歯薬出版株式会社, 東京, pp84-96, 2024.
9. 荒木　厚（監修）, 荒木　厚, 本田佳子, 府川則子, 本川佳子：フレイルサポート栄養士テキスト, 東京, pp1-148, 2023.
10. 荒木　厚：慢性腎臓病：SGLT2 阻害薬への期待と高齢者への処方の落とし穴. 高齢者薬物療法の勘所：マルモ・リハ薬剤・サルコペニアを一刀両断, 松本彩加, 吉村芳弘（編集）, 中外医学社, 東京, pp41-52, 2023.

11. 荒木　厚：高齢者で自己注射が困難な場合の糖尿病管理. ちょっと困った背景を持つ糖尿病の診かた：基本をクリアしたすべての糖尿病診療医へ捧げる, 北澤 公（編集）, 河合俊英（編集協力）, 金芳堂, 京都, pp138-150, 2023.
12. 荒木　厚：高齢者の検査計画. 臨床検査データブック 2023-2024, 高久史麿（監修）, 黒川 清, 春日雅人, 北村 聖, 大西宏明, 医学書院, 東京, pp84-86, 2023.

●学会発表

1. 荒木　厚：（シンポジウム３）糖尿病治療の最前線. 高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 が目指すもの. 第 120 回日本内科学会総会・講演会. 東京, 4 月 16 日, 2023.
2. 荒木　厚：（座長）（シンポジウム 10）より良い高齢者糖尿病ケアを目指して. 第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会. 鹿児島, 5 月 11 日, 2023.
3. 勝俣 悠, 豊島堅志, 村尾雄治, 寄川史乃, 北山さおり, 渡部 創, 小寺玲美, 大庭和人, 石川譲治, 田村嘉章, 千葉優子, 粟田主一, 荒木　厚：DASC-8 による高齢者糖尿病のカテゴリー分類において, フレイル発症リスクはカテゴリーII から増加する. 第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会. 鹿児島, 5 月 12 日, 2023.
4. 小寺玲美, 田村嘉章, 村尾雄治, 寄川史乃, 勝俣 悠, 北山さおり, 渡部 創, 大庭和人, 豊島堅志, 石川譲治, 千葉優子, 荒木　厚：高齢糖尿病患者における重心動揺計の指標とフレイルや身体能力との関連について. 第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.　鹿児島, 5 月 13 日, 2023.
5. 渡部 創, 大庭和人, 田村嘉章, 石川譲治, 勝俣 悠, 北山さおり, 小寺玲美, 豊島堅志, 千葉優子, 荒木　厚：第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会. 鹿児島, 5 月 13 日, 2023.
6. Atsushi Araki, Keiko Motokawa, Misato Hayakawa, Kenji Toyoshima, Hirohiko Hirano, Noriko Fukawa, Keiko Honda, Tomoki Sasaki, Yuka Narita, Hiizuru Ota, Takuya Ueda, Yoshinori Fujiwara, Tatsuro Ishizaki, Yoshiaki Tamura, Kenji Toba : Development of the program of certificated Frailty-Support Physicians, Nutritionists, and Nurses for the support of community-dwelling older people based on the “Frailty Health Check-up” in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 12, 2023.
7. Motoya Sato, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, Yu Katsumata, So Watanabe, Shugo Zen, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Atsushi Araki : Erector spinae muscle area is associated with frailty and accumulation of visceral fat is positively correlated with arteriosclerosis in old-old inpatients with diabetes:A cross-sectional study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 12, 2023.
8. Yuu Katsumata, Kenji Toyoshima, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, So Watanabe, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yuko Chiba, Shuichi Awata, Atsushi Araki : Categorization according to the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) predicts the risk of frailty, disability, and death. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 13, 2023.
9. Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yasunori Fujita, Masafumi Ito, Remi Kodera, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Masashi Tanaka, Atsushi Araki : High serum growth differentiation factor 15 (GDF15) levels were associated with incidence of frailty in patients with cardiometabolic disease. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 13, 2023.
10. Rika Iwakiri, Tomohiro Nakayama, Hironobu Hamaya, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Teiki Okawa, Atsushi Araki : Multimorbidity, consisting of a combination of chronic disease and geriatric syndromes, predicts risk of failure to discharge home in older patients. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 12, 2023.
11. Hironobu Hamaya, Tomohiro Nakayama, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Atsushi Araki, Rika Iwagiri : Multimorbidity scores consisting of chronic diseases and geriatric syndromes, were associated with lower incidence of improvement of Barthel Index after admission. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 14, 2023.
12. Tomohiro Nakayama, Hironobu Hamaya, Yoko Murano, Takashi Kobayashi, Ai Kataoka, Teiki Okawa, Atsushi Araki, Rika Iwagiri : The Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System (DASC-21) predicts risk of failure to discharge home in older adults with pneumonia. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 14, 2023.
13. Ayumi Toba, Joji Ishikawa, Ruri Shimizu, Kana Takani, Aya Yamamoto, Teppei Maeda, Matsuyo Kawano, Yoshiaki Tamura, Atsushi Araki, Kazumasa Harada : Left atrial function assessed by strain imaging is associated with appendicular skeletal muscle mass index in patients with cardiometabolic disease. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 14, 2023.

14. Tomoki Sasaki, Yui Negishi, Akane Machida, Atsushi Araki, Kenji Toyoshima, Mami Yoshioka, Hiizuru Ohta, Yoshie Araki, Takuya Ueda, Kenji Toba : Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON). IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 12, 2023.
15. Shunei Kyo, Atsushi Araki : (Chair)(Symposium Frailty) Recent Advance of Wearable Watch for Frailty. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 12, 2023.
16. Atsushi Araki, Cheng-Chieh Lin : (Chair) (Symposium Geriatrics 14) Management of diabetes in older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 13, 2023.
17. Atsushi Araki(Chair) (Luncheon Seminar 13), Daisuke Yabe : Management of type 2 diabetes in the super-aged society. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 14, 2023.
18. 荒木　厚, 千葉優子, 濱谷広頌, 岩切理歌 : (シンポジウム) : multimorbidity 実態調査から見えてきた課題と今後の展望. 高齢者急性期病院における multimorbidity に基づいた frailty index による入院患者の予後予測. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
19. 荒木　厚, 池上博司 : (座長) (シンポジウム 11) 高齢者の糖尿病治療の進歩と展望-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
20. 大庭和人, 田村嘉章, 石川譲治, 藤田泰典, 伊藤雅史, 田中雅嗣, 小寺玲美, 豊島堅志, 千葉優子, 荒木　厚 : 高齢者の血清 GDF15 高値はフレイル発症の独立した危険因子である. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
21. 勝俣 悠, 豊島堅志, 渡部 創, 小寺玲美, 大庭和人, 石川譲治, 田村嘉章, 千葉優子, 栗田主一, 荒木　厚 : DASC-8 による高齢者の認知機能・ADL のカテゴリー分類は, フレイル発症のリスクを反映する. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
22. 石川譲治, 田村嘉章, 鳥羽梓弓, 十菱千尋, 藤本肇, 荒木　厚, 原田和昌 : 心血管代謝疾患を有する外来通院患者における 3 年間の外来血圧の変化と認知機能変化の関連. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
23. 岩切理歌, 小林孝史, 中山智博, 片岡 愛, 村野陽子, 大川庭熙, 荒木　厚 : 高齢入院患者における multimorbidity は退院時の転院または死亡のリスクを予測する. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 20 日, 2023.
24. 濱谷広頌, 片岡 愛, 中山智博, 小林孝史, 村野陽子, 大川庭熙, 荒木　厚, 岩切理歌 : 高齢者入院における Multimorbidity と入院後の Barthel index の変化との関連についての検討. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 20 日, 2023.
25. 中山智博, 村野陽子, 小林孝史, 片岡 愛, 大川庭熙, 荒木　厚, 岩切理歌 : The Dementia Assesment Sheet for Community-based Integrated Care System (DASC-21) による高齢者肺炎患者の退院転帰に及ぼす影響についての検討. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 20 日, 2023.
26. 江尻愛美, 河合 恒, 荒木　厚, 藤原佳典, 平野浩彦, 小山照幸, 杉江正光, 小島基永, 鈴木隆雄, 大渕修一 : 身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連 : 横断研究. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 19 日, 2023.
27. 早川美知, 本川佳子, 横山友里, 大須賀洋祐, 飯塚あい, 豊島堅志, 田村嘉章, 石川譲治, 藤原佳典, 荒木　厚 : フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 6 月 20 日, 2023.
28. Chin-Hsiao Tseng, Atsushi Araki : (Chair) (Oral Presentation)Diabetes mellitus in older adults. The IDF-WPR Congress 2023/15th Scientific Meeting of AASD. Kyoto, July 22, 2023.
29. 荒木　厚(座長) (教育講演) , 田村嘉章 : 高齢者. 第 10 回日本糖尿病協会年次学術集会. 京都, 7 月 23 日, 2023.
30. 佐藤元彌, 豊島堅志, 橘 盛昭, 三神神太郎, 野中敬介, 新井冨生, 荒木　厚, 田村嘉章 : 各診療科の連携のもと診断しえた著明な低 Na 血症を呈した両側性副腎原発悪性リンパ腫の 1 例. 第 688 回日本内科学会関東地方会. 東京, 7 月 9 日, 2023.
31. 荒木　厚 : (特別講演) フレイルと multimorbidity を考慮した高齢者疾患の治療. 第 25 回日本高齢消化器病学会総会. 東京, 7 月 28 日, 2023.
32. 荒木　厚 : フレイル・サルコペニア予防のための高齢者糖尿病の食事・栄養療法と薬物療法. (シンポジウム) 糖尿病とサルコペニア・フレイル～病態の理解と予防のための栄養学的アプローチ. 第 11 回日本くすりと糖尿病学会学術集会. 神戸, 9 月 3 日, 2023.
33. 荒木　厚 (座長) (スポンサードセミナー) , 鈴木 亮 : 高齢者糖尿病診療のトピックス-より良い高齢者糖尿病ケアを目指して-. 第 51 回日本老年医学会関東甲信越地方会. 東京, 9 月 30 日, 2023.
34. Atsushi Araki : Preditors of frailty in patients with cardiometabolic diseases-Role of GDF-15, lower limb function, and cerebral white matter integrity. 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium, 2023 IAGG-AOR Satellite. Tokyo, Oct 17, 2023.
35. 村尾雄治, 石川譲治, 田村嘉章, 飯塚あい, 鳥羽梓弓, 原田和昌, 荒木　厚 : 心血管代謝疾患を有する高齢者にお

ける位相角とフレイルの関連-縦断調査による検討. 第 10 回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 11 月 4 日, 2023.
36. 福島薫子, 北山さおり, 佐塚まなみ, 小寺玲美, 大庭和人, 豊島堅志, 千葉優子, 山本寛, 荒木　厚, 田村嘉章：肺癌に対する免疫チェックポイント阻害薬加療中に発生した副腎不全と甲状腺クリーゼの一例. 第 691 回日本内科学会関東地方会. 東京, 11 月 18 日, 2023.
37. 荒木　厚：（座長）ワークショップ 22　薬物療法④. 第 38 回日本糖尿病合併症学会. 岡山, 10 月 21 日, 2023.
38. 渡部 創, 大庭和人, 北山さおり, 佐藤元彌, 小寺玲美, 豊島堅志, 千葉優子, 田村嘉章, 荒木　厚：COVID-19 ワクチン接種後におこった下垂体機能低下症の一例. 第 33 回臨床内分泌代謝 Update. 横浜, 11 月 3 日, 2023.
39. 荒木　厚：高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023. 第 34 回日本糖尿病性腎症研究会. 東京, 12 月 2 日, 2023.
40. 麓隆太郎, 豊島堅志, 小寺玲美, 大庭和人, 千葉優子, 荒木　厚, 田村嘉章：高齢糖尿病患者におけるデュラグルチドから他剤への変更による影響の実態. 第 61 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会. 東京, 1 月 20 日, 2024.
41. 荒木　厚, 鈴木 亮：（座長）【シンポジウム 3】超高齢社会における糖尿病診療の課題. 第 58 回糖尿病学の進歩. 京都, 2 月 16 日, 2024.
42. 荒木　厚：高齢者における糖尿病治療.【特別企画 2】人生 100 年時代を見据えた糖尿病診療～新生児から高齢者まで～. 第 58 回糖尿病学の進歩. 京都, 2 月 17 日, 2024.
43. 井原健人, 大庭和人, 山川尚子, 麓隆太郎, 小寺玲美, 豊島堅志, 千葉優子, 荒木　厚, 田村嘉章：レパグリニドとクロピドグレルの併用で遷延性低血糖を来たした高齢 2 型糖尿病の 1 例. 日本内科学会第 694 回関東地方会. 東京, 3 月 16 日, 2024.

●講師等院外活動（講演）
1. 荒木　厚：高齢者の糖尿病の治療. ラジオ NIKKEI 医学講座. 4 月 4 日, 2023.
2. 荒木　厚：高齢者糖尿病患者におけるインスリン治療-現状と今後の課題-. ゾルトファイ web 講演会. 4 月 5 日, 2023.
3. 荒木　厚：(座長)糖尿病 Web セミナー. Web 開催, 5 月 16 日, 2023.
4. 荒木　厚：認知症とフレイルを考慮した高齢者糖尿病の治療-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. 第 61 回高知県糖尿病談話会. Web 開催, 東京, 5 月 19 日, 2023.
5. 荒木　厚：（総合司会、Closing remarks）Up-dated Meeting of Sarcopenia. Web 開催, 東京, 5 月 24 日, 2023.
6. 荒木　厚：糖尿病, 脂質異常症, 甲状腺疾患. 杏林大学医学部加齢医学講座 M4 講義. 東京, 5 月 26 日, 2023.
7. 荒木　厚：高齢者糖尿病患者におけるインスリン治療-現状と今後の課題-. Up-to-date Lecture on Insulin Therapy. Web 開催, 東京, 5 月 31 日, 2023.
8. 荒木　厚：医療的視点から見たフレイル予防. 区市村介護予防事業者向け研修（総論編）. Web 開催, 東京, 6 月 20 日, 2023.
9. 荒木　厚：（特別講演）高齢者の糖尿病治療の進歩-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 の改訂にあたって. DIAMOND SEMINAR 2023. 東京, 7 月 12 日, 2023.
10. 荒木　厚：後期高齢者健診の質問票の見方とフレイル予防への活用法. 板橋区医師会講演会. Web 開催, 東京, 7 月 12 日, 2023.
11. 荒木　厚：（特別講演）認知症とフレイルを考慮した高齢者糖尿病の治療. Teijin DPP-4i Family Web Seminar. Web 開催, 東京, 7 月 14 日, 2023.
12. 荒木　厚：高齢者糖尿病の治療―過去から未来へ. 第 16 回研修医・若手医師キャリアデザインの会-糖尿病学へのいざない-. Web 開催, 東京, 7 月 18 日, 2023.
13. 荒木　厚：老年医学を学ぶことの重要性. 高齢医学セミナー2023. 東京, 7 月 28 日, 2023.
14. 荒木　厚：（コメント）. フレイルサポート栄養士研修会ワークショップ. 東京, 8 月 5 日, 2023.
15. 荒木　厚, 野村和至：(座長)第 2 回いたばし糖尿病多職種ネットワークの会. 東京, 8 月 19 日, 2023.
16. 荒木　厚：健康長寿めざすフレイル予防のすべて. 渋谷フレイル予防フェア. 東京, 8 月 24 日, 2023.
17. 荒木　厚：(閉会の辞). 糖尿病セミナー. 東京, 8 月 25 日, 2023.
18. 荒木　厚：高齢者の糖尿病治療の進歩-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. 高齢者 2 型糖尿病 WEB セミナーin 松山. Web 配信, 9 月 7 日, 2023.
19. 荒木　厚：医療から見たフレイル. 宮城県市民公開講座：はればれ健康フェスタ. Web 配信, 9 月 10 日, 2023.
20. 荒木　厚：医療職ができるフレイル予防のすべて. 横浜市医療専門職向け　フレイル予防普及啓発講演会. Web 配信, 10 月 3 日, 2023.
21. 荒木　厚：健康寿命を延ばすフレイル予防と対策～いつまでもいきいき暮らすために～. 令和 5 年度健康づくり事業推進指導者育成研修. Web 開催, 10 月 7 日, 2023.
22. 荒木　厚（座長）, 佐藤友彦：高齢者の生活習慣病と不眠、綿田裕孝：2 型糖尿病 update. 高齢者医療セミナ

ー. Web 配信, 10 月 11 日, 2023.
23. 荒木　厚：高齢者糖尿病の個別化医療-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて-. DiaMond Seminar in 北関東甲信越. 東京, 10 月 14 日, 2023.
24. 荒木　厚：（開会挨拶、閉会の辞）. 第 30 回城北 CDE セミナー. 東京, 10 月 28 日, 2023.
25. 荒木　厚：（座長）板橋区、練馬区、豊島区、北区合同糖尿病予防デー：みんなで予防する糖尿病-地域の多職種とともに. 東京, 11 月 4 日, 2023.
26. 荒木　厚：（特別講演）高齢者糖尿病の個別化医療をめざして-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. 高齢者医療セミナ-2023-地域で支える医療を目指して. 彦根, 11 月 9 日, 2023.
27. 荒木　厚（座長）, 渡邉健太郎：糖尿病合併高血圧患者における治療戦略. 糖尿病合併高血圧の治療戦略を考える. 東京, 11 月 14 日, 2023.
28. 荒木　厚：(講演)多職種で行うフレイル予防の重要性. 第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会. 東京, 11 月 22 日, 2023.
29. 荒木　厚：(グループワーク)多病を有するフレイル患者の症例検討. 第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会. 東京, 11 月 22 日, 2023.
30. 荒木　厚：高齢者糖尿病における GLP-1 受容体作動薬療法の課題と今後の展望. 第 3 回江戸川糖尿病チームセミナー. 東京, 11 月 29 日, 2023.
31. 荒木　厚：高齢者の糖尿病. 東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」. 東京, 11 月 30 日, 2023.
32. 荒木　厚：高齢者の糖尿病. 東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」. 東京, 12 月 7 日, 2023.
33. 荒木　厚：高齢者糖尿病の低血糖症状のメカニズム. 第 1 回高齢糖尿病患者の看護研修. 糖尿病教育・看護学会研修推進委員会主催. 東京, 12 月 3 日, 2023.
34. 荒木　厚：(基調講演)介護予防・フレイル予防における医療職の役割-多職種連携の重要性-. 令和５年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フレイル予防の推進』. 東京, 12 月 9 日, 2023.
35. 荒木　厚：(シンポジウム司会). 令和５年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フレイル予防の推進』. 東京, 12 月 9 日, 2023.
36. 荒木　厚：フレイルの評価法. 松本市医師会フレイルサポート医研修会. 松本, 12 月 10 日, 2023.
37. 荒木　厚：フレイルの類似概念：サルコペニア、ロコモティブシンドローム、カヘキシア. 松本市医師会フレイルサポート医研修会. 松本, 12 月 10 日, 2023.
38. 荒木　厚：地域のフレイル対策とフレイル健診の活用法. 松本市医師会フレイルサポート医研修会. 松本, 12 月 10 日, 2023.
39. 荒木　厚：（ワークショップの症例提示と解説）COVID-19 流行後にフレイルとなったマルチモビディティの症例. 松本市医師会フレイルサポート医研修会. 松本, 12 月 10 日, 2023.
40. 荒木　厚：（座長）腎障害を合併した糖尿病症例の診療 2023-finerenone への期待. ケレンディア Meet the Expert. 東京, 12 月 12 日, 2023.
41. 荒木　厚：(特別講演)「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023」を踏まえた高齢者糖尿病の個別化医療-HbA1c 検査の活用法. アークレイ臨床検査セミナー2023 東京. 東京, 12 月 14 日, 2023.
42. 荒木　厚(座長）, 池田 迅：経口 GLP-1 製剤を実臨床でどのように活かすか―ポリファーマシーの観点から考える糖尿病治療、渡邉健太郎：経口 GLP-1 受容体作動薬の上手な使い方. GLP-1 Web Seminar. 東京, 12 月 18 日, 2023.
43. 荒木　厚：フレイルの概念、診断、治療 、および後期高齢者の質問票の活用法.　フレイルサポート専門栄養士研修会. Web 配信, 1 月 15 日, 2024.
44. 荒木　厚：フレイル予防センターの研修とフレイル外来の研究. 第 9 回老年医学イノベーションフォーラム. 名古屋, 1 月 20 日, 2024.
45. Yamada T, Shinohara T, Ouchi S, Mabuchi S, Nakagawa K, Yoshimi K, Saito M, Toyoshima K, Tamura Y, Araki A, Kojima M, Hashimoto K：Comparison of diaphragm function in sarcopenia and non-sarcopenia in the elderly. 第 9 回老年医学イノベーションフォーラム. 名古屋, 1 月 20 日, 2024.
46. 荒木　厚：糖尿病の新たな治療目標：治療負担の軽減とスティグマの解消. 令和５年度第４回糖尿病ケアチーム勉強会. 東京, 1 月 31 日, 2024.
47. 荒木　厚：(開会の言葉, コメント). 第３回いたばし糖尿病多職種ネットワークの会. 東京, 2 月 10 日, 2024.
48. 荒木　厚：高齢者のフレイル予防. フレイルサポートナース研修会. 東京, 2 月 17 日, 2024.
49. 荒木　厚：(Closing Remarks). DUAL Seminar in TOKYO WEST-imeglimin の再出発. 東京, 2 月 20 日, 2024.
50. 荒木　厚：老年病特論のねらい. 介護予防運動指導員テキスト説明会. 東京, 2 月 27 日, 2024.
51. 荒木　厚：個別性を考慮した高齢者糖尿病の治療と療養指導. 第 10 回みやぎ糖尿病療養指導フォーラム. 仙台, 3 月 2 日, 2024.

52. 荒木　厚：(Session 2 座長).ポリファーマシーを考える会.東京,3 月 7 日,2024.
53. 荒木　厚：高齢者糖尿病の個別化医療をめざして-高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて.第 25 回北足立臨床糖尿病懇話会.北本,3 月 8 日,2024.
54. 荒木　厚(基調講演座長),宇都宮一典：多様化する糖尿病の食事療法と CDE の役割.第 31 回城北 CDE セミナー.東京,3 月 16 日,2024.

●取材記事、マスコミ関係

1. 荒木　厚：SD が挑む(12)常識を覆し老いを止める：「高齢者の糖尿病」撃つ. Themis 32(7);pp82-83,2023.
2. 荒木　厚：糖尿病になるともの忘れしやすくなる？関わりのある認知症の種類や対策について紹介.なかまある.https://nakamaaru.asahi.com/article/15015993,10 月 20 日,2023.
3. 荒木　厚：肥満と認知症の関係とは？高齢期の肥満や対策について紹介.なかまある.https://nakamaaru.asahi.com/article/15055308,11 月 22 日,2023.
4. 荒木　厚：高齢者糖尿病診療ガイドライン、薬物療法のエビデンス増え 7 年ぶりに改訂. CareNet.https://www.carenet.com/news/general/carenet/56707,7 月 3 日.2023.
5. 荒木　厚：高齢者糖尿病診療 GL 2023「併存疾患を意識した治療を」.日経メディカル.https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/report/t353/202306/580259.html,6 月 30 日,2023.

●論文査読　以下の雑誌の査読を行った。

Geriatrics and Gerontology International, BMC Geriatrics,Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism, Diabetes,Obesity and Metabolism, Journal of Diabetes Investigation

副院長　岩田　淳

●雑誌論文

1. Akihiko Mitsutake, Takashi Matsukawa, Atsushi Iwata, Hiroyuki Ishiura, Jun Mitsui, Takashi Toya, Mineo Kurokawa, Norio Sakai, Shoji Tsuji, Tatsushi Toda：Favorable outcome of hematopoietic stem cell transplantation in late-onset Krabbe disease. Brain and Development 45(7):408-412, 2023.
2. Mana Higashihara, Hiroki Yamazaki, Yuishin Izumi, Masahito Kobayashi, Hiroyuki Nodera, Chizuko Oishi, Atsushi Iwata, Shigeo Murayama, yuji Kaji, Masahiro Sonoo：Far-field potential of the compound muscle action potential as a reliable marker in amyotrophic lateral sclerosis. Muscle and Nerve 68(3)：257-263, 2023.
3. Masanori Kurihara, Kenji Ishibashi, Tomoyasu Matsubara, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Masashi Kameyama, Aya Midori Tokumaru, Katsuhiko Takeda, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: High sensitivity of asymmetric 18F‐THK5351 PET abnormality in patients with corticobasal syndrome. Scientific Reports 13:12147, 2023.
4. Hiroki Masuda, Masahiro Mori, Shigeki Hirano, Akiyuki Uzawa, Tomohiko Uchida, Mayumi Muto, Ryohei Ohtani, Reiji Aoki, Yoshiyuki Hirano, Japanese Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative (J-ADNI); Satoshi Kuwabara：Higher longitudinal brain white matter atrophy rate in aquaporin-4 IgG-positive NMOSD compared with healthy controls. Scientific Reports 13(1):12631, 2023.
5. Keiko Hatano, Kenji Ishibashi, Kazuki Yamada, Kenji Ishii, Atsushi Iwata：Clinical application of 18F-THK5351 PET to identify inflammatory lesions through imaging astrogliosis in a case of cytomegalovirus ventriculoencephalitis. Clinical Nuclear Medicine 48(10):e489-e490, 2023.
6. Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Atsushi Iwata, and Kenji Ishii：Detailed Assessment of 18F-THK5351 Distribution Pattern in the Midbrain: Comparison With Progressive Supranuclear Palsy and Corticobasal Syndrome. Clinical Nuclear Medicine 48(10):841-846, 2023.
7. Shuhei Egashira, Akatsuki Kubota, Toshiyuki Kakumoto, Reiko Kawasaki, Risa Kotani, Kaori Sakuishi, Atsushi Iwata, Sung Kwan Bae, Nobuhisa Akamatsu, Kiyoshi Hasegawa, Mariko Tanaka, Kazuo Nakamichi, Masayuki Saijo & Tatsushi Toda: Long-term survival from progressive multifocal leukoencephalopathy in living-donor liver transplant recipient with preformed donor-specific Antibody. Journal of NeuroVirology 29(5):519-523, 2023.
8. Reito Nakamura, Ikumi Tomizawa, Atsushi Iwai, Tetsuo Ikeda, Kota Hirayama, Yung Wen Chiu, Takanobu Suzuki, Airi Tarutani, Tatsuo Mano, Atsushi Iwata, Tatsushi Toda, Youhei Sohma, Motomu Kanai, Yukiko Hori, Taisuke Tomita： Photo-oxygenation of histidine residue inhibits α-synuclein aggregation. FASEB J. 37(12):e23311, 2023.
9. Sopak Supakula, Yuki Hatakeyama, Nicolas Leventoux, Maika Itsuno, Naoko Numata, Hayato Hiramine, Satoru Morimoto, Atsushi Iwata, Sumihiro Maeda, Hideyuki Okano：Urine-Derived Cells from the Aged Donor for the 2D/3D Modeling of Neural Cells via iPSCs. Aging Brain 4:100101, 2023.
10. Kenichiro Sato, Yoshiki Niimi, Ryoko Ihara, Atsushi Iwata, Takeshi Ikeuchi, Takeshi Iwatsubo:Advertisement by medical facilities as an opportunity route of APOE genetic testing in Japan: a website analysis. Journal of Community Genetics 15(2):195-204, 2024.
11. Kai Funakawa, Masanori Kurihara, Kensuke Takahashi, Mana Higashihara, Manato Hara, Akihiko Mitsutake, Hiroyuki Ishiura, Aya Midori Tokumaru, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Yuko Saito, Atsushi Iwata：Proximal sensory neuropathy and cerebellar ataxia as presenting symptoms of NOTCH2NLC-related neuronal intranuclear inclusion disease. Journal of the Neurological Sciences 122915, 2024.
12. Ishibashi Kenji, Kurihara Masanori, Toyohara Jun, Ishii Kenji, and Iwata Atsushi：Pitfalls of Amyloid-Beta PET Comparisons With 18F-MK-6240 and 18F-THK5351 PET. Clinical Nuclear Medicine, 49(4):319-321, 2023.
13. Mihoko Shiio, Nobuya Maeda, Atsushi Iwata, Kenji Ishibashi, Kenji Ishii, Hiroshi Takuma, Yuko Ishizaka, Yasuhisa Sakura：Ventral Variant Posterior Cortical Atrophy with Occipito-temporal Accumulation of Tau Proteins/Astrocyte Gliosis. Internal Medicine in press, 2024.
14. Masataka Kikuchi, Akinori Miyashita, Norikazu Hara, Kensaku Kasuga, Yuko Saito, Shigeo Murayama, Akiyoshi Kakita, Hiroyasu Akatsu, Kouichi Ozaki, Shumpei Niida, Ryozo Kuwano, Takeshi Iwatsubo, Akihiro Nakaya, Takeshi Ikeuchi, Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative; Japanese Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative：Polygenic effects on the risk of Alzheimer’s disease in the Japanese population. Alzheimer’s Research & Therapy 16(1):45, 2024.

15. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Satoru Morimoto, Akira Arakawa, Kensuke Ohse, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata, Shigeo Murayama, Yuko Saito : Background Pathology Associated with Aberrant Cerebrospinal Fluid p-tau181 and Aβ42 in Alzheimer's Disease and Other Neurodegenerative Diseases. Acta Neuropathologica Communications 12(1):48, 2024.
16. Kensuke Takahashi, Masanori Kurihara, Kenji Ishibashi, Yuta Komori, Ryoji Goto, Mana Higashihara, Masashi Kameyama, Hirohiko Hirano, Meiko Hashimoto Maeda, Rie Watanabe, Kenji Ishii, Atsushi Iwata : Increased 18F-THK5351 Uptake at Bilateral Primary Motor Cortex in Patients with Progressive Pseudobulbar Palsy. Acta Neurologica Scandinavica in press, 2024.
17. Kurihara, Masanori, Komori, Yuta, Goto, Ryoji, Obata, Maki, Ishibashi, Kenji, Ishii, Kenji, Tokumaru, Aya Midori, KanemaruKazutomi, Takeda, Katsuhiko, Iwata, Atsushi : Right temporal variant frontotemporal dementia initially presenting with gradually progressing heading disorientation. The Clinical Neuropsychologist in press, 2024.

●総説

1. 岩田　淳：疾患修飾薬治療. Clinial Neuroscience41(9):1172-1175, 2023.
2. 佐藤謙一郎, 肥田あゆみ, 新美芳樹, 岩田　淳, 岩坪 威：ハッショウマメ（Mucuna Pruriens）の個人間インターネット取引での広告・販売の実態に関する調査. YAKUGAKU ZASSHI 143(2):1057-1067, 2023
3. 栗原正典, 岩田　淳：アルツハイマー病疾患修飾薬概論と抗Aβ抗体薬の実用化. 医学のあゆみ 287(13):1031-1038, 2023.
4. 間野達雄, 岩田　淳：エピジェネティクスとアルツハイマー病. 医学のあゆみ 287(13):916-921, 2023.
5. 岩田　淳：アルツハイマー病治療の新時代　レカネマブの適正使用. Clinician 698:5-7, 2024.
6. 岩田　淳：血液バイオマーカー総論. 日本老年医学会雑誌 61(1):23-27, 2024.

●単行書・報告書

1. 岩田　淳：Alzheimer 病. 脳神経疾患最新の治療, 北川一夫, 青木正志, 小林俊輔編, 南江堂, 東京, 2023.
2. 栗原正典, 岩田　淳：進行期アルツハイマー病の神経症候. 認知症診断のための神経所見のとり方, 三品雅洋, 浦上克哉編, ワールドプランニング, 東京, 2023.
3. 岩田　淳：神経疾患の理解. 公認心理師カリキュラム準拠 人体の構造と機能及び疾病　第2版, 武田克彦, 岩田　淳, 小林 靖編, 医歯薬出版株式会社, 東京, 2023.
4. 岩田　淳:認知症に対する薬物療法 up to date. 症候学から見極める認知症, 池田学編, 新興医学出版社, 東京, 2024.
5. 岩田　淳:脳神経内科診療の掟, 岩田　淳, 小林俊輔編, 中外医学社, 東京, 2024.

●学会・研究会発表

1. Kensuke Ohse, Masashi Toyoda, Mami Yoshioka, Masanori Kurihara, Tokyo Medical Biobank Group, Atsushi Iwata, Nobuo Kanai : Quality control at the Tokyo Medical Biobank to provide high-quality biospecimens. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2023, Yokohama, Japan, ポスター, 6月12日, 2023.
2. Masanori Kurihara, Soichiro Kondo, Kensuke Takahashi, Keiko Hatano, Kensuke Ohse, Mami Yoshioka, Nobuo Kanai, Kenji Toba, Atsushi Iwata : Characteristics of Tokyo Medical Biobank participants with age-associated neurological diseases recruited at the Department of Neurology. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2023, Yokohama, Japan, ポスター, 6月12日, 2023.
3. Soichiro Kondo, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Hitomi Matsui, Kensuke Ohse, Takayuki Kato, Yasushi Nishina, Ko Furuta, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata : Characteristics of patients with Alzheimer's disease undergoing lumbar puncture for biomarker confirmation in our hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2023, Yokohama, Japan, ポスター, 6月12日, 2023.
4. Keiko Hatano, Ryoji Goto, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata : Clinical profile of early drug-naïve Parkinson's disease aged ≥ 80 years at diagnosis. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2023, Yokohama, Japan, ポスター, 6月13日, 2023.
5. Atsushi Iwata : Biomarker in dementia practice: an overview. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2023, Yokohama, Japan, ポスター, 6月13日, 2023.
6. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Satoru Morimoto, Yuko Saito, Kazutomi Kanemaru, Shigeo Murayama, Atsushi Iwata : Associations of Antemortem Cerebrospinal Fluid Biomarkers with Alzheimer's Disease Neuropathologic changes at Autopsy. AAIC 2023, 2023, Amsterdam, Netherlands, ポスター, 7月16日, 2023.

7. Kazutomi Kanemaru, Akiko Kanemaru, Masanori Kurihara, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Atsushi Iwata, Yuko Saitoh, Shigeo Murayama：Sex differences of cerebrospinal fluid biomarkers in Alzheimer's disease. AAIC 2023, 2023, Amsterdam, Netherlands, ポスター, 7 月 20 日, 2023.
8. N Ziogas, C. J. Mummery, M. Boada Rovira, J. L. Cummings, N. C. Fox, O. Hansson, A. Iwata, S. P. Salloway, A. Schneider, A. Unwin, E. Huang, A. Edwards, I. Tien, S. Wu, L. Lin, M. Shulman, J. Landen, S. Budd Haeberlein. Design of CELIA：a Phase 2, randomized, double-blind, placebo-controlled, parallel-group study to assess the efficacy, safety, and tolerability of BIIB080 in patients with MCI due to Alzheimer's disease or mild Alzheimer's disease dementia. AAIC 2023. Amsterdam Netherlands, ポスター, 7 月 20 日, 2023.
9. Ikumi Tomizawa, Yung-Wen Chiu, Tatsuo Mano, Maiko Ono, Makoto Higuchi, Tatsuo Toda, Atsushi Iwata, Yukiko Hori, Taisuke Tomita：Identification of novel regulators of disease-specific α-synuclein aggregation by genome wide screening using the CRISPR/Cas9 system. Society for Neuroscience 2023. Washington D. C., USA, 10 月 7 日, 2023.
10. Kenichito Sato, Yoshiki Niimi, Ryoko Ihara, Kazushi Suzuki, Atsushi Iwata, Takeshi Iwatsubo.：Influence of COVID-19 pandemic to self-perceived memory decline:contribution to cognitive change one-year later. CTAD 2023, Boston, MA, USA, ポスター, 10 月 24 日, 2023
11. Mana Higashihara, Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Kensuke Takahashi, Yuta Komori, Ryoko Ihara, Mehdi van den Bos, Parvathi Menon, Yuki Hatanaka, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Steve Vucic, Kenji Ishii, Atsushi Iwata：Relationship between cortical hyperexcitability and astrogliosis in amyotrophic lateral sclerosis. 34th international symposium on ALS/MND 2023. Basel, Switzerland, ポスター, 12 月 6 日, 2023.
12. Masanori Kurihara, Ryosuke Shimasaki, Keiko Hatano, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata：Radiological Heterogeneity of Tokyo Medical Biobank Participants with Lewy body Diseases. ADPD2024. Lisbon, Portugal, ポスター, 3 月 5 日, 2024.
13. Keiko Hatano, Masashi Kameyama, Masanori Kurihara, Kensuke Ohse, Ryoji Goto, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Renpei Sengoku, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Shigeo Murayama, Atsushi Iwata：Prevalence of amyloid positivity evaluated by cerebrospinal fluid Aβ42 concentration in early Parkinson's disease without dementia aged ≧ 80 years at diagnosis. ADPD2024. 2024, Lisbon, Portugal, ポスター, 3 月 5 日, 2024.
14. Kazuya Matsumoto, Shun Murakami, Kengo Ishiki, Kazuto Yamashita, Masahiro Miura, Shigeki Iwanaga, Toshiyuki Sato, Atsushi Iwata：Increasing plasma Aβ42/40 accuracy by combining p-tau181 levels that are measured by fully automated immunoassay platform, ADPD2024., Lisbon, Portugal, ポスター, 3 月 5 日, 2024.
15. Ryosuke Shimasaki, Masanori Kurihara, Keiko Hatano, Ryoji Goto, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata：The association of CSF biomarkers with DAT SPECT and MIBG myocardial scintigraphy in Parkinson's disease. ADPD2024. Lisbon, Portugal, ポスター, 3 月 7 日, 2024.
16. 岩田　淳：アルツハイマー病における神経細胞特異的な情報解析. 第 31 回日本医学会総会. 東京, 招待講演, 4 月 22 日, 2023
17. 金丸和富, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田　淳, 齊藤祐子, 村山繁雄：アルツハイマー病における脳脊髄液バイオマーカーと MMSE との関連, 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, 口演, 5 月 31 日, 2023
18. Keiko Hatano, Ryoji Goto, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Kazutomi Kanemaru, and Atsushi Iwata：Clinical profile of early drug-naïve Parkinson's disease aged ≥ 80 years at diagnosisApplication of CSF findings to ATN classification. 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, ポスター, 5 月 31 日, 2023
19. Mana Higashihara, Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Hiroki Komatsu, Kensuke Takahashi, Soichiro Kondo, Yuta Komor, Parvathi Menon, Mehdi van den Bos, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Yuko Saito, Takayuki Kato, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Aya M Tokumaru, Steve Vucic, Kenji Ishii, Atsushi Iwata：筋萎縮性側索硬化症における運動皮質興奮性と astrogliosis の関連についての検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023, 千葉, ポスター, 6 月 1 日, 2023
20. 髙橋健祐, 栗原正典, 石橋賢士, 後藤良司, 東原真奈, 亀山征史, 平野浩彦, 波多野敬子, 井原涼子, 武田克彦, 仁科裕史, 金丸和富, 石井賢二, 岩田　淳：進行性の偽性球麻痺を主徴とする症例における 18F-THK5351 PET の有用性. 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, ポスター, 6 月 1 日, 2023.

21. 岩田　淳：認知症診療における ATN 分類の臨床応用. 第 64 回日本神経学会学術大会, 2023, 千葉, 招待講演, 6 月 1 日, 2023.
22. 近藤壯一朗, 東原真奈, 波多野敬子, 栗原正典, 井原涼子, 石橋賢士, 吉田拓也, 高梨成彦, 德丸阿耶, 小松明子, 新井冨生, 齋藤　輔, 宮腰重三郎, 橘 盛昭, 宮本　鋼, 辛　正廣, 仁科裕史, 金丸和富, 石井賢二, 岩田　淳：中枢神経に発生した成熟 B 細胞腫瘍における 18F-THK5351　PET の有用性の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, ポスター, 6 月 1 日, 2023.
23. 舟川　開, 栗原正典, 髙橋健祐, 小松　樹, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 德丸阿耶, 原　愛徒, 齊藤祐子, 光武明彦, 柴田頌太, 石浦浩之, 金丸和富, 村山繁雄, 岩田　淳：成人発症神経核内封入体病における感覚障害・小脳性運動失調の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, 口演, 6 月 3 日, 2023.
24. 小森雄太, 栗原正典, 小松大樹, 後藤良司, 波多野敬子, 東原真奈, 井原涼子, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 金丸和富, 武田克彦, 岩田　淳：右側頭葉を中心とした萎縮を示す前頭側頭型認知症の神経画像と神経心理症状の関係性. 第 64 回日本神経学会学術大会. 千葉, 口演, 6 月 3 日, 2023.
25. 秋冨友佑, 高橋健祐, 東原真奈, 近藤壯一朗, 原　愛徒, 井原涼子, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田　淳：経過 6 年の原因不明の嚥下障害に対して大腿直筋生検を施行し, 診断が得られた封入体筋炎の 1 例. 第 687 回日本内科学会関東地方会. 東京, 口演, 6 月 10 日, 2023.
26. 金丸和富, 金丸晶子, 仁科裕史, 岩田　淳, 村山繁雄：アルツハイマー型認知症における脳脊髄液バイオマーカーと認知機能との関連. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 口演, 6 月 16 日, 2023.
27. 岩田　淳：認知症で期待される新しい治療ターゲット. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 横浜, 教育講演, 6 月 17 日, 2023.
28. 髙橋健祐, 平賢一郎, 東原真奈, 原　愛徒, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田　淳：嚥下障害で発症し病初期に四肢筋力低下が目立たず, 経過 6 年で診断に難渋した封入体筋炎の 88 歳男性例. 第 245 回 日本神経学会関東・甲信越地方会. 東京, 口演, 6 月 17 日, 2023.
29. 髙橋健祐, 東原真奈, 山田一貴, 近藤壯一郎, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 加藤貴行, 金丸和富, 仁科裕史, 岩田　淳：早期診断, 早期治療により良好な転帰をたどった軸索型 Guillain-Barré 症候群の 1 例. 第 37 回日本神経救急学会学術集会. 軽井沢, 口演, 6 月 24 日, 2023.
30. 山田一貴, 東原真奈, 髙橋健祐, 近藤壯一朗, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 加藤貴行, 小原健太, 仁科裕史, 岩田　淳：アテローム性脳梗塞の加療後に起立性低血圧が増悪し脳梗塞の再発を認めた 65 歳女性例. 第 37 回日本神経救急学会学術集会, 2023, 軽井沢, 口演, 6 月 24 日, 2023.
31. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata, Yuko Saito, Shigeo Murayama：Pathological background of decreased CSF Aβ42 in dementia with Lewy bodies and progressive supranuclear palsy. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会, 神戸, 口演, 7 月 16 日, 2023.
32. 後藤良司, 栗原正典, 原　愛徒, 荒川　晶, 松原知康, 岩田　淳, 新井冨生, 村山繁雄, 齊藤祐子：嗜銀顆粒性認知症の一純粋例. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会, 2023, 神戸, ポスター, 7 月 6 日, 2023.
33. 岩田　淳：認知症のバイオマーカー診断. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会, 2023, 神戸, 招待講演, 7 月 7 日, 2023.
34. 岩田　淳：それでもシヌクレイン抗体療法で PD は治療できる-No の立場から. 第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス, 大阪, 招待講演, 7 月 22 日, 2023.
35. 山田一貴, 東原真奈, 髙橋　祐, 小野秀子, 栗原正典, 平 賢一郎, 波多野敬子, 井原涼子, 仁科裕史, 幸原伸夫, 岩田　淳：随意収縮により誘発される顔面・四肢の筋痙攣と四肢の感覚鈍麻を主訴に来院した 61 歳男性例. 第 107 回 NeuroMuscular Conference, 東京, 口演, 7 月 23 日, 2023.
36. 岩田　淳：バイオマーカーを用いた認知症医療の社会実装に向けて. TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム, 東京, 招待講演, 7 月 28 日, 2023.
37. 谷藤秀一, 栗原正典, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 武田克彦, 岩田　淳：電文体発話を特徴とする進行性の非流暢性失語を前景に, 左上下肢動作緩慢を伴った右利き 75 歳女性の 1 例. 第 246 回日本神経学会関東甲信越地方会, 東京, 口演, 9 月 2 日, 2023.
38. 近藤壯一朗, 栗原正典, 原　愛徒, 東原真奈, 仁科裕史, 金丸和富, 村山繁雄, 齊藤祐子, 岩切理歌, 岩田　淳：年齢・合併症を考慮した免疫抑制療法により良好な転帰が得られたスタチン関連免疫介在性壊死性ミオパチーの 81 歳女性例. 第 75 回日本老年医学会 関東甲信越地方会, 東京, 口演, 9 月 30 日, 2023.
39. 岩田　淳：アルツハイマー病のバイオマーカー診断と疾患修飾薬. 第 69 回日本内科学会信越支部生涯教育講演会, 新潟, 招待講演, 10 月 21 日, 2023.
40. 石橋賢士, 近藤壯一朗, 波多野敬子, 東原真奈, 岩田　淳, 石井賢二：中枢神経系の腫瘍性疾患における 18F-THK5351 を用いた MAO-B PET の有用性. 第 63 回日本核医学会学術総会, 大阪, 口演, 11 月 16 日, 2023.
41. 今村洋介, 谷藤秀一, 栗原正典, 近藤壯一朗, 小寺玲美, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田　淳：若年性脳梗塞を契機に原発性アルドステロン症が判明した 45 歳男性例. 第 691 回日本内科学会関東地方会, 東京, 口演, 11 月 8 日, 2023.

42. 岩田　淳：アルツハイマー病の超早期診断時代を迎えたバイオマーカーの最新知見. 第 49 回臨床神経病理懇話会, 第 24 回日本神経病理学会近畿地方会, 東京, 口演, 11 月 8 日, 2023.
43. 栗原正典, 松原知康, 森本 悟, 荒川 晶, 金丸和富, 岩田　淳, 齊藤祐子, 村山繁雄：脳脊髄液アルツハイマー病バイオマーカーと剖検脳病理所見の関係の詳細な検討. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
44. 間野達雄, 大友　岳, 橋本唯史, 戸田達史, 岩田　淳：Hif1a and α-Syn Degradation:A Neuron-Specific Epigenome in Parkinson's Disease. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
45. 近藤壯一朗, 栗原正典, 大瀬賢介, 野島　久, 吉川えみ子, 岩田　淳：アルツハイマー病脳脊髄液バイオマーカーでの全自動 CLEIA ・ELISA 測定値間の関係性. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
46. 井原涼子, 小岩井あまね, 加川栄美, 上村　綾, 新美芳樹, 岩坪　威, 岩田　淳：認知機能検査の品質管理としての音声レビューの必要性の検証-J-TRC 研究の経験. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
47. 鈴木一詩, 古屋佑一郎, 本郷悠, 松井太郎, 佐藤謙一郎, 新美芳樹, 井原涼子, 岩田　淳, 岩坪　威, 池脇克則：軽度認知障害における認知ドメインの障害パターンと予後の関連. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
48. 佐藤謙一郎, 新美芳樹, 井原涼子, 岩田　淳, 池内　健, 岩坪　威：本邦における APOE 遺伝子検査についての医療機関によるウェブ広告の実態調査. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
49. 金丸和富, 金丸晶子, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 東原奈, 仁科裕史, 岩田　淳, 齊藤祐子, 村山繁雄：アルツハイマー病における CSF biomarker と MMSE との関連. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, ポスター, 11 月 24 日, 2023.
50. 岩田　淳：What are the challenges created by the introduction of anti-Aβ drugs?. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 2023, 奈良, シンポジウム, 11 月 25 日, 2023.
51. 岩田　淳：抗 Aβ抗体レケンビのもたらす治療価値に関して. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, 招待講演, 11 月 25 日, 2023.
52. 岩田　淳:Dementia における分散型臨床試験の lessons learned と展望. 第 42 回日本認知症学会学術集会, 奈良, 招待講演, 11 月 25 日, 2023.
53. 岩田　淳：レカネマブの臨床効果. アルツハイマー病における抗アミロイドβ抗体薬の投与にあたり必要な事項, 奈良, 招待講演, 11 月 25 日, 2023.
54. 髙橋健祐, 東原真奈, 栗原正典, 石橋賢士, 近藤壯一朗, 小森雄太, 平野浩彦, 井原涼子, 仁科裕史, 石井賢二, Steve Vucic, 岩田　淳：Bulbar onset motor neuron disease における 18F-THK5351 PET と threshold tracking TMS の有用性について. 第 53 回日本臨床神経生理学会, 福岡, ポスター, 11 月 30 日, 2023
55. 夏目 采, 東原真奈, 小野秀子, 小森雄太, 竹山哲史, 高橋健祐, 清水 優, 岩田　淳, 時村文秋：神経伝導検査が予後予測と治療方針の決定に役立った肘部管症候群の一例. 第 53 回臨床神経生理学会, 福岡, ポスター, 11 月 30 日, 2023.
56. 小森雄太, 平賢一郎, 栗原正典, 吉田千晴, 石橋賢士, 石井賢二, 武田克彦, 岩田　淳：記銘力が比較的保たれており頭頂葉機能障害が目立った若年発症アルツハイマー病の 65 歳女性例. 第 247 回日本神経学会関東甲信越地方会, 東京, 口演, 12 月 2 日, 2023.
57. 秋冨友佑, 平 賢一郎, 髙橋健祐, 東原真奈, 原　愛徒, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田　淳：嚥下第 100 回日本核医学会関東甲信越大会障害で発症し, 病初期に四肢筋力低下が目立たず, 診断に難渋した封入体筋炎の 88 歳男性例. 第 27 回板橋区医師会医学会, 東京, 口演, 12 月 2 日, 2023.
58. 岩田　淳：認知症治療における最新のトピックス. 第１８回東京都医学検査学会, 東京, 招待講演, 12 月 3 日, 2023.
59. 岩田　淳：認知症の治療薬開発の現状. 21 世紀先端医療コンソーシアム, 東京, 口演, 1 月 16 日, 2024.
60. 岩田　淳：アルツハイマー病疾患修飾薬の登場で変わる認知症医療. 第 100 回日本核医学会関東甲信越大会, 東京, 招待講演, 1 月 27 日, 2024.
61. 平 賢一郎, 森まどか, 秋冨友佑, 東原真奈, 加藤貴行, 仁科裕史, 金丸和富, 岩田　淳：封入体筋炎における頭頸部筋病変の検討. 令和 5 年度希少難治性筋疾患に関する調査研究班, 東京, 2 月 2 日, 2024.
62. 岩田　淳：抗 Aβ薬の登場によって認知症医療はどう変わるか. 第 28 回福岡市認知症疾患医療センター研修会, 福岡, 招待講演, 2 月 13 日, 2024.
63. 岩田　淳：アルツハイマー病疾患修飾薬の登場で変わる認知症医療. 日本精神薬学会 WEB 講習会東京, 招待講演, 2 月 25 日, 2024.
64. 嶋﨑亮介, 栗原正典, 東原真奈, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 武田克彦, 岩田　淳：bvFTD と dysexecutive AD の鑑別に 18F-MK-6240 PET が有用だった 63 歳女性例. 第 248 回日本神経学会関東甲信越地方会, 東京, 口演, 3 月 2 日, 2024.

65. 椎尾三保子,前田伸也,岩田　淳,石橋賢士,石井賢二,詫間　浩,石坂裕子,櫻井靖久：18F-THK5351 PET で両側後頭側頭領域に限局性の集積を呈し,ventral variant posterior cortical atrophy と考えられた 73 歳女性例.第 248 回日本神経学会関東・甲信越地方会,東京,口演,3 月 2 日,2024.
66. 岩田　淳：レカネマブの適用使用を考える。その臨床像とこれからの診療連携を見据え.秋田県医師会認知症診療ネットワーク研修会,秋田,招待講演,3 月 18 日,2024.

●講師等院外活動（講演・放送等）

1. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の疾患修飾薬の登場と今後の認知症医療の方向性.IQVIA 講演会.東京,4 月 28 日,2023.
2. 岩田　淳：招待講演　「脳ドック領域における認知機能チェックの重要性」−近未来の認知症診療を見据えて今,知っておくべきこと−.日本脳ドック学会 web 講演会.東京,5 月 15 日,2023.
3. 岩田　淳：招待講演　臨床におけるバイオマーカー診断の意義と課題.アルツハイマー病研究会 第 23 回学術シンポジウム.東京,5 月 27 日,2023.
4. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線.第 62 回多摩核医学技術検討会.東京,6 月 9 日,2023.
5. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線.埼玉県神経内科医会.大宮,6 月 15 日,2023.
6. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病治療薬の最前線. 第 1 回豊島区もの忘れ相談医養成研修会.東京,6 月 19 日,2023.
7. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線. 第 18 回認知症ファイヤーカンファレンス.名古屋,7 月 1 日,2023
8. 岩田　淳：招待講演　レビー小体病の診断と治療. 北海道トレリーフライブ配信講演会.東京,7 月 4 日,2023.
9. 岩田　淳：招待講演　AD Continuum・バイオマーカーパネルを用いた早期アルツハイマー病の診断.Neuroscience Web Seminar.新潟,7 月 6 日,2023.
10. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の臨床はどう変わるか〜パーキンソン病も含めて考える〜.NeurologySeminar-認知症 Part.東京,7 月 24 日,2023.
11. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病治療薬の最前線. 北区医師会学術講演会.東京,7 月 26 日,2023.
12. 岩田　淳：招待講演　認知症治療薬の現状と新しい治療薬.興和株式会社研修会.東京,8 月 24 日,2023.
13. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の超早期診断時代を迎えたバイオマーカーの最新知見.第 37 回中勢認知症集談会特別講演会. 津,8 月 31 日,2023.
14. 岩田　淳：招待講演　疾患修飾薬（Aβ抗体薬）副作用,特に ARIA について. 大阪府認知症疾患医療センター勉強会.大阪,9 月 1 日,2023.
15. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病治療薬の最前線.茨城県認知症病態と治療講演会.つくば,9 月 6 日,2023.
16. 岩田　淳：招待講演　疾患修飾薬を見据えた次世代の認知症医療. 茨城県認知症疾患医療センター研修会.つくば,9 月 8 日,2023.
17. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病治療薬の最前線. 認知症とフレイル:診療の forefront.千葉,9 月 27 日,2023.
18. 岩田　淳：招待講演　バイオマーカーを用いた早期アルツハイマー病の診断. 鳥取県中部医師会講演会.倉吉,10 月 12 日,2023.
19. 岩田　淳：招待講演　脳神経内科医はレビー小体型認知症をどう診断,治療しているか。症例を交えて.第 94 回板薬イブニングセミナー.東京,10 月 19 日,2023.
20. 岩田　淳：招待講演　レケンビのデータから考える 実臨床への応用.ボストン,10 月 26 日,2023.
21. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の医療はどう変わるか.第 7 回神経変性疾患を学ぶ会 In WEST TOKYO.東京,11 月 7 日,2023.
22. 岩田　淳：招待講演　「パーキンソン病治療・最新の話題〜医師の立場から〜」.パーキンソン病治療多職種連携セミナー.東京,11 月 15 日,2023.
23. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬とは何か?.第 29 回 New Horizon for Neurosciences.東京,12 月 9 日,2023.
24. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬とは何か?.New Horizon for Neurosciences. 東京,12 月 9 日,2023.
25. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病疾患修飾薬の社会実装とその問題. 第 35 回 21 世紀カンファレンス.東京,12 月 14 日,2023.
26. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の疾患修飾薬とは?. 研修医・若手医師のための脳神経内科学への誘

い. 東京,12 月 14 日,2023.
27. 岩田　淳：招待講演　これからの認知症診療と抗 Aβ抗体薬レカネマブの最新知見. 藤岡多野地区かかりつけ医認知症対応力向上フォローアップ研修会.東京,12 月 18 日,2023.
28. 岩田　淳：招待講演　抗 Aβ薬の登場でどう臨床は変わるか.アミロイド PET 勉強会 in 埼玉. 東京,12 月 20 日,2023.
29. 岩田　淳:招待講演　これからの認知症診療と抗 Aβ抗体薬レカネマブの最新知見.令和 5 年度第 3 回かかりつけ医認知症対応力向上研修会.鳥取,1 月 12 日,2024.
30. 岩田　淳：招待講演　認知症の治療薬開発の現状. 21 世紀 先端医療コンソーシアム.東京,1 月 16 日 2024.
31. 岩田　淳：招待講演　レケンビの臨床試験の効果について紐解く.LEQEMBI Japan Kick-off Meeting.東京,1 月 20 日,2024.
32. 岩田　淳：招待講演　アルツハイマー病の新しい治療と認知症予防のお話し. 東京海上日動あんしん生命認知症セミナー.東京,1 月 24 日,2024.
33. 岩田　淳：招待講演　抗 Aβ抗体レケンビのもたらす治療価値について.西胆振認知症を考える会.東京,1 月 25 日,2024.
34. 岩田　淳:招待講演　抗 Aβ抗体レケンビのもたらす治療価値について.秋田県認知症疾患医療センター講演会.東京,1 月 26 日,2024.
35. 岩田　淳：招待講演　抗 Aβ抗体レケンビのもたらす治療価値について.さっぽろ北部認知症連携の会セミナー.東京,1 月 31 日,2024.
36. 岩田　淳：招待講演　レケンビのデータから考える実臨床への応用.　LEQEMBI web Seminar. 東京,2 月 2 日,2024.
37. 岩田　淳：招待講演　抗 Aβ抗体レケンビのもたらす治療価値について.認知症セミナー in 釧路. 東京,2 月 9 日,2024.
38. 岩田　淳：招待講演　レケンビの安全使用にむけて-ARIA の鑑別と対処を中心に.レケンビ適正使用講演会-ARIA マネジメントについて.東京,2 月 20 日,2024.
39. 岩田　淳：招待講演　高齢者てんかんの鑑別診断と治療～認知症に潜むてんかん～. 患者中心の医療を目指す Web セミナー.長崎,3 月 1 日,2024.
40. 岩田　淳：招待講演　レケンビの適正使用を考えーその臨床像とこれからの診療連携を見据えて.LEQEMBI EXPERT MEETING in Aomori.青森,3 月 11 日,2024.
41. 岩田　淳:招待講演　レケンビのデータから考える実臨床への応用.第 2 回新潟県における抗 Aβ抗体薬の医療体制について考える会.新潟,3 月 14 日,2024.
42. 岩田　淳：招待講演　レケンビのデータから考える実臨床への応用.LEQEMBI web Seminar.東京,3 月 22 日,2024.
43. 岩田　淳：招待講演　脳神経内科の地域連携の理想像高齢パーキンソン病をどう診るか. Parkinson’s disease seminar.東京,3 月 25 日,2024.
44. 岩田　淳：招待講演　これからの認知症診療と抗 Aβ抗体薬レカネマブの最新知見. 宇都宮市医師会学術講演会.宇都宮,3 月 28 日,2024.
45. 岩田　淳：招待講演　オープニング.Alzheimer’s disease evangelist program.東京,3 月 30 日,2024.

総合内科・高齢診療科

＜雑誌論文＞

1. Iwakiri R, Hamaya H, Nakayama T, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Araki A. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic diseases and geriatric syndromes, predicts the risk of difficulty in discharge home in older patients admitted to acute care hospital. Geriatrics & Gerontology International. Geriatr. Gerontol. Int. 2023;1-6. DOI:1111/ggi.14727
2. 瀧川美和, 岩切理歌, 片原優斗, 小原朋や, 島﨑良知, 瀧川正則, 片岡愛, 大川庭熙, 石川譲治, 荒木厚. 高齢者急性期病院におけるポリファーマシーカンファレンスに基づい薬剤師による減薬提案の実態および効果に関する調査 日本老年薬学学会雑誌 Vol.7 No.1 2024 pp.1-7
3. Shimazaki Y; Kishimoto K; Ishikawa J; Iwakiri R; Araki A; Shinobu Imai. Association between cognitive impairment severity and polypharmacy in older patients with atrial fibrillation: a retrospective study using inpatients data from a specialised geriatric hospital Geriatrics (Basel). 2024 Jan 24;9(1):15. doi: 10.3390/geriatrics9010015
4. 小原朋也, 熊木良太, 片原憂斗, 佐藤麻美子, 島﨑良知, 岩切理歌, 岸本桂子. 高齢者において常用薬と服用意図が一致しない状態の形成・ 持続に関わる要因と一致している薬剤の特徴に関する検討 日本老年薬学学会雑誌 Vol.7 No1. 2024 PP 8-15
5. Hamaya H, Kojima T, Hattori Y, Akishita M. Association of pneumonia admission with polypharmacy and drug use in community-dwelling older people. Geriatr Gerontol Int. 2024 Apr;24(4):404-409.

＜単行書に一部執筆＞

1. 岩切理歌：認知症大全. 脳の機能の衰えを示す傾眠、病気が隠れていないか確認を. 小学館, pp190-191, 2023.
2. 片岡 愛、岩切理歌、荒木 厚 おなかによい生活習慣とは？患者さんにどう伝える？ 南山堂 薬局 May 2023 Vol.74 No 6

＜学会など研究会発表＞

＜令和５年度実績＞

1. Iwakiri R, Nakayama T, Hamaya H, Kataoka A, Kobayashi T, Murano Y, Okawa T, Araki A. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic disease and geriatric syndromes, predicts risk of failure to discharge home in older patients. The International Association of Gerontology and Geriatrics. Yokohama 2023/6/14
2. Hamaya H, Araki A, Uchida N, Nakayama T, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Iwakiri R. Multimorbidity scores consisting of chronic diseases and geriatric syndromes, were associated with lower incidence of improvement of Barthel Index after admission. The International Association of Gerontology and Geriatrics 2. Yokohama 2023/6/14
3. Nakayama T, Hamaya H, Araki A, Uchida N, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Iwakiri R.The Dementia Assessment SheetforCommunity-based Integrated Care System (DASC-21) predicts risk of failure to discharge home in older adults with pneumonia The International Association of Gerontology and Geriatrics . Yokohama 2023/6/14
4. 岩切理歌、濵谷広頌、村野陽子、中山智博、片岡 愛、大川庭熙、荒木厚:高齢入院患者における multimorbidity は退院時の転院または死亡のリスクを予測する

第 65 回日本老年医学会学術集会 横浜 6/16～6/18, 2023

5. 濵谷広頌、岩切理歌、村野陽子、中山智博、片岡　愛、大川庭熙、荒木厚：高齢者入院における Multimorbidity と入院後の Barthel index の変化との関連についての検討
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/18, 2023
6. 中山智博、村野陽子、小林孝史、片岡愛、大川庭熙、荒木厚：The Dementia Associated Sheet for Community-based Integrated Care System (DASC-21) による高齢者肺炎患者の退院転帰に及ぼす影響についての検討
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/18, 2023
7. 片岡愛、小林 孝史、中山 智博、濱谷 広頌、村野 陽子、大川 庭熙、岩切　理歌：
高齢者における便秘症と慢性併存症との関連第
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/18, 2023
8. 村野陽子、濱谷広頌、片岡愛、小林孝史、中山智博、大川庭熙、佐塚まなみ、山本寛、岩切理歌：80 歳以上の睡眠時無呼吸症候群の臨床像の検討
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/17, 2023
9. 小林孝史、中山智博、濵谷広頌、片岡　愛、村野陽子、大川庭熙、岩切理歌：
後期高齢者における血圧と動脈硬化及び骨格筋量との関連
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/18, 2023
10. 大川庭熙、坪光雄介、藤本肇. 高齢者救急病院における CCU 選定救急搬送患者の傾向
第 65 回日本老年医学会学術集会　　横浜　6/16～6/18, 2023

＜講師など院外活動＞

1. 岩切理歌：東京都看護協会　「高齢者のフィジカルアセスメント～高齢者に多い症状や疾患に対するケア」
東京都新宿区　　12/5, 2023
2. 岩切理歌:板橋区のポリファーマシーを考える会「当院におけるポリファーマシー対策(7年間を振り返って)」
東京都板橋区　　3/7, 2023

膠原病・リウマチ科

＜学術論文＞

1. Yamada S, Nagafuchi Y, Wang M, Ota M, Hatano H, Takeshima Y, Okubo M, Kobayashi S, Sugimori Y, Masahiro N, Yoshida R, Hanata N, Suwa Y, Tsuchida Y, Iwasaki Y, Sumitomo S, Kubo K, Shimane K, Setoguchi K, Azuma T, Kanda H, Shoda H, Zhang X, Yamamoto K, Ishigaki K, Okamura T, Fujio K. Immunomics analysis of rheumatoid arthritis identified precursor dendritic cells as a key cell subset of treatment resistance. Ann Rheum Dis. 2023 Jun;82(6):809-819.
2. Ota M, Nakano M, Nagafuchi Y, Kobayashi S, Hatano H, Yoshida R, Akutsu Y, Itamiya T, Ban N, Tsuchida Y, Shoda H, Yamamoto K, Ishigaki K, Okamura T, Fujio K. Multimodal repertoire analysis unveils B cell biology in immune-mediated diseases. Ann Rheum Dis. 2023 Nov;82(11):1455-1463.
3. Matsumoto T, Sugihara T, Hosoya T, Ishizaki T, Kubo K, Kamiya M, Baba H, Tsuchida M, Hirano F, Kojima M, Miyasaka N, Harigai M. Effectiveness and safety of treat-to-target strategy for methotrexate-naïve rheumatoid arthritis patients >75 years of age. Rheumatol Adv Pract. 2024 Feb 9;8(1):rkae019.

＜総説/単行本＞

1. 久保かなえ『腎機能障害における免疫抑制療法の注意点』　リウマチ科 70(1):1-7, 2023
2. 久保かなえ『高齢者におけるリウマチ診療』板橋区医師会通報 2023 夏号
3. 久保かなえ『高齢者関節リウマチ治療の実際』CLINIC magazine 636:24-27, 2023
4. 久保かなえ『高齢者における膠原病の診断と治療』Medical Practice 41(2):264-268, 2024

＜学会＞

1. 秋冨友佑、小林聖未、新井冨生、久保かなえ. 巨細胞性動脈炎治療後に ANCA 陽転化を伴う顕微鏡的多発血管炎が発症した 1 例. 第 686 回内科学会関東地方会 2023.5
2. Hiroyuki Baba, Takahiko Sugihara, Tatsuro Ishizaki, Manami Nomura, Tadashi Hosoya, Mari Kamiya, Takumi Matsumoto, Kanae Kubo, Fumio Hirano, Nobuyuki Miyasaka, Masayo Kojima, Shinsuke Yasuda, Masayoshi Harigai. Long-term outcomes of methotrexate in elderly-onset RA implementing the treat-to-target strategy. EULAR 2023 Congress. 2023.5 Milan
3. Yasuo Nagafuchi, Saeko Yamada, Mineto Ota, Hiroaki Hatano, Kanae Kubo, Kenichi Shimane, Keigo Setoguchi, Takanori Azuma, Mizuko Mamura, Tomohisa Okamura, Kazuyoshi Ishigaki, Keishi Fujio. Immunological profiling identified clinical correlates and abatacept treatment response predictor of rheumatoid arthritis. EULAR 2023 Congress. 2023.5 Milan
4. Yasuo Nagafuchi Saeko Yamada, Mineto Ota, Hiroaki Hatano, Kanae Kubo, Kenichi Shimane, Keigo Setoguchi, Takanori Azuma, Mizuko Mamura, Tomohisa Okamura, Kazuyoshi Ishigaki, Keishi Fujio. Immunological profiling identified clinical correlates and predictors of rheumatoid arthritis. 第 67 回日本リウマチ学会　2023.4 福岡
5. 杉原毅彦、松本拓実、竹中健智、久保かなえ、木村直樹、津野宏隆、松井利浩. 関節リウマチ患者における合併症によるダメージの蓄積. 第 67 回日本リウマチ学会　2023.4 福岡

＜講師等院外活動＞

1. 久保かなえ　第 120 回日本内科学会ことはじめ　座長 2023.4
2. 久保かなえ　高齢化時代における RA 診療を考える会　座長　2023.5 東京　アッヴィ合同会社

3. 久保かなえ　Biologics Cross Conference ディスカッサント 2023.6 大鵬薬品
4. 久保かなえ　『全身性エリテマトーデスの診療』2023.6 日本新薬株式会社
5. 久保かなえ　第 18 回腎・膠原病治療研究会　座長 2023.9　エーザイ株式会社
6. 久保かなえ　リウマチ・膠原病治療を考える会 in 城北 座長　2023.9 エーザイ株式会社
7. 久保かなえ　『超高齢化社会のリウマチ診療』関節リウマチ治療を考える 2023.11 ファイザー株式会社
8. 久保かなえ　TAISHO Rheumatoid Arthritis Meeting 座長　2023.11 大正製薬株式会社
9. 久保かなえ　『高齢者関節リウマチの診療連携について』RA Clinical Seminar 2024.12 田辺三菱製薬
10. 久保かなえ　『好酸球性多発血管炎性肉芽腫症』EGPA Management Seminar 2024.12 グラクソ・スミスクライン株式会社
11. 久保かなえ　RINVOQ Expert Seminar パネリスト　2024.12 アッヴィ合同会社
12. 久保かなえ　Glucocorticoid Web Seminar 座長　2023.12 第一三共株式会社
13. 久保かなえ　『高齢者の関節リウマチ診療』2024.1 エーザイ株式会社
14. 久保かなえ　関節リウマチ Web Seminar from 城北　座長 2024.3 エーザイ株式会社

腎臓内科・透析科

＜原著論文＞

1. Matsuno S, Itabashi M, Komatsu A, Taito K, Izawa A, Tsuchiya T, Yamanaka N, Oka M, Yumura W, Arai T, Takei T. Anti-glomerular basement membrane disease developing 3 years after the development of Sweet syndrome and 1 year after the development of anti-neutrophil cytoplasmic antibody-associated vasculitis: a case report. 2023 Aug;12(3):259-264. doi: 10.1007/s13730-022-00758-3.
2. Hashimoto, S. Itabashi M, Taito K, Izawa A, Ota Y, Tsuchiya T, Matsuno S, Arai M, Yamanaka N, Saito T, Oka M, Suzuki N, Tsuruta Y, Takei T. Usefulness of assessment of the Clinical Frailty Scale and the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 21-items at the time of initiation of maintenance hemodialysis in older patients with chronic kidney disease. Plosone 2024, in press

＜総説＞

1. 武井　卓、高齢化社会の腎泌尿器疾患診療 Up To Date】総説：高齢化社会における腎臓内科診療、腎と透析(0385-2156)94 巻 5 号 Page671-680(2023.05)
2. 板橋美津世【病因・病態生理から読み解く腎・泌尿器疾患のすべて】全身性疾患に伴う腎障害　抗リン脂質抗体症候群(解説) 腎と透析(0385-2156)95 巻増刊 Page238-241(2023.12)
3. 岡雅俊【病因・病態生理から読み解く腎・泌尿器疾患のすべて】全身性疾患に伴う腎障害　腫瘍崩壊症候群(解説) 腎と透析(0385-2156)95 巻増刊 Page331-335(2023.12)

＜学会抄録＞

1. Taito K, Oka M, Fukagawa H, Izawa A, Tsuchiya T, Matsuno S, Yamanaka N, Yumura W, Suzuki N, Itabashi M, Takei T, Acute Kidney Injury associated with COVID-19 in Elderly Patients, IAGG, Yokohama, 2024.06
2. Yamanaka N、Taito K、Izawa A、Tsuchiya T、Matsuno S、Oka M、Suzuki N, Itabashi M、Fujiwara Y、Takei T. Risk factors associated with the development of frailty among community-dwelling older adults: a 4-year prospective longitudinal study. IAGG, Yokohama, 2024.06
3. 孫田皓康, 帯刀健太, 太田由衣, 土屋毅亮, 松野志歩, 岡雅俊, 鈴木訓之, 板橋美津世, 武井 卓、肺 MAC 症の経過中に顕微鏡的多発血管炎を発症した 1 例、内科学会地方会　東京　2024. 02
4. 土屋 毅亮, 小林 茉愛, 岡 雅俊, 帯刀 健太, 井沢 理乃, 松野 志歩, 山中 法子, 板橋 美津世, 武井 卓、アバコパンが奏功した中型血管を主体に発症した ANCA 関連血管炎の一例、日本腎臓学東部学術大会　仙台　2023.09
5. 今村 洋介, 帯刀 健太, 岡 雅俊, 太田 由衣, 土屋 毅亮, 松野 志歩, 山中 法子, 鈴木 訓之, 板橋 美津世, 武井 卓、左室緻密化障害を合併した常染色体優性多発性嚢胞腎(ADPKD)の新規遺伝子異常の報告、日本腎臓学東部学術大会　仙台　2023.09
6. 深川 晴登, 帯刀 健太, 岡 雅俊, 橘 盛昭, 新井 冨生, 板橋美津世, 武井 卓、リンパ形質細胞性リンパ腫による急性腎障害をきたした一例、日本腎臓学東部学術大会　仙台　2023.09　(優秀演題賞)
7. 山中 法子, 帯刀 健太, 井沢 理乃, 土屋 毅亮, 松野志歩, 岡 雅俊, 板橋美津世, 藤原 佳典, 武井 卓、地域高齢者健診における腎機能と新規フレイル発症の関連性、日本腎臓学会総会　横浜　2023.06
8. 帯刀 健太, 岡 雅俊, 井沢 理乃, 土屋 毅亮, 松野志歩, 山中 法子, 湯村 和子, 板橋美津世, 武井 卓, 当院における COVID-19 感染症と急性腎障害、日本腎臓学会総会　横浜　2023.06
9. 土屋 毅亮, 岡 雅俊, 帯刀 健太, 井沢 理乃, 松野志歩, 板橋美津世, 武井 卓、尿路感染症を契機に急性

腎障害・脳室炎を発症し PMX,CHDF を要した 2 症例、日本透析医学会、神戸 2023.05

10. 帯刀 健太, 岡 雅俊, 井沢 理乃, 土屋 毅亮, 松野志歩, 山中 法子, 橋本 征治, 新井 冨生, 湯村 和子, 板橋美津世, 武井 卓、重症 COVID-19 肺炎罹患後に AKI となり血液透析導入し,離脱できず死亡した一例、日本透析医学会、神戸 2023.05
11. 井沢 理乃, 帯刀 健太, 土屋 毅亮, 松野志歩, 山中 法子, 岡 雅俊, 板橋美津世, 武井 卓、Mycobacterium gordonae による胸膜炎を合併した維持透析患者の一例、日本透析医学会、神戸 2023.05
12. 南茂悦子、井田はづき、寺山真由、金子絢美、新開省二、阿部 巧、村山洋史、板橋美津世、武井 卓、松岡亮輔、竹田優美、上條文夏、尿中 Na/K 比とフレイルとの横断的関係およびフレイル予防につながる食事内容の検討、第 78 回 日本栄養・食糧学会大会、福岡　2023.05

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 武井　卓：板橋区・練馬区・豊島区・北区合同 糖尿病予防デー　「糖尿病から腎臓を守ろう！」板橋　11月4日　2023
2. 板橋美津世:Nephrologist meeting 高齢MPAに対するアバコパン治療の可能性　東京　1月21日　2024　2.14
3. 武井　卓：医療の価値説明を目指すセミナー2023「医薬品及び医療機器の経済価値評価（費用対効果含む）の評価事例」2024.3.6
4. 板橋美津世:城北腎性貧血治療WEBセミナー「高齢者CKD治療におけるHIF-PHD阻害薬の使用経験」　2023.8.31

糖尿病・代謝・内分泌内科

令和5年度も当科スタッフはフレイルを中心とした多くの研究を行った。その結果、誌上発表49、学会発表61、講演その他78で総発表数は188となり、総数は昨年とほぼ同数だったが、学会発表が増加した。とくに国際学会であるIAGG2023における発表が際立ち、専攻医の勝俣先生の発表がOutstanding Poster Presentation Awardを受賞した。

研究の主たるテーマは高齢者糖尿病とフレイル・サルコペニア、認知機能、栄養である。本年度もDASC-8カテゴリーとフレイル発症（勝俣、豊島）、GDF-15とフレイル発症（大庭）、脊柱起立筋とフレイルの有病率(佐藤、田村)等の研究論文が英文誌に掲載された。専攻医による英語の症例報告も複数採択された。「スマートウォッチ研究」では、病院部門の中心となって患者を多数エントリーし、生活習慣病がある患者のヘルスログとフレイルの関連の研究に着手した。

また、令和5年度には「高齢者糖尿病診療ガイドライン2023」が刊行されたが、当科スタッフは委員および執筆者としてその多くに貢献した。また、本年刊行予定の日本老年医学会の「高齢者のための安全な薬物療法ガイドライン」の作成にも関与している。

さらに当科は長寿医療開発研究のフレイルレジストリー研究、全国の大学病院等の糖尿病患者のレジスリー研究「J-DREAMS」にも参加している。

＜雑誌論文(原著論文、英文誌、学会誌)＞

1. Shimazaki T, Kishimoto K, Ishikawa J, Iwakiri R, Araki A, Imai S. Association between cognitive impairment severity and polypharmacy in older patients with atrial fibrillation: a retrospective study using inpatient data from a specialised geriatric hospital. **Geriatrics.** 9(1), 15, **2024.**
2. Katsumata Y, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Iizuka A, Tachibana A, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Ishikawa J, Araki A. Changes in physical activity before, during, and after the state of emergency due to COVID-19 pandemic and its association with incidence of frailty in older outpatients with cardiometabolic disease. **Aging Medicine and Healthcare 2024**;(in press).
3. Oba K, Ishikawa J, Tamura Y, Fujita Y, Ito M, Iizuka A, Fujiwara Y, Kodera R, Toyoshima K, Chiba Y, Tanaka M, Araki A. Serum Growth Differentiation Factor 15 Levels Predict the Incidence of Frailty Among Patients with Cardiometabolic Diseases. **Gerontology** 2024; 70(5):517-525.
4. Kodera R, Fujihara K, Koyama T, Shiozaki H, Mutsuma Y, Yagyuda N, Hatta M, Tsuruoka K, Takeda Y, Araki A, Sone H. Impact of a history of cardiovascular disease and physical activity habits on the incidence of functional disability. **Sci Rep 2023** Nov 27;13(1):20793.
5. Iwakiri R, Hamaya H, Nakayama T, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Araki A. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic diseases and geriatric syndromes, predicts the risk of difficulty in discharge home in older patients admitted to acute care hospital. **Geriatr Gerontol Int 2024;** Mar:24 Suppl 1:300-305.
6. Sasaki T, Ueda T, Negishi Y, Toyoshima K, Yoshioka M, Ohta H, Araki A, Toba K. Using the Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON) for early detection of frailty. **Geriatr Gerontol Int 2024;** Mar:24 Suppl 1:396-397.
7. Katsumata Y, Toyoshima K, Tamura Y, Murao Y, Sato M, Watanabe S, Kodera R, Oba K, Ishikawa J, Chiba Y, Awata S, Araki A. Categorization using the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) based on cognitive function and activities of daily living predicts frailty, disability, and mortality in older adults. **Geriatr Gerontol Int. 2024;** Mar:24 Suppl 1:150-155.
8. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Relationship between blood pressure and cognitive impairment in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. **Geriatr Gerontol Int. 2024;** Mar:24 Suppl 1:110-117.
9. Sato M, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Katsumata Y, Watanabe S, Zen S, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Araki A. The cross-sectional area of erector spinae muscle and the liver-to-spleen ratio are associated with frailty in older patients with diabetes: A cross-sectional study. **BMC Geriatr. 2023** Nov 22;23(1):765.
10. Sato M, Toyoshima K, Tamura Y, Chiba Y, Araki A. Spontaneous pneumoperitoneum and diabetic ketoacidosis in fulminant type 1 diabetes: a case report. **Oxf Med Case Reports. 2023 Aug**

20;2023(8)： omad079.
11. Murao Y, Ishikawa J, Tamura Y, Kobayashi F, Iizuka A, Toba A, Harada K, Araki A. Association between physical performance during sit-to-stand motion and frailty in older adults with cardiometabolic diseases: a cross-sectional, longitudinal study. **BMC Geriatr. 2023 May 30**;23(1):337.
12. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Changes in blood pressure associated with frailty and sarcopenia in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. **Geriatr Gerontol Int. 2023**;23(7):506-516.
13. 荒木 厚：高齢者の common disease―糖尿病. **日本医師会雑誌** 152： 1280-1281, 2024.
14. 荒木 厚：夜間頻尿. **日本医師会雑誌** 152(9):990, 2023.
15. 瀧川美和, 岩切理歌, 片原憂斗, 小原朋也, 島﨑良知, 瀧川正紀, 片岡愛, 大川庭熙, 石川譲治, 荒木厚：高齢者急性期病院におけるポリファーマシーカンファレンスに基づいた薬剤師による減薬提案の実態および効果に関する調査. **日本老年薬学会誌** 7(1):1-7, 2024.
16. 荒木 厚:高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 が目指すもの. **日本内科学会雑誌** 112 (9):1600-1606, 2023.

＜雑誌論文（総説）＞

1. 荒木 厚：高齢者糖尿病における GLP-1 受容体作動薬の使用の意義と注意点. **医学のあゆみ** 288(12):981-984, 2024.
2. 荒木 厚:「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023」を踏まえた高齢者糖尿病の個別化医療. **Diabetes Journal** 51(1)22-26, 2024.
3. 荒木 厚：高齢者のサルコペニア肥満. **アニムス** 117:35-41, 2024.
4. 荒木 厚：序文. 特集　糖尿病と認知症. **Progress in Medicine** 43(12):1083, 2023.
5. 豊島堅志、荒木 厚：SGLT2 阻害薬、GLP-1 受容体作動薬と認知症. **Progress in Medicine** 43(12):1121-1124, 2023.
6. 荒木 厚：Q&A 糖尿病による末梢神経障害に悩まされています. **きょうの健康** 12 月号, 106, 2023.
7. 荒木 厚、田村嘉章、鳥羽研二:糖尿病とフレイル・サルコペニア. **DIABETES JOURNAL** 50(3):101-108, 2023.
8. 荒木 厚： 高齢者糖尿病の特徴と個別化治療. **日本臨床** 81:466-472, 2023.
9. 府川 則子、荒木 厚：食事療法と糖尿病. **月刊糖尿病** 15:47-55, 2023.
10. 勝俣 悠 、千葉 優子、池上 靖子、荒木 厚：糖尿病網膜症と認知機能障害,認知症. **月刊糖尿病** 15:29-38, 2023.
11. 荒木 厚：特集にあたって：認知症予防を考慮した高齢者糖尿病の治療. **月刊糖尿病** 15： 5, 2023.
12. 荒木 厚：フレイル対策におけるプロフェッショナル育成. **Prog. Med.** 43:615-619.
13. 荒木 厚：老年医学随想 ： Geriatric Medicine goes on. **Geriatric Medicine** 61(5)： 447-448, 2023.
14. 豊島堅志、荒木 厚:肥満治療は認知症予防に役立ちますか? **Geriatric Medicine** 61(5)： 433-436, 2023.
15. 片岡 愛 、岩切 理歌、荒木 厚： おなかによい生活習慣とは? 患者さんにどう伝える? **薬局** 74 ： 1135-1138, 2023.
16. 荒木 厚:(田中 幾太郎記事) SD が挑む(12)常識を覆し老いを止める:「高齢者の糖尿病」撃つ. **Themis** 32(7)； 82-83, 2023.
17. 田村嘉章　糖尿病と認知症：疫学, 危険因子 **Progress in Medicine** 43 (12) 1085-1090, 2023.ライフ・サイエンス
18. 田村嘉章.動脈硬化性疾患のリスク管理　糖尿病・肥満 **診断と治療** 111： 55-59, 2023
19. 豊島堅志:【高齢者糖尿病 update-診断・治療の最新動向-】高齢者糖尿病の合併症・併存症と管理　高齢者糖尿病をサポートする制度. **日本臨床** 81 巻 4 号 Page586-591(2023.04)
20. 豊島堅志:【概論】フレイルの UPDATE－診断・評価を中心に. **臨床栄養** 144 巻 3 号 Page314-321

＜雑誌論文（書籍その他）＞

1. 荒木 厚：生活習慣病と認知症予防の深い関係を知ろう. **健達ネットで 1 億回読まれている認知症が分かるコラム.** メディカル・ケア・サービス株式会社、東京, 29-35, 2024.
2. 荒木 厚：高齢者糖尿病. **日常診療に活かす診療ガイドライン UP-TO-DATE 2024-2025.** 門脇 孝, 小室一成, 宮地良樹（監修）. メディカルビュー社, 大阪, pp1049-1055, 2024.
3. 荒木 厚:第 14 章高齢者糖尿病. **糖尿病専門医研修ガイドブック改訂第 9 版―日本糖尿病学会専門医取得のための研修必携ガイド**, 日本糖尿病学会（編）, 診断と治療社, 東京, 426-434, 2023.
4. 荒木 厚:第 15 章特殊な病態における糖尿病治療. 認知機能障害、精神疾患における血糖コントロール. **糖**

尿病専門医研修ガイドブック改訂第 9 版―日本糖尿病学会専門医取得のための研修必携ガイド, 日本糖尿病学会（編), 診断と治療社, 東京, 467-469, 2023.

5. 荒木 厚：高齢者糖尿病. **内分泌代謝・糖尿病　内科領域専門医研修ハンドブック**. 日本内分泌学会・日本糖尿病学会（編集). 東京, 診断と治療社, 401 -403 , 2023.
6. 日本老年医学会・日本糖尿病学会（編・著）：**高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023**. 南江堂, 東京,1-235, 2023.
7. 荒木 厚：認知機能障害、精神疾患における血糖管理. **内分泌代謝・糖尿病　内科領域専門医研修ハンドブック**. 日本内分泌学会・日本糖尿病学会（編集). 東京, 診断と治療社, 431 -432 , 2023.
8. 荒木 厚：第６章　内科疾患. **公認心理師カリキュラム準拠 人体の構造と機能及び疾病第２版.** 武田 克彦（編集), 岩田 淳（編集), 小林 靖（編集). 医歯薬出版株式会社, 東京, 84-96, 2024.
9. 荒木 厚（監修)、荒木厚、本田佳子、府川則子、本川佳子. **フレイルサポート栄養士テキスト**. 東京, 1-148, 2023.
10. 荒木 厚：慢性腎臓病：SGLT2 阻害薬への期待と高齢者への処方の落とし穴. **高齢者薬物療法の勘所：マルモ・リハ薬剤・サルコペニアを一刀両断**. 松本彩加、吉村芳弘（編集). 東京、中外医学社、41-52, 2023.
11. 荒木 厚：高齢者で自己注射が困難な場合の糖尿病管理. **ちょっと困った背景を持つ糖尿病の診かた：基本をクリアしたすべての糖尿病診療医へ捧げる**. 北澤公（編集)、河合俊英（編集協力). 金芳堂、京都、138-150, 2023.
12. 荒木 厚：高齢者の検査計画. **臨床検査データブック 2023-2024**. 高久史麿（監修）、黒川清、春日雅人、北村聖、大西宏明. 医学書院、東京、84-86, 2023.
13. 田村嘉章:(共著)**「認知症の併存疾患管理ガイドブック」**南山堂 2024

＜学会発表＞

1. 荒木 厚：(シンポジウム３）糖尿病治療の最前線. 高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 が目指すもの. **第 120 回日本内科学会総会・講演会**. 東京, 4 月 16 日, 2023.
2. 荒木 厚：(座長）(シンポジウム 10)より良い高齢者糖尿病ケアを目指して. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島, 5 月 11 日, 2023.
3. 勝俣 悠, 豊島堅志, 村尾 雄治, 寄川 史乃, 北山 さおり, 渡部創, 小寺玲美, 大庭和人, 石川譲治, 田村嘉章, 千葉優子, 栗田主一, 荒木　厚: DASC-8 による高齢者糖尿病のカテゴリー分類において, フレイル発症リスクはカテゴリーII から増加する. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島, 5 月 12 日, 2023.
4. 小寺玲美, 田村嘉章, 村尾 雄治, 寄川 史乃, 勝俣 悠, 北山 さおり, 渡部創, 大庭和人, 豊島堅志, 石川譲治, 千葉優子, 荒木　厚: 高齢糖尿病患者における重心動揺計の指標とフレイルや身体能力との関連について. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島, 5 月 13 日, 2023.
5. 渡部 創、大庭 和人、田村 嘉章 、石川 譲治 、勝俣 悠、北山さおり、小寺 玲美、豊島 堅志、千葉 優子、荒木 厚. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島, 5 月 13 日, 2023.
6. Atsushi Araki, Keiko Motokawa, Misato Hayakawa, Kenji Toyoshima, Hirohiko Hirano, Noriko Fukawa, Keiko Honda, Tomoki Sasaki, Yuka Narita, Hiizuru Ota, Takuya Ueda, Yoshinori Fujiwara, Tatsuro Ishizaki, Yoshiaki Tamura, Kenji Toba. Development of the program of certificated Frailty-Support Physicians, Nutritionists, and Nurses for the support of community-dwelling older people based on the “Frailty Health Check-up” in Japan. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 202**3. Yokohama, June 12, 2023.
7. Motoya Sato, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, Yu Katsumata, So Watanabe, Shugo Zen, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Atsushi Araki. Erector spinae muscle area is associated with frailty and accumulation of visceral fat is positively correlated with arteriosclerosis in old-old inpatients with diabetes: A cross-sectional study. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 12, 2023.
8. Yuu Katsumata, Kenji Toyoshima, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, So Watanabe, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yuko Chiba, Shuichi Awata, Atsushi Araki. Categorization according to the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) predicts the risk of frailty, disability, and death. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 13, 2023.
9. Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yasunori Fujita, Masafumi Ito, Remi Kodera, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Masashi Tanaka, Atsushi Araki. High serum growth differentiation factor 15 (GDF15) levels were associated with incidence of frailty in patients with cardiometabolic disease. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 13, 2023.

10. Rika Iwakiri, Tomohiro Nakayama, Hironobu Hamaya, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Teiki Okawa, Atsushi Araki. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic disease and geriatric syndromes, predicts risk of failure to discharge home in older patients. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 12, 2023.
11. Hironobu Hamaya, Tomohiro Nakayama, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Atsushi Araki, Rika Iwakiri. Multimorbidity scores consisting of chronic diseases and geriatric syndromes, were associated with lower incidence of improvement of Barthel Index after admission. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 14, 2023.
12. Tomohiro Nakayama, Hironobu Hamaya, Yoko Murano, Takashi Kobayashi, Ai Kataoka, Teiki Okawa, Atsushi Araki, Rika Iwagiri. The Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System (DASC-21) predicts risk of failure to discharge home in older adults with pneumonia. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 14, 2023.
13. Ayumi Toba, Joji Ishikawa, Ruri Shimizu, Kana Takani, Aya Yamamoto, Teppei Maeda, Matsuyo Kawano, Yoshiaki Tamura, Atsushi Araki, Kazumasa Harada. Left atrial function assessed by strain imaging is associated with appendicular skeletal muscle mass index in patients with cardiometabolic disease. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 14, 2023.
14. Tomoki Sasaki, Yui Negishi, Akane Machida, Atsushi Araki, Kenji Toyoshima, Mami Yoshioka, Hiizuru Ohta, Yoshie Araki, Takuya Ueda, Kenji Toba. Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON). **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 12, 2023.
15. Yoshiaki Tamura. (Symposium) Recent Advance of Wearable Watch for Frailty. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 12, 2023.
16. Yoshiaki Tamura. (Symposium) Management of Older Patients with Diabetes. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 13, 2023.
17. Shunei Kyo, Atsushi Araki. (Chair) (Symposium Frailty) Recent Advance of Wearable Watch for Frailty. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 12, 2023.
18. Atsushi Araki, Cheng-Chieh Lin. (Chair) (Symposium Geriatrics 14) Management of diabetes in older adults. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 13, 2023.
19. Atsushi Araki. (Chair) (Luncheon Seminar 13) Daisuke Yabe: Management of type 2 diabetes in the super-aged society. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama**, June 14, 2023.
20. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, and Harada K. Reduced activity of daily living by cognitive dysfunction was associated with lower BP in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 14, 2023.
21. 荒木 厚、千葉優子、濱谷広頌、岩切理歌:(シンポジウム):multimorbidity 実態調査から見えてきた課題と今後の展望. 高齢者急性期病院における multimorbidity に基づいた frailty index による入院患者の予後予測. **第 65 回日本老年医学会学術集会.** 横浜, 6 月 18 日, 2023.
22. 荒木 厚、池上博司:(座長)(シンポジウム 11) 高齢者の糖尿病治療の進歩と展望―高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
23. 田村嘉章(シンポジウム「高齢者の糖尿病治療の進歩と展望ー高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて」). 高齢者糖尿病の特徴と総合機能評価. **第 65 回日本老年医学会学術集会** 横浜、6 月 16-6 月 18 日, 2023.
24. 田村嘉章(シンポジウム「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン 2023」). 糖尿病薬. **第 65 回日本老年医学会学術集会** 横浜、6 月 16-6 月 18 日, 2023.
25. 田村嘉章(ジョイントシンポジウム)「栄養障害と高齢者の薬物療法」栄養障害を考慮した高齢者糖尿病とその薬物療法. **第 65 回日本老年医学会学術集会** 横浜、6 月 16-6 月 18 日, 2023.
26. 田村嘉章(シンポジウム「より良い高齢者糖尿病ケアを目指して」) 高齢者糖尿病の老年症候群と総合機能評価. **第 66 回日本糖尿病学会学術集会**. 鹿児島、5 月 11-13 日, 2023.
27. 田村嘉章(教育講演)「高齢者糖尿病治療の留意点」. **第 10 回日本糖尿病協会年次学術集会** 京都、7 月 23 日, 2023.
28. 田村嘉章(シンポジウム) わが国の高齢者の肥満・肥満症の現状と問題点 **第 44 回日本肥満/第 41 回日本肥満症治療学会学術集会** 11 月 25 日, 仙台、2023.
29. 田村嘉章(シンポジウム)高齢者の肥満・肥満症の特徴と課題 **第 44 回日本肥満/第 41 回日本肥満症治療学会学術集会** 11 月 25 日, 仙台、2023.
30. 田村嘉章(教育講演)「高齢者糖尿病診療ガイドラインの改定のポイント」 **第 58 回糖尿病学の進歩** 京都、2 月 17 日, 2024.

31. 豊島堅志：[シンポジウム 3]超高齢社会における糖尿病診療の課題　高齢者糖尿病を支える制度とサービス. **第 58 回糖尿病学の進歩**. 京都，2 月 16 日，2024
32. 大庭和人，田村嘉章，石川譲治，藤田泰典，伊藤雅史，田中雅嗣，小寺玲美，豊島堅志，千葉優子，荒木 厚: 高齢者の血清 GDF15 高値はフレイル発症の独立した危険因子である. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 18 日，2023.
33. 小寺玲美，田村嘉章，村尾 雄治，寄川 史乃，勝俣 悠，北山 さおり，渡部創，大庭和人，豊島堅志，石川譲治，千葉優子，荒木　厚: 高齢糖尿病患者における重心動揺計の指標とフレイルや身体能力との関連について. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島，5 月 13 日，2023
34. 勝俣悠，豊島堅志，渡部創，小寺玲美，大庭和人，石川譲治，田村嘉章，千葉優子，粟田主一，荒木　厚: DASC-8 による高齢者の認知機能・ADL のカテゴリー分類は，フレイル発症のリスクを反映する. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 18 日，2023.
35. 勝俣悠，豊島堅志，渡部創，小寺玲美，大庭和人，石川譲治，田村嘉章，千葉優子，粟田主一，荒木　厚: DASC-8 による高齢者糖尿病のカテゴリー分類において、フレイル発症リスクはカテゴリーⅡから増加する. **第 66 回日本糖尿病学会学術集会**. 鹿児島. 5 月 12 日，2023
36. 井原健人、大庭和人、山川尚子、麓隆太郎、小寺玲美、豊島堅志、千葉優子、荒木厚、 田村嘉章：レパグリニドとクロピドグレルの併用で遷延性低血糖を来たした高齢 2 型糖尿病の 1 例： **第 694 回日本内科学会関東地方会**，2024 年 3 月 16 日，東京
37. 渡部創、大庭和人、田村　嘉章、石川　譲治、小寺　玲美、豊島　堅志、千葉　優子、荒木厚：坐位時間と高血糖は高齢糖尿病患者のフレイル発症の危険因子である。: **第 66 回日本糖尿病学会学術総会**， 2023 年 5 月 13 日，鹿児島
38. 石川譲治、鳥羽梓弓、二見崇太郎、田村嘉章、荒木厚、原田和昌　高齢高血圧患者における脈圧および平均血圧とフレイルおよび認知機能との関連　**第 45 回日本高血圧学会総会**、2023 年 9 月 17 日、大阪
39. 鳥羽梓弓、石川譲治、二見崇太郎、清水瑠璃、十菱千尋、両角愛、斎藤義弘、小松俊介、石山泰三、藤本肇、坪光雄介、田村嘉章、荒木厚、原田和昌　高齢高血圧患者における左房機能低下はサルコペニアと関連している　**第 45 回日本高血圧学会総会**、2023 年 9 月 16 日、大阪
40. 石川譲治，田村嘉章，鳥羽梓弓，十菱千尋，藤本肇，荒木 厚，原田和昌: 心血管代謝疾患を有する外来通院患者における 3 年間の外来血圧の変化と認知機能変化の関連. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜， 6 月 18 日，2023.
41. 岩切理歌, 小林孝史, 中山智博, 片岡愛, 村野陽子, 大川庭熙, 荒木 厚. 高齢入院患者における multimorbidity は退院時の転院または死亡のリスクを予測する. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 20 日，2023
42. 濱谷広頌，片岡愛，中山智博，小林孝史，村野陽子，大川庭熙，荒木 厚，岩切理歌: 高齢者入院における Multimorbidity と入院後の Barthel index の変化との関連についての検討. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 20 日，2023.
43. 中山智博，村野陽子，小林孝史，片岡愛，大川庭熙，荒木 厚，岩切理歌. The Dementia Assesment Sheet for Community-based Integrated Care System (DASC-21) による高齢者肺炎患者の退院転帰に及ぼす影響についての検討. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 20 日，2023.
44. 江尻愛美，河合恒，荒木 厚，藤原佳典，平野浩彦，小山照幸，杉江正光，小島基永，鈴木隆雄，大渕修一: 身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連：横断研究. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 19 日，2023.
45. 早川美知，本川佳子，横山友里，大須賀洋祐，飯塚あい，豊島堅志，田村嘉章，石川譲治，藤原佳典，荒木厚: フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜，6 月 20 日，2023.
46. Chin-Hsiao Tseng, Atsushi Araki. (Chair) (Oral Presentation) Diabetes mellitus in older adults. **The IDF-WPR Congress 2023 / 15th Scientific Meeting of AASD**. Kyoto, July 22, 2023.
47. 佐藤元彌、豊島堅志、橘　盛昭、三神神太郎、野中敬介、新井冨生、荒木厚、田村嘉章：各診療科の連携のもと診断しえた著明な低 Na 血症を呈した両側性副腎原発悪性リンパ腫の 1 例. **第 688 回日本内科学会関東地方会**. 東京，7 月 9 日，2023.
48. 荒木 厚：(特別講演) フレイルと multimorbidity を考慮した高齢者疾患の治療. **第 25 回日本高齢消化器病学会総会.** 東京，7 月 28 日，2023.
49. 荒木 厚：フレイル・サルコペニア予防のための高齢者糖尿病の食事・栄養療法と薬物療法.（シンポジウム）糖尿病とサルコペニア・フレイル～病態の理解と予防のための栄養学的アプローチ. **第 11 回日本くすりと糖尿病学会学術集会**. 神戸，9 月 3 日，2023.
50. 田村嘉章(座長) 鈴木亮「高齢者の糖尿病治療」**内分泌 Update** 2023 11 月 3 日，東京、2023.
51. 荒木 厚：(座長)（教育講演）田村嘉章：高齢者糖尿病治療の留意点. **第 10 回日本糖尿病協会年次学術集会**.

京都，7 月 23 日，2023.
52. 荒木 厚：(座長)（スポンサードセミナー）鈴木亮：高齢者糖尿病診療のトピックスーより良い高齢者糖尿病ケアを目指してー．**第 51 回日本老年医学会関東甲信越地方会．東京**，9 月 30 日，2023.
53. Atsushi Araki: Preditors of frailty in patients with cardiometabolic diseases-Role of GDF-15, lower limb function, and cerebral white matter integrity. **7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium, 2023 IAGG-AOR Satellite.** Tokyo, Oct 17, 2023.
54. 村尾雄治， 石川譲治，田村嘉章，飯塚あい，鳥羽梓弓，原田和昌，荒木 厚．心血管代謝疾患を有する高齢者における位相角とフレイルの関連ー縦断調査による検討．**第 10 回日本サルコペニア・フレイル学会大会**．東京，11 月 4 日，2023.
55. 福島薫子、北山さおり、佐塚まなみ、小寺玲美、大庭和人、豊島堅志、千葉優子、山本寛、荒木 厚、田村嘉章．肺癌に対する免疫チェックポイント阻害薬加療中に発生した副腎不全と甲状腺クリーゼの一例． **第 691 回日本内科学会関東地方会**．東京，11 月 18 日，2023.
56. 荒木 厚：(座長)（ワークショップ 22 薬物療法④） **第 38 回日本糖尿病合併症学会**．岡山， 10 月 21 日，2023.
57. 渡部創、大庭和人、北山さおり、佐藤元彌、小寺玲美、豊島堅志、千葉優子、田村嘉章、荒木 厚：COVID-19 ワクチン接種後におこった下垂体機能低下症の一例．**第 33 回臨床内分泌代謝 Update**．横浜， 11 月 3 日，2023.
58. 荒木 厚:高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023． **第 34 回日本糖尿病性腎症研究会**．東京，12 月 2 日，2023.
59. 麓隆太郎、豊島堅志、小寺玲美、大庭和人、千葉優子、荒木 厚、田村嘉章. 高齢糖尿病患者におけるデュラグルチドから他剤への変更による影響の実態．**第 61 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会**，東京，1 月 20 日，2024.
60. 荒木 厚、鈴木亮：(座長)【シンポジウム 3】超高齢社会における糖尿病診療の課題．**第 58 回糖尿病学の進歩**．京都，2 月 16 日，2024.
61. 荒木 厚：高齢者における糖尿病治療．【特別企画 2】人生 100 年時代を見据えた糖尿病診療～新生児から高齢者まで～．**第 58 回糖尿病学の進歩**．京都，2 月 17 日，2024.

＜講師等院外活動(講演、メディアなど)＞

1. 荒木 厚：高齢者の糖尿病の治療．**ラジオ NIKKEI 医学講座**．(2023.4.4 放送)
2. 荒木 厚：高齢者糖尿病患者におけるインスリン治療ー現状と今後の課題ー．**ゾルトファイ web 講演会．** 4 月 5 日，2023.
3. 荒木 厚：(座長) **糖尿病 Web セミナー．** Web 開催，5 月 16 日，2023.
4. 荒木 厚：認知症とフレイルを考慮した高齢者糖尿病の治療ー高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて．**第 61 回高知県糖尿病談話会**．Web 開催，東京，5 月 19 日，2023.
5. 荒木 厚：(総合司会、Closing remarks) **Up-dated Meeting of Sarcopenia.** Web 開催，東京，5 月 24 日，2023.
6. 荒木 厚:糖尿病,脂質異常症,甲状腺疾患.**杏林大学医学部加齢医学講座 M4 講義**．東京，5 月 26 日，2023.
7. 荒木 厚：高齢者糖尿病患者におけるインスリン治療ー現状と今後の課題ー．**Up-to-date Lecture on Insulin Therapy.** Web 開催，東京，5 月 31 日，2023.
8. 荒木 厚：医療的視点から見たフレイル予防．**区市町村介護予防事業者向け研修（総論編)**．Web 開催，東京，6 月 20 日，2023.
9. 荒木 厚：(特別講演) 高齢者の糖尿病治療の進歩―高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 の改訂にあたって．**DIAMOND SEMINAR 2023.** 東京，7 月 12 日，2023.
10. 荒木 厚：後期高齢者健診の質問票の見方とフレイル予防への活用法．**板橋区医師会講演会**．Web 開催 ，東京，7 月 12 日，2023.
11. 荒木 厚：(特別講演)認知症とフレイルを考慮した高齢者糖尿病の治療.**Teijin DPP-4i Family Web Seminar.** Web 開催，東京，7 月 14 日，2023.
12. 荒木 厚：高齢者糖尿病の治療―過去から未来へ．**第 16 回研修医・若手医師キャリアデザインの会―糖尿病学へのいざないー.** Web 開催，東京，7 月 18 日，2023.
13. 荒木 厚：老年医学を学ぶことの重要性．高齢医学セミナー2023． 東京，7 月 28 日，2023.
14. 荒木 厚：(コメント) **フレイルサポート栄養士研修会ワークショップ**．東京，8 月 5 日，2023.
15. 荒木 厚， 野村和至：(座長)**第 2 回いたばし糖尿病多職種ネットワークの会**．東京，8 月 19 日，2023.
16. 荒木 厚：健康長寿めざすフレイル予防のすべて．**渋谷フレイル予防フェア**．東京，8 月 24 日，2023.
17. 荒木 厚：(閉会の辞) **糖尿病セミナー**．東京，8 月 25 日，2023.
18. 荒木 厚：高齢者の糖尿病治療の進歩ー高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて．**高齢者 2 型糖尿病 WEB セミナーin 松山.** Web 配信，9 月 7 日，2023.

19. 荒木 厚：医療から見たフレイル．**宮城県市民公開講座：はればれ健康フェスタ．**Web 配信，9 月 10 日，2023.
20. 荒木 厚：医療職ができるフレイル予防のすべて．**横浜市医療専門職向け　フレイル予防普及啓発講演会．**Web 配信，10 月 3 日，2023.
21. 荒木 厚：健康寿命を延ばすフレイル予防と対策～いつまでもいきいき暮らすために～．**令和 5 年度健康づくり事業推進指導者育成研修**．Web 開催，10 月 7 日，2021.
22. 荒木 厚：(座長) 佐藤友彦：高齢者の生活習慣病と不眠、綿田裕孝：2 型糖尿病 update．**高齢者医療セミナー**．Web 配信，10 月 11 日，2023.
23. 荒木 厚：高齢者糖尿病の個別化医療ー高齢者糖尿病診療ガイドライン２０２３を踏まえてー　**DiaMond Seminar in 北関東甲信越**．東京，10 月 14 日，2023.
24. 荒木 厚：(開会挨拶、閉会の辞) **第 30 回城北 CDE セミナー**．東京，10 月 28 日，2023.
25. 荒木 厚：(座長) **板橋区、練馬区、豊島区、北区合同糖尿病予防デー：みんなで予防する糖尿病―地域の多職種とともに**．東京，11 月 4 日，2023.
26. 荒木 厚：(特別講演) 高齢者糖尿病の個別化医療をめざしてー高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて．**高齢者医療セミナー2023―地域で支える医療を目指して．**彦根，11 月 9 日，2023.
27. 荒木 厚：(座長) 渡邉健太郎：糖尿病合併高血圧患者における治療戦略．**糖尿病合併高血圧の治療戦略を考える．**東京，11 月 14 日，2023.
28. 荒木 厚：(講演)多職種で行うフレイル予防の重要性．**第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会**．東京，11 月 22 日，2023.
29. 荒木 厚：(グループワーク)多病を有するフレイル患者の症例検討．**第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会**．東京，11 月 22 日，2023.
30. 荒木 厚：高齢者糖尿病における GLP-1 受容体作動薬療法の課題と今後の展望．**第 3 回江戸川糖尿病チームセミナー．**東京，11 月 29 日，2023.
31. 荒木 厚：高齢者の糖尿病．**東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」**東京，11 月 30 日，2023.
32. 荒木 厚：高齢者の糖尿病．**東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」**東京，12 月 7 日，2023.
33. 荒木 厚：高齢者糖尿病の低血糖症状のメカニズム．**第 1 回高齢糖尿病患者の看護研修．糖尿病教育・看護学会研修推進委員会主催**．東京，12 月 3 日，2023.
34. 荒木 厚：(基調講演)介護予防・フレイル予防における医療職の役割ー多職種連携の重要性ー．　**令和５年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フレイル予防の推進』．**　東京，12 月 9 日，2023.
35. 荒木 厚：(シンポジウム司会)．**令和５ 年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フレイル予防の推進』．**　東京，12 月 9 日，2023.
36. 荒木 厚：フレイルの評価法．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
37. 荒木 厚：フレイルの類似概念：サルコペニア、ロコモティブシンドローム、カヘキシア．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
38. 荒木 厚：地域のフレイル対策とフレイル健診の活用法．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
39. 荒木 厚：(ワークショップの症例提示と解説) COVID-19 流行後にフレイルとなったマルチモビディティの症例．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
40. 荒木 厚：(座長) 腎障害を合併した糖尿病症例の診療 2023―finerenone への期待．**ケレンディア Meet the Expert．**東京，12 月 12 日，2023.
41. 荒木 厚：(特別講演) 「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023」を踏まえた高齢者糖尿病の個別化医療-HbA1c 検査の活用法．**アークレイ臨床検査セミナー2023 東京**．東京，12 月 14 日，2023.
42. 荒木 厚：(座長) 池田迅：経口 GLP-1 製剤を実臨床でどのように活かすかーポリファーマシーの観点から考える糖尿病治療、渡邉健太郎：経口 GLP-1 受容体作動薬の上手な使い方．**GLP-1 Web Seminar**．東京，12 月 18 日，2023.
43. 荒木 厚：フレイルの概念、診断、治療 、および後期高齢者の質問票の活用法．**フレイルサポート専門栄養士研修会**．Web 配信，1 月 15 日，2024.
44. 荒木 厚：フレイル予防センターの研修とフレイル外来の研究．**第 9 回老年医学イノベーションフォーラム．**名古屋，　1 月 20 日，2024.
45. 荒木 厚：(開会の言葉，コメント) **第３回いたばし糖尿病多職種ネットワークの会**．東京，2 月 10 日，2024.
46. 荒木 厚：高齢者のフレイル予防．**フレイルサポートナース研修会**．東京，2 月 17 日，2024.

47. 荒木 厚：(Closing Remarks) **DUAL Seminar in TOKYO WEST-imeglimin の再出発**. 東京, 2 月 20 日, 2024.
48. 荒木 厚：老年病特論のねらい. **介護予防運動指導員テキスト説明会**. 東京, 2 月 27 日, 2024.
49. 荒木 厚：個別性を考慮した高齢者糖尿病の治療と療養指導. **第 10 回みやぎ糖尿病療養指導フォーラム**. 仙台, 3 月 2 日, 2024.
50. 荒木 厚：(Session 2 座長)**ポリファーマシーを考える会**. 東京, 3 月 7 日, 2024.
51. 荒木 厚：高齢者糖尿病の個別化医療をめざして―高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 を踏まえて. **第 25 回北足立臨床糖尿病懇話会**. 北本, 3 月 8 日, 2024.
52. 荒木 厚：(基調講演座長)宇都宮一典：多様化する糖尿病の食事療法と CDE の役割. **第 31 回城北 CDE セミナー**. 東京, 3 月 16 日, 2024.
53. 荒木 厚：(田中 幾太郎記事) SD が挑む(12)常識を覆し老いを止める：「高齢者の糖尿病」撃つ. Themis 32 (7); 82-83, 2023.
54. 荒木 厚：糖尿病になるともの忘れしやすくなる？関わりのある認知症の種類や対策について紹介. なかまある. https://nakamaaru.asahi.com/article/15015993. 2023.10.20.
55. 荒木 厚：肥満と認知症の関係とは？高齢期の肥満や対策について紹介. https://nakamaaru.asahi.com/article/15055308. 2023.11.22.
56. 荒木 厚：高齢者糖尿病診療ガイドライン、薬物療法のエビデンス増え 7 年ぶりに改訂. CareNet. https://www.carenet.com/news/general/carenet/56707. 2023.7.3
57. 荒木 厚：高齢者糖尿病診療 GL 2023、「併存疾患を意識した治療を」. 日経メディカル. https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/report/t353/202306/580259.html. 2023.06.30.
58. 田村嘉章：「高齢者糖尿病」東京大学学生講義, 7 月 4 日, 2023.
59. 田村嘉章：「高齢者糖尿病」東京大学学生講義, 12 月 5 日, 2023.
60. 田村嘉章：「高齢者糖尿病」東京大学学生講義, 2 月 9 日, 2024.
61. 田村嘉章 「高齢糖尿病患者のポリファーマシーの課題と対策」6 月 21 日,「Jouhoku Medical Forum」東京、2023.
62. 田村嘉章 「高齢者糖尿病診療におけるデジタルデバイスの有用性と課題」「第４回糖尿病診療のデジタル化を深める会」7 月 26 日, 東京、2023.
63. 田村嘉章「高齢者糖尿病診療ガイドライン 2023 フレイル・サルコペニア予防を中心に」「Diamond Seminar in 水戸」11 月 21 日, Web、2023.
64. 田村嘉章 「糖尿病と認知症」「かかりつけ医のための糖尿病 WEB セミナー」2 月 6 日, Web、2024.
65. 田村嘉章(座長) 「糖尿病セミナー」 「2 型糖尿病におけるインスリン治療の変遷」8 月 25 日, 東京、2023.
66. 田村嘉章：インスリン治療と 1 型糖尿病 第３回いたばし糖尿病多職種ネットワークの会. 東京, 2 月 10日, 2024.
67. 田村嘉章(座長) 「糖尿病 Web セミナー」～合併疾患の管理についての検討～2 月 9 日, 東京、2024.
68. 千葉優子：一般内科医が知っておくべき骨粗鬆症の知識について　株式会社ケアネット　ケアネット TV 収録　東京　8 月 11 日, 2023.
69. 千葉優子：認知症のある高齢者糖尿病. 東京糖尿病療養指導士認定機構スキルアップ研修会　北里大学薬学部白金キャンパス　8 月 20 日, 2023.
70. 千葉優子：骨粗鬆症について. 板橋区女性健康支援センター(板橋区保健所)　東京　12 月 15 日, 2023.
71. 豊島堅志：フレイルサポート栄養士講習研修. Web, 7 月 21 日～8 月 4 日, 2023
72. 豊島堅志：フレイルサポート栄養士集合型研修. 東京, 8 月 5 日, 2023
73. 豊島堅志：東京糖尿病療養指導士認定機構　スキルアップ研修会. 東京, 8 月 20 日, 2023
74. 豊島堅志：フレイルと関連する疾患と老年症候群 松本市医師会フレイルサポート医研修会. 松本, 12 月 9 日, 2023
75. 豊島堅志：(ワークショップ) 診断で役立つ栄養プログラムの確立、(ケーススタディ)栄養障害リスクのある外来患者、嚥下障害. 高齢者栄養療法講習会. Web, 12 月 17 日, 2023
76. 豊島堅志：フレイルと関連する疾患と老年症候群のケア. フレイルサポート専門栄養士研修会. Web, 1 月 13 日, 2023
77. 大庭和人：板橋看護専門学校講義「内分泌総論」東京, 11 月 1 日, 2023.
78. 大庭和人：板橋看護専門学校講義「副腎・副甲状腺」東京, 11 月 8 日, 2023.
79. 小寺玲美：板橋看護専門学校講義, 疾病と治療Ⅲ 内分泌・代謝 第 1 回, 11 月 8 日, 2023.
80. 小寺玲美：板橋看護専門学校講義, 疾病と治療Ⅲ 内分泌・代謝 第 2 回, 11 月 15 日, 2023.
81. 小寺玲美：板橋看護専門学校講義, 疾病と治療Ⅲ 内分泌・代謝 第 3 回, 11 月 29 日, 2023.

82. 麓隆太郎：高齢者糖尿病における治療の単純化. 糖尿病セミナー, 東京. 8 月 25 日, 2023

＜論文査読＞

依頼されて以下の雑誌の査読を行った。

荒木 厚： Geriatrics and Gerontology International, BMC Geriatrics, Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism, Diabetes, Obesity and Metabolism, Journal of Diabetes Investigation

田村嘉章：Geriatrics and Gerontology International, Diabetology International

千葉 優子：Geriatrics and Gerontology International, Japanese Journal of Geriatrics 日本老年医学会雑誌

豊島堅志：Geriatrics and Gerontology International、日本老年医学会雑誌

循環器内科

＜論文＞

1. Fumino Yorikawa, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Ayumi Toba, Kazumasa Harada, Atsushi Araki. Determinants of depressive symptoms in older outpatients with cardiometabolic diseases in a Japanese frailty clinic: importance of bidirectional association between depression and frailty. PLoS One. 2023; 18: e0281465.
2. Joji Ishikawa, Kazumasa Harada. Heart and Brain Failure. The Vicious Cycle of the Heart-Brain Interaction. JACC: Asia 2023; 3: 120-121, Editorial comment.
3. Yuko Ago Shiraishi, Yukiko Ishikawa, Joji Ishikawa, Masami Matsumura, Shizukiyo Ishikawa. Age and sex differences in the risk of cardiovascular diseases by chronic kidney disease in a general Japanese population. Heart Vessels. 2023; 38: 1164-1171
4. Yuji Murao, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Fumino Kobayashi, Ai Iizuka, Ayumi Toba, Kazumasa Harada, Atsushi Araki. Association between physical performance during sit-to-stand motion and frailty in older adults with cardiometabolic diseases: a cross-sectional, longitudinal study. BMC Geriatrics. 2023; 23: 337.
5. Toba A, Ishikawa J. Current topics of frailty in association with hypertension and other medical conditions. Hypertens Res. 2023; 46: 1188-1194.
6. Aoyama R, Takeda K, Ishikawa J, Harada K. Short-term effects of transcatheter aortic valve replacement on blood pressure and cardiac function in elderly patients with severe aortic stenosis. Blood Press Monit. 2023; 28: 103-108.
7. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Changes in blood pressure associated with frailty and sarcopenia in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. Geriatr Gerontol Int. 2023; 23: 506-516.
8. Ayumi Toba, Joji Ishikawa, Kazumasa Harada. Automated Office Blood Pressure Measurement with Assistance of an Instructional Video in Patients with Hypertension. Blood Press Monit 2023; 29 (2): 63-70.
9. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Relationship between blood pressure and cognitive impairment in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. Geriatr Gerontol Int. 2023; Suppl 1:110-117.
10. Yuu Katsumata, Kenji Toyoshima, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Motoya Sato, So Watanabe, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yuko Chiba, Shuichi Awata, Atsushi Araki. Categorization using the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) based on cognitive function and activities of daily living predicts frailty, disability, and mortality in older adults. Geriatr Gerotol Int. 2023; Suppl 1: 150-155.
11. Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yasunori Fujita, Masafumi Ito, Ai Iizuka, Yoshinori Fujiwara, Remi Kodera, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Masashi Tanaka, Atsushi Araki. Serum Growth Differentiation Factor 15 Levels Predict the Incidence of Frailty Among Patients with Cardiometabolic Diseases. Gerontology. 2024; doi: 10.1159/000536150, online ahead of print.
12. Yuu Katsumata, Kenji Toyoshima, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Motoya Sato, So Watanabe, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yuko Chiba, Atsushi Araki. Changes in physical activity before, during, and after the state of emergency due to COVID-19 pandemic and its association

with incidence of frailty in older outpatients with cardiometabolic disease. Aging Medicine and Healthcare 2023, in press.

13. Jimba T, Kodera S, Kohsaka S, Otsuka T, Harada K, Shindo A, Shiraishi Y, Kohno T, Takei M, Nakano H, Matsuda J, Yamamoto T, Nagao K, Takayama M. Forecasting the Acute Heart Failure Admissions: Development of Deep Learning Prediction Model Incorporating the Climate Information. J Card Fail. 2024; 30 (2): 404-409.
14. Matsushita K, Harada K, Kohno T, Nakano H, Kitano D, Matsuda J, Takei M, Yoshino H, Yamamoto T, Nagao K, Takayama M. Prevalence and clinical characteristics of diabetic cardiomyopathy in patients with acute heart failure. Nutr Metab Cardiovasc Dis. 2023 Dec 19:S0939-4753(23)00507-0. doi: 10.1016/j.numecd.2023.12.013.
15. Yamamoto T, Harada K, Yoshino H, Nakamura M, Kobayashi Y, Yoshikawa T, Maejima Y, Otsuka T, Nagao K, Takayama M. Impact of the COVID-19 pandemic on incidence and mortality of emergency cardiovascular diseases in Tokyo. J Cardiol. 2023; 82 (2): 134-139.
16. Yosuke Tanaka, Ai Morozumi, and Nobutaka Hirokawa. Nodal flow transfers polycystin to determine mouse left-right asymmetry Developmetal Cell 2023; 58,1447-1461.

＜雑誌＞

1. 原田和昌（編）：エキスパートが語る高齢者循環器診療のすべて―ガイドライン通りにできない場合には？（2024.03.08）日本医事新報社（東京）
2. 原田和昌：第 2 章老年病特論 2.3 心不全. 介護予防主任運動指導員・介護予防運動指導員 養成講座テキスト　大渕修一編（2023.12）社会保険出版社（東京）
3. 原田和昌：【変わりゆく高齢者の循環器診療】高齢者の心不全診療の特徴. 心臓 55 巻 1 号 Page8-14 (2023.01)
4. 原田和昌　CRT-D は NYHA 分類 II/III 度心不全の全死亡を 14 年後まで減少させる　Long-Term Outcomes of Resynchronization-Defibrillation for Heart Failure. The New England journal of medicine. 2024 Jan 18;390(3);212-220 に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
5. 原田和昌　高親和性 TTR 安定化薬 acoramidis は ATTR 心アミロイドーシスの予後を改善する　Efficacy and Safety of Acoramidis in Transthyretin Amyloid Cardiomyopathy. The New England journal of medicine. 2024 Jan 11;390(2);132-142 に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
6. 原田和昌　症候性の重症大動脈弁狭窄症に対する新しい非侵襲的超音波治療（NIUT）の可能性 Treatment of severe symptomatic aortic valve stenosis using non-invasive ultrasound therapy: a cohort study. Lancet. 2023 Dec 16;402(10419);2317-2325 に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
7. 原田和昌　RNA 干渉治療薬パチシランはトランスサイレチン型心アミロイドーシス患者の 12 ヵ月時の機能的能力を維持したが全死因死亡や心血管イベントは低下しなかった Patisiran Treatment in Patients with Transthyretin Cardiac Amyloidosis. The New England journal of medicine. 2023 Oct 26;389(17);1553-1565 に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
8. 原田和昌　アントラサイクリン系薬剤による心機能障害をアトルバスタチンは抑制したがプラセボとの差はわずかであった Atorvastatin for Anthracycline-Associated Cardiac Dysfunction: The STOP-CA Randomized Clinical Trial. JAMA. 2023 Aug 08;330(6);528-536.に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
9. 原田和昌　カテーテルアブレーションは心房細動を伴う末期心不全の予後を改善する Catheter Ablation in End-Stage Heart Failure with Atrial Fibrillation. The New England journal of medicine. 2023 Oct 12;389(15);1380-1389.に対するコメント　ケアネット CLEAR！ジャーナル四天王
10. 原田和昌　拡張型心筋症の遺伝子構造はアフリカ系と欧州系患者とで異なっている Genetic Architecture

of Dilated Cardiomyopathy in Individuals of African and European Ancestry. JAMA. 2023 Aug 01;330(5);432-441.に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王

11. 原田和昌　遠隔血行動態モニタリングシステムは心不全患者の EF に関係なく入院を減少させ、QOL を改善する Remote haemodynamic monitoring of pulmonary artery pressures in patients with chronic heart failure(MONITOR-HF): a randomised clinical trial. Lancet (London, England). 2023 Jun 24;401(10394);2113-2123. に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
12. 原田和昌　sotatercept は新しい作用機序の肺動脈性肺高血圧症の新薬である Phase 3 Trial of Sotatercept for Treatment of Pulmonary Arterial Hypertension. The New England journal of medicine. 2023 Apr 20;388(16);1478-1490. に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
13. 原田和昌　トラセミド、お前もか？―心不全における高用量利尿薬の功罪 Effect of Torsemide vs Furosemide After Discharge on All-Cause Mortality in Patients Hospitalized With Heart Failure: The TRANSFORM-HF Randomized Clinical Trial. JAMA. 2023 Jan 17;329(3);214-223. に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
14. 原田和昌：減塩１グラムで血圧１低下. 日刊スポーツ 2023.12.24 P.13
15. 原田和昌：血圧は「高め」でもダメ. 日刊スポーツ 2023.12.25　P.21
16. 原田和昌：食物繊維を意識する. 日刊スポーツ 2023.12.26 P.23
17. 原田和昌：減塩で認知症予防も. 日刊スポーツ 2023.12.27 P.23
18. 原田和昌：減塩作戦に乗ってみる. 日刊スポーツ 2023.12.29 P.25
19. 原田和昌：動脈硬化が治る？ 日刊スポーツ 2023.12.30 P.23
20. 原田和昌：隠れ心不全に注意. 日刊スポーツ 2023.12.31 P.25
21. 原田和昌：血圧測定の習慣化を. 日刊スポーツ 2024.1.6P.23
22. 石川譲治　治療抵抗性高血圧に対するアルドステロン合成阻害薬 baxdrostat の効果　Phase 2 Trial of Baxdrostat for Treatment-Resistant Hypertension　NEJM ; 2022 に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
23. 石川譲治　特集『高齢者における“こころ”と“身体” 症例から理解する』低血圧の臨床　Medicina 2023 年 8 月号
24. 石川譲治、二見崇太郎、原田和昌　認知症と心疾患　認知症の併存疾患ガイドブック、南山堂
25. 石川譲治　降圧薬に対する血圧低下度に薬剤差、個人差があるのか？Heterogeneity in Blood Pressure Response to 4 Antihypertensive Drugs　A Randomized Clinical Trial. JAMA 2023:329: 1160-1169 に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
26. 石川譲治 24 時間平均血圧および夜間血圧は、診察室血圧よりも優れた総死亡のリスクマーカー　なぜ夜間血圧は予後予測能が高いのか？治療の対象なのか？Relationship between clinic and ambulatory blood pressure and mortality: an observational cohort study in 59124 patients. Lancet 2023, May 5, published online.に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
27. 石川譲治　脳出血患者の収縮期血圧を 1 時間以内に 130mmHg～140mmHg にコントロールすると通常治療と比較して 6 か月後の神経学的予後（modified Rankin Scale）が良い　The third Intensive Care Bundle with Blood Pressure Reduction in Acute Cerebral Haemorrhage Trial (INTERACT3): an international, stepped wedge cluster randomized controlled trial. Lancet, published online May 25, 2023.に対するコメント　ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
28. 高梨大輔、石川譲治　心電図　パーフェクトレッスン　レッスン３　見極めろ！　異常波形　左室肥大 Medical Technology 2023
29. 高梨大輔、石川譲治　心電図　パーフェクトレッスン　レッスン３　見極めろ！　異常波形　右室肥大

Medical Technology 2023

30. 石川譲治「わたしはこうする！高齢者の循環器診療」フレイル・サルコペニアは治療対象か？ 日本医事新報社 2023年
31. 石川譲治 高血圧に対するアルドステロン合成酵素阻害薬 Lorundrostat. The Targe-HTN Randomized Clinical Trial. JMAA 2034: 16029に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
32. 石川譲治 Effect of home cook interventions for salt reduction in China: cluster randomized controlled trial. BMJ 2023; 382:e074258に関するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
33. 石川譲治 急性虚血性脳梗塞に対する早期の降圧治療 発症8日目からの降圧治療開始との比較で90日後の死亡や神経学的後遺症に有意差なし Early versus delayed antihypertensive treatment in patients with acute ischaemic stroke: multicentre, open label, randomized, controlled trial. BMJ 2023; 383: e076448に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
34. 石川譲治 起立性低血圧の有無で、積極的な降圧治療における心血管疾患発症や総死亡の抑制効果に違いはあるのか？ Orthostatic Hypotension, Hypertension Treatment, and Cardiovascular Disease. An Individual Participant Meta-Analysis. JAMA 2020; 330: 1459-1471に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王
35. 石川譲治 食塩摂取量はどこまで減らせばいいのだろうか？ Effect of Dietary Sodium on Blood Pressure A Crossover Trial. JAMA 2023に対するコメント ケアネットCLEAR！ジャーナル四天王

＜学会・発表（国内）＞

1. 李惠、原田和昌、石川譲治、坪光雄介、藤本肇、石山泰三、村田哲平、鳥羽 梓弓、小松俊介、十菱千尋、清水瑠璃、橘昌利、河田光弘、眞野暁子、村田知洋 亜急性期心筋梗塞で発見された椎体破壊を伴う梅毒性胸部大動脈瘤の一例 第267回日本循環器学会関東甲信越地方会 令和５年２月25日（土）ステーションコンファレンス東京
2. 小寺玲美、田村嘉章、村尾 雄治、寄川史乃、勝俣悠、北山さおり、渡部創、大庭 和人、豊島堅志、石川譲治、千葉優子、荒木厚 高齢糖尿病患者における重心動揺計の指標とフレイルや身体能力との関連について 第66回糖尿病学会年次学術集会 2023年5月11日
3. 渡部創、大庭和人、田村嘉章、石川譲治、小寺玲美、豊島堅志、千葉優子、荒木厚 坐位時間と高血糖は高齢糖尿病患者のフレイル発症の危険因子である 第66回糖尿病学会年次学術集会 2023年5月11日
4. 勝俣悠、豊島堅志、村尾雄治、寄川史乃、北山さおり、渡部創、小寺玲美、大庭和人、石川譲治、田村嘉章、千葉優子、粟田主一、荒木厚 DASC-8による高齢者糖尿病のカテゴリー分類において、フレイル発症リスクはカテゴリーIIから増加する 第66回糖尿病学会年次学術集会 2023年5月
5. 大庭和人、田村嘉章、石川譲治、藤田泰典、伊藤雅史、田中雅嗣、小寺玲美、豊島堅志、千葉優子、荒木厚 高齢者の血清GDF15高値はフレイル発症の独立した危険因子である 第66回糖尿病学会年次学術集会 2023年5月
6. 清水瑠璃、山本文、村田哲平、石川譲治、原田和昌 感染性脳動脈瘤破裂をきたした重症僧帽弁狭窄症に伴う感染性心内膜炎の一例 感染性心内膜炎１ 第96回日本超音波医学会学術集会、大宮、2023年5月27日
7. 早川美知、本川佳子、横山友里、大須賀洋祐、飯塚あい、豊島堅志、田村嘉章、石川譲治、藤原佳典、荒木厚 フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討 第65回日本老年医学会学術集会 2023年6月17日、横浜
8. 大庭 和人、田村 嘉章、石川 譲治、藤田 泰典、伊藤 雅史、田中 雅嗣4)、小寺 玲美、豊島 堅志、千葉 優子、荒木 厚 血清GDF15高値はフレイル発症に関連する 第65回日本老年医学会学術集会 2023年6月18日、横浜
9. 石川譲治、田村嘉章、鳥羽梓弓、十菱千尋、藤本肇、荒木厚、原田和昌 心血管代謝疾患を有する外来通院患者における3年間の外来血圧の変化と認知機能変化の関連 第65回日本老年医学会学術集会 2023年6月17日、横浜（優秀演題賞）
10. 勝俣悠、豊島堅志、渡辺創、小寺玲実、大庭和人、石川譲治、田村嘉章、千葉優子、粟田圭一、荒木厚 DASC-8による高齢者の認知機能・ADLのカテゴリ―分類はフレイル発症のリスクを反映する 第65回日本老年医学会学術集会 2023年6月17日、横浜
11. 石川譲治、鳥羽梓弓、二見崇太郎、田村嘉章、荒木厚、原田和昌 高齢高血圧患者における脈圧および平

均血圧とフレイルおよび認知機能との関連　第45回日本高血圧学会総会、2023年9月17日、大阪
12. 鳥羽梓弓、石川譲治、二見崇太郎、清水瑠璃、十菱千尋、両角愛、斎藤義弘、小松俊介、石山泰三、藤本肇、坪公雄介、田村嘉章、荒木厚、原田和昌　高齢高血圧患者における左房機能低下はサルコペニアと関連している　第45回日本高血圧学会総会、2023年9月16日、大阪
13. 村尾雄治、石川譲治、田村嘉章、飯塚あい、鳥羽梓弓、原田和昌、荒木厚　心血管代謝疾患を有する高齢者における位相角とフレイルの関連―縦 断調査による検討―　日本サルコペニア・フレイル学会　2023年11月3日～4日、御茶ノ水
14. 清水瑠璃、石川譲治、二見崇太郎、十菱千尋、鳥羽梓弓、小松俊介、石山泰三、両角愛、斎藤義弘、藤本肇、坪公雄介、原田和昌　高齢心不全入院患者における認知機能障害に伴う生活機能低下が退院後の死亡および心不全再入院に与える影響について　日本心不全学会年次学術集会、2023年10月7日、横浜
15. 宮本一慶、清水瑠理、二見崇太郎、石川譲治、原田和昌　難治性心不全に伴う蛋白漏出性胃腸症を診断治療した症例　第690回日本内科学会関東地方会、2023年10月14日、東京
16. 石川譲治　Case Report Session, Cardiomyopathy. 座長　第87回日本循環器学会学術集会, 福岡、2023年3月19日

＜学会・発表（海外）＞

1. Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yasunori Fujita, Masafumi Ito, Remi Kodera, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Masashi Tanaka Atsushi Araki. High serum growth differentiation factor 15 (GDF15) levels were associated with incidence of frailty in patients with cardiometabolic disease. IAGG-AOR 2023, Yokohama, Japan
2. Ishikawa J, Harada K, and Kyo S. Recent advance in wearable watch devices to evaluate atrial fibrillation and heart failure for prevention of Frailty. IAGG-AOR 2023 Jun 12, 2023. Yokohama, Japan.
3. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, and Harada K. Reduced activity of daily living by cognitive dysfunction was associated with lower BP in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. IAGG-AOR 2023 Jun 14, 2023. Yokohama, Japan.
4. Ruri Shimizu, Joji Ishikawa, Ai Morozumi, Shutaro Futami, Yoshihiro Saito, Chihiro Jubishi, Shunsuke Komatsu, Ayumi Toba, Hajime Fujimoto, Taizo Ishiyama, Yusuke Tsuboko, Kazumasa Harada. DASC-21 score was predictive of in-hospital death and prolong hospital stay in elderly patients hospitalized for heart failure. IAGG-AOR 2023 Jun 14, 2023. Yokohama, Japan.
5. Toba A, Ishikawa J, Harada K. Left atrial function assessed by strain imaging is associated with skeletal muscle mass in older outpatients with cardiometabolic disease. IAGG-AOR 2023 Jun 14, 2023. Yokohama, Japan.
6. Ishikawa J. Management of blood pressure in frail patients. 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium, 2003 IAGG-AOR Satellite, 2023/10/17, Tokyo.
7. Ishikawa J. Moderator of Session Dementia Awareness. IAGG-AOR 2023 Jun 13, 2023. Yokohama, Japan.

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 原田和昌：Anticoagulant Therapy in the Elderly AF Patients: With Consideration of CKD, Adherence, and Frailty. 第12回アジア/オセアニア国際老年学会イブニングセミナー（神奈川）2023.6.
2. 原田和昌：高齢者心不全の併存症としての貧血治療　相模原cardiovascular Webセミナー（WEB開催）2023/4/25
3. 原田和昌：心不全. メトロポリタン循環器内科研修連絡会WEB2023（第２回）（WEB開催）2023/5/23
4. 原田和昌：心血管イベントと心不全を考慮した糖尿病治療. Miyazaki Network Conference（WEB開催）2023/5/25

5. 原田和昌：高齢者心房細動患者の抗血栓治療におけるフレイルの意義. AF患者さんのLifelong Support（WEB開催）2023/6/1
6. 原田和昌：高齢者と亜鉛. 高齢者と亜鉛WEBセミナー（WEB開催）2023/6/19
7. 原田和昌：高齢者高血圧における夜間高血圧における神経体液性因子～エンレストへの期待～. 高齢者高血圧を考える会（WEB開催）2023/6/27
8. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方の役割と可能性. 河北郡市医師会学術講演会（WEB開催）2023/7/12
9. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2阻害薬の意義～. Heart Failure Webinar in 大牟田（WEB開催）2023/8/24
10. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2阻害薬の意義～. 心不全治療を考える会（WEB開催）2023/8/25
11. 原田和昌：腎性貧血治療のパラダイムシフト（Opening）城北腎性貧血治療WEBセミナー（WEB開催）2023/8/31
12. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢～SGLT2阻害薬の意義～. Online Heart Failure Conference（WEB開催）2023/9/1
13. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方薬の役割と可能性. 循環器漢方医学講演会2023（WEB開催）2023/9/21
14. 原田和昌：心不全とフレイル～予防と治療のために必要なこと～. 三原市医師会学術講演会「高齢者疾患の栄養・運動・薬物療法」（WEB開催）2023/9/26
15. 原田和昌：心血管イベントと心不全を考慮した糖尿病治療. 宮崎市郡内科医会学術講演会（WEB開催）2023/10/20
16. 原田和昌：高齢者心不全治療における漢方薬の役割と可能性. 心不全の栄養管理について漢方薬で考える会（WEB開催）2023/11/16
17. 原田和昌：高尿酸血症は心不全患者の予後を規定する～病型分類と薬物治療選択の実際～. 高尿酸血症治療セミナー（WEB開催）2023/12/7
18. 原田和昌：高齢者心不全の特性に基づいた薬物治療～早期治療の重要性. 循環器WEBセミナー（WEB開催）2023/12/21
19. 原田和昌：高齢者高血圧における夜間高血圧と神経体液性因子～エンレストへの期待～. 令和５年度第１回青森県臨床内科医会学術講演会～健康寿命延伸に向けた血圧管理を目指して～（WEB開催）2024/1/15
20. 原田和昌：慢性心不全治療の新たな選択肢ーSGLT2阻害薬の意義ー. 心不全治療を考える会～超高齢社会におけるSGLT2阻害薬の役割～（WEB開催）2024/3/18
21. 田中庸介、両角愛、廣川信隆　左右軸決定の新しい機構：ポリシスチンの細胞外輸送が左側特異的にカルシウムを上昇させる　第22回　東京大学生命科学シンポジウム2023年6月17日、東京
22. 石川譲治　高齢者高血圧におけるARNIの位置付けARNI Hypertension meeting, 2023年２月15日、Web
23. 石川譲治　高齢者の心血管リスク管理　～どこまで、いつまで下げればいいのか？～　パルモディアWeb Conference, 2023年11月13日、池袋
24. 石川譲治 Stage BからのARNIの使用、ARNI Hypertension meeting, 2023年11月17日

呼吸器内科

＜総説＞

1. 山本寛. COPDを再考する～ICS/LABA/LAMAの意義～. 板橋区医師会通報516; 20-25, 2023.
2. 山本寛. Medical Science Review: 特集　増加する誤嚥性肺炎診療Up-to-date. 各論3　誤嚥性肺炎の抗菌薬使用のポイント. Vita 41(1); 44-47, 2023.
3. 山本寛. 高齢者診療の実際 No.23: 高齢者のcommon disease－悪性腫瘍. 日医雑誌152(12); 1400-1405, 2023.

＜単行書・報告書＞

1. 山本寛. 寒い時期 肺炎を見逃すな！高齢者の大敵“隠れ肺炎”. NHKテキスト「きょうの健康」2013年2月号: pp. 10-13, 2023.
2. 山本寛. 第1章 高齢がん患者の特徴－非高齢者と何が違うのか？ 3. 個人差. よくわかる老年腫瘍学. 「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」研究班」. 編集: 日本がんサポーティブ学会. 中外医学社, 東京, pp.123-129, 2023.

＜学会・研究会発表＞

1. 山本寛: 高齢肺がん患者の未来予想図～高齢者機能評価活用の実際～. 非小細胞肺癌オプジーボ・ヤーボイ併用療法 Hybrid WEBライブセミナー. 東京[web配信], 4月6日, 2023.
2. 山本寛: 症例提示. 板橋区COPD Summit ～患者さんの健康寿命延伸を考える～. 東京[web配信], 4月12日, 2023.
3. 山本寛: 高齢者喘息の個別化診療～喘息を患う高齢者を診る～. GSK Asthma Seminar in TOKYO トータル・コントロールを目指した喘息治療の潮流とは. 東京[web配信], 4月13日, 2023.
4. 山本寛: 高齢肺がん患者の未来予想図をえがく～高齢者機能評価の活用～. 第186回城西胸部画像研究会. 東京, 4月25日, 2023.
5. 山本寛: 重症喘息を患う高齢者を診る～テゼスパイアの使用経験～. テゼスパイア東日本WEBセミナー. 東京[web配信], 5月15日, 2023.
6. 山本寛: COPDを再考する～全身性疾患としてのCOPDとLABA/LAMA/ICSの役割～. 板橋区医師会講演会. 東京[ハイブリッド], 5月19日, 2023.
7. 山本寛: 高齢者重症喘息におけるBiologicsの役割～脆弱性と好酸球から考える～. 好酸球から考える重症喘息Symposium. 東京[web配信], 5月31日, 2023.
8. 山本寛: [座長]高齢者のための肺癌免疫療法セミナー. 東京[web配信], 6月1日, 2023.
9. Hiroshi Yamamoto, Namio Kagoo, Manami Sazuka, Chiemi Nogimori, Masayuki Ishibashi, Hirokazu Yamada: Impact of respiratory Syncytial virus infection on activities of daily living in the older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, June 13, 2023.
10. 山本寛: 高齢者がん診療における多職種連携の現状と今後の方向性. 第65回日本老年医学会学術集会 シンポジウム4(高齢者がん診療小委員会・日本老年腫瘍研究会企画) 高齢者がん診療2023～多職種連携～. 横浜, 6月17日, 2023.
11. 山本寛: 健康寿命の延伸を目指した高齢者肺炎の予防戦略. 第65回日本老年医学会学術集会 シンポジウム14 健康長寿のための成人ワクチン最前線. 横浜, 6月18日, 2023.
12. 山本寛. [座長]第65回日本老年医学会学術集会. 一般口演23 COVID-19-3. 横浜, 6月18日, 2023.
13. 山本寛: [座長]TOKYO BIO Therapy Conference. 東京[web配信], 6月28日, 2023.
14. 山本寛: [座長]第27回東京呼吸ケア研究会. 東京, 7月1日, 2023.
15. 山本寛: 高齢がん患者の未来予想図を共有する～高齢者機能評価の活用～. 第2回乳がんセミナーinさいたま東部. 東京[ハイブリッド], 7月3日, 2023.
16. 山本寛: 高齢者重症喘息の治療におけるNew-angle～高齢者の生活機能を守るための処方箋～. Severe Asthma New-angle Symposium. 東京[web配信], 7月11日, 2023.
17. 山本寛: [座長]Severe Asthma Frontline～新時代の重症喘息治療の展望～. 東京[web配信], 8月3日, 2023.
18. 山本寛: 高齢者重症喘息における生物学的製剤の役割～テゼスパイアの使用経験～. テゼスパイア東日本WEBセミナーTezspire SmiLe for Patient. 東京[web配信], 8月7日, 2023.

19. 山本寛：［ディスカッサント］Severe Asthma カンファレンス in 東京2023. 東京[web配信], 8月21日, 2023.
20. 山本寛： COPDを再考する～LABA/LAMA/ICS3剤併用療法を活用するために～. Respiratory Luncheon Meeting. 東京[web配信], 8月21日, 2023.
21. 山本寛： 高齢者肺炎の深層を理解する. 杏林製薬株式会社社内勉強会. 東京, 8月23日, 2023.
22. 山本寛： 高齢肺がん患者の未来予想図を共有する～高齢者機能評価のエビデンスと活用の実際～. 高齢者の肺がん診療を考える会. 東京[web配信], 8月24日, 2023.
23. 山本寛： 高齢肺がん患者の未来予想図を共有する～高齢者機能評価のエビデンスと活用の実際～. 肺癌サポーティブケアwebセミナー. 東京[web配信], 9月8日, 2023.
24. 山本寛： 高齢者重症喘息の治療における新しい視点～高齢者の生活機能を守るための処方箋～. Severe Asthma Symposium. 東京[web配信], 9月13日, 2023.
25. 山本寛： Chugai Lung Cancer Symposium in SHIGA～高齢者機能評価について考える～. 滋賀[web配信], 9月14日, 2023.
26. 山本寛： 健康寿命の延伸を目指した高齢者肺炎への多角的アプローチ. 東京都病院薬剤師会 令和5年度第2回高齢者薬物療法領域薬剤師研究会. 東京[web配信], 9月21日, 2023.
27. 山本寛： 健康寿命の延伸を目指した高齢者肺炎への多角的介入. 相模原市耳鼻咽喉科医会学術講演会. 東京, 9月28日, 2023.
28. 山本寛： 高齢者機能評価を活用した肺がんトータルケアの実際. 肺がんトータルケアWeb Seminar. 東京[web配信], 9月29日, 2023.
29. 山本寛： COPDの死亡率減少を目指した地域実行モデルの展開～健康日本21（第3次）木洩れ陽2032を受けて～. COPD Summit～健康日本21(第3次)木漏れ陽2032を考える～. 東京[ハイブリッド], 10月11日, 2023.
30. 山本寛： 肺癌をわずらう高齢者を診るために～高齢者機能評価のエビデンスと活用の実際～. 第5回N・E・W薬薬連携Seminar. 東京[web配信], 10月16日, 2023.
31. 山本寛： 高齢者重症喘息の治療における意思決定支援～テゼスパイアの使用経験から考える～. TRIANGLE 2 ～患者さんの意思決定を支援する～. 東京[web配信], 10月18日, 2023.
32. 山本寛： 高齢者重症喘息における生物学的製剤の役割～テゼスパイアの使用経験～. Yamagata Severe Asthma Seminar. 山形[ハイブリッド], 10月27日, 2023.
33. 山本寛：［座長］第3回日本老年腫瘍研究会勉強会. 東京[web配信], 10月28日, 2023.
34. 山本寛： 重症喘息における私の処方～Bio製剤の使いどころ、使いわけ、使いごこち～. 喘息Bio製剤の適正使用を考える会. 東京[web配信], 10月30日, 2023.
35. 山本寛： Closing. Asthma Symposium. 東京[web配信], 11月2日, 2023.
36. 山本寛：［座長］第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会.学会企画シンポジウム1 サルコペニア・フレイルの評価方法. 東京, 11月4日, 2023.
37. 山本寛： 高齢者重症喘息の治療における生物学的製剤の役割～テゼスパイアの使用経験から考える～. Severe Asthma Biologics Seminar in Chiba. 千葉[web配信], 11月8日, 2023.
38. 山本寛： 高齢肺癌患者に対するNivolumab+Ipilimumab併用療法の経験. 非小細胞肺癌IO併用療法 Hybrid webライブセミナー. 東京[web配信], 11月10日, 2023.
39. 山本寛： 高齢喘息患者の将来リスク回避を目指した吸入療法の展開. 高齢者疾患フォーラム. 東京[ハイブリッド], 11月15日, 2023.
40. 福島薫子, 北山さおり, 佐塚まなみ, 小寺玲美, 大庭和人, 豊島堅志, 千葉優子, 山本寛, 荒木厚, 田村嘉章. 肺癌に対する免疫チェックポイント阻害薬加療中に発生した副腎不全と甲状腺クリーゼの1例. 第691回日本内科学会関東地方会. 東京, 11月18日, 2023.
41. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. Respiratory Portfolio National Conference in Osaka. 大阪[ハイブリッド], 11月19日, 2023.
42. 山本寛： 高齢者重症喘息の治療における生物学的製剤の役割～テゼスパイアの使用経験から考える～. テゼスパイア発売1周年記念Web Symposium. 東京[web配信], 11月20日, 2023.
43. 山本寛: 高齢者機能評価の活かし方～どう捉え、どう対応するか～. Meet The Expert on Thoracic Oncology ～高齢者肺がんを考える～. 東京[web配信], 11月22日, 2023.
44. 山本寛： 高齢者重症喘息におけるBiologicsの役割～テゼスパイアの使用経験～. Severe Asthma TV Symposium_12月4日_夜. 東京[web配信], 12月4日, 2023.
45. 山本寛： RSウイルス感染が高齢者の日常生活機能に与えるインパクト. RSウイルスワクチンフォーラム. 東京[ハイブリッド], 12月10日, 2023.
46. 山本寛： 高齢者重症喘息治療の1年を振り返る～テゼスパイアの使用経験～. Tezspire 1st Anniversary Symposium～重症喘息治療の実臨床を振り返る～. 東京[web配信], 12月12日, 2023.
47. 山本寛： 高齢者機能評価の活かし方～がんを患う高齢者を診るために～. 令和5年度がん医療セミナー. つ

くば[web配信], 12月13日, 2023.
48. 山本寛： 高齢者重症喘息におけるBiologicsの役割～テゼスパイアの使用経験～. Tezspire SmiLe for Patients越谷. 越谷[ハイブリッド], 12月15日, 2023.
49. 山本寛： 高齢者喘息の個別化診療～喘息を患う高齢者を診る～. GSK Web Seminar in TOKYO. 東京[web配信], 1月19日, 2024.
50. 山本寛： 患者中心アウトカムを志向した高齢者診療の考え方～肺炎診療を例に考える～. 神奈川県呼吸器疾患フォーラム2024～高齢者肺炎診療の最前線～. 藤沢[web配信], 1月20日, 2024.
51. 山本寛： ［教育講演]高齢者がん診療～脆弱性の評価から新たなパラダイムを創造する～. 第185回日本結核・非結核性抗酸菌症学会関東支部学会　第258回日本呼吸器学会関東地方会. 若手向け教育セッション. 東京, 2月17日, 2024.
52. Hiroshi Yamamoto： Sustainable Japanese model of geriatric oncology care. 第21回日本臨床腫瘍学会学術集会 SIOG/JSMO joint symposium. 名古屋, 2月24日, 2024.
53. 山本寛： 高齢者重症喘息の治療における新しい視点～高齢者の生活機能を守るための処方箋～. Funderful Meeting. 東京[web配信], 2月26日, 2024.
54. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. アレックスビー発売記念講演会in和歌山 60歳以上の成人におけるRSウイルス感染症の予防意義. 和歌山, 3月2日, 2024.
55. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. アレックスビー発売記念講演会 60歳以上の成人におけるRSウイルス感染症の予防意義. 東京[web配信], 3月7日, 2024.
56. 山本寛： 好酸球性重症喘息の将来リスクを回避するために～健康寿命の延伸を目指した生物学的製剤の活用～. 重症喘息Update seminar. 東京[web配信], 3月14日, 2024.
57. 孫田皓康, 籠尾南海夫, 舟川開, 佐塚まなみ, 山田浩和, 山本寛. 蜘蛛の巣除去スプレー吸入により肺障害を来した1例. 第694回日本内科学会関東地方会. 東京, 3月16日, 2024.[日本内科学会指導医賞]
58. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. アレックスビーWEB講演会. 東京[web配信], 3月18日, 2024.
59. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. GSK RSV Vaccine Forum in 横浜・川崎. 東京[web配信], 3月21日, 2024.
60. 山本寛： 好酸球性重症喘息の将来リスクを回避するために～健康寿命の延伸を目指した生物学的製剤の活用～. 好酸球から考える重症喘息Symposium. 東京[web配信], 3月27日, 2024.
61. 山本寛： 高齢者重症喘息におけるBiologicsの役割～テゼスパイアの使用経験～. 第21回練馬呼吸器研究会. 東京[web配信], 3月28日, 2024.
62. 山本寛： 高齢者の日常生活機能に与えるRSウイルス感染のインパクト. ALEXVY National Conference in Kobe. 神戸[ハイブリッド], 3月31日, 2024.

消化器・内視鏡内科

＜学会・研究会発表＞

1. Ono S, Kurihara Y, Hirose F, et al. ELECTROSURGICAL KNIFE WITH THE WATER-JET FUNCTION OF TIP-TYPE DURING ENDOSCOPIC TREATMENT INJECTION. UEGW, Amsterdam. 14-17/Oct/2023.
2. Hosaka S, Horikoshi Y, Sato Y, et al. Receiving direct oral anticoagulants can be a risk factor for severe bleeding requiring blood transfusions after endoscopic sphincterotomy. UEGW, Amsterdam. 14-17/Oct/2023.
3. Nagami Y, Sakai T, Nakatani M, …, Ono S, et al. Continuous Warfarin administration versus Heparin bridging therapy in post colorectal polypectomy haemorrhage (WHICH study). UEGW, Amsterdam. 14-17/Oct/2023.
4. Hosaka S, Horikoshi Y, Sato Y, et al. Receiving direct oral anticoagulants can be a risk factor for severe bleeding requiring blood transfusions after endoscopic sphincterotomy. IAGG, Yokohama. 12-14/Jun/2023.
5. 佐藤 優樹, 白倉 英知, 深川 一史, ほか. エドキサバンが原因と考えられた剥離性食道炎の一例. 第117回日本消化器内視鏡学会関東支部例会. 東京(2023.12).
6. 正谷 一石, 堀越 裕介, 佐藤 優樹, ほか. 非結核性抗酸菌症に対する三剤併用化学療法中に生じた大腸腸管気腫症の一例. 第375回日本消化器病学会関東支部例会. 東京(2023.07)
7. 堀越 裕介, 佐藤 優樹, 白倉 英知, ほか. 柿の大量摂取により発症した胃石の十二指腸嵌頓に対してコーラ局注・内服併用療法が奏功した一例. 第116回日本消化器内視鏡学会関東支部例会. 東京(2023.06)
8. 伊藤 峻, 小野 敏嗣, 田村 周甫, ほか. 大腸憩室出血に対するリカバリー手技としてのOTSCの有用性の検討. 第116回日本消化器内視鏡学会関東支部例会. 東京(2023.06)
9. 白倉 英知, 深川 一史, 堀越 裕介, ほか. 急激な体重減少を来した高齢発症のCronkhite Canada症候群の1例. 第687回日本内科学会関東地方会. 東京(2023.06)

＜雑誌＞

1. Arai T, Ono S, Takubo K. Squamous Neoplastic Precursor Lesions of the Esophagus. Gastroenterol Clin North Am. 2024 Mar;53(1):25-38.
2. 大隅 瞬, 深川 一史, 永坂 拓也, ほか. 内視鏡の読み方　粘膜下腫瘍様の形態をとる大腸病変の鑑別(解説). 臨床消化器内科(0911-601X)39巻3号 Page349-353(2024.02)
3. 堀越 裕介, 佐藤 優樹, 白倉 英知, ほか. 柿胃石に対しコーラの内視鏡的局注・内服併用療法が奏功した一例(原著論文). Progress of Digestive Endoscopy(1348-9844)103巻1号 Page63-65(2023.12)
4. 保坂 祥介, 小野 敏嗣, 中里 徹矢, ほか.【超高齢社会における肝胆膵疾患診療】加齢による肝胆膵の生理的変化(解説). 肝胆膵(0389-4991)86巻6号 Page679-683(2023.06)
5. 前嶋 恭平, 小野 敏嗣, 伊藤 峻, ほか.【消化管狭窄に対する内視鏡的バルーン拡張術】EBD施行時の抗血栓薬の取り扱い(解説). 臨床消化器内科(0911-601X)38巻5号 Page503-509(2023.04)

脳神経内科

＜雑誌論文＞

（原著）

1. Mana Higashihara, Hiroki Yamazaki, Yuishin Izumi, Masahito Kobayashi, Hiroyuki Nodera, Chizuko Oishi, Atsushi Iwata, Shigeo Murayama, Ryuji Kaji, Masahiro Sonoo: Far-field potential of the compound muscle action potential as a reliable marker in amyotrophic lateral sclerosis. Muscle Nerve 68(3): 257-263, 2023
2. Masanori Kurihara, Kenji Ishibashi, Tomoyasu Matsubara, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Masashi Kameyama, Aya Midori Tokumaru, Katsuhiko Takeda, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: High sensitivity of asymmetric ^{18}F-THK5351 PET abnormality in patients with corticobasal syndrome. Sci Rep 13(1): 12147, 2023
3. Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Atsushi Iwata, Kenji Ishii: Detailed Assessment of ^{18}F-THK5351 Distribution Pattern in the Midbrain: Comparison With Progressive Supranuclear Palsy and Corticobasal Syndrome. Clin Nucl Med 48(10): 841-846, 2023
4. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Satoru Morimoto, Akira Arakawa, Kensuke Ohse, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata, Shigeo Murayama, Yuko Saito: Neuropathological changes associated with aberrant cerebrospinal fluid p-tau181 and Aβ42 in Alzheimer's disease and other neurodegenerative diseases. Acta Neuropathol Commun 12(1):48, 2024
5. Mana Higashihara, Nathan Pavey, Parvathi Menon, Mehdi van den Bos, Kazumoto Shibuya, Satoshi Kuwabara, Matthew C Kiernan, Masayoshi Koinuma, Steve Vucic: Reduction in short interval intracortical inhibition from the early stage reflects the pathophysiology in amyotrophic lateral sclerosis: A meta-analysis study. Eur J Neurol e16281, 2024
6. Kensuke Takahashi, Masanori Kurihara, Kenji Ishibashi, Yuta Komori, Ryoji Goto, Mana Higashihara, Masashi Kameyama, Hirohiko Hirano, Meiko Hashimoto Maeda, Rie Watanabe, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: Increased ^{18}F-THK5351 uptake at bilateral primary motor cortex in patients with progressive pseudobulbar palsy. Acta Neurol Scand 2024 *in press*
7. Keiko Hatano, Kenji Ishibashi, Kazuki Yamada, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: Clinical Application of ^{18}F-THK5351 PET to Identify Inflammatory Lesions Through Imaging Astrogliosis in a Case of Cytomegalovirus Ventriculoencephalitis. Clin Nucl Med 48(10): e489-e490, 2023
8. Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Jun Toyohara, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: Pitfalls of Amyloid-Beta PET: Comparisons With ^{18}F-MK-6240 and ^{18}F-THK5351 PET. Clin Nucl Med 49(4): 319-321, 2024
9. Kai Funakawa, Masanori Kurihara, Kensuke Takahashi, Mana Higashihara, Manato Hara, Akihiko Mitsutake, Hiroyuki Ishiura, Aya Midori Tokumaru, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Yuko Saito, Atsushi Iwata: Proximal sensory neuropathy and cerebellar ataxia as presenting symptoms of *NOTCH2NLC*-related neuronal intranuclear inclusion disease. J Neurol Sci 458: 122915, 2024
10. Yuta Komori, Masanori Kurihara, Ryoji Goto, Maki Obata, Kenji Ishibashi, Kenji Ishii, Aya Midori Tokumaru, Kazutomi Kanemaru, Katsuhiko Takeda, Atsushi Iwata: Right temporal variant frontotemporal dementia initially presenting with gradually progressing heading disorientation: A case report. Clin Neuropsychol 2024 *in press*

11. Akira Arakawa, Ryoji Goto, Mana Higashihara, Yuko Hiroyoshi, Ayako Shioya, Manato Hara, Makoto Orita, Tomoyasu Matsubara, Renpei Sengoku, Masashi Kameyama, Aya M Tokumaru , Masato Hasegawa, Tatsushi Toda, Atsushi Iwata, Shigeo Murayama, Yuko Saito: Clinicopathological study of dementia with grains presenting with parkinsonism compared with a typical case. Neuropathology 2024
12. Taku Hatano, Renpei Sengoku, Hiroshi Nagayama, Naotake Yanagisawa, Asako Yoritaka, Keisuke Suzuki, Noriko Nishikawa, Yohei Mukai, Kyoichi Nomura, Norihito Yoshida, Morinobu Seki, Miho Kawabe Matsukawa, Hiroo Terashi, Katsuo Kimura, Jun Tashiro, Shigeki Hirano, Hidetomo Murakami, Hideto Joki, Tsuyoshi Uchiyama, Hideki Shimura, Kotaro Ogaki, Jiro Fukae, Yoshio Tsuboi, Kazushi Takahashi, Toshimasa Yamamoto, Kenichi Kaida, Ryoko Ihara, Kazutomi Kanemaru, Osamu Kano: Impact of Istradefylline on Levodopa Dose Escalation in Parkinson's Disease: ISTRA ADJUST PD Study, a Multicenter, Open-Label, Randomized, Parallel-Group Controlled Study. Neurol Ther 2024 13(2): 323-338, 2024
13. Kenichiro Sato, Yoshiki Niimi, Ryoko Ihara, Atsushi Iwata, Takeshi Ikeuchi, Takeshi Iwatsubo: Advertisement by medical facilities as an opportunity route of APOE genetic testing in Japan: a website analysis. J Community Genet 2024
14. Reito Nakamura, Ikumi Tomizawa, Atsushi Iwai, Tetsuo Ikeda, Kota Hirayama, Yung Wen Chiu, Takanobu Suzuki, Airi Tarutani, Tatsuo Mano, Atsushi Iwata, Tatsushi Toda, Youhei Sohma, Motomu Kanai, Yukiko Hori, Taisuke Tomita: Photo-oxygenation of histidine residue inhibits α-synuclein aggregation. FASEB J 37(12): e23311, 2023
15. Sopak Supakula, Yuki Hatakeyama, Nicolas Leventoux, Maika Itsuno, Naoko Numata, Hayato Hiramine, Satoru Morimoto, Atsushi Iwata, Sumihiro Maeda, Hideyuki Okano: Urine-derived cells from the aged donor for the 2D/3D modeling of neural cells via iPSCs. Aging Brain. 4: 100101, 2023
16. Nathan Pavey, Andrew Hannaford, Mana Higashihara, Mehdi van den Bos, Matthew C Kiernan, Parvathi Menon, Steve Vucic: Utility of split hand index with different motor unit number estimation techniques in ALS. Clin Neurophysiol. 156:175-182, 2023
17. Reisa A Sperling, Michael C Donohue, Rema Raman, Michael S Rafii, Keith Johnson, Colin L Masters, Christopher H van Dyck, Takeshi Iwatsubo, Gad A Marshall, Roy Yaari, Michele Mancini, Karen C Holdridge, Michael Case, John R Sims, Paul S Aisen; A4 Study Team: Trial of Solanezumab in Preclinical Alzheimer's Disease. N Engl J Med. 389(12): 1096-1107, 2023
18. Masataka Kikuchi, Akinori Miyashita, Norikazu Hara, Kensaku Kasuga, Yuko Saito, Shigeo Murayama, Akiyoshi Kakita, Hiroyasu Akatsu, Kouichi Ozaki, Shumpei Niida, Ryozo Kuwano, Takeshi Iwatsubo, Akihiro Nakaya, Takeshi Ikeuchi; Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative; Japanese Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative. Polygenic effects on the risk of Alzheimer's disease in the Japanese population. Alzheimers Res Ther. 16(1): 45, 2024
19. Hiroki Masuda, Masahiro Mori, Shigeki Hirano, Akiyuki Uzawa, Tomohiko Uchida, Mayumi Muto, Ryohei Ohtani, Reiji Aoki, Yoshiyuki Hirano, Japanese Alzheimer’s Disease Neuroimaging Initiative (J-ADNI); Satoshi Kuwabara: Higher longitudinal brain white matter atrophy rate in aquaporin-4 IgG-positive NMOSD compared with healthy controls. Sci Rep 13(1): 12631, 2023
20. Mihoko Shiio, Nobuya Maeda, Atsushi Iwata, Kenji Ishibashi, Kenji Ishii, Hiroshi Takuma, Yuko Ishizaka, Yasuhisa Sakurai: Ventral Variant Posterior Cortical Atrophy with Occipito-temporal Accumulation of Tau Proteins/Astrocyte Gliosis. Intern Med 2024

21. Shuhei Egashira, Akatsuki Kubota, Toshiyuki Kakumoto, Reiko Kawasaki, Risa Kotani, Kaori Sakuishi, Atsushi Iwata, Sung Kwan Bae, Nobuhisa Akamatsu, Kiyoshi Hasegawa, Mariko Tanaka, Kazuo Nakamichi, Masayuki Saijo, Tatsushi Toda: Long-term survival from progressive multifocal leukoencephalopathy in living-donor liver transplant recipient with preformed donor-specific antibody. J Neurovirol. 29(5): 519-523, 2023
22. Akihiko Mitsutake, Takashi Matsukawa, Atsushi Iwata, Hiroyuki Ishiura, Jun Mitsui, Harushi Mori, Takashi Toya, Akira Honda, Mineo Kurokawa, Norio Sakai, Shoji Tsuji, Tatsushi Toda: Favorable outcome of hematopoietic stem cell transplantation in late-onset Krabbe disease. Brain Dev 45(7):408-412, 2023
23. Yoshiki Shimokawa, Yuki Ishikawa, Teiki Okawa, Mana Higashihara, Fumiaki Tokimura, Tsuyoshi Miyazaki, Kentaro Hayakawa: A case of subacute combined degeneration of the spinal cord diagnosed with difficulty due to a history of treatment for pyogenic spondylitis. Clin Case Rep 11(4):e7180, 2023
24. Takahiro Shimizu, Hideyuki Matsumoto, Keiko Hatano, Hideji Hashida: Cerebral Venous Thrombosis in a Neuromyelitis Optica Patient. Intern Med 63(9):1331-1332, 2024
25. 佐藤謙一郎, 肥田あゆみ, 新美芳樹, 岩田淳, 岩坪威: ハッショウマメ（Mucuna pruriens）の個人間インターネット取引での広告・販売の実態に関する調査. YAKUGAKU ZASSHI 143(12): 1057-1067, 2023

＜総説＞

1. 岩田淳: 【認知症-Alzheimer病治療の新しい時代を迎えて】Alzheimer病(AD)疾患修飾薬治療. Clinial Neuroscience 41(9): 1172-1175, 2023
2. 岩田淳: 【Alzheimer病の疾患修飾療法への期待】Alzheimer病の疾患修飾療法 臨床的評価について. 脳神経内科 99(2): 221-224, 2023
3. 井原涼子:【アルツハイマー病疾患修飾薬の臨床応用に向けて】抗アミロイドβ抗体薬適用にあたっての早期アルツハイマー病の診断と認知機能検査・臨床評価. カレントテラピー 42(3): 190-194, 2024
4. 栗原正典, 岩田淳: アルツハイマー病におけるバイオマーカーの開発状況. 臨床精神医学 52(9): 1047-1053, 2023
5. 井原涼子: 今月のTopic 開発 アルツハイマー病病態に作用する新薬・レカネマブをどのように使っていくか. 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス 54(6): 539-541, 2023
6. 岩田淳: 血液バイオマーカー総論. 日本老年医学会雑誌 61(1): 23-27, 2024
7. 井原涼子:【アルツハイマー病-研究と治療の最前線】臨床・治療薬 アルツハイマー病の診断基準の変遷と将来像. 医学のあゆみ 287(13): 1016-1021, 2023
8. 栗原正典, 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬概論と抗Aβ抗体医薬の実用化. 医学のあゆみ 287 (13): 1031-1037, 2023
9. 井原涼子:【バイオマーカー結果開示をめぐる諸問題】臨床研究と診療におけるバイオマーカー結果開示の実際と課題(解説). Dementia Japan 37(1): 47-53, 2023
10. 井原涼子:【認知症のゲノム医療】DIAN/DIAN-TU,その日本からの参加の歩み. Dementia Japan 37(2): 273-279, 2023
11. 平賢一郎, 森まどか, 山本敏之:【ミオパチーの最近の進歩】封入体筋炎の嚥下障害. 脳神経内科 99(5): 667-672, 2023
12. 平 賢一郎, 森 まどか:【筋疾患の病態と臨床】変遷する炎症性筋疾患の概念. 脳神経内科 99 (2): 170-175, 2023
13. 岩田淳: パーキンソン病. 元気がいいね 144: 4-5, 2024

14. 間野達雄, 岩田淳:【アルツハイマー病-研究と治療の最前線】基礎 エピジェネティクスとアルツハイマー病. 医学のあゆみ 287 (13): 916-920, 2023
15. 岩田淳:【診断の糸口はここにある 手がかりから紐解く臨床推論】(第10章)神経 [Case 9]嚥下障害 食事が飲み込めなくなりました. 内科. 132 (3): 683-686, 2023
16. 岩田淳:【診断の糸口はここにある 手がかりから紐解く臨床推論】(第10章)神経 [Case 8]家庭内暴力妻:夜寝ると殴る蹴るの暴力が始まります.そんな記憶はないと日中は言うのですが…… 内科 132(3) 678-682, 2023
17. 東原真奈:【診断の糸口はここにある 手がかりから紐解く臨床推論】(第10章)神経 [Case 4]手のしびれ手がしびれていて,朝方痛くて目が覚めます. 内科 132(3): 661-665, 2023
18. 岩田淳: アルツハイマー病治療の新時代 レカネマブの適正使用. Clinician 698, 5-7, 2024
19. 岩田淳: 血液バイオマーカー総論と全自動超高感度Aβ42/40測定法. Demetia Japan

＜学会発表＞

（海外）

1. Atsushi Iwata: Biomarker in dementia practice: an overview. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. 2023 横浜: 口演, 2023/6/13
2. Keiko Hatano, Ryoji Goto, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata: Clinical profile of early Parkinson's disease aged ≥ 80 years at diagnosis. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. 2023 横浜: ポスター, 2023/6/13
3. Masanori Kurihara, Soichiro Kondo, Kensuke Takahashi, Keiko Hatano, Kensuke Ohse, Mami Yoshioka, Nobuo Kanai, Kenji Toba, Atsushi Iwata: Characteristics of Tokyo Medical Biobank participants with age-associated neurological diseases recruited at the Department of Neurology. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. 2023 横浜: ポスター, 2023/6/12
4. Soichiro Kondo, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Hitomi Matsui, Kensuke Ohse, Takayuki Kato, Yasushi Nishina, Ko Furuta, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata: Characteristics of patients with Alzheimer's disease undergoing lumbar puncture for biomarker confirmation in our hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. 2023 横浜: ポスター, 2023/6/12
5. Kensuke Ohse, Masashi Toyoda, Mami Yoshioka, Masanori Kurihara, Tokyo Medical Biobank Group, Atsushi Iwata, Nobuo Kanai: Quality control at the Tokyo Medical Biobank to provide high-quality biospecimens. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. 2023 横浜: ポスター, 2023/6/12
6. Kenichiro Taira, Madoka Mori-Yoshimura, Toshiyuki Yamamoto, Yasushi Oya, Ichizo Nishino, Yuji Takahashi: Clinical Subsets of Inclusion Body Myositis. American Academy of Neurology 75th Annual Meeting. 2023 Boston, ポスター, 2023/4/25
7. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Satoru Morimoto, Yuko Saito, Kazutomi Kanemaru, Shigeo Murayama, Atsushi Iwata: Associations of Antemortem Cerebrospinal Fluid Biomarkers with Alzheimer's Disease Neuropathologic changes at Autopsy. Alzheimer's Association International Conference (AAIC) 2023. 2023 Amsterdam, ポスター, 2023/7/16
8. Kazutomi Kanemaru, Akiko Kanemaru, Masanori Kurihara, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Atsushi Iwata, Yuko Saito, Shigeo Murayama: Sex differences of cerebrospinal fluid biomarkers in Alzheimer's disease. Alzheimer's Association International Conference (AAIC) 2023. 2023 Amsterdam, ポスター, 2023/7/20

9. Nick Ziogas, Catherine J. Mummery, Mercè Boada Rovira, Jeffrey L. Cummings, Nick C Fox, Oskar Hansson, Atsushi Iwata, Stephen Salloway, Anja Schneider, Anne Unwin, Ellen Huang, Amanda Edwards, Irene Tien, Shuang Wu, Lin Lin, Melanie Shulman, Jaren Landen, Samantha Budd Haeberlein: Design of a Phase 2, Randomized, Double-Blind, Placebo-Controlled, Parallel-Group Study to Assess the Efficacy, Safety, and Tolerability of BIIB080 in Subjects with Mild Cognitive Impairment Due to Alzheimer's Disease or Mild Alzheimer's Disease Dementia. Alzheimer's Association International Conference (AAIC) 2023. 2023 Amsterdam, ポスター, 2023/7/16
10. Ikumi Tomizawa, Yung-Wen Chiu, Tatsuo Mano, Maiko Ono, Makoto Higuchi, Tatsuo Toda, Atsushi Iwata, Yukiko Hori, Taisuke Tomita: Identification of novel regulators of disease-specific α-synuclein aggregation by genome wide screening using the CRISPR/Cas9 system. Society for Neuroscience 2023. 2023 Washington D.C., ポスター, 2023/10/7
11. Kenichito Sato, Yoshiki Niimi, Ryoko Ihara, Kazushi Suzuki, Atsushi Iwata, Takeshi Iwatsubo: Influence of COVID-19 pamdemic to self-percieved memory decline: contribution to cognitive change one-year later. Clinical Trials on Alzheimer's disease 2023. 2023 Boston, ポスター, 2023/10/24
12. Mana Higashihara, Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Kensuke Takahashi, Yuta Komori, Ryoko Ihara, Mehdi van den Bos, Parvathi Menon, Yuki Hatanaka, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Steve Vucic, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: Relationship between cortical hyperexcitability and astrogliosis in amyotrophic lateral sclerosis. 34th international symposium on ALS/MND. 2023 Basel, ポスター, 2023/12/6
13. Keiko Hatano, Masashi Kameyama, Masanori Kurihara, Kensuke Ohse, Ryoji Goto, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Renpei Sengoku, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Shigeo Murayama, Atsushi Iwata: Prevalence of amyloid positivity evaluated by cerebrospinal fluid Aß42 concentration in early Parkinson's disease without dementia aged ≧ 80 years at diagnosis. Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conference 2024. 2024 Lisbon, ポスター, 2024/3/5
14. Masanori Kurihara, Ryosuke Shimasaki, Keiko Hatano, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata: Radiological Heterogeneity of Tokyo Medical Biobank Participants with Lewy body Diseases. Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conference 2024. 2024 Lisbon, ポスター, 2024/3/5
15. Ryosuke Shimasaki, Masanori Kurihara, Keiko Hatano, Ryoji Goto, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata: The association of CSF biomarkers with DAT SPECT and MIBG myocardial scintigraphy in Parkinson's disease. Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conference 2024. 2024 Lisbon, ポスター, 2024/3/7

（国内）

1. 岩田淳: アルツハイマー病における神経細胞特異的な情報解析. 第 31 回日本医学会総会. 2023 東京: 招待講演, 2023/4/22
2. 金丸和富, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田淳, 齊藤祐子, 村山繁雄: アルツハイマー病における脳脊髄液バイオマーカーと MMSE との関連. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: 口演, 2023/5/31
3. Keiko Hatano, Ryoji Goto, Masanori Kurihara, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata: Clinical profile of early drug-naïve Parkinson's disease aged ≥ 80 years at diagnosis: Application of CSF findings to ATN classification.

第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: ポスター, 2023/5/31

4. Mana Higashihara, Kenji Ishibashi, Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Hiroki Komatsu, Kensuke Takahashi, Soichiro Kondo, Yuta Komori, Parvathi Menon, Mehdi van den Bos, Keiko Hatano, Ryoko Ihara, Yuko Saito, Takayuki Kato, Yasushi Nishina, Kazutomi Kanemaru, Masahiro Sonoo, Shigeo Murayama, Aya M Tokumaru, Steve Vucic, Kenji Ishii, Atsushi Iwata: 筋萎縮性側索硬化症における運動皮質興奮性と astrogliosis の関連についての検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: ポスター, 2023/6/1
5. 近藤壯一郎, 東原真奈, 波多野敬子, 栗原正典, 井原涼子, 石橋賢士, 吉田拓也, 高梨成彦, 徳丸阿耶, 小松明子, 新井冨生, 齋藤輔, 宮腰重三郎, 橘盛昭, 宮本鋼, 辛正廣, 仁科裕史, 金丸和富, 石井賢二, 岩田淳: 中枢神経に発生した成熟 B 細胞腫瘍における ^{18}F-THK5351PET の有用性の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: ポスター, 2023/6/1
6. 髙橋健祐, 栗原正典, 石橋賢士, 後藤良司, 東原真奈, 亀山征史, 平野浩彦, 波多野敬子, 井原涼子, 武田克彦, 仁科裕史, 金丸和富, 石井賢二, 岩田淳: 進行性の偽性球麻痺を主徴とする症例における ^{18} F-THK5351 PET の有用性. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: ポスター, 2023/6/1
7. 小森雄太, 栗原正典, 小松大樹, 後藤良司, 波多野敬子, 東原真奈, 井原涼子, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 徳丸阿耶, 金丸和富, 武田克彦, 岩田淳: 右側頭葉を中心とした萎縮を示す前頭側頭型認知症の神経画像と神経心理症状の関係性の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: 学生・研修医口演, 2023/6/3
8. 舟川開, 栗原正典, 髙橋健祐, 小松大樹, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 徳丸阿耶, 原愛徒, 齊藤祐子, 光武明彦, 柴田頌太, 石浦浩之, 金丸和富, 村山繁雄, 岩田淳: 成人発症 *NOTCH2NLC* 関連神経核内封入体病における感覚障害・小脳性運動失調の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会. 2023 千葉: 学生・研修医口演, 2023/6/3
9. 秋冨友佑, 高橋健祐, 東原真奈, 近藤壯一朗, 原愛徒, 井原涼子, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田淳: 経過 6 年の原因不明の嚥下障害に対して大腿直筋生検を施行し,診断が得られた封入体筋炎の 1 例. 第 687 回日本内科学会関東地方会. 2023 東京, 口演, 2023/6/10
10. 金丸和富, 金丸晶子, 仁科裕史, 岩田 淳, 村山繁雄: アルツハイマー型認知症における脳脊髄液バイオマーカーと認知機能との関連. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 2023 横浜, 口演, 2023/6/16
11. 岩田淳: 認知症で期待される新しい治療ターゲット. 第 65 回日本老年医学会学術集会. 2023 横浜, 教育講演, 2023/6/17
12. 髙橋健祐, 平賢一郎, 東原真奈, 原愛徒, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田淳: 嚥下障害で発症し病初期に四肢筋力低下が目立たず, 経過 6 年で診断に難渋した封入体筋炎の 88 歳男性例. 第 245 回 日本神経学会関東・甲信越地方会. 2023 東京, 口演, 2023/6/17 【臨床神経学 推薦論文】
13. 山田一貴, 東原真奈, 髙橋健祐, 近藤壯一朗, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 加藤貴行, 小原健太, 仁科裕史, 岩田淳: アテローム性脳梗塞の加療後に起立性低血圧が増悪し脳梗塞の再発を認めた 65 歳女性例. 第 37 回日本神経救急学会学術集会. 2023 軽井沢, 口演, 2023/6/24【日本神経救急学会雑誌 推薦論文】
14. 髙橋健祐, 東原真奈, 山田一貴, 近藤壯一郎, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 加藤貴行, 金丸和富, 仁科裕史, 岩田淳: 早期診断、早期治療により良好な転機をたどった軸索型 Guillain-Barré 症候群の 1 例. 第 37 回日本神経救急学会学術集会. 2023 軽井沢, 口演, 2023/6/24【日本神経救急学会雑誌 推薦】
15. Masanori Kurihara, Tomoyasu Matsubara, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata, Yuko Saito, Shigeo Murayama: Pathological background of decreased CSF Aβ42 in dementia with Lewy bodies and progressive supranuclear palsy. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会/第 66 回日本神経化学会大

会 合同大会. 2023 神戸, 口演 (優秀口演賞演題候補), 2023/7/6

16. 後藤良司, 栗原正典, 原愛徒, 荒川晶, 松原知康, 岩田淳, 新井冨生, 村山繁雄, 齊藤祐子: 嗜銀顆粒性認知症の一純粋例. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会/第 66 回日本神経化学会大会 合同大会. 2023 神戸, ポスター, 2023/7/6
17. 岩田淳: 認知症のバイオマーカー診断. 第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会/第 66 回日本神経化学会大会 合同大会. 2023 神戸, 招待講演, 2023/7/7
18. 岩田淳: それでもシヌクレイン抗体療法で PD は治療できるーNo の立場から. 第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス. 2023 大阪, 招待講演, 2023/7/22
19. 山田一貴, 東原真奈, 髙橋健祐, 小野秀子, 栗原正典, 平賢一郎, 波多野敬子, 井原涼子, 仁科裕史, 幸原伸夫, 岩田淳: 四肢・顔面の筋痙攣と感覚障害を主訴に来院した球脊髄性筋萎縮症（SBMA）の 61 歳男性例. 第 107 回 Neuromuscular Conference. 2023 東京, 口演, 2023/7/23
20. 岩田淳: バイオマーカーを用いた認知症医療の社会実装に向けて. TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム. 2023 東京, 招待講演, 2023/7/28
21. 大瀬賢介, 豊田雅士, 吉岡まみ, 栗原正典, 岩田淳, 金井信雄:「東京メディカルバイオバンクにおける品質管理」TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム. 2023 東京, ポスター, 2023/7/28
22. 東原真奈: 神経筋疾患の電気診断. 第 9 回日本筋学会学術集会・第 10 回筋ジストロフィー医療研究会合同学術集会. 2023 千里: 招待講演, 2023/8/19
23. 谷藤秀一, 栗原正典, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 武田克彦, 岩田淳: 電文体発話を特徴とする進行性の非流暢性失語を 前景に, 左上下肢動作緩慢を伴った 右利き 75 歳女性の 1 例. 第 246 回日本神経学会関東甲信越地方会. 2023 東京, 口演, 2023/9/2
24. 小森雄太, 栗原正典, 後藤良司, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 金丸和富, 武田克彦, 岩田淳: 地誌的見当識障害を主徴とした右側頭葉を中心とした萎縮を示す前頭側頭型認知症の 71 歳女性例. 第 47 回日本神経心理学会学術集会. 2023 高知, 口演, 2023/9/8
25. 谷藤秀一, 栗原正典, 小幡真希, 石橋賢士, 石井賢二, 武田克彦, 岩田淳: 第 47 回日本神経心理学会学術集会. 2023 高知, 口演, 2023/9/7【神経心理学 推薦論文】
26. 東原真奈, 平島富美子: 下垂足の電気診断（ライブデモ）. 第 20 回日本臨床神経生理学会神経筋電気診断セミナー.2023 東京, 教育講演, 2023/9/16
27. 近藤壯一朗, 栗原正典, 原愛徒, 東原真奈, 仁科裕史, 金丸和富, 村山繁雄, 齊藤祐子, 岩切理歌, 岩田淳: 年齢・合併症を考慮した免疫抑制療法により良好な転帰が得られたスタチン関連免疫介在性壊死性ミオパチーの 81 歳女性例. 第 75 回日本老年医学会関東甲信越地方会. 2023 東京, 講演, 2023/9/30 【奨励賞受賞】
28. 岩田淳: アルツハイマー病のバイオマーカー診断と疾患修飾薬. 第 69 回日本内科学会信越支部生涯教育講演会. 2023 新潟, 招待講演, 2023/10/21
29. 石橋賢士, 近藤壯一朗, 波多野敬子, 東原真奈, 岩田淳, 石井賢二: 中枢神経系の腫瘍性疾患における ^{18}F-THK5351 を用いた MAO-B PET の有用性. 第 63 回 日本核医学会学術総会. 2023 大阪: 口演, 2023/11/16
30. 今村洋介, 谷藤秀一, 栗原正典, 近藤壯一朗, 小寺玲美, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田淳: 若年性脳梗塞を契機に原発性アルドステロン症が判明した 45 歳男性例. 第 691 回日本内科学会関東地方会. 2023 東京, 口演, 2023/11/18【奨励賞・指導医賞受賞】
31. 岩田淳: アルツハイマー病の超早期診断時代を迎えたバイオマーカーの最新知見. 第 49 回臨床神経病理懇話会, 第 24 回日本神経病理学会近畿地方会. 2023 大津, 口演, 2023/11/18
32. 近藤壯一朗, 栗原正典, 大瀬賢介, 野島久, 吉川えみ子, 岩田淳: アルツハイマー病脳脊髄液バイオマー

カーでの全自動 CLEIA ・ELISA 測定値間の関係性. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24

33. 栗原正典, 松原知康, 森本悟, 荒川晶, 金丸和富, 岩田淳, 齊藤祐子, 村山繁雄: 脳脊髄液アルツハイマー病バイオマーカーと剖検脳病理所見の関係の詳細な検討. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
34. 金丸和富, 金丸晶子, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田淳, 齊藤祐子, 村山繁雄: アルツハイマー病における CSF biomarker と MMSE との関連. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
35. 間野達雄, 大友岳, 橋本唯史, 戸田達史, 岩田淳: Hif1a and α-Syn Degradation: A Neuron-Specific Epigenome in Parkinson's Disease. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
36. 井原涼子, 小岩井あまね, 加川栄美, 上村綾, 新美芳樹, 岩坪威, 岩田淳: 認知機能検査の品質管理としての音声レビューの必要性の検証 ーJ-TRC 研究の経験. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
37. 鈴木一詩, 古屋佑一郎, 本郷悠, 松井太郎, 佐藤謙一郎, 新美芳樹, 井原涼子, 岩田淳, 岩坪威, 池脇克則: 軽度認知障害における認知ドメインの障害パターンと予後の関連. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
38. 佐藤謙一郎, 新美芳樹, 井原涼子, 岩田淳, 池内健, 岩坪威: 本邦における APOE 遺伝子検査についての医療機関によるウェブ広告の実態調査. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, ポスター, 2023/11/24
39. 岩田淳: What are the challenges created by the introduction of anti-Aβ drugs? 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, シンポジウム, 2023/11/25
40. 岩田淳: 抗 Aβ 抗体レケンビのもたらす治療価値に関して. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, 招待講演, 2023/11/25
41. 岩田淳: Dementia における分散型臨床試験の lessons learned と展望. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 2023 奈良, 招待講演, 2023/11/25
42. 岩田淳: レカネマブの臨床効果. アルツハイマー病における抗アミロイドβ抗体薬の投与にあたり必要な事項. 2023 奈良, 招待講演, 2023/11/25
43. 髙橋健祐, 東原真奈, 栗原正典, 石橋賢士, 近藤壯一朗, 小森雄太, 平野浩彦, 井原涼子, 仁科裕史, 石井賢二, Steve Vucic, 岩田淳: Bulbar onset motor neuron disease における ^{18}F-THK5351 PET と threshold tracking TMS の有用性について. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会. 2023 福岡, ポスター, 2023/11/30
44. 夏目采, 東原真奈, 小野秀子, 小森雄太, 竹山哲史, 髙橋健祐, 清水優, 岩田淳, 時村文秋: 神経伝導検査が予後予測と治療方針の決定に役立った肘部管症候群の一例. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会. 2023 福岡, ポスター, 2023/11/30
45. 東原真奈: ALS の電気生理マーカー update. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術集会. 2023 福岡, 教育講演, 2023/12/1
46. 東原真奈: Cortical excitability and cognitive impairment in ALS. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術集会. 2023 福岡, シンポジウム, 2023/12/1
47. 小森雄太, 平賢一郎, 栗原正典, 吉田千晴, 石橋賢士, 石井賢二, 武田克彦, 岩田淳: 記銘力が比較的保たれており頭頂葉機能障害が目立った若年発症アルツハイマー病の 65 歳女性例. 第 247 回日本神経学会関東甲信越地方会. 2023 東京, 2023/12/2

48. 秋冨友佑, 平賢一郎, 髙橋健祐, 東原真奈, 原愛徒, 加藤貴行, 齊藤祐子, 仁科裕史, 岩田淳: 嚥下障害で発症し、病初期に四肢筋力低下が目立たず、診断に難渋した封入体筋炎の 88 歳男性例. 第 27 回板橋区医師会医学会. 2023 東京, 口演, 2023/12/2
49. 岩田淳: 認知症治療における最新のトピックス. 第 18 回東京都医学検査学会. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/3
50. 小森雄太, 東原真奈, 近藤壯一朗, 嶋﨑亮介, 原愛徒, 荒川晶, 井原涼子, 早川謙太郎, 齊藤祐子, 村山繁雄, 仁科裕史, 岩田淳: 腓腹神経生検で非典型的な電子顕微鏡所見を呈した抗 MAG/SGPG 抗体関連ニューロパチーの 85 歳男性例. 第 108 回 Neuromuscular Conference. 2023 東京, 口演, 2023/12/23
51. 岩田淳: 認知症の治療薬開発の現状. 21 世紀先端医療コンソーシアム. 2024 東京, 口演, 2024/1/16
52. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬の登場で変わる認知症医療. 第 100 回日本核医学会関東甲信越大会. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/27
53. 岩田淳: 抗 Aß 薬の登場によって認知症医療はどう変わるか. 第 28 回福岡市認知症疾患医療センター研修会. 2024 福岡, 2024/2/13
54. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬の登場で変わる認知症医療. 日本精神薬学会 WEB 講習会. 2024 東京, 招待講演, 2024/2/25
55. 嶋﨑亮介, 栗原正典, 東原真奈, 石橋賢士, 石井賢二, 德丸阿耶, 武田克彦, 岩田淳: bvFTD と dysexecutive AD の鑑別に 18F-MK-6240 PET が有用だった 63 歳女性例. 第 248 回日本神経学会関東甲信越地方会. 2024 東京, 口演, 2024/3/2
56. 椎尾三保子, 前田伸也, 岩田淳, 石橋賢士, 石井賢二, 詫間浩, 石坂裕子, 櫻井靖久: ^{18}F-THK5351 PET で両側後頭側頭領域に限局性の集積を呈し、ventral variant posterior cortical atrophy と考えられた 73 歳女性例. 第 248 回日本神経学会関東甲信越地方会. 2024 東京, 口演, 2024/3/2
57. 岩田淳: レカネマブの適用使用を考える。その臨床像とこれからの診療連携を見据え. 秋田県医師会認知症診療ネットワーク研修会. 2024 秋田, 招待講演, 2024/3/18
58. 井原涼子: 認知機能評価・臨床評価の現状と課題. 第 42 回日本認知症学会学術集会シンポジウム 1. 奈良, シンポジウム, 2023/11/24
59. 井原涼子, 小岩井あまね, 加川栄美, 上村綾, 新美芳樹, 岩坪威, 岩田淳. 認知機能検査の品質管理としての音声レビューの必要性の検証 ーJ-TRC 研究の経験. 第 42 回日本認知症学会学術集会. 奈良, ポスター, 2023/11/25
60. 井原涼子: 新時代の認知症診療 抗 Aβ 抗体レカネマブをどう使うか. 日本予防学会東京都支部第 4 回学術集会. オンライン, 招待講演, 2024/3/24

＜院外活動・講演＞

1. 岩田淳: アルツハイマー病の疾患修飾薬の登場と今後の認知症医療の方向性. IQVIA 講演会. 2023 東京, 招待講演, 2023/4/28
2. 東原真奈: CIDP and CIDP mimics の電気診断と pitfalls. 新潟 CIDP 講演会 初学者からエキスパートまでの神経生理. 2023 新潟, 招待講演, 2023/5/10
3. 岩田淳:「脳ドック領域における認知機能チェックの重要性」ー近未来の認知症診療を見据えて今、知っておくべきことー. 日本脳ドック学会 web 講演会. 2023 東京, 招待講演, 2023/5/15
4. 岩田淳: 臨床におけるバイオマーカー診断の意義と課題. アルツハイマー病研究会 第 23 回学術シンポジウム. 2023 東京, 招待講演, 2023/5/27
5. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線. 第 62 回多摩核医学技術検討会. 2023 東京, 招待講演, 2023/6/9

6. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線. 埼玉県神経内科医会. 2023 大宮, 招待講演, 2023/6/15
7. 井原涼子: 疾患修飾薬の登場に伴う認知症診療の転換.第 32 回徳島大学 Neurology Grand Round. 2023 徳島: 招待講演, 2023/6/16
8. 東原真奈: ALS の早期診断と電気生理マーカー~治療創薬研究に向けて.第 32 回徳島大学 Neurology Grand Round. 2023 徳島: 招待講演, 2023/6/16
9. 岩田淳: アルツハイマー病治療薬の最前線. 第 1 回豊島区もの忘れ相談医養成研修会. 2023 東京, 招待講演, 2023/6/19
10. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬創薬の最前線. 第 18 回認知症ファイヤーカンファレンス. 2023 名古屋, 招待講演, 2023/7/1
11. 岩田淳: レビー小体病の診断と治療. 北海道トレリーフライブ配信講演会, 2023 東京, 招待講演, 2023/7/4
12. 岩田淳: AD Continuum・バイオマーカーパネルを用いた早期アルツハイマー病の診断. Neuroscience Web Seminar, 2023 新潟, 招待講演, 2023/7/6
13. 岩田淳: アルツハイマー病の臨床はどう変わるか～パーキンソン病も含めて考える～ Neurology Seminar –認知症 Part. 2023 東京, 招待講演, 2023/7/24
14. 岩田淳: アルツハイマー病治療薬の最前線. 北区医師会学術講演会. 2023 東京, 招待講演, 2023/7/26
15. 岩田淳: 認知症治療薬の現状と新しい治療薬. 興和株式会社研修会. 2023 東京, 招待講演, 2023/8/24
16. 岩田淳: アルツハイマー病の超早期診断時代を迎えたバイオマーカーの最新知見. 第 37 回中勢認知症集談会特別講演会. 2023 津, 招待講演, 2023/8/31
17. 岩田淳: 疾患修飾薬（Aβ 抗体薬）副作用、特に ARIA について. 大阪府認知症疾患医療センター勉強会. 2023 大阪, 招待講演, 2023/9/1
18. 岩田淳: アルツハイマー病治療薬の最前線. 茨城県認知症病態と治療講演会. 2023 つくば, 招待講演, 2023/9/6
19. 岩田淳: 疾患修飾薬を見据えた次世代の認知症医療. 茨城県認知症疾患医療センター研修会. 2023 つくば, 招待講演, 2023/9/8
20. 岩田淳: アルツハイマー病治療薬の最前線. 認知症とフレイル:診療の forefront. 2023 千葉, 招待講演, 2023/9/27
21. 岩田淳: バイオマーカーを用いた早期アルツハイマー病の診断. 鳥取県中部医師会講演会. 2023 倉吉, 招待講演, 2023/10/12
22. 岩田淳: 脳神経内科医はレビー小体型認知症をどう診断、治療しているか。症例を交えて. 第 94 回板薬イブニングセミナー. 2023 東京, 招待講演, 2023/10/19
23. 岩田淳: アルツハイマー病の医療はどう変わるか. 第 7 回神経変性疾患を学ぶ会 In WEST TOKYO. 2023 東京, 招待講演, 2023/11/7
24. 岩田淳: 「パーキンソン病治療・最新の話題～医師の立場から～」パーキンソン病治療多職種連携セミナー. 2023 東京, 招待講演, 2023/11/15
25. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬とは何か? 第 29 回 New Horizon for Neurosciences. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/9
26. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬とは何か? New Horizon for Neurosciences. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/9
27. 岩田淳: アルツハイマー病疾患修飾薬の社会実装とその問題. 第 35 回 21 世紀カンファレンス. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/14

28. 岩田淳: アルツハイマー病の疾患修飾薬とは? 研修医・若手医師のための脳神経内科学への誘い. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/14
29. 岩田淳: これからの認知症診療と抗 Aβ 抗体薬レカネマブの最新知見. 藤岡多野地区かかりつけ医認知症対応力向上フォローアップ研修会. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/18
30. 岩田淳: 抗 Aβ 薬の登場でどう臨床は変わるか. アミロイド PET 勉強会 in 埼玉. 2023 東京, 招待講演, 2023/12/20
31. 岩田淳: これからの認知症診療と抗 Aβ 抗体薬レカネマブの最新知見. 令和 5 年度第 3 回かかりつけ医認知症対応力向上研修会. 2024 鳥取 , 招待講演, 2024/1/12
32. 岩田淳: 認知症の治療薬開発の現状. 21 世紀 先端医療コンソーシアム. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/16
33. 岩田淳: レケンビの臨床試験の効果について紐解く. LEQEMBI Japan Kick-off Meeting. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/20
34. 岩田淳: アルツハイマー病の新しい治療と認知症予防のお話し. 東京海上日動あんしん生命認知症セミナー. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/24
35. 岩田淳: 抗 Aβ 抗体レケンビのもたらす治療価値について. 西胆振認知症を考える会. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/25
36. 岩田淳: 抗 Aβ 抗体レケンビのもたらす治療価値について. 秋田県認知症疾患医療センター講演会. 2024 東京, 招待講演, 2024/1/26
37. 岩田淳: 抗 Aβ 抗体レケンビのもたらす治療価値について. さっぽろ北部認知症連携の会セミナー. 2024, 招待講演, 2024/1/31
38. 岩田淳: レケンビのデータから考える実臨床への応用. LEQEMBI web Seminar. 2024 東京, 招待講演, 2024/2/2
39. 岩田淳: 抗 Aβ 抗体レケンビのもたらす治療価値について. 認知症セミナー in 釧路.2024 東京, 招待講演, 2024/2/9
40. 岩田淳: レケンビの安全使用にむけて―ARIA の鑑別と対処を中心に. レケンビ適正使用講演会-ARIA マネジメントについて- 2024 東京, 招待講演, 2024/2/20
41. 岩田淳: 高齢者てんかんの鑑別診断と治療～認知症に潜むてんかん～ 患者中心の医療を目指す Web セミナー. 2024 長崎, 招待講演, 2024/3/1
42. 岩田淳: レケンビの適正使用を考える-その臨床像とこれからの診療連携を見据えて- LEQEMBI EXPERT MEETING in Aomori. 2024 青森, 招待講演, 2024/3/11
43. 岩田淳: レケンビのデータから考える実臨床への応用. 第 2 回新潟県における抗 Aβ 抗体薬の医療体制について考える会. 2024 新潟, 招待講演, 2024/3/14
44. 岩田淳: レケンビのデータから考える実臨床への応用. LEQEMBI web Seminar. 2024 東京, 招待講演, 2024/3/22
45. 岩田淳: 脳神経内科の地域連携の理想像高齢パーキンソン病をどう診るか. Parkinson's disease seminar. 2024 東京, 招待講演, 2024/3/25
46. 岩田淳: これからの認知症診療と抗 Aβ 抗体薬レカネマブの最新知見. 宇都宮市医師会学術講演会. 2024 宇都宮, 招待講演, 2024/3/28
47. 栗原正典: 神経核内封入体病における脳脊髄液リン酸化タウ及び他のバイオマーカーの検討. 板橋区 Neurology Web Seminar. 2023 東京, 招待講演, 2023/4/18
48. 井原涼子: 認知症治療におけるイノベーションと今後の医療提供体制―診療におけるバイオマーカーの利用を中心に. HGPI シンポジウム「認知症を考える～共生社会とイノベーションを日本から～」広島, 招待講演, 2023/5/28

49. 井原涼子: 疾患修飾薬の登場に伴う認知症診療の転換．徳島大学脳神経内科第 32 回 Neurology Ground Round WEB. 徳島, 招待講演, 2023/6/16
50. 井原涼子: 疾患修飾薬の登場に伴う認知症診療の転換．東京大学精神神経科クルズス．東京, 講義, 2023/9/25
51. 井原涼子: これからの認知症診療とかかりつけ医への期待．第 33 回北多摩認知症を考える会．東京, 招待講演, 2023/9/27
52. 井原涼子: これからの認知症診療－新規 AD 治療薬の登場による大きな転換．第 7 回日本認知症学会特別教育研修会［認知症］ランチョンセミナー．東京, 招待講演, 2023/10/29
53. 井原涼子: 認知症研究における DCT への期待と課題－医師の立場から－．DCT サミット 2023. 東京, 招待講演, 2023/12/6
54. 井原涼子: アルツハイマー病疾患修飾薬をどう使うか．日本薬局学会・認知症研修症例報告書き方セミナー．オンライン, 招待講演, 2024/1/18
55. 井原涼子: 抗 Aβ抗体薬時代の認知症診療－レカネマブの特性を踏まえて－．Asahi Dementia Forum 2023. オンライン, 招待講演, 2024/2/1
56. 井原涼子: 抗 Aβ抗体薬時代の認知症診療－画像検査・Aβバイオマーカー検査をどう使うか？ 第 43 回福井脳機能画像カンファレンス．福井, 招待講演, 2024/3/1
57. 井原涼子: レケンビ診療を見据えた CSF バイオマーカー検査の実際と留意点．LEQEMBI web seminar. オンライン, 招待講演, 2024/3/12
58. 井原涼子: レカネマブ治療の実際と期待．JP モルガンオンラインセミナー．オンライン, 招待講演, 2024/3/15
59. 井原涼子: 認知症新薬に期待すること～効能と治療の展望～．小金井市市民講座「今日からできる認知症予防」東京, 招待講演, 2024/3/16
60. 井原涼子: アルツハイマー病と新しい治療薬を理解する．日本認知症予防協会主催セミナー．東京, 招待講演, 2024/3/28
61. 井原涼子: レケンビ®による診療の実際－CDR・MMSE の Tips．LEQEMBI web seminar in 東海．オンライン, 招待講演, 2024/3/29
62. 東原真奈: CIDP と CIDP mimics の電気診断. CIDP Conference from Tokyo 2024．東京, 招待講演, 2024/3/29

血液内科

＜学会発表＞

第 46 回日本造血・免疫細胞療法学会総会

①65 歳以上骨髄系腫瘍患者に対する Flu/Mel/TMG を用いた臍帯血ミニ移植症例の解析
Flu/Mel/TMG as conditioning regimen for CBT in over 65 years old patients with myeloid malignancy.
〇小倉和外、久能美香、赤川順子、齋藤　輔、小林寿美子、宮腰重三郎

②当院の高齢者移植における移植後リンパ増殖性疾患の検討
Examination of PTLD in elderly patients with hematopoietic stem cell transplantation at our hospital
〇齋藤　輔、久能美香、赤川順子、小倉和外、小林寿美子、宮腰重三郎

③高齢移植患者が退院後に直面した困難を乗り越えられた要因分析（第一報）
Primary factors to overcome difficulties for elderly patients after HCT (first report)
〇赤川順子、久能美香、齋藤　輔、小倉和外、小林寿美子、宮腰重三郎

④臍帯血移植後晩期発症の中枢神経原発 EBV 関連移植後リンパ増殖症
Late-onset CNS primary EBV-related PTLD after cord blood transplantation
〇久能美香、小倉和外、赤川順子、齋藤　輔、小林寿美子、宮腰重三郎

⑤機械学習モデルを用いた臍帯血移植の生着予測
Machine Learning Prediction Model for Neutrophil Recovery after Unrelated Cord Blood Transplantation
〇鍬塚八千代、笠島理加、山口　類、内田直之、小沼貴晶、田中正嗣、
新谷直樹、**宮腰重三郎**、香西康司、上原康史、衛藤徹也、豊﨑誠子、
西田徹也、石丸文彦、加藤剛二、福田隆浩、井元清哉、　熱田由子、高橋　聡

⑥高齢者 AML に対する同種造血幹細胞移植：移植ソースに関する検討
Efficacy and safety of allogeneic HCT in AML patients aged >65 years with unfavorable cytogenetics
〇山崎 聡、水野昌平、岩﨑　惇、瀬尾幸子、内田直之、**宮腰重三郎**、
中野伸亮、石綿一哉、上原康史、衛藤徹也、高瀬　謙、河北敏郎、
田中正嗣、澤　正史、片山雄太、名和由一郎、鬼塚真仁、一戸辰夫、
熱田由子、諫田淳也、柳田正光

第 85 回　日本血液学会　学術総会

①Outcome after reduced intensity cord blood transplantation following Venetoclax-based therapy among AML patients over 65 years old with myeloid malignancy.
〇Mika Kuno, Kazuto Ogura, Junko Akagawa, Tasuku Saito, Sumiko Kobayashi, Shigesaburo Miyakoshi

＜令和 5 年度トランスレーショナルリサーチ課題　研究助成＞

高齢者急性骨髄性白血病に対するギルテリチニブフマル酸塩による移植前化学療法併用による同種造血幹細胞移植後の再発予防効果の検証
〇小倉和外

輸血・細胞療法科

＜学会・研究会発表＞

1. 小林 茉愛, 小林 寿美子, 李 惠, 林 拓海, 橘 盛昭, 齋藤 輔, 小倉 和外, 宮腰 重三郎. 新型コロナウイルスワクチン4回接種後に脳出血を伴うITPを発症しTPO製剤が著効した高齢者の1例　第686回日本内科学会関東地方会（東京）2023.5.20
2. 小菅隆雄、阿部真愛、谷田部元野、土田紗貴、斎藤　輔、小倉和外、小林寿美子. 当センターで経験した抗JMH保有患者への輸血を行なった1症例.
   第71回日本輸血細胞治療学会総会　ポスター発表2023.5.11(千葉幕張)

＜雑誌論文＞

1. Mai Kobayashi, Sumiko Kobayashi, Takumi Hayashi, Moriaki Tachibana, Tasuku Saito, Kazuto Ogura, Shigesaburo Miyakoshi. Immune thrombocytopenic purpura in an elderly patient with cerebral hemorrhage after the fourth mRNA-1273 COVID 19 vaccination. Geriatrics & Gerontology International. 969-970: 23(12). 2023. httpw://doi.org.1111/ggi.14737
2. 小林寿美子.　高齢者骨髄系腫瘍に対する同種移植.　血液内科 vol87(3). 322-328. 2023

感染症内科

＜学会発表＞

1. 野口穣，東條未希，脇谷美弥子，古川友子，浅見諒子，小金丸博，増田義重，吉田敦，稲松孝思．当センターにおける POT 法による *Clostridioides difficile* の解析．第 35 回日本臨床微生物学会総会・学術集会．2 月，2024.
2. 浅見諒子，野口穣，古川友子，脇谷美弥子，東條未希，小金丸博，吉田敦，増田義重，稲松孝思，山田浩和，大瀬賢介，豊田雅士．*Mycobacterium lentiflavum* 分離例の臨床的および細菌学的特徴について．第 35 回日本臨床微生物学会総会・学術集会．2 月，2024.

＜講師等院外活動（講師・放送等）＞

1. 小金丸博：（講師）重症感染症．筑波大学医学群講義．茨城，11 月 2 日，2023.

精神科・もの忘れ外来

＜学会・研究発表＞

1. 古田光.Number of the Patients with Mild Cognitive Impairment Visiting a Memory Clinic Increased in Tokyo.IAGG2023；パシフィコ横浜：神奈川.2023.06.12
2. 古田光.日本語版 DBD13 の用語の変更と等価性の検討. 第 24 回日本認知症ケア学会大会;京都国際会館:京都.2023.06.03
3. 古田光. 高齢者うつ病治療次の一手、ECT 薬物療法、変性疾患. シンポジウム高齢者のうつ病治療、次の一手.第 119 回日本精神神経学会総会. パシフィコ横浜.2023.6.23
4. 古田光. 当院の施行状況からみる老年期精神障害に対する ECT の有効性と安全性.第 36 回日本総合病院精神医学会;仙台国際センター：宮城.2023.11.17
5. 古田光.都市部認知症疾患医療センター10 年間の初診患者の動向.38 回日本老年精神医学会秋季大会：日本教育会館：東京.2023.10.14
6. Hitomi Matsui, Tsuyoshi Okamura, Ryutaro Yasuda, Mao Shimizu, Yuki Omori, Muneko Kataoka, Ko Furuta. Dopamine transporter single photon emission computed tomography (DaT-SPECT) imaging of older people with late onset major depression, IAGG Asia Oceania Regional Congress, 2023
7. 松井仁美，岡村毅，保田竜太郎，清水真央，大森佑貴，片岡宗子，古田光　口腔の体感幻覚症状を呈した患者における脳機能画像および有効な治療法の検討，第119回日本精神神経学会学術集会，2023
8. 松井仁美，大森佑貴，岡村毅，土屋大樹，清水真央，片岡宗子，古田光　体感幻覚を伴う老年期のうつ病患者における脳機能画像および有効な治療法の検討，第38回日本老年精神医学会秋季大会，2023
9. 松井仁美，齋藤久美子，扇澤史子，今村陽子，畠山啓，大森佑貴，岡村毅，古田光，栗田主一　診断後支援から診断前支援へ～当院の若年性認知症に対する支援の実態調査から～，第 42 回日本認知症学会学術集会，2023
10. 松井仁美，大森佑貴，岡村毅，土屋大樹，清水真央，片岡宗子，古田光　老年期のうつ病患者における脳機能画像と抗うつ薬に対する治療抵抗性との関連性の検討，第 36 回日本総合病院精神医学会総会，2023
11. Naomi Jikumaru, Mayumi Umeda, Toshiko Tsuzuki, Taeko Sato, Yuki Omori, Hiroyuki Sasai. Disturbed sleep-wake rhythm and cognitive dysfunction among inpatients in a geriatric hospital, IAGG Asia Oceania Regional Congress, 2023
12. 大森佑貴，松井仁美，片岡宗子，清水真央，保田竜太郎，古田光　Restless genital syndromeの2症例：症例報告と文献レビュー，第119回日本精神神経学会学術集会，2023
13. 大森佑貴，谷口龍誠，谷古宇美佳，神林崇　高齢者・認知症患者における睡眠の問題に対する介入方法，第45回日本睡眠学会定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会，2023
14. 石戸秀明，千葉滋，伊佐恵，小川靖裕，今西彩，大森佑貴，小野太輔，近藤英明，中村淳子，師田晴子，石井亜紀子，宮本智之，西野精治，本田治久，神林崇　ナルコレプシー/過眠症研究の進歩　脳脊髄液オレキシン A に基づく中枢神経系炎症性脱髄疾患による過眠症の特徴，第 45 回日本睡眠学会定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，2023
15. 大森佑貴，谷口龍誠，谷古宇美佳，山内陽子，扇澤史子，今村陽子，岡本一枝，髙岡陽子，木村陽子，畠山啓，松井仁美，片岡宗子，清水真央，土屋大樹，古田光　東京都健康長寿医療センターの入院患者における睡眠薬の処方傾向の調査，第36回日本総合病院精神医学会総会，2023
16. 大森佑貴：東北精神神経学会 令和5年度第二回生涯教育研修会　3月9日
17. 大森佑貴：一般社団法人日本認知症予防学会 主催セミナー　3 月 28 日
18. 畠山啓，枝広あや子，椎名貴恵，近藤康寛，山田悠佳，新田怜小，岡村毅，井藤佳恵，栗田主一. 認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援. 認知症ケア学会第24回大会; 国立京都国際会館. 2023.6.3-4 2023.6.4. 石崎賞受賞
19. 岡本一枝，古田光，井藤佳恵，扇澤史子，今村陽子，高岡陽子，青島希，植田那月，大森佑貴，松井

仁美, 片岡 宗子, 清水真央, 栗田主一　アルツハイマー型認知症(AD)におけるFrontal Assessment Battery(FAB)による前頭葉機能評価　健常者と軽度認知障害(MCI)を含む重症度によるFABの検討　老年精神医学雑誌34巻増刊II, 212, 2023.

20. 扇澤史子, 岡本一枝, 今村陽子, 高岡陽子, 青島希, 植田那月, 佐藤妙子, 畠山啓, 大森佑貴, 古田光 急性期病院での認知症ケアを次の生活拠点につなぐための取り組み　「ケアの提案書」の意義と課題 日本認知症ケア学会誌 22(1)155, 2023.
21. 扇澤史子, 岡本一枝, 井藤佳恵, 今村陽子, 高岡陽子, 青島希, 植田那月, 大森佑貴, 松井仁美, 畠山啓, 齋藤 久美子, 古田光, 栗田主一　認知症高齢者の希死念慮の特徴と背景　精神科入院中の診療録の希死念慮に関連する記述の質的分析　老年精神医学雑誌 34 巻増刊 II, 216, 2023
22. 扇澤史子　コロナ禍における高齢者医療：感染管理とケアの両立を目指した心理支援　会員企画シンポジウム：これまで、そしてこれからの「感染症と心理臨床」を考えるー私たちは、HIV と COVID-19 から何を学び、そして今後どのように生かすことができるのか 日本心理臨床学会第 42 回大会　オンデマンド配信, 2023
23. 扇澤史子　2023　臨床的視点から：MCI や軽症段階の方への心理的支援　公募シンポジウム：認知症・MCI の当事者と共に語り合う実践の試み（河野直子・長田久雄・野村信威・宮前史子）　日本心理学会第 87 回大会　2023 年 9 月 15 日
24. 今村陽子,仲程知恵,中村昌悟,斎藤久美子,片岡宗子,金千恵子　糖尿病を合併した中等度認知症患者の退院支援についての検討　認知症と身体疾患を考慮したケアの提案書をとおして　認知症ケア学会 2023 年度関東ブロック大会抄録集,18,2023

＜雑誌論文＞

1. 1. Hitomi Matsui, Takehiro Tamura, Tsuyoshi Okamura, Genichi Sugihara, Ko Furuta, Yuki Omori, Masashi Kameyama, Shuichi Awata, Takashi Takeuchi, Hidehiko Takahashi. Indicative biomarkers of Lewy body disease with oral sensory hallucinations in the older people. Psychiatry Clin. Neurosci. Rep. 2024;3:e171
2. 小西 治子, 長澤 陽子, 松井 仁美, 眞野 暁子, 齊藤 英一. 腎機能障害を伴う高齢末期心不全患者の呼吸困難をオキシコドン高用量とミダゾラムで緩和した1症例. 日本老年医学会雑誌. 60 巻 (2023) 3 号 p. 301-306
3. Hideaki Ishido, Shigeru Chiba, Hana Takahashi, Megumi Isa, Yasuhiro Ogawa, Hiroki Kubota, Aya Imanishi, Yuki Omori, Taisuke Ono, Ko Tsutsui, Go Eun Han, Hideaki Kondo, Hiroshi Tsuji, Kiyotaka Nakamagoe, Akiko Ishii, Keiko Tanaka, Akira Tamaoka, Tetsuo Shimizu, Seiji Nishino, Tomoyuki Miyamoto, Takashi Kanbayashi Characteristics of hypersomnia due to inflammatory demyelinating diseases of the central nervous system, BMJ Neurol Open 5:e000428, 2023
4. 大森佑貴, 神林崇　【精神科領域の専門資格-どうやって取得し, どのように臨床へ活かすか】日本睡眠学会総合専門医, 精神医学　65巻12号　1630-1633, 2023
5. 大森佑貴, 神林崇　睡眠の最適化は認知症治療介入になりうるか, 老年精神医学雑誌　35巻3号　275-280, 2023
6. 扇澤史子　認知症が疑われる人へのアウトリーチで心理職に期待される役割　山下洋（編）　こころの科学 229, 日本評論社, pp.2-7, 2023.
7. 扇澤史子 認知症周辺における希死念慮　希死念慮を抱く認知症本人への心理支援　自殺予防と危機介入 43(2)90-94, 2023.
8. 扇澤史子 認知症と診断された後の家族支援の取り組み　診断後支援が終末期までの礎となった事例を通して　認知症ケア事例ジャーナル 16(3), 188-194, 2023.
9. 扇澤史子 死に向かう人々の傍らで――エンドオブライフケア　臨床心理学 24(2), 171-176, 2024.
10. 扇澤史子　老年精神医学領域の実践における心理専門職の役割と課題　認知症本人・家族への心理支援

を中心に　第 38 回秋季日本老年精神医学会・教育講演 6　老年精神医学雑誌 34 巻増刊 II, 90, 2023.

11. Mitsutake S, Yano S, Ishizaki T, Furuta K, Hatakeyama A, Sugiyama M, Awata S, Ito H, Toba K. Association of functional and cognitive impairment severity with discharge to long-term care facilities in older patients admitted to a general acute care hospital from home, Arch Gerontol Geriatr. Dec;115:105111, 2023

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 古田光. 認知症の治療について. 豊島区薬剤師学術講演会；Online:豊島区薬剤師会. 2023.6.22
2. 古田光. 地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート（DASC-21）.板橋区DASC研修;板橋グリーンホール:板橋区.2023.6.19
3. 古田光. 院におけるリエゾンチーム活動. 城北リエゾン&スリープセミナー；Online:ＭＳＤ. 2023.5.18
4. 古田光. 認知症の基礎知識. 令和5年度第1回東京都歯科医師認知症対応力向上研修：Online:東京都歯科医師会. 2023.8.30
5. 古田光. 認知症の人の理解と対応. 2023年度および2024年度東京都認知症介護実践者研修;Online：東京都.（ビデオ配信）
6. 古田光. 認知症に関する知識. 東京都看護師認知症対応力向上研修Ⅰ；Online:認知疾患医療センター（ビデオ配信）
7. 古田光. かかりつけ医認知症対応力向上研修.令和5年度第1回かかりつけ医認知症対応力向上研修；Online:認知症疾患医療センター（ビデオ配信）
8. 古田光. かかりつけ医認知症対応力向上研修.令和5年度第1回かかりつけ医認知症対応力向上研修；東京都健康長寿医療センター.認知症疾患医療センター.2023.11.11
9. 畠山啓.DASCについて. DASC研修.すみだリバーサイドホールイベントホール（墨田区）;墨田区福祉保健部高齢者福祉課地域支援係.2023.10.6
10. 畠山啓.認知症の方へのソーシャルワーク支援.2023年度ソーシャルワークスキルアップ研修;Online:日本医療ソーシャルワーカー協会.2023.10.23
11. 古田光. 東京都健康長寿医療センターと認知症疾患医療センターにおける高齢者の精神疾患、および認知症の診断と治療について. 東京都立大実習講義.22.5.9
12. 古田光. 認知症（BPSD）.東京医科歯科大学神経科学・臨床（ブロック型）;東京医科歯科大学:2023.9.12
13. 齋藤久美子.区西北部における認知症初期集中支援チームの現状～地域拠点型認知症疾患医療センターの立場から～. 中野区認知症初期集中支援チーム事例報告会. 中野区医師会館. 中野区医師会. 2024.3.11
14. 古田光. 認知症と人生会議. 中野区 ACP 講演会；中野区役所：中野区.2023.6.16
15. 古田光. 認知症と診断されたら知っておきたい医療と治療の話.板橋区認知症の方を介護する家族のための講座：グリーンホール：板橋区. 2023.05.24
16. 古田光.認知症基礎講座.東京都島しょ部認知症対応力向上にむけた支援事業；利島村：2023.09.30
17. 古田光. 高齢者の精神疾患について. 東京都島しょ部認知症対応力向上にむけた支援事業；青ヶ島村役場:認知症支援推進センター・2023.12.21
18. 齋藤久美子. 家族の負担軽減のコツ～社会資源を上手に活用しよう！～.認知症の方を介護する家族のための講座. 板橋区立グリーンホール. 板橋区おとしより保健福祉センター.　2023.9.21
19. 齋藤久美子.若年性認知症の人や家族への支援～認知症疾患医療センターSWの立場から～. 若年性認知症フレンドリーTOKYO研究会. Online. NPO認知症予防サポートセンター. 2024.1.29
20. 扇澤史子　認知症とともに生きる方への接し方　認知症の方を介護する家族のための講座　板橋区おとしより保健福祉センター，グリーンホール 2 階ホール　2023 年 6 月 20 日 14:00～16:00

21. 扇澤史子　認知症の人とともに生きる家族が支えられるために　高島平家族会（家族介護者教室＆交流会）2024年3月9日13:30-15:30
22. 今村陽子　認知症の方を介護をしている方のストレス対処法　2023 年 11 月 7 日　14:00-16:00
23. 扇澤史子　認知症の方に安心感を与えるコミュニケーションのコツ　株式会社ウェルビト勉強会 2024 年 3 月 19 日 18:00-19:00
24. 扇澤史子　若年性認知症本人への心理支援　若年性認知症研究会　2024 年 3 月 26 日 14:30-16:30
25. 扇澤史子　認知症本人を支える家族への心理支援　みんなの老年心理学ゼミ　黒川由紀子老年学研究所主催　2024年1月20日10:00-16:00

＜書籍＞

1. 畠山啓. 認知症、あなたは大丈夫？予防には食事と運動、睡眠、知的活動. 日経ビジネス電子版. 2023. 6. 9
2. １．齋藤久美子（共著）. ジェネラリスト・ソーシャルワークの継承と創発. 新保祐光・久保田純編著. 風間書房. 2023. 9. 24

緩和ケア内科

＜雑誌論文＞

1. 小西 治子, 長澤 陽子, 松井 仁美, 眞野 暁子, 齊藤 英一: 「腎機能障害を伴う高齢末期心不全患者の呼吸困難をオキシコドン高用量とミダゾラムで緩和した1症例」. 老年医学会雑誌 2023 年 60 巻 3 号 p. 301-306.

＜学会・研究会発表＞

1. 齊藤 英一: [交流集会4] 俳句を詠んでみよう・ふたたび「悲嘆を詠む」. 第28回日本緩和医療学会学術大会. 神戸, 6月30日, 2023.

外科

＜座長＞

1. 金澤伸郎. 一般演題5　下部消化管. 第871回外科集談会(東京)　3.9, 2024.

＜学会発表＞

1. Tetsuya Nakazato, Hiroshi Yamamoto, Mitsuhiro Kawata, Takafusa Yoshioka, Mitsuru Matsukura, Tsuyoshi Miyazaki; Initiatives to Predict Postoperative Complications and Long-Term Outcomes Using Wearable Devices in Elderly Surgical Patients. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, June 12-14; Yokohama, Japan
2. 中里徹矢、大森春祐、三井秀雄、新井富生、金澤伸郎：十二指腸乳頭部原発の mixed neuroendocrine-non-neuroendocrine neoplasm (MiNEN)の１切除例, 第 59 回日本胆道学会学術集会（札幌） 9.14, 2023
3. 金澤伸郎、石崎達郎、三井秀雄、中里徹矢、新井孝明、大森春佑、田中佑治、荒木厚、許俊鋭、鳥羽研二. 術前評価としてのフレイルの有用性と,経時的な検討. 第 78 回日本消化器外科学会総会（函館） 7.14, 2023
4. 荒井奈緒子、三井秀雄、田中佑治、新井孝明、中里徹矢、大反啓文、新井冨生、金澤伸郎. 早期胃 MiNEN の 1 例. 第 96 回日本胃癌学会総会（京都） 3.1, 2024
5. 荒井奈緒子、新井孝明、田中佑治、三井秀雄、中里徹矢、新井富生、金澤伸郎. ＩｇＡ腎症に伴う高Ｋ血症にてポリスチレンスルホン酸カルシウム服用中に発症したＳ状結腸穿孔の 1 例. 第 85 回臨床外科学会総会（岡山） 11.17, 2023
6. 江本雛子、新井孝明、荒井奈緒子、田中佑治、三井秀雄、中里徹矢、金澤伸郎. 宿便性閉塞性大腸炎を契機としたＳ状結腸穿孔の１例. 第 871 回外科集談会(東京)　3.9, 2024.

血管外科

＜学会・研究会発表＞

1. Murase K, Hanada K, Matsukura M, Hoshina K. “Kissing VBX Technique for Acute Abdominal Aortic Occlusion with Bilateral Lower Limb Ischemia: Two Case Reports.”
   Gyeongju Hwabaek Conventionn Center. June 10th, 2023.
2. 花田和正　松倉　満「TAVI での perclose デバイス使用後のアクセス損傷に対する 2 治療例」
   第 51 回日本血管外科学会総会　　東京　2023 年 5 月 31 日
3. 松倉　満「肝胆膵外科術中に肝動脈再建を施行した 3 症例」
   第 51 回日本血管外科学会総会　　東京　2023 年 6 月 2 日
4. 松倉　満「血管外科医が新規導入施行した脊髄刺激療法 10 症例の検討」
   第 64 回日本脈管学会総会　　東京　2023 年 10 月 26 日
5. 松倉　満「エキシマレーザ Turbo カテーテルを使用して下肢血管内治療を施行した 3 症例の検討」
   第 64 回日本脈管学会総会　　東京　2023 年 10 月 27 日

＜論文＞

1. 松倉　満 II.下肢動脈バイパス術2) 腸骨動脈から大腿膝窩動脈領域の治療-EVT firstの時代へ. 雑誌手術 金原出版株式会社. 2023年13巻1885-1891頁

心臓血管外科

＜雑誌論文＞

1. 河田光弘、村田知洋、眞野暁子、乾　明敏、許　俊鋭：陳旧性脳梗塞で右片麻痺のあるA型急性大動脈解離, severe ARに対して新型コロナ禍の救急対応を行い救命できた1例. ICUとCCU 2023; 47: S57-61.
2. 髙橋寿由樹、吉野秀朗、坪宏一、下川智樹、荻野均、國原孝、薄井宙男、渡邉和宏、河田光弘、益原大志、山崎学、山本剛、長尾建、高山守正：急性A型急性大動脈解離の院内予後における休日入院と平日入院の比較. ICUとCCU 2023; 47:S19-23.
3. 髙橋寿由樹、吉野秀朗、坪宏一、下川智樹、荻野均、國原孝、薄井宙男、渡邉和宏、河田光弘、益原大志、山崎学、山本剛、長尾建、高山守正：B型急性大動脈解離における臨床的特徴と院内予後の性差：レジストリ研究. ICUとCCU 2023; 47:S24-27.
4. 山崎学、吉野秀朗、國原孝、坪宏一、下川智樹、荻野均、河田光弘、髙橋寿由樹、薄井宙男、渡邉和宏、藤井毅郎、山本剛、長尾建、高山守正：心肺停止を伴ったStanford A型大動脈解離の予後：東京急性大動脈スーパーネットワーク. ICUとCCU 2023; 47:S41-43.
5. 許俊鋭、河田光弘、五條理志: リフレーミング 「心臓外科医からの期待 : 心臓移植, 心臓再生医療」. 医工学治療 35(3): 165-169, 2023.
6. Mano A, Murata T, Inui A, Kawata M, Kyo S. “Acute myocardial infarction due to left main trunk ostial stenosis occurring in the acute phase after aortic valve replacement.” Cureus 2023; Oct 22; 15(10).
7. Mano A, Murata T, Inui A, Kawata M, Kyo S. “Severe left ventricular failure unmanageable by Impella 5.0.” Cureus 2023; Oct 28; 15(10).
8. Konishi H, Nagasawa Y, Matsui H, Mano A, Saito E. “The use of high-dose oxycodone with midazolam for dyspnea due to end-stage heart failure in an older patient with renal insufficiency.” Nihon Ronen Igakkai Zasshi (Japanese) 2023;60(3):301-306.
9. 村田知洋、乾明敏、眞野暁子、河田光弘、許俊鋭: COVID-19 関連肺炎を罹患した上肢急性動脈閉塞症の 1 例. 日本血管外科学会雑誌 32(4) 301-305, 2023.
10. 高木智充、國原孝、吉野秀朗、荻野均、坪宏一、下川智樹、河田光弘、高橋寿由樹、薄井宙男、山崎学、小嶋啓介、高山守正：急性大動脈スーパーネットワークデータベースを用いた Stanford A 型急性大動脈解離に対する拡大手術の意義の検証. General Thoracic and Cardiovascular Surgery 71(suppl): 540-540, 2023.
11. Mano A, Murata T, Date K, Kawata M, Sato M, Yamashita N, Iino K, Kyo S, Saito E. Dexmedetomidine for dyspnoea. BMJ Support Palliat Care. 2023 Oct;13(e1):e84-e85.
12. Yamasaki M, Yoshino H, Kunihara T, Akutsu K, Shimokawa T, Ogino H, Kawata M, Takahashi T, Usui M, Watanabe K, Fujii T, Yamamoto T, Nagao K, Takayama M. Outcomes of type A acute aortic dissection with cardiopulmonary arrest: Tokyo Acute Aortic Super-network Registry. Eur J Cardiothorac Surg. 2023 Apr 3;63(4).
13. Takahashi T, Yoshino H, Shimokawa T, Ogino H, Kunihara T, Akutsu K, Usui M, Yamasaki M, Watanabe K, Kawata M, Fujii T, Masuhara H, Takagi T, Imazuru T, Yamamoto T, Nagao K, Kohsaka S, Takayama M; Tokyo CCU Network Scientific Committee. Sex Differences in DeBakey Type I/II Acute Aortic Dissection Outcomes: The Tokyo Acute Aortic Super-network. JACC Adv. 2023 Oct 30;2(9).
14. Akutsu K, Yoshino H, Shimokawa T, Ogino H, Kunihara T, Takahashi T, Usui M, Watanabe K, Yamasaki M, Fujii T, Kawata M, Watanabe Y, Yamamoto T, Kohsaka S, Nagao K, Takayama M. Clinical Features of 544 Patients With Ruptured Aortic Aneurysm - A Report From the Tokyo Acute Aortic Super Network Database. Circ J. 2024 Feb 28.

＜学会・研究会＞

1. Mitsuhiro Kawata, Tomohiro Murata, Akiko Mano, Akitoshi Inui, Shunei Kyo. Successful ascending aorta replacement using intermittent pressure-augmented retrograde cerebral perfusion (IPA-RCP) for acute aortic dissection type A in nonagenarian patients in the COVID-19 era. The 31st Annual meeting of the Asian society for cardiovascular and thoracic surgery, BEXCO, Busan, Korea 2023.5.31-6.3
2. Mitsuhiro Kawata, Tomohiro Murata, Akiko Mano, Akitoshi Inui, Shunei Kyo：Efficacy of intermittent pressure-augmented retrograde cerebral perfusion (IPA-RCP) for acute aortic dissection type A in a nonagenarian. The 12th International Association of Gerontology and Geriatric(IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama NORTH, Yokohama, JAPAN 2023.6.12-15
3. Mitsuhiro Kawata. Possibilities of DA-TAVI. Consider AS treatment in the Low Risk Era. Luncheon Seminar 14. The 12th International Association of Gerontology and Geriatric(IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama NORTH, Yokohama, JAPAN 2023.6.14
4. Ishikawa J, Araki A, Harada K, Kyo S: Wearable watch device use to detect Atrial fibrillation and Heart failure for prevention of frailty. Symposium 14. The 12th International Association of Gerontology and Geriatric(IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama NORTH, Yokohama, JAPAN 2023.6.12-15
5. 許俊鋭. より良い在宅治療を考える: 人工心臓. 第 39 回日本医工学治療学会　川越　2023.5.13
6. 許俊鋭. 人工心臓と私～在宅治療に向けた人工心臓の歴史を振り返る～ . 第 39 回日本医工学治療学会　川越　2023.5.13
7. 許俊鋭、河田光弘、五條理志. 特別企画　「リフレーミング」 心臓医からの期待. 第 39 回日本医工学治療学会　川越　2023.5.13
8. 乾明敏、村田知洋、眞野暁子、河田光弘、許俊鋭. 多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例. 東京胸部外科懇話会　2023 年度 東京　2023.7.17
9. 河田光弘. Frozen elephant trunk ではなく total debranching TEVAR としての open stent graft. 第 2 回 Tokyo Aortic Conference, 日本ライフライン天王洲アカデミア, 東京,2023.7.21
10. 河田光弘、村田哲平、藤本肇、乾明敏、村田知洋、眞野暁子、清水瑠理、吉鷹秀範：低心機能 low flow low gradient severe AS, 両側 CIA 高度石灰化に対して full sternotomy DA-TAVI を施行した 1 例. 第 13 回 日本経カテーテル心臓弁治療学会学術集会 JTVT 2023 虎ノ門ヒルズフォーラム　2023.7.28
11. Kyo S, Toba K. Introduction of TMIG. Brief history from “Yoikuin” to the “TMIG”. 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium 東京都健康長寿医療センター 2023.10.16-18
12. 河田光弘、村田知洋、眞野暁子、乾明敏、許俊鋭: Malperfusion を伴う急性 B 型大動脈解離に対して緊急 TEVAR＋末梢血行再建にて救命、救肢できた 1 例. 第 26 回大動脈ステントグラフト研究会　奈良 2023.11.3
13. 乾明敏、村田知洋、眞野暁子、河田光弘、許俊鋭：多発大動脈瘤に対して段階的治療を行い良好な結果が得られた 1 例. 第 193 回日本胸部外科学会関東甲信越地方会　東京　2023.11.11
14. 乾明敏、村田知洋、眞野暁子、河田光弘、許俊鋭：脳梗塞を契機に発見された急性 A 型大動脈解離. 第 27 回板橋区医師会医学会　板橋区立文化会館　東京　2023.12.2
15. 河田光弘、村田知洋、眞野暁子、乾明敏、許俊鋭：下半身灌流障害を伴う B 型急性大動脈解離に対して緊急 TEVAR+末梢血行再建にて救命、救肢出来た 1 例. 第 43 回東京 CCU 研究会　日本橋ラーニングセンター 2023.12.23
16. 乾明敏、村田知洋, 眞野暁子, 河田光弘, 許俊鋭. 2023 年度報告. 東京胸部外科懇話会 2023 年度冬 報告会 東京大学医学部附属病院 臨床研究棟Ａ 1 階会議室 2023.12.17
17. 都楳 優、西郷 友香、笹原 みさと、羽根田 千恵、石川 峻、片岡 祐佳理、眞野暁子. ICU 早期経腸栄養開始フローチャート. 第 51 回日本集中治療医学会学術集会　札幌　2024.3.14-16
18. 藤本肇、両角愛、河田光弘、眞野暁子. 心肺停止となり血行再建と ECPELLA が功を奏するも、退院に多診療科・職種の協力を要した急性心筋梗塞の一例. 第 51 回日本集中治療医学会学術集会　札幌　2024.3.14-16
19. 乾明敏、村田知洋, 眞野暁子, 河田光弘, 許俊鋭. 術後 5 年半で人工弁機能不全をきたした 1 例. 第 194 回日本胸部外科学会関東甲信越地方会. 宇都宮　2024.3.16
20. 許俊鋭. 健康な心臓を保つために日常生活で注意すること. 未病息災カンファレンス 九段会館テラス バンケットホール 3F 真珠　2023.3.11
21. 許俊鋭. 本邦における植込型 LVAD Destination Therapy 導入までの歩み. 医療価値評価の胎動プログラム 2022 東京大学 2024.3.1

＜総説＞

1. 河田光弘. 第 4 章 循環器病学. 4 後天性心疾患. 分担執筆　臨床工学講座　臨床医学総論　第 2 版 第 5 刷　医歯薬出版株式会社　2024.1.10
2. 河田光弘. 2023 年　主要な臨床研究概説　心臓外科：〇小開胸 vs 胸骨正中切開　僧帽弁形成術において　〇遺伝子組み換え人工ブタから人への異種心臓移植においての移植片不全：症例報告　〇心停止ドナーからの心臓移植の成績　〇甲状腺ホルモン薬(レボチロキシン)静注は血行動態不安定な脳死ドナー心に有効か？　〇Low-Risk 症候性重症大動脈弁狭窄症患者に対する TAVR の 5 年成績.脳・心・腎・血管疾患クリニカル・トライアル Annual overview 2024　J-CLEAR 編集; 42-44, 2024.2 月
3. 許俊鋭. HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入 (1)「体外式 VAD 開発～製造販売承認～心臓移植ブリッジ使用の軌跡」BIO Clinica 39(2):126-131, 2024
4. 許俊鋭. HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入 (2)「第一世代拍動流植込型 LVAD 臨床導入から補助人工心臓治療関連学会協議会 (VAD 協議会) 設立の軌跡」BIO Clinica 39(4):33-38, 2024
5. 許俊鋭. HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入 (1)「VAD 協議会設立後の活動 : 連続流植込型 LVAD 承認・保険償還の経緯」BIO Clinica 39(4):478-483, 2024
6. 許俊鋭. HISTORY「我が国における補助人工心臓の開発と臨床導入 (1)「DT (Destination Therapy), 小児用 VAD (EXCOR), カテーテル VAD (Impella) の臨床導入の経緯」BIO Clinica 39(9):751-756, 2024
7. 許俊鋭.「CE 図鑑」臨床工学技士のココがすごい！ Clinical Engineering 35(1):4, 2023
8. 許俊鋭. 心臓死ドナー心を用いた心臓移植成績（解説：許 俊鋭 氏）－1689 (carenet.com) <https ://www.carenet.com/news/clear/journal/56708> 2023.7.3
9. 許俊鋭. VAHEART 臨床治験「EVAHEART 装着下にご結婚された小暮直樹さんの思い出」.　「大阪大学移植医療部 20 周年記念誌」.pp22-23,2024
10. 許俊鋭. 私の海外留学見聞録「マサチューセッツ総合病院(MGH)留学と築いた人脈」.　集中/MediCon 2023 Oct.:26-27,2023
11. 許俊鋭. リレーエッセイ第 12 回：本邦への植込型 LVAD 臨床導入とそのエピソード.　日本人工臓器学会 HP 2023.10.19 <https://www.jsao.org/essay/essay015/>
12. 許俊鋭. 第 60 回日本人工臓器学会特別講演「本邦における Destination Therapy 導入までの歩み」. 人工臓器　52(1):12-13, 2023
13. 許俊鋭、小金丸博、増田義重、出崎奈美、金谷育子、島崎良知、太田日出、佐藤芳雄、豊田雅士、鳥羽研二. 新型コロナウイルス感染症へのセンターの取り組み. 地方独立行政法人化以後のセンターの運営. 3 近年の出来事　第 1 章 東京都康長寿医療センターの現在. 東京都健康長寿医療センター病院、研究所開設 50 年・養育院創立 150 年記念誌　pp50-52, 2023
14. 河田光弘. 外科系診療部門　心臓血管外科. 病院の 50 年. 5 各科の歴史・成果・現状・展望. 第 2 章 東京都健康長寿医療センターの歴史. 東京都健康長寿医療センター病院、研究所開設 50 年・養育院創立 150 年記念誌　pp116-119, 2023
15. 許俊鋭. 東京都健康長寿医療センターにおける新型コロナウイルス感染(コロナ)パンデミックに対する取り組み. 新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020 年～2023 年）. 東京都健康長寿医療センターHP <https://www.tmghig.jp/cms_upload/dfafa334857a73aa1ebf3c2cd4e8cb32_1.pdf>
16. 河田光弘. コロナ禍の救急診療・心臓血管外科(急性大動脈スーパーネットワーク)の取り組み. 新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020 年～2023 年）. 東京都健康長寿医療センターHP <https://www.tmghig.jp/cms_upload/2a179ffd1ba1f4746aec3560165de510.pdf>
17. 河田光弘. 病院の面会について・心臓血管外科術前術後の家族面会. 新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020 年～2023 年）. 東京都健康長寿医療センターHP <https://www.tmghig.jp/cms_upload/c63ef817817c52d2e5e031cff813bc3a_1.pdf>
18. 安樂真樹、河田光弘、小松郷子、鉄谷祥子、高岡祐子. 重症治療（人工呼吸器、ECMO）. 新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020 年～2023 年）. 東京都健康長寿医療センターHP < https://www.tmghig.jp/cms_upload/2f129b1ba85316d197a8ad888fb1fe57.pdf >
19. 眞野暁子. コロナ禍の救急診療・集中治療室(ICU)の取り組み. 新型コロナウイルス感染症対策・活動記録（2020 年～2023 年）. 東京都健康長寿医療センターHP <https://www.tmghig.jp/cms_upload/86835fa9d43d15919ef9d91dd25d4f81.pdf>

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 許 俊鋭: 本邦における補助人工心臓治療-特に植込型 LVAD の実施施設・実施医基準について-第 30 回東大・東京女子医大 VAD 研修コース 東京大学医学部附属病院＋Web 2023.5.28
2. 許 俊鋭: 本邦における補助人工心臓治療-特に植込型 LVAD の実施施設・実施医基準について-第 31 回東大・東京女子医大 VAD 研修コース 東京女子医科大学＋Web 2023.11.14
3. 許 俊鋭: 重症心不全の外科治療 特に補助人工心臓と心臓移植. 第 47 回東京電機大学 E 講座 Web 配信 2023.11.14
4. 許 俊鋭: 補助人工心臓治療とエンド・オブ・ライフケア. 第 7 回エンド・オブ・ライフケア研修会 東京都健康長寿医療センター 2023.1.27
5. 村田知洋、河田光弘: COVID-19 に罹患した上肢急性動脈閉塞症の 1 例. 院内 CPC 3 階第 3 会議室 A 2023.5.25
6. 河田光弘. 大動脈瘤のステントグラフト治療. ラジオ NIKKEI 第一放送 2023.8.8 23:00～23:15
7. 河田光弘. 大動脈瘤のステントグラフト治療. ドクターサロン vol.68 1-5, 杏林製薬株式会社 2024.1.20

＜座長・コメンテーター＞

1. 眞野暁子. 一般口演 25 補助循環/人工心臓 座長. 第 27 回日本心不全学会学術集会 パシフィコ横浜ノース 横浜 2023.10.8

＜その他＞

2021年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）に『急性大動脈解離での肺酸素化障害抑制に向けた水素ガス吸入療法の検討』で2021/4/1時点で採択され3年目の研究を終了。研究成果をまとめていく。

院内の認定臨床研究審査委員会で承認を得た(整理番号H20-03) 『急性大動脈解離Stanford B型患者に起こる肺酸素化障害に対する水素ガス吸入の安全性試験』を開始し、順調に参加症例登録、研究を10症例に達し終了。
今後、解析し第77回日本胸部外科学会定期学術集会に演題登録する予定。

10施設での治験『冠動脈バイパス手術（CABG）を施行する虚血性心疾患に伴う重症心不全患者に対するヒト（同種）iPS 細胞由来心筋球（HS-001）の第Ⅰ/Ⅱ相試験』を治験審査委員会で承認を得て(整理番号T20-08)、適応患者さん候補が今年度もいたが、同意を最終的に得られず断念。 On-pump CABGのみ施行。患者さんは無事独歩退院。現在も募集継続中。

2024年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）に『急性大動脈解離でのサイトカインストームに対する水素ガス吸入療法の確立』で2024/4/1時点で採択された。

脳神経外科

学会研究活動は、脳血管障害、脳腫瘍、正常圧水頭症、慢性硬膜下血腫などに関するテーマについて、臨床的および基礎的な検討を行っている。脳神経外科学会総会・コングレス・地方会、日本脳神経血管内治療学会、老年脳神経外科学会、老年病学会、板橋区医師会、などで活動している。

2015年から参画していたNCDの脳神経外科手術全症例登録事業は、脳神経外科学会主導で発展的に拡張され、2018年1月1日からの、Japan Neurosurgical Database (JND) 研究事業に移行、センター脳神経外科で入院治療を行った全症例登録を行っている。

2019年1月からは、国立循環器病センターが事務局として運営している「日本脳卒中データバンク」事業に参画している。脳卒中入院の全症例登録を行なっている。事務局からは毎年、全国施設データと当センターデータとを比較した解析結果が提供されており、当センターの脳卒中診療の質を高めることに寄与している。

＜雑誌論文＞

1. Ohara K, Miyawaki S, Nakatomi H, Okano A, Teranishi Y, Shinya Y, Ishigami D, Hongo H, Takayanagi S, Tanaka S, Shinozaki-Ushiku A, Kohsaka S, Kage H, Oda K, Miyagawa K, Aburatani H, Mano H, Tatsuno K, Saito N. Case report and literature review: exploration of molecular therapeutic targets in recurrent malignant meningioma through comprehensive genetic analysis with Todai OncoPanel. Front Neurol. 2023 Nov 23;14:1270046. 2023.
2. Okano A, Miyawaki S, Teranishi Y, Hongo H, Dofuku S, Ohara K, Sakai Y, Shin M, Nakatomi H, Saito N. POLR2A Mutation is a Poor Prognostic Marker of Cerebellopontine Angle Meningioma.Neurosurgery. 2024 Feb 21. 2024
3. Tsuchiya T, Ikemura M, Miyawaki S, Teranishi Y, Ohara K, Ushiku T, Saito N. Clinical and radiological features of intracranial ancient schwannomas: a single-institution, retrospective analysis.Brain Tumor Pathol. 2024 Apr;41(2):73-79. 2024
4. Umekawa M, Koizumi S, Ohara K, Ishigami D, Miyawaki S, Saito N. Distal radial artery approach is safe and effective for cerebral angiography and neuroendovascular treatment: A single-center experience with ultrasonographic measurement.Interv Neuroradiol. 2024 Apr;30(2):280-287.2024
5. Dofuku S, Sato M, Aoka T, Nakamura R, Ohara K, Ota T. Successful Mechanical Thrombectomy for Isolated Internal Carotid Artery Occlusion in a Patient with Monocular Blindness: A Case Report.NMC Case Rep J. Jun 26;10:191-195. 2023
6. Shinya Y, Hasegawa H, Shin M, Kawashima M, Umekawa M, Katano A, Ikemura M, Ushiku T, Ohara K, Okano A, Teranishi Y, Miyawaki S, Saito N.Long-Term Outcomes of Stereotactic Radiosurgery for Postoperative World Health Organization Grade I Skull Base Meningioma: Utility of Ki-67 Labeling Index as a Prognostic Indicator. Neurosurgery. Nov 1;93(5):1144-1153. 2023
7. Hanakita S, Shin M, Hasegawa H, Shojima M, Ohara K, Shinya Y, Kawashima M, Kondo K, Saito N.Endoscopic Extended Transsphenoidal Surgery Aiming for Radical Resection of Skull Base Tumors Involving Cavernous Sinus: Assessment of Resectability and Risks of Complications. Oper Neurosurg (Hagerstown). 2023 Sep 1;25(3):260-268. 2023.
8. Shinya Y, Hasegawa H, Shin M, Kawashima M, Umekawa M, Katano A, Ikemura M, Ushiku T, Ohara K, Okano A, Teranishi Y, Miyawaki S, Saito N. Optimizing Prognostic Predictions and Treatment Strategies in Postoperative World Health Organization Grade 1 Skull Base Meningioma: Potential Role of Ki-67 Labeling Index in Stereotactic Radiosurgery. World Neurosurg. 2023 Oct;178:266-267. 2023
9. Dofuku S, Sonehara K, Miyawaki S, Sakaue S, Imai H, Shimizu M, Hongo H, Shinya Y, Ohara K, Teranishi Y, Okano A, Ono H, Nakatomi H, Teraoka A, Yamamoto K, Maeda Y, Nii T, Kishikawa T, Suzuki K, Hirata J, Takahashi M, Matsuda K, Kumanogoh A, Matsuda F, Okada Y, Saito N.Genome-Wide Association Study of Intracranial Artery Stenosis Followed by Phenome-Wide Association Study.Transl Stroke Res. 2023 Jun;14(3):322-333.
10. Teranishi Y, Miyawaki S, Nakatochi M, Okano A, Ohara K, Hongo H, Ishigami D, Sakai Y, Shimada D, Takayanagi S, Ikemura M, Komura D, Katoh H, Mitsui J, Morishita S, Ushiku T, Ishikawa S, Nakatomi H, Saito N. Meningiomas in patients with neurofibromatosis type 2 predominantly comprise 'immunogenic subtype' tumours characterised by macrophage infiltration.Acta Neuropathol Commun. 2023 Sep 26;11(1):156. 2023

＜学会・研究会発表＞

1. 小原健太、高梨成彦、田口備教、上野俊昭：当院における Trans carotid artery revascularization の治療経験．第 82 回日本脳神経外科学会総会．神奈川．10 月 25 日，2023
2. 小原健太：小型 M1 破裂動脈瘤に対してコイル塞栓術を行った 1 例．BASICS 東京．東京．10 月 6 日，2023
3. 高梨成彦、小原健太、田口備教、上野俊昭：3D プリンタで製作した「列柱型マンドレル形成プレート」を用いて先端から長い範囲を形成したマイクロカテーテルの、脳動脈瘤コイル塞栓術における有効性と安全性について．第 39 回脳神経血管内治療学会．京都．11 月 24 日，2023
4. 高梨成彦、幸田俊一郎、小原健太、田口備教、上野俊昭：当院における Queckenstedt’s test の信頼性についての脊椎 MRI を用いた検討．第 25 回日本正常圧水頭症学会学術集会．当院における Queckenstedt’s test の信頼性についての脊椎 MRI を用いた検討．大阪．2 月 18 日，2023
5. 高梨成彦：正常圧水頭症の 9 割の未受診患者を治療につなげるための地域連携．第 27 回板橋区医師会医学会．東京．12 月 3 日，2023

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 小原健太：脳卒中に対する脳神経外科治療とその進歩．第 168 回老年学・老年医学公開講座．東京．1 月 26 日，2024
2. 小原健太：Hybrid neurosurgery の時代における脳卒中外科の実践．脳神経地域連携講演会．東京．2 月 28 日，2024
3. 小原健太：Hybrid neurosurgery の時代における脳卒中外科の実践．脳神経内科・脳神経外科地域連携セミナー．東京．8 月 4 日，2024
4. 高梨成彦：板橋看護専門学校　成人看護学　脳・神経　脳神経外科疾患．2023 年 10 月 25 日、11 月 10 日、11 月 29 日
5. 高梨成彦：水頭症かもしれません　ふらつく・ぼんやりする・トイレにまにあわない．第 168 回老年学・老年医学公開講座．東京．1 月 26 日，2024

呼吸器外科

＜雑誌論文＞ （＊corresponding author）

1. Nobori Y, Anraku M*, Yamauchi Y, Mun M, Yoshino I, Nakajima J, Ikeda N, Matsuguma H, Iwata T, Shintani Y, Nakayama M, Oyama T, Chida M, Kuroda H, Hashimoto H, Azuma Y, Funai K, Endoh M, Uemura Y, Kawamura M. Risk-adjusted hazard analysis of survival after pulmonary metastasectomy for uterine malignancies in 319 cases. JTCVS Open. 2023 Jan 30;13:411-422. doi: 10.1016/j.xjon.2023.01.014. eCollection 2023 Mar. PMID: 37063124
2. Anraku M*, Keshavjee S. Care of the Multiorgan Donor.In: Hall J, Schmidt G. (Editors). Principles of Critical Care (5th Edition), Elsevier Saunders, Amsterdam; p1219-1227, 2024.
3. 登 祐哉, 安樂 真樹：肺移植の適応と実際. 臨床雑誌　内科　2024; 133 号 1 巻　p149-155

＜学会活動・研究会発表・講師等院外活動＞

学会発表・座長

1. Anraku M. Yokoi R, Hara S, Nobori Y, Ono T, Sato K, Watanabe F, Isoyama T, Takai M, Ono M, Nakajima J. Silicone-based hollow fiber membrane lungs for a long-term extracorporeal respiratory support: Initial results from a pilot study using a goat model. 69th American Society for Internal Artificial Organ Annual Conference. San Francisco, CA, USA, June 14-17, 2023.
2. Yuya Nobori, Masaki Anraku, Yuqi Zhou, Takayuki Gyoten, Keisuke Goda, Minoru Ono, Jun Nakajima： ”Detection and classification of circulating platelet aggregates in patients with left ventricular assist devices by real-time image-based single-cell profiling” 68th annual conference of American Society for Artificial Internal Organs (ASAIO2023). San Francisco, USA. Saturday, June 17, 2023.
3. 安樂真樹: 特別企画 2 SDGs：産業と技術革新の基盤を作ろう 産学連携・医工連携―アイデアを医療に生かす― 長期呼吸補助目的の膜型人工肺の開発. 第 40 回日本呼吸器外科学会総会.　新潟,　7 月 13 日,　2023.
4. 安樂真樹（座長:）　肺移植-臨床-1. 第 40 回日本呼吸器外科学会総会.　新潟,　7 月 13 日,　2023.
5. 土屋武弘, 藤森　賢, 鈴木聡一郎, 菊永晋一郎, 新妻　徹, 大塚礼央, 濱田洋輔, 三原秀誠: 空洞形成を伴う肺腺癌手術症例における予後因子としての空洞壁厚の検討. 第 40 回日本呼吸器外科学会総会.　新潟,　7 月 13 日,　2023.
6. 登　祐哉, 土屋武弘, 安樂真樹：左心膜全欠損と気管支原生嚢胞を伴った左肺外分画症の一例.　第 40 回日本呼吸器外科学会総会.　新潟,　7 月 13 日,　2023.
7. Anraku M. Artificial lung for long-term extracorporeal respiratory supports: Lessons learned from a pilot study using a goat model.17th European Mechanical Circulatory Support Summit. Paris, France, September 3-6, 2023.
8. 安樂真樹（座長）:　シンポジウム呼吸器 1　呼吸器再生研究の最前線（人工臓器・リサーチ.）第 75 回日本胸部外科学会総会.　横浜, 10 月 6 日, 2023
9. 安樂真樹（座長）:呼吸器 2　肺移植. 第 76 回日本胸部外科学会. 仙台,　10 月 19 日,　2023
10. 土屋武弘, 登　祐哉, 安樂真樹: 肺癌術後せん妄における術前 DASC―21 スクリーニングの有用性. 第 27 回板橋区医師会医学会.　東京, 12 月 2 日, 2023
11. 登　祐哉, 土屋武弘, 河田光弘, 眞野暁子, 小金丸博, 山本寛, 武井卓, 新井冨生, 安樂真樹. ECMO での治療後に再燃した COVID-19 肺炎による重症呼吸不全の 1 例. 第 27 回板橋区医師会医学会.　東京, 12 月 2 日, 2023

整形・脊椎外科

＜雑誌論文＞

1. Kaneko T, Matsudaira K, Hayakawa K, Tokimura F, Miyazaki T. Malnutrition and Its Association with the Mortality of Patients with Femoral Intertrochanteric Fractures: A Retrospective Analysis of Japanese Patients *Open Journal of Orthopedics* Vol.14 No.1, January 22, 2024. doi: 10.4236/ojo.2024.141003
2. Kaneko T, Matsudaira K, Hayakawa K, Tokimura F, Miyazaki T. Clinical and safety outcomes of simultaneous bilateral total knee arthroplasty for Japanese octogenarian patients: a retrospective analysis. ***Eur J Orthop Surg Traumatol.*** 2024 Jan;34(1):155-160. doi: 10.1007/s00590-023-03634-7. Epub 2023 Jun 28.PMID: 37378735
3. Kaneko T, Nakamura S, Hayakawa K, Tokimura F, Miyazaki T. Clinical and radiological outcomes of total hip arthroplasty in octogenarian patients using a three-dimensional porous titanium cup: a retrospective analysis in Japanese patients. ***Eur J Orthop Surg Traumatol.*** 2023 Aug;33(6):2361-2367. doi: 10.1007/s00590-022-03439-0. Online ahead of print. PMID: 36414875
4. Kaneko T, Nakamura S, Hayakawa K, Tokimura F, Miyazaki T. Preoperative incidence and risk factors of deep vein thrombosis in Japanese patients undergoing total hip arthroplasty. ***Eur J Orthop Surg Traumatol***. 2023 Mar 5. doi: 10.1007/s00590-023-03508-y. Online ahead of print. PMID: 36871251
5. Yoshiki Shimokawa, Yuki Ishikawa, Teiki Okawa, Mana Higashihara, Fumiaki Tokimura, Tsuyoshi Miyazaki, Kentaro Hayakawa "A case of subacute combined degeneration of the spinal cord diagnosed with difficulty due to a history of treatment for pyogenic spondylitis. ***Clin Case Rep*** 2023 Apr 7;11(4):e7180.
6. Masahiko Sumitani, Atsushi Kimura, Takao Mochizuki, Toru Akiyama, Baasanjav Uranbileg, Takuya Takahashi, Takashi Hirai, Kentaro Hayakawa, Hirotaka Chikuda, Makoto Kurano "Cerebrospinal Fluid Lysophosphatidylcholine Species for Distinguishing Narrowing of the Lumbar Spine" World Neurosurg. 2024 Mar:183:e571-e575
7. Kawata M, McClatchy DB, Diedrich JK, Olmer M, Johnson KA, Yates JR, Lotz MK. Mocetinostat activates Krüppel-like factor 4 and protects against tissue destruction and inflammation in osteoarthritis. ***JCI Insight.*** 2023 Sep 8;8(17):e170513.

＜学会・研究会発表＞

1. Taizo Kaneko; Shinya Nakamura; Kentaro Hayakawa; Fumiaki Tokimura; Tsuyoshi Miyazaki. Preoperative incidence and risk factor of deep vein thrombosis in Japanese patients undergoing total hip arthroplasty. 24th EFORT Congress, Vienna, 24-26 May.2023.
2. Taizo Kaneko; Hiroshi Hamaji; Kentaro Hayakawa; Fumiaki Tokimura; Tsuyoshi Miyazaki. Clinical and radiological outcomes of total hip arthroplasty in octogenarian patients using a three-dimensional porous titanium cup. IAGG Asia/Oceania Reginal Congress 2023, Yokohama, 12-14 June.2023
3. Manabu Kawata, Merissa Olmer, Kristen A. Johnson, and Martin K. Lotz. Pharmacological modulation of Krüppel-like Factor 4 reduces the severity of experimental osteoarthritis via tissue protection and regeneration. ACR Convergence 2023 San Diego, USA. 2023/11/10-15.
4. 早川謙太郎、蔵野信、矢富裕、秋山佳之、住谷昌彦、平井高志、高橋拓也、緒方徹、田中栄、筑田博隆. 「ヒト脳脊髄液中のリゾホスファチジルコリン濃度測定は、神経障害性疼痛の原因診断に有用である」 第96回日本整形外科学会学術集会 2023/5/11-14
5. 河田 学, Lotz Martin. 「MocetinostatはKLF4遺伝子の発現を上昇させ、軟骨分化および抗変性・炎症作用を有する、変形性関節症の新規治療薬剤候補である」 第38回日本整形外科学会基礎学術集会　茨城県つくば市, 2023/10/19-20.
6. 河田 学, Lotz Martin. 「MocetinostatはKLF4遺伝子の発現を上昇させ、軟骨分化および抗変性・炎症作用を有する、変形性関節症の新規治療薬剤候補である」第36回日本軟骨代謝学会大阪府豊中市, 2024/2/16-17.

7. 大庭 雄太郎, 小口 史彦, 渡邉 健一, 砂山 智未, 小林 洋介, 唐司 寿一, 安部 博昭, 東川 晶郎：後壁損傷を伴った骨粗鬆性脊椎椎体骨折に対する Vertebral Body Stenting (VBS) 単独による経皮的椎体形成術の治療成績. 第 30 回記念日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会 2023/9/16　東京コンファレンスシティ
8. 大庭 雄太郎, 小口 史彦, 熊埜御堂 雄大, 山口 泰輝, 東川 晶郎, 渡邉 健一：ベルトロッチ症候群における椎間孔外の神経根圧迫が及ぼす影響. 第 30 回記念日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会 2023/9/16　東京コンファレンスシティ

＜講師等院外活動（講演・研究会発表・放送・新聞等）＞

1. 金子泰三：関節が痛い.com　　https://www.kansetsu-itai.com/doctor/doc465.php
2. 松平恭子、早川謙太郎:「胸椎化膿性脊椎炎の治癒後に症状が再燃した 1 例」　第 73 回 SMC サロン（脊椎脊髄外科談話会）(2023/6/2)
3. 松平恭子、早川謙太郎:「胸椎椎体 scalloping を生じた腫瘤性病変の 1 例」　第 3 回 Johoku Spine Surgery update Seminar　(2023/9/6)
4. 大庭雄太郎, 藤本陽, 橘亮太, 大坪研介, 滝川一晴 膝関節皮下骨性腫瘤を主訴とした偽性偽性副甲状腺機能低下症の 1 例 第 25 回静岡県骨軟骨代謝・骨粗鬆症研究会 2024/2/9 静岡パルシェ

＜その他（表彰・助成など）＞

1. 河田 学: The Emerging Investigator Excellence Award, ACR Convergence 2023. San Diego, USA. 2023/11/10-15.
2. 河田 学: 日本学術振興会科学研究費　2023-2024 年度　研究活度スタート支援　転写因子 KLF4 に依拠した、変形性関節症の新規治療候補薬剤の網羅的探索および機能解析
3. 金子泰三：第 35 回村上元孝記念研究奨励賞 優秀論文賞

皮膚科

＜総説＞

1. 種井良二. 高齢者の皮膚症状～デルマトポローシス（という概念）をどう考えるか？～. 皮膚病診療 2023, 45(増刊号) 15-20.

＜講師等院外活動(講演・放送等)＞

1. 種井良二. シンポジウム 28 高齢化と皮膚科　高齢者にみられる肌の変化と皮膚疾患の特徴. 第 39 回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会. 札幌, 6 月 18 日, 2023.
2. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎における診断と治療. Tokyo AD expert Webinar from 文京 4 大学. 東京, 5 月 24 日, 2023.
3. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎における診断と治療. 高齢者アトピー性皮膚炎治療カンファレンス. 東京, 6 月 21 日, 2023.
4. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療. 高齢者 AD 治療 UP TO DATE. 大阪, 7 月 8 日, 2023.
5. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎における診断と治療. 城北地区炎症性皮膚疾患治療 Special Lecture. 東京, 7 月 13 日, 2023.
6. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. 第 4 回長野市アトピー性皮膚炎ハイブリッド講演会. 長野, 9 月 26 日, 2023.
7. 種井良二. 「高齢者の皮膚を守る痒みの治療アトピー性皮膚炎の診断と治療」～アトピー性皮膚炎と乾癬を中心に～、高齢者の免疫疾患を考える. 東京, 10 月 5 日, 2023.
8. 種井良二. 高齢者皮膚疾患の診断と治療. Meet the Specialist in Tokyo. 東京, 10 月 12 日, 2023.
9. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. 高齢者 AD 治療 UP TO DATE in 奈良. 奈良, 10 月 21 日, 2023.
10. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. 3 領域合同 Type2 炎症への治療戦略. 東京, 11 月 9 日, 2023.
11. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. 皮膚疾患治療 Seminar. 名古屋, 11 月 30 日, 2023.
12. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. Derma WEB LIVE. 全国講演会, 12 月 1 日, 2023.
13. 種井良二. 高齢者アトピー性皮膚炎の診断と治療、結節性痒疹に対するデュピルマブへの期待. 第 7 回　彩たまでるま. 浦和, 1 月 21 日, 2024.
14. 種井良二. アトピー性皮膚炎と結節性痒疹から考える、高齢者の湿疹・皮膚炎と痒疹の診断と治療. 神奈川県臨床皮膚研究会. 川崎, 11 月 9 日, 2023.

眼科

＜雑誌論文＞

1. 寺島まり絵，池上靖子，寺田裕紀子，山本裕樹，福田祥子，高尾博子，野田拓也，沼賀二郎：乳癌治療薬タモキシフェン内服後に発症し自然閉鎖した黄斑円孔の一例　臨床眼科　77（4）：499-504，2023.
2. 岡野 夏海，山本裕樹，池上 靖子，福田 祥子，高尾 博子，沼賀 二郎：網膜細動脈瘤破裂に伴う黄斑円孔が自然閉鎖した1症例　臨床眼科 77(8)：1061-1066，2023.
3. 一迫 星来，山本 裕樹，半田 忠良，高尾 博子，大島 博美，善本 三和子，池上 靖子，沼賀 二郎：傾斜乳頭症候群に合併した黄斑円孔の1例　臨床眼科 78(4)：473-478，2024.
4. Ikegami Y, Shiraya T, Araki F, Ueta T, Toyama T, Kato S. Navigated direct photocoagulation with a 30-ms short-pulse laser for treating microaneurysms in diabetic macular edema exhibits a high closure rate. Sci Rep. 2023 Apr 13;13(1):6092. doi: 10.1038/s41598-023-33260-6

＜総説＞

1. 善本 三和子：糖尿病網膜症．眼科分野監修：沖波聡．今日の臨床サポート（第6版）．永井良三，木村健二郎，上村直実，名郷直樹，今井靖，伊藤浩 編．エルゼビア・ジャパンhttps://clinicalsup.jp/jpoc/
2. 善本 三和子：糖尿病黄斑浮腫．Medical Note Expert（医師向け）疾患解説記事 監修 2023.7 https://medicalnote.jp/expert/diseases/fc0f5abe-6422-43ca-867b-7e596be2bb68
3. 善本 三和子：糖尿病網膜症．メディカルノート（一般向け）疾患解説記事 監修 2023.11 https://medicalnote.jp/diseases/%E7%B3%96%E5%B0%BF%E7%97%85%E7%B6%B2%E8%86%9C%E7%97%87

＜学会・研究会発表＞

1. 寺島まり絵，池上靖子，山本裕樹，高尾博子，高梨成彦，小林聖未，久保かなえ，沼賀二郎：巨細胞性動脈炎と特発性直回ヘルニアを併発した視神経症の一例：第127回　日本眼科学会総会．東京，4月6日，2023，
2. 一迫 星来，山本 裕樹，半田 忠良，高尾 博子，大島 博美，善本 三和子，池上 靖子，沼賀 二郎：傾斜乳頭症候群に合併した黄斑円孔の1例．第77回　日本臨床眼科学会．東京，10月6日，2023.
3. 一迫 星来，池上 靖子，外山 琢，高尾 博子，大島 博美，中川 美智子，岡野 夏海，福尾 美和子，山本 裕樹，太田 良枝，善本 三和子，沼賀 二郎：網膜静脈閉塞症に伴う黄斑浮腫に対する抗VEGF薬硝子体内注射後の前房フレア値：第62回　網膜硝子体学会．横浜，11月25日，2023.
4. 岡野 夏海，池上 靖子，寺田 裕紀子，山本 裕樹，青木 彩，高尾 博子，福田 祥子，野田 拓也，松浦 智之，中川 美知子，寺島 まり絵，沼賀二郎：COVID-19ワクチン接種直後に網膜中心動静脈閉塞症を発症した1例．第27回　板橋区医師会学会，東京，12月2日，2023
5. 竹中　美帆：眼症状を初発とし神経・心臓サルコイドーシスが疑われた1例　東京大学眼科学教室　クリニカルカンファランス．東京，2月14日，2024

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 山本　裕樹：初めての硝子体手術．　第 2 回バビースモの有用性 WEB セミナー―安全性と有効性の面から―．東京，　6 月 14 日，2023.
2. 善本　三和子：糖尿病網膜症 diabetic retinopathy (DR)・糖尿病黄斑浮腫 diabetic macular edema (DME) －全身状態を考慮した DME 治療．中外製薬社内勉強会，東京，7 月 21 日，2023.

3. 大島　博美：東京都健康長寿医療センターの現状と病診連携. 第 9 回　網膜疾患を考える会, 東京, 9 月 6 日, 2023.
4. 善本　三和子：眼科シリーズ「白内障」.　思いやりの心でいきいき健康ライフ！　山形放送（ラジオ放送）全 5 回

耳鼻咽喉科

＜原著論文＞

1. Watanabe H, Ito T, Aoki N, Bai J, Honda K, Kawashima Y, Fujikawa T, Ikeda T, Tsutsumi T:Quantitative analysis and correlative evaluation of video-oculography, micro-computed tomography, and histopathology in Pendrin-null mice. Neurobiology of Disease 2023; 183: 106194.

＜総説・著書＞

1. 鈴木康弘：エビデンス各論　生薬　上品（上薬）　オウギ. JOHNS　39(6), 594－595, 2023.
2. 鈴木康弘：耳鼻咽喉科領域の漢方治療－代表的な 3 疾患に用いられる漢方薬－. 耳臨　117(2), 198-199, 2024.
3. 鈴木康弘：症候・病態編　「鼻出血」. 内科診断学第 4 版　医学書院：387-392, 2024.

＜学会・研究会発表＞

1. 川島慶之、渡邊浩基、本田圭司、伊藤卓、藤川太郎、西尾綾子、竹田貴策、丸山絢子、堤剛：Pretragal Superficial Musculoaponeurotic System Fascia を用いた内視鏡下 Fat-Plug Myringoplasty.
   第 33 回日本耳科学会総会・学術講演会　群馬, 2023 年 11 月.

＜講演会＞

1. 鈴木康弘：一般講演座長、パネリスト：One Airway One Disease Seminar　東京, 2023 年 7 月 14 日.
2. 鈴木康弘：特別講演１　「アレルギー疾患治療について」：第 33 回静岡県東部耳鼻科集談会　静岡, 2024 年 2 月 3 日.
3. 鈴木康弘：「高齢者の難聴～耳の聞こえが気になり始めたら～」：府中市認知症予防に関わる市民講演会　東京, 2024 年 2 月 9 日.
4. 鈴木康弘：「高齢者における外来診療について～アレルギー性疾患治療を中心に～」：町田市耳鼻咽喉科医会学術講演会　東京, 2024 年 2 月 13 日.
5. 鈴木康弘：講演Ⅰ　座長：Allergic Night 20th　東京, 2024 年 2 月 14 日.

＜研究助成金＞

1. 渡邊浩基：科学研究費助成事業　若手研究 C, 20K18305, Pendred 症候群モデルマウスにおける平衡障害の評価.

歯科口腔外科

1　学会発表

(1) 海外

1. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Yuki Ohara, Yoshiko Motohashi, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Association between Functional Assessment Staging of Alzheimer's Disease and oral hygiene management issues for older adults with Alzheimer's disease. 2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
2. Keiko Motokawa, Yurie Mikami, Yasuaki Wada, Tabata Fuka, Misato Hayakawa, Maki Shirobe, Lena Kalantar, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Hiroyuki Sasai, Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata. Albumin redox state as a biomarker for protein intake among community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging (Itabashi-LSA). 2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
3. Kazuhito Miura, Masanori Iwasaki, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Misato Hayakawa, Yurie Mikami, Lena Kalantar, Yoshiko Motohashi, Kentaro Igarashi, Yuki Ohara, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Association between masseter muscle mass and regional skeletal muscle mass in older adults requiring long-term care.2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
4. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Nutritional status and feasibility of swallowing function evaluation according to the severity of Alzheimer's disease. PENSA2023. 2023.10.20-22. Taiwan.
5. Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Masanori Iwasaki, Hirohiko Hirano. Effect of home-visit-based nutritional support by registered dietitian on the dietary habits of home-care residents. PENSA2023. 2023.10.20-22. Taiwan.
6. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Predictive factors for swallowing function decline in older adults with Alzheimer's disease: a 1-year longitudinal study. ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
7. Motokawa Keiko, Iwasaki Masanori, Shirobe Maki, Sakata Yasuyuki, Kato Mana, Obuchi Shuichi, Kawai Hisashi, Hirano Hirohiko. Association of Serum 25(OH)D Levels with Oral Function in Community-Dwelling Older Adults. ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
8. Hirohiko Hirano, Iwasaki Masanori, Ayako Edahiro, Yasuhiro Kugimiya, Maki Shirobe. A study on diagnostic algorithm for Oral Hypofunction based on the JSG diagnostic criteria (JSG: Japanese Society of Gerontology). ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
9. Miyuki MORI, Mika SAITO, Hirohiko HIRANO, Analysis of Risk Factors for Post-Extraction Bleeding in Older People receiving Anticoagulation Therapy. 023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.

（シンポジウムなど）

1. Hirohiko Hirano. Trends in Oral Frailty and its Association with Healthy Longevity: Symposium 11 Oral frailty: Assessment and interventions.2023.6.12.Yokohama.

(2) （国内）

1. 岡村毅,多賀努,稲垣宏樹,宮前史子,宇良千秋,杉山美香,枝広あや子,笹井浩行,平野浩彦、栗田主一. 認知症であることを地域の人に知らせるか一般論としてはどうか,そして自分事としてはどうか.日本認知症ケア学会第24回学術大会.2023.6.3-4.京都
2. 白部麻樹、枝広あや子、本川佳子、森下志穂、本橋佳子、岩崎正則、渡邊裕、平野浩彦. アルツハイマー型認知症重症度と口腔機能評価実施可否に関する検討. 日本老年歯科医学会第34回学術大会. 2023.6.16-18. 横浜.
3. 本川佳子、三上友里江、早川美知、坂田穏行、加藤麻奈、白部麻樹、藤原佳典、河合恒、大渕修一、平野浩彦. 地域在住高齢者における食欲不振と栄養素等摂取量の関わり. 第65回日本老年医学会学術集会. 2023.6.16-18.横浜.
4. カランタル玲奈、本川佳子、早川美知、三上友里江、白部麻樹、枝広あや子、岡村毅、笹井浩行、平野浩彦、栗田主一. 地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態の関連の横断的検証：板橋健康長寿縦断研究. 第65回日本老年医学会学術集会. 2023.6.16-18.横浜.
5. 五十嵐憲太郎, 栗谷川輝, 目黒郁美, 鈴木到, 釘宮嘉浩, 石井智浩, 伊藤誠康, 有川量崇, 岩崎正則, 平野浩彦, 河相安彦静電容量型感圧センサーシートを用いた咬合力測定の信頼性および成人の基準値の検討予備的検討.日本老年歯科医学第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜

6. 松原ちあき、白部麻樹、枝広あや子、本川佳子、森下志穂、本橋佳子、岩崎正則、渡邊裕、平野浩彦．非経口栄養管理中の要介護高齢者に対する口腔衛生管理に関する検討．日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
7. 枝広あや子、白部麻樹、森下志穂、平野浩彦．病院歯科における認知症の人の歯科診療の実態調査．日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
8. 河合恒,江尻愛美,今村慶吾,伊藤久美子,藤原佳典,井原一成,平野浩彦,大渕修一.老研式活動能力指標のサブドメインの加齢変化パターン板橋お達者研究.第65回日本老年社会科学会大会2023.6.17-18.横浜
9. 中川紗百合，新井絵理，平良賢周，渡邊裕，三浦和仁，白部麻樹、 本川佳子，小原由紀，岩崎正則，平野浩彦，小野高裕，足立融，渡部隆夫，山崎裕.後期高齢者におけるオーラルフレイルと栄養関連指標に関する横断研究.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
10. 大沢啓，森美由紀，清水梓，齊藤美香，大鶴洋，平野浩彦.重症認知症高齢者の上顎歯肉に医原性リンパ増殖性疾患を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
11. 齊藤美香，大沢啓，清水梓，森美由紀，平野浩彦，大鶴洋，織田麻琴.超高齢口腔癌患者の治療経験.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
12. 解良武士，大須賀洋祐，河合恒，江尻愛美，伊藤久美子，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一新しいサルコペニア質問紙の開発お達者健診研究.日本老年医学会第65回学術大会.2023.6.17-18.横浜
13. 江尻愛美，河合恒，荒木厚，藤原佳典，平野浩彦，小山照幸，杉江正光，小島基永，鈴木隆雄，大渕修一.身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連横断研究.日本老年医学会第65回学術大会.2023.6.17-18.横浜
14. 森美由紀，清水梓，大沢啓，斉藤美香，大鶴洋，平野浩彦.味覚障害を契機に転移性脳腫瘍を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会2023.6.17-18.横浜
15. 五味達之祐、北湯口純、奥山健太、鎌田真光、井上茂、平野浩彦、武藤芳照、上岡洋晴.中山間地域在住高齢者の近隣食環境と食品摂取多様性との関連：横断研究.第70回日本栄養改善学会学術総会.2023.9.1-3.名古屋
16. 白部麻樹、渡邊裕、平野浩彦．今日から始めるオーラルフレイル予防．第10回日本予防理学療法学会学術大会．2023.10.28-29.函館.
17. 五味達之祐、本川佳子、白部麻樹、岩崎正則、枝広あや子、大渕修一、藤原佳典、荒井秀典、栗田主一、平野浩彦.会食を行う通いの場の参加者減少に関連する要因：ソーシャルマーケティングの視点.第82回日本公衆衛生学会総会.2023.10.31-11.2.つくば
18. 村上正治,釘宮嘉浩,中村純也,岩崎正則,本川佳子,枝広あや子,白部麻樹、河合恒,大渕修一,藤原佳典,井原一成,平野浩彦．咀嚼機能の客観評価と主観評価の乖離と将来のサルコペニア発症リスクとの関連性について-お達者研究-．第10回日本サルコペニア・フレイル学会．2023.11.4-5.御茶ノ水.
19. 白部麻樹，枝広あや子，本川佳子，森下志穂，岩崎正則，渡邊裕，平野浩彦．アルツハイマー病の重症度に応じた嚥下機能評価の実施可否と栄養状態．日本口腔検査学会第16回学術大会．2023.11.4-5.水道橋.
20. 釘宮嘉浩，岩崎正則，白部麻樹、本川佳子，枝広あや子，渡邊裕，五十嵐憲太郎，阿部巧，横山友里，北村明彦，村山洋史，平野浩彦．地域在住高齢者における色変わりガムの測定値の分布．日本口腔検査学会第16回学術大会．2023.11.4-5.水道橋.
21. 江口佳奈、本川佳子、岩崎正則、白部麻樹、五味達之祐、カランタル玲奈、早川美知、枝広あや子、稲垣宏樹、笹井浩行、栗田主一、平野浩彦．地域在住高齢者における日常の食生活の咀嚼行動と年齢の関連の予備的研究．第27回日本病態栄養学会年次学術集会．2024.1.26-28.京都.
22. 大沢啓，森美由紀，清水梓，齊藤美香，大鶴洋，平野浩彦.重症認知症高齢者の上顎歯肉に医原性リンパ増殖性疾患を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
23. 齊藤美香，大沢啓，清水梓，森美由紀，平野浩彦，大鶴洋，織田麻琴.超高齢口腔癌患者の治療経験.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
24. 森美由紀,斉藤美香,大鶴洋,平野浩彦．持続する出血に対し腫瘍血管塞栓術を施行した終末期舌癌患者の１例.第68回公益社団法人日本口腔外科学会総会・学術大会.2023.11.10-12.大阪
25. 大沢啓,森美由紀,佐藤はるか,齊藤美香,大鶴洋,平野浩彦．重症認知症高齢者の口腔領域に医原性リンパ増殖性疾患を発見した一例.第27回板橋区医師会医学会.2023.12.2板橋区
26. 森美由紀，清水梓，大沢啓，斉藤美香，大鶴洋，平野浩彦.味覚障害を契機に転移性脳腫瘍を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会2023.6.17-18.横浜
27. 齊藤美香、佐藤はるか、大沢啓、森美由紀、平野浩彦、中山行夫．骨吸収抑制薬関連顎骨壊死（ARONJ）に対し当院連携医と併診した1例．第27回板橋区医師会医学会.2023.12.2板橋区

2 誌上発表

(1) 原著

1. Shirobe M, Edahiro A, Motokawa K, Morishita S, Ohara Y, Motohashi Y, Iwasaki M, Watanabe Y, Hirano H. Association between Dementia Severity and Oral Hygiene Management Issues in Older Adults with Alzheimer's Disease: A Cross-Sectional Study. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2023; 20(5):3841. (原著・査読あり) (IF: 4.614)
2. Nagatani M, Tanaka T, Son BK, Kawamura J, Tagomori J, Hirano H, Shirobe M, Iijima K. Oral frailty as a risk factor for mild cognitive impairment in community-dwelling older adults: Kashiwa study. Exp Gerontol. 2023 Feb;172:112075. (原著・査読あり) (IF: 4.253)
3. Nishimoto M, Tanaka T, Hirano H, Watanabe Y, Ohara Y, Shirobe M, Iijima K. Severe Periodontitis Increases the Risk of Oral Frailty: A Six-Year Follow-Up Study from Kashiwa Cohort Study. Geriatrics (Basel). 2023 Feb 13;8(1):25. (原著・査読あり) (IF: 3.737)
4. Takeda M, Watanabe Y, Taira K, Miura K, Ohara Y, Iwasaki M, Ito K, Nakajima J, Iwasa Y, Itoda M, Nishi Y, Watanabe Y, Kishima M, Hirano H, Shirobe M, Minakuchi S, Yoshida M, Yamazaki Y. Association between Death or Hospitalization and Observable Variables of Eating and Swallowing Function among Elderly Residents in Long-Term Care Facilities: A Multicenter Prospective Cohort Study. Healthcare 2023, 11, 1827. (原著・査読あり) (IF : 3.160)
5. Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Shirobe M, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K. Oral frailty five-item checklist to predict adverse health outcomes in community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Sep;23(9):651-659. doi: 10.1111/ggi.14634. (原著・査読あり) (IF : 3.387)
6. Tsuyoshi Okamura, Tsutomu Taga, Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae, Chiaki Ura, Mika Sugiyama, Ayako Edahiro, Maki Shirobe, Keiko Motokawa, Narumi Kojima, Yosuke Osuka, Masanori Iwasaki, Hiroyuki Sasai, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata.Barrier to sharing a dementia diagnosis with neighbors in Tokyo. Geriatr Gerontol Int. 2023 Oct;23(10):761-763. doi: 10.1111/ggi.14662. (原著・査読あり) (IF : 3.387)
7. Karl G H Parisius, Merel C Verhoeff, Frank Lobbezoo, Limor Avivi-Arber, Joke Duyck, Hirohiko Hirano, Katsuya Iijima, Barbara Janssens, Anastassia Kossioni, Chia-Shu Lin, Gerald McKenna, Frauke Müller, Martin Schimmel, Anita Visser, Yutaka Watanabe, Robbert J J Gobbens.Towards an operational definition of oral frailty: A e-Delphi study. Arch Gerontol Geriatr. 2023 Sep 6:117:105181. (原著・査読あり) (IF : 1.2)
8. Takeshi Kera, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi.Respiratory sarcopenia is a predictor of all-cause mortality in community-dwelling older adults-The Otassha Study. J Cachexia Sarcopenia Muscle. 2023 Aug;14(4):1894-1899. doi: 10.1002/jcsm.13266. (原著・査読あり) (IF:8.9)
9. Sachiko Yamazaki, Chiaki Ura, Hiroki Inagaki, Mika Sugiyama, Fumiko Miyamae, Ayako Edahiro, Kae Ito, Masanori Iwasaki, Hiroyuki Sasai, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata.Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people. Psychogeriatrics. 2023 Nov 6.doi: 10.1111/psyg.13042. (原著・査読あり) (IF:1.67)
10. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi.Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults: the Otassha study. Front Public Health. 2023 Aug 22:11:1248462.doi: 10.3389/fpubh.2023.1248462. (原著・査読あり) (IF:5.2)
11. Takeshi Kera, Yosuke Osuka, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi.Development and validation of a rapid sarcopenia screening questionnaire: The Otassha study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov 14. doi: 10.1111/ggi.14730. (原著・査読あり) (IF : 3.387)
12. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi.Impact of combinations of subscale declines in higher-level functional capacity on 8-year all-cause mortality among communty-dwelling older Japanese adults. Arch Gerontol Geriatr. 2023 Nov:114:105096. doi: 10.1016/j.archger.2023.105096. (原著・査読あり) (IF:1.2)
13. Masaharu Murakami, Hirohiko Hirano, Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Keiko Motokawa.Development of a multiple masticatory function model based on the evaluation of sarcopenia: A cross-sectional survey of the Otassha study. Arch Oral Biol. 2023 Nov:155:105803.doi: 10.1016/j.archoralbio.2023.105803.

（原著・査読あり）（IF:2.64）

14. Narumi Kojima , Miji Kim , Kyoko Saito , Yuko Yoshida , Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi , Hiroyuki Shimada , Takao Suzuki , Hajime Iwasa , Hunkyung Kim . Effects of Daily Consumption of Soy Products on Basic/Instrumental Activities of Daily Living in Community-Dwelling Japanese Women Aged 75 Years and Older: A 4-Year Cohort Study. Womens Health Rep (New Rochelle). 2023 May 15;4(1):232-240. doi: 10.1089/whr.2022.0076. （原著・査読あり）（IF:1.3）
15. 本川 佳子, 三上 友里江, 早川 美知, 白部 麻樹, 柄澤 紀, 長谷川 隆則, 河合 恒, 大渕 修一, 平野 浩彦. 地域在住高齢者の肉類摂取量とフレイル関連因子に関する横断的検討. 日本サルコペニア・フレイル学会雑誌(2433-1805)7巻1号 Page112-115(2023.06).
16. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K,Hayakawa M, Miura K, Kalantar L, Edahiro A, Kawai H, Fujiwara Y, Ihara K, Watanabe Y, Obuchi S, Hirano H. Validation of self-reported articulatory oral motor skill against objectively measured repetitive articulatory rate in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. Geriatrics & Gerontology International. 23(10), 729-735, 2023（原著・査読あり）（IF: 3.387）
17. Hatanaka S, Osuka S, Kojima N, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Relationship between phase angle and lower-extremity function in older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Nutrition. 024 Mar;119:112289.（原著・査読あり）（IF: 4.4）
18. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is non-inferior to the Kihon Checklist in screening frailty among independent older adults aged 75 years and older: The Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatrics & Gerontology International. 2024 Mar;24 Suppl 1:176-181.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
19. Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. A neighbour to consult with is important in dementia- friendly communities: Associated factors of self-efficacy allowing older adults to continue living alone in community settings. Psychogeriatrics. In press, 2023（原著・査読あり）（IF: 2）
20. Kawamura J, Tanaka T, Kanno S, Osawa K, Okabayashi K, Hirano H, Shirobe M, Nagatani M, Son BK, Lyu W, Iijima K. Relationship between a gum-chewing routine and oral, physical, and cognitive functions of community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2024 Jan;24(1):68-74.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
21. Daimaru K, Osuka Y, Kojima N, Mizukami K, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Associations of polypharmacy with frailty severity and each frailty phenotype in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatr Gerontol Int. 2024 Mar;24 Suppl 1:196-201.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
22. Takahashi J, Kawai H, Ejiri M, Fujiwara Y, Hirano H, Sasai H, Obuchi S. Predicting the incidence of mild cognitive impairment with a computer-based cognitive assessment tool in community-dwelling older adults: The Otassha study. PLoS One. 2024 Jan 25;19(1):e0297433.（原著・査読あり）（IF: 3.7）
23. Kawai H, Ejiri M, Imamura K, Ito K, Fujiwara Y, Hirano H, Ihara K, Obuchi S. Three-year trajectories of social networks, face-to-face interactions, and non-face-to-face interactions among community-dwelling older adults in Japan during the COVID-19 pandemic: Otassha study. Maturitas. 2024 Feb 12;183:107943.（原著・査読あり）（IF: 4.9）
24. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-Item Checklist. Geriatr Gerontol Int. 2024 Feb 23.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
25. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Sex-specific factors associated with acceptance of smartwatches among urban older adults: the Itabashi longitudinal study on aging. Front Public Health. 2024 Feb 23;12:1261275.（原著・査読あり）（IF: 5.2）
26. Hashimoto K, Takeuchi T, Ihara K, Obuchi S, Kawai H, Hirano H, Fujiwara Y, Hunkyung K, Watanabe Y, Hashizume M. Association Between Ego-Resilience and Social Isolation Among Urban Older People. Gerontol Geriatr Med. 2024 Mar 13;10:23337214241238069.（原著・査読あり）（IF: 2.7）

(2) 総説

なし

（報告書）

1. 平野浩彦（分担）,他.令和５年度厚生労働省老人保健健康増進等事業(老人保健健康事業推進費等補助金).通所事業所等における口腔・栄養管理サービスに関する調査研究事業報告書.2024年３月.
2. 平野浩彦（代表）,他.令和５年度厚生労働省老人保健健康増進等事業(老人保健健康事業推進費等補助金).認知症患者の口腔管理体制に関する調査研究事業報告書.2024年３月.
3. 平野浩彦（代表）,他.令和５年度厚生労働省老人保健健康増進等事業(老人保健健康事業推進費等補助金).認知症の人の口腔機能を地域で守っていくための事例集.2024年３月.

３　著書等

＜講師等院内活動＞

1.　平野浩彦　Oral Frailty 韓国厚労省院内レクチャー　2022年11月24日
2.　齊藤美香：高齢者の口腔疾患-顎骨壊死について-　クルズス、2023年6月27日

＜講師等院外活動＞

（大学講義）

1.　平野浩彦　高齢者歯科　日本大学松戸歯学部講義　2022年6月21日　松戸
2.　平野浩彦　高齢者歯科（要介護の原因疾患、高齢者の口腔管理、栄養管理）東京歯科大学講義　2022年7月7日　東京

(国内)

1. 齊藤美香：高齢者の口腔疾患について　板橋看護専門学校講義、2023年5月28日

麻酔科

＜雑誌論文＞

1. 小松郷子： 準緊急手術前のフレイル・サルコペニア評価 麻酔 72(9)：819-826, 2023.

＜学会・研究会発表＞

1. 秋山絢子、内田博: 硬膜外カテーテルが内視鏡的局所麻酔薬の気管内散布に有用だった 2 症例
   日本ペインクリニック学会第 57 回学術集会 佐賀 7 月 15 日 2023.
2. 清水啓介、小松郷子、秋山絢子、久保田涼、縄田瑞木、内田博： DNAR (Do-Not-Attempt-Resuscitation) の患者が全身麻酔・区域麻酔を受ける際の、DNAR 指示の自動的執行停止に関する検討
   日本麻酔科学会第 70 回学術集会 神戸 6 月 1 日～6 月 3 日 2023.
3. 小松郷子、縄田瑞木、久保田涼： 術前および術後 1 年目におけるフレイル評価の有用性の検討
   第 36 回日本老年麻酔学会 佐賀 2 月 16 日 2024.
4. 小松郷子： 高齢者の健康管理の課題と現状
   第 36 回日本老年麻酔学会認定医制度講演 佐賀 2 月 16 日 2024.

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 小松郷子： 2023 年度第 1 回東大病院 ACLS コース, 東京, 8 月 5 日, 2023
2. 小松郷子： 2023 年度第 2 回東大病院 ACLS コース, 東京, 10 月 22 日, 2023
3. 小松郷子： 2023 年度第 3 回東大病院 ACLS コース, 東京, 3 月 3 日, 2024
4. 小松郷子： 看護師特定行為研修(区分別科目)OSCE 外部評価者, 東京, 6 月 5 日, 2023
5. 小松郷子： ICLS 指導者講習会コースディレクター, 東京, 9 月 24 日, 2023

特定集中治療室

＜論文＞

1. **Mano A**, Murata T, Inui A, Kawata M, Kyo S. “Acute myocardial infarction due to left main trunk ostial stenosis occurring in the acute phase after aortic valve replacement.” Cureus 2023; Oct 22; 15(10):e47482.
2. **Mano A**, Murata T, Inui A, Kawata M, Kyo S. “Severe left ventricular failure unmanageable by Impella 5.0.” Cureus 2023; Oct 28; 15(10):e47882.
3. Konishi H, Nagasawa Y, Matsui H, **Mano A**, Saito E. “The use of high-dose oxycodone with midazolam for dyspnea due to end-stage heart failure in an older patient with renal insufficiency.” Nihon Ronen Igakkai Zasshi (Japanese) 2023;60(3):301-306.

＜学会発表＞

1. **眞野 暁子**: 第 27 回日本心不全学会学術集会 一般口演 25 補助循環/人工心臓 座長
2. 都楳 優、西郷 友香、笹原 みさと、羽根田 千恵、石川 峻、片岡 祐佳理、**眞野　暁子**: ICU 早期経腸栄養開始フローチャート. 第 51 会日本集中治療医学会学術集会 ポスター発表
3. **藤本 肇**、両角　愛、河田　光弘、**眞野　暁子**: 心肺停止となり血行再建と ECPELLA が功を奏するも、退院に多診療科・職種の協力を要した急性心筋梗塞の一例. 第 51 会日本集中治療医学会学術集会 ポスター発表

リハビリテーション科

＜単行本・報告書＞

1. 本田拓也，谷村厚子：作業療法士が適切と考える高齢者を対象とした急性期作業療法のアウトカム指標の予備的検討．作業療法 42 巻 3 号，pp299-308，2023.
2. 朴文華（編集協力）：クエスチョン・バンク　理学療法士・作業療法士　国家試験問題解説 2024　共通問題，メディックメディア，2024
3. 朴文華（編集協力）：クエスチョン・バンク　理学療法士　国家試験問題解説 2024　専門問題，メディックメディア，2024
4. 朴文華（編集協力）：クエスチョン・バンク　作業療法士　国家試験問題解説 2024　専門問題，メディックメディア，2024
5. 原寛美監修，田中春奈：高次脳機能障害ポケットマニュアル第 4 版．医歯薬出版，東京，pp71-77，pp128-134，2023.

＜学会・研究会発表＞

1. 金丸晶子，全秀剛，齊藤陽子，正田奈緒子，加藤貴行：認知・運動リハビリテーションプログラムが高齢者の軽度認知障害（MCI）に及ぼす効果．第 60 回日本リハビリテーション医学会学術集会．福岡，6 月 29 日，2023.
2. 加藤貴行，金丸晶子，河地由恵，本田拓也，牧田彩加，卯埜静奈，樋口和奏，清水彩，榎本洋司，植村ほのか，齊藤陽子，正田奈緒子：An intervention of cognitive training and physical exercise could improve or maintain cognitive functioning in MCI subjects．第 12 回 IAGG アジア/オセアニア国際老年学会議．横浜，6 月 13 日，2023.
3. 金丸晶子，江渕貴裕，齊藤陽子，正田奈緒子，寺澤泉，榎本洋司，全秀剛，加藤貴行：The Effect of a Team-Round Against Hospitalization-Associated Disability (TRAHAD) at an Acute-care Hospital on the Hospital-stay Length．第 12 回 IAGG アジア/オセアニア国際老年学会議．横浜，6 月 14 日，2023.
4. 榎本洋司，金丸晶子，藤本静香，寺澤泉：The relation between the discharge destination and the rehabilitation in our Integrated Community-Based Care Unit (ICBCU)．第 12 回 IAGG アジア/オセアニア国際老年学会議．横浜，6 月 14 日，2023.
5. 樋口和奏，金丸晶子，加藤貴行，本田拓也，卯埜静奈，清水彩，植村ほのか，榎本洋司，牧田彩加，寺澤泉：A rehabilitation program (REPCREC: Rehabilitation Program Using Physical and Cognitive Rec-Xercise) for the elderly with mild cognitive impairment (MCI)．第 12 回 IAGG アジア/オセアニア国際老年学会議．横浜，6 月 14 日，2023.
6. 加藤貴行，齊藤陽子，金丸晶子：軽度認知障害外来における頭部 MRI 微小出血所見を有する症例についての検討．第 65 回日本老年医学会学術集会．横浜，6 月 18 日，2023.
7. 河地由恵，牧田彩加，卯埜静奈，加藤貴行，金丸晶子：軽度認知障害を対象とした「高齢者いきいき外来」受診者の特徴．第 47 回日本高次脳機能障害学会学術大会．仙台，10 月 29 日，2023
8. 山本小諸里，小西海香，田中春奈，江口洋子，佐竹祐人，池上正斗，葛西有代，菊地尚久，三村悠，穴水幸子：2010 年以降の本邦の社会的出来事に関する遠隔記憶検査更新版の開発・時間勾配の検討．第 47 回日本高次脳機能障害学会学術大会．仙台，10 月 29 日，2023
9. 江渕貴裕，山口真依，寺澤泉，金丸晶子：経カテーテル大動脈弁留置術後，入院・外来での理学療法により身体機能が向上し，術後 6 年間在宅生活を継続出来ている症例．第 10 回日本予防理学療法学会学術大会．函館，10 月 29 日，2023
10. 鈴木圭，齊藤陽子，正田奈緒子，江渕貴裕，寺澤泉，金丸晶子：パーキンソン病を合併した首下がり症候群の運動療法とネックカラーによる装具療法の効果．板橋区医師会医学会．東京，12 月 2 日，2023
11. 加藤貴行，全秀剛，齊藤陽子，正田奈緒子，金丸晶子：気管切開が入院期間長期化に影響を与えた症例についての検討．第 7 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会．宮崎，11 月 5 日，2023
12. 木村和哉，本田拓也，寺澤泉，正田奈緒子，金丸晶子：理学療法やボツリヌス療法による多角的介入をもとに装具再作製を行い ADL が改善した生活期脳出血患者の一例．第 7 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会．宮崎，11 月 3 日，2023
13. 加藤貴行，河地由恵，卯埜静奈，牧田彩加，全秀剛，齊藤陽子，正田奈緒子，金丸晶子：脳アミロイドアンギオパチーを疑う MRI 脳微小出血所見を持つ症例の検討．第 42 回日本認知症学会学術集会．奈良，11 月 25 日，2023.

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 金丸晶子：治療論Ⅱリハビリテーション．東京都立板橋看護専門学校．東京，4 月 17・24 日・5 月 1 日，2023.
2. 鈴木圭：治療論Ⅱ理学療法．東京都立板橋看護専門学校．東京，5 月 10・17 日，2023.
3. 本田拓也：治療論Ⅱ作業療法．東京都立板橋看護専門学校．東京，5 月 16 日，2023.

4. 大村有希：治療論Ⅱ言語聴覚療法．東京都立板橋看護専門学校．東京，5 月 30 日，2023.
5. 正田奈緒子：100 歳までの健康長寿をめざし骨折予防を考える．シルバー大学講演会．東京，5 月 17 日，2023.
6. 正田奈緒子：基調講演フレイルに立ち向かう:フレイル予防の重要性とその実際．第 5 回アバンセ懇話会．東京，9 月 16 日,2023.
7. 本田拓也：令和 5 年度第 1 回臨床実習指導者講習会「職業倫理および連携論」．東京都作業療法士会．Web 開催，9 月 30 日，10 月 1 日，2023.
8. リハビリテーション科：「フレイル予防隊」．読売新聞．10 月 24 日，2023.
9. 本田拓也：令和 5 年度第 2 回臨床実習指導者講習会「作業療法参加型実習の理解」．東京都作業療法士会 Web 開催，11 月 18 日・19 日，2023.
10. 加藤貴行：脳神経疾患のリハビリテーション．新常識！？脳疾患の最新治療とリハビリテーション，第 168 回老年学・老年医学公開講座．板橋区立文化会館大ホール，東京，1 月 26 日，2024.

放射線診断科

＜雑誌論文＞

1. Aiba I, Hayashi Y, Shimohata T, Yoshida M, Saito Y, Wakabayashi K, Komori T, Hasegawa M, Ikeuchi T, Tokumaru AM, et al. Clinical course of pathologically confirmed corticobasal degeneration and corticobasal syndrome. Brain Commun. 2023 Nov 3;5(6):fcad296. doi: 10.1093/braincomms/fcad296. eCollection 2023.
2. Kurihara M, Komatsu H, Sengoku R, Shibukawa M, Morimoto S, Matsubara T, Arakawa A, Orita M, Ishibashi K, Mitsutake A, Shibata S, Ishiura H, Adachi K, Ohse K, Hatano K, Ihara R, Higashihara M, Nishina Y, Tokumaru AM, et al. CSF P-Tau 181and other biomarkers in patients with neuronal intranuclear inclusion disease. Neurology. 2023 Mar 7;100(10):e1009-e1019. doi: 10.1212/WNL.0000000000201647
3. Kurihara M, Ishibashi K, Matsubara T, Hatano K, Ihara R, Higashihara M, Kameyama M, Tokumaru AM, et al. High sensitivity of asymmetric ^{18}F-THK5351 PET abnormality in patients with corticobasal syndrome. Sci Rep. 2023 Jul 27;13(1):12147. doi: 10.1038/s41598-023-39227-x
4. 德丸阿耶 シンポジウム 22 変性疾患における神経放射線学的知見:神経変性疾患の画像診断：臨床―画像―病理連関の意義 「神経治療学」40 巻 4 号 627-632:2023
5. 徳丸阿耶 シンポジウム 22 変性疾患における神経放射線学的知見 司会の言葉 「神経治療学」40 巻 4 号 626:2023
6. Sho Takeyasu, Ken Morita, Seitaro Saito, Masanori Toho, Takashi Oyama, Takafumi Obo, Kazuki Taoka, Arika Shimura, Hiroaki Maki, Eisuke Shibata, Yusuke Watanabe, Fumio Suzuki, Liuzhe Zhang, Hiroshi Kobayashi, Munetoshi Hinata, and Mineo Kurokawa, et al. Myeloid sarcoma and pathological fracture: a case report and review of literature Int J Hematol. 2023 Dec;118(6):745-750. doi: 10.1007/s12185-023-03656-1. Epub 2023 Sep 14.

＜単行本・報告書＞

1. 徳丸阿耶 頭蓋縫合早期癒合症 p300－310 第 2 版 小児神経の画像診断大場洋編 2024 年 3 月 学研 東京
2. 徳丸阿耶 腫瘍 mimics p689-709 第 2 版 小児神経の画像診断大場洋編 2024 年 3 月 学研 東京
3. 徳丸阿耶 医療のいま これから 医療トピックス④ 認知症の画像診断 第 143 号 都民と医師を結ぶ健やか情報誌 2024年 2, 3 月
4. 山本浩太郎、高田晃一、山本麻子 骨端症：下肢 ：p747-756 骨壊死の画像診断 up date 臨床放射線 2023年 vol.68 no.8 金原出版株式会社 東京
5. 勝俣恵、高田晃一、山本麻子 骨転移画像診断の注意点：p1467-1473 がん時代の整形外科必携! 骨転移診療のアップデート〈骨転移集学的治療各論〉 臨床整形外科 2023 年 医学書院 東京

＜学会・研究会発表＞

1. Tokumaru AM Symposium;「What is the role of neuroimaging for dementia」chairman The 82nd Japan Radiological Society Yokohama
2. 張申逸、張申逸、鈴木文夫、高田晃一、佐々木舞ら 筋委縮側索硬化症：臨床的フェノタイプと voxel based morphometry による局在病変抽出の意義 A voxel based morphometry of the amyotrophic lateral sclerosis: a retrospective study 第５３回神経放射線学会 2023 大宮
3. 徳丸阿耶 これからの認知症診療における神経画像診断～病理から実臨床へ～morning seminar 第 53 回日本神経放射線学会 2023 大宮

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 徳丸阿耶 神経変性疾患の画像診断―臨床画像病理連関― 旗の台神経セミナー特別講演 2023 年 2 月
2. 徳丸阿耶 認知症の画像診断―画像病理連関を通して学ぶこと 特別講演 第 110 回 Neuroimaging conference 久留米・佐賀 2023 年 2 月 久留米
3. 徳丸阿耶 齊藤祐子、村山繁雄ら 神経変性疾患の画像病理連関―認知症の背景を中心に― 第 19 回神経疾患に親しみ強くなる会 教育セミナー 2023 年 1 月から 2 月配信

4. 徳丸阿耶　認知症の画像診断―画像病理連関を通して学ぶこと　特別講演　第 4 回おおもり脳機能画像講演会　2023 年 3 月　大森
5. 徳丸阿耶　　第 15 回　Neuro-Imaging refresher club　神経変性疾患のトピックス　日常診療から追いかける認知症世界　2023 年 11 月東京
6. 徳丸阿耶　第 19 回神経疾患に親しむ会　教育セミナー『神経画像診断 Vol.8 ～中枢神経疾患全体を包括的に』神経変性疾患の画像病理連関―認知症の背景を中心に一　2023 年 1 月配信
7. 徳丸阿耶　画像病理連関を通して一神経変性疾患の鑑別診断―困難な道のりは続く　第 13 回 Neuroimaging Seminar 徳島大学　2023 年 10 月
8. 徳丸阿耶　認知症の画像診断―画像病理連関を通して学ぶこと一第 23 回旗の台神経セミナー2023 年 2 月
9. 徳丸阿耶　認知症の画像診断―画像病理連関を通して学ぶこと一第 110 回 Neuroimaging Conference 筑後佐賀　久留米大学 2023 年 2 月

放射線治療科

＜雑誌論文＞

1. Sekiguchi K, Sumi M, Saito A, Zenda S, Arahira S, Iino K, Okumura M, Kawai F, Nozawa K.
   The effectiveness of moisturizer on acute radiation-induced dermatitis in breast cancer patients: a systematic review and meta-analysis. Breast Cancer 2023 30(1):2-12
   doi: 10.1007/s12282-022-01403-8.
2. Mishima K, Nishikawa R, Narita Y, Mizusawa J, Sumi M, Koga T, Sasaki N, Kinoshita M, Nagane M, Arakawa Y, Yoshimoto K, Shibahara I, Shinojima N, Asano K, Tsurubuchi T, Sasaki H, Asai A, Sasayama T, Momii Y, Sasaki A, Nakamura S, Kojima M, Tamaru JI, Tsuchiya K, Gomyo M, Abe K, Natsumeda M, Yamasaki F, Katayama H, Fukuda H.
   Randomized phase III study of high-dose methotrexate and whole-brain radiotherapy with/without temozolomide for newly diagnosed primary CNS lymphoma: JCOG1114C. Neuro Oncol 2023 6;25(4):687-698.

＜総説＞

なし

＜学会活動・研究会発表＞

1. 角美奈子：放射線治療と皮膚のケア．東京都病院薬剤師会　診療所例会.東京，　4 月 17 日，2023.
2. 角美奈子：必須知識 Up to date　緩和的放射線治療．第 8 回日本緩和医療学会 専門医・認定医セミナー.オンライン開催，7 月 9 日，2023.
3. 角美奈子：放射線治療における遅発性放射線反応と看護．第 38 回がん放射線治療看護セミナー.福岡，6 月 24 日，2023.
4. 角美奈子：高齢者放射線皮膚炎の現状．日本放射線看護学会　第 12 回学術集会.長崎．9 月 9 日，2023.
5. 角美奈子：放射線腫瘍学．令和５年度がん専門薬剤師集中教育講座．オンライン開催，9 月 16 日，2023.
6. 角美奈子：胸部領域の放射線治療看護．第 39 回がん放射線治療看護セミナー.和歌山，11 月 11 日，2023.
7. 角美奈子：肉腫の放射線治療．第 7 回日本サルコーマ治療研究学会．名古屋，2 月 9 日，2024.

臨床検査科

＜雑誌論文＞

1. 高梨大輔,石川譲治：心電図 パーフェクトレッスン SECTION 02 右室肥大.Medical Technology 51(13).12月 2023.

＜学会・研究会発表＞

1. 野口 穣, 東條 未希, 脇谷 美弥子, 古川 友子, 浅見 諒子, 小金丸 博, 増田 義重, 稲松 孝思, 吉田 敦. 当センターにおける POT 法による *Clostridioides difficile* の解析. 第 35 回日本臨床微生物学会総会・学術集会 横浜, 2 月 11 日, 2024.
2. 浅見 諒子, 野口 穣, 古川 友子, 脇谷 美弥子, 東條 未希,小金丸 博, 増田 義重, 稲松 孝思, 山田 浩和, 大瀬 賢介, 豊田 雅士, 吉田 敦. *Mycobacterium lentiflavum* 分離例の臨床的および細菌学的特徴について. 第 35 回日本臨床微生物学会総会・学術集会 横浜, 2 月 10 日, 2024.
3. 夏目 采, 東原 真奈, 小野 秀子, 小森 雄太, 髙橋 健祐, 竹山 哲史, 清水 優, 岩田 淳, 時村 文秋. 神経伝導検査が予後予測と治療方針の決定に役立った肘部管症候群の一例. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会 福岡,11 月 30 日,2023.

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 前田哲平：超音波検査法フォーラム,第28回心エコー実技スクール 実技講師.東京,9月10日,2023.
2. 前田哲平：超音波検査法フォーラム,第77回超音波診断レクチャー循環器領域 実技講師.WEB,3月14日,2024.

＜研修・教育活動＞

・3校より4名の臨床検査実習生の研修を受け入れている。
2023/4/4～6/2 新渡戸文化短大、東京電子専門学校
2024/1/9～3/1 大東文化大学
・初期研修医の超音波研修も受け入れている。
2023/4/4～2024/3/31 初期臨床研修医（2年目）3名/年 各1カ月の期間で研修を行った。
・資格取得
野口 穣：2024/1/1～感染制御認定臨床微生物検査技師、認定臨床微生物検査技師の資格を取得している。

病理診断科

＜雑誌論文＞

1. Motoda A, Matsubara T, Tanei Z, Sakashita Y, Yamazaki M, Kawakami I, Sengoku R, Arai T, Maruyama H, Saito Y, Murayama S. Morphological study of the phrenic nerve to determine a reference value for the myelinated fiber density in elderly individuals. Neuropathology 43:129-134, 2023.
2. Fujitani H, Eguchi H, Arai T, Muramatsu M, Okazaki Y. Heterogeneity of rare germline variants is 1 associated with pancreatic cancer and other cancer types. Eur J Clin Oncol 32:286-297, 2023.
3. Takubo K, Aida J, Vieth M, Fujiwara M, Nemoto T, Arai T, Mukaisho K, Nakazawa A, Ishiwata T. Cardiac mucosa in neonates. Pathol Res Prat 246:154498, 2023.
4. Matsui K, Torii S, Hara S, Maruyama K, Arai T, Imanaka-Yoshida K. Tenascin-C in tissue repair after myocardial infarction in humans. Int J Mol Sci 24:10184, 2023.
5. Abe H, Rokutan H, Totoki Y, Nakamura H, Shibata T, Ushiku T, Fukayama M. Lost expression of AT-rich interaction domain 1A in the gastric mucosa-A constituent of field cancerization in the stomach. Pathol Int 73:234-245, 2023.
6. Kondo A, Shinozaki-Ushiku A, Rokutan H, Kunita A, Ikemura M, Yamashita H, Seto Y, Nagae G, Tatsuno K, Aburatani H, Koinuma D, Ushiku T. Loss of viral genome with altered immune microenvironment during tumour progression of Epstein-Barr virus-associated gastric carcinoma. J Pathol 260:124-136, 2023.
7. Saito-Adachi M, Hama N, Totoki Y, Nakamura H, Arai Y, Hosoda F, Rokutan H, Yachida S, Kato M, Fukagawa A, Shibata T. Oncogenic structural aberration landscape in gastric cancer genomes. Nat Commun 14:3688, 2023.
8. Arai T, Komatsu A, Kanazawa N, Nonaka K, Ishiwata T. Clinicopathological and molecular characteristics of gastric papillary adenocarcinoma. Pathol Int 73:358-366, 2023.
9. Kaneko M, Nakashima M, Sugiura K, Ishida N, Tamura S, Tani S, Yamade M, Hamaya Y, Osawa S, Tatsuta K, Kurachi K, Baba S, Iwashita Y, Arai T, Sugimura H, Maekawa M, Sugimoto K Iwaizumi M. Both MLH1 deficiency and BRAFv600E mutation are a unique characteristic of colorectal medullary carcinoma: an observational study. Medicine 102:e35022, 2023.
10. Veldhuizen PG, Röcken C, Behrens HM, Muti HS, Yoshikawa T, Arai T, Oshima T, Tan P, Ebert MP, Pearson AT, Calderaro J, Grabsch HI, Kather JN. Deep Learning-based subtyping of gastric cancer histology predicts clinical outcome a multi-institutional retrospective study. Gastric Cancer 26:708-720, 2023.

＜総説＞

1. Arai T, Ono S, Takubo K. Squamous neoplastic precursor lesions of the esophagus. Gastroenterol Clin North Am 53:25-38, 2024.
2. 新井 冨生：大腸癌取扱い規約と TNM 分類の比較. 最新臨床大腸癌学 2023 最新の診断・治療と病態. 日本臨牀 81 増刊号 5:481-487, 2023.
3. 保坂 祥介、小野 敏嗣、中里 徹矢、小松 明子、野中 敬介、石渡 俊行、新井 冨生：加齢による肝胆膵

の生理的変化．肝胆膵 86:679-683，2023.

4. 新井 冨生：序説　知っておくべき口腔・咽喉頭病変．胃と腸 58:1097-1099，2023.

＜単行本・報告書＞

1. 新井 冨生：食道癌の病理．一般社団法人日本消化器外科学会編　消化器外科専門医の心得 2023 年度版，東京，pp228-229，2023.
2. 新井 冨生：第 1 章 食道．正常画像と比べてわかる病理アトラス第 3 版―マクロとミクロの対応で捉える病態，下 正宗、長嶋 洋治（編），羊土社，東京，pp16-27，2024.
3. 新井 冨生：第 8 章 心臓．正常画像と比べてわかる病理アトラス第 3 版―マクロとミクロの対応で捉える病態，下 正宗、長嶋 洋治（編），羊土社，東京，pp148-163，2024.
4. 新井 冨生：第 9 章 血管．正常画像と比べてわかる病理アトラス第 3 版―マクロとミクロの対応で捉える病態，下 正宗、長嶋 洋治（編），羊土社，東京，pp164-171，2024.
5. 新井 冨生：病理組織検査．東京都健康安全研究センター精度管理室編，令和 5 年度第 42 回東京都衛生検査所精度管理事業報告書，東京都保健医療局医療政策部発行，pp193-216，2024.

＜学会・研究会発表＞

1. [Outstanding Poster Presentation Award] Arai T, Komatsu A, Nagasaka T, Nonaka K, Ishiwata T. Age-related increase of proportion of microsatellite instability in gastric, colorectal, and endometrial carcinomas. International Academy of Geriatrics and Gerontology (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, 2023.6.12.
2. Arai T. Comparison between JGCA and WHO classification of signet ring cell and poorly cohesive carcinoma. In Pathology session “Refining poorly cohesive”. International Gastric Cancer Congress (IGCC) 2023. Yokohama, 2023.6.17.
3. Arai T. Classification and definition of undifferentiated-type carcinoma: the Japanese pathologist’s view. The 10th Korean International Gastric Cancer Association (KINGCA) WEEK 2023. Seoul, 2023.9.15.
4. 本間 尚子、松田 陽子、堀井 理絵、佐々木 英一、深澤 由里、園部 聡、新井 冨生、秋山 太、渋谷 和俊、三上 哲夫：ワークショップ 11　Triple negative 乳癌の病理　Up-to-date Pathology of Triple-negative breast cancer: An update Triple-negative 乳癌（TNBC）と性ステロイドホルモン．第 112 回日本病理学会総会．下関，4 月 14 日，2023.
5. 野中 敬介、上野 幸恵、小松 明子、志智 優樹、五味 不二也、石渡 敏行、津坂 恭央、永田 卓士、粕谷 豊、新井 冨生：前立腺腺癌の診断から 10 年後に小細胞神経内分泌癌に形質転換し比較的急速な経過で死亡した 1 剖検例．第 112 回日本病理学会総会．下関，4 月 14 日，2023.
6. 白幡 浩人、中島 裕理、江坂 四季音、髙畠 絵美、長谷川 康子、鈴木 明美、新井 冨生：肺多形癌２症例の細胞像．第 64 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）．名古屋，6 月 10 日，2023.
7. 永坂 拓也、神野 聖也、荒川 昌、野中 敬介、六反 啓文、佐藤 優樹、保坂 祥介、小野 敏嗣、齊藤 祐子、新井 冨生：胆嚢原発神経内分泌癌の 1 剖検例．第 69 回日本病理学会総会秋期特別総会．久留米，11 月 9 日，2023.
8. 六反 啓文、新井 冨生、石渡 俊行、牛久 哲男：早期胃型腫瘍から粘液癌への進展についての病理学的検討．第 34 回日本消化器癌発生学会総会．高崎，11 月 24 日，2023.
9. 六反 啓文、新井 冨生、石渡 俊行、牛久 哲男：低異型度の腺窩上皮型腫瘍から胃粘液癌への進展に関する病理学的検討．第96回日本胃癌学会総会．京都，2月29日，2024.
10. 荒井 奈緒子、三井 秀雄、田中 佑治、新井 孝明、中里 徹矢、六反 啓文、新井 冨生、金澤 伸郎：早期

胃 MiNEN の 1 例. 第 96 回日本胃癌学会総会. 京都, 3 月 1 日, 2024.

11. 永坂 拓也、神野 聖也、小松 明子、野中 敬介、六反 啓文、登 祐哉、土屋 武弘、安樂 真樹、熊坂 利夫、新井 冨生：扁平上皮腺上皮混合型乳頭腫の 2 例. 第 113 回日本病理学会総会. 名古屋, 3 月 28 日, 2024.
12. 神野 聖也、永坂 拓也、六反 啓文、新井 冨生：胎児消化管類似癌と MSI-high 充実型低分化腺癌の衝突胃癌の一例. 第 113 回日本病理学会総会. 名古屋, 3 月 28 日, 2024.
13. 野中 敬介、小松 明子、永坂 拓也、神野 聖也、六反 啓文、志智 優樹、五味 不二也、石渡 俊行、新井 冨生：長期重症疾患の患者における血清アルブミン値と副腎組織の酸化ストレスの関係. 第 113 回日本病理学会総会. 名古屋, 3 月 29 日, 2024.

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

1. 新井 冨生：上部消化管の病理. 金沢医科大学. 石川, 7 月 11 日, 2023.
2. 新井 冨生：老化の病理. 浜松医科大学. 浜松, 10 月 11 日, 2023.
3. 新井 冨生：消化管癌の病理. 香川大学医学部. 香川, 11 月 6 日, 2023.
4. 新井 冨生：実習講義　消化管. 香川大学医学部. 香川, 11 月 6 日, 2023.
5. 新井 冨生：老化と病理. 富山大学医学部. 富山, 12 月 8 日, 2023.
6. 新井 冨生：食道の病理. 日中医学協会. 東京, 2 月 1 日, 2024.
7. 新井 冨生：令和 5 年度衛生検査所精度管理調査結果について　病理組織診. 令和 5 年度東京都衛生検査所精度管理講習会. 東京, 3 月 18～22 日, 2024.

薬剤科

＜論文投稿＞

1. 小原朋也：高齢者において常用薬と服用意図が一致しない状態の形成・持続に関わる要因と一致している薬剤の特徴に関する検討, 日本老年薬学会雑誌, Vol.7 No.1 2024 p.8-15
2. Shimazaki Y et al: Association between Cognitive Impairment Severity and Polypharmacy in Older Patients with Atrial Fibrillation: A Retrospective Study Using Inpatient Data from a Specialised Geriatric Hospital. Geriatrics (Basel, Switzerland) vol. 9,1 15. 24 Jan. 2024

＜雑誌投稿＞

なし

＜講演会等＞

1. 島崎良知：高齢者薬物療法について. 東京都病院薬剤師会高齢者薬物療法領域薬剤師養成研究会. 東和薬品株式会社練馬営業所, Web 開催, 2023 年 6 月 22 日
2. 島崎良知：地域へ繋げる高齢者薬物治療～薬剤管理サマリーの普及に向けて～. 日本病院薬剤師会関東ブロック第53回学術大会基調講演. 朱鷺メッセ新潟, 2023年8月27日
3. 片原憂斗：早期臨床体験. 早期臨床体験. 東邦大学, 2023年9月5日～6日
4. 三澤椋一：早期臨床体験. 早期臨床体験. 東邦大学, 2023年9月5日～6日
5. 甲斐田浩輔：新型コロナ感染症禍におけるがん化学療法と今後の当院の取り組み. 第17回北東京がんフォーラム, ホテルメトロポリタン, 2023年10月6日
6. 谷古宇美佳：認知症のかたに対して薬剤師に求められること～薬学的管理と関係機関との連携～. 令和5年度東京都薬剤師認知症対応力向上研修. Web開催,2023年11月25日,2023年12月10日
7. 田中三鈴: 大腿骨骨折患者における治療薬の処方状況と退院時薬剤指導. 板橋区骨粗しょう症リエゾン研究会.板橋区医師会館.2023年3月30日

＜学会発表＞

1. 小原朋也：患者の中で薬剤と服用意図が一致しない状態の形成・持続要因に関する検討. 第7回日本老年薬学会学術大会,アクロス福岡,2023年5月20日～21日
2. 早舩美保子：当センターにおける下剤適正使用への取り組み. 日本薬学会第144年会,パシフィコ横浜,2024年3月28日～31日

栄養科

＜学会発表＞

1. 都楳優：第51回日本集中治療医学会学術集会　わが施設自慢の実践シリーズ・栄養プロトコール「ＩＣＵ早期経腸栄養開始フローチャート」

＜講師等院外活動（講演・放送等）＞

１．羽根田千恵：「糖尿病予防、治療に役立つ食事の工夫」　糖尿病予防デー　共済：東京都区西北部糖尿病医療連携推進検討会・板橋区医師会・板橋区糖尿病対策推進会議　板橋区立グリーンホール　11 月 4 日

２．羽根田千恵：第 1 回こころとからだのゼミナール　老化やフレイル、認知症に関わる「食事」について学ぼう　高島平ココからステーション　3 月 16 日

高齢者バイオリソースセンター

＜原著論文＞

1. ◎Higashihara M, Yamazaki H, Izumi Y, Kobayashi M, Nodera H, Oishi C, Iwata A, Murayama S, Kaji R, ★Sonoo M : Far-field potential of the compound muscle action potential as a reliable marker in amyotrophic lateral sclerosis. Muscle Nerve. 2023 Sep;68(3):257-263. doi: 10.1002/mus.27829. Epub 2023 Apr 22. (査読あり、IF: 3.22)
2. ◎★Beck G, Yonenobu Y, Kawai M, Ikenaka K, Sera F, Ozono T, Shimada Y, Yamashita R, Sakata Y, Morii E, Yoshinaga T, Ando Y, Murayama S, ★Mochizuki H: RNA interference in late-stage hereditary transthyretin amyloidosis: a clinicopathological study. J Neurol. 2023 Sep;270(9):4544-4548. doi: 10.1007/s00415-023-11754-7. Epub 2023 May 8. (査読あり、IF: 4.85)
3. ◎Matsubara T, Murayama S, Tsukamoto T, Sano T, Mizutani M, Tanei ZI, Takahashi Y, Takao M, ★Saito Y: Parkinson's disease in a patient with olfactory hypoplasia: a model case of "body-first Lewy body disease" providing insights into the progression of α-synuclein accumulation. J Neurol. 2023 Oct;270(10):5090-5093. doi: 10.1007/s00415-023-11783-2. Epub 2023 May 29. (査読あり、IF:4.85)
4. ◎Uchino A, ★Saito Y, Oonuma S, Murayama S, Yagishita S, Kitamoto T, Hasegawa K: An autopsy case of variably protease-sensitive prionopathy with Met/Met homogeneity at codon 129. Neuropathology. 2023 Dec;43(6):486-495. doi: 10.1111/neup.12911. Epub 2023 May 30. (査読あり、IF:1.91)
5. ◎Tachida Y, ◎Iijima J, Takahashi K, Suzuki H, Kizuka Y, Yamaguchi Y, Tanaka K, Nakano M, Takakura D, Kawasaki N, Saito Y, Manya H, Endo T, ★Kitazume S: O-GalNAc glycosylation determines intracellular trafficking of APP and Aβ production. J Biol Chem. 2023 Jul;299(7):104905. doi: 10.1016/j.jbc.2023.104905. Epub 2023 Jun 9. (査読あり、IF:5.16)
6. ◎Tarutani A, ◎Lövestam S, Zhang X, Kotecha A, Robinson AC, Mann DMA, Saito Y, Murayama S, Tomita T, ★Goedert M, Scheres SHW, ★Hasegawa M : Cryo-EM structures of tau filaments from SH-SY5Y cells seeded with brain extracts from cases of Alzheimer's disease and corticobasal degeneration. FEBS Open Bio. 2023 Aug;13(8):1394-1404. doi: 10.1002/2211-5463.13657. Epub 2023 Jul 7. (査読あり、IF:2.69)
7. ◎★Mori K, Shigenobu K, Beck G, Uozumi R, Satake Y, Suzuki M, Kondo S, Gotoh S, Yonenobu Y, Kawai M, Suzuki Y, Saito Y, Morii E, Hasegawa M, Mochizuki H, Murayama S, ★Ikeda M : A heterozygous splicing variant IVS9-7A > T in intron 9 of the MAPT gene in a patient with right-temporal variant frontotemporal dementia with atypical 4 repeat tauopathy. Acta Neuropathol Commun. 2023 Aug 10;11(1):130. doi: 10.1186/s40478-023-01629-3. (査読あり、IF:7.8)
8. ◎★Tarutani A, Kametani F, Tahira M, Saito Y, Yoshida M, Robinson AC, Mann DMA, Murayama S, Tomita T, ★Hasegawa M: Distinct tau folds initiate templated seeding and alter the post-translational modification profile. Brain. 2023 Dec 1;146(12):4988-4999. doi: 10.1093/brain/awad272. (査読あり、IF:13.5)
9. ◎Fujita K, Homma H, Jin M, Yoshioka Y, Jin X, Saito Y, Tanaka H, ★Okazawa H : Mutant α-synuclein propagates via the lymphatic system of the brain in the monomeric state. Cell Rep. 2023 Aug 29;42(8):112962. doi: 10.1016/j.celrep.2023.112962. Epub 2023 Aug 16. (査読あり、IF:9.42)
10. ◎★Watanabe H, Murakami R, Tsumagari K, Morimoto S, Hashimoto T, Imaizumi K, Sonn I, Yamada K, Saito Y, Murayama S, Iwatsubo T, ★Okano H : Astrocytic APOE4 genotype-mediated negative impacts on synaptic architecture in human pluripotent stem cell model. Stem Cell Reports. 2023 Sep 12;18(9):1854-1869. doi: 10.1016/j.stemcr.2023.08.002. Epub 2023 Aug 31. (査読あり、IF:7.76)
11. ◎★Saito Y, Ishiyama A, Saito Y, Komaki H, Sasaki M: Myelin abnormalities in merosin-deficient congenital muscular dystrophy. Muscle Nerve. 2024 Jan;69(1):55-63. doi: 10.1002/mus.28002. Epub 2023 Nov 7. (査読あり、IF:3.22)
12. ◎★Kurano.M, Saito Y, Yatomi Y: Comprehensive analysis of metabolites in postmortem brains of patients with Alzheimer's disease. J Alzheimers Dis. 2024;97(3):1139-1159. doi: 10.3233/JAD-230942. (査読あり、IF:4.47)
13. ◎★Aiba I, ◎Hayashi Y, Shimohata T, Yoshida M, Saito Y, Wakabayashi K, Komori T, Hasegawa M, Ikeuchi T, Tokumaru AM, Sakurai K, Murayama S, Hasegawa K, Uchihara T, Toyoshima Y, Saito Y, Yabe I, Tanikawa S, Sugaya K, Hayashi K, Sano T, Takao M, Sakai M, Fujimura H, Takigawa H, Adachi T, Hanajima R, Yokota O, Miki T, Iwasaki Y, Kobayashi M, Arai N, Ohkubo T, Yokota T, Mori K, Ito M, Ishida C, Tanaka M, Idezuka J, Kanazawa M, Aoki K, Aoki M, Hasegawa T, Watanabe H, Hashizume A, Niwa H, Yasui K, Ito K, Washimi Y, Mukai E, Kubota A, Toda T, Nakashima K: J-VAC study group: Clinical course of pathologically confirmed corticobasal degeneration and corticobasal syndrome. Brain Commun. 2023 Nov 3;5(6):fcad296. doi: 10.1093/braincomms/fcad296. eCollection 2023. (査読あり、IF:4.5)

14. ◎★Ito M, Fujii N, Kohara S, Tanaka M, Takao M, Mihara B, Saito Y, Mizuma A, Nakayama T, Netsu S, Suzuki N, Kakita A, ★Nagata E: Elevation of inositol pyrophosphate IP7 in the mammalian spinal cord of amyotrophic lateral sclerosis. Front Neurol. 2024 Jan 11:14:1334004. doi: 10.3389/fneur.2023.1334004. eCollection 2023. （査読あり、IF:4）
15. ◎Funakawa K, ★Kurihara M, Takahashi K, Higashihara M, Hara M, Mitsutake A, Ishiura H, Tokumaru AM, Sonoo M, Murayama S, Saito Y, Iwata A: Proximal sensory neuropathy and cerebellar ataxia as presenting symptoms of NOTCH2NLC-related neuronal intranuclear inclusion disease. J Neurol Sci. 2024 Mar 15:458:122915. doi: 10.1016/j.jns.2024.122915. Epub 2024 Feb 2. （査読あり、IF:3.18）
16. ◎★Kikuchi M, Miyashita A, Hara N, Kasuga K, Saito Y, Murayama S, Kakita A, Akatsu H, Ozaki K, Niida S, Kuwano R, Iwatsubo T, Nakaya A, ★Ikeuchi T, Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative; Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative: Polygenic effects on the risk of Alzheimer's disease in the Japanese population. Alzheimers Res Ther. 2024 Feb 27;16(1):45. doi: 10.1186/s13195-024-01414-x. （査読あり、IF: 6.12）
17. ◎Kurihara M, ◎Matsubara T, Morimoto S, Arakawa A, Ohse K, Kanemaru K, Iwata A, Murayama S, ★Saito Y：Neuropathological changes associated with aberrant cerebrospinal fluid p-tau181 and Aβ42 in Alzheimer's disease and other neurodegenerative diseases. Acta Neuropathol Commun. 2024 Mar 27;12(1):48. doi: 10.1186/s40478-024-01758-3. （査読あり、IF:7.8）
18. ◎★Inoue K, Sugase S, Naka T, Ikeuchi T, Murayama S, Fujimura H: An autopsy case of diffuse atypical argyrophilic grain disease (AGD) with presenile onset and three-year course of motor and cognitive impairment. Neuropathology. 2024 Jun;44(3):200-207. doi: 10.1111/neup.12949. Epub 2023 Nov 7. （査読あり、IF:1.91 ）
19. ◎Uchino A, ★Saito Y, Tokuda S, Yagishita S, Murayama S, Hasegawa K: An autopsy case of MV 2K+C subtype of Creutzfeldt-Jakob disease. Neuropathology. 2024 Feb 14. doi: 10.1111/neup.12964. Online ahead of print. （査読あり、IF:1.91）

＜総説＞、＜学会発表＞は、研究所テーマ神経病理学参照。

■病院部門課題研究費で行われた研究

指定研究　重点医療(血管病、高齢者がん、認知症、高齢者糖尿病)に関する研究

研究代表者		共同研究者	研究課題名
所属	氏名		
脳神経内科	栗原　正典	石橋　賢士・岩田　淳	前頭側頭型認知症及び大脳皮質基底核症候群におけるTHK5351　PET所見と臨床所見の関連の検討
精神科	扇澤　史子	古田　光・井藤　佳恵 岡本　一枝・今村　陽子 高岡　陽子・青島　希 畠山　啓・齋藤　久美子 大森　祐貴・松井　仁美 栗田　主一	認知症高齢者の希死念慮の特徴と背景：希死念慮の有無別の疾患割合および身体的・精神的・社会的要因の特徴と希死念慮に関する言動についての質的検討
血管外科	松倉　満	牧野　能久・清水　優 高梨　大輔・河野　ますよ 小林　敬翔	高齢者でも安全に行える歩行機能評価方法の開発
病理診断科	六反　啓文	新井　冨生・石渡　俊行 小野　敏嗣	高齢者胃癌の初期病理像の研究および進展のリスク因子の探索
循環器内科	石川　譲治	鳥羽　梓弓・二見　崇太郎 清水　瑠璃・十菱　千尋 小松　俊介・齋藤　義弘	フレイル患者の至適血圧レベルに関する研究

指定研究　フレイルを考慮した医療やフレイル予防、介護予防に関する研究

研究代表者		共同研究者	研究課題名
所属	氏名		
糖尿病・代謝・内分泌内科	豊島　堅志	田村　嘉章・千葉　優子 大庭　和人・小寺　玲美 村尾　雄治・石川　譲治 栗田　主一・藤原　佳典	糖尿病患者におけるSGLT2阻害薬、GLP-1受容体作動薬使用によるフレイル関連指標と認知機能の変化
糖尿病・代謝・内分泌内科	大庭　和人	田村　嘉章・千葉　優子 小寺　玲美・村尾　雄治 木下　大輔・石川　譲治 藤原　佳典	高齢者の血液検査における新規炎症マーカーとフレイル・サルコペニアと発症の関連
腎臓内科・透析科	岡　雅俊	武井　卓・板橋　美津世	当院におけるCovid19感染者に合併した急性腎不全とフレイルの関係
糖尿病・代謝・内分泌内科	村尾　雄治	田村　嘉章・千葉　優子 豊島　堅志・大庭　和人 小寺　玲美・木下　大輔 石川　譲治・藤原　佳典	Moca-JにおけるTMTの誤答の質とフレイル・サルコペニアの発症、ADL、認知機能との関連
腎臓内科、透析科	板橋　美津世	武井　卓・山中　法子 藤原　佳典	地域高齢者健診における腎機能と新規フレイル発症の関連性

指定研究　高齢期急性期医療の充実に関する研究

所属		共同研究者	研究課題名
課（科）	氏名		
麻酔科	清水　啓介		高齢者における周術期のDNAR指示に関する医師へのアンケート調査
腎臓内科・透析科	武井　卓	板橋　美津世・鈴木　訓之 岡　雅俊・山中　法子	高齢者尿路感染症の実態把握と重症度分類の構築
歯科口腔外科	森　美由紀	平野　浩彦	当院における抗擬固薬服薬高齢患者の抜歯後出血に関する検討
外科	中里　徹矢		高齢者急性胆嚢炎に対する経皮経肝胆嚢ドレナージ後早期胆嚢摘出術の安全性に関する研究
麻酔科	小松　郷子	縄田　瑞木・清水　啓介	術前の栄養評価とプレハビリテーションが術後回復に及ぼす効果について

指定研究　質の高い医療や患者サービスの向上に関する研究

所属		共同研究者	研究課題名
課（科）	氏名		
消化器・内視鏡科	小野　敏嗣	三神　信太郎・保坂　祥介 深川　一史・羽鳥　清華 大隅　瞬	バレット食道の診断における画像強調内視鏡（IEE）の有効性に関する多施設研究
消化器・内視鏡科	深川　一史	小野　敏嗣、三上　信太郎 保坂　祥介、羽鳥清華 大隅　瞬	高齢者に対する内視鏡検査におけるミダゾラムとプロフォールによる鎮静の比較

Ⅲ　統　　計

外来診療の状況

1. 診療科別外来患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：人）

区分＼診療科	高齢総合診療科	内科	腎臓内科	糖尿病内分泌内科	循環器内科	呼吸器内科	消化器内科	脳神経内科	脳卒中内科	血液内科	緩和ケア内科	膠原病リウマチ内科	神経科	精神科	もの忘れ外来	外科	血管外科	心臓血管外科	脳神経外科	呼吸器外科	整形外科・脊椎外科	皮膚科	泌尿器科	眼科	耳鼻咽喉科	麻酔科	歯科口腔外科	リハビリテーション科	骨粗鬆症外来	フレイル外来	放射線診療科	救急科	合計
外来患者数	3,114	454	8,268	15,588	23,299	9,376	11,516	11,500	5,606	626	7,050	5,474	2,910	7,645	1,882	2,122	3,157	1,838	12,397	7,396	13,167	14,990	5,059	1,014	10,552	1,929	2,020	767	3,460	5,353	199,529
延診療日数	243	97	243	243	243	243	243	243	197	243	243	243	243	243	96	197	243	171	243	192	194	243	243	－	243	243	147	243	243	366	294
1日平均数	12.8	4.7	34.0	64.1	95.9	38.6	47.4	47.3	28.5	2.6	29.0	22.5	12.0	31.5	19.6	10.8	13.0	10.7	51.0	38.5	67.9	61.7	20.8	－	43.4	7.9	13.7	3.2	14.2	14.6	678.7

※「フレイル外来」としては平成27年10月より計上している。
※「婦人科」は平成26年4月より取り下げ
※麻酔科外来数は、術前診察（麻酔科IC）数をさす

2. 診療科・初診・再診別外来患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：人）

区分＼診療科		高齢総合診療科	内科	腎臓内科	糖尿病内分泌内科	循環器内科	呼吸器内科	消化器内科	脳神経内科	脳卒中内科	血液内科	緩和ケア内科	膠原病リウマチ内科	神経科	精神科	もの忘れ外来	外科	血管外科	心臓血管外科	脳神経外科	呼吸器外科	整形外科・脊椎外科	皮膚科	泌尿器科	眼科	耳鼻咽喉科	麻酔科	歯科口腔外科	リハビリテーション科	骨粗鬆症外来	フレイル外来	放射線診療科	救急科	合計	比率（%）
外来患者数	初診	489	48	184	254	884	228	1,127	1,149	141	233	130	297	853	380	248	56	350	85	963	255	337	1,072	443	6	2,319	54	52	2	792	3,534	16,965	8.5
	再診	2,625	406	8,084	15,334	22,415	9,148	10,389	10,351	5,465	393	6,920	5,177	2,057	7,265	1,634	2,066	2,807	1,753	11,434	7,141	12,830	13,918	4,616	1,008	8,233	1,875	1,968	765	2,668	1,819	182,564	91.5
	合計	3,114	454	8,268	15,588	23,299	9,376	11,516	11,500	5,606	626	7,050	5,474	2,910	7,645	1,882	2,122	3,157	1,838	12,397	7,396	13,167	14,990	5,059	1,014	10,552	1,929	2,020	767	3,460	5,353	199,529	100.0

年度別外来患者数の推移

（単位：人）

年度	合計	初診再掲	1日当り
平成18年度	215,821	14,416	734
平成19年度	211,005	13,757	718
平成20年度	197,483	13,041	674
平成21年度	196,672	11,950	671
平成22年度	200,359	12,135	681
平成23年度	206,835	13,405	701
平成24年度	208,334	13,456	711
平成25年度	201,059	14,193	703
平成26年度	220,759	14,781	753
平成27年度	235,697	15,966	801
平成28年度	238,896	15,298	815
平成29年度	238,600	15,907	814
平成30年度	235,248	16,029	808
令和元年度	230,199	16,162	794
令和2年度	205,600	15,231	699
令和3年度	217,026	17,873	741
令和4年度	213,056	18,387	725
令和5年度	199,529	16,965	679

3. 外来初診予約時の状況

(1)年齢別新規予約患者数

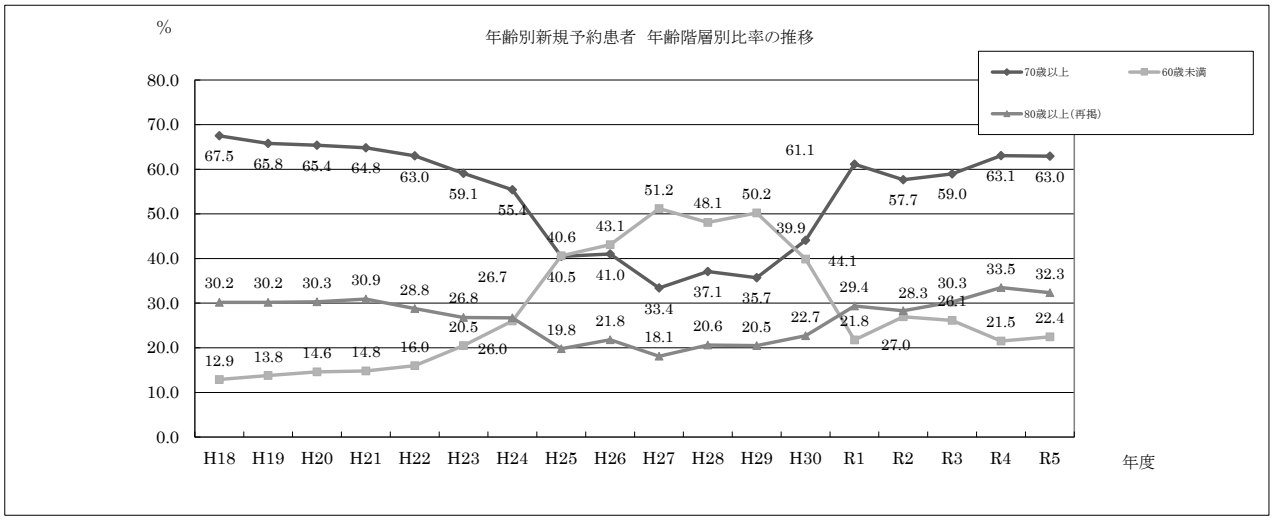
令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位:人）

区分 / 年齢階層	男	女	計
90歳以上	140	310	450
85～89歳	318	524	842
80～84歳	504	685	1,189
75～79歳	549	695	1,244
70～74歳	518	588	1,106
65～69歳	366	296	662
60～64歳	228	231	459
55～59歳	205	186	391
50～54歳	173	163	336
45～49歳	118	96	214
40～44歳	86	88	174
40歳未満	314	293	607
計	3,519	4,155	7,674

(2)年齢別新規予約患者数の年度別推移

（上段:人、下段:比率%）

年度	60歳未満	60～69歳	70～79歳	80歳以上	計
平成18年度	954	1,455	2,763	2,238	7,410
	12.9%	19.6%	37.3%	30.2%	100.0%
平成19年度	978	1,441	2,512	2,134	7,065
	13.8%	20.4%	35.6%	30.2%	100.0%
平成20年度	935	1,281	2,256	1,943	6,415
	14.6%	20.0%	35.2%	30.3%	100.0%
平成21年度	894	1,229	2,045	1,863	6,031
	14.8%	20.4%	33.9%	30.9%	100.0%
平成22年度	991	1,299	2,110	1,776	6,176
	16.0%	21.0%	34.2%	28.8%	100.0%
平成23年度	1,552	1,536	2,443	2,022	7,553
	20.5%	20.3%	32.3%	26.8%	100.0%
平成24年度	2,233	1,590	2,463	2,294	8,580
	26.0%	18.5%	28.7%	26.7%	100.0%
平成25年度	2,147	996	1,096	1,047	5,286
	40.6%	18.8%	20.7%	19.8%	100.0%
平成26年度	1,852	683	827	937	4,299
	43.1%	15.9%	19.2%	21.8%	100.0%
平成27年度	2,498	752	746	883	4,879
	51.2%	15.4%	15.3%	18.1%	100.0%
平成28年度	1,845	568	631	790	3,834
	48.1%	14.8%	16.5%	20.6%	100.0%
平成29年度	2,082	584	628	851	4,145
	50.2%	14.1%	15.2%	20.5%	100.0%
平成30年度	1,924	774	1,034	1,095	4,827
	39.9%	16.0%	21.4%	22.7%	100.0%
令和元年度	1,697	1,331	2,478	2,288	7,794
	21.8%	17.1%	31.8%	29.4%	100.0%
令和2年度	1,904	1,085	2,074	2,000	7,063
	27.0%	15.4%	29.4%	28.3%	100.0%
令和3年度	2,044	1,163	2,243	2,367	7,817
	26.1%	14.9%	28.7%	30.3%	100.0%
令和4年度	1,665	1,194	2,290	2,593	7,742
	21.5%	15.4%	29.6%	33.5%	100.0%
令和5年度	1,722	1,121	2,350	2,481	7,674
	22.4%	14.6%	30.6%	32.3%	100.0%



(3)新規予約患者の地域別患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日 (単位:人)

(1) 区部

区名	一般
千代田	7
中央	6
港	13
新宿	57
文京	72
台東	4
墨田	13
江東	22
品川	12
目黒	8
大田	28
世田谷	34
渋谷	19
中野	45
杉並	31
豊島	902
北	508
荒川	24
板橋	4,105
練馬	812
足立	56
葛飾	10
江戸川	16
区部計	6,804

(2) 市・郡・島しょ部

市名	一般
八王子	10
立川	2
武蔵野	5
三鷹	9
青梅	3
府中	4
昭島	1
調布	5
町田	2
小金井	7
小平	6
日野	2
東村山	2
国分寺	2
国立	2
狛江	2
東大和	4
清瀬	8
東久留米	7
武蔵村山	1
多摩	4
稲城	2
羽村	1
あきる野	1
西東京	13
市部計	105
郡部	0
島しょ部	7
市・郡・島しょ部	112

(3) 他県

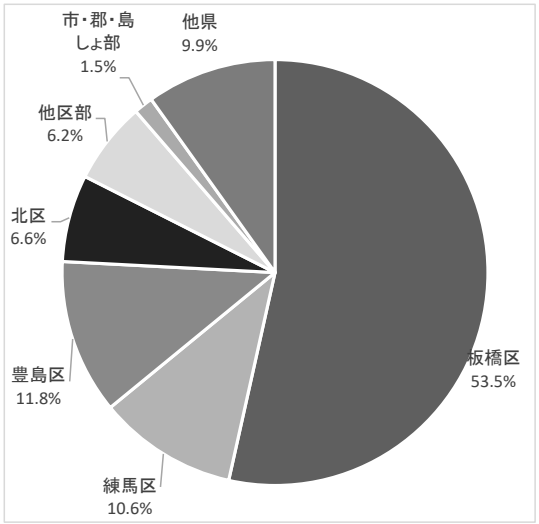
埼玉	498
神奈川	71
千葉	64
その他	125
他県計	758

総計(1)+(2)+(3)	7,674

新規予約患者の地域別患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位 比率:% 人数:人)

地域	比率	人数
板橋区	53.5	4,105
練馬区	10.6	812
豊島区	11.8	902
北区	6.6	508
他区部	6.2	477
市・郡・島しょ部	1.5	112
他県	9.9	758
合計	100.0	7,674



(4)新規予約患者の平均年齢

令和5年4月1日～令和6年3月31日

男	女	全体
67.9	71.2	69.7

4. 救急患者取扱状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日　(単位:人)

			総数	うち入院
全体	時間内	救急車	1,230	746
		その他	2,069	1,078
		小計	3,299	1,824
	時間外	救急車	3,201	1,706
		その他	2,112	672
		小計	5,313	2,378
	計		8,612	4,202
休日(再掲)	時間内	救急車	349	203
		その他	448	79
		小計	797	282
	時間外	救急車	574	268
		その他	331	65
		小計	905	333
	計		1,702	615

救急患者数の推移

(単位:人)

年度			平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
総数			8,672	8,174	7,802	7,305	6,607	7,365	8,012	7,974	9,200	10,102	9,860	10,218	9,782	9,667	8,683	10,339	10,336	8,612
再掲	入院		4,373	4,031	3,872	3,444	3,105	3,587	3,799	3,507	4,293	4,709	4,492	4,697	4,558	4,338	3,689	4,413	4,240	4,202
			(50.4)	(49.3)	(49.6)	(47.1)	(47.0)	(48.7)	(47.4)	(44.0)	(46.7)	(46.6)	(45.6)	(46.0)	(46.6)	(44.9)	(42.5)	(42.7)	(41.0)	(48.8)
	救急車		3,534	3,357	3,258	2,906	2,618	2,971	3,447	3,434	3,986	4,371	4,399	4,497	4,247	4,143	3,575	4,333	4,246	4,431
			(40.8)	(41.1)	(41.8)	(39.8)	(39.6)	(40.3)	(43.0)	(43.1)	(43.3)	(43.3)	(44.6)	(44.0)	(43.4)	(42.9)	(41.2)	(41.9)	(41.1)	(51.5)
	時間外		4,473	4,388	4,203	3,754	3,388	3,657	4,333	4,521	5,560	5,990	5,744	6,021	5,193	5,549	4,690	6,036	6,229	5,313
			(51.6)	(53.7)	(53.9)	(51.4)	(51.3)	(49.7)	(54.1)	(56.7)	(60.4)	(59.3)	(58.3)	(58.9)	(53.1)	(57.4)	(54.0)	(58.4)	(60.3)	(61.7)
掲	休日	時間内	878	858	733	616	595	647	786	833	924	915	902	971	934	940	684	755	953	797
		時間外	632	676	628	641	470	564	720	712	985	943	990	973	928	889	697	845	990	905
		計	1,510	1,534	1,361	1,257	1,065	1,211	1,506	1,545	1,909	1,858	1,892	1,944	1,862	1,829	1,381	1,600	1,943	1,702
			(17.4)	(18.8)	(17.4)	(17.2)	(16.1)	(16.4)	(18.8)	(19.4)	(20.8)	(18.4)	(19.2)	(19.0)	(19.0)	(18.9)	(15.9)	(15.5)	(18.8)	(19.8)

※ (　　)は年度内の比率(%)である。

入院退院の状況

5. 病床利用状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

診療科＼項目	実稼動病床数	延利用数	病床稼働率	入院者数	退院者数	死亡（再掲）	診療科移動		（再掲）緊急入院
							転入	転出	
	床	人	%	人	人	人	人	人	人
総合内科・高齢診療科	26	6,981	74.5%	162	450	19	343	63	363
感染症内科		20		0	2	0	3	0	3
腎臓内科	28	10,070	68.6%	209	470	17	292	26	321
糖尿病・代謝・内分泌内科	30	7,537	68.6%	186	484	11	337	36	360
循環器内科	42	15,768	102.6%	854	1,068	50	280	57	701
呼吸器内科	19	8,266	118.9%	192	394	34	227	24	278
消化器・内視鏡内科	36	11,257	85.4%	827	1,200	27	462	60	597
脳神経内科・脳卒中科	32	14,353	122.5%	552	946	18	453	55	584
血液内科	24	8,741	99.5%	286	331	21	53	13	91
緩和ケア内科	14	4,478	87.4%	94	177	133	67	7	19
在宅医療連携病床		84		8	7	0	0	0	0
膠原病・リウマチ科	7	2,397	93.6%	66	116	1	54	9	51
精神科	30	8,015	73.0%	222	245	0	10	5	19
外科・血管外科	41	11,166	74.4%	857	948	23	156	90	273
心臓血管外科	10	2,890	114.0%	59	86	8	23	3	35
呼吸器外科		1,281		101	108	3	11	5	14
脳神経外科	12	5,942	135.3%	290	346	8	75	14	215
整形・脊椎外科	42	13,255	86.2%	529	530	2	31	23	148
皮膚科	5	1,474	80.5%	67	72	1	8	5	14
泌尿器科	8	2,816	96.2%	353	367	4	31	14	49
眼科	17	4,191	67.4%	2,174	2,179	0	2	3	12
耳鼻咽喉科	2	355	48.5%	70	65	0	2	7	12
歯科口腔外科	2	207	28.3%	58	58	0	0	0	0
リハビリテーション科	3	278	25.3%	17	16	1	6	3	7
救急科	4	2,471		2,435	23	10	4	2,407	36
放射線診療科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
SCU	9	（再掲）2,349	－	（再掲）345	（再掲）30	（再掲）8	（再掲）69	（再掲）381	－
ICU	8	（再掲）1,626	－	（再掲）213	（再掲）28	（再掲）28	（再掲）518	（再掲）703	－
計	462	144,293	84.5%	10,668	10,688	391	2,930	2,929	4,202

※科別病床稼働率は年度内における病床数変更を勘案して計算している。
※実稼働病床数は令和6年3月31日時点の病床数を記載している。

6. 病床稼働率

算定病床	実稼動病床	462
A 延病床数	（実稼働病床×365日）	170,661
B 延入院患者数		144,293
B/A 病床稼働率		84.5%

〔病床回転率〕

$$\frac{365日}{平均在院日数} = \frac{365}{12.5} = 29.2 \text{ 回}$$

〔病床稼働率の推移〕

年度	延入院患者数	病床稼働率 %	
		予算定床	実稼動病床
平成18年度	207,477	88.0	85.9
平成19年度	211,153	89.3	87.2
平成20年度	198,613	86.4	85.0
平成21年度	184,179	－	88.7
平成22年度	182,937	－	88.2
平成23年度	178,414	－	85.7
平成24年度	175,572	－	84.5
平成25年度	160,888	－	79.7
平成26年度	162,276	－	80.8
平成27年度	173,510	－	86.2
平成28年度	175,503	－	87.4
平成29年度	172,483	－	85.9
平成30年度	175,011	－	87.2
令和元年度	167,020	－	83.0
令和2年度	141,327	－	78.5
令和3年度	144,738	－	86.7
令和4年度	142,249	－	83.6
令和5年度	144,293	－	84.5

7. 月別入退院状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：人）

区分 / 月別	入院	退院			月末在籍患者数	延入院患者数
		一般		計		
		退院	死亡			
4月	864	885	30	915	313	11,602
5月	876	808	30	838	351	11,392
6月	915	890	24	914	352	11,259
7月	843	825	30	855	340	12,109
8月	900	846	29	875	365	12,406
9月	833	852	29	881	317	11,977
10月	901	832	45	877	341	11,949
11月	926	861	35	896	371	11,698
12月	863	930	31	961	273	11,840
1月	973	810	31	841	405	12,701
2月	882	854	36	890	397	12,428
3月	892	904	41	945	344	12,932
計	10,668	10,297	391	10,688	－	144,293
比率(%)	－	96.3	3.7	100.0	－	－

入退院患者数の年度別推移

（単位：人）

年度	入院	退院		
		生存退院	死亡	計
平成18年度	10,648	10,193	507	10,700
平成19年度	9,978	9,507	447	9,954
平成20年度	9,346	8,916	470	9,386
平成21年度	8,816	8,916	405	9,321
平成22年度	9,013	8,609	414	9,023
平成23年度	9,150	8,760	414	9,174
平成24年度	9,494	9,098	396	9,494
平成25年度	9,569	9,145	447	9,592
平成26年度	11,576	11,112	456	11,568
平成27年度	13,053	12,512	517	13,029
平成28年度	13,179	12,642	539	13,181
平成29年度	13,135	12,680	566	13,246
平成30年度	12,605	12,105	534	12,639
令和元年度	12,470	11,934	500	12,434
令和2年度	10,552	10,132	443	10,575
令和3年度	11,337	10,786	525	11,311
令和4年度	10,941	10,540	427	10,967
令和5年度	10,668	10,297	391	10,688

8. 平均在院日数

令和5年4月1日～令和6年3月31日

※平均在院日数＝24時在院患者延数/((新入院患者数+退院患者数)/2)　（単位：日）

年 度	一般病棟	精神病棟	眼科(再掲)	リハビリ(再掲)	病院全体
平成18年度	17.9	36.6	3.2	44.9	18.4
平成19年度	19.5	48.0	3.3	45.6	20.2
平成20年度	19.7	43.5	2.8	49.2	20.2
平成21年度	19.2	51.7	2.1	46.8	19.9
平成22年度	18.7	41.6	2.0	51.1	19.3
平成23年度	17.9	38.6	1.8	42.5	18.5
平成24年度	17.0	36.5	1.8	48.0	17.5
平成25年度	15.1	32.7	1.7	48.4	15.8
平成26年度	12.3	31.6	0.9	37.5	13.0
平成27年度	11.7	30.6	0.9	29.8	12.3
平成28年度	11.4	32.0	1.0	24.9	12.3
平成29年度	10.9	34.5	1.0	17.8	12.1
平成30年度	11.7	32.3	1.0	26.7	12.9
令和元年度	11.2	29.9	1.1	26.8	12.4
令和2年度	11.1	34.1	1.0	21.2	12.4
令和3年度	10.7	38.5	1.0	17.5	11.8
令和4年度	11.0	34.1	1.0	20.4	12.0
令和5年度	11.5	33.4	0.9	15.9	12.5

※令和5年度の施設基準平均在院日数は***15.0日*** である。（平成23年度より7対1の施設基準日数）

9. 入院患者の年齢別内訳

令和5年4月1日～令和6年3月31日 （単位:人）

区分 / 年齢階層	男	女	計
90歳以上	401	979	1,380
85～89	761	1,175	1,936
80～84	1,075	1,190	2,265
75～79	942	920	1,862
70～74	735	598	1,333
65～69	391	270	661
60～64	243	194	437
55～59	155	88	243
50～54	119	93	212
50歳未満	218	121	339
計	5,040	5,628	10,668

入院患者の年齢別内訳年度別推移

（単位:上段・人、下段・%）

年 度	60歳未満	60～69歳	70～79歳	80歳以上	計
平成24年度	305	1,145	3,178	4,860	9,488
	3.2	12.1	33.5	51.2	100.0
平成25年度	356	1,177	3,326	4,693	9,552
	3.7	12.3	34.8	49.1	100.0
平成26年度	501	1,308	4,117	5,650	11,576
	4.3	11.3	35.6	48.8	100.0
平成27年度	669	1,538	4,428	6,418	13,053
	5.1	11.8	33.9	49.2	100.0
平成28年度	723	1,755	4,163	6,538	13,179
	5.5	13.3	31.6	49.6	100.0
平成29年度	767	1,621	4,297	6,450	13,135
	5.8	12.3	32.7	49.1	100.0
平成30年度	716	1,494	4,062	6,333	12,605
	5.7	11.9	32.2	50.2	100.0
令和元年度	823	1,218	4,229	6,200	12,470
	6.6	9.8	33.9	49.7	100.0
令和2年度	779	1,087	3,496	5,190	10,552
	7.4	10.3	33.1	49.2	100.0
令和3年度	1,136	1,274	3,506	5,421	11,337
	10.0	11.2	30.9	47.8	100.0
令和4年度	852	1,109	3,358	5,622	10,941
	7.8	10.1	30.7	51.4	100.0
令和5年度	794	1,098	3,195	5,581	10,668
	7.4	10.3	29.9	52.3	100.0

10. 入院患者平均年齢（入院時）

令和5年4月1日～令和6年3月31日 （単位:歳）

男	女	計
75.7	79.8	77.9

11. 地域別入院患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日

(1) 区部

（単位:人）

区名	一般
千代田	10
中央	5
港	4
新宿	52
文京	77
台東	4
墨田	6
江東	20
品川	13
目黒	7
大田	9
世田谷	24
渋谷	7
中野	36
杉並	56
豊島	1,324
北	609
荒川	21
板橋	6,338
練馬	1,141
足立	81
葛飾	9
江戸川	15
区部計	9,868

(2) 市・郡・島しょ部

（単位:人）

市名	一般
八王子市	6
立川市	4
武蔵野市	5
三鷹市	6
青梅	1
府中市	3
調布市	2
町田市	2
小金井市	6
小平市	6
日野市	1
東村山市	2
国分寺市	1
福生	1
東大和市	3
清瀬市	3
東久留米市	3
多摩市	1
西東京市	13
市部計	69
郡部	0
島しょ部	4
市・郡・島しょ部	73

(3) 他県

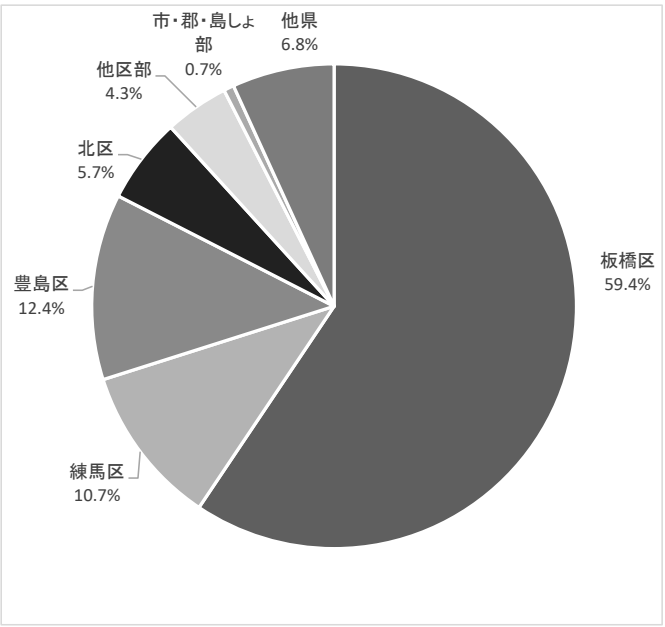
（単位:人）

埼玉	548
神奈川	30
千葉	32
その他	117
他県計	727

総計(1)+(2)+(3)	10,668

（単位・比率:%、人数:人）

地域	比率	人数
板橋区	59.4	6,338
練馬区	10.7	1,141
豊島区	12.4	1,324
北区	5.7	609
他区部	4.3	456
市・郡・島しょ部	0.7	73
他県	6.8	727
合計	100.0	10,668



12. 退院者の在院期間

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:人)

	内科系	リハビリ	外科系			歯科口腔外科	救急科	計	比率(%)
			一般外科	眼科	外科計				
30日以下	5,252	13	2,181	2,176	4,357	58	25	9,705	90.8%
31日以上～60日以下	532	3	279	3	282	0	0	817	7.6%
61日以上～90日以下	72	0	37	0	37	0	0	109	1.0%
91日以上～180日以下	31	0	23	0	23	0	0	54	0.5%
181日以上～365日以下	1	0	2	0	2	0	0	3	0.0%
366日以上	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
合　　計	5,888	16	2,522	2,179	4,701	58	25	10,688	100.0%
比　率（%）	55.1%	0.1%	23.6%	20.4%	44.0%	0.5%	0.2%	100.0%	－

退院者の在院期間年度別推移

(上段:人・下段:割合)

年　度	30日以下	31～60日	61日以上	計
平成18年度	8,502	1,578	620	10,700
	79.5%	14.7%	5.8%	100.0%
平成19年度	7,641	1,670	643	9,954
	76.8%	16.8%	6.5%	100.0%
平成20年度	7,164	1,723	696	9,583
	74.8%	18.0%	7.3%	100.0%
平成21年度	6,732	1,442	581	8,755
	76.9%	16.5%	6.6%	100.0%
平成22年度	7,035	1,361	566	8,962
	76.9%	16.5%	6.6%	100.0%
平成23年度	7,271	1,373	530	9,174
	78.5%	15.2%	6.3%	100.0%
平成24年度	7,619	1,419	454	9,492
	80.3%	14.9%	4.8%	100.0%
平成25年度	7,931	1,242	414	9,587
	82.7%	13.0%	4.3%	100.0%
平成26年度	10,068	1,241	259	11,568
	87.0%	10.7%	2.2%	100.0%
平成27年度	11,439	1,336	254	13,029
	87.8%	10.3%	1.9%	100.0%
平成28年度	11,540	1,362	279	13,181
	87.6%	10.3%	2.1%	100.0%
平成29年度	11,569	1,362	259	13,190
	87.7%	10.3%	2.0%	100.0%
平成30年度	10,977	1,352	336	12,665
	86.7%	10.7%	2.7%	100.0%
令和元年度	11,447	796	191	12,434
	92.1%	6.4%	1.5%	100.0%
令和2年度	9,529	852	194	10,575
	90.1%	8.1%	1.8%	100.0%
令和3年度	10,289	841	181	11,311
	91.0%	7.4%	1.6%	100.0%
令和4年度	10,010	794	163	10,967
	91.3%	7.2%	1.5%	100.0%
令和5年度	9,705	817	166	10,688
	90.8%	7.6%	1.6%	100.0%

入院患者の死亡状況

13. 死亡者内訳及び剖検数

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:人)

項目 / 月	一般患者		救急外来患者		計		他病院からの受入件数
	死亡者数	うち剖検数	死亡者数	うち剖検数	死亡者数	うち剖検数	剖検数
4 月	30	2	5	0	35	3	1
5 月	30	1	3	0	33	1	0
6 月	24	1	3	0	27	3	2
7 月	30	2	4	0	34	2	0
8 月	29	1	2	0	31	1	0
9 月	29	3	2	0	31	4	1
10 月	45	4	7	0	52	6	2
11 月	35	4	4	0	39	4	0
12 月	31	4	9	0	40	6	2
1 月	31	2	9	0	40	5	3
2 月	36	8	5	0	41	9	1
3 月	41	3	7	1	48	4	0
合計	391	35	60	1	451	48	12
剖検率	9.0%		1.7%		10.6%		

死亡者、死亡率の年度別推移

年 度	退院患者数(人)	死亡退院患者数(人)	合計	死亡率(%)
平成25年度	9,145	447	9,592	4.7%
平成26年度	11,112	456	11,568	3.9%
平成27年度	12,512	517	13,029	4.0%
平成28年度	12,642	539	13,181	4.1%
平成29年度	12,625	565	13,190	4.3%
平成30年度	12,105	534	12,639	4.2%
令和元年度	11,934	500	12,434	4.0%
令和2年度	10,132	443	10,575	4.2%
令和3年度	11,934	525	12,434	4.2%
令和4年度	10,540	427	10,967	3.9%
令和5年度	10,297	391	10,688	3.7%

$$\text{死亡率} = \frac{\text{死亡退院患者数}}{\text{退院患者合計数（死亡退院も含む）}} \times 100$$

14. 年齢別死亡者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日 （単位:人）

区分 / 年齢階層	計	比率
60歳未満	24	6.1%
60～64	15	3.8%
65～69	27	6.9%
70～74	37	9.5%
75～79	48	12.3%
80～84	83	21.2%
85～89	75	19.2%
90歳以上	82	21.0%
計	391	100.0%
平均年齢	80.3	

死亡者の平均年齢の推移

（単位:歳）

年度	計
平成28年度	79.8
平成29年度	80.5
平成30年度	80.5
令和元年度	81.1
令和2年度	79.8
令和3年度	80.9
令和4年度	81.4
令和5年度	80.3

年齢別死亡者数の推移

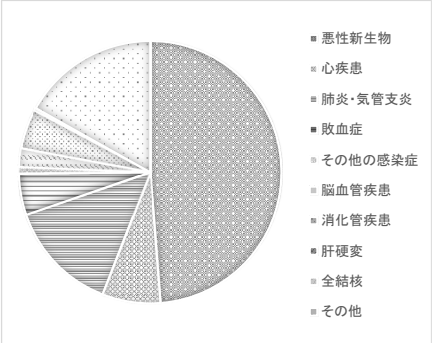
（単位:人）

年度	60歳未満		60～69歳		70～79歳		80歳以上		計	
平成28年度	30	5.6%	65	12.1%	110	20.4%	334	62.0%	539	100.0%
平成29年度	26	4.6%	51	9.0%	144	25.5%	344	60.9%	565	100.0%
平成30年度	15	2.8%	74	13.9%	135	25.3%	310	58.1%	534	100.0%
令和元年度	25	5.0%	43	8.6%	127	25.4%	305	61.0%	500	100.0%
令和2年度	26	5.9%	48	10.8%	114	25.7%	255	57.6%	443	100.0%
令和3年度	27	5.1%	47	9.0%	136	25.9%	315	60.0%	525	100.0%
令和4年度	19	4.4%	29	6.8%	112	26.2%	267	62.5%	427	100.0%
令和5年度	24	6.1%	42	10.7%	85	21.7%	240	61.4%	391	100.0%

15. 死亡原因別死亡者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：人）

死因	死亡者数	比率(%)
悪性新生物	191	48.8
心疾患	28	7.2
肺炎・気管支炎	54	13.8
敗血症	20	5.1
その他の感染症	3	0.8
脳血管疾患	9	2.3
消化管疾患	19	4.9
肝硬変	1	0.3
全結核	0	0.0
その他	66	16.9
計	391	100.0



死亡原因比率の年度別推移

（単位：%）

死亡原因＼年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
悪性新生物	39.2	38.4	37.6	30.4	39.4	27.1	30.8	44.3	44.9	50.7	54.7	57.3	57.1	51.6	56.2	50.1	52.0	48.8
肺炎・気管支炎	20.1	19.2	22.2	11.6	7.9	7.7	6.8	7.1	7.2	11.8	7.6	3.9	7.9	13.8	9.9	7.8	9.1	13.8
心疾患	8.9	9.9	9.7	10.9	10.3	10.1	12.4	8.2	9.1	9.7	6.5	7.1	8.1	8.8	11.3	9.9	7.7	7.2
脳血管疾患	10.4	9.6	5.7	8.8	7.0	7.2	7.3	4.7	4.8	1.9	4.1	4.6	2.6	5.0	2.3	2.5	2.3	2.3
計	78.6	77.1	75.2	61.7	64.6	52.1	57.3	64.3	66	74.1	72.9	72.9	75.7	79.2	79.7	70.3	71.1	72.1

16. 死亡者の入院期間

（単位：人）

期間＼	計	比率
1日	17	4.3%
2日～7日	81	20.7%
8日～30日	170	43.5%
～90日	111	28.4%
～180日	11	2.8%
～365日	1	0.3%
計	391	100.0%
平均在院期間	26.9	－

部署別業務状況

17.手術件数

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:人)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
手術件数	外科	40	46	47	32	47	43	51	50	55	43	37	40	531
	血管外科	21	16	9	21	15	12	13	24	15	16	20	26	208
	脳神経外科	17	27	22	17	28	25	19	12	16	23	25	20	251
	整形外科	30	28	24	29	28	25	36	36	29	28	32	30	355
	脊椎外科	11	15	13	18	13	9	15	10	7	18	18	17	164
	泌尿器科	28	27	25	28	28	36	27	29	28	35	29	29	349
	呼吸器内科	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	眼科	181	182	190	174	160	152	189	208	183	189	184	189	2181
	耳鼻咽喉科	6	6	5	6	7	4	7	4	5	6	5	3	64
	精神科	1	13	19	44	51	31	18	9	23	19	18	10	256
	麻酔科	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	循環器内科	6	13	11	7	15	11	13	8	4	12	6	3	109
	皮膚科	3	1	0	2	1	0	1	4	2	3	2	0	19
	心臓血管外科	6	6	5	9	5	9	12	9	9	5	10	7	92
	呼吸器外科	10	8	8	6	6	10	8	10	11	9	9	9	104
	歯科口腔外科	0	2	1	0	0	1	1	0	1	0	1	0	7
	消化器内科	0	0	1	0	0	0	1	2	1	2	1	0	8
	脳神経内科	1	0	3	2	5	1	0	0	1	0	0	1	14
	血液内科	0	1	0	1	1	1	1	0	1	0	1	1	8
	腎臓内科	6	4	5	3	2	4	3	2	3	9	7	5	53
	リハビリテーション科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	369	396	388	399	412	375	415	417	394	417	405	390	4777

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:人)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
緊急手術件数	外科	9	8	7	3	5	4	6	7	6	6	3	10	74
	血管外科	2	1	2	4	2	2	2	5	2	4	4	5	35
	脳神経外科	4	9	3	2	7	7	5	3	5	11	12	5	73
	整形外科	2	1	0	0	1	0	0	2	1	1	0	0	8
	脊椎外科	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	3
	泌尿器科	2	5	0	2	3	5	1	2	5	1	2	0	28
	呼吸器内科	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	眼科	2	1	0	1	1	0	1	1	2	1	0	1	11
	耳鼻咽喉科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	精神科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	麻酔科	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	循環器内科	0	0	1	2	2	2	2	1	1	3	0	0	14
	皮膚科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	心臓血管外科	2	1	0	4	1	3	3	2	3	1	5	4	29
	呼吸器外科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	歯科口腔外科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	消化器内科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	脳神経内科	0	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	5
	血液内科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	腎臓内科	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	4
	リハビリテーション科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	26	27	14	22	24	26	20	23	25	29	29	25	290

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：人）

			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
麻酔科関与・非関与別手術件数	外科	関与	32	36	36	27	35	33	43	43	41	33	29	31	419
		非関与	8	10	10	5	12	10	8	7	14	10	8	9	111
		合計	40	46	46	32	47	43	51	50	55	43	37	40	530
	血管外科	関与	7	8	4	9	3	3	4	8	8	8	7	8	77
		非関与	14	8	5	12	12	9	9	16	7	8	13	18	131
		合計	21	16	9	21	15	12	13	24	15	16	20	26	208
	脳神経外科	関与	8	12	10	12	15	21	12	9	10	10	15	11	145
		非関与	9	15	12	5	13	4	7	3	6	13	10	9	106
		合計	17	27	22	17	28	25	19	12	16	23	25	20	251
	整形外科	関与	27	24	21	26	22	21	26	28	24	21	29	27	296
		非関与	3	4	3	3	6	4	10	8	5	7	3	3	59
		合計	30	28	24	29	28	25	36	36	29	28	32	30	355
	脊椎外科	関与	10	14	12	12	11	9	14	10	7	15	17	15	146
		非関与	1	1	1	6	2	0	1	0	0	3	1	2	18
		合計	11	15	13	18	13	9	15	10	7	18	18	17	164
	泌尿器科	関与	20	22	19	21	21	23	19	21	15	27	22	23	253
		非関与	8	5	6	7	7	13	8	8	13	8	7	6	96
		合計	28	27	25	28	28	36	27	29	28	35	29	29	349
	眼科	関与	1	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	5
		非関与	180	182	189	173	159	152	189	208	183	188	184	189	2176
		合計	181	182	190	174	160	152	189	208	183	189	184	189	2181
	耳鼻咽喉科	関与	6	6	5	5	5	2	6	3	4	5	5	3	55
		非関与	0	0	0	1	2	2	1	1	1	1	0	0	9
		合計	6	6	5	6	7	4	7	4	5	6	5	3	64
	精神科	関与	1	13	19	44	51	31	18	9	23	19	18	10	256
		非関与	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計	1	13	19	44	51	31	18	9	23	19	18	10	256
	循環器内科	関与	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		非関与	6	13	11	7	15	11	13	7	4	12	6	3	108
		合計	6	13	11	7	15	11	13	8	4	12	6	3	109
	心臓血管外科	関与	5	5	5	8	5	9	11	9	9	5	10	7	88
		非関与	1	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	4
		合計	6	6	5	9	5	9	12	9	9	5	10	7	92
	呼吸器外科	関与	10	8	8	6	6	10	8	10	11	9	9	8	103
		非関与	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
		合計	10	8	8	6	6	10	8	10	11	9	9	9	104
	その他	関与	1	3	1	1	1	3	2	0	2	0	2	1	17
		非関与	11	6	9	7	8	5	5	8	7	14	10	7	97
		合計	12	9	10	8	9	8	7	8	9	14	12	8	114
	計	関与	128	151	141	172	176	165	163	151	154	153	163	144	1861
		非関与	241	245	246	227	236	210	252	266	240	250	242	247	2902
		合計	369	396	387	399	412	375	415	417	394	417	405	391	4777

18. 疾病別手術件数

外　科

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

部位		術式	件数
乳腺	悪性	乳房切除	9
食道胃接合部	悪性	左開胸下部食道切除	1
胃・十二指腸	悪性	胃全摘術（残胃全摘含む）	8
		胃切除術	16
		腹腔鏡下胃切除術	1
	GIST	腹腔鏡下胃部分切除術	2
	穿孔	洗浄ドレナージ、単純閉鎖	6
虫垂	虫垂炎	虫垂切除術	1
		腹腔鏡下虫垂切除	13
結腸・直腸	悪性	開腹結腸切除術	22
		腹腔鏡下切除術	45
		（低位）前方切除術	1
		腹腔鏡下前方切除術	2
		Miles, ISR	1
		腹腔鏡下Miles, ISR 手術	2
	良性	切除	10
		人工肛門造設術	28
		人工肛門閉鎖術	5
	S状結腸捻転	結腸切除術	2
肛門		直腸脱手術	4
		内痔核	8
肝・胆・膵	悪性	肝切除術	11
		腹腔鏡下肝切除術	3
		膵体尾部切除術	1
		腹腔鏡下膵体尾部切除術	2
		膵頭十二指腸切除術	7
	良性	胆嚢摘出術（開腹）	1
		胆嚢摘出術（腹腔鏡）	70
		脾臓摘出	2
ヘルニア		鼠径ヘルニア根治術（前方アプローチ）	68
		鼠径ヘルニア根治術（腹腔鏡）	11
		大腿ヘルニア根治術（前方アプローチ）	5
		腹壁瘢痕ヘルニア根治術	2
		臍ヘルニア根治術	2
		閉鎖孔ヘルニア	8
		食道裂孔ヘルニア	2
		ポートサイトヘルニア	1
イレウス		イレウス解除術	8
		腹腔鏡下癒着剥離術	1
	絞扼	イレウス解除術（腸管切除含む）	13
		バイパス術	8
その他		CVポート挿入術・抜去	24
		内視鏡下胃瘻造設	63
		全麻手術	19
		局麻手術	27
計			546

総手術件数　546件
内緊急手術　 77件

脳神経外科（中央手術室、血管撮影室で行われた手術）

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
脳腫瘍・脊髄腫瘍	11
脳動脈瘤・脳動静脈奇形（開頭術）	8
脳出血・脳梗塞（開頭術）	12
頸動脈狭窄（頸動脈内膜剥離術）	11
脳動脈瘤・血管奇形等（血管内手術）	15
頸動脈狭窄（血管内治療）	13
その他の血管内治療（急性期再開通）	17

術式	件数
慢性硬膜下血腫	48
外傷性疾患(血腫除去)	2
シャント・ドレナージ	55
脳血管バイパス術	5
その他	13
計	210

皮膚科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
皮膚良性腫瘍切除術	12
皮膚悪性腫瘍切除術	5

術式	件数
その他	2
計	19

整形・脊椎外科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
大腿骨頸部骨折	
骨接合術（CCHS）	5
骨接合術（γネイル）	42
人工骨頭置換術	40
小計	87
その他の骨折	
その他の骨折	56
（手外科関連　件再掲）	34
人工関節手術	
人工膝関節	85
人工膝関節（単顆型）	1
人工股関節	60
人工肩関節	0
小計	146
脊椎関連手術	
頚椎	26
胸椎	6
腰椎	71
経皮的後弯矯正術	22
椎体生検	8
仙骨骨折	4
脊髄腫瘍	4
ヘルニコア	3
小計	144

術式	件数
手外科手術	
手根管症候群	39
肘部管症候群	7
神経剥離・移植	1
腫瘍切除	3
デュプイトレン拘縮	1
腱	3
骨折	34
胸郭出口症候群	0
ばね指	6
その他	0
小計	95
デブリドマン	12
その他	22

合計　528件

泌尿器科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数	術式	件数
膀胱癌	76	前立腺生検	63
前立腺癌	4	腎嚢胞穿刺	2
膀胱結石	9	尿管ステント交換	84
前立腺肥大	42	膀胱直腸瘻閉鎖	1
腎腫瘍	10	膀胱瘻増設	1
腎瘻増設術	18	RP	17
腎盂尿管腫瘍	5	その他	17
尿管鏡	2	計	374
尿管結石(TUL)	15		
尿道狭窄	6		
去勢術	2		

眼科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月 1 日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
白内障関連	1,584
硝子体関連	63
緑内障関連	46
外眼部関連	32
硝子体注射関連	457
計	2,182

眼科（中央手術室以外で行われた手術）

令和5年4月 1 日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
マルチカラーレーザー	200
ヤグレーザー	118
計	318

耳鼻咽喉科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月 1 日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数	術式	件数
鼓室形成術	10	喉頭微細手術	1
顔面神経減圧術	1	口蓋扁桃摘出術	10
内視鏡下鼻内手術	26	気管切開術	6
鼻中隔矯正術	9	気管切開孔閉鎖術	3
頸部リンパ節生検	5	計	71

歯科口腔外科（中央手術室で行われた手術）

令和5年4月 1 日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
顎骨腫瘍摘出術	2
開窓術	1
埋伏抜歯術(埋伏過剰歯含む)	7
口蓋隆起形成術	1
顎下腺管内唾石摘出術	1
計	12

歯科口腔外科（中央手術室以外で行われた手術）

令和5年4月 1 日～令和6年3月31日（単位：件）

術式	件数
抜歯手術	966
難抜歯(智歯含む)	615
歯根嚢胞摘出手術(歯冠大)	27
腐骨除去手術(歯槽部)	19
顎関節脱臼非観血的整復術・歯	16
顎骨腫瘍摘出術(3cm未満)	11
顎炎等手術1／3顎未満	7
その他	89
計	1,750

19. リハビリテーション取扱実績

令和5年4月1日～令和6年3月31日

項目			患者数(人)	1ヶ月平均
訓練内訳	理学療法（PT）	入院	26,036	2169.7
		外来	89	7.4
		計	26,125	2177.1
	作業療法（OT）	入院	9,609	800.8
		外来	118	9.8
		計	9,727	810.6
	言語療法（ST）	入院	4,621	385.1
		外来	67	5.6
		計	4,688	390.7
	心理療法	入院	3,214	267.8
		外来	167	13.9
		計	3,381	281.8
訓練計		入院	43,480	3623.3
		外来	441	36.8
		計	43,921	3660.1
補装具製作		製作	71	5.9
		修理	49	4.1
		計	120	10.0

20. 理学療法実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

		入院	外来	計
脳血管	人数	6,779	83	6,862
	単位	12,253	166	12,419
	加算	9,209	0	9,209
廃用	人数	5,150	0	5,150
	単位	9,066	0	9,066
	加算	5,999		5,999
運動器	人数	8,911	5	8,916
	単位	18,508	7	18,515
	加算	14,451		14,451
呼吸器	人数	2,179	0	2,179
	単位	3,780	0	3,780
	加算	2,835		2,835
心大血管	人数	2,909	0	2,909
	単位	5,263	0	5,263
	加算	4,347		4,347
がん患者	人数	0		0
	単位	0		0
緩和ケア	人数	83		83
	単位	130		130
患者数		26,011	88	26,099
単位数		49,000	173	49,173
早期加算件数		36,841		36,841

21.作業療法実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

		入院	外来	計
脳血管	人数	6,052	55	6,107
	単位	10,874	104	10,978
	加算	8,211	0	8,211
廃用	人数	1,962	0	1,962
	単位	3,672	0	3,672
	加算	2,497		2,497
運動器	人数	1,080	62	1,142
	単位	2,135	104	2,239
	加算	1,525		1,525
呼吸器	人数	371	0	371
	単位	661	0	661
	加算	497		497
心大血管	人数	126	0	126
	単位	201	0	201
	加算	131		131
がん患者	人数	0		0
	単位	0		0
緩和ケア	人数	18		18
	単位	32		32
患者数		9,609	117	9,726
単位数		17,575	208	17,783
早期加算件数		12,861		12,861

22.言語療法実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

		入院	外来	計
脳血管	人数	3,420	62	3,482
	単位	5,574	168	5,742
	加算	4,230	0	4,230
廃用	人数	712	0	712
	単位	1,028	0	1,028
	加算	673		673
呼吸器	人数	413	0	413
	単位	587	0	587
	加算	448		448
心大血管	人数			0
	単位			0
	加算			0
がん患者	人数	0		0
	単位	0		0
	加算			0
摂食機能療法	人数	6		6
	単位	6		6
緩和ケア	人数	0		0
	単位	0		0
患者数		4,551	62	4,613
単位数		7,195	168	7,363
早期加算件数		5,351	0	5,351

23.心理検査等取扱件数

令和5年4月1日～令和6年3月31日

項目	入院	外来	合計
知能検査(極複雑)	0	0	0
知能検査(複雑)	0	0	0
知能検査(容易)	178	1	179
人格検査(極複雑)	0	0	0
人格検査(複雑)	0	0	0
人格検査(容易)	3	0	3
その他の心理検査(極複雑)	6	1	7
その他の心理検査(複雑)	217	76	293
その他の心理検査(容易/その他)	432	43	475
その他の心理検査(容易/MMSE)	177	7	184
合計	1,013	128	1,141

24. 調剤実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

	区 分	入院	外来	合計
1 処方箋枚数	院内処方箋枚数	89,501	3,954	93,455
	院外処方箋枚数		103,849	103,849
	小計	89,501	107,803	197,304
	院外処方箋発行率		96.3%	
	注射処方箋枚数	83,630	18,131	101,761
	合計	173,131	125,934	299,065

	2-(1)処方調剤						
	区 分		入 院		外 来		合 計	
			件数	剤数	件数	剤数	件数	剤数
2 調剤数	内用	散剤	14,853	88,402	1,081	3,499	15,934	91,901
		錠剤	197,953	1,312,245	5,744	70,885	203,697	1,383,130
		水剤	3,409	14,111	1,316	1,502	4,725	15,613
		頓服	6,827	49,703	1,348	8,405	8,175	58,108
		小 計	223,042	1,464,461	9,489	84,291	232,531	1,548,752
	外用	湿布・含嗽・吸入・洗浄	6,961	24,946	309	1,910	7,270	26,856
		軟膏・散剤・坐剤	7,395	31,529	149	735	7,544	32,264
		点眼耳鼻剤	9,550	26,204	28	46	9,578	26,250
		小 計	23,906	82,679	486	2,691	24,392	85,370
	注射剤(在宅注射等)		3,227	3,500	24	25	3,251	3,525
	計		250,175	1,550,640	9,999	87,007	260,174	1,637,647
	2-(2)注射処方せんによる調剤							
	個人セット調剤		299,548	565,026	25,415	38,777	324,963	603,803
	調剤計		549,723	2,115,666	35,414	125,784	585,137	2,241,450

25. 製剤実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:剤)

内用	散 剤 500g	1,686	外用	軟 膏 g	1,612
	水 剤 500ml	8		点眼・耳鼻 5mlまたは5g	196
	頓 剤 1回分	13,923		小 計	2,197
	小 計	15,617		滅菌外用剤 50ml	6,779
外用	散 剤 500g	0		注射剤 50ml	100
	水 剤 500ml	389		合 計	6,879

26. 院外処方箋発行率

年 度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
院外処方箋枚数	128,852	113,718	115,594	111,235	103,849
外来処方箋総枚数	132,700	117,149	120,154	115,860	107,803
院外処方箋発行率(%)	97.1%	97.1%	96.2%	96.0%	96.3%

27. 薬品管理状況

(1) 採用薬品品目数

令和6年3月31日現在

区分	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
注射薬	621	634	641	607	687
内用薬	739	755	764	731	776
外用薬	250	251	261	241	254
その他	0	0	0	0	0
計	1,610	1,640	1,666	1,579	1,717

※ 緊急購入薬品は含まない

※ 平成22年度より薬価未収載薬品も含め、保険薬事典に準じた区分とする。

(2) 薬品入出庫状況

区分	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
入庫件数	23,133	21,651	22,510	19,152	19,014
出庫件数	268,966	250,388	261,096	246,354	249,858

28.薬効別薬品使用比率(薬価)

令和5年4月1日～令和6年3月31日

薬 効 名	金 額(薬価)	比 率 (%)
精神神経用剤	91,827,572.90	4.6%
循環器用剤	46,003,810.40	2.3%
呼吸器官用剤	49,085,541.00	2.5%
消化器官用剤	21,295,182.26	1.1%
外皮用剤	4,724,307.60	0.2%
ビタミン剤	3,249,475.00	0.2%
滋養強壮剤	26,066,192.20	1.3%
血液・体液用剤	141,147,942.00	7.1%
抗悪性腫瘍剤	690,828,053.70	34.9%
抗生物質・抗菌剤	234,466,271.94	11.8%
生物学的製剤	273,766,543.10	13.8%
その他	396,488,512.40	20.0%
合 計	1,978,949,404.50	100%

29.麻薬取扱状況

区分	品名	単位	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
	ペチジン塩酸塩注射液35mg	A	99	123	178	155	326
	塩酸モルヒネ注10mg	A	197	363	530	342	353
	塩酸モルヒネ注50mg	A	334	553	675	176	104
	塩酸モルヒネ注200mg	A	107	76	116	73	35
	フェンタニル注射液0.1mg「テルモ」	A	1,328	9,728	13,085	7,609	9,412
	レミフェンタニル静注用20mg		893	1,013	1,001	1,207	1,577
	オキファスト注10mg	A	990	1,208	978	1,100	983
	オキファスト注50mg	A	805	741	607	1,405	1,271
	ナルベイン注20mg	A	1,976	1,406	1,530	1,637	740
	ケタラール静注用50mg	A	439	44	10	84	139
	ケタラール筋注用500mg	V	46	45	19	46	3
内用剤	アブストラル舌下錠100μg	T	154	251	512	81	60
	アブストラル舌下錠200μg	T	216	22	445	0	195
	アヘンチンキ	mL	－	212	131	0	144
	MSコンチン錠10mg	T	501	1,415	816	391	148
	MSコンチン錠30mg	T	158	486	976	126	76
	オキシコドン徐放錠5mg	T	11,316	8,041	－	－	－
	オキシコドン徐放錠5mgNX	T	－	4,318	8,529	12,904	9,794
	オキシコドン徐放錠20mg	T	1,182	1,809	－	－	－
	オキシコドン徐放錠20mgNX	T	－	340	1,353	887	1,189
	オキシコドン徐放錠40mg	T	799	906	258	－	－
	オキシコドン徐放錠40mgNX	T	－	－	794	118	382
	オキシコンチンTR錠5mg	T	－	－	22	131	188
	オキシコンチンTR錠20mg	T	－	－	－	58	0
	オプソ内服液　5mg	包	387	511	384	213	113
	オプソ内服液　10mg	包	75	329	657	310	112
	メサペイン錠　5mg	T	1,175	1,536	930	332	378
	メサペイン錠　10mg	T	1,774	2,304	1,928	363	1,423
	ナルサス錠　2mg	T	988	757	631	1,232	990
	ナルサス錠　6mg	T	－	－	－	－	83
	ナルサス錠　12mg	T	0	23	0	－	－
	ナルサス錠　24mg	T	0	0	174	0	106
	ナルラピド錠　1mg	T	－	－	－	－	206
	ナルラピド錠　4mg	T	30	40	0	－	－
	オキノーム散　2.5mg	包	3,114	2,761	3,003	2,741	2,571
	オキノーム散　5mg	包	1,620	1,708	1,030	1,857	1,366
	オキノーム散　10mg	包	508	568	415	92	262
	オキノーム散　20mg	包	592	625	1,045	130	623
	モルペス細粒2%(10mg0.5g)	包	866	750	136	－	－
	モルペス細粒6%(10mg0.5g)	包	－	347	26	148	15
	コデインリン酸塩散10%	g	263	60	338	138	269
	モルヒネ硫酸塩水和物徐放細粒分包10mg「フジモト」	包	－	－	54	222	8
	モルヒネ硫酸塩水和物徐放細粒分包30mg「フジモト」	包	－	－	－	－	48
	モルヒネ塩酸塩水和物	g	10	8	0	－	5
	モルヒネ塩酸塩水和物1%	g	485	480	12	6	83
外用剤	アンペック坐剤10mg	個	53	30	75	62	26
	デュロテップMTパッチ2.1mg	枚	4	14	18	16	0
	フェントステープ0.5mg	枚	727	775	1,242	764	526
	フェントステープ1mg	枚	1,179	846	1,091	1,002	312
	フェントステープ2mg	枚	620	844	616	212	261
	フェントステープ4mg	枚	184	661	456	90	112

30.向精神薬・覚醒剤原料取扱業務

		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
向精神薬取扱件数	内用・外用	624	448	346	273	329
	注射	2,468	2,379	2,368	2,109	2,267
覚醒剤原料取扱件数	内用・外用	70	70	40	36	21

31.外来服薬指導実施状況

(1) 月別患者数

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:人)

月別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
患者数	138	180	159	187	198	167	138	159	147	187	141	108	1,909

(2) 項目別相談件数

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:件)

総合相談	薬の変更	薬 効	用 法	副作用	院外説明	その他	合計
0	0	1,307	1,809	264	0	657	4,037

32. 外来がん患者指導業務

(単位:件)

年 度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
指導件数	595	546	880	846	808
がん患者指導管理料ハ算定件数	152	161	282	17	8
連携充実加算算定件数	―	225	481	425	415
抗がん剤電話サポート件数	20	28	43	11	1

33.病棟業務実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:件)

区　　分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
服薬指導回数	1,285	1,270	1,462	1,335	1,455	1,317	1,472	1,427	1,339	1,420	1,404	1,356	16,542
薬剤管理指導料													
325点算定件数	524	556	588	528	579	490	523	587	573	579	550	536	6,613
380点算定件数	490	475	530	529	541	522	620	522	418	528	449	488	6,112
麻薬加算件数	10	7	5	7	7	15	5	8	7	9	3	1	84
退院時薬剤情報管理指導料算定件数	152	109	142	130	121	117	125	137	157	120	146	152	1,608

*薬剤管理指導実施病棟:

ICU/CCU、SCU

5東(心臓外科、呼吸器外科、循環器内科、外科)

5西(循環器内科)

6東(整形外科、脊椎外科、泌尿器科、耳鼻科)

6西(地域包括ケア病棟、総合内科、リハビリテーション科、在宅医療連携)

7東(眼科、外科、血管外科)

7西(外科、血管外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科)

8東(膠原病・リウマチ科、脳血管外科、皮膚科)

8西(消化器内科、外科、血管外科)

9東(コロナ対応病床)

9西(10月までコロナ対応病床、糖尿病・代謝・内分泌内科、歯科口腔外科)

10東(コロナ対応病床)

10西(脳神経内科、脳卒中科)

11東(精神科)

11西(血液内科、化学療法科、輸血・免疫療法科)

12階(緩和ケア内科)

34.無菌製剤(抗がん剤・TPN・末梢点滴混注)処方箋取扱数

(単位:枚)

年　度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
枚数	6,615	7,132	7,566	7,312	7,333

35.医薬品情報業務

(単位:枚)

年　　度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
情報収集件数	484	452	821	632	1462
情報提供件数	548	498	586	443	724
情報誌発行件数	5	6	6	4	6
薬事委員会取扱件数	339	300	321	304	265

36. 輸血用血液およびアルブミン製剤取扱状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

製 剤 名	取扱数(延べ)	取扱数(実数)	使用数	使用率(%)
赤血球濃厚液	7,593	6,584	6,446	97.9%
洗浄赤血球	0	0	0	0.0%
新鮮凍結血漿	1,956	1,630	1,516	93.0%
濃厚血小板	11,510	11,365	11,355	99.9%
HLA適合血小板	180	180	180	100.0%
自己血	234	223	210	94.2%
輸血用血液 合計	21,473	19,982	19,707	98.6
5%アルブミン (本)	794	790	735	93.0%
20%アルブミン (本)	1,450	1,453	1,412	97.2%
アルブミン製剤 合計	2,244	2,243	2,147	95.7

・輸血用血液は200mlを1単位として算出した。

・使用数について前年度と比較し、赤血球製剤4％増、新鮮凍結血漿16％増、血小板製剤7%減、自己血23％減であった。

・アルブミン製剤については5%製剤は10%増、20%製剤は7%増で全アルブミン製剤の使用グラム数は23,3075gであった。

・使用率については自己血が前年比4%増加し、年々増加している。

37.病理学的業務実施状況

(1) 病理解剖

項　　目	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
件数	63	43	50	56	48
作製ブロック数(個)	7,208	4,349	4,770	5,172	4,972
ガラス標本数(枚)	20,136	14,003	15,082	17,240	16,580
肉眼・顕微鏡写真(枚)	5,715	8,004	5,415	6,761	6,537

平成28年度以前は神経病理分を含まない。

(2) 手術・生検組織学的検査

項　　目	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
件数	3,154	2,919	2,871	2,641	3,007
作製ブロック数(個)	8,701	7,662	8,326	7,807	9,062
ガラス標本数(枚)	28,605	25,037	21,603	20,490	23,370
肉眼・顕微鏡写真(枚)	5,413	9,159	7,366	6,764	8,495

(3) 細胞診

項　　目	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
件数	1,723	1,641	1,579	1,596	1,549
ガラス標本数(枚)	3,685	3,416	3,189	3,082	3,214
顕微鏡写真(枚)	1,775	1,413	1,465	1,599	1,525
術中迅速(件)	—	60	52	43	94

(4) 特殊検査

項　　目	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
術中迅速	100	103	95	79	134
免疫染色	966	985	810	832	873
電子顕微鏡検査	139	246	40	18	26
検査中迅速(ROSE)	20	17	15	9	12

(5) 診療科別剖検率一覧 (暦年)

	令和元年度			令和2年度			令和3年度			令和4年度			令和5年度		
循環器内科	11	76	(14.5%)	4	62	(6.5%)	6	60	(10.0%)	5	50	(10.0%)	7	50	(14.0%)
脳神経内科	3	15	(20.0%)	4	21	(19.0%)	7	31	(22.6%)	8	32	(25.0%)	5	18	(27.8%)
呼吸器内科	0	32	(0.0%)	1	26	(3.8%)	0	29	(0.0%)	1	26	(3.8%)	4	34	(11.8%)
消化器内科	4	45	(8.9%)	2	26	(7.7%)	4	40	(10.0%)	6	33	(18.2%)	3	27	(11.1%)
血液内科	4	22	(18.2%)	2	16	(12.5%)	3	32	(9.4%)	3	20	(15.0%)	3	21	(14.3%)
総合診療科・	0	18	(0.0%)	1	16	(6.3%)	1	22	(4.5%)	0	12	(0.0%)	1	19	(5.3%)
糖尿病・代謝・	6	19	(31.6%)	2	13	(15.4%)	2	22	(9.1%)	1	7	(14.3%)	0	11	(0.0%)
緩和ケア科	4	172	(2.3%)	2	179	(1.1%)	1	180	(0.6%)	0	166	(0.0%)	0	133	(0.0%)
外科	4	19	(21.1%)	3	16	(18.8%)	5	24	(20.8%)	7	20	(35.0%)	2	26	(7.7%)
心臓血管外科	5	14	(35.7%)	4	9	(44.4%)	5	14	(35.7%)	2	4	(50.0%)	5	8	(62.5%)
脳神経外科	1	16	(6.3%)	0	11	(0.0%)	0	16	(0.0%)	1	13	(7.7%)	0	8	(0.0%)
泌尿器科	1	7	(14.3%)	3	11	(27.3%)	1	5	(20.0%)	3	5	(60.0%)	0	4	(0.0%)
その他	8	45	(17.8%)	3	37	(8.1%)	4	50	(8.0%)	5	39	(12.8%)	5	32	(15.6%)
院内合計	51	500	(10.2%)	31	443	(7.0%)	39	525	(7.4%)	42	427	(9.8%)	35	391	(9.0%)
総計※	47			60			43			56			48		

※総計には救急外来患者と外部医療機関からの委託解剖を含む。

38. 臨床検査実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日（単位：件）

区分	検査名	総件数
一般	尿定性	31,625
	尿沈渣（鏡検）	22,113
	糞便検査	1,000
	穿刺液	559
	小計	55,297
血液	末梢血液一般	101,609
	血液像（鏡検）	63,179
	出血・凝固検査	30,832
	骨髄像検査	213
	細胞採取液（鏡検）	21
	穿刺液	152
	穿刺液（鏡検）	121
	その他（混和試験・凝集能等）	0
	小計	196,127
臨床化学		115,303
免疫血清		8,157
一般細菌	泌尿器系	2,986
	呼吸器系	3,151
	消化器系	735
	血液・骨髄血	6,860
	穿刺液	357
	その他の部位	581
迅速抗酸菌	尿中抗原	348
	インフルエンザ	478
	抗酸菌培養	891
	結核PCR	160
	MACPCR	163
	小計	16,710
新型コロナ	院内（ＰＣＲ＋抗原）	12,383
	院内（研究所）	209
	院外（外部委託）	0
	小計	12,592

区分	検査名	総件数
生理機能	心電図	19,396
	自律神経	920
	血圧脈波	1,653
	運動負荷	39
	肺機能	886
	SAS	164
	脳波	313
	筋・神経	490
	心エコー	7,165
	腹部エコー	2,575
	体表エコー	1,305
	頸動脈エコー	1,152
	血管エコー	2,438
	平衡機能	0
	耳鼻科	2,100
	小　計	40,596
輸血	ABO血液型	3,164
	交差（血液型）	3,306
	交差適合試験	3,351
	Coombs試験（直接）	141
	Coombs試験（間接）	93
	不規則抗体（血液型）	3,177
	不規則抗体（交差）	3,119
	小計	16,351

採血業務	（外来採血） 59,641
総件数	520,774

39.放射線部門取扱数

令和5年4月1日～令和6年3月31日

区分			患者数						件数						保険点数
						再掲						再掲			
			計	入院	外来	ﾎﾟｰﾀﾌﾞﾙ	時間外	ﾃﾞｼﾞﾀﾙ加算	計	入院	外来	ﾎﾟｰﾀﾌﾞﾙ	時間外	ﾃﾞｼﾞﾀﾙ加算	
画像診断	単純	(1)単純一般	43,467	18,554	24,913	7,265	3,604		97,127	32,844	64,283		6,169		
		(2)断層	0						0						
		(3)MG法	98		97				343		339				
	特殊	(4)ﾊﾟﾝﾄﾓ・ｾﾌｧﾛｰ	1,031	270	761				1,032	270	762				
		(5)骨塩定量	2,164	186	1,978				5,905	429	5,476				
		(6)その他	6,942	2,752	4,190		152		10						
		(7)歯科	1,682	364	1,318				2,230	510	1,720				
		(8) 小 計	55,384	22,127	33,257	7,265	3,760	0	106,647	34,059	72,588	0	6,173	0	
	造影	(9)上部消化管	168	155					2,510	2,389					
		(10)下部消化管	54	43					384	305					
		(11)消化管小計	222	198	24	0	30	0	2,894	2,694	200	0	101	0	
		(12)肝胆膵	282	268					2,086	2,030					
		(13)腎膀胱	7						34						
		(14)脊髄控	6						31						
		(15)子宮卵管	0						0						
		(16)神経根ブロック	40		36				43		37				
		(17)その他	161	146					473	429					
		(18)消化管以外小計	496	429	67	0	41	0	2,667	2,528	139	0	149	0	
		(19) 小 計	718	627	91	0	71	0	5,561	5,222	339	0	250	0	
	血管造影	(20)脳血管	70						248						
		(21)心臓血管	401	381			55		924	863			354		
		(22)胸腹血管	44						69						
		(23)四肢血管	93	92					166	165					
		(24) 小 計	608	580	28	0	80	0	1,407	1,338	69	0	599	0	
	CT	(25)頭頚部単純	6,497	2,083	4,414		1,483		255,200	78,265	176,935		62,625		
		(26)頭頚部造影	126	66	60				17,480	9,720	7,760				
		(27)頭頚部小計	6,623	2,149	4,474	0	1,486	0	272,680	87,985	184,695	0	62,935	0	
		(28)躯幹部単純	10,587	2,034	8,553		2,036		1,085,780	205,560	880,220		230,530		
		(29)躯幹部造影	2,777	590	2,187		278		644,780	140,260	504,520		63,760		
		(30)躯幹部小計	13,364	2,624	10,740	0	2,314	0	1,730,560	345,820	1,384,740	0	294,290	0	
		(31)四肢単純	462	161	301				36,480	13,120	23,360				
		(32)四肢造影	68	33	35				19,080	8,920	10,160				
		(33)四肢小計	530	194	336	0	2	0	55,560	22,040	33,520	0	160	0	
		(34) 小 計	20,517	4,967	15,550	0	3,802	0	2,058,800	455,845	1,602,955	0	357,385	0	
	MRI	(35)頭部単純	4,739	854	3,885		404		24,703						
		(36)頭部造影	239	94	145				0						
		(37)頭部小計	4,978	948	4,030	0	404	0	24,703	0	24,703	0	3	0	
		(38)躯幹部単純	2,085	331	1,754				100						
		(39)躯幹部造影	158		133				0						
		(40)躯幹部小計	2,243	356	1,887	0	8	0	100	100	0	0	0	0	
		(41)四肢単純	169		134				0						
		(42)四肢造影	14						0						
		(43)四肢小計	183	36	147	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		(44) 小 計	7,404	1,340	6,064	0	412	0	24,803	100	24,703	0	3	0	
	透視	(45)単純透視	335	285					341	291					
		(46)造影透視	82	76					85	79					
		(47) 小 計	417	361	56	0	32	0	426	370	56	0	38	0	
		(48) 合 計	85,048	30,002	55,046	7,265	8,157	0	2,197,644	496,934	1,700,710	0	364,448	0	

目 次

区 分		患者数				件数				保険点数
		計	入院	外来	時間外(再掲)	計	入院	外来	時間外(再掲)	
核医学	(49)試料測定invitro	0				0				0
	(50)体外測定(形態検査)	3,905	540	3,365		139,096	8,761	130,335		0
	(51)体外測定(機能検査)	2				1				0
	(52)RI治療	0				0				0
	(53)その他	465		405		25,651		22,252		0
	(54) 小 計	4,372	600	3,772	6	164,748	12,160	152,588	94	0
放射線治療	(55)高エネルギーX線	1,384	836	548	0	5,478	3,336	2,142	0	2,921,200
	(56)高エネルギー電子線	4	0	4	0	4	0	4	0	3,360
	(57)密封小線源	1,383	836	547	0	3,206	1,995	1,211	0	466,200
	(58)温熱療法	116	82	34	0	116	82	34	0	471,700
	(59)その他	123	88	35	0	123	88	35	0	134,200
	(60)放射線治療管理料	865	101	764	0	865	101	764	0	172,042
	(61) 小 計	3,875	1,943	1,932	0	9,792	5,602	4,190	0	4,168,702
(62) 総 合 計		93,295	32,545	60,750	8,163	2,372,184	514,696	1,857,488	364,542	4,168,702

血管造影IVR 再掲分		患者数			件数		
		計	入院	外来	計	入院	外来
血管造影IVR	(63)脳血管	9	9		158	158	
	(64)心臓血管	224	222		5,755	5,688	
	(65)胸腹血管	37	37		237	237	
	(66)四肢血管	29	26		209	156	
	(67) 合 計	299	294	5	6,359	6,239	120

新規患者数	
123	人

放射線治療業務 再掲分		患者数			件数		
		計	入院	外来	計	入院	外来
放射線治療業務	(68)シミュレーター	20	15	5	30	25	5
	(69)計画用CT	181	144	37	15,526	12,087	3,439
	(70)リニアックグラフィー	159	128	31	225	182	43
	(71)線量分布計算	303	215	88	601	397	204
	(72)全身照射	90	59	31	102	71	31
	(73)定位放射線治療	30	20	10	97	69	28
	(74)固定器具加算	12	7	5	12	7	5
	(75)血液照射	24	10	14	24	10	14
	(76)その他	0	0	0	0	0	0
	(77) 合 計	819	598	221	16,617	12,848	3,769

区 分	入院		外来		合計		保険点数
	患者数	件数	患者数	件数	患者数	件数	
(78)画像診断	30,002	496,934	55,046	1,700,710	85,048	2,197,644	0
(79)核医学	600	12,160	3,772	152,588	4,372	164,748	0
(80)放射線治療	1,943	5,602	1,932	4,190	3,875	9,792	4,168,702
(81) 合 計	32,545	514,696	60,750	1,857,488	93,295	2,372,184	4,168,702

	患者数	件数	撮影料(点数換算)
乳がん検診 再掲分	1,678	4,307	

40.給食実施状況

区分	食種名	令和5年度			令和4年度		
		食数(食)	1日当り(食)	比 率(%)	食数(食)	1日当り(食)	比 率(%)
一般食	常食	102,079	279.7	29.8	100,171	274.4	30.1
	軟食	48,130	131.9	14.1	48,591	133.1	14.6
	流動食	1,336	3.7	0.4	1,358	3.7	0.4
	計	151,545	415.3	44.3	150,120	411.2	45.1
特別食 加算	塩分エネルギー調整食	70,481	193.1	20.6	64,053	175.5	19.3
	たんぱく調整食	4,781	13.1	1.4	6,132	16.8	1.8
	肝臓食	2,138	5.9	0.6	2,520	6.9	0.8
	潰瘍食	362	1.0	0.1	787	2.2	0.2
	上部消化管術後食	1,728	4.7	0.5	1,089	3.0	0.3
	低繊維食	43	0.1	0.0	0	0.0	0.0
	透析食	6,828	18.7	2.0	7,342	20.1	2.2
	嚥下導入食	10,703	29.3	3.1	12,065	33.1	3.6
	その他	0	0.0	0	0	0.0	0
	小 計	97,064	265.9	28.4	93,988	257.5	28.2
特別食 非加算	塩分エネルギー調整食	4,017	11.0	1.2	3,421	9.4	1.0
	低繊維食	769	2.1	0.2	1,403	3.8	0.4
	濃厚流動食	19,501	53.4	5.7	18,246	50.0	5.5
	嚥下導入食	41,350	113.3	12.1	42,184	115.6	12.7
	その他	27,944	76.6	8.2	23,404	64.1	7.0
	小 計	93,581	256.4	27.3	88,658	242.9	26.6
特別食計		190,645	522.3	55.7	182,646	500.4	54.8
合計		342,190	937.6	100.0	332,766	911.6	100.0

41.再加工及び禁止・個別対応食の状況

区分	令和5年度			令和4年度		
	食数(食)	1日当り(食)	比 率(%)	食数(食)	1日当り(食)	比 率(%)
再加工食	100,568	275.5	29.4	105,977	290.3	31.8
禁止・個別対応食	129,295	354.2	37.8	123,566	338.5	37.1

42.個人栄養食事指導実施状況

（単位:件）

指導名		令和5年度			令和4年度		
		入 院	外 来	合 計	入 院	外 来	合 計
算定	糖尿病	168	1,555	1,723	172	1,787	1,959
	腎臓病	66	342	408	97	417	514
	心臓・高血圧	242	413	655	200	441	641
	肝臓病	5	24	29	7	13	20
	胃腸病	15	10	25	14	31	45
	肥満	0	44	44	0	33	33
	脂質異常症	3	62	65	0	66	66
	がん	74	162	236	76	118	194
	摂食・嚥下	26	9	35	29	18	47
	低栄養	19	20	39	26	37	63
	その他	0	0	0	11	7	18
小計		618	2,641	3,259	632	2,968	3,600
算定外		129	149	278	155	106	261
合計		747	2,790	3,537	787	3,074	3,861

43.集団栄養食事指導実施状況

		令和5年度			令和4年度		
		回 数	人 数		回 数	人 数	
			算 定	算定外		算 定	算定外
集団指導	糖尿病(入院)	34	93	2	40	101	13
	糖尿病(外来)	0	0	0	0	0	0
	小計	34	93	2	40	101	13
糖尿病教室		3	0	81	1	0	17
合計		37	93	83	41	101	30
			176			131	

44. 在宅看護相談室の看護実施状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

1　相談内容と業務内容件数

項　　目		延件数
相談内容	病状相談	4,065
	介護相談	3,403
	介護用品	4,198
	地域サービス	284
	受診相談	153
	入院相談	61
業務内容	連絡調整	4,700
	退院調整	3,372
	情報収集	4,457
	病状確認	3,706
	カンファレンス	53
	その他	8
連携	院内職員との連携	4,294
	地域関係者との連携	4,354
合　　計		31,882
利用者	患者・家族	4,038
	院内職員	3,763
	地域関係者	3,901
合　　計		11,702
方法	電話	7,407
	面談	3,103
	その他	9
合　　計		10,519

2　調整内容別件数

自宅退院・在宅調整（入院・外来）	438
転院調整	－
介護相談	438
退院前合同カンファレンス	56
合　　計	438

3　退院支援計画書作成件数：　0件

4　退院前合同カンファレンス件数

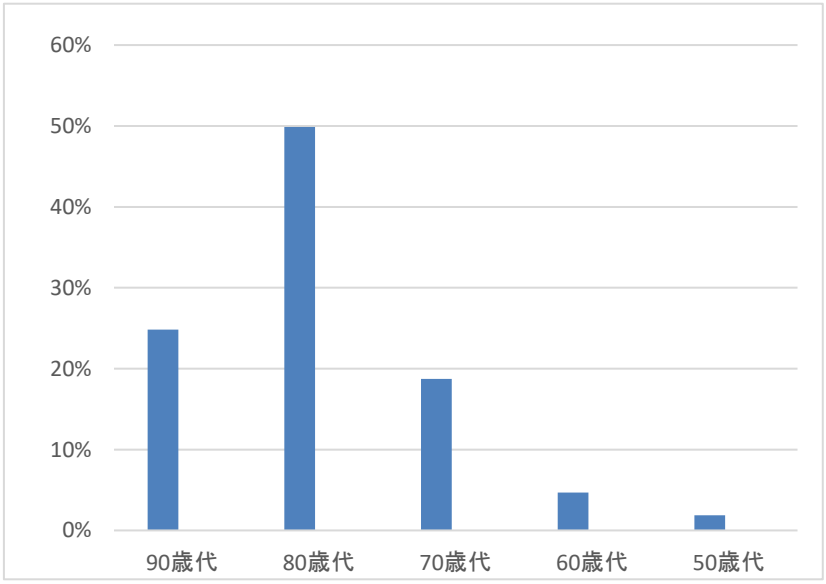
合同カンファレンス	56
共同指導料算定（再掲）	56
介護支援連携加算（再掲）	69

5　退院前後訪問件数

退院前	－
退院当日	14
退院後	－
外泊	－
合　　計	14

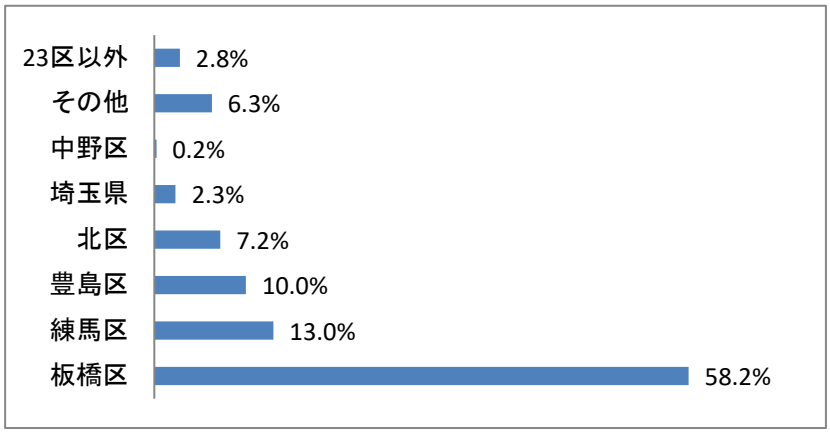
6　調整及び相談ケースの内訳

（1）年齢別



年齢	人数	割合
90歳代	106	25%
80歳代	213	50%
70歳代	80	19%
60歳代	20	5%
50歳代	8	2%
合　計	427	100.0%

(2) 居住地域別



	件数	割合
板橋区	251	58.2%
練馬区	56	13.0%
豊島区	43	10.0%
北区	31	7.2%
埼玉県	10	2.3%
中野区	1	0.2%
その他	27	6.3%
23区以外	12	2.8%
合　計	431	100.0%

45. 在宅酸素療法実績

新規導入者

月	5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	6年 1月	2月	3月	計
人数	6	7	1	3	1	8	0	2	3	4	3	2	40

46. 在宅人工呼吸療法実績

新規導入者

月	5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	6年 1月	2月	3月	計
人数	0	0	1	0	1	0	0	0	2	1	1	1	7

47. 病歴取扱状況

令和5年4月1日～令和6年3月31日

項目 / 月別	取扱件数			貸出件数
	一般退院	死亡退院	計	死亡者カルテ
4月	885	30	915	72
5月	808	30	838	21
6月	890	24	914	0
7月	825	30	855	1
8月	846	29	875	1
9月	852	29	881	2
10月	832	45	877	0
11月	861	35	896	0
12月	930	31	961	0
1月	810	31	841	0
2月	854	36	890	0
3月	904	41	945	0
計	10,297	391	10,688	97

医療相談室相談件数

令和 5 年度分 年報

(1) 診療科目別

診療科目		入院 新規	入院 継続	入院 入院計	外来 新規	外来 継続	外来 外来計
内科系	内科	123	1173	1296	15	55	70
	腎臓内科	203	2590	2793	16	18	34
	内分泌科	89	1057	1146	6	26	32
	循環器科	196	1383	1579	14	22	36
	呼吸器科	137	1683	1820	12	82	94
	消化器科	117	1673	1790	15	55	70
	神経内科	296	3507	3803	25	82	107
	血液科	8	139	147	4	7	11
	感染症科	2	16	18	0	0	0
	膠原病・リウマチ科	25	298	323	8	14	22
	緩和ケア病棟入院相談	0	3	3	1	643	644
	緩和ケア内科	14	399	413	3	59	62
	小 計	1210	13921	15131	119	1063	1182
外科系	外科	75	949	1024	19	87	106
	脳外科	131	1412	1543	3	30	33
	整形外科	168	1820	1988	5	17	22
	心臓血管外科	19	197	216	3	5	8
	皮膚科	20	265	285	4	2	6
	泌尿器科	18	293	311	2	10	12
	脊椎外科	24	221	245	0	4	4
	眼科	0	0	0	1	1	2
	耳鼻咽喉科	0	0	0	2	0	2
	放射線科	0	0	0	0	1	1
	在宅医療連携病床	0	0	0	0	0	0
	歯科	0	0	0	1	19	20
	血管外科	19	213	232	1	0	1
	麻酔科	0	0	0	0	0	0
	小 計	474	5370	5844	41	176	217
リハビリテーション科		3	27	30	2	1	3
精神科		1	2	3	1	0	1
化学療法科		11	337	348	1	4	5
合 計		15	366	381	4	5	9
未受診・他					51	4	55
総 合 計		1699	19657	21356	215	1248	1463

(2) 対象別

本人	2601
家族	16383
友人・知人	917
院内・事務職員	33876
医療機関	23353
区市役所・保健所	3574
老人保健施設	1598
老人ホーム等	1659
ケアマネージャー	2428
そ の 他	750
計	87,139

(3) 方法別

面接	17,042
電話	65,832
文書	2,873
訪問	27
その他	2,917
計	88,691

(4) 対応別

情報提供・連絡	55,773
情報収集	20,305
観察・状況把握	5,090
方針協議	6,208
問題整理・心理援助	854
直接援助	461
計	88,691

(5) 主訴別

受診		1,553
入院		2,601
退院		9634
転院		52,024
自宅		5,792
施設	長期	2,093
	短期・中期	3,801
	障害、他	382
療養上		3,107
家族		310
経済		2,455
日常生活		287
福祉制度一般		1,456
就労		9
心理的問題		76
その他		3,111
計		88,691

(6) 新ケースの紹介経路

病院内	医師	1,524
	看護婦	190
	リハビリ	6
	事務	1
	インテーク	0
	その他	1
	小 計	1,722
病院外	本人	33
	家族	101
	友人・知人	2
	医療機関	31
	区市役所・保健所	9
	老人保健施設	0
	老人ホーム等	2
	ケアマネージャー	10
	都関係	0
	その他	4
	小 計	192
計		1,914

(7) その他業務

ｸﾗｲｴﾝﾄ処遇会議		1924
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ調整		2
会議	院内	287
	院外	8
研修	院内	188
	院外	20
社会資源収集		68
実習生関連		0
見学者		2
他職ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ		0
講演・講義		1
調査・研究		0
業務統計		1733
学会・研究会		0

	入院	外来	未・他	計
新 規	1,699	164	51	1,914
継 続	19,657	1,244	4	20,905
計	21,356	1,408	55	22,819

診療費の収入状況

49. 診療実績

令和5年4月1日～令和6年3月31日(単位:点)

項目		入院	外来	合計	比率(%)
基本料等	初診料	854,322	5,967,310	6,821,632	
	外来診療料	—	12,246,078	12,246,078	
	入院料等	631,221,415	—	631,221,415	
	計	632,075,737	18,575,448	650,651,185	50.9%
投薬料		7,480,121	11,109,650	18,589,771	1.5%
注射料		28,256,359	87,142,161	115,398,520	9.0%
処置料		7,120,745	9,294,285	16,415,030	1.3%
手術料		226,376,145	8,682,048	235,058,192	18.4%
検査料		20,510,952	92,904,006	113,414,958	8.9%
画像診断料		5,653,818	52,447,867	58,101,685	4.5%
諸収入		31,946,923	38,689,456	70,636,379	5.5%
合計		959,420,800	318,844,920	1,278,265,719	100.0%
(歯科口腔外科再掲)		1,040,827	6,944,481	7,985,308	-
延べ人数		144,293	199,529	343,822	-
1人1日平均点数		6,649.1	1,598.0	3,717.8	-
レセプト枚数		14,051	114,634	128,685	-

50. 診療実績:前年度比較

(単位:円)

区　分		入　院		
		令和4年度	令和5年度	増(△)減
診療実績(円)		9,979,498,785	9,594,207,997	△ 385,290,788
年間延患者数(人)		142,249	144,293	2,044
稼動日数(日)		365	366	1
一日一人当収入(円)		70,155	66,491	△ 3,664
収入内訳	基本料	6,756,067,668	6,320,757,366	△ 435,310,302
	投薬料	74,694,732	74,801,214	106,482
	注射料	316,804,869	282,563,594	△ 34,241,275
	処置料	64,024,103	71,207,450	7,183,347
	手術料	2,155,419,859	2,263,761,445	108,341,586
	検査料	247,037,990	205,109,517	△ 41,928,473
	画像診断料	50,151,206	56,538,180	6,386,974
	諸収入	315,298,358	319,469,231	4,170,873

※ 室料差額は含まない。

(単位:円)

区　分		外　来		
		令和4年度	令和5年度	増(△)減
診療実績(円)		3,392,914,777	3,188,449,197	△ 204,465,580
年間延患者数(人)		213,056	199,529	△ 13,527
稼動日数(日)		294	294	0
一日一人当収入(円)		15,925	15,980	55
収入内訳	基本料	197,717,816	185,754,480	△ 11,963,336
	投薬料	130,523,556	111,096,499	△ 19,427,057
	注射料	929,178,984	871,421,605	△ 57,757,379
	処置料	90,350,454	92,942,854	2,592,400
	手術料	83,785,422	86,820,476	3,035,054
	検査料	996,217,277	929,040,060	△ 67,177,217
	画像診断料	516,010,835	524,478,666	8,467,831
	諸収入	449,130,433	386,894,557	△ 62,235,876
	院外処方(再掲)	73,784,120	69,519,953	△ 4,264,167

※ 保険外は「諸入」に含めて計上している。

51. 診療実績(入院)

令和5年4月1日～令和6年3月31日　(単位:円、人、枚)

	基本料		投薬料	注射料	処置料	手術料	検査料	画像診断料	諸収入	計	延人数	レセプト数
	初診料(再掲)											
4月	669,800	502,083,156	6,129,941	23,839,036	7,001,520	185,806,997	19,740,197	4,160,318	26,206,204	774,967,369	11,602	1,162
5月	705,140	487,495,627	5,819,409	20,830,290	5,722,806	188,980,690	19,834,408	4,320,028	25,873,201	758,876,459	11,392	1,185
6月	665,380	504,327,685	6,432,550	25,211,790	5,861,290	159,638,490	19,794,300	4,682,606	28,543,146	754,491,857	11,259	1,273
7月	602,097	528,983,410	6,535,461	27,894,712	5,786,343	182,183,280	19,251,628	3,751,568	26,253,112	800,639,514	12,109	1,151
8月	732,170	545,926,314	6,467,129	36,273,500	5,128,870	164,999,380	20,612,646	5,065,820	31,213,660	815,687,319	12,406	1,160
9月	714,550	523,242,486	6,019,424	23,438,470	6,862,820	180,961,020	19,396,070	3,952,880	26,009,126	789,882,296	11,977	1,110
10月	683,860	523,132,658	4,713,717	19,151,915	4,662,745	200,428,750	19,799,490	4,853,885	27,953,331	804,696,491	11,949	1,119
11月	695,852	510,043,909	5,151,521	16,460,797	4,864,860	222,930,885	12,436,404	4,344,042	25,028,086	801,260,504	11,698	1,164
12月	784,687	520,909,699	7,958,903	21,077,644	6,289,766	192,993,453	13,798,633	5,144,633	25,407,000	793,579,731	11,840	1,142
1月	829,530	566,826,060	6,806,850	22,439,500	7,411,010	180,818,910	13,504,270	5,457,996	24,692,360	827,956,956	12,701	1,179
2月	715,380	542,852,315	5,619,660	22,993,030	5,355,190	202,515,460	12,661,250	5,112,840	26,228,259	823,338,004	12,428	1,204
3月	744,772	564,934,047	7,146,649	22,952,910	6,260,230	201,504,130	14,280,221	5,691,564	26,061,746	848,831,497	12,932	1,202
合計	8,543,218	6,320,757,366	74,801,214	282,563,594	71,207,450	2,263,761,445	205,109,517	56,538,180	319,469,231	9,594,207,997	144,293	14,051
歯科再掲	3,130	7,978,300	22,550	60,380	31,550	1,709,720	240,080	76,240	289,450	10,408,270	207	61

※ 室料差額は含まない。

52. 診療実績(外来)

令和5年4月1日～令和6年3月31日　(単位:円、人、枚)

	基本料			投薬料	注射料	処置料	手術料	検査料	画像診断料	諸収入	合計	院外処方 (再掲)	延人数	レセプト 枚数
	初診料 (再掲)	外来診療料 (再掲)												
4月	5,104,518	10,585,652	15,957,270	11,658,500	59,327,740	7,828,380	6,744,300	79,696,457	43,200,134	32,681,583	257,094,364	5,956,002	17,065	9,721
5月	5,090,048	10,251,558	15,500,066	6,482,985	86,083,400	7,869,015	6,453,717	78,051,426	40,003,618	32,134,982	272,579,209	5,881,564	16,523	9,498
6月	5,291,407	10,933,198	16,385,465	10,146,320	52,273,610	7,850,620	6,935,780	84,215,868	44,416,083	33,679,479	255,903,225	6,101,050	17,744	9,995
7月	5,352,561	10,284,560	15,846,001	6,802,837	95,190,310	7,449,668	6,873,550	81,100,936	40,890,491	32,995,779	287,149,572	5,775,496	16,798	9,582
8月	5,266,919	10,154,779	15,542,138	10,611,842	66,300,380	7,522,838	7,248,480	78,777,359	39,907,488	34,111,419	260,021,944	5,920,325	16,545	9,406
9月	4,654,920	10,420,776	15,199,736	8,514,330	77,420,270	8,283,368	7,796,708	78,200,270	42,226,481	32,455,440	270,096,603	5,720,566	16,649	9,457
10月	4,719,091	10,767,180	15,925,811	12,632,138	80,282,040	8,118,316	7,343,787	80,452,304	47,372,407	35,532,356	287,659,159	5,991,237	17,495	9,839
11月	5,381,435	10,033,233	15,659,948	10,038,248	72,157,740	7,526,000	6,991,916	76,121,510	47,797,957	31,505,220	267,798,539	5,696,762	16,617	9,571
12月	5,044,761	10,358,122	15,972,763	8,882,409	71,373,320	7,512,950	7,795,570	75,468,759	45,816,291	31,446,683	264,268,745	5,969,650	16,871	9,761
1月	5,127,179	9,382,486	15,096,945	9,221,790	75,093,810	7,379,634	8,362,391	72,861,354	43,172,074	29,665,521	260,853,519	5,431,206	15,571	9,271
2月	4,315,832	9,255,832	13,880,864	7,188,265	60,201,930	7,447,670	6,604,190	69,715,522	42,556,132	29,275,227	236,869,800	5,388,680	15,226	9,055
3月	4,324,432	10,033,401	14,787,473	8,916,835	75,717,055	8,154,395	7,670,087	74,378,295	47,119,510	31,410,868	268,154,518	5,687,415	16,425	9,478
合計	59,673,103	122,460,777	185,754,480	111,096,499	871,421,605	92,942,854	86,820,476	929,040,060	524,478,666	386,894,557	3,188,449,197	69,519,953	199,529	114,634
歯科再掲	8,660,940	8,302,170	16,963,110	220,350	53,670	14,414,140	7,663,520	4,351,680	8,309,290	17,469,050	69,444,810	1,173,260	10,552	6,158

※ 保険外は「諸収入」に含めて計上している。

53. 入院患者(入院時)保険種別内訳

令和5年4月1日～令和6年3月31日 (単位:人)

	社会保険							国民健康保険						後期高齢者						生保	原爆	中国	労災	公害	自賠	重度障	自費	計	比率(%)
	本人	家族	(再掲)公費負担					本人	家族	(再掲)公費負担				本人	(再掲)公費負担														
			生保	難病(国疾病)	心身障害者	ひとり親	人工透析			難病(国疾病)	心身障害者	ひとり親	人工透析		原爆(一般)	難病(国疾病)	心身障害者	大気汚染	人工透析										
39歳以下	86	23	2	4	4	1		26	18		2									14							9	176	1.6
40～49	83	12	1	7				26	11	2	3		1							23							8	163	1.5
50～59	199	45	1	8	4		7	100	54	9	12	1	3							46			4			2	5	455	4.3
60～64	163	45		4	9		3	123	67	25	18		3							31						4	4	437	4.1
65～69	151	58	2	5			2	269	121	6	18		6	3		3				57							2	661	6.2
70～74	190	61		7	3		1	688	281	27	27		14	5						102			2		1		3	1,333	12.5
75～79														1,737	5	65	24	1	44	122	2			1				1,862	17.5
80歳以上		1												5,265	11	109	40		55	310	2	3						5,581	52.3
計	872	245	6	35	20	1	13	1,232	552	69	80	1	27	7,010	16	177	64	1	99	705	4	3	6	1	1	6	31	10,668	100.0
比率(%)	8.2	2.3	0.1	0.3	0.2	0.0	0.1	11.5	5.2	0.6	0.7	0.0	0.3	65.7	0.1	1.7	0.6	0.0	0.9	6.6	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.3	100.0	

54. 外来患者(新患)保険種別内訳

令和5年4月1日～令和6年3月31日 (単位:人)

	社会保険								国民健康保険									後期高齢者						生保	児童	中国	労災	公務	自賠	日雇	自費	計	比率(%)
	本人	家族	(再掲)公費負担						本人	家族	(再掲)公費負担							本人	(再掲)公費負担														
			生保	精神通院	難病(国疾病)	心身障害者	ひとり親	乳幼児			特定疾患	精神通院	難病(国疾病)	心身障害者	ひとり親	人工透析	乳幼児		原爆(一般)	難病(国疾病)	心身障害者	人工透析	精神通院									
39歳以下	298	113	2		1	6	4	10	85	48		2		3	3		2							13	1		2		8		39	607	7.9
40～49	247	33			2	1	2		43	24				2	1									21			2		2		16	388	5.1
50～59	377	85	2		1	6	2		131	61			2	4	1									46			2	2	1		22	727	9.5
60～64	199	59		1		1			104	56			1	3										28					1	1	11	459	6.0
65～69	184	60				2			253	107	1		1	8		1		4						33							21	662	8.6
70～74	165	49			1	2			523	279			2	13		1		3						53			1		1		32	1,106	14.4
75～79																		1,154	2	4	10	2		63		1	1				25	1,244	16.2
80歳以上																		2,312	8	10	13	2	1	108		3			1		57	2,481	32.3
計	1,470	399	4	1	5	18	8	10	1,139	575	1	2	6	33	5	2	2	3,473	10	14	23	4	1	365	1	4	8	2	14	1	223	7,674	100.0
比率(%)	19.2	5.2	0.1	0.0	0.1	0.2	0.1	0.1	14.8	7.5	0.0	0.0	0.1	0.4	0.1	0.0	0.0	45.3	0.1	0.2	0.3	0.1	0.0	4.8	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	2.9	100.0	

疾病統計

55. 退院患者の疾患内訳 （ICD10コードによる大分類）

令和5年4月1日～令和6年3月31日

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主　病			副　病		
		男	女	計	男	女	計
感染症及び寄生虫症	A00－B99	107	94	201	260	242	502
新生物	C00－D48	1,026	843	1,869	922	738	1,660
血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	D50－D89	57	49	106	239	279	518
内分泌,栄養及び代謝疾患	E00－E90	163	163	326	1,684	1,571	3,255
精神及び行動の障害	F00－F99	50	78	128	299	521	820
神経系の疾患	G00－G99	341	445	786	550	664	1,214
眼及び付属器の疾患	H00－H59	826	1,279	2,105	84	121	205
耳及び乳様突起の疾患	H60－H95	16	42	58	14	21	35
循環器系の疾患	I00－I99	837	830	1,667	2,352	2,412	4,764
呼吸器系の疾患	J00－J99	374	304	678	790	572	1,362
消化器系の疾患	K00－K93	494	490	984	727	808	1,535
皮膚及び皮下組織の疾患	L00－L99	58	55	113	125	117	242
筋骨格系及び結合組織の疾患	M00－M99	139	271	410	392	725	1,117
腎尿路生殖器系の疾患	N00-N99	228	246	474	827	617	1,444
妊娠，分娩及び産じょく	O00-O99	0	0	0	0	0	0
先天性奇形,変形及び染色体異常	Q00-Q99	7	10	17	24	12	36
症状，徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	R00-R99	1	1	2	437	438	875
損傷，中毒及びその他の外因の影響	S00-T98	135	229	364	198	238	436
原因不明の新たな疾患又はエマージェンシーコードの暫定分類	U00-U49	186	199	385	89	57	146
傷病及び死亡の外因	V01-Y98	0	0	0	0	0	0
健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービスの利用	Z00-Z99	11	5	16	877	1,354	2,231
合　　計		5,056	5,633	10,689	10,890	11,507	22,397

〔内訳〕（ICD10コード中分類）

令和5年4月1日～令和6年3月31日

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
感染症及び寄生虫症	A00－B99	107	94	201	260	242	502
腸管感染症		29	24	53	38	35	73
結核		8	3	11	14	11	25
主として性的伝播様式をとる感染症		3	0	3	3	1	4
皮膚及び粘膜病変を特徴とするウイルス感染症		9	5	14	8	25	33
ウイルス性肝炎		1	0	1	8	16	24
その他のウイルス疾患		5	13	18	16	28	44
真菌症		7	3	10	50	31	81
感染症及び寄生虫症の続発・後遺症		0	0	0	6	2	8
その他の感染症及び寄生虫症		45	46	91	117	93	210
新生物<腫瘍＞	C00－D48	1,026	843	1,869	922	738	1,660
胃の悪性新生物＜腫瘍＞		98	52	150	62	49	111
結腸の悪性新生物＜腫瘍＞		108	153	261	77	113	190
直腸S状結腸移行部及び直腸の悪性新生物＜腫瘍＞		63	24	87	27	17	44
肝及び肝内胆管の悪性新生物＜腫瘍＞		22	11	33	7	5	12
気管,気管支及び肺の悪性新生物＜腫瘍＞		130	87	217	61	51	112
乳房の悪性新生物＜腫瘍＞		0	22	22	0	27	27
子宮の悪性新生物＜腫瘍＞		0	8	8	0	5	5
悪性リンパ腫		53	41	94	11	11	22
白血病		86	66	152	19	19	38
その他の悪性新生物＜腫瘍＞		345	231	576	434	242	676
良性新生物＜腫瘍＞及びその他の新生物＜腫瘍＞		121	148	269	224	199	423
血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	D50－D89	57	49	106	239	279	518
貧血		29	27	56	175	205	380
その他の血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害		28	22	50	64	74	138

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
内分泌,栄養及び代謝疾患	E00－E90	163	163	326	1,684	1,571	3,255
甲状腺障害		3	2	5	59	97	156
糖尿病		112	93	205	841	672	1,513
脂質異常症		0	1	1	379	435	814
その他の内分泌,栄養及び代謝障害		48	67	115	405	367	772
精神及び行動の障害	F00－F99	50	78	128	299	521	820
血管性及び詳細不明の認知症		32	20	52	229	409	638
精神作用物質使用による精神及び行動の障害		9	2	11	25	8	33
統合失調症,統合失調症型障害及び妄想性障害		6	12	18	8	20	28
気分[感情]障害(躁うつ病を含む)		3	35	38	20	49	69
神経症性障害,ストレス関連障害及び身体表現性障害		0	9	9	11	32	43
知的障害＜精神遅滞＞		0	0	0	2	1	3
その他の精神及び行動の障害		0	0	0	4	2	6
神経系の疾患	G00－G99	341	445	786	550	664	1,214
パーキンソン病		58	66	124	72	75	147
アルツハイマー病		46	61	107	167	250	417
てんかん		31	29	60	36	44	80
脳性麻痺及びその他の麻痺性症候群		0	3	3	15	12	27
自律神経系の障害		9	9	18	3	2	5
その他の神経系の疾患		197	277	474	257	281	538
眼及び付属器の疾患	H00－H59	826	1,279	2,105	84	121	205
結膜炎		0	0	0	2	2	4
白内障		566	1,016	1,582	38	62	100
屈折及び調節の障害		2	1	3	1	1	2
その他の眼及び付属器の疾患		258	262	520	43	56	99
耳及び乳様突起の疾患	H60－H95	16	42	58	14	21	35
外耳炎		0	0	0	0	1	1
その他の外耳疾患		0	0	0	0	1	1

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
中耳炎		1	5	6	1	4	5
その他の中耳及び乳様突起の疾患		0	3	3	1	0	1
メニエール病		0	2	2	1	1	2
その他の内耳疾患		13	32	45	3	3	6
その他の耳疾患		2	0	2	8	11	19
循環器系の疾患	I00－I99	837	830	1,667	2,352	2,412	4,764
高血圧性疾患		5	7	12	835	891	1,726
虚血性心疾患		186	107	293	238	155	393
その他の心疾患		228	374	602	728	947	1,675
くも膜下出血		4	13	17	1	7	8
脳内出血		46	39	85	10	7	17
脳梗塞		147	124	271	61	61	122
脳動脈硬化(症)		43	4	47	61	24	85
その他の脳血管疾患		9	24	33	16	1	17
動脈硬化(症)		43	26	69	52	32	84
低血圧(症)		3	2	5	23	6	29
その他の循環器系の疾患		123	110	233	327	281	608
呼吸器系の疾患	J00－J99	374	304	678	790	572	1,362
急性鼻咽頭炎[かぜ]＜感冒＞		0	1	1	0	1	1
急性咽頭炎及び急性扁桃炎		3	2	5	2	3	5
その他の急性上気道感染症		13	29	42	15	10	25
肺炎		110	87	197	144	97	241
急性気管支炎及び急性細気管支炎		2	14	16	9	17	26
アレルギー性鼻炎		0	0	0	5	13	18
慢性副鼻腔炎		10	9	19	14	14	28

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病 男	主病 女	主病 計	副病 男	副病 女	副病 計
急性又は慢性と明示されない気管支炎		0	0	0	4	2	6
慢性閉塞性肺疾患		14	3	17	142	36	178
喘息		11	9	20	65	71	136
その他の呼吸器系の疾患		211	150	361	390	308	698
消化器系の疾患	K00－K93	494	490	984	727	808	1,535
う蝕		2	2	4	2	2	4
歯肉炎及び歯周疾患		4	5	9	11	6	17
その他の歯及び歯の支持組織の障害		27	19	46	20	9	29
胃潰瘍及び十二指腸潰瘍		35	25	60	34	24	58
胃炎及び十二指腸炎		12	23	35	57	61	118
痔核		14	11	25	11	10	21
アルコール性肝疾患		22	4	26	21	4	25
慢性肝炎(アルコール性のものを除く)		1	4	5	9	6	15
肝硬変(アルコール性のものを除く)		0	1	1	4	20	24
その他の肝疾患		10	10	20	41	46	87
胆石症及び胆のう炎		86	97	183	40	47	87
膵疾患		12	12	24	26	21	47
その他の消化器系の疾患		269	277	546	451	552	1,003
皮膚及び皮下組織の疾患	L00－L99	58	55	113	125	117	242
皮膚及び皮下組織の感染症		28	28	56	23	15	38
皮膚炎及び湿疹		2	3	5	34	26	60
その他の皮膚及び皮下組織の疾患		28	24	52	68	76	144
筋骨格系及び結合組織の疾患	M00－M99	139	271	410	392	725	1,117
炎症性多発性関節障害		15	52	67	60	115	175
関節症		27	99	126	12	44	56
脊椎障害(脊椎症を含む)		41	54	95	47	50	97
椎間板障害		8	4	12	3	1	4

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
頚腕症候群		0	0	0	0	0	0
腰痛症及び坐骨神経痛		0	4	4	5	9	14
その他の脊柱障害		0	1	1	2	2	4
肩の傷害＜損傷＞		0	0	0	0	2	2
骨の密度及び構造の障害		1	4	5	51	257	308
その他の筋骨格系及び結合組織の疾患		47	53	100	212	245	457
腎尿路生殖器系の疾患	N00-N99	228	246	474	827	617	1,444
糸球体疾患及び腎尿細管間質性疾患		47	75	122	56	65	121
腎不全		60	53	113	422	308	730
尿路結石症		13	30	43	12	15	27
その他の腎尿路系の疾患		41	86	127	169	219	388
前立腺肥大(症)		51	0	51	164	0	164
その他の男性生殖器の疾患		16	0	16	4	0	4
月経障害及び閉経周辺期障害		0	0	0	0	2	2
乳房及びその他の女性生殖器の疾患		0	2	2	0	8	8
妊娠，分娩及び産じょく	O00-O99	0	0	0	0	0	0
その他の妊娠，分娩及び産じょく		0	0	0	0	0	0
先天性奇形,変形及び染色体異常	Q00-Q99	7	10	17	24	12	36
心臓の先天奇形		0	1	1	10	6	16
その他の先天奇形，変形及び染色体異常		7	9	16	14	6	20
症状，徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	R00-R99	1	1	2	437	438	875
損傷，中毒及びその他の外因の影響	S00-T98	135	229	364	198	238	436
骨折		57	170	227	45	96	141
頭蓋内損傷及び内臓の損傷		25	7	32	10	7	17
熱傷及び腐食		0	0	0	0	2	2
中毒		1	4	5	1	1	2
その他の損傷及びその他の外因の影響		52	48	100	142	132	274
原因不明の新たな疾患又はエマージェンシーコードの暫定分類	U00-U49	186	199	385	89	57	146
COVID-19	U071	186	198	384	84	56	140
COVID-19の既往及び後遺症	U08-U09	0	1	1	5	1	6
傷病及び死亡の外因	V01-Y98	0	0	0	0	0	0
健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービスの利用	Z00-Z99	11	5	16	877	1,354	2,231

	コードNo.	男	女	計	男	女	計
、口腔及び咽頭の悪性新生物＜腫瘍＞	C00－C14	5	4	9	3	2	
器の悪性新生物＜腫瘍＞	C15－C26	420	365	785	215	222	437
器及び胸腔内臓器の悪性新生物＜腫瘍＞	C30－C39	132	88	220	64	51	115
び関節軟骨の悪性新生物＜腫瘍＞	C40－C41	0	0	0	0	0	0
の黒色腫及びその他の皮膚の悪性新生物＜腫瘍＞	C43－C44	1	4	5	0	4	4
及び軟部組織の悪性新生物＜腫瘍＞	C45－C49	3	1	4	4	1	5
の悪性新生物＜腫瘍＞	C50－C50	0	22	22	0	27	27
生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞	C51－C58	0	16	16	0	6	6
生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞	C60－C63	89	0	89	72	0	72
路の悪性新生物＜腫瘍＞	C64－C68	91	60	151	33	28	61
脳及びその他の中枢神経系の部位の悪性新生物＜腫瘍＞	C69－C72	2	5	7	0	0	0
腺及びその他の内分泌腺の悪性新生物＜腫瘍＞	C73－C75	1	2	3	0	4	4
不明確、続発部位及び部位不明の悪性新生物＜腫瘍＞	C76－C80	21	20	41	276	163	439
ぴ組織、造血組織及び関連組織の悪性新生物＜腫瘍＞、原記載された又は推定されたもの	C81－C96	139	107	246	30	30	60
した(原発性)多部位の悪性新生物＜腫瘍＞	C97－C97	0	0	0	0	0	0
内新生物＜腫瘍＞	D00－D09	1	1	2	1	1	2
合　　計		905	695	1,600	698	539	1,237

〔内訳〕（ICD10コード中分類）

令和5年4月1日～令和6年3月31日 （単位：人）

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
口唇、口腔及び咽頭の悪性新生物<腫瘍＞	C00－C14	5	4	9	3	2	5
口唇の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
舌根〈基底〉部の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
舌のその他及び部位不明の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	2	2	4
歯肉の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
口(腔)底の悪性新生物＜腫瘍＞		3	0	3	0	0	0
口蓋の悪性新生物＜腫瘍＞		0	2	2	0	0	0
その他及び部位不明の口腔の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
耳下腺の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
その他及び部位不明の大唾液腺の悪性新生物＜腫瘍＞		0	1	1	0	0	0
扁桃の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
中咽頭の悪性新生物＜腫瘍＞		1	1	2	0	0	0
鼻〈上〉咽頭の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
梨状陥凹〈洞〉の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
下咽頭の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	1	0	1
その他及び部位不明確の口唇、口腔及び咽頭の悪性新生物＜腫瘍＞		1	0	1	0	0	0
消化器の悪性新生物＜腫瘍＞	C15－C26	420	365	785	215	222	437
食道の悪性新生物＜腫瘍＞		20	12	32	14	2	16
胃の悪性新生物＜腫瘍＞		98	52	150	62	49	111
小腸の悪性新生物＜腫瘍＞		14	3	17	4	3	7
結腸の悪性新生物＜腫瘍＞		108	153	261	77	113	190
直腸S状結腸移行部の悪性新生物＜腫瘍＞		12	4	16	4	4	8
直腸の悪性新生物＜腫瘍＞		51	20	71	23	13	36
肛門及び肛門管の悪性新生物＜腫瘍＞		1	6	7	0	1	1
肝及び肝内胆管の悪性新生物＜腫瘍＞		22	11	33	7	5	12
胆のう〈嚢〉の悪性新生物＜腫瘍＞		6	2	8	0	0	0
その他及び部位不明の胆道の悪性新生物＜腫瘍＞		21	10	31	12	10	22

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病 男	主病 女	主病 計	副病 男	副病 女	副病 計
膵の悪性新生物＜腫瘍＞		67	92	159	12	22	34
その他及び部位不明確の消化器の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
呼吸器及び胸腔内臓器の悪性新生物＜腫瘍＞	C30－C39	132	88	220	64	51	115
鼻腔及び中耳の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
副鼻腔の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
喉頭の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	2	0	2
気管の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
気管支及び肺の悪性新生物＜腫瘍＞		130	87	217	61	51	112
胸腺の悪性新生物＜腫瘍＞		2	1	3	1	0	1
心臓、縦隔及び胸膜の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
その他及び部位不明確の呼吸器系及び胸腔内臓器の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
骨及び関節軟骨の悪性新生物＜腫瘍＞	C40－C41	0	0	0	0	0	0
(四)肢の骨及び関節軟骨の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
その他及び部位不明の骨及び関節軟骨の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
皮膚の黒色腫及びその他の皮膚の悪性新生物＜腫瘍＞	C43－C44	1	4	5	0	4	4
皮膚の悪性黒色腫		0	0	0	0	0	0
皮膚のその他の悪性新生物＜腫瘍＞		1	4	5	0	4	4
中皮及び軟部組織の悪性新生物＜腫瘍＞	C45－C49	3	1	4	4	1	5
中皮腫		3	0	3	2	0	2
カポジ〈kaposi〉肉腫		0	0	0	2	0	2
末梢神経及び自律神経系の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
後腹膜及び腹膜の悪性新生物＜腫瘍＞		0	1	1	0	0	0
その他の結合組織及び軟部組織の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	1	1
乳房の悪性新生物＜腫瘍＞	C50	0	22	22	0	27	27
乳房の悪性新生物＜腫瘍＞		0	22	22	0	27	27

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
女性生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞	C51－C58	0	16	16	0	6	6
外陰(部)の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
膣の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
子宮頚部の悪性新生物＜腫瘍＞		0	1	1	0	0	0
子宮体部の悪性新生物＜腫瘍＞		0	7	7	0	2	2
子宮の悪性新生物＜腫瘍＞、部位不明		0	0	0	0	3	3
卵巣の悪性新生物＜腫瘍＞		0	8	8	0	1	1
その他及び部位不明の女性生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
胎盤の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
男性生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞	C60－C63	89	0	89	72	0	72
陰茎の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	1	0	1
前立腺の悪性新生物＜腫瘍＞		88	0	88	71	0	71
精巣〈睾丸〉の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
その他及び部位不明の男性生殖器の悪性新生物＜腫瘍＞		1	0	1	0	0	0
腎尿路の悪性新生物＜腫瘍＞	C64－C68	91	60	151	33	28	61
腎盂を除く腎の悪性新生物＜腫瘍＞		13	7	20	7	8	15
腎盂の悪性新生物＜腫瘍＞		14	11	25	0	5	5
尿管の悪性新生物＜腫瘍＞		6	5	11	1	1	2
膀胱の悪性新生物＜腫瘍＞		57	37	94	24	13	37
その他及び部位不明の尿路の悪性新生物＜腫瘍＞		1	0	1	1	1	2
眼、脳及びその他の中枢神経系の部位の悪性新生物＜腫瘍＞	C69－C72	2	5	7	0	0	0
眼及び付属器の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
髄膜の悪性新生物＜腫瘍＞		0	1	1	0	0	0
脳の悪性新生物＜腫瘍＞		2	4	6	0	0	0
脊髄、脳神経及びその他の中枢神経系の部位の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0

疾病、障害及び死因の統計分類基本分類	ICD10 コードNo.	主病			副病		
		男	女	計	男	女	計
甲状腺及びその他の内分泌腺の悪性新生物＜腫瘍	C73－C75	1	2	3	0	4	4
甲状腺の悪性新生物＜腫瘍＞		1	2	3	0	4	4
副腎の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
その他の内分泌腺及び関連組織の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
部位不明確、続発部位及び部位不明の悪性新生物＜腫瘍＞	C76－C80	21	20	41	276	163	439
その他及び部位不明確の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
リンパ節の続発性及び部位不明の悪性新生物＜腫瘍＞		1	1	2	19	21	40
呼吸器及び消化器の続発性悪性新生物＜腫瘍＞		7	9	16	198	110	308
その他の部位及び部位不明の続発性悪性新生物＜腫瘍＞		7	4	11	56	27	83
悪性新生物＜腫瘍＞，部位が明示されていないもの		6	6	12	3	5	8
リンパ組織、造血組織及び関連組織の悪性新生物＜腫瘍＞，原発と記載された又は推定されたもの	C81－C96	139	107	246	30	30	60
ホジキン＜Hodgkin〉リンパ腫		2	0	2	0	0	0
ろ〈濾〉胞性リンパ腫		0	4	4	4	2	6
非ろ〈濾〉胞性リンパ腫		28	28	56	2	2	4
成熟T/NK細胞リンパ腫		4	0	4	0	1	1
非ホジキン＜non-Hodgkin＞リンパ腫のその他及び詳細不明の型		11	8	19	2	6	8
T/NK細胞リンパ腫のその他の明示された型		4	0	4	2	0	2
悪性免疫増殖性疾患		4	1	5	1	0	1
多発性骨髄腫及び悪性形質細胞性新生物＜腫瘍＞		8	24	32	10	10	20
リンパ性白血病		11	12	23	2	2	4
骨髄性白血病		67	28	95	7	6	13
単球性白血病		0	2	2	0	1	1
細胞型の明示されたその他の白血病		0	0	0	0	0	0
細胞型不明の白血病		0	0	0	0	0	0
リンパ組織、造血組織及び関連組織のその他及び詳細不明の悪性新生物＜腫瘍＞		0	0	0	0	0	0
独立した（原発性）多部位の悪性新生物＜腫瘍＞	C97	0	0	0	0	0	0

第三部　研 究 部 門

（令和５年度　活動報告）

Ⅰ　チーム研究等

チーム研究

研究系	研究チーム名	研　究　テ　ー　マ	チ　ー　ム リーダー
自然科学系	老化機構	分子機構 プロテオーム システム加齢医学	井上聡
	老化制御	分子老化制御 生体調節機能 老化細胞	石神昭人
	老化脳神経科学	自律神経機能 記憶神経科学 老化神経生物学	遠藤昌吾
	加齢変容	心血管老化再生医学 運動器医学	石神昭人
	老年病理学	高齢者がん 神経病理学	石渡俊行
	神経画像	PET薬剤科学 PET画像診断 AI画像解析	豊原潤
社会科学系	社会参加とヘルシーエイジング	社会参加・社会貢献 ヘルシーエイジングと地域保健 大都市高齢者基盤	藤原佳典
	自立促進と精神保健	フレイルと筋骨格系の健康 オーラルフレイルと栄養 認知症と精神保健	平野浩彦
	福祉と生活ケア	デジタル高齢社会 医療・介護システム ソーシャルインクルージョン	石崎達郎

老化機構研究チーム

チームリーダー：井上聡

研究チームの概要

チームは､分子機構研究･プロテオーム研究･システム加齢医学研究の3テーマから構成される。分子機構研究は糖鎖、プロテオーム研究はタンパク質、システム加齢医学研究は性ホルモン作用および代謝経路に着目し、老化および老化関連疾患のメカニズムの解明および新たな診断・治療法の開発、さらには健康長寿への応用を目指し、テーマ間での連携を深めている。これらの実現に向け、先進的な方法論、概念を取り入れた基礎・応用研究を進めるとともに、基盤技術を提供し、高齢者の健康増進、長寿、生活の質の向上に寄与することを目的とする。

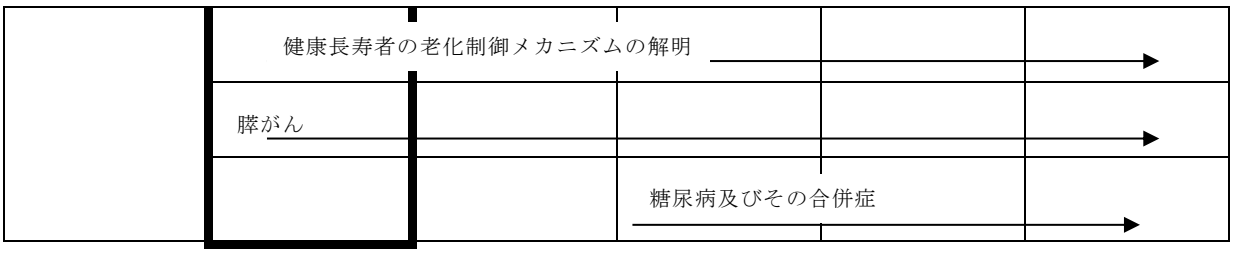
【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

分子機構

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)糖鎖異常による疾患発症メカニズムの解明とその応用	・糖鎖合成関連酵素の構造および機能の解析 ・筋ジストロフィー用治療薬の開発	・合成関連酵素の解析 ・筋ジス治療薬の開発 ・がんにおけるO-マンノース型糖鎖機能の解析	・合成関連酵素の解析 ・筋ジス治療薬の開発 ・がんにおける糖鎖機能の解析	・合成関連酵素の解析 ・筋ジス治療薬の開発 ・がんにおける糖鎖機能の解析	・合成関連酵素の解析 ・筋ジス治療薬の開発 ・がんにおける糖鎖機能の解析
(2)老化および老化疾患に関連する糖鎖機能の解明	・モデルマウスのマルチオミクス解析 ・インフォマティクス解析手法の検討	・マルチオミクス ・インフォマティクス解析によるターゲット分子の探索	・マルチオミクス ・インフォマティクス ・ターゲット分子と老化／疾患との関連の解	・マルチオミクス ・インフォマティクス ・ターゲット分子の解析	・マルチオミクス ・インフォマティクス ・ターゲット分子の解析 ・データベース化
(3)認知症における糖鎖機能の解明	・糖鎖遺伝子導入細胞の糖鎖解析とAPP代謝への影響の解析	・糖鎖遺伝子導入細胞の糖鎖解析とAPP代謝への影響の解析	・糖鎖遺伝子導入細胞の糖鎖解析とAPP代謝への影響の解析 ・ブレインバンク検体の糖鎖解析	・細胞の解析 ・ブレインバンク検体の解析 ・糖鎖改変細胞の作製	・細胞の解析 ・ブレインバンク検体の解析 ・糖鎖改変細胞の解析

プロテオーム

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)細胞外小胞(EV)を標的としたバイオマーカー探索と機能解明	組織特異的EV精製法の確立 →	老化関連疾患の試料を用いたバイオマーカー探索 →			
(2)超硫黄生体物質の解析法の創出と老化関連疾患研究への応用		超硫黄老化関連疾患の資料を用いたバイオマーカー探索 →	老化関連疾患との関連解明研究 →		
(3)A 超高感度グライコミクス･グライコプロテオミクス研究基盤の確立	→	→	→	→	→
(3)B老化･老化関連疾患研究への応用			バイオマーカー候補分子の検証 →		
		フレイル・運動機能低下のバイオマーカー探索 →			



システム加齢医学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1A)性ホルモンのフレイル・認知症における役割の解明	→	→	→	→	→
	・性ホルモンの筋肉・骨における標的分子・シグナル経路を包括的に同定する。	・性ホルモンシグナルの標的・関連分子をコードする遺伝子の細胞における作用メカニズムを解明する。	・高齢マウスや筋肉・骨の疾患マウスモデルを用いて性ホルモンシグナルの役割を解明する。	・遺伝子改変マウス等により*in vivo*での機能を解析する。	・ヒト臨床検体も含めロコモティブ症候群・フレイルの診断・治療・予防への応用について検討する。
	・エストロゲンとその関連受容体（ER/ERR）の神経細胞における発現と機能を解析する。	・ER及びERRの脳・神経細胞における標的分子を包括的に同定する。	・ER及びERRの標的・関連分子をコードする遺伝子を改変した細胞等を作製し、作用メカニズムを解明する。	・遺伝子改変マウス等で*in vivo*での機能を解析する。神経変性疾患マウスモデルを用いて標的・関連分子の機能を解明する。	・認知症患者脳検体及び高齢マウスを用いた解析を行い、認知症の診断・治療・予防への応用について検討する。
	・ビタミンの認知症・フレイル・うつにおける新しい縦断コホート研究を始める。	・ビタミンの認知症・フレイル・うつにおけるコホート研究を進め解析する。	・ビタミンの認知症・フレイル・うつにおけるコホート研究を行い、新しいバイオマーカーを探る。	・ビタミンの認知症・フレイル・うつにおけるコホート研究を継続して進める。	・研究結果を総括し、バイオマーカー等への臨床応用を図る。
	・性ホルモンと関連するRNA結合蛋白質の認知症患者脳検体・神経細胞における発現解析を行う。	・RNA結合蛋白質の標的RNAの包括的に同定し、メカニズムの解析を進める。	・RNA結合蛋白質の標的RNA・関連分子コードする遺伝子を改変した細胞等を作製し、作用メカニズムを解明する。	・遺伝子改変マウス等で*in vivo*での機能を解析する。神経変性疾患マウスモデルを用いて標的・関連分子の機能を解明する。	・認知症患者脳検体及び高齢マウスを用いた解析を行い、認知症の診断・治療・予防への応用について検討する。

(1B)ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿・フレイルにおける役割の解明	・COX7RPの遺伝子改変マウスの表現型と作用をシングルセルレベルで解析する。	・COX7RPによる超複合体形成制御のメカニズムの解明、及び筋肉運動・糖代謝・健康長寿に担う役割とそのメカニズムの解明を行う。	・COX7RPの作用に関わる分子をコードする遺伝子を改変した細胞等を作製し、メカニズム解明を進める。	・高齢マウスや老化関連疾患マウスモデルでCOX7RPの機能を解明する。	・ヒト臨床検体も含めてCOX7RPの役割を解析し、COX7RPのフレイル・糖尿病の診断・治療・予防や健康長寿増進への応用を検討する。
	・我々が独自に開発した超複合体形成の可視化・空間定量化技術による化合物・既存薬・抽出物等のスクリーニングを行う。	・スクリーニングを継続しつつ、同定した化合物等から得られる機能解明を行う。	・同定した超複合体形成制御分子の標的・関連分子をコードする遺伝子を改変した細胞等を作製し、作用メカニズムを解明する。	・高齢動物やフレイル・糖尿病・神経変性疾患のマウスモデルにおいて、標的・関連分子の機能を解明する。	・ヒト臨床検体を用いてフレイル・糖尿病・認知症の診断・治療・予防への応用を図る。
(2)健康長寿を損なうホルモン依存性がんにおける性ホルモンシグナルと治療抵抗性メカニズムの解明	・ホルモン依存性がんにおける性ホルモンの標的遺伝子を包括的に同定する。 ・ホルモン依存性がんの治療抵抗性に関わる非コードRNA及びRNA結合蛋白質を包括的に同定する。 ・ホルモン不応性の治療抵抗性がんについて、治療抵抗性のメカニズムを解析する。	・性ホルモンの標的・関連遺伝子の治療抵抗性における役割と作用メカニズムを解明する。 ・非コードRNA及びRNA結合蛋白質が治療抵抗性に寄与する作用メカニズムを解明する。 ・解明したがんの治療抵抗性メカニズムをもとに、小分子・核酸創薬に向けたスクリーニングを進める。	・患者由来がんモデルを用いて標的・関連遺伝子の作用メカニズムを検討する。 ・患者由来がんモデルを用いて標的・関連分子の作用メカニズムを検討する。 ・患者由来がんモデルを用いて、小分子・核酸創薬のための解析を進める。	・患者由来がん動物モデルを用いて標的・関連遺伝子の治療応用に関して検討する。 ・患者由来がん動物モデルを用いて標的・関連分子の治療応用に関して検討する。 ・患者由来がん動物モデルを用いて、候補小分子・核酸の治療応用について検討する。	・メカニズムを患者臨床検体を用いて解析し、診断・治療への臨床応用を検討する。 ・メカニズムを患者臨床検体を用いて解析し、診断・治療への臨床応用を図る。 ・小分子・核酸創薬に向けて、患者臨床検体も活用して候補小分子・核酸の診断・治療への応用を図り、導出につなげる。

分子機構

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
萬谷　博	研究部長	総括
赤阪　啓子	研究員	研究全体のデータ収集・分析
今江　理恵子	研究員	研究全体のデータ収集・分析
星野　俊介	研究員	研究項目(1)のデータ収集・分析
遠藤　玉夫	シニアスタッフ	研究全体の分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 糖鎖異常による疾患発症メカニズムの解明とその応用

本テーマで発見したO-マンノース型糖鎖は、その欠損が中枢神経障害を伴う先天性筋ジストロフィー症（ジストログリカノパチー）の原因となることから、神経および筋機能に重要な糖鎖である。こうした成果に基づいてジストログリカノパチーの治療薬開発を進めており、昨年度に薬剤候補分子のCDP-リビトール誘導体の治療効果を報告した(Nat. Commun. 2022)。生体内ではCDP-

リビトールはリビトールリン酸から合成されるが（Cell Rep. 2016)、哺乳動物におけるリビトールリン酸の生合成経路は分かっていなかった。本年度は、ヒト細胞を用いてリビトールリン酸の産生経路と主要な産生酵素がAKR1B1であることを明らかにした（学会3,13,17)。また、高齢者がん研究テーマとシステム加齢医学研究テーマとO-マンノース型糖鎖と膵がんおよび乳がんに関する共同研究を進め今年度の学会で報告した（学会12,15)。

(2) 老化および老化疾患に関連する糖鎖機能の解明

加齢や老化関連疾患おける糖鎖および糖タンパク質の変化から、加齢よる機能低下や疾患の要因となる分子変化を特定することを目標として老化および関連疾患モデル細胞／マウスのマルチオミクス解析を行う。これまでに、自然老化マウス、老化疾患マウス（・-klothoマウス)、微小重力環境を含む筋萎縮マウスの解析を進めている。本年度は血清、肺、骨格筋におけるN型糖鎖の加齢変化のグラコームデータのインフォマティクスを進め、加齢に伴ってパウチマンノース型糖鎖が変化することを見出した。パウチマンノース型糖鎖は無脊椎動物の主要糖鎖で2 個のN-アセチルグルコサミンと 数個のマンノースによって構成される短い糖鎖である。哺乳類にも存在することが報告されているが、生合成経路や機能については明らかにされてない。さらに糖鎖変化のメカニズムを検討するためトランスクリプトーム解析を進めており、パウチマンノース型糖鎖の産生への関与が疑われるマンノース分解酵素HEXAとHEXBの発現を調べたとところ加齢に伴う変化が認められた（国際学会1, 学会5,11,14)。

(3) 認知症における糖鎖機能の解明

これまでにアルツハイマー病で変化する糖鎖遺伝子を複数見出し、糖鎖修飾がアミロイド前駆体タンパク質（APP）の代謝を変化させることを明らかにしており、アルツハイマー病における糖鎖変化およびAPP代謝変化のメカニズムの解析を進めている。APPにはスプライシングの違いによりアミノ酸数の異なるアイソフォームが存在し、神経細胞由来のAPP695と血管内皮細胞由来のAPP770が知られている。本年度は、APP695とAPP770の糖鎖修飾機構が異なることを報告した（論文1)。神経細胞由来のAβは老人斑形成、血管内皮細胞（Aβ）はアミロイド・アンギオパチーの原因となることから、今後両者の代謝機構のメカニズムを明らかにしていく必要がある。

一方で、糖鎖には多様な構造が存在しており、実際の生体における糖鎖変化のメカニズムは非常に複雑であることから、実際のアルツハイマー病の脳における糖鎖変化を明らかにする必要がある。本年度から、ヒューマングライコ―ムプロジェクトが文部科学省「大規模学術フロンティア促進事業」として開始され、中核機関である東海国立大学機構糖鎖生命コア研究所（iGCORE）とブレインバンク検体を用いたマルチオミクス解析の共同研究を計画した。iGCOREにおける倫理申請が承認され次第、共同研究契約を締結しプロジェクトを開始する予定である。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 糖鎖異常による疾患発症メカニズムの解明とその応用

O-マンノース型糖鎖の生合成酵素の同定や機能解析により、これまでにO-マンノース型糖鎖の主要な生合成経路を解明することができた。こうした成果に基づいたジストログリカノパチー治療薬開発では、昨年度に糖鎖生合成の前駆体であるCDP-リビトールの誘導体の治療効果について報告した（Nat. Commun. 2022)。CDP-リビトールはCTPとリビトールリン酸から合成酵素ISPDにより合成されることも我々が以前に報告しているが（Cell Rep. 2016)、哺乳動物におけるリビトールリン酸の生合成経路は分かっていなかった。リビトールは五炭糖アルコールであることから、五炭糖の①リボースあるいは②リブロースが還元されてできたリビトールがリン酸化される経路と、リボースあるいはリブロースのリン酸化後に③リボースリン酸あるいは④リブロースリン酸が還元される経路が予想された。また還元酵素とし、アルドーケト還元酵素（AKR）ファミリーの関与を想定してAKR1A1、AKR1B1、AKR1C1が候補とした。さらに、質量分析機を利用して細胞内のリボースリン酸を定量する方法を開発し、リボースリン酸の還元に関わる還元酵素の活性測定を可能にした。また、AKR1A1、AKR1B1、AKR1C1の強制発現細胞とノックダウン細胞を作製し、哺乳動物細胞のリボースリン酸産生経路を明らかにした（論文3)。

(2) 老化および老化疾患に関連する糖鎖機能の解明

マルチオミクスにより老化マウスおよび関連疾患モデルマウスの糖鎖および糖タンパク質の網羅的定量解析を進めている。これまでに、自然老化マウス、老化疾患マウス（α-klothoマウス)、微小重力環境を含む筋萎縮マウスから得られたデータのバイオインフォマティクス解析から各モデル間の共通変化や特徴的変化を見出している。また、DNAアレイあるいはトランスクリプトーム解析を行い、糖鎖変化と遺伝子発現の変化との関連性について検討を進めている。

(3) 認知症における糖鎖機能の解明

今年度より始まったヒューマングライコームプロジェクト（HGP）では認知症の死後脳を用いたマルチオミクス解析を計画している。HGPにおいてブレインバンク検体を使用するため、本年度はHGPを主催するiGCOREと当研究所（ブレインバンク、分子機構）の共同研究契約の準備を進め、アルツハイマー性認知症と嗜銀顆粒性認知症の主座病変部（側頭葉）を用いた詳細な解析計画を作成した。iGCOREにおいて倫理申請中であり承認され次第、計画を開始する。本計画では、ブレインバンクは検体をiGCOREと分子機構に提供し、iGCOREで網羅的解析、分子機構では変化のあった分子の解析を分担する。また、糖鎖修飾によるAPP代謝への影響の解析では、神経由来APPと血管由来APPは糖鎖修飾と細胞内代謝機構が異なることを報告した。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜がんに関する共同研究＞
【センター内】老化機構研究チーム（システム加齢医学）
＜マルチオミクスに関する共同研究＞
【センター内】老化機構研究チーム（プロテオーム）
＜認知症（ブレインバンク）に関する共同研究＞
【センター内】老年病理学研究チーム（神経病理学）
＜肺気腫に関する共同研究＞
【センター内】老化制御研究チーム（分子老化制御）
＜グライコミクスに関する共同研究＞
【センター内】加齢変容研究チーム（心血管老化再生医学）
＜筋疾患に関する共同研究＞
【センター内】老年病態研究チーム（運動器医学）
＜筋ジストロフィー症に関する共同研究＞
【センター外】東京大学、愛媛大学、神戸大学、国立精神神経医療研究センター、Radboud大学（オランダ）、北京大学
＜構造解析に関する共同研究＞
【センター外】京都大学、高エネルギー加速器研究機構
＜糖鎖機能に関する共同研究＞
【センター外】京都大学
＜プロテオミクスに関する共同研究＞
【センター外】慈恵会医科大学、名古屋大学、北海道大学、新潟大学
＜プロテオグリカンに関する共同研究＞
【センター外】神戸薬科大学
＜酵素機能／糖鎖合成に関する共同研究＞
【センター外】鳥取大学、野口研究所
＜筋ジストロフィー治療薬に関する共同研究＞
【センター外】東京薬科大
＜糖鎖機能、がんに関する共同研究＞
【センター外】名古屋市立大学
＜アルツハイマー病に関する共同研究＞
【センター外】福島県立医科大学
＜網膜色素変性症に関する共同研究＞
【センター外】Baylor大学

プロテオーム

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
三浦　ゆり	研究部長	研究全体の統括・研究計画（３B）のデータ収集・分析
津元　裕樹	主任研究員	研究計画（３A・B）のデータ収集・分析
梅澤　啓太郎	研究員	研究計画（２）のデータ収集・分析
川上　恭司郎	研究員	研究計画（１）のデータ収集・分析

１　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 細胞外小胞（EV）を標的としたバイオマーカー探索と機能解明

標的とする組織から分泌される特異的なEVを濃縮・精製する方法を開発する。疾患における組織特異的EVの解析から、早期診断マーカーの開発、病態メカニズムの解明、治療標的の開発につなげることを目指す。本年度は、血管内皮細胞由来EVの濃縮・精製に使用できる抗体を選出し、血漿から血管内皮細胞由来EVを濃縮・精製する方法を確立した。また、SONICと連携して認知機能の低下に特徴的なバイオマーカー候補EVタンパク質を明らかにした。

本テーマ関連の成果として、論文発表１、 学会発表（国際１、国内３）、 市民向け講演１

(2) 超硫黄生体物質の解析法の創出と老化関連疾患研究への応用

超硫黄生体物質(硫黄原子がチオール基に余剰に結合した構造を有する生体分子やタンパク質)を分析可能な化学ツールの開発及び、それらを用いた蛍光イメージング法やプロテオーム解析法の確立と複合化、実装化を目指す。本年度は生体調節機能グループと連携して、複製老化モデル細胞（TIG-1）を用いたミトコンドリア内超硫黄分子種の蛍光イメージングとプロテオーム解析を行った。複製老化に伴うミトコンドリアのエネルギー代謝と超硫黄分子種の変動との関連性を示唆する結果を得た。

本テーマ関連の成果として、学会発表（国内１）、市民向け講演１

(3) 超高感度グライコミクス・グライコプロテオミクス研究基盤の確立と老化・老化関連疾患研究への応用

これまでに開発した分析手法を踏まえ、汎用性が高く、超高感度な質量分析を基盤とする独自のグライコミクス・グライコプロテオミクス分析手法を確立することを目指す。さらに、チーム外研究部門、病院部門、バイオバンクや他機関と連携して、独自に確立した分析手法を応用することにより、糖鎖・糖ペプチド及びその関連物質に着目した新たなバイオマーカー開発や、病態及び健康長寿のメカニズム解明につなげることを目標とする。本年度は、N型糖鎖解析、遊離糖鎖解析、N型糖ペプチド解析の3種類の解析法を確立し、特に遊離糖鎖解析においては血漿や血清において新規の糖鎖構造の存在を見出した。

老化・老化関連疾患に関しては、高齢者がんグループと連携して培養膵がん細胞を用いたN型糖鎖およびN型糖ペプチド解析を行い、膵がんの中でも上皮系と間葉系でタンパク質全体の糖鎖パターンが異なることが示され、糖鎖修飾が種々の膵がんを判別するバイオマーカーとなる可能性が示唆された。

本テーマ関連の成果として、論文発表１、学会発表（国際２、国内２）、招待講演３、特許（出願１、登録１）、理事長奨励賞１、プレス発表１

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 細胞外小胞（EV）を標的としたバイオマーカー探索と機能解明

細胞外小胞（EV）に着目し、病態におけるバイオマーカー探索やその機能解明を目指す。

①血管内皮特異的EV精製法の確立　本年度は、血管内皮細胞特異的なタンパク質に対する抗体を用いてEVを精製し、EVに含まれるmiRNAを測定して血管内皮細胞由来かどうかを調べた。また、この方法で精製したEVに含まれるタンパク質の解析を行い、血管内皮細胞由来EVが濃縮されているかどうかを調べた。血小板由来EVの混入を低減して、血管内皮細胞由来EVの精製に使用できる抗体を選出することに成功し、血漿から血管内皮細胞由来EVを精製する方法を確立した。

②認知機能低下のEVバイオマーカー探索　認知症・精神保健グループ（稲垣研究員）と連携して、SONICコホートの中から6年間連続的に認知機能が低下した人を抽出し、認知機能低下の前後で変化する血漿EVタンパク質を調べた。血漿EVのプロテオーム解析により、認知機能の低下に特徴的なバイオマーカー候補EVタンパク質を明らかにした。さらにサンドイッチELISA系を構築し、バイオマーカー候補EVタンパク質が認知機能の低下に伴い有意に変化することを、抗体を用いて検証した。

本研究は、自立促進と精神保健研究チーム（認知症と精神保健）および福祉と生活ケア研究チーム（医療・介護システム）との共同研究である。SONICから解析対象者を抽出する際、認知機能検査に精通する稲垣研究員（認知症と精神保健)、増井研究員（医療・介護システム）と協同し、効果的に研究を推進した。

本年度、血管内皮細胞由来EVを精製する方法を確立したので、来年度以降SONIC参加者の中から、高血圧や糖尿病など血管の老化や疾患を引き起こしている人を抽出し、血管内皮細胞由来EVに含まれるmiRNAやタンパク質の解析を進める。また、認知機能低下のEVバイオマーカー探索については、さらに検体数を増やし、今年度明らかにした候補EVタンパク質のバイオマーカーとしての有

用性の検証を進める。以上の研究を進めていくことで、本研究計画の実現が期待される。

(2) 超硫黄生体物質の解析法の創出と老化関連疾患研究への応用

超硫黄生体物質(硫黄原子がチオール基に余剰に結合した構造を有する生体分子やタンパク質)を分析可能な化学ツールの開発及び、それらを用いた蛍光イメージング法やプロテオーム解析法の確立と複合化、実装化を目指す。本年度は、超硫黄分子種（グルタチオンやシステインの超硫黄化物）に焦点を当て、第三期中期計画にて独自に開発した蛍光プローブを用いて、老化細胞モデルにおける超硫黄分子種の濃度変動の可視化を行った。

複製老化モデル細胞（TIG-1）を用いて、細胞分裂期（Phase1)、倍加速度低下期（Phase2)、分裂停止期（Phase3）におけるミトコンドリア内の超硫黄分子種を蛍光イメージングにより相対定量した結果､Phaseが上がるにつれて超硫黄分子種の濃度が低下することを新たに見出した｡また、これらの細胞をプロテオーム解析した結果、硫黄代謝や超硫黄産生に関連する複数のミトコンドリア内酵素の発現量に顕著な変化が見られ、複製老化に伴うミトコンドリアのエネルギー代謝と超硫黄分子種の変動の関連性を示唆する結果を得た。

老化関連疾患群に特徴的な超硫黄生体物質情報を、分析手法の開発を通じて明らかにすることを目標とした第四期中期計画において、老化現象と超硫黄の関連を示唆する本研究成果はその計画の実現に資するものである。よって、今後の更なる詳細研究により、計画全体の実現が期待される。

(3) 超高感度グライコミクス・グライコプロテオミクス研究基盤の確立と老化・老化関連疾患研究への応用

3A. 超高感度グライコミクス・グライコプロテオミクス研究基盤の確立

2022年度までに確立したシアル酸の化学誘導体化法および糖鎖補足ビーズを用いたN型糖鎖解析法を用い、血漿、組織（腎、脳、膵)、培養細胞などの①N型糖鎖解析および②遊離糖鎖解析を行った。その結果、MALDI-TOF MSによる糖鎖プロファイルの取得に成功し、汎用性の高い前処理法であることが示された。一方、MALDI-TOF MSではN型糖鎖に付加したフコースの位置を区別することが困難であった。そこで、LC-ESI-MS/MSによる詳細な構造解析行い、コアと側鎖に付加したフコースの区別に成功した。

次世代型高感度質量分析システムとして、イオンモビリティーを搭載したLC-ESI-MS/MSシステムおよび解析ソフトウェアが整備された（2023年9月末)。

①N型糖鎖解析　超百寿者群、90歳群、80歳群、70歳群の血漿タンパク質の解析を行った結果、超百寿者群では側鎖に付加したフコースが有意に増加したことから、このような糖鎖構造変化が健康長寿に重要である可能性が示唆された。

②遊離糖鎖解析　これまでに報告のない構造の新規遊離糖鎖が、ヒト、マウス、ラットの血漿や血清に存在することを発見した（学会発表； 国内８)。しかしながら、その生成機構は不明であり、さらなる研究が必要である。

糖鎖解析全般においては島津製作所との共同研究として推進し、血中遊離糖鎖の分析に関する特許出願を行った（特許２)。

本年度、様々な生物種（ヒト、マウス、ラット）の様々なサンプル（血液、組織、培養細胞）からN型糖鎖に関する情報を取得することができた。来年度、得られた糖鎖情報に加え、次世代型高感度質量分析システムを含むLC-ESI-MS/MSを活用して糖ペプチド解析を行うことにより、第四期中期計画における本研究項目の実現が期待される。

3B. 老化・老化関連疾患研究への応用

B-1. 膵がん（高齢者がん研究テーマとの共同研究)

二次元および三次元培養の膵がん細胞を用い､シアル酸結合様式を区別した糖鎖､糖ペプチド、遊離糖鎖解析を行い､膵がんに特徴的な糖鎖とその生物学的意義の解明を目的とする｡本年度は、5種類の上皮系、3種類の間葉系ヒト膵がん細胞株を用いて質量分析を基盤とするN型糖鎖およびN型糖ペプチド解析を行った。

三次元培養の上皮系膵がん細胞において、複数の複合型N型糖鎖が顕著に増加した。また、これらのN型糖鎖が結合するタンパク質には、既知の腫瘍マーカーが含まれていた。このことは、既知の腫瘍マーカーであっても糖鎖まで区別することにより、上皮系膵がんを判別できる可能性を示唆するものである。

本年度、サンプル調製から解析までの研究基盤が確立された。来年度以降、再現性を含む詳細な解析を進めることにより、膵がんに特徴的な糖鎖とその生物学的意義の解明の実現が期待される。

B-2. 健康長寿者の老化制御メカニズムの解明

健康長寿者の糖鎖を介した老化制御メカニズムを明らかにすることを目標とする。本年度は縦断的アプローチを用いて慢性炎症が糖鎖構造に及ぼす影響を調べるため、SONICコホートの中から6年間連続的にCRP（炎症指標）が増加した人を解析対象者として抽出し、また傾向スコアマッチング解析を用いて対照群を抽出した。炎症性サイトカイン等（IL-6、TNF-α、GDF15、CD163）について、CRP増加に伴う変化を調べた。また、血漿のN型糖ペプチド解析を行い、炎症の亢進による糖鎖変化と糖鎖が結合するタンパク質について調べた。

CRP増加群と対照群それぞれについて個人ごとに6年間の変化を比較したところ、IL-6とCD163はCRP増加群においてのみ有意に増加することから、本方法での解析対象者の抽出は概ね妥当であると判断された。炎症の亢進による糖鎖変化については現在解析中である。

本計画は、糖鎖を介した健康長寿者の老化制御メカニズムについて、縦断的・横断的アプローチによる観察研究と、糖転移酵素の改変動物等を用いた検証研究を行う。本年度は縦断的アプローチを行ったが、来年度以降に行う横断的アプローチ（超百寿者血漿を用いた炎症指標と糖鎖構造の関連性解析；慶応大と協同）や、チーム内（分子機構）・都立大と協同した糖転移酵素改変動物についての準備も進めており、研究全体の計画の実現が期待される。

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜研究計画(1)＞
【センター内】福祉と生活ケア研究チーム（医療・介護システム)、自立促進と精神保健研究チーム（認知症と精神保健）
【センター外】中部国際医療センターがんゲノム診断・診療センター、帝京大学、藤田医科大学、芝浦工業大学、大阪大学、慶応大学医学部百寿総合研究センター、
＜研究計画(2)＞
【センター内】老化制御研究チーム（生体調節機能)、老年病理学研究チーム（高齢者がん)、糖尿病・代謝・内分泌内科
【センター外】名古屋市立大学大学院、東北大学加齢医学研究所、京都産業大学、京都薬科大学、九州大学大学院薬学研究院、自然科学研究機構生理学研究所、慶應義塾大学
＜研究計画(3A)＞
【センター外】島津製作所
＜研究計画(3B)＞
【センター内】福祉と生活ケア研究チーム（医療・介護システム)、自立促進と精神保健研究チーム（認知症と精神保健)、老年病理学研究チーム（高齢者がん)、糖尿病・代謝・内分泌内科
【センター外】大阪大学、慶応大学医学部百寿総合研究センター、島津製作所、杏林大学、大阪大学、東京都立大学
＜質量分析技術支援＞
【センター内】老化脳神経科学研究チーム（老化神経生物学、自律神経機能)、自立促進と精神保健研究チーム（フレイル・筋骨格系の健康）
＜プロテオーム技術支援＞
【センター内】加齢変容研究チーム（心血管老化再生医学、筋老化制御)、認知症未来社会創造センター（IRIDE）
【センター外】横浜市立大学大学院、愛媛大学、大阪大学、東京都立大学、京都工芸繊維大学、学習院大学、千葉大学大学院薬学系研究院、筑波大学、国立感染症研究所、帝京平成大学、芝浦工業大学、福島県立医科大学
＜AMED創薬総合支援＞
【センター外】名古屋市立大学大学院、大阪大学大学産業科学研究所

システム加齢医学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
井上　聡	研究部長	研究全体の総括・責任者
高山　賢一	専門副部長	研究全体の統括・推進

竹岩　俊彦	研究員	研究全体のデータ収集・分析
佐藤　薫	研究員	研究全体のデータ収集・分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

当テーマは、第四期中期計画期間において「性ホルモンのフレイル・認知症における役割の解明」、「ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿・フレイルにおける役割の解明」、及び「健康長寿を損なうホルモン依存性がんにおける性ホルモンシグナルと治療抵抗性メカニズムの解明」という3つの課題を中心として研究を進めている。

「性ホルモンのフレイル・認知症における役割の解明」では、細胞・動物モデルやヒト臨床検体を活用して、骨・筋肉・神経における性ホルモン作用の解析が進展し、そのフレイル・認知症・ロコモティブ症候群に担う役割について複数の知見を得ている。特に、認知症未来社会創造センター及び当センター・ブレインバンクとの共同研究を契機として、性ホルモン作用に関わるRNA結合蛋白質であるG3BP、及びG3BPをコア因子として含む巨大な蛋白質-RNA複合体であるストレス顆粒が、アルツハイマー型認知症関連遺伝子の調節に寄与することを明らかにして、国際英文誌に原著論文（***Aging (Albany)***, 2023, and ***Cover***）を発表し表紙を飾るとともに、学会発表を行っている。さらに、社会科学系研究室と連携して、高齢者を対象とした長期縦断コホート（板橋お達者健診）の健診結果の縦断解析を行い、ビタミンK不足とフレイル発症のリスクとの関連を明らかにし、国際英文誌に原著論文発表し、学会発表も進めている。「ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿・フレイルにおける役割の解明」に関して、これまでに我々は性ホルモンであるエストロゲンの標的因子であるCOX7RPが超複合体の形成制御因子であることを見出し、超複合体の形成促進がミトコンドリアにおけるエネルギー代謝の亢進や筋肉の運動持久力の向上に寄与することを明らかにしてきた。COX7RPの生理学的な役割をさらに解明するため、COX7RPを高発現する遺伝子改変マウス（COX7RP-Tgマウス）を独自に作製し、その健康長寿と老化・老年病に関連する表現型について解析を進めている。これまでに、COX7RP-Tgマウスでは、超複合体の形成が促進されており、筋肉の運動能が向上し、また糖代謝が改善することを見出している。さらに同マウスを活用して、ミトコンドリア代謝や活性酸素種（ROS）レベルの制御におけるCOX7RPの役割について詳細な解析が進行しているだけでなく、細胞老化、及び個体の寿命に担う役割についても解析が進行中である。一方で、超複合体の新しい形成制御メカニズムの研究に取り組んでおり、世界に先駆けて超複合体の生細胞イメージング・空間定量評価技術を独自に開発した。さらに、本技術を元に化合物ライブラリーのハイスループットスクリーニングを進め、超複合体の形成を促進する複数の化合物を見出した。その中でも、最も超複合体の形成を促進したSYKキナーゼの阻害剤について解析を進め、SYK阻害剤の処理がミトコンドリア代謝の活性化や筋肉の運動持久力の向上に寄与することを明らかにした。本成果について国際英文誌***Nature Communications***に原著論文を発表してプレスリリースを行い、第46回日本基礎老化学会大会で発表して奨励賞を受賞した。「健康長寿を損なうホルモン依存性がんにおける性ホルモンシグナルと治療抵抗性メカニズムの解明」に関して、高齢者で罹患・死亡者数の増加が問題となっている前立腺がんや乳がんを中心に、性ホルモンシグナルが治療抵抗性に担う役割とその臨床的意義について解析を進めている。本成果については***PNAS Nexus***をはじめとする国際英文誌に複数の原著論文を発表してプレスリリースを行い、第42回日本アンドロロジー学会学術大会で発表して学会賞を受賞した。また、本成果に関連した国内特許も申請中である。さらに、難治性のホルモン不応性がんについても新規診断・治療標的の探索・同定とそのメカニズムの解析を開始しており、臨床応用につなげることを目指している。一方、倫理基準を満たした患者臨床検体より患者由来がん細胞を樹立し、患者由来異種移植モデルを作製する研究が展開している。このように、それぞれの課題で順調に研究目標を達成しており、今後さらに研究を推進して老年医学・老化学と医生物学の発展に寄与し、東京都民及び国民の健康長寿ならびに社会へ貢献したい。

2　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 加齢性疾患・健康長寿における性ホルモンの予防・治療効果とそのメカニズムの解明

(1A) 性ホルモンのフレイル・認知症における役割の解明

【進捗状況】

・性ホルモンとフレイル・ロコモティブ症候群に関するプロジェクトは、性ホルモンの作用メカニズムの解明が進んでおり、学会・講演会における発表も順調に進行している。骨組織や筋組織におけるアンドロゲンシグナルをChIPシーケンス等の手法で解析し、老化に関連する組織特異的なアンドロゲンシグナルを同定する研究が進行しており、学会発表を行った。また、エストロゲン応答遺伝子*EBAG9*を欠損したマウスの骨量の減少とそれに伴う各種パラメータの変化に関する結果を得て、骨におけるEBAG9の作用メカニズムの解析が進行している。本研究成果

について学会発表し、原著論文にまとめ国際英文誌である*iScience*誌に投稿し査読対応中である。

・性ホルモンであるエストロゲンの受容体（ER）、及びERと相同性の高いエストロゲン関連受容体（ERR）に関して、ChIPシーケンス等の手法を活用し神経細胞におけるERRの新規標的因子の同定を進めており、そのメカニズムの解析も順調に進行している。

・ビタミンと老化・加齢性疾患に関するプロジェクトは、ビタミンKの新しい作用メカニズムの解析が進展しており、芝浦工業大学との新たな共同研究にも発展し、学部学生を受け入れて進めている。社会科学系研究室と連携し、お達者健診で得られた血液サンプルを利用して、フレイルや認知機能障害等の加齢性疾患とビタミンK充足度の関係を調べる疫学研究が進展しており、ビタミンK不足とフレイル発症の関連を明らかにし原著論文にまとめ、日本骨代謝学会の英文機関誌である*Journal of Bone and Mineral Metabolism*誌に発表し、学会発表も順調に進行している。

・性ホルモン作用に関わるRNA結合蛋白質について、認知症未来社会創造センター及びブレインバンクと連携し、脳・神経における機能や認知症に担う役割の解析を進めている。性ホルモン作用にかかわるRNA結合蛋白質であるPSFが神経細胞の老化に担う役割について、RNAシーケンス等の手法を活用した解析が進行している。CLIPシーケンス等の手法を用いた解析により、性ホルモン作用に関わるRNA結合蛋白質G3BP、及びG3BPをコア因子として含む巨大な蛋白質-RNA複合体であるストレス顆粒が、アルツハイマー型認知症に担う新しい役割を明らかにして、*Aging (Albany)*誌に原著論文を発表し、雑誌表紙を飾るとともに、学会・講演会発表も順調に進行している。

【学術的知見】

・板橋お達者健診の健診結果に関して縦断解析を行い、ビタミンK不足を示すバイオマーカーである血清中の低カルボキシル化オステオカルシン（ucOC）と総オステオカルシン（OC）の比率（ucOC/OC）がフレイル発症の予測因子であることを明らかにして論文発表を行った（*J Bone Miner Metab*, 2023）。

・性ホルモン作用に関わるRNA結合蛋白質であるG3BPは、ストレス環境下において相分離現象を介して形成される巨大な蛋白質とRNAの複合体であるストレス顆粒の主要な構成因子であるが、神経細胞においてG3BP及びストレス顆粒が複数のアルツハイマー型認知症関連遺伝子の発現を調節することを新たに見出し、論文発表を行った（*Aging (Albany)*, 2023, and *Cover*）。

(1B) ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿・フレイルにおける役割の解明

【進捗状況】

・ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の形成制御因子として我々が同定したCOX7RPに関するプロジェクトについて、COX7RPを高発現する遺伝子改変マウス（COX7RP-Tgマウス）を独自に作製し、筋機能や糖代謝におけるCOX7RPの役割に関して解析を進めている。さらに同マウスを活用して、ミトコンドリア代謝や活性酸素種（ROS）レベルの制御におけるCOX7RPの役割を解析するとともに、細胞老化、及び個体の寿命に担う役割についても解析が進行中である。

・ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の新しい形成制御メカニズムに関するプロジェクトについて、独自に確立した評価系を利用して化合物や既存薬、及び抽出物ライブラリーのハイスループットスクリーニングを進めており、特に本スクリーニングより同定した化合物については、その作用を細胞・動物レベルの研究により明らかにして、*Nature Communications*誌に原著論文を発表し、学会発表も順調に進行している。国内外の外部共同研究機関や企業への技術の導出も進行している。

【学術的知見】

・ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞イメージング・空間定量評価法を確立し、それを元に千超の化合物のハイスループットスクリーニングを行い、超複合体の形成を促進する複数の化合物を同定した。それらの化合物の中でも特に超複合体の形成を促進したspleen tyrosine kinase (SYK)の阻害剤に関して、ミトコンドリア代謝の活性化と筋肉の運動持久力の向上にはたらくことを明らかにした。本成果のサルコペニア等の筋疾患の治療・予防や筋肉機能の向上への応用を提唱し、知財を確保したうえで論文発表を行った（*Nat Commun*, 2023）。

(2) 健康長寿を損なうホルモン依存性がんにおける性ホルモンシグナルと治療抵抗性メカニズムの解明

【進捗状況】

・ホルモン依存性がんにおける性ホルモン作用に関するプロジェクトについて、高齢者の健康を損なう前立腺がん及び乳がんを中心として、新しい診断・治療標的を同定するとともに、その

メカニズムの解析が順調に進行している。前立腺がんの研究について、アンドロゲンシグナルと関わるOCT1転写因子の標的として同定したANLNの病理学的解析を行い、*Asian Journal of Urology*誌に原著論文を発表し、学会発表や特許の国外移行も進行している。

・ホルモン依存性がんの治療抵抗性に関わる非コードRNA及びRNA結合蛋白質のプロジェクトについて、前立腺がんや乳がん等のがんの治療抵抗性に関わる非コードRNA・RNA結合蛋白質の新規同定とメカニズムの解析が順調に進行している。非コードRNAについて、新規に同定した非コードRNAである*BNAT1*が、乳がんの治療抵抗性に担う役割を明らかにして*Cells*誌に原著論文を発表し、学会発表も進行している。一方、RNA結合蛋白質について、前立腺がん及び乳がんの治療抵抗性に関わるRNA結合蛋白質であるPSFを抑制する新しい小分子を同定し、その腫瘍抑制効果を示して、*PNAS Nexus*誌に原著論文を発表し、プレスリリース、学会発表や新たな特許の申請を進めた。

・ホルモン不応性の治療抵抗性がんに関するプロジェクトについて、ホルモン不応性がんの新規診断・治療標的の同定と治療抵抗性メカニズムの解析が進み、倫理基準を満たした患者検体からのがん細胞の樹立とそれを活用した異種移植モデルの作製が順調に進展している。ホルモン不応性前立腺がんについて、DNA傷害の修復に関わる因子群が治療抵抗性に担う役割を明らかにして*Scientific Reports*誌に原著論文を発表し、学会発表も進行している。また、当チーム内で分子機構テーマと共同で糖鎖修飾酵素POMGnT1の卵巣がんにおける役割について解析を進めており、日本癌学会での学会発表を行っている。

【学術的知見】

・倫理基準を満たした前立腺がん検体を用いて免疫組織化学実験を行い、ANLNの強免疫染色性が患者予後不良と有意に相関し、OCT1の免疫染色性と組みわせることで患者予後不良とより強く相関することを明らかにして、論文発表を行った（***Asian J Urol***, 2023)。

・エストロゲンシグナルの新しい標的非コードRNAとして*BNAT1*を同定し、生化学・分子生物学的な手法を用いた解析により、*BNAT1*がエストロゲン受容体の発現とエストロゲンシグナルを亢進して治療抵抗性乳がんの増殖・生存を促進することを明らかにして、論文発表を行った(***Cells***, 2022)

・分子間相互作用の解析技術であるαアッセイを用いて、5万超の小分子のハイスループットスクリーニングを行い、PSFとRNAの結合を阻害する小分子を同定・最適化した。本化合物が治療抵抗性の前立腺がん及び乳がんの増殖を抑制し抗腫瘍効果を発揮することを明らかにして、***PNAS Nexus***誌に論文発表を行った。

・RNAシーケンスを用いた包括的な遺伝子発現解析により、ホルモン不応性及び治療抵抗性前立腺がんにおいて、DNA傷害の修復因子群が多く発現することを見出し、機能実験からこれらの因子が治療標的の候補となることを示した。また、候補因子の一つであるRFC2に関して倫理基準を満たした前立腺がん検体を用いて免疫組織化学実験を行い、RFC2の強免疫染色性が患者予後不良と有意に相関することを明らかにして、論文発表を行った（***Sci. Rep.***, 2023)。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜性ホルモンのフレイル・認知症における役割の解明に関する共同研究＞

【センター内】実験動物施設、自立促進と精神保健研究チーム、老年病理学研究チーム（神経病理学・高齢者ブレインバンク）

【センター外】順天堂大学医学部附属順天堂病院、東京医科大学、埼玉医科大学病院、東京大学医学部附属病院、埼玉医科大学、昭和大学、芝浦工業大学、カリフォルニア大学、北海道大学 ＜ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿・フレイルにおける役割の解明＞

【センター内】実験動物施設、老化制御研究チーム（生体調節機能）

【センター外】東京大学、埼玉医科大学、理化学研究所、米国国立衛生研究所、デューク・シンガポール国立大学医学部、千葉大学大学院医学研究院

＜健康長寿を損なうホルモン依存性がんにおける性ホルモンシグナルと治療抵抗性メカニズムの解明＞

【センター内】実験動物施設、呼吸器内科

【センター外】順天堂大学医学部附属順天堂病院、東京大学医学部附属病院、埼玉医科大学、千葉大学大学院医学研究院、虎の門病院、日本大学医学部附属板橋病院、東京大学医学部附属病院、自治医科大学、埼玉医科大学医学部国際医療センター、東北大学大学院、東京大学大学院、独立行政法人国立病院機構四国がんセンター、埼玉医科大学医学部国際医療センター

論文・学会発表（令和5年度）

分子機構

１　論文（誌上発表）：原著

1. Yuriko Tachida, Junko Iijima, Kazuto Takahashi, Hideaki Suzuki, Yasuhiko Kizuka, Yoshiki Yamaguchi, Katsunori Tanaka, Miyako Nakano, Daisuke Takakura, Nana Kawasaki, Yuko Saito, Hiroshi Manya, Tamao Endo, Shinobu Kitazume：O-GalNAc glycosylation determines intracellular trafficking of APP and Aβ production. J. Biol. Chem. 299(7), 104905, 2023（査読有）（IF：5.485, 2022-2023）
2. Katsufumi Dejima, Rieko Imae, Yuji Suehiro, Keita Yoshida, Shohei Mitani：An endomembrane zinc transporter negatively regulates systemic RNAi in Caenorhabditis elegans. iScience 26(6), 106930, 2023（査読有）(IF: 5.8, 2022)
3. ◎Shunsuke Hoshino, ★Hiroshi Manya, Rieko Imae, Kazuhiro Kobayashi, Motoi Kanagawa, Tamao Endo：Endogenous reductase activities for the generation of ribitol-phosphate, a CDP-ribitol precursor, in mammals. J. Biochem. 2023, in press (doi: 10.1093/jb/mvad115)（査読有）（IF：3.241, 2023-2024）

２　論文（誌上発表）：総説

1. ◎Keiko Akasaka-Manya, ★Hiroshi Manya, Tamao Endo：Enzyme assay of protein *O*-mannosyltransferase (POMT1/2). Glycoscience Protocols (GlycoPODv2) NIH Bookshelf (Eds. Shoko Nishihara, Kiyohiko Angata, Kiyoko F. Aoki-Kinoshita, Jun Hirabayashi), Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology, 2022.3.23
2. ◎Keiko Akasaka-Manya, ★Hiroshi Manya, Tamao Endo：Enzyme assay of protein *O*-linked-mannose ・1,2-*N*-acetylglucosaminyltransferase 1 and protein *O*-linked-mannose ・1,4-*N*-acetylglucosaminyltransferase 2 (POMGNT1/2). Glycoscience Protocols (GlycoPODv2) NIH Bookshelf (Eds. Shoko Nishihara, Kiyohiko Angata, Kiyoko F. Aoki-Kinoshita, Jun Hirabayashi), Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology, 2022.3.23
3. ◎★Hiroshi Manya, Tamao Endo：Enzyme assay of protein O-mannose kinase (POMK). Glycoscience Protocols (GlycoPODv2) NIH Bookshelf (Eds. Shoko Nishihara, Kiyohiko Angata, Kiyoko F. Aoki-Kinoshita, Jun Hirabayashi), Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology, 2022.3.23
4. ◎Rieko Imae, ★Hiroshi Manya, Tamao Endo：Enzyme assay of fukutin and fukutin-related protein (ribitol phosphate transferase, FKTN and FKRP). Glycoscience Protocols (GlycoPODv2) NIH Bookshelf (Eds. Shoko Nishihara, Kiyohiko Angata, Kiyoko F. Aoki-Kinoshita, Jun Hirabayashi), Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology, 2022.3.23
5. ◎Shunsuke Hoshino, ★Hiroshi Manya, Tamao Endo：Enzyme assay of ribitol xylosyltransferase 1 (RXYLT1). Glycoscience Protocols (GlycoPODv2) NIH Bookshelf (Eds. Shoko Nishihara, Kiyohiko Angata, Kiyoko F. Aoki-Kinoshita, Jun Hirabayashi), Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology, 2022.3.23
6. 今江理恵子：薬学研究への道「基礎研究の医療への応用を目指して」.薬奨ニュース, 36, 8, 2023.7
7. 赤阪-萬谷啓子、萬谷博：老化にともなうKlothoの減少と糖鎖修飾変化の意義. 腎臓内科, 18(1), 39-46, 2023.7

３　学会発表（国際）

1. Keiko Akasaka-Manya, Hisatoshi Hanamatsu, Nobuaki Miura, Jun-ichi Furukawa, Hiroshi Manya, Tamao Endo：N-glycan expression in multiple organs during aging in mice. IAGG-AOR2023, Yokohama, Kanagawa, 2023.6.12-14
2. Rieko Imae, Hiroshi Manya, Hiroki Tsumoto, Yuri Miura, Tamao Endo：Aging-associated changes in the amount of nucleotide sugars, the donor substrates for glycan biosynthesis, in mouse tissues. IAGG-AOR2023, Yokohama, Kanagawa, 2023.6.12-14
3. Jun-ichi Tamra, Takahiro Tamra, Shunsuke Hoshino, Rieko Imae, Ryuichi Kato, Mizuki Yokono, Mao Nagase, Shiho Ohno, Noriyoshi Manabe, Yoshiki Yamaguchi, Hiroshi Manya, Tamao Endo：Chemical and chemo-enzymatic synthesis of tandem ribitol phosphate scaffolding of matriglycan. Eurocarb 2023, Paris, France, 2023.7.9-13
4. Ikuko Yokota, Takashi Nishikaze, Hisatoshi Hanamatsu, Hiroshi Manya, Keiko Akasaka-Manya, Jun-Ichi Furukawa：Sialic Acid Linkage-Specific Alkylamidation of O-Linked Glycoproteins and β-Elimination in the Presence of Pyrazolone. Glyco26, Taipei, Taiwan, 2023.8.27-9.1

４　学会発表（国内）

1. 赤阪-萬谷啓子、萬谷博、遠藤玉夫：先天性筋ジストロフィー症原因遺伝子産物ISPDの酵素学的解析. 日本薬学会第143年会, 北海道札幌市（北海道大学）, 2023.3.25-28（ハイブリッド開催）
2. 今江理恵子、萬谷博、津元裕樹、三浦ゆり、遠藤玉夫：マウス臓器における糖ヌクレオチド含量の加齢変化. 日本薬学会第143年会, 北海道札幌市（北海道大学）, 2023.3.25-28（ハイブリッド開催）
3. 星野駿介、今江理恵子、萬谷博、遠藤玉夫：哺乳動物細胞におけるリビトールリン酸産生に関わる還元酵素の活性評価, 日本薬学会第143年会, 北海道札幌市（北海道大学）, 2023.3.25-28（ハイブリッド開催）
4. 赤阪啓子：糖鎖修飾によるAPPプロセシングへの影響, 第２回バイオソフトマターメディカル研究会, 東京都八王子市（都立大）, 2023.3.30
5. 赤阪-萬谷啓子、花松久寿、三浦信明、古川潤一、萬谷博、遠藤玉夫：マウス加齢にともなうN型糖鎖変化の解析, 第46回日本基礎老化学会大会, 神奈川県横浜市（パシフィコ横浜ノース）, 2023.6.6-18
6. 丸山詩織、赤阪-萬谷啓子、萬谷博、遠藤玉夫：*O*-Man 糖鎖不全による筋委縮モデルマウスの筋病理解析, 第46回日本基礎老化学会大会, 神奈川県横浜市（パシフィコ横浜ノース）, 2023.6.6-18
7. 今江理恵子、萬谷博、津元裕樹、三浦ゆり、遠藤玉夫：糖鎖合成基質である糖ヌクレオチドの加齢マウス臓器における変化, 第46回日本基礎老化学会大会, 神奈川県横浜市（パシフィコ横浜ノース）, 2023.6.6-18
8. 赤阪-萬谷啓子、萬谷博、遠藤玉夫：糖鎖修飾によるAPPプロセシングの制御. TOBIRA 第11回研究交流フォーラム, 東京都千代田区（ソラシティ　カンファレンスセンター）, 2023.7.28
9. 星野駿介、今江理恵子、水野真盛、蜷川暁、萬谷博、遠藤玉夫：*O*-Man β1-4GlcNAc転移酵素POMGNT2の基質特異性の解析, 第42回日本糖質学会年会, 鳥取県鳥取市（とりぎん文化会館）, 2023.9.7-9
10. 今江理恵子：「ラミニン結合性*O*-マンノース型糖鎖の生合成制御機構の解析」（奨励賞受賞講演）,第42回日本糖質学

会年会，鳥取県鳥取市（とりぎん文化会館），2023.9.7-9
11. 萬谷博 ： 老化モデルマウスを用いた包括的組織グライコーム解析（シンポジウム 老化研究の多様性と予防医学による健康寿命延長の可能性を探る），第67回日本薬学会関東支部大会，東京都清瀬市（明治薬科大学），2023.9.16
12. 竹岩俊彦、今江理恵子、萬谷博、池田和博、堀江公仁子、井上聡 ： 高異型度漿液性卵巣がんにおける糖転移酵素POMGnT1の腫瘍促進因子としての役割，第82回日本癌学会学術総会，神奈川県横浜市(パシフィコ横浜)，2023.9.21-23
13. 萬谷博 ： マンノース型糖鎖の生合成と糖アルコールリン酸による制御（シンポジウム グライココードの解明に向けて-変わった糖鎖構造に真剣に思いを巡らす），第96回日本生化学会大会，福岡県福岡市（福岡国際会議場），2023.10.31-11.2
14. 赤阪-萬谷啓子、花松久寿、三浦信明、古川潤一、萬谷博、遠藤玉夫 ： マウスN型糖鎖の加齢にともなう発現変化，第96回日本生化学会大会，福岡県福岡市（福岡国際会議場），2023.10.31-11.2
15. 今江理恵子、萬谷博、濱弘太郎、横山和明、石渡俊行、遠藤玉夫 ：膵癌由来MIA PaCa-2細胞におけるα-ジストログリカン糖鎖伸長阻害因子CDP-グリセロールの機能解析，第96回日本生化学会大会，福岡県福岡市(福岡国際会議場)，2023.10.31-11.2
16. 萬谷啓子 ： *O*型糖鎖修飾によるAPPプロセシングの制御，第42回日本認知症学会学術集会，奈良県奈良市（奈良県コンベンションセンター），2023.11.24-26
17. 星野駿介、今江理恵子、萬谷博、遠藤玉夫 ： Endogenous reductase activities for the generation of ribitol-phosphate, a CDP-ribitol precursor, in mammals, GlycoTOKYO 2023シンポジウム,神奈川県川崎市（慶應大学），2023.12.9
18. 金川基、萬谷博 ： 糖鎖異常型筋ジストロフィーモデルマウスを用いた分子病態機構の解明と治療法開発～CDP-リビトール生合成経路の解明. 精神神経疾患研究開発費「疾患モデルを駆使した筋ジストロフィーの治療法開発」2023年度研究班会議，東京都小平市（国立精神・神経医療研究センター），2023.12.19-20

５　受賞

1. 今江理恵子: 第26回日本糖質学会奨励賞，ラミニン結合性*O*-マンノース型糖鎖の生合成制御機構の解明

６　その他

連携大学院等

1. 東京農工大学大学院連合農学研究科　健康長寿科学（学部生1名、大学院生2名）
2. 明治薬科大学　健康薬学コース（薬学科5年生2名）

プロテオーム

１　論文（誌上発表）：原著

1. Kato, Y., Byeon, J., Noto, A. Kashiwaya, S., Aoki, Y., Watanabe, N., Tsumoto, H., Miura, Y., Fukui, K.: Tocotrienols prevent the decline of learning ability in high-fat high-sucrose diet-fed C57BL/6 mice, Int. J. Mol. Sci., 25(6), 3561 (2024)
2. Ogawa, Y., Miura, Y., Ikemoto, M., Ohnishi, A., Goto, Y., Aoki, K., Motokurumada, Y., Akimoto, Y., Endo, T., Tsujimoto, M., Yanoshita, R.: Distinguishing two distinct types of salivary extracellular vesicles: A potential tool for 5 understanding their pathophysiological roles, Front. Mol. Biosci. 11: 1278955 (2024)
3. Shinno, K., Miura, Y., Iijima, K.M., Suzuki, E., Ando, K.: Axonal distribution of mitochondria maintains neuronal autophagy during aging via eIF2β, eLife, *in press* (査読あり, IF2022: 8.713)
4. Fujita, Y., Shinkai, S., Taniguchi. Y., Miura, Y., Tanaka, M., Ohsawa, I., Kitamura, A., Ito, M.: Association between serum GDF15 concentration and total mortality in community-dwelling Japanese older populations: The involvement of renal dysfunction, J. Gerontol. A Biol. Sci. Med. Sci. 78(9) 1701-1707, (2023) （査読あり, IF2022: 6.591)
5. Yachida, N., Hoshino, F.,Murakami, C., Ebina, M., Miura, Y., Sakane, F.: Saturated fatty acid- and/or monounsaturated fatty acid-containing phosphatidic acids selectively interact with heat shock protein 27, J. Biol. Chem. 299, 103019, (2023) （査読あり, IF2022: 5.485)
6. Miura, Y., Tsumoto, H., Masui, Y., Inagaki, H., Ogawa, M., Ideno, Y., Kawakami, K., Umezawa, K., Kabayama, M., Akagi, Y., Akasaka, H., Yamamoto, K., Rakugi, H., Ishizaki, T., Arai, Y., Ikebe, K., Kamide, K., Gondo, Y., Endo, T.: A characteristic *N*-glycopeptide signature associated with diabetic cognitive impairment identified in a longitudinal cohort study, Biochim. Biophys. Acta, -General Subjects, 1867, 130318, (2023) （査読あり, IF2022: 4.117)
7. Kato, T., Kawakami, K., Mizutani, K., Ando, T., Sakai, Y., Sakurai, K., Toyota, S., Ehara, H., Ito, H., Ito, M.: H19 in Serum Extracellular Vesicles Reflects Resistance to AR Axis-targeted Therapy Among CRPC Patients., Cancer Genomics & Proteomics., 20, 456-468, (2023). （査読あり, IF2022: 3.395)

２　論文（誌上発表）：総説

なし

３　学会発表（国際）

1. Shinno, K., Miura,Y., Suzuki,E., Ando, K.: The depletion of axonal mitochondria impairs autophagy via eIF2 signaling, Society for Neuroscience (SFN) Annual Meeting 2023, Washington, USA, 2023.11.11-15
2. Miura, Y.: Glycomics and glycoproteomics focused on aging, 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium, 2023 IAGG-AOR Satellite, TMIG (Tokyo), 2023.10.16-18

3. Akimoto, Y., Miura, Y., Kudo, A., Hart, G.W., Endo, T.: The localization of *O*-GlcNAcylated β-actin in the nucleus, the 26th International Glycoconjugate Symposium (Glyco26), Taipei, Taiwan, 2023.8.27-9.1
4. Miura, Y., Tsumoto, H., Masui, Y., Inagaki, H., Kawakami, K., Umezawa, K., Ishizaki, T., Kamide, K., Gondo, Y., Endo, T.: A characteristic *N*-glycopeptides associated with diabetic cognitive impairment on the basis of a longitudinal cohort study, IAGG/ Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-15
5. Kawakami, K., Fujita, Y., Kato, T., Umezawa, K., Tsumoto, H., Miura,Y., Katagiri, Y., Miyazaki, T., Mizutani, K., Ito, M.: Development of a detection system for prostate-specific membrane antigen-expressing extracellular vesicles and its potential for the diagnosis of prostate cancer and renal cell carcinoma. IAGG/ Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-15
6. Imae, R., Manya, H., Tsumoto, H., Miura, Y., Endo, T.: Aging-associated changes in the amount of nucleotide sugars, the donor substrates for glycan biosynthesis, in mouse tissues, IAGG/ Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-15
7. Akimoto, Y., Miura, Y., Endo, T., Hart, G.W.: *O*-GlcNAcylation and Diabetes, Global summit on Endocrinology, Madrid, Spain, 2023.4.18-19

４　学会発表（国内）

1. 志智優樹、津元裕樹、五味不二也、野中敬介、長谷川康子、藤原正和、進士誠一、高橋公正、三浦ゆり、石渡俊行：3次元培養下における膵臓がん培養細胞株のムチン産生能：プロテオーム解析と免疫細胞化学染色による検討、第113回日本病理学会総会、名古屋国際会議場（名古屋市）、2024.3.28-30
2. 秋元義弘、三浦ゆり、宮東昭彦、Gerald W. Hart 、遠藤玉夫：リン酸化、糖修飾 S199β-アクチンの核内における局在、第129回日本解剖学会総会・全国学術集会、那覇文化芸術劇場なはーと（那覇市）、2024.3.21-23
3. 秋元義弘，三浦ゆり，宮東昭彦，Gerald W. Hart，遠藤玉夫：糖修飾 S199 β-アクチンの核内における局在、日本顕微鏡学会第66回シンポジウム、Gメッセ群馬（群馬県高崎市）、2023.11.11-12
4. 杉山 誉人、佐々木 克仁、信田 理沙、梅澤 啓太郎、三浦 ゆり、潮田 亮、乃村 俊史：病原性変異型 SERPINB7 の細胞外分泌不全が長島型掌蹠角化症を引き起こす、第96回日本生化学会大会、福岡国際会議場・マリンメッセ福岡（福岡市）、2023.10.31-11.2
5. 川上恭司郎、江戸直樹、盛田幸司、石川敏夫、小野瀬裕之、福森龍也、津元裕樹、梅澤啓太郎、伊藤雅史、三浦ゆり：血清中細胞外小胞のプロテオーム解析による甲状腺濾胞癌のバイオマーカー探索、第10回 日本細胞外小胞学会学術集会、北海道大学 学術交流会館（札幌市）、2023.10.23-24.
6. 橋本穂乃香，宮良政嗣，桑原由佳，津元裕樹，三浦ゆり，古武 弥一郎：パーキンソン病関連神経毒による p62 核蓄積と p62 核内機能の検討、フォーラム 2023：衛生薬学･環境トキシコロジー、広島大学霞キャンパス（広島市）、2023.9.12-13
7. 伊藤幸裕、飯田也、高橋ゆかり、津元裕樹、高田悠里、山下泰信、三浦ゆり、大庭誠、鈴木孝禎：共有結合型疎水性タグによる標的タンパク質分解、第17回バイオ関連化学シンポジウム、東京理科大学野田キャンパス（千葉県野田市）、2023.9.8-10
8. 津元裕樹、西風隆司、梅澤啓太郎、川上恭司郎、早川禎宏、遠藤玉夫、三浦ゆり：高分解能質量分析による血漿中遊離糖鎖の構造解析、第42回日本糖質学会年会、とりぎん文化会館（鳥取市）、2023.9.7-9
9. 梅澤啓太郎、津元裕樹、川上恭司郎、三浦ゆり：スクシニル化タンパク質の網羅的解析を可能とする新規タグ分子の開発、日本プロテオーム学会 2023 年大会、朱鷺メッセ（新潟市）、2023.7.24-26
10. 川上恭司郎、藤田泰典、加藤卓、梅澤啓太郎、津元裕樹、三浦ゆり、片桐恭雄、宮崎龍彦、水谷晃輔、伊藤雅史：細胞外小胞上の前立腺特異的膜抗原（PSMA）測定系の構築と前立腺がんおよび腎がんにおける有用性の検討、第46回日本基礎老化学会大会、パシフィコ横浜ノース（横浜市）2023.6.16-18
11. 重本和宏、森秀一、周赫英、大村卓也、津元裕樹、三浦ゆり：神経筋シナプスの機能不全を診断する新しいバイオマーカーの開発、第46回日本基礎老化学会大会、パシフィコ横浜ノース（横浜市）2023.6.16-18
12. 今江理恵子、萬谷博、津元裕樹、三浦ゆり、遠藤玉夫：糖鎖合成基質である糖ヌクレオチドの加齢マウス臓器における変化、第46回日本基礎老化学会大会、パシフィコ横浜ノース（横浜市）2023.6.16-18
13. 川上恭司郎：血管内皮細胞由来エクソソームの単離方法の確立と内皮細胞内ストレスマーカーの探索、2022年度理事長研究奨励費研究成果発表、2023.6.2

５　著書等

1. 梅澤啓太郎 2022年度小柳財団研究成果報告書「生活習慣病の機序解明に資するアシル化タンパク質の複合的解析法の確立」（代表：梅澤啓太郎）
2. 梅澤啓太郎 2022年度精密測定技術振興財団助成事業成果報告書「タンパク質の新しいレドックス制御現象を解析可能な精密計測技術の確立」（代表：梅澤啓太郎）
3. 川上恭司郎 2022年度科学研究費成果報告書
基盤研究C「認知機能低下の早期バイオマーカー探索：長期縦断研究の検体を用いた細胞外小胞の解析」（代表：川上恭司郎）
4. 川上恭司郎 2022年度理事長研究奨励費報告書「血管内皮細胞由来エクソソームの単離方法の確立と内皮細胞内ストレスマーカーの探索」（代表：川上恭司郎）

６　特許

1. 管理番号TMG-061PCJP、出願番号2021-533919、津元裕樹、西風隆司、質量分析方法、質量分析装置およびプログラム、出願日2020.7.6、登録日2023.7.7
2. 管理番号TMG-122JP、出願番号2023-127438、津元裕樹、西風隆司、血液試料中の遊離糖鎖の分析方法、出願日2023.8.4
3. 管理番号TMG-115JP、出願番号2023-141250、瀧川健司、西宗裕史、梅澤啓太郎、GABA検出用蛍光プローブ及びその製造方法、出願日2023.8.31

７　その他

受賞

1. 津元裕樹、石渡俊行：理事長奨励賞（タンパク質の糖鎖修飾に着目した膵がん多様性の解明）

招待講演
1. 三浦ゆり：老化関連疾患に関わるタンパク質翻訳後修飾のプロテオミクス、第96回日本生化学会大会・シンポジウム、福岡国際会議場・マリンメッセ福岡（福岡市）、2023.10.31-11.2
2. 三浦ゆり：プロテオームからみた老化研究、第46回日本基礎老化学会大会・組織培養学会合同シンポジウム、パシフィコ横浜ノース（横浜市）2023.6.16-18
3. 三浦ゆり：電気泳動の老化研究への応用、第74回日本電気泳動学会学術大会、石垣市民会館（石垣市）、2023.5.18-20

市民向け講演会
1. 川上恭司郎：エクソソーム：大きな可能性を秘めた小さなメッセンジャー、第166回老年学・老年医学公開講座、オンライン開催（YouTube 2023.9.22より公開）
2. 梅澤啓太郎、津元裕樹、川上恭司郎、三浦ゆり：タンパク質の超硫黄修飾現象に着目した新しいプロテオーム研究、TOBIRA第11回研究交流フォーラム、ソラシティカンファレンスセンターホール（千代田区）、2023.7.28
3. 藤田泰典、新開省二、谷口優、三浦ゆり、田中雅嗣、大澤郁朗、北村明彦、伊藤雅史：地域在住高齢者の血中GDF15濃度と総死亡リスクの関連性、TOBIRA第11回研究交流フォーラム、ソラシティカンファレンスセンターホール（千代田区）、2023.7.28
4. 重本和宏、森秀一、周赫英、大村卓也、津元裕樹、三浦ゆり：神経筋シナプスの機能不全を診断する新しいバイオマーカーの開発、TOBIRA第11回研究交流フォーラム、ソラシティカンファレンスセンターホール（千代田区）、2023.7.28

プレス発表
1. 藤田泰典、新開省二、谷口優、三浦ゆり、田中雅嗣、大澤郁朗、北村明彦、伊藤雅史：地域在住日本人高齢者の血液中GDF15濃度と総死亡リスクの関連を解明、2023.5.16
2. 三浦ゆり、増井幸恵、稲垣宏樹、石﨑達郎、遠藤玉夫：糖尿病性認知症に特徴的な血中タンパク質糖鎖を発見、2023.2.13

システム加齢医学

１　論文（誌上発表）：原著

1. Kobayashi A, Azuma K, Takeiwa T, Kitami T, Horie K, Ikeda K, Inoue S: A FRET-based respirasome assembly screen identifies spleen tyrosine kinase as a target to improve muscle mitochondrial respiration and exercise performance in mice. ***Nat Commun*** 14(1):312, 2023. (査読あり)　　(IF: 17.694、2022-2023)
2. Sato K, Takayama K, Inoue S: Stress granules sequester Alzheimer's disease-associated gene transcripts and regulate disease-related neuronal proteostasis. ***Aging (Albany)*** 15(10):3984-4011, 2023, and ***Cove***r. (査読あり) (IF: 5.955、2022-2023)
3. Takayama K, Matsuoka S, Adachi S, Honma T, Yoshida M, Doi T, Shin-ya K, Yoshida M, Osada H, Inoue S: Identification of small-molecule inhibitors against the interaction of RNA-binding protein PSF and its target RNA for cancer treatment. ***PNAS nexus*** 2(6): pgad203, 2023. (査読あり) (IF: 新規創刊のためIFなし)
4. Horie K, Takagi Kiyoshi, Takeiwa T, Mitobe Y, Kawabata H, Suzuki T, Ikeda K, Inoue S: Estrogen-Inducible LncRNA BNAT1 functions as a modulator for estrogen receptor signaling in endocrine-resistant breast cancer cells. ***Cells*** 11:3610, 2022. (査読あり) (IF: 7.666、2022-2023)
5. Oshima M, Takayama K, Yamada Y, Kimura N, Kume H, Fujimura T, Inoue S: Identification of DNA damage response-related genes as biomarkers for castration-resistant prostate cancer. ***Sci Rep*** 13(1):19602, 2023. (査読あり)(IF: 4.997、2022-2023)
6. Yamamoto S, Obinata D, Takayama K, Funakoshi D, Fujiwara K, Hara M, Takahashi S, Inoue S: Anillin actin-binding protein expression correlates with poor prognosis for prostate cancer patients. ***Asian J Urol*** (in press)(査読あり)(IF: 2.6、2022-2023)
7. Azuma K, Osuka Y, Kojima N, Sasai H, Inoue S: Vitamin K insufficiency predicts incidence of frailty in community-dwelling older adults: The Otassha Study. ***J Bone Mineral Metab*** (in press) (査読あり) (IF: 2.976、2022-2023)
8. Azuma K, Ikeda K, Shiba S, Sato W, Horie K, Hasegawa T, Amizuka N, Tanaka S, Inoue S: EBAG9-deficient mice display decreased bone mineral density with suppressed autophagy. ***iScience*** 27(2):108871,2024. (査読あり) (IF: 5.8、2022-2023)
9. Hongo H, Kosaka T, Takayama K, Baba Y, Yasumizu Y, Ueda K, Suzuki Y, Inoue S, Beltran H, Oya M: G protein signaling of oxytocin receptor as a potential target for cabazitaxel-resistant prostate cancer. ***PNAS Nexus*** 3(1):pgae002, 2024 (査読あり) (新規創刊のためIFなし)

２　論文（誌上発表）：総説

1. Yoh H, Ikeda K, Horie-Inoue K, Inoue S: Roles of estrogen, estrogen receptors, and estrogen-related receptors in skeletal muscle: regulation of mitochondrial function. ***Int J Mol Sci*** 24 1853, 2023, selected as ***Latest Review Award***. (査読あり) (IF: 6.208、2022-2023)
2. Sato K, Takayama K, Inoue S: Role of piRNA biogenesis and its neuronal function in the development of neurodegenerative diseases. ***Front Aging Neurosci*** 15:1157818, 2023. (査読あり) (IF: 5.702、2022-2023)
3. Kobayashi A, Takeiwa T, Ikeda K, Inoue S: Roles of Noncoding RNAs in Regulation of Mitochondrial Electron Transport Chain and Oxidative Phosphorylation. ***Int J Mol Sci*** 24 9414, 2023. (査読あり) (IF: 6.208、2022-2023)
4. Yang Y, Ruscio A, Inoue S, Wang G, Gao S: Editorial: Interplay Between Epigenetic Modifiers and Transcription Factors in Driving Cancer Progression. ***Front Oncol*** 13:1211537, 2023. (査読あり) (IF: 5.738、2022-2023)
5. Sato K, Takayama K, Inoue S: Expression and function of estrogen receptors and estrogen-related receptors in the brain and their association with Alzheimer's disease. ***Front Endocrinol*** 14:1220150 , 2023. (査読あり) (IF: 3.9、2022)

6. Horie K, Inoue S: Editorial: Potential repurposing of DPP4 inhibitors for target therapy resistance in renal cell carcinoma. ***Oncotarget*** 14:807-808, 2023. (査読あり) (IF: 0.966、2022-2023)
7. Sato K, Takayama K, Inoue S: Stress granule-mediated RNA regulatory mechanism in Alzheimer's disease. ***Geriatric Gerontol Int*** (in press) 2023. (査読あり) (IF: 3.387、2022-2023)
8. Obinata D, Takayama K, Inoue S, Takahashi S: Exploring Androgen Receptor Signaling Pathway in Prostate Cancer: A Path to New Discoveries. ***Int J Urology*** 31: 590-597, 2024. (査読あり) (IF: 2.6、2022-2033)

3 学会発表（国際）

1. Takeiwa T, Azuma K, Ikeda K, Horie-Inoue K, Inoue S: Development of a FRET-based evaluation system of mitochondrial respiratory supercomplex formation in live cells and its potential clinical application to muscle disorders. Keystone Symposia, Mitochondrial Dysfunction: From Ultra-Rare Diseases to Aging, BeaverRunResort, Colorado, United States. (2023.3.26-29)
2. Sato K, Takayama K, Inoue S: Stress granules sequester Alzheimer's disease-associated gene transcripts in human neuronal cells. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan. (2023.6.12-15)
3. Azuma K, Ikeda K, Shiba S, Sato W, Horie K, Hasagawa T, Amizuka N, Tanaka S, Inoue S: Effect on autophagy and bone metabolism of estrogen receptor-associated gene 9 (Ebag9), IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan. (2023.6.12-15)
4. Horie K, Kitayama S, Ikeda K, Suzuki T, Kawakami S, Inoue S: [Late breaking oral session] Identification and Functional Analyses of Therapeutic Targets for Testicular Germ Cell Tumors. ENDO2023, McCormick Place, Chicago, USA. (2023.6.17)
5. Ikeda K, Horie K, Inoue S: Mitochondrial respiratory chain supercomplex assembly factor COX7RP is transcriptionally regulated by ERα and ERRα and associated with tumor progression in hormone-dependent cancers. Mechanisms and Models of Cancer Meeting, Salk Institute, La Jolla, CA, USA. (2023.6.23)
6. Ikeda K, Horie K, Inoue S: Mitochondrial respiratory chain supercomplex assembly factor COX7RP is transcriptionally regulated by ERα and ERRα and associated with tumor progression in hormone-dependent cancers. 16th Annual Symposium: Salk Institute for Biological Studies, California, USA. (2023.8.1-4)
7. Inoue S: Mitochondrial Respiratory Supercomplex and Aging. 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium 2023 IAGG-AOR Satellite, Tokyo, Japan. (2023.10.16-18)
8. Inoue S, Ikeda K, Horie K: Targeting disease-specific long noncoding RNA *OIN1* in a patient-derived ovarian cancer model. FRONTIERS IN CANCER SCIENCE 2023, National University of Singapore University Cultural Centre (UCC), Singapore. (2023.11.6-8)
9. Yamazaki M, Li M, Nishimura T, Hongu T, Takamatsu S, Gabata T, Ueno M, Hirao A, Kohno S, Takahashi C, Horie K, Ikeda K, Inoue S, Gotoh N. (2024.2.10-14) The Biophysical Society Annual Meeting 2024, Pennsylvania Convention Center, USA.

4 学会発表（国内）

1. 大日方大亮、高山賢一、Lawrence Mitchell、Taylor Renea、Sandhu Shahneen、船越大吾、Risbridger Gail、高橋悟、井上聡：難治性前立腺癌における新規アンドロゲン受容体/OCT1 標的遺伝子の同定　第 32 回泌尿器科分子・細胞研究会　秋田市にぎわい交流館 AU（秋田県秋田市）(2023.2.24)
2. 高山賢一、鈴木穣、井上聡：骨芽細胞由来細胞における細胞特異的アンドロゲン受容体シグナルの探索　第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会　久留米大学筑水会館（福岡県久留米市）(2023.2.25)
3. 竹岩俊彦、池田和博、鈴木貴、佐藤航、川端英孝、堀江公仁子、井上聡：[優秀演題賞受賞] エストロゲン受容体陽性乳がんにおける RNA 結合蛋白質 PSPC1 の臨床的意義と作用メカニズムの解明　第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会（福岡県久留米市）(2023.2.25)
4. 池田和博、堀江公仁子、井上聡：ホルモン感受性患者由来子宮内膜がん細胞におけるエストロゲン応答遺伝子 Efp と COX7RP の機能解析　第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会　久留米大学筑水会館（福岡県久留米市）(2023.2.25)
5. 堀江公仁子、池田和博、井上聡：エストロゲン受容体の新しいエピゲノム制御メカニズム　第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会　久留米大学筑水会館（福岡県久留米市）(2023.2.25)
6. 竹岩俊彦、東浩太郎、北見俊守、堀江公仁子、池田和博、井上聡：ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞 FRET イメージングによる定量法の開発と筋疾患治療・予防法への応用　第 21 回日本ミトコンドリア学会年会　帝京大学板橋キャンパス（東京都板橋区）(2023.3.16-18)
7. 東浩太郎、井上聡：高齢者におけるビタミン K 不足は身体的、精神的・心理的フレイルと関連する　第 8 回ビタミン K 研究コンソーシアム会議　芝浦工大豊洲キャンパス（東京都豊島区）(2023.4.26)
8. 池田和博，鈴木貴，堀江公仁子，井上聡：がん代謝を調節するミトコンドリア呼吸鎖超複合体形成因子 COX7RP の前立腺がんにおける役割とその核内受容体 ERRα と転写共役因子 PGC-1α による発現制御機構　第 9 回 がんと代謝研究会 in 松山　愛媛県県民文化会館（愛媛県松山市）(2023.5.31-6.1)
9. 井上聡：[シンポジウム]ミトコンドリア呼吸鎖超複合体のエストロゲン受容体・関連受容体による制御とホルモン依存性がん　第 96 回日本内分泌学会学術総会　名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）(2023.6.1-3)
10. 高山賢一、井上聡：[シンポジウム] アンドロゲン受容体の転写因子複合体とスーパーエンハンサー解析第 96 回日本内分泌学会学術総会　名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）(2023.6.1-3)
11. 大日方大亮、高橋悟、井上聡：[シンポジウム]去勢抵抗性前立腺癌の基礎と臨床　第 96 回日本内分泌学会学術総会　名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）(2023.6.1-3)
12. 高山賢一：[YEC セミナー] 相分離機構の観点からみた性ホルモン受容体転写制御機構　第 96 回日本内分泌学会学術総会　名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）(2023.6.1-3)
13. 井上聡：[シンポジウム：感染と免疫とアンチエイジングのポプリ] 免疫と骨免疫に関わる新しい因子 EBAG9　第 23 回日本抗加齢医学会総会　東京国際フォーラム（東京都千代田区）(2023.6.9-11)
14. 東浩太郎、大須賀洋祐、小島成実、笹井浩行、井上聡：都市部在住高齢者におけるビタミンK充足度と認知機能低下の新規発生の関連：お達者研究　第 23 回日本抗加齢医学会総会　東京国際フォーラム（東京都千代田区）(2023.6.9-11)

15. 竹岩俊彦、東浩太郎、池田和博、堀江公仁子、井上聡：[合同ポスター]ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞FRETイメージング法開発とサルコペニア治療・筋肉抗老化への応用　第33回日本老年学会総会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.6.16）
16. 東浩太郎、井上聡：都市部在住高齢者におけるビタミンK充足度と精神的フレイルの関連　第65回日本老年医学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.6.16-18）
17. 竹岩俊彦、東浩太郎、池田和博、堀江公仁子、井上聡：［奨励賞受賞］ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞FRETイメージング法開発とサルコペニア治療・筋肉抗老化への応用　第46回日本基礎老化学会大会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.6.17-18）
18. 藤本章博、池田和博、竹岩俊彦、木脇圭一、川端英孝、大崎昭彦、堀江公仁子、井上聡：[ワークショップ]自然免疫制御に関わる ZCCHC3 と Efp/TRIM25 はトリプルネガティブ乳がんの新規診断・治療標的となる　第24回ホルモンと癌研究会　順天堂大学　本郷・お茶の水キャンパス　有山登メモリアルホール（東京都文京区）（2023.6.16-17）
19. 池田和博、鈴木貴、堀江公仁子、井上聡：難治性前立腺がんにおけるミトコンドリア呼吸鎖超複合体形成因子COX7RPの役割とその上流転写因子のエストロゲン関連受容体ERRαによる発現制御機構　日本アンドロロジー学会第42回学術大会　ウィンクあいち（愛知県名古屋市）（2023.6.23-24）
20. 大島将、高山賢一、木村直樹、山田雄太、久米春喜、藤村哲也、井上聡：[学会賞受賞講演：臨床部門]前立腺癌の悪性化ならびに去勢抵抗性前立腺癌への進展に関わるバイオマーカーとなるDNA損傷応答関連遺伝子の同定　日本アンドロロジー学会第42回学術大会　ウィンクあいち（愛知県名古屋市）（2023.6.23-24）
21. 堀江公仁子、岩渕英里奈、池田和博、渋谷祐介、徳永英樹、島田宗昭、新谷大輔、長谷川幸清、鈴木貴 、井上聡：患者由来子宮体がん細胞のスーパーエンハンサー解析から抽出したcordon-bleu WH2 repeat protein-like 1のがん診断・治療における意義　第41回日本内分泌学会内分泌代謝学サマーセミナー　ホテル松島大観荘（宮城県宮城郡松島町）（2023.7.6-7）
22. 高山賢一：RNA 結合タンパク質の機能阻害によるホルモン療法抵抗性がんへの新規治療法の開発、第４回 SGH がん研究者ワークショップ レイク佐川（滋賀県守山市）（2023.7.8-9）
23. 東浩太郎、井上聡：演題名：都市部在住高齢者におけるビタミンK不足と新規フレイル該当の関連　東京骨関節フォーラム2023　御茶ノ水ソラシティカンファレンス（東京都千代田区）（2023.7.15）
24. 井上聡：[シンポジウム：筋腱靭帯：骨を彩る筋・腱・靱帯シンポジウム］ミトコンドリア呼吸鎖超複合体と筋機能　第41回日本骨代謝学会学術集会　都市センターホテル（東京都千代田区）（2023.7.27-29）
25. 竹岩俊彦、東浩太郎、池田和博、堀江公仁子、井上聡：呼吸鎖超複合体のライブイメージング法開発と筋肉機能向上・サルコペニア治療への応用　第9回日本筋学会学術集会　千里ライフサイエンスセンター（大阪府豊中市）（2023.8.18-19）
26. 池田和博、佐藤航、楊絢太、堀江公仁子、竹岩俊彦、新谷大輔、黒崎友亮、兒玉幸修、佐々木均、長谷川幸清、井上聡：卵巣がん幹細胞性に対する疾患特異的非コードRNA OIN1を標的とするRNA干渉ナノ療法の開発　第82回日本癌学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.9.21-23）
27. 竹岩俊彦、今江理恵子、萬谷博、池田和博、堀江公仁子、井上聡：高異型度漿液性卵巣がんにおける糖転移酵素POMGnT1の腫瘍促進因子としての役割　第82回日本癌学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.9.21-23）
28. 藤原恭子、関本和祥、廣田大樹、神戸洸哉、金城はなか、小林佑朔、松田大聖、村上瑞希、坂口陸、佐藤睦、長崎瑛里、池田和博、高山賢一、井上聡、大月穣：分子内のエチレングリコールの数が新規呼吸鎖複合体Ⅰ阻害剤9bwの機能に与える影響　第82回日本癌学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.9.21-23）
29. 山崎雅弘、李梦嬌、西村建徳、高松繁行、蒲田敏文、上野将也、平尾敦、河野晋、高橋智聡、堀江公仁子、池田和博、井上聡、後藤典子：Targeting FXYD3 positive cancer stem cells in radio-resistance.　第82回日本癌学会学術総会　横浜市・パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）　（2023.9.21-23）
30. 井上聡：[シンポジウム：領域横断ワークショップ ： 治療誘導型神経内分泌癌の診断と治療］神経内分泌癌の悪性化メカニズムと相分離創薬　第61回日本癌治療学会学術集会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）（2023.10.19-21）
31. 井上聡：[シンポジウム：がん三次元培養研究の新展開]女性がんの患者由来スフェロイド培養モデルの確立とその応用　日本患者由来がんモデル学会学術集会 2023　国立がん研究センター　（東京都中央区）（2023.10.24-26）
32. 井上聡：[シンポジウム］ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の健康長寿における役割とそのライブセルイメージング法の開発　第96回日本生化学会大会　福岡国際会議場・マリンメッセ福岡B館（福岡県福岡市）（2023.10.31-11.2）
33. 東浩太郎、竹岩俊彦、池田和博、井上聡：[シンポジウム]フレイル・サルコペニアの最先端基礎研究：ミトコンドリア超複合体と筋機能　第10回日本サルコペニア・フレイル学会　御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター（東京都千代田区）（2023.11.3-4）
34. 藤本章博、池田和博、大崎昭彦、堀江公仁子、井上聡：自然免疫関連因子 ZCCHC3 と Efp の免疫染色性はトリプルネガティブ乳がんの予後予測因子となりがん悪性化に関わる　第４回オール埼玉医大研究の日　埼玉医科大学（埼玉県日高市）（2023.11.11）
35. 佐藤航、池田和博、堀江公仁子、井上聡：卵巣がん患者由来培養・転移マウスモデルの確立とがん特異的非コードRNA OIN1を標的とするナノ技術核酸創薬の開発　第４回オール埼玉医大研究の日　埼玉医科大学（埼玉県日高市）（2023.11.11）
36. 池田和博、堀江公仁子、井上聡：前立腺がんにおけるミトコンドリア呼吸鎖超複合体形成促進因子 COX7RP を介するエネルギー代謝制御と患者予後における役割　第４回オール埼玉医大研究の日　埼玉医科大学（埼玉県日高市）（2023.11.11）
37. 井上聡：[シンポジウム：最先端テクノロジーを駆使した治療抵抗性がん微小環境の解明］EBAG9はエクソソームを介する伝達によりがん免疫エスケープと上皮間葉移行を引き起こす　第46回日本分子生物学会年会　神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル（兵庫県神戸市）（2023.12.6-8）
38. 堀江公仁子、池田和博、井上聡：[シンポジウム]核内受容体に制御されるミトコンドリア遺伝子 COX7RP は酸素呼吸を促進してホルモン依存性がんの病態進行に関わる　第46回日本分子生物学会年会　神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル（兵庫県神戸市）（2023.12.6-8）
39. 東浩太郎、井上聡：[シンポジウム：生老病死の疾患分子病態学の新展開］EBAG9による骨代謝およびオートファ

ジー制御　第46回日本分子生物学会年会　神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル（兵庫県神戸市）(2023.12.6-8)
40. 佐藤航、池田和博、堀江公仁子、井上聡：卵巣がん特異的非コードRNA OIN1の患者由来培養・転移マウスモデルを用いた機能とシグナル経路の解析　第24回関東ホルモンと癌研究会　がん研究会有明病院（東京都江東区）(2024.1.20)
41. 池田和博、堀江公仁子、井上聡：[シンポジウム] 女性がん三次元培養系による新規治療標的と転移治療モデルの開発　第5回がん三次元培養研究会　(2024.2.28)　東京都・国立がん研究センター
42. 竹内康人、村山貴彦、柏村里沙、矢野正雄、笹原麻子、田辺真彦、石川聡子、太田哲生、多田敬一郎、洲崎悦生、平田英周、池田和博、堀江公仁子、井上聡、岡本康司、東條有伸、後藤典子：[シンポジウム] GCSF を介した乳がん幹細胞とがん関連線維芽細胞(CAF)との相互作用は、乳がんの骨転移に関与する　第5回がん三次元培養研究会(2024.2.28)　国立がん研究センター（東京都中央区）
43. 大日方大亮、高山賢一、Mitchell Lawrence、船越大吾、原誠、Gail Risbridger、高橋悟、井上聡：[シンポジウム] 去勢抵抗性前立腺がん患者由来モデルの確立とその応用　第5回がん三次元培養研究会　(2024.2.28)　国立がん研究センター（東京都中央区）
44. 佐藤航、池田和博、堀江公仁子、竹岩俊彦、井上聡：三次元スフェロイド培養系とその腹水形成モデルに基づく卵巣がん高発現長鎖非コードRNAを標的とした核酸治療法の開発　第5回がん三次元培養研究会（2024.2.28）　国立がん研究センター（東京都中央区）
45. 藤本章博、池田和博、竹岩俊彦、木脇圭一、小倉拓也、川端英孝、大崎昭彦、井上聡、堀江公仁子：三次元培養系を活かした自然免制御連因子 ZCCHC3 と Efp のトリプルネガティブ乳癌における役割の解析　第５回がん三次元培養研究会　(2024.2.28)　国立がん研究センター（東京都中央区）
46. 井上聡：[教育講演：臨床医が知るべき基礎知識] 核内受容体と転写因子（2024.3.9）第31日本ステロイドホルモン学会学術集会　品川シーズンテラスカンファレンス（東京都港区）
47. 池田和博、鈴木貴、堀江公仁子、井上聡：エストロゲン関連受容体とミトコンドリア呼吸鎖超複合体形成因子COX7RPの前立腺がんにおける役割　第31回日本ステロイドホルモン学会学術集会（2024.3.9）東京都・品川シーズンテラスカンファレンス（東京都港区）
48. 佐藤薫、高山賢一、井上聡：ヒト神経細胞におけるエストロゲン関連受容体標的遺伝子の網羅的探索と認知症発症メカニズムの解明第31回日本ステロイドホルモン学会学術集会（2024.3.9）東京都・品川シーズンテラスカンファレンス（東京都港区）
49. 竹岩俊彦、今江理恵子、萬谷博、池田和博、堀江公仁子、井上聡：糖転移酵素 POMGnT1 は高異型度漿液性卵巣がんの増殖・生存を制御する（2024.3.11）東京都健康長寿医療センター研究所　第40回所内研究討論会、ポスター
50. 久保田優希、竹岩俊彦、廣田佳久、井上聡：ビオチン標識を用いたビタミンK依存性γカルボキシラーゼに近接するタンパク質の包括的な探索法（2024.3.11）東京都健康長寿医療センター研究所　第40回所内研究討論会、ポスター

5　著書等

1. Azuma K, Inoue S: Extra-hepatic functions of vitamin K. (2023) *Lipophilic Vitamins in Health and Disease* (Edited by Dr. Paramjit S. Tappia) Springer Nature (in press)
2. 渡部創、東浩太郎、井上聡：グルココルチコイドが標的とする多彩な標的遺伝子、Rp.+（レシピプラス）2023年夏号　Vol.22 No.3　飲むステロイド、南山堂　(2023.7)
3. 高山賢一：治療抵抗性がんの新たな治療法へ、内藤記念科学振興財団、内藤財団時報112号、寄稿（2023.9.11）
4. 高山賢一：性ホルモン受容体のエピゲノム制御機構と老年病、がんにおける役割、山口内分泌疾患研究振興財団「知識の普及および啓発」事業、寄稿（2023.8）
5. 竹岩俊彦、井上聡：ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞イメージングと筋肉抗老化・筋疾患治療への応用、基礎老化研究（日本基礎老化学会会誌）48巻 第1号（2024.2）
6. 渡部創、東浩太郎、井上聡：ビタミンKの健康維持における役割、機能性食品と薬理栄養(日本機能性食品医用学会誌)(2024.2)

6　特許

1.管理番号：TMG-112JP、出願番号：特願2023-042128、発明者：井上聡、高山賢一、発明の名称「前立腺癌又は乳癌治療用医薬組成物」、出願人：地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター、出願日：2023年3月16日
そのほか国外移行を2件（米国・欧州移行と米国移行）進めた。

7　その他

受賞

1. 竹岩俊彦、池田和博、鈴木貴、佐藤航、川端英孝、堀江公仁子、井上聡：[優秀演題賞受賞] エストロゲン受容体陽性乳がんにおけるRNA結合蛋白質PSPC1の臨床的意義と作用メカニズムの解明　第30回日本ステロイドホルモン学会学術集会（福岡県久留米市）(2023.2.25)
2. 高山賢一：[令和4年度東京都医師会医学奨励賞]治療抵抗性前立腺がん悪性化を促進する転写因子複合体形成における相分離機構の解明並びに治療薬への応用（2023.3.7）
3. 竹岩俊彦、東浩太郎、池田和博、堀江公仁子、井上聡：[第33回日本老年学会総会合同ポスター][奨励賞受賞]ミトコンドリア呼吸鎖超複合体の生細胞FRETイメージング法開発とサルコペニア治療・筋肉抗老化への応用　第46回日本基礎老化学会大会　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）(2023.6.16-18)
4. 大島将、高山賢一、木村直樹、山田雄太、久米春喜、藤村哲也、井上聡：[学会賞受賞講演：臨床部門]前立腺癌の悪性化ならびに去勢抵抗性前立腺癌への進展に関わるバイオマーカーとなるDNA損傷応答関連遺伝子の同定　日本アンドロロジー学会第42回学術大会　ウィンクあいち（愛知県名古屋市）(2023.6.23-24)

広報活動

1. プレスリリース：「ミトコンドリア超複合体の見える化から動物をマラソンランナー型にする新しい薬物を発見」(2023.1.25)
2. 高山賢一：がんの悪性化をもたらす遺伝子制御の仕組みと治療への応用、東京都健康長寿医療センターホームペー

ジ、研究トップクス(2023.6.1)
3. プレスリリース:「治療抵抗性がんに対するRNAを標的とした新たな治療薬候補分子の発見」(2023.6.26)
4. 井上聡:老化と寿命の謎を探る「後天的に変化するエピゲノム」(2023.6.26) 信濃毎日新聞
5. 竹岩俊彦:ミトコンドリア超複合体の「見える化」から挑む筋肉疾患の予防・治療と健康増進 、東京都健康長寿医療センターホームページ、研究トップクス(2023.10.26)

講演会
1. 佐藤薫、高山賢一、井上聡:「性ホルモンと脳の老化 ～記憶力を高め、脳を修復し、若返らせる性ホルモンの作用～」令和5年度科学技術週間参加行事　板橋区立文化会館（東京都板橋区）(2023.4.18)
2. 佐藤薫、高山賢一、井上聡:アルツハイマー型認知症診断RNAバイオマーカーの探索に向けたストレス顆粒によるヒト神経細胞RNA代謝制御機構の解明　TOBIRA第11回研究交流フォーラムソラシティカンファレンスセンター（東京都千代田区）(2023.7.28)

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

老化制御研究チーム

チームリーダー：石神昭人

研究チームの概要

老化制御研究チームでは、老化の機構を明らかにして日常生活に制限のない期間、すなわち健康寿命を延伸させるための方法論をエビデンスに裏打ちされた科学的根拠に基づいて開発することを目標とする。その目標を達成するために様々な生物種を研究対象として用い、そこから得られた研究成果を最終的にヒトへと外挿する。さらに、ヒトでの有用性を確認して健康寿命の延伸に貢献する。また、研究内容は、高齢者特有の疾患の発症を予防するための早期診断薬や発症後の有用な治療方法の開発にまで拡大し、高齢者の健康水準の更なる向上を図る。さらに、研究成果を迅速に学術論文として発信して世界の老化研究をリードする。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

分子老化制御

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)老化機構の解明	老化関連遺伝子の細胞への導入	老化関連遺伝子高発現マウスの作出	老化細胞制御因子スクリーニング法の確立	老化細胞制御因子の探索	老化細胞制御因子の臨床応用
(2)老化制御の達成（ビタミンCと老化）	ビタミンC不足によるゲノム全体のメチル化解析	ビタミンC不足による網羅的遺伝子発現解析	ビタミンC不足によるプロモーター領域のメチル化解析	エピジェネティクス制御と老化	エピジェネティクス制御と老化、ビタミンC
(3)老化制御の達成（栄養と老化）	成長期､若齢期の最適な栄養バランスの探索	中齢期の最適な栄養バランスの探索	老齢期の最適な栄養バランスの探索	老年疾患を予防する栄養バランス	健康寿命を延伸する栄養バランス

生体調節機能研究

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)水素分子による抗炎症の分子機構解明と水素医学の実用化 (1)（続き)水素分子による抗炎症の分子機構解明と水素医学の実用化	・水素水による過剰免疫応答抑制効果検証 ・水素ガスによる大動脈解離抑制効果のモデルマウスでの検証 ・水素ボンベによる大動脈解離の医師主導治験準備	・水素水による過剰免疫応答抑制メカニズムの解明 ・水素ガスによるtPA副作用抑制のモデルマウスでの検証 ・水素ボンベによる医師主導治験の開始 ・水素水による認知症抑制効果の介入研究を準備	・水素による脂質代謝制御機構の細胞レベルでの検証 ・水素ガスによる過剰免疫応答抑制効果検証 ・水素発生器によるARDSの医師主導治験の準備 ・水素水による認知症抑制効果の介入研究を開始	・水素による脂質代謝制御機構の動物レベルでの検証 ・水素ガスによる過剰免疫応答抑制メカニズムの解明 ・水素発生器よる医師主導治験の開始	・水素のプライマリーターゲット同定 ・水素ガスによる過剰免疫応答抑制するメカニズムの解明 ・水素ボンベと水素発生器よる医師主導治験を継続
(2)ミトコンドリ	・複製老化過程	・複製老化メカ	・多様な老化細	・動物でのミト	・老齢動物の老

ア変容を指標とした異種老化細胞同定と老化制御	でのミトコンドリア代謝変容を同定 ・GDF15高発現細胞を個体で特定 ・クリステ形成のリアルタイムイメージング法確立	ニズムとミトコンドリア代謝変容との関連性を検証 ・GDF15高発現細胞がこれまで報告されている老化細胞 ・クリステの形成から崩壊過程の解明	胞でのミトコンドリア代謝変容を検証 ・老齢動物の老化制御によるGDF15の発現変化を解析 ・ミトコンドリアリモデリング課程のイメージングとオミックス解析	コンドリア代謝変容を指標とした老化細胞の検出 ・ミトコンドリアリモデリング分子機構の解明	化制御によるミトコンドリア代謝変容と細胞老化との関連性を検証 ・老齢動物でのミトコンドリアリモデリングによる抗老化効果の検証

老化細胞研究

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)気腫病態における老化細胞の病理的役割の解明と老化細胞を標的としたCOPD治療モデルの確立	SASPを介した老化細胞の非細胞自律的作用に関する解析 モデル動物飼育体制の確立 遺伝子改変動物を用いた肺胞再生の評価系の確立 新規遺伝子可変マウスの作製	遺伝子改変動物を用いた肺胞再生の定量解析	老化細胞による肺組織再生制御作用点の探索と制御	老化細胞と内在性肺組織前駆細胞の相互作用解析	薬剤による肺気腫治療モデル動物の確立
(2) 筋由来抗細胞老化因子の探索と運動療法作用点の解明	細胞培養系における抗細胞老化因子の機能解析 動物運動モデルの作製と解析 ヒトサンプルの収集と解析	運動モデルの作製と解析	肺気腫病態モデルの解析	細胞老化が関与する慢性疾患モデルの解析	慢性疾患モデルにおける抗細胞老化因子の解析

分子老化制御

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
近藤　嘉高	研究副部長	研究全体の総括（10月から）
石神　昭人	副所長	研究全体の総括（9月まで）
佐藤　綾美	研究員	ビタミンCと老化のデータ収集・分析
土志田　裕太	研究員	老化機構解明のデータ収集・分析
滝野　有花	非常勤研究員	栄養と老化のデータ収集・分析

１　第四期中期計画の研究成果（概要）

(1) 老化機構の解明

若齢動物の組織には、本来の細胞機能を持つ正常な「若い細胞」のみが存在する。一方、老齢動物の組織には、細胞機能が衰退、異常化した所謂「老化細胞」が存在し、加齢に伴いその数も増加することが予想される。分子老化制御では、第三期中期計画期間において、老齢と若齢ラッ

ト肝臓の実質細胞を用いた「包括的1細胞トランスクリプトーム解析」により、老齢で高発現している3種類の老化関連遺伝子(*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3*)を同定した。これら3種類の老化関連遺伝子は、今までに老化との関連性を示す研究報告はない。第四期中期計画期間では、若齢マウス肝臓の実質細胞にこれら3種類の老化関連遺伝子(*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3*)を導入、高発現させ、老化細胞を誘導できるかを明らかにする。また、老化関連遺伝子を強制発現させたトランスジェニックマウス(老化促進モデルマウス)を作出して、その表現型を詳細に解析する。

本年度、老齢のラット、及びマウス肝臓の実質細胞で高発現している3種類の老化関連遺伝子(*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3*)の研究成果をまとめ、論文投稿した。そして、論文がScientific Reportsに掲載された(論文(誌上発表):原著5番)。また、研究所よりプレスリリース「老化細胞を特定するため、その指標となる老化関連遺伝を同定」(2023年9月11日)した。さらに、本研究成果をIAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023にて発表し、土志田裕太 研究員が「Outstanding Presentation Award」を受賞した。

また、本年度、老化関連遺伝子の強制発現が老化を促進するかを*in vivo*で明らかにするため、肝細胞のマーカー遺伝子であるAlbuminのプロモーターを用い、肝臓の実質細胞でのみ老化関連遺伝子(*Gliprl*)を高発現するトランスジェニックマウス(老化促進モデルマウス)の作出に成功した。現在、このトランスジェニックマウスを繁殖し、表現型を解析している。

(2) 老化制御の達成（ビタミンCと老化）

近年、ビタミンCがDNA脱メチル化酵素(Tet, Ten-Eleven Translocation)の補因子として、エピジェネティクスを介した遺伝子発現制御に深く関与することが明らかになってきた。エピジェネティクスとは、DNA塩基配列の変化を伴わない遺伝子発現制御機構である。恒久的な遺伝子変異とは異なり、エピジェネティクスは可塑性を示し、環境や生活習慣など外的要因の影響を受けて変化しうる。代表的な機構としてDNAメチル化(DNAm)やヒストン修飾がよく知られる。最近、欧米では、老化とエピジェネティクスとの関連が注目され、エピジェネティック時計(DNAm age)と称して研究が激化している。

DNAmに影響を与える主な因子として、喫煙がよく知られる。実際に喫煙により老化関連遺伝子$p16^{INK4A}$など遺伝子のメチル化変化が報告されている。そこで、分子老化制御では、喫煙がDNAmに及ぼす影響をビタミンCにより防御できるかを明らかにすることを研究目的とした。さらに、近年、従来の紙巻きたばこに代わり、加熱式たばこが普及している。しかし、加熱式たばこの健康への影響は未だわかっていないことが多い。そこで、加熱式たばこによるDNAmへの影響についても比較、検討した。

本年度、加熱式たばこエアロゾル抽出液をヒト肺由来培養細胞に曝露させ、DNAm変化をreduced representation of bisulfite sequencing(RRBS)法とバイオインフォマティクスにより解析した。RRBSは、制限酵素によりCpGリッチなゲノム領域を濃縮し、バイサルファイトにより非メチル化シトシンを化学変換後にシーケンサーで読み取る手法である。解析の結果、加熱式たばこは、CpG領域のメチル化変化を引き起こし、老化関連遺伝子などのmRNA発現量に影響することを明らかにした。また、特にシトクロムP450のひとつ*CYP1A1*(cytochrome P450 family 1 subfamily A member 1)のプロモーター領域においてメチル化が大きく変化し、mRNA発現量を顕著に増加することを示した。本研究成果は、論文投稿し、Toxicology and Applied Pharmacologyに掲載された(論文(誌上発表):原著7番)。また、学会発表し、佐藤綾美 研究員が第33回日本老年学会総会において「優秀演題賞」、第46回日本基礎老化学会大会において「日本基礎老化学会奨励賞」を受賞した。

(3) 老化制御の達成（栄養と老化）

以前には、カロリー制限や食餌制限による寿命延長効果について様々な生物種を用いた研究が盛んに行われていた。しかし、現在の日本の高齢者は、低栄養(厚生労働省の平成28年「国民健康・栄養調査」より)が問題となり、逆に健康寿命を縮めている可能性がある。誕生から死まで、一生涯に渡り同じ栄養バランスがよいとは限らない。健康寿命を平均寿命に最大限近づけるためには、ライフステージ(一生における加齢にともなう変化を幾つかの段階に区切ったそれぞれの段階)ごとに最適な栄養バランスを明らかにする必要がある。

第四期中期計画では、ライフステージを成長期, 若齢期, 中齢期, 老齢期の4つにわけ、各ステージでの最適な栄養バランスを明らかにする。即ち、成長期, 若齢期, 中齢期における三大栄養素(タンパク質, 脂質, 炭水化物)の適切な摂取割合が老齢期でのフレイル, サルコペニア, 認知症の予防や代謝健康(metabolic health)、そして健康寿命の延伸に繋がるかを明らかにする。

本年度、若齢および中齢のマウスに、総カロリーは等しくタンパク質の比率が異なる5種類の飼料(総カロリーに対するタンパク質比率5%, 15%, 25%, 35%, 45%; 炭水化物比率70%, 60%, 50%, 40%, 30%; 脂質は全て25%)をあたえて2ヶ月間飼育し、タンパク質の摂取比率や月齢が異なると

代謝健康にどのような影響があるかを詳細に解析した。その結果、タンパク質比率25～35%（炭水化物比率40～50%）の飼料は、血糖値や血中総コレステロール濃度が低く、肝臓脂質量も少ないなど、代謝健康にとって最も優れていることがわかった。本研究成果は、論文投稿し、GeroScienceに掲載された(論文(誌上発表):原著8番)。また、研究所よりプレスリリース「高齢期にむけた健康的な食事のタンパク質比率は25～35%」(2023年5月8日)した。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 老化機構の解明

若齢動物の組織には、本来の細胞機能を持つ正常な「若い細胞」のみが存在する。一方、老齢動物の組織には、細胞機能が衰退、異常化した所謂「老化細胞」が存在し、加齢に伴いその数も増加することが予想される。分子老化制御では、第三期中期計画期間において、老齢と若齢ラット肝臓の実質細胞を用いた「包括的1細胞トランスクリプトーム解析」により、老齢で高発現している3種類の老化関連遺伝子(*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3*)を同定した。研究成果の概要(プレスリリースより）は以下である。

はじめに、私たちが定義する「老化関連遺伝子」とは、老化の機構に直接関与する遺伝子だけではなく、間接的に発現変動する、老化機構に直接関与しない遺伝子も含みます。さらに、老化の影響が組織毎に異なる可能性も考慮し、組織特異的に加齢により発現変動する遺伝子もすべて含みます。

本研究では、若齢(7月齢)と老齢(27月齢)のラット肝臓実質細胞を用いて「包括的1細胞トランスクリプトーム解析」を行い、老化関連遺伝子を一次スクリーニングしました。さらに、ラットという動物種特異性を排除するため、候補となる遺伝子を様々な月齢(3, 6, 12, 24, 32-34月齢)のマウス肝臓を用いた定量的PCR法により加齢変化を検証し、二次スクリーニングしました。その結果、老齢で高発現している3種類の老化関連遺伝子として*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3*を新たに見出しました（図1)。

これら 3 種類の老化関連遺伝子は、今までに老化との関連性を示す研究報告はありませんでした。また、老齢ラット肝臓実質細胞の詳細なトランスクリプトーム解析により、これらの遺伝子は、ほぼ同じ細胞(同一細胞)に高発現していることがわかりました。これは、これらの遺伝子を高発現する細胞が老化細胞である可能性を示唆しています。さらに、蛍光 in situ ハイブリダイゼーション(FISH, fluorescence in situ hybridization）により、*Gliprl*, *Clec12a*, *Phlda3* を高発現する細胞が 27 月齢のマウス肝臓実質細胞において確認できました。老齢動物の組織に存在する老化細胞の同定は、複雑な老化機構の解明に繋がります。

また、本研究成果は、IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023にて「Outstanding Presentation Award」(土志田裕太 研究員)を受賞した。

本年度、老化関連遺伝子の強制発現が老化を促進するかを*in vivo*で明らかにするため、肝細胞のマーカー遺伝子であるAlbuminのプロモーターを用い、肝臓の実質細胞でのみ老化関連遺伝子(*Gliprl*)を高発現するトランスジェニックマウス(老化促進モデルマウス)の作出に成功した。現在、このトランスジェニックマウスを繁殖し、表現型を解析している。

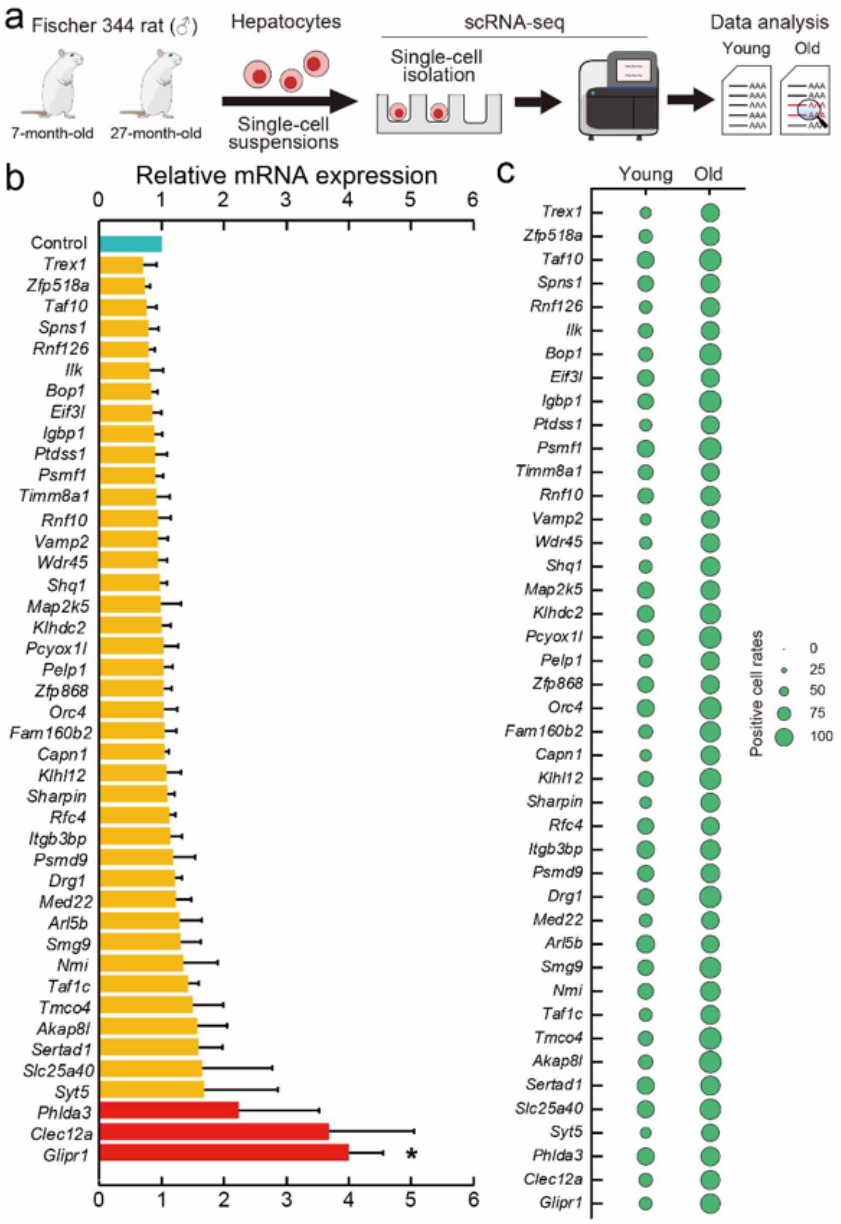


図 1 の説明

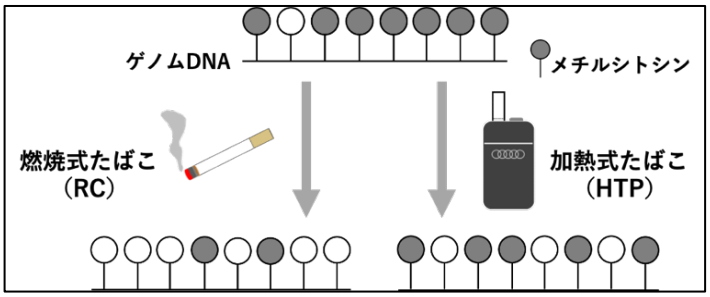
(a) 7 月齢と 27 月齢のラット肝臓実質細胞における包括的 1 細胞トランスクリプトーム解析の流れ (b) 6 月齢と 32-34 月齢のマウス肝臓を用いた 43 遺伝子の定量的 PCR 法による解析。赤色は、老齢で発現レベルが 2 倍以上の遺伝子。内因性コントロール遺伝子には，β-アクチンを用いた。値は，平均値±標準誤差。*$p < 0.05$ (c) 円の直径は、陽性細胞の割合を示す。

(2) 老化制御の達成（ビタミンCと老化）

加齢に伴う生体変容メカニズムの理解には、エピジェネティクスの変化を追究することがひとつのカギとなる。エピジェネティクスとは、DNA塩基配列の変化を伴わない遺伝子発現制御機構であり、DNAメチル化(DNAm)やヒストン修飾に代表される。DNAmの加齢変化は、エピジェネティック時計と称され、老年病罹患リスクや寿命の予測への応用研究が加速している。

近年、ビタミンC研究において、ビタミンCがDNA脱メチル化酵素(Tet, Ten-Eleven Translocation)の補因子として、エピジェネティクスを介した遺伝子発現制御に深く関与することが明らかになってきた。DNAmに影響を与える主な因子として、喫煙がよく知られる。実際に喫煙により老化関連遺伝子$p16^{INK4A}$など遺伝子のメチル化変化が報告されている。そこで、分子老化制御では、喫煙がDNAmに及ぼす影響をビタミンCにより防御できるかを明らかにすることを研究目的とした。

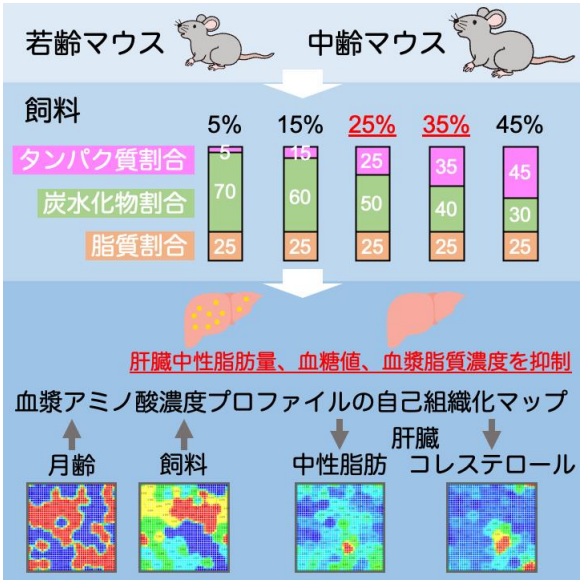
また、近年、従来の紙巻きたばこに代わり、加熱式たばこが普及している。しかし、加熱式たばこの健康への影響は未だわかっていないことが多い。そこで、加熱式たばこによるDNAmへの影響についても比較、検討することにした。加熱式たばこによるDNAmへの影響を基礎的に捉えるべく、加熱式たばこエアロゾル抽出液をヒト肺由来培養細胞に曝露させ、DNAm変化をreduced representation of bisulfite sequencing(RRBS)法とバイオインフォマティクスにより解析した。RRBSは、制限酵素によりCpGリッチなゲノム領域を濃縮し、バイサルファイトにより非メチル化シトシンを化学変換後にシーケンサーで読み取る手法である。本解析の結果、加熱式たばこは、CpG領域のメチル化変化を引き起こし、老化関連遺伝子などのmRNA発現量に影響することを明らかにした。また、特にシトクロムP450のひとつ*CYP1A1*(cytochrome P450 family 1 subfamily A member 1)のプロモーター領域メチル化を大きく変化させ、mRNA発現量を増加することを明らかにした(右概念図)。CYP1A1は、たばこ煙に含まれるベンゾピレンのような多環芳香族炭化水素に対して、体内で変異原性・発がん性のある物質へと代謝する。そして、結果的に肺がんのリスクを高める。加熱式たばこによるDNAm変化に対するビタミンCの効果は、現在検討中である。ビタミンCの効果を検討するまでの研究成果は、論文投稿し、2023年9月15日にToxicology and Applied Pharmacologyに掲載された(論文(誌上発表):原著7番) また、本研究成果は、第33回日本老年学会総会において「優秀演題賞」、第46回日本基礎老化学会大会において「日本基礎老化学会奨励賞」(佐藤綾美 研究員)を受賞した。



(3) 老化制御の達成 (栄養と変化)

以前には、カロリー制限や食餌制限による寿命延長効果について様々な生物種を用いた研究が盛んに行われていた。しかし、現在の日本の高齢者は、低栄養(厚生労働省の平成28年「国民健康・栄養調査」より)が問題となり、逆に健康寿命を縮めている可能性がある。誕生から死まで、一生涯に渡り同じ栄養バランスがよいとは限らない。健康寿命を平均寿命に最大限近づけるためには、ライフステージ(一生における加齢にともなう変化を幾つかの段階に区切ったそれぞれの段階)ごとに最適な栄養バランスを明らかにする必要がある。そのため、高齢期にむけた代謝健康(metabolic health)に適した三大栄養素(タンパク質, 脂質 炭水化物)の摂取割合を検討した。そして、高齢期にむけた健康的な食事のタンパク質比率は25〜35%であることを明らかにした。本研究成果は、論文投稿し、2023年4月28日にGeroScienceに掲載された(論文(誌上発表):原著8番)。

若齢(6月齢)と中齢(16月齢)のオスマウスにタンパク質のカロリー比率が異なる5種類の飼料(総カロリーは等しい; 脂質比率25%; タンパク質比率5%, 15%, 25%, 35%, 45%; 炭水化物比率70%, 60%, 50%, 40%, 30%)を与えて8週間飼育した。タンパク質比率15%の飼料は、日本におけるカロリー摂取比率に近い。タンパク質比率25〜35%の飼料は、血糖値や血中総コレステロール濃度が低く、肝臓脂質量も少ないなど、代謝健康にとって最も優れていることがわかった (右図)。一方、タンパク質比率5%および45%は、極端な結果であった。また、血中アミノ酸濃度をもちいて機械学習の一種である自己組織化マップ解析を行なったところ、アミノ酸濃度プロファイルが似ているマウスで構成される複数の塊(クラスター)が形成された。血中アミノ酸濃度のプロファイルは、月齢やタンパク質比率が異なる飼料の違いだけで決まることが示された。さらに、得られた自己組織化マップに肝臓中性脂肪量のヒートマップを重ね合わせた結果、中性脂肪量が多いクラスターや少ないクラスターが認められたことから、血中アミノ酸濃度プロファイルと肝臓中性脂肪量は良く相関することがわかった。



本研究から、若齢、中齢ともにタンパク質比率25〜35%が最も健康的であることが明らかとなった。本研究で得られた成果は社会科学系の疫学データとも対応させる予定であるが、現在の日本

におけるタンパク質の摂取比率は13.8%であることから、食事のタンパク質比率を25～35%に高めることは、高齢期にむけた代謝健康の維持に役立つ可能性が示唆される。

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜老化機構の解明＞
【センター内】老年病理学研究チーム（高齢者がん）
【センター外】東京都立大学、和歌山県立医科大学、東京医科歯科大学、東邦大学、早稲田大学、広島大学、韓国釜山大学、韓国ハリムン大学
＜老化制御の達成＞
【センター内】老化脳神経科学研究チーム、腎臓内科、病理診断科、薬剤科
【センター外】北陸大学、順天堂大学、芝浦工業大学、東洋大学、東京大学、東京農業大学、明治大学、杏林大学、国立保健医療科学院、朝日大学

生体調節機能

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
大澤　郁朗	研究副部長	研究全体の総括、研究項目(1)責任者
藤田　泰典	研究員	研究項目 (2)責任者 研究全体のデータ収集・分析
池谷　真澄	研究員	研究項目(1)のデータ収集・分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

第一に水素分子による抗炎症の分子機構解明と水素医学の実用化について、複数の分野で進行中の研究について報告する。動物モデルを中心とした水素分子の作用機序を解明するための基礎研究と大動脈解離に関する臨床研究ともに順調に進展している。

「水素ガスによる脳神経保護」において、吸入麻酔薬セボフルランによって引き起こされる神経細胞死への水素ガスの保護効果を網羅的リン酸化プロテオームで解析し、新たな分子メカニズムを発見した。麻酔に混合した水素ガスは細胞輸送および細胞突起の進展に関連する一群のタンパク質のリン酸化状態を変動させた。これにはMAP1ファミリーなどが含まれ、リン酸化の亢進は酸化ストレスを抑制し、神経細胞を保護することが知られている。脳梗塞や神経変性疾患での水素分子による神経保護効果にも関与している可能性がある新たな発見であった。さらに「水素ガス吸入の脳梗塞急性期rt-PA療法における副作用抑制効果」では、脳梗塞治療の副作用である脳出血の抑制に水素ガスが有効である可能性を検証した。昨年度に確立したrt-PA投与による脳出血モデルマウスで、水素ガス吸入が脳出血領域を縮小し浮腫を抑制すること、このときミクログリアの活性化とVEGFの過剰発現が抑制されることが確認された。水素ガスが脳梗塞治療において有望な副作用抑制薬となり、rt-PA適応となる患者数を拡大できる可能性を示唆している。次に「水素水飲用による免疫過剰応答抑制」では、水素水が多様な疾患で抗炎症効果を示すことが確認されながらも、その具体的な作用機序が不明である状況で、小腸免疫系への関与が示唆されていた。昨年までに水素水を投与すると短時間に小腸パイエル板での樹状細胞に対する抗原提示が抑制されることを示してきた。今年度はこれを食物アレルギーモデルで検証し、有意にアナフィラキシー症状を改善することが示された。水素水が腸管免疫系の過剰応答を調整し、特に小腸免疫系の恒常性に寄与していることが多様な水素水の病態改善効果に繋がっている可能性を示唆する知見である。興味深いことに抗原提示の抑制と同時に水素水によりパイエル板上のムチン層が薄層化していた。この因果関係については現在解明中である。

「水素ガス吸入による急性大動脈解離の緩和」に関する研究は、当センター発の水素ガス吸入による新規治療法確立を目指している。急性大動脈解離は炎症性サイトカインの上昇や好中球の活性化を介して大動脈解離の進行や肺障害などの合併症を引き起こす。水素ガスの吸入はこれらを抑制する効果が見込まれることから、臨床研究に加えて、その裏付けとなる動物モデルの確立と効果、作用機序の研究を進めている。動物モデルでは、マウスでコラーゲンとエラスチンの架橋結合を阻害した後、血圧上昇によって大動脈解離を引き起こす急性大動脈解離モデルを確立した。このモデルに水素ガスを吸入させたところ生存率が上昇して、大動脈破裂の発症頻度が減少し、解離範囲が縮小していた。また、肺障害も緩和され、炎症性サイトカインの上昇と好中球の活性化が抑制されていた。これらの知見は水素ガス吸入による抗炎症作用が急性大動脈解離の緩和に有効であることを裏付けている。臨床研究では、当センターICUに設置する水素ガス吸入装置を開発し、急性大動脈解離Stanford B型患者に起こる肺酸素化障害に対する水素ガス吸入の安全

性試験を進めている。すでに目標である10例が完了した。全例で呼吸状態は安定し、人工呼吸器やNIPPVを要せず、安定して急性期の入院治療を完了した。水素ガスを吸入した患者の予後は全て良好であったことから、生化学的解析を進行中である。この結果を受け、本研究では急性大動脈解離Stanford B型患者に起こる肺酸素化障害に対するH_2ガス吸入の有効性試験開始を予定している。

第二にミトコンドリアに着目した老化制御研究は主に以下の３項目に焦点を当てて順調に進行している。

「老化初期過程に潜在するミトコンドリア変容の解明」昨年度までの研究からヒト胎児線維芽細胞の複製老化において、ミトコンドリアの形態変化は複製老化前から起こっており、呼吸鎖障害は複製老化後に現れることを明らかにしてきた。本年度は、複製老化過程におけるミトコンドリア代謝変容を解明するために、ヒト胎児線維芽細胞TIG-1のメタボローム解析を実施し、解糖系、クエン酸回路、セリン生合成などの代謝経路の複製老化における変化を同定した。さらに代謝フラックス解析により、複製老化前の移行期においてクエン酸回路の代謝流量が低下していること明らかになった。エネルギー産生を調節するためにクエン酸回路が負に制御されている可能性が考えられ、複製老化過程におけるミトコンドリアの機能的変化に新たな視点を提供する知見である。

「ミトコンドリア呼吸鎖機能低下と細胞老化の関連性の解明」加齢に伴い呼吸鎖複合体の遺伝子発現低下や呼吸鎖機能の低下が確認され、老齢個体には呼吸鎖機能が低下した細胞が存在することが示唆されている。一方、ミトコンドリア翻訳抑制による呼吸鎖機能低下が線虫やマウスでの寿命延伸に関与していることが知られているが、その複製老化への影響は検証されていない。そこで本年度は、TIG-1細胞を使用してin vitroでの実験を行い、ミトコンドリア翻訳抑制が複製老化を抑制する可能性を示した。その分子メカニズムには統合ストレス応答の活性化が関与している可能性が示唆されるという全く新たな知見を得ている。特に統合ストレス応答を抑制する条件下では、ミトコンドリア翻訳抑制による最大分裂回数の増加が抑制されていた。

「老化マーカーとしてのGDF15の生物学的・臨床疫学的意義」我々は以前にGDF15をミトコンドリア病バイオマーカーとして同定した。血中GDF15は加齢に伴って増加し、高齢者の死亡リスクと関連すること、早期細胞老化でGDF15の遺伝子発現が誘導されることから、GDF15は老化マーカーの候補としても注目されている。本年度では、GDF15高発現細胞の同定を試み、in situハイブリダイゼーション法の導入を行なった。また、社会科学系との連携により、日本人高齢者1、801人を対象にした臨床疫学的な調査を行い、血中GDF15濃度に基づいて4つの群に分け、5。7年間の追跡調査を実施した。GDF15最高値群では、最低値群と比較して死亡リスクが5。03倍高く、さらに調整を行っても1。98倍高かったことが判明した。この死亡リスク上昇には腎機能低下が一部関与している。本年度、これらの研究成果を米国の老年学専門学術誌で発表した。また、糖尿病・代謝・内分泌内科などの病院部門と共同でGDF15がフレイルを予見する有効なマーカーとなりうることを示し、同じく欧州の老年学専門学術誌で発表した。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 水素分子による抗炎症の分子機構解明と水素医学の実用化

研究計画に基づき、動物モデルを中心とした水素分子の作用機序を解明するための基礎研究と大動脈解離に関する臨床研究ともに順調に進展している。

〈水素分子の作用機序〉

#「水素ガスによる脳神経保護」

水素ガスの吸入は、頭部外傷、脳梗塞から AD や PD などの神経変性疾患まで多くの病態において脳神経保護効果を示す。全身麻酔薬によって引き起こされる新生仔の脳変性に対する抑制効果もその一例である。そこで脳における水素分子の神経保護メカニズムを解明するため、水素ガスが麻酔薬セボフルランによって誘導される神経細胞死に影響を与える分子メカニズムを解析した。まず、セボフルランに対して感受性を示すのは幼弱な神経前駆細胞であり、新生仔マウスの後脾皮質でアポトーシスを起こすことを確認した。2%の水素ガスを混合したセボフルランに 3 時間曝露された新生仔マウスでは大脳皮質での酸化ストレスが低減し、酸化ストレスによって誘発される c-Jun のリン酸化と下流遺伝子の発現量増加が共に抑制され、TUNEL およびカスパーゼ 3 の断片化により検出される後脾皮質でのアポトーシスが抑制された。麻酔薬は即効性であり、極めて短時間にシグナル伝達変化が生じることを示しているが、この段階で水素分子が関与している可能性が考えられた。そこで、今年度、網羅的なリン酸化プロテオーム解析を行った。新生仔マウスの脳がセボフルランにさらされた際に後脾皮質でリン酸化されるタンパク質には、神経の発達とシナプスのシグナル伝達に関連するものが含まれていた。これは、麻酔薬が神経系の構造と機

能を変化させることを示唆している。シナプス形成は未熟なニューロンの生存に重要であり、アポトーシスに対して抑制的に働く。水素ガスの混合は細胞輸送および細胞突起の進展に関連する一群のタンパク質のリン酸化状態を変動させた。とくに MAP1A および MAP1B のリン酸化を促進していた。主に神経系で発現する MAP1 ファミリーはリン酸化状態に応じて微小管を調節し、神経発達および維持に関与する。輸送系の異常はミトコンドリアの過活性化を引き起こし、酸化ストレスを生じる。以上について、現在、論文投稿準備中である。

#「水素ガス吸入の脳梗塞急性期 rt-PA 療法における副作用抑制効果」

脳梗塞急性期には血栓溶解療法（rt-PA）が用いられるが、その副作用である脳出血を水素ガスの吸入が軽減できるか検証している。rt-PA はプラスミン活性化により血栓を溶解するが、脳出血のリスクを回避するため、特に発症から 4.5 時間以内の投与が推奨されている。副作用の抑制は適応時間の拡大に繋がる。一方、水素ガスは脳梗塞や脳出血などの脳血管障害モデルで病態改善効果が報告されている。昨年度までに中大脳動脈を電気メスで凝固・虚血した脳梗塞マウスでの rt-PA 投与による脳出血副作用モデルを確立した。本年度、この rt-PA 副作用モデルを用い、２％水素ガス吸入が 4 時間後の rt-PA 投与による出血領域を有意に縮小し、浮腫による脳重量の増大を抑制する効果が確認された。この結果は、水素ガス吸入によって rt-PA の投与が遅れた患者でも出血を抑制できる可能性を示唆している。さらに免疫染色の結果からミクログリアの活性化と VEGF の発現上昇を水素ガスは抑制していた。抗炎症作用と共に VEGF による血管障害抑制が主要な作用機序と推察される。

#「水素水飲用による免疫過剰応答抑制」

水素水飲用は多様な疾患で抗炎症効果を示すが、その詳細な作用機序は不明である。以前の研究で、水素水をマウス大腸炎モデルに投与すると小腸パイエル板（PP）で FOXP3 陽性の制御性 T 細胞低下が抑制されていたことから、水素分子が小腸免疫系恒常性維持に関与する可能性が示唆された。そこで非自己抗原として卵白アルブミン（OVA）を用い、PP での抗原提示に水素水飲用が及ぼす影響と、食物アレルギーモデルマウス DO11.10 を OVA で感作し、アナフィラキシー症状に対する水素水飲用効果を調べた。昨年度までの研究により、PP での抗原提示については、マウスに水素水を経口投与した一定時間後に FITC で蛍光標識した OVA（FITC-OVA）を経口投与し、さらに 3 時間後に回腸 PP を摘出して上皮下ドーム領域の FITC-OVA 陽性細胞を解析したところ、水素水投与の１から６時間後には樹状細胞への取り込みが抑制されていた。この効果は、24 時間後には消失していた。そこで今年度、DO11.10 マウスに水素水を経口投与した 6 時間後に OVA 30 mg を経口投与し、これを 1 日おきに計 6 回行い感作した。OVA を尾静注し、アナフィラキシー症状を観察すると、水素水の投与はこれを有意に改善した。以上の結果は、水素水飲用による抗原提示の抑制が小腸免疫系恒常性維持に寄与することを示している。研究成果の一部を学会発表し、論文執筆準備中である。また、水素分子がヒドロゲナーゼを有する腸内細菌を介して小腸免疫系に作用する可能性について解析中である。

〈水素ガス吸入療法〉

#「水素ガス吸入による急性大動脈解離の緩和」

急性大動脈解離は炎症性サイトカインの上昇や好中球の活性化を介して大動脈解離の進行や肺障害などの合併症を引き起こす。本研究では当センター発の水素ガスの吸入による新規治療法確立を目指している。

（動物モデル）昨年度までにマウスの急性大動脈解離モデルを確立した。マウスにリシルオキシダーゼ阻害剤を投与することでコラーゲンとエラスチンの架橋結合を阻害した後、アンジオテンシン II 投与による急激な血圧上昇により短時間で大動脈解離を引き起こす。今年度、このモデルマウスでアンジオテンシン II 投与後 24 時間に渡り 2%の水素ガスを吸入させたところ、生存率が上昇して、大動脈破裂の発症頻度が減少し、解離範囲が縮小していた。この時、血漿中の炎症性サイトカイン IL-6 とマトリックスメタロプロテアーゼ MMP-9 の上昇が抑制され、解離領域と肺での好中球浸潤及び肺胞洗浄液中タンパク量の上昇が抑制されていた。これらの知見から水素ガス吸入による抗炎症作用が急性大動脈解離の緩和に有効であることを裏付けられたので､現在、論文執筆中である。

（臨床） 当センターICU で水素ガス吸入装置を開発し、急性大動脈解離 Stanford B 型患者に起こる肺酸素化障害に対する水素ガス吸入の安全性試験(特定臨床研究 計画番号:jRCTs031200342)を進めている。すでに目標である 10 例の研究参加同意が得られ、全例で呼吸状態は安定し、人工呼吸器や NIPPV を要せず、安定して急性期の入院治療を完了した。水素ガスを吸入した患者の予後は全て良好であったことから、生化学的解析を進行中である。この結果を受け、本研究では急性大動脈解離 Stanford B 型患者に起こる肺酸素化障害に対する H_2 ガス吸入の有効性試験に向けた検討を開始する。

(2) ミトコンドリア変容を指標とした異種老化細胞同定と老化制御
研究計画に基づき、ミトコンドリアに着目した老化制御研究は概ね順調に進んでいる。主に以下の３つの研究項目を進めている。
#「老化初期過程に潜在するミトコンドリア変容の解明」
ヒト胎児線維芽細胞複製老化におけるミトコンドリアの解析から、ミトコンドリア形態は複製老化前から変化しているが、呼吸鎖障害が発生して酸化ストレスが増大するのは複製老化後であることを昨年度までに明らかにした。この事から、複製老化過程のミトコンドリアでは、呼吸鎖障害とは異なる機能的変化が潜在しているものと考えられた。そこで、本年度は複製老化過程に潜在するミトコンドリア代謝変容を明らかにするために、ヒト胎児線維芽細胞である TIG-1 細胞のメタボローム解析を実施した。その結果、複製老化前の移行期に顕著に増減する代謝物質を検出し、関連する複数の代謝経路（解糖系、クエン酸回路、セリン生合成など）を同定した。さらに、安定同位体標識グルコースによる代謝フラックス解析により、クエン酸回路の代謝流量が低下することを明らかにした。クエン酸回路代謝中間体の存在量は増加しており、細胞内 ATP 量も低下していなかったことから、エネルギー産生を調節するためにクエン酸回路が負に制御されている可能性が考えられる。
#「ミトコンドリア呼吸鎖機能低下と細胞老化の関連性の解明」
個体レベルでは加齢に伴い呼吸鎖複合体の遺伝子発現低下や呼吸鎖機能の低下が観察されることから、老齢個体には呼吸鎖機能が低下した細胞が存在し、臓器や組織の機能低下に関与していると考えられている。一方、ミトコンドリア翻訳抑制による呼吸鎖機能低下は複数の生物種で寿命を延伸させることが知られているが、詳細なメカニズムは不明である。しかし、ミトコンドリア翻訳抑制による寿命延伸と細胞老化との関連性は検証されていない。そこで本年度は、TIG-1 細胞を用いて細胞老化に対するミトコンドリア翻訳抑制の効果を *in vitro* で検証した。高濃度のドキシサイクリン（Dox）はミトコンドリアの翻訳を特異的に阻害し、呼吸鎖機能を低下させる。TIG-1 細胞を Dox 処理した結果、ミトコンドリアの膨潤化と共に呼吸鎖複合体サブユニットの減少と酸素消費速度の低下が確認された。この時、細胞の最大分裂回数が増加し、細胞老化が部分的に抑制された。ミトコンドリア翻訳抑制による呼吸鎖機能低下は統合ストレス応答を活性化する。そこで、Dox と同時に統合ストレス応答阻害剤 ISRIB 存在下で長期継代培養を行ったところ、Dox による最大分裂回数の増加が抑制された。また、統合ストレス応答で誘導されるアミノ酸代謝酵素と翻訳制御因子は細胞老化に伴い低下するが、Dox 処理はこれを抑制した。以上から、ミトコンドリアの翻訳抑制は細胞老化を部分的に抑制し、その分子メカニズムには統合ストレス応答活性化の関与が示唆された。
#「老化マーカーとしての GDF15 の生物学的・臨床疫学的意義」
我々は遺伝性疾患であるミトコンドリア病のバイオマーカーとして GDF15 を初めて同定し、その臨床的有用性を明らかにした。その後、他の多くの研究グループがその有用性を確認している。一方、血中 GDF15 は加齢に伴って増加し、高齢者の死亡リスクと関連すること、早期細胞老化で GDF15 の遺伝子発現が誘導されることから、GDF15 は老化マーカーの候補としても注目されている。しかし、その背景にある分子メカニズムは不明である。高齢期における血中 GDF15 の増加は、ミトコンドリア機能障害を有する細胞数増加を反映しているものと考えられる。そこで本研究では、加齢に伴って出現する GDF15 高発現細胞を同定することにより、血中 GDF15 と高齢期の負の健康アウトカムの基盤にある分子機序の解明を目指している。本年度は、GDF15 高発現細胞の同定に資する in situ ハイブリダイゼーション法の導入を試みたが、十分な検出感度が得られなかった。次年度以降さらなる改良を試みると共に、他の実験方法の導入も検討する。また、社会科学系との連携により日本人高齢者における血中 GDF15 濃度の臨床疫学的意義の解明にも取り組んでいる。群馬県草津町または埼玉県鳩山町に在住の 65 歳以上の高齢者1,801人を対象に、血液中の GDF15 濃度の測定ならびに 5.7 年間（中央値）の追跡調査を実施した。対象者を血中 GDF15 濃度に基づいて 4 群（最低値群、低値群、高値群、最高値群）に分け、総死亡リスクを分析したところ、GDF15 最高値群の死亡リスクは、最低値群よりも 5.03 倍高く、社会人口学的変数（年齢、性別、地域、学歴）と臨床的に重要な変数（既往歴、血液検査数値、老齢期うつ病評価度、認知機能評価スコア）で調整した場合でも 1.98 倍高いことが分かった。この死亡リスクは、腎臓機能の指標であるシスタチン C または β2-ミクログロブリンの追加調整により、統計的な有意水準が消失した。これらの結果から、血中 GDF15 濃度が高い高齢者は死亡リスクが高いことが明らかとなり、そのリスク上昇には腎臓の機能低下が一部関与している可能性が示された。以上の研究成果を本年度、米国の老年学専門学術誌で発表した。次年度以降は、死因別解析や身体機能低下や認知機能低下などの他のアウトカムとの関連性について解析を行う。また、糖尿病・代謝・内分泌内科などの病院部門と共同で血清中の GDF15 が高値であると心代謝性疾患を有する高齢者でのフレイルを予測できることを報告し、GDF15 がフレイルを予見する有効なマーカーとなりうるこ

とを示した。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜水素分子による抗炎症の分子機構解明と水素医学の実用化＞

【センター内】老化脳神経科学研究チーム、心臓血管外科、血管外科、呼吸器外科、臨床工学科

【センター外】神奈川県健康医療局、岡山大学大学院、東洋大学、東洋大学、日本医科大学、

＜ミトコンドリア変容を指標とした異種老化細胞同定と老化制御＞

【センター内】老化機構研究チーム、社会参加とヘルシーエイジング研究チーム、糖尿病・代謝・内分泌内科、循環器内科

【センター外】東京大学、東京農工大学、防衛医科大学

老化細胞

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
杉本　昌隆	研究副部長	研究全体の総括 肺気腫治療モデルの解析
津島　博道	研究員	筋由来因子の解析 マウス運動モデルの解析 肺気腫モデルの樹立
廣瀬　美嘉子	研究員	2023年9月入職 新規肺遺伝子改変動物の樹立 肺気腫病態の解析

１　第四期中期計画における研究成果の概要

本研究テーマでは、細胞老化が病態に影響を及ぼす機構の解明、および老化細胞を標的とした新たな疾患治療モデル・創薬シーズの確立を目指す。特に本テーマでは、呼吸器疾患病態と細胞老化の関連に着目して研究を行っている。

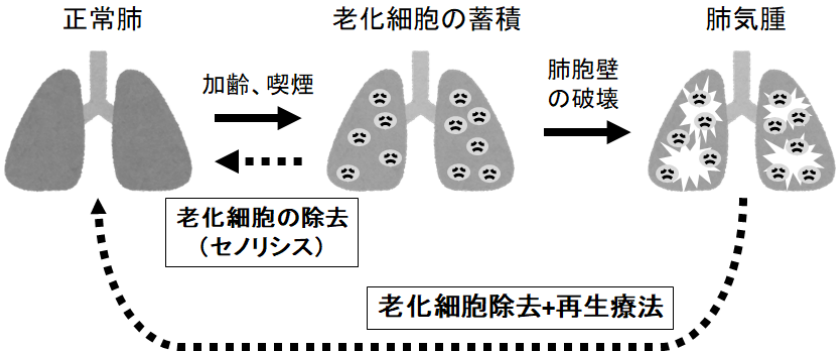
慢性閉塞性肺疾患（chronic obstructive pulmonary disease、 COPD）は、常に世界で死因の上位を占め、2019 年の WHO（世界保健機関）の報告では死因の第 3 位となっている。我が国においても有病者は 500 万人をこえると推定されており、同年の国内における死因の第 5 位であることが報告されている。COPD の罹患率は高齢者や喫煙者で顕著に高く、未曽有の超高齢化社会を迎えた我が国において、同疾患による問題は今後益々肥大化することが予測される。COPD は慢性気管支炎と肺気腫を主要病態とするが､現時点で肺気腫に対する有効な治療法は確立されておらず、革新的な創薬・治療基盤の確立が求められる。

ヒトを含む哺乳動物の細胞は、重度の障害を受けると細胞老化（cellular senescence）と呼ばれる増殖停止状態に陥る。細胞老化は、がん細胞へと形質転換するリスクを持つ潜在的に危険な細胞の増殖を阻止する極めて重要ながん抑制機構として機能する。一方、加齢とともに細胞老化をおこした細胞（老化細胞）は様々な組織に蓄積する。老化細胞は senescence-associated secretory phenotype(SASP)と呼ばれる特異的な分泌表現型を介して､周辺の環境に影響を与える。このような老化細胞の非細胞自律的作用は、組織の加齢性変化や慢性疾患の発症に関与することがモデル動物を用いた解析から明らかになり、認知症やフレイルなど、様々な疾患に対して老化細胞を標的とするセノリティック薬の臨床試験が国外で行われている。ヒト COPD 患者の肺組織においても細胞老化の亢進が認められており､COPD 病態と細胞老化の関連が以前より示唆されていた。我々は、肺気腫モデル動物において、老化細胞の除去が気腫病態を抑制することをこれまでに見出しており、老化細胞が肺気腫の有効な治療・創薬標的になり得ることが示唆された。

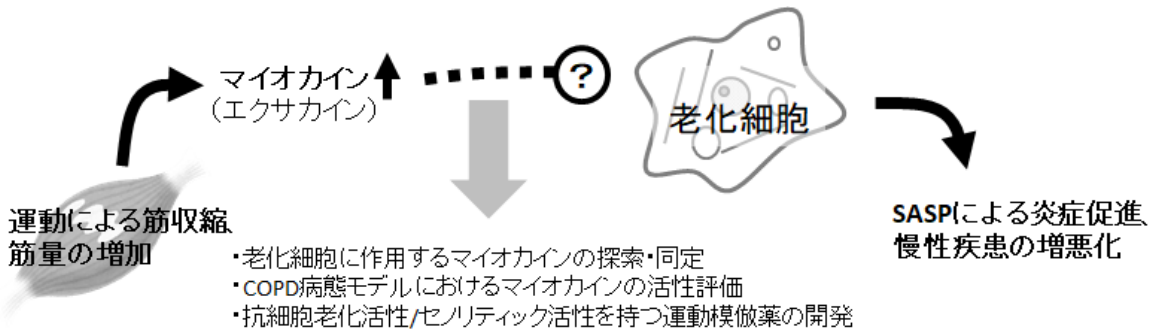
また､COPD に対しては気管支拡張薬や抗炎症薬を用いた対症療法の他に、運動療法も用いられる。ヒトや動物モデルにおいて持続的な運動トレーニングは、一定の効果を持つことが示されている。しかしながら運動療法について、その作用点やメカニズムなど生化学的なエビデンスは乏しい。一方、近年のヒト及び動物モデルを用いた研究からは、持続的な運動は末梢組織で細胞老化を減少させる働きを持つことが示されている。本テーマでは、運動療法の作用点の一つとしてこの抗細胞老化メカニズムに着目した。細胞老化の視点から運動療法の作用点を解明することにより、新たな創薬シーズの創出へと繋がることが期待される。

以上を背景とし、本テーマでは第四期中期計画期間において、以下の二つの項目について研究を

開始した。
①気腫病態における老化細胞の病理的役割の解明と老化細胞を標的とした COPD 治療モデルの確立
肺組織内の老化細胞が気腫病態を増悪化する機構に関しては不明である。本テーマの研究から、老化細胞が肺組織の再生に抑制性の作用を示し、その結果病態を増悪化することが示唆されていた。国外で COPD に対する細胞移植による再生治療が試みられているが、これまでに有効性は確認されていない。当該年度までの本テーマで行った動物モデルでの予備実験結果からは、老化細胞を除去（セノリシス）することにより細胞移植の効果が顕著に高くなることが示唆されている。これらの結果から、肺組織内の老化細胞は、SASP を介した非細胞自律的作用により、肺組織幹・前駆細胞の活性に影響を与えることが考えられた。当該年度は特に培養細胞をモデルとして用い、肺組織前駆細胞に対する老化細胞の影響について解析を行い、老化細胞の作用点を解明する手掛かりを得た。また、肺組織再生評価モデル動物を樹立し、老化細胞が肺再生に及ぼす影響について解析を開始した。また令和 8 年度に計画している実験「老化細胞と内在性肺組織前駆細胞の相互作用解析」に向け、大阪大学・旭川医科大学との共同研究により新規モデル動物作製を開始した。



②筋由来抗細胞老化因子の探索と運動療法作用点の解明
COPD を含む慢性疾患に対して運動療法が一定の効果を持つことが知られている。しかしながら運動療法の機構や作用点に関する生化学的なエビデンスは少ない。一方、ヒトや実験動物において運動トレーニングが、末梢組織における老化細胞の動態に影響を与えることが多く報告されている。本テーマでは筋細胞から分泌される因子（マイオカイン）に着目して解析を行い、当該年度までに本テーマが中心となって外部機関（至学館大学、国立長寿医療センター）と共同研究を行い、細胞老化に対して抑制性作用を示す因子を同定した。当該年度はその機能について詳細な解析を行うとともに、動物モデルを用いて細胞老化に関連した生理作用の評価系の確立を行った。またヒトサンプル（COPD 患者）における血中因子濃度と呼吸機能の相関について調べるために、COPD 患者血清の収集と解析を開始した。



2　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 気腫病態における老化細胞の病理的役割の解明と老化細胞を標的としたCOPD治療モデルの確立
これまでの研究から、肺組織内の老化細胞はSASPを介して非細胞自律的に組織再生を抑制し、病態を増悪化することが示唆された。当該年度は、この作用機序について明らかにし、本病態に対する新たな創薬・治療標的を発見することを目的として、細胞培養系を用いて老化細胞と肺組織幹・前駆細胞の相互作用について解析を行った。ヒト肺組織由来の正常線維芽細胞を継代培養

により細胞老化を誘導し、SASP因子を含む培養上清を得た。肺組織幹・前駆細胞として本テーマで樹立した肺スフェロイド細胞（LSC）を使用した。LSCを老化細胞培養上清、もしくは非老化細胞培養上清存在下で培養すると、老化細胞培養上清に曝露したLSCにおいては特定の上皮細胞への分化に異常が観察された。

先行研究で示されたLSCによる組織再生に重要な役割を持つ因子群の発現について調べたところ、再現性を持って複数の因子の発現が老化細胞によって影響を受けることが明らかになった。このうち、老化細胞により最も負に影響を受けた二つの因子は、同じ核内受容体の標的であることから、老化細胞はこの核内受容体に対して抑制的に働くことが示唆された。実際に同核内受容体のルシフェラーゼレポーターアッセイを行うと、老化細胞培養上清存在下では核内受容体の活性が著しく低下することを示す結果が得られた。さらにこの核内受容体の合成リガンドでLSCを刺激すると、分化マーカーの発現様式が変化したことから、同受容体を介したシグナルが肺組織幹・前駆細胞の活性に影響を与えることが強く示唆された。

また、生体における肺組織再生の評価を行うために、特定のリニエージをトレース可能な遺伝子改変マウスの作出を行った。成体において肺胞表面を構成する1型肺胞上皮細胞（ATI）は2型上皮（ATII）から供給される。また組織障害時においてATIIは気管支肺胞幹細胞（BASC）から供給される。肺組織再生時のBASC>ATII>ATIのリニエージトレースを行うために、ATIIとBASCのマーカー遺伝子であるSftpc遺伝子座からCre/ERT2を発現するマウス（Sftpc-Cre/ERT2）と、Rosa26遺伝子座からCre依存的にGFPを発現するRosa-LSL-GFPマウス、および肺組織の老化細胞除去が可能なARF-DTRマウスを交配し、ARF-DTR; Sftpc-Cre/ERT2; Rosa-LSL-GFPマウスを作出した。予備実験を行い、タモキシフェン投与によりこの系統のマウスでBASCとATIIにGFPを誘導可能であることを確認した（図１）。本年度より同マウスを用いて肺組織再生の定量評価系の確立と解析を行う。

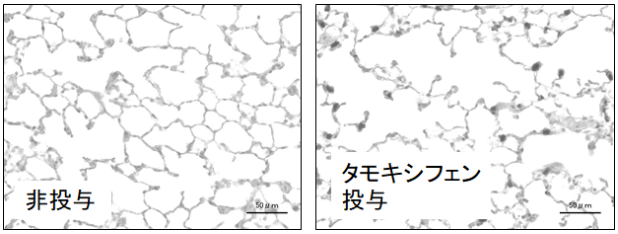


図１ Sftpc-Cre/ERT2; Rosa-LSL-GFP マウス肺組織を GFP 抗体を用いて免疫染色した.
（左）未処理肺組織.
（右）タモキシフェン処理を行ったマウス肺組織.

また、障害肺の再生にはBASCが特に重要な役割を持つことが知られているが、肺組織の老化や肺気腫病態との関連、また老化細胞との相互作用については不明である。肺組織の老化や肺気腫病態における障害肺再生機構の役割について調べるために、BASCを任意の時期に除去可能な遺伝子改変マウスの作出を行う。BASCは単一のマーカーで標識はできず、一般的にSftpcとScgb1a1遺伝子の共発現によって特徴づけることができる。これら遺伝子が共発現する細胞に致死遺伝子産物DTAを発現誘導可能な遺伝子改変マウスの樹立を行う。新たにScgb1a1遺伝子座にLSL-DTAをノックインしたマウスを作出し、既に入手している上記のSftpc-Cre/ERT2と交配し、コンディショナルに除去可能なマウスを樹立する。Scgb1a1-LSL-DTAはプラットフォーム支援の下、大阪大学・旭川医科大学と共同研究により作出を進めてきた。当該年度までにノックインES細胞を作成し個体の作出を進めてきたが、発生過程でDTAの発現リークにより目的のノックインマウスを得ることができなかった。そこでより強力なStop配列を追加挿入してターゲッティングベクターの再構築を行い、現在改めてノックインES細胞の樹立を開始した。

(2) 筋由来抗細胞老化因子の探索と運動療法作用点の解明

本テーマでは、運動による細胞老化抑制を仲介する因子の探索と、生体における細胞老化関連病態における同因子の作用について明らかにすることにより、新たな学術的発見と創薬シーズの創出を目的として研究を開始した。本研究に関し、当該年度までに細胞老化を抑制する活性を持ち、運動によって増加する筋細胞由来因子の探索を行い、一つの候補因子を同定した。

試験管内において筋細胞の培養上清は線維芽細胞の分裂寿命を延伸する作用を持つが、同因子に対する中和抗体存在下では、細胞老化抑制効果が著しく減弱することを確認した。また同因子組換えタンパク質で細胞を刺激すると増殖の促進とともに細胞老化マーカーの発現が低下した（図２）。これらの実験結果から、同因子は細胞老化に対する抑制活性を持つことが明らかになった。同因子に関する生化学的な解析を行

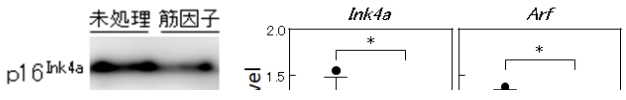


図２ 筋由来因子による細胞老化抑制. 線維芽細胞を同因子で刺激し、細胞老化マーカーの発現をイムノブロッティング（左）およびリアルタイム PCR（右）で解析した.

った先行研究において、受容体・細胞内シグナルが複数報告されていたが、線維芽細胞においてはこれらのシグナルの変化は認められなかった。一方でこの因子で刺激した線維芽細胞は、細胞内活性酸素種の減少が認められた。細胞内活性酸素種は、細胞老化を引き起こす要因であることから、同因子による分裂寿命延伸はこの作用を介することが示唆された。
また動物モデルを用いた解析も並行して行い、自発的運動を8週間行ったマウスでは、肺組織の老化細胞の減少とともに、血中レベルおよび骨格筋で同因子の発現が増加することを明らかにした。一方、若齢マウス（2~4ヶ月齢）と老齢マウス（2年齢）の骨格筋における同因子発現量を調べたところ、老齢マウスの組織では著しい発現低下が認められた。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜肺由来老化細胞と LSC 相互作用の解析＞
【センター内】老化制御・生体調節機能研究テーマ
＜ヒトサンプルの収集＞
【センター内】自立促進と精神保健・フレイル・筋骨格系の健康研究テーマ
＜筋由来因子の探索＞
【センター外】国立長寿医療研究センター
＜新規遺伝子改変動物の作製＞
【センター外】大阪大学、旭川医科大学
＜運動モデル樹立に関する共同研究、運動トレーニングサンプル収集＞
【センター外】至学館大学
＜肺組織リニエージトレースマウスの作出＞
【センター外】福井大学

論文・学会発表（令和5年度）

分子老化制御

１　論文（誌上発表）：原著

1. Ramalingam Manikandan, Jaehoon Kim, **Akihito Ishigami**, Joon Young Cho, Jung Hoon Kim, Joon Tark Han, Jaewon Lee, Seung-Cheol Chang. Dispersant-free supra single-walled carbon nanotubes for simultaneous and highly sensitive biomolecule sensing in ex vivo mouse tissues. *Carbon* 213, 118275, 2023. DOI: org/10.1016/j.carbon.2023.118275（査読あり）(IF 10.9, 2022)
2. Kohta Arakawa, Hirofumi Inoue, **Akihito Ishigami**, **Ayami Sato**, **Yuka Takino**, Miori Tanaka, Hiromu Morimoto, Nobuyuki Takahashi, Mariko Uehara. Release of SMP30 in extracellular vesicles under conditions of ascorbic acid deficiency is involved with acute phase response in ODS rat. *J Nutr Sci Vitaminol*, accepted, 2023.（査読あり）(IF 2.0, 2022)
3. Hirofumi Inoue, Yusaku Shimizu, Hiroto Yoshikawa, Kohta Arakawa, Miori Tanaka, Hiromu Morimoto, **Ayami Sato**, **Yuka Takino**, **Akihito Ishigami**, Nobuyuki Takahashi, Mariko Uehara. Resveratrol upregulates senescence marker protein 30 by activating AMPK/Sirt1-Foxo1 signals and attenuating H_2O_2-induced damage in FAO rat liver cells. *J Nutr Sci Vitaminol* 69(5), 388-393, 2023. DOI: 10.3177/jnsv.69.388. PMID: 37940580 (IF 2.0, 2022)
4. Thenmozhi Rajarathinam, Dinakaran Thirumalai, Sivaguru Jayaraman, Seonguk Yang, **Akihito Ishigami**, Jang-Hee Yoon, Hyun-Jong Paik, Jaewon Lee, Seung-Cheol Chang. Glutamate oxidase sheets-Prussian blue grafted amperometric biosensor for the real time monitoring of glutamate release from primary cortical neurons. *Int J Biol Macromol* 254 (Pt 2), 127903, 2023. DOI: 10.1016/j.ijbiomac.2023. PMID: 37939751 (IF 8.2 2022)
5. **Yuta Doshida**, Shinichi Hashimoto, Sadahiro Iwabuchi, **Yuka Takino**, Toshiyuki Ishiwata, Toshiro Aigaki, **Akihito Ishigami**. Single-cell RNA sequencing to detect age-associated genes that identify senescent cells in the liver of aged mice. *Sci Rep* 13, 14186, 2023. DOI: 10.1038/s41598-023-41352-6. PMID: 37648885 (IF 4.6, 2022)
6. Nana Fukuoka, Tatsuya Ishida, Kyota Ishii, **Ayami Sato**, Maria Lucia Zaidan Dagli, Nantiga Virgona, Tomohiro Yano. Resveratrol can induce differentiating phenotypes in canine oral mucosal melanoma cells. *J Vet Med Sci* 85(7), 721-726, 2023. DOI: 10.1292/jvms.22-0446. PMID: 37225449 (IF 1.2, 2022)
7. **Ayami Sato**, **Akihito Ishigami**. Effects of heated tobacco product aerosol extracts on DNA methylation and gene transcription in lung epithelial cells. *Toxicol Appl Pharmacol* 475, 116637, 2023. DOI: 10.1016/j.taap.2023.116637. PMID: 37499768 (IF 3.8, 2022)
8. **Yoshitaka Kondo**, Hitoshi Aoki, Masato Masuda, Hiroki Nishi, Yoshihiro Noda, Fumihiko Hakuno, Shin-Ichiro Takahashi, Takuya Chiba, **Akihito Ishigami**. Moderate protein intake percentage in mice for maintaining metabolic health during approach to old age. *GeroScience* 45, 2707-2726, 2023. DOI: 10.1007/s11357-023-00797-3. PMID: 37118349 (IF 5.6, 2022)
9. Masaki Takigawa, Hiroyuki Tanaka, Junichi Suwa, Tomoya Obara, Yohei Maeda, Mamoru Sato, Yoshitomo Shimazaki, Toshihisa Onoda, **Akihito Ishigami**, Toshihiro Ishii. Accuracy of therapeutic drug monitoring of teicoplanin at the onset of febrile neutropenia. *Medicina (Kaunas)* 59(4), 758, 2023. DOI: 10.3390/medicina59040758. PMID: 37109716 (IF 2.6, 2022)
10. Ying Li, Jian Dai, Fuyuki Kametani, Masahide Yazaki, **Akihito Ishigami**, Masayuki Mori, Hiroki Miyahara, Keiichi Higuchi. Renal function in aged C57BL/6J mice is impaired by deposition of age-related

apolipoprotein A-II amyloid independent of kidney aging. *Am J Pathol* 193(6), 725-739, 2023. DOI: 10.1016/j.ajpath.2023.03.002. PMID: 36965775 (IF 6.0, 2022)

11. Masaki Takigawa, Hiroyuki Tanaka, Hiromi Washiashi, Toshihisa Onoda, **Akihito Ishigami**, Toshihiro Ishii. Time to onset of gemcitabine-induced thrombotic microangiopathy in a Japanese population: a case series and large-scale pharmacovigilance analysis. *Cancer Diagn Progn* 3(1), 115-123, 2023. DOI: 10.21873/cdp.10188. PMID: 36632593
12. Tsuguno Yamaguchi, Yu Yamamoto, Kenji Egashira, **Ayami Sato**, **Yoshitaka Kondo**, Shuhei Saiki, Mitsuo Kimura, Takashi Chikazawa, Yukio Yamamoto, **Akihito Ishigami**, Shinya Murakami. Oxidative stress inhibits endotoxin tolerance and may affect periodontitis. *J Dent Res* 102(3), 331-339, 2023. DOI: 10.1177/00220345221138523. PMID: 36529984 (IF 7.6, 2022)

2 論文（誌上発表）：総説

1. **佐藤綾美**, **石神昭人** ： ビタミンCと呼吸器疾患. ビタミン,受理 (2023年10月)
2. **佐藤綾美**, **石神昭人** ： 老化指標DNAメチル化に影響を及ぼす因子の評価. 基礎老化研究, 受理 (2023年9月)
3. **石神昭人** ： 皮膚におけるビタミンCの働き.Bella Pelle 8, 219-222, 2023
4. **石神昭人** ： ビタミンCの不足は慢性閉塞性肺疾患(COPD)発症リスクを高める. 食と医療 25, 26-31, 2023
5. 佐藤安訓, 木村敏行, **石神昭人** ： 2006年から2021年における壊血病発症状況(その1)：日本では自閉スペクトラム症児を中心に壊血病が増加している. ビタミン 97, 131-137 (2023)
6. 佐藤安訓, 木村敏行, **石神昭人** ： 2006年から2021年における壊血病発症状況(その2)：世界では年齢に問わず壊血病が増加している. ビタミン 97, 138-143, 2023
7. 瀧川正紀, 石井敏浩, **石神昭人** ： 腎疾患とビタミンC. ビタミン 97, 144-146, 2023
8. **石神昭人** ： ビタミンC摂取と老化制御. 食品と科学 65, 18-20, 2023

3 学会発表（国際）

1. **Yoshitaka Kondo** ： Dietary macronutrient balance and metabolic health. Symposium Aging Science 2 “Nutrition and Aging”, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
2. **Ayami Sato** ： A redox-inactive analog of vitamin E as a potential anticancer agent. Symposium Aging Science 2 “Nutrition and Aging”, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
3. **Yuta Doshida**, Shinichi Hashimoto, Sadahiro Iwabuchi, **Yuka Takino**, Toshiyuki Ishiwata, Toshiro Aigaki, **Akihito Ishigami** ： Identification of age-associated genes in liver of aged mice. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
4. Kaori Nakagawa, Yuki Yoshii, Issa Furihata, Tatsunobu Nakagawa, **Yoshitaka Kondo**, Takuya Chiba ： *Wdr6* gene deletion suppresses fat accumulation in the $Lep^{ob/ob}$ mouse model of obesity and type 2 diabetes. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
5. **Ayami Sato**, **Akihito Ishigami** ： Effect of heated tobacco products aerosol extracts on DNA methylation in lung derived cells. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
6. **Yuka Takino**, Jaewon Lee, Shuichi Machida, **Akihito Ishigami** ： Vitamin C is essential for the maintenance of skeletal muscle functions. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
7. Noritsugu Osakabe, **Ayami Sato**, Jaewon Lee, Shuichi Machida, **Akihito Ishigami** ： Effect of ascorbate on histone demethylation during C2C12 cells differentiation. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
8. Tomoki Shimoda, **Yuta Doshida**, Jaewon Lee, **Akihito Ishigami** ： Effect of $p16^{INK4a}$ overexpression in primary cultured hepatocytes from young mice. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, PACIFICO Yokohama North, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14
9. **Yoshitaka Kondo** ： Moderate protein intake percentage in mice for maintaining metabolic health during approach to old age. The 1st Joint Research Symposium between Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology and Pusan National University 2023, Washington Hotel Yokohama Sakuragicho, Yokohama, Japan, 2023.6.15
10. **Ayami Sato**, **Akihito Ishigami** ： Effect of heated tobacco products aerosol extracts on DNA methylation in lung epithelial cells. The 1st Joint Research Symposium between Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology and Pusan National University 2023, Washington Hotel Yokohama Sakuragicho, Yokohama, Japan, 2023.6.15
11. **Yuta Doshida**, **Yuka Takino**, **Akihito Ishigami** ： Identification of age-associated genes in aged mouse livers. The 1st Joint Research Symposium between Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology and Pusan National University 2023, Washington Hotel Yokohama Sakuragicho, Yokohama, Japan, 2023.6.15
12. **Ayami Sato**, **Akihito Ishigami** ： Epigenetic changes due to smoking and aging: What is the impact of heated tobacco products? The 40th Korean Society for Gerontology and Korea-Japan Joint Symposium, Korea University, Seoul, Korea, 2023.7.13-15
13. **Ayami Sato**, **Akihito Ishigami** ： Effect of a heated tobacco product on gene expression in lung derived cells. The 2nd Joint Research Symposium between Pusan National University and Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology in 2023, Pusan National University, Busan, Korea, 2023.11.23-24
14. Noritsugu Osakabe, **Ayami Sato**, Jaewon Lee, Shuichi Machida, **Akihito Ishigami** ： Effect of vitamin C on epigenetic changes in C2C12 cells differentiation. The 2nd Joint Research Symposium between Pusan

National University and Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology in 2023, Pusan National University, Busan, Korea, 2023.11.23-24
15. Tatsuki Minowa, Noritsugu Osakabe, **Ayami Sato**, Jaewon Lee, Shuichi Machida, **Akihito Ishigami**：Regulation of myoblast proliferation and differentiation by vitamin C. The 2nd Joint Research Symposium between Pusan National University and Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology in 2023, Pusan National University, Busan, Korea, 2023.11.23-24
16. Tomoki Shimoda, Jaewon Lee, **Yoshitaka Kondo**, **Akihito Ishigami**：Effect of $p16^{INK4a}$ overexpression on the expression of senescence-associated genes in TIG-1 cells. The 2nd Joint Research Symposium between Pusan National University and Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology in 2023, Pusan National University, Busan, Korea, 2023.11.23-24

4　学会発表（国内）

1. 石神昭人：【特別講演】グルコノラクトナーゼ遺伝子破壊マウスを用いたビタミンCに関する諸問題へのアプローチ. 第168回ビタミンC研究委員会, 近畿大学東京センター, 東京, 2023.3.9
2. 佐藤安訓, 木村敏行, 石神昭人：日本における壊血病の患者背景の実態. 第168回ビタミンC研究委員会, 近畿大学東京センター, 東京, 2023.3.9
3. Yung-Li Hung, Ayami Sato, Yuka Takino, Akihito Ishigami, Shuichi Machida：Effects of resistance training on cellular senescence in aging skeletal muscle. 日本生理学会第100回記念大会,国立京都国際会館,京都,2023.3.14-16
4. Ayami Sato：Possibility of a new anti-aging mechanism of vitamin C. 日本生理学会第100回記念大会,国立京都国際会館,京都,2023.3.14-16
5. 川井大雅, 石神昭人, 佐藤綾美, 竹中麻子：ビタミンCまたはビタミンE欠乏が社会的敗北ストレスによるマウスの不安様行動増加に及ぼす影響. 日本農芸化学会2023年度大会,オンライン開催,広島,2023.3.14-17
6. 石神昭人：【招待講演】SMP30遺伝子欠損マウスを用いたビタミンCの機能,疾患研究. 第8回ビタミンK研究コンソーシアム会議, 芝浦工業大学豊洲キャンパス, 東京, 2023.4.26
7. 荒川航太, 井上博文, 石神昭人, 佐藤綾美, 滝野有花, 森本洋武, 高橋信之, 上原万里子：アスコルビン酸欠乏レベルの違いが抗老化タンパク質 Senescence marker protein-30 (SMP30)発現のエクソソーム分泌に与える影響の解析. 第77回日本栄養・食糧学会大会, 札幌コンベンションセンター, 札幌, 2023.5.12-14
8. 石神昭人：【モーニングセミナー】皮膚におけるビタミンCの働き-皮膚でのエピジェネティクス研究も含めて-. 第122回日本皮膚科学会総会, パシフィコ横浜, 横浜, 2023.6.4
9. 中川香里, 吉井幸, 降旗一冴, 中川辰信, 小松利光, 下川功, 近藤嘉高, 千葉卓哉：Wdr6遺伝子の欠損は肥満症モデル*Lep*$^{ob/ob}$マウスの脂肪蓄積量とその分布を変化させる.第23回抗加齢医学会総会, 東京国際フォーラム, 東京, 2023.6.9-11
10. 田村元, 滝野有花, 石神昭人：アスコルビン酸の濃度と溶存酸素が保存安定性に及ぼす影響. 第169回ビタミンC研究委員会, 東北大学大学院農学研究科本館会議室１, 東京, 2023.6.16
11. 佐藤安訓, 木村敏行, 石神昭人：自閉スペクトラム症児を中心として我が国で増加しつつある壊血病. 日本ビタミン学会第75回大会, 東北大学青葉山コモンズ, 仙台, 2023.6.17-18
12. 近藤嘉高：高齢期に向けたmetabolic healthの維持に最適なタンパク質摂取割合の検討.シンポジウムS5「食事・栄養と健康長寿」, 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
13. 中川香里, 吉井幸, 降旗一冴, 中川辰信, 近藤嘉高, 千葉卓哉：肥満症モデルである*Lep*$^{ob/ob}$マウスにおけるWdr6遺伝子の欠損は脂肪蓄積を抑制する.日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
14. 佐藤綾美, 石神昭人：喫煙によるエピジェネティクス変化と老化 -加熱式たばこの影響は？. シンポジウムS2「バイオインフォマティクス・生体変容」, 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
15. 土志田裕太, 橋本真一, 岩淵禎弘, 滝野有花, 石渡俊行, 相垣敏郎, 石神昭人：ドキソルビシンによる老化誘導が老化関連遺伝子の発現に及ぼす影響. 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
16. 佐藤綾美, 石神昭人：老化指標DNAメチル化に影響を及ぼす因子の評価. 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
17. 下田友貴, 土志田裕太, Jaewon Lee, 石神昭人：マウス肝臓実質細胞における$p16^{INK4a}$過剰発現による影響. 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
18. 賦舩翔太, 洪永豊, 佐藤綾美, 滝野有花, 石神昭人, 町田修一：加齢および性差が骨格筋リボソーム量に及ぼす影響. 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
19. 洪永豊, 佐藤綾美, 滝野有花, 石神昭人, 町田修一：筋力トレーニングによる筋サテライト細胞の増加に及ぼす加齢および性差の影響. 日本基礎老化学会第46回大会, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023.6.16-18
20. 土志田裕太, 板橋美津世, 滝野有花, 佐藤綾美, 湯村和子, 丸山直記, 武井卓, 石神昭人：高齢の慢性腎臓病患者は血中ビタミンC濃度が低く,血液透析によりさらに減少する. TOBIRA第11回研究交流フォーラム, ソラシティカンファレンスセンター内ソラシティホール, 東京, 2023.7.28
21. 刑部紀亜, 佐藤綾美, Jaewon Lee, 町田修一, 石神昭人：C2C12細胞の筋分化,及びエピジェネティクスに対するビタミンCの効果.第9回日本筋学会学術集会, 千里ライフサイエンスセンター, 大阪, 2023.8.18-19
22. 佐藤綾美：喫煙とビタミンCに関する最新の知見. 第３回ビタミンC研究委員会シンポジウム, インテリジェントロビー・ルコ, 東京, 2023.9.1
23. 佐藤綾美, 刑部紀亜, 箕輪樹, 町田修一, 石神昭人：骨格筋分化におけるビタミンCのエピジェネティック作用. 第170回ビタミンC研究委員会, ろうかん, 島根, 2023.10.27
24. 土志田裕太, 橋本真一, 岩淵禎弘, 滝野有花, 石渡俊行, 相垣敏郎, 石神昭人：シングルセル解析を用いた老齢マウス肝臓での老化肝細胞の指標となる遺伝子の同定. 第96回日本生化学会大会, 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡B館, 福岡, 2023.10.31-11.2
25. 刑部期亜, 石神昭人：C2C12細胞の筋分化におけるビタミンCのエピジェネティック作用. 都立大バイオコンファレンス2023, 東京都立大学, 東京, 2023.11.17

26. 箕輪樹, 石神昭人 : ビタミンCによる筋芽細胞の増殖・分化制御機構の解明. 都立大バイオコンファレンス2023, 東京都立大学, 東京, 2023.11.17
27. 佐藤綾美, 刑部紀亜, 箕輪樹, 町田修一, 石神昭人 : 筋芽細胞の分化におけるビタミンCの作用. 第21回日本機能性食品医用学会総会, 琉球大学, 沖縄, 2023.12.9-10

5 著書等
なし

6 特許
なし

7 その他
1. **土志田裕太** : 令和5年度 東京都健康長寿医療センター 理事長研究奨励賞 受賞, 2023.6
2. **土志田裕太** : Outstanding Presentation Award, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 受賞, 2023.6
3. **佐藤綾美** : 第33回日本老年学会総会 優秀演題賞 受賞, 2023.6
4. **佐藤綾美** : 日本基礎老化学会奨励賞 受賞, 2023.6

生体調節機能
1 論文（誌上発表）：原著
1. Fujita Y、 Shinkai S、 Taniguchi Y、 Miura Y、 Tanaka M、 Ohsawa I、 Kitamura A、 Ito M. Association Between Serum GDF15 Concentration and Total Mortality in Community-Dwelling Japanese Older Populations: The Involvement of Renal Dysfunction. ***J Gerontol A Biol Sci Med Sci*** 78:1701-1707、 2023. （IF : 5.1、2022)
2. Iketani M、 Sakane I、 Fujita Y、 Ito M、 Ohsawa I. H_2-induced transient upregulation of phospholipids with suppression of energy metabolism. ***Med Gas Res*** 13:133-141、 2023. (IF : 2.9、2022)
3. Aokage T、 Iketani M、 Seya M、 Meng Y、 Ageta K、 Naito H、 Nakao A、 Ohsawa I. Attenuation of pulmonary damage in aged lipopolysaccharide-induced inflammation mice through continuous 2 % hydrogen gas inhalation: A potential therapeutic strategy for geriatric inflammation and survival. ***Exp Gerontol*** 180:112270、 2023. (IF:3.9、 2022)
4. Shimamura A、 Ohsawa I、 Mitsuishi T. Multiple human papillomavirus-associated plantar epidermoid cysts。 ***Eur J Dermatol*** 33:693-694、 2023. (IF:2.5、 2022)
5. Usami T、 Ohsawa I、 Suga Y、 Mitsuishi T. Human papillomavirus type 94-associated flat warts and review of reported cases. ***J Dermatol*** 51:96-97、 2024. (IF:3.1、 2022)
6. Oba K、 Ishikawa J、 Tamura Y、 Fujita Y、 Ito M、 Iizuka A、 Fujiwara Y、 Kodera R、 Toyoshima K、 Chiba Y、 Tanaka M、 Araki A. Serum Growth Differentiation Factor 15 Levels Predict the Incidence of Frailty Among Patients with Cardiometabolic Diseases. ***Gerontology.*** 70:517-525、 2024. (査読あり) (IF : 5.6、2023)
7. Yano D、 Ohsawa I、 Suga Y、 Mitsuishi T. Unusual clinical presentation of extragenital condyloma acuminatum. ***J Dermatol*** 2024. doi: 10.1111/1346-8138.17184 (IF:3.1、 2022)

2 論文（誌上発表）：総説
なし

3 学会発表（国際）
1. Ruri Sugiyama、 Junya Hanaguri、 Harumasa Yokota、 Akifumi Kushiyama、 Sakura Kushiyama、 Takako Kikuchi、 Tsutomu Igarashi、 Masumi Iketani、 Ikuroh Ohsawa、 Seiyo Harino、 Satoru Yamagami、 Taiji Nagaoka。 Oral intake of hydrogen water improves retinal blood flow dysregulation in response to flicker stimulation and systemic hyperoxia in type 2 diabetic mice. ARVO 2023、 New Orleans、 LA、 USA、 2023.4.23-27
2. Masumi Iketani、 Masaki Komatsu、 Yasunori Fujita、 Hideo Kawaguchi、 Ikuroh Ohsawa。 Administration of hydrogen-rich water prevents vascular aging of the aorta in models of mouse atherosclerosis. IAGG-AOR2023、 Yokohama、 2023.6.12-14
3. Yasunori Fujita、 Masumi Iketani、 Masafumi Ito、 Ikuroh Ohsawa。 Inhibition of mitochondrial translation extends replicative lifespan in human fetal lung fibroblasts. IAGG-AOR2023、 Yokohama、 2023.6.12-14
4. Akane Yokoyama、 Masaki Komatsu、 Masumi Iketani、 Yasunori Fujita、 Masafumi Ito、 Hideo Kawaguchi、 Ikuroh Ohsawa. Hydrogen-rich water-induced suppression of antigen transport into Peyer’s parches of the small intestine. IAGG-AOR2023、 Yokohama、 2023.6.12-14
5. Takuya Omura、 Taichi Fukunaga、 Yoshihiro Noda、 Yasunori Fujita、 Ikuroh Ohsawa、 Kazuhiro Shigemoto. Discovery of changes in mitochondrial function and morphology with muscle aging。 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023、 Yokohama、 2023.6.12-14
6. Kyojiro Kawakami、 Yasunori Fujita、 Taku Kato、 Keitaro Umezawa、 Hiroki Tsumoto、 Yuri Miura、 Yasuo Katagiri、 Tatsuhiko Miyazaki、 Kosuke Mizutani、 Masafumi Ito。 Development of a detection system for prostate-specific membrane antigen-expressing extracellular vesicles and its potential for the diagnosis of prostate cancer and renal cell carcinoma。 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023、 Yokohama、 2023.6.12-14
7. Kazuhito Oba、 Joji Ishikawa、 Yoshiaki Tamura、 Yasunori Fujita、 Masafumi Ito、 Remi Kodera、 Kenji Toyoshima、 Yuko Chiba、 Masashi Tanaka、 Atsushi Araki。 High serum growth differentiation factor 15 (GDF15) levels were associated with incidence of frailty in patients with cardiometabolic disease。 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023、 Yokohama、 2023.6.12-14

４　学会発表（国内）

1. 藤田泰典、池谷真澄、伊藤雅史、大澤郁朗　統合ストレス応答を介したミトコンドリア翻訳抑制の細胞老化抑制効果　第46回日本分子生物学会年会、神戸市、2023。12。6-8。
2. 池谷真澄、青景聡之、河田光弘、藤田泰典、伊藤雅史、大澤郁朗　分子状水素はMMP-9上昇を抑制し大動脈解離の進行を抑制する　第46回日本分子生物学会年会、神戸市、2023。12。6-8。
3. 立花麻恵、三木悠未、池谷真澄、藤田泰典、渡辺信博、堀田晴美、山田憲彦、川口英夫、大澤郁朗　水素ガス吸入による脳梗塞血栓溶解（rt-PA）療法時の出血抑制　第46回日本分子生物学会年会、神戸市、2023。12。6-8。
4. 横山茜、上田優依、池谷真澄、藤田泰典、伊藤雅史、川口英夫、大澤郁朗　高濃度水素水による小腸パイエル板での食物アレルゲン取り込み抑制とアナフィラキシー症状の緩和　第46回日本分子生物学会年会、神戸市、2023。12。6-8。
5. 上田優依、横山茜、池谷真澄、藤田泰典、伊藤雅史、川口英夫、大澤郁朗　水素水投与による消化管ムチン層の薄層化とムチン分解菌の活性化　第46回日本分子生物学会年会、神戸市、2023。12。6-8。
6. 大澤郁朗。指定講演（招待講演）：分子状水素による神経疾患制御。第16回認知症の早期発見、予防・治療研究会、東京、2023。9。24。
7. 大澤郁朗、藤田泰典。老化細胞クリステのリアルタイム・イメージング。LE2023、川越、2023。9。15-16。
8. 池谷真澄、青景聡之、河田光弘、藤田泰典、伊藤雅史、大澤郁朗　水素ガス吸引はマウスにおいて大動脈解離の進行を抑制する 第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
9. 横山茜、上田優依、池谷真澄、藤田泰典、伊藤雅史、川口英夫、大澤郁朗　水素水による小腸パイエル板での食物アレルゲン取り込み抑制はアナフィラキシー症状を軽減する 第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
10. 上田優依、横山茜、池谷真澄、藤田泰典、伊藤雅史、川口英夫、大澤郁朗　水素水投与が消化管ムチン分解菌に及ぼす影響 第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
11. 立花麻恵、三木悠未、池谷真澄、藤田泰典、渡辺信博、堀田晴美、山田憲彦、川口英夫、大澤郁朗　脳梗塞血栓溶解（rt-PA）療法時の脳出血に対する水素ガス吸入効果検証 第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
12. 上村尚美、井内勝哉、五十嵐勉、大澤郁朗、仁藤智香子、清家正博、太田成男。 酸化ストレスモニタリングマウスを用いた糖尿病モデルマウスの酸化ストレス解析と分子状水素の効果。 第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
13. 細井(小林)舞香、五十嵐勉、大澤郁朗、五十嵐徹、 亀谷修平、 池田康博、 宮川世志幸、酒井真志人、岡本史樹。 水素水飲用による網膜色素変性モデルマウスにおける視細胞保護効果。第12回日本分子状水素医学生物学会大会、東京、2023。8。28-29。
14. 大澤郁朗、藤田泰典。ランチョンセミナー（招待講演）：複製老化とミトコンドリア。第75回日本細胞生物学会大会、奈良、2023。6。28-30
15. 藤田泰典、池谷真澄、田中雅嗣、伊藤雅史、大澤郁朗　ヒト胎児線維芽細胞の複製老化過程に生ずるエネルギー代謝変容　第46回日本基礎老化学会大会、横浜市、2023。6。16-18。
16. 池谷真澄、青景聡之、河田光弘、藤田泰典、大澤郁朗　大動脈解離モデルマウスでの水素ガス投与による抗炎症効果検証　第46回日本基礎老化学会大会、横浜市、2023。6。16-18。
17. 川上恭司郎、藤田泰典、加藤卓、梅澤啓太郎、津元裕樹、三浦ゆり、片桐恭雄、宮崎龍彦、大澤郁朗、水谷晃輔、伊藤雅史　細胞外小胞上の前立腺特異的膜抗原（PSMA）測定系の構築と前立腺がんおよび腎がんにおける有用性の検討　第46回日本基礎老化学会大会、横浜市、2023。6。16-18。

５　著書等

1. 大澤郁朗編著　第12回日本分子状水素医学生物学会大会要旨集. 2023

６　特許

なし

７　その他

1. 大澤郁朗.分子状水素による疾患制御の可能性.京都大学高分子化学セミナー、オンライン、2023.4.3
2. 大澤郁朗.分子状水素医学。神奈川県テレストローク機器体験及び意見交換会、横浜、2023.6.13
3. 池谷真澄、 青景聡之、 河田光弘、 藤田泰典、 大澤郁朗. 大動脈解離モデルマウスにおける水素ガス投与の効果検証.第 11 回 TOBIRA 研究交流フォーラム、東京、2023.7.28.
4. 藤田泰典、新開省二、谷口優、三浦ゆり、田中雅嗣、大澤郁朗、北村明彦、伊藤雅史.域在住高齢者の血中 GDF15 濃度と総死亡リスクの関連性　第 11 回 TOBIRA 研究交流フォーラム、東京、2023.7.28.

老化細胞

１　論文（誌上発表）：原著

1. Kawaguchi K., Asai A., Mikawa R., Ogiso N., Sugimoto M. Age-related changes in lung function in National Center for Geriatrics and Gerontology Aging Farm C57Bl/6N mice. Exp. Animals 17. 173-182. 2023.

２　論文（誌上発表）：総説

1. Sugimoto M. Targeting Cellular Senescence: A Promising Approach in Respiratory Diseases. Geriatr Gerontol Int. 24 S1, 60-66, 2024.
2. 津島博道, 杉本昌隆　肺組織における細胞老化　医学のあゆみ　Vol.287 No.5, 2023.（査読なし）
3. 廣瀬美嘉子, 津島博道, 杉本昌隆　老化と肺疾患　日本臨牀　Vol.82 No.1, 66-71, 2024.（査読なし）

３　学会発表（国際）

1. Masataka Sugimoto Pathophysiological roles of cellular senescence in pulmonary aging and diseases. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 13, 2023.

2. Hiromichi Tsushima and Masataka Sugimoto Muscle-derived factor mediates exercise-induced senosuppression. The 1st Joint Research Symposium between Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology and Pusan National University 2023, Yokohama, June 15, 2023.
3. Hiromichi Tsushima, Azusa Asai, Tohru Hosoyama, Hirobumi Tada, Masataka Sugimoto Characterization of muscle-derived seno-suppressor IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 14, 2023.
4. Masataka Sugimoto, Hiromichi Tsushima, Mikako Hirose Senescent Cells and Emphysema: A Path to Lung Recovery. JSPS A3 Foresight Meeting, Osaka, Jan 11, 2024.
5. Hiromichi Tsushima, Masataka Sugimoto Muscle-derived factor mediates exercise-induced senosuppression. JSPS A3 Foresight Meeting, Osaka, Jan 11, 2024.

４　学会発表（国内）

1. 杉本昌隆　肺組織の老化・疾患と細胞老化　第67 回日本薬学会関東支部大会，シンポジウム，東京，2023年9月16日
2. 杉本昌隆　呼吸器疾患における細胞老化の病理的役割と老化細胞を標的とした治療モデルの確立　第33回日本老年学会,シンポジウム，横浜，2023年6月17日
3. 杉本昌隆　呼吸器疾患における老化細胞の病理的役割：セノセラピーモデルの確立へ　第23回日本抗加齢医学会シンポジウム，東京，2023年6月9日
4. 津島博道，浅井あづさ，細山　徹，多田敬典，杉本昌隆　筋由来Seno-suppressorの機能および運動モデルにおける動態解析　第23回日本抗加齢医学会，東京，2023年6月11日
5. 津島博道，浅井あづさ，細山　徹，多田敬典，杉本昌隆　マウス骨格筋由来抗細胞老化因子（seno-suppressor）の解析　第33回日本老年学会，横浜，2023年6月17日

５　著書等

なし

６　特許

なし

７　その他

1. 津島博道　日本基礎老化学会奨励賞　第46回日本基礎老化学会大会　2023年6月17日
2. 津島博道　優秀演題賞　第33回日本老年学会総会　2023年6月16日

――――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

老化脳神経科学研究チーム

チームリーダー：遠藤昌吾

研究チームの概要・目的

脳神経系は、痛みや排泄のような基本的な機能に加え運動や記憶のような高次の機能をも支えている。それゆえ、加齢等による脳神経系の機能障害は、患者の日常生活に極めて重大な問題を引き起こす。様々な生理機能を支える脳神経の役割は不明な点が多く残され、その役割解明は疾病の治療のために重要である。

基盤研究グループに属する本研究チームでは、「脳・神経系に生じる障害を克服して、超高齢化社会におけるサクセスフルエイジングを達成する」ことを目的として、老化研究や疾病研究の基盤となる成果、そして、その臨床応用も視野に入れて研究を行っている。

今期は、新規テーマ・**老化神経生物学テーマが新設され、西宗テーマリーダーと研究員2人（井上ー記憶神経科学から異動、瀧川）**で研究が開始された。また、**記憶神経科学には木村哲也副部長**が加わり認知症関連のバイオマーカー研究が開始された。

<u>自律神経機能</u>

I. 自律神経機能の老化とその制御の解析ー自律神経機能の解明を進めることで薬物に代替しうる又はより有効な非薬物療法を生み出すことを目指す。

II. 認知機能に関わる脳内コリン作動性ニューロンの機能とその制御の解明ー認知機能に重要な大脳皮質や海馬、嗅球にアセチルコリンを放出する前脳基底部コリン作動性ニューロンの機能の老化過程、およびコリン作動性神経系を賦活する臨床応用可能な手法の開発とそのメカニズムの解明を目指す。

<u>記憶神経科学</u>

I. 認知機能の維持・改善に関する研究ー社会系コホート研究の成果を動物に置き換えた研究を行うためのモデル構築を行い、記憶機能の低下防止や回復に寄与する基礎研究を行う。

II. 運動記憶の制御とリハビリテーションへの応用ー効率的なリハビリテーションを目指した基礎研究および運動記憶に関与する新しい分子機構の解明をおこなう。

III. 認知症バイオマーカーとしての細胞外タウオリゴマーの研究ーアルツハイマー病におけるタウオリゴマーとNMDA受容体の研究、薬物候補、バイオマーカーの探索を行う。

<u>老化神経生物学（新規テーマ）</u>

I. 加齢や神経変性疾患に伴うシナプス機能低下の解析ー老化やALSでは、神経筋接合部の維持に必須なシナプス分化因子ラミニンβ2が減少し、脱神経が起こる。そこで、間葉系幹細胞を用いてラミニンβ2と神経機能を維持する方法を開発し、臨床応用を目指す。

II. 加齢にともなう運動機能低下の研究ー加齢による運動機能低下に、脳のミトコンドリア機能と運動野の神経活動レベルの低下が関与する事を見出した。さらに、機能性食品コエンザイムQ投与で加齢マウスの運動機能と神経活動レベルを維持できる方法を発見した。その分子機構の解明を試み、臨床応用を目指す。

III. 加齢や精神・神経疾患に伴うシナプス機能障害の分子機序解析ー抑制性シナプス機能を新開発イメージセンサーで計測し、シナプス蛋白質を超解像顕微鏡STEDを用いて解析し、神経機能低下を起こす変性メカニズム解明する。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

自律神経機能

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
自律神経機能の解明に基づくフレイルの克服に向けた研究					
(1) 骨格筋	→	→	→		
(2) 松果体	→	→	→	→	
(3) 嗅覚	→	→	→	→	→
(4) 血糖調節	→	→	→	→	→

脳内コリン作動系機能などの解明に基づく認知症の克服に向けた研究 （5）脳内環境 （6）嗅覚刺激					

記憶神経科学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
I. 認知・心理的フレイルに関する研究	認知的フレイルモデルの作成と解析 歩行機能評価系の確立	同左 同左	同左 cAMP系強化薬の効果の解析（フレイルモデル・歩行）	同左 記憶の担い手としてのグリアの解析	同左
II.小脳が認知機能において果たす役割とその応用に関する研究	老化に伴う小脳機能の解析	同左	運動による認知機能回復の解析（小脳障害モデル、老化動物）	同左	同左
III. 認知症バイオマーカーとしての細胞外Tauオリゴマーの研究 認知症診断のための血液バイオマーカー検出システムの開発 認知症治療の為の抗体試薬の開発	血液バイオマーカー検出システムの運用 中和抗体検索システムの開発	同左 中和抗体検索システムによる創薬シーズの絞り込み	血液バイオマーカー検出システムの拡張 ヒト抗体の作成	拡張した血液バイオマーカー検出システムの運用 安全性試験および体内動態の確認	血液バイオマーカー検出システムを用いた中和抗体の小規模臨床試験 同左

老化神経生物学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
（研究項目１）加齢や神経変性疾患に伴うシナプス機能低下の解析と介入方法の開発	ヌクレオチドによるラミニンβ2発現上昇の機序の解明		ヌクレオチドによる運動機能改善に関わる骨格筋の機序の解析	ヌクレオチドによる運動機能改善に関わる運動神経の機序の解析	
（研究項目2）脳内物質補充によるシナプス可塑性調節を介した	歩行機能の加齢変化と水溶化	老化に伴う運動機能低下の性差	水溶化CoQ_{10}効果の非臨床試験	水溶化CoQ_{10}効果の非臨床試験	水溶化CoQ_{10}臨床試験実施の準備

老化に伴う運動・認知機能低下の改善法の検討	CoQ_{10}効果の解析	解析 水溶化CoQ_{10}効果の薬理学的解析 中年マウス海馬LTP解析	（1） 海馬LTPの加齢変化と脳内物質補充による可塑性調節(水溶化CoQ_{10})	（2） 海馬LTPの加齢変化と脳内物質補充による可塑性調節(NMN)	海馬LTPの加齢変化と脳内物質補充による可塑性調節(BDNF)
（研究項目3）創薬展開を指向した老化や精神・神経疾患の脳シナプス解析	GABA蛍光プローブのスクリーニングと特許出願準備 GABAシナプス近傍へのラベル化用タンパク質の発現・精製 超解像イメージングによるアクティブゾーンタンパク質の定量解析	GABA蛍光プローブ–ラベル化用タンパク質複合体のGABAシナプス近傍へのラベル化の評価とGABA応答性評価	GABA蛍光イメージングによる野生型培養神経細胞のGABA放出特性の解析 GABA蛍光プローブの薬効評価への応用可能性の検証	GABA蛍光イメージングによる野生型培養神経細胞のGABA放出特性の解析 超解像イメージングによるアクティブゾーンタンパク質の定量解析	GABA蛍光イメージングによる病態を模した培養神経細胞のGABA放出特性の解析 超解像イメージングによるアクティブゾーンタンパク質の定量解析

自律神経機能

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
堀田　晴美	研究部長	研究全体の総括、研究項目(1)・(5)責任者
内田　さえ	研究副部長	研究項目(3)・(6)責任者
渡辺　信博	研究員	研究項目(2)責任者、(5) 分担者
守屋　正道	非常勤研究員	研究項目(5)分担者

1　第四期中期計画における研究成果の概要

自律神経機能の解明に基づくフレイルの克服に向けた研究

自律神経は全身の臓器に分布し多岐にわたる役割を持つが、未解明な点も多い。高齢者の健康長寿に向けて、毎日の生活を支える自律神経の働きについて主に動物を用いた基礎研究を行い、その成果の応用に向けて一部臨床研究も行う。

(1) 交感神経活動が骨格筋の収縮・緊張におよぼす作用

内臓や血管を調節するのが自律神経、骨格筋を調節するのが運動神経と説明されることが多いが、実は自律神経は、骨格筋や運動神経の働きの調節にも関わることが最近わかってきた。第3期に明らかにした骨格筋収縮と筋交感神経とのフィードバック関係を老齢ラットで調べ、論文発表[原著3]とプレス発表「老化による筋力低下に、交感神経が関わること」を行った。また、第1-2期に交感神経反射抑制作用を明らかにした皮膚刺激ツールが慢性肩こりに及ぼす影響を他施設と共同で解析し、論文発表[原著2]とプレス発表「皮膚へのやさしい刺激が肩こり症状を緩和する」を行った。さらに、骨格筋と交感神経との関係の老化メカニズムを追究するため、他テーマ（老化神経生物)と連携し､新たにイメージングと生理機能を組み合わせた研究の準備を進めている。

(2) 体性感覚刺激を用いた松果体機能の調節

メラトニン分泌に及ぼす圧刺激と温度刺激の影響の解明が進んだ。さらにメカニズムの解明にむけ、他チーム（プロテオーム）と連携し松果体細胞外のカテコラミンの測定系を確立しつつある。

(3) 嗅覚障害と関連する自律神経・運動系の究明

社会系チーム（社会参加･社会貢献）と連携し､高齢者を対象とした調査実施（2024年1月予定）の準備を行った。

脳内コリン作動系機能などの解明に基づく認知症の克服に向けた研究

加齢に伴い増える神経変性疾患アルツハイマー病（AD）は、認知症の症状が現れる20年以上前から始まる脳のアミロイドβ(Aβ)蓄積が引き金となって生じると考えられている。しかし近年、Aβ蓄積以前より脳血流に異常がみられることが示され、脳血流への関心が高まりつつある。私達は、強力な脳血流調節機能を持つ脳内コリン作動系について研究を進めている。

(4) 脳内環境の恒常性維持と脳内コリン作動系

インスリン抵抗性による認知機能障害に脳内α7型ニコチン受容体が関わることを、他施設との共同研究で示した[原著4]。また、第3期に明らかにした人参養栄湯の脳血流に及ぼす作用のメカニズムを明らかにするため、脳内部の細動脈の直径変化を調べ、収縮を緩和することを示した[投稿中]。角膜への簡易的短時間の刺激がコリン作動系の活性化に大きく関与することを見出した[投稿準備中]。

(5) 高齢者の認知機能低下を予防する嗅覚刺激の開発

嗅覚刺激による嗅球血流反応とα4β2型ニコチン受容体刺激による増強作用が老齢ラットで低下することを他施設との共同研究で示し、論文発表した［原著1]。さらに、三叉神経刺激による血流反応、およびその反応に及ぼすニコチン受容体刺激の影響の解明が進んだ。

2　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 交感神経活動が骨格筋の収縮・緊張におよぼす作用

①ラット後肢の筋力の維持には、筋収縮をきっかけとした交感神経の反射性活動が寄与すること

を第3期に明らかにした。今回、筋収縮と交感神経の間のこのフィードバック機構が、老化によって低下する可能性を調べたところ、老化ラットでは筋力における交感神経の寄与の程度が、若いラットよりも少なくなっていることがわかった。この作用には老若に関わらずアドレナリンαおよびβ受容体が関与し、筋萎縮が進むほど、運動神経機能を助ける交感神経の寄与率が低下していた。その一方で、交感神経が単独でもたらすα受容体を介した筋緊張の増加（運動神経とは関係ない作用）が老化ラットで増大していた。加齢に伴う運動機能の低下には、交感神経によるサポートの低下と交感神経による筋緊張の発生の増加の両方が関係していると考えられる。骨格筋と交感神経の間のフィードバック機構の加齢による低下は、高齢者のサルコペニアを加速する要因となりうる。収縮筋と交感神経の間のフィードバック機構の低下は、筋萎縮の程度と相関していたため、運動による筋萎縮の予防や回復が、筋と交感神経の間のフィードバック機能の回復に役立つかもしれない。交感神経の興奮のみで生じる筋緊張の増加は、筋硬直や深部痛の発症に関係している可能性がある。
②マイクロコーンによる皮膚へのやさしい刺激が脊髄オピオイド系を介して疼痛情報の伝達を妨げることを第1-2期に明らかにしてきた。今回、NHK特集番組において、慢性的な肩こりを有する人を対象におこなった調査のデータを解析し、皮膚へのやさしい刺激が首・肩回りの痛みや不快感をやわらげるとともに、首や肩が動く範囲を増加させることを明らかにした。痛みや不快感という主観的な症状と、首や肩関節・肩甲帯の動き（計12種類）の可動範囲という客観的な症状を、マイクロコーンを絆創膏で貼り付けるセルフケアを2週間実施する前後で比較した。痛みや不快感は平均7から2まで低下した。12種類の動きのうち、8種類の可動範囲が増加した。以上より、マイクロコーンを用いた皮膚へのやさしい刺激は、肩こりに対する安全かつ有効なセルフケア方法になる可能性を示した。

(2) 体性感覚刺激を用いた松果体機能の調節
　松果体は内分泌器官のひとつで、睡眠調節等の作用をもつメラトニンを分泌する。本研究課題では麻酔下ラットを用いて実験をおこなった。マイクロダイアリシス法を用いて松果体組織の灌流液を採取し、ELISA法にて液中に含まれるメラトニン濃度を定量化した。さらに、体性感覚刺激として、背部をさすったり後肢を圧迫したりする機械刺激や、体幹部を加温または冷却する温度刺激を与え、松果体からのメラトニン分泌に対する影響を検討した。灌流液中に含まれるメラトニン濃度は、体性感覚刺激により変化しうることが分かった。具体的には、ラットの後肢を圧迫する刺激によりメラトニン濃度が増加または減少する一方、背部をさする刺激では変化しなかった。温度刺激（特に冷却刺激）においては、メラトニン濃度は一貫して減少することが分かった。

(3) 嗅覚障害と関連する自律神経・運動系の究明
　高齢者の嗅覚障害には認知機能低下に加えて自律神経系や運動系との関連があると予想される。本研究ではこれ迄の研究成果を発展させ、新たに嗅覚障害と心循環調節障害・転倒リスクとの関連を解明することを目的とする。本研究の神経基盤となる基礎研究では、嗅覚統合中枢の嗅皮質のコリン作動系の役割について検討を進めている。高齢者を対象とした調査研究では、嗅覚・認知機能・自律神経機能（心循環）・運動機能（重心動揺）を調査する具体的な方法の検討を重ね、来年１月の調査実施の準備が整った。
認知機能の維持に重要な脳内コリン作動系が嗅球に加えて、嗅覚統合中枢である嗅皮質のアセチルコリン放出を高める結果を基礎研究で見出している。高齢者を対象とした調査研究(予行練習)では、急な起立時の転倒リスクに関連する心循環調節機能（自律神経機能）を心拍連続測定から計測しうる結果を得ている。

(4) 脳内環境の恒常性維持と脳内コリン作動系
①インスリン抵抗性による認知機能障害が早期に認められる新しいアルツハイマー病モデルマウス（APP/IR-dKI）において、体性感覚刺激に対する皮質血流応答を測定した。対照マウスでは、ムスカリン受容体遮断薬（atropine）またはα7型ニコチン受容体遮断薬（MLA）によって皮質血流反応が低下した。しかし、ADモデルマウスでは、MLAによる抑制効果は認められなかった。MLAは対照マウスでは認知機能も抑制したが、ADモデルマウスでは抑制しなかった。アミロイドβの負荷は対照マウスとADモデルマウスで差がなかった。したがって、インスリン抵抗性は、α7型ニコチン受容体のダウンレギュレーションによって引き起こされる認知機能障害と大脳皮質血流の調節障害を誘導することを明らかにした。
②人参養栄湯は、食欲不振や虚弱の改善を目的に用いられてきた漢方薬で、近年ではアルツハイマー病患者の認知機能低下を軽減することが報告された。我々はこれまでに、この人参養栄湯が脳内コリン作動系を賦活化し、大脳皮質血流を調節することを明らかにしてきた。今年度は、多

光子顕微鏡を用いて麻酔下マウスの大脳皮質血管をイメージングし、安静時血管径および虚血再灌流時の血管径変化に対する人参養栄湯の作用を検討した。安静時血管径については、大脳皮質表面を走行する動脈と実質内を穿通する動脈を同時にイメージングし、血管径を計測した。蒸留水（コントロール）を胃内投与すると大脳皮質実質内の動脈径が減少するのに対し、人参養栄湯溶液を投与した場合では、この動脈径の減少が防がれることが分かった。一方、大脳皮質表面の動脈径に対しては、蒸留水・人参養栄湯、いずれの溶液を胃内投与した場合でも血管径は変化しなかった。虚血再灌流時の血管径変化については、大脳皮質実質内の動脈をイメージングした。蒸留水あるいは人参養栄湯溶液を胃内投与した後に、片側の総頚動脈を一過性に（1分間）閉塞した後、解放するモデルで実験をおこなった。その結果、脳虚血中に大脳皮質実質内の動脈径が増大したが、動脈径変化に薬液間（蒸留水vs.人参養栄湯）に違いはなかった。一方、閉塞解放後（再灌流時）の動脈径については、蒸留水投与後は急速に閉塞前の動脈径に戻ったが、人参養栄湯投与後は動脈径が緩徐に戻ることが分かった。

③角膜は目と外界との境界面に位置し、その表面はAδとC線維の神経支配によって密に覆われているため、本質的に侵害受容性があり角膜は有害な刺激を敏感に検出可能である。そこで、侵害刺激となる角膜への刺激による大脳皮質血流増加反応を計測し解析した。この簡易的かつ短時間で脳血流が応答する刺激を応用し、加齢やアルツハイマー病に伴う脳内アセチルコリンの機能障害（認知症など）の評価として実用可能かも併せて検討している。von Freyフィラメントによる角膜刺激は、大脳皮質血流を増加し血圧を上昇させた。上部胸髄横切断により血圧上昇はほぼ消失させた状態でも、大脳皮質血流は増加した。atropineの全身性投与は両側性に、角膜刺激による大脳皮質血流増加を有意に減少させた。さらに、前脳基底部マイネルト核へのmuscimol微量注入は投与側の、脳血流増加を有意に減少させた。以上の結果は、角膜刺激はコリン作動性神経の活性化を介して大脳皮質血流に影響を及ぼすことを明らかにした。

(5) 高齢者の認知機能低下を予防する嗅覚刺激法の開発

嗅覚情報は大脳へ直接連絡する唯一の感覚であることから、認知機能低下の早期発見に加えて予防においても注目されている。本課題では嗅覚刺激が脳血流に与える影響とコリン作動系による制御を調べた。匂いの受容に関わるに二つの神経系（嗅神経系と三叉神経系）で嗅覚刺激の影響に差異があるかの検討が進捗している。

芳香の受容に関わる嗅神経系と、身の危険を察知する刺激臭の受容に関わる三叉神経系では、脳血流及ぼす影響が異なる知見が得られた。具体的には嗅神経系を介する嗅覚刺激は嗅球血流を増加させるのに対して、三叉神経系の刺激は嗅球血流には影響せず、新皮質血流を増加させることが分かった。同反応に対してニコチン性コリン作動系が促進性に制御することも見出されてきた。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜自律神経機能の老化とその制御の解析＞

【センター内】老年病態研究チーム（運動器医学)、生体調節機能、老化神経生物、高齢者健康増進事業支援室

【センター外】人間総合科学大学、ＮＨＫ，日本健康寿命延伸協会

【センター内】自立促進と精神保健研究チーム（認知症と精神保健)、福祉と生活ケア研究チーム（医療・介護システム)、実験動物施設

【センター外】佐久大学、人間総合科学大学、筑波技術大学、東京慈恵会医科大学、国立長寿医療研究センター、富山大学

記憶神経科学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
遠藤昌吾	研究部長	第四期研究全体の総括、研究項目II責任者
木村哲也	専門副部長	研究項目III責任者
柳井修一	研究員（兼務）	研究項目I責任者
大塚智子	技術員	研究項目IIIのサポート

１　第四期中期計画における研究成果の概要

Ⅰ．認知・心理的フレイルに関する研究

早期の認知症発見と予防の観点から、適切な介入を行うことで脳機能を維持・改善すること、あるいは､発症を先送りできる認知･心理的フレイルの状態を改善することが重要視されている。ヒトの認知的フレイル、認知症を模倣する複数のモデルマウスを確立するとともに、フレイルや認知症に関連する血液バイオマーカーの探索を行い、認知症モデルマウスの総合評価システムを構築する。これらのモデルマウスは、介入や創薬に極めて有用であるとともに、社会科学系と共有するフレイル予防のための課題を遂行するうえでの基盤となる。さらに、このモデルマウスを利用して、既存薬を応用した認知・心理的フレイルへの早期介入の有効性を明らかにする。

II. 小脳が認知機能において果たす役割とその応用に関する研究

小脳のみに障害を受けたほぼ全ての患者で認知機能障害が観察され、この病態はCCAS(Cerebellar Cognitive Affective Syndrome; 小脳性認知情動症候群)として注目されている。そこで、認知機能において従来は無視されてきた「小脳」に焦点を絞り、加齢に伴う小脳神経回路機能の低下と認知機能の低下の関係を明らかにし、小脳の認知機能における役割を解明する。そして、運動が小脳神経回路機能の改善を介して、加齢に伴う認知機能低下を予防・改善することを明らかにする。

III. 認知症バイオマーカーとしての細胞外Tauオリゴマーの研究

アミロイド繊維前駆体がNMDA受容体に作用しこれを活性化して神経細胞毒性を示すことが、アミロイドオリゴマー（オリゴマー；小型の繊維前駆体の総称）仮説の基盤となっている。レカネマブはアミロイド繊維前駆体を認識する抗体であり、その抗認知症作用はアミロイドオリゴマー仮説の正当性を示した。
一方で、海馬のNMDA受容体の活性化はシナプス抑圧(long-term depression, LTD)に伴いpT181、pT217などのリン酸化Tauを産生する。たとえば、pT181Tauはレカネマブ投与により減少することから、これらのリン酸化Tauはアミロイド繊維前駆体の毒性を反映するバイオマーカーと想定されている。

木村は**NMDA受容体結合性Tauオリゴマーを初めて発見し、それが**NMDA受容体を刺激する機能を有することから、認知症原因分子の有力候補と想定した。そして、このオリゴマとNMDA受容体と結合を阻害して毒性を減弱させるTau抗体を作成した。

しかし、Tau製薬は競争的な分野であり、**NMDA受容体結合性Tauオリゴマーの毒性とアルツハイマー病態との関係を示すために、**新たなバイオマーカー候補として認知症患者を含むヒト高齢者でTauの挙動を解明する必要が指摘された。そのために、**Tauオリゴマーを含む多くのTau種を多次元的に検出する血液解析システムの構築**を開始した。発見したTauオリゴマーが**血液バイオマーカーとして認知症進行の診断に利用**することを新たな目標にしている。

ヒトを用いた血液解析データにおけるNMDA受容体結合性**Tauオリゴマー動態解析が完了させる。**その上で、抗体を共同開発した企業と相談し製薬企業へのアウトソーシングを検討中である。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

Ⅰ. 認知・心理的フレイルに関する研究

認知･心理的フレイルの新たなモデルマウスとして､3系統のマウスを用いた研究が進行中である。

野生型C57BL/6Jメスマウス　－　ヒトでは**老化の様態及び認知症治療薬の効果に性差が存在する**と知られているが、**メスマウスの老化に関する知見は限られている。**通常老化モデルマウスであるC57BL/6Jのオスマウスで構築したテストバッテリー（Yanai & Endo, ***Front Aging Neurosci,*** 2021）を用いて3、12、18ヶ月齢のC57BL/6Jメスマウスの行動評価を行った。

ICER-OEマウス　－　本マウスは、ヒトで認められる**年齢依存的cAMPシグナル伝達系の遺伝子発現機能低下を加速させて再現するモデルマウスである。**実験群を体外受精で作出するために必要な凍結資源（凍結胚）の作製、蓄積を進めている。また、加齢に伴う歩行変化を、より自然に近い「歩き方」で解析するランニングホイールは製作を終えている。

通常老化マウス　－　また､第3期の基礎研究の発展研究として､cAMPの作用を強化する薬物**シロスタゾール（cAMPの分解酵素（PDE）阻害薬）が加齢により引き起こされた記憶障害を改善する**ことを見出した(Yanai and Endo, ***Front Phamacol***, 2022)。

メスマウスの行動解析は順調に進んでおり、通常老化モデルマウス（C57BL/6J）の加齢関連様態の性差が明らかになりつつある。

cAMPシグナル伝達系の年齢依存的機能低下を時間を短縮して再現するマウスモデル（ICER-OE）は

凍結資源の作製段階中である。

II. 小脳が認知機能において果たす役割とその応用に関する研究

身体的リハビリテーションや運動学習に重要な役割を果たす小脳依存性記憶とその記憶を支える神経可塑性とその分子機構に着目して研究を進めてきた。**ミリ秒の神経活動を数十年間維持される記憶へと変換されるためには、記憶に関与するシグナル系や神経回路を長期間維持して、長期記憶を形成する分子機構が必要である。**長期記憶は生物が外界の刺激や環境に対応する術を与える。

*Aplysia*や*Drosophila*ではcAMP依存性キナーゼが、哺乳類の海馬ではCa^{2+}/CaM依存性キナーゼやホスファターゼカスケードが、長期記憶に伴い基質リン酸化を長時間維持して生理機能をもたらすことが明らかにされてきた。しかし、小脳依存性記憶において長時間維持され、長期記憶を形成するための分子機構は不明であった。

これまで**加齢に伴う活性酸素種（ROS, reactive oxygen species）増加は記憶低下の要因とされてきたが、その実態は不明であった。**悪玉と考えられていた**ROSが生理活性分子として働くことから、コントロールされないROS産生がROS依存性記憶を障害するという仮説のもと、研究を進めてきた。**

第3期に、活性酸素種（ROS, reactive oxygen species）が、小脳依存性の記憶、神経可塑性（LTD）に関わること、特に長期記憶に関わることを明らかにした。記憶や可塑性を支える分子機構として、ROSとNO（一酸化窒素）を神経活動の同時性感知機構(coincident detector)とした**長寿命シグナル分子8-ニトロ-cGMPが関わること、8-ニトロ-cGMPによるcGMP依存性キナーゼ（PKG）による長期キナーゼ活性化**でPKGの基質であるG-substrateが長期にリン酸化されることが、シグナル系を長期間維持する、ひいては、長期記憶に重要であることを見出した。

また、一般にROS消去剤として服用される抗酸化物質・ビタミンCは運動学習に影響しないが、膜蓄積性のビタミンEの投与は運動学習を阻害することから、**高度な運動を行うアスリートや身体リハビリテーション中の高齢者などにおいては、投与する抗酸化物質の注意深い選択と利用が必要であることが示唆された。**

ほぼ全ての記憶は、長期記憶に変換されて初めて動物の行動に影響を及ぼし、環境適応が可能となる。これまで、**アメフラシやDrosophilaの神経系ではcAMP依存性キナーゼの持続的活性化**が、また、ヒトを含む脊椎動物の陳述記憶を司る**海馬ではCa^{2+}/CaM kinase IIの持続的活性化**が、長期記憶を支える分子基盤であることが明らかにされている。一方、小脳依存性記憶ではcAMP系やCa^{2+}/CaM系は大きな役割を果たしていない。今回見出した、**ROS - NO - 8-ニトロcGMP系は、cGMPシグナルを長期間維持して、小脳の長期記憶の形成・維持を制御する、これまで見出されていない新機構である**と考えられる。

III. 認知症バイオマーカーとしての細胞外Tauオリゴマーの研究

これまでに、以下の研究・開発を行ってきた：

・新規AD(アルツハイマー病)治療薬として抗Tauオリゴマー抗体の開発

・血中の超微量Tauオリゴマー計測のシステム開発

作成した新規AD治療薬（抗Tauオリゴマー抗体）の臨床試験には以下条件が必要である；

a) MCI(軽度認知障害)あるいはADの状態推移を定量的に評価する方法の開発、

b) a)に基づく正確な薬剤の導入次期の決定、

c) 薬効の評価基準の設定、

今年度は、a)**血液バイオマーカー用いた非正常検体の同定手法を確立**した。**センターお達者検診コホート由来の血漿の分析**を行い、非正常なバイオマーカー変化を表す分散図（Aß42残差・Tau残差相関地図：詳細は「具体的な取り組み」を参照）を作成することで、**これまで報告されてきたADの特徴を有する非正常者群の抽出に成功し、健常者コホート検体群は、ADの特徴を有する検体群を約５％程度含む**ことを明らかにした（**図6**）。今後、MCIやAD検体を含むIRIDEバイオバンク検体を解析することで、上で得られた健常者群の変化を表す「**Aß42残差・Tau残差相関地図（地図）**」を拡張し、さらに、リン酸化TauやTauオリゴマーの変化を重装することで、認知症形成過程を可視化するバイオマーカー「地図」を作成中である。この「地図」は、より正確な抗認知症薬の導入タイミング、および、薬効の評価基準を提供する。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜認知・心理的フレイル＞

【センター内】社会参加と地域保健研究チーム（社会参加と社会貢献）、神経画像研究チーム（PET薬剤科学）

＜小脳が認知機能において果たす役割とその応用＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学）
【センター外】京都大学、防衛医科大学
＜認知症バイオマーカーとしての細胞外Tauオリゴマーの研究＞
【センター内】IRIDE（コホート研究部門、バイオロジー研究部門）
【センター外】キシダ化学株式会社

老化神経生物学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
西宗　裕史	研究部長	テーマ全体の総括、研究項目(1)の責任者 外部研究費申請、研究のデータ収集・分析、論文執筆と投稿、学会発表
井上　律子	研究員	研究項目(２)の責任者 外部研究費申請、研究のデータ収集・分析、論文執筆と投稿、学会発表
瀧川　健司	研究員	研究項目(３)の責任者 外部研究費申請、研究のデータ収集・分析、論文執筆と投稿、学会発表
冨岡　直子	非常勤職員	研究のデータ収集・分析、学会発表
鈴木　友子	非常勤職員	研究データ収集・分析
竹野　光太郎	契約研究員	研究データ収集・分析
中野　友貴	連携大学生	研究のデータ収集・分析、学会発表

１　第四期中期計画における研究成果の概要

本研究テーマの長期目標は、老化や神経変性疾患による運動、神経機能低下の克服である。この長期目標達成のために、仮説「神経系の情報伝達を担うシナプスの機能低下や変性脱落が、サルコペニア、フレイル、認知機能低下の原因機序に関与する」を立て、老化や神経変性疾患におけるシナプスの機能解析と、維持・治療方法の開発を行っている。

研究課題「加齢や神経変性疾患に伴うシナプス機能低下の解析と介入方法の開発」では、抗老化作用を示すヌクレオチド（生体内代謝産物）が神経筋接合部の神経支配や運動機能を改善する機序を解析し、加齢による運動機能低下を予防・改善する介入方法の開発を目指している。
老化したヒトやマウスでは、神経筋接合部で脱神経が起こり運動機能が低下するが、運動機能を維持する対処方法は確立されていない。ヌクレオチド(NMN)は多くの生物種に存在し体内でも生成されるが、加齢に伴い減少する。このヌクレオチドは体内で補因子ニコチンアミドアデニンジヌクレオチドに変換され、ミトコンドリアのATP合成過程や、代謝制御・老化に関するサーチュインの活性化に関与する重要なヌクレオチドである。このヌクレオチドは抗老化作用物質として注目されており、臨床試験によりヒトが安全に摂取できる事がここ数年で判明した。しかし、このヌクレオチドが加齢による運動機能低下を改善するか、またその作用機序については明らかになっていない。
我々は、老化神経筋接合部ではシナプス形成因子ラミニンβ2の発現量減少に起因する脱神経が起こることを見出した。また、ヌクレオチドが骨格筋ミトコンドリア機能を改善し、神経筋接合部の脱神経を抑制し、運動機能を改善することを見出した。このヌクレオチドの作用機序に、ラミニンβ2の発現量維持が関与していることも見出した。令和5年度は、このヌクレオチドの作用機序に運動神経のシナプス形成タンパク質群が重要であることを明らかにできた。
研究課題「脳内物質補充によるシナプス可塑性調節を介した老化に伴う運動・認知機能低下の改善法の検討」では、老化に伴って脳内量が減少し、ミトコンドリア機能や神経可塑性に関連する物質を補充することにより、運動・認知機能の加齢性低下を軽減・改善することを目指している。
老化初期に相当する中年動物において、脳内物質補充による運動機能低下の改善を既に実証している。特に中年期においては皮質運動野の神経活動の加齢性低下が運動機能に及ぼす影響は大き

いと考えられ、老化に伴い減少するコエンザイムQ_{10}（CoQ_{10}）を中年マウスに飲水投与することで動作の緩慢さが改善した。この改善に脳ミトコンドリア機能と運動野の神経活動の改善が寄与することを明らかにした。
令和5年度は、臨床応用の可能性を検討しやすい運動指標として歩行機能に着目し、水溶化CoQ_{10}飲水投与による中年および高齢動物の歩行機能の改善効果を検証している。また行動実験と生化学または電気生理実験を組み合わせることで、運動指標とそれ以外の指標の相関を検討するためのデータ取得を試みている。
加齢に伴いCoQ10が減少することはヒトの臓器においても知られている。しかし、運動機能とCoQ_{10}の関係については病態に関連した先行研究があるのみで、高齢者についての情報は乏しい。CoQ_{10}補充による介入の臨床応用を目指す上で、日本人高齢者の血中CoQ_{10}濃度とフレイルに関連が深い運動機能についての基礎データが必要である。フレイル・筋骨格系の健康研究テーマと共同研究を行い、お達者検診参加者の血漿中CoQ_{10}濃度と運動機能の相関を解析中である。
研究課題「創薬展開を指向した老化や精神・神経疾患の脳シナプス解析」では、抑制性シナプスと老化や精神・神経疾患の病態との関連性を明らかにするために、機能と構造の側面から解析し、抑制性シナプスを標的とした新薬の開発に展開することを目指している。第三期中期計画では、(1) GABA結合タンパク質を蛍光色素で標識したGABA蛍光プローブ開発の概念実証となる機能的解析技術、(2) シナプスタンパク質のSTED超解像イメージング技術による構造的解析技術の確立までを達成した。そこで本年度は、(1) シナプスのGABA放出の検出に適用可能な新規GABA蛍光プローブの開発と、(2) STED画像からシナプスタンパク質の発現量を定量化する方法の確立に取り組んだ。(1) に関しては、プロテオーム研究テーマの梅澤研究員と東京大学大学院医学系研究科の廣瀬教授との連携によって効果的に推進し、以下の成果を上げた。はじめに、GABA結合タンパク質上に標識する蛍光色素の最適な部位をスクリーニングすることで、4色の新規GABA蛍光プローブを取得した。次に、本蛍光プローブの蛍光シグナルが高いpH安定性を有することを示し、既存のGABA蛍光プローブであるiGABASnFR（Nat. Methods 16, 763-770 (2019)）のpH不安定性の問題を解決することができた。これらの成果をもとに、本蛍光プローブを発明とした特許「GABA検出用蛍光プローブ及びその製造方法. 出願番号2023-141250」を出願した。さらに、本蛍光プローブをGABAシナプス近傍に配置するラベル化技術の確立の準備として、GABAシナプスの細胞膜上に存在する分子と結合する候補タンパク質を選定し、大腸菌発現系を用いて候補タンパク質の最適な発現・精製条件の最適化を完了した。(2) に関しては、STED超解像イメージングによって撮影したマウス脳切片における抑制性シナプスのシナプスタンパク質の発現量を蛍光強度のピーク値で定量化する方法を確立した。今後、(1)、(2) の技術を用いた脳シナプス解析によって、抑制性シナプスと老化や精神・神経疾患の病態との関連性が明らかになることが期待される。

2　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 加齢や神経変性疾患に伴うシナプス機能低下の解析と介入方法の開発
加齢による運動機能低下の機序と機能維持を目指す介入方法を研究している。抗老化作用を示すヌクレオチドの経口投与により老化マウスの骨格筋ミトコンドリア機能活性化、神経筋接合部の神経支配改善、握力上昇を見出した。このヌクレオチドの作用機序が神経筋接合部のラミニンβ2発現上昇によること、そしてシナプス形成分子メカニズムの蛋白質が協働している事を見出した。
発生段階に神経筋接合部を形成する分子機序が、老化神経筋接合部の維持に必須であり、その欠如が加齢による変性と脱神経の原因機序になっていることを発見した。ヌクレオチドの抗老化作用機序は、先述の分子機序を改善していること見出し、ヌクレオチド研究でこれまで知られていない作用原理を明らかにできた。

(2) 脳内物質補充によるシナプス可塑性調節を介した老化に伴う運動・認知機能低下の改善法の検討
中年・高齢マウスの歩行機能および運動野神経活動に対する水溶化CoQ_{10}飲水投与による改善効果を検証している。中年動物においてCoQ_{10}投与による歩行速度の改善が確認できたので、効果が大きい歩行指標について詳細な解析を行っている。また、健常高齢者の血漿中CoQ_{10}濃度と運動機能の相関を解析する共同研究を行い、臨床応用を目指す上での基礎データ取得を開始した。
中年動物に水溶化CoQ_{10}を飲水投与すると動作の緩慢さが改善するが、この改善に脳ミトコンドリア機能と皮質運動野のシナプス可塑性が介する神経活動の改善が寄与することを論文発表した。さらに、水溶化CoQ_{10}投与により中年動物の歩行機能が改善し、歩行速度が有意に速くなることを示した。また高齢動物において、運動野の神経応答が中年よりさらに減弱していることを初めて電気生理学的に示すデータを得た。

(3) 創薬展開を指向した老化や精神・神経疾患の脳シナプス解析

本年度は、(1) 新規GABA蛍光プローブの開発と、(2) STED画像からシナプスタンパク質の発現量を定量化する方法の確立に取り組んだ。(1) に関しては、GABA結合タンパク質上に標識する蛍光色素の最適な部位をスクリーニングすることで、4色（緑、黄、橙、赤）の新規GABA蛍光プローブを取得した。次に、本蛍光プローブの蛍光シグナルが高いpH安定性を有することを示す学術的知見を取得し、既存のGABA蛍光プローブであるiGABASnFR (Nat. Methods 16, 763-770 (2019)) のpH不安定性の問題を解決することができた。これらの成果をもとに、本蛍光プローブを発明とした特許「GABA検出用蛍光プローブ及びその製造方法. 出願番号2023-141250」を出願した。さらに、本蛍光プローブをGABAシナプス近傍に配置するラベル化技術の確立の準備として、GABAシナプスの細胞膜上に存在する分子と結合する候補タンパク質を選定し、大腸菌発現系を用いて候補タンパク質の最適な発現・精製条件の最適化を完了した。(2) に関しては、STED超解像イメージングによって撮影したマウス脳切片における抑制性シナプスのシナプスタンパク質の発現量を蛍光強度のピーク値で定量化する方法を確立した。これらの成果によって、本年度の研究計画の全3項目を達成した。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜加齢や神経変性疾患に伴うシナプス機能低下の解析と介入方法の開発＞
【センター内】自律神経機能研テーマ
【センター外】国立長寿医療研究センター研究所、大阪大学、ウィスコンシン大学、サウスウェスタン大学、カンザス大学、株式会社明治ホールディングス
＜脳内物質補充によるシナプス可塑性調節を介した老化に伴う運動・認知機能低下の改善法の検討＞
【センター内】記憶神経科学テーマ、フレイル・筋骨格系の健康研究テーマ、プロテオーム研究テーマ、生体調節機能研究テーマ
＜創薬展開を指向した老化や精神・神経疾患の脳シナプス解析＞
【センター内】プロテオーム研究テーマ
【センター外】東京大学

論文・学会発表（令和5年度）

自律神経機能

１　論文（誌上発表）：原著

1. Uchida S, Moriya J, Morihara D, Kagitani F. Nicotinic cholinergic regulation of olfactory bulb blood flow response in aged rats. ***Journal of Physiological Sciences***, 73:1, 2023（査読あり）(IF: 2.3, 2022)
2. Watanabe N, Nara M, Suzuki S, Sugie M, Yamamoto T, Hotta H. Effects of gentle mechanical skin stimulation on subjective symptoms and joint range of motions in people with chronic neck and shoulder discomfort. ***Journal of Physiological Sciences***, 73:4,2023（査読有）(IF：2.3, 2022)
3. Hotta H, Iimura K, Watanabe N, Suzuki H, Sugie M, Shigemoto K. Sympathetic modulation of hindlimb muscle contractility is altered in aged rats. ***Scientific Reports,*** 13(1):7504, 2023（査読有）(IF：4.6, 2022)
4. Izuo N, Watanabe N, Noda Y, Saito T, Saido TC, Yokote K, Hotta H, Shimizu T. Insulin resistance induces earlier initiation of cognitive dysfunction mediated by cholinergic deregulation in a mouse model of Alzheimer's disease. ***Aging Cell,*** 00:e13994, 2023（査読有）(IF：7.8, 2022)
5. Mutoh N, Moriya M, Xu C, Kato K, Arai S, Iwabuchi N, Tanaka M, Jinghua Y, Itamura R, Sakatani K, Warisawa S. Bifidobacterium breve M-16V regulates the autonomic nervous system via the intestinal environment: A double-blind, placebo-controlled study. ***Behavioural Brain Research,*** 5:460:114820, 2024（査読有）(IF: 3.4, 2021)
6. Takara H, Suzuki S, Satoh S, Abe Y, Miyazato S, Kohatsu Y, Minakata S, Moriya M. Association between early mobilization and functional outcomes in patients with aneurysmal subarachnoid hemorrhage: A Multicenter, retrospective, propensity score-matched study. ***Neurocritical Care***, in press, （査読有）(IF: 3.5, 2022)
7. Moriya M, Hu L, Sakatani K, Kitahra M. Estimation of cognitive impairment in chronic pain patients and characteristics of estimated mild cognitive impairment. ***Frontiers in Neurology***, 15:1344190, 2024（査読有）(IF: 3.4, 2022)

２　論文（誌上発表）：総説

1. 内田さえ、守屋樹羅、森原大智：認知機能に関わる脳内アセチルコリンの働き，保健の科学，65(4). 273-278, 2023
2. 堀田晴美、鈴木はる江. 体性―自律神経反射メカニズムとその高齢者医療・介護への応用、自律神経， 61(1)， 51-55, 2024
3. Uchida, S., Kagitani, F. Influence of age on nicotinic cholinergic regulation of blood flow in rat's olfactory bulb and neocortex. ***Journal of Physiological Sciences***, 74:18, 2024（査読有）(IF：2.3, 2022)

3　学会発表（国際）

1. Watanabe N, Noda Y, Nemoto T, Iimura K, Shimizu T, Hotta H. Influence of amyloid β deposition around the pial artery on cerebral artery response during transient ischemia in Alzheimer's disease model mice, Neurovascular Unit Conference 2023, "US-Japan joint workshop on the Neurovascular Unit" 2023年1 月6-9日, 東京
2. Uchida S, Moriya J, Morihara D, Kagitani F. The basal forebrain cholinergic system linking olfaction and cognitive functions: from basic studies to clinical application. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, 2023.3.19-20.
3. Moriya J, Morihara D, Kagitani F, Uchida S. Effect of basal forebrain stimulation on extracellular acetylcholine release and blood flow in the olfactory cortex. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, 2023.3.19-20.
4. Morihara D, Moriya J, Kagitani F, Uchida S. Analysis of cerebral blood flow responses to olfactory stimulation. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, 2023.3.19-20.
5. Watanabe N, Iimura K, Hotta H. Japanese traditional medicine, ninjin'yoeito influences cerebral cortical blood flow via muscarinic acetylcholine receptors. The International Association of Geriatrics and Gerontology (IAGG)/Asia-Oceania regional congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
6. Hotta H, Watanabe N, Suzuki H. Sympathetic modulation of hindlimb muscle contractility in young and aged rats. The International Association of Geriatrics and Gerontology (IAGG)/Asia-Oceania regional congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
7. Uchida S, Moriya J, Morihara D, Kagitani F. Aging changes of alpha4beta2 nicotinic receptor function in the olfactory bulb. The International Association of Geriatrics and Gerontology (IAGG)/Asia-Oceania regional congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
8. Moriya J, Morihara D, Kagitani F, Uchida S. Basic research on cholinergic function that links olfaction and dementia: Effect of basal forebrain stimulation on extracellular acetylcholine release in the olfactory cortex. The International Association of Geriatrics and Gerontology (IAGG)/Asia-Oceania regional congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
9. Morihara D, Moriya J, Kagitani F, Uchida S. Basic research on cholinergic function that links olfaction and dementia: Analysis of blood flow responses in the olfactory bulb and neocortex to trigeminal olfactory stimulation. The International Association of Geriatrics and Gerontology (IAGG)/Asia-Oceania regional congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
10. Hotta H. Neurogenic control of brain vasculature. Symposium: The impact of microvascular aging on brain neural functions: Experimental and theoretical approaches, 12th World Congress of Microcirculation, Beijing, China, 2023.9.20-24
11. Hotta H. Somato-autonomic reflex possibly related to the skeletal muscle homeostasis. International Scientific Acupuncture and Medicine Symposium 2023, Jeju, Korea, 2023.10.6-8.

4　学会発表（国内）

1. 森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ．嗅覚刺激による脳血流反応の解析，第17回環境生理学プレコングレス，京都，2023.3.13.
2. 堀田晴美，飯村佳織，渡辺信博，鈴木はる江．Sympathetic modulation of skeletal muscle contractility is altered by age and sex，第100回日本生理学会，京都，2023.3.14-16.
3. 渡辺信博，堀田晴美．Influence of somatosensory stimulation on melatonin secretion from the pineal gland in urethane-anesthetized rats，第100回日本生理学会，京都，2023.3.14-16.
4. 内田さえ．Aging of olfaction and cognitive function．100周年記念シンポジウム「加齢に伴う生体機能低下と抗老化への多角的アプローチ」，第100回日本生理学会，京都，2023.3.14-16.
5. 鍵谷方子，内田さえ．Regulation of ovarian estradiol secretion and change in autonomic functions by somatosensory stimulation，シンポジウム「臓器連関の基礎と臨床」，第100回日本生理学会，京都，2023.3.14-16.
6. 守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子，内田さえ．Physiological function of basal forebrain cholinergic fibers projecting to the olfactory cortex．第100回日本生理学会，京都，2023.3.14-16.
7. 堀田晴美．咀嚼・嚥下が健康長寿に果たす役割．シンポジウム：食事・栄養と健康長寿，第46回日本基礎老化学会大会，横浜，2023.6.16-18.
8. 内田さえ，守屋樹羅，森原大智，志村まゆら，鍵谷方子．大脳新皮質血流のニコチン性コリン作動性調節．第46回日本基礎老化学会大会，横浜，2023.6.16-18.
9. 渡辺信博，奈良毬那，鈴木志穂子，杉江正光，山本高穂，堀田晴美．肩こり症状および頸肩部の可動域に対する皮膚刺激ツールを用いたセルフケアの効果．第46回日本基礎老化学会大会，横浜，2023.6.16-18.
10. Uchida S, Moriya J, Shimura M, Kagitani F. The influence of age on nicotinic cholinergic regulation of blood flow responses in the olfactory bulb and neocortex. 第46回日本神経科学大会，仙台，2023.8.1-4.
11. 立花麻恵，三木悠未，池谷真澄，藤田泰典，渡辺信博，堀田晴美，山田憲彦，川口英夫，大澤郁朗．脳梗塞血栓溶解（rt-PA）療法時の脳出血に対する水素ガス吸入効果検証．第12回分子状水素医学生物学会，東京，2023.8.28-29.
12. 守屋正道．急性期くも膜下出血後の早期歩行獲得に向けた急性期リハビリテーション戦略（くも膜下出血後の転機を予測する-機械学習モデルによる分析-）．第21回日本神経理学療法学会学術大会，横浜．2023. 9. 9.
13. 渡辺信博，守屋正道，堀田晴美．坐骨神経刺激に伴う大脳皮質血流増加に対する漢方薬・人参養栄湯の作用．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
14. 守屋正道，渡辺信博，堀田晴美，高橋由香里，加藤総夫．侵害刺激誘発皮質部位特異的脳血流増加における前脳基底部マイネルト核の関与．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
15. 鈴木志穂子，渡辺信博，奈良毬那，杉江正光，山本高穂，堀田晴美．慢性的な頸肩不快感を有する人の自覚症状と関節可動域に及ぼす軽微な機械的皮膚刺激の効果．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
16. 杉江正光，渡辺信博，鈴木はる江，堀田晴美．老齢ラットにおける後肢筋収縮力の交感神経性調節の変化．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.

17. 泉尾直孝，渡辺信博，野田義博，斉藤貴志，西道隆臣，横手幸太郎，堀田晴美，清水孝彦．インスリン抵抗性はアルツハイマー病モデルマウスにおいてアセチルコリン神経系異常を伴って早期の認知機能障害を引き起こす． 第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
18. 内田さえ，守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子．嗅球のニコチン受容体機能の老化．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
19. 守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子，内田さえ．梨状皮質の血流に対する前脳基底部刺激の影響．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
20. 森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ．三叉神経系嗅覚刺激による脳血流反応の解析．第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023.10.28-29.
21. 森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ．三叉神経系嗅覚刺激による脳血流反応の解析．日本情動学会第12回大会，京都，2023.11.18-19.
22. 立花麻恵，三木悠未，池谷真澄，藤田泰典，渡辺信博，堀田晴美，山田憲彦，川口英夫，大澤郁朗．水素ガス吸入による脳梗塞血栓溶解（rt-PA）療法時の出血抑制．第46回日本分子生物学会年会，神戸，2023.12.6-8.
23. 渡辺信博，西宗裕史，守屋正道，堀田晴美．骨格筋の収縮力に対する血圧上昇の影響．第50回自律神経生理研究会，東京，2023.12.2.
24. 森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ．三叉神経を介する嗅覚刺激が脳局所血流に及ぼす影響．第50回自律神経生理研究会，東京，2023.12.2.
25. 守屋正道，唐子顕児，酒谷薫，皆方伸，佐藤周平，安部陽子，鈴木翔太，宮里将平，高良光.動脈瘤くも膜下出血患者の転帰を早期に予測する機械学習モデルの構築．第51回日本集中治療医学会学術集会，札幌．2024.03.14-16.
26. Hotta H. Dysregulation of the Autonomic Nervous System with Aging - An Approach from the Interaction with the Somatic Nervous System. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.
27. Watanabe N, Moriya M, Hotta H. The contribution of large-diameter afferent fibers to cerebral blood flow response to sciatic nerve stimulation in urethane-anesthetized mice. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.
28. Moriya J, Morihara D, Kagitani F, Uchida S. Effect of basal forebrain stimulation on regional blood flow in the piriform cortex. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.
29. Morihara D, Moriya J, Kagitani F, Uchida S. Regional cerebral blood flow responses to trigeminal olfactory stimulation. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.
30. Moriya M, Watanabe N, Hotta H. Responses of splenic sympathetic nerve activities induced by electrical stimulation of the sciatic nerve. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.
31. Watanabe N, Nara M, Suzuki S, Sugie M, Yamamoto T, Hotta H. Effects of gentle mechanical skin stimulation on subjective symptoms and joint range of motions in people with chronic neck and shoulder discomfort. 第101回日本生理学会大会，北九州，2024.3.28-30.(入澤宏・彩記念JPS優秀論文賞受賞ポスター)

5　著書等

1. 大橋敦子（監修）鍵谷方子，金澤佑治，森田恵子，二本松明，斉藤光代，下井俊典，志村まゆら，鈴木敦子，鈴木郁子，内田さえ．生理学実習NAVI　第3版，医歯薬出版，1-89，2023年
2. 堀田晴美（監修）シニアのための自律神経．TJ MOOK，宝島社，2023.11.15
3. 上田晃，内田さえ，鍵谷方子，原田彰宏．人体の構造と機能 第6版，医歯薬出版，1-361，2023年
4. 堀田晴美，渡辺信博．加齢と疾患．人体の構造と機能及び疾患 第2版，医歯薬出版，69-81，2024年
5. 内田さえ．第3節 鍼灸刺激が循環機能に及ぼす作用-4　脳血流に及ぼす作用，図解鍼灸療法技術ガイドⅠ　第２版 矢野忠（編）第３章　鍼灸の治療的作用，文光堂，170-175，2024年
6. 内田さえ．コラム　自律神経系の理解，臨床神経心理学 第2版，医歯薬出版，32-34，2024年

6　特許

登録：TREATMENT OF DISEASES MEDIATED BY THYROID AND PARATHYROID HORMONES
アメリカ合衆国　16/348924 出願日 2017/11/10　登録番号 11571574　登録日 2023/2/7
発明者：Hans Jakob Kristoffer, Arun SRIDHAR, 堀田晴美
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所, Galvani Bioelectronics Limited

7　その他

広報活動

1. 堀田晴美　自律神経の働きがストレス解消に大きく影響している．エール，2023.1.1
2. 堀田晴美，渡辺信博＜プレスリリース＞「皮膚へのやさしい刺激が肩こり症状を緩和することを発見」2023 年 04 月 17 日
3. 堀田晴美，渡辺信博＜プレスリリース＞「老化による筋力低下に、交感神経が関わることを発見」2023 年 05 月 17 日
4. 堀田晴美　皮膚をつまむ！さする！寝る前 1 分でいい！高齢者に多い夜間頻尿に薬並みに効くと判明した骨盤底さすり．壮快，2023.7.16
5. 堀田晴美　死に至る「夏の夜間頻尿」撃退法．女性セブン 2023.9.11
6. 内田さえ　それ全部自律神経のせいです．週刊現代，講談社，65 巻 15 号，2023.5.27
7. 内田さえ　自律神経セルフケア．Tarzan，マガジンハウス，860 号，2023.6.8
8. 渡辺信博　「最新イメージング技術で脳血管のはたらきを見る」 令和 5 年度科学技術週間参加行事，東京都健康長寿医療センター研究所，東京，2023 年 4 月 18 日
9. 堀田晴美「歩行はなぜ認知症予防になるか」練馬区認知症予防推進員連絡会，東京，2024 年 2 月 28 日

学術大会主催

第 76 回日本自律神経学会総会　2023.10.28－29
大会長：堀田晴美、副会長：岩田淳
テーマ：超高齢社会における自律神経研究

記憶神経科学

1　論文(誌上発表)：原著

1. Sho Kakizawa, Tomoko Arasaki, Ayano Yoshida, Ayami Sato, Yuka Takino, Akihito Ishigami, Takaaki Akaike, Shuichi Yanai, Shogo Endo.
Essential Role of ROS - 8-nitro-cGMP signaling in long-term memory of motor learning and cerebellar synaptic plasticity.
Redox Biology, 70, 103053, 2024. **(査読あり、IF (11.4, 2022))**
2. Shuichi Yanai, Tetsuro Tago, Jun Toyohara, Tomoko Arasaki, & Shogo Endo.
Reversal of spatial memory impairment by phosphodiesterase 3 inhibitor cilostazol is associated with reduced neuroinflammation and increased cerebral glucose uptake in aged male mice.
Frontier Pharmacol, **13**, 1031637, 2022. **(査読あり、IF (5.988, 2022))**
3. Keiichi Suzuki, Hiroko Koyama, Narumasa Nakamura,Yasuyuki Kimura, Aya Ogata, Hiroshi Ikenuma, Hideki Ishii, Ming Rong Zhang, Kazunori Kawamura, Takafumi Minamimoto, Yuji Nagai, Hiroshi Katsuki, Tetsuya Kimura, Nobuyuki Kimura, Masanori Ichise, Takashi Kato, Kengo Ito, Masaaki Suzuki.
^{11}C-Labeling of acyclic retinoid peretinoin by rapid C-[^{11}C]methylation to disclose novel brain permeability and central nervous system activities hidden in antitumor agent.
4. Ryota Sakurai, Hisashi Kawai, Hiroyuki Suzuki, Susumu Ogawa, Shuichi Yanai, Hirohiko Hirano, Masayasu Ito, Kazushige Ihara, Shuich Obuchi, & Yoshinori Fujiwara.
Cognitive, physical, and mental profiles of older adults with misplaced self-evaluation of hearing loss.
Arch Gerontol Geriatr, **104**, 104821, 2023. **(原著、査読あり、IF (4.163, 2022))**
5. Ritsuko Inoue,Masami Miura, Shuichi Yanai, & Hiroshi Nishimune.
Coenzyme Q10 supplementation improves the motor function of middle-aged mice by restoring the neuronal activity of the motor cortex.
Sci Report, **13**, 4323. **(査読あり、IF(4.997, 2022))**
6. Tomoya Shintani, Shuichi Yanai, Akane Kanasaki, Misuzu Tanaka, Tetsuo Iida, Genki Ozawa, Tadao Kunihiro, & Shogo Endo.
Long-term D-Allose Administration Favorably Alters the Intestinal Environment in Aged Male Mice.
J Applied Glycosci, **4,** 97-102, 2022. **(査読あり、IF (1.10, 2022))**

2　論文(誌上発表)：総説

1. 柿澤昌, 遠藤昌吾.小脳は認知機能障害治療の新たな標的となるか？ ***Bio Clinica*** **39**, 43-47, 2024.

3　学会発表(国際)

1. Ritsuko Inoue, Masami Miura, Shuichi Yanai, Hiroshi Nishimune. Age-related decline in motor function in middle-aged mice is ameliorated by coenzyme Q10 supplementation-mediated improvement of neuronal activities. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, パシフィコ横浜, 2023.6.12-14.

4　学会発表(国内)

1. 柳井修一．老化研究における行動科学．日本行動科学学会第 39 回ウィンターカンファレンス．2024.2.18-20, 滋賀
2. 柳井修一・高瀬謙吉．正しく研究するとは，正しく生きるとは～杉岡先生が残したもの．日本行動科学学会第 39 回ウィンターカンファレンス．2024.2.18-20, 滋賀
3. Sho Kakizawa, Tomoko Arasaki, Yasushi Satoh, Shogo Endo. Involvement of 8-nito-cGMP - ERK signals in the induction of long-term depression in the mouse cerebellum. (第 95 回日本薬理学会年会, 2022 11.30-12.3, 福岡)
4. 井上律子, 三浦正巳, 柳井修一, 西宗裕史, Coenzyme Q10 supplementation improves age-related reduction of fEPSP in the motor cortex of middle-aged mice. 第 100 回日本生理学会大会, 京都国際会館, 2023.3.14-16.
5. 柿澤昌、遠藤昌吾. 活性酸素シグナルの小脳シナプス長期可塑性および可塑性方向性決定機構への関与. 第 147 回日本薬理学会関東部会. 2023.3.21. (東京)
6. 柳井修一, 網羅的行動解析による老化関連表現型の評価. 第 46 回日本基礎老化学会大会, パシフィコ横浜, 2023.6.16-18.
7. 柳井修一, 新崎智子, 遠藤昌吾, 老化に伴うマウスの心身機能低下の評価. TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム, 東京, 2023.7.28.
8. 井上律子, 柳井修一, 三浦正巳, 西宗裕史, 加齢に伴う歩行機能低下の改善と水溶化コエンザイム Q10 投与の有効性. TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム, 東京, 2023.7.28.
9. 木村哲也, アットモルエライザによる認知症バイオマーカー研究、 第４６回日本基礎老
10. 木村哲也, 新たなバイマーカー研究に向けた超高感度エライザ手法の開発, 第 11 回 TOBIRA 研究交流フォーラム, 東京, 2023.7.28.
11. 木村哲也, 小山幸一, 大西徳幸, 川野克己, 新たなバイオマーカー研究に向けた超高感度エライザ手法の開発, 日本臨床化学会ランチョンセミナー, 東京, 2023.7.28.
12. 奈良毬那, 杉江正光, 横関智一, 遠藤昌吾, 原田和昌, レセプト及び特定健診データを用いた認知症新規発症因子の検討, 第 42 回認知症学会, 奈良市, 2023.11.24.

5　著書等

1. 遠藤昌吾,「記憶にかかわる海馬と記憶術」, 保健総合大百科2023（少年写真新聞社）, 217-218, 2023

6　特許

なし

7　その他

1. 柳井修一,音が聞こえづらいと思ったらー耳寄りの耳の話ー, 三多摩高齢･退職者団体連合講演会, 東京, 2023.6.21.

2. 遠藤昌吾, 「脳は図書館～知っている様で知らない記憶の仕組み～」, （社）日本健康寿命延伸協会　講演会, ヘルスケア工房フレトレセンター, 板橋区大山, 2023.11.17.
3. 遠藤昌吾, 「ヒューマニエンス（2023 年 11 月 21 日放送）,「死の迎え方　ヒトの穏やかな死とは」, NHKBS プレミアム

老化神経生物学

１　論文（誌上発表）：原著

1. Ritsuko Inoue, Masami Miura, Shuichi Yanai and Hiroshi Nishimune. “Coenzyme Q_{10} supplementation improves the motor function of middle-aged mice by restoring the neuronal activity of the motor cortex.” ***Scientific Reports*** 13: 4323. （査読あり）(IF: 4.99、2023)

２　論文（誌上発表）：総説

1. Ritsuko Inoue, and Hiroshi Nishimune. “Neuronal Plasticity and Age-Related Functional Decline in the Motor Cortex” ***Cells*** 12: 2142. （査読あり）(IF: 6.0、2023)

３　学会発表（国際）

1. Ritsuko Inoue, Masami Miura, Shuichi Yanai, Hiroshi Nishimune. Age-related decline in motor function in middle-aged mice is ameliorated by coenzyme Q_{10} supplementation-mediated improvement of neuronal activities. 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG)-Asia Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-14, 2023.
2. Naoko H. Tomioka, Yomna Badawi, Kenji Takikawa, Hiroshi Nishimune. Super-resolution imaging of synaptic proteins of neuromuscular junctions in adults and aged mice. 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG)-Asia Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-14, 2023.
3. Tomoki Nakano, Kotaro Takeno, Yomna Badawi, Hiroshi Nishimune, Expression mechanism analysis of synapse-organizers essential for maintaining motor function and neuromuscular junctions, 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG)-Asia Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-14, 2023.

４　学会発表（国内）

1. 西宗裕史、神経筋接合部のアクティブゾーンタンパク質構成の超解像顕微鏡解析、2022年度　生理研研究会　ナノ・メゾスケールから捉えるシナプス制御機構の新展開、生理学研究所、2023年2月3日（口頭発表、Zoomを使用したWeb開催）
2. 井上律子、三浦正巳、柳井修一、 西宗裕史、Coenzyme Q_{10} supplementation improves age-related reduction of fEPSP in the motor cortex of middle-aged mice. 第 100 回日本生理学会大会、京都国際会館、2023 年 3 月 14-16 日
3. 井上律子　老化に伴う神経活動の低下とシナプス可塑性を介した機能改善、第46回日本基礎老化学会大会　パシフィコ横浜（横浜市)、2023年6月16-18日
4. 富岡 直子、Yomna Badawi、瀧川 健司、西宗 裕史、老齢および成体マウス神経筋接合部のシナプスタンパク質の超解像イメージング、第46回日本基礎老化学会大会、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市)、2023年6月16-18日
5. 瀧川 健司、梅澤 啓太郎、西宗 裕史. 新薬開発を指向した蛍光性GABAセンサーの開発. 第14回スクリーニング学研究会、ソニックシティ（埼玉県さいたま市)、2023年11月29-30日
6. 瀧川 健司、梅澤 啓太郎、西宗 裕史. GABAを蛍光分析するバイオセンサーの開発. 新アミノ酸分析研究会第13回学術講演会、大田区産業プラザPiO（東京都大田区)、2023年12月8日
7. 渡辺信博、西宗裕史、守屋正道、堀田晴美、骨格筋収縮力に対する血圧上昇の影響、第50回自律神経生理研究会、東京都健康長寿医療センター研究所（東京)、2023年12月2日

５　著書等

1. 西宗 裕史、井上 律子、瀧川 健司. 研究所の50年、研究チームの歴史・成果・現状・展望、自然科学系、神経回路動態（神経生理）/老化神経生物学テーマ、病院・研究所創立50周年・養育院創設150年記念誌、2023年
2. 西宗裕史、井上律子、瀧川 健司. 研究所パンフレット-事業概要―中期計画（第四期:2023-2027）自然科学系、老化脳神経科学研究チーム、老化神経生物学テーマ、2023年10月

６　特許

1. 特許出願：瀧川 健司、梅澤 啓太郎、西宗 裕史、ＧＡＢＡ検出用蛍光プローブ及びその製造方法、出願番号2023-141250、2023年8月31日

７　その他

大学、研究機関での講演

1. 西宗裕史、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の治療を目指したヒト間葉系幹細胞の利用、山口大学大学院医学系研究科　メディバイオ事業研究会　第２８回講演会、（山口県、宇部市）2023 年 6 月 19 日
2. 西宗裕史、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の治療を目指した神経筋接合部の研究、国立長寿医療研究センター、（愛知県大府市）2024 年 1 月 12 日

その他

1. 西宗 裕史、井上 律子、瀧川 健司. 脳・神経系の障害克服を目指して. 令和５年度科学技術週間参加行事. 東京都板橋区、2023 年 4 月 18 日
2. 井上律子、柳井修一、三浦正巳、西宗裕史 加齢に伴う歩行機能低下の改善と水溶化コエンザイム Q_{10} の有効性、TOBIRA 第 11 回研究交流フォーラム、御茶ノ水ソラシティ カンファレンスセンター（東京）2023 年 7 月 28 日
3. 瀧川 健司. 脳内伝達物質の時空間動態を可視化する蛍光プローブの開発、第 48 回 都市高齢者の健康長寿医療研究会（澁澤榮一プロジェクト)、東京都健康長寿医療センター（東京都板橋区)、2023 年 12 月 7 日
4. 連携大学院大学の国立大学法人　東京農工大学の（１）大学生に対して当センターの老化研究を紹介する特別講義

における施設見学、研究室実験内容紹介、（２）大学院生に対して集中講義　国際応用生命科学 II（英語授業）、（３）修士課程大学院生を研究室に受け入れ修士研究指導

――――――――――――

二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

加齢変容研究チーム

チームリーダー：石神昭人

研究チームの概要・目的

加齢変容研究チームでは、加齢に伴い刻々と変化する臓器や組織の機能低下を細胞や遺伝子のレベルで明らかにして、からだ全体の老化、すなわち個体老化へと外挿する。そして、臓器や組織間の相互作用など、個体老化から見た新たな老化機構の解明や老化制御の達成を目指す。最終ゴールには、高齢者の健康増進、健康長寿に寄与することを目的としている。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

心血管老化再生医学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)心臓組織の機能維持とその破綻の機序解明	→	→	→	→	→
1)細胞間接着因子の発現・分布	組織学的解析による分子の絞り込み	絞り込み分子の詳細な発現マップの作製	加齢モデルでの発現・分布の変遷解析	病態モデルでの発現・分布の変遷解析	分子間相互作用の機序を探る
2) 心臓微小血管網の役割解明	組織内血管表層糖鎖マップの作製	組織内血管表層糖鎖構造から機能的役割の解析	組織内血管表層糖鎖の加齢変遷の解析	組織内血管表層糖鎖の病態変遷の解析	組織内血管の役割の解明
3) 血管構造・機能変遷に伴う心臓機能への影響	ミトコンドリアの構造・機能評価技術の確立	ミトコンドリア構造・機能と心筋細胞機能の相関性評価	加齢モデルによるミトコンドリアの構造・機能評価	病態モデルによるミトコンドリアの構造・機能評価	血管と心筋細胞の機能相関性を解析・評価
(2)臓器間相互作用から探る加齢性心血管疾患発症機序の解明	→	→	→	→	→
1)老化プロセスにおける臓器間相互関連性の解明	腎臓・肺の老化プロセスにおける糖鎖マッピング解析	循環器組織における老化プロセスの比較解析	循環器系老化プロセスから特徴的分子の解析	病態モデルでの解析	組織間連携を担う分子の機能解析
2)血管病態機能の解明	血管恒常性機能の解析	血管病変における細胞間相互作用解析	血管病変発症機序解明とその抑制制御の探索	血管病態発症起点の探索	疾患発症の予防効果への検証
3)血管内皮細胞老化特異的分泌因子の機能解析	分泌因子の作用機序の解明	マウスの加齢に伴う表現型解析	分泌因子の心臓への影響検証	分泌因子の他臓器への影響検証	分泌因子の個体における機能制御機序の解明
(3)心臓組織機能の再生とその機序の解明	→	→	→	→	→
	抗炎症作用を有する候補物質による心臓組織機能の評価指標の検討	心臓組織機能の評価から抗炎症作用候補物質の絞り込みの検討	加齢モデルによる抗炎症作用候補物質の心臓組織機能再生の評価	疾患モデルによる抗炎症作用候補物質心臓組織機能再生の評価	抗炎症作用候補物質による心臓組織機能低下予防効果の検証

運動器医学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)筋萎縮・筋老化のメカニズムの解明と制御	→	→	→	→	→
	動物モデルにおける検討	メカニズム解明	メカニズム解明	コホート解析・バイオマーカー探索	サルコペニア予防治療基盤の確立
(2)骨格筋の再生メカニズムの解明	→	→	→	→	→
	各種マウス作出および解析	各種マウスの解析	メカニズム解明	メカニズム解明	幹細胞移植治療戦略の構築
(3)骨格筋の性質を規定するエピゲノム制御の解明	→	→	→	→	→
	マッスルメモリーモデルの確立	マッスルメモリーモデルの評価	ポジショナルメモリー解析	ポジショナルメモリーの概念確立	メモリーを応用した介入基盤構築

(4)筋疾患の病態解明と治療基盤の創出	マウスモデルの実証実験	マウスモデルの実証実験	メカニズム解明	メカニズム解明	FSHD治療基盤の確立

心血管老化再生医学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
豊田　雅士	研究副部長	研究全体の総括
佐々木　紀彦	研究員	研究項目(2)-2)、3)の責任者 研究全体のデータ収集・分析
板倉　陽子	研究員	研究項目(2)-1)の責任者 研究全体のデータ収集・分析
大瀬　賢介	研究員(IREDE)	研究全体のデータ収集・分析
吉田　友里香	研究員(非常勤)	研究全体のデータ収集・分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

第四期では、私たちがこれまでの心臓老化プロセスの解析から観察された種々の変化が、組織機能の維持・低下にどのように関わっているかを探求し、心臓組織内の微小循環システムの分子基盤を明らかにしていく。その結果として、微小血管を捉える新たな診断技術の開発、加齢に伴う種々の心血管疾患の予防、早期の診断・治療へと波及していくことを期待して研究を進めている。

そこで本期間では、以下の３項目を計画した。

(1)心臓組織の機能維持とその破綻の機序解明

(2)血管を介した臓器間相互作用から探る加齢性心血管疾患発症機序の解明

(3)心臓組織機能の再生とその機序の解明

上記３項目を連携させ研究を行なっている。本年度の進捗の概要を以下に記す。

(1) 心臓組織の機能維持とその破綻の機序解明

若齢から老齢マウスにおける心臓組織内の血管構造及び機能の変遷を詳細に解析した。構造解析結果からは、心臓機能を維持するため特に毛細血管網が著しく発達していることが改めて示された。組織末梢毛細血管での機能解析では、機能評価のための実験系をほぼ確立した。この評価系を用いた解析から、組織機能維持と老化との関連が見えてきた。さらに心臓組織機能の維持に欠かせない心筋細胞内ミトコンドリアの動態を調べるための実験系を確立し、心臓機能と血管機能の相関性を評価した。

(2) 血管を介した臓器間相互作用から探る加齢性心血管疾患発症機序の解明

研究計画２：生体内の老化（個体老化）では、各臓器の老化プロセスの総体として現れると考えられるが、個々の臓器の老化プロセスについては不明な点が多い。そこで、循環器系における臓器連関を探るため、肺・腎臓組織に対する糖鎖プロファイルの加齢変化を取得し、心臓組織との比較を進めている。これまでの結果から、肺、腎臓では加齢で顕著な違いを認めるレクチンが複数見出され、心臓とは異なりその組織内局在も極めて特異的であった。この中には、加齢性疾患に関わり臓器間連関を担う役割が想定される細胞群が含まれていた。また循環器系を支える血管内皮細胞が老化で分泌する因子として同定したタンパク質の機能解析を進めた結果、高齢者由来の血漿中でこのタンパク質が検出されたこと、本タンパク質の糖鎖修飾パターンは多様性があるなかで内皮細胞特異的な糖鎖修飾があることが示された。

(3) 心臓組織機能の再生とその機序の解明

研究計画３：心臓機能の再生には、組織内環境を知ることがまず必要との考えのもと、まず組織内炎症の評価を行なった。ここでは、ウエットでの実験に加えデータベースの情報を活用したインフォマティクス解析を最大限利用した評価をした。研究計画（１）でのミトコンドリア機能に付随したデータを活用して、組織の炎症惹起に心筋細胞がどう関連するかを探り、興味ある結果が得られた。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 心臓組織の機能維持とその破綻の機序解明

加齢で顕著に違いが認められた心臓組織内血管について、構造・機能両面から加齢プロセスを追跡し、詳細に解析を進めた。

血管構造解析では、若齢から老齢マウスにおける心臓組織内の変遷を詳細に解析した。その結果から著しい身体的成長の時期に心臓組織内血管が大きく変化していること、その後の血管構造は顕著な変化は認められず維持されていることが示された。

血管機能解析では、心臓組織内血管網の多くが血管内皮細胞のみからなる毛細血管であることが構造解析で示されたことから、末梢毛細血管の機能に着目して解析を行なった。機能評価のための実験系の構築を進め、ほぼ確立するに至った。この評価系を用いて心臓内毛細血管機能を検討し、現在データの取りまとめを行なっている。

心臓組織の機能評価では、心筋細胞内ミトコンドリアの分解機構に着目して検討をしている。本項目では血管機能に焦点を当てた研究を進めているが、それが心臓機能にどう影響を及ぼしているかは疾患発症の機序解明に重要となる。ここでは心臓機能の評価として心筋細胞のミトコンドリアに注目した。心臓は生涯拍動を維持するため莫大なエネルギー代謝器官であり、心筋細胞内のミトコンドリアが重要な働きを担っている。ほぼ分裂することのない心筋細胞でミトコンドリアがその機能を維持し続けるためには、常に分解・新生が起こっていると考えられるが、その詳細は不明な点が多い。そこでまず、心筋細胞内の不良ミトコンドリアの分解を詳細に解析するための*in vitro*実験評価系を確立した。さらにこの方法を用いて不良ミトコンドリアの分解活性を若齢・老齢マウスで比較解析した。

(2) 血管を介した臓器間相互作用から探る加齢性心血管疾患発症機序の解明

老化プロセスにおける臓器間連関では、心臓機能と関連の深い臓器における糖鎖のプロファイルを取得し、これまでに得られている心臓老化プロセスと比較して臓器特異性ならびに加齢変化について検討した。本年度は、若齢・老齢の健常マウスから心臓・腎臓および肺組織で、レクチンマイクロアレイ解析による網羅的な糖鎖プロファイル解析を実施した。また加齢変化を認めたレクチンについてはその組織内局在についても調べた。その結果、加齢で顕著な違いを認めるレクチンを複数見出し、その組織内局在も極めて特異的で、臓器間連関を担う機能が想定されたことから、さらなる検証を進めている。

血管内皮細胞老化特異的分泌因子の機能解析では、ヒト初代培養細胞を用いた*in vitro*実験系での解析を進めており、分泌時に血管内皮特異的な糖鎖修飾があることが示唆された。これを踏まえ、血管指標のバイオマーカーとしての可能性を探るためヒト血清検体での検証を行う準備をしている。また細胞での解析に加え、*in vivo*での個体機能の検証を行うため血管内皮特異的欠損マウスでの解析を進めている。さらに加齢性疾患病態への分泌因子の関与を探るため、動脈硬化モデルとして知られるApoE欠損マウスとのダブル欠損マウスの作製を始めた。

(3) 心臓組織機能の再生とその機序の解明

心臓組織機能再生では､心臓機能の低下の要因の１つである組織内の炎症の評価を進めている。組織内では加齢に伴う炎症反応の亢進が機能低下と関連していることが想定されているが、その実態は未だ十分に把握されていない。老化による心臓機能低下を抑制・再生を考える上で、炎症の抑制を制御することが重要であると考えている。そこで本項目では、まず組織内にどの程度の炎症が起こっているかの評価を行なっている。本年度は、炎症を誘導するマクロファージなどの免疫細胞の発現・分布、その加齢変化について、バイオインフォマティクス解析や免疫染色による解析を進めた。

(4) その他の研究

当テーマでは、センター・都民への還元を念頭に各研究員が持つ技術ソースを活用した研究を上記テーマ研究とは別に並行して進めている。この中から本年度に顕著な進捗があった課題について以下に示す。

1. 迅速発育抗酸菌*M. abscessus*の多剤耐性臨床分離株の比較ゲノム解析
（病院部門感染症内科との共同研究）

迅速発育抗酸菌*M. abscessus*の多剤耐性臨床分離株について、ロングリードシークエンサーを用いて全ゲノム解析を行った。その結果、当該臨床分離株は標準菌株には認められない３種類の

プラスミドを保持していた。さらに、データベースに登録されている世界各国の*M. abscessus*の臨床分離株のデータベースを解析した結果、３種類のうち２種類のプラスミドが広範に伝播していることが明らかとなった。これらのプラスミドには薬剤排出トランスポーターなどがコードされていることから、臨床分離株の多剤耐性に関与している可能性が推測された。現在はその裏付けとなるデータを取得しつつ、論文投稿の準備を行なっている。

2. 非結核性抗酸菌*M. lentiflavum*の病原性に関与する因子の迅速診断法の開発
(令和５年度TR課題, 病院部門感染症内科・臨床検査科との共同研究)
近年、本院での分離例が増加している非結核性抗酸菌*M. lentiflavum*の臨床分離株についてその病原性に関与する因子の迅速診断法の開発を目的として令和5年度TR課題として採択された。臨床検査科で分離した23種類の臨床分離株について､増殖速度の温度依存性などを詳細に解析し、増殖速度の早い群と増殖速度の遅い群に分類した。現在はこれらの株からゲノムDNAとRNAを抽出して、全ゲノム解析とRNA-seq解析の準備を進めている。

3. 新型コロナウイルス等検出の高感度検査
（病院部門感染症内科、臨床検査科、理化学研究所、東京医科歯科大学、国立感染症研究所所、いすみ医療センターとの共同研究、AMED新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業)
新型コロナウイルス感染症は､抗原検査またはPCR検査により診断が行われる。これら検査は一長一短があり、今後の感染症パンデミックへの対応を考え、小型かつ迅速高感度な検査機器の開発が求められている。理化学研究所で開発された機器での臨床検査機器としての精度を検証するため、当センターで得られた検体（鼻咽頭液、唾液）を用いてPCR検査との比較を実施している。また改良した機器（自動化）での呼吸器疾患関連ウイルス（新型コロナウイルス、インフルエンザウイルス（A, B)、RSウイルス）の検証にむけた準備を整えている。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携
＜組織解析＞
【センター内】高齢者がん研究テーマ
＜加齢関連糖鎖構造・機能＞
【センター内】分子機構研究テーマ
＜グライコーム解析＞
【センター内】プロテオーム研究テーマ
＜１分子計測による生体内酵素活性の機器開発＞
【センター内】神経病理学研究テーマ、脳神経内科
＜お達者検診等の検体・データを活用した機能マーカーの検証・開発＞
【センター内】フレイル・筋骨格系の健康研究テーマ
＜オーラルフレイルに対する再生医療への試み＞
【センター内】オーラルフレイル・栄養研究テーマ
【センター外】順天堂大学
＜加齢性心血管病態＞
【センター内】心臓血管外科
＜人工肺による長期呼吸補助＞
【センター内】心臓血管外科、呼吸器外科
＜ヒト組織での評価・解析＞
【センター内】病理診断科
＜呼吸器感染症疾患の迅速検査＞
【センター内】感染症内科
＜非結核性細菌の薬剤耐性獲得機序・生体内増殖機序＞
【センター内】臨床検査科
＜組織糖鎖解析・エピゲノム解析＞
【センター内】産業技術総合研究所
＜心臓組織機能再生＞
【センター内】国立成育医療研究センター研究所
＜微小血管機能解析＞
【センター外】明治大学、筑波大学

＜分子プローブ＞
【センター外】東北大学
＜血管病態＞
【センター外】横浜市立大学
＜呼吸器疾患検査機器開発＞
【センター外】理化学研究所

筋老化制御研究チーム

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
小野　悠介	研究部長	研究全体の総括 研究全体のデータ収集・分析・責任者
沖野　良輔	非常勤研究員	研究全体のデータ収集・分析
合田　祐貴	非常勤研究員	研究全体のデータ収集・分析

１　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 筋萎縮・筋老化のメカニズム解明と制御

骨格筋の萎縮を引き起こすメカニズムについては不明な点が多い。本研究テーマはこれまでに筋組織の血管内皮細胞と筋線維の細胞間相互作用として「Dll4－Notch2軸」を同定し、この軸が、不活動や糖尿病によって誘導される筋萎縮の鍵を握ることを見出した（Nature Metab 2022)。今後、「Dll4－Notch2軸」を制御する詳細なメカニズムを解明し、さらに、加齢による筋脆弱化においてもこの軸が関与するかを検証し、サルコペニアの予防治療法開発につなげる。

(2) 骨格筋の再生メカニズムの解明

サテライト細胞は筋再生に必須の役割を担う。サテライト細胞は通常休止期の状態で存在し、筋損傷刺激により速やかに活性化する。活性化したサテライト細胞は速やかに細胞周期に入り、増殖後に分化し、互いに融合することで多核筋線維を生み出す。一部の細胞は分化せず、自己複製することで幹細胞プールを維持する。本研究テーマは、このようなサテライト細胞の増殖、分化、自己複製の運命決定を制御する分子メカニズムの解明に取り組んできた（Cell Rep 2015; Stem Cells 2018; Stem Cell Rep 2018; Stem Cell Rep 2020a; Stem Cell Rep 2020b; J Cell Sci 2024)。今後、サテライト細胞の運命決定制御を司る分子基盤を解明し、筋再生治療開発への応用を目指す。

(3) 骨格筋の性質を規定するエピゲノム制御の解明

骨格筋の大きさや形状は解剖学的に多様であり，またその機能も身体動作のみならず，姿勢維持，呼吸，咀嚼，嚥下，表情表出等と多岐にわたる。近年、骨格筋の性質は全身を通して均一ではないことがわかりつつある。当研究テーマは、そのメカニズムの一端として、胚発生過程で形成される位置記憶（ポジショナルメモリー）が成体の骨格筋およびサテライト細胞に内在することを明らかにしてきた（Sci Adv 2021; Acta Physiol 2022)。今後、骨格筋の遺伝子発現アトラスを作成し、ポジショナルメモリーの概念を確立する。近年、骨格筋は過去の活動経験をマッスルメモリーとして記憶し、将来の運動刺激への応答性や適応能に影響を与えることがわかってきた。そこで、筋活動がエピゲンムレベルで刻まれ筋質を変化させるマッスルメモリーの本体を解明し、筋質を規定する制御機構の堅牢性と可塑性を明らかにする。

(4) 筋疾患の病態解明と治療基盤の創出

難治性筋疾患である筋ジストロフィーの治療法開発に取り組む。特に、治療法のない顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー（FSHD）に着目する。FSHD 患者では本来骨格筋では認められない細胞毒性をもつ DUX4 という転写因子が骨格筋に異所性に発現することで筋脆弱化を誘導すると考えられている。しかし，DUX4 がどのように細胞毒性を発揮し、病態発症につながるのか不明な点が多い。本研究テーマは FSHD の病態解明と治療基盤を創出する。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 筋萎縮・筋老化のメカニズムの解明と制御

「計画(1) Notchシグナルを標的にした健康寿命延伸効果の検証」

可溶型Dll4Notchシグナル制御の減弱化による健康寿命・個体寿命の延伸効果を実証する。糖尿病

マウスや高齢マウスを用いて長期的なD114中和抗体およびD114阻害剤投与の老化抑制効果を調べる。

「計画(2) サルコペニアの血中バイオマーカーの有用性を検証」

早期の社会実装に向け、高齢マウスの血清およびヒトコホート研究の血清サンプルを用いて、サルコペニア・フレイルの予防治療につながる新規バイオマーカーとしての可能性を検証する。

計画１について、仮説を支持する結果が得られている。計画２については、測定方法を確立した。

(2) 骨格筋の再生メカニズムの解明

「計画(1) サテライト細胞の機能的不均一性の解明」

サテライト細胞における運命決定の不均一性を調べる。特にシングルセル解析で見出した遺伝子の発現パターンに着目し、ステムネスを維持する集団を同定する。骨格筋特異的遺伝子欠損マウスにおける顕著な表現型が見出されており、順調に進んでいる。

(3) 骨格筋の性質を規定するエピゲノム制御の解明

「計画(1) マウスアトラス作成」

成体マウスの筋組織およびサテライト細胞を単離し、RNAseq解析を行う。特に頭部と四肢の違いに着目し、同定した位置遺伝子の機能解析を行う。

「計画(2) マッスルメモリーの解明」

レジスタンス運動は，網のラダーを使ったクライミング運動にて筋肥大を誘導する。脱トレーニング後、再トレーニング効果を検証する。各種オミクス解析を行う。

(4) 筋疾患の病態解明と治療基盤の創出

「計画（１）FSHD の治療法開発基盤」

難治性筋疾患である FSHD の治療法開発に取り組む。細胞毒性をもつ転写因子 DUX4 が骨格筋に異所性に発現するが、その細胞毒性の機序については不明な点が多い。FSHD モデルマウスを確立した。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜タンパク質配列決定＞
【センター内】老化機構研究チーム（プロテオーム)、神
＜遺伝子欠損マウスの表現型＞
【センター内】自律神経機能研究テーマ
＜筋発生・再生＞
【センター外】熊本大学、九州大学、理化学研究所
＜エネルギー代謝＞
【センター外】東京大学
＜骨格筋の再生・代謝＞
【センター外】京都府立大学
＜筋疾患＞
【センター外】東海大学、国立精神神経医療研究センター、ロンドン大学
＜遺伝子欠損マウスの分与＞
【センター外】横浜市立大学
＜骨格筋の老化・再生・適応＞
【センター外】九州歯科大学、静岡大学、松本大学

論文・学会発表（令和5年度）

心血管老化再生医学

１　論文（誌上発表）：原著

1. Yamada S, Ko T, Ito M, Sassa T, Nomura S, Okuma H, Sato M, Imasaki T, Kikkawa S, Zhang B, Yamada T, Seki Y, Fujita K, Katoh M, Kubota M, Hatsuse S, Katagiri M, Hayashi H, Hamano M, Takeda N, Morita H, Takada S, Toyoda M, Uchiyama M, Ikeuchi M, Toyooka K, Umezawa A, Yamanishi Y, Nitta R, Aburatani H, Komuro I. TEAD1 trapping by the Q353R-Lamin A/C causes dilated cardiomyopathy. ***Sci Adv*** 9(15):eade7047, 2023.（原著、査読あり）(IF 13.6, 2022)

(ヒト遺伝性心臓疾患患者血液からの iPS 細胞樹立及び樹立細胞の特性（増殖・分化等）解析、品質評価（理化学研究所バイオリソースセンターへ寄託）を担当)

2. Itakura Y, Hasegawa Y, Kikkawa Y, Murakami Y, Sugiura K, Nagai-Okatani C, Sasaki N, Umemura M, Takahashi Y, Kimura T, Kuno A, Ishiwata T, Toyoda M*. Spatiotemporal changes of tissue glycans depending on localization in cardiac aging. ***Regen Ther*** 22:68-78, 2023. (*corresponding author) (原著、査読あり) (IF 4.3, 2022)

2 論文（誌上発表）：総説

1. 豊田雅士. 糖鎖から探る細胞老化・個体老化, 日本香粧品学会誌 47(2):109-116, 2023. (著書、査読なし)

3 学会発表（国際）

1. Kanai N, Ohse K, Fujino A, Fuchimoto Y. Autologous epithelial cell sheet with dedicated device for intractable esophageal stricture. Sympodium Presentation. TERMIS-EU 2023. Manchester, UK, 2023.3.28-31.
2. Kanai N, Ohse K, Fujino A, Fuchimoto Y. Clinical studies using autologous epithelial cell sheet for various esophageal disease. ISCT 2023, Paris, France. 2023.5.31-6.3.
3. Sasaki N, Hirano K, Shichi Y, Itakura Y, Ishiwata T, Toyoda M. “Increased gangliosides via polycomb repressor complex 2 contribute to the proliferation and migration of dedifferentiated vascular smooth muscle cells”, IAGG-AOR 2023, Yokohama, 2023.6.12-6.14.
4. Itakura Y, Sasaki N, Toyoda M, “Spatiotemporal changes of cardiac glycans in aging”. IAGG-AOR 2023, Yokohama, 2023.6.12-6.14.
5. Ishiwata T, Sasaki N, Gomi F, Shichi Y, Shinji S, Nonaka K, Toyoda M. “FGFR4 inhibitors reduced cell proliferation and migration, and induced cellular senescence in pancreatic cancer cells”, IAGG-AOR 2023, Yokohama, 2023.6.12-6.14.
6. Ohse K, Toyoda M, Yoshioka M, Kurihara M, Tokyo Medical Biobank Group , Iwata A, Kanai N, “Quality control at the Tokyo Medical Biobank to provide high-quality biospecimens”, IAGG-AOR 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-6.14.
7. Kurihara M, Kondo S, Takahashi K, Hatano K, Ohse K, Yoshioka M, Kanai N, Toba K, Iwata A, IAGG-AOR2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-6.14.
8. Kondo K, Kurihara M, Ihara R, Matsui H, Ohse K, Kato T, Nishina Y, Furuta K, Kanemaru K, Iwata A. “Characteristics of patients with Alzheimer’s disease undergoing lumbar puncture for biomarker confirmation in our hospital”, IAGG-AOR2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.

4 学会発表（国内）

1. 佐々木紀彦、平野和巳、志智優樹、板倉陽子、石渡俊行、豊田雅士. “ポリコーム抑制複合体2の働きで増加するガングリオシドが脱分化型平滑筋細胞の増殖と遊走に関与する”, CVMW2023, 神戸, 2023.12.9-12.10.
2. 板倉陽子、佐々木紀彦、吉田友里香、豊田雅士.“加齢心臓における部位特異的な糖鎖変化が示す組織変化と糖鎖の意義”,第96回日本生化学会大会,福岡,2023.10.31-11.2
3. 板倉陽子、佐々木紀彦、吉田友里香、豊田雅士. “加齢に伴うマウス心臓組織変化と領域特異的な糖鎖変化の意義”, 第42回日本糖質学会,鳥取,2023.9.7-9
4. 板倉陽子、佐々木紀彦、大瀬賢介、吉田友里香、豊田雅士.“加齢に伴う心臓の組織変化と糖鎖の役割”, 第46回日本基礎老化学会, 横浜, 2023.6.16-18.
5. 大瀬賢介,吉田敦, 豊田雅士. “迅速発育抗酸菌*M. abscessus*の多剤耐性臨床分離株の比較ゲノム解析から明らかとなった東アジアにおけるプラスミドの水平伝播”, 第46回日本分子生物学会年会, 神戸, 2023.12.6-8.
6. 佐々木紀彦、平野和巳、志智優樹、板倉陽子、石渡俊行、豊田雅士. “ポリコーム抑制複合体2の働きで増加するガングリオシドが脱分化型平滑筋細胞の増殖と遊走に関与する”, CVMW2023, 神戸, 2023.12.9-12.10.

5 著書等

1. Akiyama S, Saku N, Miyata S, Ite K, Nonaka H, Toyoda M, Kamiya A, Kiyono T, Kimura T, Kasahara M, Umezawa A. Drug metabolic activity as a selection factor for pluripotent stem cell-derived hepatic progenitor cells. ***Prog Mol Biol Transl Sci*** 199:155-178, 2023. (著書、査読なし)
2. Ite K, Toyoda M, Akiyama S, Enosawa S, Yoshioka S, Yukitake T, Yamazaki-Inoue M, Tatsumi K, Akutsu H, Nishina H, Kimura T, Otani N, Nakazawa A, Fukuda A, Kasahara M, Umezawa A. Stem cell challenges and opportunities. ***Prog Mol Biol Transl Sci*** 199:375-395, 2023. (著書、査読なし)
3. 豊田雅士, 梅澤明弘. 第 3 章初代培養法 3-1-4 ヒト間葉系幹細胞 (3) -羊膜由来間葉系幹細胞の樹立, pp105-109, 細胞培養・組織培養の技術 第 4 版（日本組織培養学会） (著書、査読なし)
4. 豊田雅士. 第 6 章初代培養法 6-10 間葉系幹細胞の培養と分化, pp285-290, 細胞培養・組織培養の技術 第 4 版（日本組織培養学会） (著書、査読なし)

6 特許

なし

7 その他

なし

運動器医学

1 論文（誌上発表）：原著

1. Araki H, Hino S, Anan K, Kuribayashi K, Etoh K, Seko D, Takase R, Kohrogi K, Hino Y, **Ono Y**, Araki E, Nakao M. LSD1 defines the fiber type-selective responsiveness to environmental stress in skeletal muscle. ***Elife.*** 2023 Jan 25;12:e84618. 1-29. (原著、査読あり) (IF：7.7、2022)
2. Fujimaki S, **Ono Y***. Murine models of tenotomy-induced mechanical overloading and tail-suspension-induced mechanical unloading. ***Methods Mol Biol.*** 2023 Mar 30; 2640:207-215. (原著、査読あり) (IF：1.1、2022)
Corresponding author.

3. Fujita R, Mizuno S, Sadahiro T, Hayashi T, Sugasawa T, Sugiyama F, **Ono Y**, Takahashi S, Ieda M. Generation of a MyoD knock-in reporter mouse line to study muscle stem cell dynamics and heterogeneity. ***iScience.*** 2023 May 19;26(5): 106592.1-25. （原著、査読あり）(IF：5.8、2022)
4. Oyakawa S, Yamaguchi Y, Kadowaki T, Sakai E, Noguromi M, Tanimoto A, **Ono Y**, Murata H, Tsukuba T, Tsukuba. Rab44 deficiency accelerates recovery from muscle damages by regulating mTORC1 signaling and transport of fusogenic regulator. ***J Cell Physiol.*** 2023 Oct;238(10):2253-2266. (原著、査読あり) (IF：5.6、20202216)
5. Tanimoto A, Yamaguchi Y, Kadowaki T, Sakai E, Oyakawa S, **Ono Y**, Yoshida N, Tsukuba T. Rab44 negatively regulates myoblast differentiation by controlling fusogenic protein transport and mTORC1 signaling. ***J Cell Biochem.*** 2023 Oct;124(10):1486-1502. (原著、査読あり) (IF：4.0、2022)

2　論文（誌上発表）：総説

1. Ortuste Quiroga HP, Fujimaki S, **Ono Y**. Pax7 reporter mouse models: a pocket guide for satellite cell research. ***Eur J Transl Myol*** 12174, 2023. 1-14. (総説、査読あり) (IF：なし、2022)

3　学会発表（国際）

1. **Yusuke Ono** “Molecular mechanisms controlling muscle mass and regeneration”. International Symposium on Signals for Human, Animal and Planetary Health: From Metabolites To Biological Interactions, Nakashima-hall, The University of Tokyo, Tokyo, 2024.3.5. 招待演者
2. **Yusuke Ono** “Dll4 - Notch2 axis: an emerging therapeutic target for muscle wasting diseases”. The Notch meeting XII, Benaki Museum, Athens, Greece, 2023.10.2. 招待演者
3. **Yusuke Ono** “The vascular endothelial cell-derived Dll4 controls skeletal muscle mass”. INSERM-JSPS WORKSHOP: From basic discovery to preclinical modeling at the forefront of muscle disease therapies, Chateau de Montvillargenne, Gouvieux, France, 2023.9.14. 招待演者
4. **Yusuke Ono** “Cellular and molecular mechanisms of muscle atrophy induced by mechanical unloading and metabolic overloading”. The International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.13. 招待演者
5. **Yusuke Ono** “The vascular Dll4 - muscular Notch2 axis controls skeletal muscle mass”. 1st Symposium on ″Skeletal muscle cells in Growth and Disease″, Osaka, 2023.5.1. 招待演者
6. **Yusuke Ono** “Mechanisms regulating the quality and quantity of skeletal muscles”. 8th IFAA FIPAR Webinar, Federative International Program on Anatomical Research (FIPAR), Online, 2023.4.24. 招待演者

4　学会発表（国内）

1. **小野悠介**「微小環境を標的とした骨格筋の再生・可塑性制御」第 23 回日本再生医療学会総会　理事会企画シンポジウム「運動器の再生医療の現状と展望」, 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター, ホテル日航新潟, 新潟, 2024 年 3 月 21 日. 招待演者
2. **小野悠介**「骨格筋幹細胞の運命決定制御と機能的不均一性の分子基盤」第 23 回日本再生医療学会総会　公募シンポジウム「再生医療の未来を拓く幹細胞研究の最前線」, 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター, ホテル日航新潟, 新潟, 2024 年 3 月 21 日. 招待演者
3. **小野悠介**「骨格筋研究の可能性～人生 100 年時代を豊かに生き抜くために～」山梨体育・スポーツ科学学会　令和 5 年度第 1 回 SSC 特別講演, 山梨大学, 甲府、2024 年 1 月 19 日、招待講演
4. **小野悠介**「Notch シグナルを標的にした筋老化制御」, JST 創発天谷パネル SO-TIME, オンライン, 2023 年 11 月 29 日 招待演者
5. **小野悠介**「Dll4-Notch2 軸による骨格筋の可塑性制御」, 第 96 回日本生化学会大会シンポジウム、「臓器リモデリング・可塑性とその破綻」, 福岡国際会議場, 福岡, 2023 年 11 月 2 日, 招待演者
6. **小野悠介**「研究の進め方」若手必見！実力派若手研究者が語る多様な研究環境における研究活動の進め方, 日本体力医学会特別大会―2023 東京シンポジウム―, 早稲田大学大隈記念講堂, 東京, 2023 年 9 月 17 日, 招待演者
7. **小野悠介**「骨格筋の再生・可塑性のメカニズムとその破綻」第 12 回細胞再生医療研究会学術集会, 甲南大学, 神戸, 2023 年 9 月 9 日, 招待演者
8. **小野悠介**「骨格筋幹細胞における運命決定制御の分子メカニズムとその破綻」2023 年日本エピジェネティクス研究会年会, 学術総合センタービル一橋講堂, 東京, 2023 年 6 月 19 日, 招待演者
9. **小野悠介**「加齢マウスを用いたサルコペニア発症メカニズムの解明と介入戦略」第 46 回日本基礎老化学会大会／第 33 回日本老年学会総会合同シンポジウム, パシフィコ横浜ノース, 横浜, 2023 年 6 月 17 日, 招待演者

5　著書等

1. **小野悠介**. 筋萎縮の治療戦略. 糖尿病合併症, メディカル・ジャーナル社, Vol.37, No.2, 209-212, 2023. （総説、査読なし）
2. **小野悠介**, 藤巻慎. Notch シグナルによる骨格筋量調節. 糖尿病・内分泌代謝科, 科学評論社, Vol.57, No.4, 481-478, 2023. （総説、査読なし）邦文著書
3. 小野悠介. がんが及ぼす影響－カヘキシア「よくわかる老年腫瘍学(分担執筆)」日本がんサポーティブケア学会　編, 金原出版株式会社, pp45-54, 2023 年 3 月 20 日. （著書、査読なし）
4. **小野悠介**. 筋持久力増強運動と筋(骨格)系. 「明日の運動療法を磨く理学療法プラクティス：こだわり抜く筋持久力増強運動」文光堂, pp9-17, 2023 年 6 月 24 日. （著書、査読なし）

6　特許

発明の名称　：筋萎縮症治療剤
発明者：小野悠介、藤巻慎
国際出願番号：PCT/JP2022/015725
国際出願日：2022 年 3 月 29 日
米国移行出願日：2023 年 9 月 26 日
米国出願番号：18/552,609

7　その他

なし

――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

老年病理学研究チーム

チームリーダー：石渡俊行

研究チームの概要

本研究チームは病理学の知識と技術を研究基盤とし、老化に伴って発生または増加する老年性疾患、特に膵臓がんなどの高齢者がんと、認知症などの神経疾患について病因の解明と、早期診断法と新規治療法の開発を行なうことを目指している。「高齢者ブレインバンク」、「電子顕微鏡室」と連携し、本研究所における病理組織学的研究や形態学的な研究の中核となっている。
研究員の多くは、病院業務（病理組織診断、剖検診断、神経内科診療）に参加しており、病院の「病理診断科」と密接に連携し、それぞれの特徴を生かしながら研究を進めている。高齢者がんや神経疾患に関する研究員の高い専門性を生かして、センターの患者の診療レベルの向上にも貢献している。「高齢者ブレインバンク」などの公的な研究基盤推進事業を行っている点も本研究チームの特徴である。
国内外の研究所、大学とも共同研究を活発に進めており、研究の成果は学会発表するとともに英文論文として広く国際的に報告してきた。講演会などの広報活動や特許出願など、都民をはじめとした社会への貢献も積極的に進めてきた。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

高齢者がん

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)膵臓がんの老化誘導療法の開発	FGFR4阻害剤の３次元培養での検討	FGFR4阻害剤の３次元培養での検討 新たな老化誘導因子の網羅解析	FGFR4阻害剤の動物実験による確認 新規候補薬の３次元培養での検討	FGFR4阻害剤の動物実験による確認 新規候補薬の動物実験による確認	新規候補薬の動物実験による確認
(2)膵臓がんの多様性の解明と個別化治療の開発	３次元共培養法開発 蛍光多重染色	３次元共培養法開発 蛍光多重染色	３次元共培養法開発	スフェア抑制の検討	スフェア抑制の検討
(3)膵臓がんの転移機序の解明と転移抑制療法の開発	候補薬剤探索	候補薬剤探索	３次元培養での検討	３次元培養での検討	動物実験での検討
(4)剖検組織標本を用いた老年性疾患のテロメア長解析	慢性ストレスと副腎のテロメア研究 喫煙と脳のテロメア研究	認知症のテロメア長解析	認知症のテロメア長解析	フレイルのテロメア長解析	フレイルのテロメア長解析

神経病理学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)嗜銀顆粒性疾患の認知症に加え、運動障害への関与の解明	黒質病変の検討	認知症主体疾患との比較	症例蓄積	症例蓄積	統計病理期間内総括
(2)全身疾患としてのレビー小体病スクリーニングに基づく高齢者フレイル研究	症例蓄積	Body first モデル例の神経病理解析	症例蓄積	症例蓄積	Preclinical, prodromal 群とフレイルとの関与研究
(3)アルツハイマー病疾患修飾療法の実証研究	症例蓄積	症例蓄積	治療経験例の神経病理所見報告	症例蓄積	中間総括
(4)前頭側頭型認知症・筋萎縮性側索硬化症、辺縁系優位TDP43蛋白蓄症の総合的研究	症例蓄積	症例蓄積	症例蓄積	臨床・画像診断の剖検による実証結果発表	病型別検討
(5)高齢者糖尿病の、血管病、認知症への関与に関する神経病理研究	症例蓄積	症例蓄積	症例蓄積	症例蓄積	統計病理結果の中間集計
(6)高齢者脳におけるゲノム発現背景研究	テストサンプル	三次元ゲノム発現プロファイル研究	研究結果の公表		

高齢者がん

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
石渡　俊行	研究部長	研究全体の総括、研究項目(1)～(4)責任者
五味　不二也	研究員	研究全体のデータ収集・分析
野中　敬介	研究員	研究全体のデータ収集・分析
志智　優樹	非常勤研究員	研究全体のデータ収集・分析
進士　誠一	非常勤研究員	研究全体のデータ収集・分析
藤原　正和	非常勤研究員	研究全体のデータ収集・分析
長谷川　文雄	非常勤技術員	電子顕微鏡標本作成・観察・撮影（センター全体）
長谷川　康子	非常勤技術員	病理組織標本作成・観察・撮影（センター全体）

１　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 膵臓がんの老化誘導療法の開発

以前に線維芽細胞増殖因子受容体4（Fibroblast growth factor receptor 4: FGFR4）阻害剤のBLU9931で膵臓がん細胞に老化誘導が起こることを発見し原著論文として報告した。一方、BLU9931とは別のFGFR4シグナル伝達阻害剤の小分子化合物のBLU554は、進行した肝細胞がんの治療薬として臨床試験のフェーズI/IIに入っている。新たにBLU9931の薬剤としての承認を目指すより、すでに肝細胞がんで臨床試験を行なっているBLU554の膵臓がんへの適応拡大の方が現実的と考え、BLU554の膵臓がんに対する効果を検討した。その結果、BLU554にも膵臓がんの増殖を抑制する効果と、膵臓がん細胞を老化誘導する作用があることを確認した。BLU9931とBLU554を含むFGFR4阻害剤による膵臓がんの老化誘導と、ケルセチンなどのセノリティック薬の投与によるがん細胞の細胞死誘導について本センターの知財委員会の審査で承認を受け、米国への特許出願を行なった。

(2) 膵臓がんの多様性の解明と個別化治療の開発

上皮系の膵臓がん細胞株と間葉系の膵臓がん細胞株は人体に類似した立体的な培養（三次元培養)をすることで､全く異なった形態を示し抗がん剤の効果も違うことを以前に発見し報告した。間葉系の肉腫のような性質の膵臓がん細胞を上皮系の膵臓がん細胞へ変化させることで、増殖や浸潤が抑制され抗がん剤の効果が増強するかを検討している。間葉系の膵臓がん細胞に、上皮系のタンパク質への選択的スプライシングを誘導するEpithelial Splicing Regulatory Protein 1 (ESRP1) 遺伝子を導入した安定過剰発現株の作製に成功し、細胞動態の変化と抗がん剤の有効性について検討を行なっている。現時点ではESRP1遺伝子導入膵臓がん細胞株における増殖能の変化や、Gemcitabine, nab-Paclitaxelなどの抗がん剤への感受性の変化は認められない。今後、細胞の遊走能や浸潤能の変化を2次元培養と3次元培養で検討する予定である。上皮系へ形質を転換させることで膵臓がんを均一な上皮系の細胞群に変化させることができれば、有効な治療法の探索が可能になることが期待される。

(3) 膵臓がんの転移機序の解明と転移抑制療法の開発

がん細胞が集簇して塊状となった状態でのがん細胞の遊走能を測定する方法を新たに開発することに成功した。人体内では、膵臓がん細胞は集まって塊状となり（腫瘤形成)、腫瘤が増大するにつれて周囲組織への浸潤や転移の可能性が高まってくる。現在までに、一個一個のがん細胞の水平方向や垂直方向へ移動する能力を測定する方法は広く知られていたが、がん細胞の集まった腫瘤が周囲へどのように広がって行くのかを、*in vitro*で測定する方法はなかった。今回、上皮系と間葉系の膵臓がん細胞株のスフェア（培地中に浮遊した細胞塊）を形成し、そのスフェアが培養プレートに接着して広がって行く様子をタイムラプス撮影し、撮影した多数の写真を人工知能（AI）のディープラーニング法で画像解析した。間葉系の膵臓がん細胞のスフェアは上皮系のスフェアに比べ、早期に培養プレートへ接着し広い範囲に遊走して広がって行くことが明らかとなった。また、最もE-cadherin発現が高く上皮系の性質の強い膵臓がん細胞は、3日間にわたり培養プレートに接着しなかった。今回の方法は膵臓がんの腫瘤が周囲へ広がる機序の解明や、遊走を抑える薬剤の探索に利用可能であり、膵臓がんの転移抑制法の発見に繋がる可能性がある。この方法は膵臓がん以外のがん種でも利用することができるため、広範囲ながん研究への貢献が期待される。膵臓がんの多様性研究を進めるなかで、膵臓がんには上皮系と間葉系のがん細胞が存在することが明らかとなったが、他のがん種で上皮系と間葉系のがん細胞が存在するかは不明であった。膵臓がんと同様に高齢者に多い消化器がんであり、同じ腺がんに分類される大腸がんにおける上皮間葉系形質について検討した。通常の二次元培養を行なった大腸がん細胞株も膵臓がん細胞のように、E-cadherin高値/Vimentin低値の上皮系と、その逆の発現パターンを示す間葉系に分類されることが明らかとなった。しかし、大腸がん培養細胞株を人体内のように立体的に三次元培養すると、二次元培養で間葉系であった細胞株がE-cadherin高値/Vimentin低値の上皮系の形質に変化することを発見した。間葉系の大腸がん細胞株は立体的に増殖すると上皮系に変化することから、大腸がんは膵臓がんに比べて人体内では多様性が少ない可能性が示唆された。

(4) 剖検組織標本を用いた老年性疾患のテロメア長解析

本テーマで病理医として病理解剖を行っている医師研究員は、自ら大部分の剖検症例の副腎を採取するとともに詳細な標本作製を行なっている。がんや白血病などの長期重症疾患の患者の副腎組織は、細胞内脂質が消失し赤色調となることからLipid depletion（細胞内脂質喪失）と呼ばれている。Lipid depletionの副腎ではDehydroepiandrosterone (DHEA)を産生する網状層の実質細胞のみでテロメア長が短縮し、細胞増殖が亢進していることを発見した。DHEAは血中では90%以上がその硫化物であるDHEA-Sとして存在しており、これらの患者ではDHEA-Sの濃度は正常範囲か正常以上の濃度となっていた。このため､長期重症疾患の患者ではDHEAの産生を維持するために、網状層の細胞の増殖が起こっていることが示唆された。今後、DHEAが長期重症疾患などの症状緩和、補充療法や治療などに利用される可能性が考えられる。脳に関しては、喫煙が海馬の神経細胞のテロメア長に及ぼす影響の検討を進めている。現時点では症例数に限りがあるが、女性の喫煙者（ブリンクマン指数200-1800）は非喫煙女性に比べてテロメア長が有意に短縮しているという結果を得ている。今後､症例数を増やすとともに､男性の喫煙者での検討を進める予定である。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 膵臓がんの老化誘導療法の開発

FGFR4阻害剤の中で、すでに進行した肝臓がん患者に対する臨床試験（フェーズI/II）に使用されているBLU554が、膵臓がん培養細胞株で老化誘導を起こすことを明らかにした。以前に報告したBLU9931とBLU554による膵臓がん細胞の老化誘導と、セノリティック薬の効果について、米国特

許出願を行なった（出願番号: 18/260,974)。

膵臓がんの新規治療薬の開発は、数十年にわたり世界中の研究者と製薬会社により行われてきたが極めて成果は乏しい状況である。現在、すでに進行した肝細胞がんで臨床試験に入っているFGFR4阻害剤のBLU554を、膵臓がんへ適応拡大することによって老化誘導がおこることやケルセチンによる相乗効果が期待できることを、本センターの知財グループとともに臨床試験を行なっている製薬会社にアピールし共同研究を目指す計画である。

(2) 膵臓がんの多様性の解明と個別化治療の開発

上皮系と間葉系の膵臓がん細胞が存在し、3次元培養によってもこれらの上皮間葉系形質は保持されることが明らかとなった。上皮系の膵臓がん細胞の方が、間葉系に比べて細胞増殖能も周囲への遊走能も低いことから、間葉系から上皮系への形質転換が可能かを検討するとともに、上皮系に変化することで抗がん剤の効果が増強されるかを検討した。

上皮系への選択的スプライシングを促進させることが報告されている、Epithelial Splicing Regulatory Protein 1 (ESRP1)を、間葉系膵臓がん培養細胞株のKP4とMIA PaCa-2細胞に遺伝子導入し、ESRP1の安定過剰発現細胞を作製した。ESRP1の遺伝子導入膵臓がん細胞株では3次元培養したスフェアの面積と、GemcitabineやNab-Paclitaxelなどの抗がん剤の効果はベクターのみを遺伝子導入した対照の細胞 (Mock)と同様であった。現在、ESRP1遺伝子導入細胞における、スフェアの形態の変化や遊走能や浸潤能について検討を進めている。

(3) 膵臓がんの転移機序の解明と転移抑制療法の開発

近年、発見した膵臓がん細胞のスフェアを形成する方法を基盤に、がん細胞の塊（腫瘤）が周囲へ遊走して行く過程をタイムラプス撮影で経時的に撮影することに成功した。撮影した一万枚以上の画像を、人工知能(AI)のディープラーニング法で画像解析する方法を開発した。この新たな膵臓がんの遊走機序の解明方法を用いて行った研究成果がFrontiers in Cell and Developmental Biology誌のCancer Section (IF: 5.5)に原著論文として採択され、プレス発表を行なった。

膵臓がんの予後が悪い原因の一つが、がんの腫瘤から周囲の組織へがん細胞が遊走し、血管やリンパ管に侵入して他の臓器へ転移を起こすことである。人体内で転移が起こるメカニズムを直接解明することは困難であり、動物実験においてもヒトの膵臓がん細胞は重度の免疫不全マウスでのみ転移することから、実験結果は免疫応答のない特殊な条件下のものとなってしまっている。今回、開発した方法により、膵臓がん細胞の腫瘤から周囲へがん細胞が遊走する時に必要な分子の発見や、がん細胞の遊走を抑制する抗がん剤の開発が可能となる可能性がある。今回開発した方法を用いて、膵臓がんの浸潤や転移を抑制する方法を開発したいと考えている。この方法は、膵臓がんだけでなく、低接着プレートでスフェアを形成することができる大腸がんなどの他のがん種に応用することが可能である。

(4) 剖検組織標本を用いた老年性疾患のテロメア長解析

本センターの病理解剖で得られた副腎組織と、脳組織を用いて組織FISH法にてテロメア長の解析を行なっている。長期重症疾患の患者における、副腎の網状層のテロメア長短縮についての論文が、Frontiers in Endocrinology誌(IF: 5.2)に掲載され、プレス発表を行なった。

がんや白血病などの長期重症疾患により慢性ストレスを受けた副腎組織は、細胞内脂質が消失し赤色調となることからLipid depletionと呼ばれている。副腎組織はコルチゾール産生細胞、カテコラミン産生細胞など各種の内分泌細胞から構成されるが、Lipid depletionの副腎ではDHEAを産生する皮質の網状層の細胞のみテロメア長が短縮し、細胞増殖が亢進していることを発見した。血中ではDHEA-Sの大部分がアルブミンに結合するため、低アルブミン血症では血中DHEA-S濃度も通常は低下する。しかし、これらの患者では血中アルブミン値は低値であったが、DHEA-Sの濃度は正常範囲に維持されていた。このことから、長期重症疾患の患者ではDHEAが生体に重要な役割を果たしており、このため網状層で細胞増殖が起こっていることが示唆された。また、本センターの剖検症例を用いて喫煙が脳の海馬（歯状回顆粒細胞）の神経細胞のテロメア長に及ぼす影響の解析を進めており、女性の喫煙者（平均74.2歳）では非喫煙者（平均76.6歳）に比べてテロメア長が短いという実験結果を得ている。

テロメア長は、細胞老化のマーカーであると同時に細胞が増殖している状態を示す指標となっている。このため、さまざまな疾患における細胞動態の変化を検討することが可能である。今後も、病理解剖が多くブレインバンクを持っている本センターの特徴を生かし、副腎と脳組織のテロメア長解析を用いて行なう予定である。

(5) 大腸癌培養細胞株の3次元培養による多様性の研究【新規追加】

上皮系と間葉系のヒト膵臓がん培養細胞株を、立体的に3次元培養すると、形成されるスフェアの形態と抗がん剤の効果が異なっていることを以前に報告した(Scientific Rep. 2021)。このような上皮間葉系の違いは膵臓がんに特異的なことか、他のがんでも起こっているのかを解明する目的で新規に研究を開始した。5種類の大腸癌培養細胞株で検討したところ、2次元培養では上皮系マーカーのE-cadherinと間葉系マーカーのvimentinの発現量によって膵臓がんと同様に3種類の上皮系と2種類の間葉系のがん細胞に分けられることがわかった。しかし、これらの大腸がん培養細胞株を3次元培養したところ、膵臓がん細胞とは違い全ての細胞株が上皮系の形質に変化することが明らかとなった。この研究成果については現在、論文投稿の準備中である。

大腸がん培養細胞株は、2次元培養では上皮間葉系の形質の違いが明瞭であるが、立体的に3次元培養すると5種類の細胞株が全てE-cadherin高値でvimentin低値の上皮系の形質に変化することを発見した。このため、上皮系と間葉系の大腸がん培養細胞株が形成するスフェアの形態には、膵臓がん培養細胞株にみられたような違いはみられなかった。間葉系の大腸がん培養細胞株も、3次元培養することで腺管様の構造や上皮系細胞マーカーのPARD3の発現が認められた。
大腸がん細胞は、3次元培養で間葉系から上皮系の性質に変化することから、人体内では多様性が失われている可能性がある。このような、多様性の欠如と抗がん剤の効果について検討することで大腸がんの特徴を明らかにするとともに、膵臓がんの特異性も解明できる可能性がある。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜膵臓がん＞
【センター内】心血管老化再生研究テーマ、プロテオーム研究テーマ、分子機構研究テーマ、記憶神経科学研究テーマ
【センター外】日本医科大学、日本獣医生命科学大学、金沢大学がん進展制御研究所、近畿大学、東京大学、カリフォルニア大学
＜大腸がん＞
【センター外】日本医科大学
＜病理解剖組織を用いたテロメア＞
【センター内】神経病理学研究テーマ、病理診断科
＜消化管病理評価における組織透明化技術の応用＞
【センター内】消化器・内視鏡内科
＜移植組織におけるテロメア長＞
【センター外】自治医科大学

神経病理学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
齊藤　祐子	研究部長	研究全体の総括
村山　繁雄	常勤特任研究員	研究全体の実務担当
小幡　真希	常勤研究員	ブレインバンクコーディネーター
森島 真帆	非常勤研究員	ブレインバンクリサーチマネジャー
松原 知康	非常勤研究員	ブレインバンク業務
荒川 晶	非常勤研究員	ブレインバンク業務
原 愛徒	非常勤研究員	ブレインバンク業務
内野　彰子	非常勤研究員	ブレインバンク業務
川田　菜月	常勤技術員	ブレインバンク業務

１　第四期中期計画における研究成果の概要

(1)嗜銀顆粒性疾患の認知症に加え、運動障害への関与の解明

部門で高齢者認知症における重要性を明らかにした嗜銀顆粒性認知症に関して、認知症だけでなく、パーキンソン症状を呈し、DATスキャンが低下する症例群が存在することが、脳神経内科、精神科、放射線診断科との共同研究で明らかになってきた。嗜銀顆粒に関しては発見者で本来解

剖学者であるBraakは認知症との関係のみを問題にしており、脳幹病変や運動障害に関しては検討していない。今回脳幹・基底核を検討し、嗜銀顆粒は早期に黒質と側坐核を障害する点で、Alzheimer型神経原線維変化（ADNFT）とは進展パターンが異なること、黒質をおかしレビー小体型認知症との鑑別が問題となることを明らかにし、雑誌公表した（Arakawa A et al. Neuropathology. 2024. doi: 10.1111/neup.12973.）。

(2)全身疾患としてのレビー小体病スクリーニングに基づく高齢者フレイル研究

疫学神経病理手法により、高齢者の1/3に全身のどこかにレビー小体病理が存在し、フレイルの原因になりうることを明らかにし、国際誌に発表でき、読売新聞に掲載された2020年度の研究を踏襲し症例数をさらに増加させた。

本邦ブレインバンクの特徴は全身剖検を前提とする点であり、脳のみの蒐集よりなる欧米ブレインバンクとは一線を画する。また当センターは病理診断科も国内で一流の評価を得ている点で、唯一の対抗施設であるSun City Body Bankが神経病理医一人のリカバリーからなる点で、レベルが異なる。今年度は特に末梢自律神経系を中心におかす純粋自律神経不全症が、これまで7000以上蓄積された開頭剖検例中3例になったことを受け、レビー小体病理の全身分布の進展パターンの特異性を国内・国際学会において報告し、現在論文執筆中である。

(3)アルツハイマー病疾患修飾療法の実証研究

Fluorbethabenの生前献脳同意登録者をリクルートすることでの実証研究国際治験において、当センターは米国に次ぐ貢献を行った実績がある。生前献脳同意登録患者の治験参加推進を継続することで、これまで共同研究先で本邦アルツハイマー病疾患修飾薬治験数上位である姫路中央病院ブレインバンク委託例で、老人班削減効果の形態病理学的実証研究を、論文執筆中である。

レカネマブが健康保険収載され、必要案件を全て満たすセンターは、他施設と比較し、群を抜いて症例数の増加がある。。剖検例はまだ無いが、投与症例に関する実証研究、特に副反応であるARIAE、ARIAHの剖検例は未だに僅少で、国際的貢献が期待できる。

(4)前頭側頭型認知症・筋萎縮性側索硬化症、辺縁系優位TDP43蛋白蓄症の総合的研究

THK5351 PETを用いた中心前回（運動野）への集積と、磁気二発刺激の抑制欠如に基づく上位運動ニューロン機能評価を国内・学会に発表し、さらに生前献脳同意登録を推進することで、今年度までに本登録例を三例得ることが出来ている。さらに大阪大学発達障害・精神・神経疾患ブレインバンクとの共同で、大阪浅香山病院前頭側頭型認知症生前献脳同意登録例の解析に協力し、国際誌発表、国内・国際学会発表を行うことが出来た。

(5)高齢者糖尿病の、血管病、認知症への関与に関する神経病理研究

国立長寿研究里博士の、糖尿病マウスとアルツハイマー病モデルマウスとの掛け合わせ実験での成果を検討する予定であったが、共同研究先でのヒト検体での実証の枠組みにおいて、センター臨床情報へのアクセスが必要との提案に対し、現在検討中である。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1)嗜銀顆粒性疾患の認知症に加え、運動障害への関与の解明

嗜銀顆粒の進展ステージに脳幹・基底核を含めることでの多数例検討を行った。パーキンソン症状を明らかに呈した5例について、検討結果を日本神経学会、日本認知症学会に報告し、論文発表した(Arakawa A et al. Neuropathology. 2024. doi: 10.1111/neup.12973.)（。さらに脳幹での進展ステージ、基底核での進展ステージを評価した。脳幹では、青斑核、縫線核が最初期で、黒質がそれに続き、晩期に黒質をおかすアルツハイマー型神経原線維変化（ADNFT）と比べて黒質が早期におかされることが明らかとなった。また基底核では側坐核が最初期で、マイネルト基底核がそれに続き、ADNFTとの違いが明らかになった。このステージ分類についても論文執筆中である。

嗜銀顆粒については、これまで英米での存在承認が得られていなかったが、我々の提供した側坐核検体のCryo EM解析で、独自の構造物であることがCambridgeに認められ、英国で昨年存在承認を得た。米国神経病理学会でも協力関係にあったUCSF Brain Bankより報告がされ、米国でも存在承認を得た。その折り、高齢者コントロールを多数提供していることへの謝辞をいただいた。

(2)全身疾患としてのレビー小体病スクリーニングに基づく高齢者フレイル研究

全身剖検に基づく、レビー小体病理の全身スクリーニングに基づき、高齢者の1/3にレビー小体

病理が出現し、フレイルの原因になりうる一昨年度報告から、昨年度は自律神経症状が長期に前景に立つ純粋自律神経不全症について、蓄積剖検例から3例を抽出し検討した。いずれも長期の自律神経症状を呈した症例である。末梢優位にレビー小体病理が出現し、黒質が比較的保たれる点が共通していた。蓄積αシヌクレインの構造解析、ゲノム背景研究を推進中である。また嗅球低形成剖検例でのレビー小体病理が嗅球・辺縁系をspareすることを明らかにし、brain first body first仮説への傍証を得ることが出来た。

レビー小体病理の全身スクリーニングに関して、凍結リソースを含め蓄積しているのは国際的に高齢者ブレインバンクのみである。レビー小体は脳幹型、皮質型に分けられてきたが、これは末梢がパーキンソン病ブレインバンクではリソース構築されていなかったことによる。我々の検討により、全身疾患としてのレビー小体病の研究が初めて可能となった。

(3)アルツハイマー病疾患修飾療法の実証研究

脳神経内科、脳卒中科では疾患修飾療法治験を継続して受けている。治験参加者について、常勤バイオバンクコーディネーターにより、生前同意登録を推進している。また生前献脳同意登録者への治験参加を、治験コーディネーターを通じ推進している。

今回レカネマブと髄液アミロイドβ定量が保険収載されることで、レカネマブ投与者への生前献脳同意登録を推進していく予定である。

現時点では髄液バイオマーカー、アミロイドPETの治験が集積されている段階だが、今後レカネマブ投与症例の剖検を得ることで、さらなる知見を得ることが可能となる。

(4)前頭側頭型認知症・筋萎縮性側索硬化症、辺縁系優位TDP43蛋白蓄症の総合的研究

筋萎縮性側索硬化症は、上位・下位運動ニューロンをおかし、認知症をしばしば伴う。当施設は脳神経内科において、下位運動ニューロンの神経生理学的検査法による検出では国内のトップレベルを誇る。一方上位運動ニューロンの検出は臨床上しばしば困難である。この問題に、運動野二発磁気刺激による抑制欠如を豪州のグループが報告し、留学によりその方法をセンターに委嘱し、現在推進中である。本邦では千葉大学が行っているが、豪州と並び、剖検による実証研究は行っていない。THK5351はタウペットとして開発されたが、MAOBリガンドで星状膠細胞と結合することを、我々は生前献脳同意登録例を用いたリガンドアッセイで証明した。臨床画像との共同研究で、磁気二発刺激とTHK5351 PETを用いた上位運動ニューロン病変評価をすすめ、国内外学会に報告、今年度までに剖検例を三例得ることが出来た。

また発達障害・精神・神経疾患ブレインバンクとの共同研究により、意味性認知症に末期錐体路病変が加わることで、摂食障害の原因となることを明らかに出来、国内外学会で発表し、現在論文執筆中である。

辺縁系優位TDP43蛋白蓄積症については、全例スクリーニングを継続することで、高齢者変性型認知症における役割を明らかにする努力を行っている。

(5)高齢者糖尿病の、血管病、認知症への関与に関する神経病理研究

糖尿病診断基準の変遷と、治療法の進歩により、後方視的病歴検討による研究は難しく、前方視的蓄積に切り替えた。現在症例を蓄積中である。糖尿病モデルマウスとアルツハイマーモデルマウスの掛け合わせ研究の知見をヒト脳で検証する試みに関して、分子病理的観点からの検討を開始する方向転換を行った。アルツハイマー型老年性変化は高齢者ブレインバンク登録全例に存在し、現在結果のまとめと考察を議論中である。

(6) 高齢者脳におけるゲノム発現背景研究【新規追加】

東京大学・大阪大学岡田教授を主任研究者とし、生前本人同意でバイオバンクジャパンに登録された患者中、ご遺族同意で高齢者ブレインバンクに登録された症例の、三次元ゲノムプロファイルの検討を行う研究を開始した。

バイオバンクジャパンはセンター倫理委員会承認済みの事業である。高齢者ブレインバンクも同様である。両者のデータベース共有に関しては、倫理委員会承認は不要との見解を頂いているが、さらに検討していく予定である。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜ブレインバンク＞

【センター内】臨床画像、脳神経内科、放射線科、病理診断科、精神科、リハビリテーション科

【センター外】大阪大学、新潟大学、東京都医学総合研究所、東京大学、徳島大学

＜ブレインバンクリソースを用いた研究＞
【センター内】老年病態研究チーム

論文・学会発表（令和5年度）

高齢者がん

1　論文（誌上発表）：原著

1. ◎Yuuki Shichi, Fujiya Gomi, Yasuko Hasegawa, Seiichi Shinji, Kimimasa Takahashi, ★Toshiyuki Ishiwata. Artificial intelligence-based analysis of time-lapse images of sphere formation and process of plate adhesion and spread of pancreatic cancer cells. Front. Cell Dev. Biol., 17 Nov. 2023. （査読あり） (IF: 5.5, 2022).
2. ◎★Keisuke Nonaka, Kaiyo Takubo, Junko Aida, Yoriko Watai, Akiko Komatsu, Fujiya Gomi, Yuuki Shichi, Yuto Yamazaki, Toshiyuki Ishiwata, Hironobu Sasano, Tomio Arai. Accelerated telomere shortening in adrenal zona reticularis in patients with prolonged critical illness. Front Endocrinol (Lausanne). 2023 Sep 4:14:1244553. （査読あり） (IF: 5.2, 2022).
3. Yuta Doshida, Shinichi Hashimoto, Sadahiro Iwabuchi, Yuka Takino, Toshiyuki Ishiwata, Toshiro Aigaki & Akihito Ishigami. Single-cell RNA sequencing to detect age-associated genes that identify senescent cells in the liver of aged mice. Scientific Reports. (2023) 13: 14186. （査読あり） (IF: 4.6, 2022).
4. Yoko Itakura, Yasuko Hasegawa, Yurika Kikkawa, Yuina Murakami, Kosuke Sugiura, Chiaki Nagai-Okatani, Norihiko Sasaki, Mariko Umemura, Yuji Takahashi, Tohru Kimura, Atsushi Kuno, Toshiyuki Ishiwata, Masashi Toyoda. Spatiotemporal changes of tissue glycans depending on localization in cardiac aging. Regenerative Therapy 22 (2023) 68-78. （査読あり）(IF: 4.3, 2022).
5. ◎★Keisuke Nonaka, Morito Kurata, Moriaki Tachibana, Akiko Komatsu, Yuuki Shichi, Fujiya Gomi, Toshiyuki Ishiwata, Kou Miyamoto, Tomio Arai. Chromosomal analysis of clonally related B-cell lymphomas with discordant immunoglobulin light-chain restrictions at different anatomical sites. Pathology International 2023 Feb;73(2):100-102. （査読あり）(IF: 2.2, 2022).
6. Kaiyo Takubo, Junko Aida, Michael Vieth, Mutsunori Fujiwara, Tetsuo Nemoto, Tomio Arai, Ken-Ichi Mukaisho, Atsuko Nakazawa, Toshiyuki Ishiwata. Cardiac mucosa in neonates. Pathology, Research and Practice, 2023 Jun:246:154498. （査読あり）(IF: 2.8, 2022).
7. 保坂祥介, 小野敏嗣, 中里徹矢, 小松明子, 野中敬介, 石渡俊行, 新井冨生. 加齢による肝胆膵の生理的変化. 肝胆膵 86 (6) 679-683, 2023.（査読なし）(IF:なし)
8. Yoshibumi Ueda, Yuri Miura, Nario Tomishige, Naotoshi Sugimoto, Megumi Murase, Genki Kawamura, Norihiko Sasaki, Toshiyuki Ishiwata, Takeaki Ozawa. Mechanistic insights into cancer drug resistance through optogenetic PI3K signaling hyperactivation. Cell Chemical Biology. 29, 1576-1587, November 17, 2022. （査読あり）(IF: 8.6, 2022)
9. Masaki Michishita, Kazuhiko Ochiai, Rei Nakahira, Daigo Azakami, Yukino Machida, Tomokazu Nagashima, Takayuki Nakagawa, Toshiyuki Ishiwata. mTOR pathway as a potential therapeutic target for cancer stem cells in canine mammary carcinoma. Front Oncol. 2023 Jan 27:13:1100602 （査読あり）(IF: 4.7, 2022)
10. Tomio Arai, Akiko Komatsu, Nobuo Kanazawa, Keisuke Nonaka, Toshiyuki Ishiwata. Clinicopathological and molecular characteristics of gastric papillary adenocarcinoma. Pathol Int 2023 Aug;73(8):358-366. （査読あり）(IF: 2.2, 2022)

2　論文（誌上発表）：総説

1. ◎Yuuki Shichi, Fujiya Gomi, Norihiko Sasaki, Keisuke Nonaka, Tomio Arai, ★Toshiyuki Ishiwata. Epithelial and mesenchymal features of pancreatic ductal adenocarcinoma cell lines in two- and three-dimensional cultures. J Pers Med. 2022 May 4;12(5):746. （査読あり）(IF: 3.0, 2023)

3　学会発表（国際）

1. Toshiyuki Ishiwata, Norihiko Sasaki, Fujiya Gomi, Yuuki Shichi, Seiichi Shinji, Masashi Toyoda. FGFR4 inhibitors reduced cell proliferation and migration, and induced cellular senescence in pancreatic cancer. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-15, 2023.
2. Tomio Arai, Akiko Komatsu, Takuya Nagasaka, Keisuke Nonaka, Toshiyuki Ishiwata. Age-related increase of proportion of microsatellite instability in gastric, colorectal, and endometrial carcinomas. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-15, 2023.
3. Keisuke Nonaka, Toshiyuki Ishiwata, Fujiya Gomi, Yuuki Shichi, Tomio Arai. Telomere length differences in adrenocortical cells between men and women. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-15, 2023.
4. Yuta Doshida, Shinichi Hashimoto, Sadahiro Iwabuchi, Yuka Takino, Toshiyuki Ishiwata, Toshiro Aigaki, Akihito Ishigami. Identification of age-associated genes in liver of aged mice. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, June 12-15, 2023.
5. Yuuki Shichi, Fujiya Gomi, Yasuko Hasegawa, Seiichi Shinji, Kimimasa Takahashi, Toshiyuki Ishiwata. Enhanced morphofunctional characteristics of pancreatic ductal adenocarcinoma cell lines in three-dimensional culture. Second JCA/AACR Precision Cancer Medicine International Conference. Kyoto, Japan, June 28-30, 2023.

4　学会発表（国内）

1. 野中敬介、上野幸恵、小松明子、志智優樹、五味 不二也、石渡俊行、津坂恭央、永田卓士、粕谷　豊、新井冨生. 「前立腺腺癌の診断から 10 年後に小細胞神経内分泌癌に形質転換し比較的急速な経過で死亡した 1 剖検例」第 112 回

日本病理学会総会、下関、2023 年 4 月 13 日～15 日.
2. 土志田裕太, 橋本真一, 岩淵禎弘, 滝野有花, 石渡俊行, 相垣敏郎, 石神昭人. ドキソルビシンによる老化誘導が老化関連遺伝子の発現に及ぼす影響. 第 46 回日本基礎老化学会大会、横浜、2023 年 6 月 16 日 - 2023 年 6 月 18 日.
3. 五味不二也、佐々木紀彦、志智優樹、野中敬介、進士誠一、豊田雅士、石渡俊行. 「膵臓がん細胞の FGFR4 阻害剤による増殖抑制と老化誘導」とびら第 11 回研究交流フォーラム.お茶の水、2023 年 7 月 28 日.
4. 進士誠一、志智優樹、山田岳史、松田明久、上原 圭、横山康行、高橋吾郎、岩井拓磨、武田幸樹、栗山 翔、宮坂俊光、 香中伸太郎、小川祐太郎、五味不二也、石渡俊行、吉田 寛. 3 次元培養によるヒト大腸がん細胞の形態機能解析. 第 82 回日本癌学会学術総会、横浜、2023 年 9 月 21 日～23 日.
5. 高橋吾郎、進士誠一、山田岳史、松田明久、上原 圭、横山康行、岩井拓磨、武田幸樹、栗山 翔、宮坂俊光、香中伸太郎、 小川祐太郎、石渡俊行、吉田 寛. 閉塞性大腸癌における腫瘍浸潤免疫細胞の評価. 第 82 回日本癌学会学術総会、横浜、2023 年 9 月 21 日～23 日.
6. 五味不二也 、志智優樹 、進士誠一 、石渡俊行. FGFR4 阻害剤 BLU554 は膵癌細胞の増殖、浸潤を抑制し細胞老化を誘導する. 第 82 回日本癌学会学術総会、横浜、2023 年 9 月 21 日～23 日.
7. 志智優樹、五味不二也、長谷川康子、進士誠一、高橋公正、 石渡俊行. 膵癌培養細胞株におけるスフェアの形成過程および接着遊走過程のタイムラプス解析. 第 82 回日本癌学会学術総会、横浜、2023 年 9 月 21 日～23 日.
8. 今江理恵子, 萬谷 博, 濱弘太郎, 横山和明, 石渡俊行, 遠藤玉夫.第 96 回日本生化学会大会、福岡、2023 年 10 月 31 日～11 月 2 日.
9. 六反啓文 、新井冨生、石渡俊行、牛久哲男. 早期胃型腫瘍から粘液癌への進展についての病理学的検討. 第 34 回日本消化器癌発生学会総会、高崎、2023 年 11 月 24 日、25 日.
10. 永坂拓也, 神野聖也, 荒川 昌, 野中敬介, 六反啓文, 佐藤優樹, 保坂祥介, 小野敏嗣, 齊藤祐子, 新井冨生. 胆嚢原発神経内分泌癌の 1 剖検例. 第 69 回日本病理学会総会秋期特別総会, 久留米, 2023 年 11 月 9 日
11. 六反啓文, 新井冨生, 石渡俊行, 牛久哲男. 低異型度の腺窩上皮型腫瘍から胃粘液癌への進展に関する病理学的検討. 第 96 回日本胃癌学会総会, 京都市, 2024 年 2 月 29 日.
12. 六反啓文, 新井冨生, 石渡俊行, 牛久哲男. 早期胃型腫瘍から粘液癌への進展についての病理学的検討. 第 34 回日本消化器癌発生学会総会, 群馬県高崎市, 2023 年 11 月 24 日.
13. 石渡俊行. 個別化治療を目指した、膵がんの幹細胞と多様性の研究.金沢大学がん進展制御研究所第 4 回腫瘍制御共同研究セミナー、 金沢、2024 年 3 月 23 日.
14. 志智優樹、津元裕樹、五味不二也、野中敬介、長谷川康子、藤原正和、進士誠一、高橋公正、三浦ゆり、石渡俊行.3 次元培養下における膵臓がん培養細胞株のムチン産生能：プロテオーム解析と免疫細胞化学染色による検討.第 133 回日本病理学会総会、名古屋市、2024 年 3 月 28 日～30 日.

５　著書等

なし

６　特許

特許出願の米国移行　「医薬組成物」TMG-084JPPC, 出願番号: 18/260,974, 出願日 : 2023/7/11

７　その他

なし

神経病理学

１　論文（誌上発表）: 原著

1. ◎Higashihara M, Yamazaki H, Izumi Y, Kobayashi M, Nodera H, Oishi C, Iwata A, Murayama S, Kaji R, ★Sonoo M : Far-field potential of the compound muscle action potential as a reliable marker in amyotrophic lateral sclerosis. Muscle Nerve. 2023 Sep;68(3):257-263. doi: 10.1002/mus.27829. Epub 2023 Apr 22. (査読あり、IF: 3.22)
2. ◎★Beck G, Yonenobu Y, Kawai M, Ikenaka K, Sera F, Ozono T, Shimada Y, Yamashita R, Sakata Y, Morii E, Yoshinaga T, Ando Y, Murayama S, ★Mochizuki H: RNA interference in late-stage hereditary transthyretin amyloidosis: a clinicopathological study. J Neurol. 2023 Sep;270(9):4544-4548. doi: 10.1007/s00415-023-11754-7. Epub 2023 May 8. (査読あり、IF: 4.85)
3. ◎Matsubara T, Murayama S, Tsukamoto T, Sano T, Mizutani M, Tanei ZI, Takahashi Y, Takao M, ★Saito Y: Parkinson's disease in a patient with olfactory hypoplasia: a model case of ″body-first Lewy body disease″ providing insights into the progression of α-synuclein accumulation. J Neurol. 2023 Oct;270(10):5090-5093. doi: 10.1007/s00415-023-11783-2. Epub 2023 May 29. (査読あり、IF:4.85)
4. ◎Uchino A, ★Saito Y, Oonuma S, Murayama S, Yagishita S, Kitamoto T, Hasegawa K: An autopsy case of variably protease-sensitive prionopathy with Met/Met homogeneity at codon 129. Neuropathology. 2023 Dec;43(6):486-495. doi: 10.1111/neup.12911. Epub 2023 May 30. (査読あり、IF:1.91)
5. ◎Tachida Y, ◎Iijima J, Takahashi K, Suzuki H, Kizuka Y, Yamaguchi Y, Tanaka K, Nakano M, Takakura D, Kawasaki N, Saito Y, Manya H, Endo T, ★Kitazume S: O-GalNAc glycosylation determines intracellular trafficking of APP and Aβ production. J Biol Chem. 2023 Jul;299(7):104905. doi: 10.1016/j.jbc.2023.104905. Epub 2023 Jun 9. (査読あり、IF:5.16)
6. ◎Tarutani A, ◎Lövestam S, Zhang X, Kotecha A, Robinson AC, Mann DMA, Saito Y, Murayama S, Tomita T, ★Goedert M, Scheres SHW, ★Hasegawa M : Cryo-EM structures of tau filaments from SH-SY5Y cells seeded with brain extracts from cases of Alzheimer's disease and corticobasal degeneration. FEBS Open Bio. 2023 Aug;13(8):1394-1404. doi: 10.1002/2211-5463.13657. Epub 2023 Jul 7. (査読あり、IF:2.69)
7. ◎★Mori K, Shigenobu K, Beck G, Uozumi R, Satake Y, Suzuki M, Kondo S, Gotoh S, Yonenobu Y, Kawai M, Suzuki Y, Saito Y, Morii E, Hasegawa M, Mochizuki H, Murayama S, ★Ikeda M : A heterozygous splicing variant IVS9-7A > T in intron 9 of the MAPT gene in a patient with right-temporal variant frontotemporal dementia with atypical 4 repeat tauopathy. Acta Neuropathol Commun. 2023 Aug 10;11(1):130. doi:

10.1186/s40478-023-01629-3. (査読あり、IF:7.8)
8. ◎★Tarutani A, Kametani F, Tahira M, Saito Y, Yoshida M, Robinson AC, Mann DMA, Murayama S, Tomita T, ★Hasegawa M: Distinct tau folds initiate templated seeding and alter the post-translational modification profile. Brain. 2023 Dec 1;146(12):4988-4999. doi: 10.1093/brain/awad272. (査読あり、IF:13.5)
9. ◎Fujita K, Homma H, Jin M, Yoshioka Y, Jin X, Saito Y, Tanaka H, ★Okazawa H：Mutant α-synuclein propagates via the lymphatic system of the brain in the monomeric state. Cell Rep. 2023 Aug 29;42(8):112962. doi: 10.1016/j.celrep.2023.112962. Epub 2023 Aug 16. (査読あり、IF:9.42)
10. ◎★Watanabe H, Murakami R, Tsumagari K, Morimoto S, Hashimoto T, Imaizumi K, Sonn I, Yamada K, Saito Y, Murayama S, Iwatsubo T, ★Okano H：Astrocytic APOE4 genotype-mediated negative impacts on synaptic architecture in human pluripotent stem cell model. Stem Cell Reports. 2023 Sep 12;18(9):1854-1869. doi: 10.1016/j.stemcr.2023.08.002. Epub 2023 Aug 31. (査読あり、IF:7.76)
11. ◎★Saito Y, Ishiyama A, Saito Y, Komaki H, Sasaki M: Myelin abnormalities in merosin-deficient congenital muscular dystrophy. Muscle Nerve. 2024 Jan;69(1):55-63. doi: 10.1002/mus.28002. Epub 2023 Nov 7. (査読あり、IF:3.22)
12. ◎★Kurano.M, Saito Y, Yatomi Y: Comprehensive analysis of metabolites in postmortem brains of patients with Alzheimer's disease. J Alzheimers Dis. 2024;97(3):1139-1159. doi: 10.3233/JAD-230942. (査読あり、IF:4.47)
13. ◎★Aiba I, ◎Hayashi Y, Shimohata T, Yoshida M, Saito Y, Wakabayashi K, Komori T, Hasegawa M, Ikeuchi T, Tokumaru AM, Sakurai K, Murayama S, Hasegawa K, Uchihara T, Toyoshima Y, Saito Y, Yabe I, Tanikawa S, Sugaya K, Hayashi K, Sano T, Takao M, Sakai M, Fujimura H, Takigawa H, Adachi T, Hanajima R, Yokota O, Miki T, Iwasaki Y, Kobayashi M, Arai N, Ohkubo T, Yokota T, Mori K, Ito M, Ishida C, Tanaka M, Idezuka J, Kanazawa M, Aoki K, Aoki M, Hasegawa T, Watanabe H, Hashizume A, Niwa H, Yasui K, Ito K, Washimi Y, Mukai E, Kubota A, Toda T, Nakashima K: J-VAC study group: Clinical course of pathologically confirmed corticobasal degeneration and corticobasal syndrome. Brain Commun. 2023 Nov 3;5(6):fcad296. doi: 10.1093/braincomms/fcad296. eCollection 2023. (査読あり、IF:4.5)
14. ◎★Ito M, Fujii N, Kohara S, Tanaka M, Takao M, Mihara B, Saito Y, Mizuma A, Nakayama T, Netsu S, Suzuki N, Kakita A, ★Nagata E: Elevation of inositol pyrophosphate IP7 in the mammalian spinal cord of amyotrophic lateral sclerosis. Front Neurol. 2024 Jan 11:14:1334004. doi: 10.3389/fneur.2023.1334004. eCollection 2023. (査読あり、IF:4)
15. ◎Funakawa K, ★Kurihara M, Takahashi K, Higashihara M, Hara M, Mitsutake A, Ishiura H, Tokumaru AM, Sonoo M, Murayama S, Saito Y, Iwata A: Proximal sensory neuropathy and cerebellar ataxia as presenting symptoms of NOTCH2NLC-related neuronal intranuclear inclusion disease. J Neurol Sci. 2024 Mar 15:458:122915. doi: 10.1016/j.jns.2024.122915. Epub 2024 Feb 2. (査読あり、IF:3.18)
16. ◎★Kikuchi M, Miyashita A, Hara N, Kasuga K, Saito Y, Murayama S, Kakita A, Akatsu H, Ozaki K, Niida S, Kuwano R, Iwatsubo T, Nakaya A, ★Ikeuchi T, Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative; Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative: Polygenic effects on the risk of Alzheimer's disease in the Japanese population. Alzheimers Res Ther. 2024 Feb 27;16(1):45. doi: 10.1186/s13195-024-01414-x. (査読あり、IF: 6.12)
17. ◎Kurihara M, ◎Matsubara T, Morimoto S, Arakawa A, Ohse K, Kanemaru K, Iwata A, Murayama S, ★Saito Y：Neuropathological changes associated with aberrant cerebrospinal fluid p-tau181 and Aβ42 in Alzheimer's disease and other neurodegenerative diseases. Acta Neuropathol Commun. 2024 Mar 27;12(1):48. doi: 10.1186/s40478-024-01758-3. (査読あり、IF:7.8)
18. ◎★Inoue K, Sugase S, Naka T, Ikeuchi T, Murayama S, Fujimura H: An autopsy case of diffuse atypical argyrophilic grain disease (AGD) with presenile onset and three-year course of motor and cognitive impairment. Neuropathology. 2024 Jun;44(3):200-207. doi: 10.1111/neup.12949. Epub 2023 Nov 7. (査読あり、IF:1.91)
19. ◎Uchino A, ★Saito Y, Tokuda S, Yagishita S, Murayama S, Hasegawa K: An autopsy case of MV 2K+C subtype of Creutzfeldt-Jakob disease. Neuropathology. 2024 Feb 14. doi: 10.1111/neup.12964. Online ahead of print. (査読あり、IF:1.91)

２　論文（誌上発表）：総説

1. 村山繁雄, 齊藤祐子：前頭側頭型認知症（FTD） 病態はどこまでわかったか. CLINICAL NEUROSCIENCE 41 巻 9 号, 2023.9, 1216-1219（査読あり）
2. 山本達也, 荒木信之, 齊藤祐子：パーキンソン病に伴う自律神経障害 排尿排便障害と QOL. 自立神経（0288-9250）60 巻 3 号, 2023.9, 103-105（査読なし）
3. 村山繁雄, 齊藤祐子：検査からみる神経疾患 皮膚生検でわかる神経疾患. CLINICAL NEUROSCIENCE 41 巻 11 号, 2023.11, 1518-1519（査読あり）

３　学会発表（国際）

1. Murayama S, Saito Y, Takao M, Mihara B, Kaneda D: 2023 Annual Report of Japaneses Brain Bank Net Work for Neuroscience Research. Annual Meeting of the American Association of Neuropathologists (AANP), Montley, California, USA, June8-11 2023
2. Matsubara T, Murayama S, Tsukamoto T, Sano T, Mizutani M, Tanei ZI, Takahashi Y, Takao M, Saito Y: Investigation of Parkinson's disease with olfactory hypoplasia as a candidate for body-first propagation of α-synuclein. Annual Meeting of the American Association of Neuropathologists (AANP), Montley, California, USA, June8-11 2023
3. Arakawa A, Matsubara T, Higashihara M, Orita M, Shioya A, Sengoku R, Murayama S, Saito Y ： Brainstem and basal ganglia pathology in dementia with argyrophilic grains presenting with parkinsonism. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023

4. Matsubara T, Murayama S, Tsukamoto T, Sano T, Mizutani M, Tanei ZI, Takahashi Y, Takao M, Saito Y : Investigation of Lewy body-related α-synucleinopathy in the peripheral nervous systems as a possible background for physical frailty in Parkinson's disease. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023
5. Murayama S, Saito Y, Takao M, Kaneda D, Mihara B : The Japanese Brain Bank Network for Neuroscience Research: its contribution to aging research. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023
6. Obata M, Hara M, Arakawa A, Orita M, Matsubara T, Morishima M, Murayama S, Arai T, Saito Y : Will the autopsy diagnosis to be a support to the bereaved family? - Report on Brain Bank Pre-Registration－. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023
7. Saito Y, Miyashita T, Matsubara T, Ikeuchi T, Takao M, Murayama S : Investigation of aging deterioration of cryopreserved brains. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023
8. Hara M, Saito Y, Shibukawa M, Matsubara T, Arakawa A, Murayama S : Neuropathological investigation of pure autonomic failure. IAGG-AOR2023, Yokohama, June 12-14 2023
9. Murayama S, Saito Y, Takao M, Mihara B, Kaneda D: 2023 Annual Report of Japaneses Brain Bank Net Work for Neuroscience Research. Alzheimer's Association International Conference(AAIC), Amsterdam, Netherlands, July 16-20 2023,
10. Murayama S, Saito Y : The contribution of Brain Bank for Aging Research to pathophysiology of Parkinson's disease. International Congress of Parkinson's disease and movement disorders, Copenhagen, Denmark, August 27-31 2023
11. Beck G, Yamashita R, Yonenobu Y, Ikenaka K, Murayama S, Mochizuki H: A tau-directed monoclonal antibody could alter the tau pathology of progressive supranuclear palsy. International Congress of Parkinson's disease and movement disorders, Copenhagen, Denmark, August 27-31, 2023
12. Murayama S, Saito Y, Beck G, Inoue K, Yamadera M, Mochizuki H: Establishment of Brain Bank for Neurodevelopmental, Neurological and Psychiatri Disorers. International Congress of Neuropathology (ICN2023) , Berlin, Germany, September 13-16 2023
13. Murayama S, Saito Y : Propagation of Lewy Body- related Alpha- synucleinopathy in Aging, from Brain Bank for Aging Research Project, Japan. ICKMDS2023 4th International Conference of Korean Movement Disorder Society, Busan, Korea, December 1-2 2023

４　学会発表（国内）

1. Ikeda A, Funayama M, Yoshida M, Li Y, Yoshino H, Inoshita T, Shiba-Fukushima K, Meng H, Amo T, Aiba I, Saito Y, Atsuta N, Nakamura R, Tohnai G, Sone J, Saito Y, Murayama S, Izumi Y, Kaji R, Morita M, Taniguchi A, Nishioka K, Imai Y, Sobue G, Hattori N: Characterization of CHCHD2 variants linked to amyotrophic lateral sclerosis and Parkinson's disease. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
2. 金丸和富, 栗原正典, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 岩田　淳, 齊藤祐子, 村山繁雄：アルツハイマー病における脳脊髄液バイオマーカーと MMSE との関連. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
3. Hamano T, Imai M, Yamamoto R, Sasaki H, Nicholas K, Murayama S, Morishima M, Naiki H, Yen SH, Aoki K, Asano R, Kitazaki Y, Yamaguchi T, Endo Y, Enomoto S, Shirafuji N, Hayashi K, Ikawa M, Yamamura O, Nakamoto Y: Degradation of Tau Oligomer by Autophagy. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
4. 村山繁雄, 齊藤祐子, 別宮豪一, 望月秀樹, 米延友希, 山下里佳, 井上貴美子, 山寺みさき, 森　千晃, 須藤素弘, 大江田知子：日本ブレインバンクネットワーク関西拠点の構築. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
5. 東原真奈, 石橋賢士, 小松大樹, 栗原正典, 松原知康, メノン パールバティ, バンデンボス メフディー, 波多野敬子, 井原涼子, 齊藤祐子, 加藤貴行, 仁科裕史, 金丸和富, 園生雅弘, 村山繁雄, 徳丸阿耶, ブチッチ スティーブ, 石井賢二, 岩田　淳：筋萎縮性側索硬化症における運動皮質興奮性と astrogliosis の関連についての検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
6. 松原知康, 荒川　晶, 原　愛徒, 織田麻琴, 村山繁雄, 齊藤祐子：扁桃体病理に乏しい Limbic predominant age-related TDP43 proteinopathy(LATE)の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
7. 荒川　晶, 塩谷彩子, 原　愛徒, 織田麻琴, 松原知康, 仙石錬平, 村山繁雄, 戸田達史, 齊藤祐子：高齢者連続剖検コホートを用いた中脳における嗜銀顆粒の分布に関する検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
8. 原　愛徒, 村山繁雄, 荒川　晶, 織田麻琴, 松原知康, 戸田達史, 齊藤祐子：純粋自律神経不全症の神経病理学的検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
9. 川浪　文, 宮下真信, 宮城雄一, 冨樫尚彦, 館野琴菜, 市川つわ, 村山繁雄, 柳下三郎, 長谷川一子：当院における特発性小脳失調症の臨床病理学的検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
10. 齊藤祐子, 宮下哲典, 松原知康, 池内　健, 高尾昌樹, 村山繁雄：凍結保存脳の経年劣化についての検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
11. Mitsutake A, Kawai M, Arakawa A, Kakumoto T, Matsukawa T, Shirota Y, Sakuishi K, Mitsui J, Yogo M, Suzuki M, Hattori N, Ishiura H, Murayama S, Tsuji S, Toda T: A clinical, genetic, and pathological study of autosomal recessive spinocerebellar ataxia-8 in Japan. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
12. Yamaguchi T, Asano R, Sada K, Kanaan NM, Murayama S, Aoki K, Sasaki H, Yen SH, Takaku N, Kitazaki Y, Endo Y, Enomoto S, Shirafuji N, Ikawa M, Yamamura O, Hamano T: Syk inhibitor decreased oligomeric tau. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
13. Tezuka T, Ishiguro M, Taniguchi D, Ogata J, Ishii R, Ikeda A, Li Y, Yoshino H, Matsui T, Kaida K, Funayama M, Nishioka K, Saito Y, Murayama S, Imai Y, Hattori N: Characterization of new disease-associated LRRK2 variants found in Parkinson's disease cohort. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
14. 舟川　開, 栗原正典, 高橋健祐, 小松大樹, 波多野敬子, 井原涼子, 東原真奈, 仁科裕史, 徳丸阿耶, 原　愛徒, 齊藤祐子, 光武明彦, 柴田頌太, 石浦浩之, 金丸和富, 村山繁雄, 岩田　淳：成人発症 NOTCH2NLC 関連神経核内封入体病における感覚障害・小脳性運動失調の検討. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31-6.3
15. 貴島晴彦, 押野　悟, 谷　直樹, クーウイミン, 下野久理子, 別宮豪一, 村山繁雄：LEAT に属する Polymorphous low-grade neuroepithelial tumor of the young の特徴. 第 51 回日本小児神経外科学会, 宇都宮, 2023.6.9-10

16. 秋冨友佑，髙橋健祐，東原真奈，近藤壯一朗，井原涼子，仁科裕史，岩田　淳，原　愛徒，齊藤祐子，加藤貴行：経過６年の原因不明の嚥下障害に対して大腿直筋生検を施行し，診断が得られた封入体筋炎の１例．第 687 回日本内科学会関東地方会，東京，2023.6.10
17. 吉井光司朗，裴　有安，齊藤祐子，堀内恵美子，橋田秀司：非特異的な高次機能障害を来し脳生検を要した自己免疫性 GFAP アストロサイトパチーの 72 歳男性例．第 245 回日本神経学会関東・甲信越地方会，東京，2023.6.17
18. 光武明彦，坂井悠人，馬場悠輔，荒川　晶，齊藤祐子，津本　学，池田　茂，岩田信恵：COVID-19 感染後、両側中小脳脚病変を呈した CADASIL の 60 歳男性例．第 245 回日本神経学会関東・甲信越地方会，東京，2023.6.17
19. 髙橋健祐，平　賢一郎，東原真奈，原　愛徒，加藤貴行，齊藤祐子，仁科裕史，岩田　淳：嚥下障害で発症し病初期に四肢筋力低下が目立たず、経過 6 年で診断に難渋した封入体筋炎の 88 歳男性例．第 245 回日本神経学会関東・甲信越地方会，東京，2023.6.17
20. 小比賀俊介，濱本暁子，安食孝洋，山下里佳，杉山慎太郎，木下允，別宮豪一，角田渓太，村山繁雄，望月秀樹：免疫グロブリン療法を導入した FOSMN の一例．第 125 回日本神経学会近畿地方会，大阪，2023.7.1
21. 矢下大輝，代田悠一郎，瀬戸瑛子，日野理美，角元利行，石浦浩之，久保田　暁，前田明子，佐竹　渉，早川美奈子，箱崎眞結，鈴木理樹，池村雅子，村山繁雄，齊藤祐子，戸田達史：発声障害で発症し、広範な白質高信号を認めた 72 歳女性例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
22. 山村良平，角田渓太，米延友希，別宮豪一，木下　允，村山繁雄，望月秀樹：9 年の経過で左右非対称性に進行した末梢神経障害の一例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
23. 松原知康，村山繁雄，塚本　忠，佐野輝明，水谷真志，種井善一，高橋祐二，高尾昌樹，齊藤祐子：嗅球低形成を伴うパーキンソン病の 1 例－body-first 進展のモデルケースか？第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
24. 栗原正典，松原知康，金丸和富，岩田　淳，齊藤祐子，村山繁雄：Pathological background of decreased CSF Aβ42 in dementia with Lewy bodies and progressive supranuclear palsy．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
25. 大谷麗子，鴻江真維，河上　緒，吉田眞理，村山繁雄，野中　隆，長谷川成人：神経変性疾患における TMEM106B アミロイドの局在．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
26. 原　愛徒，村山繁雄，荒川　晶，織田麻琴，松原知康，戸田達史，齊藤祐子：純粋自律神経不全症の神経病理学的検討．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
27. 光武明彦，荒川　晶，河合三津保，代田悠一郎，寺田さとみ，後藤　順，安永瑛一，池村雅子，前田明子，作石かおり，石浦浩之，松川敬志，三井　純，辻　省次，戸田達史，村山繁雄，齊藤祐子：小脳に特徴的病変を認めた、経過約 30 年の緩徐進行性小脳失調を呈した SCAR8（*SYNE1* ataxia）の 1 剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
28. 井上貴美子，寒川　真，山根俊之，山寺みさき，森　千晃，須藤素弘，豊岡圭子，藤村晴俊，村山繁雄：抗 N-methy1-D-aspartate receptor(NMDAR)脳炎の二症例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
29. 小幡真希，原　愛徒，荒川　晶，織田麻琴，松原知康，森島真帆，村山繁雄，新井冨生，齊藤祐子：ブレインバンク事前ドナー登録 20 年の活動報告．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
30. 村山繁雄，齊藤祐子，別宮豪一，望月秀樹，米延友希，山下里佳，井上貴美子，山寺みさき，森　千晃，須藤素弘，大江田知子，松本博志，池田　学，森井英一：発達障害・精神・神経疾患ブレインバンク 2022 年度年次報告．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
31. 別宮豪一，村山繁雄，山下里佳，米延友希，望月秀樹：大阪大学神経内科ブレインバンクの現状報告．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
32. 須藤素弘，井上貴美子，森　千晃，山寺みさき，豊岡圭子，村山繁雄：長期経過に伴う筋委縮の進行したジストロフィー症例における筋生検．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
33. 清水幹人，別宮豪一，奥野龍禎，星　拓，隅蔵大幸，東田京子，深阪　勲，永島　希，伊藤　舞，村山繁雄，望月秀樹，坂口　学：特徴的な画像所見を呈した MOG 抗体関連疾患（MOGAD）の 2 生検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
34. 仙石錬平，栗原正典，松原知康，金田大太，瀧川洋史，花島律子，池内　健，長谷川成人，岩田　淳，齊藤祐子，村山繁雄：JALPAC 登録後に最終診断が確認された剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
35. 荒川　晶，松原知康，塩谷彩子，織田麻琴，原　愛徒，仙石錬平，村山繁雄，戸田達史，齊藤祐子：嗜銀顆粒性疾患における黒質線条体ドパミン病理の免疫組織学的研究．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
36. 後藤良司，栗原正典，原　愛徒，荒川　晶，松原知康，岩田　淳，新井冨生，村山繁雄，齊藤祐子：嗜銀顆粒性認知症の一純粋例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
37. 相川未希，松原知康，竹内亮子，鵜飼康平，樋口直史，齊藤祐子，村山繁雄，福武敏夫：慢性期統合失調症の高齢者一剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
38. 和田山智哉，清水幹人，木村一皓，馬場孝輔，別宮豪一，長野清一，野呂瀬一美，彦坂健児，村山繁雄，望月秀樹：潜在性トキソプラズマ症を合併した中枢神経浸潤 Erdheim-Chester 病の 1 例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
39. 小渡貴司，松原知康，寺田達弘，松平敬史，高嶋浩嗣，川口典彦，齊藤祐子，村山繁雄，小尾智一：高度なアルツハイマー病理を認めたダウン症候群の一例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
40. 紀乃正志，松原知康，城　妃咲，喜多　誠，高場啓太，濱田康弘，川北梨愛，野中和香子，高田忠幸，鎌田正紀，齊藤祐子，村山繁雄：家族性認知症が疑われ、生前ブレインバンクに登録していた死亡時 96 歳の一剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
41. 山寺みさき，井上貴美子，須藤素弘，森　千晃，豊岡圭子，藤村晴俊，秀嶋　信，神吉英明，安岡弘直，村山繁雄，望月秀樹：*SNCA* duplication を伴う家族性パーキンソン病の一例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
42. 森　千晃，須藤素弘，山寺みさき，豊岡圭子，井上貴美子，藤村晴俊，村山繁雄：TDP-43 変異家族性筋萎縮性側索硬化症の一剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8

43. 竹内亮子，松原知康，佐藤　光，佐藤　進，齊藤祐子，村山繁雄，福武敏夫：全経過 5 か月で死亡した筋萎縮性側索硬化症の 72 歳女性剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
44. 別宮豪一，米延友希，河井真季子，池中建介，大薗達彦，島田勇毅，山下里佳，森井英一，村山繁雄，望月秀樹：パチシランを投与した遺伝性 ATTR アミロイドーシスの 1 剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
45. 竹中乃由利，米延友希，別宮豪一，木下　允，鈴木健大，川崎貴裕，小河浩太郎，村山繁雄，望月秀樹：末梢神経障害に対し免疫療法が奏功した全身性強皮症の生検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
46. 和泉唯信，松原知康，織田雅也，藤田浩司，宮本亮介，山上　圭，渡辺千種，立山義朗，齊藤祐子，村山繁雄：Tokushima ALS Research の臨床-病理実証研究．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
47. 山下里佳，村山繁雄，別宮豪一，本山雄一，下野九理子，貴島晴彦，望月秀樹：Calbindin 染色にて entrapped neuron が明瞭に観察できた pediatric diffuse astrocytoma の 1 例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
48. 寺田達弘，荒川　晶，松原知康，松平敬史，高嶋浩嗣，川口典彦，荒木保清，佐藤克也，齊藤祐子，村山繁雄，小尾智一：E200K 変異および M232R 変異を認めた遺伝性クロイツフェルトヤコブ病の一例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
49. 古谷祥吾，別宮豪一，河井真季子，吉澤秀憲，米延友希，大薗達彦，森井英一，村山繁雄，望月秀樹：真菌性全脳炎（Acrophialophora fusispora）の 1 剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
50. 渋川茉莉，荒川　晶，狩野　修，齊藤祐子，村山繁雄：孤発性 Creutzfeldt-Jakob 病 MM1>2 の 57 歳男性剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
51. 山上　圭，松原知康，藤田浩司，西田善彦，齊藤祐子，村山繁雄，和泉唯信：行動異常を呈した高齢発症認知症の 77 歳男性の剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
52. 米延友希，釜江和恵，清川博貴，別宮豪一，池田　学，森井英一，村山繁雄，望月秀樹：中心前回に変性と TDP 病理を伴った意味性認知症の一剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
53. 矢下大輝，代田悠一郎，瀬戸瑛子，日野理美，角元利行，石浦浩之，久保田　暁，前田明子，佐竹　涉，早川美奈子，箱崎眞結，鈴木理樹，池村雅子，村山繁雄，齊藤祐子，戸田達史：発声障害で発症し、広範な白質高信号を認めた FTD-MND の 72 歳女性剖検例．第 64 回日本神経病理学会総会学術研究会，神戸，2023.7.6-8
54. 宮本勝哉，繁信和恵，森　康治，佐竹祐人，山下里佳，別宮豪一，村山繁雄，池田　学：発症から緩やかな経過を経て死亡し、病理解剖にて左優位の意味性認知症の確定診断に至った一例．第 132 回近畿精神神経学会，滋賀，2023.7.8
55. 小林伸行，小坂瑠衣，嶋田和也，石井 梓，岡 直美，村山繁雄，齊藤祐子，近藤一博：アルツハイマー病とヘルペスウイルス感染に関する分子病理学的研究．第 70 回日本ウイルス学会学術集会，仙台，2023.9.26-28
56. 原　愛徒，齊藤祐子，荒川　晶，織田麻琴，松原知康，戸田達史，村山繁雄：純粋自律神経不全症の神経病理学的検討．第 76 回日本自律神経学会総会，埼玉，2023.10.28-29
57. 井上貴美子，米谷　廉，齋藤慶介，澤田秀幸，須藤素弘，大江田知子，山寺みさき，森　千晃，豊岡圭子，藤村晴俊，村山繁雄：易転倒傾向で発症し，L-dopa 有効のパーキンソニズムを呈した大脳皮質基底核変性症の一例．第 49 回臨床神経病理懇話会・第 24 回日本神経病理学会近畿地方会，滋賀，2023.11.18-19
58. 松原知康，和泉唯信，織田雅也，渡邉千種，立山義朗，齊藤祐子，村山繁雄：Totally-locked in state に至った長期生存 ALS の一剖検例．第 49 回臨床神経病理懇話会・第 24 回日本神経病理学会近畿地方会，滋賀，2023.11.18-19
59. 豊岡圭子，須藤素弘，森　千晃，山寺みさき，井上貴美子，村山繁雄，藤村晴俊：シャルコー・マリー・トゥース病（CMT1A）とパーキンソン病（PD)と診断されていた 102 歳の剖検例．第 49 回臨床神経病理懇話会・第 24 回日本神経病理学会近畿地方会，滋賀，2023.11.18-19
60. 栗原正典，松原知康，森本　悟，荒川　晶，金丸和富，岩田　淳，齊藤祐子，村山繁雄：脳脊髄液アルツハイマー病バイオマーカーと剖検脳病理所見の関係の詳細な検討．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
61. 金丸和富，金丸晶子，栗原正典，波多野敬子，井原涼子，東原真奈，仁科裕史，岩田　淳，齊藤祐子，村山繁雄：アルツハイマー病における CSF biomarker と MMSE との関連．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
62. 大谷麗子，鴻江真維，河上　緒，吉田眞理，村山繁雄，齊藤祐子，野中　隆，長谷川成人：神経変性疾患における TMEM106B アミロイドの局在．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
63. 原　範和，宮下哲典，長谷川舞衣，月江珠緒，春日健作，齊藤祐子，村山繁雄，池内　健：アルツハイマー病理の進行に着目した剖検脳トランスクリプトーム解析．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
64. 村山繁雄，齊藤祐子，美原　盤，金田大太，高尾昌樹：日本神経科学ブレインバンクネットワーク 2023 年次報告．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
65. 高山賢一，鈴木　貴，齊藤祐子，井上　聡：アルツハイマー型認知症における性ホルモン関連 RNA 結合タンパク質の予防的役割の解析．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
66. 荒川　晶，松原知康，塩谷彩子，原　愛徒，仙石錬平，村山繁雄，齊藤祐子：Parkinsonism を呈した嗜銀顆粒性認知症の臨床像の特徴．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
67. 繁信和恵，篠崎和弘，谷口典男，佐竹祐人，別宮豪一，山下里佳，陸　雄一，吉田眞理，村山繁雄，池田　学：40 歳未満で発症した行動障害型前頭側頭型認知症（bvFTD）自験例 4 例の臨床的特徴の検討．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
68. 小幡真希，原　愛徒，荒川　晶，森島真帆，新井冨生，村山繁雄，齊藤祐子：高齢者の解剖に至る背景について－高齢者ブレインバンクドナー登録者の検討－．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
69. 北爪しのぶ，立田由里子，飯島順子，高橋一人，鈴木英明，高倉大輔，川崎ナナ，齊藤祐子，萬谷　博，遠藤玉夫：O-糖鎖付加修飾が APP の細胞内輸送と Aβ の産生量を規定する．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
70. 田平万莉奈，亀谷富由樹，齊藤祐子，吉田眞理，David M.A. Mann，長谷川成人：神経変性疾患タウ線維における翻訳後修飾の同定と定量解析．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
71. 宮下哲典，金田大太，原　範和，光森理紗，大日方　藍，月江珠緒，長谷川舞衣，五十嵐一也，春日健作，菊地正隆，齊藤祐子，村山繁雄，橋詰良夫，新飯田俊平，尾崎浩一，池内　健：日本人 AD における LATE,PART の感受性遺伝子解析．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26

72. 齊藤祐子，宮下哲典，森島真帆，荒川　晶，原　愛徒，池内　健，高尾昌樹，村山繁雄：ブレインバンクのリソースの質の担保と研究利用検体選択についての検討．第 42 回日本認知症学会学術集会，奈良，2023.11.24-26
73. 酒井久美子，葛　林楯，別宮豪一，門脇　淳，大薗達彦，木村康義，村山繁雄，望月秀樹：ミルタザピン・メフロキン併用療法が奏功した、特発性 CD4 リンパ球減少症を背景とする進行性多巣性白質脳症の一例．第 126 回日本神経学会近畿地方会，大阪，2023.12.16

5　著書等
なし

6　特許
なし

7　その他
なし

――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

神経画像研究チーム

チームリーダー：豊原潤

研究チームの概要・目的

ポジトロン断層法（PET）を用いて加齢及び高齢者特有の疾患、特に認知症の脳の病態生理を明らかにすること、また、がんの病態を適切に診断するため、これまで開発してきたPET診断法をベースにして新しい診断法を開発することを目的とする。これらの研究を通して認知症の早期診断・病態診断やフレイルの発症機序解明、高齢者がんの病態診断、また様々な介入や治療の効果判定に科学的根拠を与えるなど、センターの重点医療に貢献する。

PET薬剤科学研究テーマでは、主に新規PET薬剤の開発と初期臨床試験と応用、有用な薬剤の導入とそれらの新しい臨床課題への応用、PETデータ解析法の開発等を行なう。

第四期では、PETを用いた認知症に関する新たな画像解析手法と放射性薬剤の開発に取り組み、新規放射性薬剤[F-18]FSW-100(ヒストン脱アセチル化酵素６)の世界初臨床使用(first-in-human)への到達を目指す。また、放射性薬剤の新しい標識合成方法や小動物イメージングに関する基盤的な研究を展開し、PET薬剤開発や基礎老化研究への応用を試みる。更に、第三期に引き続き、治験使用薬の製造を通して社会貢献を行う。

PET画像診断テーマでは、臨床的に有用なPET薬剤を用いて、センター内外の医療機関等と共にヒト生体を対象としたPET臨床研究を行い、研究成果を社会全体や患者の診療へ還元する。
第四期では、センター他部門と連携の下、アミロイドPET・タウPETを各種バイオマーカーと横断的かつ縦断的に解析し、センターの基盤である加齢と認知症の研究を加速させる。また、グリアイメージング等を用いて、センターの診療を支援する。更に、国内外の多施設共同研究や治験へ参加することを通して、認知症克服を目指した社会貢献を行う。

AI画像解析テーマでは、PET画像などの解析、あらゆる分野のAI研究、理論医学研究を行う。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

PET薬剤科学

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)放射性薬剤の開発に関する研究:PET脳血流診断剤の開発	[^{11}C]MMP非臨床開発	[^{11}C]MMP臨床使用承認	[^{11}C]MMP認定倫理審査委員会	[^{11}C]MMP初期臨床試験開始	[^{11}C]MMP初期臨床試験終了
(2)放射性薬剤の開発に関する研究:HDAC6リガンドの開発	[^{18}F]FSW-100 非臨床開発	[^{18}F]FSW-100 臨床使用承認	[^{18}F]FSW-100 認定倫理審査委員会	[^{18}F]FSW-100 初期臨床試験開始	[^{18}F]FSW-100 初期臨床試験終了
(3)放射性薬剤の開発に関する研究：その他の新規放射性薬剤の開発	血管病新規薬剤評価	血管病新規薬剤特許申請	血管病新規薬剤非臨床開発	血管病新規薬剤臨床使用承認	血管病新規薬剤認定倫理審査委員会
	その他新規薬剤創薬研究	その他新規薬剤創薬研究	その他新規薬剤創薬研究	その他新規薬剤創薬研究	その他新規薬剤創薬研究（見極め）
(4)基盤技術の開発に関する研究	治験使用薬製造	治験使用薬製造	治験使用薬製造	治験使用薬製造	治験使用薬製造
	基盤技術(標識・画像解析・小動物イメージング)	基盤技術(標識・画像解析・小動物イメージング)	基盤技術(標識・画像解析・小動物イメージング)	基盤技術(標識・画像解析・小動物イメージング)	基盤技術(標識・画像解析・小動物イメージング)

PET画像診断

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1-1)脳の加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測の研究:PETバイオマーカーによる解	アミロイドPET、タウPET、FDG-PETの症例蓄積				
	アミロイドPETの有用性評価と定量値の意義評価				

析	MK6240-PET開始 MK6240-PETの有用性評価 タウPET定量値の意義評価
(1-2)脳の加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測の研究：健常高齢者コホートの画像追跡	健常高齢者の画像追跡(FDG-PET・3D-MRI) アミロイドPET追加の協議 タウPET追加の協議 正常加齢の縦断的解析 認知症・フレイルに関与する要因の検討
(2)アストログリオーシス画像などPET診断技術の臨床応用とその支援となる画像処理技術の開発	アストログリオーシスPETの臨床応用(他のグループと共同) THK5351-PETによる病態評価 SMBT-1の開始と性能評価 SMBT-1による病態評価 新規型PET薬剤(ITMMなど)の有用性評価と臨床研究(他のグループと共同) 旧来型PET薬剤(FDGなど)の臨床研究(他のグループと共同)
(3)認知症克服へ向けた国内外の多施設共同研究及び治験への参加	認知症多施設共同研究・治験へ参加

AI画像解析

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)顔による認知症スクリーニング方法の推進	顔写真収集			AIモデルの開発	
(2)究室との共同研究の推進	微小出血検出プログラム 白質病変の分類プログラム				
(3)動態解析の研究	新規トレーサーの解析 REICA法共同研究				
(4)Iを用いたデータの可視化	AI可視化共同研究				
(5)理論医学の推進	赤血球寿命共同研究 脳灌流圧モデル共同研究				

PET薬剤科学

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
豊原　潤	研究部長	研究全体の総括 研究項目(1)・(3)・(4)標識合成・小動物イメージング・治験使用薬製造の責任者 研究全体のデータ収集・分析
坂田　宗之	研究員	研究項目(4)画像解析の責任者 研究全体のデータ収集・分析
多胡　哲郎	研究員	研究項目(2)の責任者 研究全体のデータ収集・分析
石井　賢二	専門部長	研究項目(1)・(2)のデータ収集・分析
石橋　賢士	研究副部長	研究項目(1)・(2)のデータ収集・分析
上高　祐人	技術員	研究項目(1)・(2)のデータ収集・分析
山本　由美	非常勤研究員	研究項目(3)新規標的の責任者 研究項目(3)新規標的のデータ収集・分析
森田　光洋	非常勤研究員	研究項目(3)新規標的のデータ収集・分析
田中　浩士	非常勤研究員	研究項目(4)標識合成のデータ収集・分析
日浦　幹夫	非常勤研究員	研究項目(1)のデータ収集・分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

PETを用いる研究や診療の発展は、その基礎となる放射性薬剤や画像解析法の開発に大きく依存している。PET薬剤科学研究テーマでは、神経変性疾患や認知症の診断、病態機能解明に役立つ新規放射性薬剤の開発を中心に研究活動を行っている。第四期中期計画では、これに加えて血管病や高齢者糖尿病に関連した画像診断や病態機能解明に役立つ新規放射性薬剤の開発も行う。第四期中期計画終了までに、PETを用いた認知症に関する新たな放射性薬剤の非臨床開発に取り組み、1つ以上の有用な放射性薬剤の臨床使用(first-in-human)に到達することを目指している。さらに、機械学習などの最新技術を応用した、臨床診断を支援する医用画像解析法の開発に関する研究も進める。また、アルツハイマー病治療薬のグローバル治験に対応するため、治験薬GMP準拠下での治験使用薬の製造と出荷を行い、研究成果の社会的な還元に努める。

上記の研究を円滑に進めるためには、基盤技術の確立も重要である。新規PET薬剤の開発には新しい標識化学や適切なモデル動物での評価研究が不可欠である。新規放射性薬剤の開発を効率的に進めるため、所内外の研究機関と連携して、新規標識合成法の開発、疾患モデル動物のPETイメージングと画像解析法の開発にも取り組む。

今年度は、糖尿病を伴う高齢者の認知症診断を目的としたPET脳血流イメージング剤の[^{11}C]MMPならびに、神経変性疾患と関連したヒストン脱アセチル化酵素６（HDAC6）に結合するリガンド[^{18}F]FSW-100についての非臨床開発を進め、いずれもセンター短寿命放射性薬剤臨床利用委員会（以下、委員会）での審議に必要なデータ取得を終了した。[^{18}F]FSW-100については、2023年11月14日に開催した委員会で審議がなされ、2023年11月28日に資料の修正をもって承認された。また、血管病に対する新規放射性薬剤の候補化合物について、疾患モデル動物を用いた検討から有用性が見出されたため、特許出願の準備（明細書の作成）を開始した。

新規放射性薬剤の創薬研究について、今年度は、探索段階の分子標的に対する候補化合物を見出すことは出来なかった。

基盤技術開発として、ペプチドやタンパク質の標識化に有用な標識基の開発を進め、モデル化合物としてアミノ酸への^{18}F標識を行った。疾患モデル動物のPETイメージング研究を推進するために、既設の小動物PET装置MIP-100を更新し、新たに小動物用高性能前臨床トータルボディPET/CT Si78を導入した。

画像解析法に関する研究では、第三期中期計画に引き続き、機械学習を応用した、医用画像解析法の開発に関する研究を進め、これまで関心領域単位で行っていた学習を三次元画像のボクセル単位での深層学習へと展開し、機種間差補正手法について検討した。また、データ駆動型短時間フレーム体動補正に関する研究として、自作のファントム駆動装置を用いたファントム実験および臨床研究で計測されたデータを用いた評価を行った。

第三期中期計画に引き続き、治験薬GMP準拠下での治験使用薬の製造と出荷を行い、研究成果の社会的な還元に努めた。また、DEMCIRC研究やレカネマブの診療で用いられるPET薬剤Vizamylの製造に必要な日本核医学会PET薬剤製造施設認証の監査を受け(3年毎の4回目)、適合(A判定)した。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 放射性薬剤の開発に関する研究：PET脳血流診断剤の開発

第三期中期計画にて見出された、糖尿病を伴う高齢者の認知症診断を目的としたPET脳血流イメージング剤の[^{11}C]MMPについて、臨床使用を目的とした非臨床試験を開始した。安全性試験（単回投与毒性試験、変異原性試験）、被ばく線量推定ならびに３ロット製造試験を終了した。

^{18}F標識化合物については、目的物を得られていないため、引き続き合成方法の検討を実施している。

非臨床試験の結果、[^{11}C]MMPは、定められた品質試験規格に適合して製造可能であり、安全性試験（無毒性量>3.55mg/kg：臨床予定最大投与量の10,000倍に相当）ならびに製造試験の結果から、当センターで製造された[^{11}C]MMP投与に伴うリスクは毒性学的に十分許容できる範囲であることが確認された。マウス体内分布試験から推定されたヒト被ばく線量は臨床予定投与量である740MBqを投与した場合、実効線量4mSv、最大吸収線量が膀胱壁の43mGyであり、いずれも国際放射線防護委員会で勧告された（ICRP Recommendation）研究志願者の線量拘束値1-10mSvならびに米国放射性薬剤研究員会（RDRC）の最大吸収線量<50mSvの範囲内であった。

非臨床試験の一環として、一般的な脳内の受容体28種とそれらの基質の結合に対するMMPの阻害作用を評価した結果、Sigma受容体以外の受容体に対してMMPは、10μMの濃度で50%以上の阻害作用を示すことはなかった。MMPのSigma受容体への弱い結合性に関しては、MMPの母体骨格であるフェニルアルキルアミンに由来する。この性質は[^{11}C]MMPの後期相における脳局所洗出し速度へ影響すると考えられ、すでに報告（Toyohara et al. EJNMMI Res 2020）しているように、初期相の[^{11}C]MMPの脳取り込みがより正確に脳血流を反映するとした結果と矛盾しない結果であった。

[^{11}C]MMPは予定通りに研究が進行しており、当初計画通り令和８年度にはfirst-in-human試験へ到達する見込みである。

^{18}F標識化合物については、^{18}F-トリフルオロメチル化が技術的に難しく、世界中の研究機関でチャレンジしているが、安定的に高収率で得られる手法が開発されていない。当該研究分野の学術的な進歩をフォローしつつ、より確立された手法である芳香族の^{18}F化によって得られる化合物についても検討を進める。

(2) 放射性薬剤の開発に関する研究：HDAC6リガンドの開発

第三期中期計画にて見出された、候補化合物の[^{18}F]FSW-100について、臨床使用を目的とした非臨床試験を終了し、短寿命放射性薬剤臨床利用委員会に臨床使用承認について審議し（2023年11月14日）、承認された（2023年11月28日）。

非臨床試験の結果、[^{18}F]FSW-100は、定められた品質試験規格に適合して製造可能であり、安全性試験（無毒性量>2.5mg/kg：臨床予定最大投与量の10,000倍に相当）ならびに製造試験の結果から、当センターで製造された[^{18}F]FSW-100投与に伴うリスクは毒性学的に十分許容できる範囲であることが確認された。マウス体内分布試験から推定されたヒト被ばく線量は臨床予定投与量である185MBqを投与した場合、実効線量3mSv、最大吸収線量が膀胱壁の23mGyであり、いずれもICRP Recommendationの研究志願者の線量拘束値1-10mSvならびに米国RDRCの最大吸収線量<50mSvの範囲内であった。また、有効性の評価として薬物動態や代謝がヒトに近い覚醒サルを用いたPET計測を行い、[^{18}F]FSW-100は脳への十分に高い放射能集積を示すこと、HDAC6に選択的な阻害剤によって[^{18}F]FSW-100の集積が90%近く阻害されたことから、ヒトにおいても脳内HDAC6を選択的に画像化可能であることが示唆された。

[^{18}F]FSW-100は予定通りに研究が進行しており、当初計画通り令和８年度にはfirst-in-human試験へ到達する見込みである。

(3) 放射性薬剤の開発に関する研究：その他の新規放射性薬剤の開発

血管病に対する新規放射性薬剤の候補化合物について、心疾患モデル動物での評価研究を進め、実施例を蓄積した。現在、特許出願に向けて明細書の作成ならびに権利範囲拡大のため他疾患モデル動物での実施例の追加を検討している。

その他、探索段階の他分子標的に対するリガンドについて、今年度は未だ候補化合物を見いだせていない。

心筋梗塞モデルラットにおいて、左前下降枝以降の血管支配領域に相当する心筋梗塞部位を欠損像として極めて明瞭に描出可能であった。また、巨細胞性心筋炎モデルラットにおいては、病巣に相当する複数の部位の欠損像を描出可能であり、重症度の指標とされる心筋/体重の重量比が増大するにしたがい、心筋への集積が減少した。さらに、薬剤誘発性心不全モデルマウスにお

いて、急性期では対照群に比べて有意な集積の低下を示すものの、慢性期では逆に有意な集積の増大を認めた。

共同研究先の白鳥製薬にて安全性試験が並行して実施されており、知的財産対応後は、臨床応用へ向けて研究を進める。当センターでの臨床研究実施に向けて、心臓核医学の研究者を呼び込むため、知財対応後の積極的な学術発表と連携先の探索を実施する。

(4) 基盤技術の開発に関する研究

新規標識合成法の開発として、ペプチドやタンパク質の標識化に有用な標識基の開発を進め、モデル化合物としてアミノ酸への^{18}F標識を行った。

疾患モデル動物のPETイメージング研究を推進するために、既設の小動物PET装置MIP-100を更新し、新たに小動物用高性能前臨床トータルボディPET/CT Si78を導入した。

画像解析法に関する研究では、第三期中期計画に引き続き、機械学習を応用した、医用画像解析法の開発に関する研究を進めた。これまで用いた関心領域単位で情報抽出したデータに対する機械学習から、三次元画像のボクセル単位の深層学習に発展した研究を開始し、最初の題材として旧機種のPET専用機と現行のPET/CTとの間の機種間差補正法について検討した。また、データ駆動短時間フレーム体動補正法に関する研究をPET画像診断研究ならびにGEヘルスケア・ジャパンと連携して進め、自作のファントム駆動装置を用いたアミロイドPETを想定した低放射能濃度のファントム実験、および臨床研究で計測されるPET計測のうち体動が検出されたデータに対して手法を適用して評価した。

第三期中期計画に引き続き、治験薬GMP準拠下での治験使用薬の製造と出荷を行い、研究成果の社会的な還元に努めた。令和5年4月から11月までの8ヶ月間で、治験使用薬タウイメージング剤MK6240を30バッチ(90ドーズ)、アミロイドイメージング剤NAV4694を20バッチ(20ドーズ)、また、研究支援としてDEMCIRC研究用にアミロイドイメージング剤Vizamylを13バッチ(122ドーズ)提供した。また、Vizamyl製造に必要な日本核医学会PET薬剤製造施設認証の監査を受け(3年毎の4回目)、適合(A判定)した。

^{18}F標識において標識反応に使用される脱離基の分解が問題となることがある。これに対して脱離基に一部立体障害を持たせた新たな脱離基の2-methyl-6-nitrobenzenesulfonateを設計し、有用性を検討した。その結果、立体障害をもたらす2-methyl基の導入により、ネオペンチル標識基の^{18}F化の効率が向上されることが確認された。また、その応用例としてアミノ酸の合成も可能であった。

機械学習を用いた機種間差補正法については、三次元U-netを用いた画像変換により初期検討で機種間差を56%低下することに成功した。引き続き性能向上を探索する。データ駆動短時間フレーム体動補正法に関する研究では、アミロイドPETを想定した低放射能濃度のファントム実験で、高い放射能濃度(FDG想定)に比べて遜色ない補正性能が得られるが、体動検知の精度が短時間再構成のパラメータに依存することがわかった。また、体動が含まれる臨床PETデータに適用すると、比較的低計数な症例や体動で画像が乱れた症例も安定して補正可能であり、脳溝や脳室などの描出が鮮明になり画像のコントラスト向上が確認された。

小動物用PETの更新により、疾患モデル動物のPETイメージング研究は質・量ともに向上することが期待される。

機種間差補正の精度が向上することで、過去と現在の機種を統合した多数の症例による機械学習が可能になることが期待される。

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜基盤技術の開発＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET画像診断）
【センター外】東京工業大学、GEヘルスケア・ジャパン株式会社
＜新規放射性薬剤の開発＞
【センター内】運動器医学研究テーマ
【センター外】白鳥製薬株式会社

PET画像診断
研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
石橋　賢士	研究副部長	研究の総括、PET検査の実施、データ解析と考察

石井　賢二	専門部長	PET検査の実施、データ解析と考察
上髙　祐人	技術員	PET撮影、画像処理、データ管理
稲次　基希	非常勤研究員	PET臨床研究の遂行
鈴木　幸久	非常勤研究員	PET臨床研究の遂行
高木　和子	非常勤看護師	PET検査時の被験者管理
村上　里美	非常勤看護師	PET検査時の被験者管理

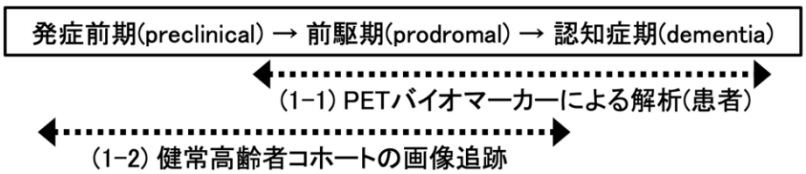
1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 脳の加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測の研究

センターの第４期中期計画に記載される「高齢者に特有な疾患と老年症候群を克服するための研究」の基盤となるPET臨床研究である。すなわち、加齢と認知症に焦点を当てた大きな枠組み(センターの各部門)からなるセンターの基盤的な臨床研究であり、我々のチームはその一翼を担う。我々のチームの主な役割は、アミロイドPET・タウPET・FDG-PETを施行し、PETデータを各種バイオマーカーと横断的かつ縦断的に解析することである。認知症の病期は「加齢変化→発症前期→前駆期→認知症期」に分類される。この研究テーマは対象となる病期に応じて、2つのサブテーマ(１－１)PETバイオマーカーによる解析、(１－２)健常高齢者コホートの画像追跡、に分割した(下図参照)。(１－１)PETバイオマーカーによる解析では、患者を主な対象として「前駆期～認知症期」をターゲットにしている。(１－２)健常高齢者コホートの画像追跡では、健常高齢者コホートを主な対象として「加齢変化～発症前期～前駆期」をターゲットにしている。両者を組み合わせることによって、加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測を総合的に評価する。そして、センターの基盤的な臨床研究として、研究成果を社会へ還元する。

(2) アストログリオーシス画像などPET診断技術の臨床応用とその支援となる画像処理技術の開発

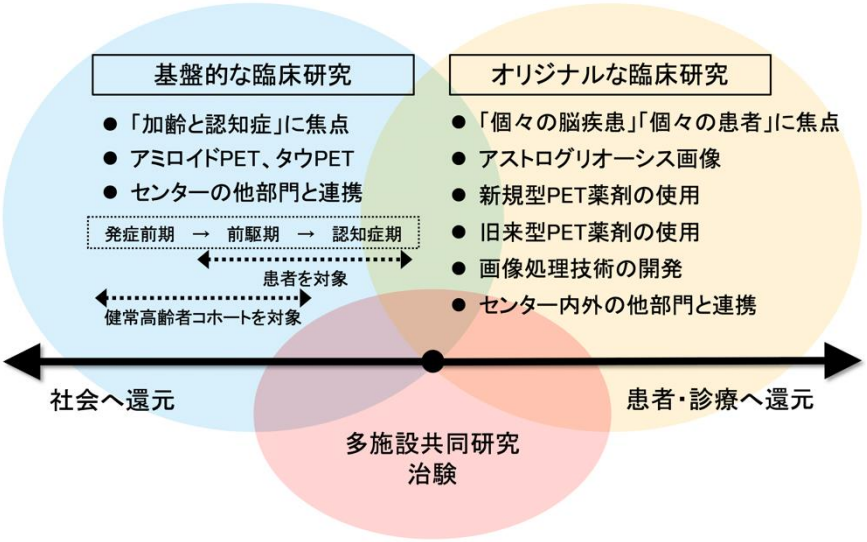
「個々の脳疾患」や「個々の患者」に焦点を当てたオリジナルなPET臨床研究である。研究結果を患者や診療へ直接還元することを目指している。この研究テーマの中核にMAO-Bリガンドを用いた「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」を置く。「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」は斬新的なPET診断技術であり、我々のチームが世界をリードする分野である。我々のチームのこ



れまでの実績から、「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」は個々の患者の診断や治療法の選択等、診療に極めて有用であることがわかっている。病院脳神経内科・放射線診断科・神経病理部門等と共同で、「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」の有用性について、画像-臨床-病理の関連を踏まえた強固なエビデンスを構築し、一般診療への普及に向けた取り組みを進める。また、PET検査では、20-60分程度の連続撮影を行い、陽電子(ポジトロン)のデータを収集し、各種の補正を行い、PET画像を出力する。最終的なPET画像の質は、途中の画像処理技術に大きく依存する。質の高いPET臨床研究の遂行には安定した画像処理技術が不可欠である。この研究テーマでは、画像処理技術の向上も目指している。

(3) 認知症克服へ向けた国内外の多施設共同研究及び治験への参加

国内外の認知症多施設共同研究や治験に関連したPET臨床研究である。現在、認知症の根本的な病態解明・治療薬開発を目的とする多施設共同研究や治験が世界レベルで行われている。PET臨床研究の基盤を持つ我々のチームが国内の先頭に立ってそれらの研究や治験に参加し、社会に貢献することを目指す。最近、アルツハイマー病の疾患修飾薬であるレカネマブが本邦厚労省からアルツハイマー病の治療薬として承認を受けた。疾患修飾薬の本格的な臨床導入に備えて、各種の関連ガイドラインの作成やアミロイドPET・タウPETの解析法等の確立に携わり、一般診療への普及に向けた環境を整備する。



【参考】PET 画像診断研究の 3 つのテーマ

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1-1) 脳の加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測の研究：PETバイオマーカーによる解析

加齢と認知症に焦点を当てた大きな枠組み(センターの各部門)からなるセンターの基盤的な臨床研究であり、我々のチームはその一翼を担う。「(１－１)PETバイオマーカーによる解析」では、主に患者を対象として、アミロイドPET・タウPET・FDG-PETを施行し、「前駆期～認知症期」の病態解析を行う。

今年度の最優先事項はタウPET(MK6240)の導入である。倫理委員会から研究計画の承認を受け、本年6月からタウPETを用いた臨床研究を開始することができた。現在、病院診療部門(脳神経内科、精神科等)と連携の下、我々のチーム主導で症例を蓄積中である。本年度の実績として、認知症患者を中心に約80例のアミロイドPET、約40例のタウPET、約200例のFDG-PETを実施した。

アミロイドPETにタウPET(MK6240)が加わることで、アルツハイマー病診療が一変した。従来、アミロイドPETが陽性であれば、認知機能低下の原因として安易にアルツハイマー病と診断される傾向があった。タウPETを組み合わせることで、「アミロイド陽性レベルであってもアルツハイマー病ではない」「アミロイド陰性レベルであってもアルツハイマー病である」と診断されるべき症例が少なからず存在することが判明した。アミロイドPETのピットフォールとして、これらの症例は英文誌と邦文誌へ掲載される見込みである(著書等:1、現在英文誌投稿中)。アミロイドやタウを標的とした疾患修飾薬を使用する際に、重要な知見となる。

研究計画は順調に展開している。病院診療部門・神経病理部門・社会科学系部門等と連携の下、PETバイオマーカーを臨床および病理データと総合的に解析することことで、研究計画は着実に実現する見込みである。

(1-2) 脳の加齢変化と認知症の早期診断及び発症予測の研究：健常高齢者コホートの画像追跡

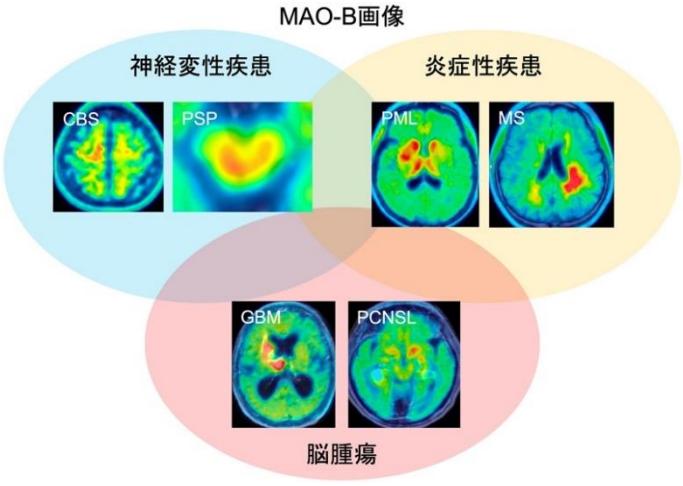
「研究計画(１－１)PETバイオマーカーによる解析」は、「前駆期～認知症期」の病態解析に焦点を当てている。一方、「研究計画(１－２)健常高齢者コホートの画像追跡」は、更に上流の「加齢変化～発症前期～前駆期」に焦点を当て、病態解析を行う。

社会科学系部門の“社会参加・社会貢献研究テーマ”と共同で、認知機能正常の健常高齢者コホートを対象としてFDG-PETと3D-MRIを用いた縦断的な画像追跡を2004年から継続している。昨年度までに約300名をエントリーし、延べ約1800回の画像検査(FDG-PETと3D-MRI)を実施した。本年度の実績として、約120名にfollow-up目的のFDG-PETと3D-MRIを実施した。順調に展開している。

本年度からの新たな試みとして、放射線診断科と連携の下、MRIシーケンスに脳血流を評価するASL(arterial spin labeling)画像を追加した。FDG画像(糖代謝を評価)とASL画像はどちらも脳機能の指標として用いられる。現時点で最も優れた脳機能検査はFDG-PETであるが、FDGはブドウ糖のアナログであり両者は競合関係にある。したがって、FDGの脳内分布は血糖値の影響を受けるため、高血糖時にはFDG-PETの診断能が低下する。「このようなFDG-PETの欠点をASL画像が補完できるか？」がresearch questionである。

具体的に、FDG画像とASL画像を比較することで、1)ASL画像の性能評価、2)ASL画像はFDG画像の代替となり得るか、等を現在検証中である。
研究計画は順調に展開している。研究計画(１－１)と(１－２)を組み合わせることで、研究計画は着実に実現する見込みである。

(2) アストログリオーシス画像などPET診断技術の臨床応用とその支援となる画像処理技術の開発



研究計画(1)は、加齢と認知症に焦点を当てた大きな枠組み(センターの各部門)からなるセンターの基盤的な臨床研究であり、研究成果を社会へ還元することを目指している。一方、本研究計画(2)は、「個々の脳疾患」「個々の患者」に焦点を当てたオリジナルなPET臨床研究であり、研究結果を患者や診療へ直接還元することを目指している。
本研究計画では、1)アストログリオーシス画像(MAO-B画像)、2)新規型PET薬剤、3)旧来型PET薬剤(FDG等)を用いて、オリジナルな臨床研究が行われる。今年度は、病院脳神経内科と連携の下、「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」を用いたPET臨床研究が活況を呈した。我々のチームと病院脳神経内科から、多くの学会発表や論文発表が行われた(原著論文:1,3-5、総説論文:1、国際学会発表:1-2、国内学会発表:2-5,7-10)。
「新規型PET薬剤」または「旧来型PET薬剤」を用いた臨床研究も進行中である。特に、非常勤研究員の研究テーマ“FDG-PETを用いたアルツハイマー病とレビー小体型認知症の鑑別”は第13回日本脳血管・認知症学会総会で若手研究奨励賞臨床優秀賞を獲得しており(その他:1)、その研究成果は英文誌に公表されている(原著論文:2)。また、“社会参加・社会貢献研究テーマ”と共同で、FDG-PETを用いた介入効果判定を行なっている。健常高齢者に絵本読み聞かせや囲碁学習の介入を行い、介入前後の脳機能の変化をFDG-PETで測定する研究デザインである。
PET画像の質の向上を目指した画像処理技術の開発も順調であり、関連学会で中間発表を行った(国内学会:14,31)。
「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」はMAO-Bを介してアストログリオーシスの程度を画像化することにより、微小な炎症を可視化する(右図)。神経変性疾患では、変性領域を特定することにより、その診断に有用である。炎症性疾患では、炎症領域を特定することにより、その病態評価に有用である。腫瘍性疾患では、MAO-B含有量の違いからアストロサイト系腫瘍とリンパ系腫瘍の鑑別に有用である。
このように「アストログリオーシス画像(MAO-B画像)」は臨床に極めて有用な診断技術であることを英文誌に総説として公表する予定である(総説論文:1、国際学会発表:1)。また、独自に開発した「進行性核上性麻痺の診断におけるMAO-B画像の処理技術」に対して、特許出願した(特許:1)。
FDG-PETを用いたオリジナルな臨床研究の成果を紹介する。レビー小体型認知症(DLB)の70%程度にCIS(cingulate island sign)を認め、CISはDLB診断基準の支持的バイオマーカーに採用されているが、“どのような場合にCISが出現しやすいか”が不明であった。本研究では、MMSEが20-24点程度の患者でCISが最も出現しやすく、DLBとADの鑑別能が最大となることを確認し、学会および論文で発表した(原著論文:2、国内学会発表:6,11)。アミロイドやタウを標的とした疾患修飾薬を使用する際に、重要な知見となる。
研究計画は順調に進展している。病院診療部門・神経病理部門等と連携が進めば、研究計画は着実に実現する見込みである。

(3) 認知症克服へ向けた国内外の多施設共同研究及び治験への参加

本年度の実績として、石井専門部長を中心にAMED関連認知症多施設研究:6課題［DIAN-Japan研究、層別化バイオマーカー研究(BATON)、AMEDプレクリニカル期AD追跡研究(J-TRC、PAD-TRACK)、AMED認知症評価標準化研究、新規バイオマーカー(SMBT-1)開発研究］に参画している。また、石井専門部長を中心に疾患修飾薬国際共同治験:8試験、国際医師主導型治験:1試験に参画し、アミロイドPETおよびタウPETを実施している。

アミロイドベータの可溶性および不溶性凝集体に対するモノクローナル抗体であるレカネマブがアルツハイマー病の治療薬として本邦の厚労省から承認を受けた。この承認に対応するため、石井専門部長が座長を務める認知症関連学会合同のワーキンググループで「アミロイドPETイメージング剤の適正使用ガイドライン」を改訂した(著書等:6)。主な変更点として、アミロイドPETの適切な使用項目に「軽度認知障害（MCI）または軽度認知症あり、背景としてアルツハイマー病が疑われるが、疾患修飾薬治療のために確定診断を要する症例」を追加した。

国内外の多施設共同研究や治験へ迅速に参加できるように、PET薬剤製造、PET撮影、研究担当者の倫理研修等を、常に国際臨床研究レベルに維持している。研究計画は着実に実現する見込みである。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜認知症研究：ＰＥＴバイオマーカーによる解析＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学、AI画像解析)、脳神経内科、精神科、放射線診断科、老年病理学研究チーム（神経病理学）
＜認知症研究：健常高齢者コホートの画像追跡＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学、AI画像解析)、放射線診断科、社会参加とヘルシーエイジング研究チーム（社会参加・社会貢献研究）
＜ＰＥＴ診断技術の臨床応用＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学、AI画像解析)、脳神経内科、精神科、放射線診断科、老年病理学研究チーム（神経病理学）
【センター外】東京医科歯科大学（脳神経内科、脳神経外科、眼科)、東京慈恵会医科大学（脳神経内科)、東京都立駒込病院（脳神経内科)、三島総合病院（眼科）
＜ＰＥＴ画像処理技術の開発＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学、AI画像解析)、脳神経内科、精神科、放射線診断科
【センター外】北里大学（医療衛生学部)、
＜多施設共同研究及び治験への参加＞
【センター内】神経画像研究チーム（PET薬剤科学、AI画像解析)、HAIC研究開発ユニット

AI画像解析

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
亀山征史	研究専門部長	研究全体の総括

１　第四期中期計画における研究成果の概要

顔写真による認知症スクリーニング方法のプロジェクトでは AMED の事業に採択された。今後多施設で顔写真収集を行う。
松尾研の研究では、精度も向上し、社会実装のために、企業とコンタクトをしている。
核医学動態解析の分野では、IMP 脳血流 SPECT では早期像が有用であることを明らかにした。
薬剤科との共同研究にて、抗がん剤による副作用の研究を始めている。
赤血球寿命の研究の準備を始めている。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 顔による認知症スクリーニング方法の推進

7月末に、AMED「予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業（エビデンス構築促進事業)」に採択された。PS, POの先生からの統計学的なバイアス等についての指導があり、事前面談を繰り返し､研究計画書を仕上げることを条件に10月に契約することができた｡全体で2000万円/年×3年。当センターには今年度380万円+間接経費114万円の配分。
複十字病院の飯塚先生との共同研究にて、アルツハイマー病では笑顔を作るのが下手になり、それが側坐核と淡蒼球の萎縮と相関していることがわかり、学会発表を行った。現在、投稿中である。

AMEDの研究資金により、研究の遂行が可能となった。

(2) 松尾研究室との共同研究の推進

微小出血プログラムについては、教師データのやり直しを行った。教師データが信頼できるも

のになったため、精度も向上した。
白質病変Fazekas分類プログラムについては、精度を上げるために努力を続けている。
レカネマブが上市しようとしている時期であり、ARIA-Hの検出にも使えることから、社会実装のために、企業とコンタクトをしている。
AIのモデルにより微小出血を指摘したり、白質病変を分類することの可能性を示すことができた。

(3) 核医学動態解析の研究

開発したIMPでの脳血流定量方法である、REICA法の研究について、他施設との共同研究を模索している。
IMPでの脳血流SPECTでの早期像の有用性について、simulationと札幌秀友会病院のデータを使い、示すことができた。学会発表を行った。
通常静注後30分後を中心とした20-40分後にSPECT収集を行っているが、静注後、20分後まで患者さんを待たせると、患者さんは長く拘束される。simulationにより、5-25後の早期像では、カウントは若干減るものの、コントラストが改善した。
REICA方については、今後多施設との共同研究を通じて利点をアピールし、普及に努める。
IMPの早期像の有用性については、今後読影実験を行い論文化する。

(4) AIを用いたデータの可視化

薬剤科との共同研究を行っている。化学療法による皮膚の写真と副作用のグレードのデータを用いて、deep learningを行った。
グレードの高いものが少なく、グレード0かそれ以上かの弁別を行ったところ、8割程度の正答率を得ることができた。しかしながら、Grad-CAMによるAIの注目ポイントを確認したところ、発赤などには着目している様子はなく、改善を試みている。
写真の枚数が少なかったことも反省点でもあるし、今後社会実装を行うためには、validationも必要となるため、もっと多くの写真を集めたい。

(5) 理論医学の推進

赤血球寿命の簡易的な指標として、iA1c（IFCC表示のHbA1c）/GA、糖尿病のない患者ではiA1cが使えることを示す論文がaccept出版された。
発作性夜間ヘモグロビン尿症において、重症度診断や治療の効果判定に使えるのではないかと考え、大阪大学、筑波大学との共同研究を進めるために、科研費に応募した。
赤血球寿命を測定するために赤血球クレアチンを使う方法も開発したが、高知学園大学での測定機器の故障により測定できなくなってしまった。代替策を試している。
脳灌流圧モデルの研究については、東京都立大学伊井研究室での数値計算モデルは数年かかる見通しである。

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜PET＞
【センター内】PET画像診断研究テーマ、PET薬剤科学研究テーマ
＜AI医療＞
【センター外】東京大学
＜顔写真から認知症を判別しようとする研究＞
【センター外】東京大学、岡山大学、徳島大学、名古屋大学
＜脳灌流圧に関するシミュレーション＞
【センター外】東京都立大学
＜赤血球寿命に関する共同研究＞
【センター外】はくほう会セントラル病院、大阪大学、筑波大学

論文・学会発表（令和5年度）

PET薬剤科学

1　論文（誌上発表）：原著

1. Yanai, S., Tago, T., Toyohara, J., Arasaki, T., Endo, S.: Reversal of spatial memory impairment by phosphodiesterase 3 inhibitor cilostazol is associated with reduced neuroinflammation and increased cerebral glucose uptake in aged male mice. Fron. Pharmacol., 2022; 13:1031637. 2022.12.21（原著，査読あり）（IF：5.988, 2021）
2. Liu, Z., Fukagawa, Y., Yamano, M., Tago, T., Iwai, K., Kumazoe, M., Tachibana, H., Toyohara, J., Tanaka,

H.: A gold-complex initiated functionalization of biologically active polyphenols applied to a ^{18}F-labeled chemical probe. Org. Biomol. Chem., 2023; 21(29):5990-5996. 2023.6.26（原著，査読あり）（IF：3.2, 2022）
3. Iida, S., Tago, T., Tada, M., Toyohara, J., Tanaka, H.: ^{18}F-Fluorination of 2-methyl-6-nitrobenzenesulfonate ester and its application to the synthesis of a ^{18}F-labeled amino acid. Asian J. Org. Chem., doi: 10.1002/ajoc.202300412. 2023.9.28（原著，査読あり）（IF：2.7, 2022）
4. Tago, T., Sakata, M., Kanazwa, M., Yamamoto, S., Ishii, K., Toyohara, J.: Preclinical validation of a novel brain-penetrant PET ligand for visualization of histone deacetylase 6: a potential imaging target for neurodegenerative diseases. Eur. J. Nucl. Med. Mol. Imaging., 2024 Mar 5. doi: 10.1007/s00259-024-0666-1.（原著，査読あり）（IF：9.1, 2022）
5. Ishibashi, K., Kurihara, M., Toyohara, J., Ishii, K., Iwata, A.: Pitfalls of amyloid-beta PET: comparisons with ^{18}F-MK-6240 and ^{18}F-THK5351 PET. Clin. Nucl. Med., 2024 Apr 1; 49(4):319-321.（原著，査読あり）（IF：10.6, 2022）

2　論文（誌上発表）：総説

なし

3　学会発表（国際）

1. Toyohara, J., Tago, T., Ishii, K.: Fully automated radiosynthesis of [^{18}F]SMBT-1 for clinical use. The 25th International Symposium on Radiopharmaceutical Sciences 2023, Honolulu, 2023.5.22-26
2. Tago, T., Toyohara, J., Ishii, K.: Optimization of the automated radiosynthesis of an ^{18}F-labeled tetrahydroquinoline derivative for brain HDAC6 imaging. The 25th International Symposium on Radiopharmaceutical Sciences 2023, Honolulu, 2023.5.22-26
3. Toyohara, J., Sakata, M., Ishibashi, K., Wagatsuma, K., Tago, T., Imabayashi, E., Ishii, K.: Age-dependent decline of the P-glycoprotein function at the blood-brain barrier: preliminary observation with newly developed PET tracer fluorine-18 labelled MC225. IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, 2023.6.12-14
4. Yamamoto, Y., Mitamura, K., Norikane, T., Toyohara, J., Nishiyama, Y.: Texture indices extracted from FLT and 4'-[methyl-^{11}C]thiothymidine (4DST) PET/CT to distinguish tumor grade in newly diagnosed high-grade glioma. SNMMI 2023 Annual Meeting, Chicago, 2023.6.24-27
5. Ishii, K., Ishibashi, K., Sakata, M., Kamitaka, Y., Tago, T., Kameyama, M., Kanemaru, K., Murayama, S., Iwata, A., Toyohara, J.: Implementation of amyloid PET in a memory clinic of geriatric hospital revealed characteristics of causative diseases by age. Alzheimer's Association International Conference 2023, Amsterdam, 2023.7.16-20
6. Tago, T., Sakata, M., Kanazawa, M., Yamamoto, S., Toyohara, J.: Visualization of histone deacetylase 6 expression in the conscious monkey brain: preliminary Pet study with [^{18}F]FSW-100. 19TH European Molecular Imaging meeting, Porto, 2024.3.12-15

4　学会発表（国内）

1. 豊原潤，多胡哲郎，西野浩輔，酒井昌成，石井賢二.：選択的モノアミンオキシダーゼB結合リガンド[^{18}F]SMBT-1の臨床使用に向けた多目的合成装置による製造法の検討．日本薬学会第143年会，札幌，2023.3.25-28
2. 多胡哲郎，豊原潤，石井賢二.：PET用HDAC6イメージングプローブ[^{18}F]FSW-100の自動合成最適化．日本薬学会第143年会，札幌，2023.3.25-28
3. 豊原潤.：放射性医薬品エキスパートセミナー放射性薬剤の製造と品質管理．第23回日本核医学会春季大会，Web開催，2023.4.26-6.1
4. 石橋賢士，三浦義治，上高祐人，多胡哲郎，坂田宗之，豊原潤，石井賢二.：パーキンソン病患者におけるコーヒー摂取後のアデノシンA_{2A}受容体占拠率．第64回日本神経学会学術大会，千葉，2023.5.31-6.3
5. 多胡哲郎，豊原潤，石井賢二.：PET用HDAC6プローブ[^{11}C]Bavarostatの標識合成．第17回日本分子イメージング学会総会・学術集会，仙台，2023.6.8-9
6. 多胡哲郎，豊原潤，石井賢二.：PET用脳内ヒストンデアセチラーゼ6イメージングプローブの開発．第11回TOBIRA研究交流フォーラム，東京，2023.7.28
7. 多胡哲朗．神経変性疾患を標的としたPET用薬剤開発．第192回東京医科大学総会，東京（Web），2023.11.4
8. 多胡哲郎，坂田宗之，豊原潤.：PET用HDAC6プローブ[^{18}F]FSW-100の被ばく線量推定と毒性試験．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
9. 坂田宗之，上高祐人，我妻慧，石橋賢士，多胡哲郎，豊原潤，石井賢二.：脳FDG画像の新旧機種間差補正における機会学習の利用．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
10. 坂田宗之，上高祐人，甲木晶枝，川上泰史，我妻慧，織田圭一，石橋賢士，多胡哲郎，豊原潤，石井賢二.：脳PET臨床計測におけるデータ駆動短時間フレーム体動補正法の利用．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
11. 田中浩士，飯田翔悟，多胡哲郎，多田匡利，河原琉晟，豊原潤.：電子求引性置換基を有するベンゼンスルホン酸エステルを前駆体として用いるネオペンチル^{18}F標識化の検討．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
12. 旦浦幹夫，坂田宗之，梅森勉，太田潔，福田信，布村仁一，鄭健錫，増田和明，片山容一.：遂行機能障害の進行と関連する脳血流低下部位の解析；SPECT研究．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
13. 上高祐人，坂田宗之，織田圭一，甲木晶枝，川上泰史，我妻慧，小林正和，石井賢二.：アミロイドPET検査を想定したデータ駆動型体動補正法の評価．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
14. 小堀海優，我妻慧，上髙祐人，坂田宗之，甲木晶枝，川上泰史，石井賢二.：脳PETのGibbsアーチファクト解決に向けた改良型PSF補正の基礎検討．第63回日本核医学会学術総会，大阪，2023.11.16-18
15. 多胡哲朗.：F-18標識法・薬剤．PET化学ワークショップ2024，札幌，2024.2.2-4
16. 豊原潤.：PET化学　てびき第６版　その１（基礎技術）１．てびき第６版の概要．PET化学ワークショップ2024，札

幌, 2024.2.2-4
17. 豊原潤.：PET化学　てびき第６版　その２（神経機能）６．[11C]Preladenant. PET化学ワークショップ2024, 札幌, 2024.2.2-4
18. 豊原潤.：PET化学　てびき第６版　その２（神経機能）７．[18F]MC225. PET化学ワークショップ2024, 札幌, 2024.2.2-4
19. 豊原潤.：PET化学　てびき第６版　その３（神経病理）１０．[18F]NAV4694. PET化学ワークショップ2024, 札幌, 2024.2.2-4
20. 豊原潤.：PET化学　てびき第６版　その３（神経病理）１１．[18F]MK6240. PET化学ワークショップ2024, 札幌, 2024.2.2-4
21. 日浦幹夫, 坂田宗之, 梅森勉, 太田潔, 福田信, 布村仁一, 鄭健錫, 増田和明, 片山容一.：遂行機能障害と関連する脳血流低下部位の解析：認知症診断における123I-IMP SPECT検査の活用例. 第53回日本神経放射線学会, 埼玉, 2024.2.9-10

5　著書等
なし

6　特許
なし

7　その他
なし

PET画像診断

1　論文（誌上発表）：原著
1. ★◎Ishibashi K, Miura Y, Wagatsuma K, Toyohara J, Ishiwata K, Ishii K. Adenosine A_{2A} receptor occupancy by caffeine after coffee intake in Parkinson's disease. Mov Disorders 2022 Apr;37(4):853-857. (査読有り)(IF = 10.338)
2. Wagatsuma K, Ishibashi K, Kameyama M, Sakata M, Miwa K, Kamitaka Y, Ishii K. Decreased imaging time of amyloid PET using [18F]florbetapir can maintain quantitative accuracy. Radiological Physics and Technology 2022 Jun;15(2):116-124, Doi:10.1007/s12194-00653-7 (査読有り)(IF = 1.12).
3. Imabayashi E, Tamamura N, Yamaguchi Y, Kamitaka Y, Sakata M, ★Ishii K. Automated semi-quantitative amyloid PET analysis technique without MR images for Alzheimer's disease. Ann Nucl Med 2022 Oct;36(10):865-875. doi: 10.1007/s12149-022-01769-x. PMID: 35821311 (査読有り)(2022 IF = 2.668)
4. ★◎Ishibashi K, Miura Y, Tago T, Toyohara J, Higashihara M, Iwata A, Ishii K. Distribution pattern of the monoamine oxidase B ligand, 18F-THK5351, in the healthy brain. Clin Nucl Med 2022 jul;47(7):e489-e495. PMID: 35675140, DOI: 10.1097/RLU.0000000000004272, (査読有り)(2021 IF = 7.794)
5. Imabayashi E, Ishii K, Toyohara J, Wagatsuma K, Sakata M, Tago T, Ishibashi K, Kojima N, Kohda N, Tokumaru AM, Kim H. Possibility of enlargement in left medial temporal areas against cerebral amyloid deposition observed during preclinical stage. Front Aging Neurosci. 2022 Apr 19;14:847094. doi: 10.3389/fnagi.2022.847094. PMID: 35517046. (査読有り) (IF=5.702)
6. Wagatsuma K, Miwa K, Kamitaka Y, Koike E, Yamao T, Yoshii T, Kobayashi R, Nezu S, Sugamata Y, Miyaji N, Imabayashi E, Ishibashi K, Toyohara J, Ishii K. Determination of optimal regularization factor in Bayesian penalized likelihood reconstruction of brain PET images using [18F]FDG and [11C]PiB. Med Phys 2022 May;49(5):2995-3005. doi: 10.1002/mp.15593. PMID: 35246870. (査読有り)(2021 IF = 4.506)
7. Hara S, Tanaka Y, Inaji M, Hayashi S, Ishii K, Nariai T, Maehara T. Spatial coefficient of variation of arterial spin labeling MR for detecting hemodynamic disturbances measured with 15O-gas PET in patients with moyamoya disease. Neuroradiology 2022 Apr;64(4):675-684. doi: 10.1007/s00234-021-02802-y. PMID: 34499192. (査読有り)(2021 IF = 2.995)
8. Kurihara M, Komatsu H, Sengoku R, Shibukawa M, Morimoto S, Matsubara T, Arakawa A, Orita M, Ishibashi K, Mitsutake A, Shibata S, Ishiura H, Adachi K, Ohse K, Hatano K, Ihara R, Higashihara M, Nishina N, Tokumaru AM, Ishii K, Saito Y, Murayama S, Kanemaru K, and Iwata A. CSF p-tau181 increases in patients with neuronal intranuclear inclusion disease without amyloid burden. Neurology, in press. (査読有り)(IF = 9.91)
9. Kandiah N, Choi SH, Hu CJ, Ishii K, Kasuga K, Mok VCT. Current and future trends in biomarkers for the early detection of Alzheimer's disease in Asia: Expert opinion. JAD Reports 2022;6:699-710. DOI 10.3233/ADR-220059 (査読有り)(2021 IF = 4.757)
10. Higashihara M, ★◎Ishibashi K, Tokumaru AM, Ishii K, Iwata A. Brain PET Imaging of 11C-Methionine, 18F-FDG, and 18F-THK5351 in a Case of Lymphomatoid Granulomatosis. Clin Nucl Med. 2022;47(12)e749-751. (査読有り) (IF = 10.782)

2　論文（誌上発表）：総説
なし

3　学会発表（国際）
1. Wagatsuma K, Sakata M, Miwa K, Ishibashi K, Kamitaka Y, Yamao T, Ishii K. Is Bayesian Penalized Likelihood Reconstruction without Point-Spread-Function Correction Appropriate for Amyloid PET Imaging?. JSRT-JSMP Joint International Conference on Radiological Physics and Technology. Yokohama, 2022.4.14-2022.4.17

2. Tago T, Toyohara J, Ishii K. Radiosynthesis and biological evaluation of a nicotinic acid hydroxamate derivative as a radioligand for HDAC6 PET imaging. International Symposium on Radiopharmaceutical Sciences, Nantes, 2022.5.29-2022.6.2
3. Matsubara T, Murayama S, Ihara R, Higashihara M, Nishina Y, Kanemaru K, Iwata A, Arai T, Kameyama M, Tokumaru AM, Imabayashi E, Ishibashi K, Toyohara J, Saito Y, Ishii K. Comparative pathological study of Carbon-11 labeled Pittsburgh compound-B PET Centiloid Scale and amyloid beta deposition in postmortem brains. Alzheimer's Association International Conference 2022, San Diego, 2022.7.31-2022.8.4
4. Imabayashi E, Ishii K, Toyohara J, Kojima N, Tago T, Sakata M, Wagatsuma K, Ishibashi K, Tokumaru AM, Kim H. Amyloid accumulation in medial temporal area starts in MCI stage in [^{18}F]flutemetamol PET. Alzheimer's Association International Conference 2022, San Diego, 2022.7.31-2022.8.4
5. Imabayashi E, Ishii K, Toyohara J, Kojima N, Tago T, Sakata M, Wagatsuma K, Ishibashi K, Tokumaru AM, Kim H. Regional cerebral atrophy correlate with amyloid accumulation in preclinical Alzheimer's disease. Alzheimer's Association International Conference 2022, San Diego, 2022.7.31-2022.8.4
6. Ishibashi K, Miura Y, Kamitaka Y, Tago T, Sakata M, Toyohara J, Ishii K. Occupancy of adenosine A_{2A} receptors after coffee intake in patients with Parkinson's disease. The 13th Congress of the World Federation of Nuclear Medicine and Biology, Kyoto, 2022.9.8-11
7. Wagatsuma K, Miwa K, Yamao T, Kamitaka Y, Akamatsu G. Development of a novel brain phantom for tau PET imaging. The 13th Congress of the World Federation of Nuclear Medicine and Biology, Kyoto, 2022.9.8-11
8. Wagatsuma K, Miwa K, Akamatsu G, Yamao T, Kamitaka Y, Sakurai M, Fujita N, Hanaoka K. Development of phantom test procedures for tau PET imaging in multi-center study. The 13th Congress of the World Federation of Nuclear Medicine and Biology, Kyoto, 2022.9.8-11
9. Kamitaka Y, Miwa K, Wagatsuma K, Yoshii T, Yamao T, Fukuda S, Yakushiji Y, Sakata M, Ishii K. Optimization of γ factor in a relative difference penalty function of Bayesian penalized likelihood reconstruction for detection of sub-centimeter lesions. The 13th Congress of the World Federation of Nuclear Medicine and Biology, Kyoto, 2022.9.8-11
10. Fukuda S, Miwa K, Wagatsuma K, Yakushiji Y, Yamao T, Kamitaka Y, Nishikawa N, Hasegawa T. Optimization of Bayesian penalized likelihood reconstruction algorithm for [^{18}F]flutemetamol amyloid PET images. 35th Annual Congress of the European Association of Nuclear Medicine, Barcelona, 2022.10.15-19
11. Kurihara M, Ihara R, Ishibashi K, Ishii I, Kanemaru K, Iwata A. Diagnosis and clinical trial recruitment of patients with early onset Alzheimer's disease in clinical practice: Single center experience in Japan. Clinical Trials on Alzheimer's Disease 2022, San Francisco, 2022.11.29-12.2
12. Ishii K. Challenges for clinical implementation of amyloid PET. The 13th Brain Research Institute International Symposium, Niigata, 2023.3.9-10

4 学会発表（国内）

1. 福田翔平，三輪建太，藥師寺優，我妻慧，山尾天翔，上髙祐人，西川祝子．^{18}F-flutemetamol アミロイド PET における TOF-BPL 法の罰則項内の最適化．第 78 回日本放射線技術学会総会学術大会，横浜，2022.4.14-17
2. 石井賢二．認知症バイオマーカー・治療薬開発の最近の話題．日本脳神経核医学研究会脳 PET ワークショップ 2022，横浜，2022.4.16
3. 石井賢二． アミロイド PET の原理・ガイドライン．第 21 回日本核医学会春季大会アミロイド PET 読影講習会，Web 開催，2022.5.7-31
4. 石井賢二．アミロイド PET-認知症診療への導入と今後の展望-．第 60 回多摩脳核医学技術検討会，東京，2022.5.13
5. 石井賢二．DMT 時代の診療におけるアミロイド PET の展望．第 63 回日本神経学会学術大会，東京，2022.5.18-21
6. Kurihara M, Ishibashi K, Baba T, Ihara R, Komatsu H, Higashino M, Kimura T, Nakayama T, Hatano K, Higashihara M, Kameyama M, Imabayashi E, Tokumaru A, Nishina Y, Takeda K, Kanemaru K, Ishii K, Iwata A. High sensitivity of asymmetric 18F-THK5351 PET abnormality in corticobasal syndrome patients. 第 63 回日本神経学会学術大会，東京，2022.5.18-21
7. 小松大樹，栗原正典，仙石錬平，渋川茉莉，森本悟，荒川晶，松原知康，石橋賢士，光武明彦，柴田頌太，石浦浩之，難波栄二，東原真奈，仁科裕史，德丸阿耶，石井賢二，齊藤祐子，村山繁雄，金丸和富，岩田淳．神経核内封入体患者の脳脊髄液中におけるリン酸化 tau（p-tau181）濃度の上昇．第 63 回日本神経学会学術大会，東京，2022.5.18-21
8. 神谷知紀，清水聰一郎，金高秀和，竹野下尚仁，稲川雄太，石井賢二．実臨床における AT（N）分類の A マーカーの検討．第 63 回日本神経学会学術大会，東京，2022.5.18-21
9. 山本諒，清水聰一郎，金高秀和，竹野下尚仁，稲川雄太，春日健作，池内健，石井賢二．リアルワールドにおける AT（N）分類による AD 診断．第 63 回日本神経学会学術大会，東京，2022.5.18-21
10. Ishibashi K, Onishi A, Kamitaka Y, Tago T, Sakata M, Toyohara J, Ishii K. Longitudinal changes in ^{18}F-FDG uptake in two elderly patients with Alzheimer's disease. 第 63 回日本神経学会学術大会,東京,2022.5.18-21
11. 石井賢二．認知症診療の未来を拓く画像診断．第 76 回日本放射線技術学会東京支部春季学術大会．東京，2022.5.21
12. 濱野祐光，我妻慧，池本健佑，鶴来泰成，中島幹太，上髙祐人，三輪建太．アミロイド PET における PSF 補正無しの Bayesian Penalized Likelihood 法の再構成パラメータの最適化．第 76 回日本放射線技術学会東京支部春季学術大会，東京，2022.5.21
13. 山村俊弘，田村郁，小林大輔，稲次基希，外山裕香，原祥子，田中洋次，成相直，石井賢二，前原健寿．脳腫瘍の surrogate marker Astrocytoma，IDH-mutant における MTAP 染色性と臨床経過、Methionine PET との関連．第 40 回日本脳腫瘍病理学会，川越，2022.5.27-28
14. 神谷知紀，清水聰一郎，金高秀和，竹野下尚仁、稲川雄太，石井賢二．実臨床における AT（N）分類の A マーカーの検討．第 64 回日本老年医学会学術集会，大阪，2022.6.2-4
15. 和田成美，清水聰一郎，金高秀和，竹野下尚仁，稲川雄太，石井賢二．髄液バイオマーカーとアミロイド PET による AD 分類．第 64 回日本老年医学会学術集会，大阪，2022.6.2-4

16. 大原三佳，竹野下尚仁，稲川雄太，深澤雷太，平尾賢太郎，金高秀和，石井賢二，春日健作，池内健，清水聰一郎．アミロイドPET陰性認知症患者における臨床／画像所見の特徴＜第２報＞．第64回日本老年医学会学術集会，大阪，2022.6.2-4
17. 稲次基希，石井賢二，前原健寿．てんかん焦点診断における脳磁図と核医学検査．シンポジウム３ 各種検査法と脳磁図の比較，第37回日本生体磁気学会大会，札幌，2022.6.15
18. 石井賢二．アミロイドPET －認知症診療への導入と最近の話題－． 令和４年度 Advanced Life Science Meeting，東京（Web），2022．6．18
19. 石井賢二．アミロイドイメージングにおける空間分布と集積量についての考察．第２回湯島脳神経画像講演会，Web，2022．6．28
20. 石井賢二．パーキンソン病の病態と治療．薬剤師のためのパーキンソン病Webセミナー，東京（Web），2022．6．7
21. 上髙祐人．半導体PET/CT装置 Discovery MI 5-ringの性能評価．第９回GE Metropolitan Area Users Meeting，Web，2022.7.9
22. 織田圭一，上髙祐人，坂田宗之，甲木晶枝，川上泰史，我妻慧，石井賢二．3Dプリンタとステッピングモーターによる頭部ファントム駆動装置の開発．PETサマーセミナー2022，甲府，2022．7．30
23. 石井賢二．認知症疾患修飾薬治療の新時代におけるアミロイド&タウPETの展望．シンポジウム２ 核医学～近未来核医学の向かう道－診断・治療の精度をあげる最新手法～，第58回日本医学放射線学会秋季臨床大会，東京，2022．9．2
24. 多胡哲郎，豊原潤，石井賢二．新規脳内HDAC6 PETイメージングプローブの開発．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
25. 亀山征史，百瀬敏光，石橋賢士，石井賢二．脳幹流圧の新しい提案 －流体力学を使った理論的なアプローチ－．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
26. 今林悦子，豊原潤，坂田宗之，石橋賢士，上髙祐人，石井賢二．[^{18}F] Flutemetamol によるアミロイドPET定量化のためのアルゴリズム開発について．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
27. 今林悦子，豊原潤，多胡哲郎，坂田宗之，我妻慧，石橋賢士，石井賢二．プレクリニカル期アルツハイマー病のアミロイド蓄積に相関する大脳皮質の萎縮について．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
28. 今林悦子，豊原潤，多胡哲郎，坂田宗之，我妻慧，石橋賢士，石井賢二．[^{18}F] Flutemetamol によるアミロイドPETの軽度認知障害期における側頭葉内側部の集積について．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
29. 坂田宗之，上髙祐人，甲木章枝，川上弘文，我妻慧，織田圭一，石橋賢士，多胡哲郎，豊原潤，石井賢二．アミロイドPETにおけるデータ駆動短時間フレーム体動補正法の検討．第62回日本核医学会学術総会，京都，2022.9.9-11
30. 鈴木幸久、清澤源弘、石井賢二．眼瞼痙攣および片側顔面痙攣患者におけるボツリヌス毒素治療の長期予後、シンポジウム６「眼瞼・顔面痙攣の長期予後を考える」、第 9 回日本ボツリヌス治療学会学術大会、東京、2022.9.17
31. 石井賢二．認知症病理PET診断の最新情報 －アミロイド・タウPETを中心に．第19回脳核医学画像解析研究会，東京，2022.9.17
32. 松原知康，齊藤祐子，金丸和富，石井賢二，村山繁雄．Amyloid PETと神経病理．第38回 Brain Function Imaging Conference，東京，2022.10.8
33. 日浦幹夫，坂田宗之，成相直，石橋賢士，我妻慧，多胡哲郎，豊原潤，石井賢二，片山容一．有酸素運動の強度変化に伴う前頭葉皮質における脳血流酸素代謝カップリングの考察． 第 65 回日本脳循環代謝学会学術集会， 甲府，2022.10.28-29.
34. 鈴木幸久、清澤源弘、若倉雅登、石井賢二．羞明をきたす疾患と脳機能変化、基礎のシンポジウム２「羞明や感覚器過敏に関する自律神経制御」、第75回自律神経学会総会、埼玉県さいたま市、2022.10.28
35. 鈴木幸久、清澤源弘、若倉雅登、石井賢二．羞明の有無による片頭痛患者の糖代謝分布の違い、第60回日本神経眼科学会総会、岡山県倉敷市、2022.11.12
36. 今林悦子，豊原潤，多胡哲郎，坂田宗之，石橋賢士，石井賢二．[^{18}F]flutemetamolの軽度認知障害期における側頭葉内側部集積について．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
37. 今林悦子，豊原潤，多胡哲郎，坂田宗之，石橋賢士，石井賢二．プレクリニカル期およびMCI期におけるアミロイド蓄積に相関する大脳皮質の萎縮について．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
38. 竹野下尚仁，山本諒，深澤雷太，金高秀和，石井賢二，春日健作，池内健，清水聰一郎．アミロイドPET陰性認知症患者における髄液バイオマーカー/画像所見の特徴．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
39. 新美芳樹，佐藤健一郎，冨田尚希，岩田淳，塚本忠，加藤隆司，吉山顕次，古和久朋，春日健作，池内健，石井賢二，伊藤健吾，千田道雄，岩坪威．治験即応コホート J-TRCにおける血漿アミロイドβ測定の有用性に関する検討．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
40. 都河明人，山本諒，神谷知紀，和田成美，竹野下尚仁，石井賢二，清水聰一郎．もの忘れ精査の過程でAphasiaを呈した患者のSLTA，アミロイドPETの検討．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
41. 山本諒，清水聰一郎，金高秀和，竹野下尚仁，稲川雄太，石井賢二．AD診断における２施設でのバイオマーカー測定結果の比較．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
42. 栗原正典，小松大樹，仙石錬平，渋川茉莉，森本悟，波多野敬子，井原涼子，東原真奈，仁科裕史、石橋賢士，光武明彦，柴田頌太，石浦浩之，石井賢二，徳丸阿耶，松原知康，齊藤祐子，村山繁雄，金丸和富，岩田淳．第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
43. 田代学，平岡宏太良，冨田尚希，石木愛子，小林良太，四月朔日聖一，メスフィン ベリフ，武田和子，草場美津江，菊池昭夫，渡部浩司，麦倉俊司，古川勝敏，加藤隆司，石井賢二，川勝忍，原田龍一，古本祥三，岡村信行．認知症疾患の層別化における[^{18}F]SMBT-1の有用性の検討プロジェクトの経緯報告2022.第41回日本認知症学会学術集会，東京，2022.11.25-27
44. 池本健佑，我妻慧，鶴来泰成，濱野祐光，中島幹太，上髙祐人，石井賢二．アミノ酸代謝PETイメージングにおけるBayesian Penalized Likelihood法を用いた脳腫瘍の良悪性鑑別精度の向上．第69回関東支部研究発表大会．つくば，2022.12.3-4.
45. 濱野祐光，我妻慧，池本健佑，鶴来泰成，中島幹太，坂田宗之，石井賢二．PSF補正無しのBayesian penalized likelihood画像再構成を用いた[^{18}F]flutemetamolの定量性検証．第69回関東支部研究発表大会．つくば，2022.12.3-4.

46. 鶴来泰成，我妻慧，池本健佑，廿樂楓，上髙祐人，濱野祐光，中島幹太．Bayesian penalized likelihood 画像再構成を用いた腫瘍体積抽出の精度検証．第 69 回関東支部研究発表大会．つくば，2022.12.3-4.
47. 山村俊弘，田村 郁，小林 大輔，稲次 基希，外山 裕香，原 祥子，田中 洋次，成相 直，石井 賢二，前原 健寿 Astrocytoma，IDH-mutant における MTAP 染色性と Methionine PET、治療経過の検討 第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会 2022 年 12 月 4 日 千葉
48. 石井賢二．認知症疾患修飾薬治療（DMT）新時代に向けた脳 PET の役割と次世代 PET への期待．次世代 PET 研究会 2023，千葉，2023.1.21
49. 稲次基希、橋本聡華、原祥子、林志保里、石井賢二、前原健寿　核医学検査を用いたてんかん焦点診断　第 46 回日本てんかん外科学会，山口，2023.1.26-27
50. 石井賢二．アミロイド PET アップデート．アルツハイマー病研究会画像診断サブコミッティ．東京，2023.2.11

5　著書等

1. ★◎石井賢二．画像から見た SNAP(suspected non-Alzheimer’s disease pathophysiology)の背景疾患．Dementia Japan 2022;36(1):67-75（査読なし）（IF なし）
2. 三輪建太，宮司典明，山下康輔，山尾天翔，上髙祐人．デバイスレスの data-driven respiratory gating PET/CT による呼吸制御に関する研究．日本放射線技術学会雑誌．2021;77(11):1356-1365（査読なし）（IF なし）
3. ★◎石橋賢士．アミロイド PET，タウ PET リガンド．診断と治療 2022.05;110(5):623-629 （査読なし）（IF なし）
4. ★◎石井賢二．認知症疾患の神経画像バイオマーカー診断．脳神経内科 2023;98(2):179-187 （査読なし）（IF なし）

AI画像診断

1　論文（誌上発表）：原著

1. Goto R, Kurihara M, Kameyama M, Komatsu H, Higashino M, Hatano K, Ihara R, Higashihara M, Nishina Y, Matsubara T, Kanemaru K, Saito Y, Murayama S, Iwata A. Correlations between cerebrospinal fluid homovanillic acid and dopamine transporter SPECT in degenerative parkinsonian syndromes. J Neural Transm (Vienna). 2023 Apr;130(4):513-520. doi: 10.1007/s00702-023-02611-y. （査読あり）(IF 3.3)
2. Kurihara M, Ishibashi K, Matsubara T, Hatano K, Ihara R, Higashihara M, Kameyama M, Tokumaru AM, Takeda K, Nishina Y, Kanemaru K, Ishii K, Iwata A. High sensitivity of asymmetric 18F-THK5351 PET abnormality in patients with corticobasal syndrome. Sci Rep. 2023. 13(1):12147. （査読あり）(IF 4.6)
3. Koga M, Kameyama M, Okumiya T. Estimation of mean erythrocyte age using HbA1c or HbA1c/glycated albumin for evaluation of anemia severity. J Clin Lab Anal. 2023 Jul;37(13-14):e24947. doi: 10.1002/jcla.24947. （査読あり）(IF 2.7)
4. Asahara Y, Kameyama M, Ishii K, Ishibashi K. Diagnostic performance of the cingulate island sign ratio for differentiating dementia with Lewy bodies from Alzheimer’s disease changes depending on the mini-mental state examination score. J Neurol Sci. 2023 Dec 15;455:122782. doi: 10.1016/j.jns.2023.122782.
5. Umeda-Kameyama Y, Kameyama M, Kojima T, Tanaka T, Iijima K, Ogawa S, Iizuka T, Akishita M. Investigation of a model for evaluating cognitive decline from facial photographs using AI. Geriatr Gerontol Int. 2024 Jan 2. doi: 10.1111/ggi.14793. Epub ahead of print. PMID: 38168884.
6. Asahara Y, Kameyama M, Ishii K, Ishibashi K. Diagnostic performance of the cingulate island sign ratio for differentiating dementia with Lewy bodies from Alzheimer’s disease changes depending on the Mini-Mental State Examination score. J Neurol Sci. 2023. 15;455:122782. doi: 10.1016/j.jns.2023.122782. （査読あり）(2022IF：4.4)
7. Hitomi Matsui MD, Takehiro Tamura MD, PhD, Tsuyoshi Okamura MD, PhD, Genichi Sugihara MD, PhD, Ko Furuta MD, Yuki Omori MD, PhD, Masashi Kameyama MD, PhD, Shuichi Awata MD, PhD, Takashi Takeuchi MD, PhD, Hidehiko Takahashi MD, PhD. Indicative biomarkers of Lewy body disease with oral sensory hallucinations in the older people. PCN Reports 2024; 3(1): e171. doi: 10.1002/pcn5.171

2　論文（誌上発表）：総説

1. Kameyama M, Umeda-Kameyama Y. Applications of Artificial Intelligence in Dementia. Geriatr Gerontol Int. DOI: 10.1111/ggi.14709 （査読あり）(IF 3.3)

3　学会発表（国際）

1. Kameyama M. Artificial Intelligence for Dementia. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023.
2. Yumi UMEDA-KAMEYAMA, Masashi Kameyama, Taro Kojima, Masaki Ishii, Tomoki Tanaka, Katsuya Iijima, Sumito Ogawa, Tomomichi Iizuka, Masahiro Akishita. Investigation of a Model for Evaluating Cognitive Decline from Facial Photographs Using AI. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023.
3. Ishii K, Ishibashi K, Sakata M, Kamitaka Y, Tago T, Kameyama M, Kanemaru K, Murayama S, Iwata A, Toyohara J. Implementation of amyloid PET in a memory clinic of geriatric hospital revealed characteristics of causative diseases by age. Alzheimer’s Association International Conference 2023, Amsterdam, 2023.7.15
4. Tomoyasu Matsubara, Shigeo Murayama, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi NIshina, Kazutomi Kanemaru, Atsushi Iwata, Tomomi Arai, Masashi Kameyama, Aya M Tokumaru, Etsuko Imabayashi, Kenji Ishibashi, Jun Toyohara, Yuko Saito, Kenji Ishii. Comparative pathological study on carbon-11 labeled Pittsburgh compound-B PET centiloid scale and amyloid beta deposition in postmortem brains. Alzheimer’s Association International Conference 2023, Amsterdam, 2023.6.16-
5. Tomomichi Iizuka, Yumi Umeda Kameyama, Makoto Fukasawa, Masahiro Akishita, Masashi Kameyama, Impaired ability to smile in Alzheimer’s disease is associated with reduced brain volume of nucleus accumbens and pallidum, revealed by artificial intelligence, Alzheimer’s Association International Conference 2023, Amsterdam, 2023.7.15

6. Ryosuke Shimasaki, Masanori Kurihara, Keiko Hatano, Ryoji Goto, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata. The association of CSF biomarkers with DAT SPECT and MIBG cardiac scintigraphy in Parkinson's disease, AD PD Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conference, Risbon, 2024/3/5-9
7. Keiko Hatanoa, Masashi Kameyamab,c, Masanori Kuriharaa, Kensuke Ohsec, Ryoji Gotod, Ryoko Iharaa, Mana Higashiharaa, Renpei Sengokue, Yasushi Nishinaa, Kazutomi, Kanemarua, Yuko Saitof, Shigeo Murayamaa,f,g, Atsushi Iwata. Age-related trends in amyloid positivity in Parkinson's disease without dementia, AD PD Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conference, Risbon, 2024/3/5-9
8. Masanori Kurihara, Ryosuke Shimasaki, Keiko Hatano, Kenichiro Taira, Ryoko Ihara, Mana Higashihara, Yasushi Nishina, Masashi Kameyama, Atsushi Iwata. Radiological Heterogeneity of Tokyo Medical Biobank Participants with Lewy body Diseases, AD PD Alzheimer's & Parkinson's Diseases Conferenc, Risbon, 2024/3/5-9

4 学会発表（国内）

1. 浅原有揮，石橋賢士，亀山征史，石井賢二．MMSE scoreの低下に伴うCIS ratioによるADとDLBの鑑別脳の変化．口演．第64回日本神経学会学術大会，千葉，2023.5.31-2023.6.3
2. 高橋健祐，栗原正典，石橋賢士，後藤良司，東原真奈，亀山征史，平野浩彦，波多野敬子，井原涼子，武田克彦，仁科裕史，金丸和富，石井賢二，岩田淳．進行性の犠牲球麻痺を主徴とする症例における18F-THK5351 PETの有用性．第64回日本神経学会学術大会，千葉，2023.5.31-2023.6.3
3. 浅原有揮，石橋賢士，亀山征史，石井賢二．認知機能障害の進行に伴うCIS ratioによるレビー小体型認知症とアルツハイマー病の鑑別能の変化．第13回日脳血管・認知症学会総会(Vas-Cog Japan 2023)，東京，2023.8.5
4. 波多野敬子， 後藤良司， 栗原正典， 井原涼子， 東原真奈， 仁科裕史， 亀山征史， 金丸和富， 岩田淳 Clinical profile of early drug-naive Parkinson's disease aged >= 80 years at diagnosisポスター．第64回日本神経学会学術大会，千葉，2023.5.31-2023.6.3
5. 亀山征史、圓子真由美、阪井純tracer kinetics を背景にIMPの早期像の活用． 第63回日本核医学学術総会，大阪，2023.11.16-2023.11.18
6. 亀山征史、圓子真由美、阪井純tracer kinetics を背景にIMPの早期像の活用．第66回日本脳循環代謝学会学術集会，福岡，2023.11.10-2023.11.11
7. 亀山祐美、亀山征史、小島太郎、石井正紀、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢、小川純人、飯塚友道、秋下雅弘．AIを用いた顔写真から認知機能低下を評価するモデルの検討． 第65回 日本老年医学会学術集会 ポスター 横浜．2023.6.16-18
8. 飯塚友道、亀山祐美、秋下雅弘、亀山征史.Impaired smile is associated with reduced subcortical brain volume in AD.認知症学会，奈良， 2023/11/24-26
9. 亀山征史tracer kinetics でひも解く脳血流定量のひ・み・つ ♡ 第31回北海道神経画像研究会 札幌 2023/3/17
10. 亀山征史 IMP脳血流SPECTの早期像の有用性 第13回核医学画像解析研究会 千葉 2023/12/9
11. 亀山征史 AIによる認知症診断支援 第11回TOBIRA研究交流フォーラム，東京，2023.7.28
12. 亀山征史．アミロイドPETが描き出す新たな可能性．第53回日本神経放射線学会，さいたま，2024.2.9-2.10

5 著書等

なし

6 特許

1. 特許7281633 亀山征史，竹内壮介，石井伸弥．平均赤血球年齢を決定する方法 特許査定2023/5/18
2. PCT/JP2023/12303亀山征史， 飯塚友道， 亀山祐美， 秋下雅弘． 疾患該当性判定プログラム及び疾患該当性判定装置 PCT出願2023/3/27

7 その他

1. 「認知症になると表情も変わる？顔つきに関わる特徴や最新のAI研究を紹介」、朝日新聞社 ウェブサイト なかまぁるhttps://nakamaaru.asahi.com/article/15021046

――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

社会参加とヘルシーエイジング研究チーム

チームリーダー：小林江里香

研究チームの概要

社会参加とヘルシーエイジング研究チームでは、多様な高齢者が、社会とのつながりや役割をもつことで、人生を楽しみ、持続可能な地域づくりに貢献できる社会の実現を目指し、社会参加・社会貢献とそれを支えるヘルシーエイジング（フレイル・認知症の一次予防）の推進、および社会関係の構築に資する研究を行う。

当チームを構成する以下の 3 つの研究テーマは、多様な専門領域の研究者が参加し、相互に協働・補完しながら、社会関係・社会参加やその効果を検証するための基礎的研究から、介入プログラムを社会実装するための応用研究まで幅広い研究に取り組んでいる。

社会参加・社会貢献研究テーマ： 人生 100 年時代における社会参加と社会貢献の在り方の提示を目指し、高齢期の社会的活躍の促進と早期認知機能低下抑制を軸として、①社会貢献活動の実態と効用および次世代高齢者のライフスタイルに合わせた社会活動の探索に関する調査研究、②社会参加の促進を目的とした多様な生涯学習プログラムの開発・検証と健康増進効果の機序解明に関する介入研究、③多世代共生社会の構築に資する社会参加・社会貢献活動の実装と普及に関する実践的研究に取り組む。認知機能および認知症に関連する研究は IRIDE の取組と連携し推進する。

ヘルシーエイジング研究テーマ：ヘルシーエイジングを推進する社会システムの構築に向けた研究を、フレイル・認知症の一次予防の観点から取り組むことを目指し、①長期縦断研究データ等を基に、フレイル・要介護化・認知症等の危険因子の解明、および地域における効果的な介護予防対策の実施と評価を進めること、②健康無関心や社会的弱者など、これまで働きかけが難しかった対象層へのアプローチ方法について検討し提言を行うこと、の2点を推し進める。

大都市社会関係基盤研究テーマ：大都市の中高年者のニーズに合った社会的つながりの構築を目指し、①中年期からの孤立予防、および②PDCA サイクルに沿った多様な通いの場の推進と評価に関する基礎的・応用的研究を行う。また、30 年以上にわたり継続している全国高齢者パネル調査（JAHEAD/NSJE）により、社会参加・関係やそれらの基盤となる家族・健康・経済状態等について、③高齢期の縦断的変化と時代・地域差の課題に取り組む。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

社会参加・社会貢献研究

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)社会貢献の実態に関する調査研究　ボランティアコホート	縦断追跡調査（活動の動機調査）	縦断追跡調査（ネガティブ影響調査）	縦断追跡調査（ネガティブさの受容）	縦断追跡調査（心身への長期的影響）	縦断追跡調査（生活への長期的影響）
(3)次世代高齢者に関する調査研究、積極的孤立調査	積極的孤立の心身・生活機能への影響調査	積極的孤立のメカニズムに関する調査・検討	次世代高齢者の社会貢献の実態調査	次世代高齢者の社会貢献のニーズ調査	次世代高齢者の社会活動の在り方提示
(2)多様な生涯学習の開発に関する介入研究	ペア碁プログラム等介入実施	ボードゲームプログラム等介入	ものづくりプログラム等介入実施	生活習慣系新規プログラム開発	多因子介入プログラム等介入実施
(2)生涯学習による健康増進効果の機序解明に関する介入研究	脳画像／脳機能等測定（予備試験）	脳画像／脳機能等測定（比較試験）	脳画像／脳機能等測定（比較試験）	脳画像／脳機能等測定（追跡）	脳画像／脳機能等測定（追跡）
(3)各種プログラムの地域への実装に関する実践的研究	自治体への実装と地域ニーズ調査	産後ケア事業の実践・影響調査	社会貢献実践高齢者調査	通いの場への改変と実装	社会貢献の在り方の提示
(4)国際的普及に向けた実践的研究	プログラムの現地向け最適化	国外での実践準備・調整	国外での実践	国外での実践、解析	TMIG型プログラムの国際発信

ヘルシーエイジング研究

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1) 基礎的研究：介護予防・フレイル予防に向けた疫学研究	・草津町、鳩山町、和光市での調査、研究の実施 ・データ分析、成果公表	・草津町、気仙沼市での調査、研究の実施 ・データ分析、成果公表	・草津町での調査、研究の実施 ・データ分析、成果公表	・草津町、養父市、和光市での追跡調査、研究の実施 ・データ分析、成果公表	・草津町、調査、研究の実施 ・データ分析、成果公表 ・社会還元
(2)－1) 応用的研究：地域づくりによるフレイル予防・改善のための社会システムの開発と実装化	・介入研究の準備、調整	・介入実施 ・実装戦略の検証 ・データ分析、成果公表	・介入実施 ・実装戦略の検証 ・データ分析、成果公表	・介入実施 ・実装戦略の改良 ・データ分析、成果公表	・介入実施 ・実装戦略の改良 ・データ分析、成果公表 ・社会還元
(2)－2) 応用的研究：高齢者就労における新たな職域の開拓に向けた研究	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装戦略の検証 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装戦略の検証 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装戦略の検証 ・データ分析、成果公表 ・社会還元
(3)－1))挑戦的研究：孤立高齢者へのアプローチ方法の研究	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表 ・社会還元
(3)－2) 挑戦的研究：無関心層へのアプローチ方法の研究	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表	・調査実施 ・実装方法の検討 ・データ分析、成果公表 ・社会還元

大都市社会関係基盤研究

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)中年期からの孤立予防	a.生活困窮を経験した単身中高年女性の面接 b.地域中高年者調査データの分析 c.チェックリスト、プログラム開発 d.相談機関調査、専門家ヒアリング	a.質的分析、成果公表 b.地域中高年者調査追跡調査実施 c.開発、パイロット研究 d.相談支援機関の役割・課題総括	a.質的分析、成果公表 b.データ分析、成果公表 c.開発、パイロット研究	b.データ分析、成果公表 c.プログラム修正or他地域展開	b.データ分析、成果公表 c.プログラム修正or他地域展開 d.成果公表
(2)PDCAサイクルに沿った多様な通いの場の推進と評価 ※課題の一部は、東京都介護予防・フレイル予防推進支援セ	・異動・介護保険情報の収集 ・各地域データの分析、成果公表 ・地域介入の継続	・異動・介護保険情報の収集 ・各地域データの分析、成果公表 ・地域介入の継続、他地域展開	・異動・介護保険情報の収集 ・各地域データの分析、成果公表 ・地域介入の継続、他地域展開	・異動・介護保険情報の収集 ・各地域データの分析、成果公表 ・地域介入の継続、他地域展開	・異動・介護保険情報の収集 ・各地域データの分析、成果公表 ・地域介入の継続、他地域展開

ンターと協働			・大田区・北区郵送調査	・地域介入の効果検証	・総括
(3)高齢期の健康・生活の縦断的変化と時代・地域差	JAHEAD第10回調査研究報告書 データ解析・公表	第11回調査実施 データ解析・公表	第9回データの公開 データ解析・公表	第11回調査研究報告書 データ解析・公表	 データ解析・公表

社会参加と社会貢献研究

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
鈴木　宏幸	研究副部長	研究全体の総括
桜井　良太	研究員	研究（1）A②・Bの責任者
高橋　知也	研究員	研究（1）A①、研究（3）Aの責任者
飯塚　あい	研究員	研究（2）A・B、研究（3）Bの責任者
小川　将	研究員（プロジェクト）	IRIDE　統合コホートに従事 テーマ研究との連携では研究（2）、（3）に関与
山城　大地	研究員（プロジェクト）	IRIDE　統合コホートに従事 テーマ研究との連携では研究（3）に関与
佐藤　研一郎	研究員（プロジェクト）	IRIDE　DEMCIRC研究に従事 テーマ研究との連携では研究（2）に関与
高橋　佳史	研究員（プロジェクト）	IRIDE　DEMCIRC研究に従事 テーマ研究との連携では研究（2）に関与
松永　博子	研究員（プロジェクト）	IRIDE　DEMCIRC研究に従事 テーマ研究との連携では研究（1）、（3）に関与
記内　杏奈	技術員（プロジェクト）	IRIDE　DEMCIRC研究に従事 テーマ研究との連携では研究（3）に関与
雛倉　圭吾	技術員（プロジェクト）	スマートウォッチ研究に従事 テーマ研究との連携では研究（1）、（3）に関与
藤田　幸司	非常勤研究員	研究（1）A①、研究（3）A・Bのデータ収集・分析
北郷　萌	非常勤研究員	各研究の医学的対応、対象者の医療相談対応
藤平　杏子	非常勤研究員	研究（1）Aデータ収集・解析
古谷　友希	非常勤研究員	研究（3）データ収集・解析
小林　キミ	非常勤研究員	研究（1）Bデータ収集・解析
清水　佑輔	非常勤研究員	研究（2）・（3）データ整理・分析

1　第四期中期計画における研究成果の概要

当テーマでは第四期おける基本ビジョンを「長寿を喜ぶ・喜ばれる多世代共生社会の実現」として設定している。今後、地域における自助（自身による健康維持・増進）と互助（健康度に応じた役割の獲得）および高齢者を中心とする地域活動が益々重要となるが、それらの実現には未だ課題が多い。超少子高齢社会が本格化する中で、高齢者自身が長寿を前向きに捉え、地域社会の中で生きがいを持ち、他の世代にとっても歓迎される形で社会との関わりを持つことが必要であると考えられる。

第四期テーマ研究の目標

高齢期の社会的活躍の促進と早期認知機能低下抑制を軸として、第四期の基本ビジョン「長寿を喜ぶ・喜ばれる多世代共生社会の実現」に資する中期目標を「人生100年時代における社会参加と社会貢献の在り方の提示」として設定する。

第四期中期計画期間においては上記目標達成のため、(1) 調査研究、(2) 介入研究、(3) 実践的

研究の3つを柱として、それぞれに含まれる各研究プロジェクトに取り組む。

(1) 社会貢献の実態と次世代高齢者に関する調査研究

研究1A-① ボランティアコホートの縦断追跡調査
研究1A-② WEBを含めた次世代高齢者の社会活動の探索
研究1B 積極的孤立のメカニズムと心身・生活機能への影響に関する検討

社会活動の実態と効用および次世代高齢者のライフスタイルに合わせた社会活動の探索に関する調査研究を行う。

当テーマ独自のボランティアコホート（N=400＋毎年追加）の縦断追跡調査を実施し、心身・認知機能への影響および社会貢献活動継続の動機や健康への否定的・肯定的影響、生活への長期的影響を検討し、社会活動の実態を明らかにする（研究1A-①）。高齢期における適切な社会参加・社会貢献の実施方法や、否定的側面をどのように対処するべきかを提示することをねらいとしている。

WEB上のコミュニティへの参画など次世代高齢者における社会参加・社会貢献活動の実態およびニーズを解明するための観察研究を実施する（研究1A-②）。現在の中年世代だけでなく、スマートフォンなどの情報機器を生活の一部として活用している現高齢世代も含めて次世代高齢者と位置づけ、これからの中年・高齢世代における新しい社会参加・社会貢献の実態と適切な在り方を示すことをねらいとしている。

上記研究と関連し、あえて孤立・孤独を好むというような社会交流に対する嗜好性に基づく検討も実施する。孤立・孤独の状態を自ら選択しているものを積極的孤立と位置づけ、積極的孤立が生じるメカニズムおよび心身・生活機能への影響を検討する（研究1B）。多様性を踏まえた新しい高齢者像の一端を示し、結果として社会的包摂の促進に寄与することをねらいとしている。

(2) 多様な生涯学習の開発と機序解明に関する介入研究

研究2A 特性・嗜好に応じた多様な介入方法の開発・検証
研究2B-① 介入の長期効果と残存効果の検討
研究2B-② 介入の機序解明の検討
研究2B-③ 介入研究に有用な指標の開発・検討

社会参加の促進を目的とした多様な生涯学習プログラムの開発および検証と健康増進効果の機序解明に関する介入研究を行う。

フレイルやMCIといった個人の健康度の特性および個人の嗜好や生活習慣などのニーズに応える多様な介入方法の開発・検証を行う。これまでに開発した絵本プログラムや囲碁プログラムを好事例とし、民間の企業・団体と連携して介入手法の開発行い、高齢者が社会生活や日常生活を送るにあたっての選択肢の幅の拡大を目指す。これには「健康志向が高い健康な層」だけでなく、より幅広い層に届くようなアプローチを念頭に実施する。もって、社会参加が困難な層における健康増進や社会参加の機会の増大をねらいとしている。

認知機能評価、心身・生活機能評価、心理実験、MRI、FDG-PET等の複合的な指標を用いた介入研究を実施し、知的活動による介入効果の機序解明を目指す。また、介入の長期効果についても検討を行う（研究2B-①・②）。生涯学習プログラムの機序を解明することで、より適切なプログラムの設計に向けた資料を得ると同時に、知的活動に消極的な地域住民を説得するための啓発材料を得ることをねらいとしている。

また、認知機能や社会参加に焦点をあてた介入研究を下支えする研究として、スクリーニングおよび介入効果の検討に有用な評価指標の開発・検討も行う（研究2B-③）。

(3) 多世代共生社会の構築に資する実践的研究

研究3A-① 多世代共生社会に資する実践研究 産後ケア事業およびSOSの出し方教育
研究3A-② 多世代共生社会に資する実践研究 実践高齢者調査
研究3B-① 各種プログラムの地域への実装
研究3B-② 各種プログラムの国際的普及に向けた効果検証

多世代共生社会の構築に資する社会参加・社会貢献活動の実装と普及に関する実践的研究を行う。

社会参加活動に従事する高齢者は社会貢献活動にも至るというこれまでの成果を背景として、社会貢献活動から他の社会貢献活動への展開・発展に関する実践的研究を実施する（研究3A-①）。本研究の足掛かりとして、読み聞かせを実践する高齢者ボランティアが展開しやすい活動として自治体が行う産後ケア事業および小・中学校が行うSOSの出し方教育へと参画し、高齢者本人および受け手に対する影響を検討する。社会貢献活動における享受者側の視点も評価に取り

入れる。また、これらの社会貢献活動を実践する高齢者を対象に定量的・定性的調査を実施し、社会貢献活動に至る背景についても検討を行う（研究3A-②）。両研究から、多世代共生社会に資する社会貢献の在り方を例示することをねらいとする。

これまでに本研究テーマにおいて開発してきたプログラムの実装と普及に向けた取組として、自治体への実装および住民主体の通いの場や都外遠隔地への普及にむけた適切な導入方法および障壁に関する検討を行う（研究3B-①）。当テーマの基本ビジョンである多世代共生社会の構築に資する実践的成果を得る。また、本テーマが開発したプログラムの国際的普及に向けた検証に取り組む（研究3B-②）。これまでに関係のある米国Drexel大学において生涯学習プログラムの介入効果を検証し、TMIG型社会参加促進・認知機能低下抑制プログラムとして国際的に発信する。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 社会貢献の実態と次世代高齢者に関する調査研究

【研究1A-①】ボランティアコホートの縦断追跡調査

2022年度に実施した調査（16自治体のREPRINTSボランティア団体を対象。配布数527、回収数473、回収率89.8%）を通じて得られたデータの整理および統計解析を行い、随時研究成果を発表した。2023年度は新たに580名に調査を打診し、今年度中の回収を予定している。また、これまでに得られた縦断データから認知機能と手指巧緻性の関連について解析した。

ボランティアコホートの縦断追跡調査では、これまでの追跡データから新型コロナウイルス(COVID-19)がボランティア活動継続意志にもたらす影響やアフターコロナを見据えた対応、SNSの活用、活動を通じて得られる幸福感および負担感などに関する横断的、または縦断的解析を行い、研究成果を発表した。

身体的にも認知的にも健康な65歳以上高齢者165人を対象とした7年間の縦断研究を行い、手指巧緻性と実行機能や処理速度などの高度な認知機能との間に双方向の関連性があることが判明した。また、最大歩行速度は実行機能と双方向に関連していた。手運動機能と認知機能を因子とした一般化線形混合モデルの結果、両因子が相互に依存している相互関連性を明らかにし、さらにそれらの神経基盤の共通性を示唆している。これらの知見は、高度な認知刺激のために手指巧緻性を必要とするプログラムの実装を促進するのにも役立つ。

【研究1A-②】WEBを含めた次世代高齢者の社会活動の探索

次世代高齢者の社会参加活動の探索のために、特に孤立しがちな男性（30歳代から60歳代）を対象として、社会参加活動に関するニーズ把握のためのインターネット調査を12月末より実施予定である。また、今後の調査研究に向け、次世代高齢者のニーズに関しテーマ研究内外のメンバーと定期的な議論を重ね、ゲーム（eスポーツ）や恋愛などのトピックを抽出した。

さらに、ヘルシーエイジング研究テーマと連携して和光市において住民健診を実施し、高齢者の知的活動と認知機能の関連についての検討を開始している。

社会参加活動に関するニーズ把握のためのインターネット調査を12月末より実施する。それらを分析することにより、次世代高齢者の社会参加活動を促すプログラムについて提案する。

【研究1B】積極的孤立のメカニズムと心身・生活機能への影響に関する検討

積極的孤立に関するインターネット調査を行い、精神的健康への影響を検討した。また、東京LSAにおける2年間の追跡調査を完了した。今後は積極的孤立と健康状態変化の因果関係について検討する予定である。加えて、孤立が健康に及ぼす神経メカニズムに人付き合いに関する嗜好性（すなわち積極的孤立）が及ぼす影響を調べるためfMRI実験を行っている。

20代から70代までの首都圏在住の9000人を対象としたインターネット調査を行い、人付き合いに対する嗜好性と社会的孤立が精神的健康に与える影響を検討した。人付き合いに対する嗜好性は、独り好きの指標とされている Preference for Solitude Scale から独り好き者を定義し、社会的孤立は他者との交流頻度が週1回未満の者と定義した。精神的健康の指標として、抑うつ、well-being、主観的孤立感を調査した。独り好きと社会的孤立を要因とした分散分析の結果、社会的孤立の有無にかかわらず、独り好きの志向を有する者ほど精神的健康度が有意に悪い傾向があることが明らかとなった。以上から、好んで孤立しているといった積極的孤立者が良好な精神的健康を有しているわけではないことが示唆された。

(2) 多様な生涯学習の開発と機序解明に関する介入研究

【研究2A】特性・嗜好に応じた多様な介入方法の開発・検証

認知機能低下者向けの新たな介入としてものづくりを題材としたプログラムを開発し、社会実装に関する検証を実施し報告した。また、このプログラムを社会参加型創作プログラムとして発

展させる開発事業を民間企業とともに開始した。この研究は国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）のプロジェクトとして採択された。また、これまで開発した囲碁プログラムの改良版として、新たに「ペア碁」という更なる社会的交流の要素を含んだプログラムを開発し、板橋区高島平地域にて介入を実施中である。さらに、囲碁を活用した認知機能低下者向けのプログラムの本試験および感染症流行下でも継続可能かつ身体機能低下者を対象としたオンライン囲碁プログラムによる介入を関東近郊の複数の高齢者施設で実施中である。

MCIおよび軽度認知症の人46名を対象に有償化した際の参加率と精神機能への有効性について検討した結果、全6回（最初に1・2回無料、3・4回各2000円、5・6回各3000円）の完遂率は78.3%であり、金銭的理由による脱落は1名だけだった。また、完遂者においては精神的健康状態（A-WHO-5-J）において有意な改善がみられた。有償でも参加を希望するような趣味講座に前向きなMCI・軽度認知症の人にとっては、趣味講座への参加が精神的健康状態の向上に寄与する事が示唆された。

【研究2B-①】介入の長期効果と残存効果の検討

介入の長期効果と残存効果の検討では、囲碁プログラムの参加者の継続要因に関する追跡調査を実施、解析した。

囲碁プログラムの参加者の継続要因に関する追跡調査では、継続要因として仲間との交流、老いに対する不安の解消、日常生活のストレスの解消などが抽出された。

【研究2B-②】介入の機序解明の検討

これまでに当テーマが開発した絵本プログラムおよび囲碁プログラムにおいて板橋区内において新たに介入を実施し、参加者を対象に頭部MRIおよびFDG-PETを撮像し脳機能評価に関する予備的検討を開始した。対象者数はそれぞれ絵本プログラムが14名、ペア碁プログラム13名であり、2024年2月までにデータ取得を行う予定である。

興味・関心のある情報を検索する機能は、加齢の過程でも損なわれにくくことが示唆されている。当テーマで実施している認知介入研究に参加する地域住民107名を対象に社会参加活動の頻度と人物情報の検索可能性判断の関連を検討した。

当テーマで実施している認知介入研究に参加する地域淳民を対象に社会参加活動の頻度と人物情報の検索可能性判断の関連を検討した結果、社会参加を頻繁に行う群は社会参加を頻度が低い群よりも人物情報に対する検索可能性判断の精度が高かったことが明らかになった。この知見は、社会参加活動に従事することで、人物情報を重要な情報として記銘が促進されたことが示唆された。この知見から、社会参加活動を通した特性・嗜好に応じた多様な介入を行うことで、自身の認知機能に対する判断が向上することが期待される。（業績＃、受賞）

【研究2B-③】介入研究に有用な指標の開発・検討

これまでに開発した「映像を用いた集団版認知機能評価検査」について、認知機能低下の早期発見を可能にするためのデータ分析を実施し、また介入研究の評価指標としての分析を実施した。

映像を用いた集団版認知機能評価検査については、これまでにデータを取得した829名のデータから、60歳から85歳以上までの5歳ごとの標準値を提示した。また、本検査を用いて絵本プログラムの介入効果を検討したところ、年代による介入効果の相違について示す事が可能であった。

(3) 多世代共生社会の構築に資する実践的研究

【研究3A-①】多世代共生社会に資する実践研究　産後ケア事業研究、SOSの出し方教育研究

産後ケア事業研究では、府中市で実施している産後ケア事業との連携のもと、当チームで養成した地域の絵本読み聞かせボランティア団体に同事業内で絵本の読み聞かせの実施を依頼し、母親の認知的ソーシャルキャピタルに与える介入効果を検討している。

SOSの出し方教育研究は、当チームが養成した絵本読み聞かせボランティア団体が活動する地域にて実施している。現在までに、神奈川県川崎市内の小学校1校、秋田県北秋田市内の小学校1校にて実施を完了しており、2023年度中には、東京都府中市内の中学校1校、秋田県内の中学校1校でも実施予定である。並行して、実際に児童・生徒が気軽にSOSを出せる相手としての「信頼できる大人」像を検討している。現在はこれらの知見をもとに心理士と連携し、SOSを受け止めることができるシニアを養成するための講習を実施するための準備を進めている。

産後ケア事業研究では、介入6か月の追跡調査の結果、地域互酬性の向上に寄与することが示された。

SOS の出し方教育研究では、児童にとっての「信頼できる大人」像は「優しい」ことや「傾聴的態度・受容的態度」であり、生徒にとっては「規範性・規範意識」などの人格的側面が重視されることが明らかとなった。

【研究3A-②】多世代共生社会に資する実践研究　実践高齢者調査

多世代共生社会に資する実践的研究における高齢者調査では、これまでの調査では対象としてこなかった層として生活困窮者に着目し、生活困窮者予備軍へのアプローチとして、生活費を賄うための求職者が多いアクティブシニア就業支援センターの就労支援担当者3名を対象とする半構造化面接を実施した。アクティブシニア就業支援センターとは、おおむね55歳以上を対象とした就労支援施設である（以下、アクティブ）。

生活困窮者予備軍へのアプローチとして、生活費を賄うための求職者が多いアクティブシニア就業支援センターの就労支援担当者3名を対象として半構造化面接を実施した。就労支援の障壁として、「高齢者へのネガティブイメージが企業側にある」、「福祉機関との連携・協働により支援を止めない枠組みの構築」、「個人情報・本人の同意が支援を阻む要因ともなる」、「フェードアウトさせないための手立てが本当の課題」という4つの概念が明らかとなった。また、アクティブの利用者を対象とした支援ニーズに関する質問紙調査も実施し、現在、データ作成及び分析中である。

【研究3B-①】各種プログラムの地域への実装

絵本読み聞かせプログラムについては、①首都圏を中心とする自治体からの受託（板橋区、文京区、北区、新宿区、練馬区、目黒区、●品川区、立川市、八王子市、狛江市、稲城市）のほか、②学術機関との共同開催（●奈良教育大学）、③地域包括支援センターとの共同開催（北区光照苑、●踊場地域ケアプラザ）、④地域サロンにおけるプログラムとしての開催（●NPO法人地域共生開発機構ともつく）、⑤既存の絵本読み聞かせボランティア団体との共同開催（りぷりんと・あおば、りぷりんと・大田、くまの子）など、多様なステークホルダーとの共同・連携のもとで開催することができた（●印は新規フィールド）。また囲碁プログラムは2020年度から継続中の新宿区薬王寺エリアに加え、今年度から新たに新宿区中落合エリア、新宿区西新宿エリアで展開した。

【研究3B-②】各種プログラムの国際的普及に向けた効果検証

認知症対策は国際的な課題であり、我が国だけでなく世界的に受容される認知症予防及び進行抑制を目的としたプログラムを開発、普及させる必要がある。当センターで開発した囲碁を活用した認知機能低下抑制プログラムは、国内の高齢者の認知機能維持に一定の効果が示されたが、非アジア圏の高齢者に受容され、効果がみられるかは不明である。そこで今回、米国で予防医学研究に従事するDrexel大学のMulhorn教授（健康管理学科長）と協働し、米国において囲碁プログラム、および囲碁プログラムの発展型であるペア碁プログラムの効果検証に関する共同研究について協議を開始した。Mulhorn教授を2024年1月に招聘する。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜(1) 社会貢献の実態と次世代高齢者に関する調査研究＞
【センター内】デジタル高齢社会研究テーマ
【センター外】静岡大学
＜(2) 多様な生涯学習の開発と機序解明に関する介入研究＞
【センター内】オーラルフレイル・栄養研究テーマ、PET画像診断研究テーマ、放射線診療科、フレイル外来
【センター外】東京大学、国立長寿医療研究センター、理化学研究所 革新知能統合研究センター
＜(3) 多世代共生社会の構築に資する実践的研究＞
【センター内】認知症・精神保健研究テーマ
【センター外】奈良教育大学、国立長寿医療研究センター、理化学研究所 革新知能統合研究センター

ヘルシーエイジング研究

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
村山 洋史	研究副部長（テーマリーダー）	研究全体の総括、データ収集・解析・発表、論文作成
野中 久美子	研究員	研究（３）の責任者、データ収集・解析・発表、論文作成：社会参加関連研究
野藤 悠	研究員	研究（２）の責任者、データ収集・解析・発表、論文作成：運動関連研究
横山 友里	研究員	研究（１）の責任者、データ収集・解析・発表、論文作成：栄養関連研究
阿部 巧	研究員	研究（１）の責任者、データ収集・解析・発表、論文作成：運動関連研究
菅原 康宏	認知症未来社会創造センター研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
天野 秀紀	研究助手	データ収集・解析・発表、論文作成
大曽根 由実	非常勤職員	データ収集・解析・発表、論文作成
北村 明彦	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
齋藤 尚子	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
須田 拓実	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
高瀬 麻以	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
西 真理子	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成
成田 美紀	非常勤研究員	データ収集・解析・発表、論文作成

１　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 基礎的研究：介護予防・フレイル予防に向けた疫学研究

当テーマが運営している地域コホート（群馬県草津町、埼玉県鳩山町、兵庫県養父市、宮城県気仙沼市）の調査や転帰データの追加を行った。これらに加え、今年度、都市近郊部コホートとして新たに和光コホート(埼玉県和光市)を立ち上げた。郵送質問紙調査にて 40～64 歳者の 2,692 名と 65 歳以上者の 7,132 名、および会場型調査にて 65 歳以上者の 1,004 名に参加いただいた。郵送質問紙調査と会場型調査はデータ連結が可能である。

これらのコホートデータを用い、以下をはじめとする知見を得た。

・定期的な運動実践（運動）、良好な食習慣（栄養）、定期的な社会活動への参加（社会参加）の 3 要素をすべて満たしている者は、いずれか 1 要素だけ満たしている者に比べ、フレイル発症のリスク、並びに要介護認定発症リスクが低下すること

・多様な食品摂取は、要介護認知症の発生リスクの低下と有意に関連すること

・血清クレアチニン・シスタチン C 比とサルコペニア有病率との間に負の関連が、骨格筋指数、握力、最大歩行速度との間に正の関連がみられること

・希薄な社会的ネットワークは認知機能低下―総死亡の関連を強める方向に働くが、独居は弱める方向に作用すること（同じ「孤立」でも健康への作用が異なる可能性）

(2) 応用的研究：介護予防・フレイル予防の手法検証

1)地域づくりによるフレイル予防。改善のための社会システムの開発と実装化

2014 年度より兵庫県養父市にて、「研修を受けたシルバー人材センターの会員が仕事として各地区に出張し、フレイル予防教室の立ち上げ・一定期間の運営を行う」というフレイル予防モデルを立案し、実践してきた。今年度は新たに 9 か所の拠点が開設され、実施地区の割合は 64.9%となった。約 5 年間の中間評価を実施し、以下のことを明らかにした。

・フレイル予防教室の参加者では非参加者に比べ、要支援・要介護認定の発生リスクが半減する

こと

2)高齢者就労における新たな職域の開拓に向けた研究
介護の周辺業務支援を一部担う高年齢介護助手に一貫して着目してきた。2020 年度には、国内初となる全国調査（約 3,600 の介護老人保健施設全数を対象とした郵送調査）を実施した。また、2022 年度には、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、グループホーム、有料老人ホームに対象を拡大し、介護助手導入による施設経営面への効果を明らかにすることを目的とした全国調査を行った。今年度は、2020 年データを解析し、以下についてシリーズで論文化を進めた。
・全体として、約 3 割の介護老人保健施設が高年齢介護助手を雇用していること
・職場でのソーシャルサポートが多いほど、高年齢介護助手の情緒的消耗感が低いこと
・業務への多様なメリットを感じているほど、高年齢介護助手の情緒的消耗感が低いこと
・そのメリットを享受するには、利用者との接点が多い業務への従事が重要であること
・介護職員は介護助手雇用によって様々な業務改善効果を実感し、その効果実感は職員の情緒的消耗感の低さに関連していること
また、一連の調査結果と施設における高年齢介護助手の導入プロセスをまとめた実践者向け書籍「ご存じですか？『介護助手』のちから」を出版した。

(3) 挑戦的研究：働きかけが難しい層へのアプローチ方法の検討
1)孤立高齢者へのアプローチ方法の研究
社会的孤立状態にある高齢者 13 名へのインタビュー調査を実施した。途中経過として、
・60～70 代の身体機能が比較的高い孤立高齢者は必ずしも孤立状態になく、何らかの交流機会（例：囲碁の会、区の介護予防教室など）を持つものの、そこで親密な交流関係を築くきっかけを見つけられない、あるいは敢えて築かないようにしていたこと
・一方、80 代以上の対象者の多くは、自身や親族・友人の加齢により交流機会が著しく減少し、予期せぬ孤立状態に至っていたこと
を明らかにした。次年度以降も引き続きインタビュー調査を継続していく。

2)無関心層へのアプローチ方法の研究
①ナッジを活用した健康無関心層へのアプローチに関する研究
ナッジとは、行動科学の知見に基づき、望ましい行動を自発的に促すアプローチの総称である。今年度は、2020 年に新潟県および山形県で行った高齢者への調査データを用い、ナッジメッセージが高齢期の社会参加活動を促し得るかを検討した。現状、高齢期の社会参加を促すために、利得（例：健康効果）を強調しているものが多い。しかし、分析の結果、
・社会参加活動未実施者では、損失に訴求したメッセージ（「あなたが社会参加活動をしなければ、やりたい事を諦めることになり、自己負担の医療介護費が高くつく」）を読んだ方が、社会参加活動への関心が高く、印象が良く、参加意向が高いこと
を明らかにした。本研究により、利得よりも、損失に訴求したメッセージの方が社会参加促進に対する効果が高い可能性が示唆された。
また、一般向け書籍「ナッジ×ヘルスリテラシー：ヘルスプロモーションの新たな潮流」、実践者向け書籍「保健活動で使える！ナッジ：押さえておくべき基本と実践例」を出版した。

②オンラインフラットフォームを活用した社会参加活動のマッチング支援
首都圏 3 自治体（埼玉県和光市、東京都八王子市、東京都板橋区）、社会福祉協議会等と協働しながら、オンラインプラットフォームを活用して高齢者を就労および就労的活動にマッチングする仕組みの実装とその有効性の検証を 2023 年 3 月より開始した。各自治体が本研究を自治体事業と位置付け、コーディネーターを核に就労・就労的活動の掘り起こし、高齢者への普及啓発とアプローチ、およびオンラインマッチングシステムの活用を着実に進めている。次年度は、実装に向けてのボトルネックの分析、および実際のマッチングがどの程度達成されたかといった効果分析を行っていく。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況
(1) 基礎的研究：介護予防・フレイル予防に向けた疫学研究
第三期中期計画の研究を継続、発展させることを目的として以下の研究を行いたい。
(1) 草津・鳩山縦断調査
草津コホート：6～7月に会場型調査を実施し、711名が参加した。また、今年度は悉皆調査（郵送＋訪問）の年でもあり、65歳以上の健常者から要介護5までの者も含めた2,110名に対し、6～8月

に質問紙調査を行った（回収数：1,536件）。加えて、自治体の協力を得て、転帰情報、介護保険情報、医療費・介護費データの情報収集を行った。
鳩山コホート：鳩山コホート調査：12月に65歳以上の町民全員（5,476名）への郵送での悉皆質問紙調査を行った（回収状況は現在集計中）。加えて、自治体の協力を得て、転帰情報、介護保険情報、医療費・介護費データの情報収集を行った。
・横断分析の結果、ベースライン時の血清クレアチニン・シスタチンC比（CCR）とサルコペニア有病率との間に負の関連が、骨格筋指数、握力、最大歩行速度との間に正の関連がみられた。6年間の縦断分析の結果、CCR最高値群（第4四分位）に比べて、最低値群（第1四分位）で最大歩行速度が有意に大きく低下していた。サルコペニア関連指標のバイオマーカーとして、CCRは有用であると考えられた（Kitago et al., J Nutr Health Aging, 2023）。
・血中GDF15濃度の最高値群（第4四分位）の総死亡リスクは、最低値群（第1四分位）に比べて、約2倍高いことが示された。腎機能の指標であるシスタチンCまたはβ2-ミクログロブリンを追加で調整すると統計的な有意差が消失したことから、血中GDF15濃度と総死亡リスクとの関連において腎臓の機能低下が一部関与している可能性が示された（Fujita et al., J Gerontol A Biol Sci Med Sci, 2023）。
定期的な運動実践（運動）、良好な食習慣（栄養）、定期的な社会活動への参加（社会参加）の3要素をすべて満たしている者は、いずれか1要素だけ満たしている者に比べ、要介護認定発症リスク（ハザード比）が有意に低下することが示された（図1; Abe et al., Exp Gerontol, 2023）。

(2) 養父コホート調査
自治体の協力を得て、転帰情報、介護保険情報、介護費データの情報収集を行った。6.8年間の前向きコホート研究の結果、多様な食品摂取は、要介護認知症の発生リスクの低下と有意に関連することが示された（Yokoyama et al., Public Health Nutr, 2023）。

(3) 気仙沼コホート調査
自治体の協力を得て、転帰情報、介護保険情報データの情報収集を行った。

(4) 和光コホート調査
6～7月に無作為抽出（対象人口の1/3抽出）された40～64歳の市民9,092名、および要介護2以下の65歳以上の市民全数13,994名を対象とした郵送による質問紙調査を実施した（回収数：2,692件と7,132件）。また、9～10月に65歳以上の市民1,004名を対象とした会場型調査を実施した。質問紙調査と会場型調査は、データの結合が可能である。

(5) その他のコホート
大田区での調査から得られたデータを用い、運動、栄養、社会参加の3要素の充足状況（2要素以上充足で良好と定義）の変化と新規フレイル発症との関連性を解析した結果、ベースライン（T0）と1回目の追跡調査（T1）ともに3要素の充足が不良であった者に比べ、両調査において3要素の充足が良好であった者およびT0では充足状況が不良であったがT1では良好に改善していた者は2回目の追跡調査（T2）においてフレイルを発症するリスクが有意に低下することが示唆された。（Abe et al., IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 ポスター発表, 2023 [Outstanding Poster Presentation Award受賞]）
足立コホート（認知症と精神保健研究テーマと共同）のデータを用い、認知機能低下と総死亡の関連を、社会関係（世帯構成、社会的ネットワーク）がどう修飾するかを明らかにした。その結果、希薄な社会的ネットワークは認知機能低下―総死亡の関連を強める方向に働くが、独居は弱める方向に作用することが明らかになった。同じ「孤立」という概念で語られることがある独居と希薄な社会的ネットワークであるが、その健康への作用は全く異なる可能性が示唆された（図2; Murayama et al., J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci, 2023; Murayama et al, The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America ポスター発表, 2023）
・十日町コホート（新潟大学、東京医科歯科大学、東京医科大学と共同）の縦断データを用い、種々の交絡要因を調整しても、社会的孤立者は、社会的孤立していない人と比較して、海馬と前頭前野の容積減少が大きいことを明らかにした（村山他, 第12回日本認知症予防学会学術集会 ポスター発表, 2023 [日本認知症予防学会浦上賞受賞]）。

(2) 応用的研究：介護予防・フレイル予防の手法検証
1)地域づくりによるフレイル予防・改善のための社会システムの開発と実装化
1-1)フレイル予防の拠点づくりによるアプローチの効果検証

本取組開始後最大4.8年間追跡した結果、フレイル予防教室の参加者では非参加者に比べて、要支援・要介護認定の発生リスクが半減したことが明らかになった（図4; Nofuji et al., Prev Med, 2023)。一方で、本教室の認知に影響する要因分析の結果から、地域とのつながりや健康への関心が乏しい、フレイルといった層には認知されにくいことが明らかになり（野藤他，第82回日本公衆衛生学会総会ポスター発表， 2023)、こうした層へのアプローチ方法の検討が課題として浮き彫りになった。

1-2)フレイル予防の“ちょい足し”プログラムの効果および実装戦略の検証

第三期では、通いの場のフレイル・介護予防効果を高めるための手法の一つとして、既存の活動にフレイル予防の観点で不足している要素（筋力運動、栄養・口腔ケア等）を無理なく付加する“ちょい足し”プログラムを開発し、東京都内の複数の自治体に実装した。しかし、普及にあたってはいくつかの課題が残されており、第四期ではそれらの解決に向けた研究を行うことを計画している。

今年度は、埼玉県和光市にて、体操や趣味活動等を行っている高齢者の自主グループを対象にクラスター比較試験を行い、“ちょい足し”プログラムの効果検証を行った。研究には、市内で活動する13グループ105名（介入群5グループ53名、対照群8グループ52名）が参加した。介入群は、ちょい足しの実践方法を学ぶ講習会にグループの代表者が参加し、その後3か月間、グループ活動の際にちょい足しプログラムに取り組んだ。12月末に最終の測定会を実施する予定である。

2)高齢者就労における新たな職域の開拓に向けた研究

2-1)シルバー人材センターにおける新たな職域開拓および就業寿命延伸に向けた実証研究

埼玉県シルバー人材センターと共同して、2018年度より、「フレイル予防教室の運営がシルバー人材センターの仕事に成り得るか」という実証研究を進めている。これは、養父市で開発したモデルが仕事として成立し、普及するかという視点で同モデルの普及可能性を探るものである。第四期では、実施にあたっての課題を解決しつつ、更なる普及および他地域への展開を目指している。

今年度は、全58センターを対象に昨年度の実施状況や課題に関する調査を行うとともに、県内全4ブロックで教室運営のスキルを学ぶ人材養成講座を実施した。

2-2)福祉分野における高年齢介護助手の導入促進に向けた実証研究

当テーマでは、介護の周辺業務支援を一部担う高年齢介護助手に一貫して着目してきた。高齢者の社会参加を通じた心身機能維持への寄与に加え、介護職スタッフの業務負担を軽減し、専門性の高い業務に専念することを可能にする取り組みであると想定される。2020年度には、国内初となる全国調査を実施した。約3,600の介護老人保健施設全数を対象とした郵送調査であり、施設管理者、介護職員、そして介護助手を対象にした3つの調査を同時に実施した。また、2022年度には介護老人保健施設だけでなく、特別養護老人ホーム、グループホーム、有料老人ホームといった他の介護施設も対象にし、再び全国調査を行った。この調査では、介護助手導入による施設経営面への効果を明らかにすることを目的とした。

(3) 挑戦的研究：働きかけが難しい層へのアプローチ方法の検討

1)孤立高齢者へのアプローチ方法の研究

分析の途中経過として、以下を明らかにした。

- 60～70代の身体機能が比較的に高い孤立高齢者の中には、趣味や体操グループなど社会参加活動の場に通っている者もいた。しかし、そこで親密な交流関係を築くきっかけがない、あるいは敢えて築かないようにしていた
- 一方、80代以上の対象者の多くは、自身や親族・友人の加齢により交流機会が著しく減少し予期せぬ孤立状態に至っていた
- 孤立高齢者が抱える生活課題は家事援助などにとどまらず、財産の管理や整理といった「終活」に関する事、生活家電（冷暖房機や給湯器等）の故障対応など多岐に渡るが、それらへ対応できる支援が不足していた

以上から、単に社会参加活動の場へ通うことが必ずしも孤立の予防や解消につながらないこと、親密な交流関係を築ける場の運営方法検討の重要性が示唆された（野中他，第84回日本公衆衛生学会学術集会ポスター発表， 2023；齊藤他， 第84回日本公衆衛生学会学術集会ポスター発表，2023)。

2)無関心層へのアプローチ方法の研究

2-1)ナッジを活用した健康無関心層へのアプローチに関する研究
　ナッジとは､行動科学の知見に基づき､望ましい行動を自発的に促すアプローチの総称である。人は合理的な選択を常にするわけではないという前提に基づき、人が持つ意思決定の癖（認知バイアス）を利用して行動変容を促す仕掛けである。いわゆる「健康無関心層」や「必要性を分かっているがなかなか一歩が踏み出せない層」へのアプローチとして公衆衛生分野での注目を集めている。このナッジが健康づくりや介護予防・フレイル予防に活用できるかを検証するため、神奈川県横浜市や新潟県十日町市等と共同して調査を行っている。
また、一般市民向け書籍「ナッジ×ヘルスリテラシー：ヘルスプロモーションの新たな潮流」（村山他，大修館書店，2022)、保健医療福祉従事者向けの書籍「保健活動で使える！ナッジ：押さえておくべき基本と実践例」（髙橋，村山他，医学書院，2023）を出版した。

2-2)オンラインプラットフォームを活用した社会参加活動のマッチング支援
　第三期に、職業上のスキルや知識を活かし地域団体の活動を支援する新たなボランティア形態である「プロボノ」に参加する現役勤労者ボランティアへの定性的・定量的調査を実施した。今年度は、それらの分析を行い、スキルを活かして明確な業務に取り組むプロボノが、地域活動経験がないホワイトカラー職種の中年男性（40～50代）にとって参加しやすい活動形態であることを明らかにした（Nonaka et al., Geriatr Gerontol Int, 2023; Takase et al., Geriatr Gerontol Int, in press; Nonaka et al., IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 ポスター発表，2023［Outstanding Poster Presentation Award受賞］; 野中他，日本老年社会科学会第65回大会ポスター発表，2023［第33回日本老年学会総会合同ポスター（老年社会科学部門）最優秀演題賞受賞］［第65回日本老年社会科学会大会優秀ポスター賞受賞］)。
これらの知見に基づき、首都圏3自治体（埼玉県和光市、東京都八王子市、東京都板橋区）にて、自治体や社会福祉協議会と協働しながら、オンラインプラットフォームを活用して高齢者を就労および就労的活動（役割を伴う雇用労働や有償・無償のボランティア活動）にマッチングする仕組みの実装とその有効性の検証を開始した（図6)。

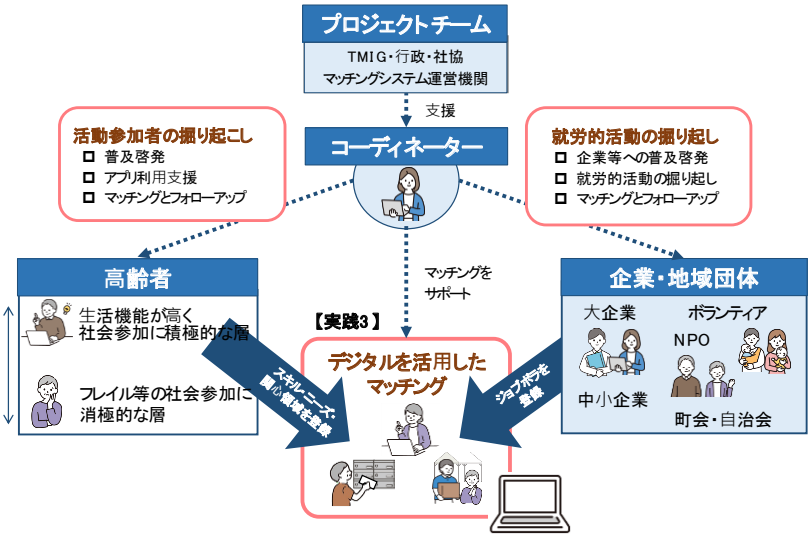


図6．オンラインプラットフォームを活用した社会参加活動のマッチング支援の体制概念図

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜フレイル予防・改善のための地域介入＞
【センター内】社会参加と社会貢献研究テーマ、大都市社会関係基盤研究テーマ、口腔保健と栄養研究テーマ、介護予防研究テーマ
【センター外】筑波大学
＜孤立高齢者へのアプローチ方法
【センター内】認知症と精神保健研究テーマ、介護・エンドオブライフ研究テーマ、東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター
【センター外】日本福祉大学
＜高齢者就労＞
【センター内】フレイルと筋骨格系の健康研究テーマ
【センター外】東北大学
＜介護予防・フレイル予防に向けた疫学研究＞

【センター内】医療・介護システム研究テーマ
【センター外】
＜腎機能とサルコペニア・フレイル＞
【センター内】腎臓内科
【センター外】
＜フレイル外来患者を対象とした複合介入＞
【センター内】フレイル予防センター
＜認知症リスクチャート開発＞
【センター内】認知症未来社会創造センター
＜フレイル予防・改善のための栄養介入＞
【センター外】女子栄養大学
＜社会参加促進＞
【センター外】千葉大学予防医学センター、慶應義塾大学
＜孤立高齢者・無関心層へのアプローチ方法＞
【センター外】京都大学、帝京大学大学院公衆衛生学研究科、
＜長寿コホートおよび高齢者就労＞
＜フレイル発症の要因解明＞

大都市社会関係基盤

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
小林　江里香	研究部長	研究全体の総括、研究項目(3)責任者
清野　諭	主任研究員（係長）	研究項目(2)責任者
村山　陽	研究員（係長）	研究項目(1)責任者
小島　みさお	研究員（主任級）	研究項目(2)北区フィールド分担者 ※9月まで非常勤研究員
長谷部　雅美	非常勤研究員	研究項目(1)補助
山口　淳	非常勤研究員	研究項目(1)補助
遠峰結衣(9月退職)	非常勤研究員	研究項目(2)大田区フィールド分担者
城寶　佳也(1月～)	非常勤研究員	研究項目(2)大田区フィールド分担者
竹内　真純	非常勤研究員	研究項目(3)JAHEAD補助、（1）補助
平松　正和	非常勤研究員	研究項目(1)補助
堀　左馬之介	非常勤技術員	研究項目(1)補助

1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 中年期からの孤立予防

①孤立に陥るライフコースのパターンとそのリスク要因、孤立や困窮状態に陥りながらも援助要請が抑制されるメカニズムを明らかにする基礎研究、②孤立・困窮予防のためのプログラム開発と実装化に向けた応用研究を行う。①に関しては、既存データの解析・発表を行い、生活困窮を経験した単身中高年女性を対象にした面接調査を1月～2月に実施した。

②については、中年期からの現状把握と将来展望を促すためのツールとして「一人暮らしライフスタイルチェックリスト」の作成を進めた。また、孤立・困窮リスクが高い中高年者が情報を入手し、プログラムに参加するための仕組みづくりを目指し、中高年者の「馴染みの場所・行きつけの場所」を介した情報提供の可能性をさぐるための調査を実施し、経済的問題を抱える人が利用する公的相談機関（自立相談支援窓口等）の調査を3月に実施した。相談機関調査は、チェックリスト配布やプログラムの実施を含む孤立予防において、これらの機関がどのような役割を果たせるのか、またそのための課題は何かを明らかにすることを目的とする。

(2) PDCAサイクルに沿った多様な通いの場の推進と評価

基礎研究として、①多様な通いの場の推進に資するエビデンスを提示する疫学的分析、②通いの場の「担い手」としての住民参加促進のためのニーズの分析、③応用研究：地域介入研究（アクションリサーチ）に取り組んでいる。①に関しては、データ解析により、自治体のPDCAへの取り組み状況と通いの場の数の地域相関関係、コロナ禍の通いの場への参加中断・継続がフレイルに及ぼす短期的影響などを明らかにした。②については、都内4自治体の中年・前期高齢者のデー

タ分析をもとに、就労状況と担い手としての意向との関係についての論文を公表した。③に関しては、東京都北区の全19圏域のうち12圏域において、地域包括支援センターによるPDCAサイクルに沿った通いの場づくりを伴走支援した。団地在住男性の孤立解消を目的としたプロジェクトや移動型スーパーを活用した居場所づくりなど、ユニークな取り組みを進めている。

（3）高齢期の健康・生活の縦断的変化と時代・地域差（東京LSA）

全国高齢者パネル調査（JAHEAD）の第11回調査（2024年実施予定）の準備を進めるとともに、第10回調査（2021年実施）までのデータ解析を進めた。2023年度は、特に、1987年から30年以上にわたり継続しているJAHEADの特徴を活かした、調査年や出生コホートによる差異に関する論文や学会発表を重点的に行った。社会的孤立（交流頻度でみた客観的な孤立）や主観的孤立（孤立感）の出現率・加齢変化における時代的・世代的変化に関する研究も含まれる。地域差としては、独居と抑うつ傾向の関係が、居住地の都市度により異なることを報告した。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

（1）中年期からの孤立予防

①基礎研究：理論モデルの確立

生活困窮を経験した単身中高年女性を対象にした面接調査：9～10 月にかけて、都内の無料定額宿泊所や養護老人ホーム(計 13 ヵ所)を訪問し面接調査に向けたヒアリングを行い、調査実施に向けた準備を行った。1 月より中高年期に生活困窮を経験した単身女性高齢者約 50～80 人を対象にした半構造化面接調査を実施した。

②応用研究：孤立・困窮予防策の開発と実装

一人暮らしライフスタイルチェックリストの作成：現在独居または将来独居となる可能性が高い 40-60 代くらいの人を対象とする。Web 上でチェック項目に回答してもらい、診断結果と対策を提示することにより、自身のリスクの認識、サービスなどの情報・知識の獲得、将来展望を促すことを目的とする。5 月に専門家 15 名による 3 つのワーキンググループ（健康 G、経済 G、社会 G）を立ち上げ、8 月にかけて、グループ別に先行研究のレビュー等に基づきチェック項目候補を選定した。9～10 月には 45-74 歳の調査会社のモニター1000 人を対象に Web での予備調査を行い、11～12 月にはそのデータも用いながら、最終的な項目の選定やリスクの判断基準の設定、対象者に示すメッセージ・アドバイス案の作成を行った。1 月からはチェックリスト案について自治体関係者等への意見聴取を行い、修正した上で年度内に内容を完成させる。Web 版の制作は令和５年度末から令和６年度前半にかけて行う。

「馴染みの場所・行きつけの場所」を介した情報提供の可能性についての検討：7～8 月に都内在住の 50-60 代の調査会社のモニター9269 人に Web 調査を行い、「馴染みの場所・行きつけの場所」の有無や種類について尋ね、さらに同意を得られた 50 人に対して半構造化面接（オンライン）を行い、場所の特徴、訪問頻度、そこでの他者との交流状況などについて把握した。9～12 月にかけてテープ起こしおよびデータ整理を行い、1～3 月に質的分析手法によるデータ解析を実施した。

参加型プログラムの開発：調査会社のモニターを対象に、2023 年 1～2 月に実施した孤立・困窮予防のプログラムの内容と効果について、日本心理学会で報告した。

孤立予防における公的相談機関の役割・課題の明確化：10～11月に調査実施に向けて、厚労省担当者および相談機関職員を含めた検討会および視察を実施した(計5回)。3月には全国の就労支援機関（ハローワーク等；約500機関、地域若者サポートステーション約143機関)、自立相談支援機関（社会福祉協議会等：約1,400機関）を対象にした質問紙調査(Web調査)を実施した。さらにより深く聞く必要がある場合、同意を得た機関5～15箇所ほどに対してヒアリング調査を行い、チェックリスト案内の配布やプログラム実施を含む孤立予防の機能を持つための課題や他機関・団体との連携のあり方などについて検討する。

プログラム実装化に向けた協働体制の強化：今後、チェックリスト案内配布やプログラムの実施において協力を得るため、都内2つの自治体における自立相談支援機関との関係づくりに努めた。まず、社会福祉法人 新宿区社会福祉協議会とは共同研究契約を締結し、10月より当法人が令和5年度に実施した特例貸付利用者への郵送調査の調査データの二次解析を行い、特例貸付利用者が抱える生活の中での困り事や必要とするサポート、孤立・孤独状態や馴染みの場所・行きつけの

場所などについて検討している。いたばし暮らしのサポートセンターとは、共同で第1回居場所勉強会を8月に開催し（企画者：村山陽）、中高年の居場所の問題について情報共有を行った。2～3月に第2回居場所勉強会を開催する予定である。さらに、日本心理学会第87回大会において、「中高年期からの孤立・困窮予防に向けた挑戦」と題するシンポジウムを開催し（企画者：村山陽）、当テーマ研究員や福祉の現場で支援業務に携わる生活相談員、施設職員からの報告を元に議論を深めた。

（2）PDCA サイクルに沿った多様な通いの場の推進と評価

①基礎研究：多様な通いの場の推進に資するエビデンスを提示する疫学的分析

大田区フィールド：15,500 名（ベースライン時 65-84 歳）を対象として実施した 2016 年・2018 年・2022 年の郵送調査データと、2022 年 9 月までの死亡・介護保険情報をリンケージし、縦断分析をおこなった。また、継続的に収集してきた介護保険情報から、COVID-19 が新規要支援・要介護申請に及ぼした影響について分析を進めており、2023 年 12 月末時点の転帰データの提供を受けた。

八王子市・豊島区フィールド：通いの場の取組の短期的な効果評価を目的として、2021 年に実施したベースライン調査（八王子市 75 歳以上 31,124 名、豊島区 65-84 歳 5,576 名）と 2022 年の 1 年後追跡調査データをリンケージした分析をおこなった。今後、毎年 3 月末時点の転帰データの提供を受ける予定である。

北区フィールド：2021 年のベースライン調査データ（65 歳以上全員 51,741 名）と、区から提供を受けた小地域（町丁目）データをリンケージし、多角的なマルチレベル分析をおこなった。今後、毎年 3 月末時点の転帰データの提供を受ける予定である。

②基礎研究：通いの場の「担い手」としての住民参加促進のためのニーズ分析

東京都介護予防・フレイル予防推進支援センターの事業として 2020-21 年度に実施した、都内 4 区市（渋谷区、墨田区、町田市、国分寺市）の住民調査における中年者(55-64 歳)と前期高齢者(65-74 歳)のデータを分析し、通いの場の種類別の参加意向、担い手としての参加意向や意向をもつ人の特徴、希望参加頻度を検討した。

③応用研究：PDCAサイクルに沿った通いの場等の取組を推進する地域介入研究（アクションリサーチ）

北区フィールド：2022 年度から開始している北区での地域介入を継続した。4 月～11 月末までの間に、全 19 圏域のうち 12 圏域（介入地区）に計 78 回現地訪問し、地域包括支援センターによる PDCA サイクルに沿った通いの場づくりを伴走支援した。団地在住男性の孤立解消を目的としたプロジェクトや移動型スーパーを活用した居場所づくりなど､ユニークな取り組みが進行中である。

（3）高齢期の健康・生活の縦断的変化と時代・地域差（東京 LSA）

全国高齢者パネル調査（JAHEAD）の第 10 回調査（2021 年実施）の研究報告書の作成を進めるとともに、2024 年度に実施予定の第 11 回調査の内容についての検討を行った。また、第 10 回までのデータを用いて、社会的孤立・孤立感の調査年による推移や出生コホート別の縦断的変化などについて分析を進めた。

2023 年度から 2026 年度までの科研費（基盤 A）を獲得できたため、第 11 回調査は 2024 年度に実施することが確定した。第 10 回調査を含む縦断データの分析・学会発表も順調に進んでおり、次年度以降はこれらの論文発表が進むことが期待される。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜(1) 中年期からの孤立予防＞

【センター内】ヘルシーエイジング研究テーマ、社会参加・社会貢献研究テーマ

【センター外】文京学院大学、聖学院大学、目白大学、社会福祉法人 新宿区社会福祉協議会、いたばし暮らしのサポートセンター、社会福祉法人やまて福祉会、Career Value研究所

＜(2) PDCAサイクルに沿った多様な通いの場の推進と評価＞

【センター内】社会参加と地域保健研究チーム（ヘルシーエイジング研究テーマ)、東京都健康長寿医療センター研究所東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター

＜(3) 【東京LSA】 高齢期の健康・生活の縦断的変化と時代・地域差＞

【センター内】社会参加と地域保健研究チーム（ヘルシーエイジング研究テーマ）

【センター外】ミシガン大学、東京大学、桜美林大学、東京都立大学、早稲田大学、慶應義塾大学、西武文理大学、実践女子大学、国立長寿医療研究センター

論文・学会発表（令和5年度）

社会参加と社会貢献研究

1　論文（誌上発表）：原著

1. Abe T, Fujita K, Sagara T, Ishibashi T, Morishita K, Murayama H, Sakurai R, Osuka Y, Watanabe S, Fujiwara Y. Associations between frailty status, work-related accidents and efforts for safe work among older workers in Tokyo: A cross-sectional study. Geriatrics & Gerontology International. 23(3): 234-238. (2023). (査読あり)(IF: 3.3,2022)
2. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Suzuki H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K. Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers: The IRIDE cohort study. Geriatrics & Gerontology International.Nov;23(11):887-888. (2023). (査読あり)(IF：3.3,2022)
3. Asaoka H, Okamura S, Baba C, Fujimoto N, Ishizuka Y, Takahashi T. Influence of the COVID-19 pandemic on children with autism spectrum disorder and their mothers in Japan. Autism & Developmental Language Impairments, 8, 1-18. (2023). (査読あり) (IF:2.20,2022)
4. Cho D, Suzuki H, Ogawa S, Takahashi T, Sato K, Iizuka A, Kobayashi M, Yamauchi M, Kinai A, Li Y, Fujiwara F. Evaluation of the usefulness of a paper-pencil group cognitive assessment for older adults in the community. BMC public health 23(1) 1273-1273. (2023). (査読あり) (IF：4.135,2022)
5. Fujihira K, Takahashi T, Sagara T, Matsunaga H, Fujita K, Suzuki H, Murayama H, Fujiwara Y. Relationship between face‐to‐face and non‐face‐to‐face communication, and well‐being in older volunteers during the pandemic: The REPRINTS project. Journal of Community & Applied Social Psychology 34(2). (2024). (査読あり) (IF:2.968, 2021)
6. Fujihira K, Takahashi M, Wang C, Fuke S, Hayashi N. Consumption of hot protein-containing drink accelerates gastric emptying rate and is associated with higher hunger levels in older adults. Temperature. In press. (2023). (査読あり) (IF：4.344,2022) .
7. Fujihira K, Takahashi M, Wang C, Hayashi N. Factors explaining seasonal variation in energy intake: A review. Frontiers in Nutrition. (2023); 10: 1192223. (査読あり) (IF:5.0.2022)
8. Fujiwara Y, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Fujita K, Murayama, H, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status in old age and cause-specific disability in Japanese community-dwelling older adults with or without frailty: A 3.6-year prospective study. Geriatrics & Gerontology International. Nov;23(11):855-863. (2023). (査読あり)(IF:3.3,2022)
9. Fukuzaki N, Suzuki Y, Uchida J, Nakajima T, Yamamoto S, Imamura K, Yoshikoshi S, Harada M, Matsuzawa R, Kamiya K, Matsunaga A. Changes in body composition of patients undergoing hemodialysis during the coronavirus disease 2019 pandemic: a retrospective longitudinal study. Renal Replacement Therapy ,9(1):12, (2023). (査読あり) (IF=1.2, 2022)
10. Furuya T, Ogawa S, Yamazaki H, Matsumoto D, Motomiya M, Tamura Y, Arai K. Association between reasons for employment and burnout tendencies among rehabilitation technology professionals. Journal of Physical Therapy Science, 35(10), 696-702. (査読あり) (2023).
11. Fushimi T, Fujihira K, Takase H, Miyashita M. Relationships among Physical Activity, Physical Function, and Food Intake in Older Japanese Adults Living in Urban Areas: A Cross-Sectional Study. Geriatrics (Basel). 8(2):41. (2023). (査読あり) (IF:2.3,2022)
12. Iizuka A, Yamashita M, Ura C, Okamura T. GO Revisited: Qualitative Analysis of the Motivating Factors to Start and Continue Playing GO. J Community Health Nurs. 40(1):52-63. Jan-Mar. (2023). (査読あり). (IF:1.0, 2022)
13. Imamura K, Yamamoto S, Suzuki Y, Yoshikoshi S, Harada M, Osada S, Kamiya K, Matsuzawa R, Matsunaga A. Prevalence, overlap, and prognostic impact of multiple frailty domains in older patients on hemodialysis. Archives of Gerontology and Geriatrics. Nov.114. 105082.(2023). (査読あり) (IF:4.0,2022)
14. Kobayashi J, Suzuki H, Sato K, Ogawa S, Matsunaga H, Kawashima T. Eye Movement Differences in Japanese Text Reading between Cognitively Healthy Older and Younger Adults. UbiComp/ISWC '23 Adjunct: Adjunct Proceedings of the 2023 ACM International Joint Conference on Pervasive and Ubiquitous Computing & the 2023 ACM International Symposium on Wearable Computing, 469-474. (2023). (査読あり) (IF:-, -)
15. Kobayashi-Cuya KE, Sakurai R, Sakuma N, Suzuki H, Ogawa S, Takebayashi T, Fujiwara Y. Bidirectional Associations of High-Level Cognitive Domains with Hand Motor Function and Gait Speed in High-Functioning Older Adults: A 7-year Study. Archives of Gerontology and Geriatrics.117. Online ahead of print (2023). (査読あり)(IF: 4.0,2022)
16. Matsunaga M, Suzuki Y, Yamamoto S, Imamura K, Yoshikoshi S, Harada M, Kutuna Toshiki, Kamiya K, Yoshida A, Ichikura K, Fukase Y, Murayama N, Tagaya H, Matsunaga A. Interactional effects of depressive symptoms and physical function on daily physical activity in ambulatory patients receiving hemodialysis, Renal Replacement Therapy, 9: 28, (2023). (査読あり) (IF:1.2,2022)
17. Nishinakagawa M, Sakurai R, Nemoto Y, Matsunaga H, Takebayashi T, Fujiwara Y. Influence of education and subjective financial status on dietary habits among young, middle-aged, and older adults in Japan: a cross-sectional study. BMC Public Health. 26;23(1):1230. (2023). (査読あり)(IF: 4.135,2022)
18. Nishinakagawa M, Sakurai R, Nemoto Y, Matsunaga H, Takebayashi T, Fujiwara Y. Influence of education and subjective financial status on dietary habits among young, middle-aged, and older adults in Japan: a cross-sectional study. Journal of Public Health. 23(1):1230. (2023) (査読あり) (IF:4.4,2022)
19. Ogawa S, Suzuki H, Kobayashi-Cuya KE, Murayama S, Iizuka A, Takahashi T, Yamauchi M, Fujiwara, Y. A Randomized Controlled Pilot Study on Home-Based Expressive Writing Intervention for Community-Dwelling Japanese Older Adults Who Care About Their Forgetfulness. SAGE Open, 13(4). (2023). (査読あり)

(IF:2.032,2022)

20. Roberts MJ, Thackray AE, Wadley AJ, Alotaibi TF, Hunter DJ, Thompson J, Fujihira K, Miyashita M, Mastana S, Bishop NC, O'Donnell E, Davies MJ, King JA, Yates T, Webb D, Stensel DJ. Effect of Acute Walking on Endothelial Function and Postprandial Lipemia in South Asians and White Europeans. Med Sci Sports Exerc. 55(5):794-802. (2023). (査読あり) (IF:4.1,2022)
21. Sakurai R, Abe T, Fujiwara Y. Low intention to visit a hospital for hearing loss of older adults. Journal of the American Medical Directors Association. 24(7):1092-1093. (2023). (原著、IF: 7.6,2022)
22. Sakurai R, Miura Y, Kodama K, Fujimoto M. Effect of auditory deprivation on adaptive locomotion: Interaction with lower visual field occlusion. Behavioural Brain Research.455. Online ahead of print. (2023). (原著、IF: 2.7,2022)
23. Shimizu Y, Hashimoto T, Karasawa K. Reducing negative attitudes toward older adults and increasing advocacy for policies to support older adults: Bayesian analysis approach. Acta Psychologica, 239, 103995. (2023) (IF:1.8,2022)
24. Shimizu Y, Sato K, Ogawa S, Cho D, Takahashi Y, Yamashiro D, Li Y, Takahashi T, Hinakura K, Iizuka A, Furuya T, Suzuki H. Subjective well-being and implicit anti-old attitudes held by Japanese older adults. Geriatrics & Gerontology International (in press). (2023). (査読あり) (IF:3.3,2022)
25. Shimizu Y, Suzuki M, Hata Y, Sakaki T. Older adults are healthier than many people expect: Reducing anti-old attitudes. Educational Gerontology, 49(12), 1116-1127. (2023). (IF:1.5,2022)
26. Shimizu Y., Suzuki, M., Hata, Y., & Sakaki, T. Prescriptive stereotypes, negative attitudes toward older adults, and social participation: Surveys on younger and older Japanese. Cogent Gerontology, 3(1), 2310096. (2024). (査読あり)
27. Shimizu Y, Suzuki M, Hata Y, Sakaki T. The relationship between frailty and social participation: Focus on subjective health. BMC Research Notes, 16, 123. (2023). (IF:1.8,2022)
28. Shimizu Y, Takahashi T, Sato K, Ogawa S, Cho D, Takahashi Y, Yamashiro D, Li Y, Hinakura K, Iizuka A, Furuya T, & Suzuki H. Perceptions of older adults and generativity among older citizens in Japan: A descriptive cross-sectional study. Osong Public Health and Research Perspectives. (in press).(2023) (査読あり)(IF: 4.3,2022)
29. Suzuki Y, Harada M, Matsuzawa R, Hoshi K, Koh Y M, Aoyama N, Uemura K, Yamamoto S, Imamura K, Yoshikoshi S, Kamiya K, Yoshida A, Shoji T, Matsunaga A. Trajectory of Serum Albumin Prior to Death in Patients Receiving Hemodialysis. Journal of Renal Nutrition. Mar;33(2):368-375, (2023). (査読あり). (IF: 3.2, 2022).
30. Takahashi T, Matsunaga H, Sagara T, Fujita K, Fujihira K, Ogawa S, Suzuki H, Murayama H, Fujiwara Y. Effects of fear of COVID-19 on older volunteers' willingness to continue their activities: REPRINTS cohort study. Geriatrics & gerontology international. (2024). (査読あり)(IF: 3.3,2022)
31. Takahashi Y, Sato K, Yamashiro D, Ogawa S, Li Y, Furuya T, Shimizu Y, Cho D, Takahashi T, Suzuki H. Mild cognitive impairment decreases the accuracy of own memory monitoring. Geriatrics & gerontology international. (2024). (査読あり)(IF: 3.3,2022)
32. Takahashi M, Mineshita Y, Yamagami J, Wang C, Fujihira K, Tahara Y, Kim HK, Nakaoka T, Shibata S. Effects of the timing of acute mulberry leaf extract intake on postprandial glucose metabolism in healthy adults: a randomised, placebo-controlled, double-blind study. Eur J Clin Nutr. 77(4):468-473. (2023). (査読あり). (IF: 4.7, 2022)
33. Tataka Y, Hiratsu A, Fujihira K, Nagayama C, Kamemoto K, Fushimi T, Takase H, Miyashita M. Habitual Physical Activity and Dietary Profiles in Older Japanese Males with Normal-Weight Obesity. Int J Environ Res Public Health. 20(14):6408. (2023) . (査読あり) (IF:4.614,2021)
34. Thackray AE, Hinton EC, Alanazi TM, Dera AM, Fujihira K, Hamilton-Shield JP, King JA, Lithander FE, Miyashita M, Thompson J, Morgan PS, Davies MJ, Stensel DJ. Exploring the acute effects of running on cerebral blood flow and food cue reactivity in healthy young men using functional magnetic resonance imaging. Hum Brain Mapp. 44(9):3815-3832. (2023) (査読あり) (IF:4.8,2022)
35. Uchida J, Suzuki Y, Imamura K, Yoshikoshi S, Nakajima T, Fukuzaki N, Harada M, Kamiya K, Matsuzawa R, Matsunaga A. The Association of Short Physical Performance Battery with Mortality and Hospitalization in Patients Receiving Hemodialysis. Journal of Renal Nutrition, Online ahead of print. (2023). (査読あり). (IF: 3.2, 2022).
36. Yamabe S, Yamamoto S, Harada M, Suzuki Y, Imamura K, Yoshikoshi S, Osada S, Matsunaga A. Utility of the Low Physical Activity Questionnaire for hemodialysis patients with frailty: a cross-sectional study. Renal Replacement Therapy, 9: 61, (2023). (査読あり) (IF=1.2, 2022).
37. Yoshikoshi S, Suzuki Y, Yamamoto S, Imamura K, Harada M, Osada S, Matsunaga A. Effects of anthropometric indicator changes on hospitalization and mortality among patients on hemodialysis. Journal of Nephrology. Sep;36(7):1983-1990, (2023). (査読あり) (IF:3.4,2023)
38. Yoshikoshi S, Yamamoto S, Suzuki Y, Imamura K, Harada M, Kamiya K, Matsunaga A. Reserved gait capacity and mortality among patients undergoing hemodialysis. Nephrology Dialysis Transplantation. Nov 30;38(12):2704-2712, (2023). (査読あり) (IF:6.1,2023)
39. Yoshikoshi S, Yamamoto S, Suzuki Y, Imamura K, Harada M, Yamabe S, Matsunaga Y, Osada S, Tagaya H, Matsunaga A. Association between Physical Frailty and Sleep Disturbances among Patients on Hemodialysis. A Cross-Sectional Study. Nephron 148 (3): 152-159, (2024). (査読あり) (IF=2.27, 2022).
40. 伊藤晃碧, 古谷健. 精神作業が心理的負担感とストレス反応に及ぼす影響 ―ピーク・エンドの法則を応用した課題構成の効果― 応用心理学研究,49(2),pp119-129,(2023).
    査読あり (IF:0.8,2022)
41. 小林江里香, 村山陽 ,長谷部雅美 ,高橋知也 ,山口淳 ,山崎幸子. 都市部の中高年独居者における心身の健康, 経済状態, 社会関係上の問題による類型化と類型別特徴 社会福祉学, 64(1), 61-74(2023).査読あり
42. 松永博子, 高橋知也, 相良友哉, 藤原佳典, 鈴木宏幸. 中高齢者就労支援施設（アクティブシニア就業支援センタ

ー）における支援の障壁に関する研究：ESSENCE Studyより．老年学雑誌 14, 18－29. (2024).
43. 清水佑輔, 鈴木雅, 畠由佳子, 榊敏朗. 高齢者との接触経験の質に対する認知とエイジズム：クロスラグモデルを用いた検討. 老年社会科学 (2024). (査読あり).

２ 論文（誌上発表）：総説

1. Fujihira K, Takahashi M, Wang C, Fuke S, Hayashi N. Effects of temperatures of protein-containing drinks on gastric emptying and appetite in older people. International Conference on Adaptations and Nutrition in Sports, Singapore, 2023.7.19-21.
2. Fujita K, Taniguchi Y, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Trajectories of frequency of going out in old ages and its associated factors. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
3. Fujita K, Yamazaki S, Imuta H, Yong R, Matsunaga H, Fujiwara Y. Depressive Tendencies and Negative Life Events as Predictors of Homebound Status Among Older Adults in Japan. The Gerontological Society of America 2023 Annual Scientific Meeting, Tampa, 2023.11.8-12.
4. Fujiwara Y, Takahashi T, Ogawa S, Yamashita M, Fujihira K, Matsunaga H, Fujita K, Murayama H, Suzuki H. The effect of negative attitudes towards activities on mental health status among elderly volunteers. The Gerontological Society of America 2023 Annual Scientific Meeting, Tampa, 2023.11.8-12.
5. Fuke S, Fujihira K, Wang C, Takahashi M. Effects of the timing of meal and sulforaphane intake on postprandial oxidative stress and antioxidant capacity in healthy adults. International Conference on Adaptations and Nutrition in Sports, Singapore, 2023.7.19-21.
6. Furuya T, Ogawa S, Cho D, Yamashiro D, Takahashi Y, Li Y, Kawakubo K, Takahashi T, Suzuki H. The Timed Up and Go Dual Task (TUG-DT) and its Relationship to Various Cognitive Domains in Normal Elderly Subjects. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
7. Hinakura K, Sakurai R, Sasai H, Ogawa S, Seino S, Hata T, Fujiwara Y, Awata S. Characteristics of wearable activity trackers users and association with health related indices among older adults. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
8. Iizuka A, Ura C, Okamura T. Innovative Dementia Care in Japan: Timeless Wisdom. GO game / Community care. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
9. Iizuka A, Ura C, Yamashita M, Ito K, Okamura T. Effects of the “Symbiotic GO Program” on cognitive function, mental health, and social network of older adults with cognitive decline. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
10. Kobayashi J, Suzuki H, Sato K, Ogawa S, Matsunaga H, Kawashima T. Eye Movement Differences in Japanese Text Reading between Cognitively Healthy Older and Younger Adults. Adjunct Proceedings of the 2023 ACM International Joint Conference on Pervasive and Ubiquitous Computing & the 2023 ACM International Symposium on Wearable Computing, 2023.10.8.
11. Kobayashi-Cuya K, Sakurai R. Surveillance technology for older adults with and without dementia. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
12. Matsunaga H, Fujita K, Takahashi T, Suzuki H, Fujiwara Y. Trial of the second safety net - street living prevention facilities: Tokyo Metropolitan Government's special area efforts as one of the support projects for the self-reliance of the needy. The 32nd World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Piran, 2023.9.19-23.
13. Matsunaga H, Takahashi T, Suzuki H, Fujiwara Y. A Study on Independence Support Measures for the Needy and Aid for its Supporters: Targeting the Independence Support Facilities in Tokyo. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
14. Ogawa S, Suzuki H, Iizuka A, Takahashi T, Murayama S, Matsunaga H, Yamauchi M, Fujiwara Y. Effects of Uncontrollability of Negative Rumination on the Number of Errors and Execution Time of TMT-B in Japanese community-dwelling older adults. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
15. Sakurai R, Pieruccini-Faria F, Cornish B, Fraser J, Binns M, Beaton D, Dilliott AA, Kwan D, Ramirez J, Tan B, Scott C, Sunderland K, Tartaglia C, Finger E, Zinman L, Freedman M, McLaughlin P, Swartz R, Symons S, Lang A, Bartha R, Black S, Masellis M, Hegele R, McIlroy W, ONDRI Investigators, Montero-Odasso M: Link among apolipoprotein E E4, gait, and cognition in neurodegenerative diseases: ONDRI study. Alzheimer's & Dementia, Online ahead of print, 2024.
16. Sato K, Shimizu Y, Suzuki H, Takahashi T, Ogawa S, Iizuka A, Hinakura K, Cho D, Li Y, Furuya T, Takahashi Y, Yamashiro D, Fujihira K, Haga T, Kobayashi M, Fujiwara Y. The relationship between cognitive function and implicit anti-old attitudes in older adults, The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
17. Sato K, Suzuki H, Takahashi T, Ogawa S, Takahashi Y, Cho D, Yamashiro D, Iizuka A, Shimizu Y, Furuya T, Li Y, Hinakura K, Fujihira K, Fujiwara Y. The relationship between cognitive function, subjective forgetfulness anxiety, and implicit age attitudes in older adults. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
18. Shimizu Y, Hashimoto T, Karasawa K. The impact of the perception that “old age is still a long way off” on ageism. The 2023 American Psychological Association Annual Convention. online. 2023.8.3-5.
19. Shimizu Y, Sato K, Ogawa S, Cho D, Takahashi Y, Yamashiro D, Li Y, Takahashi T, Hinakura K, Iizuka A, Furuya T, Suzuki H. The relationship between well-being and implicit anti-old attitudes in older adults. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
20. Shimizu Y, Suzuki M, Hata Y, Sakaki T. Ageism toward the unhealthy old among the healthy old: Bayesian factor analysis and linear model. The 15th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, Hong Kong, 2023.7.13-15.
21. Suzuki H, Takahashi T, Ogawa S, Iizuka A, Sato K, Hinakura K, Cho D, Li Y, Furuya T, Takahashi Y,

Yamashiro D, Shimizu Y, Fujihira K, Haga T, Kobayashi M, Fujiwara Y. Social implementation of the cognitive intervention program through a training for picture book reading: examination of differences in intervention effects by age group. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.

22. Suzuki H. Intervention programs for the prevention of cognitive decline based on cognitive reserve: lifelong learning programs. Dementia 5: Non-pharmacological intervention for dementia. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
23. Takahashi T, Fujihira K, Sagara T, Fujita K, Suzuki H, Matsunaga H, Murayama H, Fujiwara Y. Factors Related to Generativity of Older Reading Aloud Volunteers During the COVID-19 Pandemic: REPRINTS Study. The Gerontological Society of America 2023 Annual Scientific Meeting, Tampa, 2023.11.8-12.
24. Takahashi T, Fujihira K, Sagara T, Ogawa S, Suzuki H, Matsunaga H, Murayama H, Fujiwara Y. Effects of Fear of COVID-19 on Older Volunteers' Willingness to Continue Their Activities: REPRINTS Cohort Study. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
25. Takahashi Y, Sato K, Yamashiro D, Ogawa S, Li Y, Furuya T, Cho D, Shimizu Y, Takahashi T, Suzuki H, Fujiwara Y. MCI decreases the accuracy of own memory monitoring. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
26. Yamashiro D, Yamashita M, Abe T, Takahashi Y, Sato K, Fujiwara Y, Awata S, Sasai H, Obuchi SP, Ishizaki T, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Factors associated with depressive symptoms by cognitive function level in community-dwelling older adults: IRIDE Cohort Study. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
27. Yoshikoshi S, Suzuki Y, Yamamoto S, Imamura K, Harada M, Fukuzaki N, Tobita A, Nikkawa S, Osada S, Matsunaga A. Trajectory of Anthropometric Indicator and Clinical events Among Patients on Hemodialysis, 60th ERA-EDTA Congress, Milan, 2023.6.15-18.
28. Yoshikoshi S, Yamamoto S, Suzuki Y, Imamura K, Harada M, Fukuzaki N, Tobita A, Nikkawa S, Matsunaga A. Reserved gait capacity and clinical outcomes in hemodialysis patients. World Congress of Nephrology, Bangkok, 2023.3.30-4.2

3　学会発表（国際）

1. 阿部巧, 山城大地, 山下真里, 植田拓也, 鈴木宏幸, 藤原佳典, 栗田主一, 鳥羽研二. IRIDE Cohort Study investigators.地域包括支援センターにおける認知機能評価の実態把握と認知機能低下者スクリーニングモデルの適用可能性：IRIDE Cohort Study. 第12回日本認知症予防学会学術集会, 新潟, 2023.9.15-17.
2. 朝岡寛史, 高橋知也 直示動詞使用時の発達的特徴の定量的測定とASD児に対する発達に基づく介入の効果. 日本特殊教育学会第61回大会, 横浜, 2023.8.25-27.
3. 出口直樹, 桜井良太, 雛倉圭吾, 笹井浩行 都市部在住高齢者におけるスマートウォッチの受容. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 函館, 2023.10.28-29.
4. 藤原佳典, 高橋知也, 藤平杏子, 松永博子, 相良友哉, 藤田幸司, 山下真里, 川窪貴代, 村山洋史, 鈴木宏幸. ボランティア活動への満足度・負担感が精神的健康度に及ぼす影響：REPRINTS 研究より. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
5. 藤田幸司, 横山友里, 西真理子, 松永博子, 藤原佳典. 高齢者におけるボランティア活動頻度, 満足度と主観的ウェルビーイングとの関連. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
6. 藤田幸司, 横山友里, 西真理子, 藤原佳典. 地域社会におけるボランティア活動の継続と主観的ウェルビーイングとの関連. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
7. 藤平杏子, 高橋 将記, 王春弋, 福家冴佳, 林直亨. 高齢者の胃排出と食欲に及ぼす飲料温度の影響. 第77回日本食糧栄養学会, 札幌, 2023.5.12-14.
8. 藤平杏子, 高橋知也, 松永博子, 相良友哉, 藤田幸司, 山下真里, 鈴木宏幸, 村山洋史, 藤原佳典. 中高年者のコミュニティ所属数と幸福感の関連：REPRINTS研究より. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
9. 福家冴佳, 藤平杏子, 田原敦志, 酒井哲志, 王春弋, 費薇, 大橋海音, 鍛島秀明, 高橋将記. 健常成人における胃排出速度と体内時計・生体リズムとの関連. 第10回時間栄養学会学術大会, 広島, 2023.8.26.
10. 福家冴佳, 尾﨑真実帆, 藤平杏子, 金鉉基, 中岡隆志, 柴田重信, 高橋将記.ヒトの朝食と夕食における酸化ストレスならびに抗酸化能力の変動. 第77回日本食糧栄養学会, 札幌, 2023.5.12-14.
11. 古谷友希, 阿部巧, 小川将, 山城大地, 野藤悠, 横山友里, 清野諭, 天野秀紀, 藤原佳典, 村山洋史 (2023). 地域在住高齢者におけるBMIとba-PWVとの関連性. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 函館, 2023.10.28-29.
12. 古谷友希, 新井啓介, 土屋稔. 理学療法士を目指す学生の就業理由とBurnoutの傾向との関連. 第12回日本理学療法教育学会学術大会, 大宮, 2023.12.9-10.
13. 古谷友希, 田村由馬, 小川将, 田宮創, 高橋もも, 寺島雅人, 鶴見知己, 中谷祐己, 安隆則. 糖尿病患者における外出自粛期間前後でのHbA1cの変化. 第9回糖尿病理学療法学会, 名古屋, 2023.9.16-17.
14. 早川美知, 本川佳子, 横山友里, 大須賀洋祐, 飯塚あい, 豊島堅志, 田村嘉章, 石川譲治, 藤原佳典, 荒木厚. 地域在住高齢者に対する運動・栄養・社会参加の複合プログラムによる介入についての予備的検討. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
15. 雛倉圭吾, 桜井良太, 笹井浩行, 清野諭, 秦俊貴, 藤原佳典, 栗田主一. インドア派の高齢者の精神的健康状態：オンラインでの他者交流に着目した検討. 第34回日本疫学会学術総会, 滋賀, 2024.1.31-2.2.
16. 雛倉圭吾, 山城大地, 小川将, 長大介, 飯塚あい, 古谷友希, 鈴木宏幸. 地域在住高齢者における座位行動の多寡と認知機能との関連-パソコン, スマートフォンの使用頻度を考慮した検討-. 埼玉県理学療法士学会, 埼玉, 2023.1.22.
17. 飯塚あい, 小川将, 鈴木宏幸, 藤原佳典. 認知機能低下者の技能の習得と喪失に関する検討:卓上ゲームの囲碁を用いて. TOBIRA第11回研究交流フォーラム, 御茶ノ水, 2023.7.28.
18. 藺牟田洋美, 山崎幸子, 藤田幸司. 家族との会話や笑いと高齢者の居場所感との関連 農村地域在住高齢者の家族関係の居場所感に焦点をあてて. 日本発達心理学会第34回大会, 大阪, 2023.3.3-5.
19. 伊藤晃碧, 飯塚あい, 宇良千秋, 山下真里, 鈴木宏幸, 岡村毅. 共生型囲碁プログラムの開発と評価：実現可能性の検討. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.

20. 管思清・田村真樹・清水佑輔・野口晃菜・大島郁葉 (2023). マイクロアグレッション・スティグマ・社会的カモフラージュの壁を越える：自閉症者を含むマイノリティにおける社会的孤立・孤独から解放するための理解への架け橋ー社会心理学・臨床心理学・精神医学・障害科学の観点からー. 日本心理学会第87回大会, 神戸, 2023.9.15-17.
21. 川窪貴代, 小川将, 高橋知也, 松永博子, 山内美紗子, 小林桃子, 佐藤研一郎, 藤原佳典, 鈴木宏幸. 小学生における「信頼出来る大人」と「相談手段」「命・つながり・SOS の出し方」プログラムのデータから(1).日本健康心理学会第36回大会, 横浜, 2023.12.2-3.
22. 小林潤平, 鈴木宏幸, 佐藤研一郎, 小川将, 松永博子 健常高齢者の読み過程における眼球運動に関する解析：若年者との比較. 第42回日本認知症学会学術集会, 奈良, 2023.11.24-26.
23. 松永博子, 伊藤晃碧, 大辻みずき, 李岩, 小川敬之, 藤原佳典, 鈴木宏幸. MCI・軽度認知症の人を対象とした趣味講座における有償化の影響:社会実装に向けた専門職・家族の要望. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪,2023.10.28-29.
24. 松永博子, 高橋知也, 相良友哉, 鈴木宏幸, 村山洋史, 藤原佳典 中高齢者就労支援施設における支援課題に関する研究. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
25. 松永博子, 小川将, 高橋知也, 藤平杏子, 小宮山恵美, 芳賀輝子, 藤原佳典, 鈴木宏幸.産後ケア事業における世代間交流プログラムREPRINTSの援用 (2) . 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
26. 森裕樹・藤田幸司・山城大地・相良友哉・倉岡正高・植田拓也・藤原佳典(2023). 高齢者にとっての地域の居場所とその様相. 日本環境心理学会第16回大会, オンライン, 2023.3.11.
27. 森晶子, 樗木悠亮, 清水佑輔 (2023). 理系の多様なロールモデルと女子中高生との対話の実践：「放課後トーク」の効果に関する考察. 日本教育工学会2023年秋季全国大会(第43回), 京都, 2023.9.16-17.
28. 村尾雄治, 石川譲二, 田村嘉章, 飯塚あい, 鳥羽梓弓, 原田和昌, 荒木厚. 心血管代謝疾患を有する高齢者における位相角とフレイルの関連ー縦断調査による検討ー. 第10回サルコペニア・フレイル学会, 御茶ノ水, 2023.11.4-5.
29. 村山洋史, 飯塚あい, 町田征己, 天笠志保, 井上茂, 藤原武男, 菖蒲川由郷. 高齢期の社会的孤立が脳容積に及ぼす影響: NEIGE Study. 第12回日本認知症予防学会学術集会, 新潟, 2023.9.15-17.
30. 西中川まき, 桜井良太, 笹井浩之, 武林亨. 疾病を有する中高年者におけるヘルスアプリの利用と健康行動の関連に対するヘルスリテラシーの関与. 第25回日本健康支援学会年次学術大会シンポジウム3, 愛知, 2024.3.2-3.
31. 小川将, 高橋知也, 長大介, 飯塚あい, 山城大地, 佐藤研一郎, 李岩, 高橋佳史, 清水佑輔, 鈴木宏幸. 地域在住高齢者における自己隠蔽傾向と被援助志向性の関連―健康増進事業の参加者を対象とした分析―. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
32. 小川将, 松永博子, 高橋知也, 藤平杏子, 小宮山恵美, 芳賀輝子, 藤原佳典, 鈴木宏幸. 産後ケア事業における世代間交流プログラムREPRINTSの援用 (1) . 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
33. 小川将, 川窪貴代, 高橋知也, 松永博子, 山内美紗子, 小林桃子, 佐藤研一郎, 藤原佳典, 鈴木宏幸. 小学生における「信頼出来る大人」と「相談手段」「命・つながり・SOS の出し方」プログラムのデータから(2).日本健康心理学会第36回大会, 横浜, 12.2-3.
34. 樗木悠亮, 森晶子, 清水佑輔 (2024). 大学院生・大学生の教育アウトリーチ参加動機の分析. 日本教育工学会2024年春季全国大会(第44回), 熊本, 2024.3.2-3.
35. 桜井良太. 高齢期の脳の健康―認知症リスク要因を踏まえた健康づくり―. 第18回運動と脳の勉強会講演会, オンライン, 2023.6.9.
36. 桜井良太. 身体機能の維持・改善が認知機能に与える影響. 第42回日本認知症学会学術集会, 奈良, 2023.11.24-26.
37. 桜井良太. 歩行機能と認知機能の関連：感覚・遺伝子リスクファクターからの検討. 第192回東京医科大学医学会総会,オンライン, 2023. 11.4.
38. 桜井良太. 補聴器装着に伴う認知機能と身体機能の改善. TOBIRA第11回研究交流フォーラム, 御茶ノ水, 2023.7.28.
39. 桜井良太, 三浦有花, 児玉謙太郎. 障害物の高さと奥行きが障害物回避に及ぼす影響：加齢変化に着目した検討. 第20回姿勢と歩行研究会, 東京, 2024. 3.23.
40. 桜井良太, 三浦有花, 児玉謙太郎, 藤本雅大. 聴覚情報遮断が障害物回避に及ぼす影響：視覚情報遮断との交互作用. 第19回姿勢と歩行研究会, 東京, 2023.3.4.
41. 桜井良太, 根本裕太, 松永博子, 藤原 佳典. 主観的歩行速度低下と主観的認知機能低下の関連：抑うつに着目した検討. 第34回日本疫学会学術総会, 滋賀, 2024. 1.31-2.2
42. 佐藤研一郎, 高橋佳史, 田淵貴大, 村山洋史. 先延ばし傾向, COVID-19感染恐怖, ワクチン接種行動の関連. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
43. 佐藤研一郎, 小林潤平, 鈴木宏幸, 小川将, 松永博子 健常高齢者の読み過程における眼球運動に関する解析：読み速度と認知・心理・生活機能. 第42回日本認知症学会学術集会, 奈良, 2023.11.24-26.
44. 相良友哉, 高橋知也, 松永博子, 藤平杏子, 藤田幸司, 山下真里, 川窪貴代, 鈴木宏幸, 村山洋史, 藤原佳典. ボランティア団体の役員は活動負担感が増大するか？：REPRINTS Studyより. 日本世代間交流学会第14回全国大会, 京都, 2023.12.2.
45. 相良友哉, 藤田幸司, 山城大地, 森裕樹, 植田拓也, 倉岡正高, 清野諭, 野藤悠, 山下真里, 阿部巧, 藤原佳典. 類型別にみた高齢者の居場所の特徴 (2) －居場所の類型と精神的健康度との関連－. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
46. 相良友哉, 藤田幸司, 山城大地, 森裕樹, 植田拓也, 倉岡正高, 服部真治, 中村一朗, 澤岡詩野, 藤原佳典. 地域の居場所づくりの支援者における多様な地域の居場所の把握・連携状況(その2)-支援者の職種および都市規模別の比較-. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
47. 清水佑輔, 橋本剛明, 唐沢かおり (2023). 「誰もが高齢者になる」事実と高齢者支援政策に対する重視度 日本社会心理学会第64回大会, 四谷, 2023.9.7-8.
48. 清水佑輔, 橋本剛明, 唐沢かおり (2023). エイジズムの軽減と人生設計の促進：ステレオタイプ・エンボディメント理論に着目して. 日本心理学会第87回大会, 神戸, 2023.9.15-17.
49. 清水佑輔, 高橋知也, 佐藤研一郎, 小川将, 長大介, 高橋佳史, 山城大地, 李岩, 雛倉圭吾, 鈴木宏幸 (2023). どのような高齢者が若い世代に対する経験や知識の継承を好むのか. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
50. 清水佑輔, 佐藤研一郎, 小川将, 長大介, 高橋佳史, 山城大地, 李岩, 高橋知也, 雛倉圭吾, 飯塚あい, 古谷友希, 鈴木宏幸 (2023).「体力に自信があるから, 転ぶのは怖くない」は本当か：主観的健康度と高齢者へのポジティ

ブイメージがもたらす影響. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
51. 清水佑輔, 鈴木雅, 畠由佳子, 榊敏朗 (2023). 人々が思うより高齢者は健康である：態度変容に向けた事前登録実験. 日本グループ・ダイナミックス学会第69回大会, 高知, 2023.9.23-24.
52. 蘇心寧, 小川将, 高橋佳史, 土谷利仁, 山城大地, 長大介, 李岩, 川窪貴代, 古谷友希, 清水佑輔, 伊藤晃碧, 高橋知也, 鈴木宏幸 (2023). 高齢者の自己隠蔽傾向と「考え込み」および「反省的熟考」 との関連：地域の健康増進事業の参加者を対象とした検討. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
53. 鈴木宏幸. 高齢者研究および生涯学習の取組からの示唆－社会状況を踏まえてー、ラウンドテーブル『加齢の自覚と受容の生涯発達―「ふと感じる加齢」の調査から―』. 日本発達心理学会第66回大会, 大阪, 2024.3.6-8.
54. 鈴木宏幸, 高橋知也, 小川将, 長大介, 飯塚あい, 山城大地. 地域在住中高年者を対象とした認知症共生尺度作成の試み. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
55. 鈴木宏幸, 山城大地, 小川将, 長大介, 飯塚あい, 鈴木宣子, 田中信太郎. 軽度認知障害（MCI）スクリーニング検査モデル事業参加者における認知症共生意識の関連要因（1）生活機能に関する検討. 第12回日本認知症予防学会学術集会, 新潟, 2023.9.15-17.
56. 鈴木宏幸, 山城大地, 小川将, 長大介, 飯塚あい, 鈴木宣子. 軽度認知障害（MCI）検査モデル事業への参加による認知症共生意識への影響. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
57. 鈴木宏幸, 松永博子, 伊藤晃碧, 大辻みずき, 李岩, 小川敬之, 藤原佳典. MCI・軽度認知症の人を対象とした趣味講座における有償化の影響: 前後比較試験による介入効果と継続性に関する検討. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
58. 田原敦志, 藤平杏子, 福家冴佳, 酒井哲志, 王春弋, 費薇, 高橋将記. タンパク質の摂取タイミングの違いがヒトの筋肥大効果に及ぼす影響. 第10回時間栄養学会学術大会, 広島, 2023.8.26.
59. 高橋将記, 王春弋, 峯下由衣, 藤平杏子, 田原優, 金鉉基, 中岡隆志, 柴田重信. 時間栄養学的視点に基づく食後の血中代謝物質の網羅的解析-食事タイミングと絶食時間に着目した検証. 第77回日本食糧栄養学会, 札幌, 2023.5.12-14.
60. 高橋佳史, DEMCIRC Study investigators (2023). MCIのReversionとConversionに影響する要因の解明 (DEMCIRC縦断研究)：研究デザインと登録時の認知機能の特徴. TOBIRA第11回研究交流フォーラム, 御茶ノ水, 2023.7.28.
61. 高橋佳史, 佐藤研一郎, 山城大地, 清水佑輔, 李岩, 古谷友希, 小川将, 高橋知也, 鈴木宏幸 (2023). ドキドキすることは思い出しやすいと錯覚する：項目の覚醒度と記憶のモニタリングの関連. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
62. 高橋佳史, 佐藤研一郎, 田淵貴大, 村山洋史. (2023) COVID-19 感染予防行動に対する先延ばしと地域への信頼の影響. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
63. 高橋佳史, 山城大地, 佐藤研一郎, 李岩, 小川将, 高橋知也, 鈴木宏幸 (2023) . 社会参加と人物情報に対する記憶想起の精度の関連. 第12回日本認知症予防学会学術集会, 新潟, 2023.9.15-17.
64. 高橋知也, 小川将, 清水佑輔, 佐藤研一郎, 李岩, 古谷友希, 山城大地, 飯塚あい, 藤原佳典, 鈴木宏幸. 新型コロナウイルス流行下での「シニアの絵本読み聞かせボランティア養成プログラム」の受講前後における世代継承性の変容：REPRINTS研究より. 日本世代間交流学会第14回全国大会, 京都, 2023.12.2.
65. 高橋知也, 松永博子, 小川将, 藤田幸司, 相良友哉, 佐藤研一郎, 藤原佳典, 鈴木宏幸.小学校高学年児童への「SOSの出し方教育」による精神的健康と被援助志向性への効果：REPRINTS研究より. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
66. 竹島里香, 古谷友希, 小川将, 清水佑輔, 塚田花音, 土谷利仁, 伊藤晃碧, 李岩, 川窪貴代, 高橋知也, 鈴木宏幸. 地域在住中高齢者における絵本読み聞かせ講座への参加による友人数の変化. 第25回日本健康支援学会年次学術大会, 愛知, 2024.3.2-3.
67. 友定雅貴, 松本英, 西駿明, 佐々木祥弘, 桜井良太, 山口健. 靴底センサシステムを用いた若年者及び高齢者の歩行解析に関する研究. 日本機械学会シンポジウム：スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス2023, 名古屋, 2023.11.11.
68. 土谷利仁, 高橋知也, 相良友哉, 藤平杏子, 藤田幸司, 山下真里, 川窪貴代, 松永博子, 鈴木宏幸, 村山洋史, 藤原佳典. 新型コロナウイルス（Covid-19）流行期における絵本読み聞かせボランティア活動の工夫：REPRINTS Studyより. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
69. 塚田花音, 高橋知也, 小川将, 松永博子, 藤田幸司, 佐藤研一郎, 藤平杏子, 藤原佳典, 鈴木宏幸(2023).「SOSの出し方プログラム」は相談相手の種類を増やす効果があるのか. 日本世代間交流学会第14回全国大会, 京都, 2023.12.2.
70. 塚田花音, 高橋知也, 清水佑輔, 佐藤研一郎, 小川将, 高橋佳史, 山城大地, 李岩, 雛倉圭吾, 飯塚あい, 古谷友希, 鈴木宏幸 (2023). メッセンジャーアプリケーションの利用頻度と援助要請スタイルの関連について. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
71. 塚田花音, 緑川晶 (2023). 一般大学生を対象としたセンサリールームの心理的効果に関する検討. 日本心理学会第87回大会, 神戸, 2023.9.15-17.
72. 山城大地, 藤田幸司, 相良友哉, 森裕樹, 植田拓也, 倉岡正高, 服部真治, 中村一朗, 澤岡詩野, 藤原佳典. 地域の居場所づくりの支援者における多様な地域の居場所の把握・連携状況(その1)-居場所のタイプ別の比較-. 第65回日本老年社会科学会大会, 横浜, 2023.6.17-18.
73. 山城大地, 阿部巧, 山下真里, 植田拓也, 鈴木宏幸, 藤原佳典. 地域包括支援センターの専門職職員が相談対応場面で行う認知機能評価の実態把握: IRIDE Cohort Study. TOBIRA第11回研究交流フォーラム, 御茶ノ水, 2023.7.28.
74. 山城大地, 高橋佳史, 小川将, 佐藤研一郎, 長大介, 古谷友希, 李岩, 川窪貴代, 土谷利仁, 高橋知也, 鈴木宏幸. 高齢者の主観的時間と認知機能領域の関連―簡易認知機能検査（MoCA-J）を用いた検討―. 日本時間学会第15回大会, 山口, 2023.7.1-2.
75. 山城大地, 山下真里, 川窪貴代, 高橋知也, 松永博子, 相良友哉, 藤田幸司, 藤平杏子, 土谷利仁, 登藤直弥, 鈴木宏幸, 村山洋史, 藤原佳典 (2023). 高齢期のボランティア活動に関する負担感尺度作成の試み：REPRINTSコホートスタディより. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
76. 山城大地, 藤田幸司, 相良友哉, 森裕樹, 植田拓也, 倉岡正高, 清野諭, 野藤悠, 山下真里, 阿部巧, 藤原佳典. 類型別にみた高齢者の居場所の特徴（1）－居場所への期待と居場所の有無との関連－. 第82回日本公衆衛生学会総会, 筑波, 2023.10.31-11.2.
77. 山城大地, 鈴木宏幸, 小川将, 長大介, 飯塚あい, 鈴木宣子, 田中信太郎. 軽度認知障害（MCI）スクリーニング検

査モデル事業参加者における認知症共生意識の関連要因（2）社会参加の状況に着目した検討．第12回日本認知症予防学会学術集会，新潟，2023.9.15-17.
78. 山部早智，原田愛永，吉越駿，新川さやか，飛田亜純，渡邊孝明，松永篤彦：透析中の運動療法を契機に疾病管理としての定期的な身体機能評価システムへ参加につながった好事例．第14回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会，新潟，2024.3.16-17.
79. 吉越駿，今村慶吾，原田愛永，山部早智，長田しをり，松永篤彦．血液透析患者におけるオステオサルコペニアが抑うつ症状に与える影響：4年間の前向きコホート研究．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
80. 吉越駿，今村慶吾，原田愛永，長田しをり，松永篤彦：高齢血液透析患者における身体活動量の管理目標値の設定と生命予後との関連．第105回神奈川腎研究会，横浜，2023.11.12.
81. 吉越駿，今村慶吾，原田愛永，飛田亜純，新川さやか，山部早智，長田しをり，松永篤彦：糖尿病を合併する血液透析患者に対する長期的な身体機能管理プログラムが生命予後に及ぼす影響．第11回日本腎栄養代謝研究会学術集会・総会，札幌，2023.7.15-16.
82. 吉越駿，今村慶吾，山本尚平，鈴木裕太，原田愛永，長田しをり，松永篤彦．血液透析患者におけるカヘキシアと臨床アウトカムとの関連：従来（Evans）基準と新基準（アジア版）の比較研究．第14回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会，新潟，2024.3.16-17.
83. 吉越駿，桜井良太，高橋佳史，佐藤研一郎，大田崇央，畑中翔，大村千晶，今村慶吾，河合恒，笹井浩行，鈴木宏幸，栗田主一．高齢者はどのように歩行速度を上げているのか？-歩容パターンの類型化と認知機能との関連．第20回姿勢と歩行研究会，姿勢と平衡国際シンポジウム，東京，2024.3.23.
84. 吉越駿，山本尚平，今村慶吾，鈴木裕太，原田愛永，長田しをり，松永篤彦．血液透析患者における低栄養が経年的に歩行速度に与える影響．第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会，三重，2024.3-2.

４　著書・報告書等

1. 長大介，吉川紀子，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度板橋区絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
2. 雛倉圭吾，吉川紀子，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度練馬区絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
3. 伊藤晃碧，土谷利仁，菊池英子，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度新宿区薬王寺絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
4. 飯塚あい，世代間交流の理論と実践（3）新たな社会創造に向かうソーシャルネットワークとしての世代間交流活動，第５章 囲碁を活用した世代間交流プログラムの開発と実践，三学出版，2023．35-47.
5. 飯塚あい，伊藤晃碧：令和４年度新宿区囲碁超入門講座報告書．2023.3
6. 李岩，川窪貴代，小川将，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度立川市絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
7. 李岩，川窪貴代，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度狛江市絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
8. 李岩，土谷利仁，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度稲城市絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
9. 松永博子．仏教心理学入門 第７章 晃洋書房，2024．171-209.
10. 松永博子，高橋知也，鈴木宏幸．中高齢求職者の支援ニーズに関する調査報告書．2024.1.
11. 三林ゆい，大辻みずき，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度北区絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
12. 小川将，古谷友希，李岩，川窪貴代，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度八王子市絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
13. 鈴木宏幸,山城大地:軽度認知障害の早期発見及び認知機能検査結果と社会参加等の活動状況の検証 2022 年度実施報告書．2023.7
14. 鈴木宏幸,松永博子,大辻みずき,伊藤晃碧:令和４年度軽度認知症の人に対する趣味教室の効果検証にむけたパイロット研究報告書．2023.6.
15. 鈴木宏幸,雛倉圭吾:令和４年度練馬区脳活プログラム（絵本読み聞かせ編）前期事業報告書．2023.11
16. 鈴木宏幸,世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著,地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ改訂版,第 11 章ライフ出版社．2023.7
17. 鈴木宏幸．動ける体をつくる！フレイル対策 実践編.神協連ニュース No.486.神奈川県生活協同組合連合会．2023
18. 鈴木宏幸.ボランティア活動による健康増進の特徴とポイント.神協連ニュース No.489.神奈川県生活協同組合連合会.2023
19. 鈴木宏幸.健康チャレンジで健康的な生活習慣を会得しましょう！.神協連ニュース No.495．神奈川県生活協同組合連合会.2023
20. 鈴木宏幸.交流を楽しむ！フレイル対策 チェック編.神協連ニュース No.487.神奈川県生活協同組合連合会.2023
21. 鈴木宏幸，高齢期における認知機能の変化健康長寿の＜花＊コミュニケーター＞養成講座テキスト 2023.5
22. 鈴木宏幸，高齢期の発達課題と心理状況健康長寿の＜花＊コミュニケーター＞養成講座テキスト 2023.5
23. 鈴木宏幸,藤田幸司,山城大地.松永博子．認知症当事者が製品・サービスの開発に参画することによる QOL 向上等に関する研究報告書．2024.3
24. 高橋知也,世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著　地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ改訂版　第１章：絵本の読み聞かせボランティア「りぷりんと」が目指すもの
25. 高橋知也．高齢者の居場所づくりと多世代交流の機会をいかに創出するか．　月間シルバー人材センターNo.440.公益社団法人全国シルバー人材センター事業協会編
26. 土谷利仁，藤原充子，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度目黒区絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
27. 土谷利仁，伊藤晃碧，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度新宿区中落合絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
28. 土谷利仁，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度新宿区戸山絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.
29. 山城大地，高橋佳史，菊池英子，高橋知也，鈴木宏幸，藤原佳典．令和４年度文京区絵本読み聞かせ講座実施報告書．2023.3.

５　その他 受賞歴等（受賞歴は筆頭演者のみ記載）

1. 雛倉圭吾. 地域在住高齢者における座位行動の多寡と認知機能との関連.2023年6月埼玉県理学療法学会 奨励賞.
2. Hinakura K. Characteristics of wearable activity trackers users and association with health related indices among older adults. IAGG-AOR2023: Outstanding Poster Award.
3. Yamashiro D. Factors associated with depressive symptoms by cognitive function level in community-dwelling older adults: IRIDE Cohort Study. IAGG-AOR2023: Outstanding Poster Award.
4. 鈴木宏幸. 地域在住中高年者を対象とした認知症共生尺度作成の試み. 第65回日本老年社会科学会大会優秀ポスター賞.
5. 清水佑輔. 第14回日本学術振興会 育志賞.
6. 清水佑輔. どのような高齢者が若い世代に対する経験や知識の継承を好むのか. 第65回日本老年社会科学会大会優秀ポスター賞.
7. 高橋佳史. 社会参加と人物情報に対する記憶想起の精度の関連. 12回日本認知症予防学会学術集会浦上賞.
8. 吉越駿. 北里大学 大村賞.
9. 吉越駿. 北里大学大学院医療系研究科 優秀学位論文賞.
10. 吉越駿, 松永篤彦. 運動をはじめる前の評価と注意点. 透析ケア. vol. 30, No.2, 16-20. 2024.

ヘルシーエイジング研究

1 論文（誌上発表）：原著

1. Murayama H, Suda T, Nakamoto I, Shinozaki T, Tabuchi T. Changes in social isolation and loneliness prevalence during the COVID-19 pandemic in Japan: The JACSIS 2020-2021 study. Front Public Health. 2023;11:1094340. doi: 10.3389/fpubh.2023.1094340. (査読あり) (IF: 6.461、2022/2023)
2. Murayama H, Shimada S, Morito K, Maeda H, Takahashi Y. Evaluating the effectiveness of letter and telephone reminders in promoting the use of specific health guidance in an at-risk population for metabolic syndrome in Japan: A randomized controlled trial. Int J Environ Res Public Health. 2023;20(5):3784. doi: 10.3390/ijerph20053784. (査読あり) (IF: 4.614、2022/2023)
3. Murayama H, Sasaki S, Takahashi Y, Takase M, Taguchi A. Message framing effects on attitude and intention toward social participation in old age. BMC Public Health. 2023;23(1):1713. doi: 10.1186/s12889-023-16555-1. (査読あり) (IF: 4.135、2022/2023)
4. Murayama H, Nakamoto I, Takase M, Sagara T, Sugiura K, Higashi K, Fujiwara Y. Older assistant care workers as late-life employment in Japan: Perceived benefits from work and emotional exhaustion. Geriatr Gerontol Int. 2023. doi: 10.1111/ggi.14690. (in press) (査読あり) (IF:3.387、2022/2023)
5. Murayama H, Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Motokawa K, Okamura T, Awata S. The relationship between cognitive decline and all-cause mortality is modified by living alone and a small social network: A paradox of isolation. J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci. 2023;78(11):1927-1934. doi: 10.1093/geronb/gbad134. (査読あり) (IF: 4.942、2022/2023)
6. Murayama H, Takagi Y, Tsuda H, Kato Y. Applying nudge to public health policy: Practical examples and tips for designing nudge interventions. Int J Environ Res Public Health. 2023;20(5):3962. doi: 10.3390/ijerph20053962. (査読あり) (IF: 4.614、2022/2023)
7. Nonaka K, Murayama H, Murayama Y, Murayama S, Kuraoka M, Nemoto Y, Kobayashi E, Fujiwara Y. The impact of generativity on maintaining higher-level functional capacity of older adults: A longitudinal study in Japan. Int J Environ Res Public Health. 2023;20(11):6015. doi: 10.3390/ijerph20116015. (査読あり) (IF: 4.614、2022/2023)
8. Nonaka K, Takase M, Sugiura K, Murayama H. Introducing a Japanese form of Pro Bono as a way to foster cooperation between the working generation and community-based organizations. Geriatr Gerontol Int. 2023. doi: 10.1111/ggi.14716. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
9. Nofuji Y, Seino S, Abe T, Yokoyama Y, Narita M, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Effects of community-based frailty-preventing intervention on all-cause and cause-specific functional disability in older adults living in rural Japan: A propensity score analysis. Prev Med. 2023;169:107449. doi: 10.1016/j.ypmed.2023.107449. (査読あり) (IF: 4.637、2021/2022)
10. Yokoyama Y, Nofuji Y, Seino S, Abe T, Murayama H, Narita M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Association of dietary variety with the risk for dementia: the Yabu cohort study. Public Health Nutr. 2023;26(11):2314-2321. doi: 10.1017/S1368980023000824. (査読あり) (IF: 4.539、2022/2023)
11. Abe T, Fujita K, Sagara T, Ishibashi T, Morishita K, Murayama H, Sakurai R, Osuka Y, Watanabe S, Fujiwara Y. Associations between frailty status, work-related accidents and efforts for safe work among older workers in Tokyo: A cross-sectional study. Geriatr Gerontol Int. 2023;23(3):234-238. doi: 10.1111/ggi.14557. (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
12. Abe T, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Amano H, Yamashita M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Modifiable healthy behaviours and incident disability in older adults: Analysis of combined data from two cohort studies in Japan. Exp Gerontol. 2023;173:112094. doi: 10.1016/j.exger.2023.112094. (査読あり) (IF: 3.9、2022/2023)
13. Abe T, Seino S, Hata T, Yamashita M, Ohmori N, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Transportation modes and social participation in older drivers and non-drivers: Results from urbanised Japanese cities. J Transp Geogr. 2023;109:103598. doi.org/10.1016/j.jtrangeo.2023.103598. (査読あり) (IF: 6.1、2022/2023)
14. Abe T, Yamashita M, Fujiwara Y, Sasai H, Obuchi PS, Ishizaki T, Awata S, Toba K, Fluctuations in cognitive test scores and loss to follow-up in community-dwelling older adults: The IRIDE Cohort Study. Dement Geriatr Cogn Disord. 2023. doi: 10.1159/000531764. (in press) (査読あり) (IF: 2.4、2022/2023)
15. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Suzuki H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K. Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers: The IRIDE cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2023;23(11):887-888. doi: 10.1111/ggi.14677. (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
16. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Kimata M. The association between meal enjoyment and depressive symptoms of senior care facility residents in Japan. Jpn J Health Hum Ecol.

2023;89(2):48-56. doi.org/10.3861/kenko.89.2_48. (査読あり)

17. Suda T, Sugawara I, Murayama H. Association between participation in social network service groups and offline social networks. Geriatr Gerontol Int. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
18. Takase M, Nonaka K, Sugiura K, Murayama H. The association between role conflict and project participation in "Pro Bono Workers". Geriatr Gerontol Int. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
19. Abe T, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Nishita Y, Makizako H, Jeong S, Iwasaki M, Yamada M, Kojima N, Iijima K, Obuchi S, Shinmura K, Otsuka R, Suzuki T. Higher-level competence: Results from the Integrated Longitudinal Studies on Aging in Japan (ILSA-J) on the shape of associations with impaired physical and cognitive functions. Geriatr Gerontol Int. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
20. 村山洋史、嶋田誠太朗、髙橋勇太. 手紙と電話による特定保健指導の利用再勧奨の効果：都市部における保健指導利用に積極的な層への無作為化比較試験. 日本公衆衛生雑誌 2023;70(6):381-389. (査読あり)
21. 高瀬麻以, 杉浦圭子, 相良友哉, 中本五鈴, 馬盼盼, 六藤陽子, 東憲太郎, 藤原佳典, 村山洋史. 高年齢介護助手雇用による介護職員の業務促進・阻害要素の変化と情緒的消耗感との関連. 日本公衆衛生雑誌. (印刷中) (査読あり)
22. 齋藤尚子, 高瀬麻以, 田口敦子, 村山洋史. 高齢者が感じる生活支援の必要性と住民との関係性：農村部における生活支援未利用者への横断調査. 日本公衆衛生雑誌. (印刷中) (査読あり)
23. Takahashi T, Matsunaga H, Sagara T, Fujita K, Fujihira K, Ogawa S, Suzuki H, Murayama H, Fujiwara Y. Effects of fear of COVID-19 on older volunteers' willingness to continue their activities: REPRINTS Cohort Study. Geriatr Gerontol Int. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
24. Morita A, Fujiwara T, Murayama H, Machida M, Inoue S, Shobugawa Y. Association between trajectory of socioeconomic position and regional brain volumes related to dementia: Results from the NEIGE study. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2023. doi: 10.1093/gerona/glad269. (in press) (査読あり) (IF: 6.591、2022/2023)
25. Osuka Y, Okubo Y, Nofuji Y, Maruo K, Fujiwara Y, Oka H, Shinkai S, Lord SR, Sasai H. Occupational fall risk assessment tool for older workers. Occup Med (Lond) . 2023;73(3):161-166. doi: 10.1093/occmed/kqad035. (査読あり) (IF: 5.629、2021/2022)
26. Fujita Y, Shinkai S, Taniguchi Y, Miura Y, Tanaka M, Ohsawa I, Kitamura A, Ito M. Association between serum GDF15 concentration and total mortality in community-dwelling Japanese older populations: The Involvement of Renal Dysfunction. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2023;78(9):1701-1707. doi: 10.1093/gerona/glad105. (査読なし) (IF: 6.591、2022/2023)
27. Fujiwara Y, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Fujita K, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status in old age and cause-specific disability in Japanese community-dwelling older adults with or without frailty: A 3.6-year prospective study. Geriatr Gerontol Int . 2023. doi: 10.1111/ggi.14686. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
28. Kitago M, Seino S, Shinkai S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Hata T, Abe T, Taniguchi Y, Amano H, Murayama H, Kitamura A, Akishita M, Fujiwara Y. Cross-sectional and longitudinal associations of creatinine-to-cystatin C ratio with sarcopenia parameters in older adults. J Nutr Health Aging. 2023;27(11):946-952. doi: 10.1007/s12603-023-2029-3. (査読あり) (IF: 5.285、2022/2023)
29. Yamanaka N, Itabashi M, Fujiwara Y, Nofuji Y, Abe T, Kitamura A, Shinkai S, Takebayashi T, Takei T. Relationship between the urinary Na/K ratio, diet and hypertension among community-dwelling older adults. Hypertens Res. 2023;46(3):556-564. doi: 10.1038/s41440-022-01135-4. (査読あり) (IF: 5.4、2022/2023)
30. Hatanaka S, Sasai H, Shida T, Osuka Y, Kojima N, Ohta T, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K, Association between dynapenia and cognitive decline in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. Geriatr Gerontol Int. 2023. (in press) (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
31. Taniguchi Y, Yokoyama Y, Ikeuchi T, Mitsutake S, Murayama H, Abe T, Seino S, Amano H, Nishi M, Hagiwara Y, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Pet ownership-related differences in medical and long- term care costs among community-dwelling older Japanese. PLoS One. 2023;18(1):e0277049. doi: 10.1371/journal.pone.0277049. (査読あり) (IF:3.752、2022/2023)
32. Seino S, Abe T, Nofuji Y, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Dose-response associations of physical activity and sitting time with all-cause mortality in older Japanese adults. J Epidemiol. doi: 10.2188/jea.JE20220246. (in press) (査読あり) (IF: 3.809、2021/2022)
33. Chen T, Chen S, Honda T, Kishimoto H, Nofuji Y, Narazaki K. Accelerometer-measured sedentary behavior and risk of functional disability in older Japanese adults: A 9-year prospective cohort study. Int J Behav Nutr Phys Act . 2023;20(1):91. doi: 10.1186/s12966-023-01490-6. (査読あり) (IF: 8.915、2022/2023)
34. Chandrabose M, Forkan ARM, Abe T, Owen N, Sugiyama T. Joint associations of environmental and sociodemographic attributes with active and sedentary travel. Transportation research part D: transport and environment. 2023;116:103643. doi.org/10.1016/j.trd.2023.103643. (査読あり) (IF: 7.6、2022/2023)
35. Isamu K, Takamiya T, Amagasa S, Machida M, Kikuchi H, Fukushima N, Inoue S, Murayama H, Fujiwara T, Shobugawa Y. The association of subjective vision with objectively measured intensity-specific physical activity and bout-specific sedentary behavior among community-dwelling older adults in Japan. Jpn J Ophthalmol. 2023;67(2):164-174. doi: 10.1007/s10384-023-00977-w. (査読あり) (IF: 2.211、2022/2023)
36. Ide-Okochi A, He M, Murayama H, Samiso T, Yoshinaga N. Non-compliance of hypertension treatment and related factors among Kumamoto earthquake victims who experienced the COVID-19 pandemic during post-earthquake recovery period. Int J Environ Res Public Health. 2023;20(6):5203. doi: 10.3390/ijerph20065203. (査読あり) (IF:4.614、2022/2023)
37. Sakurai R, Abe T, Fujiwara Y. Low intention to visit a hospital for hearing loss among older adults. J Am Med Dir Assoc. 2023;24(7):1092-1093. doi: 10.1016/j.jamda.2023.03.035. (査読あり) (IF: 7.6、2022/2023)
38. Sugiyama M, Chau H-W, Abe T, Kato Y, Jamei E, Veeroja P, Mori K, Sugiyama T. Third places for older adults' social engagement: A scoping review and research agenda. Gerontologist. 2023;63(7):1149-1161.

doi: 10.1093/geront/gnac180. (査読あり) (IF: 5.7、2022/2023)
39. Fujihira K, Takahashi T, Sagara T, Matsunaga H, Fujita K, Suzuki H, Murayama H, Fujiwara Y. Relationship between face-to-face and non-face-to-face communication, and well-being in older volunteers during the pandemic: The REPRINTS project. *Journal of Community & Applied Social Psychology* (in press).
40. Ide-Okochi A, He M, Kanamori Y, Samiso T, Takamoto K, Murayama H. Gender differences in the association between psychological distress and sociability among older adult survivors: Cross-sectional survey four years after the 2016 Kumamoto Earthquake in Japan. *Tohoku Journal of Experimental Medicine* (in press).
41. Ueno T, Saito J, Murayama H, Saito M, Haseda M, Kondo K, Kondo N. Social participation and functional disability trajectories in the last three years of life: The Japan Gerontological Evaluation Study. *Archives of Gerontology & Geriatrics* (in press).
42. Tani Y, Kawahara T, Sugihara G, Machida M, Amagasa S, Murayama H, Inoue S, Fujiwara T, Shobugawa Y. Childhood book availability helps to preserve cognitive function in older adults with low education: Results from the NEIGE study. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences & Social Sciences*. (in press).
43. 多田由紀、吉﨑貴大、横山友里、竹林純、岡田恵美子、瀧本秀美、石見佳子. 健康的な食行動の実践を支援するための日本版栄養 プロファイルモデル試案の実行可能性調査：食習慣改善意欲の有無による横断的検討. 栄養学雑誌. 2023;81(5);246-259. (査読あり)
44. 稲益大悟、岡本尚己、久保田晃生、阿部巧. 高齢者の週の交通行動を予測するためには何日間の調査が必要か？ 体育測定評価研究. (印刷中) (査読あり)
45. 中本五鈴、杉浦圭子、相良友哉、高瀬麻以、馬盼盼、藤陽子、東憲太郎、藤原佳典、村山洋史. 高年齢介護助手が就労によって感じるメリットと情緒的消耗感との関連: 横断研究. 日本公衆衛生雑誌 2023;70(7):425-432. (査読あり)
46. 馬盼盼、相良友哉、杉浦圭子、高瀬麻以、中本五鈴、六藤陽子、東憲太郎、藤原佳典、村山洋史. 高年齢介護助手における職業性ストレスおよびソーシャルサポートと情緒的消耗感の関連. 厚生の指標 2023;70(11):9-15. (査読あり)
47. 相良友哉、高瀬麻以、杉浦圭子、中本五鈴、馬盼盼、六藤陽子、東憲太郎、藤原佳典、村山洋史. 介護老人保健施設の規模による高年齢介護助手の導入実態と課題. 日本公衆衛生雑誌. (印刷中) (査読あり)
48. 美﨑定也、村山洋史、杉山美香、稲垣宏樹、岡村毅、宇良千秋、宮前史子、枝広あや子、本川佳子、粟田主一. 身体機能，精神機能，認知機能，口腔機能，併存疾患による地域在住高齢者の類型化と転倒経験との関連. 日本老年医学会雑誌. (in press) (査読あり)
49. 松﨑英章、辻大士、野藤悠、岸本裕歩、陳涛、楢﨑兼司. 基本チェックリストを用いた要介護化リスク評価尺度の試作と予備的検証: 8年間の前向き疫学研究. 厚生の指標 2023; 70(2):9-16. (査読あり)
50. 杉浦圭子, 相良友哉, 高瀬麻以, 中本五鈴, 馬盼盼, 六藤陽子, 東憲太郎, 藤原佳典, 村山洋史. 介護老人保健施設に勤務する高年齢介護助手の業務内容と就労によって感じるメリットとの関連. 日本公衆衛生雑誌.(印刷中)(査読あり)
51. 福岡豊, 西澤颯大, 西沢エリック辰哉, 天笠志保, 村山洋史, 藤原武男, 井上茂, 菖蒲川由郷. GPSおよび加速度データからの高齢者に共通の身体活動場所の抽出法. 電気学会論文誌C. (印刷中)
52. 森裕樹、清野諭、山下真里、横山友里、植田拓也、小林江里香、内田勇人、藤原佳典. 大都市在住後期高齢者における通いの場への参加状況とその関連要因：新型コロナウイルス感染症拡大の影響に着目した検討. 応用老年学. (印刷中) (査読あり)
53. 清野諭, 野藤悠, 植田拓也, 根本裕太, 倉岡正高, 髙橋淳太, 森裕樹, 秦俊貴, 北村明彦, 小林江里香, 村山洋史, 本川佳子, 服部真治, 山田実, 近藤克則, 荒井秀典, 藤原佳典. 通いの場の取組をPDCAサイクルに沿って推進・評価するためのフレームワーク：ACT-RECIPE. 日本公衆衛生雑誌. (印刷中)

2 論文（誌上発表）：総説

1. 村山洋史. 高齢期就労の可能性と課題 健康づくりの視点から. Aging & Health. 2023;32(1): 16-19.
2. 村山洋史. 認知症者や要介護者本人を対象とした研究の必要性とそのボトルネック. 老年社会科学. 2023;45(1):45-50.
3. 村山洋史. 社会的孤立が健康に及ぼす影響と孤立対策の現状. 総合リハビリテーション. 2023;51(6):611-617.
4. 阿部巧. 高齢期における外出時の移動手段：健康の視点から. 生活協同組合研究. 2023; 567 : 15-21.

3 学会発表（国際）

1. Murayama H, Kobayashi E, Sugisawa H, Liang J. Trajectories of life-course financial strain and depressive symptoms: Result from the National Survey of the Japanese Elderly. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-15.
2. Murayama H. Socioeconomic differences in trajectories of functional capacity among older Japanese individuals: A 25-year longitudinal study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Symposium.2023.6.12-15.
3. Murayama H. Effects of later-life employment in welfare on health and well-being: Findings from the national survey for geriatric health service facilities in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Symposium.2023.6.12-15.
4. Nonaka K, Takase M, Sugiura K, Murayama S, Saga I, Kawai Y, Murayama H. The association between Pro Bono experience and participation in community activity among those who were not interested in community activities prior to their Pro Bono experience. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-15.
5. Nofuji Y, Seino S, Abe T, Yokoyama Y, Narita M, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Effects of community-based frailty-preventing intervention on dementia in older adults living in rural Japan: A quasi-experimental study using propensity score matching. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-15.
6. Yokoyama Y, Seino S, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Association between

changes in dietary variety and depressive symptoms in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokoyama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
7. Abe T, Seino S, Hata T, Yokoyama Y, Nofuji Y, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Changes in healthy behaviours and incident frailty in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
8. Abe T. Findings and lessons from the COVID-19 pandemic for future geriatric studies. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Symposium. 2023.6.12-14.
9. Amano H, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Apathetic symptoms and the risk of incident dementia certified in the Long-Term Care Insurance System: a 12-year cohort study of the community dwelling elderly. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
10. Suda T, Murayama H, Sugawara I. Participation in social networking service communities to foster offline social networks. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
11. Ozone Y, Narita M, Yokoyama Y, Fujiwara Y, Kitamura A, Shinkai S. Food Group Intake using 4 Food Groups Scoring Method and Frailty in Community-Dwelling Older Japanese: A Cross-Sectional Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
12. Narita M, Shinkai S, Yokoyama Y, Seino S, Abe T, Nofuji Y, Amano H, Nishi M, Kitamura A, Fujiwara Y. Association between Japanese Healthy Eating Scores and Sarcopenia in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
13. Hata T, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Nofuji Y, Narita M, Taniguchi Y, Amano H, Nishi N, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Impact of dietary variety on changes in nutritional biomarkers among community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokoyama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
14. Kaneko A, Sugaya A, Tanabe A, Ozone Y, Akao L, Narita M, Yokoyama Y, Kitamura A, Fujiwara Y, Shinkai S. Characteristics of Nutritional Intake in Older Persons with Mild Cognitive Impairment. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
15. Ikeuchi T, Abe T, Taniguchi Y , Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y , Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Subjective age and mortality in Japanese older adults: The Kusatsu Longitudinal Study on Aging. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokoyama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
16. Fujita K, Taniguchi Y, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S. Trajectories of frequency of going out in old ages and its associated factors. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
17. Yano T, Nonaka K, Takase M, Murayama H. A qualitative study on contributing factors that enable young and middle-aged workers to engage in volunteer activities to support Japanese older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-15.
18. Takahashi T, Fujihira K, Sagara T, Ogawa S, Suzuki H, Matsunaga H, Murayama H, Fujiwara Y. Effects of fear of COVID-19 on older volunteers' willingness to continue their activities: REPRINTS cohort study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-15.
19. Ueno T, Saito J, Murayama H, Saito M, Haseda M, Kondo K, Kondo N. Social participation and trajectories of functional disability in the last three years of life: the Japan Gerontological Evaluation Study. 2023 SER Conference. Portland, USA. Poster. 2023.6.13-15.
20. Murayama H, Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Okamura T, Awata S. The cognitive decline-mortality association is modified by living alone and social network: A paradox of isolation. The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA). Tampa, USA. Poster. 2023.11.8-12.
21. Fujiwara Y, Takahashi T, Murayama H, Fujihira K, Fujita K, Yamashita M, Matsunaga H, Suzuki H. Influence of negative attitudes toward volunteer activities on older volunteers' mental health status: Results from the REPRINTS study. The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA). Tampa, USA. Poster. 2023.11.8-12.
22. Takahashi T, Fujihira K, Sagara T, Fujita K, Suzuki H, Matsunaga H, Murayama H, Fujiwara Y. Factors related to generativity of older reading aloud volunteers during the COVID-19 pandemic: REPRINTS study. The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA). Tampa, USA. Poster. 2023.11.8-12.
23. Takase M, Nakamoto I, Murayama H. Public bath use at Japanese senior apartment associated with neighborhood relationships and social support. The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA). Tampa, USA. Poster. 2023.11.8-12.
24. Takase M, Odagami K, Eguchi H, Mori K, Itabashi M, Kono Sei, Shimizu Y, Iijima K. Use of the exercise feature of a healthcare app and change in the prevalence of lower back pain. The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA). Tampa, USA. Poster. 2023.11.8-12.
25. Abe T, Mohamed F, Chandrabose M, Beck B, Owen N, Sugiyama T. Differential roles of population density in walking and cycling: Findings from Greater Tokyo. 3rd Asia-Pacific Society for Physical Activity conference. Wellington, New Zealand. Oral. 2023.11.27-28.

4 学会発表（国内）

1. 阿部巧、藤原佳典、北村明彦、野藤悠、西田裕紀子、牧迫飛雄馬、鄭丞媛、大塚礼、鈴木隆雄、ILSA-J Group. JST版活動能力指標との関連性における身体機能と認知機能の差異：長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）. 第65回日本老年医学会学術集会（パシフィコ横浜ノース・アネックス：神奈川）. 口演. 2023.6.16-18.
2. 清野諭、横山友里、阿部巧、野藤悠、谷口優、村山洋史、天野秀紀、新開省二、北村明彦、藤原佳典. 地域在住高齢者のサルコペニアと死因別死亡リスク. 第65回日本老年医学会学術集会（パシフィコ横浜ノース・アネックス：神奈川）. 口演. 2023.6.16-18.
3. 早川美知、本川佳子、横山友里、大須賀洋祐、飯塚あい、豊島堅志、田村嘉章、石川譲治、藤原佳典、荒木厚. 地域

在住高齢者に対する運動・栄養・社会参加の複合プログラムによる介入についての予備的検討．第65回日本老年医学会学術集会（パシフィコ横浜ノース・アネックス：神奈川）．示説．2023.6.16-18.
4. 村山洋史．コロナ禍およびAfterコロナ時代における社会的フレイル予防．第33回日本老年学会総会（パシフィコ横浜ノース・アネックス：神奈川）．シンポジウム．2023.6.16-18.
5. 薫一帆、高宮朋子、天笠志保、町田征己、菊池宏幸、福島教照、小田切優子、井上茂、村山洋史、藤原武男、菖蒲川由郷．The sex-specific association of physical activity with vision among community-dwelling older adults stratified by age group．第191回東京医科大学医学会総会(zoom配信:東京)．示説．2023.6.17.
6. 野中久美子、高瀬麻以、杉浦圭子、村山幸子、齋藤みほ、渡邉彩、嵯峨生馬、村山洋史．地域づくりの新たな担い手「プロボノワーカー」の活動状況とその促進要因の検討：勤労者プロボノワーカーへのインタビュー調査と質問紙調査より．第65回日本老年社会科学会（パシフィコ横浜ノース：横浜）．示説．2023.6.17-18
7. 野藤悠、清野諭、横山友里、阿部巧、村山洋史、藤原佳典．介護予防の４要素（運動・栄養・社会参加・口腔ケア）の充足数と要介護認定との関連性．第65回日本老年社会科学会（パシフィコ横浜ノース：神奈川）．示説．2023.6.17-18.
8. 藤田幸司、横山友里、西真理子、藤原佳典．高齢者のボランティア活動の継続と主観的ウェルビーイングとの関連．第65回日本老年社会科学会（パシフィコ横浜ノース：神奈川）．示説．2023.6.17-18.
9. 倉岡正高、清野諭、横山友里，小島みさお，森裕樹，植田拓也，藤原佳典．一人暮らし高齢男性の困り事の相談相手と他者と食事をする機会の関連の検証.第65回日本老年社会科学会(パシフィコ横浜ノース:神奈川).示説.2023.6.17-18.
10. 松永博子、高橋知也、相良友哉、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．中高齢者就労支援施設における支援課題に関する研究．第65回日本老年社会科学会（パシフィコ横浜ノース：神奈川）．示説．2023.6.17-18.
11. Abe T, Sugiyama T, Owen N, Hino K. Neighbourhood built environment and withdrawal from a walking program with incentives in mid-to-older aged adults in Japan．第25回日本運動疫学会学術総会（中京大学：愛知）．口演．2023.6.24-25.
12. 横山友里、新開省二．Dietary Variety Score (DVS)の開発の経緯．第70回日本栄養改善学会学術総会（名古屋国際会議場：愛知）．シンポジウム．2023.9.1-3.
13. 成田美紀．Dietary Variety Score (DVS) を用いた食事・栄養指導の実際．第70回日本栄養改善学会学術総会（名古屋国際会議場：愛知）．シンポジウム．2023.9.1-3.
14. 秦俊貴、清野諭、横山友里、成田美紀、新開省二、北村明彦、藤原佳典．都市部在住高齢者における食品摂取の多様性と4年後のフレイルとの関連．第70回日本栄養改善学会学術総会（名古屋国際会議場：愛知）．口演．2023.9.1-3.
15. 新開省二、成田美紀．一般高齢者の早期低栄養リスクを評価する簡易アセスメントツールの開発と応用．第29回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会（パシフィコ横浜ノース：神奈川）．ランチョンセミナー．2023.9.2-3.
16. 村山洋史、飯塚あい、町田征己、天笠志保、井上茂、藤原武男、菖蒲川由郷．高齢期の社会的孤立が脳容積に及ぼす影響: NEIGE Study．第12回日本認知症予防学会学術集会（朱鷺メッセ：新潟）．示説．2023.9.15-17.
17. 阿部巧、山城大地、山下真里、植田拓也、鈴木宏幸、藤原佳典、栗田主一、鳥羽研二、IRIDE Cohort Study investigators．地域包括支援センターにおける認知機能評価の実態把握と認知機能低下者スクリーニングモデルの適用可能性:IRIDE Cohort Study．第12回日本認知症予防学会学術集会（朱鷺メッセ：新潟）．口演．2023.9.15-17.
18. 成田美紀、大曽根由実、新開省二、阿部巧、横山友里、野藤悠、秦俊貴、北村明彦、藤原佳典、村山洋史．地域在住高齢者における新型コロナウイルス感染症 流行直後の生活行動の変化と食品摂取多様性との関連．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．口演．2023.10.28-29.
19. 大曽根由実、野藤悠、横山友里、阿部巧、成田美紀、村山洋史、新開省二．地域在住高齢者における肉・卵の摂取頻度が低い要因に関する実態把握：2023年度草津町調査．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
20. 小宮山恵美、清野諭、横山友里、小島みさお、植田拓也、倉岡正高、森裕樹、山中信、谷出敦子、秦俊貴、小林江里香、藤原佳典．大都市在住高齢者におけるコロナ禍の健康に対する意識変容とその関連要因．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
21. 秦俊貴、森裕樹、清野諭、野藤悠、植田拓也、藤原佳典．通いの場のフレイル予防機能強化を目的とした「ちょい足し™」プログラム研修の普及と展開：都内自治体での取り組みの評価．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．口演．2023.10.28-29.
22. 赤尾瑠琉、大曽根由実、金子絢美、秦俊貴、成田美紀、渡邉愼二、古谷千寿子、清野諭、藤原佳典、新開省二．オンラインアプリ『バランス日記』を用いたフレイル予防の実証研究：前期介入群における実行可能性評価．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．口演．2023.10.28-29.
23. 小島みさお、清野諭、横山友里、倉岡正高、植田拓也、森裕樹、小宮山恵美、山中信、谷出敦子、秦俊貴、小林江里香、藤原佳典．大都市高齢者における社会参加割合とフレイル該当割合に関する地域相関分析．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
24. 櫻井花、稲垣宏樹、杉山美香、山下真里、清水恒三朗、野中久美子、村山洋史、岡村毅、栗田主一．ひきこもり家族を抱える高齢者の実態と抑うつとの関連．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
25. 山城大地、山下真里、川窪貴代、高橋知也、松永博子、相良友哉、藤田幸司、藤平杏子、土谷利仁、登藤直弥、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．高齢期のボランティア活動に関する負担感尺度作成の試み：REPRINTSコホートスタディより．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
26. 土谷利仁、高橋知也、相良友哉、藤平杏子、藤田幸司、山下真里、川窪貴代、松永博子、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．新型コロナウイルス（Covid-19）流行期における絵本読み聞かせボランティア活動の工夫：REPRINTS Studyより．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．示説．2023.10.28-29.
27. 谷出敦子、清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、植田拓也、森裕樹、秦俊貴、山中信、藤原佳典．地域在住高齢者における地域レベルの社会参加と精神的健康との関連：横断的マルチレベル分析．第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館市民会館・函館アリーナ：北海道）．口演．2023.10.28-29.
28. 古谷友希、阿部巧、小川将、山城大地、野藤悠、横山友里、清野諭、天野秀紀、藤原佳典、村山洋史．地域在住高齢者におけるBMIとba-PWVとの関連性.第10回日本予防理学療法学会学術大会(函館市民会館･函館アリーナ:北海道)．口演．2023.10.28-29.
29. 井上綾乃、福岡豊、天笠志保、村山洋史、藤原武男、井上茂、菖蒲川由郷．GPSと加速度データの統合による高齢者の中高強度身体活動パターンの解析．第10回医薬工3大学包括連携推進シンポジウム（工学院大学：東京）．示説．

2023.10.28.
30. 村山洋史、須田拓実、田淵貴大. 社会的孤立および孤独感とCOVID-19感染の関連：JACSIS研究. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
31. 村山洋史、鈴木宏和、髙橋勇太. ChatGPTを活用したナッジの可能性. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 自由集会. 2023.10.31-11.2.
32. 野中久美子、齋藤尚子、杉山美香、稲垣宏樹、村山洋史. 社会的孤立状態にある高齢者の生活実態と生活での課題：本人へのインタビュー調査1. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
33. 野藤悠、吉田由佳、森知美、阿部巧、横山友里、清野諭、藤原佳典、村山洋史. 介護予防活動の認知に影響する要因の検討：養父コホート研究. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
34. 横山友里、清野諭、秦俊貴、小島みさお、倉岡正高、植田拓也、小宮山恵美、森裕樹、山中信、谷出敦子、小林江里香、藤原佳典. 大都市在住高齢者における地域レベルの共食割合と個人の食品摂取の多様性との関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
35. 阿部巧、野藤悠、横山友里、清野諭、藤原佳典、村山洋史. 地域在住高齢者における外出時の手段別移動時間とフレイルとの関連性. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
36. 成田美紀、大曽根由実、新開省二、横山友里、阿部巧、野藤悠、秦俊貴、村山洋史、藤原佳典. COVID-19流行前後における高齢者の食生活 （1）食品摂取多様性と関連要因の変化. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2
37. 大曽根由実、成田美紀、新開省二、横山友里、野藤悠、阿部巧、秦俊貴、村山洋史、藤原佳典. COVID-19流行前後における高齢者の食生活（2）食品摂取多様性の変化をもたらす要因. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
38. 藤田幸司、横山友里、西真理子、松永博子、藤原佳典. 高齢者におけるボランティア活動頻度、満足度と主観的ウェルビーイングとの関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 口演. 2023.10.31-11.2.
39. 清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、山中信、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典. 大都市在住高齢者の地域レベルの社会参加と 個人の身体不活動：横断的マルチレベル分析. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 口演. 2023.10.31-11.2.
40. 秦俊貴、清野諭、横山友里、遠峰結衣、新開省二、北村明彦、藤原佳典. 食品摂取の多様性のチェック経験と食品摂取多様性スコアの変化：地域レベルでの検討. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
41. 倉岡正高、清野諭、横山友里、小島みさお、小宮山恵美、森裕樹、山中信、谷出敦子、秦俊貴、植田拓也、藤原佳典. 大都市高齢者の個人・地域レベルの世代間交流と個人の精神的健康度の関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
42. 山中信、清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典. 所得別にみた地域在住高齢者における就労状況と精神的健康度の関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
43. 新開省二、成田美紀、外川恵、林芙美、武見ゆかり. BDHQを用いた高齢者の栄養疫学研究（1）BDHQの妥当性検討. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
44. 金子絢美、大曽根由実、赤尾瑠琉、成田美紀、秦俊貴、藤原佳典、新開省二. BDHQを用いた高齢者の栄養疫学研究（2）フレイルおよびMCIと関連する食品群と栄養素. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
45. 赤尾瑠琉、大曽根由実、金子絢美、秦俊貴、成田美紀、清野諭、藤原佳典、新開省二. オンラインアプリ『バランス日記』を用いたフレイル予防の実証試験. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
46. 小島みさお、清野諭、横山友里、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、山中信、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典. 大都市高齢者の基本チェックリストによる性・年齢・要支援認定有無別フレイル発現率. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
47. 杉浦圭子、野中久美子、村山幸子、高瀬麻以、齋藤みほ、村山洋史. プロボノ活動が本業に及ぼす影響とウェルビーイングとの関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
48. 齋藤尚子、野中久美子、杉山美香、稲垣宏樹、村山洋史. 社会的孤立状態にある高齢者が交流を増やせない要因：本人へのインタビュー調査2. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
49. 児玉康子、天笠志保、井上茂、菖蒲川由郷、村山洋史. 豪雪地域における冬期の介護予防事業の評価. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
50. 菖蒲川由郷、白倉悠企、尾白有加、町田征己、村山洋史、藤原武男、井上茂. 高齢者のソーシャルサポートと脳容積の変化：NEIGE studyより. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
51. 尾白有加、菖蒲川由郷、白倉悠企、町田征己、村山洋史、藤原武男、井上茂. 高齢者の食と脳容積の変化：NEIGE studyより. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
52. 高瀬麻以、齋藤尚子、野中久美子、村山洋史. 企業が高齢者を雇用することにより感じる課題とその対応の整理. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
53. 高橋佳史、佐藤研一郎、田淵貴大、村山洋史. COVID-19感染予防行動に対する先延ばしと地域住民／政府への信頼感の影響. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
54. 佐藤研一郎、高橋佳史、田淵貴大、村山洋史. 先延ばし傾向、COVID-19感染恐怖、ワクチン接種行動の関連. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
55. 藤原佳典、高橋知也、藤平杏子、松永博子、相良友哉、藤田幸司、山下真理、川窪貴代、村山洋史、鈴木宏幸. シニアボランティアにおける活動への満足度・負担感が精神的健康度に及ぼす影響：REPRINTS-ex研究より. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
56. 藤平杏子、高橋知也、松永博子、相良友哉、藤田幸司、山下真里、川窪貴代、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典. 中高年者のコミュニティ所属数と幸福感の関連：REPRINTS研究より. 第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）. 示説. 2023.10.31-11.2.
57. 釘宮嘉浩、岩崎正則、白部麻樹、本川佳子、枝広あや子、渡邊裕、五十嵐憲太郎、阿部巧、横山友里、北村明彦、村山洋史、平野 浩彦. 地域在住高齢者における色変わりガムの測定値の分布. 第16回日本口腔検査学会学術大会（東京歯科大学：東京）. 口演. 2023.11.4-5.

58. 村山洋史、野中久美子、高瀬麻以、杉浦圭子、齋藤みほ、渡邉彩、嵯峨生馬．勤労世代を地域活動へとつなぐ「プロボノ」活動：プロボノワーカーの活動実態について．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．2023.12.2.
59. 倉岡正高、清野諭、山下真里、野藤悠、村山洋史、藤原佳典．東日本大震災被災地における世代間交流と精神的健康度の関連．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．2023.12.2.
60. 相良友哉、高橋知也、松永博子、藤平杏子、藤田幸司、山下真里、川窪貴代、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．ボランティア団体の役員は活動負担感が増大するか？：REPRINTS Studyより．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．2023.12.2.
61. 村山洋史.行動変容を導くナッジとは.第30回日本行動医学会学術総会(東京大学:東京).シンポジウム.2023.12.2-3.
62. 齋藤尚子．特別養子縁組の養親が抱く不安や困りごとの実態－新聞記事データベースを用いての検討．第12回日本公衆衛生看護学会学術集会（北九州国際会議場＋オンライン：福岡）．示説．R6.1.6-1.7.
63. 山岸貴子、齋藤尚子、川村牧子．地域包括ケアを担う看護職育成に向けて基礎看護教育で教授する内容と指導方法の検討（第１報）－看護系大学教員が捉える地域包括ケアを担う看護職とはー．第12回日本公衆衛生看護学会学術集会（北九州国際会議場＋オンライン：福岡）．示説．R6.1.6-1.7.
64. 川村牧子、山岸貴子、齋藤尚子．地域包括ケアを担う看護職育成に向けて基礎看護教育で教授する内容と指導方法の検討（第2報）地域包括ケアを担う看護職育成における教育上の困難点の明確化．第12回日本公衆衛生看護学会学術集会（北九州国際会議場＋オンライン：福岡）．示説．R6.1.6-1.7.
65. 村山洋史、杉山美香、稲垣宏樹、宇良千秋、宮前史子、枝広あや子、本川佳子、岡村毅、栗田主一．地域レベルのソーシャルキャピタルと総死亡との関連：都市部でのマルチレベルコホート研究．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．2024.1.31-2.2.
66. 中本五鈴、村山洋史、田淵貴大．同世代の非介護者と比較したヤングアダルトケアラーの精神的健康と社会的孤立の実態：JACSIS2020調査．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．2024.1.31-2.2.
67. 尾白有加、白倉悠企、村山洋史、町田征己、井上茂、藤原武男、菖蒲川由郷．高齢者の食の多様性と脳容積の変化：NEIGE study．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．2024.1.31-2.2.
68. 谷友香子、藤原武男、杉原玄一、花里真道、鈴木規道、町田征己、天笠志保、村山洋史、井上茂、菖蒲川由郷．近隣環境の美しさは高齢者のどの脳領域と関連するか？第34回日本疫学会学術総会(びわ湖大津プリンスホテル:滋賀)．示説．2024.1.31-2.2.
69. 清野諭、横山友里、森裕樹、植田拓也、山下真里、野藤悠、北村明彦、服部真治、山田実、近藤克則、荒井秀典、藤原佳典．大都市在住高齢者におけるCOVID-19流行下の通いの場への参加が1年後のフレイルに及ぼす影響．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．2024.1.31-2.2.
70. 阿部巧，野藤悠，横山友里，野中久美子，村山洋史．サルコペニア判定における筋力・身体機能評価法の差異が有病率に及ぼす影響．日本体育測定評価学会第23回大会，福井，2024.2.29.
71. 清野諭、山中信、谷出敦子、秦俊貴、野藤悠、藤原佳典．通いの場のフレイル予防機能強化を図る“ちょい足し”研修プログラム®：実施回数による効果差の検討．第25回日本健康支援学会年次学術大会（中京大学：愛知）．示説．2024.3.2-3.
72. 佐藤文音，金美珍，藤井啓介，薛載勲，阿部巧．ダンスの実践が女性高齢者の実行機能と気分に与える一過性の影響：動きの創作の有無に着目した探索的検討．第25回日本健康支援学会年次学術大会（中京大学：愛知）．示説．2024.3.2-3.

５　著書等

1. 村山洋史、藤原佳典、東憲太郎（編）．ご存知ですか？「介護助手」のちから：元気シニアが介護現場の人材不足を救う．社会保険出版社、2023.6.1発行
2. 似内遼一、高瀬麻以、荻野亮吾、村山洋史（監訳）．コミュニティを研究する：概念、定義、測定方法．新曜社（東京）、2023.8.5発行
3. 髙橋勇太、村山洋史、竹林正樹．保健活動で使える！ナッジ：押さえておくべき基本と実践例．医学書院（東京）、2023.8.28発行
4. 清野諭、山下真里、菅原康宏、新開省二．気仙沼スタディ報告書「気仙沼市　健康長寿のまちづくりのための生活実態調査　報告書（中間調査）」2023.7.

６　特許

なし

７　その他

1. Murayama H. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 Outstanding Poster Presentation Award. Trajectories of life-course financial strain and depressive symptoms: Result from the National Survey of the Japanese Elderly. 2023.6.12-15.
2. Nonaka K. 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 Outstanding Poster Presentation Award. The association between Pro Bono experience and participation in community activity among those who were not interested in community activities prior to their Pro Bono experience. 2023.6.12-15.
3. Abe T. The 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 Outstanding Poster Presentation Award. Changes in healthy behaviours and incident frailty in community-dwelling older adults. 2023.6.12-15.
4. 野中久美子．第33回日本老年学会総会 合同ポスター（老年社会科学部門）最優秀演題賞、地域づくりの新たな担い手「プロボノワーカー」の活動状況とその促進要因の検討：勤労者プロボノワーカーへのインタビュー調査と質問紙調査より．2023.6.16-18.
5. 野中久美子．第65回日本老年社会科学会大会 優秀ポスター賞、地域づくりの新たな担い手「プロボノワーカー」の活動状況とその促進要因の検討：勤労者プロボノワーカーへのインタビュー調査と質問紙調査より．2023.6.17-18.
6. 阿部巧．第25回日本運動疫学会学術総会 最優秀演題賞、Neighbourhood built environment and withdrawal from (ア) a walking program with incentives in mid-to-older aged adults in Japan. 2023.6.24-25.
7. 村山洋史．第12回日本認知症予防学会学術集会 浦上賞、高齢期の社会的孤立が脳容積に及ぼす影響: NEIGE Study.

2023.9.15-17.
8. 阿部巧. 第23回日本体育測定評価学会大会　優秀発表賞、サルコペニア判定における筋力・身体機能評価法の違いが有病率に及ぼす影響. 2024.2.29.

大都市社会関係基盤研究

１　論文（誌上発表）：原著

1. Kobayashi E, Harada K, Okamoto S, Liang J: Living alone and depressive symptoms among older Japanese: Do urbanization and time period matter? *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 78(4), 718-729, 2023.（査読あり）(IF:6.2, 2022)
2. Seino S, Abe T, Nofuji Y, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y: Dose-response associations of physical activity and sitting time with all-cause mortality in older Japanese adults. *Journal of Epidemiology*, 34(1), 23-30, 2024.（査読あり）(IF: 4.7, 2022/2023)
3. Murayama Y, Hasebe M, Yamazaki S, Yamaguchi J, Kobayashi E: Social work for vulnerable and marginalized people during COVID-19 in Japan. *Asian Social Work and Policy Review*, 17(3), 162-175, 2023.（査読あり）(IF:1.2, 2022)
4. Murayama Y, Yamazaki S, Hasebe M, Kobayashi E: Effects of adverse life events on mental health in single older adults in Japan. *Psychogeriatrics*, 23(5), 838-346, 2023.（査読あり）(IF: 2.0, 2022)
5. Abe T, Seino S, Hata T, Yamashita M, Ohmori N, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y: Transportation modes and social participation in older drivers and non-drivers: Results from urbanised Japanese cities. *Journal of Transport Geography*, in press.（査読あり）(IF: 6.1, 2022/2023)
6. Abe T, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Amano H, Yamashita M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Modifiable healthy behaviours and incident disability in older adults: Analysis of combined data from two cohort studies in Japan. *Exp Gerontol*, in press.（査読あり）(IF: 4.253, 2022/2023)
7. Fujiwara Y, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Fujita K, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status in old age and cause-specific disability in Japanese community-dwelling older adults with or without frailty: a 3.6-year prospective study. *Geriatr Gerontol Int*, in press.（査読あり）(IF: 3.3, 2022/2023)
8. Kitago M, Seino S, Shinkai S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Toshiki H, Abe T, Taniguchi Y, Amano H, Murayama H, Kitamura A, Akishita M, Fujiwara Y. Cross-sectional and longitudinal associations of creatinine-to-cystatin C ratio with sarcopenia parameters in older adults. *J Nutr Health Aging*, in press.（査読あり）(IF: 5.285, 2022/2023)
9. Nakagawa T, Kobayashi E: Cohort differences in trajectories of life satisfaction among Japanese older adults. *Psychology and Aging*, 38(7), 601-614, 2023.（査読あり）(IF: 3.7, 2022)
10. Nonaka K, Murayama H, Murayama Y, Murayama S, Kuraoka M, Nemoto Y, Kobayashi E, Fujiwara Y: The Impact of generativity on maintaining higher-level functional capacity of older adults: A longitudinal study in Japan. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 20(11), 6015, 2023. https://doi.org/10.3390/ijerph20116015（査読あり）(IF: 5.4, 2022)
11. Okamoto S, Sakamoto H, Kamimura K, Komamura K, Kobayashi E, Liang J: Economic effects of healthy ageing: Functional limitation, forgone wages, and medical and long-term care costs. *Health Economics Review*, 13, article number:28, 2023. https://doi.org/10.1186/s13561-023-00442-x　（査読あり）(IF:2.4, 2022)
12. Osuka Y, Nofuji Y, Seino S, Maruo K, Oka H, Shinkai S, Fujiwara Y, Sasai H. The effect of a multicomponent intervention on occupational fall-related factors in older workers: a pilot randomized controlled trial. *J Occup Health*, 64: e12374, 2022.（査読あり）(IF: 2.57, 2022/2023)
13. Sugisawa H, Sugihara Y, Kobayashi E, Fukaya T, Liang J: Trends in informal and formal home help use among older adults with disabilities in Japan: From 1999 to 2017. *International Journal of Social Welfare*, 33(1), 220-236, 2024.（査読あり）(IF: 1.9, 2022)
14. Taniguchi Y, Seino S, Ikeuchi T, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Protective effects of dog ownership against the onset of disabling dementia in older community-dwelling Japanese. *Prev Med Rep*, 36, 102465.（査読あり）(IF: 2.8, 2022/2023)
15. Taniguchi Y, Yokoyama Y, Ikeuchi T, Mitsutake S, Murayama H, Abe T, Seino S, Amano H, Nishi M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y, Hagiwara Y. Pet ownership-related differences in medical and long-term care costs among community-dwelling older Japanese. *Plos One*, 18(1), e0277049, 2023.（査読あり）(IF: 3.7, 2022/2023)
16. Yokoyama Y, Nofuji Y, Seino S, Abe T, Murayama H, Narita M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Association of dietary variety with the risk for dementia: the Yabu Cohort Study. *Public Health Nutr*, in press.（査読あり）(IF: 4.539, 2022/2023)
17. Okamoto S, Sata M, Rosenberg M, Nakagoshi N, Kamimura K, Komamura K, Kobayashi E, Sano J, Hirazawa Y, Okamura T, Iso H. Universal health coverage in the context of population ageing: Catastrophic health expenditure and unmet need for healthcare, *Health Economics Review*, 14:8, 2024 .　（査読あり）(IF: 2.4, 2022)
18. Takeuchi, M, Katagiri, K. Effects of workplace ageism on negative perception of aging and subjective well-being of older adults according to gender and employment Status. *Geriatrics & Gerontology International*. (in press).　（査読あり）(IF: 3.3, 2022)
19. Nakada T, Kozawa T, Seino S, Murota S, Eto M, Shimasawa J, Shimizu Y, Tsurugano S, Katsukawa F, Sakamoto K, Washizaki H, Ishigaki Y, Sakamoto M, Takadama K, Yanai K, Matsuo O, Kameue C, Suzuki H, Kurotani K, Ohkawara K. A community-based intervention to enhance subjective well-being in older adults: study design and baseline participant profiles. Healthcare, in press.　（査読あり）(IF: 2.8, 2022)
20. Tham YJ, Okamoto S, Kobayashi E. The importance of examining both the amount and balance of social support: A study on the relationship between social support and subjective well-being of older Japanese adults. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 34(2), e2783, 2024.（査読あり）(IF: 2.7, 2022)

21. 小林江里香, 根本裕太：通いの場の担い手としての住民参加－都市部の中高年者におけるニーズの分析. 老年社会科学, 45(3), 255-263, 2023. （査読なし）
22. 小林江里香, 村山陽, 長谷部雅美, 高橋知也, 山口淳, 山崎幸子：都市部の中高年独居者における心身の健康、経済状態、社会関係上の問題による類型化と類型別特徴. 社会福祉学, 64(1), 61-74, 2023. （査読あり）
23. 小島みさお, 東畠弘子：認知症在宅要介護高齢者における紙おむつの選定についての福祉用具専門相談員の実態と選定困難意識. 自立支援介護・パワーリハ学会誌. 2023;17（2）:38-45.（査読あり）
24. 小島みさお:男性家族介護者による排泄ケアの実態と意識:首都圏で暮らす男性家族介護者の語りから. シニア社会学会誌 エイジレスフォーラム. 2023;21:19-29.（査読あり）
25. 平松正和, 尾形真規子：大豆イソフラボンの生理機能－耐糖能障害への効果について－. 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構生活科学研究所研究報告. 46, 49-50, 2023. （査読なし）
26. 山田篤裕, 小林江里香, 梁浙西（Jersey Liang）：高齢期の貧困動態と社会主観的貧困線. 貧困研究, 30, 73-84, 2023. （査読あり）
27. 森裕樹, 清野諭, 山下真里, 横山友里, 植田拓也, 小林江里香, 藤原佳典： 大都市在住の後期高齢者における通いの場への参加状況とその関連要因：新型コロナウイルス感染症拡大前後の比較検討. 応用老年学, 印刷中. （査読あり）

２ 論文（誌上発表）：総説

1. 小林江里香: 中高年者の孤立と孤独―社会的課題として. 「世界」2023年12月号, 第976号, 115-124, 岩波書店, 2023.（査読なし）
2. 清野諭. PDCAサイクルに基づく多様な通いの場の推進と評価. 老年社会科学, 45(3), 264-267, 2023.（査読なし）
3. 清野諭. 地域における介護予防・フレイル予防に関する疫学研究とその実践的応用. 公衆衛生情報. 53(2), 4-5, 2023.（査読なし）
4. 清野諭. 高齢期の健康づくり戦略：鍵は“ちょい足し”にあり. みんなのスポーツ, 45(9): 12-14, 2023.（査読なし）
5. 村山陽：研究発表を終えて，応用心理学のクロスロード，2023，12，（印刷中）（査読なし）
6. 菊池宏幸, 清野諭, 野藤悠, 植田拓也, 井上茂：身体活動・運動分野のロジックモデルとアクションプランの例：運動習慣者割合の増加. 健康教育学会誌, 2024,2.（印刷中）（査読あり）
7. 成田美紀, 清野諭. 栄養・食生活分野のロジックモデルとアクションプランの例：低栄養傾向高齢者の減少：健康教育学会誌, 2024,2.（印刷中）（査読あり）
8. 清野諭, 野藤悠, 植田拓也, 根本裕太, 倉岡正高, 髙橋淳太, 森裕樹, 秦俊貴, 北村明彦, 小林江里香, 村山洋史, 本川佳子, 服部真治, 山田実, 近藤克則, 荒井秀典, 藤原佳典. 通いの場の取組をPDCAサイクルに沿って推進・評価するためのフレームワーク：ACT-RECIPE. 日本公衆衛生雑誌, 2024,2.(印刷中)（査読あり）

３ 学会発表（国際）

1. Seino S, Abe T, Nofuji Y, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. The combined impact of physical activity and sitting time on Incident Functional Disability in Older Adults. 2023 American College of Sports Medicine Annual Meeting & World Congresses. Denver, Colorado USA, 2023.5.30-6.2.
2. Kobayashi E, Okamoto S, Fukaya T, Murayama H, Liang J: Are older Japanese becoming increasingly isolated? Trajectories of social isolation by birth cohorts and gender (Symposium: Exploring healthy longevity: results from the panel surveys in Asia/Oceania region). The 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
3. Seino S, Abe T, Nofuji Y, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Dose-response association of physical activity and sitting time with incident functional disability in older Japanese adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
4. Murayama Y, Yamazaki S, Hasebe M, Yamaguchi J, Kobayashi E: Influence of life-course factors on support resources and help-seeking of middle-aged and older adults living alone, IAGG-Asia Oceania Regional Congress2023, Yokohama, 2023. 6.12-14.
5. Murayama Y: How Middle-Aged and Older Men Living Alone Reach Poverty and Isolation and its Relationship with Help-Seeking, IAGG-Asia Oceania Regional Congress2023 Social science5 (Social isolation and health in the post-COVID-19 era), PACIFICO Yokohama North (Japan, Yokohama), 2023, 6.13.
6. Kojima M, Seino S, Hata T, Fujiwara Y. Association of urinary problems with social participation and health-related indices among older Japanese adults: A cross-sectional study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
7. Takeuchi M. Katagiri K. Effects of ageism in the workplace on the subjective well-being of older adults: Differences by gender and employment status. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
8. Abe T, Seino S, Hata T, Yokoyama Y, Nofuji Y, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Changes in healthy behaviours and incident frailty in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
9. Amano H, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Apathetic symptoms and the risk of incident dementia certified in the Long-Term Care Insurance System: a 12-year cohort study of the community dwelling elderly in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
10. Fujita K, Taniguchi Y, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Trajectories for the frequency of going out and its associated factors among community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
11. Fujiwara Y, Seino S, Hata T, Abe T, Yokoyama Y, Nofuji Y, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status and incident frailty in community-dwelling older adults: a 6-year prospective study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
12. Hata T, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Nofuji Y, Narita M, Taniguchi Y, Amano H, Nishi M, Shinkai S,

Kitamura A, Fujiwara Y. Impacts of dietary variety on changes in nutritional biomarkers among community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
13. Hinakura K, Sakurai R, Sasai H, Ogawa S, Seino S, Hata T, Fujiwara Y, Awata S. Characteristics of wearable activity trackers users and association with health status among older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
14. Ikeuchi T, Abe T, Taniguchi Y, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Subjective age and mortality in Japanese older adults: The Kusatsu Longitudinal Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
15. Ishizaki T, Seino S. Implementing a new public health program for frailty prevention in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
16. Kuraoka M, Seino S, Yokoyama Y, Kojima M, Mori H, Ueda T, Komiyama E, Fujiwara Y. The relationship between intra- and inter-generational exchange and mental health of male public housing residents. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
17. Mori H, Seino S, Nofuji Y, Fujiwara Y. Implementation and evaluation of a frailty-prevention program for the leaders of older residents. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
18. Murayama H, Kobayashi E, Sugisawa H, Liang J: Trajectories of life-course financial strain and depressive symptoms: Result from the National Survey of the Japanese Elderly. The 12th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
19. Narita M, Shinkai S, Yokoyama Y, Seino S, Abe T, Nofuji Y, Amano H, Nishi M, Kitamura A, Fujiwara Y. Association between Japanese Healthy Eating Scores and Sarcopenia in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
20. Nofuji Y, Seino S, Abe T, Yokoyama Y, Narita M, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Effects of community-based frailty-preventing intervention on dementia in older adults living in rural Japan: A quasi-experimental study using propensity score matching. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
21. Yokoyama Y, Seino S, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Association between changes in dietary variety and depressive symptoms in community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
22. Takeuchi M, Katagiri K. Factors hindering Internet use among older housewives in Japan: Gender stereotypes and spousal dependence. The 15th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, Hong Kong, 2023.6.13-15.
23. Kobayashi E: Nationwide longitudinal study on the health and lives of Japanese older adults: Overview of JAHEAD/NSJE. 7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium 2023 OAGG-AOR Satellite, Tokyo, 2023.10.16-18.
24. Kobayashi E: Does living with a family affect social contact/participation? Variations across birth cohorts and gender in Japan. (Symposium: The Role of Contextual Factors in Adult Development and Aging). The 2023 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Tampa, FL, 2023.11.8-12.

4　学会発表（国内）

1. 清野諭，横山友里，小島みさお，森裕樹，倉岡正高，植田拓也，藤原佳典．質問紙で評価した大都市在住高齢者の総身体活動量と身体活動基準の充足率：記述疫学研究．第33回日本疫学会学術総会，静岡，2023.2.1-3.
2. 谷口優，清野諭，秦俊貴，池内朋子，阿部巧，新開省二，北村明彦，藤原佳典．地域高齢者における犬猫飼育経験と自立喪失発生との関連．第33回日本疫学会学術総会，静岡，2023.2.1-3.
3. 村山洋史，小林江里香，杉澤秀博：ライフコースにわたる経済的不利の軌跡パターンと高齢期の精神的健康．第33回日本疫学会学術総会，静岡，2023.2.1-3.
4. 秦俊貴，清野諭，横山友里，阿部巧，野藤悠，成田美紀，谷口優，天野秀紀，西真理子，新開省二，北村明彦，藤原佳典．地域高齢者における食品摂取の多様性がヘモグロビン値の変化に与える影響．第33回日本疫学会学術総会，静岡，2023.2.1-3.
5. 清野諭，野藤悠．自治体の介護予防事業を支援する研究者の立場から．シンポジウム1　地域社会における真の健康支援の実現に向けた官・産・学の取り組みと展望．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
6. 大須賀洋祐，野藤悠，清野諭，丸尾和司，岡敬之，新開省二，藤原佳典，笹井浩行．高齢就労者に対する多要素介入の安全性、受容性、潜在的有効性：予備的ランダム化比較試験．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
7. 野藤悠，横山友里，清野諭，阿部巧，村山洋史，藤原佳典．フレイル予防の3要素（運動・栄養・社会参加）の充足数と介護費との関連性．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
8. 百瀬由璃絵，小林江里香：高齢期の社会的排除・持続的貧困がもたらす負の軌跡－入院・入所・死亡．数理社会学会第74回大会，2023.3.7-8.
9. 大高千明，辻野和美，中田大貴，田舎中真由美，鈴木基文，清野諭，田中喜代次．骨盤底フレイルに関連する身体機能の検討：骨盤底機能年齢と体力・運動機能、日常生活習慣との関連性．第10回日本介護予防・健康づくり学会大会，大阪，2023.3.17-18.
10. 辻野和美，大高千明，中田大貴，田舎中真由美，鈴木基文，清野諭，田中喜代次．骨盤底フレイル予防を目指した骨盤底機能年齢推定式の開発：体力測定および質問紙を用いて．第10回日本介護予防・健康づくり学会大会，大阪，2023.3.17-18.
11. 辻野和美，大高千明，中田大貴，田舎中真由美，鈴木基文，清野諭，田中喜代次．骨盤底フレイル予防を目指した骨盤底機能年齢推定式（簡易版）の開発：質問紙J-PFDI20とロコモ25を用いて．第36回日本老年泌尿器科学会，2023.5.26-27.
12. 清野諭，横山友里，阿部巧，野藤悠，谷口優，村山洋史，天野秀紀，新開省二，北村明彦，藤原佳典．地域在住高齢者のサルコペニアと死因別死亡リスク．第65回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.
13. 新開省二，安田誠史，北村明彦，藤原佳典，岸恵美子，河野あゆみ，清野諭．フレイル・ロコモの現状と公衆衛生対策．領域横断的なフレイル、ロコモ対策の推進．第65回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.

14. 小林江里香, 岡本翔平, 深谷太郎, Jersey Liang: 全国高齢者における社会的孤立・孤独の割合と関連要因の時代的変化－COVID-19の影響に着目して. 日本老年社会科学会　第65回大会, 横浜, 2023.6.17-18.
15. 清野諭, 秦俊貴, 野藤悠, 横山友里, 新開省二, 北村明彦, 藤原佳典. 大都市在住高齢者におけるCOVID-19流行下の新規要支援・要介護申請数：第7波までの影響分析. 第65回日本老年社会科学会. 2023.6.17-18.
16. 村山陽, 長谷部雅美, 山崎幸子, 山口淳, 清水佐紀, 小林江里香：単身中高年者におけるSNSを利用した他者とのつながり方:つながり方のパターンとSNS利用意識との関連. 日本老年社会科学会 第65回大会, 横浜, 2023. 6.17-18.
17. 小島みさお, 清野諭, 秦俊貴, 藤原佳典. 排尿障害による日常生活制限を有する高齢者の発現率と関連要因：横断的研究. 日本老年社会科学会 第65回大会, 横浜, 2023. 6.17-6.18.
18. 竹内真純・片桐恵子. フルタイム就労女性とエイジズム：高齢者の受ける年齢差別. 日本老年社会科学会 第65回大会, 横浜, 2023. 6.17-6.18.
19. 深谷太郎, 小林江里香: 高齢者のICTの利用状況－Web会議システムの利用を含めた考察－. 日本老年社会科学会第65回大会, 横浜, 2023.6.17-18.
20. 山崎幸子, 村山陽, 長谷部雅美, 山口淳, 清水佐紀, 小林江里香：単身中高年者の馴染みの場の分類とその心理的機能. 日本老年社会科学会 第65回大会, 横浜, 2023. 6.17-6.18.
21. 野藤悠, 清野諭, 横山友里, 阿部巧, 村山洋史, 藤原佳典. 介護予防の4要素（運動・栄養・社会参加・口腔ケア）の充足数と要介護認定との関連性. 日本老年社会科学会 第65回大会, 横浜, 2023. 6.17-6.18.
22. 中川威, 小林江里香: 人生満足感の軌跡の世代差. 日本老年社会科学会　第65回大会, 横浜, 2023.6.17-18.
23. 百瀬由璃絵, 小林江里香: 日本の高齢者における社会的排除と持続的貧困による死亡率の異同. 日本老年社会科学会　第65回大会, 横浜, 2023.6.17-18.
24. 倉岡正高、清野諭、横山友里、小島みさお、 森裕樹、植田拓也、藤原佳典. 一人暮らし高齢男性の困り事の相談相手と他者との食事の機会に関する関係の検証：大都市自治体悉皆調査からみる独居男性に対する支援策の探求. 日本老年社会科学会　第65回大会, 横浜, 2023.6.17-18.
25. 小島みさお, 東畠弘子. 特定福祉用具販売種目購入後のモニタリングおよびメンテナンスに関する実態：福祉用具専門相談員のアンケート調査から. 第4回福祉用具専門相談員研究大会（KFCホール、ハイブリッド開催：東京）. 口述. 2023.6.22.
26. 清野諭. フレイル予防を目的とした普及・実装研究の実際：東京都内での地域介入研究による事例から. 中高年者における地域レベルの身体活動の普及と継続. 第25回日本運動疫学会学術総会. 2023.6.24-25.
27. 辻野和美, 田中喜代次, 清野諭, 中田大貴, 大高千明. 骨盤底機能に関連する基礎的体力要素の検討. 日本女性骨盤底医学会, 東京, 2023.8.5-6.
28. 村山陽, 長谷部雅美 ： 孤立状態にある単身中高年者におけるコミュニケーションの志向性の違いによるSNS利用と孤独感との関連. 日本応用心理学会第89回大会, 東京(亜細亜大学), 2023,8.26-8.27.
29. 秦俊貴, 清野諭, 横山友里, 成田美紀, 新開省二, 北村明彦, 藤原佳典. 都市部在住高齢者における食品摂取の多様性と4年後のフレイルとの関連. 栄養改善学会, 愛知, 2023.9.2-3.
30. 平松正和, 安井洋子, 羽生大記. 高齢入院患者における障害高齢者の日常生活自立度の非改善要因の検討. 第70回日本栄養改善学会. 名古屋. 2023.9.2.
31. 栃山友美, 平松正和, 堀春奈, 沼澤明里, 岸昌代, 田中寛, 伊藤智子. 管理栄養士に関するコンピテンシーと個人特性との関連の検討. 第70回日本栄養改善学会. 名古屋. 2023.9.3.
32. 沼澤明里, 平松正和, 堀春奈, 栃山友美, 岸昌代, 田中寛, 伊藤智子. 管理栄養士に関するコンピテンシーと臨地実習「公衆栄養学」の実習内容との関連の検討. 第70回日本栄養改善学会. 名古屋. 2023.9.3.
33. 竹内真純・片桐恵子. 年齢差別を受けた経験が主観的well-beingに与える影響：性別と就労経験による違い. 日本社会心理学会第64回大会, 上智大学, 2023.9.7-8.
34. 小林江里香：中高年者の社会的孤立・孤独の実態と多様性－何が問題なのか（シンポジウム：中高年期からの孤立・困窮予防に向けた挑戦:心理学研究と現場を結ぶ）. 日本心理学会第87回大会, 神戸市, 2023. 9.15-17.
35. 村山陽：孤立・困窮状態にある単身中高年男性の援助要請はどのように促されるのか: 現場と研究を結ぶ試み, 公募シンポジウム中高年期からの孤立・困窮予防に向けた挑戦:心理学研究と現場を結ぶ. 日本心理学会第87回大会, 神戸国際会議場・神戸国際展示場3号館（神戸市), 2023, 9.15-9.17.
36. 村山陽, 山崎幸子, 長谷部雅美, 山口淳, 小林江里香：単身中高年男性からの援助要請を促すためのオンラインプログラムの開発と評価.日本心理学会第87回大会, 神戸, 2023. 9.15-17.
37. 村山陽：生活困窮者への心の援助で大切なこと:その2 ひきこもり、社会的孤立を中心に, 日本心理臨床学会 第42回大会(Web大会), オンライン, 2023,9.22-10.12.
38. 村山陽：孤立・困窮状態にある単身中高年男性が、助けを求めないのはなぜか？自主シンポジウム 日本心理臨床学会 第42回大会(Web大会), オンライン, 2023,9.22-10.12.
39. 村山陽, 山崎幸子, 長谷部雅美, 小林江里香：単身中高年者の健康に影響する社会的孤立に対するオンラインコミュニケーションの緩衝効果. 第15回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会, 福島, 2023. 9.29-10.1.
40. 長谷部雅美, 村山陽, 山崎幸子, 山口淳, 小林江里香：中高年者における福祉・介護の制度利用に対する抵抗感と社会関係との関連. 第15回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会, 福島, 2023. 9.29-10.1.
41. 山崎幸子, 村山陽, 長谷部雅美, 山口淳, 小林江里香：単身中高年者における他者交流の類型；隠れた孤独と精神的健康の関連. 第15回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会, 福島, 2023. 9.29-10.1.
42. 清野諭. 通いの場の取組をPDCAサイクルに沿って評価するための枠組み：ACT-RECIPE. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 北海道, 2023.10.28-29.
43. 古谷友希, 阿部巧, 小川将, 山城大地, 野藤悠, 横山友里, 清野諭, 天野秀紀, 藤原佳典, 村山洋史. 地域在住高齢者におけるBMIとba-PWVとの関連性. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 北海道, 2023.10.28-29.
44. 谷出敦子, 清野諭, 横山友里, 小島みさお, 倉岡正高, 植田拓也, 森裕樹, 秦俊貴, 山中信, 藤原佳典. 地域在住高齢者における地域レベルの社会参加と精神的健康との関連：横断的マルチレベル分析. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 北海道, 2023.10.28-29.
45. 小島みさお, 清野諭, 横山友里, 倉岡正高, 植田拓也, 森裕樹, 小宮山恵美, 山中信, 谷出敦子, 秦俊貴, 小林江里香, 藤原佳典: 大都市高齢者における社会参加割合とフレイル該当割合に関する地域相関分析. 第18回日本応用老年学会大会, 大阪, 2023.10.28-29.
46. 小宮山恵美, 清野諭, 横山友里, 小島みさお, 植田拓也, 倉岡正高, 森裕樹, 山中信, 谷出敦子, 秦俊貴, 小林江里香, 藤原佳典: 大都市在住高齢者におけるコロナ禍の健康に対する意識変容とその関連要因. 第18回日本応用老

年学会大会，大阪，2023.10.28-29.
47. 秦俊貴，森裕樹，清野諭，野藤悠，植田拓也，藤原佳典．通いの場のフレイル予防機能強化を目的とした「ちょい足し」プログラム研修の普及と展開：都内自治体での取り組みの評価． 第18回日本応用老年学会大会， 大阪，2023.10.28-29.
48. 赤尾瑠琉，大曽根由実，金子絢美，秦俊貴，成田美紀，渡邉愼二，古谷千寿子，清野諭，藤原佳典，新開省二．オンラインアプリ「バランス日記」を用いたフレイル予防の実証研究：前期介入群における実行可能性評価． 第18回日本応用老年学会大会，大阪，2023.10.28-29.
49. 清野諭，横山友里，小島みさお，倉岡正高，森裕樹，小宮山恵美，山中信，谷出敦子，秦俊貴，植田拓也，小林江里香，藤原佳典．大都市在住高齢者の個人・地域レベルの社会参加と身体不活動：横断的マルチレベル分析． 第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
50. 清野諭，藤原佳典．コロナ禍における高齢者の身体活動・社会参加の動向と対策．シンポジウム48．コロナ禍における高齢者の保健・医療・福祉の動向．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
51. 村山陽，長谷部雅美，山崎幸子，山口淳，小林江里香：単身中高年者の精神的健康に影響するスティグマに対する同質ネットワークの緩衝効果．第82回日本公衆衛生学会総会．つくば，2023. 10.31-11.2.
52. 小島みさお、清野諭、横山友里、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、山中信、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典．大都市高齢者の基本チェックリストによる性・年齢・要支援認定有無別フレイル発現率．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
53. 長谷部雅美，村山陽，山崎幸子，山口淳，小林江里香：中高年者における公的な福祉制度の利用意向を促進する要件に基づく類型化とその特徴．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023. 10.31-11.2.
54. 阿部巧，野藤悠，横山友里，清野諭，藤原佳典，村山洋史．地域在住高齢者における外出時の手段別移動時間とフレイルとの関連性．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
55. 横山友里，清野諭，秦俊貴，小島みさお，倉岡正高，植田拓也，小宮山恵美，森裕樹，山中信，谷出敦子，小林江里香，藤原佳典：大都市在住高齢者における地域レベルの共食割合と個人の食品摂取の多様性との関連． 第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
56. 山城大地，藤田幸司，相良友哉，森裕樹，植田拓也，倉岡正高，清野諭，野藤悠，山下真里，阿部巧，藤原佳典．高齢者の居場所の類型ごとの特徴①－居場所への期待と類型別の居場所の有無の関連－． 第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
57. 山中信，清野諭，横山友里，小島みさお，倉岡正高，森裕樹，小宮山恵美，谷出敦子，秦俊貴，植田拓也，小林江里香，藤原佳典．所得別にみた地域在住高齢者における就労状況と精神的健康度の関連． 第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
58. 森裕樹，植田拓也，清野諭，秦俊貴，藤原佳典．フレイル予防を目的とする専門職向けプログラムの実施と評価．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
59. 秦俊貴，清野諭，横山友里，遠峰結衣，新開省二，北村明彦，藤原佳典．食品摂取の多様性のチェック経験と食品摂取多様性スコアの変化：地域レベルでの検討．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
60. 赤尾璃琉，成田美紀，秦俊貴，清野諭，藤原佳典，新開省二．オンラインアプリ「バランス日記」を用いたフレイル予防の実証試験．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
61. 倉岡正高，清野諭，横山友里，小島みさお，小宮山恵美，森裕樹，山中信，谷出敦子，秦俊貴，植田拓也，藤原佳典． 大都市高齢者の個人・地域レベルの世代間交流と個人の精神的健康度の関連． 第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
62. 相良友哉，藤田幸司，山城大地，森裕樹，植田拓也，倉岡正高，清野諭，野藤悠，山下真里，阿部巧，藤原佳典．高齢者の居場所の類型ごとの特徴②－居場所の類型と精神的健康度との関連－． 第82回日本公衆衛生学会総会， つくば，2023.10.31-11.2.
63. 野藤悠，吉田由佳，森知美，阿部巧，横山友里，清野諭，藤原佳典，村山洋史．介護予防活動の認知に影響する要因の検討：養父コホート研究．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
64. 深谷太郎，小林江里香：新型コロナウイルス感染症流行が高齢者に対する面接調査への協力に与える影響について-全国調査データから-.82回日本公衆衛生学会総会， つくば,2023.10.31-11.2
65. 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，山口淳，小林江里香：世代間交流を導入した多職種連携教育プログラムが大学生の多職種連携スキルに及ぼす影響 日本質的心理学会第20回大会，茨木（立命館大学），2023，11.4-11.5.
66. 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，長谷部雅美，西田希，山田耕平，尾上勉:高齢者におけるジェネラティビティと互恵性規範が世代間援助の授受に及ぼす影響．日本世代間交流学会 第14回大会，京都橘大学（京都），2023,12.2.
67. 山中信，倉岡正高，小島みさお，清野諭，小宮山恵美，植田拓也，藤原佳典．大都市の団地在住高齢男性の社会参加を目指す居場所づくり：伴走支援報告．第14回日本世代間交流学会大会，京都，2023.12.2.
68. 倉岡正高，清野諭，山下真里，野藤悠，村山洋史，藤原佳典．東日本大震災被災地における世代間交流と精神的健康度の関連．第14回日本世代間交流学会大会，京都，2023.12.2.
69. 谷出敦子，清野諭，横山友里，小島みさお，植田拓也，森裕樹，小宮山恵美，山中信，倉岡正高，藤原佳典．大都市高齢者における世代間交流と主観的幸福感の関連：横断的マルチレベル分析． 第14回日本世代間交流学会大会，京都，2023.12.2.
70. 平松正和，尾形真規子，岸昌代，澤田めぐみ，前明日美，堀春奈，田中寛．若年女性の栄養状態評価における体脂肪及び内臓脂肪量の意義の検討．第27回日本病態栄養学会，京都，2021.1.27.
71. 清野諭，横山友里，森裕樹，植田拓也，山下真里，野藤悠，北村明彦，服部真治，山田実，近藤克則，荒井秀典，藤原佳典． 大都市在住高齢者におけるCOVID-19流行下の通いの場への参加が1年後のフレイルに及ぼす影響． 第34回日本疫学会，滋賀，2024.1.31-2.2.
72. 秦俊貴，清野諭，横山友里，成田美紀，新開省二，北村明彦，藤原佳典．都市部在住高齢者における食品摂取の多様性と総死亡との関連．第34回日本疫学会，滋賀，2024.1.31-2.2.
73. 雛倉圭吾，桜井良太，笹井浩行，清野諭，秦俊貴，藤原佳典，粟田主一．インドア派の高齢者の精神的健康状態：オンラインでの他者交流に着目した検討．第34回日本疫学会，滋賀，2024.1.31-2.2.
74. 清野諭，山中信，谷出敦子，秦俊貴，野藤悠，藤原佳典．通いの場のフレイル予防機能強化を図る“ちょい足し”研修プログラム®：実施回数による効果差の検討．第25回日本健康支援学会年次学術大会，愛知，2024.3.2-3.
75. 中田翼，小澤多賀子，清野諭，黒谷佳代，大河原一憲．高齢者の主観的幸福度の向上を目指した健康プロジェクト：調布・デジタル・長寿運動のスタディプロファイル．第25回日本健康支援学会年次学術大会，愛知，2024.3.2-

3.
76. 谷出敦子，清野諭，横山友里，小島みさお，森裕樹，秦俊貴，小宮山恵美，山中信，植田拓也，倉岡正高，藤原佳典．地域在住高齢者における世代内／世代間交流の組合せとフレイルの関連：横断的マルチレベル分析．第25回日本健康支援学会年次学術大会，愛知，2024.3.2-3.（最優秀ポスター賞）

5　著書等

1. 清野諭．第15章フレイル概念とフレイル対策の実際．ナースのためのメディカルフィットネス．ナップ，印刷中.（査読なし）
2. 清野諭．高齢期のフレイル予防．花コミュニケーター養成テキスト．Thera Labo（査読なし）.
3. 清野諭．第16章フレイル・サルコペニア予防特論．介護予防主任運動指導員養成講座テキスト，印刷中.（査読なし）
4. 清野諭．第21章　コクラン：信頼できるエビデンス、十分な情報による意思決定、健康の向上．健康研究におけるシステマティックレビュー（Systematic Reviews in Health Research 翻訳本），印刷中.（査読なし）
5. 清野諭．第22章　ガイドライン作成におけるシステマティックレビューの活用：GRADEアプローチ．健康研究におけるシステマティックレビュー（Systematic Reviews in Health Research 翻訳本），印刷中.（査読なし）
6. 清野諭．第27章　包括的メタアナリシスソフトウェア．健康研究におけるシステマティックレビュー（Systematic Reviews in Health Research翻訳本），印刷中.（査読なし）
7. 北村明彦，清野諭．自治体による予防・啓発活動．第4章フレイル・ロコモの予防と介入．秋下雅弘（編集代表）フレイル・ロコモのグランドデザイン，印刷中.（査読なし）
8. 清野諭．予防のための包括的プログラム．第4章フレイル・ロコモの予防と介入．秋下雅弘（編集代表）フレイル・ロコモのグランドデザイン，印刷中.（査読なし）
9. 清野諭．第5回 運動②：有酸素運動のポイント．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，305，9，2023.（査読なし）
10. 清野諭．第6回 運動③：筋力運動のポイント．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，306，9，2023.（査読なし）
11. 清野諭．第7回 運動④：ストレッチ運動のポイント．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，307，9，2023.（査読なし）
12. 清野諭．第8回 食・栄養①：多様な食品摂取の合言葉「さあにぎやかにいただく」．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，308，9，2023.（査読なし）
13. 清野諭．第9回 食・栄養②：手計りの上手な活用．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，309，9，2023.（査読なし）
14. 清野諭．第10回 口腔ケア①：オーラルフレイルにご用心．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，309，11，2023.（査読なし）
15. 清野諭．第11回 口腔ケア②：口腔ケアのちょい足しプログラム．連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，309，1，2024.（査読なし）
16. 清野諭．第12回 社会参加①：人や社会とのつながりが寿命を延ばす！？ 連載 健康長寿：“ちょい足し”のススメ．情報誌「のうねん」，309，3，2024.（査読なし）
17. 清野諭．今からできる健康づくり：合言葉は“ちょい足し”．東京くらしねっと，印刷中.（査読なし）
18. 村山陽：単身中高年者の社会的孤立予防に向けた世代間オンラインコミュニケーションの検討，『研究調査助成報告書 第38号1.情報通信に関する人文学・社会科学分野における研究』 公益財団法人 電気通信普及財団 （編），https://www.taf.or.jp/grant-a/report/38/01.html，2023年9月 （査読なし）
19. 村山陽・大場宏美：第６章 読み聞かせボランティアの世代間交流のエビデンス―エビデンスで振り返る「りぷりんと」討(p231-p.260)，『地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ 改訂版』 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」（編著），株式会社ライフ出版社 2023年7月 （査読なし）
20. Murayama Y, (2023) The impacts of an intergenerational program in Japan: Evidence from the REPRINTS Project:In An international perspective on intergenerational learning; Elsie, Ong & Sam, Chu., Eds, Springer Nature, Singapore (In press)
21. 小島みさお．特定福祉用具販売種目に関する相談と選定の実態－福祉用具専門相談員のアンケート調査から－令和4年度 （公財）フランスベッドメディカルホームケア研究助成財団 研究報告書．2023.10月（査読なし）
22. 小島みさお．特定福祉用具販売種目の購入後のモニタリングとメンテナンス～福祉用具専門相談員のアンケート調査から～．福祉介護テクノプラス10月号．日本工業出版．2023.10月（査読なし）

6　特許

1. 清野諭：商標「ちょい足しメニュー」「ちょい足しプログラム」2023年10月27日

7　その他

1. 小林江里香：中高年者における孤独感と相談相手の有無－性・婚姻状況別分析．孤独・孤立の実態把握に関する研究会「人とのつながりに関する基礎調査－令和3年、4年－　調査結果に関する有識者による考察」(pp. 21-34)，2023年10月．（内閣官房　第3回孤独・孤立対策に関する有識者会議，配布資料１－２）https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodoku_koritsu_yushikisha/dai3/siryou.html
2. 小島みさお：講演,2023年度シニア社会学会連続講座「長寿時代を生き抜く知恵 part2」第3回「人生100年時代を楽しむための準備：とても大事な排泄の話」、東京家政学院大学三番町キャンパス・ハイブリッド開催、一般社団法人シニア社会学会主催、2023.11.11

――――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等
波線=学振特別研究員

自立促進と精神保健研究チーム

チームリーダー：平野浩彦

研究チームの概要

高齢者が尊厳をもって､すこやかに､安全に暮らすことができる地域社会を創造するためには、高齢者に現れやすいさまざまな老年症候群や老年病を予防するとともに、たとえ疾病に罹患しても、必要な医療、介護、住まい、日常生活支援等のサービスを統合的に提供することができる地域包括ケアシステムの構築が不可欠である。当研究チームでは、サルコペニア、膝痛、虚弱、転倒、尿失禁、低栄養、口腔機能低下、認知機能低下、生活機能低下、精神的健康度低下などの老年症候群の予防をめざした介入プログラムの開発を進めた。また、たとえ認知症になっても、生活の質を保持し、安全に暮らしていくことができるよう、国や地方公共団体、関係する組織・団体と連携して、地域の特性に応じた認知症総合支援体制の構築を実現するための政策研究も推進した。さらに、うつ病などの高齢者精神疾患の早期発見・早期対応や自殺予防を視野に入れた、高齢者のための地域精神保健プログラムの開発等も推進した。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

フレイル・骨格筋の健康

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)板橋区在住高齢者の大規模研究フィールドの維持・発展	✓ お達者研究の追跡調査の実施 ✓ 板橋LSAの2023年調査の実施 ✓ 参加率・追跡率を高める取り組みの予備検討 ✓ 調査結果の迅速フィードバックの取り組みの予備検討 ✓ 所内外の他研究へのデータ拠出	✓ お達者研究の追跡調査の実施 ✓ 板橋LSA 2021の3年後追跡調査の実施 ✓ 参加率・追跡率を高める取り組みの検証 ✓ 調査結果の迅速フィードバックの取り組みの検証 ✓ 所内外の他研究へのデータ拠出	✓ お達者研究の追跡調査の実施 ✓ 板橋LSA 2022の3年後追跡調査の実施 ✓ 参加率・追跡率を高める取り組みの実装 ✓ 迅速フィードバックシステムの実装 ✓ 所内外の他研究へのデータ拠出	✓ お達者研究の追跡調査の実施 ✓ 板橋LSA 2023の3年後追跡調査の実施 ✓ 参加率・追跡率を高める取り組みの実装 ✓ 迅速フィードバックシステムの実装 ✓ 所内外の他研究へのデータ拠出	✓ お達者研究の追跡調査の実施 ✓ 板橋LSA 2021の6年後追跡調査の実施 ✓ 参加率・追跡率を高める取り組みの実装 ✓ 迅速フィードバックシステムの実装 ✓ 所内外の他研究へのデータ拠出
(2)フレイルに関する研究	✓ 評価法研究の予備検討 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ オンライン通いの場介入の実施	✓ 評価法研究の検証 ✓ 要因解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究
(3)サルコペニアに関する研究	✓ 評価法研究の予備検討 ✓ 要因解明のための観察研究	✓ 評価法研究の検証 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 筋質改善の介入研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究

(4)軽度認知機能障害に関する研究	✓ 要因解明のための観察研究	✓ 要因解明のための観察研究	✓ 要因解明のための観察研究	✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 筋脳連関の解明のための介入研究	✓ 要因解明のための観察研究
(5)慢性疼痛に関する研究	✓ 評価法研究の予備検討 ✓ 要因解明のための観察研究	✓ 評価法研究の検証 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 慢性疼痛ハイリスク者への介入	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究
(6)関節症に関する研究	✓ 評価法研究の予備検討 ✓ 要因解明のための観察研究	✓ 評価法研究の検証 ✓ 要因解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究	✓ 新たな評価法の実装 ✓ 要因解明のための観察研究 ✓ 健康影響解明のための観察研究
(7)働く高齢者に関する研究	✓ 労働安全指標の開発 ✓ 疼痛・身体的能力と労働安全の検証	✓ 労働安全指標の検証 ✓ 疼痛・身体的能力と労働安全の検証	✓ 多要素介入研究		

オーラルフレイル・栄養

研究目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)高齢者の口腔機能と栄養の改善に関する研究 （研究全体）	地域在住高齢者、要介護高齢者の口腔、栄養調査（第三期から継続）	地域在住高齢者、要介護高齢者の口腔、栄養調査	地域在住高齢者、要介護高齢者の口腔、栄養調査	地域在住高齢者、要介護高齢者の口腔、栄養調査	地域在住高齢者、要介護高齢者の口腔、栄養調査 口腔機能、栄養評価の確立
①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 -［1］口腔機能	咬合力（口腔機能モニター Oramo-bf）データ収集	咬合力（口腔機能モニター Oramo-bf）基準値の報告	咬合力（口腔機能モニター Oramo-bf）妥当性の検証	口腔機能低下症の治療における咬合力（口腔機能モニター Oramo-bf）の考え方に関する資料の作成	口腔機能低下症の疾患構造に関する資料の作成
①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 -［2］歯周病	高齢者歯周病データベースの構築	高齢者歯周病データベースの解析	口腔領域リスク評価法の開発	口腔領域リスク評価法の検証	口腔領域リスク評価法のブラッシュアップ
①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 -［3］小型IoTデバイス×AIの活用 -1	食事画像写真の収集 食品摂取多様性スコア（DVS）画像解析モデルの開発	DVS画像解析モデルのアプリへの実装	DVS画像解析システムの検証	DVS画像解析システムを用いた介入研究の実施	DVS画像解析システムを用いた介入研究の検証

①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 -［3］小型IoTデバイス×AIの活用 -2	咀嚼行動データを客観的に記録できるウェアラブルデバイス「バイトスキャン」のデータ収集	バイトスキャンデータ解析モデルの開発	DVS画像解析システムとの連携システム開発	DVS画像解析システム（バイトスキャン連携）を用いた介入研究の実施	DVS画像解析システム（バイトスキャン連携を用いた介入研究の検証
①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 -［4］認知症	認知症の人の実態調査（口腔管理ニーズおよび必要な口腔管理サービスの充足状況等）	課題把握を目的とした郵送調査	「認知症の人に対する口腔管理マニュアル」の作成	「認知症の人に対する口腔管理マニュアル」の検証	「認知症の人に対する口腔管理マニュアル」のブラッシュアップ
②オーラルフレイルの普及啓発	オーラルフレイル記述疫学的データの収集	オーラルフレイル該当率等の報告 オーラルフレイル改善プログラムの開発	地域における介入研究	介入効果の検証	オーラルフレイル改善プログラムのブラッシュアップ マニュアル作成
③高齢者の食環境整備（通いの場から要介護高齢者まで）	データの収集	介護現場で利用者の低栄養リスクを早期に把握し栄養専門職へつなぐ栄養評価指標の作成	栄養評価指標を組み込んだ介護保険施設等における栄養関連連携モデル作成	栄養関連連携モデルの検証	介護保険施設等における栄養関連連携モデル運営マニュアル作成（ICTの活用を含む）
(2) 口腔と栄養関連施策に関する検討	歯科診療所、地域在住高齢者、認知症の人のデータ収集	歯科診療所、地域在住高齢者、認知症の人のデータ収集 ➤横断データの解析	歯科診療所、地域在住高齢者、認知症の人のデータ収集 ➤縦断データの解析 2026年度診療報酬改定へのエビデンス提供	歯科診療所、地域在住高齢者、認知症の人のデータ収集 ➤縦断データの解析	歯科診療所、地域在住高齢者、認知症の人のデータ収集 ➤縦断データの解析
	介護施設のデータ収集（第三期から継続） ➤横断・縦断データの解析 2024年度介護報酬改定へのエビデンス提供	介護施設のデータ収集	介護施設のデータ収集➤横断データの解析 2024年度介護報酬改定の効果検証（口腔、栄養）	介護施設のデータ収集➤縦断データの解析 2027年度介護報酬改定へのエビデンス提供	介護施設のデータ収集

認知症・精神保健

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)認知症共生社会実現に資する総合的研究	データ収集	データ収集・データ分析	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチへの応用	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチへの応用・一般社会実装の提案	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチへの応用・一般社会実装の提案・一般社会実装の実施
(2)あたらしい認知症ケアの開発研究	データ収集	データ収集・データ分析	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチ	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチ	データ収集・データ分析・フィールドでのアクションリサーチ

			への応用	への応用・一般社会実装の提案	への応用・一般社会実装の提案・一般社会実装の実施
(3)人生100年時代の老年社会医学研究の方法の確立	→ 方法論のワーキンググループ結成	方法論の論文化（和文）	方法論の他地域での応用	方法論の複数地域の比較	→ 方法論の再度の論文化（英文）

フレイルと筋骨格系の健康

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
笹井　浩行	研究副部長	研究全体の総括・データ収集・分析 研究項目(1)の主担当
小島　成実	研究員	研究項目(1)の副担当 研究項目(2)の主担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
志田　隆史	研究員 （臨床検査技師）	研究項目(1・2)の副担当 研究項目(3)の主担当 評価法研究（超音波、血液、尿）の担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
大田　崇央	研究員	研究項目(1・2)の副担当 研究項目(4)の主担当 評価法研究（筋機能）の担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
大村　千晶	研究員 （看護師）	研究項目(4・6)の副担当 研究項目(5)の主担当 研究全体の安全管理担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
志村　広子	研究員	研究項目(2)の副担当 評価法研究（主に身体活動評価）の担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
出口　直樹	研究員 （理学療法士）	研究項目(5・6)の主担当 研究項目(7)の副担当 評価法研究（主に睡眠評価・疼痛評価）の担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
畑中　翔	研究員	研究項目(3)の副担当者 研究項目(4・7)の主担当者 評価法研究（身体組成、筋機能）の担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
大丸　香	非常勤技術員 （薬剤師）	研究項目(2)の副担当者 評価法研究（身体活動・睡眠）の補助担当 研究全体のデータ収集・分析・発表
丸尾　和司	非常勤研究員 （生物統計家）	研究デザイン・統計分析に関する指導・助言
植田　真白	非常勤技術員 （臨床検査技師）	超音波検査、血液分注等の臨床検査実務
名越　敬真	非常勤技術員 （デザイナー）	発表資料、高齢者への案内資料・文書のデザイン

1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 板橋区在住高齢者の大規模研究フィールドの維持・発展

当テーマでは、お達者研究と板橋健康長寿縦断研究（板橋LSA）という二つの地域高齢者コホートを運営し、センター周辺の高齢者を対象に各種検査を行っている。令和5年度のお達者研究では、

71歳以上の高齢者777人に対し、運動機能や認知機能などの実測と質問紙調査を実施した。板橋LSAでは令和4年度（2023年2月）に70歳以上85歳未満の高齢者655人を対象に同様の検査をおこなった。令和5年度（2024年2月）にも同様の調査を実施する予定であり、令和3～5年度の3年間で郵送調査約8,000名、会場調査2,500名超の大規模コホートが完成することとなる。当テーマが管理する地域高齢者コホートで得られたデータを用いて、令和5年に16編（うち、テーマ研究員（非常勤含む）が筆頭の論文は10編）の学術論文を発表した。

本年度は、コホートの追跡率を高めるための試みを実施した。行動経済学のナッジ理論に基づく案内メッセージの効果が検証された。お達者研究の参加者をランダムに3群に割り付けた。1968名の参加適格者のうち865名が健診に申し込み、最終的に777名が参加した。各群の参加割合は対照群が38.7%、ポジティブメッセージ群が38.6%、ネガティブメッセージ群が41.1%であった。統計的には有意ではないものの、損失回避を示唆するネガティブメッセージによって追跡率の向上が可能であることが示唆された。

上述の地域高齢者コホートは、所内外の大規模な研究プロジェクトに貢献している。スマートウォッチを使った高齢者の健康づくり研究や、軽度認知障害の高齢者を対象にした認知症移行要因の研究のリクルート対象となっている。また、認知症、要介護、死亡要因の分析や、国立長寿医療研究センターの長寿コホート研究へのデータ拠出も行っている。さらに、文部科学省のヒューマングライコームプロジェクトにも参画し、血漿試料および関連データを提供する予定である。

(2) フレイルに関する研究

令和5年度には、フレイルに関する多角的な研究を行った。これにはフレイルの評価方法の検討、フレイルの原因と健康への影響の調査、フレイルの予防と改善に向けた介入研究が含まれる。フレイル評価法に関しては、国際的に使用されているPittsburgh Fatigability Scale（PFS）とEdmonton Frailty Scale（EFS）の日本語版を作成し、その妥当性を検証した。また、日本で用いられる「後期高齢者の質問票」のフレイル判定精度に関する分析も行った。フレイルの要因や健康への影響に関する観察研究では、大豆食品の摂取、エクオールの代謝、ビタミンK充足度、生体電気インピーダンス法から得られる位相角（PhA）とフレイルとの関連を調査した。さらに、多剤併用とフレイルとの関連性についての横断的分析も行った。フレイル予防・改善に関する介入研究では、ラジオ体操のフレイル改善効果に関するランダム化比較試験のデータをまとめ、国際誌に投稿した。また、オンライン通いの場アプリを利用したフレイル改善介入の実行可能性に関する単群試験を実施し、その成果を次年度の学会で発表する予定である。

(3) サルコペニアに関する研究

令和5年度にサルコペニアの評価法と健康影響に関する研究を行った。生体電気インピーダンス（BI）法のみを用いた高い診断精度のサルコペニア判定法を開発した。Kinectを活用したサルコペニア・フレイル判定アルゴリズムの作成し、スクリーニングに有効である可能性を示した。血中cell-free DNAとメタボロミクスを用いたバイオマーカーの探索を行った。その結果、cfDNAとメタボロミクス解析はサルコペニアの新規バイオマーカー探索としての一定の利用価値を示した。また、サルコペニア診断基準5種と転倒発生の研究では、FNIHによる基準が転倒予測に有用であることが示された。運動介入の筋質改善効果については、レジスタンス運動の神経学的筋質への影響と筋間脂肪への介入効果をメタ解析し、国際学会で発表した。

(4) 軽度認知機能障害に関する研究

令和5年度は、軽度認知機能障害に関する複数の観察研究を行った。これにはサルコペニアの重症度と認知機能低下の関連、サルコペニアと関連する脳領域の同定、ダイナペニアと認知機能低下、腸内細菌叢とアミロイドβ蓄積の関係、チーズ摂取と認知機能の関連などが含まれる。サルコペニアの重症度と認知機能低下の研究では、6,426人を対象に分析し、サルコペニアと重症サルコペニアが認知機能低下のリスクと関連していることが明らかになった。MRIを用いた研究では、握力が脳容積と正の相関を示す一方で、歩行速度と骨格筋量指数は特定の部位の脳容積と関連しなかった。ダイナペニアと認知機能の関連研究では、3,338人のデータを解析し、筋量が保たれていても筋力低下が認知機能の低下と関連していることを示した。腸内細菌叢とアミロイドβの蓄積の関係を検証した研究では、「ファーミクテス門」が少ない人はアミロイドβ陽性のリスクが高いことが判明した。チーズ摂取と認知機能の関連研究では、65歳以上の1,503人を対象にロジスティック回帰分析を行い、チーズ摂取が認知機能低下のリスクを減じることが明らかになった。

(5) 慢性疼痛に関する研究

板橋LSAのデータを用い、疼痛と中枢性感作を有する地域在住高齢者238名の臨床像を分析した。疼痛程度と中枢性感作の重症度により4群に分類し、運動機能、睡眠の質、精神的健康、生活の質、血液バイオマーカーの特徴を調査した。中等度以上の疼痛と中枢性感作を併発する高齢者は他群に比べ、機能低下や生活の質の低下が顕著だった。この結果は、早期治療と介入の必要性を示している。

(6) 関節症に関する研究

板橋LSAのデータを使用し、膝OAを有する高齢者243名を対象に、24時間行動ガイドラインの達成状況と精神的健康度、膝痛の関連を横断的に調査した。週150分の身体活動、8時間未満の座位、7～9時間の睡眠がガイドラインで、3項目の達成者は21.0%だった。3項目を達成した群は、精神的健康度が良好で、達成項目が少ない群ほど健康度が低かった。

(7) 働く高齢者に関する研究

高齢労働者の転倒リスクを評価するためのツール、Occupational Fall Risk Assessment Tool（OFRAT）を開発し、シルバー人材センターの会員1113名を対象にその予測妥当性を検証した。しかし、約40%のセンターが実装困難と回答したため、OFRATの簡便版の開発を進めた。この研究は厚生労働科学研究費補助金を資金源としている。令和5年度にお達者研究の参加者から148名の働く高齢者をリクルートし、今年度中にさらに200名程度をリクルートする予定である。OFRATは産業保健現場での活用が期待される。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 板橋区在住高齢者の大規模研究フィールドの維持・発展

お達者研究:令和5年10月14日～22日および11月3日～5日の計12日間にお達者研究の2023年度追跡調査を実施した。この健診では、71歳以上の地域在住高齢者777人を対象に、運動機能、認知機能、聴力、血液、超音波検査（骨格筋）、栄養等の実測に加え、各種質問紙調査により幅広いデータを収集した。追跡調査において、初回調査からすべて参加、または、およそ6割参加の方々をそれぞれランダムに集め、調査に参加する理由などを尋ねるフォーカスグループインタビュー(FGI)を行った。両グループのFGI結果に基づき、地域在住高齢者が関心を寄せるキーワード（「認知機能を知ることができる」など）を抽出した。健診募集案内作成にあたり、FGIから得たキーワードを用いたメッセージをポジティブに伝える表現とネガティブに伝える表現の2通りを作成した。案内発送対象者を、ベースラインの認知機能得点と過去の健診参加率を割付因子とし、①メッセージ無し、②ポジティブメッセージ、③ネガティブメッセージの3群にランダムに割り付けた。

板橋LSA:令和5年2月1日～14日の14日間に板橋LSAの2022年度ベースライン調査を実施した。この健診では70歳以上85歳未満の地域在住高齢者655人を対象に、運動機能、認知機能、口腔機能、聴力、血液検査、超音波検査（肝臓および骨格筋）、栄養等の実測に加え、問診や各種質問紙調査を実施し、1000項目以上に及ぶ幅広いデータを収集した。

令和6年2月1日～14日にも新たな対象者を募集して、板橋LSAの郵送調査（送付数5,000件、有効回答数2,000件程度）および会場調査（900名程度）を実施する準備を進めている。令和5年度をもって板橋LSAの3ヵ年に渡るベースライン調査が終了し、合計で郵送調査約8,000名、会場調査2,500名超の大規模コホートが完成することとなる。令和6年度から3年後の追跡調査を開始する。
案内発送対象者がすべて当研究所コホートに未参加であることを踏まえ、まず封筒の開封を促すようなデザインの改変を一律に行った。板橋区からの提供データに含まれる情報（性別、年齢、住所）をもとにソーシャルマーケティングの手法に基づいたセグメンテーションを実施した。具体的には性別（男女）、年齢（75歳以上、未満）、住所（会場までの距離が1000m以上、未満）のいずれも割付因子として用いた。お達者健診と同様に募集案内にナッジを取り入れたメッセージを数案考案し、高島平のココからステーションに通う高齢者（募集対象ではない地域在住高齢者）の投票により、最終的なメッセージを決定した。メッセージにはソーシャルマーケティング戦略手法である４P（Product, Price, Place, Promotion）が含まれるよう構成した。対象者は先述の割付因子に基づき各セグメンテーションにおいて2群にランダム割付され、①従来案内、②メッセージありのいずれかが募集案内に含まれた。現在は、募集案内が発送され参加の受け付け中である。なお、これらの取り組みについては理事長研究奨励費による支援を受けて実施している。

SW研究:令和4年～6年度の3ヵ年にかけて東京都の財政的支援を受け「高齢者の健康づくりに資するスマートウォッチ等デジタル機器活用事業」（以降、SW研究）が実施されている。SW研究は地域

高齢者および当センター病院を受診する患者を対象に、スマートウォッチおよびアンクルバンドの装着を依頼し、日々の活動や睡眠等のデータを継続的に収集し、フレイル等の関連を明らかにする大規模研究である。お達者研究2017/2019年コホートおよび板橋LSAの2022年度調査から対象者として参加している。これは研究所でリクルートした対象者の7割超に相当する。また、SW研究のサブ研究として同研究で使用するスマートウォッチで計測する活動量および睡眠の妥当性検証を当テーマが担っている。

DEMCIRC研究:認知症未来社会創造センター（IRIDE）が主導する「MCI-Reversionの影響因子、バイオマーカー、画像の層別化縦断研究」(DEMCIRC研究)（研究代表者：鳥羽研二）にも、当テーマの地域コホートがリクルート対象となっている。DEMCIRC研究は軽度認知障害の高齢者を対象に、各種心理・精神検査、血液バイオマーカー検査、画像検査（MRIとPET）を毎年実施し、認知症や健常への移行要因を探る研究である。令和5年度にそのベースライン調査が完了したが、最終的に組み入れた399名のうち371名（93%）が当テーマ管理のコホートからリクルートされている。加えて、当テーマ所属の常勤研究員2名、非常勤技術員3名がDEMCIRC研究の実務運営において中心的な役割を担っている。

統合コホート研究:IRIDEが実施する「認知症、要介護、死亡の要因解明と発症予測に関する地域コホート統合研究」（統合コホート研究）に、当テーマの地域コホートのデータを拠出している。統合コホート研究の目的は、認知症の早期発見のために、各地域の研究データを統合し、認知症の危険因子のうち各要因の認知症発症に対する寄与度を明らかにし、その結果を視覚的にわかりやすく利用できるように、リスクチャートを作成することである。同研究では所内の5つのコホートから合計7,833人のデータが統合されているが、うち2121人（27%）が当テーマ管理のコホートから提供されている。当テーマは統合コホート研究のデータ解析・成果発表にも貢献しており、令和5年度はサルコペニア重症度やダイナペニア（骨格筋量が保たれつつ筋力が低下している状態）の有無と認知機能低下の関連を分析し、それぞれ国際誌に発表した（Ohta et al., Front Public Health, 2023; Hatanaka et al., Geriatr Gerontol Int, in press)。その他にも、複数の計画を提出し、現在解析中であり、令和6年度に成果を発表予定である。

ILSA-J研究:所外のプロジェクトに関しては、国立長寿医療研究センターが長寿医療研究開発費を財源に主導する「長寿コホートの総合的研究」(ILSA-J研究）に、お達者研究2017コホートのデータが拠出されている。ILSA-J研究は、地域在住高齢者を対象として老化・老年病を研究するコホート研究（国内16研究）のデータを統合し、日本人高齢者の健康水準とその推移を明らかにすることを目的とした多施設共同研究である。令和5年度は新たなデータ拠出はなかったが、ILSA-J研究に関連した学会発表が3件なされた。

ヒューマングライコームプロジェクト:文部科学省「大規模学術フロンティア促進事業」として令和5年度から名古屋大学が主導する「ヒューマングライコームプロジェクト」に当センターが参画している。同プロジェクトはヒトに存在する糖鎖の全構造情報の取得（ヒト糖鎖精密基盤地図）や糖鎖と各種疾病等との関係性の解析を目的としている。その一環でお達者研究および板橋LSAから、研究期間中に合計3,000件の血漿試料および関連データが拠出される見通しである。

(2) フレイルに関する研究

(A)フレイルの評価法に関する研究

海外で評価が定まっており、かつ幅広く使用されているフレイル関連尺度であるPittsburgh Fatigability Scale（PFS）およびEdmonton Frailty Scale（EFS）の日本語版の作成とその妥当性検証に取り組んだ。また、我が国のフレイル健診で活用されている「後期高齢者の質問票」によるフレイル判定精度について分析した。

Pittsburgh Fatigability Scale日本語版の作成と妥当性検証

フレイル表現系のひとつである易疲労性（疲れやすさ）に関する尺度として世界中で使われているPittsburgh Fatigability Scale（PFS）の日本語版の作成と妥当性検証をおこなった。具体的には、原著者のDr. Nancy Glynnの了承を得たうえで、University of Pittsburghと日本語訳作成にかかる契約を締結し、当テーマの研究員3名で日本語版に翻訳した。また、お達者研究2022年度調査においてPFSと運動機能のデータを収集した。妥当性検証の結果、PFS得点と通常歩行速度に中程度の相関がみられるとともに、ROC曲線の曲線下面積は0.75 （95%CI 0.67, 0.82）であった。2024年度に学会および誌上での発表を進める。

Edmonton Frailty Scale日本語版の作成と妥当性検証

フレイルの尺度として世界中で使われているEdmonton Frailty Scale（EFS）の日本語版の作成およびデータ収集を終え、データ分析を進めているところである。具体的には、University of Albertaと日本語訳作成にかかる契約を締結し、当テーマの研究員3名で作成した日本語版の利用について原著者のDr. Darryl B. Rolfsonの了承を得た後、2023年度のお達者健診に参加した777名を対象としてEFSのデータを収集した。データ整理が済み次第、併存的妥当性の検証（J-CHS等、他のフレイル指標との比較）を進め、2024年春以降に論文投稿予定である。

後期高齢者質問票

板橋LSAに参加した645名の後期高齢者を対象に、フレイル判定（J-CHS基準）の判別能を15項目からなる後期高齢者の質問票（QMCOO）と25項目からなる基本チェックリスト（KCL）で比較した。その結果、後期高齢者の質問票のフレイル判定におけるROC分析の曲線下面積は0.76(95%CI:0.70, 0.82）であり、KCLのそれは0.77（95%CI：0.69, 0.84）であった。非劣性検定の結果、QMCOOはKCLに劣らないことが示された。QMCOOは質問項目が少なく、短時間で適用可能であるため、実用性が高いと考えられる。本研究の成果を国際誌に発表した（Deguchi et al., Geriatr Gerontol Int, in press)。

(B)フレイルの要因や健康影響に関する観察研究

令和5年度は種々の栄養関連指標とフレイルやフレイル表現型の一要素である身体機能やADL障害との関連を分析した。特に、大豆食品の摂取、大豆イソフラボンが腸内細菌により代謝されたエクオール、ビタミンK充足度、細胞や細胞膜の健康状態を表し、生体電気インピーダンス法から得られる位相角（phase angle: PhA）に着目した。新たに科研費を獲得し、多剤併用とフレイルとの関連について横断的に分析した。

大豆食品摂取とADL障害

大豆製品の摂取頻度が将来の日常生活動作（BADL/IADL）に関連するかどうかを検証した。お達者健診2008年コホートの対象者である75歳以上の女性1,289名を対象に4年間追跡し、ADL/IADL障害の新規発生を転帰として、ベースラインにおける大豆製品摂取頻度（4段階）との関連を二項ロジスティック回帰分析を用いて検証した。その結果、大豆製品摂取頻度のカテゴリが一つ下がることに伴うオッズ比は1.51（95%CI;1.19, 1.94）であった。IADLについても同様の結果を得た（オッズ比1.37、95%CI 1.09, 1.72)。本研究の成果を国際誌に発表した（Kojima et al., Womens Health Rep, 2023)。また、同論文は日本スポーツ栄養協会の公式情報サイト（https://sndj-web.jp/news/002322.php）で紹介された。

エクオールとフレイル

大豆食品摂取の健康効果をより深めるべく、大豆イソフラボンの一種であるダイゼインの代謝産物であるエクオールとフレイルの関連を検証した。エクオールは、エストロゲンの機能を適切に補完することで更年期以降の様々な疾患の予防に関わるとされ、その産生能の有無が高齢期の健康問題全般に関わる可能性がある。2023年2月の板橋LSAの会場調査参加者（653名、男性58%、年齢70～85歳）を対象に、エクオール産生能とフレイル（J-CHS基準）の関連を、性・年齢調整を伴う二項ロジスティック回帰にて分析した。その結果、エクオール非産生者（279名）に比べ、産生者（374名）では、「フレイル+プレフレイル」の該当オッズ比（95%CI）が0.69（0.50, 0.96）であった。エクオール産生能はフレイルの発生に予防的に作用していることが推察された。本研究の成果は、2024年度に学会および国際誌にて発表予定である。

ビタミンK充足度と新規フレイル発生

ビタミンKは主に血液凝固に関連する脂溶性ビタミンであるが、近年、フレイルや認知機能低下などの老年症候群との関連が指摘されている。お達者研究2020年調査に参加し、フレイルでなかった518名を1年間追跡した。追跡時に66人（12.7%）がフレイルを発生した。ビタミンK充足度の指標である低カルボキシル化オステオカルシンとオステオカルシンの（ucOC/OC）比の最低四分位群（Q1）を基準とし、最高四分位群（Q4）におけるフレイル発生のオッズ比は2.53（95%CI 1.07, 4.92）と有意に高く、ビタミンK充足度が低いとフレイル発生のリスクが高いことが示された。本研究の成果を国際誌に発表した（Azuma et al., J Bone Miner Metab, 2023)。本研究はA系システム加齢医学研究テーマと東京大学老年病科との共同研究の成果である。

PhAと身体機能

生体電気インピーダンス（BI）法で測定した位相角と骨格筋量指数の下肢機能への影響を、板橋LSAの2021年度と2022年度参加者1,464名を対象に調査した。この研究では、short physical performance batteryスコアが10点未満の低身体機能をアウトカムとし、ロジスティック回帰分析を性別に行った。また、ROC曲線を用いて低身体機能の判別能を比較した。その結果、位相角の最低四分位群と最高四分位群のオッズ比（95%CI）は、左脚で男性が0.09（0.03, 0.32)、女性で0.12（0.04, 0.33）で有意だった。一方、骨格筋量指数では有意な結果は得られず、男性が0.51（0.19, 1.34)、女性が0.56（0.21, 1.47）だった。下肢と全身の位相角は、骨格筋量指数よりも低身体機能の判別に優れていた（P<0.001)。この研究は、BI法による位相角測定がサルコペニアの診断に役立つ可能性を示している。この成果を国際誌で発表した(Hatanaka et al., Nutrition, in press)。

ポリファーマシーとフレイル

高齢者では多病によるポリファーマシーが懸念されているが、ポリファーマシーとフレイルの重症度や表現型との関係はエビデンスが十分ではない。そこで、板橋LSAの2021年度参加者1021名を対象に、ポリファーマシー（5剤以上）とフレイルの重症度および表現型との横断的関連を検証した。ポリファーマシー群でのフレイルは10.1%、非ポリファーマシー群でのフレイル5.0%より有意に高かった。ポリファーマシーとフレイル重症度のオッズ比（95%CI）は1.89（1.40, 2.57)、フレイル表現型とのオッズ比は体重減少で1.81（1.00, 3.27)、低筋力で1.50（1.08, 2.09)、低歩行速度で2.25（1.29, 3.94）で有意だった。ポリファーマシー高齢者はフレイルのリスク、特に体重減少、低筋力、低歩行速度のリスクが高いと考えられた。この成果を国際誌で発表した（Daimaru et al., Geriatr Gerontol Int, in press)。今後、慎重投与薬等、薬理作用を考慮したポリファーマシーとフレイルの縦断研究を行い、両者の因果関係を追及する予定である。

(C)フレイル予防・改善に関する介入研究

昨年度にデータ収集を終えたラジオ体操のフレイル改善効果に関するランダム化比較試験のデータを今年度に取りまとめ、国際誌に投稿した。また、オンライン通いの場アプリを用いたフレイル改善介入の実行可能性を検証する単群試験を実施した。

ラジオ体操介入の有効性

フレイル高齢者226名を対象に、ラジオ体操の有効性をランダム化比較試験によって検証した。その結果、俊敏性や動的バランス、持久力、運動セルフエフィカシー（自宅で運動を実践する自信度）に対する介入群の優位性は対照群と比較して高かったが、主要評価項目である健康関連QoLに変化の差はみられなかった。その成果をIAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023で発表し、Outstanding Poster Presentation Awardを受賞した。本研究の成果を論文にまとめ、Journal of Epidemiologyに投稿し、現在審査中である。

オンライン通いの場アプリを活用したフレイル予防介入の実行可能性

通いの場は介護予防に資する目的で全国に設置され運用されているものの、コロナ禍において対面交流を避ける高齢者が増えフレイルがさらに増加した。オンライン通いの場は通いの場の機能をアプリ上に再現したもので2020年に上市されているが、その運用、実用可能性については検証されていない。お達者研究2017/2019コホートの2021年度調査に参加したプレ/フレイルかつスマートフォンを持つ高齢者34名に対し、アプリ使用の講習会を週1度の間隔で実施した。6週間の介入の後、6週間の自己管理期間を設けた。介入期間中4名が脱落した。介入6セッションの参加率は100%であった。アプリの使用状況（ログイン日数/介入期間）はフレイルで80.6%、プレフレイルで85.2%であった。アプリの積極的使用状況（アプリ内加算ポイント7pt以上の日数/介入期間）では、フレイルで39.9%、プレフレイルで50.9%であった。これらの結果は日本健康支援学会年次学術大会（2024年3月、名古屋市）にて発表予定である。この結果を踏まえ、2024年度にアプリ介入によってフレイル表現型得点が変化するかどうかを検証する予備的ランダム化比較試験を実施予定である。

(3) サルコペニアに関する研究

(A)サルコペニアの評価法に関する研究

令和5年度は、BI法から得られる電気生理パラメータのみを用いて、サルコペニアの判定を試みる研究をおこなった。また、過年度に取得したデータを用いて、立ち上がり動作時の運動学的パラメータをKinectより取得し、そこからサルコペニアの有無を判定するアルゴリズムを開発し、

その成果を国際誌に発表した。また、サルコペニアの診断バイオマーカーの候補として、血中cell-free DNAの分析やメタボロミクス解析をおこなった。

(B)サルコペニアの健康影響に関する研究

サルコペニアの健康影響に関しては、サルコペニアの国内外の診断基準5種と、サルコペニアの負の転帰の一つである、転倒および外傷を伴う転倒との関連を前向きに検証した研究を国際誌に報告した。

(C)運動介入の筋質改善効果に関する統合研究

種々の運動介入が筋質改善に及ぼす影響を検討したランダム化比較試験のシステマティックレビューおよびメタ解析を実施した。令和5年度はそのうちレジスタンス運動が神経学的側面での筋質に対する影響、筋間脂肪に及ぼす介入効果について国際学会で発表した。

(4) 軽度認知機能障害に関する研究

サルコペニア重症度と認知機能低下

サルコペニアの重症度と認知機能との関連が、性・年齢によって異なるかどうかを検討した。IRIDEコホート研究として統合された5つの地域コホートからなる高齢者8,180人の参加者のうち、6,426人（65～74歳の男性1,157人、75歳以上の男性1,063人、65～74歳の女性2,281人、75歳以上の女性1,925人）を解析対象とした。サルコペニアおよび重症サルコペニアの有病割合は、男性でそれぞれ13.9%、4.1%、女性でそれぞれ13.3%、3.7%だった。非サルコペニアを基準とした場合、認知機能低下の多変量調整オッズ比（95%CI）は、サルコペニアで2.20（1.54, 3.15)、重症サルコペニアで3.56（2.20, 5.71）だった。性別と年齢で層別化した解析でも同様の傾向が認められ、両カテゴリ内で線形関係（傾向のP<0.05）がみられた。さらに、性とサルコペニア重症度との間には有意な交互作用があり（P<0.05)、男性に比べて女性でサルコペニアの重症度と認知機能の低下との線形関係がより強いことが示された（第11回日本認知症予防学会（浦上賞受賞)、Ohta et al. *Front Public Health.* 2023)。

サルコペニアと関連する脳領域の同定

高度な統計的画像処理技術を用いて、サルコペニア診断のための様々な指標と部位特異的脳容積との関連を検討した。包括的な老年医学的検査を受けた150人の地域在住高齢者のうち、MRI測定を完了した121人（平均年齢79.0±4.0歳、男性28.9%）を解析対象とした。性、年齢を調整した結果、握力は両側内側側頭葉、島皮質、左前頭葉、左側頭葉の体積と正の相関があった（すべてP<0.001)。対照的に、歩行速度と骨格筋量指数は特定の部位の脳容積と明確な関連を示さなかった（Ohta et al. The International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023)。現在、論文執筆中である。

ダイナペニアと認知機能低下

ダイナペニア（筋肉量は保たれているが筋力が低下している状態）が認知機能と関連するか否かを地域在住の日本人高齢者で検討した。IRIDE統合コホートのデータを利用して、筋肉量が保たれている3,338人（女性2,162人）のデータを解析した。ダイナペニアを曝露とし、MMSEスコアで定義した認知機能低下段階をアウトカムとした順序ロジスティック回帰分析の結果、多変量オッズ比（95%CI）は、男性で1.51（1.02, 2.24)、女性で2.08（1.51, 2.86）であり、筋肉量が保たれている人でも、筋力低下は認知機能の低下と関連していることがわかった。今年度はこの成果を国際誌で発表した（Hatanaka et al., Geriatr Gerontol Int, in press)。

腸内細菌叢とPETによるAβの蓄積

近年、腸内細菌叢とアルツハイマー病との関連が注目されている。本研究では、各種腸内細菌の割合と脳内アミロイドβ（Aβ）との関連を検証した。大塚製薬株式会社との共同研究である「認知症早期発見のための脳画像精密検査」の参加者（136名、男性29%、年齢68～86歳）を対象に、腸内細菌叢検査と陽電子放出断層撮影（PET）による脳内アミロイド測定をほぼ同日に行い、門レベルの各種腸内細菌割合の多寡とアミロイドPET陽性/陰性との関連を検討した。その結果、6つの主要な腸内細菌門のうち、「ファーミクテス門」が少ない人は、Aβ陽性のオッズ比が2.13（95%CI 1.02, 4.46）と有意に高いことが示された。ファーミクテス門の減少がAβ増加を促進し、アルツハイマー病の一因となっている可能性が示唆された。この結果をThe 12th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023で発表し、Outstanding Poster Presentation Awardを受賞した。同内容にて、レター論文としての発表を準備中である。

チーズ摂取と認知機能の関連

高齢者における乳製品摂取と認知機能との関連は依然として不明である。横断研究デザインを用い、お達者研究に参加する65歳以上の成人1503人を対象とした。認知機能低下はMMSE得点が23点以下で定義した。ロジスティック回帰分析を行ったところ、チーズ摂取と認知機能が有意に関連することが明らかになった（オッズ比＝0.40、95%CI 0.20, 0.82)。本研究の成果は栄養学系国際誌に報告した（Kim et al., Nutrients, 2023)。また、プレス発表をおこない、複数のニュースサイトに取り上げられた。

(5) 慢性疼痛に関する研究

板橋LSAに参加した、痛みのある地域在住高齢者238名（中央値75歳、男性51.9%）を対象に、疼痛と中枢性感作（CS）の重症度に基づいた分類における運動機能、生活の質、血液バイオマーカーの特徴を調査した。疼痛程度（NRS ＞ 3）とCSの程度（CSI-9 ＞ 9）に基づき、参加者を4群に分類した（a群：疼痛軽度・CS無し、b群：疼痛中等度以上・CS無、c群：疼痛軽度・CS有、d群：疼痛中等度以上・CS有)。その結果、中等度以上の疼痛とCSを併発する高齢者は他群に比べ運動機能や睡眠の質が低く、精神的健康状態や生活の質も低下していた。生化学検査では、pentosidineの高値とAlb、PNI、creatinine/cystatin Cの低値が特徴的であった。この結果から、中等度以上の疼痛とCSの併発防止のための早期治療・介入の必要性が示され、特徴を示した血液バイオマーカーを対象とした研究が今後の課題となることを示した。本研究の成果は第11回日本運動器理学療法学会学術大会で発表した（出口他)。

(6) 関節症に関する研究

令和4年から5年度に板橋LSAに参加した、70歳以上の膝OAを有する男女243名（中央値78歳、女性78.1%）を対象に、24時間行動ガイドラインの達成状況とその精神的健康度および膝痛との関連を検証した。ガイドラインの達成割合は、週150分の身体活動で76.5%、8時間未満の座位行動で69.9%、7～9時間の睡眠で34.4%と、睡眠時間の達成割合が最も低かった。達成状況の内訳は、3項目達成が21.0%、2項目達成が46.1%、1項目達成が24.3%、達成項目なしは8.6%だった。3項目を達成した群と比較して、2項目、1項目、達成項目なしの群は、それぞれ精神的健康度が良好である該当オッズが有意に低かった（オッズ比: 1.83 [0.85, 3.95]、3.48 [1.44, 8.42]、3.89 [1.17, 12.9]; p for trend <0.01)。一方で、達成状況と膝痛との関連は示されなかった（p for trend = 0.095)。本研究の成果は第10回日本予防理学療法学会学術大会で発表した（出口・他)。令和6年度中に論文化を目指している。

(7) 働く高齢者に関する研究

服薬、視力、運動・認知機能などを含む多角的なリスクプロファイルに基づいて働く高齢者の転倒リスクを評価するツールOccupational Fall Risk Assessment Tool（OFRAT）を開発し、シルバー人材センターの会員1113名を対象に就業転倒に対する予測妥当性を検証した（Osuka et al., Occup Med, 2023)。

さらに、43のシルバー人材センターを対象にOFRATのユーザビリティを調査した。その結果、約4割のセンターが「人手不足等の理由でOFRATの導入は難しい」と回答した。そこで、OFRATより簡便に就業転倒リスクを評価できるツール（OFRAT短縮版）を新たに検討することとした。この研究の資金源は厚生労働科学研究費補助金（厚生労働省労働安全衛生総合研究事業「高齢労働者の転倒災害防止に向けたOccupational Fall Risk Assessment Tool（OFRAT）短縮版の開発」、研究代表者：大須賀洋祐）として獲得されている。

この研究は国立長寿医療研究センターが実施する東浦研究および東京都健康長寿医療センターが実施するお達者健診・板橋LSAの付随研究として、両研究施設での実施許可が得られている。830名の参加者確保を予定しているが、既に「お達者健診」の2017コホートおよび2019コホートの参加者のうち今年度の健診に参加した777名から働く高齢者148名をリクルートしており、今年度はさらに板橋健康長寿縦断研究および東浦研究の参加者から200名程度をリクルートする見込みである。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜(1)板橋区在住高齢者の大規模研究フィールドの維持・発展＞

【センター内】口腔保健と栄養研究テーマ、認知症と精神保健研究テーマ、認知症未来社会創造センター

【センター外】国立長寿医療研究センター

＜(2)フレイルに関する研究＞
【センター内】口腔保健と栄養研究テーマ、認知症と精神保健研究テーマ、デジタル高齢社会研究テーマ、医療・介護システム研究テーマ、システム加齢医学研究テーマ、
【センター外】国立長寿医療研究センター、東京大学老年病科、米国ピッツバーグ大学公衆衛生大学院、カナダ・アルバータ大学、筑波大学人間総合科学研究群
＜(3)サルコペニアに関する研究＞
【センター内】口腔保健と栄養研究テーマ、認知症と精神保健研究テーマ、システム加齢医学研究テーマ
【センター外】国立長寿医療研究センター、東京大学医学部附属病院22世紀医療センター筑波大学人間総合科学研究群
＜(4)軽度認知機能障害に関する研究＞
【センター内】社会参加と社会貢献研究テーマ、認知症未来社会創造センター、PET画像診断研究テーマ
＜(6)関節症に関する研究＞
【センター内】病院整形外科
＜(7)働く高齢者に関する研究＞
【センター外】国立長寿医療研究センター

オーラルフレイル・栄養

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
平野　浩彦	研究部長	研究会体の統括、研究結果報告と社会還元
本川　佳子	研究員	研究体制整備と実施、栄養データ整理・評価
白部　麻樹	研究員	研究体制整備と実施、歯科データ整理・評価
五味　達之祐	研究員	研究体制整備と実施、栄養データ整理・評価
早川　美知	技術員	研究実施、栄養データ整理・評価
カランタル　玲奈	技術員	研究実施、栄養データ整理・評価
江口　佳奈	技術員	研究実施、歯科データ整理・評価
岩崎　正則	非常勤研究員	統計解析、データ評価
五十嵐　憲太郎	非常勤研究員	研究実施、歯科データ整理・評価
三上　友里江	非常勤研究員	研究実施、栄養データ整理・評価
那須　郁夫	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
西田　直美	非常勤研究員	栄養データ整理・評価
佐々木　直子	非常勤研究員	栄養データ整理・評価
渡邊　裕	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
本橋　佳子	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
森下　志穂	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
松原　ちあき	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
金久　弥生	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
唐帆　純子	非常勤研究員	歯科データ整理・評価
小原　由紀	非常勤研究員	研究実施、歯科データ整理・評価
瀧川　美和	非常勤研究員	データ整理・評価
相田　順子	非常勤研究員	データ整理・評価
村上　正治	協力研究員	研究実施
高城　大輔	協力研究員	研究実施
釘宮　嘉浩	協力研究員	研究実施
星野　大地	協力研究員	研究実施
中村　純也	協力研究員	研究実施
上野　結衣	研究生	研究実施

1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 高齢者の口腔機能と栄養の改善に関する研究

① 高齢者の口腔および栄養評価法の確立

地域在住高齢者から要介護高齢者までを対象として、口腔機能（歯周病を含む）および栄養評

価指標を開発検証し、現場への普及を目指す。認知症の状況に応じた高齢者の継続的な口腔管理等の地域連携システム構築に向け研究を進めている。本研究目的の達成のため、4つの小項目（[①-1] 口腔機能［①-2］歯周病［①-3］小型IoTデバイス×AIの活用［①-4］認知症）を設定し、細やかに研究を進めた。

[①-1] 口腔機能

地域在住高齢者5000名（東京LSAのフィールド）、要介護高齢者2000名の様々な口腔機能の基準値の報告、口腔機能の低下に関連する因子の同定、咀嚼筋量の加齢変化の確認、口腔機能と食事摂取・栄養状態との関連の明確化などを行うための、基盤データ作成を終了し解析を進めた。企業（住友理工など）と開発した口腔機能（咬合力）測定装置（特許取得：TMG-054JP；Oramo-bf）の基準値確立、若年層からの口腔機能データ収集を目的に小児歯科学会と連携し小児用測定装置開発に着手した。また、当該機器で測定される咬合力を保険病名「口腔機能低下症」診断・治療指針に反映さるために、当該病名対象である50歳からのデータ収集を行い、口腔機能低下症の疾患構造の再検討を行った。

[①-2] 歯周病

8020運動達成者増加により、歯周病の有病率が高齢者において上昇し続けている。歯周病は糖尿病、循環器病、感染性心内膜炎、誤嚥性肺炎、認知症など様々な疾患との関連が指摘されている。以上から地域在住高齢者1000名（東京LSAのフィールドを活用）から500名の歯周病に関する詳細なデータ（PISA：歯周組織炎症重症度など）を収集した。高齢者医科治療および療養上のリスクを歯周病も包含して口腔領域から評価する新たな方法の開発を進める目的に炎症関連血清マーカー（IL-６等）との関連性検討を行っている。当該評価は従来の各評価者の臨床経験に依存した評価に加え標準化されたリスク評価が可能となり、円滑な医科治療および療養を進める上で本評価法の有用性は高い。

[①-3] 小型IoTデバイス×AIの活用

多様な食品を組み合わせて、食事をバランスよく摂取することが健康長寿のために重要であることは既に様々な研究から示されている。食品摂取の多様性を評価する指標である食品摂取多様性スコア（DVS）は東京LSAでも収集され、活用されている。スマートフォン等で撮影した食事写真画像をAIによって評価し、DVSを即時に利用者にフィードバックするとともにライフログとして研究で活用するシステムを開発する目的で、精度向上工程進めている。さらに咀嚼行動データを客観的に記録できるウェアラブルデバイス「バイトスキャン（シャープ株式会社）」によって収集されるデータを組み合わせ、地域在住高齢者の食行動の変容を通じて健康長寿を目指す仕組みを検討する上での基礎的データ収集を終了した。

[①-4] 認知症

当テーマではこれまで、認知症の状態に応じた継続的な口腔管理の在り方の検討を行ってきた。さらに認知症の人の口腔管理に関する基礎データの収集を継続した。データは認知症の人本人・家族、口腔管理を実施する者を取り巻く課題を整理し、「認知症の人に対する口腔管理マニュアル」作成に資する基礎的知見としてまとめている。また、認知症の人への円滑な歯科治療提供体制構築に向けた調査事業を、厚労省老健事業にて4年継続して実施した。
当該事業で得た知見に基づき新技術提案を行い、令和6年度医療保険報酬改定に向けて議論の俎上に載っている。

② オーラルフレイルの普及啓発

日本老年医学会、日本老年歯科医学会、日本サルコペニア・フレイル学会の3学会合同で設立したオーラルフレイルワーキンググループと連携を取りながら、多機関連携による大規模調査研究事業を複数実施し、得られたデータをもとにオーラルフレイル新たな評価法の提案を行った。またその予防プログラムのブラッシュアップを行った。得られた知見を日本だけでなく、国際歯科連盟（FDI）を介してアプリ開発、Webコンテンツなどで海外へ向け発信し普及させている。

③ 高齢者の食環境整備（フレイルから要介護高齢者まで）

スマートフォンアプリやInformation and Communication Technology（ICT：情報通信技術）やInternet of Things（IoT：モノのインターネット）等を活用し、通いの場等におけるフレイル予防から要介護高齢者の低栄養予防におけるシームレスな栄養ケア実現のための食環境整備の課題解決に取り組んでいる。

【①高齢者の口腔および栄養評価法の確立 － ①-3　スマートウォッチ事業】で既に記載の通り、スマートフォンとAIを活用し、地域在住高齢者が多様な食品を組み合わせて、食事をバランスよく摂取する環境の整備に向け、データ構築を進めた。第三期において作成した通いの場に参加する高齢者が自身の栄養状態や口腔機能等に応じた適切な食事を選択することを支援するツールを普及させていくために、通いの場の効果的な運営に関する要因解析を行い論文化した。さらには栄養管理も包含した多職種による総合的なリハビリテーション・機能訓練、口腔健康管理が連携し一体的に実施される環境整備を目標とする事業に取り組んでいる。当センターフレイル予防センターと連携し、フレイルサポート栄養士テキストの作成、研修会運営にコアメンバーとして参画した。

(2) 口腔と栄養関連施策に関する知見作成と提言

口腔と栄養関連の診療報酬および介護報酬にかかる施策の効果検証を行うとともに、口腔と栄養関連の制度上の改善すべき点を明らかにした。令和6年度介護保険・医療保険報酬改定等に資する根拠データとして12個の当テーマの知見が引用された。

以上から、高齢者が地域において望む暮らしを継続するために必要な口腔や栄養に関する新たなサービスの創出や人材育成、介護事業所の役割を明らかにして、地域包括ケアシステムの推進、医療および介護保険サービスの維持に貢献していると考えている。第三期同様に今後も厚生労働省、日本歯科医師会、日本栄養士会等の関連団体と密に連携をとり、厚労科研や老健事業等を活用しながら研究を推進する基盤を継続している。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 高齢者の口腔機能と栄養の改善に関する研究

① 高齢者の口腔および栄養評価法の確立

地域在住高齢者から要介護高齢者までを対象として、口腔機能（歯周病を含む）および栄養評価指標を開発検証し、現場への普及を目指す。認知症の状況に応じた高齢者の継続的な口腔管理等の地域連携システム構築に向け研究を進めている。本研究目的の達成のため、4つの小項目（[①-1] 口腔機能 （口腔機能低下症）[①-2] 歯周病 [①-3] 小型IoTデバイス×AIの活用 [①-4] 認知症）を設定し、細やかに研究を進めた。

①-1　口腔機能

地域在住高齢者5000名（東京LSAのフィールドを活用)、要介護高齢者2000名の様々な口腔機能の基準値の報告、口腔機能の低下に関連する因子の同定、咬筋の加齢変化の確認、口腔機能と食事摂取・栄養状態との関連の明確化などに関する調査事業を実施した。

口腔機能の中でも咬合力（噛む力）の測定については住友理工株式会社との共同研究により静電容量型感圧センサーシートを用いた新たな咬合力測定装置を第三期中期計画後半において開発した（特許取得：TMG-054JP)。本装置は2022年7月から医療機器として販売が開始され（口腔機能モニター Oramo-bf；図1)、本装置Oramo-bfの正確性や妥当性については既に国際学術誌を通じて発表済である（Iwasaki M, et al. Int J Environ Res Public Health. 19(9), 2022)。本装置を用いることで咬合力の測定がより身近なものとなった。また、Oramo-bfにより測定された咬合力は歯科領域での新たな保険病名「口腔機能低下症」の診断に使用可能である。よって、第四期中期計画においては、東京LSA等のフィールドを活用し、Oramo-bfで測定される咬合力の基準値を確立し、歯科臨床における口腔機能低下症の治療指針に反映させることを目指し研究事業進めている。

①-2　歯周病

感染症に焦点化した際、高齢者医療と口腔領域との関係は口腔ケアによる嚥下性肺炎予防が広く知られ、口腔ケアは療養上のケアとして標準的に取り入れられている。また近年、周術期における口腔ケアが術後予後（在院日数など）に寄与する知見に基づき、周術期における口腔衛生管理等に対し診療報酬が平成24年度新設された。

一方で、日本歯科医師会・厚生労働省による「80歳になっても自分の歯を20本以上保とう」という8020 運動により、高齢者世代では多くの歯が残るようになり、高齢者の口腔環境は大きく変化した。高齢者が多くの歯を有するようになったことで、歯を支える組織である歯周組織（歯肉、歯槽骨など）に生じる疾患：歯周病が、新たな口腔の問題としてクローズアップされている。歯科疾患実態調査の結果（図2）が示すとおり、65歳以上高齢者の歯周病有病率は上昇を続け、2016年時点で5割を超えた（54.5%）。この状況は、口腔領域の高齢者医科治療および療養上のリスクとして、口腔ケアによる短時間で改善可能な口腔衛生状態（口の汚れ）だけでなく、局所感染症

である歯周病も視野に入れるべきフェーズに入ったことを示している。

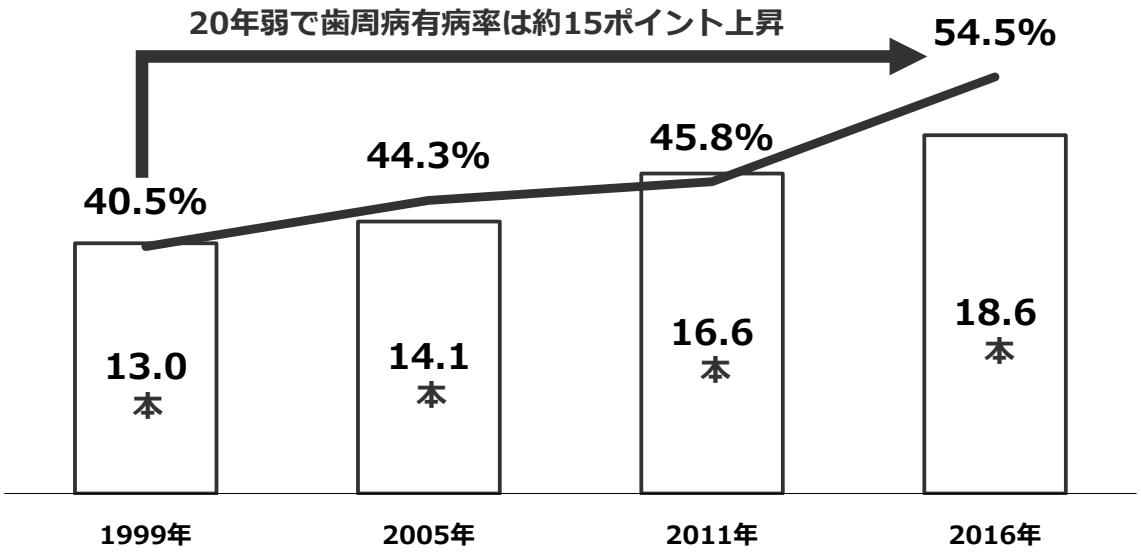


図2. 歯周病有病率（線グラフ）と一人平均現在歯数（棒グラフ）の推移
（65歳以上；歯科疾患実態調査1999～2016年）

歯周病は、歯に付着する歯垢による細菌感染症であり、感染によって引き起こされる炎症性反応により、歯肉、歯槽骨が破壊・吸収される。歯周病には様々な細菌が関与するが、その中でも歯周炎症局所から高頻度に分離される*Porphyromonas gingivalis*（P.G.）はタンパク質分解酵素（プロテアーゼ）と、病巣局所への定着に重要な線毛を有し、歯周病の発症・進行に重要な役割を有している。歯周病は、歯を失う原因となるだけではなく、全身に影響を与えることが指摘されている。その経路には大きく①血流を介する経路（血行性；図3）、②嚥下（誤嚥）を介する経路、がある。

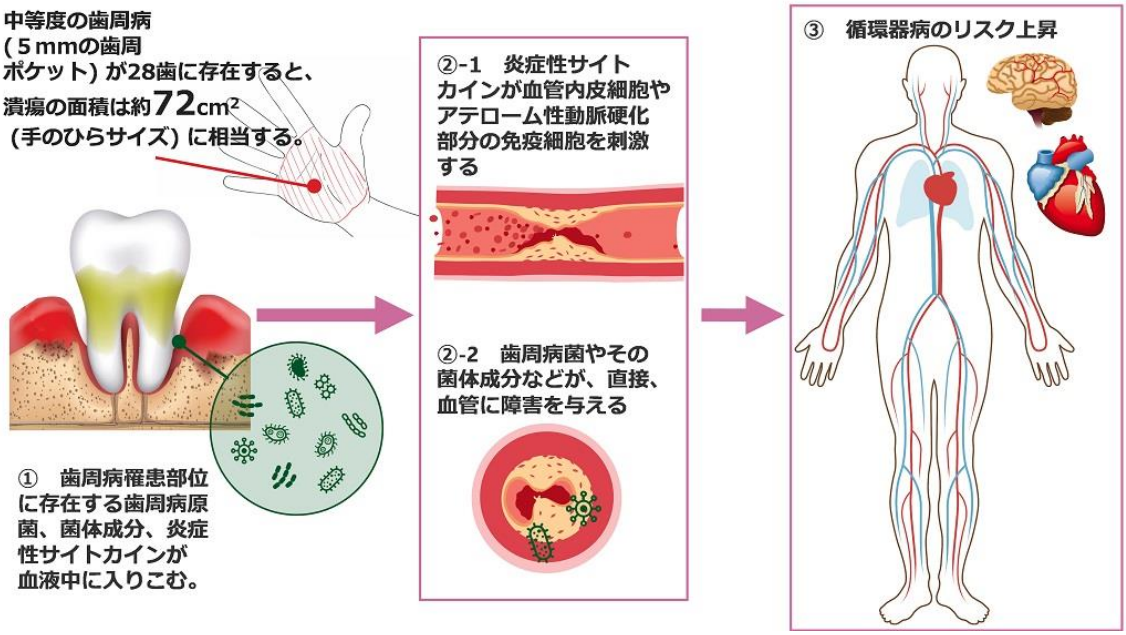


図3. 歯周病が血行性に全身に影響を与えるメカニズム

進行した歯周病では、歯と歯肉との間を結合している上皮が破壊され、歯の根の方向へ後退することで、歯周ポケットと称される隙間が形成される。このポケットの深化に伴い、P.G.などの嫌気性菌が優位に増殖する環境が醸成され、ポケット内の環境に変化が生じる。そして、炎症性変化あるいは細菌成分の直接作用により、上皮細胞が剥離脱落することで潰瘍が形成される。その結果、歯周病原菌、歯周病原菌が有する内毒素、そして歯肉の炎症で産生された物質（炎症性サイトカイン）が血液中に入ることが可能となる。これらの物質が血行性に全身を回り、様々な

臓器に影響を与える可能性が示されている。以上が血行性に影響を与えるメカニズムであり、歯周ポケット内面に形成される潰瘍の面積が、歯周病が全身に与える影響を決定していることが考えられる。

嚥下を介する経路としては、特に高齢者において、歯周病原菌などの口腔細菌の誤嚥が呼吸器疾患（嚥下性肺炎）につながるとされている。

歯周病との関連について最も研究の進んでいる疾患は糖尿病であるが、それ以外にも循環器病、感染性心内膜炎、誤嚥性肺炎、認知症など様々な疾患との関連について研究されている。糖尿病、循環器病、認知症などは高齢者の健康長寿と生活の質を脅かすものである。また、感染性心内膜炎や誤嚥性肺炎は入院中の予後を決定する因子でもある。

以上のことから高齢者の歯周病対策は健康長寿社会実現のために必要不可欠である。また、医科治療および療養リスクに焦点化した口腔領域リスク評価は歯科医療従事者の臨床的な経験により実施されることが多く標準化されていない。口腔衛生評価に加え、歯周病を口腔領域の侵入門戸と位置づけた口腔領域リスク評価法を考案し、安心安全な高齢者医科治療および療養を進めることが重要である。

そこで当テーマでは、高齢者医科治療および療養上のリスクについて歯周病を包含して口腔領域から評価する新たな方法を開発することを目的に調査を進めデータベース構築を行った。現時点で東京LSAのフィールドを活用し地域在住高齢者500名から歯周病に関する詳細なデータを収集済である。規模としては国内最大規模ではあるが、国外の疫学研究に並ぶ、あるいは凌駕する研究とするために1000名まで規模を拡大するとともに、当センター歯科口腔外科に高齢者医科治療および療養計画立案に際し口腔評価依頼のあった患者100名/年を対象としたデータも取得する環境整備を行っている。

本研究で作成される、「口腔衛生評価に加え歯周病重症度スコアを包含した口腔領域リスク評価法」により、従来の各評価者の臨床経験に依存した評価に加えた均てん化されたリスク評価が可能となり、円滑な医科治療および療養を進める上で本評価法の有用性は高い。

①-3　小型IoTデバイス×AIの活用

多様な食品を組み合わせて、食事をバランスよく摂取することが健康長寿のために重要であることは既に様々な研究から示されている。食品摂取の多様性を評価する指標である食品摂取多様性スコア（DVS）は東京LSAでも収集され、活用されている。第四期においてはスマートフォンで撮影した食事写真画像をAIによって診断し、DVSを即時に利用者にフィードバックするとともにライフログとして研究で活用するシステムを構築することを目的に基礎的データ構築は概ね終了した。

また、咀嚼（噛むこと）は、食物を摂取して粉砕し、唾液と混ぜ合わせて嚥下しやすい食塊をつくる一連の過程である。よく噛んで食べることは食物の消化を促し、栄養を効率よく体に取り込む手助けとなる。口腔周囲の筋肉を動かすことによって、滑舌よく話し、豊かな表情でのコミュニケーションの後押しとなることが期待される。また、よく噛むことは脳血流量やセロトニン分泌量の増加に繋がると報告されている。よって咀嚼が健全でないことは低栄養状態や口腔機能低下状態、さらには身体面、心理面の健康と関連していることが推測されるがその関連は疫学的に明らかになっていない。

「咀嚼行動」を適正に評価するためには、筋電図モニタリングなどの特定の環境下ではなく、日常の食生活における咀嚼行動を客観的に計測する必要があり、その技術的障壁が咀嚼行動に関する研究推進のボトルネックとなっていた。近年、センシング技術や通信技術の向上により、ウェアラブルデバイスによる咀嚼行動をモニタリングすることが可能となった。

当テーマでは、咀嚼行動データを客観的に記録できるウェアラブルデバイス「バイトスキャン（シャープ株式会社）；図4」を用いて、地域在住高齢者の咀嚼行動と栄養状態、全身の健康の関連性についてのデータベース構築を行った。

具体的にはバイトスキャンから得られた噛むことに関する多様なデータと健診で得られた栄養状態、口腔機能に関する詳細なデータを組み合わせたデータセットに対して、機械学習を利用し、低栄養やオーラルフレイルをスクリーニングするアルゴリズムの開発と実装を行う。また上記のDVS画像解析システムと組み合わせ、AIが不足している品目を同定し、季節に応じたちょい足しメニュー（レシピ）を提案したり、噛むことに関するデータと組み合わせ、一口あたりの咀嚼回数が少ないようであれば、AIが同定した品目に対して咀嚼回数が多くなるような調理方法を提案する、といったシステムの開発に資する基礎データ構築は概ね終了した。

①-4　認知症

認知症の人の口腔管理に関する調査研究を行う。現在の高齢者は自身の歯を多く保有し、また

デンタルインプラントが埋入されている例など、その口腔環境は多様化している。その一方で認知機能が低下すると口腔清掃等の自立度が低下するだけでなく、介護職員による口腔清掃、歯科専門職による口腔管理も著しく困難になり、口腔衛生状態が不良となる。これらが原因となり歯科疾患発症リスクが高まり、歯の喪失などにより口腔機能低下なども引き起こされ、さらに栄養障害のリスクも高まる。この対策として認知症の状況に応じた継続的な口腔管理を地域で実施することが求められる。

当テーマではこれまで､認知症の状態に応じた継続的な口腔管理の在り方の検討を行ってきた。第四期においては、認知症の人の口腔管理に関する基礎データの収集を継続すると同時に、認知症の人に対する地域医療資源の活用例なども提示された口腔管理マニュアル作成を行うことを目的として認知症関連データの解析を実施した。

研究の第一段階では認知症高齢者を含む要介護高齢者を対象に実測調査を実施し、口腔管理ニーズおよび必要な口腔管理サービスの充足状況等を把握する。さらに認知症の人本人・家族、口腔管理を実施する者を対象に、口腔関連居宅療養管理指導等を実施する上での認知症の人へのサービス提供等に関する実態および課題把握を目的に郵送調査を実施する。以上の結果を整理し、「認知症の人に対する口腔管理マニュアル」作成に資する基礎的知見をまとめる。

認知症の人への円滑な歯科治療提供体制構築に向けた調査事業を、厚労省老健事業にて4年継続して実施した。当該事業で得た知見に基づき新技術提案を行い、令和6年度医療保険報酬改定に向けて議論の俎上に載っている。

(2) 口腔と栄養関連施策に関する検討

口腔と栄養関連の診療報酬および介護報酬にかかる施策の効果検証を行うとともに、口腔と栄養関連の制度上の改善すべき点を明らかにし、診療報酬および介護報酬改定のための根拠づくりを行い、令和6年度介護保険・医療保険報酬改定等に資する根拠データとして12個の当テーマの知見が引用された。

高齢者が地域において望む暮らしを継続するために必要な口腔や栄養に関する新たなサービスの創出や人材育成、介護事業所の役割を明らかにして、地域包括ケアシステムの推進、医療および介護保険サービスの維持に貢献する。第三期同様に厚生労働省、日本歯科医師会、日本栄養士会等の関連団体と密に連携をとり、厚労科研や老健事業等を活用しながら研究を推進する基盤整備を行った。

当テーマでは毎年継続して老健事業を受託し、成果を上げてきた。特に第三期においては令和３年度介護報酬改定での「口腔・栄養スクリーニング加算」新設へ繋がる知見を生み出した。第四期においては、通いの場、通所サービスへの栄養専門職の効率的な関与を推進するための検討を行う予定である。当テーマは全国に先駆けて通いの場における栄養状態と口腔機能に関する研究を進めており、診療報酬および介護報酬改定の議論に資する知見提示が可能である。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜高齢者の口腔機能・食と身体機能＞
【センター内】フレイル・筋骨格系の健康研究、認知症・精神保健研究、デジタル高齢社会研究
【センター外】国立長寿医療研究センター、サンスター株式会社、株式会社ジーシー、株式会社ヨシダ、日本大学、国際歯科連盟（FDI）
＜食と身体機能＞
【センター内】フレイル・筋骨格系の健康研究、認知症・精神保健研究、デジタル高齢社会研究
＜「口腔衛生評価に加え歯周病重症度スコアを包含した口腔領域リスク評価法」開発＞
【センター内】歯科口腔外科
＜フレイルサポート栄養士の育成＞
【センター内】フレイル予防センター
＜栄養ケア・ステーションの運営＞
【センター内】フレイル予防センター
＜咀嚼と認知機能＞
【センター内】放射線診療科
【センター外】明治大学、新潟大学、株式会社ロッテ
＜咬合力（噛む力）と全身の健康＞
【センター外】住友理工株式会社
＜地域在住高齢者の咀嚼行動と栄養状態、全身の健康＞
【センター外】シャープ株式会社
＜高齢者のインプラント治療＞

【センター外】九州歯科大学

認知症と精神保健

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
岡村毅	研究副部長	研究全体の総括
稲垣宏樹	研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
宇良千秋	研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
枝広あや子	研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
杉山美香	研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
宮前史子	研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
多賀努	非常勤研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
中山莉子	非常勤研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
櫻井花	非常勤研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
清水恒三朗	非常勤研究員	研究全体のデザイン・データ収集・分析・論文化
山下真里	（研究員）	産休中

1　第四期中期計画における研究成果の概要

(1) 認知症共生社会実現に資する総合的研究

認知症基本法の**「自分の意見を表明する機会を保証する」**に関しては、高島平団地を中心として、認知症と生きる人だけが集まって互いに語り合うという世界的にも類がない枠組み＜本人ミーティング＞を実施し、世界初の本人ミーティング論文が出版された。認知症の人が出会うと、お互いへの慈しみが語られるという世界でも類のない報告であり、解釈的に見れば『困難にあって人は慈悲をもつ』ことの証明でもあった（Miyamae, BMC Geriatr）。

認知症基本法の**「認知症の人の生活を邪魔する障壁を取り除き、地域で安全・安心・自立の日常生活ができるようする」**に関しては、共生社会の促進要因と壁を探索してきた。促進要因としては、近所に相談相手がいること（従来の抽象的なソーシャルサポートではなく具体的な人が近所にいることが重要）ということが分かった（Ura, Psychogeriatrics）。逆に共生社会の障壁としては、男性が自己開示できないことが判明した（Okamura, GGI）。

認知症基本法の**「認知症の人の家族や親しい人も支援する」**に関しては、家族介護者研究（老健事業）をおこなった。ただしこれまでの家族介護者研究が主に家族会等（すでに社会的支援につながっている集団）を対象に行われてきたことを考慮し、あえて地域の高齢者を起点にして家族介護者を探して分析した。すると、例えば家族会に参加している家族介護者が３％に過ぎないことがわかった（Okamura, GGI）。新たな連帯の仕組みが必要だ。

共生社会を作るために必要なデータは着々と積み上げられており、研究は順調である。

(2) あたらしい認知症ケアの開発研究

国際アルツハイマー病協会が2022年に発表した報告書は、「診断後支援が提供できないのであれば、診断を奨めない」 “…we should not encourage people to have a diagnosis if post-diagnostic support is not available.”という一文で始まっているように、世界的には診断後支援の時代が始まっている。精緻な診断は必要条件だが、ケアなくしては冷たい診断であり、十分条件になりえないということだ。これは認知症基本法の**「認知症の人の意向を尊重して医療を提供する」**に該当する。診断後の不安な時に、医学的介入（本人からすれば、できないことに注目される）、福祉的な関り（同、できないことをお手伝いされる）のみでは尊厳は保てまい。希望と尊厳のためには､別の次元のケアが必要である｡そのために診断後にケアファームや寺院で、体を動かす､新しいことをする､新しい友人を作るといたことがQOLを向上させるというエビデンスを出してきた。

2023年度よりAMEDが採択されたので「インクルーシブな仕事」をつかった診断後支援研究を新たなメニューに追加する。

(3) 人生100年時代の老年社会医学研究の方法の確立

本項目は認知症基本法の**「認知症の人を支えるための共生社会の研究を進める」**に該当する。板橋区、UR都市機構、医療センターの3者による「高島平地域及び高島平団地におけるウェルフェアの発展に向けた連携協定」の締結により、住民を客体とした研究から遠く離れ、区、UR、住民、地域の専門職、そして研究者が対等な立場で共創する研究枠組みがおそらく世界で初めて確立し

たところである。報告書は、何か明確な予測を書くことが通例であることは承知しているが、われわれは予測のできない、本質的に創造的な領域に足を踏み入れたところだ。今後の成果に期待してほしい。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 認知症共生社会実現に資する総合的研究

認知症があってもなくても希望と尊厳をもって生きることができる社会（認知症共生社会、Dementia-friendly community）のための総合的研究を東京都板橋区高島平において行っている。研究所全体の支援の下、研究フィールドに研究者兼臨床家が常駐し、住民や様々なステイクホルダーと対等な立場で共創する拠点（ココからステーション）を２０１６年から運用し、様々な職種（看護師、保健師、心理士、社会福祉士、僧侶、ボランティア、内科医師、精神科医医師、歯科医師）が、データを収集し分析できる環境の中で活躍している。従前の研究との違いに注目すると、量的研究と質的研究、ハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチ、疫学研究とアクションリサーチを融合させた我が国で初めてのCommunity-based participatory research（CBPR）を進めてきた点で異なる。

ココからステーションの活動は活発であり、地域の他の専門職（地域包括、医師会、社協、民生委員）との連携も進んでいる。中でも高島平・舟渡・三園の３地域包括支援センターと認知症サポーターステップアップ研修を行い、高島平におけるチームオレンジが構築された。チームオレンジとは、認知症サポーターが研修を受けた後に継続して活動をしているものが少ないという残念な事実を踏まえて、近隣の認知症サポーターがチームを組み、認知症の人や家族に対する生活面の早期からの支援等を行うという新たな仕組みである。高島平の活動は今後の東京におけるチームオレンジをけん引するであろう。

認知症と生きる人だけが集まって互いに語り合うという世界的にも類がない枠組み「本人ミーティング」を宮前、杉山、多賀らが毎月１回継続してきた。

大規模疫学研究としては２０２２年度末に地域拠点がある高島平２丁目を対象とした高齢者悉皆郵送調査を行い、解析を行った（２丁目プロジェクト）。また３テーマ合同で行っているLSA（板橋区の長期縦断研究）も毎年行われており、他のＢ系チームとも連携して認知機能検査の標準化を宮前・稲垣が中心となって進めている（LSA）。さらに、２０１６年より認知機能の低下した地域住民２００名をコホート化して研究してきたが、家族介護者に焦点をしぼった新たな深掘り調査を老健事業の枠内で行った（老健事業）。高島平以外の千代田区、足立区、東京都島嶼部のフィールドのデータも分析をすすめた。

２０１７年～２０２０年に行われたAMED若年性認知症プロジェクトを継承し、多賀が中心となって若年性認知症の支援機関の会議を定期的に運営し、横のつながりを作っている。さらに膨大なデータの精緻な分析を進めている。

(2) あたらしい認知症ケアの開発研究

人口のボリュームゾーンであり、新しい価値観を体現した団塊の世代が高齢化し、認知症ケアの対象世代となる時代に、認知症ケアも根本的な革新が必要である。ケアする・ケアされるという二分法を超えたケア、本人のいないところで決まるケアからの脱却、そして魅力的で選ばれるケア方法の確立が求められている。我々は、海外の優良事例などを参考にしながらも、我が国の社会に根差したケア、すなわち農園や寺院を用いた全く新しいケアを開発してきた。

これらは、既存の資源の再配備により行われるため、新たな投資が不要であり、医療介護費用の大幅削減を目指せるという利点もある。費用削減が目的ではなく、費用を削減したうえに、さらに質の高いケアが得られれば、余剰資源をさらに人々の幸福に寄与するための投資に回せるのである。

ケアファーム（農園）を用いたケアにおいては①新潟の従来のフィールドの継続と水耕栽培を用いた新たなプロジェクトの開始、②板橋本町のファームの継続、③高島平にURと区を巻き込んだ新たな公共的ケアファームの構築、④伊東市の診断後支援としてのケアファームの開始、⑤長岡市の診断後支援としてのケアファームの準備に着手、と順調に推移し、宇良はすでに我が国の高齢者ケアファーム研究の第一人者である。伝統仏教寺院を用いたケアでは、①介護者のための寺院カフェを全国で展開している、②読経の誤嚥性肺炎予防効果に関する研究を増上寺および護国寺という宗派の中核寺院で行った。後者は日本のみならず世界においてマインドフルネスに並ぶケアメソッドを構築する可能性があり大きな潜在力を秘めており、メンタルヘルスと口腔医学の両方において第一人者である枝広の力が大きい。

これらに加えて、認知症になっても地域で元気に働くという視点のAMED研究を開始した。また芸術を用いた認知症ケアも杉山・海野を中心として実践を開始したところである。

(3) 人生100年時代の老年社会医学研究の方法の確立

人生１００年時代においては認知症においては予防と共生を超克し、権利、当事者参加、QOL（生の質）、QOL（死の質）、主観的体験、語り、死生観といった多様な視点からの研究方法を打ち立てる必要があると第４期計画に記載した。これは海図のない旅路であり、計画通りいかないことが前提であるが、徐々に方向性は見えている。

２０２３年９月１５日「高島平地域及び高島平団地におけるウェルフェアの発展に向けた連携協定」が締結された。これは区内でも特に高齢化が進む高島平地域において、板橋区、UR都市機構、医療センターの3者による連携協定を締結したものである。団地を含む地域内の施設や空間を有効活用し、地域住民と交流しながらだれもが参加できる活動を促進するなど、高島平地域及び団地における諸課題の解決や再生等に向けた取組を3者協働で推進することにより、子どもから高齢者まで元気に楽しく暮らせるまち・共生社会の実現をめざすものだ（板橋区HPより）。

これにより「住まい」という生活の最も基盤を管理する組織が共生研究のパートナーとなった。さっそく団地内にケアファームを作ることが許可され（これまでは団地内を掘るなどの研究活動は許可を得られなかった）、協定の力を実感している。また地域住民向けのペア碁教室研究（高齢者向けのペア碁開発及び効果測定）も棋士としても著名な飯塚（社会参加とヘルシーエイジング研究チームの医師研究員）が中心となって進めている。

協定を推進力として、公的領域との連携による共生研究を進めるという枠組みができた。ファームや囲碁研究において、地区のキーパーソンが集う自治会、社協および高島平二層協議体との連携も進んでいる。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜共生社会に関する研究＞

【センター内】フレイルと筋骨格系の健康研究、口腔保健と栄養研究、介護・エンドオブライフ研究、社会参加と社会貢献研究、ヘルシーエイジングと地域保健、精神科、神経内科、認知症疾患医療センター

【センター外】上智大学、東京大学、大正大学、文京学院大学、千葉大学、マンチェスター大学、淑徳大学、浄土宗総合研究所、徳島大学、東北大学、農研機構、駒澤大学、和光病院、川室記念病院、伊東市民病院、高田西城病院、長岡西病院、板橋区、千代田区

論文・学会発表（令和5年度）

フレイルと筋骨格系の健康

１　論文（誌上発表）：原著

1. Osuka Y, Sasai H, Kojima N, Sugie M, Motokawa K, Maruo K, Ono R, Aoyama T, Inoue S, Kim H. Adherence, safety, and potential effectiveness of a home-based Radio-Taiso exercise program in older adults with frailty: a pilot randomized controlled trial. Geriatr Gerontol Int 23(1); 32-37, 2023.1. (JIF_{2021}=3.387)
2. Kikuchi N, Ohta T, Hashimoto Y, Mochizuki Y, Saito M, Kozuma A, Deguchi M, Inoguchi T, Shinogi M, Homma H, Ogawa M, Nakazato K, Okamoto T. Effect of online home-based resistance exercise training on physical fitness, depression, stress, and well-being in middle-aged persons: a pilot study. Int J Environ Res Public Health. 20(3): 1769, 2023.1. (JIF_{2021}=4.614)
3. Naito T, Suzuki Y, Yamasue K, Saito K, Umemura M, Kojima N, Kim H, Osuka Y, Ishikawa Y, Tochikubo O. Relationship between cognitive function and sway of body in standing posture: a cross-sectional study. Geriatrics (Basel). 8: 29, 2023.2. (JIF_{2021}=NA)
4. Ohta T, Ogawa M, Kikuchi N, Sasai H, Okamoto T. Adherence to 24-h movement guidelines and depressive status during the coronavirus disease outbreak: a cross-sectional Japanese survey. Int J Public Health. 68:1604647, 2023.2. (JIF_{2021}=5.100)
5. Takahashi J, Kawai H, Ejiri M, Fujiwara Y, Hirano H, Sasai H, Ihara K, Ishii K, Oka K, Obuchi SP. Activity diversity is associated with the prevention of frailty in community-dwelling older adults: The Otassha Study. Front Public Health. 11:1113255, 2023.3. (JIF_{2021}=6.461)
6. Uzawa H, Ishii H, Ishida T, Shida T, Furuyama H, Nishida Y. Factors associated with low inter-session reliability of conditioned pain modulation in older people with or without chronic musculoskeletal pain. J Pain Res. 16: 1039-1053, 2023.3. (JIF_{2021}=2.832)
7. Mitsutake S, Takahashi Y, Otsuki A, Umezawa J, Yaguchi-Saito A, Saito J, Fujimori M, Shimazu T; INFORM Study Group (Fujimori M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Kuchiba A, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Otsuki A, Saito J, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yaguchi-Saito A, Yoshimi I, Shimazu T, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ishikawa H, Ogawa R, Fukuda Y, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Chronic diseases and sociodemographic characteristics associated with online health information seeking and using social networking sites: nationally representative cross-sectional survey in Japan. J Med Internet Res. 25:e44741, 2023.3. (JIF_{2022}=7.4)
8. Abe T, Fujita K, Sagara T, Ishibashi T, Morishita K, Murayama H, Sakurai R, Osuka Y, Watanabe S,

Fujiwara Y. Associations between frailty status, work-related accidents and efforts for safe work among older workers in Tokyo: A cross-sectional study. Geriatr Gerontol Int. 23(3):234-238, 2023.3. (JIF_{2022}=3.3)

9. 内藤卓也，出口直樹，清浦康平，平川善之．全人工膝関節置換術後の急性期における歩数の変動が疼痛と身体活動に及ぼす影響：1ヶ月間のフォローアップ研究．Pain Rehabilitation. 13(1): 15-22, 2023.3. (JIF_{2021}=NA)
10. 志村広子，久保田浩史，森山進一郎．考えることを促す学習課題:大学健康関連講義科目における双方向性を重視したオンライン授業のデザイン．教育支援協働学研究，5，99-104，2023.3. (JIF_{2021}=NA)
11. Ohta T, Sasai H, Osuka Y, Kojima N, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Age- and sex-specific associations between sarcopenia severity and poor cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: The IRIDE Cohort Study. Front Public Health. 11: 1148404, 2023.4. (JIF_{2022}=5.2)
12. Osuka Y, Okubo Y, Nofuji Y, Maruo K, Fujiwara Y, Oka H, Shinkai S, Lord SR, Sasai H. Occupational fall risk assessment tool for older workers. Occup Med (Lond). 73(3): 161-166, 2023.4. (JIF_{2022}=5.1)
13. Kinoshita K, Ozato N, Yamaguchi T, Bushita H, Sudo M, Yamashiro Y, Mori K, Katsuragi Y, Sasai H, Murashita K, Takahashi Y, Ihara K. Association of the COVID-19 pandemic with changes in objectively measured sedentary behaviour and adiposity. Int J Obes (Lond). 47(5): 375-381, 2023.5. (JIF_{2022}=4.9)
14. Osuka Y, Takeshima N, Kojima N, Kohama T, Fujita E, Kusunoki M, Imai A, Kitabayashi Y, Brechue WF, Sasai H. Qualitative assessment of standing motion with Kinect™ is a useful additional diagnostic marker for sarcopenia. Arch Gerontol Geriatr 108: 104915, 2023.5. (JIF_{2022}=4.0)
15. Kojima N, Kim M, Saito K, Yoshida Y, Hirano H, Obuchi SP, Shimada H, Suzuki T, Iwasa H, Kim H. Effects of daily consumption of soy products on basic/instrumental activities of daily living in community-dwelling Japanese women aged 75 years and older: a 4-year cohort study. Womens Health Rep. 4(1): 241-250, 2023.5. (JIF_{2022}=1.3)
16. Ishikawa H, Ogawa R, Otsuki A, Saito J, Yaguchi-Saito A, Kuchiba A, Fujimori M, Fukuda Y, Shimazu T; INFORM Study Group (Hayakawa M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yoshimi I, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ogawa L, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Effect modification by geographic area on the association between health literacy and self-rated health: a nationwide cross-sectional study in Japan. BMC Public Health. 23(1):952, 2023.5. (JIF_{2022}=4.5)
17. Akiyama M, Ishida N, Takahashi H, Takahashi M, Otsuki A, Sato Y, Saito J, Yaguchi-Saito A, Fujimori M, Kaji Y, Shimazu T; INFORM Study Group (Fujimori M, Hayakawa M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Kuchiba A, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Otsuki A, Saito J, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yaguchi-Saito A, Yoshimi I, Shimazu T, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ishikawa H, Ogawa R, Fukuda Y, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Screening practices of cancer survivors and individuals whose family or friends had a cancer diagnoses-a nationally representative cross-sectional survey in Japan (INFORM Study 2020). J Cancer Surviv. 17(3):663-676, 2023.6. (JIF_{2022}=3.7)
18. Kim H, Osuka Y, Kojima N, Sasai H, Nakamura K, Ohba C, Sasaki M, Suzuki T. Inverse association between cheese consumption and lower cognitive function in Japanese community-dwelling older adults based on a cross-sectional study. Nutrients. 15(14): 3181, 2023.7. (JIF_{2022}=5.9)
19. Kawai H, Ejiri M, Ito K, Fujiwara Y, Ihara K, Hirano H, Sasai H, Kim H, Obuchi SP. Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults-The Otassha Study. Front Public Health. 11:1248462, 2023.8. (JIF_{2022}=5.2)
20. Deguchi N, Tanaka R, Hirakawa Y, Sasai H. Preliminary effectiveness of pain management program on physical activity for patients with chronic musculoskeletal pain: non-randomized controlled trial. Musculoskeletal Care. 21(3):947-952, 2023.9. (JIF_{2022}=1.3)
21. Wakaba K, Osuka Y, Kojima N, Sasai H. Predictive capability of 5 sarcopenia diagnostic criteria for fall incidents in older Japanese women: The Otassha Study. J Am Med Dir Assoc. 24(10):1549-1554, 2023.10. (JIF_{2022}=7.6)
22. Okamura T, Taga T, Inagaki H, Miyamae F, Ura C, Sugiyama M, Edahiro A, Motokawa K, Shirobe M, Iwasaki M, Kojima N, Osuka Y, Sasai H, Hirano H, Awata S. Barrier to sharing dementia diagnosis with neighbors in Tokyo. Geriatr Gerontol Int. 23(10):761-763, 2023.10. (JIF_{2022}=3.3)
23. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Suzuki H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K; IRIDE Cohort Study investigators (Toba K, Awata S, Fujiwara Y, Suzuki H, Ishizaki T, Sasai H, Obuchi SP, Abe T, Yamashita M, Ogawa S, Yamashiro D). Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers: The IRIDE cohort study. Geriatr Gerontol Int. 23(11):887-888, 2023.11. (JIF_{2022}=3.3)
24. Terada M, Shimazu T, Saito J, Odawara M, Otsuki A, Yaguchi-Saito A, Miyawaki R, Kuchiba A, Ishikawa H, Fujimori M, Kreps GL; INFORM Study Group (Fujimori M, Hayakawa M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Kuchiba A, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Otsuki A, Saito J, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yaguchi-Saito A, Yoshimi I, Shimazu T, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ishikawa H, Ogawa R, Fukuda Y, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Age, gender and socioeconomic disparities in human papillomavirus (HPV) awareness and knowledge among Japanese adults after a 7-year suspension of proactive recommendation for the HPV vaccine: A nationally representative cross-sectional survey. Vaccine. 41(48):7147-7158, 2023.11. (JIF_{2022}=5.5)
25. Azuma K, Osuka Y, Kojima N, Sasai H, Inoue S. Vitamin K insufficiency predicts incidence of frailty in community-dwelling older adults: The Otassha Study. J Bone Miner Metab. 41(6):817-821, 2023.11. (JIF_{2022}=3.3)

26. Weni WM, Shimizu M, Ando-Ohmura C, Ohashi Y, Edvardsson D, Backman A, Baxter R, Kloos N, Ozaki A. Psychometric evaluation of the Indonesian version of the Person-centered Care Assessment Tool. Int J Older People Nurs. 18(6):e12565, 2023.11. (JIF_{2022}=2.2)
27. Abe T, Yamashita M, Fujiwara Y, Sasai H, Obuchi SP, Ishizaki T, Awata S, Toba K. Fluctuations in cognitive test scores and loss to follow-up in community-dwelling older adults: The IRIDE Cohort Study. Dement Geriatr Cogn Disord. 52(5):277-284, 2023.11. (JIF_{2022}=2.4)
28. Kera T, Osuka Y, Kawai H, Ejiri M, Ito K, Hirano H, Fujiwara Y, Ihara K, Obuchi S. Development and validation of a rapid sarcopenia screening questionnaire: The Otassha study. Geriatr Gerontol Int. 23(12):945-950, 2023.12. (JIF_{2022}=3.3)
29. 笹井浩行. 大学体育授業の楽しい思い出は健康日本21における歩数の目標値達成と関連するか？. 大学体育スポーツ学研究. 21:73-79, 2024.3. (JIF_{2022}=NA)
30. Fukushima N, Kikuchi H, Sato H, Sasai H, Kiyohara K, Sawada SS, Machida M, Amagasa S, Inoue S. Dose-response relationship of physical activity with all-cause mortality among older adults: An umbrella review. J Am Med Dir Assoc. 25(3):417-430, 2024.3. (JIF_{2022}=7.6)
31. Yamazaki S, Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people. Psychogeriatrics. 24(1): 145-147, 2024.1. (JIF_{2022}=2.0)
32. Hatanaka S, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The relationship between phase angle and lower-extremity function in older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Nutrition. 119:112289, 2024.3. (JIF_{2022}=4.4)
33. Hatanaka S, Sasai H, Shida T, Osuka Y, Kojima N, Ohta T, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Association between dynapenia and cognitive decline in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. Geriatr Gerontol Int. 24(Suppl 1):123-129, 2024.3. (JIF_{2022}=3.3)
34. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is non-inferior to the Kihon Checklist in screening frailty among independent older adults aged 75 years and older: The Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatr Gerontol Int. 24(Suppl 1):176-181, 2024.3. (JIF_{2022}=3.3)
35. Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. A neighbour to consult with is important in dementia- friendly communities: Associated factors of self-efficacy allowing older adults to continue living alone in community settings. Psychogeriatrics 24(2):518-520, 2024.3. (JIF_{2022}=2.0)
36. Osuka Y, Takeshima N, Kojima N, Kohama T, Fujita E, Kusunoki M, Kato Y, Brechue WF, Sasai H. Discrimination of frailty phenotype by Kinect™-based stepping parameters. JAR Life. 12:100-104, 2023.12. (JIF_{2022}=NA)
37. Shida T, Yoshida Y, Ohta T, Kojima N, Osuka Y, Takekoshi K, Sasai H. Identification of a novel biomarker for sarcopenia diagnosis using serum metabolomic analysis: a pilot study. Eur Geriatr Med. (in press) (JIF_{2022}=3.8)
38. Kitamura K, Hoshino T, Okabe A, Fukuyo M, Rahmutulla B, Tanaka N, Kobayashi S, Tanaka T, Shida T, Ueda M, Minamoto T, Matsubara H, Kaneda A, Ishii H, Matsushita K. The link of mRNA and rRNA transcription by PUF60/FIR through TFIIH/P62 as a novel therapeutic target for cancer. Int J Mol Sci. 24(24):17341, 2023.12. (JIF_{2022}=5.6)
39. Daimaru K, Osuka Y, Kojima N, Mizukami K, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Associations of polypharmacy with frailty severity and each frailty phenotype in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatr Gerontol Int. 24(Suppl 1):196-201, 2024.3. (JIF_{2022}=3.3)
40. Takahashi J, Kawai H, Ejiri M, Fujiwara Y, Hirano H, Sasai H, Obuchi SP. Predicting the incidence of mild cognitive impairment with a computer-based cognitive assessment tool in community-dwelling older adults: The Otassha Study. PLoS One. 19(1): e0297433, 2024.1. (JIF_{2022}=3.7)
41. Sawai A*, Shida T*, Hoshikawa Y, Hatanaka S, Ueda M, Kato Y, Tokinoya K, Natsui H, Kawakami Y, Takekoshi K., Effect of acute moderate intensity cycling on cfDNA levels considering menstrual cycle phases. Front Sports Act Living. 6:1322295, 2024.1. (JIF_{2022}=2.7) *Contributed equally.
42. Miyawaki R, Oka K, Otsuki A, Saito J, Yaguchi-Saito A, Kuchiba A, Fujimori M, Kreps GL, Shimazu T; INFORM Study Group (Fujimori M, Hayakawa M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Kuchiba A, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Otsuki A, Saito J, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yaguchi-Saito A, Yoshimi I, Shimazu T, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ishikawa H, Ogawa R, Fukuda Y, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Trust in mass media as sources of cancer information: findings from a nationally representative cross-sectional survey in Japan. J Health Commun. 29(2):143-154, 2024.2. (JIF_{2022}=4.4)
43. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Sex-specific factors associated with acceptance in smartwatches among urban older adults: The Itabashi Longitudinal Study on Aging. Front Public Health. 12:1261275, 2024.2. (JIF_{2022}=5.2)
44. Imamura K, Kawai H, Ejiri M, Sasai H, Hirano H, Fujiwara Y, Ihara K, Obuchi S. Social isolation, regardless of living alone, is associated with mortality: The Otassha Study. Front Public Health. 12:1365943, 2024.3. (JIF_{2022}=5.2)
45. Momosaka T, Saito J, Otsuki A, Yaguchi-Saito A, Fujimori M, Kuchiba A, Katanoda K, Takaku R, Shimazu T, for the INFORM Study Group (Fujimori M, Hayakawa M, Hosono S, Inoue M, Kaji Y, Katanoda K, Kuchiba

A, Matsuda T, Matsuoka YJ, Odawara M, Otsuki A, Saito J, Takahashi H, Takahashi M, Uchitomi Y, Umezawa J, Watanabe O, Yaguchi-Saito A, Yoshimi I, Shimazu T, Kreps GL, Sakurai N, Momosaka T, Akiyama M, Miyawaki R, Okubo R, Akamatsu R, Kawasaki Y, Fujisaki K, Ishikawa H, Ogawa R, Fukuda Y, Imamura H, Nakaya K, Nakaya N, Mitsutake S, Sasai H). Associations of individual characteristics and socioeconomic status with heated tobacco product harmfulness perceptions in Japan: A nationwide cross-sectional study (INFORM Study 2020). J Epidemiol. (in press) (JIF_{2022}=4.7)

46. Osuka Y, Kojima N, Daimaru K, Ono R, Sugie M, Omura T, Motokawa K, Ueda T, Maruo K, Aoyama T, Inoue S, Sasai H. Effects of Radio-Taiso on health-related quality of life in older adults with frailty: a randomized controlled trial. J Epidemiol. (in press) (JIF_{2022}=4.7)
47. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi SP, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-item Checklist. Geriatr Gerontol Int. (in press) (JIF_{2022}=3.3)
48. 中潟崇, 笹井浩行, 岡田知佳, 瀧本秀美, 宮地元彦, 小野玲. 国民健康・栄養調査（旧国民栄養調査）の運動習慣、歩数および体格・体力に関する調査項目の変遷. 運動疫学研究. (in press) (JIF_{2022}=NA)
49. Abe T, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Nishita Y, Makizako H, Jeong S, Iwasaki M, Yamada M, Kojima N, Iijima K, Obuchi S, Shinmura K, Otsuka R, Suzuki T. Higher-level competence: Results from the Integrated Longitudinal Studies on Aging in Japan (ILSA-J) on the shape of associations with impaired physical and cognitive functions. Geriatr Gerontol Int. (in press) (JIF_{2022}=3.3)
50. Takayama T, Suzuki H, Okada K, Akiyama S, Narasaka T, Maruo K, Sakamoto T, Seo E, Tsuchiya K. A novel predictive formula for highly accurate discrimination between truly Helicobacter pylori-uninfected and currently infected/spontaneously eradicated individuals for gastric cancer screening. Medicine (Baltimore). 103(9):e36335, 2024.3. (JIF_{2022}=1.6)
51. Gosho M, Ishii R, Ohigashi T, Maruo K. Multivariate generalized mixed-effects models for screening multiple adverse drug reactions in spontaneous reporting systems. Front Pharmacol. 15:1312803, 2024.1. (JIF_{2022}=5.6)
52. Nitta H, Mizumoto M, Li Y, Oshiro Y, Fukushima H, Suzuki R, Hosaka S, Saito T, Numajiri H, Kawano C, Kamizawa S, Maruo K, Sakurai H. An analysis of muscle growth after proton beam therapy for pediatric cancer. J Radiat Res. 65(2):251-255, 2024.3. (JIF_{2022}=2.0)
53. Niitsu H, Mizumoto M, Li Y, Nakamura M, Ishida T, Iizumi T, Saito T, Numajiri H, Makishima H, Nakai K, Oshiro Y, Maruo K, Sakurai H. Tumor Response on Diagnostic Imaging after Proton Beam Therapy for Hepatocellular Carcinoma. Cancers (Basel). 16(2):357, 2024.1. (JIF_{2022}=5.2)
54. Takahashi M, Mizumoto M, Oshiro Y, Kino H, Akutsu H, Nakai K, Sumiya T, Ishikawa E, Maruo K, Sakurai H. Risk Factors for Radiation Necrosis and Local Recurrence after Proton Beam Therapy for Skull Base Chordoma or Chondrosarcoma. Cancers (Basel). 15(23):5687, 2023.12. (JIF_{2022}=5.2)
55. Kawamura T, Sekine Y, Sugai K, Yanagihara T, Saeki Y, Kitazawa S, Kobayashi N, Goto Y, Ichimura H, Ohigashi T, Maruo K, Sato Y. Three-dimensional analysis reveals a high incidence of lung adenocarcinoma in the upper region. Surg Today. (in press) (JIF_{2022}=2.5)
56. Kimura T, Ishikawa H, Nagumo Y, Sekino Y, Kageyama Y, Ushijima H, Kawai T, Yamashita H, Azuma H, Nihei K, Takemura M, Hashimoto K, Maruo K, Tsuzuki T, Nishiyama H; BPT-ART Investigators Group. Efficacy and Safety of Bladder Preservation Therapy in Combination with Atezolizumab and Radiation Therapy (BPT-ART) for Invasive Bladder Cancer: Interim Analysis from a Multicenter, Open-label, Prospective Phase 2 Trial. Int J Radiat Oncol Biol Phys. 2023 Nov 1;117(3):644-651. (JIF_{2022}=7.0)
57. 中村睦美, 佐藤慎一郎, 根本裕太, 山田卓也, 武田典子, 丸尾和司, 福田吉治, 北畠義典, 荒尾孝. 地域在住高齢者における腰痛と身体活動，座位時間との関連：横断研究. 日本公衆衛生雑誌. 2023 Oct 28;70(10):690-698. (JIF_{2022}=NA)
58. Okazaki M, Yumoto M, Kaneko Y, Maruo K. Correlation of motor-auditory cross-modal and auditory unimodal N1 and mismatch responses of schizophrenic patients and normal subjects: an MEG study. Front Psychiatry. 2023 Oct 11;14:1217307. (JIF_{2022}=4.7)
59. Kurita N, Nishikii H, Maruyama Y, Suehara Y, Hattori K, Sakamoto T, Kato T, Yokoyama Y, Obara N, Maruo K, Ohigashi T, Yamaguchi H, Iwamoto T, Minohara H, Matsuoka R, Hashimoto K, Sakata-Yanagimoto M, Chiba S. Safety of romiplostim administered immediately after cord-blood transplantation: a phase 1 trial. Ann Hematol. 2023 Oct;102(10):2895-2902. (JIF_{2022}=3.5)
60. Ito Y, Ishikawa E, Sato M, Marushima A, Hayakawa M, Maruo K, Takigawa T, Kato N, Tsuruta W, Uemura K, Matsumaru Y. Comparison of the Clinical Outcome of Carotid Artery Stenting Between Institutions With a Treatment Strategy Based on Risk Factors and Those With First-Line Treatment. J Endovasc Ther. 2023 Oct;30(5):746-755. (JIF_{2022}=2.6)
61. Mizumoto M, Ogino H, Okumura T, Terashima K, Murakami M, Ogino T, Tamamura H, Akimoto T, Waki T, Katoh N, Araya M, Onoe T, Takagi M, Iwata H, Numajiri H, Okimoto T, Uchinami Y, Maruo K, Shibuya K, Sakurai H. Proton Beam Therapy for Hepatocellular Carcinoma: Multicenter Prospective Registry Study in Japan. Int J Radiat Oncol Biol Phys. 2023 Sep 30:S0360-3016(23)07969-5. (JIF_{2022}=7.0)
62. Oshiro Y, Mizumoto M, Miyamoto T, Sumiya T, Fujioka D, Shirataki H, Nakamura M, Ishida T, Iizumi T, Saito T, Numajiri H, Makishima H, Nakai K, Maruo K, Sakae T, Sakurai H. Retrospective Analysis of the Areas Responsible for Light Flash and Odor During Proton Beam Therapy and Photon Therapy. Cureus. 2023 Sep 6;15(9):e44790. (JIF_{2022}=1.2)
63. Sekino Y, Tateishi R, Fukumitsu N, Okumura T, Maruo K, Iizumi T, Numajiri H, Mizumoto M, Minami T, Nakagomi R, Sato M, Asaoka Y, Nakagawa H, Hayata Y, Fujiwara N, Shiina S, Koike K, Sakurai H. Proton Beam Therapy versus Radiofrequency Ablation for Patients with Treatment-Naïve Single Hepatocellular Carcinoma: A Propensity Score Analysis. Liver Cancer. 2022 Dec 6;12(4):297-308. (JIF_{2022}=13.8)

64. Sato A, Moriyama T, Watanabe N, Maruo K, Furukawa TA. Development and validation of a prediction model for rehospitalization among people with schizophrenia discharged from acute inpatient care. Front Psychiatry. 2023 Aug 24;14:1242918. (JIF_{2022}=4.7)
65. Nemoto Y, Sato S, Kitabatake Y, Takeda N, Maruo K, Arao T. Do the Impacts of Mentally Active and Passive Sedentary Behavior on Dementia Incidence Differ by Physical Activity Level? A 5-year Longitudinal Study. J Epidemiol. 2023 Aug 5;33(8):410-418. (JIF_{2022}=4.7)
66. Gosho M, Ishii R, Noma H, Maruo K. A comparison of bias-adjusted generalized estimating equations for sparse binary data in small-sample longitudinal studies. Stat Med. 2023 Jul 10;42(15):2711-2727. (JIF_{2022}=2.0)
67. Inaba M, Fukushima H, Hara M, Hosaka S, Fujiyama S, Maruo K, Nomura T, Okiyama N, Takada H. Antigen-specific T cell balance reveals Why patients with atopic dermatitis fail to achieve immune tolerance. Clin Immunol. 2023 Jul;252:109649. (JIF_{2022}=8.6)
68. Owada Y, Murata Y, Hamaguchi Y, Yamada K, Inomata S, Ogawa K, Ohara Y, Akashi Y, Enomoto T, Maruo K, Tanaka M, Oda T. Comparison of postoperative analgesic effects of thoracic epidural analgesia and rectus sheath block in laparoscopic abdominal surgery: A randomized controlled noninferiority trial. Asian J Endosc Surg. 2023 Jul;16(3):423-431. (JIF_{2022}=1.0)
69. Machino-Ohtsuka T, Minami K, Yamasaki H, Nakatsukasa T, Kawamatsu N, Sato K, Yamamoto M, Maruo K, Ishizu T, Kawakami Y, Ieda M. Efficacy of Low-Dose Isoproterenol Infusion for the Exclusion of a Left Atrial Appendage Thrombus in Patients With Dense Spontaneous Echo Contrast Caused by Atrial Fibrillation. Circ J. 2023 Jun 30. (JIF_{2022}=3.3)
70. Araya M, Ishikawa H, Nishioka K, Maruo K, Asakura H, Iizumi T, Takagi M, Murakami M, Azuma H, Obara W, Aoyama H, Sakurai H. Proton beam therapy for muscle-invasive bladder cancer: A systematic review and analysis with Proton- Net, a multicenter prospective patient registry database. J Radiat Res. 2023 Jun 16;64(Supplement_1):i49-i58. (JIF_{2022}=2.0)
71. Ishikawa H, Arimura T, Maruo K, Kawamura H, Toyama S, Ogino T, Okimoto T, Murakami M, Sato Y, Nishioka K, Araya M, Ohba H, Umehara K, Aoyama H, Obara W, Azuma H, Tsuji H, Sakurai H. A Japanese registry study and systematic review of particle therapy for renal cell carcinoma. J Radiat Res. 2023 Jun 16;64(Supplement_1):i41-i48. (JIF_{2022}=2.0)
72. Gosho M, Ohigashi T, Nagashima K, Ito Y, Maruo K. Bias in Odds Ratios From Logistic Regression Methods With Sparse Data Sets. J Epidemiol. 2023 Jun 5;33(6):265-275. (JIF_{2022}=4.7)
73. Morii W, Kasai K, Nakamura T, Hayashi D, Hara M, Naito T, Sonehara K, Fukuie T, Saito-Abe M, Yang L, Yamamoto-Hanada K, Narita M, Maruo K, Okada Y, Noguchi E, Ohya Y. A genome-wide association study for allergen component sensitizations identifies allergen component-specific and allergen protein group-specific associations. J Allergy Clin Immunol Glob. 2023 Feb 20;2(2):100086. (JIF_{2022}=NA)
74. Yamaguchi Y, Takeda K, Yoshida S, Maruo K. Optimal biological dose selection in dose-finding trials with model-assisted designs based on efficacy and toxicity: a simulation study. J Biopharm Stat. 2023 Apr 28:1-15. (JIF_{2022}=1.1)
75. Hiraoka T, Kiuchi G, Hiraoka R, Maruo K, Oshika T. Multifocal Contact Lenses and 0.01% Atropine Eye Drops for Myopia Control Study: Research Protocol for a 1-Year, Randomized, Four-Arm, Clinical Trial in Schoolchildren. Eye Contact Lens. 2023 Apr 1;49(4):172-177. (JIF_{2022}=2.3)
76. Hoshino Y, Arai J, Hirono K, Maruo K, Miura-Fuchino R, Yukitake Y, Kajikawa D, Kamakura T, Hinata A. Ventilator-induced diaphragmatic dysfunction in extremely preterm infants: a pilot ultrasound study. Eur J Pediatr. 2023 Apr;182(4):1555-1559. (JIF_{2022}=3.6)
77. Nakamura M, Ishikawa H, Ohnishi K, Mori Y, Baba K, Nakazawa K, Shiozawa T, Sekine I, Maruo K, Okumura T, Sakurai H. Effects of lymphopenia on survival in proton therapy with chemotherapy for non-small cell lung cancer. J Radiat Res. 2023 Mar 23;64(2):438-447. (JIF_{2022}=2.0)
78. Machino T, Aonuma K, Maruo K, Komatsu Y, Yamasaki H, Igarashi M, Nogami A, Ieda M. Randomized crossover trial of 2-week Garment electrocardiogram with dry textile electrode to reveal instances of post-ablation recurrence of atrial fibrillation underdiagnosed during 24-hour Holter monitoring. PLoS One. 2023 Feb 24;18(2):e0281818. (JIF_{2022}=3.7)
79. Li Y, Mizumoto M, Oshiro Y, Nitta H, Saito T, Iizumi T, Kawano C, Yamaki Y, Fukushima H, Hosaka S, Maruo K, Kamizawa S, Sakurai H. A Retrospective Study of Renal Growth Changes after Proton Beam Therapy for Pediatric Malignant Tumor. Curr Oncol. 2023 Jan 24;30(2):1560-1570. (JIF_{2022}=2.6)
80. Yamada T, Fukuda Y, Kanamori S, Sato S, Nakamura M, Nemoto Y, Maruo K, Takeda N, Kitabatake Y, Arao T. Association of social participation (including inconsistent participation) with the progression of frailty among older adults: Community-based cohort study in Japan. Geriatr Gerontol Int. 2023 Jan;23(1):25-31. (JIF_{2022}=3.3)
81. Sugawara N, Yasui-Furukori N, Maruo K, Shimoda K, Sumiyoshi T. Predictors of psychological distress and sleep deprivation in caregivers of stroke survivors. J Stroke Cerebrovasc Dis. 2023 Jan;32(1):106899. (JIF_{2022}=2.5)
82. Nakamura K, Marushima A, Takahashi Y, Mochizuki M, Kimura A, Fukuda Y, Asami M, Nakamoto H, Egawa S, Kaneko J, Unemoto K, Kondo Y, Yonekawa C, Uchida M, Hoshiyama E, Yamada T, Maruo K, Ishikawa E, Matsumaru Y, Inoue Y; IENE ECT with the LIFE study group. Levetiracetam versus fosphenytoin as a second-line treatment after diazepam for adult convulsive status epilepticus: a multicentre non-inferiority randomised control trial. J Neurol Neurosurg Psychiatry. 2023 Jan;94(1):42-48. (JIF_{2022}=11.0)
83. Mizuno M, Chiba I, Mukohara T, Kondo M, Maruo K, Ohigashi T, Naruo M, Asano Y, Onishi T, Tanabe H, Muta R, Mishima S, Okano S, Yuda M, Hosono A, Ueda Y, Bando H, Itagaki H, Ferrans CE, Akimoto T. Effectiveness of an online support program to help female cancer patients manage their health and

illness: Protocol for a randomized controlled trial. Contemp Clin Trials Commun. 2022 Nov 10;30:101035. (JIF_{2022}=1.5)

84. Sekiya T, Ogura Y, Kai H, Kawaguchi A, Okawa S, Hirohama M, Kuroki T, Morii W, Hara A, Hiramatsu Y, Hitomi S, Kawakami Y, Arakawa Y, Maruo K, Chiba S, Suzuki H, Kojima H, Tachikawa H, Yamagata K. TMPRSS2 gene polymorphism common in East Asians confers decreased COVID-19 susceptibility. Front Microbiol. 2022 Nov 30;13:943877. (JIF_{2022}=5.2)
85. Yamaguchi Y, Sugitani T, Yoshida S, Maruo K. Confirmatory efficacy testing for individual dose-placebo comparisons using serial gatekeeping procedure in dose-finding trials with multiple comparison procedures-modeling. Pharm Stat. 2022 Nov;21(6):1309-1323. (JIF_{2022}=1.5)

2　論文（誌上発表）：総説

なし

3　学会発表（国際）

1. Weni W, Shimizu M, Ando-Ohmura C, Ozaki A. Validity and reliability of Indonesian translation of sense of competence in dementia care staff scale. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars. Tokyo, Japan, 2023.2.28-3.1.
2. Ohta T, Kojima N, Osuka Y, Hatanaka S, Tanaka K, Sasai H. Age-specific relationship between hand-grip strength and the onset of cognitive decline among older Japanese women: The Otassha Study. ACSM 2023 Annual Meeting and World Congresses, 2023.5.30-6.2.
3. Daimaru K, Osuka Y, Kojima N, Mizukami K, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Association of polypharmacy with the severity of frailty in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
4. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is comparable to the Kihon Checklist in determining frailty: an equivalence testing. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
5. Hatanaka S, Sasai H, Shida T, Osuka Y, Kojima N, Ohta T, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Association between dynapenia and poor cognitive function in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
6. Hinakura K, Sakurai R, Sasai H, Ogawa S, Seino S, Hata T, Fujiwara Y, Awata S. Characteristics of wearable activity trackers users and association with health status among older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
7. Jikumaru N, Umeda M, Tsuzuki T, Sato T, Omori Y, Sasai H. Disturbed sleep-wake rhythm and cognitive dysfunction among inpatients in a geriatric hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
8. Kojima N, Sasai H, Osuka Y, Shinkai S, Ishii K, Kohda N, Kim H. Association between phylum-level gut microbial composition and amyloid positron emission tomography results. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
9. Motokawa K, Iwasaki M, Mikami Y, Wada Y, Tabata F, Hayakawa M, Shirobe M, Kalantar L, Osuka Y, Kojima N, Sasai H, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S. Association between serum albumin redox state and dietary protein intake among community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
10. Nakagawa H, Sasai H, Tanaka K. Physical fitness levels among colon cancer survivors with a stoma: a preliminary study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
11. Ohta T, Shida T, Kojima N, Osuka Y, Tanaka M, Ishii K, Shinkai S, Kim H, Sasai H. Identification of sarcopenia indices related to region-specific brain volume among community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
12. Osuka Y, Kojima N, Daimaru K, Ono R, Sugie M, Omura T, Ueda T, Maruo K, Inoue S, Sasai H. Effects of the Japanese National Health Exercise (Radio-Taiso) on health-related quality of life and physical fitness in older adults with frailty: A randomized controlled trial. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
13. Saito K, Kojima N, Osuka Y, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Association between dietary vitamin C intake and physical performance among older Japanese: the Itabashi Longitudinal Study on Aging. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
14. Sasai H, Kawai H, Osuka Y, Kojima N, Obuchi SP. Recent studies in frailty and cognitive functions: The Otassha Study (Dementia 07: Challenges and Prospects of Integrated Cohort for Frailty and Dementia). IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
15. Sasai H. Validity and utility of wearable devices for promoting health among community-dwelling older adults (Geriatrics 12: Digital technology and health of older people). IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
16. Shida T, Osuka Y, Kojima N, Hatanaka S, Ohta T, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Development and validation of a simple equation for identifying sarcopenia using bioelectrical impedance-derived metrics. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
17. Yamashiro D, Yamashita M, Abe T, Takahashi Y, Sato K, Fujiwara Y, Awata S, Sasai H, Obuchi SP,

Ishizaki T, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Associated factors for depressed symptoms among community-dwelling older adults by level of cognitive function: IRIDE Cohort Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.

18. Ohta T, Hatanaka S, Li J, Furuya K, Kinoshita K, Otsuka R, Kawamura M, Watanabe Y, Matsudaira K, Oka H, Osuka Y. The influence of resistance training on neurological muscle quality in older adults: a systematic review and meta-analysis. 9th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Academia, Singapore, 2023.10.26-28.
19. Hatanaka S, Ohta T, Li J, Furuya K, Kinoshita K, Otsuka R, Kawamura M, Watanabe Y, Matsudaira K, Oka H, Osuka Y. Intervention to reduce intermuscular adipose tissue in older adults: a systematic review and meta-analysis. 9th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Academia, Singapore, 2023.10.26-28.
20. Osuka Y, Okubo Y, Hatanaka S, Maruo K, Oka H, Nakata Y, Lord SR, Sasai H. Predictive validity and reliability of the short-form Occupational Fall Risk Assessment Tool. Australia and New Zealand Falls Prevention Society and World Falls Congress 2023 Joint Conference. Perth, Australia, 2023.11.26-28.
21. Obuchi SP, Toba K, Smart Watch Innovation for Next Geriatrics and Gerontology (SWING-Japan) members. An attempt to develop a digital biomarker for frailty. International Conference for Healthy Aging and Biomarkers, Taipei, 2023.12.01-02.
22. Xu D, Wang Z, Kitajima T, Nakamura T, Shimura H, Takeuchi H, Tan Y, Ge R, Qian K, Hu B, Schuller BW, Yamamoto Y. An end-to-end model for mental disorders detection by spontaneous physical activity data. IEEE International Conference on Data Mining Workshops (ICDMW), Beijing, 2023.12.01-04.
23. Daimaru K, Hatanaka S, Osuka Y, Kojima N, Sasai H. Associations of polypharmacy and potentially inappropriate medications with frailty in community-dwelling older Japanese women: The Otassha Study. International Conference on Frailty and Sarcopenia Research 2024, Albuquerque, USA, 2024.3.20-22.
24. Hatanaka S, Tanaka K, Sasai H. Phase angle for muscle quality assessment: comparison with muscle mass in relation to physical function. International Conference on Frailty and Sarcopenia Research 2024, Albuquerque, USA, 2024.3.20-22.
25. Ohta T, Osuka Y, Daimaru K, Shida T, Kojima N, Maruo K, Iizuka A, Kitago M, Fujiwara Y, Sasai H. Changes in step counts and physical activity during mobile health (mHealth) apps intervention in community-dwelling older adults with frailty: a pilot one-arm trial. International Conference on Frailty and Sarcopenia Research 2024, Albuquerque, USA, 2024.3.20-22.
26. Osuka Y, Takeshima N, Kojima N, Kohama T, Fujita E, Kusunki M, Kato Y, Brechue WF, Sasai H. Discrimination of frailty phenotype by Kinetic™-based stepping parameters. International Conference on Frailty and Sarcopenia Research 2024, Albuquerque, USA, 2024.3.20-22.

4 学会発表（国内）

1. 志田隆史，大須賀洋祐，小島成実，本川佳子，岩崎正則，稲垣宏樹，宮前史子，岡村毅，平野浩彦，粟田主一，笹井浩行．握力の測定方法の違いがサルコペニア有病割合に及ぼす影響：欧米式と日本式の比較．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
2. 大田崇央，小島成実，大須賀洋祐，畑中翔，笹井浩行．握力と膝進展筋力は認知機能低下の予測因子となるか:お達者研究．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
3. 畑中翔，志田隆史，小島成実，大田崇央，大須賀洋祐，笹井浩行．重症サルコペニア発症に対するBMIと体表面積の予測能：お達者研究．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
4. 出口直樹，小島成実，大須賀洋祐，本川佳子，岩崎正則，稲垣宏樹，宮前史子，岡村毅，平野浩彦，粟田主一，笹井浩行．都市在住高齢者におけるスマートウォッチへの関心に関連する要因の性差：板橋健康長寿縦断研究．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
5. 大須賀洋祐，野藤悠，清野諭，丸尾和司，岡敬之，新開省二，藤原佳典，笹井浩行．高齢就労者に対する多要素介入の安全性，受容性，潜在的有効性：予備的ランダム化比較試験．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
6. 笹井浩行，出口直樹，雛倉圭吾，小川将，桜井良太，粟田主一．地域高齢住民の調査におけるデジタル・ディバイドを考える（シンポジウム2-2 身体活動促進に資するデジタル・ディバイド解消への挑戦）．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
7. 辻本健彦，中田由夫，井上茂，田中茂穂，宮地元彦，岡浩一朗，笹井浩行．PA Platformを活用した身体活動の評価支援とデジタル・ディバイド（シンポジウム2-2 身体活動促進に資するデジタル・ディバイド解消への挑戦）．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
8. 甲斐裕子，中田由夫，笹井浩行，松尾知明，蘇リナ，辻本健彦，水島諒子，奥原剛．働く人を対象とした身体活動ガイドラインの概要と職域での活用．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5.
9. 畑山大知，畑中翔，久保潤二郎．陸上競技・中長距離選手の漸増負荷運動中の酸素摂取動態と筋線維組成の関係．第35回ランニング学会大会，東京，2023.3.4-5.
10. 笹井浩行．臨床に活かす活動量計測の基礎と実践（教育講演）．第21回日本電気生理運動学会／第9回計測自動制御学会電気生理研究会，大阪，2023.3.11-12.
11. 畑中翔，志田隆史，小島成実，大須賀洋祐，笹井浩行．基本チェックリストに位相角を加えることでフレイルの判別精度は高まるか．第21回日本電気生理運動学会／第9回計測自動制御学会電気生理研究会，大阪，2023.3.11-12.
12. 久保潤二郎，畑中翔，西村三郎，森田哲史，有川秀之．小学校低学年時に短距離走、持久走能力の高い児童は、高学年でも能力が高いのか？．日本発育発達学会第21回大会，愛知，2023.3.18-19.
13. 大須賀洋祐，大久保善郎，野藤悠，丸尾和司，岡敬之，新開省二，藤原佳典，笹井浩行．高齢労働者のための就業転倒リスク評価ツール（OFRAT）の予測妥当性と信頼性検証．第96回日本産業衛生学会．2023.5.10-12.
14. 出口直樹，田中亮，鄭勳九，生田祥也，安達伸生．ロコモティブシンドロームを呈した地域在住女性高齢者におけるサルコペニア肥満とフレイルリスクの関連．第96回日本整形外科学会学術総会，横浜，2023.5.12-14.
15. 野口律奈，小峰昇一，志田隆史．腸管通過時間と食習慣の関連について．日本家政学会第75回大会，東京，2023.5.26-28.

16. 岡村毅，多賀努，稲垣宏樹，宮前史子，宇良千秋，枝広あや子，笹井浩行，平野浩彦，粟田主一．認知症であることを地域の人に知らせるか：一般論としてはどうか、そして自分事としてはどうか．第24回日本認知症ケア学会大会，2023.6.3-4.
17. 鈴木隆雄，西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，阿部巧，島田裕之，大塚礼，ILSA-J Group：藤原佳典・大渕修一・平野浩彦・鈴木宏幸・村山洋史・岩崎正則・小島成実・飯島勝矢・吉村典子・渡辺修一郎・山田実・村木功・近藤克則・新村健．地域在住高齢者の健康関連変数の2007年から2017年の推移：長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）．第65回日本老年医学会学術集会，横浜，2023.6.6.
18. 大塚礼，西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，阿部巧，島田裕之，鈴木隆雄，ILSA-J Group：藤原佳典・大渕修一・平野浩彦・鈴木宏幸・村山洋史・岩崎正則・小島成実・飯島勝矢・吉村典子・渡辺修一郎・山田実・村木功・近藤克則・新村健．地域在住高齢者のサルコペニア頻度の2012年から2017年の推移：長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）．第65回日本老年医学会学術集会，横浜，2023.6.6.
19. 阿部巧，藤原佳典，北村明彦，野藤悠，西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，大塚礼，鈴木隆雄，ILSA-J Group：大渕修一・平野浩彦・鈴木宏幸・村山洋史・岩崎正則・小島成実・飯島勝矢・吉村典子・渡辺修一郎・山田実・村木功・近藤克則・新村健・島田裕之．JST版活動能力指標との関連性における身体機能と認知機能の差異：長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）．第65回日本老年医学会学術集会，横浜，2023.6.6.
20. 東浩太郎，大須賀洋祐，小島成実，笹井浩行，井上聡．都市部在住高齢者におけるビタミンＫ充足度と認知機能低下の新規発生の関連：お達者研究．第23回日本抗加齢医学会総会，東京，2023.6.9-11.
21. カランタル玲奈，本川佳子，早川美知，三上友里江，白部麻樹，枝広あや子，岡村毅，笹井浩行，平野浩彦，粟田主一．地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態の関連の横断的検証：板橋健康長寿縦断研究．第65回日本老年医学会学術集会，2023.6.16-18.
22. 安藤貴史，岸本裕歩，笹井浩行，矢次春風．コロナ流行に伴う高齢者の身体活動の量・質の変化：J-SLAC研究の2地域縦断調査．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
23. 井上茂，岡浩一朗，石井香織，小熊祐子，甲斐裕子，岸本裕歩，笹井浩行，田中茂穂，中田由夫，天笠志保．標準化された方法によって評価した日本人の身体活動・座位行動の実態．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
24. 岸本裕歩，笹井浩行，矢次春風，安藤貴史．COVID-19による行動制限下における高齢者の自宅内および外出時の活動満足度と主観的な健康感および幸福感との関連：J-SLAC研究．第25回日本運動疫学会学術総会．名古屋，2023.6.24-25.
25. 木下佳大，笹井浩行，石田水里，村下公一．一般地域住民における座位行動・身体活動と心代謝性疾患リスク因子の関連．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
26. 笹井浩行，大須賀洋祐，畑中翔，志田隆史，大田崇央，安藤千晶，志村広子，出口直樹，大丸香，小島成実．10分バウト要件の排除が IPAQ で調査した身体活動ガイドライン充足に及ぼす影響：高齢者コホートにおける埋め込み型ランダム化比較試験．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
27. 笹井浩行，中田由夫，北畠義典，種田行男．運動疫学セミナーの評価に関する調査研究（終了報告）．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
28. 大田崇央，小島成実，志田隆史，畑中翔，大須賀洋祐，笹井浩行．高齢者コホート研究からの脱落要因の探索：お達者研究．第25回日本運動疫学会学術総会．名古屋，2023.6.24-25.
29. 中潟崇，笹井浩行，南里妃名子，小野玲．日本と主要諸外国の国を代表するサーベイランス調査における身体活動・座位行動調査法の比較．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
30. 畑中翔，大須賀洋祐，小島成実，安藤貴史，笹井浩行．コロナ禍に新たに運動を始めた都市在住高齢者の特徴：お達者研究．第25回日本運動疫学会学術総会，名古屋，2023.6.24-25.
31. 田中亮，渡邊夏未，鄭勳九，光武翼，猪村剛史，田中繁治，出口直樹，濱田和明，廣濱賢太．睡眠衛生は若年者の運動器の痛みを緩和させるか？ 第27回日本ペインリハビリテーション学会学術大会，愛知，2023.6.24-25.
32. 西元淳司，出口直樹，田中繁治，井上優，田中亮．生物心理社会モデルに基づく術後膝痛予防プログラムが人工膝関節全置換術後の遷延性術後痛に及ぼす影響．第27回日本ペインリハビリテーション学会学術大会，愛知，2023.6.24-25.
33. Shimoda M, Shida T, Watanabe M, Fukushima G, Suzuki T, Suzuki S. The relationship of psoas muscle capacity of hepatobiliary pancreatic cancer patents and urine titin n-terminal fragment levels. 第35回日本肝胆膵外科学会学術集会，東京，2023.6.30-7.1.
34. 下田貢，志田隆史，渡邊充，福島元太郎，鈴木隆志，島崎二郎，鈴木修司．Association of lumbar muscle volume and urinary titin n-terminal fragment in patients with gastrointestinal tumors. 第78回日本消化器外科学会総会，函館，2023.7.12-14.（口頭発表，主題関連演題）
35. 下田貢，志田隆史，新井元，鈴木隆志，鈴木修司．膵腫瘍患者におけるサルコペニア合併と尿中Titin N-terminal Fragmentとの関連性．第54回日本膵臓学会大会．2023.7.21-22（口頭発表，ワークショップ）
36. 吉田保子，志田隆史，大須賀洋祐，輿那嶺正人，笹井浩行，竹越一博．尿および唾液中cell-free circulating DNAによるサルコペニアの新規バイオマーカーの探索：パイロット研究．第17回日本臨床検査学教育学会学術大会，奈良，2023.8.23-24.
37. 中田由夫，甲斐裕子，笹井浩行，松尾知明，蘇リナ，辻本健彦，水島諒子，奥原剛．働く人が職場で活動的に過ごすためのポイント（シンポジウム4：新たに公表される「健康づくりのための身体活動・座位行動指針」に関するインフォメーションシート）．日本体力医学会特別大会―2023東京シンポジウム―．2023.9.17.
38. 志田隆史，青木海，竹越一博，鈴木修司，下田貢．尿中N-titinは消化器癌における筋萎縮および低栄養のサロゲートマーカーとなり得るか．日本医療検査科学会第55回大会，横浜，2023.10.6-8.
39. 堀井雪乃，小林崇平，志田隆史，佐藤智明，松下一之，清宮正徳．肝臓癌の発症・進展機序の解明．日本医療検査科学会第55回大会，横浜，2023.10.6-8.
40. 篠永篤志，松本浩実，上川真奈，掛屋咲葵，古市州郎，三谷茂，田中繁治，出口直樹，田中亮．人工股関節全置換術患者における術前の年代別サルコペニアの有病率．第50回日本股関節学会学術集会．第50回日本股関節学会学術集会，福岡，2023.10.27-28.
41. 出口直樹，志田隆史，大田崇央，小島成実，安藤千晶，本川佳子，岡村毅，平野浩彦，粟田主一，笹井浩行．地域高齢者における疼痛と中枢性感作別にみた運動機能、精神的健康度、生活の質、血液バイオマーカーの特徴．第11

回日本予防理学療法学会学術大会，福岡，2023.10.13-15.
42. 篠永篤志，松本浩実，上川真奈，掛屋咲葵，古市州郎，三谷茂，田中繁治，出口直樹，田中亮．人工股関節全置換術患者における術前の年代別サルコペニアの有病率．第50回日本股関節学会学術集会．2023.10.27-28.
43. 江尻愛美，河合恒，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，解良武士，大渕修一．地域高齢者の包括的健康調査「お達者健診」（指定型オーガナイズドセッション）． 第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
44. 佐藤和之，河合恒，今村慶吾，江尻愛美，笹井浩行，藤原佳典，平野浩彦，井原一成，大渕修一．地域在住高齢者における歩行速度の加齢変化に対するネガティブな主観的認識および認識ギャップの関係とフレイルの関連-お達者健診-．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
45. 志田隆史，青木海，竹越一博，鈴木修司，下田貢．psoas volume index(PVI)は消化器癌における栄養病態を反映しうるか（一部指定型オーガナイズドセッション）．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
46. 出口直樹，桜井良太，雛倉圭吾，笹井浩行．都市部在住高齢者におけるスマートウォッチの受容（指定型オーガナイズドセッション）．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
47. 出口直樹，小島成実，大須賀洋祐，畑中翔，平野浩彦，岡村毅，栗田主一，笹井浩行．変形性膝関節症を有する高齢者の24時間行動ガイドラインの達成状況と精神的健康度および膝痛の関連．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
48. 西元淳司，出口直樹，田中繁治，井上優，田中亮．遷延性術後痛のリスクがある人工膝関節全置換術後患者に対する患者教育の効果．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
49. 濱田和明，光武翼，堀智成，岩本義隆，出口直樹，猪村剛史，田中亮．体組成がフレイルに与える影響：システマティックレビュー．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
50. 髙橋淳太，河合恒，江尻愛美，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，大渕修一．地域在住高齢者における生活活動の実施パターンの解明：お達者研究．第10回日本予防理学療法学会学術大会，函館，2023.10.28-29.
51. 笹井浩行．公衆衛生に活かす身体活動評価法の基礎と実践（シンポジウム20 身体活動・座位指標を公衆衛生研究に利用するために抑えておきたいポイントと課題）．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
52. 枝広あや子，本橋佳子，金子真由美，宇良千秋，大村千晶，白部麻樹，宮前史子，岡村毅．読経の高齢者への効果 第一報 僧侶の機能特性に関する予備的調査．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
53. 金子真由美，本橋佳子，枝広あや子，宇良千秋，安藤千晶，白部麻樹，宮前史子，岡村毅．読経の高齢者への効果 第三報 プログラム参加の促進要因の検討．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
54. 本橋佳子，金子真由美，枝広あや子，宇良千秋，安藤千晶，白部麻樹，宮前史子，岡村毅．読経の高齢者への効果 第二報 集合型プログラムの施行．第82回日本公衆衛生学会総会，つくば，2023.10.31-11.2.
55. 下田貢，志田隆史，鈴木修司．尿中Titin N-terminal Fragmentは悪性腫瘍肝切除患者のサルコペニアおよび栄養病態を反映するか．第31回日本消化器関連学会週間（JDDW） 2023.11.2-5.
56. 大須賀洋祐，小島成実，大丸香，杉江正光，大村卓也，本川佳子，植田拓也，丸尾和司，小野梨沙，青山敏彦，井上茂，笹井浩行．フレイル高齢者の健康関連QoLに対するラジオ体操の有効性：ランダム化比較試験のper protocol解析．第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会，東京，2023.11.4-5.
57. 吉田保子，志田隆史，大須賀洋祐，與那嶺正人，笹井浩行，竹越一博．血液中のcell-free DNA濃度とmitochondria由来cell-free DNA量によるサルコペニアの新規バイオマーカー探索―パイロット研究．第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会，東京，2023.11.4-5.
58. 大田崇央．コグニティブフレイルの予防としての運動と体力（学会企画シンポジウム4 コグニティブフレイル）．第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会，東京，2023.11.4-5.
59. 安藤千晶，木村慎二，近藤悦子，大鶴直史，維持期の慢性腰痛症患者に対するスマートフォン版いきいきリハビリノートを用いたテレナーシングの経験，第16回日本運動器疼痛学会，富山，2023.11.04.
60. 中田由夫，甲斐裕子，笹井浩行，松尾知明，蘇リナ，辻本健彦，水島諒子，奥原剛．働く人のためのアクティブガイド．第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会．2023.11.11-12.
61. 笹井浩行，中田由夫．活動レベルの高い労働者に対するアプローチ．第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会．2023.11.11-12.
62. 澤井朱美，志田隆史，星川佳広，植田真白，加藤優里，時野谷勝幸，夏井裕明，竹越一博．プロゲステロンは運動由来cfDNAの産生を抑制する．第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会．2023.11.11-12.
63. 志田隆史，吉田保子，大田崇央，小島成実，大須賀洋祐，笹井浩行．血清メタボロミクスによるサルコペニアに対する新規バイオマーカーの同定：パイロットスタディ．第70回日本臨床検査医学会学術集会，長崎，2023.11.16-19.
64. 江涛，河合恒，ヤンイチ，端詰勝敬，橋本和明，竹内武昭，江尻愛美，笹井浩行，藤原佳典，平野浩彦，大渕修一，井原一成．軌跡分析による高齢期うつの分類－基本チェックリストのうつ指標の面接式と自記式による実施．第88回日本健康学会総会，弘前，2023.12.1-2.
65. 江口佳奈，本川佳子，岩崎正則，白部麻樹，五味達之祐，カランタル玲奈，早川美知，枝広あや子，稲垣宏樹，笹井浩行，栗田主一，平野浩彦．地域在住高齢者における日常の食生活の咀嚼行動と年齢の関連の予備的研究．第27回日本病態栄養学会年次学術集会．京都，2024.1.26-28.
66. 江尻愛美，河合恒，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，井原一成，笹井浩行，大渕修一．身体機能が低下した高齢者におけるソーシャルサポートと抑うつの関連：お達者健診研究．第34回日本疫学会学術総会．滋賀，2024.1.31-2.2.
67. 西田和正，河合恒，江尻愛美，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，渡辺修一郎，大渕修一．グループ活動参加が高齢者の歩行速度に及ぼす影響：お達者健診研究．第34回日本疫学会学術総会．滋賀，2024.1.31-2.2.
68. 雛倉圭吾，桜井良太，笹井浩行，清野諭，秦俊貴，藤原佳典，栗田主一．インドア派の高齢者の精神的健康状態：オンラインでの他者交流に着目した検討．第34回日本疫学会学術総会．滋賀，2024.1.31-2.2.
69. 西中川まき，桜井良太，笹井浩行，武林亨．疾患を有する中高年者のヘルスアプリの利用と健康行動の関連に対するヘルスリテラシーの関与．第25回日本健康支援学会年次学術大会，名古屋，2024.3.2-3.

70. 黒崎喬嗣，内田遼太，引地優人，笹井浩行，中垣内真樹，重松良祐．要支援・要介護高齢者におけるスクエアステップエクササイズの実践に対する主観的感覚：質的研究を用いた検討．第25回日本健康支援学会年次学術大会，名古屋，2024.3.2-3.
71. 大田崇央，大須賀洋祐，大丸香，志田隆史，小島成実，丸尾和司，飯塚あい，北郷萌，藤原佳典，笹井浩行．地域在住フレイル高齢者におけるモバイルヘルス（mHealth）アプリの利用可能性を評価する探索的研究：予備試験．第25回日本健康支援学会年次学術大会，名古屋，2024.3.2-3.
72. 安藤千晶，大田崇央，畑中翔，笹井浩行．骨粗鬆症検診受診に関連する要因の探索：お達者研究．第25回日本健康支援学会年次学術大会，名古屋，2024.3.2-3.
73. 吉越駿，桜井良太，高橋佳史，佐藤研一郎，大田崇央，畑中翔，安藤千晶，今村慶吾，河合恒，笹井浩行，鈴木宏幸，栗田主一．地域在住高齢者における歩行速度増加時の戦略パターンと認知機能との関連．第20回姿勢と歩行研究会・姿勢と平衡国際シンポジウム，東京，2024.03.23.

5　著書等

1. 中川裕貴，志田隆史．一次代謝物の相関分析を用いた性別による加齢の差異解析．島津製作所アプリケーションニュース．2023
2. 笹井浩行，小島成実，大須賀洋祐，安藤貴史，金憲経．コロナ禍における都内在住高齢者の運動・栄養・社会参加の変化と認知機能低下sの関連：2019～2022年の4時点データを用いた縦断研究．第37回若手研究者のための健康科学研究助成報告書．2023.
3. 笹井浩行．アプリで提供されるStandingTallバランス運動プログラムにより高齢者の転倒を予防できる．月刊 健康づくり 46(5)：19，2023.5.
4. 金憲経，大須賀洋祐，小島成実，笹井浩行．地域在住高齢女性におけるサルコペニア・フレイルと骨粗鬆症．整形・災害外科 66(3)：275-281，2023.3.
5. 田中亮，緒形ひとみ，光武翼，猪村剛史，田中繁治，出口直樹．運動と栄養に睡眠管理を加えたロコモティブシンドローム対策の効果の検証－若年者を対象に－．厚生労働科学研究費補助金分担研究報告書．2023
6. 光武翼，猪村剛史，岩本義隆，出口直樹，田中亮．フレイルの危険因子に関するエビデンスの評価．厚生労働科学研究費補助金分担研究報告書．2023
7. 田中亮，出口直樹，秋田智之．ロコモティブシンドロームとサルコペニアの因果関係の検証.厚生労働科学研究費補助金分担研究報告書．2023.
8. 出口直樹，秋田智之，田中亮．ロコモティブシンドロームとフレイルの因果関係の検証．厚生労働科学研究費補助金分担研究報告書．2023.
9. 出口直樹．認定理学療法士 認定臨床カリキュラム シラバス．pp163-165，2023
10. 志村広子．勤労者の身体活動実践と健康増進を支援するIoTシステムの開発．科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（令和４年度）．2023.
11. 笹井浩行．転倒予防特論．介護予防主任運動指導員テキスト．
12. 笹井浩行．転倒予防実習．介護予防主任運動指導員テキスト．
13. 笹井浩行．パーキンソン病に関連するテクノロジーと支援の可能性．
14. 安藤千晶．看護師の慢性疼痛患者への対応 集学的痛みセンターにおける看護業務の意義と今後の展望， ペインクリニック(株)，シービーアール社，44(11)，1-7，2023.
15. 安藤千晶．特集2 認知症高齢者の苦痛・苦悩を軽減する 痛みのアセスメントと支援のポイント，コミュニティケア，日本看護協会出版会，50-57，2023.
16. 安藤千晶．痛み行動観察尺度:日本語版DOLOPLUS-2の臨床への普及に向けて，安藤千晶,科学研究費基盤C 実施状況報告書(研究実施状況報告書)，2023.
17. 笹井浩行．変形性膝関節症患者に対する自動テキストメッセージでサポートされる自己管理型筋力強化運動および身体活動プログラムの有効性:ランダム化比較試験（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012581，2023．解説記事/査読なし
18. 笹井浩行．腰痛関連障害患者に対するアプリ配信によるテーラーメイド型自己管理サポートプログラムの有効性：selfBACKランダム化比較試験（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012580，2023．解説記事/査読なし
19. 笹井浩行．乳房再建を伴わない乳がん手術後の運動プログラムの有効性:多施設ランダム化比較試験および経済評価（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012579，2023．解説記事/査読なし
20. 笹井浩行．変形性膝関節症に対するビデオ通話を使った運動および減量プログラムの有効性:ランダム化比較試験（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012578，2023．解説記事/査読なし
21. 笹井浩行．末梢動脈疾患患者に対する在宅型ウォーキング介入による歩行機能への影響:MOSAICランダム化比較試験（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012577，2023．解説記事/査読なし
22. 笹井浩行．心不全で入院した高齢患者に対する身体的リハビリテーションの有効性（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012576，2023．解説記事/査読なし
23. 笹井浩行．フレイル高齢者における多要素介入による移動制限の予防効果:ランダム化比較試験(SPRINTT project)（文献紹介）．公財）健康・体力づくり財団 健康・体力づくりと運動に関する文献データベース．管理番号：PB012575，2023．解説記事/査読なし
24. 笹井浩行．乳房再建を伴わない乳がん手術後の運動実践により上肢障害が軽減する（運動・身体活動のエビデンス197）．月刊 健康づくり 46(12)：19，2023.12.
25. 小野玲，宮地元彦，南里妃名子，中潟崇，笹井浩行．身体活動・座位行動指標の評価法の開発・妥当性検討．厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業） 健康づくりのための身体活動・運動の実践に影響を及ぼす原因の解明と科学的根拠に基づく対策の推進のためのエビデンス創出（22FA1004）分担研究報告書，2023.7.

26. 笹井浩行，岡浩一朗，井上茂．文部科学省科学研究費 基盤研究B「高齢者の24時間身体活動・座位行動・睡眠ガイドライン策定に向けた科学的基盤の構築」2022年度研究実績報告書，2023.5.
27. 野村卓生，米田昭子，笹井浩行，田村好史，岡敬之，河江敏広，片岡弘明．文部科学省科学研究費 基盤研究B「高齢糖尿病患者の身体的フレイル予防を目的とした予後予測に基づく介入戦略の構築」2022年度研究実績報告書，2023.5.
28. 田中喜代次，片山靖富，中田由夫，笹井浩行．文部科学省科学研究費 基盤研究C「中年肥満者への減量介入が20年後のフレイル予防にもたらす効果」2022年度研究実績報告書，2023.5.
29. 重松良祐，笹井浩行，種田行男，中田由夫．文部科学省科学研究費 基盤研究C「スポーツ庁ガイドライン策定後における運動部活動の傷害予防に向けたリスク要因の探索」2022年度研究実績報告書，2023.5.
30. 中川ひろみ，田中喜代次，笹井浩行．文部科学省科学研究費 基盤研究C「高齢大腸がんサバイバーの排便機能障害に対する複合介入プログラムの開発」2022年度研究実績報告書，2023.5.
31. 笹井浩行．高齢者の運動機能低下予防のためのマルチコ運動のすすめ．東京都介護予防・フレイル予防推進支援センターメールマガジン．2023.7.

６　特許

なし

７　その他

なし

オーラルフレイルと栄養

１ 論文（誌上発表）：原著

1. Shirobe M, Edahiro A, Motokawa K, Morishita S, Ohara Y, Motohashi Y, Iwasaki M, Watanabe Y, Hirano H. Association between Dementia Severity and Oral Hygiene Management Issues in Older Adults with Alzheimer's Disease: A Cross-Sectional Study. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2023; 20(5):3841. （原著・査読あり）（IF: 4.614）
2. Nagatani M, Tanaka T, Son BK, Kawamura J, Tagomori J, Hirano H, Shirobe M, Iijima K. Oral frailty as a risk factor for mild cognitive impairment in community-dwelling older adults: Kashiwa study. Exp Gerontol. 2023 Feb;172:112075. （原著・査読あり）（IF: 4.253）
3. Nishimoto M, Tanaka T, Hirano H, Watanabe Y, Ohara Y, Shirobe M, Iijima K. Severe Periodontitis Increases the Risk of Oral Frailty: A Six-Year Follow-Up Study from Kashiwa Cohort Study. Geriatrics (Basel). 2023 Feb 13;8(1):25. （原著・査読あり）（IF: 3.737）
4. Takeda M, Watanabe Y, Taira K, Miura K, Ohara Y, Iwasaki M, Ito K, Nakajima J, Iwasa Y, Itoda M, Nishi Y, Watanabe Y, Kishima M, Hirano H, Shirobe M, Minakuchi S, Yoshida M, Yamazaki Y. Association between Death or Hospitalization and Observable Variables of Eating and Swallowing Function among Elderly Residents in Long-Term Care Facilities: A Multicenter Prospective Cohort Study. Healthcare 2023, 11, 1827. （原著・査読あり）（IF：3.160）
5. Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Shirobe M, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K. Oral frailty five-item checklist to predict adverse health outcomes in community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Sep;23(9):651-659. doi: 10.1111/ggi.14634. （原著・査読あり）（IF：3.387）
6. Tsuyoshi Okamura, Tsutomu Taga, Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae, Chiaki Ura, Mika Sugiyama, Ayako Edahiro, Maki Shirobe, Keiko Motokawa, Narumi Kojima, Yosuke Osuka, Masanori Iwasaki, Hiroyuki Sasai, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata.Barrier to sharing a dementia diagnosis with neighbors in Tokyo. Geriatr Gerontol Int. 2023 Oct;23(10):761-763. doi: 10.1111/ggi.14662. （原著・査読あり）（IF：3.387）
7. Karl G H Parisius, Merel C Verhoeff, Frank Lobbezoo, Limor Avivi-Arber, Joke Duyck, Hirohiko Hirano, Katsuya Iijima, Barbara Janssens, Anastassia Kossioni, Chia-Shu Lin, Gerald McKenna, Frauke Müller, Martin Schimmel, Anita Visser, Yutaka Watanabe, Robbert J J Gobbens.Towards an operational definition of oral frailty: A e-Delphi study. Arch Gerontol Geriatr. 2023 Sep 6:117:105181. （原著・査読あり）（IF：1.2）
8. Takeshi Kera, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi.Respiratory sarcopenia is a predictor of all-cause mortality in community-dwelling older adults-The Otassha Study. J Cachexia Sarcopenia Muscle. 2023 Aug;14(4):1894-1899. doi: 10.1002/jcsm.13266. （原著・査読あり）（IF:8.9）
9. Sachiko Yamazaki, Chiaki Ura, Hiroki Inagaki, Mika Sugiyama, Fumiko Miyamae, Ayako Edahiro, Kae Ito, Masanori Iwasaki, Hiroyuki Sasai, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata.Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people. Psychogeriatrics. 2023 Nov 6.doi: 10.1111/psyg.13042. （原著・査読あり）（IF:1.67）
10. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi.Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults: the Otassha study. Front Public Health. 2023 Aug 22:11:1248462.doi: 10.3389/fpubh.2023.1248462. （原著・査読あり）（IF:5.2）
11. Takeshi Kera, Yosuke Osuka, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi.Development and validation of a rapid sarcopenia screening questionnaire: The Otassha study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov 14. doi: 10.1111/ggi.14730. （原著・査読あり）（IF：3.387）
12. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi.Impact of combinations of subscale declines in higher-level functional capacity on 8-year all-cause mortality among communty-dwelling older Japanese adults. Arch

Gerontol Geriatr. 2023 Nov:114:105096. doi: 10.1016/j.archger.2023.105096. (原著・査読あり) (IF:1.2)

13. Masaharu Murakami, Hirohiko Hirano, Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Keiko Motokawa. Development of a multiple masticatory function model based on the evaluation of sarcopenia: A cross-sectional survey of the Otassha study. Arch Oral Biol. 2023 Nov:155:105803.doi: 10.1016/j.archoralbio.2023.105803. (原著・査読あり) (IF:2.64)
14. Narumi Kojima, Miji Kim, Kyoko Saito, Yuko Yoshida, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi, Hiroyuki Shimada, Takao Suzuki, Hajime Iwasa, Hunkyung Kim. Effects of Daily Consumption of Soy Products on Basic/Instrumental Activities of Daily Living in Community-Dwelling Japanese Women Aged 75 Years and Older: A 4-Year Cohort Study. Womens Health Rep (New Rochelle). 2023 May 15;4(1):232-240. doi: 10.1089/whr.2022.0076. (原著・査読あり) (IF:1.3)
15. 本川 佳子, 三上 友里江, 早川 美知, 白部 麻樹, 柄澤 紀, 長谷川 隆則, 河合 恒, 大渕 修一, 平野 浩彦.地域在住高齢者の肉類摂取量とフレイル関連因子に関する横断的検討.日本サルコペニア・フレイル学会雑誌(2433-1805)7巻1号 Page112-115(2023.06).
16. 諏訪間 加奈, 岩崎 正則, 伊藤 由美, 葭原 明弘,アルコール摂取状況と歯の喪失との関連についての研究　魚沼コホート研究ベースライン調査 口腔衛生学会雑誌(0023-2831)73巻3号 Page177-184(2023.07) (IF: n/a)
17. 岩崎正則, 福原正代, 大田祐子, 藤澤律子, 角田聡子, 片岡正太, 茂山博代, 正木千尋, 安細敏弘, 細川隆司 日本人男性労働者における主食の重ね食べと歯周病の関連についての横断研究. 口腔衛生学会雑誌. 73 (1), 42-50, 2023 (原著・査読あり) (IF: n/a)
18. Kenshu Taira, Yutaka Watanabe, Kazutaka Okada, Miyako Kondo, Maaya Takeda, Kayoko Ito, Junko Nakajima, Masanori Iwasaki, Masataka Itoda, Ken Inohara, Rikimaru Sasaki, Yasuhiro Nishi, Junichi Furuya, Yoshihiko Watanabe, George Umemoto, Masako Kishima, Takashi Tohara, Yuji Sato, Mitsuyoshi Yoshida, Yutaka Yamazaki .Association between denture use and food form in older adults requiring long-term care: A multicenter cross-sectional study. J Prosthodont Res. 2023 Jul 31;67(3):366-375.doi: 10.2186/jpr.JPR_D_21_00161. (原著・査読あり) (IF:4.351)
19. Hiroshi Murayama, Mika Sugiyama, Hiroki Inagaki, Chiaki Ura, Fumiko Miyamae, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Tsuyoshi Okamura, Shuichi Awata. The Relationship Between Cognitive Decline and All-Cause Mortality Is Modified by Living Alone and a Small Social Network: A Paradox of Isolation.J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci. 2023 Nov 14;78(11):1927-1934. doi: 10.1093/geronb/gbad134. (原著・査読あり) (IF:6.2)
20. 本川佳子、須永将広、宮崎純一、徳丸季聡、石岡拓得、山邊志都子、宮島功、伴野広幸、阿部克幸、畠山桂吾、田口佳和、金井一人、石川史明、林衛、藤原太樹、鈴木克麻、原純也. 一般病院における管理栄養士の病棟配置体制が入院時の体重減少抑制に及ぼす影響. 日本臨床栄養学会雑誌 第44巻 第2号 2022. 85-89
21. 芦田 かなえ, 藤谷 順子, 本川 佳子, 坪川 操, 西村 一弘, 藤原 恵子・高アミロース米粉を利用した粥ゼリーの物性調査.日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌(1343-8441)27巻1号 Page44-52.2023.04.
22. 中村 育子, 前田 佳予子, 田中 弥生, 本川 佳子, 水島 美保, 前田 玲.終末期の在宅療養者に対する在宅訪問栄養食事指導の介入効果の検討日本在宅医療連合学会誌(2435-4007)4巻3号 Page19-27.2023.08.
23. 森茂雄, 前田玲, 中村育子, 前田佳予子, 田中弥生, 本川佳子: 人生の最終段階を含めた高齢者に対する食支援の在り方について一多職種に対する質問票による課題検討一. 日本在宅栄養管理学会誌. In press
24. 石井 智浩, 五十嵐 憲太郎, 鈴木 亜沙子, 伊藤 誠康, 大久保 昌和, 中田 浩史, 小出 恭代, 井上 正安, 小川 晃奈, 木村 純, 北村 彩, 古賀 麻奈花, 小澤 旺彦, 高野 光司, 連記 真, 飯島 守雄, 河相 安彦.基礎実習における有床義歯に関連するOSCE形式実技試験の評価の一致度について. 日大口腔科学(0385-0145)49巻2号 Page92-97(2023.06)
25. 五十嵐 憲太郎.複製義歯の応用により咀嚼障害を改善した無歯顎補綴の症例.日本補綴歯科学会誌(1883-4426)15巻3号 Page329-332(2023.07)
26. 松田 捺美, 平良 賢周, 新井 絵理, 尾崎 公哉, 山野 茂, 渡邊 裕, 山崎 裕。当初は舌痛症が疑われたが,長期経過の後にガンマナイフが奏功した高齢女性の典型的三叉神経痛の1例.北海道歯学雑誌(0914-7063)44巻 Page107-112(2023.09)
27. Kondo Y, Masaki C, Mukaibo T, Takesue Yano H, Iwasaki M, Hosokawa R. Five- to fifteen-year survival of immediately loaded implants in fully edentulous maxillae: A multilevel analysis in a retrospective cohort study. The International Journal of Oral & Maxillofacial Implants. 38(3), 516-522, 2023 (原著・査読あり) (IF: 2.912)
28. Iwasaki M, Yoshihara A, Suwama K, Zaitsu T, Suzuki S, Ihira H, Sawada N, Aida J. A cross-sectional study of the association between periodontitis and physical activity in the Japanese population. Journal of Periodontal Research. 58(2), 350-359, 2023 (原著・査読あり) (IF: 3.946)
29. NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC). Diminishing benefits of urban living for children and adolescents' growth and development. Nature. 615, 874-883, 2023 (原著・査読あり) (IF: 69.504)
30. Iwasaki M, Motokawa K, Shirobe M, Hayakawa M, Ohara Y, Motohashi Y, Edahiro A, Kawai H, Fujiwara Y, Sakata Y, Ihara K, Watanabe Y, Obuchi S, Hirano H. Serum levels of vitamin D and periodontal inflammation in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. Journal of Clinical Periodontology. 50(9), 1167-1175, 2023 (原著・査読あり) (IF: 7.478)
31. Hoshino T, Kaneko N, Yoshihara A, Iwasaki M, Suwama K, Ito Y, Tanaka J, Narita I, Ogawa H. Associations between Plasma Antibody Levels against Porphyromonas gingivalis and Atrial Fibrillation among Community-Dwelling Older Individuals in Japan: A Cross-Sectional Study. Oral Health and Preventive Dentistry. 21(1), 339-346, 2023 (原著・査読あり) (IF: 1.595)
32. NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC). Global variation in diabetes diagnosis and prevalence based on fasting glucose and hemoglobin A1c. Nature Medicine. In press, 2023 (原著・査読あり) (IF: 82.9)
33. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Hayakawa M, Miura K, Kalantar L, Edahiro A, Kawai H, Fujiwara Y, Ihara K, Watanabe Y, Obuchi S, Hirano H. Validation of self-reported articulatory oral motor skill against objectively measured repetitive articulatory rate in community-dwelling older Japanese adults: The

Otassha Study. Geriatrics & Gerontology International. 23(10), 729-735, 2023（原著・査読あり）（IF: 3.387）
34. Iwasaki M, Inoue M, Usui M, Ariyoshi W, Nakashima K, Nagai-Yoshioka Y, Nishihara T. The association between trypsin-like protease activity in the oral cavity and kidney function in Japanese workers. Journal of Clinical Periodontology. 2024 Mar;51(3):265-273.（原著・査読あり）（IF: 7.478）
35. Hatanaka S, Osuka S, Kojima N, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Relationship between phase angle and lower-extremity function in older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Nutrition. 024 Mar;119:112289.（原著・査読あり）（IF: 4.4）
36. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is non-inferior to the Kihon Checklist in screening frailty among independent older adults aged 75 years and older: The Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatrics & Gerontology International. 2024 Mar;24 Suppl 1:176-181.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
37. Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. A neighbour to consult with is important in dementia- friendly communities: Associated factors of self-efficacy allowing older adults to continue living alone in community settings. Psychogeriatrics. In press, 2023（原著・査読あり）（IF: 2）
38. Kawamura J, Tanaka T, Kanno S, Osawa K, Okabayashi K, Hirano H, Shirobe M, Nagatani M, Son BK, Lyu W, Iijima K. Relationship between a gum-chewing routine and oral, physical, and cognitive functions of community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2024 Jan;24(1):68-74.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
39. Daimaru K, Osuka Y, Kojima N, Mizukami K, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Associations of polypharmacy with frailty severity and each frailty phenotype in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Geriatr Gerontol Int. 2024 Mar;24 Suppl 1:196-201.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
40. Takahashi J, Kawai H, Ejiri M, Fujiwara Y, Hirano H, Sasai H, Obuchi S. Predicting the incidence of mild cognitive impairment with a computer-based cognitive assessment tool in community-dwelling older adults: The Otassha study. PLoS One. 2024 Jan 25;19(1):e0297433.（原著・査読あり）（IF: 3.7）
41. Kawai H, Ejiri M, Imamura K, Ito K, Fujiwara Y, Hirano H, Ihara K, Obuchi S. Three-year trajectories of social networks, face-to-face interactions, and non-face-to-face interactions among community-dwelling older adults in Japan during the COVID-19 pandemic: Otassha study. Maturitas. 2024 Feb 12;183:107943.（原著・査読あり）（IF: 4.9）
42. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-Item Checklist. Geriatr Gerontol Int. 2024 Feb 23.（原著・査読あり）（IF: 3.387）
43. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Sex-specific factors associated with acceptance of smartwatches among urban older adults: the Itabashi longitudinal study on aging. Front Public Health. 2024 Feb 23;12:1261275.（原著・査読あり）（IF: 5.2）
44. Hashimoto K, Takeuchi T, Ihara K, Obuchi S, Kawai H, Hirano H, Fujiwara Y, Hunkyung K, Watanabe Y, Hashizume M. Association Between Ego-Resilience and Social Isolation Among Urban Older People. Gerontol Geriatr Med. 2024 Mar 13;10:23337214241238069.（原著・査読あり）（IF: 2.7）

２ 論文（誌上発表）：総説

なし

３ 学会発表（国際）

1. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Yuki Ohara, Yoshiko Motohashi, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Association between Functional Assessment Staging of Alzheimer's Disease and oral hygiene management issues for older adults with Alzheimer's disease. 2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
2. Keiko Motokawa, Yurie Mikami, Yasuaki Wada, Tabata Fuka, Misato Hayakawa, Maki Shirobe, Lena Kalantar, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Hiroyuki Sasai, Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata. Albumin redox state as a biomarker for protein intake among community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging (Itabashi-LSA). 2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
3. Edahiro A, Shoji R, Ura C, MotohashiY, Hayakawa M, ShirobeM, Miyamae F, Okamura T. Preliminary study of the effects of sutra chanting on oropharyngeal and respiratory function. 2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
4. Kazuhito Miura, Masanori Iwasaki, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Misato Hayakawa, Yurie Mikami, Lena Kalantar, Yoshiko Motohashi, Kentaro Igarashi, Yuki Ohara, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Association between masseter muscle mass and regional skeletal muscle mass in older adults requiring long-term care.2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
5. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Nutritional status and feasibility of swallowing function evaluation according to the severity of Alzheimer's disease. PENSA2023. 2023.10.20-22. Taiwan.
6. Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Masanori Iwasaki, Hirohiko Hirano. Effect of home-visit-based nutritional support by registered dietitian on the dietary habits of home-care residents. PENSA2023. 2023.10.20-22. Taiwan.
7. Iwasaki M. Evaluation and management of oral function in an ageing population from the viewpoint of oral

frailty and oral hypofunction International Association of Gerontology and Geriatrics-Asia/Oceania Regional Congress 2023 Satellite Symposium on Gerodontology, Kyoto, Japan, 2023.10.26
8. Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Shiho Morishita, Masanori Iwasaki, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Predictive factors for swallowing function decline in older adults with Alzheimer's disease: a 1-year longitudinal study. ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
9. Motokawa Keiko, Iwasaki Masanori, Shirobe Maki, Sakata Yasuyuki, Kato Mana, Obuchi Shuichi, Kawai Hisashi, Hirano Hirohiko. Association of Serum 25(OH)D Levels with Oral Function in Community-Dwelling Older Adults. ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
10. Hirohiko Hirano, Iwasaki Masanori, Ayako Edahiro, Yasuhiro Kugimiya, Maki Shirobe. A study on diagnostic algorithm for Oral Hypofunction based on the JSG diagnostic criteria (JSG: Japanese Society of Gerontology). ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.

4 学会発表（国内）

1. 岩崎正則.歯周疾患検診等を含めた歯科健診の課題と今後セルフレポートから得られる口腔情報と健診・疫学調査への活用.第72回口腔衛生学会学術大会.2023.5.21-23.大阪
2. 中久木康一，澄川裕之，安藤雄一，平田創一郎，小原由紀，末森一彦，内田朋良.無歯科医地区などを含む過疎地域における『訪問歯科診療』の安定供給に関する調査．第72回口腔衛生学会学術大会.2023.5.21-23.大阪
3. 岡村毅,多賀努,稲垣宏樹,宮前史子,宇良千秋,杉山美香,枝広あや子,笹井浩行,平野浩彦、粟田主一．認知症であることを地域の人に知らせるか一般論としてはどうか,そして自分事としてはどうか.日本認知症ケア学会第24回学術大会.2023.6.3-4.京都
4. 白部麻樹、枝広あや子、本川佳子、森下志穂、本橋佳子、岩崎正則、渡邊裕、平野浩彦．アルツハイマー型認知症重症度と口腔機能評価実施可否に関する検討．日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
5. 本川佳子、三上友里江、早川美知、坂田穏行、加藤麻奈、白部麻樹、藤原佳典、河合恒、大渕修一、平野浩彦．地域在住高齢者における食欲不振と栄養素等摂取量の関わり．第65回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.横浜.
6. 早川美知，本川佳子，横山友里，大須賀洋祐，飯塚あい，豊島堅志，田村嘉章，石川譲治，藤原佳典，荒木厚.フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討.日本老年医学会第65回学術集会．2023.6.16-18.横浜.
7. カランタル玲奈、本川佳子、早川美知、三上友里江、白部麻樹、枝広あや子、岡村毅、笹井浩行、平野浩彦、粟田主一．地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態の関連の横断的検証：板橋健康長寿縦断研究．第65回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.横浜.
8. 岩崎正則.高齢者の定義-その後の展開と展望口の老化の経時的データの提示と考察.日本老年医学会第65回学術集会.2023.6.16-18.横浜.
9. 五十嵐憲太郎，栗谷川輝，目黒郁美，鈴木到，釘宮嘉浩，石井智浩，伊藤誠康，有川量崇，岩崎正則，平野浩彦，河相安彦静電容量型感圧センサーシートを用いた咬合力測定の信頼性および成人の基準値の検討予備的検討.日本老年歯科医学第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
10. 松原ちあき、白部麻樹、枝広あや子、本川佳子、森下志穂、本橋佳子、岩崎正則、渡邊裕、平野浩彦．非経口栄養管理中の要介護高齢者に対する口腔衛生管理に関する検討．日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
11. 渡邊裕.多発性脳梗塞後,長期に経口摂取を中断していた患者に対し,病診連携で対応した1症例.日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
12. 那須郁夫,中村隆.BayesianCohortModelによる日本人一人平均処置歯数のCohort分析,歯科疾患実態調査資料を用いて.日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
13. 枝広あや子、白部麻樹、森下志穂、平野浩彦．病院歯科における認知症の人の歯科診療の実態調査．日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.
14. 大塚礼，西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，阿部巧，島田裕之，鈴木隆雄，藤原佳典，大渕修一，鈴木宏幸，岩崎正則，小島成実，飯島勝矢，吉村典子，渡辺修一郎，山田実，村木功，近藤克則，新村健.地域在住高齢者のサルコペニア頻度の2012年から2017年の推移長寿コホートの総合的研究(ILSA-J).日本老年医学会第65回学術集会.2023.6.16-18.横浜.
15. 阿部巧，藤原佳典，北村明彦，野藤悠，西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，大塚礼，鈴木隆雄，岩崎正則，山田実，小島成実，飯島勝矢，大渕修一，新村健，島田裕之，鈴木宏幸，吉村典子，渡辺修一郎，村木功，近藤克則.JST版活動能力指標との関連性における身体機能と認知機能の差異長寿コホートの総合的研究(ILSA-J).日本老年医学会第65回学術集会．2023.6.16-18.横浜.
16. 河合恒,江尻愛美,今村慶吾,伊藤久美子,藤原佳典,井原一成,平野浩彦,大渕修一.老研式活動能力指標のサブドメインの加齢変化パターン板橋お達者研究.第65回日本老年社会科学会大会2023.6.17-18.横浜
17. 中川紗百合，新井絵理，平良賢周，渡邊裕，三浦和仁，白部麻樹、本川佳子，小原由紀，岩崎正則，平野浩彦，小野高裕，足立融，渡部隆夫，山崎裕.後期高齢者におけるオーラルフレイルと栄養関連指標に関する横断研究.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
18. 大沢啓，森美由紀，清水梓，齊藤美香，大鶴洋，平野浩彦.重症認知症高齢者の上顎歯肉に医原性リンパ増殖性疾患を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
19. 齊藤美香，大沢啓，清水梓，森美由紀，平野浩彦，大鶴洋，織田麻琴.超高齢口腔癌患者の治療経験.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.17-18.横浜
20. 解良武士，大須賀洋祐，河合恒，江尻愛美，伊藤久美子，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一新しいサルコペニア質問紙の開発お達者健診研究.日本老年医学会第65回学術大会.2023.6.17-18.横浜
21. 江尻愛美，河合恒，荒木厚，藤原佳典，平野浩彦，小山照幸，杉江正光，小島基永，鈴木隆雄，大渕修一.身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連横断研究.日本老年医学会第65回学術大会.2023.6.17-18.横浜
22. 森美由紀，清水梓，大沢啓，斉藤美香，大鶴洋，平野浩彦.味覚障害を契機に転移性脳腫瘍を発見した一例.日本老年歯科医学会第34回学術大会2023.6.17-18.横浜
23. 深澤佳世，本橋佳子，宇良千秋，細野純，枝広あや子.都市部在住認知機能低下高齢者の受療勧奨者の背景因子について.日本老年歯科医学会第34回学術大会．2023.6.16-18.横浜.

24. 中久木康一，澄川裕之，安藤雄一，平田創一郎，小原由紀，末森一彦，内田朋良.無歯科医地区などを含む過疎地域における歯科訪問診療の課題に関する調査.日本老年歯科医学会第34回学術大会. 2023.6.16-18.横浜.
25. 大平匡徹，尾崎公哉，横山亜矢子，近藤美弥子，渡邊裕，山崎裕.口腔乾燥症患者に対する口腔粘膜マッサージの有用性に関する研究.日本老年歯科医学会第34回学術大会.2023.6.16-18.横浜.
26. 松下祐也，渡邊裕，白波瀬龍一，山崎裕.一般歯科医院に定期的に通院している高齢患者の口腔機能の低下とBodyMassIndexおよびサルコペニアの関係.日本老年歯科医学会第34回学術大会. 2023.6.16-18.横浜.
27. 岩崎正則.ロコモとフレイルの疫学研究フロンティア歯科口腔保健と骨の健康・身体機能.第43回日本骨形態計測学会.2023.6.29-7.1.北海道
28. 渡邊裕.ロコモとフレイルの疫学研究フロンティア地域在住高齢者における口腔機能とビタミンD摂取との関係.第43回日本骨形態計測学会2023.6.29-7.1.北海道
29. 本橋佳子，小原由紀，尾崎哲則.歯科訪問診療,障害者対応歯科受療に繋がる情報提供の課題大手検索エンジンからの情報アクセシビリティー.第64回日本歯科医療管理学会総会・学術大会.2023.7.14-16.岐阜
30. 本川佳子.ここまで来たぞ!!街づくりをふまえた地域連携地域における栄養ケアの普及・啓発のための東京都栄養士会の取組み.日本在宅栄養管理学会第10回学術大会.2023.7.15-16.東京
31. 本川佳子.「人生の最期における栄養支援」みとりプログラム全体の解析の方向性と今後の展望」.日本在宅栄養管理学会第10回学術大会.2023.7.15-16.東京
32. 前田玲，森茂雄，本川佳子，中村育子，前田佳予子，田中弥生，高崎美幸，松岡和子.人生の最終段階を含めた虚弱高齢者に対する食支援の在り方について多職種に対する質問票による課題検討.日本在宅栄養管理学会第10回学術大会.2023.7.15-16.東京
33. 五味達之祐、北湯口純、奥山健太、鎌田真光、井上茂、平野浩彦、武藤芳照、上岡洋晴.中山間地域在住高齢者の近隣食環境と食品摂取多様性との関連：横断研究.第70回日本栄養改善学会学術総会.2023.9.1-3.名古屋
34. 高橋果鈴，平井玲菜，三分一恵里，森下志穂，金子潤.1ステップPMTCペーストによる研磨と2段階研磨のスケーリング後の歯面研磨効果の比較.日本歯科衛生学会第19回学術大会.2023.9.16-18.静岡
35. 桑野友花，森下志穂，三分一恵里，佐藤剛.親子の口腔保健行動の関連性.日本歯科衛生学会第19回学術大会.2023.9.16-18.静岡
36. 伊藤佳七子，宮澤慶，森下志穂.新型コロナウイルス感染症流行前後での感染症予防対策の変化について.第19回日本歯科衛生学会学術大会.2023.9.16-18.静岡
37. 白部麻樹、渡邊裕、平野浩彦. 今日から始めるオーラルフレイル予防. 第10回日本予防理学療法学会学術大会. 2023.10.28-29.函館.
38. 白部麻樹、植田拓也、大渕修一、藤原佳典. 地域の介護予防を促進する上での歯科衛生士の役割. 第10回日本予防理学療法学会学術大会. 2023.10.28-29.函館.
39. 五味達之祐、本川佳子、白部麻樹、岩﨑正則、枝広あや子、大渕修一、藤原佳典、荒井秀典、栗田主一、平野浩彦. 会食を行う通いの場の参加者減少に関連する要因：ソーシャルマーケティングの視点.第82回日本公衆衛生学会総会.2023.10.31-11.2.つくば
40. 枝広あや子、本橋佳子、金子真由美、宇良千秋、大村千晶、白部麻樹、宮前史子、岡村毅. 読経の高齢者への効果第一報僧侶の機能特性に関する予備的調査. 第82回日本公衆衛生学会総会. 2023.10.31-11.2.つくば.
41. 本橋佳子、金子真由美、枝広あや子、宇良千秋、大村千晶、白部麻樹、宮前史子、岡村毅. 読経の高齢者への効果第二報集合型プログラムの試行. 第82回日本公衆衛生学会総会. 2023.10.31-11.2.つくば.
42. 金子真由美、本橋佳子、枝広あや子、宇良千秋、大村千晶、白部麻樹、宮前史子、岡村毅. 読経の高齢者への効果第三報プログラム参加の促進要因の検討. 第82回日本公衆衛生学会総会. 2023.10.31-11.2.つくば.
43. 村上正治,釘宮嘉浩,中村純也,岩崎正則,本川佳子,枝広あや子,白部麻樹、河合恒,大渕修一,藤原佳典,井原一成,平野浩彦. 咀嚼機能の客観評価と主観評価の乖離と将来のサルコペニア発症リスクとの関連性について-お達者研究-.第10回日本サルコペニア・フレイル学会. 2023.11.4-5.御茶ノ水.
44. 白部麻樹，枝広あや子，本川佳子，森下志穂，岩崎正則，渡邊裕，平野浩彦. アルツハイマー病の重症度に応じた嚥下機能評価の実施可否と栄養状態. 日本口腔検査学会第16回学術大会. 2023.11.4-5.水道橋.
45. 釘宮嘉浩，岩崎正則，白部麻樹、本川佳子，枝広あや子，渡邊裕，五十嵐憲太郎，阿部巧，横山友里，北村明彦，村山洋史，平野浩彦. 地域在住高齢者における色変わりガムの測定値の分布. 日本口腔検査学会第16回学術大会. 2023.11.4-5.水道橋.
46. 江口佳奈、本川佳子、岩崎正則、白部麻樹、五味達之祐、カランタル玲奈、早川美知、枝広あや子、稲垣宏樹、笹井浩行、栗田主一、平野浩彦. 地域在住高齢者における日常の食生活の咀嚼行動と年齢の関連の予備的研究. 第27回日本病態栄養学会年次学術集会. 2024.1.26-28.京都.

5 著書等

1. 平野浩彦，白部麻樹. よくわかる歯科訪問診療Ⅱ地域連携C連携の場. 一般社団法人日本老年歯科医学会編集協力. 永末書店. Page20-23.2023.6
2. 平野浩彦.【働く人の口腔衛生を考える】オーラルフレイルを予防する.安全と健康(1881-0462)74 巻 8 号.Page753-756.2023.8
3. 平野浩彦.オーラルフレイル　本概念を取り巻く動向と知見.口腔・咽頭科(0917-5105)36巻3号.Page241.2023.8
4. 平野浩彦.【歯科からみた認知症】認知症の人に対する歯科の取り組みの状況と課題(解説).Dementia Japan(1342-646X)37巻3号.Page386-392.2023.9
5. 枝広あや子，平野浩彦.口腔機能低下への対応　予防から看取りまで(Part II)　口腔機能と関連する重要事項　認知症の人の口腔機能(解説).日本歯科評論(0289-0909)83巻10号 .Page112-121.2023.10
6. 本川佳子. 臨床栄養143巻6号多職種アプローチで支える 認知症の人の食事・栄養支援
7. 本川佳子. 臨床栄養143巻6号認知症基本法について
8. 本川佳子. 臨床栄養，2022年度政策事業「全国病院栄養部門実態調査」について
9. 白部麻樹. 臨床栄養143巻6号認知症高齢者の口腔衛生
10. 岩崎正則.補綴治療は患者の何を改善できるか?:臨床アウトカムを多角的に評価する　健康な口腔から得られるもの　食・栄養を中心に.日本補綴歯科学会誌(1883-4426)15巻2号. Page158-163.2023.4

11. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　予約が?時間が?わからなくなった…!?　時間の見当識障害と、思わずしてしまう取り繕い.DHstyle(1881-3437)17巻4号.Page52-55.2023.4
12. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　症状を気にしたり、急に元気に振る舞ったり　その訴えは不安の裏返しかも!?.DHstyle(1881-3437)17巻5号.Page50-53.2023.5
13. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　「スパイに見張られている」ですって!?　その世界とともに生きていることを許容する.DHstyle(1881-3437)17巻6号.Page26-29.2023.6
14. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　気づかないうちに怪我してる?　複合的な生活困難を見抜け!.DHstyle(1881-3437)17巻7号.Page32-35.2023.7
15. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　帰り道がわからなくなっちゃった　見慣れない景色をきっかけに迷う(解説).DHstyle(1881-3437)17巻8号 Page52-55.2023.8
16. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　決められないの?　考えがまとまらないの?　その人らしく、納得した意思決定とは(解説).DHstyle(1881-3437)17巻9号.Page42-45.2023.9
17. 枝広あや子, 本橋佳子.シニア患者さんへの「ん?」　お会計がうまくできないってどういうこと?　焦ると誰でもうまくできない(解説).DHstyle(1881-3437)17巻10号.Page26-29.2023.10
18. 森下志穂.日常臨床の疑問を研究で解決しよう　統計学の目的.DHstyle(1881-3437)17巻10号.Page38-41.2023.10
19. 小原由紀, 三好 早苗.日常臨床の疑問を研究で解決しよう】研究の世界へようこそ!.DHstyle(1881-3437)17巻4号.Page48-51.2023.4
20. 小原由紀.チェアサイドQ&A　高齢者歯科に関する疑問[第15回]　口腔保湿剤の使い分けについて知りたいです。.歯科衛生士(0911-9574)47巻4号.Page29.2023.4
21. 小原由紀.日常臨床の疑問を研究で解決しよう　知っておきたい研究の基礎知識.DHstyle(1881-3437)17巻5号.Page46-49.2023.05
22. 小原由紀.【COVID-19とフレイルの実際】COVID-19とフレイルの実際　オーラルフレイル.日本老年医学会雑誌(0300-9173)60巻2号.Page135-140.2023.4
23. 小原 由紀, 三好 早苗.日常臨床の疑問を研究で解決しよう　研究計画を立てよう!.DHstyle(1881-3437)17巻9号.Page46-50.2023.9
24. 渡邊裕, 山崎 裕.【人生100年時代の感覚器のフレイル対策】味覚のフレイル.Progress in Medicine(0287-3648)43巻7号.Page585-589.2023.7
25. 渡邊裕.チェアサイドQ&A　高齢者歯科に関する疑問[第19回]　オーラルフレイルへの早期対応はどれだけ効果があるのでしょうか?.歯科衛生士(0911-9574)47巻9号.Page29.2023.9

6　特許
なし

7　その他
なし

認知症と精神保健
1　論文（誌上発表）：原著

1. Ohta T, Sasai H, Osuka Y, Kojima N, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K. Age- and sex-specific associations between sarcopenia severity and poor cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: The IRIDE Cohort Study. Front Public Health. 2023;11:114804. doi: 10.3389/fpubh.2023.1148404　(原著, 査読あり) (IF:6.461, 2022-2023)
2. Ura C, Iizuka A, Yamashita M, Ito K, Okamura T. Use of the telephone, a universally implemented communication tool, in building peer support networks for people with cognitive decline. Geriatr Gerontol Int. 2023 Jun;23(6):457-458. doi: 10.1111/ggi.14590. Epub 2023 May 3. PMID: 37132533.　(原著、査読有) (IF:3.387,2021)
3. Yamazaki S, Ura C, Okamura T. Time regained: awareness of not young anymore is a trigger for the ageing Hikikomori person to return to society. Psychogeriatrics. 2023 Jul;23(4):730-731. doi: 10.1111/psyg.12977. Epub 2023 May 28. PMID: 37245524.　(原著、査読有) (IF:2.295,2022)
4. Abe T, Yamashita M, Fujiwara Y, Sasai H, Obuchi SP, Ishizaki T, Awata S, Toba K; IRIDE Cohort Study investigators. Fluctuations in Cognitive Test Scores and Loss to Follow-up in Community-Dwelling Older Adults: The IRIDE Cohort Study. Dement Geriatr Cogn Disord. 2023 Aug 10. doi: 10.1159/000531764. Epub ahead of print. PMID: 37562370.　(原著、査読有) (IF:3.346, 2022)
5. Mitsutake S, Yano S, Ishizaki T, Furuta K, Hatakeyama A, Sugiyama M, Awata S, Ito H, Toba K. Association of functional and cognitive impairment severity with discharge to long-term care facilities in older patients admitted to a general acute care hospital from home. Arch Gerontol Geriatr. 2023 Dec;115:105111. doi: 10.1016/j.archger.2023.105111. Epub 2023 Jun 26. PMID: 37421690.　(原著、査読有) (IF:4.163, 2022)
6. Ito K, Tsuda S, Hagiwara M, Okamura T. Encouraging death communication in a death-avoidant society: analysis of interviews with death café organizers. BMC Health Serv Res. 2023 Sep 4;23(1):944. doi: 10.1186/s12913-023-09967-7. PMID: 37667361; PMCID: PMC10476286.　(原著、査読有)　(IF 2.908; 2022)
7. Okamura T, Taga T, Inagaki H, Miyamae F, Ura C, Sugiyama M, Edahiro A, Shirobe M, Motokawa K, Kojima N, Osuka Y, Iwasaki M, Sasai H, Hirano H, Awata S. Barrier to sharing a dementia diagnosis with neighbors in Tokyo. Geriatr Gerontol Int. 2023 Oct;23(10):761-763. doi: 10.1111/ggi.14662. Epub 2023 Sep 11. PMID: 37691496. (原著、査読有) (IF:3.387,2021)
8. Murayama H, Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Motokawa K, Okamura T, Awata S. The Relationship Between Cognitive Decline and All-Cause Mortality Is Modified by Living Alone and a Small Social Network: A Paradox of Isolation. J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci. 2023 Nov 14;78(11):1927-1934. doi: 10.1093/geronb/gbad134. PMID: 37725961.　(原著、査読有) (IF:4.942,　2021)
9. Miyamae, F., Sugiyama, M., Taga, T.Okamura, T. Peer support meeting of people with dementia: a qualitative

descriptive analysis of the discussions. BMC Geriatr 23, 637 (2023). https://doi.org/10.1186/s12877-023-04329-8 （原著，査読あり）（IF:4.1，2022）

10. Iizuka A, Yamashita M, Ura C, Okamura T. GO revisited: qualitative analysis of the motivating factors to start and continue playing GO. Journal of Community Health Nursing 01 Jan 2023, 40(1):52-63. DOI: 10.1080/07370016.2022.2119087（原著，査読あり）（IF:0.951，2022）
11. Okamura T, Ura C, Wakui T. Achievements and challenges of family associations for caregivers of people with dementia. GGI in press（原著、査読有）（IF:3.387,2021）
12. Yamazaki S, Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people. Psychogeriatrics. 2023 Nov 6. doi: 10.1111/psyg.13042. Epub ahead of print. PMID: 37932240. （原著、査読有）（IF:2.295,2022）
13. Edahiro A, Okamura T, Arai T, Ikeuchi T, Ikeda M, Utsumi K, Ota H, Kakuma T, Kawakatsu S, Konagaya Y, Suzuki K, Tanimukai S, Miyanaga K, Awata S. What happens if your colleague was the first person to notice that you have young-onset dementia? Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov 21. doi: 10.1111/ggi.14733. Epub ahead of print. PMID: 37990422. （原著、査読有）（IF:3.387,2021）
14. Hatanaka S, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Relationship between phase angle and lower-extremity function in older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. Nutrition, in press （原著、査読有）（IF:4.893，2021）
15. Naoki Deguchi 1，Yosuke Osuka 1,2†，Narumi Kojima 1†，Keiko Motokawa 1，Masanori Iwasaki 1，Hiroki Inagaki 1，Fumiko Miyamae 1，Tsuyoshi Okamura 1，Hirohiko Hirano 1，Shuichi Awata 34，Hiroyuki Sasai 1* The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is non-inferior to the Kihon Checklist in screening frailty among independent older adults aged 75 years and older: The Itabashi Longitudinal Study on Aging GGI in press （原著、査読有）（IF:3.387,2021）
16. Chiaki Ura 1, Hiroki Inagaki 1, Mika Sugiyama 1, Fumiko Miyamae 1, Ayako Edahiro 1, Kae Ito 2, Masanori Iwasaki 1,3, Hiroyuki Sasai 1, Tsuyoshi Okamura 1, Hirohiko Hirano 1,Shuichi Awata 4. A neighbour to consult with is important in dementia- friendly communities: Associated factors of self-efficacy allowing older adults to continue living alone in community settings. Psychogeriatrics in press （原著、査読有）（IF:2.295,2022）
17. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Sasai H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K. Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers: The IRIDE cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov, 23(11):887-888.（原著，査読あり）（IF:3.387）
18. Fujiwara Y, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Fujita K, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status in old age and cause-specific disability in Japanese community-dwelling older adults with or without frailty: A 3.6-year prospective study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov, 23(11):855-863.（原著，査読あり）（IF:3.387）
19. Hatanaka S, Sasai H, Shida T, Osuka Y, Kojima N, Ohta T, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, et al. Association between dynapenia and cognitive decline in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. Geriat Gerontol Int. 2023. in press（原著，査読あり）（IF:3.387）
20. Abe T, Seino S, Hata T, Yamashita M, Ohmori N, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Transportation modes and social participation in older drivers and non-drivers: Results from urbanised Japanese cities. Journal of Transport Geography. 2023 May, 109:103598-103598. （原著，査読あり）（IF:5.899）
21. Tsuyoshi Okamura, Chiaki Ura, Yukiko Kugimiya, Mutsuko Okamura, Masako Yamamura, Hidemi Okado, Mayumi Kaneko, Mari Yamashita, Tomoko Wakui. Inaccessibility, unresponsiveness, inconsistency, and invisibility of informal caregivers of older persons with cognitive impairment: community-based participatory research。BMC geriatrics （原著，査読あり）（IF:4.1，2022）
22. 山崎幸子,宇良千秋,岡村　毅.中高年引きこもり者が再び社会とつながるまでの過程　老年社会科学2023；45：213-224　（原著，査読あり）
23. 中山莉子，枝広あや子，岡村毅.ひとり暮らしの認知症高齢者の買い物支援 認知症ケア事例ジャーナル(in press).（原著，査読あり）
24. 畠山啓，枝広あや子，椎名貴恵，近藤康寛，山田悠佳，新田怜小，佐古真紀，柏木一惠，岡村毅，井藤佳恵，粟田主一．認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援．老年精神医学雑誌．（原著，査読あり）
25. 美﨑定也，村山洋史，杉山美香，稲垣宏樹，岡村毅，宇良千秋，宮前史子，枝広あや子，本川佳子，粟田主一．身体機能，精神機能，認知機能，口腔機能，併存疾患による地域在住高齢者の類型化と転倒経験との関連．日本老年医学会雑誌．(in press)（原著，査読あり）
26. 井藤佳恵，津田修治，山下真里，菊地和則，畠山啓，扇澤史子，古田光，粟田主一．認知症サポート医が困難事例対応において期待される割合．日本老年医学会雑誌．2023:60(3):251-260.

２　論文（誌上発表）：総説

1. 島薗進、宇良千秋、東海林良昌、小川有閑、高瀬顕功、岡村毅「高齢者の精神疾患と孤立・孤独・無縁」日本老年医学会雑誌 2023年60巻3号p.245-250
2. 岡村毅．世界が注目する農業・園芸の健康への効果―新しいフロンティア．日本園芸療法学会2023-05:1-12
3. 宮前史子．離島における認知症支援と課題：認知症支援関係者の食事にまつわる語りから（特集 多職種アプローチで支える認知症の人の食事・栄養支援）．月刊臨床栄養．143(6)，815-821.
4. 岡村毅　我が国に適した認知症診断後支援の構築のために．認知症ケア事例ジャーナル2023年16号：88-96
5. 宇良千秋　認知症ケアの新たな方法：生きづらさを抱えた人を包摂するケア・ファームの可能性．心と社会　2023:54(1):94-98.
6. 岡村毅．新規認知症治療薬レカネマブ：その期待と問題点．医事新報　in press
7. 岡村毅．それはあなたにもいつか起きることかもしれない 日本老年医学会雑誌 2023年60巻3号p.231
8. 山下真里、加藤真衣、稲垣千草、川西智也、櫻井花、山崎明子．若年性認知症の本人と家族のつどい-特集 新時代の

診断後支援. 認知症ケア事例ジャーナル 2023: 16(2):104-109.

3 学会発表（国際）

1. Ayako Edahiro, Ryosho Shoji, Chiaki Ura, Yoshiko Motohashi, Misato Hayakawa, Maki shirobe, Fumiko Miyamae, Tsuyoshi Okamura. Preliminary study of the effects of sutra chanting on oropharyngeal and respiratory function. (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
2. Fumiko Miyamae. Dementia meeting / Real-world Gerontology (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
3. Hitomi Matsui 1,2、Tsuyoshi Okamura 1、Ryutaro Yasuda 1,2、Mao Shimizu 1,2、Yuki Omori 1、Muneko kataoka 1,2、Ko Furuta 1,2 Dopamine transporter single photon emission computed tomography (DaT-SPECT) imaging of older people with late onset major depression (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN″
4. Inagaki H, Sugiyama M, Awata S. Does deficiency of social function increase the subjective loneliness of community-dwelling older persons?: Results of the mail survey in Tokyo metropolitan urban area. (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
5. Kaori Daimaru1, Yosuke Osuka1,2, Narumi Kojima1, Katsuyoshi Mizukami1,3, Keiko Motokawa1, Masanori Iwasaki1, Hiroki Inagaki1, Fumiko Miyamae1, Tsuyoshi Okamura1, Hirohiko Hirano1, Shuichi Awata4, and Hiroyuki Sasai1. Association of polypharmacy with the severity of frailty in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN″
6. Keiko Motokawa1) , Masanori Iwasakii1) , Yurie Mikami1) , Yasuaki Wada2) , Fuka Tabata3), Misato Hayakawa1) , Maki Shirobe1), Lena Kalantar1) , Yosuke Osuka1) , Narumi Kojima1),Hiroyuki Sasai1) , Hiroki Inagaki1) , Fumiko Miyamae1) , Tsuyoshi Okamura1) , Hirohiko Hirano1) , Shuichi Awata1). Association between serum albumin redox state and dietary protein intake among community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN″
7. Mika Sugiyama, Tsuyoshi Okamura, Fumiko Miyamae, Kae Ito, Ayako Edahiro, Hiroki Inagaki, Chiaki Ura, Riko Nakayama, Thutomu Taga, Shuichi Awata. What activities did the community space for supporting residents living with dementia do during the COVID-19 pandemic? (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
8. Miyamae F, Sugiyama M, Taga M, Okamura T. Peer support meeting of people with dementia: A qualitative descriptive analysis of the discussions (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
9. Nakayama R 1,2 , Ura C 2 , Miyamae F 2 , Inagaki H 2 , Sugiyama M 2 , Okamura T 2 , Edahiro A 2 , Awata S 2. Discrepancy between subjective and objective daily life ability lowers one’ s psychological well-being (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
10. Nakayama R, Wakui T, Sekino A, Okubo S, Awata S. The communication between a person living with dementia and family (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
11. Naoki Deguchi, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Keiko Motokawa, Masanori Iwasaki, Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata, Hiroyuki Sasai. The Questionnaire for medical checkups of old-old in determining frailty is equivalent to the Kihon checklist: equivalence testing. (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
12. Daichi Yamashiro, Mari Yamashita, Takumi Abe, Yoshifumi Takahashi, Kenichiro Sato, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Hiroyuki Sasai, Shuichi P. Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Kenji Toba, IRIDE Cohort Study investigators Factors associated with depressive symptoms by cognitive function level in community-dwelling older adults: IRIDE Cohort Study (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
13. Okamura. Dementia Care in Buddhist temples (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
14. Okamura Tsuyoshi. Community-based participatory research in Tokyo: Toward dementia-friendly community (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
15. Okamura Tsuyoshi. Aging in Place for everyone: Older people in isolation, poverty, and homelessness. (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
16. Saito K , Kojima N , Osuka Y , Motokawa K , Hayakawa M , Mikami Y , Ｉwasaki M , Inagaki H , Miyamae F , Okamura T , Hirano H , Awata S , Sasai H. Relationship between dietary vitamin C and physical performance among older Japanese: Itabashi Longitudinal Study on Aging (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
17. Shohei Yano, Seigo Mitsutake, Tatsuro Ishizaki, Ko Furuta, Akira Hatakeyama, Mika Sugiyama, Shuichi Awata, Kenji Toba, Hideki Ito. Dementia severity associated with discharge to a long-term care facility in older patients admitted to a general acute care hospital from home (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN″
18. Ura Chiaki. Care farms for inclusion of the people living with dementia in the super-aged community (Symposium) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
19. Ura C, Okamura T, Yamazaki S, Taga T, Eboshida A, Kawamuro Y. Care farms are new places which provides meaningful experience to the people with dementia: toward Dementia-friendly societies (Poster) IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14 Yokohama JAPAN
20. Ayako Edahiro1, Tsuyoshi Okamura1, Tetsuaki Arai2, Takeshi Ikeuchi3, Manabu Ikeda4, Kumiko Utsumi5, Hidetaka Ota6, Tatsuyuki Kakuma7, Shinobu Kawakatsu8, Yoko Konagaya9, Kyoko Suzuki10, Satoshi Tanimukai11, Kazuo Miyanaga12, Shuichi Awata1. What happens if your colleague was the first person who notice that

you have early-onset dementia? (Poster) IPA 2023/06/29 - 2023/7/2 Lisbon Portugal
21. Ura C, Iizuka A, Yamashita M, Okamura T. Pilot study of telephone peer support for inclusion of people living with cognitive decline in urban areas (Poster) IPA 2023/06/29 - 2023/7/2 Lisbon Portugal"
22. Mika Sugiyama, Hiroki Inagaki, Kae Ito, Tsuyoshi Okamura. Are the older community-residents who did not respond to the administrative survey high risk group? Early detection and continuous support by the visiting nurse (Poster) IPA 2023/06/29 - 2023/7/2 Lisbon Portugal
23. Miyamae F, Sugiyama M, Taga M, Okamura T. Development of a participant-driven dementia learning program by people living with dementia (Poster) IPA 2023/06/29 - 2023/7/2 Lisbon Portugal
24. Hiroshi Murayama, Mika Sugiyama, Hiroki Inagaki, Chiaki Ura, Fumiko Miyamae, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Tsuyoshi Okamura, Shuichi Awata. The relationship between cognitive decline and mortality is modified by living alone and a small social network: A paradox of isolation (Poster) GSA2023年11月8-12日タンパ（フロリダ）

４　学会発表（国内）

1. 杉山美香，稲垣宏樹，井藤佳恵，栗田主一 郵送調査未返送者で介護保険サービス未利用の要介護認定者への訪問調査と多職種協働～認知症等高齢者の困難事例化予防にむけて （口頭） 第12回日本認知症予防学会2023.9.15-17新潟
2. 杉山美香 認知症があってもなくても～認知症を地域で支えるためのコミュニティ参加型研究（Community-based participatory research） （教育講演）第12回日本認知症予防学会2023.9.15-17新潟
3. 伊藤晃碧 1)2) 、飯塚あい 1) 、宇良千秋 1) 、山下真理 1) 、鈴木宏幸 1) 、岡村毅 共生的囲碁プログラムの開発と評価：実現可能性の検討（ポスター）第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
4. 櫻井花 1)2) ・稲垣宏樹 1) ・杉山美香 1) ・山下真里 1) ・清水恒三朗 1) ・野中久美子 1) ・村山洋史 1) ・岡村毅 1) ・栗田主一 1) ひきこもり家族を抱える高齢者の実態と抑うつとの関連（ポスター）第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
5. 稲垣宏樹，杉山美香，栗田主一 地域在住高齢者における社会的機能の不足と精神的健康との関連：東京都都市部における郵送調査の結果から（ポスター）第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
6. 増井幸恵，中川威，権藤恭之，安元佐織，小川まどか，松本清明，石岡良子，春日彩花，堀紀子，稲垣宏樹，吉田祐子，井藤佳恵，髙山緑，新井康通，池邉一典，神出計，石崎達郎 老年的超越の縦断変化パターンの分類と関連要因の検討：SONIC70歳群データを用いて（ポスター）第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
7. 櫻井花，稲垣宏樹，杉山美香，山下真理，清水恒三朗，野中久美子，村山洋史，岡村毅，栗田主一 ひきこもり家族を抱える高齢者の実態と抑うつとの関連（ポスター）第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
8. 土谷利仁、高橋知也、相良友哉、藤平杏子、藤田幸司、山下真里、川窪貴代、松永博子、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．新型コロナウイルス（Covid-19）流行期における絵本読み聞かせボランティア活動の工夫：REPRINTS Studyより．第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
9. 山城大地、山下真里、川窪貴代、高橋知也、松永博子、相良友哉、藤田幸司、藤平杏子、小川将、登藤直弥、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．高齢期のボランティア活動に関する負担感尺度作成の試み．第18回日本応用老年学会大会2023.10.28-10.29大阪
10. 枝広あや子 認知症の人の食べられない：認知症に伴う抑うつ症状に関連しているかもしれないとき（合同シンポジウム6高齢者のうつと認知症）第33回日本老年学会総会　2023/6/16
11. カランタル玲奈、本川佳子、岩崎正則、早川美知、三上友里江、白部麻樹、平野浩彦、笹井浩行、稲垣宏樹、宮前史子、枝広あや子、岡村毅 、栗田主一 地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態に関する横断的検討：板橋健康長寿縦断研究（ポスター）第65回日本老年医学会学術集会2023年6月16-18日横浜
12. 岡村毅 既存の社会資源を活かした共生と予防：食べて、祈って、耕して(シンポジウム） 第65回日本老年医学会学術集会2023年6月16-18日横浜
13. カランタル玲奈[1]、本川佳子[1]、早川美知[2]、三上友里江[1]、白部麻樹[1]、枝広あや子[1]、岡村毅[1]、笹井浩行[1]、平野浩彦[1,3]、栗田主一[2,4] 地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態の関連の横断的検証：板橋健康長寿縦断研究（ポスター）第65回日本老年医学会学術集会2023年6月16-18日横浜
14. 野中久美子，齋藤尚子，杉山美香，稲垣宏樹，村山洋史 社会的孤立状態にある高齢者の生活実態と生活での課題：本人へのインタビュー調査1（ポスター）第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
15. 齋藤尚子，野中久美子，杉山美香，稲垣宏樹，村山洋史 演題：社会的孤立状態にある高齢者が交流を増やせない要因：本人へのインタビュー調査２（ポスター）第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
16. 枝広あや子、本橋佳子、金子真由美、宇良千秋、大村千晶、白部麻樹、宮前史子、岡村毅 読経の高齢者への効果　第一報　僧侶の機能特性に関する予備的調査（ポスター）第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
17. 本橋佳子,金子真由美,枝広あや子,宇良千秋,安藤千晶,白部麻樹,宮前史子,岡村毅 読経の高齢者への効果　第ニ報　集合型プログラムの施行（ポスター）第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
18. 金子真由美、本橋佳子、枝広あや子、宇良千秋、安藤千晶、白部麻樹、宮前史子、稲垣宏樹、岡村毅．読経の高齢者への効果　第三報　プログラム参加の促進要因の検討（ポスター） 第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
19. 相良友哉、藤田幸司、山城大地、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、清野諭、野藤悠、山下真里、阿部巧、藤原佳典．高齢者の居場所の類型ごとの特徴②―居場所の類型と精神的健康度との関連－．第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
20. 山城大地、藤田幸司、相良友哉、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、清野諭、野藤悠、山下真里、阿部巧、藤原佳典．類型別にみた高齢者の居場所の特徴①―居場所への期待と居場所の有無との関連―．第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
21. 藤平杏子、高橋知也、松永博子、藤田幸司、相良友哉、山下真里、川窪貴代、鈴木宏幸、村山洋史、藤原佳典．中高年者のコミュニティ所属数と幸福感の関連：ＲＥＰＲＩＮＴＳ研究より．第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
22. 野中久美子、齋藤尚子、杉山美香、稲垣宏樹、村山洋史 社会的孤立状態にある高齢者の生活実態と生活での課題：本人へのインタビュー調査1（ポスター）第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば

23. 齋藤尚子、野中久美子、杉山美香、稲垣宏樹、村山洋史 演題：社会的孤立状態にある高齢者が交流を増やせない要因：本人へのインタビュー調査２ （ポスター） 第82回日本公衆衛生学会総会2023.10.31-11.2つくば
24. 小野真由子，問芝志保，神谷綾子，松江しのぶ，岡村　毅，井藤佳恵，宮前史子 離島において死別を経験する人へのサポート（口頭）認知症ケア学会関東ブロック大会2023年11月12日幕張
25. 岡村毅 都市部で認知症の人を介護する家族の実態調査からわかったこと （シンポジウム） 認知症ケア学会関東ブロック大会2023年11月12日幕張
26. 松井仁美1,2,3、齋藤久美子4、扇澤史子1、今村陽子1、畠山啓4、大森佑貴1、岡村毅1,2、古田光1,2,3,4,5、粟田主一1,2,5 診断後支援から診断前支援へ～当院の若年性認知症に対する支援の実態調査から～ （ポスター） 日本認知症学会　奈良
27. 岡村毅、多賀努、稲垣宏樹、宮前史子、宇良千秋、杉山美香、枝広あや子、笹井浩行、平野浩彦、粟田主一 認知症であることを地域の人に知らせるか：一般論としてはどうか、そして自分事としてはどうか(ポスター) 認知症ケア学会2023年6月3-4日京都
28. 宇良千秋，飯塚あい，山下真里，伊藤晃碧、岡村毅 認知機能低下のある都市高齢者を包摂するピアサポートの効果―電話によるピアサポートの試み―(ポスター) 認知症ケア学会2023年6月3-4日京都〞
29. 畠山、枝広、椎名、近藤、山田、新田、岡村、井藤、粟田 認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援（ポスター）認知症ケア学会2023年6月3-4日京都
30. 杉山美香　稲垣宏樹　井藤佳恵　岡村毅　粟田主一 DFCsにむけたコミュニティ参加型研究の実践～東京都千代田区での取り組み報告～ （ポスター） 認知症ケア学会2023年6月3-4日京都
31. 宮前史子、杉山美香、多賀努、見城澄子、森倉三男、岩田裕之、岡村毅 認知症の人を含む高齢者が認知症に関して能動的な学習をするための方法とその課題―大都市の団地で開催した「認知症ゼミナール」― （ポスター） 認知症ケア学会2023年6月3-4日京都
32. 井藤佳恵,宮前史子,小野真由子 看取りに関わる施設職員を対象とした対話型デスエデュケーション・プログラムの試み （ポスター） 認知症ケア学会2023年6月3-4日京都
33. 宇良千秋 IRIDE統合コホートと認知症共生社会の実現：認知症共生社会に向けた研究 （口頭） TOBIRA第11回研究交流フォーラム
34. 松井仁美1,2、岡村毅 3、保田竜太郎1,2、清水真央1,2、大森佑貴 1、片岡宗子1,2、古田光1,2 口腔の体感幻覚症状を呈した患者における脳機能画像および有効な治療法の検討（口頭）精神神経学会
35. 宮前史子 認知症・MCIの当事者と共に語り合う実践の試み②日本における取組み：高島平「ココから話そう会」の試み（シンポジウム）日本心理学会第87回大会
36. 清水恒三朗1） 2)、山下真里1） 、原祐子2） MCI高齢者の健康行動に焦点化した認知行動モデルに基づく心理プログラムの取り組みについて（ポスター）日本心理臨床学会
37. 山下真里,加藤真衣，川西智也，扇澤史子，清水恒三朗，櫻井花．認知症の人とその家族に対する診断前・診断後支援～電話相談の活用に関する検討～（ポスター）．第42回日本心理臨床学会．2023年9月1日～３日．東京国際フォーラム．
38. 阿部巧、山城大地、山下真里、鈴木宏幸、藤原佳典、粟田主一、鳥羽研二．地域包括地域包括支援センターにおける認知機能評価の実態把握と認知機能低下者スクリーニングモデルの適用可能性：IRIDE Cohort Study．第12回日本認知症予防学会．2023年9月15日～16日．新潟コンベンションセンター．
39. 山下真里．フレイルにおける心理的アプローチ：心理職の役割（シンポジウム）．第23回日本抗加齢医科学会．2023年６月９日～１１日．東京国際フォーラム．

５　著書等

なし

６　受賞

なし

７　その他

なし

――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

福祉と生活ケア研究チーム

チームリーダー：石崎達郎

研究チームの概要・目的

福祉と生活ケア研究チームは、介護予防から医療、介護、エンドオブライフまで、高齢者ケアに関わるすべての人々や組織を対象に、居宅・施設・地域における高齢者支援のあり方やケアの質の向上に資する研究を推進している。今年度は、第3期中期計画の成果と連携し、Aging in Place実現に向けた研究実践を継続しつつ、デジタル高齢社会、医療・介護システム、ソーシャルインクルージョンの3つの主要テーマに焦点を当てて研究を進めた。デジタル高齢社会テーマにおいては、東京都スマートウォッチ等デジタル機器活用事業（SW事業）と連動し、地域在住高齢者にウエアラブルデバイスを装着させ、日常行動の記録と健康アウトカムの関係を人工知能で解析する研究を開始した。医療・介護システムテーマでは、地域単位で保健・医療・介護システムを分析し、高齢者の健康特性に配慮した質の高いサービスを提供するための研究を進めた。レセプト情報や健診情報等のビッグデータを活用し、保健・医療システム、医療と介護の連携、介護システムに関する研究を行った。ソーシャルインクルージョンでは、身体的、精神的、社会的困難が重畳する高齢者をフォーマルなサービスで支援していくために必要な地域支援体制を明らかにする研究に取り組んだ。これらの研究成果は、東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター、認知症支援センターや介護予防運動指導員養成事業等を通じて、都民や専門職への積極的な還元に努めた。

【参考】第四期中期計画における年度別研究計画

デジタル高齢社会

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)-①ウエアラブルデバイスによるDWS測定	アンクルバンド型加速度計によるDWSの信頼性の検証	加速度式とGPS式の一致度の検討	屋内外歩行によるDWSとフレイル等との関係の検討	屋内外歩行によるDWSとフレイル等との関係の検討	DWSによる身体的フレイル評価の確立
(1)-②歩行時加速度データのAIによる解析	コホートでの歩行時加速度データ収集	データセット作成、特徴点の検討	認知機能低下についての横断分析	認知機能低下についての縦断分析	歩行時加速度による認知機能評価の確立
(1)-③デジタル技術による介護予防評価	タブレット認知検査・立ち上がり測定データ収集	認知機能低下についての横断・縦断分析	認知機能低下についての縦断分析	フレイルへの横断・縦断分析	タブレット認知検査・立ち上がり測定による介護予防評価の確立
(2)-① IOTによるフレイルの社会的側面インデックス	フレイルの社会的側面に影響を及ぼすライフログの探索的分析	日内変動パターンとフレイルの社会的側面指標との関係の分析	週内変動パターンとフレイルの社会的側面指標との関係の分析	月内変動パターンとフレイルの社会的側面指標との関係の分析	IoTによるフレイルの社会的側面インデックスの開発
(3)-①コーピングの評価指標の開発	コーピング高齢者の把握とデータ収集	コーピング高齢者の関連要因の検討	コーピング高齢者の要因の質的検討	コーピングの評価指標の作成	縦断研究による検証
(3)-②デジタル技術によるコーピング促進に関する研究	コーピング高齢者の把握とデータ収集	コーピング高齢者の関連要因の検討	コーピングを促進する介入プログラムの開発	コーピングを促進する介入プログラムの開発	介入効果の検証
普及啓発 東京都介護予防・フレイル予防推進支援センターへの支援	地域づくりによる介護予防推進支援	地域づくりによる介護予防推進支援	地域づくりによる介護予防展開支援	介護予防マネジメントモデルの提案	介護予防マネジメントモデルの普及
普及啓発 介護予防運動指導員養成事業の支援	地域づくりによる介護予防に関する情報提供	地域づくりによる介護予防に関する情報提供	介護予防・日常生活支援総合事業に関する情報提供	介護予防・日常生活支援総合事業に関する情報提供	新しい介護予防ケアマネジメントモデルの提案

医療・介護システム

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
(1)保健・医療システムに関する					

研究 ①データベース（DB）の開発・更新	→	→	→	→	→
(1)保健・医療システムに関する研究 ②多疾患併存・多剤処方の健康影響の分析	多疾患併存・多剤処方の健康影響の分析	多疾患併存・多剤処方の健康影響の分析	多疾患併存・多剤処方の健康影響の分析	多疾患併存・多剤処方の健康影響の分析	多疾患併存・多剤処方に適合する保健・医療システムの提言
(2)医療と介護の連携に関する研究	ケア移行期における有害事象関連要因の分析	ケア移行期における有害事象関連要因の分析	ケア移行期における有害事象関連要因の分析	ケア移行期における有害事象関連要因の分析	ケア移行期における有害事象予防プログラムの提言
(3)介護システムに関する研究 ①認知症高齢者とその家族の支援システムに関する研究	多様な介護・支援授受実態の解明	多様な介護・支援授受実態の解明	多様な介護・支援授受サポートプログラムの策定	受援サポートプログラムの効果評価	受援サポートプログラムの効果評価
(3)介護システムに関する研究 ②要介護高齢者家族の睡眠と蓄積介護負担感との関連から介護者・支援者の個別支援	データ入力システムの構築・データ取得	データ解析：認知症周辺症状の発症予測	データ解析：介護者の負担感介入支援プログラムの作成	支援プログラムの実装・効果評価	支援プログラムの実装・効果評価
(4) 東京 LSA（SONIC研究） ①加齢による身体機能・認知機能低下に関するプロテオーム解析	→	プロテオーム解析によるバイオマーカー探索			→
(4) 東京 LSA（SONIC研究） ②加齢による身体機能・認知機能低下や関連要因に関するコホート（生まれ年）差の検討	①80歳群・90歳群、第5波調査、②新規コホート調査、調査票作成	①80歳群・90歳群、第5波調査、②新規70±1歳コホート、第1波調査	①70歳群、第6波調査	①70歳群、第6波調査、②80歳群・90歳群、第6波調査、③新規70±1歳コホート、第2波調査	①80歳群・90歳群、第6波調査、②新規70±1歳コホート、第2波調査
(4) 東京 LSA（SONIC研究） ③加齢による身体機能・認知機能低下および精神的健康に対する家族要因の検討	①80歳群、90歳群、第5波調査②子ども調査、調査票作成	①子ども調査第1波：70歳群参加者の子ども対象	①子ども調査第1波：80歳群・90歳群参加者の子ども対象	①子ども調査第2波：70歳群参加者の子ども対象	①子ども調査第2波：80歳群・90歳群参加者の子ども対象

ソーシャルインクルージョン

研究項目	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度	令和９年度
受援に対する心理的抵抗が大きい高齢者に関する研究 （「地域在住高齢者が最期まで自分らしい暮らしを実現するための支援に関する研究」から改	心理的要因の調査	心理的要因の検討	受援選択の阻害要因の検討	受援選択の阻害要因排除の検討	実現可能な支援方法の検討・提案

題）					
高齢者の心理的健康に関する研究：年齢アイデンティティと時間展望	主観年齢および時間展望との関連要因の解析・検討	主観年齢および時間展望との関連要因の解析・検討	主観年齢および時間展望との関連要因の解析・検討	心身機能が衰えた高齢者のwell-being向上の検討	Well-being 維持・向上の機序の検討・提案
高齢者における感謝の研究	感謝の基礎的研究	感謝とwell-beingの関連の検討	感謝と精神的健康との関連の検討	感謝と社会資源/社会的交流との関連の検討	感謝と社会活動との関連の検討
診断後支援に関する調査研究	調査実施とデータ分析	調査実施とデータ分析	調査実施とデータ分析	支援プログラムの作成	支援プログラムの提案
専門職後見人の後見事務ガイドラインに沿った支援に関する調査研究	社会福祉士調査	司法書士調査	弁護士調査	データの統合・分析	後見事務ガイドライン改定への提言
高齢者困難事例の臨床的特徴に関する調査研究	高齢者困難事例の分析的枠組の開発	自治体を対象とした調査	地域包括支援センターを対象とした調査	手引きの作成	体制整備への提言
認知症高齢者の行方不明に関する調査研究	独居認知症高齢者の行方不明発生率調査	都道府県毎の独居・同居別の行方不明者数調査及び市町村向け手引きの検討（既存の手引き・マニュアル等の収集･分析）	市町村向け手引き（案）の作成	市町村に対する意見聴取	手引きの修正及び体制整備への提言
過疎地域の認知症支援体制に関する研究(新規)	東京都の島しょ地域に対するこれまでの支援から、現状の課題の抽出	全国の過疎地における認知症支援体制の調査	モデル提示		

デジタル高齢社会

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
大渕修一	研究部長	研究全体の総括 研究項目(1)の責任者、論文執筆
河合　恒	専門副部長	研究項目(2)の責任者 研究項目(1)のデータ収集・分析、論文執筆 研究項目(4)の責任者、データ収集・分析、論文執筆
江尻愛美	研究員	研究項目(3)の責任者、データ収集・分析、論文執筆 研究項目(4)のデータ収集・分析、論文執筆
今村慶吾	研究員	研究項目(2)のデータ収集・分析、論文執筆
解良武士	非常勤研究員	研究項目(1)のデータ収集・分析、論文執筆 研究項目(5)の責任者、データ収集・分析、論文執筆

1　第四期中期計画における研究成果の概要

超高齢社会の進展に伴い今後の健康増進には疾病回避モデルから健康生成モデルへ転換が必要である。この転換の客観的な検証には一人ひとりの行動を日常的に記録し分析する研究基盤が必要である。近年のIOT技術の発達により様々な行動が記録可能であるが、その老年学的な意味は不明である。そこで第四期中期計画では、東京都スマートウォッチ等デジタル機器活用事業（SW事業）と連動し、地域在住高齢者に多数のセンサを内蔵するウエアラブルデバイスを長期間に渡って装着させ、収集された日常の記録と健康アウトカムの関係を人工知能で明らかにする研究に着手した。

また、このプロジェクトを通じて必要な要素技術の開発も行い、平時より高齢者の活動を記録し健康行動との関連を明らかにすることで高齢社会の科学を発展させる大規模なレジストリ「デジタルコホート（仮）」の構築を目指す。実現には１）ウエアラブル機器と従来の研究で使われているスタンダードな評価との一致度の検討（計測の妥当性）、２）ウエラブル機器による測定が老

年期のヘルスアウトカムを妥当に評価できるのか（構成概念妥当性）の検証にくわえて、３）人工知能学習のための教師データとなるヘルスアウトカム計測のデジタル化が必要である。更に第五期以降に予定される介入研究に備えて４)健康生成モデルによる介入方法の開発が必要となる。(1)～(5)のテーマ研究の成果は、東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター、介護予防運動指導員養成事業を通じて都民、専門職に還元している。

(1) 従来機器との信頼性の検討

板橋お達者健診2011コホートにおいて、アンクルバンド型加速度計とストップウォッチによる同時計測を行い、一致度は通常歩行速度が0.780、最大歩行速度で0.849であった。また、第三期中期計画で開発したGPS型計測器との一致度は0.706と妥当に計測できることが確認された。活動量、睡眠計測については笹井研究副部長との連携により検証している。

(2) ウエアラブルデバイスによる計測とヘルスアウトカムとの関連

①SW事業で収集したライフログデータがフレイルの判別に有用かどうかを明らかにするために、歩行、脈拍、睡眠、会話、皮膚温度等のウエアラブルデータの3ヶ月間の平均を求め、機械学習モデルでJ-CHS基準によるフレイルの判別ができるかを検証した。34の機械学習モデルを用いて検討したが精度は最も高いEfficient Liner SVMでも54.4%と従来型の分析では十分な精度が得られなかった。現在、各変数をタペストリー型の画像に変換することで生活パターンを認識できるようにしDeep learningモデルで判別することで精度向上を図っている。

②歩行時加速度データが認知機能低下の判別に有用かどうかを明らかにすることを目的に、板橋お達者健診2011コホートで計測した腰部・足部の、加速度・角速度のデータを生成型AIの一つである注意機構＋多層パーセプトロンのモデルを使ってMMSEを基準に判別した。学習用データと検証用データを8対2の割合でランダムに分け、モデル作成と検証を独立して行った。その結果、正答率の平均は82.06% で歩行時の加速度・角速度データで認知機能の低下を妥当に判別するモデルが作成された。

③認知機能低下者のデータのさらなる集積
上記の如く一定の成果を得ることができたが判別の精度の向上には認知機能低下者のデータが更に必要である。そこでDEMCIRC研究の対象者、板橋LSAの対象者においても歩行時の腰部および足部の加速度、角速度のデータを収集している。

(3) 教師データとなるヘルスアウトカム測定のデジタル化

①第三期中期計画で開発したタブレット型コンピュータによる認知機能検査をWebブラウザで実施できるように改修し、板橋お達者健診2011コホートにおいて実施した。また、この方法によるテスト再テスト一致度の検証も行っている。一部、民間企業へライセンス供与を行い研究成果の還元も行った。
床反力計を用いた立ち上がりパワー計測に代わるものとして、スマートフォンを利用した立ち上がり加速度の計測システムを開発し、板橋お達者健診2011コホートにおいて実施した。

②床反力計を用いた立ち上がりパワー計測に代わるものとして、スマートフォンを利用した立ち上がり加速度の計測システムを開発し、板橋お達者健診2011コホートにおいて実施した。

(4) 健康生成モデルを促す研究

健康生成モデルを促すには、心身機能が低下する中で発達するコーピング行動を評価し強化していく必要がある。そこで、身体機能低下にもかかわらず精神的健康が良好な者を、コーピングによって精神的健康を保つことのできている者（コーピング高齢者）と定義し、コーピング高齢者の持つ健康関連資源を明らかにする研究を行った。その結果、資源の候補として、ストレス対処、ヘルスリテラシー、社会的ネットワークが挙げられた。

(5) IOTによるフレイルの社会的側面の評価

1年間に渡って収集したウエアラブルデータをdaily、weekly、monthlyで集計し、生活パターンを類型化することを試みている。一方、この作業は従来とは違う次元のデータ処理を必要とすることから、クラウドサーバーを使ってウエアラブルデータとコホートデータを関連して分析することのできるシステムの構築を行った。今後はLSNS6や孤立尺度などとの関連を明らかにしていく。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 日常生活ウエアラブルデータを用いたフレイル等発症の予測に関する研究

アンクルバンド型加速度計によるDWS測定の妥当性に関する研究を行った。従来のわれわれのDWS研究ではGPSによってDWSを測定していたため、測定は屋外に限られたが、加速度計を用いることで屋内での測定も可能となる。板橋お達者健診2011コホートにおいて、アンクルバンド型加速度計とストップウォッチによる同時計測を509名に対して行い、アンクルバンド型アンクルバンド型加速度計が従来の会場調査で用いられてきたストップウォッチと同様に歩行速度が測定できるか検証した。また、SW事業においてアンクルバンド型加速度計とGPSによるDWS測定を行い、2つの測定の一致度の分析を行うためにお達者健診2011コホート参加者161名から同意を取得した。
ウエアラブルデータとフレイル等アウトカム指標との関連を調べるために、SW事業においてコホート研究参加者を対象に歩行、脈拍、睡眠、会話、皮膚温度等のウエアラブルデータを1年間に渡って収集し、コホート研究の会場調査においてフレイル等のアウトカム指標についても評価した。また、民間企業との共同研究においてDWSを2年間に渡り計測し、フレイルとの縦断的な関連を調査するために事後調査を行い、106名の基本チェックリストのデータを収集した。

ウエアラブルデバイスで測定可能な歩行時の加速度データからAIによって認知機能低下を予測するために、これまでは板橋お達者健診2011コホートにおいて歩行時の加速度データを収集してきたが、認知症疑い、軽度認知障害の高齢者のデータを増やすためにこれらの対象者をより含むDEMCIRC研究において歩行時の腰部および足部の加速度、角速度のデータを収集した。

タブレット型認知機能検査をWebブラウザで実施できるように改修し、板橋お達者健診2011コホートの会場調査にてデータ収集を行った。この再テスト信頼性を検討するために、板橋お達者健診2011コホートの会場調査参加者から対象者を募り、健診の1か月後にタブレット型認知機能検査の再調査を行い、約90名からデータを取得した。また、立ち上がり時の床反力をスマートフォン内蔵の加速度センサで測定するブラウザアプリを開発し、板橋お達者健診2011コホートの会場調査にてデータ収集を行った。

アンクルバンド型加速度計による歩行速度とストップウォッチで測定した歩行速度の級内相関係数は通常歩行速度が0.780、最大歩行速度で0.849であった。Bland-Altman Plotの結果、最大歩行速度では若干の比例誤差が観察されたが、信頼性は良好であると判断された。この知見はGait & Postureに投稿中である。

民間企業との共同研究によってスマートフォンアプリによるDWSと基本チェックリストによるフレイルとの関連を横断的に分析した結果、DWSや日常生活における歩幅がフレイルと関連することが示された。この結果はBMJ Openに掲載された。長期的に測定したDWSはフレイルでは経年的に低下するのではないかと考えたが、アプリ使用者では維持され、摂取食品数も向上し、アプリ使用による行動変容が示唆された。この結果は第10回日本予防理学療法学会のセレクション演題として報告した。

研究計画に必要なデータ収集は予定通り進行しており、研究計画の実現性は高い。

(2) IOTを活用した日常生活パターンとフレイルの社会的側面に関する研究

SW事業においてコホート研究参加者を対象に歩行、脈拍、睡眠、会話、皮膚温度等のウエアラブルデータを収集した。コホート研究の会場調査において、対面・非対面による別居家族や近隣・友人との交流頻度、Lubben Social Network Scale短縮版（LSNS-6)、外出頻度等の社会的孤立、閉じこもり等のフレイルの社会的側面関連指標を測定した。今後、これらのデータをもとにフレイルの社会的側面につながる生活パターンを同定する計画である。ウエアラブルデータに関しては、データをdaily、weekly、monthlyに集計し、コホートデータの統合、BIツールの導入を行い、分析の基盤を整備した。

ウエアラブルデータの分析は進行中である。社会的孤立の一指標である社会的交流については、板橋お達者健診2011コホートの9年間の縦断データを用いて社会的交流頻度の加齢変化パターンを明らかにした。社会的交流頻度は高頻度パターンと低頻度パターンに分類され、男性の低頻度パターンでは65歳の時点で既に社会的孤立の水準の交流頻度であること、女性では交流頻度は維持されるが、低頻度パターンでは80歳以降は低下がみられることが明らかとなった。この結果はFrontiers in Public Healthに掲載された。

研究計画に必要なデータ収集は予定通り進行しており、研究計画の実現性は高い。

(3) フレイル状態でも精神的健康を保つコーピングを促す方法に関する研究

コーピングの評価指標の開発のために、①過去に実施した調査データを用いて、フレイル高齢者において抑うつを抑制しうる要因についての予備分析を行い、板橋お達者健診2011コホートで

測定・取得すべき指標を検討した。この検討を基に②板橋お達者健診2011コホートにおいて精神的健康度、身体的フレイル、抑うつを測定し、身体的にフレイルであっても精神的健康が良好なコーピング高齢者を把握した。コーピングにつながる資源の候補として、ストレス対処、ヘルスリテラシー、社会的ネットワークなどの指標も測定した。③さらに、健康生成モデルに基づいた研究として、社会的孤立者の健康リスクに対する緩衝要因に関する分析を行った。
①予備分析の結果、身体的にフレイルであっても、ストレス対処が高いこと、相互作用的・批判的ヘルスリテラシーが高いこと、情緒的サポートの認知が高いことが抑うつのリスクを低下させることが明らかとなった。②板橋お達者健診2011コホートでは、郵送調査1,850名、会場調査587名からデータを取得した。③社会的孤立者は死亡のリスクが高いが、孤立の関連要因には不可変な要因も多く、孤立していても負の健康アウトカムを予防するためにどうすれば良いかの知見が有益である。板橋お達者健診2011コホートの8年間の縦断データを用いて分析を行った結果、孤立状態であっても週2回以上の運動習慣を持つ者は死亡リスクが抑制されることが明らかとなった。この知見はFrontiers in Public Healthに投稿中である。
研究計画に必要なデータ収集は予定通り進行しており、研究計画の実現性は高い。

(4) 高齢者へのデジタル技術の適用に関する基礎研究【新規追加】

家庭へセンサやカメラを設置したり、ウエアラブルデバイスによって日常生活での行動をモニタリングしたりすることは今までよりも多くの健康評価に有用な情報を得られる期待があるが、一方でプライバシの侵害につながる恐れがあり、データの安全や人権保護の観点からの研究が必要である。このことに関連する研究として、センサ技術への曝露を高齢者がどのように感じるかをフォトボイスにより調査した。また、プライバシを適切に制御できる技術をウエアラブルデータに適用する試み、具体的には位置情報や音声等の個人の特定につながる情報を含むデータであってもノイズを加えて個人を特定できないように処理した上で、AIによる目的とする分析を可能とする技術を使って、どのようなプライバシデータが活動できるか、所外のデータプライバシを研究する研究者やAI研究者との意見交換を行った。
フォトボイスでは、7名の地域在住高齢者を対象として調査を行った結果、センサは受け入れられやすいがカメラはAIが見る場合であっても受け入れられにくいこと、認知症や一人暮らしの場合はカメラによる見守りに対する許容度が上がる可能性があること等が明らかとなった。
プライバシ保護による研究については、大阪大学との共同研究として科研費に応募した。
研究の参加者に対しては、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づき参加者の同意を得る。フォトボイスによる調査は、東京工業大学の倫理委員会の承認を得て実施している。プライバシ制御の研究で利用するデータ取得元の板橋お達者健診2011コホート（整理番号：R22-034)、SW事業による研究（整理番号：R22-035）は当センター倫理委員会の承認を得て研究を進めている。追加のプライバシデータを取り扱う際には、本研究について倫理審査の申請を行い、研究対象者から改めて同意を得た上で実施する。

(5) 呼吸筋サルコペニアに関する研究【新規追加】

新しい高齢者の虚弱の概念として呼吸サルコペニアの疾患概念を創設する研究を行った。今年度は、呼吸サルコペニアがどのような健康アウトカムと関連するかについて検討を行った。2021年に日本リハビリテーション栄養学会から呼吸サルコペニアのポジションペーパーが出版された。しかしながらこの呼吸サルコペニアの概念は呼吸機能低下＋サルコペニアであり、我々が提案している呼吸筋機能低下とは異なる。そのため、まず、横断的な研究として、日本リハビリテーション栄養学会が提案する努力肺活量および全身サルコペニアに基づくモデルと、最大呼気流速に基づくモデルから得られた呼吸性サルコペニアを比較した。
横断的な検討では、日本リハビリテーション栄養学会が提案する診断に基づく呼吸サルコペニア（呼吸機能低下＋全身サルコペニア）に比べて、我々が提案する呼吸サルコペニアは、特異度は低いが高い感度であった。またいずれの呼吸サルコペニアも診断のカットオフ値は明確ではないため、それぞれ努力性肺活、最大呼気流速のカットオフ値を連続的に変化させたときの死亡に対するHRを求め、各概念の特徴を把握した。これらの結果はInt. J. Environ. Res. Public HealthとJCSMに発表した。また、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会，日本サルコペニア・フレイル学会，日本呼吸理学療法学会，日本リハビリテーション栄養学会の合同ポジションペーパーが発表され、我々の研究成果が引用された。さらにこの合同ポジションペーパー執筆に関してパブリックコメントとして意見を直接求められたため8点の意見を述べた。我々の主張も一部取り入れられて新たな診断基準が作成された。
板橋お達者健診2011コホート調査においては、2023年度分については調査を終えており、そのデータの解析を行うところである。大規模デイケア施設での調査は研究グループを組織し、現在

進行しているところである。
呼吸サルコペニアという概念は、これまで具体的な概念の提案もなくわずか3論文でrespiratory sarcopenia、respiratory muscle sarcopeniaといった名称のみ言及されるに過ぎなかったが、我々は世界で初めて呼吸サルコペニアの診断基準を提案するに至った。また近年においても呼吸サルコペニアを直接研究しているのは国内外でもわずかであり、多数のサンプル、長期の追跡を行えているグループは我々である。現在、新しい呼吸サルコペニアの診断基準について提案があるものの、我々の研究は大きな影響を及ぼしている。
研究の参加者に対しては、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づき参加者の同意を得る。本研究は板橋お達者健診2011コホート（整理番号：R22-034）および高崎健康福祉大学研究倫理審査（高崎健康大倫大2310号）にて許可を得て実施している。

3　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜普及啓発＞
【センター内】高齢者健康増進事業支援室
＜ウエアラブルデータを用いたフレイル等発症予測＞
【センター内】フレイル外来
【センター外】産業技術総合研究所
＜IOTを活用したフレイルの社会的側面＞
【センター内】フレイル外来
＜高齢者へのデジタル技術の適用＞
【センター外】東京工業大学
【センター内】大阪大学

医療・介護システム

研究実施体制

所属研究員氏名	役職	役割分担
石崎　達郎	研究部長	研究全体の総括、研究(1)・(2)・(4)責任者
光武　誠吾	常勤研究員	研究項目(1)・(2)のデータ分析・論文報告
吉田　祐子	常勤研究員	研究項目(1)・(2)のデータ分析・論文報告
涌井　智子	常勤研究員	研究項目(3)責任者
増井　幸恵	常勤研究員	研究項目(4)の調査調整/実施・データ収集・分析
藤原　聡子	常勤研究員	研究項目(3)のデータ分析・論文報告
大野　昴紀	非常勤研究員	研究項目(1)のデータ分析・論文報告
堀　紀子	非常勤研究員	研究項目(4)の調査調整/実施・データ収集・分析
関野　明子	非常勤研究員	研究項目(3)のデータ分析・論文報告

1　第四期中期計画における研究成果の概要

医療・介護システム研究テーマの目的は、地域単位で保健・医療・介護システムを分析し、高齢者の健康特性に配慮した質の高い保健・医療・介護サービスを提供することで、住み慣れた地域での生活を継続可能とするシステム構築に資する研究を遂行することである。当テーマではレセプト情報や健診情報等のビッグデータについて、データベース開発からデータ活用に至るまでの一連の研究環境を構築しており、研究の三本柱として「保健・医療システムに関する研究」、「医療と介護の連携に関する研究」「介護システムに関する研究」に取り組んでいる。

(1) 保健・医療システムに関する研究

①高齢者の多疾患併存・多剤処方の健康影響に関する研究
後期高齢者のほぼ全員は年に1回は外来を受診しているため、レセプト情報を活用することで、地域在住高齢者のほぼ全員を対象に、フレイルや要介護化のハイリスク者を抽出できる可能性がある。今年度はレセプト情報等を用いて多疾患併存や多剤処方による新規介護認定発生や総死亡への影響を検討した。北海道内に保険証登録住所地のある75歳以上で介護認定を受けたことのない者（442,630名、平均年齢80.6歳）を36か月間追跡し、多疾患併存や多剤処方の新規介護認定（要支援1以上）と死亡への影響を生存時間解析で分析した。疾患数（3カテゴリー）と薬剤数（3カテゴリー）の組み合わせから9カテゴリーの合成変数を作成して分析に用いた。その結果、疾患数の増加、薬剤数の増加は、新規介護認定リスクと総死亡リスクのどちらも増加した。特に、薬剤数と疾患数が最も少ない群を基準にすると、薬剤数と疾患数のどちらもが最も多い群では、新規介

護認定リスクは1.7～1.8倍、総死亡リスクは1.9～2.7倍と最もリスクが高かった。この分析結果は、現在、英文原著論文を執筆中である。

②高齢入院患者の退院直後の再入院予防に関する研究

急性期医療のアウトカム指標として「退院直後の再入院」が従来から使用されているが、近年は「全疾患による再入院」から「予防可能な再入院」へシフトしている。再入院の予防プログラム開発の基礎情報を得るために、東京都健康長寿医療センターに入院した65歳以上のDPCデータを用いて、入院時の患者情報（フレイルリスク、併存疾患、ADL等）から「全疾患による再入院」と「予防可能な再入院」の予測モデルを開発し、これら二つの間でその予測能を比較した。その結果、入院時フレイルリスク、併存疾患、ADL等から成る予測モデルは、「全疾患による再入院(C統計量：0.73, 95% 信頼区間：0.71-0.75)」よりも「予防可能な再入院(C統計量：0.79, 信頼区間：0.77-0.82)」で、より高い予測能が示された。この研究成果は、アメリカ老年学会（GSA）が刊行する「Innovation in aging」誌（IF:7）に掲載された。

(2) 医療と介護の連携に関する研究

高齢入院患者は長期療養施設への入所リスクが高いため、入院直後から長期療養施設の入所リスクを評価し、入院早期から在宅復帰支援を行うことが、入院日数短縮においても重要である。東京都健康長寿医療センターのDPCデータとDASCの連結レセプトデータを使用し、在宅から入院した患者9,060名（平均年齢79.4歳）を対象に、認知機能やADLの状況と長期療養施設への退院との関連を検討した。認知機能とADL低下の重症度別（DASC-8使用）に長期療養施設への退院患者の割合をみると、DASC-8のカテゴリーⅠは0.3%、カテゴリーⅡで1.1%、カテゴリーⅢでは4.5%であった。性別や年齢などの交絡因子の影響を統計学的に取り除いても、カテゴリーⅢはカテゴリーⅠよりも長期療養施設への退院リスクが4.1倍高いことが認められた。この研究成果は「Archives of Gerontology and Geriatrics」にて報告した。

(3) 介護システムに関する研究

認知症をはじめとする多様な要介護高齢者と家族、支援者らの支援ニーズに見合った介護システムの構築に資するべく、二つの研究に取り組んだ。「認知症高齢者とその家族の支援システムに関する研究」では、認知症介護における家族介護の実態である「名もなき介護」を明らかにし、ADLやIADLの支援だけでなく、認知症高齢者を支えるための多岐にわたる支援ニーズが明らかとなった。また、特に独居認知症介護を担う家族にとって、既存の公的・私的支援は介護負担を軽減せず、見守りや機能評価などの既存支援を超えた新たな支援ニーズが必要であることがわかった。「要介護高齢者家族の睡眠と蓄積介護負担感の関連に基づく個別支援研究」では、従来の支援が届かなかった男性介護者や介護負担の大きい家族介護者にとって、モニタリング支援が適用可能であることが示された。また定期的な記録による効果として【周囲の関係者との情報共有・関係改善】【規則的な生活リズムへの刺激】、【認知症を持つ高齢者との関係改善】【介護へのモチベーションの再確認】等の効果が示された。

(4) 東京LSA（SONIC研究）の推進

今年度は、ベースライン調査（2011年、2012年）時点で80歳群、90歳群だった参加者の追跡調査を実施し、会場調査参加者57名、郵送調査参加者は206名であった。昨年実施した70歳群の追跡調査に参加できなかった者（年齢82～84歳）については、今年度の会場調査に49名の参加が得られ、昨年度と合わせて196名を追跡できた。更に、心身機能の世代差を検討するための新規70歳コホート（年齢69～71歳）を当初計画よりも1年前倒しして開始し、板橋区において151名が初回会場調査に参加した。

原著論文の報告については、高齢者における処方薬数と転倒経験との関連を検討し（分析対象者1,076名）、多剤処方に加え、処方薬が1種類でも転倒リスクが高いことが示され、「Geriatrics & Gerontology International」誌で報告した。また、老年的超越に関する9年間の縦断変化を検討した結果（分析対象者3011人、年齢範囲：69-92歳）、ベースライン調査時の心身の健康状態や教育年数の影響を取り除いても、70歳から80歳にかけて老年的超越は大きく発達し、その後は高止まりすることが示された。本研究成果は「Journal of Adult Development」誌に投稿した。現時点で一回目の査読が終り、再投稿論文の準備中である。

(5) その他：「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施」研修会の開催

東京都委託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修」を担当した。今年度も都内区市町村の医療専門職等を対象に、延べ6日間の研修会を開催し、延べ約400名の参加者が得られた。研修会講師は、高齢者の保健事業に関与する医療関係団体（東京都歯科医師会、東京

都理学療法士協会、東京都薬剤師会、東京都栄養士会）から推薦を得たほか、当センターからは、フレイル予防センター、介護予防・フレイル予防推進支援センター、研究所から講師を依頼した。研修会の企画・調整・実施に際し、委託元の東京都保健医療局、保健事業を担当する東京都後期高齢者医療広域連合と連携しながら、研修会を企画・調整・実施を担当した。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 保健・医療システムに関する研究

①高齢者の多疾患併存・多剤処方の健康影響に関する研究

後期高齢者の健康診査では、2020年度から「後期高齢者の質問票」が全国で順次導入され、高齢者の健康状態を総合的に評価することが可能となりつつある。しかし後期高齢者の健診受診割合は全国平均で3割未満と低く、健診情報だけで地域高齢者全体の健康状態を評価し、それをフレイル予防や介護予防に活用することには限界がある。一方、後期高齢者のほぼ全員が年に1回は外来を受診していることから、レセプトデータに含まれる情報を活用することで、フレイル予防や介護予防の対象とすべきハイリスク者を、地域全体で把握できる可能性が考えられる。そこで今年度は、レセプト情報を用いて、多疾患併存や多剤処方による新規介護認定発生や総死亡への影響を検討した。

北海道後期高齢者医療広域連合データの分析では、毎年、最新データの提供を受け、データベースを更新している。多疾患併存や多剤処方の状況や新規介護認定者発生の推移をモニタリングすると同時に、多疾患併存・多剤処方の健康影響に関する分析を次年度以降も継続することで、後期高齢者一人ひとりの処方薬を把握し、処方の安全性を評価可能とする保健・医療システムの構築について検討が可能である。国内には全県単位で、重複処方や多剤処方に関する情報を各保険医療機関に提供している自治体があることから、この事例を参考にすることで、第四期中期計画最終年度までに、住民一人ひとりの全処方を包括的に把握し、処方の安全性を評価可能とする保健・医療システムの構築について提案できる可能性は高い。

②高齢者入院関連合併症・退院直後の再入院の予防に関する研究

東京都健康長寿医療センターに2016年7月以降に入院した65歳以上の患者のDPCデータを、認知症の重症度と日常生活動作（ADL）の評価データである「DASC-21」と突合させたデータベースを構築している（データ件数：延べ約3万件）。このDPC-DASC突合データベースを用いて、認知症重症度やADL情報、DPCデータの診療情報（診療行為・傷病名・薬剤・医療費情報等）を高齢者の入院医療に関する研究に利用している。

入院による療養場所の変化や入院での療養環境に負担によって、高齢患者では心身機能低下やせん妄などの高齢者入院関連合併症（Hospital-Associated Complications of Older People：HAC-OP）の発生リスクが高まる。HAC-OPは在院日数の延長や死亡に関連するが、入院患者への特別なケアの提供によってHAC-OPの予防が可能であることが報告されている。我々は、全国のDPC病院で導入可能なHAC-OPの予防ケアを検討するために、DPCデータを使ったHAC-OPの把握方法（HAC-OP-DPC）に取り組んでいる。HAC-OP発生を予測する高齢患者特性（併存疾患など）を把握した次のステップとして、HAC-OPの発生予防に効果的な介入方法を開発する。

ところで、急性期医療では「退院直後の再入院」が医療の質のアウトカム評価指標として注目されているが、近年では「再入院」の範囲を絞り、「全疾患による再入院」から「予防可能な再入院」へシフトしている。そこで今年度は東京都健康長寿医療センターのDPCデータを活用し、入院時の患者情報（フレイルリスク、併存疾患、ADL等）から「全疾患による再入院」と「予防可能な再入院」の予測モデルを開発し、これらの間で二つの予測能を比較した。

入院時のフレイルリスク、併存疾患、ADL等から構築される予測モデルは、「全疾患による再入院(C統計量：0.73, 95% 信頼区間：0.71-0.75)」よりも「予防可能な再入院(C統計量：0.79, 信頼区間：0.77-0.82)」の方が、統計学的にもより高い予測能を有することが明らかとなった。この研究成果は、アメリカ老年学会（GSA）が刊行する国際学術雑誌「Innovation in aging」（IF:7）に掲載された。

今年の夏までに、北海道後期高齢者医療レセプトデータベースへの新規データ（2021年度・2022年度分）の追加登録が完了しており、現在、データクリーニングを行っている。来年度は、この新規データを使用して、医療保険下で入院中の高齢者の心身機能の低下予防に着目した医療サービス「ADL維持向上加算」の導入が「予防可能な再入院」の予防につながっているか、「ADL維持向上加算」の効果を検証する予定である。これら一連の研究を遂行することで、第四期中期計画の最終年度までに、高齢入院患者における入院関連合併症の予防、退院直後の再入院予防のためのケアのあり方を提案できる可能性は高い。

(2) 医療と介護の連携に関する研究

今年度は「認知症重症度と長期療養施設への退院との関連」について研究に取り組んだ。高齢者の多くは日常的に医療や介護が必要になっても自宅で生活することを希望しているが、高齢入院患者では長期療養施設への退院が増加する。そのため入院後早期に長期療養施設への退院リスクのある患者を特定し、入院早期から在宅復帰支援を提供するシステムを構築することは、急性期医療機関における入院期間の短縮効果だけでなく、効率的な在宅復帰支援の提供を可能とすることが期待される。これまで、入院時に認知機能やADLが低下していることは長期療養施設への退院リスクであることが言われてきたが、これらの関連については検証が不十分であった。そこで、東京都健康長寿医療センターのDPCデータとDASC-21の連結レセプトデータを使用し、在宅から入院した高齢患者を対象に、認知機能やADLと長期療養施設への退院との関連を検討した。

分析対象者は東京都健康長寿医療センターに入院した65歳以上の高齢入院患者9,060名（平均年齢79.4歳）である。本研究では、認知機能とADL低下の重症度評価ツールとして、DASC-8を使用した。DASC-8は、DASC-21の中の8項目を使って、より簡便に認知機能とADLの重症度を評価するもので、そのスコアに応じて3つの重症度に判定される（カテゴリーⅠ：認知機能が正常でADL自立、カテゴリーⅡ：軽度認知障害～軽度認知症／手段的ADL（家事や交通機関の利用などの複雑な日常生活動作）低下、カテゴリーⅢ：中等度以上の認知症／基本的ADL（移動や入浴など基本的な日常生活動作）低下）。

DASC-8によって評価された認知機能とADL低下の重症度は、カテゴリーⅠが62.3%（5,640名）、カテゴリーⅡが18.6%（1,681名）、カテゴリーⅢでは19.2%（1,739名）で、長期療養施設へ退院した患者は、分析対象者の1.2%（112名）であった。認知機能とADL低下の重症度別に長期療養施設への退院患者の割合をみると、カテゴリーⅠは0.3%、カテゴリーⅡで1.1%、カテゴリーⅢでは4.5%であった。性別や年齢などの交絡因子の影響を統計学的に取り除いても、カテゴリーⅢはカテゴリーⅠよりも長期療養施設への退院リスクが4.1倍高いことが認められた。この研究成果は、国際科学雑誌「Archives of Gerontology and Geriatrics」に掲載された。

今後も入院中の合併症予防や退院直後の再入院予防に関する分析を継続して推進することで、第四期中期計画中に施設入所者の入院中の合併症予防、退院直後の再入院予防のための急性期入院医療におけるケア提供のあり方について提言できる可能性は高い。

(3) 介護システムに関する研究

①認知症高齢者とその家族の支援システムに関する研究

インタビュー調査を通じて家族介護の実態と課題を明らかにし、国際老年学会（IAGG）や日本心理学会でシンポジウム報告を行った。2,030名の認知症介護者データの解析から、独居の認知症高齢者の介護状況を明らかにするとともに、介護負担感の関連要因が介護形態による違いがあることが示された。また公的支援の実態として、全国の基礎自治体を対象にした質問紙調査の解析により、基礎自治体が従来とは異なる介護支援の実態に直面している現状が明らかになった。本研究成果は日本公衆衛生学会で報告し、現在、論文投稿中である。

日本老年社会科学会および日本老年学会合同学会で受賞した研究により、認知症介護における家族介護の実態である「名もなき介護」が明らかになり、ADLやIADLの支援に限らず、認知症高齢者を支えるための多岐にわたる支援ニーズが明らかとなった。しかし、特に独居認知症介護を担う家族にとって、既存の公的・私的支援が介護負担の軽減に至らず、見守りや機能評価などの既存支援を超えた新たな支援ニーズが必要であることが示された。さらに、基礎自治体による家族支援においては、従来の介護保険サービス利用支援や認知症介護に関する支援に限定されず、「8050問題」やキーパーソンの不在、家族介護者の支援能力低下などが顕在化し、公的支援の課題となっていた。これらの研究から、公的家族支援の在り方を変える必要性が明らかになっている。

来年度は今年度収集したインタビュー調査データおよび家族コホートデータを解析し、認知症介護の課題を明らかにするとともに、新たに認知症介護をすすめる上での地域支援に資するデータを収集することで、地域支援資源の可能性を検討し、認知症高齢者の在宅生活継続に資する知見を得ることができると考えている。

②要介護高齢者家族の睡眠と蓄積介護負担感の関連に基づく個別支援研究

210名の家族介護者を対象に、介護内容や睡眠、活動量計のモニタリング調査を実施し、継続的なデータ収集を行っている。社会実装に向けた運用上の課題解析は日本応用老年学会で報告され、モニタリングによる効果の質的・量的評価の解析結果は、次年度の学会報告や論文執筆に向けて準備を進めている。

この研究では、従来の支援が届かなかった男性介護者や介護負担の大きい家族介護者にとって、

モニタリング支援が適用可能であることが示された。また定期的な記録による効果として【周囲の関係者との情報共有・関係改善】【規則的な生活リズムへの刺激】、【認知症を持つ高齢者との関係改善】【介護へのモチベーションの再確認】等の効果が実証された。
既にデータ収集のためのシステムが構築され、データ収集が順調に進んでいる。収集されたデータを基に、来年度は調査協力者を拡大し、介護における個人差や日々の介護、睡眠、活動量の変動に関する詳細な分析により個別支援の実現に資する知見が得られる予定である。

(4) 東京LSA（SONIC研究）の推進

①処方薬数と転倒経験との関連に関する分析

高齢者における処方薬数と転倒経験との関連を検討した（分析対象者1,076名）。その結果、多剤処方に加え、処方薬が1種類でも転倒リスクが高いことが示された。また、処方薬が1種類のみの群（143名）では、処方薬の63%がFall risk-increasing drugs（FRIDs）と呼ばれる薬剤であった。この結果から、処方薬剤数にかかわらず、処方薬が一剤であってもその安全性を評価し、FRIDsが処方されている場合は当該処方の継続を検討する必要がある。本研究結果は国際学術雑誌「Geriatrics & Gerontology International」誌に採択された。

②老年的超越の縦断変化の検討

SONIC研究参加者3011人(年齢範囲69-92歳)の老年的超越に関する9年間の縦断変化を検討した。線形混合モデルによる分析の結果、ベースライン調査時の心身の健康状態や教育年数の影響を取り除いても、70歳から80歳にかけて老年的超越は大きく発達し、その後は高止まりすることが示された。これらの結果から、前期高齢期とは異なり、後期高齢期や超高齢期では身体的や社会的なリソースに対する認識が変化している可能性が考えられ、その変化に応じたケアや支援の内容や量を考慮していくことが重要であると考えられた。本研究成果はアメリカの国際学術雑誌「Journal of Adult Development」誌に投稿した。一回目の査読が終り、再投稿論文を投稿した。

今年度、計画を1年前倒しで新規70歳コホート調査を実施したこともあり、来年度はこの参加者の子どもを対象とする調査を計画している。研究資金の一部（科研費・基盤研究A、研究代表者・大阪大学・権藤恭之教授）は令和8年度まで確保できていることから、第四期中期計画期間終了となる令和9年度までに、新規70歳群とその子どもコホートの追跡研究を実施できる可能性は高い。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜多疾患併存・多剤処方の健康影響＞
【センター内】デジタル高齢社会
＜東京LSA（SONIC研究）＞
【センター内】ソーシャルインクルージョン、プロテオーム、認知症・精神保健研究
【センター外】大阪大学、慶應義塾大学、国立長寿医療研究センター
＜認知症高齢者とその家族の支援システム＞
【センター内】認知症未来社会創造センター、認知症・精神保健研究
【センター外】産業技術総合研究所、ジョンズ・ホプキンズ大学、香港教育大学
＜要介護高齢者家族の睡眠と蓄積介護負担感との関連＞
【センター内】フレイル・筋骨格系の健康、国立保健医療科学院
＜保健・医療システム＞
【センター内】認知症・精神保健研究
＜ケア移行期における有害事象（再入院等）の関連要因の分析＞
【センター内】高齢診療科
【センター外】マッコーリー大学
＜生活機能が医療のプロセス・アウトカムに及ぼす影響＞
【センター内】精神神経科、認知症医療推進支援センター

ソーシャルインクルージョン

研究実施体制

(1) 地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の 心理社会的健康に関する研究

(1)-1 受援に対する心理的抵抗が大きい高齢者に関する研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
池内　朋子	研究員	研究全体の統括
長田　久代	非常勤職員	研究事務補助

(1)-2 高齢者の心理的健康に関する研究

・年齢アイデンティティと時間展望に関する研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
池内　朋子	研究員	研究全体の統括
長田　久代	非常勤職員	研究事務補助

・高齢者の「感謝」感情に関する研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
小野　真由子	研究員	研究全体の統括
池内　朋子	研究員	データ分析
所属研究員以外	役職	所属機関等
長田　久雄	教授	桜美林大学
藤野　秀美	准教授	東邦大学看護学部

(2) 地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の 地域における支援体制に関する研究

(2)-1 地域の認知症支援体制に関わる専門職の支援に関する研究

・認知症の診断後支援に関する調査研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
井藤　佳恵	研究部長	認知症疾患医療センター、認知症サポート医の診断後支援に関する研究の統括
津田　修治	研究員	診療所、訪問看護師の診断後支援に関する研究の統括
菊地　和則	研究員	データ分析
所属研究員以外	役職	所属機関等
岡村　毅	研究副部長	自立促進と精神保健研究チーム
枝広　あや子	研究員	自立促進と精神保健研究チーム
山下　真理	研究員	自立促進と精神保健研究チーム
古田　光	精神科医師	東京都健康長寿医療センター精神科
畠山　啓	係長	東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター
扇澤　史子	精神科心理士	東京都健康長寿医療センター精神科
中島　朋子	常任理事	全国訪問看護事業協会
中村　順子	理事長	ホームホスピス秋田
中島　民恵子	准教授	日本福祉大学福祉経営学部医療･福祉マネジメント学科
粟田　主一	センター長	認知症未来社会創造センター
堀田　聰子	教授	慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科
松本　博成	助教	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻

・成年後見制度に関する調査研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
菊地　和則	研究員	研究全体の統括
肥田　あゆみ	非常勤研究員	データ分析
所属研究員以外	役職	所属機関等
赤沼　康弘	弁護士	日本弁護士連合会（東京弁護士会）
平澤　千鶴子	弁護士	日本弁護士連合会（第二東京弁護士会）
野口　雅人	司法書士	公益社団法人成年後見センター・リーガルサポート
藤原　康弘	司法書士	公益社団法人成年後見センター・リーガルサポート
大輪　典子	社会福祉士	公益社団法人日本社会福祉士会
星野　美子	社会福祉士	公益社団法人日本社会福祉士会

(2)-2 行政機関に把握される高齢者困難事例に関する研究

・高齢者困難事例の支援体制に関する調査研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
井藤　佳恵	研究部長	研究全体の統括
津田　修治	研究員	データ分析

・認知症高齢者の行方不明に関する調査研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
菊地　和則	研究員	研究全体の統括
池内　朋子	研究員	データ分析

（3）過疎地の認知症支援体制に関する研究

所属研究員氏名	役職	役割分担
井藤　佳恵	研究部長	研究全体の統括
津田　修治	研究員	研究デザイン、データ分析
小野　真由子	認知症支援推進センター	データ分析
所属研究員以外	役職	所属機関等
晏　子	招聘研究員	早稲田大学　国際教育協力研究所
問芝　志保	准教授	東北大学　文学部
神谷　綾子	大学院生	東京都立大学　人間健康科学研究科

1　第四期中期計画における研究成果の概要

第四期中期計画の目標：身体的健康の課題、精神的健康の課題、社会的困難が重畳する複雑困難な状況にあり、社会的に周縁化されやすい高齢者を、フォーマルなサービスで支援していくために必要な地域支援体制を明らかにすること。

(1)地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の心理社会的健康に関する研究

(1)-1 受援に対する心理的抵抗が大きい高齢者に関する研究

複雑困難状況にある高齢者の特徴として「受援の拒否」がある。受援を拒否する背景に、「迷惑をかけたくない」「他者に頼りたくない」「現状を変えられたくない」思いがあることが明らかになった。このような思いに対するアプローチの方策を検討する必要がある。本調査の結果は、日本老年社会科学会およびGerontological Society of America 2023で報告し、英文原著論文にまとめ、現在査読を受けている。

(1)-2 高齢者の心理的健康に関する研究

主観年齢と生命予後に関する研究

欧米で行われた主観年齢と死亡率の関連に関する研究では、主観年齢と死亡率が関連することが報告されている。しかし鳩山町コホートにおける5年間の追跡調査の結果、日本人では「暦年齢よりも老いて感じていること」と死亡率には有意な関連がないことが示された。本研究成果はIAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023で発表し、英文原書論文にまとめ、Geriatrics & Gerontology Internationalに掲載された。

(2)地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の地域における支援体制に関する研究

(2)-1 地域の認知症支援体制に関わる専門職の支援に関する研究

・認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援に関する研究

認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援は、①情緒・情報的な支援、②医療の受療に関する支援、③就労に関する支援、④経済的な支援，⑤障害福祉サービスや介護保険サービスの利用支援、⑥ピアサポートやインフォーマル・サポートの利用支援の、6 カテゴリーに分類された。認知症疾患医療センターで行われている診断後支援と、全国調査の結果で明らかになった若年性認知症者および家族のニーズとを比較したところ、「地域や職域における若年性認知症理解の促進」が、今後拡充するべき領域と考えられた。本研究の成果は認知症ケア学会第 24 回大会にて報告し、和文原著論文にまとめ、老年精神医学雑誌に掲載された。

・認知症サポート医の役割に関する研究

認知症サポート医は、幅広い困難事象（複雑困難状況にある者＝困難事例が抱える困難）を扱っていること、困難事例対応において、認知症を診断し、抗認知症薬を導入し、他の専門職に対して医療的側面からスーパーバイズをすることを期待されていることが明らかになった。一方で、相談・連携先としての優先度は認知症疾患医療センター、かかりつけ医よりも低く、相談・連携方法の周知が課題と考えられた。本研究の成果は和文原著論文にまとめ、日本老年医学雑誌に掲載された。また、東京都医師会が主催する東京都認知症サポート医連絡協議会で共有され、「東京

都地域連携型認知症サポート医（仮称）」の創設に還元された。

・診療所における認知症の診断後支援に関する研究

軽度認知症では心理社会的支援のニーズが高い。しかしそのニーズは診療所で見過ごされやすく、意識的に対応する必要があることが明らかになった。また、診療所の診断後支援における多職種協働の実践パターンには３つの類型があること、類型によって、実施されやすい診断後支援とされにくい診断後支援があることが明らかになった。本研究の成果は、2023 IPA (International Psychogeriatrics Association) International Congressで発表し、英文原著論文にまとめ、International Journal of Integrated Careにて査読を受けている。

(2)-2 行政機関に把握される高齢者困難事例に関する研究

・高齢者困難事例の分析的枠組みの開発

複雑困難状況にある高齢者が抱える困難事象は、①精神的健康の課題、②身体的健康の課題、③家族の課題、④近所づきあいの課題、⑤金銭トラブルの５つのカテゴリーに分類される。本研究の成果は老年精神医学会にて発表し、英文原著論文にまとめGeriatrics & Gerontology Internationalに掲載された。

・高齢期の妄想と社会的孤立の関連に関する研究

社会的孤立が深まる過程で妄想が形成され体系化していくことを3ステップの仮説で提示した。迫害妄想が形成される前に幻覚状態を呈する時期があり、この時期にインフォーマル・サポートを提供することが重要であることを示した。本研究の成果は2023 IPA (International Psychogeriatrics Association) International Congressで発表し、英文原著論文にまとめGeriatrics & Gerontology Internationalに掲載された。

・Advanced Care Planning の基盤となるデス・エデュケーションに関する研究

死を語る場であるデスカフェについて、日本のデスカフェは、「死別体験を経た参加者が、個人的な死を語る場を提供することを通して、参加者個人の救済を意図したデスカフェ」と、「多様な個人を受け入れ、多様な死を語る場を提供することを通して、死を包摂する社会をつくることを意図したデスカフェ」に大別された。地域においてACPの準備状況を用意ためのデス・コミュニケーションの促進には、後者の形式が適していると考えられた。本研究の成果は2023 IPA (International Psychogeriatrics Association) International Congressで発表し、英文原著論文にまとめBMC Health Service researchに掲載された。

(3) 過疎地域における認知症支援体制に関する研究

東京都の島しょ地域では、全国および東京都全域のデータと比較して、要支援１および２でサービスを利用している人の頻度が低く、要介護４および５で施設サービスを利用している人の頻度が高いことが把握され、認知症の中期以降に在宅生活を続けることの難しさ-Aging in place の課題-が抽出された。本研究の成果は和文総説にまとめ、老年精神医学雑誌に掲載予定である。

２　研究項目（研究課題）の実施状況及び達成状況

(1) 地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の心理社会的健康に関する研究

(1)-1-2 受援に対する心理的抵抗が大きい高齢者に関する研究

複雑困難状況にある高齢者はしばしば、社会的孤立状態にある。高齢者の社会的孤立の実態調査を目的として、全国の社会福祉協議会を対象に郵送調査を実施した（ｎ=682、有効回収率18.7%）。調査の結果、社会的孤立状態にある高齢者の特徴として「独居、身寄りなし」「経済的困窮」「認知症その他の精神疾患」「受援拒否」が抽出された。さらに、「受援の拒否」の背景に、「迷惑をかけたくない」「他者に頼りたくない」「現状を変えられたくない」思いがあることが明らかになった。

本調査の結果は、日本老年社会科学会およびGerontological Society of America 2023で報告し、英文原著論文が国際誌にて査読中である。

高齢者の「迷惑をかけたくない」心理に関する先行研究はほとんどない。また、「迷惑をかけたくないから、必要な支援を希求しない」という心理は、アメリカ的個人主義を背景とした自己決定の論理だけでは解決しない課題があることを示す知見であり、これを提示することに大きな意義があると考える。現場の個別支援の実践における、「迷惑をかけたくない」「他者に頼りたくない」「現状を変えられたくない」思いに対するアプローチの方策を検討する必要性が明らかになった。

全国の社会福祉協議会の協力を得て、地域で社会的孤立状態にある高齢者を対象としたインタビュー調査を進めている。今後は、「迷惑をかけたくない」「他者に頼りたくない」「現状を変え

られたくない」思いから受援を拒否し、社会的孤立状態に陥る高齢者を支援につなげる方策の検討を進める。研究計画の実現に問題はない。

(1)-2-1 主観年齢が高齢者の生命予後に与える影響

欧米人を対象として行われたこれまでの研究では、主観年齢が死亡率に関連することが報告されている。しかし鳩山町コホートにおける 5 年間の追跡で（n=329)、日本人では「暦年齢よりも老いて感じていること」と死亡率に有意な関連がないことが明らかになった。

本研究成果は IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 で発表し、英文原書論文にまとめ、Geriatrics & Gerontology International に掲載された。

日本人を対象とした、主観年齢と死亡率の関連に関する最初の報告である。欧米人を対象とした先行研究とは異なり、日本人では主観年齢は死亡率に関連しないことが示された。

(1)-2-2 高齢者の「感謝」感情に関する研究

研究 1)高齢者の「感謝」感情の構成要素の研究

高齢者の「感謝」感情の構成要素を明らかにするため、介護予防教室に参加する高齢者を対象としたインタビュー調査を行い、質的分析を行った。その結果、高齢者の「感謝」感情は、「人生で得てきたものの価値に気づく体験」「自己の内と外に向かう肯定的な気持ち」「得たものを次世代や社会に広く還元していきたいという願望」の 3 要素から構成されることが明らかになった。本研究の成果は IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 で発表し、和文原著論文にまとめ、学術誌「ヒューマン・ケア研究」に掲載された。

研究 2)高齢者感謝尺度の開発

研究１）で明らかになった 3 要素を基礎的枠組みとして、高齢者感謝尺度を開発中である。この尺度は本年度中に完成させる予定であり、次年度は、本尺度を用いて高齢者の「感謝」感情と well-being の関連を検討する計画である。

「感謝」感情には、年代による差異があることが指摘されている。しかし、これまで本領域の研究は若年層を対象として行われ、高齢者の「感謝」感情に焦点をあてた研究は行われていない。本研究によって、これまで未解明であった高齢者の「感謝」感情の構成要素が明らかになった。

(2) 研究地域で暮らす複雑困難状況にある高齢者の支援体制に関する研究

(2)-1 地域の認知症支援体制に関わる専門職の支援に関する研究

(2)-1-1 認知症疾患医療センターにおける診断後支援に関する研究

全国の認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援に関する研究を行った。我が国の若年性認知症者の多くは、認知症疾患医療センターで把握されていることが明らかになっている[*1]。そこで、認知症疾患医療センターに指定されている 429 施設（2018 年時点）の相談員等を対象とした全国調査[*2,3]のデータ（n=330、有効回収率 76.9%）を分析し、若年性認知症の診断後支援の実態把握を行った。

*1. AMED「若年性認知症の有病率・生活実態把握と多元的データ共有システムの開発」2017-2019 年度総括・分担報告書：研究開発代表者：粟田主一、2021

*2. 2018 年度老人保健健康増進等事業「認知症疾患医療センターの効果的、効率的な機能や地域との連携に関する調査研究事業」

*3. 2019 年度老人保健健康増進等事業「認知症疾患医療センターの質の管理及び地域連携のあり方に関する調査研究事業」

認知症疾患医療センターで行われている若年性認知症者に対する診断後支援は、以下の 6 カテゴリーに分類された。①情緒的・情報的な支援、②医療の受療に関する支援、③就労に関する支援、④経済的な支援、⑤障害福祉サービスや介護保険サービスの利用支援、⑥ピアサポートやインフォーマル・サポートの利用支援。

本研究で明らかになった診断後支援を、先行研究で明らかになっている認知症者および家族のニーズと比較したところ、「地域や職域における若年性認知症理解の促進」が今後拡充するべき領域と考えられた。本研究の成果は認知症ケア学会第 24 回大会にて報告し、和文原著論文にまとめ、老年精神医学雑誌に掲載された。次年度は、東京都で認知症疾患医療センター事業が開始された 2012 年から現在までの、都内 52 か所の認知症疾患医療センターの診断後支援等データをもちいて、東京都の認知症疾患医療センター事業体制の分析を行う。

(2)-1-2 認知症サポート医の役割に関する研究

2025 年までに認知症サポート医を 16,000 人養成することが目標とされ、現在まで順調に進捗

している。一方で課題として、認知症初期集中支援チーム員医師以外の認知症サポート医の役割がわかりにくく、十分に活用されていない点が挙げられる。

これまでに行われた調査で、認知症サポート医は複雑困難状況にある高齢者、いわゆる困難事例への対応を期待されていることが報告されている。そこで今回、困難事例対応における多機関多職種連携において、認知症サポート医はどのような役割を期待されているのか、地域の認知症支援システムに関わる専門職を対象としたアンケート調査を実施した（n＝578、有効回収率49.3%）

(3) 過疎地域の認知症支援体制に関する研究【新規追加】

(3)-1 地域包括ケアシステムにおける認知症の保健・医療・介護の連携体制の実践を評価するための分析モデルの構築

機縁法にて8町村を選定し、フォーマル/インフォーマル・サービス提供者を対象として、過疎地域における地域包括支援システムの実践をテーマにしたフォーカス・グループ・ディスカッションを行った。次いで、integrated care 理論モデル（Singer ,2022）をベースにして開発した分析モデルを用いたテーマ分析を行った。

今後、分析結果をもとに質問紙の項目を作成し、2024年度に過疎地域自立促進特別措置法によって規定される過疎関連市町村（全国885カ所）を対象とした質問紙調査を行う。

(3)-2 東京都の島しょ地域の調査

研究1）東京都の島しょ地域の認知症支援体制の現状と課題

2014年より認知症支援推進センターで行っている東京都の島しょ地域（伊豆・小笠原諸島の9町村）の認知症支援体制構築にかかる支援について、2014年から2023年の間に行ったフォーカス・グループ・ディスカッションの逐語録と公表されている介護保険サービスデータをあわせて分析し、東京都の島しょ地域の認知症支援体制の現状と課題を抽出した。本研究の成果は和文総説にまとめ、老年精神医学雑誌で報告する（2023年1月号に掲載予定)。

研究2）三宅村在住の高齢者の実態把握のための調査

高齢化と人口減少が進む過疎町村において、フォーマルサポートの不足を補ってきた地域コミュニティ内の互助の力が衰えてきていることが把握され、インフォーマル・サポートネットワークの脆弱性が増してきている。

伊豆諸島三宅島に位置する三宅村は、火山活動度Aランク（気象庁）の活火山を抱える自治体であり、とくに2000年の火山活動に際しては全島民の島外避難が行われ、地域コミュニティの解体を経験した。今回、地域コミュニティの維持が困難になりつつある地域で暮らす高齢者の実態を把握するため、三宅村の協力を得て、65歳以上住民の調査を行った。本研究の成果は、日本認知症ケア学会第25回大会で発表予定である。

研究3)神津島村における在宅看取りを支えるフォーマル/インフォーマル・サポートの調査

研究(3)-2-1から、医療介護資源が不足する過疎地では、医療介護需要度が一定程度以上になると、その地域で生活を続けることは極めて困難であり、地域外の病院や施設に移ることを余儀なくされる傾向が強いこと、在宅生活の限界は、都市部よりも介護需要度が軽度の段階に設定されていることが明らかになった。

そのような中、伊豆諸島神津島に位置する神津島村は、全国的に見ても在宅看取り　率が高い自治体として知られる。今回、神津島村の在宅看取りを支えるフォーマルおよびインフォーマル・サポートを明らかにするため、70代～80代の地域住民を対象としたフォーカス・グループ・ディスカッションを実施し、主題分析を行った。

次年度は、得られた知見を基本的な枠組みとしてインデプス・インタビューを実施し、在宅看取りを支えるフォーマル/インフォーマル・サポートの全体像を提示する。

３　他チーム、病院部門、外部研究機関（外国機関を含む）等との連携

＜受援に対する心理的抵抗が大きい高齢者に関する研究＞
【センター内】認知症疾患医療センター
【センター外】岡山大学、山ノ内町社会福祉協議会、
＜高齢者の心理的健康に関する研究＞
【センター内】社会参加と地域保健研究チーム、
【センター外】桜美林大学、東邦大学
＜地域の認知症支援体制に関わる専門職の支援に関する研究＞
【センター内】自立促進と精神保健研究チーム、認知症支援推進センター（認知症未来社会創造センターIRIDE)、認知症疾患医療センター（認知症未来社会創造センターIRIDE)、精神科、

【センター外】東京都福祉保健局、東京都医師会、全国訪問看護事業協会、日本弁護士連合会、成年後見センター・リーガルサポート、日本社会福祉士会、
＜行政機関に把握される高齢者困難事例に関する研究＞
【センター外】板橋区おとしより保健福祉センター、板橋区医師会
＜過疎地域における認知症支援体制に関する研究＞
【センター外】認知症支援推進センター（認知症未来社会創造センターIRIDE)、東京都福祉保健局、早稲田大学、広島大学、東北大学

論文・学会発表（令和5年度）

デジタル高齢社会

1 論文（誌上発表）：原著

1. ◎★Manami Ejiri, Hisashi Kawai, Keigo Imamura, Takeshi Kera, Kazushige Ihara, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi：The trajectory of psychological well-being during the COVID-19 pandemic and its association with health-promoting coping behavior among Japanese community-dwelling older adults: The Otassha Study. Exp Gerontol. 171:112029. 2023.（原著、査読あり）（IF: 3.9, 2022)
2. Manae Harada, Yuta Suzuki, Ryota Matsuzawa, Takaaki Watanabe, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Naoyoshi Aoyama, Shiwori Osada, Atsushi Yoshida, Atsuhiko Matsunaga：Physical function and physical activity in hemodialysis patients with peripheral artery disease. Hemodial Int. 27(1):74-83. 2023.（原著、査読あり）（IF: 1.3, 2022)
3. ◎★解良 武士, 齊田 高介, 樋口 大輔, 小野沢 浩, 篠原 智行, 河合 恒, 大渕 修一：様々なサルコペニア定義におけるSARC-F の有効性について．日本予防理学療法学会雑誌．2(1)：18-23．2023.（原著、査読あり）
4. Taku Toyama, Hisashi Kawai, Yohei Hashimoto, Kunihiro Azuma, Tomoyasu Shiraya, Jiro Numaga, Shuichi Obuchi, Takashi Ueta, OTASSHA Study Group：Macular and peripapillary retinal nerve fiber layer thinning in eyes with prediabetes in the elderly population: OTASSHA study. Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol. 261(5):1275-1281. 2023.（原著、査読あり）（IF: 2.7, 2022)
5. ◎★Keigo Imamura, Shohei Yamamoto, Yuta Suzuki, Shun Yoshikoshi, Manae Harada, Shiwori Osada, Kentaro Kamiya, Ryota Matsuzawa, Atsuhiko Matsunaga：Comparison of the association between six different frailty scales and clinical events in patients on hemodialysis. Nephrol Dial Transplant. 13;38(2):455-462. 2023.（原著、査読あり）（IF: 6.1, 2022)
6. 伊藤久美子, 河合恒, 西田和正, 江尻愛美, 大渕修一：通所型サービス事業所を拠点とした総合事業対象者向け介護サービスの担い手養成プログラム「サブスタッフ養成講座」．日本公衆衛生学雑誌．70(5):311-320．2023.（原著、査読あり）
7. ◎★Hisashi Kawai, Shuichi P. Obuchi, Manami Ejiri, Kumiko Ito：Association Between Daily Life Walking Speed and Frailty Measured by a Smartphone Application: a Cross-Sectional Study．BMJ Open. 23;13(1):e065098corr1. 2023.（原著、査読あり）（IF: 2.9, 2022)
8. Narumi Fukuzaki, Yuta Suzuki, Juri Uchida, Takuya Nakajima, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Manae Harada, Ryota Matsuzawa, Kentaro Kamiya, Atsuhiko Matsunaga：Changes in body composition of patients undergoing hemodialysis during the coronavirus disease 2019 pandemic: a retrospective longitudinal study. Ren Replace Ther. 9(1):12. 2023.（原著、査読あり）（IF: 1.2, 2022)
9. Yuta Suzuki, Manae Harada, Ryota Matsuzawa, Keika Hoshi, Yong Mo Koh, Naoyoshi Aoyama, Kaoru Uemura, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Kentaro Kamiya, Atsushi Yoshida, Tetsuo Shoji, Atsuhiko Matsunaga: Trajectory of Serum Albumin Prior to Death in Patients Receiving Hemodialysis. J Ren Nutr. 33(2):368-375. 2023.（原著、査読あり）（IF: 3.2, 2022)
10. Junta Takahashi, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Kazushige Ihara, Kaori Ishii, Koichiro Oka, ★Shuichi Obuchi：Activity diversity is associated with the prevention of frailty in community-dwelling older adults: The Otassha Study. Front Public Health. 11:1113255. 2023.（原著、査読あり）（IF: 5.2, 2022)
11. Takahisa Ohta, Hiroyuki Sasai, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Takumi Abe, Mari Yamashita, Shuichi P Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Kenji Toba; IRIDE Cohort Study Investigators：Age- and sex-specific associations between sarcopenia severity and poor cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: The IRIDE Cohort Study. Front Public Health. 11:1148404. 2023.（原著、査読あり）（IF: 5.2, 2021)
12. Shun Yoshikoshi, Shohei Yamamoto, Yuta Suzuki, Keigo Imamura, Manae Harada, Kentaro Kamiya, Atsuhiko Matsunaga：Reserved gait capacity and mortality among patients undergoing hemodialysis. Nephrol Dial Transplant. 38(12), 2704-2712. 2023.（原著、査読あり）（IF: 6.1, 2022)
13. Narumi Kojima, Miji Kim, Kyoko Saito, Yuko Yoshida, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi, Hiroyuki Shimada, Takao Suzuki, Hajime Iwasa, Hunkyung Kim：Effects of Daily Consumption of Soy Products on Basic/Instrumental Activities of Daily Living in Community-Dwelling Japanese Women Aged 75 Years and Older: A 4-Year Cohort Study. Womens Health Rep (New Rochelle). 4(1):232-240. 2023.（原著、査読あり）（IF: 1.3, 2021)
14. Takeaki Takeuchi, Kazuaki Hashimoto, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Hisashi Kawai, Motonaga Kojima, Masahiro Hashizume：Characteristics of blood biomarkers and eating behavior among older community-dwelling adults with typical and atypical depression. Clinical Nutrition Open Science. 49,157-165. 2023.（原著、査読あり）
15. 本川 佳子, 三上 友里江, 早川 美知, 白部 麻樹, 柄澤 紀, 長谷川 隆則, 河合 恒, 大渕 修一, 平野 浩彦：地域在住高齢者の肉類摂取量とフレイル関連因子に関する横断的検討．日本サルコペニア・フレイル学会雑誌．

7(1):112-115. 2023. (原著、査読あり)

16. ◎★Keigo Imamura, Shohei Yamamoto, Yuta Suzuki, Shun Yoshikoshi, Manae Harada, Shiwori Osada, Kentaro Kamiya, Ryota Matsuzawa, Atsuhiko Matsunaga: Prevalence, overlap, and prognostic impact of multiple frailty domains in older patients. Arch Gerontol Geriatr. 114:105082. 2023. (原著、査読あり) (IF: 4.0, 2022)
17. ◎★Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi: Impact of combinations of subscale declines in higher-level functional capacity on 8-year all-cause mortality among community-dwelling older Japanese adults. Archives of Gerontology and Geriatrics. 114:105096. 2023. (原著、査読あり) (IF: 4.0, 2022)
18. ◎★Takeshi Kera, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi: Respiratory sarcopenia is a predictor of all-cause mortality in community-dwelling older adults-The Otassha Study. J Cachexia Sarcopenia Muscle. 14(4):1894-1899. 2023. (原著、査読あり) (IF: 8.9, 2022)
19. Masanori Iwasaki, Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Misato Hayakawa, Yuki Ohara, Yoshiko Motohashi, Ayako Edahiro, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Yasuyuki Sakata, Kazushige Ihara, Yutaka Watanabe, Shuichi Obuchi, Hirohiko Hirano : Serum levels of vitamin D and periodontal inflammation in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. J Clin Periodontol. 50(9):1167-1175. 2023. (原著、査読あり) (IF: 6.7, 2022)
20. Takumi Abe, Mari Yamashita, Yoshinori Fujiwara, Hiroyuki Sasai, Shuichi P Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Shuichi Awata, Kenji Toba; IRIDE Cohort Study investigators : Fluctuations in Cognitive Test Scores and Loss to Follow-up in Community-Dwelling Older Adults: The IRIDE Cohort Study. Dement Geriatr Cogn Disord. 52(5-6), 296-303. 2023. (原著、査読あり) (IF: 2.4, 2022)
21. Shun Yoshikoshi, Yuta Suzuki, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Manae Harada, Shiwori Osada, Atsuhiko Matsunaga : Effects of anthropometric changes on hospitalization and mortality among patients on hemodialysis. J Nephrol 36, 1983-1990 2023. (原著、査読あり) (IF: 3.4, 2022)
22. Yusuke Matsunaga, Yuta Suzuki, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Manae Harada, Toshiki Kutsuna, Kentaro Kamiya, Atsushi Yoshida, Kanako Ichikura, Yuko Fukase, Norio Murayama, Hirokuni Tagaya, Atsuhiko Matsunaga : Interactional effects of depressive symptoms and physical function on daily physical activity in ambulatory patients receiving hemodialysis. Ren Replace Ther 9;28:2023. (原著、査読あり) (IF: 1.2, 2022)
23. Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Keiko Motokawa, Misato Hayakawa, Kazuhito Miura, Lena Kalantar, Ayako Edahiro, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Yutaka Watanabe, Shuichi Obuchi, Hirohiko Hirano : Validation of self-reported articulatory oral motor skill against objectively measured repetitive articulatory rate in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. Geriatr Gerontol Int. 23(10):729-735. 2023. (原著、査読あり) (IF: 3.3, 2021)
24. ◎★Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi : Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults: the Otassha study. Front Public Health. 11:1248462. 2023. (原著、査読あり) (IF: 5.2, 2022)
25. Masaharu Murakami, Hirohiko Hirano, Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Ayako Edahiro, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Keiko Motokawa : Development of a multiple masticatory function model based on the evaluation of sarcopenia: A cross-sectional survey of the Otassha study. Arch Oral Biol. 155:105803. 2023. (原著、査読あり) (IF: 3.0, 2021)
26. ◎★Takeshi Kera, Yosuke Osuka, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi, Development and Validation of Rapid Sarcopenia Screening: The Otassha Study, Geriatr Gerontol Int. 23(12), 945-950. 2023. (原著、査読あり) (IF : 3.3、2022)
27. Junta Takahashi, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Shuichi Obuchi : Predicting the incidence of mild cognitive impairment with a computer-based cognitive assessment tool in community-dwelling older adults: The Otassha study. PLoS ONE. 19(1): e0297433. 2023. (原著、査読あり) (IF : 3.7、2022)
28. Shun Yoshikoshi, Shohei Yamamoto, Yuta Suzuki, Keigo Imamura, Manae Harada, Sachi Yamabe, Yusuke Matsunaga, Shiwori Osada, Hirokuni Tagaya, Atsuhiko Matsunaga: Association between Physical Frailty and Sleep Disturbances among Patients on Hemodialysis: A Cross-Sectional Study. Nephron. 148(3):152-159. 2024. (原著、査読あり) (IF : 2.5、2022)
29. Juri Uchida, Yuta Suzuki, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Takuya Nakajima, Narumi Fukuzaki, Manae Harada, Kentaro Kamiya, Ryota Matsuzawa, Atsuhiko Matsunaga: The Association of Short Physical Performance Battery With Mortality and Hospitalization in Patients Receiving Hemodialysis. J Ren Nutr. In press, 2023. (原著、査読あり) (IF : 3.2、2022)
30. Sachi Yamabe, Shohei Yamamoto, Manae Harada, Yuta Suzuki, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Shiwori Osada, Atsuhiko Matsunaga : Utility of the low physical activity questionnaire for hemodialysis patients with frailty: a cross-sectional study. Ren Replace Ther 9, 61. 2023. (原著、査読あり) (IF : 1.2、2022)
31. Sho Hatanaka, Hiroyuki Sasai, Takashi Shida, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Takahisa Ohta, Takumi Abe, Mari Yamashita, Shuichi P Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Kenji Toba; IRIDE Cohort Study investigators : Association between dynapenia and cognitive decline in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. Geriatr Gerontol Int, 24 Suppl 1:123-129.. 2024. (原著、査読あり) (IF : 3.3、2022)
32. ◎★Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi: Three-year trajectories of social networks, face-to-face interactions, and non-face-to-face interactions among community-dwelling older adults in Japan during the COVID-19 pandemic: Otassha study. Maturitas. 183. 107943, 2024. (原著、査読あり) (IF : 4.9、2022)

33. Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Keiko Motokawa, Tomoki Tanaka, Kazunori Ikebe, Takayuki Ueda, Shunsuke Minakuchi, Masahiro Akishita, Hidenori Arai, Katsuya Iijima, Hiroyuki Sasai, Shuichi Obuchi, Hirohiko Hirano : Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-item Checklist. Geriatr Gerontol Int. 24(4):371-377. 2024. （原著、査読あり）（IF：3.3、2022）
34. Takumi Abe, Yoshinori Fujiwara, Akihiko Kitamura, Yu Nofuji, Yukiko Nishita, Hyuma Makizako, Seungwon Jeong, Masanori Iwasaki, Minoru Yamada, Narumi Kojima, Katsuya Iijima, Shuichi Obuchi, Ken Shinmura, Rei Otsuka, Takao Suzuki : Higher-level competence: Results from the Integrated Longitudinal Studies on Aging in Japan (ILSA-J) on the shape of associations with impaired physical and cognitive functions. Geriatr Gerontol Int. 24(4): 352-358. 2024. （原著、査読あり）（IF：3.3、2022）
35. ◎★Keigo Imamura, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Hiroyuki Sasai, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi : Social isolation, regardless of living alone, is associated with mortality: The Otassha Study. Front Public Health. 12:1365943, 2024. (IF: 5.2, 2022)
36. Kazuaki Hashimoto, Takeaki Takeuchi, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kim Hunkyung, Yutaka Watanabe, Masahiro Hashizume : Association Between Ego-Resilience and Social Isolation Among Urban Older People. Gerontol Geriatr Med. 10. 2024. (IF: 2.7, 2022)

２　論文（誌上発表）：総説

1. 大渕修一：健康増進に寄与する理学療法士の役割と期待．滋賀県理学療法士会学術誌．理学療法湖都．42．1-7．2022．（総説、査読なし）
2. 今村慶吾、松永篤彦： 腎臓リハビリテーションの実際（安全性も含めて）．透析フロンティア．152．10-13．2023．（総説、査読なし）
3. 今村慶吾、松永篤彦： 腎疾患患者に対するフレイルの管理． The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine. 60巻10号．P.857-863．2023．（総説、査読なし）
4. 大渕修一：介護予防（フレイル予防）のための運動療法．理学療法ジャーナル．57(12)．1409-1413．2023．（総説、査読なし）

３　学会発表（国際）

1. Hisashi Kawai, Shuichi P. Obuchi, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito：Association Between Intra-day Variation in Daily Life Walking Speed and Frailty Measured by a Smartphone Application. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
2. Keigo Imamura, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi：Impact of combined social isolation and living alone on mortality: The Otassha Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
3. Manami Ejiri, Hisashi Kawai, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Atsushi Araki, Teruyuki Koyama, Masamitsu Sugie, Motonaga Kojima, Harumi Nakada, Takao Suzuki, Shuichi Obuchi：Higher health literacy reduces depression among community-dwelling older adults with physical frailty: a cross- sectional study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
4. Shuichi Obuchi：Measurement of objective walking related activities with wearable devices. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
5. Hisashi Kawai: Reliability of measurement for daily life walking speed and its association with frailty, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 in Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
6. Hisashi Kawai: Changes in walking, social interaction, and psychological well-being among older Japanese individuals during the COVID-19 pandemic, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 in Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
7. Hiroyuki Sasai, Hisashi Kawai, Narumi Kojima, Yosuke Osuka, Shuichi P. Obuchi: Recent studies in frailty and cognitive function: The Otassha Study, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 in Yokohama, Japan, 2023.6.12-14.
8. Manae Harada, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Ryota Matsuzawa, Atsuhiko Matsunaga, Yasuo Takeuchi and Atsusi Yosida : Age-related trajectory pattern of handgrip strength and mortality in patients on hemodialysis. 60th ERA Congress, Milan, Italy. 2023.6.15-18.
9. Shun Yoshikoshi, Yuta Suzuki, Shohei Yamamoto, Keigo Imamura, Manae Harada, Narumi Fukuzaki, Asumi Tobita, Sayaka Nikkawa, Shiwori Osada and Atsuhiko Matsunaga：Trajectory of Anthropometric Indicator and Clinical Events Among Patients on Hemodialysis. 60th ERA Congress, Milan, Italy., 2023.6.15-18.
10. Asumi Tobita, Keigo Imamura, Shun Yoshikoshi, Juri Uchida, Takuya Nakajima, Narumi Fukuzaki, Sayaka Nikkawa, Manae Harada and Atsuhiko Matsunaga：Impact of combined physical frailty and depressive symptoms on mortality in patients on hemodialysis. 60th ERA Congress, Milan, Italy. 2023.6.15-18.
11. Mikiko Oono, Nomura Ayano, Koji Kitamura, Yoshifumi Nishida, Shunsaburo Nakahara, Hisashi Kawai: Homeostatic System Design Based on Understanding the Living Environmental Determinants of Falls, 2023 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics, Maui, Hawaii, 2023.10.1-4.
12. Obuchi SP, SWING-Japan Member: Wearable watch, NCGG-ICAH-TMIG joint Sympsium 2023, Tokyo, 2023.10.17.
13. Keiko Motokawa, Masanori Iwasaki, Maki Shirobe, Yasuyuki Sakata, Mana Kato, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Hirohiko Hirano: Association of Serum 25(OH)D Levels with Oral Function in Community-Dwelling Older Adults, The 1st International Conference of Asian Dysphagia Society, Korea, 2023.11.9-11.
14. Obuchi SP, Kenji Toba, SWING-Japan Member: An attempt to develop a digital biomarker for frailty, International Conference for Healthy Aging and Biomarkers, Taipei, 2023.12.2.

４　学会発表（国内）

1. 江尻愛美, 河合　恒, 伊藤久美子, 藤原佳典, 平野浩彦, 井原一成, 大渕修一：地域在住高齢者における主観的

健康感の無回答と死亡リスクの関連：お達者健診研究．第24回日本健康支援学会年次学術大会，福岡，2023.3.4-5

2. 今村慶吾，原田愛永，山本尚平，鈴木裕太，吉越駿，内田樹里，中嶋拓也，福崎なるみ，長田しをり，松沢良太，松永篤彦： 血液透析患者における快適歩行速度の加齢変化パターンと生命予後との関連：長期縦断研究．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．埼玉，2023.3.18-19
3. 新川さやか，今村慶吾，吉越駿，中嶋拓也，内田樹里，福崎なるみ，原田愛永，長田しをり，松永篤彦： 血液透析患者におけるオーラルフレイルと身体機能の関連．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会． 埼玉，2023.3.18-19
4. 今井裕人，松沢良太，山本尚平，鈴木裕太，原田愛永，今村慶吾，吉越駿，垣田大輔，辻元尚幸，長田しをり，下門清志，松永篤彦，玉木彰： 血液透析患者の死亡リスクに対するサルコペニアと加齢の相互作用：多施設前向きコホート研究．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．埼玉，2023.3.18-19
5. 福崎なるみ，鈴木裕太，今村慶吾，吉越駿，内田樹里，中嶋拓也，原田愛永，神谷健太郎，松永篤彦： 血液透析患者におけるクレアチニンインデックスと生命予後の関連－糖尿病の有無で層別した解析－．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．埼玉，2023.3.18-19
6. 飛田亜純，吉越駿，中嶋拓也，今村慶吾，内田樹里，福崎なるみ，新川さやか，原田愛永，松永祐輔，松永篤彦：血液透析患者の歩行速度低下に関連する因子の検討：精神症状の重複の影響．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．埼玉，2023.3.18-19
7. 吉越駿，山本尚平，鈴木裕太，今村慶吾，原田愛永，内田樹里，中嶋拓也，福崎なるみ，飛田亜純，新川さやか，松永篤彦： 血液透析患者におけるオステオサルコペニアが骨折と死亡リスクに与える影響．第13回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．埼玉，2023.3.18-19
8. 解良武士，大須賀洋祐，河合　恒，江尻愛美，伊藤久美子，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一： 新しいサルコペニア質問紙の開発―お達者健診研究―．第65回日本老年医学会学術集会、神奈川，2023.6.16-18
9. 河合　恒，大渕修一，江尻愛美，今村慶吾，伊藤久美子：スマートフォンアプリで測定した日常生活歩行速度の日内変動とフレイルのドメインとの関係．第65回日本老年医学会学術集会，神奈川，2023.6.16-18
10. 江尻愛美，河合 恒，荒木 厚，藤原佳典，平野浩彦，小山照幸，杉江正光，小島基永，鈴木隆雄，大渕修一：身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連：横断研究．第65回日本老年医学会学術集会、神奈川，2023.6.16-18
11. 河合　恒，江尻愛美，今村慶吾，伊藤久美子，藤原佳典，井原一成，平野浩彦，大渕修一： 老研式活動能力指標のサブドメインの加齢変化パターン：板橋お達者研究．第65回日本老年社会科学会学術集会，神奈川，2023.6.17-18
12. 解良武士，河合　恒，江尻愛美，今村慶吾，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一： 呼吸サルコペニア罹患と４年後の健康アウトカムとの関連について―お達者健診研究－．第9回呼吸理学療法学会学術大会， 東京，2023.9.2-3
13. 今村慶吾： 高齢者のフレイル予防：地域および腎疾患患者コホートの研究から．第42回東京都理学療法学術大会．東京，2023.9.17
14. 解良武士，河合 恒，江尻愛美，今村慶吾，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一： 呼吸サルコペニアの将来の健康アウトカムについて．第10回日本予防理学療法学会学術大会，北海道，2023.10.28-29
15. 河合　恒，今村慶吾，江尻愛美，解良武士，大渕修一：スマートフォンアプリによる日常生活における歩行速度と摂取食品数の評価． 第10回日本予防理学療法学会学術大会，北海道，2023.10.28-29
16. 高橋淳太，河合 恒，江尻愛美，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，大渕修一： 地域在住高齢者における生活活動の実施パターンの解明：お達者研究． 第10回日本予防理学療法学会学術大会． 北海道，2023.10.28-29
17. 佐藤和之，河合 恒，今村慶吾，江尻愛美，笹井浩行，藤原佳典，平野浩彦，井原一成，大渕修一 ： 地域在住高齢者における歩行速度の加齢変化に対するネガティブな主観的認識および認識ギャップの関係とフレイルの関連-お達者健診-．第10回日本予防理学療法学会学術大会．北海道，2023.10.28-29
18. 朴忠培，石井香織，柴田愛，岡浩一朗，河合 恒，江尻愛美，今村慶吾，大渕修一： 客観的に評価した座位行動・身体活動時間の置き換えと膝痛高齢者の健康関連QOLの関連．第10回日本予防理学療法学会学術大会． 北海道，2023.10.28-29
19. 関口 晴子，河合 恒，江尻 愛美，大渕 修一：介護予防リーダー養成講座10年間の実践報告．第10回日本予防理学療法学会学術大会．北海道，2023.10.28-29
20. 吉越 駿，今村慶吾，原田愛永，山部早智，長田しをり，松永篤彦：血液透析患者におけるオステオサルコペニアが抑うつ症状に与える影響：4年間の前向きコホート研究． 第10回日本予防理学療法学会学術大会． 北海道，2023.10.28-29
21. 今村慶吾，河合 恒，江尻愛美，大渕修一： アクションリサーチによる研究活動． 第10回日本予防理学療法学会学術大会，北海道，2023.10.28-29
22. 江尻愛美，河合 恒，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，解良武士，大渕修一： 地域高齢者の包括的健康調査「お達者健診」．第10回日本予防理学療法学会学術大会，北海道，2023.10.28-29
23. 大渕修一： 介護予防概論．第10回日本予防理学療法学会学術大会，北海道，2023.10.28-29
24. 大渕修一： 介護予防概論-長寿命国の健康課題-（大会長基調講演）． 第10回日本予防理学療法学会学術大会、北海道，2023.10.28-29
25. 村上正治，釘宮嘉浩，中村純也，岩崎正則，本川佳子，枝広あや子，白部麻樹，河合　恒，大渕修一，藤原佳典，井原一成，平野浩彦：咀嚼機能の客観評価と主観評価の乖離と将来のサルコペニア発症との関連性について-お達者健診研究-第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会，東京，2023.11.4-5.
26. 江　涛，河合　恒，楊 一馳，端詰勝敬，橋本和明，竹内武昭，江尻愛美，笹井浩行，藤原佳典，平野浩彦，大渕修一，井原一成：軌跡分析による高齢期うつの分類－基本チェックリストのうつ指標の面接式と自記式による実施，第88回日本健康学会総会，弘前，2023.12.1-2.
27. 橋本和明，竹内武昭，井原一成，大渕修一，河合　恒，平野浩彦，藤原佳典，金　憲経，渡邊　裕，端詰勝敬：高齢者のエゴレジリエンスが社会的孤立に及ぼす影響-お達者健診研究-，第27回日本心療内科学会総会・学術大会，東京，2023.12.9-10.

28. 西田和正，河合恒，江尻愛美，今村慶吾，藤原佳典，平野浩彦，笹井浩行，井原一成，渡辺修一郎，大渕修一：グループ活動参加が高齢者の歩行速度に及ぼす影響：お達者健診研究． 第36回日本疫学会学術総会， 滋賀，2024.1.31-2.2.
29. 江尻 愛美，河合 恒，今村 慶吾，藤原 佳典，平野 浩彦，井原 一成，笹井 浩行，大渕 修一： 身体機能が低下した高齢者におけるソーシャルサポートと抑うつの関連：お達者健診研究． 第36回日本疫学会学術総会， 滋賀，2024.1.31-2.2.
30. 吉越 駿，山本 尚平，今村 慶吾，鈴木 裕太，原田 愛永，長田 しをり，松永 篤彦： 血液透析患者における低栄養が経年的に歩行速度に与える影響． 第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会．三重，2024.3.2.
31. 吉越 駿，今村 慶吾，山本 尚平，鈴木 裕太，原田 愛永，長田 しをり，松永 篤彦： 血液透析患者におけるカヘキシアと臨床アウトカムとの関連：従来（Evans）基準と新基準 （アジア版）の比較研究． 第14回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会．新潟，2024.3.16-17.

５ 著書等

なし

６ 特許

1. 特許登録 大須賀洋祐，金 憲経，河合 恒，谷口 優，横山友里，清野諭，大渕修一，北村明彦，新開省二：障害判定装置及び障害判定用プログラム，登録番号：7352957，登録日：2023年9月21日
2. 特許出願 加藤啓子，藤田明子，岡 卓也，大渕修一，河合 恒：サルコペニアのバイオマーカー，出願日：令和5年4月7日 出願番号：特願2023- 62843号

７ その他

なし

医療・介護システム

１ 論文（誌上発表）：原著

1. Mitsutake S, Ishizaki T, Edahiro A, Kitamura A, Hirata T, Saito A. The effects of dental visits on the occurrence of acute hospitalization for systemic diseases among patients aged 75 years or older: A propensity score-matched study. Arch Gerontol Geriatr. 2023 Apr; 107: 104876.（査読あり、IF（2022）4.0）
2. Mitsutake S, Ishizaki T, Yano S, Tsuchiya-Ito R, Uda K, Toba K, Ito H. All-cause readmission or potentially avoidable readmission: Which is more predictable using frailty, comorbidities and ADL?. Innov Aging 2023; 7(5): igad043.（査読あり、IF: 7.0）
3. Mitsutake S, Yano S, Ishizaki T, Furuta K, Hatakeyama A, Sugiyama M, Awata S, Ito H, Toba K, Association of functional and cognitive impairment severity with discharge to long-term care facilities in older patients admitted to a general acute care hospital from home, Arch Gerontol Geriatr. 2023; 115: 105111.（査読あり、IF: 4.0）
4. Mitsutake S, Sa Z, Long J, Braithwaite J, Levesque J F, Watson D, Mitchell R. The role of frailty risk for fracture-related hospital readmission and mortality after a hip fracture, Arch Gerontol Geriatr. 2023; 117: 105264.（査読あり、IF: 4.0）
5. Mitsutake S, Takahashi Y, Otsuki A, Umezawa J, Yaguchi-Saito A, Saito J, Fujimori M, Shimazu T; INFORM Study Group. Chronic Diseases and Sociodemographic Characteristics Associated With Online Health Information Seeking and Using Social Networking Sites: Nationally Representative Cross-sectional Survey in Japan. J Med Internet Res. 2023; 25: e44741.（査読あり、IF: 7.4）
6. Yoshida Y, Ishizaki T, Masui Y, Hori N, Inagaki H, Ito K, Ogawa M, Yasumoto S, Arai Y, Kamide K, Ikebe K, Gondo Y. Effect of number of medications on the risk of falls among community-dwelling older adults: a 3-year follow up study of the SONIC study. Geriatr Gerontol Int. 2024; 24 Suppl 1: 306-310.（査読あり、IF（2022）3.3）
7. Hori N, Ishizaki T, Masui Y, Yoshida Y, Inagaki H, Ito K, Ishioka L Y, Nakagawa T, Ogawa M, Kabayama M, Kamide K, Ikebe K, Arai Y, Gondo Y. Criterion validity of the health assessment questionnaire for the national screening program for older adults in Japan: The SONIC study. Geriatr Gerontol Int. 2023, 23(6); 437-443.（査読あり、IF（2022）3.3）
8. Fujihara S, Tsuji T, Nakagomi A, Miyaguni Y, Hanazato M, Muto G, Kondo K. Association of community-level social capital with dementia: A multilevel nine-year longitudinal study using data from the Japan Gerontological Evaluation Study. Social Science & Medicine. 2023; 338: 116316.（査読あり、IF（2022）5.4）
9. Ishioka YL, Masui Y, Nakagawa T, Ogawa M, Inagaki H, Yasumoto S, Ikebe K, Kamide K, Arai Y, Ishizaki T, Gondo Y. Early- to late-life environmental factors and late-life global cognition in septuagenarian and octogenarians: The SONIC study. Acta Psychol (Amst). 2023 Mar; 233: 103844.（査読あり、IF（2022）1.8）
10. Akema S, Mameno T, Nakagawa T, Inagaki H, Fukutake M, Hatta K, Murotani Y, Tsujioka Y, Hagino H, Higashi K, Takahashi T, Wada M, Maeda Y, Gondo Y, Kamide K, Kabayama M, Ishizaki T, Masui Y, Ogata S, Ikebe K. Relationship between occlusal force and psychological frailty in Japanese community-dwelling older adults: The Septuagenarians, Octogenarians, Nonagenarians Investigation with Centenarians study. J Am Geriatr Soc. 2023; 71(6): 1819-1828.（査読あり、IF（2022）6.3）
11. Choe H., Gondo Y., Kasuga A., Masui Y., Nakagawa T., Yasumoto S., Ikebe K., Kamide K., Kabayama M., Ishizaki T.: The Relationship Between Social Interaction and Anxiety Regarding COVID-19 in Japanese Older Adults, Gerontology and Geriatric Medicine 2023; 9: 23337214231175713.（査読あり、IF（2022）2.7）
12. Hamada S, Iwagami M, Sakata N, Hattori Y, Kidana K, Ishizaki T, Tamiya N, Akishita M, Yamanaka T. Changes in Polypharmacy and Potentially Inappropriate Medications in Homebound Older Adults in Japan, 2015-2019: a Nationwide Study. J Gen Intern Med. 2023; 38(16): 3517-3525.（査読あり、IF（2022）5.7）
13. Hirokawa K, Kasuga A, Matsumoto K, Omori Y, Masui Y, Nakagawa T, Ogawa M, Ishioka Y, Inagaki H, Ikebe

K, Arai Y, Ishizaki T, Kamide K, Gondo Y. Associations between salivary testosterone levels and cognitive function among 70-year-old Japanese elderly: A cross-sectional analysis of the SONIC study. Geriatr Gerontol Int. 2022 Dec; 22(12): 1040-1046. (査読あり、IF (2022) 3.3)

14. Ikeuchi T, Itoh S, Miwa H, Watanabe K, Wakui T. Does Smartphone Use Make Older Adults Feel Younger? A Cross-Sectional Online Survey during the COVID-19 Pandemic. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2023; 20(3): 1710. (査読あり、IF (2022) : 4.5)
15. K. Watanabe, H. Miwa, T. Wakui. Technology Integration in Care Service Systems: The Required Actions of Technology Developers. IEEE Engineering Management Review. 2023; 51(1): 129-142. (査読あり、IF : なし)
16. Kojima N, Kim M, Saito K, Yoshida Y, Hirano H, Obuchi S, Shimada H, Suzuki T, Iwasa H, Kim H. Effects of Daily Consumption of Soy Products on Basic/Instrumental Activities of Daily Living in Community-Dwelling Japanese Women Aged 75 Years and Older: A 4-Year Cohort Study. Women's Health Reports. 2023 (4):1; 232-240. (査読あり、IF (2022) 1.3)
17. Komiya Y, Sugihara T, Hirano F, Matsumoto T, Kamiya M, Sasaki H, Hosoya T, Kimura N, Ishizaki T, Mori M, Tohma S, Yasuda S, Matsui T. Factors associated with impaired physical function in elderly rheumatoid arthritis patients who had achieved low disease activity. Mod Rheumatol. 2023; 34(1): 60-67. (査読あり、IF (2022) 2.2)
18. Mameno T, Tsujioka Y, Fukutake M, Murotani Y, Takahashi T, Hatta K, Gondo Y, Kamide K, Ishizaki T, Masui Y, Mihara Y, Nishimura Y, Hagino H, Higashi K, Akema S, Maeda Y, Kabayama M, Akasaka H, Rakugi H, Sugimoto K, Okubo H, Sasaki S, Ikebe K. Relationship between the number of teeth, occlusal force, occlusal contact area, and dietary hardness in older Japanese adults: The SONIC study. J Prosthodont Res. 2023 (in press) (査読あり、IF (2022) 3.6)
19. Miura Y, Tsumoto H, Masui Y, Inagaki H, Ogawa M, Ideno Y, Kawakami K, Umezawa K, Kabayama M, Akagi Y, Akasaka H, Yamamoto K, Rakugi H, Ishizaki T, Arai Y, Ikebe K, Kamide K, Gondo Y, Endo T. A characteristic N-glycopeptide signature associated with diabetic cognitive impairment identified in a longitudinal cohort study. Biochim Biophys Acta Gen Subj. 2023 Apr; 1867(4): 130316. (査読あり、IF (2022) 3.0)
20. Mizuno T., Godai K., Kabayama M., Akasaka H., Kido M., Isaka M., Kubo M., Gondo Y., Ogawa M., Ikebe K., Masui Y., Arai Y., Ishizaki T., Rakugi H., Kamide K.: Age Group Differences in the Association Between Sleep Status and Frailty Among Community-Dwelling Older Adults: The SONIC Study. Gerontol Geriatr Med. 2023;9:23337214231205432. (査読あり、IF (2022) 2.7)
21. Nakamura Y., Kabayama M., Godai K., Winston T., Akasaka H., Yamamoto K., Takami Y., Takeya Y., Gondo Y., Yasumoto S., Ogawa M., Kasuga A., Masui Y., Ikebe K., Arai Y., Ishizaki T., Rakugi H., Kamide K.: Longitudinal association of hypertension and dyslipidemia with cognitive function in community-dwelling older adults: the SONIC study, Hypertens res. 2023; 46: 1829-1839. (査読あり、IF (2022) 5.4)
22. Noma T, Kayo G, Kabayama M, Gondo Y, Yasumoto S, Masui Y, Sugimoto K, Akasaka H, Takami Y, Takeya Y, Yamamoto K, Ikebe K, Arai Y, Ishizaki T, Rakugi H, Kamide K. Lower cognitive function as a risk factor for anemia among older Japanese women from the longitudinal observation in the SONIC study. Geriatr Gerontol Int. 2023; 23(5): 334-340. (査読あり、IF (2022) 3.3)
23. Ohta T, Sasai H, Osuka Y, Kojima N, Abe T, Yamashita M, Obuchi SP, Ishizaki T, Fujiwara Y, Awata S, Toba K; IRIDE Cohort Study Investigators. Age- and sex-specific associations between sarcopenia severity and poor cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: The IRIDE Cohort Study. Front Public Health. 2023 Apr 4; 11: 1148404. (査読あり、IF (2022) 5.2)
24. Okamura T, Ura C, Wakui T. Achievements and challenges of family associations for caregivers of people with dementia. Geriatr Gerontol Int. 2023; 23(12): 978-980. (査読あり、IF (2022) 3.3)
25. Sekiguchi T, Kabayama M, Godai K, Akasaka H, Ikebe K, Masui Y, Gondo Y, Arai Y, Ishizaki T, Kamide K. Reply to comment on "Association between protein intake and changes in renal function among Japanese community-dwelling older people: The SONIC study". Geriatr Gerontol Int. 2023; 23(2): 156-157. (査読あり、IF (2022) 3.3)
26. Yano T, Godai K, Kabayama M, Akasaka H, Takeya Y, Yamamoto K, Yasumoto S, Masui Y, Arai Y, Ikebe K, Ishizaki T, Gondo Y, Rakugi H, Kamide K. Factors associated with weight loss by age among community-dwelling older people. BMC Geriatr. 2023; 23: 277. (査読あり、IF (2022) 4.1)
27. Seto E, Kosaka T, Hatta K, Mameno T, Mihara Y, Fushida S, Murotani Y, Maeda E, Akema S, Takahashi T, Wada M, Gondo Y, Masui Y, Ishizaki T, Kamide K, Kabayama M, Ikebe K. Factors related to subjective evaluation of difficulty in chewing among community-dwelling older adults. Geriatr Gerontol Int. 2024; 24 Suppl 1: 327-333. (査読あり、IF (2022) 3.3)
28. Higashi K, Hatta K, Mameno T, Takahashi T, Gondo Y, Kamide K, Masui Y, Ishizaki T, Arai Y, Kabayama M, Nishimura Y, Murotani Y, Hagino H, Tsujioka Y, Akema S, Maeda E, Seto E, Okada Y, Mihara Y, Wada M, Maeda Y, Ikebe K. The relationship between changes in occlusal support and masticatory performance using 6-year longitudinal data from the SONIC study. J Dent. 2023 Dec; 139: 104763. (査読あり、IF (2022) 4.4)
29. 菊地亜華里, 石岡良子, 小川まどか, 増井幸恵, 神出 計, 池邉一典, 石崎達郎, 新井 康通, 権藤恭之. 高齢者の余暇活動実施状況　性別・居住地域・居住形態との関連, 応用老年学, 17(1), Page32-41, 2023.08. (査読あり)
30. 前山友理恵, 樺山舞, 呉代華容, 赤坂憲, 山本浩一, 権藤恭之, 安元佐織, 増井幸恵, 池邉一典, 新井康通, 石崎達郎, 樂木宏実, 神出 計：地域在住高齢者における糖尿病の血糖コントロールと精神的健康状態との関連　SONIC研究. 日本老年医学会雑誌, 60(2), p. 141-15, 2023. (査読あり)
31. 鷲尾昌一, 石崎達郎, 植木章三, 藤原佳典, 大浦智子, 安西将也, 甲斐一郎, 奥村二郎, 大坪徹也, 矢庭さゆり, 島本太香子, 渡辺修一郎. 高齢者の市中肺炎(院外肺炎)の危険因子とインフルエンザワクチン・肺炎球菌ワクチン接種　公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告, 日本公衆衛生雑誌 2023; 70: 351-358 (査読あり)

２　論文（誌上発表）：総説

1. 増井幸恵：超高齢者における「老年的超越」, 日本医師雑誌, 152 (7), 2023.10. (総説・査読なし)

2. 石崎達郎. 保健行政のためのデータサイエンス(第3回)高齢者の健康把握におけるKDBシステム帳票データの活用, 公衆衛生 2023; 87: 458-462（非原著・査読なし）
3. 石崎達郎, 高齢者の歯科受診による入院の予防効果　傾向スコア法を用いた分析. 日本歯科医師会雑誌 2023; 76: 427-433. （非原著・査読なし）
4. 石崎達郎、光武誠吾、深谷太郎、杉山美香. KDBシステム等を用いた自治体事業の質の評価に関する研究：突合データ（CSV）ファイルのデータベース開発. 令和４年度厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）分担研究報告書. 2023.5.（非原著・査読なし）
5. 石崎達郎、増井幸恵、堀紀子. 後期高齢者の質問票の構成概念妥当性・併存的妥当性に関する検討. 令和４年度厚生労働行政推進調査事業費補助金「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施推進のための後期高齢者の質問票活用に向けた研究」分担研究報告書. 2023.5.（非原著・査読なし）

３　学会発表（国際）

1. Mitsutake S, Long J, Braithwaite J, Levesque JF, Watson D, Mitchell R. Role of frailty risk for fracture-related hospital readmission for older adults after a hip fracture, 56th Australian Association of Gerontology Conference, Gold coast, Queensland, Australia, 14-17 Nov 2023.
2. Mitsutake S, Mitchell R, Long J, Braithwaite J. Temporal trends in hip fracture hospitalisations in New South Wales, 2014- 2021, The 2023 Joint Conference of the Australia and New Zealand Falls Prevention Society & World Falls Congress, Perth, Australia, 26-28 Nov 2023.
3. Akema S., Mameno T., Nakagawa T., Inagaki H., Hatta K., Murotani Y., Seto E., Takahashi T., Wada M., Gondo Y., Kamide K., Kabayama M., Ishizaki T., Masui Y., Ikebe K.: Masticatory performance indicates the development of mild cognitive impairment: A 6-year prospective cohort study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
4. Wang C., Gondo Y., Masui Y., Kasuga A., Ogawa M., Yasumoto S.: Development of a new scale able to measuring measure the function of leisure activities among the elderly. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
5. Nakajima C., Gondo Y., Masui Y., Kasuga A., Ogawa M., Yasumoto S.: The relationship between gerotranscendence and feelings toward nature in Japanese older people. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
6. Masui Y., Gondo Y., Nakagawa T., Ikebe K., Kamide K., Arai Y., Ishizaki T.: Psychological well-being anelated factors of the oldest-old and centenarians in Japan; with focusing on gerotranscendence. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, 2023.6.12-14.
7. Kikuchi A., Hirai K., Masui Y., Kamide K., Ikebe K., Ishizaki T., Gondo Y.: Ageism in the COVID-19 pandemic -age difference in the structure and the score. GSA 2023 Annual Scientific Meeting, Tampa, 2023.11.8-12.
8. Rika Ohtsuka, Tomoko Wakui, Shuichi Awata. A mechanism of Disaster-related Deaths: Implications of a torrential rain disaster for long-term care management of vulnerable older adults. The 13th International Conference of the International Society for the Integrated Disaster Risk Management (IDRim 2023). IIT Roorkee, India. Sep 28th-30th, 2023. (Oral, 30th Sep, 2023)
9. Tomoko Wakui, Ura Chiaki, Tsuyoshi Okamura. (2023). Labeling unlabeled tasks of family caregiving: The family's role in the aging-in-place of older adults with dementia. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Invited symposium)
10. Tomoko Wakui, Kentaro Watanabe, Hiroyasu Miwa, Sakiko Itoh, Tomoko Ikeuchi. (2023). What do people expect from technology in their late life? IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Invited symposium)
11. Tomoko Wakui. (2023). Society's demands or older adults' expectation? The roles of family in long-term care in Japan. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Invited symposium)
12. Hiroyasu Miwa, Kentaro Watanabe, Sakiko Itoh, Tomoko Ikeuchi, Tomoko Wakui. (2023). Acceptability of technology use in long-term care services in Japan. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Invited symposium)
13. Akiko Sekino, Tomoko Wakui, Riko Nakayama, Suguru Okubo, Shuichi Awata. (2023). The tipping point for giving up distance care: Juggling insecurity and pressures of managing distance care for older adults. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Symposium)
14. Riko Nakayama, Tomoko Wakui, Akiko Sekino, Suguru Okubo, Shuichi Awata. (2023). The communication between a person living with dementia and family. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Symposium)
15. Fujihara S, Noguchi T, Jeong S, Ide K, Wakui T, Kondo K, Ojima T. Development of an instrument for age- and dementia-friendly cities: The Japan Gerontological Evaluation Study. IAGG Asia/ Oceania Regional Congress 2023. Yokohama. June 12-14, 2023. (Oral)
16. Chiho Shimada, Ryo Hirayama, Mio Ito, Tomoko Wakui. Care practices respecting the autonomy of older people with dementia. Alzheimer's Association International Conference 2023(AAIC2023). Amsterdam, Netherlands. July 16-20, 2023.(Poster)
17. Yano S, Mitsutake S, Ishizaki T, Furuta K, Hatakeyama A, Sugiyama M, Awata S, Ito H, Toba K. Dementia severity associated with discharge to a long-term care facility in older patients admitted to a general acute care hospital from home, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
18. Mitsutake S, Ishizaki T, Yano S, Ito K, Furuta K, Hatakeyama A, Shimazaki Y, Awata S, Ito H, Toba K., Association of the Diagnosis Procedure Combination Data Version of Hospital-Associated Complications of Older People with hospital length of stay and discharge to a facility or hospital, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
19. Ishizaki T, Seino S. Implementing a New Public Health Program for Frailty Prevention in Japan, IAGG

Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
20. Hiroyuki Baba, Takahiko Sugihara, Tatsuro Ishizaki, Manami Nomura, Tadashi Hosoya, Mari Kamiya, Takumi Matsumoto, Kanae Kubo, Fumio Hirano, Nobuyuki Miyasaka, Masayo Kojima, Shinsuke Yasuda, Masayoshi Harigai. Outcome measures, Rheumatoid arthritis, Disease-modifying ugs (DMARDs) Long-term outcomes of methotrexate in elderly-onset RA implementing the treat-to-target strategy. European Congress of Rheumatology (EULAR 2023). 2023.5.31-2023.6.3.
21. Hiroko Yoshida, Mai Kabayama, Kayo Godai, Hiroshi Akasaka, Kazunori Ikebe, Yukie Masui Yasuyuki Gondo, Tatsuro Ishizaki, Hiromi Rakugi, Kei Kamide. Relationship between salt intake and blood pressure in community-dwelling older people classified by age groups—the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
22. Yuko Nakamura, Mai Kabayama, Kayo Godai, Hiroshi Akasaka, Yasuyuki Gondo, Yukie Masui Yasumichi Arai, Tatsuro Ishizaki, Hiromi Rakugi, Kei Kamide. The Age Difference on the Effect of High-Density Lipoprotein Cholesterol (HDL-C) on Carotid Intima-Media Complex Thickness (IMT) in CommunityDwelling Older Adults: the SONIC Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
23. Atsushi Araki, Keiko Motokawa, Misato Hayakawa, Kenji Toyoshima, Tomoki Sasaki, Takuya Ueda, Yoshinori Fujiwara, Tatsuro Ishizaki, Yoshiaki Tamura, Kenji Toba. Development of the program of certificated Frailty-Support Physicians, Nutritionists, and Nurses for the support of community-dwelling older people based on the Frailty Health Check-up in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
24. Eri Seto, Takayuki Kosaka, Kodai Hatta, Toshihito Takahashi, Tomoaki Mameno, Masahiro Wada, Yuki Murotani, Suzuna Akema, Yukie Masui, Yasuyuki Gondo, Tatsuro Ishizaki, Kei Kamide, Mai Kabayama, Kazunori Ikebe. Factors related to subjective evaluation of difficulty in chewing among community-dwelling older adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
25. Yuko Yoshida, Tatsuro Ishizaki, Yukie Masui, Noriko Hori, Hiroki Inagaki, Kae Ito, Madoka Ogawa, Saori Yasumoto, Yasumichi Arai, Kei Kamide, Kazunori Ikebe, Yasuyuki Gondo. The effect of the number of medications on the incidence of falls among community-dwelling older adults: Three-year longitudinal analysis of the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
26. Yuri Miura, Hiroki Tsumoto, Yukie Masui, Hiroki Inagaki, Kyojiro Kawakami, Keitaro Umezawa, Tatsuro Ishizaki, Kei Kamide, Yasuyuki Gondo, Tamao Endo. A characteristic N-glycopeptides associated with diabetic cognitive impairment on the basis of a longitudinal cohort study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
27. YUKIE MASUI, TAKESHI NAKAGAWA, YASUYUKI GONDO, MADOKA OGAWA, AYAKA KASUGA, SAORI YASUMOTO, NORIKO HORI, YUKO YOSHIDA, HIROKI INAGAKI, YOSHIKO ISHIOKA, MIDORI TAKAYAMA, KAE ITO, KAZUNORI IKEBE, KEI KAMIDE, YASUMICHI ARAI, TASTURO ISHIZAKI. A longitudinal study of the reciprocal effects of gerotranscendence and mental health in old age: Using data from the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
28. Seigo Mitsutake, Tatsuro Ishizaki, Shohei Yano, Kae Ito, Kou Furuta, Akira Hatakeyama, Yoshitomo Shimazaki, Shuich Awata, Hideki Ito, Kenji Toba. Association of the Diagnosis Procedure Combination Data Version of Hospital-Associated Complications of Older People with hospital length of stay and discharge to a facility or hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
29. Daichi Yamashiro, Mari Yamashita, Takumi Abe, Yoshifumi Takahashi, Kenichiro Sato, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Hiroyuki Sasai, Shuichi Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Kenji Toba. IRIDE Cohort Study investigators. Factors associated with depressive symptoms by cognitive function level in community-dwelling older adults: IRIDE Cohort Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
30. Sho Hatanaka, Hiroyuki Sasai, Takashi Shida, Yosuke Osuka, Narumi Kojima, Takahisa Ota, Takumi Abe, Mari Yamashita, Shuichi P Obuchi, Tatsuro Ishizaki, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Kenji Toba. Association between dynapenia and poor cognitive function in community-dwelling older Japanese adults: The IRIDE Cohort Study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
31. Toshiki Mizuno, Kayo Godai, Mai Kabayama, Yasuyuki Gondo Gondo, Madoka Ogawa, Yukie Masui, Yasumichi Arai, Tatsuro Ishizaki, Hiromi Rakugi, Kei Kamide. Longitudinal association of sleep duration and sleep quality with frailty among the community dwelling Japanese older adults in the 70s: the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023
32. Ayaka Kasuga, Saori Yasumoto, Takeshi Nakagawa, Yoshiko Ishioka, Akari Kikuchi, Hiroki Inagaki, Madoka Ogawa, Noriko Hori, Yukie Masui, Hwang Choe, Hiroyuki Muto, Mai Kabayama, Kayo Godai, Kazunori Ikebe, Kei Kamide, Tatsuro Ishizaki, Yasuyuki Gondo. Changes in the social interaction of older adults during the COVID-19 pandemic. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, June 12-14 2023.

4 学会発表（国内）

1. 増井幸恵，権藤恭之，中川威，小川まどか，堀紀子，吉田祐子，井藤佳恵，池邉一典，神出計，石崎達郎：地域在住高齢者における老年的超越の関連要因の検討：SONIC 研究データを用いて，第65回日本老年社会科学会大会，横浜，2023.6.17-18.
2. 増井幸恵，中川威，権藤恭之，安元佐織，小川まどか，松本清明，石岡良子，春日彩花，堀紀子，稲垣宏樹，吉田祐子，井藤佳恵，髙山緑，新井康通，池邉一典，神出計，石崎達郎： 老年的超越の縦断変化パターンの分類と関連要因の検討:SONIC70 歳群データを用いて，第18回日本応用老年学会大会，豊中，2023.10.28-29.
3. 松本清明，権藤恭之，安元佐織，樺山舞，神出計，池邉一典，増井幸恵，石崎達郎：高齢者のSCの分類による地域差の検討：SONIC調査第三波を用いて，第18回日本応用老年学会大会，豊中，2023.10.28-29.
4. 王燦，権藤恭之，増井幸恵，春日彩花，小川まどか．余暇活動の機能尺度の再現性および余暇活動の機能と高齢者の心身健康との関連性の検討,第18回日本応用老年学会大会，豊中，2023.10.28-29.

5. 安元佐織, 中川威, 川崎悠丘, 増井幸恵, 権藤恭之. 100歳まで生きたいか、生きたくないか, 第18回日本応用老年学会大会, 豊中, 2023.10.28-29.
6. 木戸倫子, 赤木優也, 権藤恭之, 呉代華容, LiYaya, 赤坂憲, 安元佐織, 増井幸恵, 石崎達郎, 樺山舞, 神出計. 地域在住高齢者における地域別にみた受動喫煙と認知機能の関連の検討(SONIC研究), 第18回日本応用老年学会大会, 豊中, 2023.10.28-29.
7. 吉田祐子、岩佐一、鈴鴨よしみ. 高齢者における身体活動の実施とその背景要因の検討. 第72回東北公衆衛生学会総会、福島. 2023.7.20-7.21.
8. 吉田祐子、岩佐一、鈴鴨よしみ. 地域在住高齢者における精神的健康とライフスタイル要因の検討. 第82回日本公衆衛生学会総会. 2023.10.31-11.2.
9. 岩佐一、吉田祐子、石井佳世子. 職場の支援的風土と父親の育児参加の関連. 第82回日本公衆衛生学会総会、つくば、2023.10.31-11.2.
10. 岩佐一、吉田祐子. 職場及び家族からのソーシャルサポートと父親のワーク・ファミリー・コンフリクトの関連. 日本心理学会第87回大会、神戸、2023.9.15-17.
11. 松本清明、中川威、吉田祐子、権藤恭之. 地域在住高齢者における下肢機能の経年的変化の検証 SONIC調査におけるSPPBの検討. 日本老年行動学会第25回大会、弘前、2023.9.23-24.
12. 高橋由光、光武誠吾、コロナ禍におけるインターネット上の健康情報探索行動, 第82回公衆衛生学会総会, 茨城, 2023年10月31日-11月2日
13. 涌井智子、大久保豪、藤原聡子、甲斐一郎. 基礎自治体による高齢者家族・介護者支援上の課題. 第82回日本公衆衛生学会総会. つくば. 2023年10月31日-11月2日.
14. 森山葉子、高橋秀人、涌井智子、松澤明美、越智真奈美、田宮菜奈子. 家族介護者における年代別社会的ケア関連QOLの実態－現役世代介護者に着目して. 第82回日本公衆衛生学会総会. つくば. 2023年10月31日-11月2日.
15. 涌井智子.ケアをとりまく家族の多様化の現状とテーラーメード支援の可能性. 第82回日本公衆衛生学会総会. つくば. 2023年10月31日-11月2日.
16. 大塚理加、涌井智子、栗田主一. 豪雨災害における介護保険サービス休止の実態と在宅要支援・要介護高齢者への影響. 第82回日本公衆衛生学会総会. つくば. 2023年10月31日-11月2日.
17. 涌井智子, 藤原聡子, 中川威, 森山葉子, 甲斐一郎. 家族介護者のための活動量計を用いたテーラーメード支援プログラムの社会実装に資する考察. 第18回日本応用老年学会. 大阪. 2023年10月28-29日.
18. 藤原聡子, 涌井智子, 甲斐一郎. 家族介護者の介護負担感と抑うつにおける性差と経済状況の関連. 第18回日本応用老年学会. 大阪. 2023年10月28-29日.
19. 中山莉子, 涌井智子, 大久保豪, 藤原聡子, 関野明子. 認知症高齢者の家族介護者のコミュニケーション尺度の作成. 第18回日本応用老年学会. 大阪. 2023年10月28-29日.
20. 大塚理香, 涌井智子, 栗田主一. コロナ禍による介護サービス停止の実態と要支援・介護高齢者への影響：熊本県内のケアマネジャーへの調査から. 第18回日本応用老年学会. 大阪. 2023年10月28-29日.
21. 涌井智子.日本における家族介護多様化の現状と「名もなき介護」を担う家族ら. 日本心理学会第87回大会. 神戸. 2023年9月15-17日.
22. 藤原聡子, 涌井智子, 甲斐一郎. 家族介護者の精神的健康に関するデイリーデータの欠損値補完に関する検討. 第65回日本老年社会科学会大会. 横浜. 2023年6月17-18日.
23. 涌井智子, 宇良千秋, 釘宮由紀子, 岡村睦子, 山村正子, 岡戸秀美, 岡村毅. 地域在住認知症高齢者の家族における支援提供実態：混合研究法による名もなき介護タスクの分類. 第65回日本老年社会科学会大会. 横浜. 2023年6月17-18日.
24. 涌井智子, 宇良千秋, 釘宮由紀子, 岡村睦子, 山村正子, 岡戸秀美, 岡村毅. 地域在住認知症高齢者の家族における支援提供実態：混合研究法による名もなき介護タスクの分類. 第33回日本老年学会総会. 横浜. 2023年6月16-18日.
25. 島田千穂、伊東美緒、平山亮、木村陽子、涌井智子. 施設に入居する認知症高齢者の意思に近づく介護リーダーのケア実践. 第24回日本認知症ケア学会. 京都. 2023年6月3-4日.
26. 野口泰司, 藤原聡子, 鄭丞媛, 井手一茂, 斎藤民, 近藤克則, 尾島俊之. 高齢者にやさしいまちは家族介護負担による抑うつを軽減するか：JAGES. 第33回日本疫学会学術総会. 2023年2月1日.
27. 程雨田, 権藤恭之, 春日彩花, 石崎達郎, 増井幸恵, 神出計, 池邉一典″,高齢者の非対面交流の媒体利用パターンが主観的幸福感に対する影響. 第17回日本応用老年学会大会, 2022.11.12-13, 福岡（令和4年度未申告・追加分）
28. 石崎達郎：高齢者の歯科受診による急性疾患の入院予防効果：レセプトデータを用いた30万人の傾向スコア分析. 日本老年歯科医学会第34回大会, 2023.6.16-17, 横浜.
29. 金澤伸郎, 石崎達郎, 三井秀雄, 中里徹矢, 新井孝明, 大森春佑, 田中佑治, 荒木厚, 許俊鋭, 鳥羽研二. 術前評価としてのフレイルの有用性と経時的な検討. 第78回日本消化器外科学会総会, 2023.7.12-14, 函館
30. 浜田将太、岩上将夫、佐方信夫、服部ゆかり、木棚究、石崎達郎、田宮菜奈子、秋下雅弘、山中崇. 在宅療養高齢者におけるポリファーマシーの変化：全国医療レセプトデータを用いた2015年と2019年の比較. 第5回 日本在宅医療連合学会大会. 2023.6.24-25. 新潟.
31. 方聞, 呉代華容, 樺山舞, 関口敏彰, 赤木優也, 赤坂憲, 権藤恭之, 新井康通, 石崎達郎, 神出計. 後期高齢者・超高齢者のサルコペニアに関連する年代別血清要因の検討, 第65回日本老年医学会学術集会、2023.6.16-18, 横浜
32. 木戸倫子, 赤木優也, 権藤恭之, 呉代華容, 赤坂憲, 安元佐織, 増井幸恵, 石崎達郎, 樺山舞, 神出計, 地域在住高齢者における受動喫煙と認知機能の関連の検討(SONIC研究), 第65回日本老年医学会学術集会、2023.6.16-18, 横浜
33. 金城理子, 呉代華容, 樺山舞, 赤坂憲, 増井幸恵, 池邉一典, 石崎達郎, 権藤恭之, 樂木宏実, 神出計. 地域在住高齢者における認知機能,フレイル指標,生活習慣病有所見率における居住地域の関連性, 第65回日本老年医学会学術集会、2023.6.16-18, 横浜
34. 八田薫, 呉代華容, 樺山舞, 赤坂憲, 権藤恭之, 増井幸恵, 新井康通, 石崎達郎, 樂木宏実, 神出計. 地域在住高齢者における降圧薬の処方動向に関する調査, 第65回日本老年医学会学術集会、2023.6.16-18, 横浜
35. 関野明子, 涌井智子, 中山莉子, 大久保豪, 石崎達郎, 栗田主一. 地域在住高齢者を支える別居介護者が抱える介護負担感: 別居介護者と同居介護者へのインタビュー調査から.第65回日本老年社会科学会大会, 2023.6.17-18, 横浜

36. 関野明子, 涌井智子, 中山莉子, 石崎達郎, 栗田主一. 認知症高齢者の家族介護者における「認知症に関する情報」の重要性　家族介護者の意味付けから情報支援の視点を探る, 第24回日本認知症ケア学会大会, 2023.6.3-4, 京都
37. 半田宣弘, 石崎達郎, 光武誠吾, 大野昴紀,下肢の大切断のリスク因子　後期高齢者医療制度のレセプトデータ解析.第3回日本フットケア・足病医学会年次学術集会 2023.2.11-12, 奈良
38. 藤原聡子, 涌井智子, 甲斐一郎. 経済的状況が家族介護者の負担感と抑うつに及ぼす影響－婚姻別による検討. 日本社会関係学会第4回研究大会. 2024.3.19-21, 東京

5　著書等

なし

6　特許

1. 2023-059544、涌井智子、情報処理システム、情報処理装置、情報処理方法及びプログラム（認知症周辺症状予測)、東京都健康長寿医療センター、2023.3.31
2. 2023-059545、涌井智子、情報処理システム、情報処理装置、情報処理方法及びプログラム（家族介護者蓄積負担予測)、東京都健康長寿医療センター、2023.3.31

7　その他

国内外の受賞実績

1. 涌井智子、第33回日本老年学会総会合同ポスター（老年社会科学会部門）優秀演題賞「地域在住認知症高齢者の家族における支援提供実態　混合研究法による名もなき介護タスクの分類」2023.6.16
2. 涌井智子、第65回日本老年社会科学会大会、優秀ポスター賞「地域在住認知症高齢者の家族における支援提供実態：混合研究法による名もなき介護タスクの分類」2023.6.18

ソーシャルインクルージョン

1　論文（誌上発表）：原著

1. Ito K: Older people living in the community with delusion, Geriatr Gerontol Int 2023(査読あり) (IF 3.387, 2021)
2. Ito K, Tsuda S, Hagiwara M, Okamura T: Encouraging death communication in a death-avoidant society: analysis of interviews with death cafe organizers, BMC Health Serv Res;23(1):944 2023(査読あり) (IF: 2.908, 2023)
3. Tsuda S, Inagaki H, Sugiyama M, Okamura T, Miyamae F, Ura C, Edahiro A, Awata S: Living Alone, Cognitive Function, and Well-Being of Japanese Older Men and Women: A Cross-Sectional Study, Health & Social Care in the Community:1-8 2023 (査読あり)((IF 2.395, 2023)
4. Tsuda S, Matumoto H, Takehara S, Yabuki T, Hotta S: Family caregiver's concerns and anxiety about unaccompanied out-of-home activities of persons with cognitive impairment, BMC Geriatrics 2023(査読あり)((IF 4.07, 2023)
5. Kikuchi K, Ikeuchi T, Awata S.: A study on the incidence rate of missing persons with dementia living alone in Chiba Prefecture, Japan, Geriatr Gerontol Int:印刷中 2023(査読あり)(IF:3.387, 2021)
6. Kikuchi K, Ooguchi T, Ikeuchi T, Awata S: Exploratory study on the factors related with the early detection of missing older persons with dementia living alone in Japan, Geriatr Gerontol Int;23(5):362-5 2023(査読あり)((IF 3.387, 2021)
7. Ikeuchi T, Itoh S, Miwa H, Watanabe K, Wakui T: Does Smartphone Use Make Older Adults Feel Younger? A Cross-Sectional Online Survey during the COVID-19 Pandemic. , Int J Environ Res Public Health 2023(査読あり)(IF 4.614, 2023)
8. Ikeuchi T, Abe T, Taniguchi Y, Seino S, Yokoyama Y, Nofuji Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y: Subjective age and mortality in community-living Japanese older adults, Geriatr Gerontol Int:In press 2023(査読あり) (IF:3.387, 2021)
9. Hori N, Ishizaki T, Masui Y, Yoshida Y, Inagaki H, Ito K, Ishioka Y, Nakagawa T, Ogawa M, Kabayama M, Kamide K, Ikebe K, Arai Y, Gondo Y: Criterion validity of the health assessment questionnaire for the national screening program for older adults in Japan: The SONIC study, Geriatr Gerontol Int;23(6):437-43 2023(査読あり)(IF:3.387, 2021)
10. Matsumoto H, Tsuda S, Takehara S, Yabuki T, Hotta S: Association between Support after Dementia Diagnosis and Subsequent Decrease in Social Participation, Annals of Geriatric Medicine and Research;27(3):274-6 2023(査読あり)(IF 3.07, 2022)
11. Taniguchi Y, Seino S, Ikeuchi T, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y: Protective effects of dog ownership against the onset of disabling dementia in older community-dwelling Japanese: a longitudinal study, Preventive Medicine Reports;102465, 2211-3355. 2023(査読あり) (IF: 2.813, 2023)
12. Yamashita M, Kato M, Kawanishi T, Uehara Y, Kubota Y, Ogisawa F, Kawakubo K, Taga T, Okamura T, Ito K, Kitamura S, Yamazaki A: Characteristics of people seeking consultation after progressing to severe dementia: A mixed-method analysis, Int J Geriatr Psychiatry;38(3):e5902 2023(査読あり)((IF 3.85, 2023)
13. Yamazaki S, Ono M, Shimada C, Hayashida CT, Tomioka M, Osada H, Ikeuchi T: Feasibility of a Simplified Version of Guided Autobiography in Community-dwelling Older Adults., The International Journal of Reminiscence and Life Review:(In press) 2023 (査読あり)(IF,)
14. 井藤佳恵, 津田修治, 山下真理, 菊地和則, 畠山啓, 扇澤史子, 古田光, 栗田主一: 認知症サポート医が困難事例対応において期待される役割, 日本老年医学雑誌;60(3):251-60 2023(査読あり)(IF: NA)
15. 小野真由子, 井藤佳恵, 池内朋子, 藤野秀美, 長田久雄: 高齢者における「感謝」の構成要素, ヒューマン・ケア研究 23:31-42 2023(査読あり)(IF NA)

16. 小野真由子, 井藤佳恵, 池内朋子, 藤野秀美, 長田久雄: 高齢者における感謝の対象 : 対人関係の中あるいはそれ以外で生起する感謝の検討, 応用老年学;1:51-61 2023(査読あり) (IF:NA)
17. 畠山啓, 枝広あや子, 椎名貴恵, 近藤康寛, 山田悠佳, 新田怜小, 佐古真紀, 柏木一惠, 岡村毅, 井藤佳恵, 粟田主一: 認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援, 老年精神医学雑誌;34(5):477－86 2023(査読あり)(IF NA)
18. 肥田あゆみ, 井藤佳恵: 臨床現場から考える医療同意権 —臨床医を対象としたアンケート調査からの考察ー, 臨床倫理;12:52-65,2024 () 2024(査読あり、IF NA)
19. Yoshida Y, Ishizaki T, Masui Y, Hori N, Inagaki H, Ito K, Ogawa M, Yasumoto S, Arai Y, Kamide K, Ikebe K, Gondo Y: Effect of number of medications on the risk of falls among community-dwelling older adults: A 3-year follow-up of the SONIC study, Geriatr Gerontol Int 2024(査読あり、IF 3.387,2021)
20. Yamazaki S, Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, T. O, Hirano H, Awata S: Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people, Psychogeriatrics(First published: 06 November 2023):https://doi.org/10.1111/psyg.13042 2023(査読あり)(IF 2.295, 2023)

２ 論文（誌上発表）：総説

1. Ikeuchi T, Osada H.: From the Implementation of Japan’s Long-Term Care Insurance System to Current Challenges., IV BAKIM SİGORTASI ÇALIŞTAYI 2023
2. 井藤佳恵: 特集【精神科臨床で知っておきたい法制度、社会資源、連携機関】成人の虐待を把握したときの対応, 精神科治療学;37(12):1363-70 2023
3. 井藤佳恵: 【特集 精神医学における臨床研究のすすめ】後方視的観察研究のポイント：連続例研究, 精神医学;65(1):47-54 2023
4. 井藤佳恵: 特集【高齢者の社会的孤立・孤独とメンタルヘルス】高齢者の社会的孤立と地域精神保健の課題, 老年精神医学雑誌;34(4):154-60 2023
5. 井藤佳恵: 特集【高齢者の精神疾患と社会的問題】高齢者の精神疾患といわゆる「ごみ屋敷」, 日本老年医学雑誌;60(3)232-236 2023
6. 井藤佳恵: 認知症保健・医療・介護連携体制のなかの多職種協働, 東京内科医会会誌;39(2):97-101 2023
7. 井藤佳恵: 認知症サポート医の役割と活動, ドクターサロン;67:18-21 2023
8. 井藤佳恵: 高齢者の住環境と福祉－高齢期になって現れるいわゆる“ごみ屋敷”について考えるー, 環境福祉学会誌;8(1):65-72 2023
9. 井藤佳恵. 高齢期のいわゆる「ごみ屋敷」-支援の目的は片づけること、でいいの？. 第165回老年学・老年医学公開講座「老いを目指し老いを見据える」. 東京: 東京都健康長寿医療センター; 2023.
10. 井藤佳恵: 認知機能が低下した人の医療ケアにおける意思決定, 長寿科学振興財団WEB版機関紙「Aging and Health」;107号・秋 2023
11. 井藤佳恵: 特集【老年期の精神医療と死生学】統合失調症患者のエンドオブライフの意思決定, 老年精神医学雑誌;34(9):881-8 2023
12. 井藤佳恵: 特集【認知機能が低下しても個人を尊重した普段の生活におけるさまざまな意思決定支援】認知機能が低下した人の医療ケアにおける意思決定, Aging and Health;32(3):11-5 2023
13. 菊地和則: 意思決定支援会議と専門職後見人—社会福祉士調査からみえてきたことー, 実践成年後見;107:58-65 2023
14. 池内朋子: 特集【高齢者の住まいとwell-being】ウェルビーングとその課題, 老年精神医学雑誌(34(7)):627-32 2023
15. 井藤佳恵, 津田修治: 特集【過疎化が進展する離島・中山間地域の認知症支援】東京都の島しょ地域に対する認知症支援の現状と課題, 老年精神医学雑誌;35(１):26-37 2024
16. 井藤佳恵: エイジズムと精神疾患のスティグマ, 老年精神医学雑誌;35(5) 2024 (印刷中)
17. 井藤佳恵: 「共生」ということば, 心と社会;195: 2024 (印刷中)

３ 学会発表（国際）

1. Ito K, Hagiwara M, Okamura T. Can Death Cafés contribute to the creation of a ″death-inclusive society″ that will be the ground for the Advance care planning? 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2 2023.6.29
2. Ito K. Older people with delusional disorder. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023) Symposium Dementia 10 “Community-based participatory research in Tokyo: Toward dementia-friendly community”; パシフィコ横浜. 2023.6.12-15 2023.6.12
3. Tsuda S, Ito K. Scope of post-diagnostic dementia care by Japanese primary care clinics using team-based care models. 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2
4. Ikeuchi T, Osada H. Time Perspectives in Older Adults: A Preliminary Intervention Study. The 22nd Hawaii Pacific Gerontological Society’s Biennial Conference; Honolulu, HI. 2023.9.7-8.
5. Ikeuchi T, Abe T, Taniguchi Y, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Subjective age and mortality in Japanese older adults: The Kusatsu Longitudinal Study on Aging. IAGG Asia/Oceania Regional Congress; Yokohama, Japan. 2023.6.13.
6. Ikeuchi T. Older Adults who Have Lived in Their Own Shells. Active Aging Consortium in Asia Pacific (ACAP); USA (Webinar). 2023.11.17.
7. Ikeuchi T, Kikuchi K, Taniguchi Y, Hayashida CT, Ito K. Why Are Socially Isolated Older Adults Unable to Access Services in Japan? The 75th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA); Tampa, USA. 2023. 11.8-12
8. Ono M, Ito K, Ikeuchi T, Fujino H, Osad H. Viewing Family Support from the Perspective of Gratitude in Older Adults. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 Symposium Long Term Care 2 ”Practical research on family care research to beyond: Up-and-Coming perspectives of junior researcher” Yokohama. 2023.6.14
9. Yoshida Y, Ishizaki T, Masui Y, Hori N, Inagaki H, Ito K, Ogawa M, Yasumoto S, Arai Y, Kamide K, Ikebe

K, Gondo Y. The effect of the number of medications on the incidence of falls among community-dwelling older adults: Three-year longitudinal analysis of the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023); パシフィコ横浜. 2023.6.12-15

10. Tomioka M, Ikeuchi T, Hayashida C, al. e. Helping Retirees for a New Transition to be More Resourceful for the Community. The 22nd Hawaii Pacific Gerontological Society's Biennial Conference; Honolulu, HI. 2023.9.7-8.
11. Sugiyama M, Inagaki H, Ito K, Okamura T. Are the older community-residents who did not respond to the administrative survey high risk group? Early detection and continuous support by the visiting nurse 2023 IPA International Congress; Lisbon. 2023.6.29-7.2
12. Mitsutake S, Ishizaki T, Yano S, Ito K, Furuta K, Hatakeyama A, Shimazaki Y, Awata S, Toba K, Ito H. Association of the Diagnosis Procedure Combination Data Version of Hospital-Associated Complications of Older People with hospital length of stay and discharge to a facility or hospital. IAGG Asia/Oceania Regional Congress June 12-15, 2023 (IAGG2023); パシフィコ横浜. 2023.6.12-15
13. Matsui Y, Nakagawa T, Gondo Y, Ogawa M, Kasuga A, Yasumoto S, Hori N, Yoshida Y, Inagaki H, Ishioka Y, Takayama M, Ito K, Ikebe K, Kamide K, Arai Y, Ishizaki T. A longitudinal study of the reciprocal effects of gerotranscendence andmental health in old age: Using data from the SONIC study. IAGG Asia/Oceania Regional Congress , 2023 (IAGG2023) パシフィコ横浜. 2023.6.12-15

４　学会発表（国内）

1. 井藤佳恵. 精神医療と臨床倫理ー身体合併症医療の意思決定を中心に. 第36回日本総合病院精神医学会総会　教育講演; 仙台. 2023.11.17
2. 井藤佳恵. 認知症医療・ケアの臨床倫理. 2023年度認知症ケア学会関東ブロック大会　教育講演; 幕張メッセ国際会議場. 2023.11.12
3. 井藤佳恵. 福祉ネットワークからこぼれる人の支援ー高齢者の幻覚妄想状態と社会的孤立. 第38回日本老年精神医学会【秋季大会】教育講演; 日本教育会館（千代田区）. 2023.10.14
4. 井藤佳恵. 精神医療と臨床倫理・エンドオブライフケア. 日本エンドオブライフケア学会第6回学術集会　指定講演; 前橋市民文化会館. 2023.9.17
5. 井藤佳恵. 認知症の人と成年後見制度. 第119回　日本精神神経学会　委員会シンポジウム「認知症の人の経済的支援」; パシフィコ横浜. 2023.6.22-25 2023.6.23
6. 井藤佳恵. 共生の課題－理解と包摂から取り残されたものーいわゆるごみ屋敷症候群―. 第65回日本老年医学会学術集会　シンポジウム6（認知症対策小委員会)「認知症施策推進大綱の中間評価を踏まえて老年医学会はいかに関与すべきか」; パシフィコ横浜. 2023.6.16-18 2023.6.18
7. 井藤佳恵. 認知症とともに独りで暮らす高齢者のエンドオブライフの意思決定への関わり. 第33回日本老年医学会総会　合同シンポジウム10「エンドオブライフの医療とケア」; パシフィコ横浜. 2023.6.16-18 2023.6.17
8. 井藤佳恵, 宮前史子, 小野真由子. 看取りに関わる施設職員を対象とした対話型デスエデュケーション・プログラムの試み. 日本認知症ケア学会第24回大会; 国立京都国際会館. 2023.6.3-4 2023.6.3
9. 井藤佳恵. 認知症の保健・医療・介護連携体制のなかの多職種協働. 東京内科医会第36回医学会　教育講演; お茶の水トライエッジカンファレンス. 2023.3.18
10. 津田修治, 松本博成, 竹原敦, 矢吹知之, 堀田聰子. 認知症のある人の自宅外活動に対する家族の不安. 日本認知症ケア学会第24回大会; 国立京都国際会館. 2023.6.3-4
11. 菊地和則;池内朋子;粟田主一. 千葉県における独居認知症高齢者の行方不明発生率に関する研究. 第65回日本老年医学会学術集会; パシフィコ横浜. 2023.6.18
12. 菊地和則. 被後見人等の意思決定支援会議の実態－社会福祉士である専門職後見人への調査からー. 日本社会福祉学会第71回秋季大会; 東京. 2023.10.15
13. 池内朋子, 菊地和則, 谷口優, 井藤佳恵. 人や支援につながりにくい高齢者の特徴：全国自治体・社会福祉協議会調査結果. 第65回日本老年社会科学会; 横浜市. 2023.6.18.
14. 肥田あゆみ, 大橋琢也, 井藤佳恵. 終末期における胃ろう造設をめぐる自己決定権についての検討. 日本医事法学会第53回研究大会; 東京都立大学南大沢キャンパス. 2023.11.18-19
15. 小野真由子, 井藤佳恵, 長田久雄. 高齢者用感謝尺度の開発. 日本エンドオブライフケア学会第6回学術大会; 群馬県. 2023.9.18
16. 畠山啓, 枝広あや子, 椎名貴恵, 近藤康寛, 山田悠佳, 新田怜小, 岡村毅, 井藤佳恵, 粟田主一. 認知症疾患医療センターにおける若年性認知症の診断後支援. 認知症ケア学会第24回大会; 国立京都国際会館. 2023.6.3-4 2023.6.4
17. 萩原眞由美, 井藤佳恵, 新開省二. デスカフェがもたらす死生観の変化とACPの準備性. 日本エンドオブライフケア学会第6回学術集会; 前橋市民文化会館. 2023.9.16
18. 扇澤史子, 岡本一枝, 井藤佳恵, 今村陽子, 高岡陽子, 青島希, 植田那月, 大森佑貴, 松井仁美, 畠山啓, 齋藤久美子, 古田光, 粟田主一. 認知症高齢者の希死念慮の特徴と背景-精神科入院中の診療録の希死念慮に関連する記述の質的分析. 第38回日本老年精神医学会【秋季大会】; 日本教育会館（千代田区）. 2023.10.14
19. 増井幸恵, 中川威, 権藤恭之, 安元佐織, 小川まどか, 松本清明, 石岡良子, 春日彩花, 堀紀子, 稲垣宏樹, 吉田祐子, 井藤佳恵, 髙山緑, 新井康通, 池邉一典, 神出計, 石崎達郎. 老年的超越の縦断変化パターンの分類と関連要因の検討：SONIC 70歳群データを用いて. 第18回応用老年学会大会; 大阪大学会館. 2023.10.28-29
20. 増井幸恵, 権藤恭之, 中川威, 小川まどか, 堀紀子, 吉田祐子, 井藤佳恵, 池邉一典, 神出計, 石崎達郎. 地域在住高齢者における老年的超越の関連要因の検討　SONIC研究データを用いて. 日本老年社会科学会 第65回大会. 2023.6.17-18
21. 杉山美香、稲垣宏樹、井藤佳恵、粟田主一. 郵送調査未返送者で介護保険サービス未利用の要介護認定者への訪問調査と多職種協働～認知症等高齢者の困難事例化予防にむけて. 第12回認知症予防学会各術集会; 新潟. 2023.9.15-17
22. 杉山美香, 稲垣宏樹, 井藤佳恵, 岡村毅, 粟田主一. DFCsにむけたコミュニティ参加型研究の実践～東京都千代田区での取り組み報告～. 日本認知症ケア学会第24回大会; 国立京都国際会館. 2023.6.3-4

５　著書等
なし

６　受賞
なし

７　その他
2023年1月～2023年12月の1年間に、テーマ全体で26本の認知症関連の研修・講演の講師をつとめ、研究成果の都民への還元、地域で認知症医療・ケアに関わる専門職の人材育成に寄与した。

専門職対象
1. 井藤佳恵．認知症の基礎知識．第2回歯科医師認知症対応力向上研修；Online：東京都歯科医師会．2023.12.11
2. 井藤佳恵．認知症の基礎知識．令和5年度「成年後見人経験者用セミナー」；AP市ヶ谷：公益社団法人後見センター・リーガルサポート東京支部．2023.12.10
3. 井藤佳恵．認知症がある人の意思決定への関わり．令和5年度第2回かかりつけ医認知症対応力向上研修；ベルサール新宿：東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター．2023.11.11
4. 井藤佳恵．高齢者困難事例への対応と地域の課題．令和5年度奥会津医療介護連携セミナー；福島県会津市三島町町民センター：福島県立医科大学会津医療センター　奥会津在宅医療・介護連携支援センター．2023.9.29
5. 井藤佳恵．認知症等高齢者困難事例について考える　-いわゆる”ごみ屋敷”を通してー．多摩平の森の病院 地域連携型認知症疾患医療センター 主催勉強会；多摩平の森の病院（日野市）：地域連携型認知症疾患医療センター多摩平の森の病院．2023.9.13
6. 津田修治．認知症初期の人と家族を地域で支援する診療所-本人のwell-beingを支える強制の視点から．令和5年度第2回東京都認知症サポート医等フォローアップ研修；Online：東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター．2023.8.5
7. 井藤佳恵．高齢期のいわゆる「ごみ屋敷」について～高齢者福祉の視点で考えてみよう．令和5年度第1回　西多摩地区認知症疾患医療・介護連携協議会；青梅市ネッツたまぐーセンター（青梅市）：地域拠点型認知症疾患医療センター　青梅成木台病院．2023.8.1
8. 井藤佳恵．認知症高齢者の個別支援：介入困難な家族への対応．令和5年度板橋区認知症初期集中支援チーム員研修；グリーンホール（板橋区）：板橋区おとしより保健福祉センター．2023.7.13
9. 井藤佳恵．DASC研修．令和5年度第1回認知症地域対応力向上研修　Online：東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター．2023.5.31-6.11
10. 井藤佳恵．認知症高齢者の医療上の意思決定への関わり．認知症初期集中支援研修会；豊島区医師会；豊島区医師会．2023.3.27
11. 井藤佳恵．「看取り」へのそれぞれの思い～対話型デスエデュケーション・プログラム～．社会福祉法人育秀会　3施設合同研修会；社会福祉法人育集会；育秀苑（練馬区）．2023.3.17
12. 井藤佳恵．精神疾患が背景にある認知症高齢者の対応と支援．令和4年度板橋区認知症初期集中支援チーム員研修；板橋区おとしより保健福祉センター認知症施策推進係；グリーンホール（板橋区）．2023.2.2

大学における講義等
1. 井藤佳恵．エンドオブライフケアにおける意思決定への関わり②．佐久大学人間福祉学部「ターミナルケア」；佐久大学；佐久大学．2023.11.29
2. 井藤佳恵．エンドオブライフケアにおける意思決定への関わり①．佐久大学人間福祉学部「ターミナルケア」；佐久大学；佐久大学．2023.11.22
3. 井藤佳恵．重い精神疾患をもつ人の医療上の意思決定への関わり．東京大学「臨床死生学・倫理学研究会」；Online：東京大学大学院人文社会系研究科　死生学・応用倫理センター　上廣講座．2023.10.11
4. 菊地和則．チームとは何か-チーム研究の知見から-．静岡県立大学短期大学部．2023.9.23
5. 池内朋子．高齢者の迷惑をかけたくない思いの背景と心理的要因．岡山大学「迷惑」研究会；岡山大学．2023.9.17.
6. 井藤佳恵．「看取り」へのそれぞれの思い～対話型デスエデュケーション・プログラム～．社会福祉法人育秀会　3施設合同研修会；社会福祉法人育集会；育秀苑（練馬区）．2023.3.17
7. 菊地和則．チームとは何か-チーム研究の知見から-．静岡県立大学短期大学部．2023.2.25

一般市民、市民リーダー対象
1. 井藤佳恵．認知症はじめて講座．みんなが安心声かけ訓練IN徳丸ふれあい館；徳丸ふれあい館：板橋区徳丸おとしより相談センター（地域包括支援センター）.2023.9.26
2. 井藤佳恵．共生社会について考えよう．令和5年介護予防主任運動指導員フォローアップ研修；Online：東京都健康長寿医療センター．2023.9.11
3. 井藤佳恵．認知症支援推進センターの活動について．TOBIRA 第11回研究交流フォーラム；ソラシティカンファレンスセンター（千代田区）：東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合．2023.7.28
4. 井藤佳恵．認知症サポート医に期待される役割．令和5年度第1回東京都認知症サポート医等フォローアップ研修；Online：東京都健康長寿医療センター認知症支援推進センター．2023.6.10
5. 井藤佳恵．共生社会について考えよう．令和5年介護予防主任運動指導員フォローアップ研修；Online：東京都健康長寿医療センター．2023.5.22
6. 井藤佳恵．アドバンス・ケア・プランニング-人生の最終段階を支えるために-．市民後見人養成講習；中野区社会福祉区協議会；中野区産業振興センター（中野区）．2023.2.17
7. 井藤佳恵．高齢者の住環境と福祉-高齢期になって現れるいわゆる”ごみ屋敷”について考える-．マンション未来価値研究所セミナー「超高齢社会における共生」；大和ライフネクスト（株）；大和ライフネクスト（株）本社赤坂プラスラスタジオ（港区）．2023.2.8

成書

1. 井藤佳恵. 臨床倫理と研究倫理.　笠井清登, 村井俊哉, 内田裕之, 近藤伸介, 大島紀人. 精神科研修ノート　改定第3版. 東京: 診断と治療社; 2024. (印刷中)
2. 井藤佳恵. 医療・ケアと身体拘束.　安部彰, 小門穂, 児玉聡, 野崎亜紀子, 八代嘉美. 最強の生命倫理. 京都: 株式会社ナカニシヤ出版; 2024. (印刷中)
3. 井藤佳恵.　老年期の終末期－エンドオブライフ・ケアとwell-being.　老年臨床心理学ハンドブック第6部. 東京: 福村書店; 2024. (印刷中)

――――――――――――

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

研究支援施設等

アイソトープ施設

１　施設紹介

施設長（安全管理責任者）：織田圭一
放射線取扱主任者（研究部長）：三浦ゆり（兼務）

アイソトープ施設の目標は、放射線障害防止に関連した法律を遵守し、利用者や公衆の安全を確保する一方、放射線・放射性同位元素の利用促進と施設の維持管理を行うことである。放射線・放射性同位元素を利用する研究手法は、老化研究の進展に大きく貢献するものであり、本施設はその安全利用のための維持管理を行う。

２　活動概要

放射線業務従事者の管理について

・ 教育訓練を実施。
　放射線業務従事者に対する教育訓練を病院部門と共同で実施した。
　　放射線安全講習(再教育訓練)　 ZOOM による講演の視聴（レポート提出）3/7
・ 健康診断（問診、血液検査）を 2 回実施。
　　前期：6 月 26～30 日、後期：12 月 13～15 日

施設管理について

・作業環境測定（毎月 1 回 / 12 回)。
・自主点検を 2 回実施（前期 8 月 22 日、後期 2 月)。
・貯留槽水位計の交換（8/7)。

法令対応について

・アイソトープ委員会（メール審議・6 月 5～15 日）
・原子力規制委員会に令和 4 年度放射線管理状況報告書を提出（6 月 6 日)。

実験動物施設

1　施設紹介

施設長：石神昭人
研究員：柳井修一
技術員：新崎智子

実験動物施設概要

動物実験は生命科学研究に不可欠だが、同時に動物福祉を配慮し、適正に実施されなければならない。実験動物施設は、人道的動物実験の原則である3R (Reduction, Refinement, Replacement)を踏まえ、当センターの動物実験が適正かつ安全に実施されることを目指している。動物施設では最大マウス22,000匹（4,440ケージ)、ラット840匹（280ケージ)、ウサギ9羽（9ケージ）の飼育が可能であり、これらの実験動物を衛生的な環境下で保管する高機能動物飼養施設として、実験動物のための環境整備を行っている。施設内には複数の飼育室と実験室を備えており、SPFエリアは研究者が保有する動物の飼育や実験スペースとして利活用している。また、コンベンショナルエリアでは飼育関連資材の保管・滅菌を行うとともに、外部から搬入した動物の検疫用スペースを提供している。いずれのエリアでも遺伝子組換えマウスを使用するため、P1Aレベルの拡散防止措置をとっている。

また、実験動物施設では1979年からマウス（C57BL/6NCrSlc, C57BL/6JJAX）とラット(F344/DuCrlCrlj)を対象として生涯飼育による老化動物育成事業を推進しており、現在までに177ロットのマウスと151ロットのラットを育成してきた。持続性を持って所内研究者に老化動物を提供することで、老年学および老年医学研究の推進に重要な役割を担っている。

2　活動概要

1. 施設の運営、管理業務。

2. 実験動物の衛生的な飼育管理の実施、及び動物福祉に配慮した飼育環境の提供。特定病原体を排除したSPF 環境を維持するため、定期的な病原微生物検査を行うとともに、外部から搬入する動物、細胞に対する検疫を行っている（表１)。

3. 動物実験責任者及び実施者を対象とした教育訓練等の定期的な実施。2023 年度には APRIN e-learning による教育訓練を導入し、94 名が受講した。受講単元は以下の通りである。
① 動物実験の基礎知識
② 動物実験の実施にあたり配慮すべきこと
③ 針刺し損傷の予防
④ 動物を用いた研究論文：国際学術誌の投稿規定と ARRIVE ガイドライン
⑤ 実験動物の扱い

4. 体外受精、胚移植による個体作出、凍結胚・精子の作製、SPF 化など、生殖工学技術を用いた研究支援。2023 年度には個体作出 2 件、凍結胚作製 11 件、計 13 件の研究支援を行った。

5. 実験動物委員会の運営業務。委員会では動物実験計画の適正かつ迅速な審査を心がけており、新規の場合は１～1 ヶ月半、変更の場合は数日で承認を得ている。2023 年度の動物実験実施状況を表２に、実験動物使用数を表３にまとめた。2023 年度の委員会は以下の日程で開催した。

第 1 回：2023 年 4 月 5 日
第 2 回：2023 年 5 月 1 日
第 3 回：2023 年 6 月 5 日
第 4 回：2023 年 7 月 3 日
第 5 回：2023 年 8 月 7 日

第 6 回：2023 年 9 月 4 日
第 7 回：2023 年 10 月 2 日
第 8 回：2023 年 11 月 6 日
第 9 回：2023 年 12 月 4 日
第 10 回：2024 年 1 月 9 日
第 11 回：2024 年 2 月 5 日
第 12 回：2024 年 3 月 4 日

表 1. 2023 年度病原微生物検査数

	定期検査	検疫
マウス	107	2
ラット	18	-
細胞	-	1

（マウス、ラットは匹　細胞は件）

表 2. 2023 年度動物実験実施状況

承認年度	承認課題数	結果報告数 （うち終了・中止課題）
2021 年度	22	22 (5)
2022 年度	18	18 (5)
2023 年度	29	29 (2)

（件）

表 3. 2023 年度実験動物使用数

	研究チーム	老化動物※
マウス（野生型）	1700	1181
マウス（組換え）	993	-
ラット	88	55
その他	3	-

（匹）
※老化動物は研究者への提供数

研究情報管理室

１　施設紹介

室長：石神昭人（副所長兼務）
研究員：森澤拓
兼務研究員：坂田宗之（神経画像研究チームネットワーク担当）
非常勤職員：久保田ゆかり

研究情報管理室は、研究所の情報システムの運用及び管理、また研究所の情報セキュリティの確保を行い、研究活動を支援しています。

２　他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携

東京都健康長寿医療センター、医療情報戦略課情報システム係と情報システム管理を連携
東京都健康長寿医療センター病院、放射線診断科と情報システム管理を連携

３　活動概要

１）研究所情報システムの運用・セキュリティ管理
東京都健康長寿医療センター研究所LANの運用を行っています。インターネットに2Gbpsで接続を行い、安定したテレビ会議を実現し、電子メールの運用管理を行っています。また、全フロアに無線アンテナを設置し、訪問者用の無線LANを運用管理しています。また、研究所としての情報セキュリティの向上のために、研究所情報セキュリティ対策基準を運用しています。
２）共同利用パーソナルコンピューター・大判プリンター機器等の運用・管理
共用のWindowsパソコン、MACパソコン、カラーレーザープリンター、B0対応大判プリンター等の運用管理を行っています。一部機器は、病院、事務からの利用要望にも対応しています。
３）統計処理等アプリケーションソフトウェアの管理
共用パソコンに統計処理ソフトウエアのSPSS、SASを導入し、共同利用サービスを行っています。また、個々の研究者が利用するSPSS、SASについても計画導入、ライセンス管理を行っています。
４）薬品管理支援サーバ、老研瓦版サーバ、共用ファイルサーバの運用
薬品管理支援サーバは、毒物及び劇物の適正な管理、その他各種薬品の適正な管理のために導入されており、運用管理を行っています。老研瓦版サーバは、研究所内のお知らせ掲示板として、実験動物施設からの動物管理情報など、研究所内部の連絡のためのホームページとして、東京都健康長寿医療センターのお知らせホームページの補完的役割を担い運用管理を行っています。さらに、共用ファイルサーバを運用管理しており、各種委員会連絡等に用いられています。
５）文献検索
PsycINFO、AGELINE、医学中央雑誌などの文献検索データベースについて、インターネットから利用できる方式で契約を行い、管理運用を行っています。
６）その他
研究用コンピューターシステムの導入相談、パソコンの利用トラブル相談等に対応しています。

高齢者健康増進事業支援室

１　施設紹介

研究部長：大渕修一
非常勤研究員：関口晴子、佐藤和之、朴忠培、CHEN JOU YIN、中田晴美、坂井志麻
非常勤技術員：東海林巧、高橋奈津子、本川晃市
非常勤事務員：勝島みゆき、髙島明子、佐藤由紀子

高齢者健康増進事業支援室では、高齢者の介護予防・健康増進を目的として、１）地域における介護予防活動の発展を目指した区市町村等への事業支援及びその効果検証、２）介護予防の専門職である介護予防主任運動指導員、介護予防運動指導員の効果的な養成とフォローアップ、３）民間企業との共同研究を行っている。

２　他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携

・東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター
・自立促進と精神保健研究チーム
・社会参加と地域保健研究チーム
・福祉と生活ケア研究チーム

３　活動概要

１）地域における介護予防活動の発展を目指した区市町村等への事業支援及びその効果検証（自治体支援プロジェクト）

多摩市「介護予防リーダー養成講座」、東大和市「介護予防リーダー養成講座修了論文作成指導」、北区「介護予防事業評価」などの事業を受託し、自治体の介護予防事業支援を実施した。

また、小金井市では「生活支援体制基盤整備支援委託」の学術指導において、生活支援サービスに係るボランティア等の担い手を養成するための研修に対する支援を通じて、介護サービス事業者の負担軽減、受講者を担い手とする通いの場の体制整備を一体的に図ることにより、地域包括ケアシステムの構築を推進した。

２）介護予防主任運動指導員、介護予防運動指導員の効果的な養成とフォローアップ

介護予防運動指導員養成講座テキストの全面改訂を行い、e-ラーニングを活用した介護予防運動指導員の養成、Zoom を用いた WEB による介護予防主任運動指導員フォローアップ研修の開催、ホームページやツイッターによる定期的な情報提供、介護予防主任運動指導員・指定事業者との協力による学会や展示会での普及活動などを行った。

また、第 10 回日本予防理学療法学会学術大会において介護予防主任運動指導員・介護予防運動指導員フォーラムを開催した。

３）民間企業との共同研究

旭化成ホームズ株式会社「非接触センサを用いた生活活動量把握」、パナソニックホールディングス株式会社「ウエアラブルデバイスによる身体的・社会的フレイル検出アルゴリズム開発」、株式会社日立製作所「ウエアラブルデバイスによる認知的フレイル検出アルゴリズム開発」など民間企業との共同研究や学術指導を行った。

４　業績

誌上発表

1. Manami Ejiri, Hisashi Kawai, Keigo Imamura, Takeshi Kera, Kazushige Ihara, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi：The trajectory of psychological well-being during the COVID-19 pandemic and its association with health-promoting coping

behavior among Japanese community-dwelling older adults: The Otassha Study. Exp Gerontol. 171:112029. 2023. (原著、査読あり) (IF: 3.9, 2022)

2. 伊藤久美子, 河合恒, 西田和正, 江尻愛美, 大渕修一: 通所型サービス事業所を拠点とした総合事業対象者向け介護サービスの担い手養成プログラム「サブスタッフ養成講座」. 日本公衆衛生学雑誌. 70(5):311-320. 2023. (原著、査読あり)
3. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Shuichi Obuchi: Impact of combinations of subscale declines in higher-level functional capacity on 8-year all-cause mortality among community-dwelling older Japanese adults. Archives of Gerontology and Geriatrics. 114:105096. 2023. (原著、査読あり) (IF: 4.0, 2022)
4. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Hirohiko Hirano, Hiroyuki Sasai, Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi: Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults: the Otassha study. Front Public Health. 11:1248462. 2023. (原著、査読あり) (IF: 5.2, 2022)
5. Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Keigo Imamura, Kumiko Ito, Yoshinori Fujiwara, Hirohiko Hirano, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi: Three-year trajectories of social networks, face-to-face interactions, and non-face-to-face interactions among community-dwelling older adults in Japan during the COVID-19 pandemic: Otassha study. Maturitas. 183. 107943, 2024. (原著、査読あり) (IF: 4.9、2022)
6. Keigo Imamura, Hisashi Kawai, Manami Ejiri, Hiroyuki Sasai, Hirohiko Hirano, Yoshinori Fujiwara, Kazushige Ihara, Shuichi Obuchi: Social isolation, regardless of living alone, is associated with mortality: The Otassha Study. Front Public Health. 12:1365943, 2024. (IF: 5.2, 2022)

学会発表

1. 江尻愛美, 河合　恒, 伊藤久美子, 藤原佳典, 平野浩彦, 井原一成, 大渕修一: 地域在住高齢者における主観的健康感の無回答と死亡リスクの関連: お達者健診研究. 第24回日本健康支援学会年次学術大会, 福岡, 2023.3.4-5
2. 河合　恒, 大渕修一, 江尻愛美, 今村慶吾, 伊藤久美子: スマートフォンアプリで測定した日常生活歩行速度の日内変動とフレイルのドメインとの関係. 第65回日本老年医学会学術集会, 神奈川, 2023.6.16-18
3. 江尻愛美, 河合 恒, 荒木 厚, 藤原佳典, 平野浩彦, 小山照幸, 杉江正光, 小島基永, 鈴木隆雄, 大渕修一: 身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連: 横断研究. 第65回日本老年医学会学術集会、神奈川, 2023.6.16-18
4. 河合　恒, 江尻愛美, 今村慶吾, 伊藤久美子, 藤原佳典, 井原一成, 平野浩彦, 大渕修一: 老研式活動能力指標のサブドメインの加齢変化パターン: 板橋お達者研究. 第65回日本老年社会科学会学術集会, 神奈川, 2023.6.17-18
5. 河合　恒, 今村慶吾, 江尻愛美, 解良武士, 大渕修一: スマートフォンアプリによる日常生活における歩行速度と摂取食品数の評価.　第10回日本予防理学療法学会学術大会, 北海道, 2023.10.28-29
6. 佐藤和之, 河合 恒, 今村慶吾, 江尻愛美, 笹井浩行, 藤原佳典, 平野浩彦, 井原一成, 大渕修一 : 地域在住高齢者における歩行速度の加齢変化に対するネガティブな主観的認識および認識ギャップの関係とフレイルの関連-お達者健診-. 第10回日本予防理学療法学会学術大会. 北海道, 2023.10.28-29
7. 朴忠培, 石井香織, 柴田愛, 岡浩一朗, 河合 恒, 江尻愛美, 今村慶吾, 大渕修一: 客観的に評価した座位行動・身体活動時間の置き換えと膝痛高齢者の健康関連QOLの関連. 第10回日本予防理学療法学会学術大会. 北海道, 2023.10.28-29
8. 関口晴子, 河合恒, 江尻愛美, 大渕修一: 介護予防リーダー養成講座 10 年間の実践報告. 第 10 回日本予防理学療法学会学術大会. 北海道, 2023.10.28-29
9. 大渕修一: 介護予防概論. 第10回日本予防理学療法学会学術大会, 北海道, 2023.10.28-29
10. 大渕修一: 介護予防概論-長寿命国の健康課題-（大会長基調講演). 第10回日本予防理学療法学会学術大会、北海道, 2023.10.28-29
11. 江尻 愛美, 河合 恒, 今村 慶吾, 藤原 佳典, 平野 浩彦, 井原 一成, 笹井 浩行, 大渕 修一: 身体機能が低下した高齢者におけるソーシャルサポートと抑うつの関連: お達者健診研究. 第36回日本疫学会学術総会, 滋賀, 2024.1.31-2.2.

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)

二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター

１　施設紹介

施設長：藤原佳典
研究員：植田拓也、倉岡正高、森裕樹、山中信、谷出敦子、小宮山恵美、秦俊貴
非常勤研究員：根本裕太、田中元基
事務職員：太田陽子、戸塚寛子

東京都は、後期高齢者の増加が著しく、今後、高齢者単独・夫婦のみ世帯が増加することが予測されている。このような背景を踏まえて、東京都介護予防・フレイル予防推進支援センターでは、東京都の全ての自治体が、人と人とのつながりを通じて参加者や「通いの場」が継続的に拡大していくような「地域につながる介護予防」の取り組みや、住民の選好や地域特性に応じた、フレイル予防につながる「多様な主体による多様な活動の「通いの場」の展開」の取り組みを支援している。

２　他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携

・社会参加とヘルシーエイジング研究チーム
・自立促進と精神保健研究チーム
・福祉と生活ケア研究チーム
・高齢者健康増進事業支援室
・フレイル予防センター
・認知症未来社会創造センター
・健康長寿研修センター
・東京都社会福祉協議会
・一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構
・公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団
・桜美林大学

３　活動概要

１）人材育成

介護予防施策および介護予防・フレイル予防についての知識の習得をする「総論編」、「通いの場」の拡大・多様化を進める上で基礎となる考え方を学び、立ち上げについてノウハウを習得する「実践編Ⅰ地域づくりによる介護予防研修」、「通いの場」におけるフレイル予防の観点をふまえた予防活動の実施により、機能強化を図るためのノウハウを習得する「実践編Ⅱ多様性・機能強化研修」、「通いの場」づくりをより効果的･効率的に推進するためのノウハウを習得する「介護予防･フレイル予防推進員研修」，「実践編 1」と「介護予防・フレイル予防推進員研修」の成果報告として「実践報告会」を開催した。人材育成研修には，49 自治体，延べ 1,190 名の自治体職員，地域包括支援センター，専門職等が参加した。

２）相談支援

①介護予防・フレイル予防全般に対しての相談支援

東京都健康長寿医療センター研究所におけるこれまでの研究成果やノウハウを活かし、介護予防・フレイル予防や事業に関する相談に対して助言をした。

②東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター職員及び広域アドバイザーによる現地相談支援

区市町村において介護予防事業を進めていく上での課題などに対し、経験豊富な知識と技術を有する研究員や広域アドバイザー等が区市町村へ伺い助言をした。また、高齢者の状態等のデータを、圏域ごとに分析できる形式に整理して区市町村へ提供するとともに、活用方法について助言し、戦略的な事業展開の支援を行った。

③フレイル予防活動の担い手の養成・強化支援

地域で介護予防・フレイル予防活動を普及する担い手となる住民を育成・強化する取り組みを支援した。

3）評価・効果分析

地域の状況に応じた通いの場への参加促進のために必要な方策の提案、多様な通いの場づくりの推進など、地域特性に応じた介護予防活動等を支援するため、令和２・３年度に調査を実施した４自治体のデータを統合し､詳細な解析を実施し､｢系統的な通いの場づくりのための地域診断の手引き｣を作成し、自治体に共有した。

また、多様な通いの場の実践事例へのインタビューに基づき推進プロセスを、多様な通いの場の実践事例へのインタビューに基づき、多様な通いの場の推進プロセスを、①立ち上げの背景、②立ち上げ、③継続、④展開というステップに分類し、通いの場の運営者・代表者の大まかな動きと、自治体・地域包括支援センター・社会福祉協議会等が実際に行った支援を整理した,｢実践事例から紐解く多様な通いの場推進のしおり」を作成し自治体に共有した。

4）普及啓発

東京都介護予防・フレイル予防推進支援センターによる支援内容や成果、介護予防・フレイル予防に関する有益な情報をホームページやメール配信にて発信した。

5）運営委員会

上記４事業について、関係者間で実施状況を共有するとともに、効果的な実施に向け検討を行うことを目的とした運営委員会を設置、開催した。

４　業績

1　論文（誌上発表）：原著

1. ★◎植田拓也、柴喜崇、鹿内誠也、土屋彰吾、畠山浩太郎、渡辺修一郎．地域在住高齢者における早朝のラジオ体操会への参加が身体的､精神的､社会的側面に及ぼす効果．日本予防理学療法学会雑誌．（早期公開）（査読あり）
2. 植田拓也．通いの場の多様性と主目的による類型の活用．老年社会科学．2023;45:249-254．（査読なし）
3. ◎森裕樹、倉岡正高、相良友哉、藤原佳典．通いの場における多世代住民の参加実態と運営上の課題：全国のシルバー人材センターを対象とした調査分析．日本世代間交流学会誌．2023:13(1);3-11．（査読あり）
4. ◎森裕樹、清野諭、山下真里、横山友里、植田拓也、小林江里香、内田勇人、藤原佳典．大都市在住後期高齢者における通いの場への参加状況とその関連要因：新型コロナウイルス感染症拡大の影響に着目した検討．応用老年学．（印刷中）（査読あり）
5. ★◎森裕樹．新型コロナウイルス感染症拡大の影響により社会活動への参加を中断した高齢者の特徴．環境心理学研究．（印刷中）（査読あり）
6. ★◎山中信、石橋裕、小林法一、小林隆司、石橋仁美．短期集中リハビリテーションの対象となる高齢者選定のチェックリストの開発．印刷中：学術誌「作業療法」．（印刷中）（査読あり）
7. ★◎Tanide A, Takayanagi K, Yamagiwa K, Watanabe M, Watanabe M. Stress response during practical examination in medical training course students: The relationship with learning method and examination score. J Jpn Health Sci.(in press)（査読あり）（IF: 掲載なし）
8. ★◎谷出敦子、吉田司、渡邉大輝、中潟崇、山田陽介、澤田奈緒美、岡林恵、島田秀和、西信雄、宮地元彦．BMI区分別にみた地域在住中高齢者における指輪っかテストの結果と基本チェックリストによるフレイルの関連．理学療法学．2023:50(4);129-140．（査読あり）
9. ★◎Nemoto Y, Brown WJ, Mielke GI. Trajectories of physical activity from mid to older age in women: 21 years of data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. Int J

Behav Nutr Phys Act. 2024 Jan 8;21(1):4. doi: 10.1186/s12966-023-01540-z. (査読あり) (IF: 8.7、2022/2023)

10. ★◎田中元基、大橋靖史. 20年間にわたる日記に表現された生活空間の変容：認知症の疑われる女性の書いた日記のドキュメント分析. 質的心理学研究. 2024:23;133-154. (査読あり)
11. 江尻愛美、河合恒、安永正史、白部麻樹、伊藤久美子、植田拓也、大渕修一. 住民主体の通いの場における運営母体による課題認識の差異に応じた継続支援方法の検討. 厚生の指標. (印刷中) (査読あり)
12. Sasaki T, Ueda T, Negishi Y, Negishi Y, Toyoshima K, Yoshida M, Ohta H, Araki A, Toba K. Using the Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON) for early detection of frailty. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov 14. doi: 10.1111/ggi.14728. Online ahead of print. (Letter to the editor、査読あり) (IF: 3.387 2023/2024)
13. Abe T, Yamashiro D, Yamashita M, Ueda T, Suzuki H, Fujiwara Y, Awata S, Toba K, IRIDE Cohort Study investigators. Assessments of cognitive function of older adults in community general support centers: The IRIDE cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov;23(11):887-888. doi: 10.1111/ggi.14677. Epub 2023 Sep 21. (Letter to the editor、査読あり) (IF: 3.387 2023/2024)
14. Osuka Y, Kojima N, Daimaru K, Ono R, Sugie M, Omura T, Motokawa K, Ueda T, Maruo K, Aoyama T, Inoue S, Sasai H. Effects of Radio-Taiso on Health-Related Quality of Life in Older Adults with Frailty: A Randomized Controlled Trial. J Epidemiol. (in press) (査読あり) (IF: 3.809、2023/2024)
15. Yamagami T, Yagi M, Tanaka S, Anzai S, Ueda T, Omori Y, Tanaka C, Shiba Y. Relationship between Cognitive Decline and Daily Life Gait among Elderly People Living in the Community: A Preliminary Report. Dement Geriatr Cogn Dis Extra . 2023 Mar 2;13(1):1-9. doi: 10.1159/000528507. eCollection 2023 Jan-Dec. (査読あり) (IF: 0.502、2023/2024)
16. ★◎Fujiwara Y, Seino S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Fujita K, Murayama H, Shinkai S, Kitamura A. The relationship between working status in old age and cause-specific disability in Japanese community-dwelling older adults with or without frailty: A 3.6-year prospective study. Geriatr Gerontol Int. 2023 Nov;23(11):855-863. doi: 10.1111/ggi.14686. Epub 2023 Sep 28. (査読あり) (IF: 3.387、2022/2023)
17. Kitago M, Seino S, Shinkai S, Nofuji Y, Yokoyama Y, Hata T, Abe T, Taniguchi Y, Amano H, Murayama H, Kitamura A, Akishita M, Fujiwara Y. Cross-Sectional and Longitudinal Associations of Creatinine-to-Cystatin C Ratio with Sarcopenia Parameters in Older Adults. J Nutr Health Aging. 2023;27(11):946-952. doi: 10.1007/s12603-023-2029-3. (査読あり) (IF: 5.285、2022/2023)
18. Abe T, Seino S, Hata T, Yamashita M, Ohmori N, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Transportation modes and social participation in older drivers and non-drivers: Results from urbanised Japanese cities. J Transp Geogr. 2023 May;109:103598. doi.org/10.1016/j.jtrangeo.2023.103598. (査読あり) (IF: 6.1、2022/2023)
19. Taniguchi Y, Seino S, Ikeuchi T, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Protective effects of dog ownership against the onset of disabling dementia in older community-dwelling Japanese: A longitudinal study. Prev Med Rep. 2023 Oct 7:36:102465. doi: 10.1016/j.pmedr.2023.102465. eCollection 2023 Dec. (査読あり) (IF: 2.813、2022/2023)
20. Nishinakagawa M, Sakurai R, Nemoto Y, Matsunaga H, Takebayashi T, Fujiwara Y. Influence of education and subjective financial status on dietary habits among young, middle-aged, and older adults in Japan: a cross-sectional study. BMC Public Health. 2023 Jun 26;23(1):1230. doi: 10.1186/s12889-023-16131-7. (査読あり) (IF: 4.5、2020/2023)
21. Yamada T, Fukuda Y, Kanamori S, Sato S, Nakamura M, Nemoto Y, Maruo K, Takeda N, Kitabatake Y, Arao T. Association of social participation (including inconsistent participation) with the progression of frailty among older adults: Community-based cohort study in Japan.

Geriatr Gerontol Int. 2023 Jan;23(1):25-31. doi: 10.1111/ggi.14510. Epub 2022 Nov 24. （査読あり） （IF: 3.387、2022/2023）

22. 中村睦美、佐藤慎一郎、根本裕太、山田卓也、武田典子、丸尾和司、福田吉治、北畠義典、荒尾孝. 地域在住高齢者における腰痛と身体活動，座位時間との関連：横断研究. 日本公衆衛生雑誌. 2023:70(10);690-698. （査読あり）
23. 小林江里香、根本裕太. 通いの場の担い手としての住民参加―都市部の中高年者におけるニーズの分析―. 老年社会科学. 2023:45(3);249-254. （査読なし）
24. Nonaka K, Murayama H, Murayama Y, Murayama S, Kuraoka M, Nemoto Y, Kobayashi E, Fujiwara Y. The Impact of Generativity on Maintaining Higher-Level Functional Capacity of Older Adults: A Longitudinal Study in Japan. International Journal of Environmental Research and Public Health 20, no. 11: 6015. https://doi.org/10.3390/ijerph20116015. （査読あり） （IF: 4.6、2022/2023）
25. 菊池宏幸、清野諭、野藤悠、植田拓也、井上茂. 身体活動・運動分野のロジックモデルとアクションプランの例：運動習慣者割合の増加. 健康教育学会誌. （印刷中）. （査読あり）

２　論文（誌上発表）：総説

1. 植田拓也. フレイルや認知症になっても参加し続けられる「通いの場」づくりを目指して. Aging & Health. 2023;32(2):17-20. （査読なし）
2. 植田拓也.Physical Activity　高齢者の特性と理学療法の役割.理学療法ジャーナル.2024;58(1):24-30. （査読なし）
3. 倉岡正高. 持続可能な通いの場とは - 多世代・民間連携の視点から. 老年社会科学. 2023;45(3); 268-275. （査読なし）

３　学会発表（国際）

1. Ueda T, Nemoto Y, Kobayashi E, Kuraoka M, Mori H, Tanaka M, Yamanaka M, Tanide A, Fujiwara Y. Is participating in “Kayoinoba” associated with higher subjective degree of expected social role in frail older adults?. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
2. Kuraoka M, Seino S, Yokoyama Y, Kojima M, Mori H, Ueda T, Komiyama E, Fujiwara Y. The relationship between intra- and inter-generational exchange and mental health of male public housing residents. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
3. Mori H, Seino S, Nofuji Y, Fujiwara Y. Implementation and evaluation of a frailty-prevention program for the leaders of older residents. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
4. Tanide A, Yoshida T, Watanabe D, Nakagata T, Yamada Y, Sawada N, Okabayashi M, Shimada H, Nishi N, Miyachi M. Relationship between calf circumference and frailty in community-dwelling middle-aged and older adults by body mass index category: a cross-sectional study. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
5. Yamanaka M, Ueda T, Anzai S, Arai T, Nakase S, Shiba Y. Changes in care provided by remote support of rehabilitation professionals to nursing staff in day-care facilities. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
6. Hata T, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Nofuji Y, Narita M, Taniguchi Y, Amano H, Nishi M, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Impact of dietary variety on changes in nutritional biomarkers among community-dwelling older adults. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.

7. Nemoto Y, Mishra G, Brown WJ, Mielke GI. Trajectories of physical activity and incidence of hypertension, diabetes, and obesity: 21 years of data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Oral. 2023.6.12-14.
8. Seino S, Abe T, Nofuji Y, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Dose-Response Association of Physical Activity and Sitting Time with Incident Functional Disability in Older Japanese Adults. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
9. Yokoyama Y, Seino S, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Association between changes in dietary variety and depressive symptoms in community-dwelling older adults. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
10. Abe T, Seino S, Hata T, Yokoyama Y, Nofuji Y, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Changes in healthy behaviours and incident frailty in community-dwelling older adults. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
11. Fujita K, Taniguchi Y, Hata T, Abe T, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S, Fujiwara Y. Trajectories of frequency of going out in old ages and its associated factors. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
12. Amano H, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, Fujiwara Y. Apathetic symptoms and the risk of incident dementia certified in the Long-Term Care Insurance System: a 12-year cohort study of the community dwelling elderly in Japan. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
13. Osuka Y, Kojima N, Daimaru K, Ono R, Sugie M, Omura T, Motokawa K, Ueda T, Maruo K, Aoyama T, Inoue S, Sasai H. Effects of the Japanese National Health Exercise (Radio-Taiso) on health-related quality of life and physical fitness in older adults with frailty: A randomized controlled trial. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Tokyo, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
14. Sasaki T, Negishi Y, Machida A, Araki A, Toyoshima K, Yoshioka M, Ohta H, Araki Y, Ueda T, Toba K. Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON). International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Tokyo, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
15. Araki A, Motokawa K, Hayakawa M, Toyoshima K, Hirano H, Fukawa N, Honda K, Sasaki T, Narita Y, Ota H, Ueda T, Fujiwara Y, Ishizaki T, Tamura Y, Toba K. Development of the program of certificated Frailty-Support Physicians, Nutritionists, and Nurses for the support of community-dwelling older people based on the "Frailty Health Check-up" in Japan. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Tokyo, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
16. Hinakura K, Sakurai R, Sasai H, Ogawa S, Seino S, Hata T, Fujiwara Y, Awata S. Characteristics of wearable activity trackers users and association with health related indices among older adults. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2023. Yokohama, Japan. Poster. 2023.6.12-14.
17. Nemoto Y, Mishra G, Brown WJ, Mielke GI. Trajectories of physical activity from mid to old age in women: 21 years of data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. International Behavioral Nutrition and Physical Activity Annual Meeting. Uppsala, Sweden. Oral. 2023.6.14-17.

18. Mielke GI, Nemoto Y, Kolbe-Alexander T, Ng N, Brown WJ. Emergence of socioeconomic disparities in physical activity across the lifespan in women. Australian Public Health Conference 2023. Hobart, Australia. Oral. 2023.9.26-28.
19. Nemoto Y, Brown WJ, Mielke GI. Trajectories of physical activity and physical function among older women: Data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. The 3rd Asia-Pacific Society for Physical Activity (ASPA) Conference. Wellington, New Zealand. Oral. 2023.11.27-28.
20. Mielke GI, Nemoto Y, Kolbe-Alexander T, Ng N, Brown WJ. Emergence of socioeconomic inequalities in physical activity across the lifespan in women: 21 years of data from the Australian Longitudinal Study of Women's Health. The 3rd Asia-Pacific Society for Physical Activity (ASPA) Conference. Wellington, New Zealand. Oral. 2023.11.27-28.

４　学会発表（国内）

1. 山城大地、藤田幸司、相良友哉、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、服部真治、中村一朗、澤岡詩野、藤原佳典. 地域の居場所づくりの支援者における多様な地域の居場所の把握・連携状況(その1)　- 居場所のタイプ別の比較 - . 第65回日本老年社会科学会大会（パシフィコ横浜：神奈川）. 示説. R5.6.17-18.
2. 相良友哉、藤田幸司、山城大地、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、服部真治、中村一朗、澤岡詩野、藤原佳典. 地域の居場所づくりの支援者における多様な地域の居場所の把握・連携状況(その2)　- 居場所のタイプ別の比較 - . 第65回日本老年社会科学会大会（パシフィコ横浜：神奈川）. 示説. R5.6.17-18.
3. 植田拓也. 通いの場の推進と支援者に求められる役割. 第46回全国デイ・ケア研究大会2023（東京たま未来メッセ：東京）. シンポジウム. R5.7.21-22.
4. 秦俊貴、清野諭、横山友里、成田美紀、新開省二、北村明彦、藤原佳典. 都市部在住高齢者における食品摂取の多様性と4年後のフレイルとの関連. 第70回日本栄養改善学会学術総会（名古屋国際会議場、ハイブリッド開催：愛知）. 口演. R5.9.1-3.
5. 阿部巧、山城大地、山下真里、植田拓也、鈴木宏幸、藤原佳典、粟田主一、鳥羽研二. 地域包括支援センターにおける認知機能評価の実態把握と認知機能低下者スクリーニングモデルの適用可能性：IRIDE Cohort Study. 第12回認知症予防学会学術集会（朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター：新潟）. 口演. R5.9.15-17.
6. 植田拓也. 介護予防におけるパラダイムシフトと理学療法士に求められる役割. 第48回関東甲信越ブロック理学療法学会（大宮ソニックシティ、埼玉）. シンポジウム. R5.10.14-15.
7. 植田拓也. 通いの場の概念と類型～地域づくりに向けた通いの場の捉え方～. 第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）. シンポジウム. R5.10.28-29.
8. 小宮山恵美、清野諭、横山友里、小島みさお、植田拓也、倉岡正高、森裕樹、山中信、谷出敦子、秦俊貴、小林江里香、藤原佳典. 大都市在住高齢者におけるコロナ禍の健康に対する意識変容とその関連要因. 第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）. 示説. R4.10.28-29.
9. 谷出敦子、清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、植田拓也、森裕樹、秦俊貴、山中信、藤原佳典. 地域在住高齢者における地域レベルの社会参加と精神的健康との関連：横断的マルチレベル分析. 第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）. 口演. R5.10.28-29.
10. 秦俊貴、森裕樹、清野諭、野藤悠、植田拓也、藤原佳典. 通いの場のフレイル予防機能強化を目的とした「ちょい足し™」プログラム研修の普及と展開：都内自治体での取り組みの評価. 第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）. 口演. R5.10.28-29.
11. 倉地洋輔、中澤幹夫、天野樹、添田結美子、濱田守人、植田拓也. 通いの場参加者の要介護認定発生率～自治体事業としての評価～. 第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）. シンポジウム. R5.10.28-29.
12. 白部麻樹、植田拓也、大渕修一、藤原佳典. 地域の介護予防を促進する上での歯科衛生士の役割. 第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）. シンポジウム. R5.10.28-29.

13. 赤尾瑠琉、大曽根由実、金子絢美、秦俊貴、成田美紀、渡邉愼二、古谷千寿子、清野諭、藤原佳典、新開省二．オンラインアプリ『バランス日記』を用いたフレイル予防の実証研究：前期介入群における実行可能性評価．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．口演．R5.10.28-29.
14. 新井武志、植田拓也、山中信、安齋紗保理、中瀬咲子、柴喜崇．リハビリテーション専門職によるデイサービススタッフに対する遠隔支援が利用者の心身機能に及ぼす影響．第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）．示説．R5.10.28-11.2.
15. 成田美紀、大曽根由実、新開省二、阿部巧、横山友里、野藤悠、秦俊貴、北村明彦、藤原佳典、村山洋史．地域在住高齢者における新型コロナウイルス感染症流行直後の生活行動の変化と食品摂取多様性との関連．第18回日本応用老年学会大会（大阪大学：大阪）．口演．R5.10.28-29.
16. 中瀬咲子、安齋紗保理、山中信、植田拓也、新井武志、柴喜崇．ICTを活用した遠隔支援により，デイサービスにおける自立支援の機能強化を目指した取り組み．第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）．示説．R5.10.28-29.
17. 鹿内誠也、植田拓也、土屋彰吾、水野翔太、畠山浩太郎、柴喜崇．15年間における朝のラジオ体操会参加者と体力測定会を協働した経験．第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館アリーナ他：北海道）．示説．R5.10.28-29.
18. 植田拓也、田中元基、根本裕太、森裕樹、倉岡正高、谷出敦子、山中信、秦俊貴、小宮山恵美、藤原佳典．アフターコロナにおける通いの場の再興に向けた課題の検討-行政職員への調査-．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
19. 倉岡正高、清野諭、横山友里、小島みさお、小宮山恵美、森裕樹、山中信、谷出敦子、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典．大都市高齢者の個人・地域レベルの世代間交流と個人の精神的健康度の関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
20. 倉岡正高．国内外の多様な多世代交流の事例と手法の紹介．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場、茨城）．シンポジウム．R5.10.31-11.2.
21. 森裕樹、植田拓也、清野諭、秦俊貴、藤原佳典．フレイル予防を目的とする専門職向けプログラムの実施と評価．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
22. 山中信、清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、秦俊貴、谷出敦子、植田拓也、小林江里香、藤原佳典．所得別にみた地域在住高齢者における就労状況と精神的健康度の関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
23. 谷出敦子、根本裕太、小林江里香、植田拓也、倉岡正高、田中元基、藤原佳典．中高齢者における通いの場の担い手特性の探索的調査：都内4自治体における横断研究．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
24. 秦俊貴、清野諭、横山友里、遠峰結衣、新開省二、北村明彦、藤原佳典．食品摂取の多様性のチェック経験と食品摂取多様性スコアの変化：地域レベルでの検討．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
25. 根本裕太、佐藤慎一郎、武田典子、山田卓也、北畠義典、笠井貴志、荒尾孝．地域在住高齢者における身体活動と認知症発症との関連：多時点観察データを用いた検討．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．口演．R5.10.31-11.2.
26. 相良友哉、藤田幸司、山城大地、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、清野諭、野藤悠、山下真里、阿部巧、藤原佳典．類型別にみた高齢者の居場所の特徴(2)：居場所の類型と精神的健康度との関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
27. 小川将、高橋知也、松永博子、藤平杏子、小宮山恵美、芳賀輝子、藤原佳典、鈴木宏幸．産後ケア事業と高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの実装―3ヶ月後・6ヶ月後の追跡調査の結果―．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
28. 石川美波、小澤美由、白波瀬美貴、植田拓也、秦俊貴、相藤巨、藤原佳典．自治体における地域介護予防支援事業の効果評価：東京都目黒区の住民主体の活動支援．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
29. 白波瀬美貴、小澤美由、石川美波、植田拓也、秦俊貴、相藤巨、藤原佳典．自治体における短期集中予防サービス事業の効果評価：東京都目黒区の事例．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.

30. 横山友里、清野諭、秦俊貴、小島みさお、倉岡正高、植田拓也、小宮山恵美、森裕樹、山中信、谷出敦子、小林江里香、藤原佳典．大都市在住高齢者における地域レベルの共食割合と個人の食品摂取の多様性との関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
31. 赤尾瑠琉、大曽根由実、金子絢美、秦俊貴、成田美紀、渡邉慎二、古谷千寿子、清野諭、藤原佳典、新開省二．オンラインアプリ『バランス日記』を用いたフレイル予防の実証試験．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
32. 金子絢美、大曽根由実、赤尾瑠琉、成田美紀、秦俊貴、藤原佳典、新開省二．BDHQを用いた高齢者の栄養疫学研究（2）フレイルおよびMCIと関連する食品群と栄養素．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
33. 成田美紀、大曽根由実、新開省二、横山友里、阿部巧、野藤悠、秦俊貴、村山洋史、藤原佳典．COVID-19流行前後における高齢者の食生活（１）食品摂取多様性と関連要因の変化．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
34. 大曽根由実、成田美紀、新開省二、横山友里、阿部巧、野藤悠、秦俊貴、村山洋史、藤原佳典．COVID-19流行前後における高齢者の食生活（２）食品摂取多様性の変化をもたらす要因．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
35. 山城大地、藤田幸司、相良友哉、森裕樹、植田拓也、倉岡正高、清野諭、野藤悠、山下真里、阿部巧、藤原佳典．類型別にみた高齢者の居場所の特徴(1)：居場所への期待と居場所の有無との関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
36. 天野奥津江、笠井貴志、根本裕太、武田典子、北畠義典、荒尾孝．ご当地体操実施者の実態および特性：地域在住高齢者を対象とした全数調査による検討．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
37. 笠井貴志、天野奥津江、根本裕太、佐藤慎一郎、武田典子、北畠義典、荒尾孝．通いの場参加によるフレイル予防効果：6年間の反復測定データを用いた検討．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
38. 横山友里、清野諭、秦俊貴、小島みさお、倉岡正高、植田拓也、小宮山恵美、森裕樹、山中信、谷出敦子、小林江里香、藤原佳典．大都市在住高齢者における地域レベルの共食割合と個人の食品摂取の多様性との関連．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11-2.
39. 小島みさお、清野諭、横山友里、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、山中信、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典．大都市高齢者の基本チェックリストによる性・年齢・要支援認定有無別フレイル発現率．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．示説．R5.10.31-11.2.
40. 清野諭、横山友里、小島みさお、倉岡正高、森裕樹、小宮山恵美、谷出敦子、山中信、秦俊貴、植田拓也、小林江里香、藤原佳典．大都市在住高齢者の地域レベルの社会参加と個人の身体不活動：横断的マルチレベル分析．第82回日本公衆衛生学会総会（つくば国際会議場：茨城）．口演．R5.10.31-11.2.
41. 大須賀洋祐、小島成実、大丸香、杉江正光、大村卓也、本川佳子、植田拓也、丸尾和司、小野梨沙、青山敏彦、井上茂、笹井浩行．フレイル高齢者に対するラジオ体操の有効性：ランダム化比較試験のper protocol解析．第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会（御茶ノ水ソラシティカンファレスセンター：東京）．示説．R5.11.4-5.
42. 山中信、植田拓也、新井武志、安齋紗保里、柴喜崇．デイサービスにおける自立支援・重度化防止の取り組みとその効果に関する文献レビュー．第57回日本作業療法学会（沖縄コンベンションセンター、ハイブリッド開催：沖縄）．示説．R5.11.10-12.
43. 小宮山恵美．シニア世代が運営する産後ケア事業デイサービス型についての活動報告．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．R4.12.2.
44. 倉岡正高、清野諭、山下真里、野藤悠、村山洋史、藤原佳典．東日本大震災被災地における世代間交流と精神的健康度の関連．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．R5.12.2.
45. 森裕樹、秦俊貴、山中信、谷出敦子、小宮山恵美、倉岡正高、植田拓也、藤原佳典．多世代住民の参加を促す通いの場づくりの要因．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．R5.12.2.
46. 山中信、倉岡正高、小島みさお、清野諭、小宮山恵美、植田拓也、藤原佳典．大都市の団地在住高齢男性の社会参加を目指す居場所づくり：伴走支援報告．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．R5.12.2.

47. 谷出敦子、清野諭、横山友里、小島みさお、植田拓也、森裕樹、小宮山恵美、山中信、倉岡正高、藤原佳典．大都市高齢者における世代間交流と主観的幸福感の関連：横断的マルチレベル分析．日本世代間交流学会第14回全国大会（京都橘大学：京都）．示説．R5.12.2.
48. 早川由里子、小宮山恵美．地域包括ケアシステムの推進・進化に向けPDCAサイクルに沿って事業を展開するための取組報告～地域包括支援センターに対する伴走支援について東京都北区．第12回日本公衆衛生看護学会学術集会（北九州国際会議場、ハイブリッド開催：福岡）．示説．R6.1.6-7.
49. 秦俊貴、清野諭、横山友里、成田美紀、新開省二、北村明彦、藤原佳典．都市部在住高齢者における食品摂取の多様性と総死亡との関連.第34回日本疫学会学術総会(びわ湖大津プリンスホテル:滋賀).示説．R6.1.31-2.2.
50. Nemoto Y, Brown WJ, Ding D, Nguyen B, Mielke GI. Associations of trajectories of physical activity with chronic conditions and physical disability onset: 21 years of data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. 第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．口演．R6.1.31-2.2.
51. 清野諭、横山友里、森裕樹、植田拓也、山下真里、野藤悠、北村明彦、服部真治、山田実、近藤克則、荒井秀典、藤原佳典.大都市在住高齢者におけるCOVID-19流行下の通いの場への参加が1年後のフレイルに及ぼす影響．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．R6.1.31-2-2.
52. 雛倉圭吾、桜井良太、笹井浩行、清野諭、秦俊貴、藤原佳典、粟田主一．インドア派の高齢者の精神的健康状態：オンラインでの他者交流に着目した検討．第34回日本疫学会学術総会（びわ湖大津プリンスホテル：滋賀）．示説．R6.1.31-2-2.
53. 谷出敦子、清野諭、横山友里、小島みさお、森裕樹、秦俊貴、小宮山恵美、山中信、植田拓也、倉岡正高、藤原佳典．地域在住高齢者における世代内／世代間交流の組合せとフレイルの関連：横断的マルチレベル研究．第25回日本健康支援学会年次学術大会（中京大学：愛知）．示説．R6.3.2-3.
54. 森裕樹、田中元基、秦俊貴、植田拓也、倉岡正高、山中信、谷出敦子、小宮山恵美、藤原佳典．参加者の多様性と主体性を促す多様な通いの場づくりの要因．日本環境心理学会第17回大会（白鴎大学、ハイブリッド開催：栃木）．示説．R6.3.9.

５　著書等

1. 植田拓也、川崎裕彰、牧野和子．「自立」について考える．令和5年度東京都自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議アドバイザー養成研修事業研修テキスト．公益財団法人東京都福祉保健財団(東京).2024年1月発行.
2. 植田拓也.高齢者を取り巻く社会環境と社会資源.健康長寿の花コミュニケーター養成講座テキスト,一般社団法人＜芙和せら＞心理研究所(東京). 2023年4月発行.
3. 植田拓也,他.厚生労働省,令和5年度介護予防普及展開事業　通いの場の課題解決に向けたマニュアルVer.1(共著),2024年3月
4. 植田拓也,他.新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた通いの場をはじめとする介護予防の取組に関する調査研究事業(日本能率協会総合研究所),令和5年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業報告書(共著),2024年3月
5. 植田拓也,倉岡正高,藤原佳典,他.令和5年度老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進等事業分) 英国等諸外国における支援を必要とする住民と地域の多様な主体との調整を行う職種との国際比較を通した生活支援コーディネーターの活動基盤強化に関する調査研究事業報告書(共著),2024年3月
6. 倉岡正高．世代間交流と多世代循環型社会に着目して～世代間交流のビジョンと戦略．生きがい研究第30号、2024年3月（印刷中）
7. 森裕樹．「ここに注目！高齢者のボランティア活動ー現状と今後の可能性」．月刊シルバー人材センター(東京), 2024.1月
8. 森裕樹．元気高齢者の男性にアプローチした通いの場の包括的モデル構築と社会実装、２０２２年度ジェロントロジー研究助成報告書、2024.3月

9. 根本裕太．知的な活動と運動で認知症予防．健康づくりウォッチ．第51号．2023．https://www.my-zaidan.or.jp/health-watch/detail.php?id=430920f5e6a8fd003d6e0ea60bc88aaa&tmp=1704782741
10. 田中元基．家族関係に基づく祖父母と孫の関係性．日本発達心理学会(編)佐藤眞一、藺牟田洋美、田島信元(責任編集)高齢期の発達科学．新曜社（東京）,150-161，2024.3.15発行.
11. 新井武志、植田拓也．「介護予防」について．令和5年度東京都自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議アドバイザー養成研修事業研修テキスト．公益財団法人東京都福祉保健財団(東京)．2024年1月発行.
12. 野中久美子、森裕樹、齋藤尚子、村山洋史．2023年度大田区地域支え合い推進事業運営補助業務報告書．東京都健康長寿医療センター研究所　社会参加とヘルシーエイジング研究チーム(東京)．2024年3月
13. 西真理子、森裕樹、清野諭、野藤悠、練馬区令和5年度フレイル予防サポーター育成事業の業務委託事業報告書．東京都健康長寿医療センター研究所　社会参加とヘルシーエイジング研究チーム(東京)．2023年7月
14. 西真理子、森裕樹、清野諭、野藤悠．渋谷区令和5年度 通いの場等活動支援研修（ちょい足し研修）事業報告書．東京都健康長寿医療センター研究所　社会参加とヘルシーエイジング研究チーム(東京)．2024年1月
15. 西真理子、森裕樹、清野諭、野藤悠．渋谷区令和5年度通いの場等新規立ち上げ研修事業報告書．東京都健康長寿医療センター研究所　社会参加とヘルシーエイジング研究チーム(東京)．2024年3月
16. 清野諭、山下真里、森裕樹、服部真治、藤原佳典．【研究１】通いの場の参加による短期的効果の検証：東京都八王子市の高齢者を対象とした1年後追跡調査から．藤原佳典（編）『PDCAサイクルに沿った介護予防の取組推進のための通いの場等の効果検証と評価の枠組み構築に関する研究』，厚生労働科学研究費補助金長寿科学政策研究事業令和4年度分担研究報告書，8-15．2023.5.31.

6　国内の受賞

1. 根本裕太．早稲田大学スポーツ科学学術院　早稲田大学スポーツ科学学術院創設20周年記念式典表彰者．2023年10月.
2. 根本裕太、佐藤慎一郎、武田典子、山田卓也、北畠義典、笠井貴志、荒尾孝．第82回日本公衆衛生学会総会最優秀口演賞．地域在住高齢者における身体活動と認知症発症との関連：多時点観察データを用いた検討．2023年11月.
3. 谷出敦子、清野諭、横山友里、小島みさお、森裕樹、秦俊貴、小宮山恵美、山中信、植田拓也、倉岡正高、藤原佳典．日本健康支援学会第25回学術大会　大会最優秀賞（ポスター発表部門）．地域在住高齢者における世代内／世代間交流の組合せとフレイルの関連：横断的マルチレベル研究．2024年3月.
4. 森裕樹、田中元基、秦俊貴、植田拓也、倉岡正高、山中信、谷出敦子、小宮山恵美、藤原佳典．日本環境心理学会第17回大会優秀ポスター賞．参加者の多様性と主体性を促す多様な通いの場づくりの要因．2024年3月.

7　国外の受賞

1. Nemoto Y, Brown WJ, Mielke GI. ASPA 2023 Conference, ASPA Overall Award. Trajectories of physical activity and physical function among older women: Data from the Australian Longitudinal Study on Women's Health. The 3rd Asia-Pacific Society for Physical Activity (ASPA) Conference. 2023.11.

★コレスポンディングオーサー(責任著者)、◎ファーストオーサー(第一著者)
二重下線＝常勤研究員、下線＝非常勤職員、破線＝研究生、連携大学院生等

Ⅱ　普 及 活 動 等

1　新聞・雑誌・テレビ等

チーム名	概要	情報提供者	取材機関
老化機構研究チーム	「老化と寿命の謎を探る」エピゲノム、サーチュイン遺伝子など老化に関わる遺伝子について	井上　聡	信濃毎日新聞株式会社
	内分泌疾患に関する最新情報	高山　賢一	公益財団法人山口内分泌疾患研究振興財団
老化制御研究チーム	水素研究、この１年で急速に進展ー第12回 日本文市場水素医学生物学会大会ー	大澤　郁朗	株式会社食品化学新聞
	日本分子状水素医学生物学会大会を開催 水素の機能性表示など水素成果の社会浸透に期待	大澤　郁朗	株式会社ヘルスビジネスメディア
老化脳神経科学研究チーム	痛みも、つらさも、不快感と自律神経	内田　さえ	株式会社講談社
	自律神経セルフケア	内田　さえ	株式会社マガジンハウス
	咀嚼と高齢者の認知機能について	堀田　晴美	株式会社小学館
	皮膚をつまむ！さする！	堀田　晴美	株式会社ブティック社
	高齢者の夜間頻尿について	堀田　晴美	株式会社小学館
	シニアと自律神経の関係についての、最新の研究結果	堀田　晴美	株式会社宝島社
加齢変容研究チーム	知ってる？からだのキーワード　ゾンビ細胞について	佐々木　紀彦	株式会社オレンジページ
老年病理学研究チーム	高齢者ブレインバンクについて、どのような目的や意義があり、日頃どのような活動を行っているか	齊藤　祐子	読売新聞社
神経画像研究チーム	認知症新薬レカネマブについて	石井　賢二	株式会社朝日新聞社
	認知症になると表情も変わる？顔つきに関わる特徴や最新のAI研究を紹介	亀山　征史	株式会社朝日新聞社
社会科学系副所長	「フレイル」と「予備力の低下」	藤原　佳典	信濃毎日新聞株式会社
	幸せに老いるためのレッスン「貢献寿命」を伸ばす	藤原　佳典	株式会社講談社
	介護予防に関する下記研究内容について 埼玉県W市在住６５歳以上高齢者の追跡調査で 「ボランティア・趣味活動に月１回以上参加している高齢者は４年後の生活機能維持への効果が認められる」 「男性は交流なき外出で約２倍、女性は外出なき交流で約１．６倍、日常生活機能の危険が高まる」	藤原　佳典	日本放送協会
	＜プレスリリース＞「フレイルであっても、働くことは身体機能を維持し要介護リスクを低減することが明らかに」	藤原　佳典	株式会社産経新聞社
	2023年11月28日に行われたASEANハイレベル会合について	藤原　佳典	有限会社大分合同新聞社
	＜プレスリリース＞フレイルでもフルタイムで働き続けることで要介護認定のリスクを抑制	藤原　佳典	株式会社朝日新聞社
	シニア世代の社会参加を促進するために自治体に求められる事柄、今後の課題などについて	藤原　佳典	トッパンエディトリアルコミュニケーションズ株式会社
社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	ちょい足しでフレイル予防	清野　諭	しんぶん赤旗
	世代間交流について	村山　陽	日本放送協会
	中高年の孤立問題	村山　陽	一般社団法人共同通信社
	日本社会の地域のネットワーク、中高年男性の問題について	小林　江里香	株式会社毎日新聞社
	全世代にやさしい交通について	小林　江里香	一般財団法人交通経済研究所
	「Chat GPTは孤独感に影響与えるか」についてのインタビュー	村山　洋史	株式会社テレビ朝日
	高齢親の異変・孤独問題	村山　洋史	株式会社扶桑社
	すぐそばにある「ぼっち」　孤独・孤立対策の処方箋は	村山　洋史	日本放送協会
	孤独死のリスクについて	村山　洋史	株式会社TBSラジオ
	「元気なシニアを今後、どう社会で生かすのか」について	村山　洋史	株式会社NEXTEP
	＜プレスリリース＞「認知機能低下が死亡リスクをどう高めるかは孤立の種類次第：“独居”と“希薄なつながり”は正反対の作用を持つ」	村山　洋史	株式会社TRUST-ESTATE
	＜プレスリリース＞「認知機能低下が死亡リスクをどう高めるかは孤立の種類次第：“独居”と“希薄なつながり”は正反対の作用を持つ」	村山　洋史	株式会社創新社
	＜プレスリリース＞犬飼育で認知症低リスク　都センターで高齢者調査	谷口　優	一般社団法人共同通信社
	＜プレスリリース＞認知症リスク　犬飼う高齢者低く	谷口　優	株式会社日本経済新聞社
	＜プレスリリース＞「ペット飼育と認知症発症リスク」	谷口　優	株式会社都政新報社
	＜プレスリリース＞「ペット飼育と認知症発症リスク」	谷口　優	株式会社テレビ朝日
	＜プレスリリース＞犬の飼育者は認知症リスク4割減	谷口　優	株式会社TBSテレビ
	食品摂取の多様性スコア（DVS）について	横山　友里	日本放送協会
	全国の老健施設における高年齢介護助手の雇用状況について	相良　友哉	株式会社朝日新聞社
	SOSの出し方教育	松永　博子 山内　美沙子	株式会社北鹿新聞社
自立促進と精神保健研究チーム	認知症本人ミーティングの定義や意義について	杉山　美香	一般社団法人共同通信社
	認知症に係る特集記事　実桜の会について	杉山　美香	千代田区役所政策経営部広報広聴課
	認知症との向き合い方、介護者の在り方、医療と宗教など、また老健施設へのメッセージ	岡村　毅	株式会社社会保険研究所　出版企画部
	・お口の健康について ・お口のケアについて ・認知症に優しい社会とはどんなものか	小原　由紀	株式会社文化放送
	オーラルフレイル予防でイキイキ健康に！	平野　浩彦	株式会社オフィス201
	高齢者の方の靴下選び、むくみ・転倒予防について	出口　直樹	株式会社日本経済新聞社
	読経は身心の健康増進に良い？護国寺で検証プログラム	岡村　毅 枝広あや子	株式会社仏教タイムス
福祉と生活ケア研究チーム	在宅高齢者の社会的孤立と生活機能低下の関連と予防の方策	今村　慶吾	株式会社環境新聞社
	ごみ屋敷について	井藤　佳恵	株式会社環境新聞社
	独居認知症高齢者の行方不明の実態について	菊地　和則	日本放送協会
	認知機能が低下した人の医療ケアにおける意思決定	井藤　佳恵	株式会社厚生科学研究所
	元気に長生きする秘訣	石崎　達郎	株式会社ジャンプコーポレーション
	「家族介護」について	涌井　智子	兼松ウェルネス株式会社
	介護の一歩手前“フレイル”～早期発見へ新しい目安	石崎　達郎	日本放送協会
	＜プレスリリース＞「後期高齢者の質問票のフレイル関連12項目」について	石崎　達郎	株式会社環境新聞社
	＜プレスリリース＞「後期高齢者の質問票のフレイル関連12項目」について	石崎　達郎	読売新聞社
	介護や寝たきりにならないために　簡単！フレイルチェックリスト	石崎　達郎	日本放送協会
認知症未来社会創造センター	認知症による行方不明について	粟田　主一	長崎文化放送株式会社
副所長付専門副部長	「歩行・ウォーキングと健康」について	青柳　幸利	株式会社新潮社
	『げんきなカラダプロジェクト』を紹介する広告掲載 『げんきなカラダWALK2023』の価値や役割について	青柳　幸利	株式会社日本農業新聞
	「正しい歩き方」をテーマにした記事 「中之条研究」の成果の紹介	青柳　幸利	株式会社朝日新聞社
シニアフェロー	「死を学ぶ」、「死の迎え方」 エンドルフィン等の脳内麻薬やケトン体の増加について	遠藤　昌吾	株式会社NHKエンタープライズ

２　プレス発表

	プレス発表日	発表者	件名
1	令和５年４月 14 日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究員　阿部巧	シルバー人材センターに所属する高齢者の事故の実態と その予防のための取り組み
2	令和５年４月 17 日	老化脳神経科学研究チーム 研究部長　堀田晴美 研究員　渡辺信博	皮膚へのやさしい刺激が肩こり症状を緩和することを発見
3	令和５年４月 20 日	自立促進と精神保健研究チーム 研究員　本川佳子	肉類摂取が高齢期のフレイル予防の栄養ケアとして有効である可能性
4	令和５年４月 24 日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究員　野藤悠 研究副部長　村山洋史	～高齢者の就労的活動で支える～フレイル予防・介護予防を目的とした「通いの場」の 有効性を確認
5	令和５年５月８日	老化制御研究チーム 副所長　石神昭人 早稲田大学　人間科学学術院 講師　近藤 嘉高	高齢期にむけた健康的な食事のタンパク質比率は 25～35%
6	令和５年５月 16 日	老化制御研究チーム 研究員　藤田泰典 研究副部長　大澤郁朗	地域在住日本人高齢者の血液中 GDF15 濃度と総死亡リスクの関連を解明
7	令和５年５月 17 日	老化脳神経科学研究チーム 研究部長　堀田晴美 研究員　飯村佳織 研究員　渡辺信博 協力研究員　鈴木はる江 高齢者健康増進事業支援室 協力研究員　杉江正光 シニアフェロー　重本和宏	老化による筋力低下に、交感神経が関わることを発見
8	令和５年５月 18 日	社会参加と地域保健研究チーム 研究員　桜井良太	加齢性難聴を有する高齢者の約 7 割は病院受診を希望していない
9	令和５年６月 26 日	老化機構研究チーム 研究部長　井上聡 専門副部長　高山賢一	治療抵抗性がんに対する RNA を標的とした新たな治療薬候補分子の発見
10	令和５年７月 10 日	福祉と生活ケア研究チーム 研究部長　石崎達郎	自治体の健診で使われている「後期高齢者の質問票」はその 12 項目でフレイルの識別が可能
11	令和５年９月 11 日	老化制御研究チーム 副所長　石神昭人	老化細胞を特定するため、その指標となる老化関連遺伝子を同定
12	令和５年９月 26 日	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 板橋区 独立行政法人都市再生機構	東京都健康長寿医療センターと板橋区、ＵＲ都市機構による包括的連携協定を締結

13	令和5年10月18日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究員　桜井良太	―難聴の高齢者が転倒しやすいのはなぜか？―聴覚情報が制限されると円滑な障害物の回避行動が阻害されることが明らかに
14	令和5年10月19日	株式会社明治 桜美林大学 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター	日常的なチーズの摂取が認知機能の高さと関わることが特定の地域在住の日本人高齢者を対象とした疫学研究により判明」～7 月 18 日 国際科学雑誌 Nutrients に論文掲載～
15	令和5年10月24日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 協力研究員　谷口優 副所長　藤原佳典	ペット飼育と認知症発症リスク」犬の飼育を通じた運動習慣や社会との繋がりにより認知症の発症リスクが低下することが初めて明らかに
16	令和5年10月26日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 主任研究員　清野諭 副所長　藤原佳典	「フレイルであっても、働くことは身体機能を維持し要介護リスクを低減することが明らかに」高齢者のフレイル・就業状況と要介護認定発生との関連：3.6年の追跡研究
17	令和5年11月8日	老年病理学研究チーム 研究員　野中敬介	高度の低栄養状態の患者では副腎デヒドロエピアンドロステロン（DHEA）産生細胞の増殖が亢進する
18	令和5年11月10日	東京医科大学 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター	東京医科大学と東京都健康長寿医療センターが包括連携に関する協定を締結
19	令和5年11月30日	地方独立行政法人　東京都健康長寿医療センター 学校法人　香川栄養学園　女子栄養大学 日清オイリオグループ株式会社	◆フレイル予防・改善に向けて◆スマートフォンアプリ「バランス日記～１０食品群チェック～」を用いた研究の中間結果を発表
20	令和5年12月1日	老年病理学研究チーム 研究部長　石渡俊行	膵臓がんの広がりを人工知能(AI)により測定する方法を開発
21	令和5年12月13日	福祉と生活ケア研究チーム 研究部長　石崎達郎	中等度以上の認知症や日常生活動作が低下した高齢入院患者は長期療養施設へ退院しやすい
22	令和5年12月15日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究副部長　村山洋史	認知機能低下が死亡リスクをどう高めるかは孤立の種類次第：″独居″と″希薄なつながり″は正反対の作用を持つ
23	令和6年2月21日	福祉と生活ケア研究チーム 専門副部長　河合恒	コロナ禍 3 年間にわが国の高齢者は社会的交流を維持した
24	令和6年2月22日	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究員　飯塚 あい	『高齢者施設入居者を対象としたオンライン囲碁プログラムの 開発と評価』研究プロジェクトが開始
25	令和6年3月6日	京都大学大学院薬学研究科生体分子認識学分野 准教授　柿澤昌 老化脳神経科学研究チーム 研究部長　遠藤　昌吾	悪玉因子、活性酸素が記憶形成に必要であることを解明―抗酸化物質の過剰摂取に警鐘―

26	令和 6 年 3 月 19 日	WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター） 技官　ローゼンバーグ恵美 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究部長　小林江里香	高齢者のいる世帯は「過度な水準の保健医療支出」をより多く経験している －国際的な医療経済学誌で研究結果を発表－

3　老年学・老年医学公開講座等

令和 5 年度の老年学・老年医学公開講座等は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、前期 2 回をオンライン開催、後期 2 回を対面開催とした。令和 5 年度の老年学・老年医学公開講座のうち、オンライン開催の動画視聴回数は令和 6 年 3 月 31 日時点で合計約 14 万回、対面開催の参加人数は 560 名であった。YouTube チャンネル登録者数は令和 6 年 3 月 31 時点で 2 万 6 千人を達成した。

【老年学・老年医学公開講座】

回	テーマ・講演者	日程
165	『老いを目指し老いを見据える』 コーディネーター：副所長　石神昭人 ＜講演＞ 『みんなモヤモヤ…「終活」だけじゃ足りないの？』 自立促進と精神保健研究チーム　研究員　宮前史子 『高齢期のいわゆる「ごみ屋敷」支援の目的は片づけること、でいいの？』 福祉と生活ケア研究チーム　研究部長　井藤佳恵 『“介護”だけじゃない!?だから悩む家族介護』 福祉と生活ケア研究チーム　研究員　涌井智子	令和5年 7月 7日（金） 7月14日（金） 7月21日（金）
166	『人生100年時代、正しく知って、正しく対策！老化の仕組みと改善法』 コーディネーター：副所長　石神昭人 ＜講演＞ 『老化は克服できるのか？-細胞老化の視点から-』 老化制御研究チーム　研究副部長　杉本昌隆 『エクソソーム：大きな可能性を秘めた小さなメッセンジャー』 老化機構研究チーム　研究員　川上恭治郎 『老いは脚から、だったら今から脚を鍛えて健康寿命を延伸してみましょう』 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科　教授　町田修一	令和5年 9月15日（金） 9月22日（金） 9月29日（金）
167	『あなたの暮らしにちょい足しdeフレイル予防』 司会：副所長　藤原佳典 ＜講演＞ 『運動・身体活動のちょい足し：プラス・テンで得られる健康効果とは』 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム　研究員　清野諭 『栄養・口腔ケアのちょい足し：オーラルフレイル対策でいつまでもおいしく食べよう！』 自立促進と精神保健研究チーム　研究員　白部麻樹 『社会参加のちょい足し：人や社会のつながりづくりがフレイル予防への近道』 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム　研究副部長　村山洋史	令和5年 11月21日（火）
168	『新常識！？脳疾患の最新治療とリハビリテーション』 司会：副院長　原田和昌 ＜講演＞ 『脳卒中に対する脳神経外科治療とその進歩』 脳神経外科　医長（診療科長）　小原健太 『水頭症かもしれません～ふらつく・ぼんやりする・トイレに間に合わない～』 脳神経外科　専門部長　高梨成彦 『脳神経疾患のリハビリテーション』 リハビリテーション科専門部長　加藤貴行	令和6年 1月26日（金）

【科学技術週間参加行事】

行事 科学技術週間参加	講演 『最新イメージング技術で脳血管のはたらきを見る』 老化脳神経科学研究チーム　研究員　渡辺信博	令和５年 ４月 18 日（火）

４　友　の　会

「東京都健康長寿医療センター研究所友の会」は、老化、老年病、高齢者問題の最新成果をお知らせし、民間企業や個人との情報交換や交流、老年学に関する知識の共有および研究所の活動にご支援・ご賛同いただくことを目的とした会員制度。平成14年４月より開始。なお、令和２年４月より「東京都総合老人研究所友の会」から「東京都健康長寿医療センター研究所友の会」へ名称変更した。

１．活動内容
- ・研究所と会員との交流および会員相互の親睦
- ・研究所の主催する行事への招待
- ・講演会、セミナー等の開催
- ・会員のための情報の提供
- ・その他本会の目的を達成するために必要な事業

２．会員特典
1　会員相互の交流の場の提供
2　会員向け機関誌の提供
3　東京都健康長寿医療センター研究所発行「研究所NEWS」の提供
4　研究所が開催する講演会、セミナーに関する情報の提供
5　東京都健康長寿医療センター研究所発行の出版物の会員割引（２割引）

３．年会費
- ・個人会費：年会費　一口3,000円で一口以上
- ・法人会員（団体含む）：一口10,000円で二口以上

４．会員構成（令和6年3月31日現在）
個人会員：129名
法人会員：4社

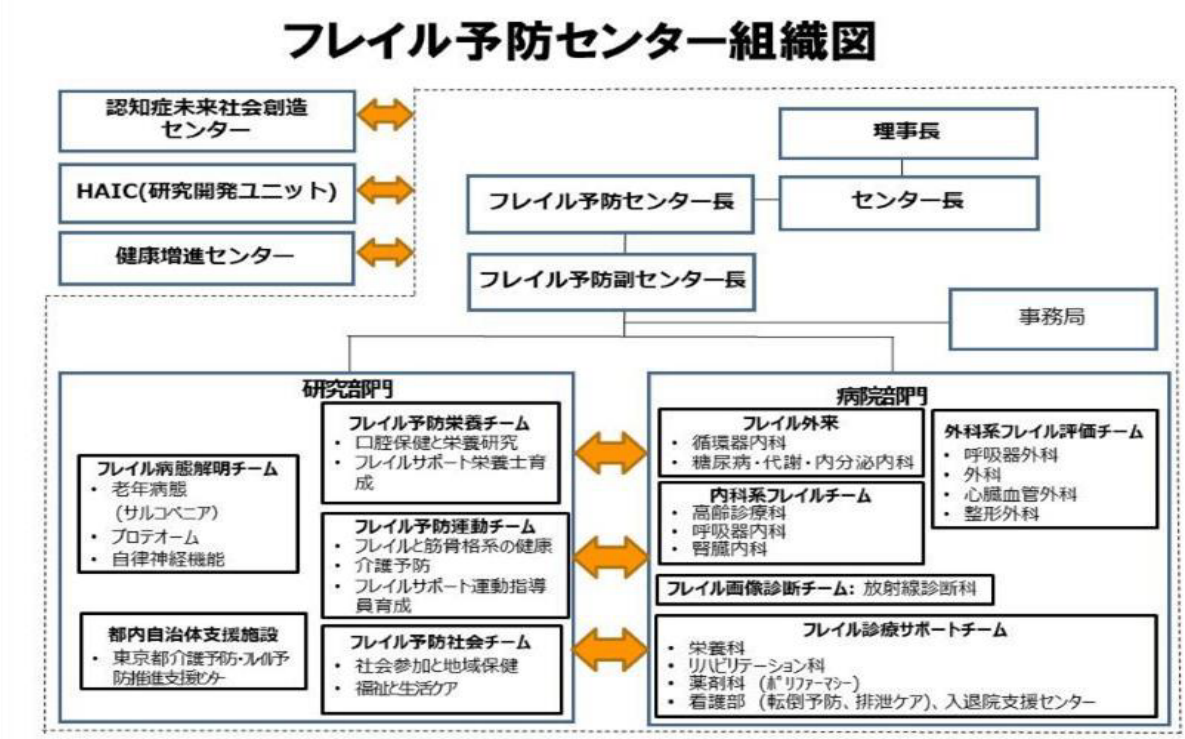
５．友の会交流会
令和6年3月6日（水）に実施
① 場所　東京都健康長寿医療センター
② 参加者　個人会員27名
③ 内容　講演『フレイル予防のための運動』
自立促進と精神保健研究チーム　研究副部長　笹井浩行　質疑応答含む

第四部　病院・研究所連携部門

フレイル予防センター

１．施設紹介

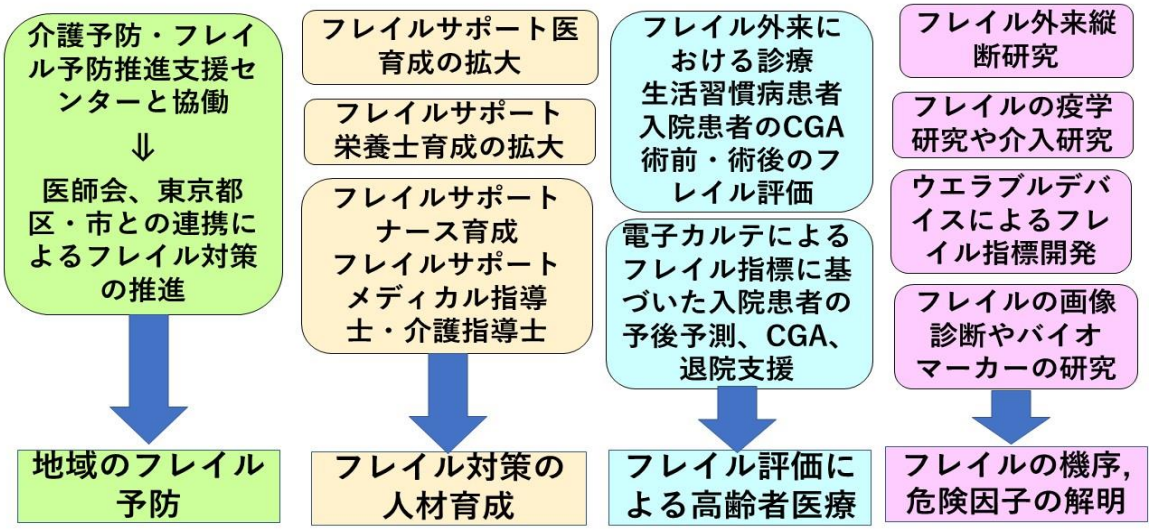
センター長：荒木厚
副センター長：石崎達郎
事務局：佐野健二、小俣恵巳、半澤絵梨子



組織：病院のフレイル外来、外科系フレイル評価チーム、画像診断や研究所のフレイル予防栄養チーム、フレイル予防社会チーム、フレイル予防運動チーム、フレイル病態解明チームなどからなる。

フレイル予防センターは、医療、介護、福祉が連携し、病院と地域で一体化したフレイル対策を行うことで、高齢者の健康寿命の延伸を図る目的で、令和２年４月に発足した。図１に示す 10 の取り組みにより、地域のフレイル予防、フレイル対策の人材育成、フレイル評価による高齢者医療、フレイルの機序や危険因子の解明を行っている。

図1 フレイル予防センターの10の取り組みと4つの目標



今年度も板橋区医師会、板橋区健康生きがい部、板橋区社会福祉協議会、東京都医師会、東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター、日本老年医学会、東京都栄養士会、女子栄養大学と連携し、下記の種々の活動を行った。

２．活動概要

① フレイルサポート医、フレイルサポート栄養士等の研修会開催

1) 板橋区医師会にて後期高齢者健診質問票に関する説明会（令和 5 年 7 月 13 日）を実施し、医師 29 名が「フレイルサポート医」の座学研修を修了した。
2) 板橋区在宅療養ネットワーク懇話会で「フレイルに関する多職種ワークショップ研修」を行い 83 名が参加した。
3) 長野県松本市にてフレイルサポート医研修（令和 5 年 12 月 10 日）を実施した。松本市医師会医師 18 名が新たに「フレイルサポート医」として認定された。また、医師以外に看護師、薬剤師、歯科衛生士、栄養士、作業療法士、理学療法士など 27 名が加わり、多職種カンファレンスを実施した。
4) 「フレイルサポート 栄養士研修会」（令和 5 年 7 月 21 日～8 月 5 日）を実施し、27 名が受講した。また、症例検討会（8 月 5 日）を実施し、19 名が「フレイルサポート栄養士」に認定された。
5) さらに専門的な栄養士の育成を全国に広げるために、アドバンスコースとしてテキストを作成し、「フレイルサポート専門栄養士研修会」（令和 6 年 1 月 13 日）をオンラインにて開催し、56 名の参加があった。
6) フレイルについて正しく理解し、多職種連携を進めながら、支援の場を拡げていけるように看護職のための「フレイルサポートナース研修会」（令和 6 年 2 月 17 日）を開催し,看護師 9 名の参加があった。

② フレイルサポート医研修テキストの作成と出版

フレイルサポート専門栄養士研修会のテキストを新たに作成し、出版した。

③ 研究所と病院の連携や院内でのフレイル対策

1) フレイル外来：医師５名、臨床心理士 2 名の体制で週 5 日の外来で生活習慣病の外来患者や術前後の患者、および入院患者のフレイル評価、認知機能評価を含めた高齢者総合機能評価を行い、1 年間で 923 名の患者が受診した。高齢者診療科外来からの紹介患者も増加している。
2) フレイル外来におけるフレイルに関する研究論文を国際誌に 11 編発表した。

④ 地域におけるフレイル予防に携わる多職種の研修

東京都健康福祉財団：健康づくり事業推進指導者育成研修.介護予防主任運動員、東京都受託事業：高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業に関する研修を行った。

４．業績

＜雑誌論文（原著論文、英文総説）＞

1. Oba K, Ishikawa J, Tamura Y, Fujita Y, Ito M, Iizuka A, Fujiwara Y, Kodera R, Toyoshima K, Chiba Y, Tanaka M, Araki A. Serum Growth Differentiation Factor 15 Levels Predict the Incidence of Frailty Among Patients with Cardiometabolic Diseases. **Gerontology** 2024 70(5):517-525. Epub 2024 Mar 15. (IF=3.1)
2. Shimazaki T, Kishimoto K, Ishikawa J, Iwakiri R, Araki A, Imai S. Association between cognitive impairment severity and polypharmacy in older patients with atrial

fibrillation: a retrospective study using inpatient data from a specialised geriatric hospital. **Geriatrics (Basel)**. 2024 Jan 24;9(1):15. (IF=2.1)

3. Katsumata Y, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Iizuka A, Tachibana A, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Ishikawa J, Araki A. Changes in physical activity before, during, and after the state of emergency due to COVID-19 pandemic and its association with incidence of frailty in older outpatients with cardiometabolic disease. **Aging Medicine and Healthcare** 2024;15(2):84-87. (IF=1.0)
4. Sato M, Tamura Y, Murao Y, Yorikawa F, Katsumata Y, Watanabe S, Zen S, Kodera R, Oba K, Toyoshima K, Chiba Y, Araki A. The cross-sectional area of erector spinae muscle and the liver-to-spleen ratio are associated with frailty in older patients with diabetes: A cross-sectional study. **BMC Geriatr.** 2023 Nov 22;23(1):765. (IF=4.1)
5. Kodera R, Fujihara K, Koyama T, Shiozaki H, Mutsuma Y, Yagyuda N, Hatta M, Tsuruoka K, Takeda Y, Araki A, Sone H. Impact of a history of cardiovascular disease and physical activity habits on the incidence of functional disability. **Sci Rep** 2023 Nov 27;13(1):20793. (IF=3.8)
6. Iwakiri R, Hamaya H, Nakayama T, Kataoka A, Murano Y, Okawa T, Araki A. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic diseases and geriatric syndromes, predicts the risk of difficulty in discharge home in older patients admitted to acute care hospital. **Geriatr Gerontol Int** 2024 Mar;24 Suppl 1:300-305. (IF : 3.4)
7. Sasaki T, Ueda T, Negishi Y, Toyoshima K, Yoshioka M, Ohta H, Araki A, Toba K. Using the Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON) for early detection of frailty. **Geriatr Gerontol Int** 2023; Mar;24 Suppl 1:396-397. (IF=3.4)
8. Katsumata Y, Toyoshima K, Tamura Y, Murao Y, Sato M, Watanabe S, Kodera R, Oba K, Ishikawa J, Chiba Y, Awata S, Araki A. Categorization using the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) based on cognitive function and activities of daily living predicts frailty, disability, and mortality in older adults. **Geriatr Gerontol Int.** 2024;Mar;24 Suppl 1:150-155. (IF=3.4)
9. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Relationship between blood pressure and cognitive impairment in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. **Geriatr Gerontol Int.** 2024 Mar;24 Suppl 1:110-117. (IF=3.4)
10. Sato M,Toyoshima K, Tamura Y, Chiba Y, Araki A. Spontaneous pneumoperitoneum and diabetic ketoacidosis in fulminant type 1 diabetes: a case report. **Oxf Med Case Reports.** 2023 Aug 20;2023(8):omad079. (IF=0.4)
11. Murao Y, Ishikawa J, Tamura Y, Kobayashi F, Iizuka A, Toba A, Harada K, Araki A. Association between physical performance during sit-to-stand motion and frailty in older adults with cardiometabolic diseases: a cross-sectional, longitudinal study. **BMC Geriatr.** 2023 May 30;23(1):337. (IF=4.1)
12. Ishikawa J, Toba A, Tamura Y, Araki A, Harada K. Changes in blood pressure associated with frailty and sarcopenia in elderly outpatients with cardiometabolic diseases. **Geriatr Gerontol Int. 2023**;23(7):506-516. (IF=3.4)
13. Moyama S, Yamada Y, Makabe N, Fujita H, Araki A, Suzuki A, Seino Y, Shide K, Kimura K, Murotani K, Honda H, Kobayashi M, Fujita S, Yasuda K, Kuroe A, Tsukiyama K, Seino Y, Yabe D. Efficacy and Safety of 6-Month High Dietary Protein Intake in Hospitalized Adults Aged 75 or Older at Nutritional Risk: An Exploratory, Randomized, Controlled Study. **Nutrients** 2023; Apr 22;15(9):2024. (IF=4.8)
14. Tamura Y, Sato M, Araki A. Case of an 89-year-old patient with Type 1 diabetes whose indices of continuous glucose monitoring were significantly improved using

an insulin pump with hybrid closed-loop mode. **Geriatr Gerontol Int 2023**; **23**; 313-314. (IF=3.4)

15. Yorikawa F, Ishikawa J, Tamura Y, Murao Y, Toba A, Harada K, Araki A. Determinants of depressive symptoms in older outpatients with cardiometabolic diseases in a Japanese frailty clinic: importance of bidirectional association between depression and frailty. **Plos One 2023**; 2023;18: e0281465. (IF=2.9)
16. Joji Ishikawa, Kazumasa Harada. Heart and Brain Failure. The Vicious Cycle of the Heart-Brain Interaction. **JACC: Asia** 2023; 3: 120-121, Editorial comment. (IF=1.8)
17. Yuko Ago Shiraishi, Yukiko Ishikawa, Joji Ishikawa, Masami Matsumura, Shizukiyo Ishikawa. Age and sex differences in the risk of cardiovascular diseases by chronic kidney disease in a general Japanese population. **Heart Vessels**. 2023; 38:1164-1171 (IF=1.8)
18. Toba A, Ishikawa J. Current topics of frailty in association with hypertension and other medical conditions. **Hypertens Res**. 2023; 46: 1188-1194. (IF=5.5)
19. Aoyama R, Takeda K, Ishikawa J, Harada K. Short-term effects of transcatheter aortic valve replacement on blood pressure and cardiac function in elderly patients with severe aortic stenosis. **Blood Press Monit**. 2023; 28: 103-108. (IF=1.4)
20. Shirobe M, Edahiro A, Motokawa K, Morishita S, Ohara Y, Motohashi Y, Iwasaki M, Watanabe Y, Hirano H. Association between Dementia Severity and Oral Hygiene Management Issues in Older Adults with Alzheimer's Disease: A Cross-Sectional Study. **International Journal of Environmental Research and Public Health**. 2023; 20(5):3841. (IF: 4.6)
21. Nagatani M, Tanaka T, Son BK, Kawamura J, Tagomori J, Hirano H, Shirobe M, Iijima K. Oral frailty as a risk factor for mild cognitive impairment in community-dwelling older adults: Kashiwa study. **Exp Gerontol**. 2023 Feb;172:112075. (IF: 4.3)
22. Nishimoto M, Tanaka T, Hirano H, Watanabe Y, Ohara Y, Shirobe M, Iijima K. Severe Periodontitis Increases the Risk of Oral Frailty: A Six-Year Follow-Up Study from Kashiwa Cohort Study. **Geriatrics (Basel)**. 2023 Feb 13;8(1):25. (IF: 2.0)
23. Takeda M, Watanabe Y, Taira K, Miura K, Ohara Y, Iwasaki M, Ito K, Nakajima J, Iwasa Y, Itoda M, Nishi Y, Watanabe Y, Kishima M, Hirano H, Shirobe M, Minakuchi S, Yoshida M, Yamazaki Y. Association between Death or Hospitalization and Observable Variables of Eating and Swallowing Function among Elderly Residents in Long-Term Care Facilities: A Multicenter Prospective Cohort Study. **Healthcare** 2023, 11, 1827. (IF : 3.2)
24. Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Shirobe M, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K. Oral frailty five-item checklist to predict adverse health outcomes in community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. **Geriatr Gerontol Int**. 2023 Sep;23(9):651-659. doi: 10.1111/ggi.14634. (IF : 3.4)
25. Tsuyoshi Okamura , Tsutomu Taga , Hiroki Inagaki, Fumiko Miyamae , Chiaki Ura , Mika Sugiyama , Ayako Edahiro , Maki Shirobe , Keiko Motokawa , Narumi Kojima , Yosuke Osuka , Masanori Iwasaki , Hiroyuki Sasai , Hirohiko Hirano , Shuichi Awata .Barrier to sharing a dementia diagnosis with neighbors in Tokyo. **Geriatr Gerontol Int.** 2023 Oct;23(10):761-763. doi: 10.1111/ggi.14662. (IF : 3.4)
26. Karl G H Parisius, Merel C Verhoeff , Frank Lobbezoo , Limor Avivi-Arber , Joke Duyck , Hirohiko Hirano , Katsuya Iijima , Barbara Janssens , Anastassia Kossioni , Chia-Shu Lin , Gerald McKenna , Frauke Müller , Martin Schimmel , Anita Visser , Yutaka Watanabe , Robbert J J Gobbens .Towards an operational definition of oral frailty: A e-Delphi study. **Arch Gerontol Geriatr**. 2023 Sep 6:117:105181. (IF : 1.2)

27. Takeshi Kera , Hisashi Kawai , Manami Ejiri , Kumiko Ito , Hirohiko Hirano , Yoshinori Fujiwara , Kazushige Ihara , Shuichi Obuchi .Respiratory sarcopenia is a predictor of all-cause mortality in community-dwelling older adults-The Otassha Study. **J Cachexia Sarcopenia Muscle.** 2023 Aug;14(4):1894-1899. doi: 10.1002/jcsm.13266. (IF:8.9)
28. Sachiko Yamazaki , Chiaki Ura , Hiroki Inagaki , Mika Sugiyama , Fumiko Miyamae , Ayako Edahiro , Kae Ito , Masanori Iwasaki , Hiroyuki Sasai , Tsuyoshi Okamura , Hirohiko Hirano , Shuichi Awata.Social isolation and well-being among families of middle-aged and older hikikomori people. **Psychogeriatrics.** 2023 Nov 6.doi: 10.1111/psyg.13042. (IF:1.67)
29. Hisashi Kawai, Manami Ejiri , Kumiko Ito , Yoshinori Fujiwara , Kazushige Ihara , Hirohiko Hirano , Hiroyuki Sasai , Hunkyung Kim, Shuichi Obuchi.Social interaction trajectories and all-cause mortality in older adults: the Otassha study. **Front Public Health.** 2023 Aug 22:11:1248462.doi: 10.3389/fpubh.2023.1248462. (IF:5.2)
30. Takeshi Kera , Yosuke Osuka , Hisashi Kawai , Manami Ejiri , Kumiko Ito , Hirohiko Hirano , Yoshinori Fujiwara , Kazushige Ihara , Shuichi Obuchi .Development and validation of a rapid sarcopenia screening questionnaire: The Otassha study. **Geriatr Gerontol Int.** 2023 Nov 14. doi: 10.1111/ggi.14730. (IF : 3.4)
31. Hisashi Kawai , Manami Ejiri , Keigo Imamura , Kumiko Ito , Yoshinori Fujiwara , Kazushige Ihara , Hirohiko Hirano , Shuichi Obuchi.Impact of combinations of sub-scale declines in higher-level functional capacity on 8-year all-cause mortality among communty-dwelling older Japanese adults. **Arch Gerontol Geriatr.** 2023 Nov:114:105096. doi: 10.1016/j.archger.2023.105096. (IF:1.2)
32. Masaharu Murakami , Hirohiko Hirano , Masanori Iwasaki , Maki Shirobe , Ayako Edahiro , Shuichi Obuchi , Hisashi Kawai , Yoshinori Fujiwara , Kazushige Ihara , Keiko Motokawa .Development of a multiple masticatory function model based on the evaluation of sarcopenia: A cross-sectional survey of the Otassha study. **Arch Oral Biol.** 2023 Nov:155:105803.doi: 10.1016/j.archoralbio.2023.105803. (IF:2.6)
33. Narumi Kojima , Miji Kim , Kyoko Saito , Yuko Yoshida , Hirohiko Hirano , Shuichi Obuchi , Hiroyuki Shimada , Takao Suzuki , Hajime Iwasa , Hunkyung Kim . Effects of Daily Consumption of Soy Products on Basic/Instrumental Activities of Daily Living in Community-Dwelling Japanese Women Aged 75 Years and Older: A 4-Year Cohort Study. **Womens Health Rep (New Rochelle).** 2023 May 15;4(1):232-240. doi: 10.1089/whr.2022.0076. (IF:1.3)
34. Hiroshi Murayama, Mika Sugiyama , Hiroki Inagaki, Chiaki Ura , Fumiko Miyamae , Ayako Edahiro , Keiko Motokawa , Tsuyoshi Okamura, Shuichi Awata. The Relationship Between Cognitive Decline and All-Cause Mortality Is Modified by Living Alone and a Small Social Network: A Paradox of Isolation. **J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci.** 2023 Nov 14;78(11):1927-1934. doi: 10.1093/geronb/gbad134. (IF:6.2)
35. Iwasaki M, Motokawa K, Shirobe M, Hayakawa M, Ohara Y, Motohashi Y, Edahiro A, Kawai H, Fujiwara Y, Sakata Y, Ihara K, Watanabe Y, Obuchi S, Hirano H. Serum levels of vitamin D and periodontal inflammation in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. **Journal of Clinical Periodontology**. 50(9), 1167-1175, 2023 (IF: 7.5)
36. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Hayakawa M, Miura K, Kalantar L, Edahiro A, Kawai H, Fujiwara Y, Ihara K, Watanabe Y, Obuchi S, Hirano H. Validation of self-reported articulatory oral motor skill against objectively measured repetitive articulatory rate in community-dwelling older Japanese adults: The Otassha Study. **Geriatr Gerontol Int.** 23(10), 729-735, 2023 (IF: 3.4)

37. Hatanaka S, Osuka S, Kojima N, Motokawa K, Hayakawa M, Mikami Y, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Relationship between phase angle and lower-extremity function in older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. **Nutrition.** 024 Mar;119:112289. (IF: 4.4)
38. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. The Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old is non-inferior to the Kihon Checklist in screening frailty among independent older adults aged 75 years and older: The Itabashi Longitudinal Study on Aging. **Geriatr Gerontol Int** 2024 Mar;24 Suppl 1:176-181. (IF: 3.4)
39. Ura C, Inagaki H, Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro A, Ito K, Iwasaki M, Sasai H, Okamura T, Hirano H, Awata S. A neighbour to consult with is important in dementia-friendly communities: Associated factors of self-efficacy allowing older adults to continue living alone in community settings. **Psychogeriatrics**. In press, 2023 (IF: 2)
40. Kawamura J, Tanaka T, Kanno S, Osawa K, Okabayashi K, Hirano H, Shirobe M, Nagatani M, Son BK, Lyu W, Iijima K. Relationship between a gum-chewing routine and oral, physical, and cognitive functions of community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. **Geriatr Gerontol Int.** 2024 Jan;24(1):68-74. (IF: 3.387)
41. Daimaru K, Osuka Y, Kojima N, Mizukami K, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Associations of polypharmacy with frailty severity and each frailty phenotype in community-dwelling older adults: Itabashi Longitudinal Study on Aging. **Geriatr Gerontol Int.** 2024 Mar;24 Suppl 1:196-201. (IF: 3.387)
42. Takahashi J, Kawai H, Ejiri M, Fujiwara Y, Hirano H, Sasai H, Obuchi S. Predicting the incidence of mild cognitive impairment with a computer-based cognitive assessment tool in community-dwelling older adults: The Otassha study. **PLoS One.** 2024 Jan 25;19(1):e0297433. (IF: 3.7)
43. Kawai H, Ejiri M, Imamura K, Ito K, Fujiwara Y, Hirano H, Ihara K, Obuchi S. Three-year trajectories of social networks, face-to-face interactions, and non-face-to-face interactions among community-dwelling older adults in Japan during the COVID-19 pandemic: Otassha study. **Maturitas**. 2024 Feb 12;183:107943. (IF: 4.9)
44. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-Item Checklist. Geriatr Gerontol Int. 2024 Feb 23. (IF: 3.387)
45. Deguchi N, Osuka Y, Kojima N, Motokawa K, Iwasaki M, Inagaki H, Miyamae F, Okamura T, Hirano H, Awata S, Sasai H. Sex-specific factors associated with acceptance of smartwatches among urban older adults: the Itabashi longitudinal study on aging. **Front Public Health.** 2024 Feb 23;12:1261275. (IF: 5.2)
46. Hashimoto K, Takeuchi T, Ihara K, Obuchi S, Kawai H, Hirano H, Fujiwara Y, Hunkyung K, Watanabe Y, Hashizume M. Association Between Ego-Resilience and Social Isolation Among Urban Older People. **Gerontol Geriatr Med.** 2024 Mar 13;10:23337214241238069. (IF: 2.7)
47. 瀧川美和, 岩切理歌, 片原憂斗, 小原朋也, 島﨑良知, 瀧川正紀, 片岡愛, 大川庭熙, 石川譲治, 荒木 厚：高齢者急性期病院におけるポリファーマシーカンファレンスに基づいた薬剤師による減薬提案の実態および効果に関する調査. **日本老年薬学会誌** 7(1):1-7, 2024. (IF=なし)
48. 本川 佳子, 三上 友里江, 早川 美知, 白部 麻樹, 柄澤 紀, 長谷川 隆則, 河合 恒, 大渕

修一， 平野 浩彦.地域在住高齢者の肉類摂取量とフレイル関連因子に関する横断的検討.**日本サルコペニア・フレイル学会雑誌**(2433-1805)7 巻 1 号 Page112-115(2023.06).（IF=なし）

49. 本川佳子、須永将広、宮崎純一、徳丸季聡、石岡拓得、山邊志都子、宮島功、伴野広幸、阿部克幸、畠山桂吾、田口佳和、金井一人、石川史明、林衛、藤原太樹、鈴木克麻、原純也. 一般病院における管理栄養士の病棟配置体制が入院時の体重減少抑制に及ぼす影響. **日本臨床栄養学会雑誌** 第 44 巻 第 2 号 2022. 85-89(IF=なし)
50. 芦田 かなえ，藤谷 順子，本川 佳子，坪川 操，西村 一弘，藤原 恵子・高アミロース米粉を利用した粥ゼリーの物性調査.**日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌**(1343-8441)27 巻 1 号 Page44-52.2023.04.（IF=なし）
51. 中村 育子，前田 佳予子，田中 弥生，本川 佳子，水島 美保，前田 玲.終末期の在宅療養者に対する在宅訪問栄養食事指導の介入効果の検討. **日本在宅医療連合学会誌**(2435-4007)4 巻 3 号 Page19-(IF=なし)
52. 森茂雄，前田玲，中村育子，前田佳予子，田中弥生，本川佳子：人生の最終段階を含めた高齢者に対する食支援の在り方について一多職種に対する質問票による課題検討一. **日本在宅栄養管理学会誌**. In press（IF=なし）

＜雑誌論文（総説,書籍＞（フレイル関連のみ）

1. 荒木 厚：高齢者のサルコペニア肥満. **アニムス** 117:35-41，2024.
2. 荒木 厚、田村嘉章、鳥羽研二：糖尿病とフレイル・サルコペニア. **DIABETES JOURNAL** 50(3):101-108，2023.
3. 荒木 厚：フレイル対策におけるプロフェッショナル育成. **Prog. Med.** 43:615-619.
4. 荒木 厚：高齢者のサルコペニア肥満. **アニムス** 117:35-41，2024.
5. 荒木 厚、田村嘉章、鳥羽研二：糖尿病とフレイル・サルコペニア. **DIABETES JOURNAL** 50(3):101-108，2023.
6. 石川譲治：「わたしはこうする！高齢者の循環器診療」フレイル・サルコペニアは治療対象か？日本医事新報社 2023 年
7. 荒木 厚（監修）、荒木厚、本田佳子、府川則子、本川佳子. **フレイルサポート栄養士テキスト**. 東京，1-148，2013.
8. 荒木 厚：慢性腎臓病：SGLT2 阻害薬への期待と高齢者への処方の落とし穴. **高齢者薬物療法の勘所：マルモ・リハ薬剤・サルコペニアを一刀両断**. 松本彩加、吉村芳弘（編集）. 東京、中外医学社、41-52，2023.

＜学会発表＞（フレイル関連のみ）

1. 勝俣 悠，豊島堅志，村尾 雄治，寄川 史乃，北山 さおり，渡部創，小寺玲美，大庭和人，石川譲治，田村嘉章，千葉優子，栗田主一，荒木 厚：DASC-8 による高齢者糖尿病のカテゴリー分類において，フレイル発症リスクはカテゴリーII から増加する. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島，5 月 12 日，2023.
2. 小寺玲美，田村嘉章，村尾 雄治，寄川 史乃，勝俣 悠，北山 さおり，渡部創，大庭和人，豊島堅志，石川譲治，千葉優子，荒木 厚：高齢糖尿病患者における重心動揺計の指標とフレイルや身体能力との関連について. **第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会.** 鹿児島，5 月 13 日，2023.
3. Atsushi Araki, Keiko Motokawa, Misato Hayakawa, Kenji Toyoshima, Hirohiko Hirano, Noriko Fukawa, Keiko Honda, Tomoki Sasaki, Yuka Narita, Hiizuru Ota, Takuya Ueda, Yoshinori Fujiwara, Tatsuro Ishizaki, Yoshiaki Tamura, Kenji Toba. Development of the program of certificated Frailty-Support Physicians, Nutritionists, and Nurses for the support of community-dwelling older people based on the “Frailty Health Check-up” in Japan. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 202**3. Yokohama, June 12, 2023.

4. Motoya Sato, Yoshiaki Tamura, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, Yu Katsumata, So Watanabe, Shugo Zen, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Atsushi Araki. Erector spinae muscle area is associated with frailty and accumulation of visceral fat is positively correlated with arteriosclerosis in old-old inpatients with diabetes: A cross-sectional study. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 12, 2023.
5. Yuu Katsumata, Kenji Toyoshima, Yuji Murao, Fumino Yorikawa, So Watanabe, Remi Kodera, Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yuko Chiba, Shuichi Awata, Atsushi Araki. Categorization according to the Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System 8-items (DASC-8) predicts the risk of frailty, disability, and death. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 13, 2023.
6. Kazuhito Oba, Joji Ishikawa, Yoshiaki Tamura, Yasunori Fujita, Masafumi Ito, Remi Kodera, Kenji Toyoshima, Yuko Chiba, Masashi Tanaka, Atsushi Araki. High serum growth differentiation factor 15 (GDF15) levels were associated with incidence of frailty in patients with cardiometabolic disease. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 13, 2023.
7. Rika Iwakiri, Tomohiro Nakayama, Hironobu Hamaya, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Teiki Okawa, Atsushi Araki. Multimorbidity, consisting of a combination of chronic disease and geriatric syndromes, predicts risk of failure to discharge home in older patients. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 12, 2023.
8. Hironobu Hamaya, Tomohiro Nakayama, Ai Kataoka, Takashi Kobayashi, Yoko Murano, Atsushi Araki, Rika Iwagiri. Multimorbidity scores consisting of chronic diseases and geriatric syndromes, were associated with lower incidence of improvement of Barthel Index after admission. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 14, 2023.
9. Ayumi Toba, Joji Ishikawa, Ruri Shimizu, Kana Takani, Aya Yamamoto, Teppei Maeda, Matsuyo Kawano, Yoshiaki Tamura, Atsushi Araki, Kazumasa Harada. Left atrial function assessed by strain imaging is associated with appendicular skeletal muscle mass index in patients with cardiometabolic disease. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 14, 2023.
10. Tomoki Sasaki, Yui Negishi, Akane Machida, Atsushi Araki, Kenji Toyoshima, Mami Yoshioka, Hiizuru Ohta, Yoshie Araki, Takuya Ueda, Kenji Toba. Prefrailty scale for Appearance Observation by Nurses (PAON). **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023.** Yokohama, June 12, 2023.
11. Shunei Kyo, Atsushi Araki. (Chair) (Symposium Frailty) Recent Advance of Wearable Watch for Frailty. **IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023**. Yokohama, June 12, 2023.
12. 荒木 厚、千葉優子、濱谷広頌、岩切理歌:(シンポジウム):multimorbidity 実態調査から見えてきた課題と今後の展望. 高齢者急性期病院における multimorbidity に基づいた frailty index による入院患者の予後予測. **第 65 回日本老年医学会学術集会.** 横浜, 6 月 18 日, 2023.
13. 大庭和人, 田村嘉章, 石川譲治, 藤田泰典, 伊藤雅史, 田中雅嗣, 小寺玲美, 豊島堅志, 千葉優子, 荒木 厚: 高齢者の血清 GDF15 高値はフレイル発症の独立した危険因子である. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
14. 勝俣悠, 豊島堅志, 渡部創, 小寺玲美, 大庭和人, 石川譲治, 田村嘉章, 千葉優子, 粟田主一, 荒木 厚: DASC-8 による高齢者の認知機能・ADL のカテゴリー分類は, フレイル発症のリスクを反映する. **第 65 回日本老年医学会学術集会**. 横浜, 6 月 18 日, 2023.
15. 岩切理歌, 小林孝史, 中山智博, 片岡愛, 村野陽子, 大川庭熙, 荒木 厚. 高齢入院患者に

おける multimorbidity は退院時の転院または死亡のリスクを予測する．**第 65 回日本老年医学会学術集会**．横浜，6 月 20 日，2023.

16. 濱谷広頌，片岡愛，中山智博，小林孝史，村野陽子，大川庭熙，荒木 厚，岩切理歌：高齢者入院における Multimorbidity と入院後の Barthel index の変化との関連についての検討．**第 65 回日本老年医学会学術集会**．横浜，6 月 20 日，2023.
17. 江尻愛美，河合恒，荒木 厚，藤原佳典，平野浩彦，小山照幸，杉江正光，小島基永，鈴木隆雄，大渕修一：身体的にフレイルな高齢者におけるストレス対処と抑うつの関連：横断研究．**第 65 回日本老年医学会学術集会**．横浜，6 月 19 日，2023.
18. 早川美知，本川佳子，横山友里，大須賀洋祐，飯塚あい，豊島堅志，田村嘉章，石川譲治，藤原佳典，荒木　厚：フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討．**第 65 回日本老年医学会学術集会**．横浜，6 月 20 日，2023.
19. 荒木 厚：（特別講演）フレイルと multimorbidity を考慮した高齢者疾患の治療．**第 25 回日本高齢消化器病学会総会．**東京，7 月 28 日，2023.
20. 荒木 厚:フレイル・サルコペニア予防のための高齢者糖尿病の食事・栄養療法と薬物療法.（シンポジウム）糖尿病とサルコペニア・フレイル～病態の理解と予防のための栄養学的アプローチ．**第 11 回日本くすりと糖尿病学会学術集会**．神戸，9 月 3 日，2023.
21. Atsushi Araki: Preditors of frailty in patients with cardiometabolic diseases-Role of GDF-15, lower limb function, and cerebral white matter integrity. **7th NCGG-ICAH-TMIG International Joint Symposium, 2023 IAGG-AOR Satellite.** Tokyo, Oct 17, 2023.
22. 村尾雄治，　石川譲治，田村嘉章，飯塚あい，鳥羽梓弓，原田和昌，荒木 厚．心血管代謝疾患を有する高齢者における位相角とフレイルの関連ー縦断調査による検討．**第 10 回日本サルコペニア・フレイル学会大会**．　東京，11 月 4 日，2023.
23. Kazuhito Miura, Masanori Iwasaki, Ayako Edahiro, Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Misato Hayakawa, Yurie Mikami, Lena Kalantar, Yoshiko Motohashi, Kentaro Igarashi, Yuki Ohara, Yutaka Watanabe, Hirohiko Hirano. Association between masseter muscle mass and regional skeletal muscle mass in older adults requiring long-term care.2023 IAGG-AOR. 2023.6.12-14. JAPAN.
24. Keiko Motokawa, Maki Shirobe, Masanori Iwasaki, Hirohiko Hirano. Effect of home-visit-based nutritional support by registered dietitian on the dietary habits of home-care residents. PENSA2023. 2023.10.20-22. Taiwan.
25. Motokawa Keiko, Iwasaki Masanori, Shirobe Maki, Sakata Yasuyuki, Kato Mana, Obuchi Shuichi, Kawai Hisashi, Hirano Hirohiko. Association of Serum 25(OH)D Levels with Oral Function in Community-Dwelling Older Adults. ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
26. Hirohiko Hirano, Iwasaki Masanori, Ayako Edahiro, Yasuhiro Kugimiya, Maki Shirobe. A study on diagnostic algorithm for Oral Hypofunction based on the JSG diagnostic criteria (JSG: Japanese Society of Gerontology). ADS2023. 2023.11.9-11. Korea.
27. 本川佳子、三上友里江、早川美知、坂田穏行、加藤麻奈、白部麻樹、藤原佳典、河合恒、大渕修一、平野浩彦．地域在住高齢者における食欲不振と栄養素等摂取量の関わり．第 65 回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.横浜.
28. 早川美知，本川佳子，横山友里，大須賀洋祐，飯塚あい，豊島堅志，田村嘉章，石川譲治，藤原佳典，荒木厚.フレイル外来患者に対する運動・栄養・社会参加の複合介入プログラムについての予備的検討.日本老年医学会第 65 回学術集会．2023.6.16-18.横浜.
29. カランタル玲奈、本川佳子、早川美知、三上友里江、白部麻樹、枝広あや子、岡村毅、笹井浩行、平野浩彦、粟田主一．地域在住高齢者における社会的孤立と栄養状態の関連の横断的検証：板橋健康長寿縦断研究．第 65 回日本老年医学会学術集会．2023.6.16-18.横浜.
30. 中川紗百合，新井絵理，平良賢周，渡邊裕，三浦和仁，白部麻樹、 本川佳子，小原由紀，岩崎正則，平野浩彦，小野高裕，足立融，渡部隆夫，山崎裕.後期高齢者におけるオーラルフレイルと栄養関連指標に関する横断研究.日本老年歯科医学会第 34 回学術大会.2023.6.17-18.横浜

31. 解良武士，大須賀洋祐，河合恒，江尻愛美，伊藤久美子，平野浩彦，藤原佳典，井原一成，大渕修一新しいサルコペニア質問紙の開発お達者健診研究. 日本老年医学会第 65 回学術大会. 2023. 6. 17-18. 横浜
32. 前田玲，森茂雄，本川佳子，中村育子，前田佳予子，田中弥生，高崎美幸，松岡和子. 人生の最終段階を含めた虚弱高齢者に対する食支援の在り方について多職種に対する質問票による課題検討. 日本在宅栄養管理学会第 10 回学術大会. 2023. 7. 15-16. 東京
33. 白部麻樹、渡邊裕、平野浩彦．今日から始めるオーラルフレイル予防．第 10 回日本予防理学療法学会学術大会．2023. 10. 28-29. 函館.
34. 五味達之祐、本川佳子、白部麻樹、岩﨑正則、枝広あや子、大渕修一、藤原佳典、荒井秀典、粟田主一、平野浩彦. 会食を行う通いの場の参加者減少に関連する要因：ソーシャルマーケティングの視点. 第 82 回日本公衆衛生学会総会. 2023. 10. 31-11. 2. つくば
35. 村上正治, 釘宮嘉浩, 中村純也, 岩崎正則, 本川佳子, 枝広あや子, 白部麻樹、河合恒, 大渕修一, 藤原佳典, 井原一成, 平野浩彦．咀嚼機能の客観評価と主観評価の乖離と将来のサルコペニア発症リスクとの関連性について-お達者研究-. 第 10 回日本サルコペニア・フレイル学会. 2023. 11. 4-5. 御茶ノ水.
36. 釘宮嘉浩，岩崎正則，白部麻樹、本川佳子，枝広あや子，渡邊裕，五十嵐憲太郎，阿部巧，横山友里，北村明彦，村山洋史，平野浩彦．地域在住高齢者における色変わりガムの測定値の分布．日本口腔検査学会第 16 回学術大会．2023. 11. 4-5. 水道橋.
37. 江口佳奈、本川佳子、岩崎正則、白部麻樹、五味達之祐、カランタル玲奈、早川美知、枝広あや子、稲垣宏樹、笹井浩行、粟田主一、平野浩彦．地域在住高齢者における日常の食生活の咀嚼行動と年齢の関連の予備的研究．第 27 回日本病態栄養学会年次学術集会．2024. 1. 26-28. 京都.

＜講師等院外活動(講演、メディアなど)＞（フレイル関連のみ）

1. 荒木 厚：医療的視点から見たフレイル予防．**区市町村介護予防事業者向け研修（総論編）**．Web 開催，東京，6 月 20 日，2023.
2. 荒木 厚：後期高齢者健診の質問票の見方とフレイル予防への活用法．**板橋区医師会講演会**．Web 開催　　，東京，7 月 12 日，2023.
3. 荒木 厚：(コメント）**フレイルサポート栄養士研修会ワークショップ**．東京，8 月 5 日，2023.
4. 荒木 厚：健康長寿めざすフレイル予防のすべて．**渋谷フレイル予防フェア**．東京，8 月 24 日，2023.
5. 荒木 厚：医療から見たフレイル．**宮城県市民公開講座：はればれ健康フェスタ．**Web 配信，9 月 10 日，2023.
6. 荒木 厚：医療職ができるフレイル予防のすべて．**横浜市医療専門職向け　フレイル予防普及啓発講演会．**Web 配信，10 月 3 日，2023.
7. 荒木 厚：健康寿命を延ばすフレイル予防と対策～いつまでもいきいき暮らすために～．**令和 5 年度健康づくり事業推進指導者育成研修**．Web 開催，10 月 7 日，2021.
8. 荒木 厚：(講演)多職種で行うフレイル予防の重要性．**第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会**．東京，11 月 22 日，2023.
9. 荒木 厚：(グループワーク)多病を有するフレイル患者の症例検討．**第 26 回在宅療養ネットワーク懇話会**．東京，11 月 22 日，2023.
10. 荒木 厚：高齢者の糖尿病．**東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」**東京，11 月 30 日，2023.
11. 荒木 厚：高齢者の糖尿病．**東京都受託事業「高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修事業」**東京，12 月 7 日，2023.
12. 荒木 厚：(基調講演)介護予防・フレイル予防における医療職の役割ー多職種連携の重要性ー．**令和５ 年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フレイル予防の推進』**．東京，12 月 9 日，2023.
13. 荒木 厚：(シンポジウム司会)．**令和５ 年度リハ・ケア推進シンポジウム『介護予防・フ**

レイル予防の推進』． 東京，12 月 9 日，2023.

14. 荒木 厚：フレイルの評価法．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
15. 荒木 厚：フレイルの類似概念：サルコペニア、ロコモティブシンドローム、カヘキシア．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
16. 荒木 厚：地域のフレイル対策とフレイル健診の活用法．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
17. 荒木 厚：（ワークショップの症例提示と解説）COVID-19 流行後にフレイルとなったマルチモビディティの症例．**松本市医師会フレイルサポート医研修会**．松本，12 月 10 日，2022.
18. 荒木 厚：フレイルの概念、診断、治療 、および後期高齢者の質問票の活用法．**フレイルサポート専門栄養士研修会**．Web 配信，1 月 15 日，2024.
19. 荒木 厚：フレイル予防センターの研修とフレイル外来の研究．**第 9 回老年医学イノベーションフォーラム．**名古屋， 1 月 20 日，2024.
20. Yamada T, Shinohara T, Ouchi S, Mabuchi S, Nakagawa K, Yoshimi K, Saito M, Toyoshima K, Tamura Y, Araki A, Kojima M, Hashimoto K: Comparison of diaphragm function in sarcopenia and non-sarcopenia in the elderly．**第 9 回老年医学イノベーションフォーラム．**名古屋， 1 月 20 日，2024.
21. 荒木 厚：高齢者のフレイル予防．**フレイルサポートナース研修会**．東京，2 月 17 日，2024.
22. 荒木 厚：老年病特論のねらい．**介護予防運動指導員テキスト説明会**．東京，2 月 27 日，2024.
23. 荒木 厚：(特別講演)認知症とフレイルを考慮した高齢者糖尿病の治療.**Teijin DPP-4i Family Web Seminar.** Web 開催，東京，7 月 14 日，2023.

認知症未来社会創造センター

１　施設紹介

センター長：粟田主一
副センター長：金井信雄、岩田淳、石井賢二、鈴木宏幸、岡村毅、古田光、井藤佳恵
事務局：佐野健二、小俣恵巳、半澤絵梨子

これまで培った膨大な臨床・研究データを活用し、ＡＩなど先端技術も取り入れた認知症の共生と予防の取組を推進するため、令和２年４月「認知症未来社会創造センター」を設置した。認知症未来社会創造センターでは主に以下の取り組みを行う。

１）健康長寿データベース／バイオバンク
・　未来に向けた認知症研究の基盤を確立するために、東京都健康長寿医療センターが保有するビッグデータのデータベースやメディカルバイオバンクを構築し、認知症研究のプラットホームを確立する。
・　構築したデータベースやメディカルバイオバンクは、当センターだけでなく他研究機関、創薬企業等の研究開発でも利活用を進め、新たな診断手法の開発、創薬および新規治療の開発につなげる。
２）メディカルオミックス／バイオマーカー
・　血液等を用いた、低コスト・低侵襲のバイオマーカーを開発し、実用化することによって、地域医療の場での質の高い認知症診断を支援する。
・　新たなバイオマーカーの開発研究を通して、さまざまな認知症疾患の病態解明を促進し、新たな診断手法の開発，創薬および新規治療の開発につながる基礎的なデータを集積する。
３）神経画像／AI 診断システム
・　東京都健康長寿医療センターが保有する MRI 神経画像等の既存データを用いて AI 画像診断支援システムを構築し､これを広く普及することによって､地域医療の場での質の高い認知症診断を支援する。
・　AI 会話システム（チャットボット）を開発し、地域社会に実装することによって、地域レベルでの認知症の気づきや早期支援を促進する。
４）コホート研究データ統合活用
・　地域コホートから得られたデータを統合的に活用できる体制を確立し、高齢者の生活習慣や身体的・精神的・社会的特徴・要因が、将来の認知機能の低下、生活機能の低下、認知症の発症、認知症と診断された後の生活の質（QOL）や生活の継続に及ぼす影響を明らかにする。
・　これに基づいてリスクチャートの作成とリスク低減に向けた総合的なプログラムの開発を行い、自治体の公的事業、民間企業、関係諸機関と連携して都内全域への普及を図る。
５）認知症共生社会
・ 日本社会は高齢化と共に単身・独居・無縁・貧困にも直面しており、認知症の人の数は右肩上がりである。様々な困難に直面する中で、認知症の人が尊厳を保持しつつ社会の一員として尊重される共生社会の実現を図る。
６）認知症疾患医療センター
・　もの忘れ外来受診者のデータベースを構築し、認知症の共生と予防に資する臨床研究の基盤を構築する。
７）認知症支援推進センター
・　認知症未来社会創造センターで蓄積される知見を､認知症支援に関わる都内の専門職へ還元するため、研修の企画運営にかかる体制基盤を構築する。

２　他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携

日本医師会、東京都医師会、日本看護協会、全国老人福祉施設協議会、日本認知症グループホーム協会、国立長寿医療研究センター､女子栄養大学､全国老人保健施設協会､日本認知症本人ワーキンググループ、日本老年医学会、慶應大学医学部、東京大学工学部、杏林大学医学部、スウェーデン　ヨーテボリ大学、シスメックス、HU フロンティア、富士フイルム、小林製薬、日本メジフィジックス、Splink、GE ヘルスケ

ア・ジャパン、フィリップス・ジャパン、認知症共生社会、認知症疾患医療センター、精神科、板橋区医師会、板橋区おとしより保健福祉センター

3　活動概要

・「TOKYO 健康長寿データベース」の基盤整備および過去データの格納、前向きデータの収集を進めている。令和 5 年度は様々な企業と共同で前向き研究としてデータ集積し、新規診断法の開発を進めている。
・バイオバンクでは、TOKYO メディカルバイオバンク研究がスタートし、前向き研究として予定登録症例数 3,000 例を設定し、共通の研究用情報の取得、研究用として利活用が可能な生体試料の品質管理および保存の基盤整備を進めた。今後解析を進めていく。さらに当センター過去生体試料（ﾌﾞﾚｲﾝﾊﾞﾝｸ・ﾊﾞｲｵﾘｿｰｽ）等の管理においても集約化した統合バイオバンクの整備を進めていく。また、各種新規企業との共同研究を一層進めていく。
・バイオマーカー開発では測定システムの構築に着手し、動物等を用いた検証を開始している。また、既存の生体試料や前向きに収集される生体試料を用いたバイオマーカー開発に関しても、産学連携で共同研究での開発が進んでいる。
・AI による認知症診断支援システムでは、東京大学松尾研究室との共同研究を行っている微小脳出血診断実用システムは完成に近づいたため、社会実装に向けて調整中。また、Fazekas 分類診断のアルゴリズム開発を進めた。企業と共同開発したアミロイド PET 読影支援ソフトは誤判定防止機能を追加。全国の医療機関で既に診療に用いられている。
・チャットボット開発においては、上位の言語モデルを採用し、さらに自然な会話となってきた。プロトタイプはほぼ完成し、実証実験を開始するための計画を作成。
・地域コホート研究では、過去データの横断データセットを完成させ、認知機能低下の関連要因を明らかにした。縦断データセット作成が完了し、このデータセットを用いた研究報告を 2 本行った。これまでに作成したデータセットを用いた研究において、学会賞 2 演題（認知症予防学会）受賞し、国際誌 1 本に掲載された(Frontiers in Public Health)。また、認知症スクリーニングシートの開発を行い、社会実装化に向けて、地域の高齢者対応を行う地域包括支援センター職員を対象とした調査を行い、現場のニーズに合わせたスクリーニングシートの開発を行っている。現在は認知症リスクチャートの開発に向けて、介護認定のデータの突合を行っている。
・板橋区、UR と連携協定を締結。板橋区高島平において認知症共生社会のエビデンス創出のための様々な研究を推進した。
・認知症支援推進センターでは、認知症の医療・ケアに関わる都内の専門職（医師、看護師、その他認知症疾患医療センターに勤務する多職種職員、地域包括支援センター職員、行政機関職員等）を対象とする研修（６種計 21 回）を企画運営し、のべ 2458 人の聴講があった。また、東京都の離島（伊豆・小笠原諸島）の認知症支援体制の構築支援を継続している。
・日本語版及び英語版のリーフレットを更新
・ホームページ更新

4　業績

認知症未来社会創造センター　運営会議8回
認知症未来社会創造センター　ステアリングコミッティ4回
センター紹介リーフレット（日本語・英語）更新
論文　166件
学会発表　350件
著書　15件
講演　126件

健康長寿イノベーションセンター

１　施設紹介

センター長：原田和昌（副院長兼務）
副センター長：藤原佳典（研究所副所長兼務）

＜研究活動の推進に向けた取組＞
高齢者医療・研究の拠点としての特色を生かし、数多くのイノベーションを創出し、健康長寿社会の実現に貢献していくため、2018年8月に健康長寿イノベーションセンター（Healthy Aging Innovation Center: HAIC ）が創設された。薬機法、臨床研究法、人を対象とした生命科学医学系指針などの法令/指針を遵守して、適切に臨床試験/研究を実施していくため、多職種スタッフの協働によって当センターでの臨床研究支援が為されている。

■研究開発ユニット
研究開発ユニット長：金井信雄
専門副部長：吉岡まみ（薬剤師兼務）、
□研究推進部門
研究員：宮本俊一、深谷太郎、長井慈
事務員：長谷川菜生美、長島慎、廣瀬典子（非常勤）、吉沢祐司（非常勤）
コーディネーター：大嶋優江、権守寿一（非常勤）、百瀬和（非常勤）、入江美穂（非常勤）、小倉加奈子（非常勤）

■事務ユニット
事務ユニット長：足原世一（経営企画課長兼務）
□研究支援部門・その他
足立真弓、岩本貴子（～8/31）、谷正隆、三木明子、平智奈都、坂田幸哉、徳丸明日香、中村光佑、清水祐太（8/1～12/31）、山田直樹、小暮幸治（非常勤）、高泉康子（非常勤）、三森弓恵（非常勤）、東美幸（非常勤）、渡瀬容子（非常勤）、小西千恵子（非常勤）、世戸晴美（9/1～）、萩原麻貴(育休)
□プロジェクト支援
佐野健二（経理係長兼務）、小俣恵巳、半澤絵梨子
□産学連携・知財部門
福島成人（研究開発ユニット係長兼務）、山口聖司（非常勤）、大野佳代（非常勤）

２　他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携

【研究開発ユニット】
国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、東京都医学総合研究所、東海国立大学機構、大阪大学、慶応大学、順天堂大学、東京医科大学、東京農工大学、都立小児総合医療センター、認知症未来社会創造センターなど
【事務ユニット】
国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、大阪大学、東京医科大学、東京農工大学

３　活動概要

【研究開発ユニット】
(1) 研究支援業務
1.　研究立案、研究計画、研究受入相談の相談、プロジェクトマネージメント
2.　治験事務局
3.　治験等コーディネーター業務

4. 受託研究（医学系）/共同研究（医学系）
5. 必須文書管理
6. 研究実施契約書等作成支援
7. 製造販売後臨床試験・調査
8. 産学連携
9. データマネージメント業務

(2) 委員会運営業務
1. 倫理委員会A/倫理委員会B
2. 治験審査委員会（IRB）
3. 認定臨床研究審査委員会(CRB)
4. 認定再生医療等審査委員会（CRB）
5. 高難度新規医療技術評価委員会
6. 未承認新規医薬品等評価委員会
7. 生命倫理審査委員会
8. 利益相反委員会
9. TR研究推進委員会
10. 短寿命放射線薬剤臨床利用委員会

【事務ユニット】
1. 研究事業の推進支援、研究費予算執行管理等
2. 研究活動及び研究費使用の不正防止対策
3. 研究所人事関係手続き（研究員等の選考、協力研究員等受入、海外渡航審査、国外研究員招聘事務、研究生・連携大学院生受入）
4. プロジェクトの推進：認知症未来社会創造センター（IRIDE)、フレイル予防センター（フレイルサポート医研修等)、スマートウオッチ
5. 研究関係会議事務局：研究推進会議、研究所幹部会議、センター研究審査委員会、外部評価委員会・内部評価委員会（第四期中期計画・中間評価)、研究不正防止委員会、認知症未来社会創造センター運営会議等
6. 介護予防（主任）運動指導員養成事業の運営

4　業務進捗状況について

【研究開発ユニット】
(1) 治験進捗状況
　　常時約 20 試験を支援している。
①治験審査委員会状況

・取扱試験数	165 試験
審査件数	330 件
報告件数	79 件
迅速件数	8 件
製造販売後調査	35 件

② 企業主導治験

・新規	4 試験
・実施中	11 試験
・PET	7 試験
・中止・終了	3 試験
・製販後調査等へ移行	3 試験

③ 医師主導治験

・新規	1 試験→中止

④ 治験薬調整件数　150 件

⑤ SDV 対応件数　　65 件

(2) 臨床研究（別添 2 参照）
①認定臨床研究審査委員会
東京都関連組織としては唯一の CRB
・申請件数　52 件
・報告件数　21 件
・相談件数　9 件
※約 9 割が外部からの申請
(3) 研究倫理委員会
①医学系
・申請件数　298 件
・審査件数　266 件
・報告件数　27 件
・相談件数　58 件
②社会科学系
・審査件数　69 件
・報告件数　5 件
・相談件数　8 件

5　業績等

【研究開発ユニット】
(1) 原著論文 1 件
A Fujino, Y Fuchimoto, T Mori, M Kano, Y Yamada, M Ohno, Y Baba, N Isogawa, K Arai, M Abe, N Kanai, Akihiro Umezawa. Evaluation of safety and efficacy of autologous oral mucosa-derived epithelial cell sheet transplantation for prevention of anastomotic restenosis in congenital esophageal atresia and congenital esophageal stenosis. Stem cell research & therapy 14(1) 86-86 2023　IF7.1

(2) 総説 1 件
渕本康史、藤野明浩、五十嵐伸孝、新井勝弘、高木亮、前田真法、金井信雄、梅澤明弘、日本外科学会定期学術集会 web 会議録、123 巻、SF-21-5、2023

(3) 学会発表 7 件
・N Kanai, K Ohse, A Fujino, Y Fuchimoto. Autologous epithelial cell sheet with dedicated device for intractable esophageal stricture. Podium Presentation. TERMIS EU 2023. 2023.3.30
・N Kanai, K Ohse, A Fujino, Y Fuchimoto. Clinical studies using autologous epithelial cell sheet for various esophageal disease. Poster Presentation. ISCT 2023. 2023.6.1
・N Kanai. “Tokyo Medical Biobank / Databank”, IAGG-AOR2023, Yokohama, Japan, 2023.6.14
・渕本康史、藤野明浩、金井信雄、再生医療の up to date: 先天性食道閉鎖症術後吻合部狭窄への細胞シート移植による臨床研究、第 60 回日本小児外科学会学術集会、2023.6.2　他

(4) 講演会 4 件

(5) 外部獲得研究費　3,250,000 円
・AMED 再生医療実用化研究事業.「先天性食道閉鎖症難治性狭窄を対象とした食道シートによる再生医療の FIH 臨床研究」分担者、1,950,000 円
・共同研究費、ライフトレック社、1,300,000 円　他

第五部　補 助 金 等

研究補助金・助成金等受入状況

1 受託研究

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
1	研究部門	老化制御研究チーム	脳梗塞tPA療法の水素ガス吸入による予後改善効果検証	地方独立行政法人神奈川県立産業技術総合研究所
2		社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	北区全高齢者実態把握調査の分析及びフォローアップ業務委託	北区
3			絵本読み聞かせ講座運営委託	品川区
4			板橋区シニアの絵本読み聞かせ事業研究委託	板橋区
5			おおたフレイル予防事業業務委託	大田区
6			高齢者のための絵本読み聞かせ講座による認知症予防研究事業業務委託	八王子市
7			フレイル予防ちょい足し事業	和光市
8		自立促進と精神保健研究チーム	介護予防把握事業	千代田区
9			千代田区認知症支援サービス推進調査業務	千代田区
10			第9期介護保険事業計画策定に伴うデータ分析業務	千代田区

2 共同研究

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
1	研究部門	老化機構研究チーム	ミトコンドリア超複合体形成作用をもつ食品素材の成分の特定と動物での機能評価	日本新薬株式会社　機能食品カンパニー
2			老化関連疾患や健康長寿マーカー探索に向けた糖鎖・糖ペプチド解析法の開発	株式会社島津製作所
3		老化制御研究チーム	「加齢関連線維性疾患」病態概念の確立及び治療法開発	国立研究開発法人 国立循環器病研究センター
4			植物性油脂の細胞老化制御に関する研究	不二製油グループ本社株式会社
5		老化脳神経科学研究チーム	人参養栄湯の脳血流増加機序の解明	ツムラ株式会社　ツムラ漢方研究所

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
6	研究部門	老化脳神経科学研究チーム	神経筋接合部の老化変性を抑制する食素材の研究	一般財団法人糧食研究会・明治ホールディングス株式会社価値共創センター
7		加齢変容研究チーム	細胞外スルファターゼ検出プローブの開発とその応用	物質・デバイス領域共同研究拠点 基盤共同研究拠点（大阪大学産業科学研究所）
8		老年病理学研究チーム	膵癌の老化誘導薬の探索と老化細胞死誘導の研究	金沢大学がん進展制御研究所
9		神経画像研究チーム	新規心筋PETプローブの開発	白鳥製薬株式会社
10			脳PETのためのPSFカーネルを組み入れたQ.Clear画像再構成法の最適化	GEヘルスケア・ジャパン株式会社
11			アミロイドPET視覚読影支援技術の開発	株式会社Splink
12			[18F]Flutemetamolによるアミロイド PET画像の体動補正法の研究	GEヘルスケア・ジャパン株式会社
13		社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	鳩山町健康長寿のまちづくり共同研究事業	鳩山町
14			高齢者を対象とした介護予防の取組効果の検証に関する研究	練馬区
15			高齢者における介護予防の取組効果の検証に関する研究	渋谷区
16			施設入居者に対する囲碁入門プログラムの有効性の検討	株式会社らいふ
17			ペア碁を活用した生涯学習型プログラムの開発と評価	公益財団法人日本ペア碁協会
18			高齢者施設入居者を対象としたタブレットを用いた囲碁プログラムの開発と評価	社会福祉法人白山福祉会・社会福祉法人日翔会
19			栄養指導におけるスマートフォンアプリケーションの有用性の検討および脂肪酸摂取と健康アウトカムに関する栄養疫学研究（第二期）	①日清オイリオグループ株式会社 ②学校法人香川栄養学園女子栄養大学
20			フレイルおよび認知症の予防につながる食品群および栄養素に関する栄養疫学研究（第二期共同研究）	①キューピー株式会社 ②学校法人香川栄養学園女子栄養大学

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
21	研究部門	副所長（社会科学系）	4群点数法で評価した食品群と健康指標との関係に関する栄養疫学研究	キューピー株式会社・学校法人香川栄養学園女子栄養大学
22			栄養指導におけるスマートフォンアプリケーションの有用性の検討および脂肪酸摂取と健康アウトカムに関する栄養疫学研究	日清オイリオグループ株式会社・学校法人香川栄養学園女子栄養大学
23			地域における「高齢期のフレイルを予防する社会システム（大都市モデル）の開発」と職域における「健康保持・増進施策」の橋渡しモデルの構築に係るICTシステムの構築	都築電気株式会社
24		自立促進と精神保健研究チーム	地域在住高齢者を対象とした栄養摂取状況とバイオマーカーに関する研究	森永乳業株式会社 研究本部 健康栄養科学研究所
25			ラジオ体操を活用したフレイル対策の科学的根拠の創出と社会実装	株式会社かんぽ生命・ NPO法人全国ラジオ体操連盟・ 学校法人東京医科大学
26			乾燥コンニャクを用いた咀嚼トレーニング方法に関する探索的研究	サンスター株式会社
27			咀嚼機能と安静時機能的結合との関連に関する探索的研究	株式会社ロッテ 中央研究所 学校法人明治大学 国立大学法人新潟大学
28			骨格筋量が低下した高齢者を対象としたニコチンアミドモノヌクレオチド(NMN)摂取と筋力強化運動が骨格筋の量と機能に及ぼす影響－探索的臨床試験	三菱商事ライフサイエンス株式会社　ニュートリション事業部
29		福祉と生活ケア研究チーム	ウエアラブルデバイスによる認知的フレイル検出アルゴリズム開発	株式会社日立製作所
30			ウエアラブルデバイスによる身体的・社会的フレイル検出アルゴリズム開発	パナソニックホールディングス株式会社
31		中之条研究	乳酸菌飲料摂取と健康に関する疫学調査	株式会社ヤクルト本社
32		HAIC研究開発ユニット	コロナ及びインフルエンザ感染検出のための高感度簡易デバイスの開発と臨床評価	ライフトレック株式会社
33	病院部門	副院長/ HAIC研究開発ユニット	アルツハイマー型認知症患者およびハイリスク者に対する嗅覚測定データを活用した探索的研究	ソニー株式会社
34			認知症予防領域における、ウエラブルデバイスを用いた一次スクリーニング検査方法の研究開発のための探索的検討	富士フイルム株式会社
35		副院長	認知症のバイオマーカーの測定	富士レビオ株式会社

３ 奨学寄附

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
1	研究部門	神経画像研究チーム	ドパミントランスポーターSPECTの形態の定量	大塚製薬株式会社
2		老化制御研究チーム	加齢による神経変性に関与する分子の検出と同定	BRAIN RESEARCH PIONEER INSTITUTE（脳と健康の研究所）
3			分子老化制御に関する研究	ハウスウェルネスフーズ株式会社
4			膵癌の多様性に基づいた３次元共培養による新規治療法の探索	大鵬薬品工業株式会社
5			分子老化制御に関する研究「ヒト肺線維芽細胞に対する加熱式たばこエアロゾル抽出液の反復曝露による影響	日本たばこ産業株式会社
6			実験動物を用いたビタミンCと老化に関する研究	ビタミンC研究委員会
7			たばこ煙によるエピジェネティクス変化に対するビタミンCの作用に関する研究	ビタミンC研究委員会
8			分子状水素の機能性に関する研究	株式会社伊藤園　中央研究所
9		老化脳神経科学研究チーム	運動に関わる脳機能とその加齢変化の生理学的解析及び介入の研究	医療法人守生会小野内科クリニック
10			自律神経機能に関する研究「海馬の局所血流に対する燃焼式および加熱式たばこの影響」	日本たばこ産業株式会社
11			認知機能の老化現象とサルコペニアの関係	おおやま健幸の街クリニック
12		老年病理学研究チーム	３次元共培養による膵臓がんの多様性解析と新規治療法の探索	協和キリン株式会社
13	病院部門	腎臓内科	高齢者尿路感染症の重症化因子の探索	中外製薬株式会社
14		糖尿病・代謝・内分泌内科	縦断研究による糖尿病患者のRDW（赤血球分布幅）やリンパ球好中球比とフレイル・サルコペニアとの関係	日本ﾍﾞｰﾘﾝｶﾞｰｲﾝｹﾞﾙﾊｲﾑ株式会社

No.	部門	研究チーム・診療科	研究課題	共同研究先
15	病院部門	泌尿器科	陰茎癌の発症機構を解明し、ひいては、陰茎癌の診断精度向上、病型分類の確立および新規治療ターゲットの同定の研究	杏林製薬株式会社
16		眼科	眼科研究	株式会社ニュービジョンコーポレーション
17			眼科研究	HOYA株式会社
18			眼科研究	参天製薬株式会社
19			眼科研究	千寿製薬株式会社
20		血液内科	高齢者血液疾患に対する同種造血幹細胞移植の安全性の確立	旭化成ファーマ株式会社
21			高齢者血液疾患に対する同種造血幹細胞移植の安全性の確立	住友ファーマ株式会社
22		整形・脊椎外科	PETを用いた骨内インプラント周囲の骨代謝活性動態の解明	ネクスメッドインターナショナル株式会社
23			人工関節全置換術を受ける患者における術前深部静脈血栓症の発生率と危険因子の検討	京セラ株式会社
24			椎弓形成におけるインプラント内人工骨の骨癒合と有効性	株式会社アムテック
25			骨代謝における骨細胞ミトコンドリアの機能解析	ｽﾐｽ･ｱﾝﾄﾞ･ﾈﾌｭｰ株式会社

4 国庫補助

No.	部門	研究チーム	所管省庁等	研究課題
1	研究部門	自立促進と精神保健研究チーム	厚生労働省	通所事業所等における口腔・栄養関連サービスに関するに関する調査研究事業
2		自立促進と精神保健研究チーム		認知症患者の口腔管理体制に関する調査研究事業
3		福祉と生活ケア研究チーム		環境変化が認知症の人に与える影響に関する調査研究

５ 民間助成金

No.	部門	研究担当者	研究チーム・診療科	助成機関	研究課題
1	研究部門	三浦ゆり	老化機構研究チーム	小柳財団	糖鎖を基盤とした新たな認知症健康管理システムの開発
2		杉本昌隆	老化制御研究チーム	公益財団法人 上原記念生命科学財団	「老化と再生の相互作用と通じた新たな治療戦略の開発」
3		内田さえ	老化脳神経科学研究チーム	公益財団法人 喫煙科学研究財団	嗅神経・三叉神経を介する嗅覚刺激による嗅球応答とニコチン反応性
4		守屋正道		公益財団法人カシオ科学振興財団	慢性疼痛患者に対応するストレス評価方法の開発と生活習慣病のリスク判定への応用
5		瀧川健司		公益財団法人コニカミノルタ科学技術振興財団	「脳神経回路の興奮・抑制バランスを可視化するマルチカラーイメージング法の確立」
6		小野悠介	加齢変容研究チーム	公益財団法人アステラス病態代謝研究会	糖尿病による組織変容の分子基盤の解明
7		小野悠介		公益財団法人 三菱財団	骨格筋萎縮の分子メカニズムの解明
8		野中敬介	老年病理学研究チーム	公益財団法人 喫煙科学研究財団	喫煙がヒト脳組織の細胞老化に及ぼす影響について
9		阿部巧	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	公益財団法人 日本中小企業福祉事業財団	高齢期の就労に伴う健康増進効果の向上を目的とした探索的研究
10		阿部巧		公益財団法人 健康・体力づくり事業財団	運動・身体活動促進のための効果的な行政施策の探索：ポピュレーションアプローチにおける効果の最適化に向けて
11		村山洋史		公益財団法人長寿科学振興財団	ジョブボラ」の創出とデジタルマッチングの実装に向けた研究：誰もが活躍できる社会を目指して
12		村山陽		公益財団法人　中山隼雄科学技術文化財団	単身中高年者の社会的孤立・困窮予防に向けたゲームの開発
13		櫻井花	自立促進と精神保健研究チーム	公益財団法人 明治安田こころの健康財団	希死念慮や自殺企図を呈する特別養護老人ホーム入居高齢者の実態調査
14		白部麻樹		公益財団法人　富徳会	要介護高齢者への口腔衛生管理の課題 - 認知症重症度による検討 -
15		宇良千秋		公益財団法人 日本生命財団	ケアファームを用いた認知症診断後支援のシステム構築

No.	部門	研究担当者	研究チーム・診療科	助成機関	研究課題
16	研究部門	清水恒三朗	自立促進と精神保健研究チーム	一般社団法人　日本心理臨床学会	地域在住高齢者を対象としたグループワークにおける要配慮場面の分類とファシリテーション手法の体系化
17		多賀努		公益財団法人 三菱財団	認知症当事者の実存的不安を共感的に理解するための疑似体験プログラムの開発
18		山下真里		公益財団法人 明治安田厚生事業団	介護予防のための集団認知行動療法を応用した運動プログラムの開発　―予備的ランダム化比較試験―
19		枝広あや子		公益財団法人ロッテ財団	読経を用いた心理的健康及び口腔咽喉頭機能への健康増進プログラム開発と実装
20		志田隆史		一般財団法人 近藤記念医学財団	骨密度が低い可能性のある高齢者の同定を容易にする日本版 骨粗鬆症リスク評価ツールの開発と妥当性の検証
21		大田崇央		一般財団法人 土木建築厚生会	「MICにおける身体的フレイル発生秩序の解明～２４時間行動に着目して～」
22		出口直樹		一般社団法人 日本理学療法学会連合	変形性膝関節症を有する高齢者の24時間身体活動・座位行動・睡眠ガイドライン策定に向けた科学的基盤の構築
23		江尻愛美	福祉と生活ケア研究チーム	公益財団法人　セコム科学技術振興財団	「自分をどれだけさらけ出せるか？」；疾病予防・健康管理のための暴露意思量調査
24		池内朋子		公益財団法人トヨタ財団	社会的孤立高齢者が支援を拒む要因の解明-迷惑をかけてもいい社会をめざして
25		肥田あゆみ		日本臨床倫理学会	高齢入院患者の転院支援・転院調整における倫理的問題点に関する検討~医療ソーシャルワーカーを対象としたアンケート調査から~
26		根本裕太	介護予防・フレイル予防推進支援センター	公益財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団	社会経済的地位が低い高齢者の地域イベント参加を促す情報伝達方策の検討
27		山崎茉莉亜	認知症未来社会創造センター	公益社団法人　中谷医工計測技術振興財団	RCR法を用いたハイパーコピー数多型の標準測定法及び標準サンプルの開発
28		佐藤薫		公益社団法 武田科学振興財団	アルツハイマー病発症に関わる女性ホルモンエストロゲン受容体（ER）および関連受容体（ERR）による遺伝子転写・RNA代謝制御機構の包括的解明
29		小野真由子		日本ヒューマン・ケア心理学会	高齢者の感謝が孤独感に及ぼす影響 高齢者の抱く感謝が孤独感に及ぼす直接的効果および緩衝効果を量的に検討するためにオンライン調査を行う。
30		佐藤薫		公益財団法人 テルモ生命科学振興財団	女性ホルモンによる認知症発症制御機構の解明とその臨床応用
31	病院部門	宮崎剛	整形・脊椎外科	ジンマー・バイオメット合同会社	学術集会における研究発表

６ 受託事業

No.	部門	研究チーム・診療科	担当職員	委託者	業務内容
1	研究部門	神経画像研究チーム	石井賢二	東京医科大学病院	神経変性疾患患者におけるPET検査の実施
2		社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	村山洋史	大田区福祉部	大田区地域支え合い推進事業運営補助業務委託
3			鈴木宏幸	立川市	絵本読み聞かせ講座運営業務委託
4			高橋知也	新宿区	令和5年度　シニアの絵本読み聞かせ講座業務委託
5			高橋知也	新宿区社会福祉事業団	令和5年度　シニアの絵本読み聞かせ講座業務委託
6			飯塚あい	新宿区社会福祉事業団	囲碁講座委託
7			鈴木宏幸	練馬区	令和5年度　認知症予防プログラム（絵本読み聞かせ編）事業の業務委託
8			鈴木宏幸	文京区	令和５年度　絵本の読み聞かせ講座の運営委託
9			村山洋史	草津町	令和5年度　国庫補助事業　草津町介護予防事業対象者把握・普及啓発事業業務委託
10			村山洋史	草津町	令和5年度　国庫補助事業　第9期介護保険事業計画基礎調査等業務委託（ニーズ調査）
11			鈴木宏幸	狛江市	絵本読み聞かせ講座業務委託
12			鈴木宏幸	稲城市福祉部高齢福祉課	認知症予防プログラム（絵本読み聞かせ講座）事業委託
13			高橋知也	北区	絵本読み聞かせ教室の運営委託
14			飯塚あい	新宿区	令和5年度　囲碁による多世代交流支援講座業務委託
15			村山洋史	鳩山町	鳩山町国保ヘルスアップ事業「高齢者のフレイル対策」
16			高橋知也	目黒区	シニア向け絵本読み聞かせ講座による認知症予防事業業務委託
17			藤原佳典	東京都福祉保健局	令和5年度東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター運営業務委託

No.	部門	研究チーム・診療科	担当職員	委託者	業務内容
18	研究部門	福祉と生活ケア研究チーム	大渕修一	東大和市	介護予防リーダー養成講座修了論文指導業務委託
19			大渕修一	多摩市	介護予防リーダー養成講座実施業務委託
20			井藤佳恵	三宅村役場	高齢者の実態把握調査のデータ分析事業
21			大渕修一	北区	北区介護予防事業評価業務委託
22			河合恒	一般財団法人日本規格協会	フレイルに関する測定方法・高齢者実データとの比較に関する調査
23			石崎達郎	東京都	令和５年度高齢者の保健事業に関わる医療専門職の人材育成研修実施委託

7 学術指導

No.	部門	研究チーム・診療科	担当職員	委託者	業務内容
1	研究部門	老化制御研究チーム	石神昭人	ロート製薬株式会社	ビタミンCの基礎研究並びに製剤開発に関する助言
2		神経画像研究チーム	坂田宗之	株式会社マイクロン	脳PET解析に関する学術的な助言・指導
3		社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	鈴木宏幸	株式会社ケイ・エス・オー	認知機能評価検査に関する学術指導（TYS-075-01研究）
4			小川将	株式会社ケイ・エス・オー	認知機能評価検査に関する学術指導（TYS-075-01研究）
5			鈴木宏幸/小川将	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社	認知症予防を目指した食品による複合メカニズム介入試験の助言・指導（社会参加・社会貢献テーマ）
6			鈴木宏幸	メビックス株式会社	認知機能評価検査に関する学術指導
7			清野諭	株式会社ハイクラス	「フレイル予防スタートブック」を活用したフレイル予防事業の普及・展開に係る助言、指導
8			村山洋史	セコム株式会社	「コミュニケーションロボットBOCCOemoを用いた外出促進によるフレイル・介護予防プロジェクト」の助言・指導

No.	部門	研究チーム・診療科	担当職員	委託者	業務内容
9	研究部門	副所長（社会科学系）	藤原佳典	セイコーエプソン株式会社	フレイル予防サービスの検討に関する学術指導
10			藤原佳典	大塚製薬株式会社	「高齢者の健康を支えるチームメイトプログラム」の取組成果を可視化するための助言・指導
11			藤原佳典	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社	認知症予防を目指した食品による複合メカニズム介入試験の助言・指導
12		自立促進と精神保健研究チーム	笹井浩行	公益財団法人東京都老人クラブ連合会	コロナ禍・老人クラブ活動支援（フレイル予防）
13			笹井浩行	アクチ・ジャパン株式会社	アクチグラフで計測した歩数データの解析に関する助言
14			宇良千秋	特定非営利活動法人 アジア人文文化交流促進協会	外国人住民支援活動についてのアンケート作成及び分析に関する指導
15			平野浩彦	株式会社ヨシダ	口腔機能低下症予防支援アプリ開発に係るアドバイス・助言
16			本川佳子	日清オイリオグループ株式会社	スマホ・アプリケーション「バランス日記」の改良と普及を目的とした学術指導
17		福祉と生活ケア研究チーム	増井幸恵	亀岡市	「亀岡市高齢期の生活状況調査」に係る学術指導
18			大渕修一	小金井市	生活支援体制基盤整備支援委託
19			涌井智子	NPO法人 キープ・ママ・スマイリング	子どもの入院に付き添う家族を対象としたケア記録調査
20			大渕修一	一般社団法人健康長寿支援センター	「高齢者の包括的な健康測定会」実施に関わる助言・指導
21			大渕修一	旭化成ホームズ株式会社	非接触センサを用いた生活活動量把握に対する助言・指導
22		実験動物施設	野田義博	パーソルテンプスタッフ株式会社	動物実験に関する知識、技術を修得ならびにそれらを評価するための助言・指導

8 科学研究費

(1)文部科学省:科学研究費助成事業 【研究代表者】※繰越課題・延長課題を除く

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
基盤研究(S)	遠藤玉夫	シニアフェロー	糖アルコールリン酸修飾のバイオロジー
基盤研究(A)	井上聡	老化機構研究チーム	呼吸鎖超複合体形成因子Cox7rpの作用機構の解明と標的臓器・長寿における役割
	小林江里香	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	高齢者におけるエイジングと時代的・世代的変化、パンデミックへの適応
基盤研究(B)	岩田淳	副院長	BRCA1の機能回復に基づいたアルツハイマー病神経細胞DNA傷害の修復機構の解明
	石崎達郎	福祉と生活ケア研究チーム	高齢者における多剤処方の健康影響評価と服薬指導プログラムの研究開発
	光武誠吾	福祉と生活ケア研究チーム	医療・介護ビッグデータを用いた再入院発生予測モデルの開発と再入院予防策への提案
	堀田晴美	老化脳神経科学研究チーム	嚥下にともなう自律神経の活性化が骨格筋におよぼす作用とサルコペニア予防への応用
	杉本昌隆	老化制御研究チーム	細胞の質的変化に基づく肺組織老化・疾患促進機構の研究：細胞老化の視点から
	藤原佳典	副所長（社会科学系）	シルバー人材センター会員に着目した高年齢就業者の安全・健康管理に向けた要因の解明
	涌井智子	福祉と生活ケア研究チーム	インフォーマルケアにおける介護者の生活実態の解明と在宅介護支援方策の検討
	村山洋史	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	介護助手に焦点を当てた高齢期就労の健康影響に関する包括的エビデンスの構築
	田中佑治	認知症未来社会創造センター	食習慣と認知機能を繋ぐ健康長寿エピゲノムに基づく『抗認知症食習慣』の提案
	村山陽	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	単身中高年者の孤立と貧困の一次予防に向けたチェックリスト開発とコミュニティ実装
	野中久美子	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	社会的孤立状態にある高齢者の生活実態と実情の徹底解明に向けた基礎的研究
	阿部巧	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	交通行動を基軸とした健康づくり戦略立案のための包括的知見の創出
	鈴木宏幸	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	新規学習を題材とした認知機能低下抑制介入プログラムにおける介入効果の機序の解明
	清野諭	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	フレイル予防の大都市モデル創出のための地域介入研究：長期的効果の検証と他地域展開

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
基盤研究(B)	笹井浩行	自立促進と精神保健研究チーム	高齢者の24時間身体活動・座位行動・睡眠ガイドライン策定に向けた科学的基盤の構築
	梅澤啓太郎	老化機構研究チーム	タンパク質の超硫黄修飾を基軸とした新しい疾患発症機構研究
	石神昭人	老化制御研究チーム	老化細胞の特定と老化細胞死誘導剤Senolytic薬による老化制御の達成
	藤田幸司	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	世代間交流プログラムの普及拡大および継続のための促進要因の解明と支援策の開発
	萬谷博	老化機構研究チーム	O-マンノース型糖鎖修飾の分子基盤と生理的意義の解明
	平野浩彦	自立促進と精神保健研究チーム	高齢者の口腔機能低下から摂食嚥下機能障害の包括的評価システム考案に関する調査研究
	三浦ゆり	老化機構研究チーム	N-グライコプロテオミクスを基盤とした超百寿者脳の老化制御メカニズムの解明
	安樂真樹	呼吸器外科	Central ECMOを用いた長期呼吸補助の至適条件と生体適合性に関する検討
基盤研究(C)	津元裕樹	老化機構研究チーム	シアル酸結合様式を区別したハイスループット糖ペプチド解析法の開発と応用
	今江理恵子	老化機構研究チーム	グリセロール-3-リン酸含有糖鎖の合成制御機構および癌における役割の解明
	高山賢一	老化機構研究チーム	性ホルモン関連RNA結合タンパク質の機能解析と老年病発生における役割の解明
	川上恭司郎	老化機構研究チーム	血管内皮障害を血液から測る～血管内皮由来細胞外小胞の精製と解析～
	大渕修一	福祉と生活ケア研究チーム	アンクルバンド型加速度計による在宅での歩行速度計測の妥当性とフレイル判別能の検証
	石橋賢士	神経画像研究チーム	神経変性疾患におけるアストログリオーシス画像：臨床と病理の関連を踏まえた臨床応用
	竹岩俊彦	老化機構研究チーム	卵巣がんにおけるRNA結合蛋白質・非コードRNA複合体の同定、機能解明と臨床応用
	小島成実	自立促進と精神保健研究チーム	日本人高齢者においてエクオール産性能が大豆製品摂取のフレイル予防効果に与える影響
	大村千晶（安藤千晶）	自立促進と精神保健研究チーム	慢性疼痛看護の構築に向けて-痛み日誌を用いた遠隔型看護介入の効果検証
	稲垣宏樹	自立促進と精神保健研究チーム	地域在住高齢者の援助希求行動の実態把握と促進／阻害要因の検討
	藤田泰典	老化制御研究チーム	複製老化過程に潜在するミトコンドリア代謝変容の同定と細胞老化メカニズムの解明

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
基盤研究(C)	河合恒	福祉と生活ケア研究チーム	フレイル高齢者における日常生活歩行速度と健康状態との関連の解明
	佐藤薫	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	piRNAクラスターにおけるヘテロクロマチン依存的な転写活性化機構の解明
	西真理子	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	地域在住高齢者の主観的ウェルビーイングの維持・向上を目的としたアクションリサーチ
	豊原潤	神経画像研究チーム	AQP4に対する高感度かつ選択的な高品質のPET薬剤の実用化
	志智優樹	老年病理学研究チーム	膵癌細胞の可変性制御による新規治療法の研究
	五味不二也	老年病理学研究チーム	幹細胞表面特異的糖鎖を標的とした膵癌の新規治療法の開発
	大瀬賢介	認知症未来社会創造センター	心筋細胞におけるミトコンドリア恒常性維持機構の加齢変化の解析
	河田光弘	心臓血管外科	急性大動脈解離での肺酸素化障害抑制に向けた水素ガス吸入療法の検討
	小原由紀	自立促進と精神保健研究チーム	高齢期における口腔機能低下と腸内細菌叢との関連性の探索に関する研究
	齋藤尚子	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	市町村母子保健担当保健師を対象とした養親への支援ガイドの開発
	渡邉信博	老化脳神経科学研究チーム	皮膚刺激によるメラトニン分泌促進作用の神経性機序の解明と高齢者の睡眠ケアへの応用
	板倉陽子	加齢変容研究チーム	心不全パンデミックの予防を目指した高齢者心疾患に関わる糖鎖関連因子の解明
	池谷真澄	老化制御研究チーム	脂質変化とエンドソーム変化を介する水素投与によるストレス耐性獲得機構の解明
	内田さえ	老化脳神経科学研究チーム	高齢者の認知機能を活性化する最適な嗅覚刺激法の開発研究
	多賀努	自立促進と精神保健研究チーム	自己効力感を利用した若年性認知症の福祉的就労の場の拡大に関する研究
	新井富生	病理診断科	高齢者胃癌の遺伝子異常に基づく病態解明と治療戦略
	萬谷啓子	老化機構研究チーム	オミクス解析による肺の老化メカニズムの解明
	齊藤祐子	老年病理学研究チーム	末梢型Lewy小体の形態・分子病理学的研究
	多胡哲郎	神経画像研究チーム	構造最適化による高性能PET用脳内HDAC6プローブの開発

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
基盤研究(C)	石渡俊行	老年病理学研究チーム	膵癌の上皮間葉系形質の制御による新規治療法の開発
	野田義博	実験動物施設	加齢に伴う造精機能障害における分子状水素の改善効果
	枝広あや子	自立促進と精神保健研究チーム	本人視点を重視した地域在住認知症高齢者の歯科受診の障壁の解明
	岩崎正則	自立促進と精神保健研究チーム	多歯時代の歯周病：機械学習による将来予測とスクリーニングスコアの開発
	井藤佳恵	福祉と生活ケア研究チーム	認知症の保健・医療・介護連携体制のための多職種連携教育プログラムの開発
	宮前史子	自立促進と精神保健研究チーム	看取りを見据えた地域包括ケアシステムの可視化：ポジティブデビアントな離島に学ぶ
	井上律子	老化脳神経科学研究チーム	老化初期からの歩行機能低下の改善：脳ミトコンドリア機能改善による介入法の検討
	滝野有花	老化制御研究チーム	老化関連遺伝子導入による細胞老化の誘導と老化細胞除去薬の探索
	佐々木紀彦	加齢変容研究チーム	ヘパラン硫酸脱硫酸化酵素を標的とした老化関連疾患の予防・治療法の開発
	本川佳子	自立促進と精神保健研究チーム	高齢糖尿病患者のフレイル対策に焦点化した栄養ケア方法の確立に資する実態調査研究
	柳井修一	老化脳神経科学研究チーム	軽度認知障害モデルマウスの認知機能と歩行機能に関わるcAMPシグナル伝達系の役割
	加藤由希子	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	子を持つ保護者のCOVID-19ワクチン躊躇に関する研究
	藤原聡子	福祉と生活ケア研究チーム	地域のソーシャル・キャピタルの醸成と認知症予防に向けた地域づくりに関する研究
	六反啓文	病理診断科	固有腺・胃型上皮分化を示す胃腫瘍群の悪性度指標および遺伝子変異の包括的研究
	近藤嘉高	老化制御研究チーム	NASHの病態進展におけるペントースリン酸副経路の関与
若手研究	今村慶吾	福祉と生活ケア研究チーム	社会的孤立の有無で分けた地域在住高齢者における修正可能な機能の縦断的軌跡の解明

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
若手研究	松永博子	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	妊産婦のメンタルヘルス対策のための地域づくり型産後ケアプログラムの開発と効果検証
	伊藤久美子	福祉と生活ケア研究チーム	地域高齢者における地域活動への参加を止める関連要因の解明
	小川将	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	「地域連携型　SOSの出し方に関する教育プログラム」の作成
	野中敬介	老年病理学研究チーム	慢性ストレスがヒト海馬および扁桃体組織に及ぼす影響の検討
	栗原正典	脳神経内科	脳脊髄液と神経系細胞モデルから迫る神経核内封入体病の病態解明
	三浦和仁	自立促進と精神保健研究チーム	口腔機能低下パターンの解明：健常からフレイル、そして要介護まで
	出口直樹	自立促進と精神保健研究チーム	変形性膝関節症を有する高齢者のフレイル予防に向けた24時間行動の構築
	畑中翔	自立促進と精神保健研究チーム	転倒・要介護リスクの筋質による総合的評価：機械学習を用いた検討
	星野駿介	老化機構研究チーム	哺乳類における糖鎖構成糖アルコール類の生合成機構及び生理的役割の解明
	江尻愛美	福祉と生活ケア研究チーム	身体的にフレイルな高齢者における精神的健康を保つためのコーピングの解明
	渡邊浩基	耳鼻咽喉科	Pendred症候群モデルマウスにおける平衡障害の評価
	瀧川健司	老化脳神経科学研究チーム	単一シナプスレベルでの蛍光GABAイメージングによる開口放出制御機構の解明
	志田隆史	自立促進と精神保健研究チーム	リボソーム発現遺伝子に着目した肝癌の新規診断および治療法の開発
	池内朋子	福祉と生活ケア研究チーム	「自立」意識が高齢者の意思決定プロセスに与える影響
	横山友里	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	地域高齢者のたんぱく質摂取量の不足を防ぐための効果的なアプローチ方法の開発
	佐藤綾美	老化制御研究チーム	表皮角化のエピジェネティクス制御機構及びその加齢変化におけるビタミンCの意義

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
若手研究	山下真里	自立促進と精神保健研究チーム	高齢者の社会参加を動機づける支援シートの開発
	高橋知也	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	「命・つながり・SOSの出し方プログラム」の有効性および短期・長期的効果の検討
	津島博道	老化制御研究チーム	老化細胞に着目した新型コロナウイルス重症化メカニズムの解明
	白部麻樹	自立促進と精神保健研究チーム	アルツハイマー型認知症の容態に応じた円滑な口腔機能管理に関する調査研究
	堀紀子	福祉と生活ケア研究チーム	地域在住高齢者のフレイル予防とヘルスリテラシー関与の解明
	津田修治	福祉と生活ケア研究チーム	認知症初期の本人の主体性を支えるリカバリーモデルに基づく新基軸介入プログラム
	大田崇央	自立促進と精神保健研究チーム	体力は座位行動を規定するか？：大学生を最長43年間追跡したコホート研究
	大堀（飯野）薫	薬剤科	大腸がん組織におけるNONOの転写後機構の解析と革新的臨床応用
	飯村佳織	老化脳神経科学研究チーム	咽頭刺激による糖代謝調節の解明；オーラルフレイル予防の重要性に寄与する基礎的研究
	小林キミ	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	Hand sensorimotor function and cognitive decline in healthy older adults and those with MCI
	守屋正道	老化脳神経科学研究チーム	侵害性の高い痛み刺激による脳内血流調節系の制御機構の解明
挑戦的研究（萌芽）	宇良千秋	自立促進と精神保健研究チーム	都市部で認知症とともに暮らす人を包摂する電話によるピアサポートの構築
	藤田幸司	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	働き盛り世代の男性を対象とした社会参加プログラムの開発とメンタルヘルスへの効果
	桜井良太	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	積極的孤立は健康悪化につながるか？―社会科学的・神経科学的検討―
	杉本昌隆	老化制御研究チーム	運動による老化細胞除去機構の解明ー慢性呼吸器疾患治療モデルへの展開
	村山陽	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	単身女性中高年者における困窮に陥るパターンと適切な援助要請スタイルの解明
	岩田淳	副院長	神経変性疾患における核内封入体を中心とした細胞間コミュニケーションの障害
	笹井浩行	自立促進と精神保健研究チーム	腎機能低下高齢者の植物性たんぱく質摂取によるサルコペニア予防効果と機序の解明

研究種目	氏名	所属研究チーム	研究課題
挑戦的研究（萌芽）	遠藤昌吾	老化脳神経科学研究チーム	老いゆく小脳から見る認知機能障害と運動による機能改善
研究活動スタート支援	大丸香	自立促進と精神保健研究チーム	都市在住高齢者におけるフレイルの発生、進行、多面性に対するポリファーマシーの影響
	土志田裕太	老化制御研究チーム	健康寿命の延伸に向けた老化細胞を除去するSenolytic薬の探索
	櫻井花	自立促進と精神保健研究チーム	介護サービス利用高齢者における希死念慮・自殺企図の実態把握と支援方法の検討
	河田学	整形・脊椎外科	転写因子KLF4に依拠した、変形性関節症の新規治療候補薬剤の網羅的探索および機能解析
	五味達之祐	自立促進と精神保健研究チーム	日本人の食事摂取基準2020年版(たんぱく質)のフレイル予防活用に向けた地域疫学研究
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）	光武誠吾	福祉と生活ケア研究チーム	長期的な医療ビッグデータを用いた死亡前まで繰り返される入院の実態把握と要因解明

(2)厚生労働省:厚生労働科学研究費補助金 【研究代表者・研究分担者】

研究事業	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム	研究課題
認知症政策研究事業	代表	粟田主一	認知症未来社会創造センター	認知症の遠隔医療およびケア提供を促進するための研究
認知症政策研究事業	代表	粟田主一	認知症未来社会創造センター	独居認知症高齢者等の地域での暮らしを安定化・永続化するための研究
政策科学推進研究事業	代表	小林江里香	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	中年期からの孤立・困窮予防プログラムの実装化に向けた研究

研究事業	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム	研究課題
難治性疾患政策研究事業	分担	齊藤祐子	老年病理学研究チーム	神経変性疾患領域における難病の医療水準の向上や患者の QOL 向上に資する研究
難治性疾患政策研究事業	分担	村山繁雄	老年病理学研究チーム	プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究
認知症政策研究事業	分担	藤原佳典	副所長（社会科学系）	軽度認知障害の人における進行予防と精神心理的支援のための手引き作成と介入研究
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	分担	村山洋史	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	健康寿命の延伸及び健康格差の縮小に影響を与える要因の解明のための研究
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	分担	村山洋史	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	健康無関心層のセグメント化と効果的介入手法の検討：ライフステージに着目して
認知症政策研究事業	分担	鈴木宏幸	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム	認知症早期発見・早期介入実証プロジェクト（J-DEPP）
認知症政策研究事業	分担	藤原佳典	副所長（社会科学系）	認知症早期発見・早期介入実証プロジェクト（J-DEPP）
長寿科学政策研究事業	分担	枝広あや子	自立促進と精神保健研究チーム	薬学的視点を踏まえた自立支援・重度化防止推進のための研究
労働安全衛生総合研究事業	分担	畑中翔	自立促進と精神保健研究チーム	高齢労働者の転倒災害防止に向けた Occupational Fall Risk Assessment Tool（OFRAT）短縮版の開発
政策科学推進研究事業	分担	石崎達郎	福祉と生活ケア研究チーム	高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施の推進及び効果検証のための研究
認知症政策研究事業	分担	粟田主一	認知症未来社会創造センター	若年性認知症の病態・支援等に関する実態把握と適切な治療及び支援につなぐプロセスの構築に関する研究
地域医療基盤開発推進研究事業	分担	島崎良知	薬剤科	切れ目のないポリファーマシー対策を提供するための薬剤師間の情報連携の推進に資する研究

研究事業	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム	研究課題
厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）	分担	岩田淳	副院長	認知症医療の進展に伴う社会的課題の検討のための研究
認知症政策研究事業	分担	石川譲治	循環器内科	併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究
認知症政策研究事業	分担	田村嘉章	循環器内科	併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究

９日本医療研究開発機構委託研究開発【研究代表者･研究分担者】

研究事業	研究課題	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム
創薬支援推進事業・創薬総合支援事業	新規がん免疫療法剤の探索	分担	津元裕樹	老化機構研究チーム
創薬基盤推進研究事業	アロステリックにタンパク質-タンパク質相互作用を阻害するinduced-fit型小分子の創出	分担	津元裕樹	老化機構研究チーム
予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業/エビデンス構築促進事業	楽しみとやりがいの創発による認知症共生：社会参加型創作教室プログラムに関する研究開発	代表	鈴木宏幸	社会参加とヘルシーエイジング研究チーム
予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業/エビデンス構築促進事業	インクルーシブな仕事を通じた認知症共生社会作りの研究	代表	岡村毅	自立促進と精神保健研究チーム
認知症研究開発事業	疾患修飾薬の実用化を見据えた認知症性疾患の標準的診断方法の標準化と普及を目指す研究	代表	岩田淳	副院長

研究事業	研究課題	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム
橋渡し研究プログラム	低眼圧症治療のための冷却溶解性隅角閉塞材の開発	代表	田中佑治	認知症未来社会創造センター
新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業	呼吸器感染症の予防対策に資するウイルス遺伝子の非増幅迅速検出法の多施設臨床研究	分担	豊田雅士	加齢変容研究チーム
革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	認知症モデルマーモセットの産出と評価	分担	齊藤祐子	老年病理学研究チーム
脳とこころの研究推進プログラム 精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト	日本ブレインバンクネット(JBBN)による精神・神経疾患死後脳リソース基盤の強化に関する研究開発	分担	齊藤祐子	老年病理学研究チーム
ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム（ゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発）/ゲノム研究を創薬等出口に繋げる研究開発プログラム	ブレインアトラス創生による精神神経疾患のシングルセル・ゲノム創薬	分担	村山繁雄	老年病理学研究チーム
ロボット介護機器開発等推進事業	マルチセンシング技術を用いた介護現場のアセスメントおよび個別ケア支援に関わる研究開発	分担	亀山征史	神経画像研究チーム
次世代治療・診断実現のための創薬基盤技術開発事業	患者層別化マーカー探索技術の開発／医療ニーズの高い特定疾患・薬剤に対する患者層別化基盤技術の開発	分担	石井賢二	神経画像研究チーム
認知症研究開発事業	画像・バイオマーカー縦断コホート研究によるプレクリニカルアルツハイマー病進行機序の解明	分担	石井賢二	神経画像研究チーム
認知症研究開発事業	反応性アストログリオーシスを定量化する新規画像バイオマーカーの研究開発	分担	石井賢二	神経画像研究チーム
医療機器等における先進的研究開発・開発体制強靭化事業　先進的医療機器・システム等開発プロジェクト	認知症・がんの早期診断を実現する世界最高分解能頭部PETの開発	分担	石井賢二	神経画像研究チーム

研究事業	研究課題	代表・分担	氏　　名	所属研究チーム
認知症研究開発事業	病的バリアントを有する遺伝性認知症を対象としたコホート構築による病態解明、バイオマーカー開発、治験促進	分担	石井賢二	神経画像研究チーム
予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業/エビデンス構築促進事業	表情から認知症を判別するアプリの開発研究	分担	亀山征史	神経画像研究チーム
革新的先端研究開発支援事業　ステップタイプ（FORCE）	ヒトの時計老化年齢を評価する血液バイオマーカーの探索とその応用	分担	野田義博	実験動物施設
再生医療実用化研究事業	先天性食道閉鎖症および先天性食道狭窄症の術後吻合部狭窄への自己上皮細胞シートによる小児再生治療の研究	分担	金井信雄	ＨＡＩＣ　研究開発ユニット
革新的先端研究開発支援事業　インキュベートタイプ(LEAP)	重症筋無力症・難治性神経筋疾患の画期的治療に向けた筋特異的受容体チロシンキナーゼ活性化剤の開発	分担	重本和宏	シニアフェロー
認知症研究開発事業	認知症プレクリニカル期・プロドローマル期を対象とするトライアルレディコホート構築研究	分担	岩田淳	副院長
難治性疾患実用化研究事業	進行性核上性麻痺と大脳皮質基底核変性症を対象とした多施設共同前向きコホート研究による質の高い診療エビデンスの構築	分担	德丸阿耶	放射線診断科
革新的がん医療実用化研究事業	高齢がん医療の質の向上を目指した診療体制の基盤整備に関する研究	分担	山本寛	呼吸器内科
革新的がん医療実用化研究事業	可及的摘出術が行われた初発膠芽腫に対するカルムスチン脳内留置用剤を用いた標準治療確立に関する研究	分担	角美奈子	放射線診断科

10 研究委託費

事業名等	事業実施機関	研究担当者	研究チーム	研究課題
長寿医療研究開発費	国立長寿医療研究センター	齊藤祐子	老年病理学研究チーム	糖尿病や加齢、APOE遺伝子多型等の危険因子にも着目したアルツハイマー病の病態研究と治療標的の同定、次世代治療薬の開発
長寿医療研究開発費	国立長寿医療研究センター	石川譲治	循環器内科	老年症候群に対する循環器病管理による影響を明らかとするための、多施設共同の包括的縦断観察研究
長寿医療研究開発費	国立長寿医療研究センター	鳥羽梓弓	循環器内科	老年症候群に対する循環器病管理による影響を明らかとするための、多施設共同の包括的縦断観察研究
長寿医療研究開発費	国立長寿医療研究センター	荒木厚	健康長寿医療研修センター	フレイル高齢者のレジストリ研究及びロコモ、サルコペニアを含めた病態解明及び予防介入法の確立を目指した臨床ならびに関連研究
令和５年度連携研究スキームによる研究委託事業（委託研究課題）	農林水産省　農林水産政策研究所	岡村毅	自立促進と精神保健研究チーム	都市・都市近郊における持続的で多様な農業の役割に関する研究
ヒト血液中の全糖鎖構造（グライコーム）解析（ヒューマングライコームプロジェクト）」に関する共同研究	国立大学法人東海国立大学機構	鳥羽研二	理事長	ヒト血液中の全糖鎖構造（グライコーム）解析（ヒューマングライコームプロジェクト）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター年報

2024年12月発行

この年報について、ご意見・お問い合わせ等がございましたら、下記までお寄せください。

編集・発行　地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
経営企画局事務部総務課
〒173-0015　東京都板橋区栄町35番２号
☎03（3964）1141（代）